㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第128集

鳥羽遺跡

A・B・C・D・E・F区

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第39集—

《本文編》

1992

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第１２８集
『　鳥羽遺跡　Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ．Ｅ．Ｆ区　』正誤表

頁	行	誤	正
例言	３０	松井美代	松井美智代
２	７	井特川流域	井野川流域
２	９	明主的	盟主的
５	５	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
７	２４	直立	直接
７	２４	い砂質	薄い砂質
７	３３	頭初	当初
８	１７	Ｄ１味溝	Ｄ１号溝
１７３	Fig 249.8	媒	煤
２１３	４	Ｂ軽職	Ｂ軽石
２６３	４	Ｂ軽石料	Ｂ軽石粒
３０３	３	ほご	ほぼ
３０６	２３	ほご	ほぼ
３５６	２７	位地	位置
３８１	５	板む	板状

資料
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
NO. 98-4434
平成10年 5月13日
01-320
62
1(7)

鳥　羽　遺　跡

A・B・C・D・E・F区

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第39集—

《本　文　編》

1992

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が、道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録されています。

本報告による鳥羽遺跡は、前橋市鳥羽町・元総社町に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和53年4月から昭和59年3月にかけて、群馬県教育委員会及び当事業団が調査しました。縄文時代後期を一部含む古墳時代から平安時代にかけて継続的に営まれた集落跡等が調査され、古代における本県の歴史、特に本遺跡が上野国府に隣接することから、奈良・平安時代を知る上での数々の貴重な資料が得られました。これら資料は昭和59年4月より報告書作成のための整理作業が行われていますが、整理が終了したものについては既に3分冊の報告書を刊行しました。今回は、遺跡の南部に相当する地域の整理が終了しましたので、ここに第4分冊の報告書を刊行することができました。本報告書には、平安時代の住居跡130棟を始めとして、県内で始めての中世の鋳造跡、館跡、井戸跡等貴重な調査成果が報告されています。また、鳥羽遺跡の整理は本報告書をもって完了しました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでに、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、地元関係者から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の歴史を解明するための資料として、役立てられることを願い序とします。

平成4年3月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小　寺　弘　之

例　　言

1．本書は関越自動車道（新潟線）建設に伴う鳥羽遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査域は前橋市鳥羽町から群馬郡群馬町大字塚田に至る地域の約1,200mの区間で、A～Oに区分してある。

3．発掘調査は昭和53年4月から昭和59年3月にわたって実施した。但し、昭和53年4月から昭和55年3月までは群馬県教育委員会がこれにあたり、ひきつづき㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団が事業を実施した。

4．本書は鳥羽遺跡発掘調査報告書全4巻のうちの第4巻である。この報告は、昭和53年～56年・58年度の調査によるものであり、対象区はA～F区で前橋市鳥羽町から元総社町地内にある。

5．鳥羽遺跡発掘調査報告書は、第1巻としてG・H・I区は昭和61年9月に、第2巻I・J・K区は昭和63年3月、第3巻LM・N・O区は平成2年3月に各々刊行した。なお、調査経過・調査概要・遺跡の立地・環境の項は第1巻を参照されたい。

6．事業主体者　日本道路公団東京第二建設局

7．調査主体者　群馬県教育委員会（昭和53年4月～昭和55年3月）・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団（昭和56年4月～昭和59年3月）

8．発掘調査体制は昭和61年9月刊行の第1巻G・H・I区を参照されたい。

9．発掘調査にあたっては次の諸氏・諸機関ほか多くの方々に御協力を賜った。

石井喜平次・石川道緒・加藤和四郎・斉藤一正・篠田わし・砂長実治・砂長竹町・関谷林造・塚田正雄・藤井英男・藤井立一・堀江俊江・本多房松・真塩宇一・真塩義美（五十音順・敬称略）

日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所・前橋市教育委員会・群馬町町役場・群馬町教育委員会・群馬町国府農業協同組合・群馬町稲荷台地区・前橋市元総社地区

10．発掘調査及び本書作成にあたっては次の諸氏・諸機関のほか多くの方々に御指導を賜った。

穴沢義功・石井栄一・石井則孝・稲葉和也・大澤正巳・金子真士・倉田芳郎・斉藤孝正・酒井清治・玉口時雄・利根川彰彦・長瀬　衛・仲野泰裕・樽崎彰一・西宮秀紀・馬淵久夫・水村孝行・宮本長二郎・渡辺　一（五十音順敬称略）

文化庁文化財保護部記念物課・東京国立文化財研究所・奈良国立文化財研究所

11．本書作成のための整理作業は平成2年4月より平成4年3月まで行った。

12．本書作成のための事務及び整理作業構成員は次の通りである。

事務関係：邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・佐藤　勉・神保侑史・岩丸大作・真下高幸・国定　均・小林昌嗣・船津　茂・須言朋子・吉田有光・柳岡良宏・野島のぶ江・今井もと子・松井美智子・角田みずほ・松井美代

整理関係：綿貫邦男・福島和恵・牧野裕美・大塚とし子・須田はつ江・高田栄子・小久保ヒロミ・横堀初枝

13．石製品の石材鑑定は飯島静男氏にお願いした。

14．鋳造跡関連の鉱滓分析については、試料の描出と肉眼観察を穴沢義功氏に指導を受け、化学分析及びその解析は大澤正巳氏に委託した。

15．本書に使用した遺物写真は佐藤元彦技師が担当した。なお遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺跡航空写真は委託した。

16. 金属製品の保存処理は、関　邦一技師・小材浩一がこれにあたった。

17. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の『前橋』１：5,000である。

18. 発掘調査・整理作業に関する史・資料は総て群馬県埋蔵文化財センターにこれを保管してある。

19. 本書作成にあたって石造遺物については新倉明彦・陶磁器を大西雅広両氏に指導を受け、中世館址を石守晃・縄文時代遺物を谷藤保彦の両氏に一稿をお願いした。

20. 本書の編集は綿貫があたり、本文執筆は断りがない限り綿貫が行った。

凡　　例

1．本報告書の掲載は鳥羽遺跡のA・B・C・D・E・F区の6区域を主な対象にしている。

2．本書における区名称は、関越自動車道本線敷地内に設定された100m等間隔中心杭間を各々1区画とし、南からALphabet順に付してある。この方法による区別付与は当該区域の調査が国家座標軸導入以前に実施されたためであり、遺構名称その他もこれに順じて表わすこととする。また方位は磁北示す。

3．本書における遺構名称にはALphabet大文字と算用数字を用いた通番でこれを示した。

例：B1号住居跡、F1号井戸跡

但し、最初のALphabetは区名を表わし、数字は調査時に付与されたものをそのまま用い、両者を併記して個々の遺構名とした。よって数字そのものは本書の中では時代その他いかなる有機的意味をもたない。また、ALphabet順と数字順が対応しないのは各区の調査経過が順を追っていないためである。

4．本書における遺構・遺物図版にはそれぞれ比例尺を付したが、基本的には次のようである。

竪穴住居跡：1／60、竪穴住居跡竈・炉：1／30、井戸跡1／60、土坑：1／40、墓跡：1／20

土器・石器：⅓、金属器・その他小形遺物：½

但し、遺構・遺物ににによってはこの限りではない。

◎本書における竪穴住居跡の規模は検出上端部で長軸・短軸方向の最高部分値をもって計測した。また主軸については竈付設壁線に対し、これに直交する。竈中心線をもって主軸方位とした。

5．本書における遺構図版中の断面基準は標高でこれを表わした。単位はmである。

6．本書における遺物記述は基本的には表類でこれを示した。計測単位はcm・gである。

7．本書における遺物図版中の番号は、遺物写真図版中の番号及び遺構図版の遺物出土位置番号、遺物観察表の番号と同一である。但し、遺構図版の遺物出土位置に関しては埋土一括取り上げ遺物についてはこの限りではない。

8．土器の色調は「標準土色帖」農林省農林水産技術会議所事務所・財団法人日本色彩研究所監修の色調名によった。

9．土器の実測図は原則として四分割法をとった。残存量が二分の一以下の遺物の場合は180°展開して図上復元として、中心線は点線で示した。

10．遺物の撮影及び小破片遺物は基本的には一角法によってこれを示した。

目　　次

序
例　言
凡　例
第1章　遺跡周辺の歴史的環境 …… 1
第2章　調査と各区の概要 …… 5
　第1節　調　　査 …… 5
　第2節　各区の概要 …… 6
第3章　遺構と遺物 …… 37
　第1節　竪穴住居跡 …… 37
　　1　竪穴住居跡 …… 38
　　2　竪穴状遺構 …… 193
　第2節　その他の遺構 …… 196
　　1　掘立柱建物跡 …… 196
　　2　井戸跡 …… 208
　　3　墓　　跡 …… 240
　　4　溝　　跡 …… 257
　　5　館　　址 …… 290
　　6　鋳造跡 …… 303
　　7　生産跡（田・さく状遺構） …… 325
　　8　その他 …… 327
第4章　各　　説 …… 346
　第1節　鳥羽遺跡出土の縄文時代遺物 …… 346
　第2節　鳥羽遺跡E区の館跡について …… 352
第5章　化学分析及び鑑定 …… 358
　第1節　鳥羽遺跡出土材の樹種 …… 358
　第2節　鋳造遺物化学分析 …… 381

第１章　遺跡周辺の歴史的環境

鳥羽遺跡は群馬県中央部を南流する利根川の右岸、前橋市鳥羽町・元総社町・群馬郡群馬町にかけての地域にあり、前橋市中央部より西方約3.5kmに位置している。巨視的には群馬上毛三山の一つ、榛名山東南麓扇状地形の末端に立地している。前橋市中を核として同心円状に市街化の進む今日、鳥羽遺跡は榛名山東南麓に広がる田園地帯と市街地との接点に展開する遺跡である。榛名山東南麓一帯は扇状地形のもたらす伏流水を源にする午王頭川・八幡川・牛池川・染谷川・唐沢川・井野川などの中小河川が複雑な開析地形を作り出している。鳥羽遺跡はこれら諸河川の一つである。染谷川右岸の段丘上にある。遺跡の立地する地域は染谷川中流域にあたり、各河川間は独立区画的な微高台地を形成している。しかし下流域に至っては広範な水田地帯に見るような低湿地や自然提防微高地へと地形変化が見られる。鳥羽遺跡周辺の歴史的環境はこれらの地理的条件に即応するように多様な遺跡内容を展開している。６世紀代に形成が始まる総社古墳は鳥羽遺跡の北方にあり、宝塔山・蛇穴山の両古墳は東国古墳文化の最後を飾っている。また、古墳時代の終焉を示す山王廃寺、律令体制の象徴としての国府・国分二寺など古代上野の代表的な遺跡が連なっている。当該地域では、関越自動車道（新潟線）建設に伴う大規模な遺跡発掘調査や小規模開発による調査で得られる資料の畜積には著しいものがある。上記した象徴的存在である諸遺跡は研究俎上に載る機会も多い。これに対し、類積する小規模遺跡については歴史的位置付きも、それらの従的地位で認識がなされるのが一般的である。本項では、古代上野国のモニュメント的な遺跡の周辺に分布する諸遺跡を中心に鳥羽遺跡周辺の歴史的環境を概述する。

縄文時代：極めて希薄な縄文時代遺跡の中にあって上野国分僧寺・尼寺中間地域は特すべき存在である。縄文時代中期加曽利Ｅ式期を中心とする竪穴住居跡34軒・竪穴状遺構９基が検出されている。鳥羽遺跡北端を区切る染谷川左岸言地上に形成された集落である。住居群は調査域の東方に延びる様相を示しており、集落自体は環状配置の可能性がある。榛名山東南麓の中心的河川である染谷川中流域周辺では唯一の集落構成をなし、中心的集落としての位置付けができよう。また台地南東部には縄文前期の大規模な集落が予想されている。下東西遺跡で縄文中期の埋甕が見られるが住居跡の存在は確認されていない。国分二寺中間地域の対岸、鳥羽遺跡では後期の竪穴住居跡１軒が検出されているが、このほか遺跡内からは縄文時代中期の土器片・石器の出土がある。いずれも遺構の存在は確認されず主に Loam 層上の粘性黒色土中より出土する。

弥生時代：鳥羽遺跡周辺では弥生中期が初見である。この時期の遺跡立地には大きく２分して見ることができる。一つは相馬ケ原扇状地の扇端部に発達した沖積地。二つは扇状地形を南流する中小河川によって形成された台地である。新保遺跡・新保田中村前遺跡などは前者に属し、井野川や染谷川によって作り出された自然堤防居住空間に、その後背低地を生産基盤とする水田耕作と考えられる。多量な木製農耕具の出土は、水田耕作がかなりの定着性をもっていたことを示している。後者には国分寺中間地域・清里庚申塚遺跡がある。前橋台地の中位地域に位置し、台地地形に狭少な谷地が開析されている。ここでは谷地を利用した水田耕作と台地上の畠作が生産手段となっていたと思われる。弥生後期には前代から継続する新保遺跡・日高遺跡のほか国分寺中間地域でもひき続き集落が営まれる。生産跡は前橋台地南方の低地に多く検出されており、新保遺跡・日高遺跡では浅間山降下のＣ軽石層に埋れた水田跡がある。この地域では他に熊野堂遺跡・小八木遺跡・芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡など著名な水田跡検出の遺跡が知られている。ただＣ軽石層の降下は古

墳時代初頭と考えられているが、Ｃ軽石層下の水田跡が必ずしも弥生時代の所産とできない状況も多い。

古墳時代：古墳時代初頭については、鳥羽遺跡の近周辺域では極めて希薄である。当該期遺跡の主たる立地は、弥生時代遺跡が展開する地域の１つである相馬ケ原扇状地形扇端部にある。鳥羽遺跡・国分二寺中間地域・下東西遺跡など台地地形の諸遺跡では数軒単位で認められているが、現在のところ高崎市の新保遺跡をその北限に烏川流域までの間が主体的な分布域となっている。

古墳時代中期は、前代に続き活発な展開を見せる井特川流域にその中心がある。豪族居館跡として著名な三つ寺Ｉ遺跡、また、これと強い関連が考えられている保渡田古墳群は５世紀末から６世紀前半にかけて、二子山古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳など70～100m級の前方後円墳を明主的な存在として形成されている。これらの生産的背景には、榛名山降下火山灰のＦＡ・ＦＰ下に検出される水田跡をもつ、熊野堂遺跡・御布呂遺跡・同道遺跡などが考えられる。しかし、生活拠点となるべき集落跡の解明は今後の課題となっている。鳥羽遺跡及びその周辺では、推定上野国府国衙域のとくにその東縁ではＦＡ隆下以前の環濠が検出された元総社明神遺跡をはじめ寺田遺跡・村東遺跡などが知られるが、大規模な集落跡としては未発達な状況である。

古墳時代後期は鳥羽遺跡の北約2.5kmに前橋市総社古墳群が成立する。本古墳群は６世紀前半の築造で、古墳群中その初期のものと考えられ、両袖型横穴式の石室をもつ王山古墳に始まる。６世紀後半には前方後円墳の総社二子山古墳・遠見山古墳など県内最後の大形前方後円墳を擁している。さらに、古墳時代終末を特徴付ける巨石石室墳の蛇穴山古墳・宝塔山古墳へと築造が続き、群馬県内の古墳時代は終わりを告げる。集落跡としては鳥羽遺跡・国分二寺中間地域に元総社明神遺跡・閉泉樋南遺跡・西国庁II遺跡に比較的まとまった遺構群が検出されている。

歴史時代：古墳時代後半から終末に引き続き、総社古墳群の領域には県内初期寺院跡の一つに数えられる山王廃寺が建立される。素弁八葉の瓦当文瓦は７世紀後半白鳳期の創建と考えられている。また、石製鴟尾塔心礎・根巻石などは蛇穴山古墳・宝塔山古墳にみられる石造技術に類似するものがあり強い係わりが想定されている。７世紀後半から８世紀代にかけて、鳥羽遺跡周辺には大規模な遺跡が出現する。下東西遺跡・北原遺跡・国分境遺跡・国分二寺中間地域・中尾遺跡・新保遺跡などかなり密集した検出状況にある。これは諸遺跡は前述した山王廃寺・国分二寺・上野国分など当該期における上野国の代表的建造物と至近の距離にある。また、集落跡としては古墳時代後期からの継続性は弱く、むしろ突然の集落形成の観が強い。この他、国府隣接域には元総社明神遺跡・堰越遺跡・大友屋敷III遺跡・天神遺跡・村東遺跡・清里南部遺跡III・西国分II遺跡・草作遺跡・柿木遺跡など奈良から平安時代にかけての集落跡が調査されているが、いずれも小規模な集落様相である。

平安時代でも基的様相は同じであるが、国府隣接地域では、奈良時代より平安期の住居跡数がやや多くなる傾向を見せる。また生産跡関係では、浅間山降下Ｂ軽石層下より検出される水田跡があり、日高遺跡・勝呂遺跡・前箱田遺跡・箱田遺跡・五反田遺跡がある。

中世：15世紀前半の築城になるとされる蒼海城は、上野国分内にある。蒼海城は基盤目状の形式をもち、県内の城郭のなかでは最古のものとされ、さらに城郭史のうえでも初期に位置付けられるとされる。蒼海城に発する周辺の城郭は八日市場城・石倉砦・総社城・厩橋城へと展開し、古代以来の中心地域としての様相は色濃く反映されている。しかしこのことはまた、中世における地域支配の複雑さを示している。鳥羽遺跡

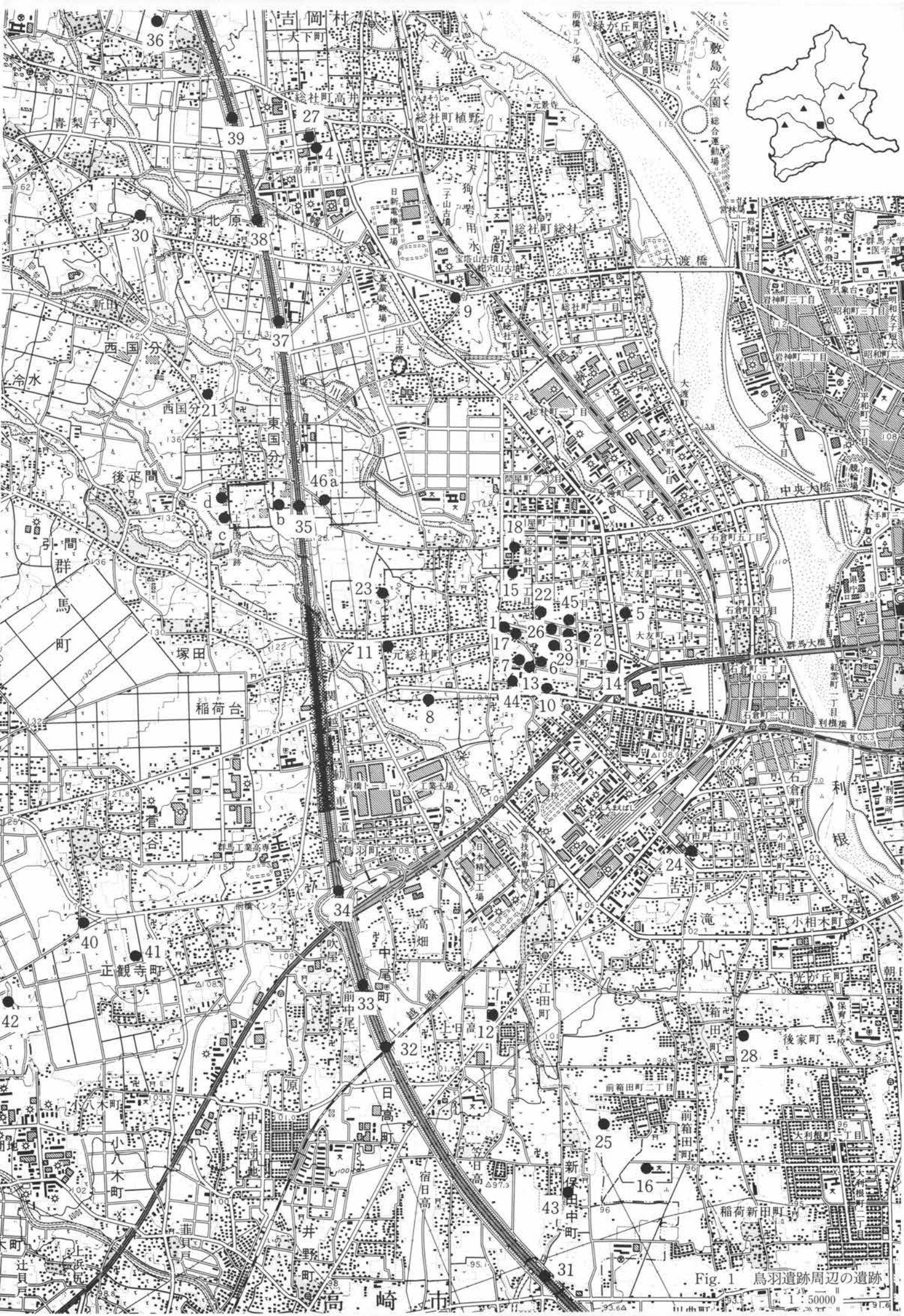


Fig. 1 鳥羽遺跡周辺の遺跡

1 : 50000

北東側に見られる大規模城郭に対し、南底地帯には中尾城・金尾城など列郭状の平城がある。

鳥羽遺跡の周辺

1．元総社明神遺跡VI
2．堰越（せきごし）遺跡
3．大友屋敷III遺跡
4．膏薬遺跡
5．堰越II遺跡
6．元総社明神遺跡V
7．寺田遺跡
8．天神遺跡
9．村東遺跡
10．神明東遺跡
11．屋敷遺跡
12．勝呂遺跡
13．元総社明神遺跡VI
14．樋越遺跡
15．閉泉樋南遺跡
16．前箱田遺跡
17．元総社明神遺跡
18．閉泉樋遺跡
19．清里南部遺跡III
20．清里南部遺跡群
21．西国分II遺跡
22．元総社明神遺跡III
23．草作遺跡
24．赤烏遺跡
25．箱田遺跡
26．元総社明神遺跡II
27．柿木遺跡
28．五反田遺跡
29．元総社明神遺跡Ⅰ
30．熊野谷遺跡
31．新保遺跡
32．日高遺跡
33．吸屋遺跡
34．中尾遺跡
35．国分寺中間地域
36．清里庚申塚遺跡
37．国分境遺跡
38．北原遺跡
39．下東西遺跡
40．菅谷遺跡
41．正観寺遺跡群
42．諸口古墳
43．新保田中前遺跡
44．元総社小学校校庭遺跡
45．大友屋敷II遺跡
46．上野国分寺隣接地域

第2章　A・B・C・D・E・F区の調査と概要

第1節　A・B・C・D・E・F区の調査

関越自動車道（新潟線）の建設に伴う鳥羽遺跡の発掘調査は、昭和53年（1878）4月、群馬県教育委員会によって開始された。以来、昭和55年（1880）調査主体が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業に移され、昭和59年（1984）3月末日まで営々として続けられた。

本報告になるA～F区域は鳥羽遺跡6ケ年の発掘調査の過程で、用地買収・民家の移転・工事工程などの理由から実施期・対象面積は断続的・重複的な調査経過をたどった。(Tab. 1　Fig 2)また、調査主体の変更や、14名の調査担当者の頻繁な移動は、細部ではあるものの上記の調査経過とあいまってやや統一性に欠ける調査方法となって表われた。例えば、文化層の認識・遺構に対する記録の粗密などである。そして一貫性のない端的な例としては同一区域内における遺構名称（遺構番号）の重複や、各区が小範囲で隔年の調査であったにもかかわらず全て通番で遺構名を付加したことなどである。しかし最も混乱を招いたものは昭和56年（1881）度から実施された国家座標軸導入の方眼設定である。従来、関越自動車道建設地内南北方向に設定されていた中心杭を結び基本軸としていた。遺跡地の最南端から100m間隔で各区を分け Alphabet を付して区名としていた。この国家座標軸の導入によって区割りそのものの範囲に変更が生じ、区単位を基本とした調査方法に大きな支障をきたしたことは言をまたない。当時、大規模な発掘調査の黎明期ともいえる状勢下にあっては多少の酌量を望むとしても、同一遺跡内におけるこれら場当り的な調査方針に対し、今後の調査に向けて大きな反省点としておきたい。

昭和53年度	群馬県教育委員会	A区 E・F区	1,000㎡ 9,575㎡	53. 4 53. 8～53.12	
昭和54年度	群馬県教育委員会	D～F区 B・C区	4,600㎡ 16,200㎡	54. 7～55. 3	試掘
昭和55年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	B・C区	6,500㎡	55.11～56. 3	
昭和56年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	B～E区	9.950㎡	56. 4～56. 7 56.10～57. 3	
昭和58年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	B区	4.620㎡	59. 1～59. 3	

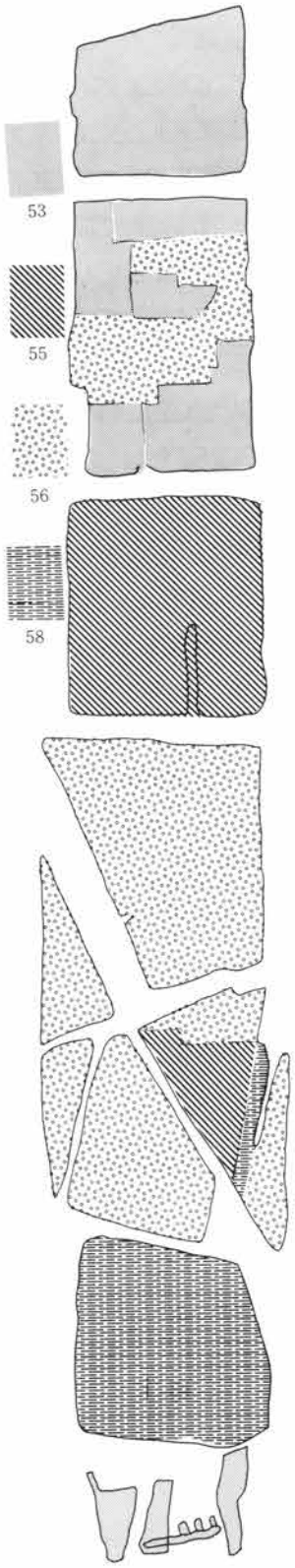


Fig. 2　調査経過図

第2節　各区の概要

A区の概要

Ａ区は鳥羽遺跡の最南部に位置し、行政区は前橋市鳥羽町に所属する。区の南端は高崎市との市境となっている。当区の調査は昭和53年４月群馬県教育委員会によって実施された。調査面積は約1000㎡である。地形的等決北から南へ緩い斜傾をなすが可視的にはほとんど平坦となっている。遺跡地一帯はほぼ半凝固化した凝灰岩質層を基盤とするが、Ａ区はこの凝灰岩質層が急激に落ち込むか、あるいは跡切れるようであり、水成 Loam あるいは黒褐色土の厚く堆積する湿潤性の低地帯となっている。

当区は東山道ルートのうち、安中市内に推定されている野尻駅から上野国府を結ぶライン上にかかり、古くより古道の存在が考えられていた地点である。昭和53年度の調査はこの古道を確認する意図が強かったと考えられる。調査では４条の溝と２条の道路状遺構が検出されている。Ａ１号・Ａ２号溝は規模が大きくＡ１号溝は上幅約10m、Ａ２号溝は2.6m～6.4mを測る。両者は北東部で合流し、東走する様相を呈し本来同一機能を有する遺構と考えられる。また、当区西側に近接して中世の館址である金尾城が知られており、現状での地割復元からは、このＡ１号・Ａ２号溝は金尾城に関係する遺構の一部である可能性が強い。Ａ３号・Ａ４号溝はともに道路状遺構と記録されている硬質帯の南縁・北縁に沿って検出された溝である。規模は小さく、側溝としての機能が考えられる。さて昭和53年当時の調査によれば、２条の道路状遺構の検出が記録されている。硬質部分は北北西から北北東へ幅1.5～２mの範囲で帯状に延びる。２条の道路状遺構はほぼ一直線になるが、西側部は天仁元年、浅間山噴火によるＢ軽石降下以前であり、東側では、このＢ軽石層を切り込んで構築されるとの所見である。調査範囲が狭少だったためか、細部におよぶ追求や、詳細な記録は残されていない。そして、この調査結果は数枚の図面に記録を留めたままなんら公表されることはなかったようである。現にこの調査から２年後に刊行された『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報』VIでは、「道の跡と断定し得る遺構は確認できなかったが、」「東西に走る幅10mを越える大きな溝が確認できた。」と報告されている。以後、推定東山道の検出はＡ区より以北に期待されていった。この状況は改めてＢ区の概要で述べることとするが、調査記録に残された道路状遺構の存在は本報告に至るまでまったく等閑視されることになった。

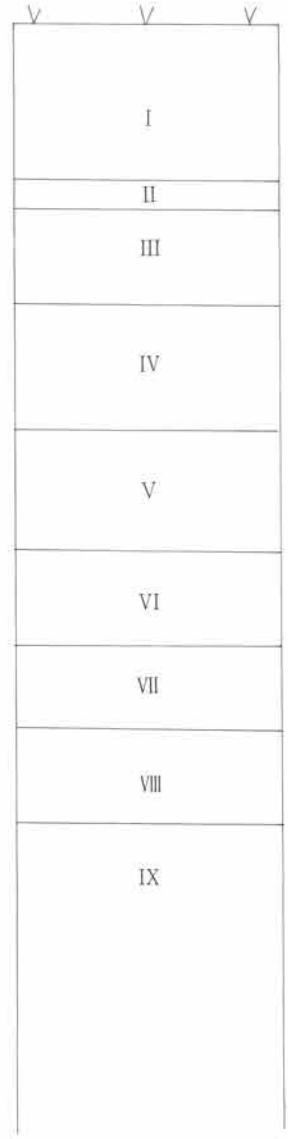


Fig. 3　基本層序図

Ｂ区試掘溝土層面
Ⅰ　耕作土（現在）
Ⅱ　鉄分層
Ⅲ　グライ土層　灰褐色、斑点状に鉄分凝集Ｂ軽石
Ⅳ　暗灰褐色土層　粘性が若干あり粒度やや密でＢ軽石を含み炭化物をわずかに認める
Ⅴ　黒色土層　砂質Ｂ軽石
Ⅵ　茶褐色土層　粘質土鉄分凝集が顕著であるＣ軽石
Ⅶ　黒色土層　砂質、Ｃ軽石をやや多量に混入する
Ⅷ　黒色土層　砂質、Ｃ軽石を全く含まない層
Ⅸ　地山　Loam層

従来、上野国府に隣接する地域で推定東山道の検出が有力視されていた地点で確認された道路状遺構が、たとえ東山道として確定するに足る遺構でなかったとしても、当然注目される遺構であることにはちがいない。しかし、なぜ今日に至るまで明らかにされなかったのか、またできなかったのか大いに疑問の残るところである。あえて原因を探るならば、次のようなことが考えられる。まず、この調査が関越自動車道の調査では比較的早い時期のものでＡ区の調査自体が試掘的意味合いをもっていたのではないか。このため調査は部分的なものとなり全体の把握が困難であったとも考えられ、全体図に示される。調査域設定の方法にもこれが表われている。さらに、検出された道路状遺構の希弱さからくる東山道イメージとの落差が大きく、調査者が東山道との関連性を認識できなかったのではないか。この道路状遺構の希弱さとともに、同時に検出された大規模な溝がこの遺構をその範囲内にとり込み、分断している状況から、さらに東山道としての認識から遠ざけてしまったものと思われる。

本報告にあたっては、この道路状遺構が東山道に類する古道である可能性が極めて高く、今後この視点に立って改めて推定東山道ルートと考える必要があろう。Ａ区に存在した道路状遺構は、隣接する金尾城によってかなりの改変を受けたと考えられ、Ａ１号・Ａ２号溝が金尾城に関連する遺構とすれば、少なくとも、東山道がある時点でそのルートを変更したとも考られ、今後の東山道に与える影響は大きいものとなろう。

Ｂ区の概要

Ｂ区は昭和54年度の試掘調査に始まり、以後昭和57年度を除き昭和59年３月に至る間断続的な調査が続けられた。当区の南半部は試掘調査後、関越道の建設に先だって一時的な土盛が行われ、最終58年度に本調査を実施した。この試掘調査は前述Ａ区での推定東山道の未確認という結果を受けてのものであり、道路遺構の検出に大きな期待がもたれての調査であった。結果、Ｂ区の南東部に南北に設定された試掘溝33Ｂ４～13において、江戸時代水田耕作土直下に砂質硬質面が検出された。南北幅約６ｍの範囲が周辺より若干の高まりを見せており、その走向がおよそ南南西～北北東を目指していた。調査所見では道路としての可能性が強いとしている。この調査所見はＡ区での道路状遺構が未報告であったためか、しばらくの間は東山道推定の有力地点として考えられていた。しかし、昭和58年度の全面調査によって、道路面と考えられていた硬質面は、水性堆積 Loam 層面を直立覆うものであり、い砂質単一層であることや、上面は江戸時代の水田面であったことから、水田面下位に沈殿堆積した床土であると判断された。このため、鳥羽遺跡内における東山道の存在は、今機、本報告になるまでまったく不明のままであった。

Ｂ区で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡10軒・中世の掘立柱建物跡１棟・井戸跡４基・墓跡２基のほか、大小の溝・さく状遺構・土坑などである。平安時代を中心とする竪穴住居跡はＢ区南西部に偏在するが、重複関係にある住居跡は皆無である。竪穴住居跡の形態・構造にはほとんど差がなく、柱穴・貯蔵穴などは検出されず、竈は東壁に付設されるのが一般的である。ただ、南西部の住居群とはやや距離をおき、Ｂ区中央部に単独で存在するＢ８号住居跡のみが北壁付設の竈を有している。Ｂ８号住居跡はかろうじてその輪郭を認めたのであり、出土遺物も検出されないため、南西部の住居群との時期的な照合はできない。

墓跡は２基検出されているが、このうちＢ332号墓は頭初特殊な土坑と扱われていたものである。中央径１ｍほどの周囲を円形に溝を掘削するものである。近年、県内の数遺跡より、本例にに類似する遺構が検出されているが、これら類似遺構には細片化した焼骨が納められた小瓶の出土する例も知られており、少なくとも、墓制にかかわる遺構である可能性が強い。溝跡は多く検出されているが、当区中央部を南南西から北北西に延びるＢ１号溝は上幅約2.5㎝の規模で、その走向はＡ区で検出されているＡ１号溝とほぼ同一方向を示して

いる。やはり隣接する金尾城に関連する遺構であろうか。さく状遺構は全体に検出されているが、Ｂ軽石粒を埋土とするものが多く、いずれも中世の所産と考えられる。南東部はこのさく状遺構が希薄な状態を示すが、地勢的に近くなっており後世の改変により削平されたものであろう。Ｂ区全体としては平安期の小集落形成後、中世には耕作地としての土地利用に変化している。

Ｃ区の概要

Ｃ区は昭和54年度、群馬県教育委員会によって試掘調査が実施された。その後昭和55年・56年と㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団によって本調査が行われている。検出された主な遺構は平安時代の竪穴住居跡７軒・井戸跡12基・墓跡３基、その他大小溝跡と著しいさく状遺構などがある。

竪穴住居跡はその所属時代が全て平安時代であり、区域内では散在しており重複関係はない。井戸跡12基のうち数基をのぞき、そのほとんどは区内北東部に集中して検出されている。井戸の開削は中世ないしはそれ以降の所産と考えられ、全て素掘り施工となっており井筒などの施設も認められない。また占地的には、鳥羽遺跡内で広く観察される凝灰岩質層の南限縁辺部にあたる。これら井戸跡に直接関わる生活跡は周辺からは検出されていない。可能性としては、北に近接して存在する鋳造跡との関連も考えられるが、これを端的に示すような遺物類の検出はない。墓跡は伸展葬を示す長方形土壙で土器類の副葬品を伴う平安期のものと、多量の細片焼骨が炭化材とともに出土する形態がある。後者は火葬墓ないしは火葬所と考えられるが、浅間山降下Ｂ軽石粒が埋土に混入していることから中世以降に属するものである。溝跡は当区の南半で検出されたＣ38号溝は上幅約８ｍの規模をもつ。また北半では、Ｄ区南で東西走するＤ１味溝がＬ字に折れ当区に及んでいる。Ｄ１号溝の検出は当区で部分的な範囲に留まったが、その走向はＣ38号溝に一致しており、両者は一連のものと考えられる。さく状遺構は調査区南半に多く検出されているが埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒が主体となっており、ほとんどが中世以降の所産と考えられる。しかし、区域南側の東縁に接する狭長な範囲で東西・南北に細かく交錯するさく状遺構はその埋土に浅間山降下Ｃ軽石粒を含む黒色土をもつことから、古墳時代に属する生産跡である可能性が高い。

Ｄ区の概要

Ｄ区は北半を昭和55年度に、また南半は昭和56年度に調査がなされた。当区は比較的多数の竪穴住居跡が検出されている。また、溝、さく状遺構などの錯綜が著しいが、これらとはやや時期を異にしており、土地利用の変遷が窺われる。竪穴住居跡44軒、掘立柱建物跡２基、井戸７基、墓跡11基、多数の溝、さく状遺構などとともに鋳造跡などが検出されている。

竪穴住居跡はほとんどが平安期に属し、調査区の東部に集中する。全体の住居数に対し重複する割合が高く集落の形成過程には長期的な継続性よりは、各住居跡の構成員段階での形成と考えられる。井戸跡は素掘り形態であり、中世以降に属するものが多い。墓跡は平安期・中世・近世の各代に及び。平安期に属するＤ16号墓からは緑釉陶器・灰釉陶器が検出されている。また当区南部では、Ｃ区で検出された火葬墓ないしは火葬所と同形態のものがありる。位置的には同じ群を構成するものであろう。溝はⅡ西～南東走する傾向が強く、その走向に何らかの規則が認められるが、これらの中でＤ405号溝は、埋土及び出土遺物から平安期に属すると考えられる。当跡は竪穴住居跡との重複が見られず、集落形成の地割りに大きく関わっていた可能性がある。調査区南側に検出されたＤ1010号溝は上幅約８ｍを測り、その西側で南に走向を変え前述したＣ38号溝に続くと考えられる。鋳造跡は鋳造土坑を中心に、作業土坑、鉱滓廃棄土坑のほか掘立柱建物跡から構

成されるようである。またD43号井戸からは、多量の鋳造関連遺物が検出され、溶解炉炉壁片・鋳型準鉱滓などの出土がある。なお、鋳造関連の遺構周辺には多数の Pit 群が見られるが、大方は規則性に欠け、建物跡としての可能性をもつ Pit 列はわずか３棟にとどまり、なおかつ、小規模である。

Ｅ区の概要

Ｅ区は昭和54年、Ｆ区とともにその一部が調査され、続いて55年度、56年度に渡って継続して実施された。当区は平安期の竪穴住居跡24軒・掘立柱建物跡３棟、井戸13基、墓跡５基、溝跡などがある。また中心的な遺構としては、内外の堀で囲まれた館跡がある。外堀は上幅約６m、深さ1.5mを測り、掘形断面形は箱堀形状である。館跡概略形はほぼ方形を呈するが、東画堀・南面堀とも各々磁北に対し傾きをもつが、北堀は鈍角に折れ、全体としては不整形となる。南面外掘には橋脚が設置されたと考えられる柱痕が検出されており、南を正面とする構えであろう。この橋脚部西側では堀南縁肩部に石組施工の様子が窺われたが、当館跡に直接関わるかは検討の余地があろう。館跡内部にはこれに伴う明らかな施設は確認されていないが、重複する２棟の掘立柱建物跡の存在が知られる。竪穴住居跡はいずれも館跡外縁にあり、掘形の浅い遺存状態であった。井戸はいずれも素掘りで井筒などの施設は見られない。大半は中世以降の所産である。墓跡は中世及び近世の所産である。なお館跡内部より検出された４基の墓は掘形が小さく円形を呈し通例の形態ではない。土器類の副葬はなされるものの墓跡としての性格付けが妥当か否かは再検討を要する。鳥羽遺跡周辺には蒼海城・金尾城跡・中尾城跡などの中世城館跡が知られ、当遺跡検出の館跡がこれらの城館跡とどのような関係にあるか、時間的位置付けや社会的位置付けへの追求が必要である。

Ｆ区の概要

Ｆ区は本報告になる調査区のうち最も北側に位置する。調査は昭和54年から55年・56年と断続的に実施された。このため遺構名称など重複・不整合な面が多い。検出された遺構は平安期の竪穴住居跡51軒、掘立柱建物跡４棟、井戸14基、墓跡２基、溝などからなる。

竪穴住居跡は、およそ大小５群に分かれ、大型群は重複が著しい。各群内には比較的大型な住居跡が存在する傾向があり、これを中心とした群構成がなされている可能性がある。また、各住居群には掘立柱建物跡１棟が伴うような状況が窺われる。井戸跡な他区に比べ平面形状の大型なものが多い。検出された井戸跡はいずれも素掘り掘形で井筒などの施設は見られず、中世以降の所産と考えられる。墓跡は他区に比べ検出は少なく、中世以降に属する土壙墓形態である。溝は大規模なものが３条ないし４条検出されている。しかし、西側にあり南北走するＦ２号溝と、南側で北東から南西走するＦII３号溝は掘形が浅い。また北端東西走のＦ１号溝は幅・深さとも大規模な様相を呈するが、対縁の北半は現県道前橋～安中線と重さなり、全様を知り得ない。また東側にあるＦ３号溝は北部でＦ１号溝に合流し、南部は直角に近く東折する。この変換部より僅か北側で西縁に人頭大の玉石を用いた規則的な石組施工が見られ、館跡を形成する堀跡の可能性もある。

Fig. 4　D区・E区・F区全体図

Fig. 5　A区・B区・C区全体図

Fig. 6　A区・B区全体図

Y=−72.10
65
60
55
B425溝
B424溝
B455溝
B439溝
B460溝
45
B423溝
B421溝
B419溝
B332墓
40
B27井
B411溝
35
X=+42.10
トレンチ
30
B1溝
25
65
60
55
50
0
10m

Fig. 7　B区全体図（1）

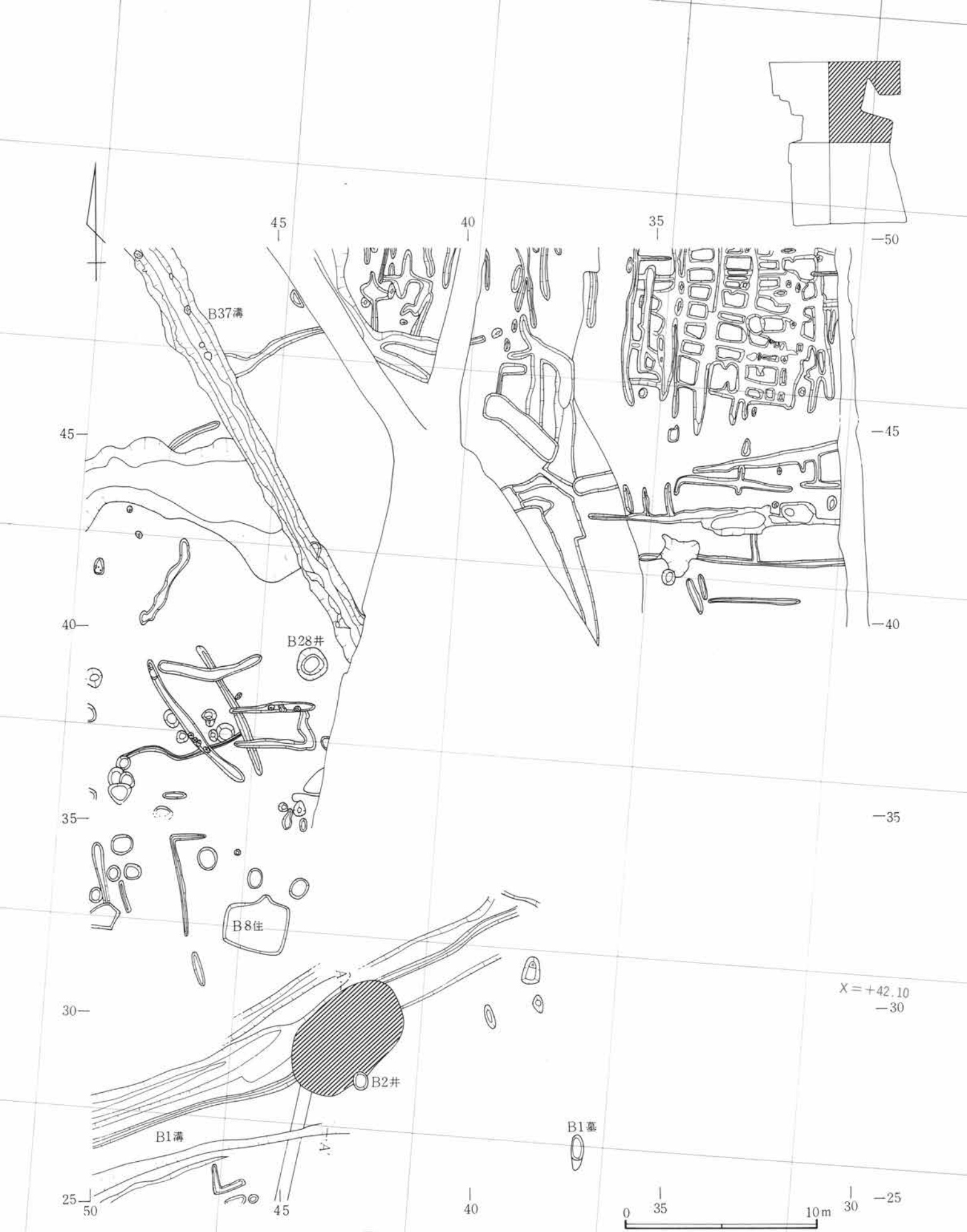

45
40
35
50
45
40
35
30
25
B37溝
B28井
B8住
B2井
B1溝
B1墓
A
A'
X＝＋42.10
0
35
10m

Fig. 8　B区全体図（2）

65
60
55
50
25
B41住
B1溝
20
15
10
05
00
B9住
B7住
B6住
B1住
B4住
B5住
B3住
トレンチ
0
10 m

Fig. 9　B区全体図（3）

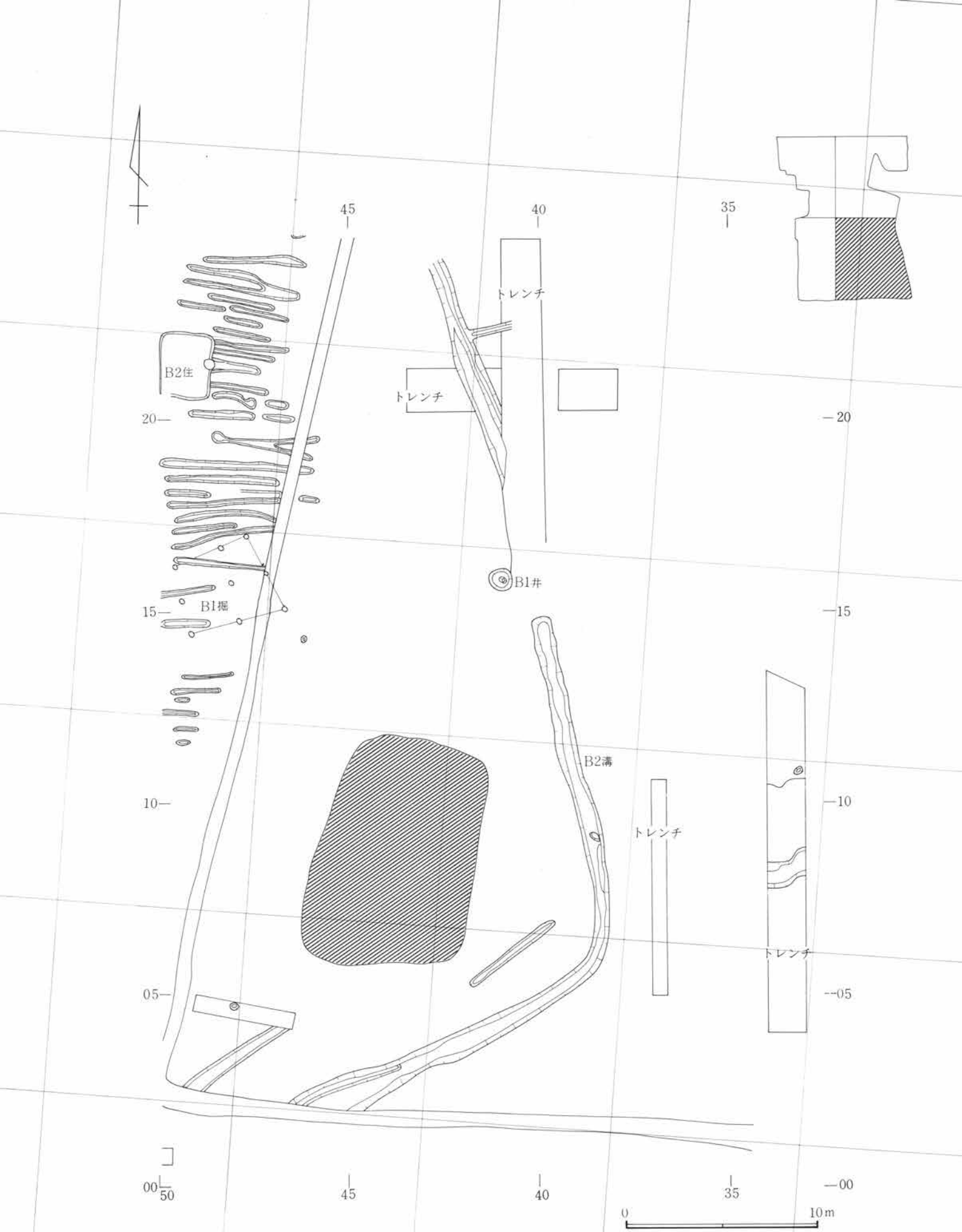


Fig. 10　B区全体図（4）

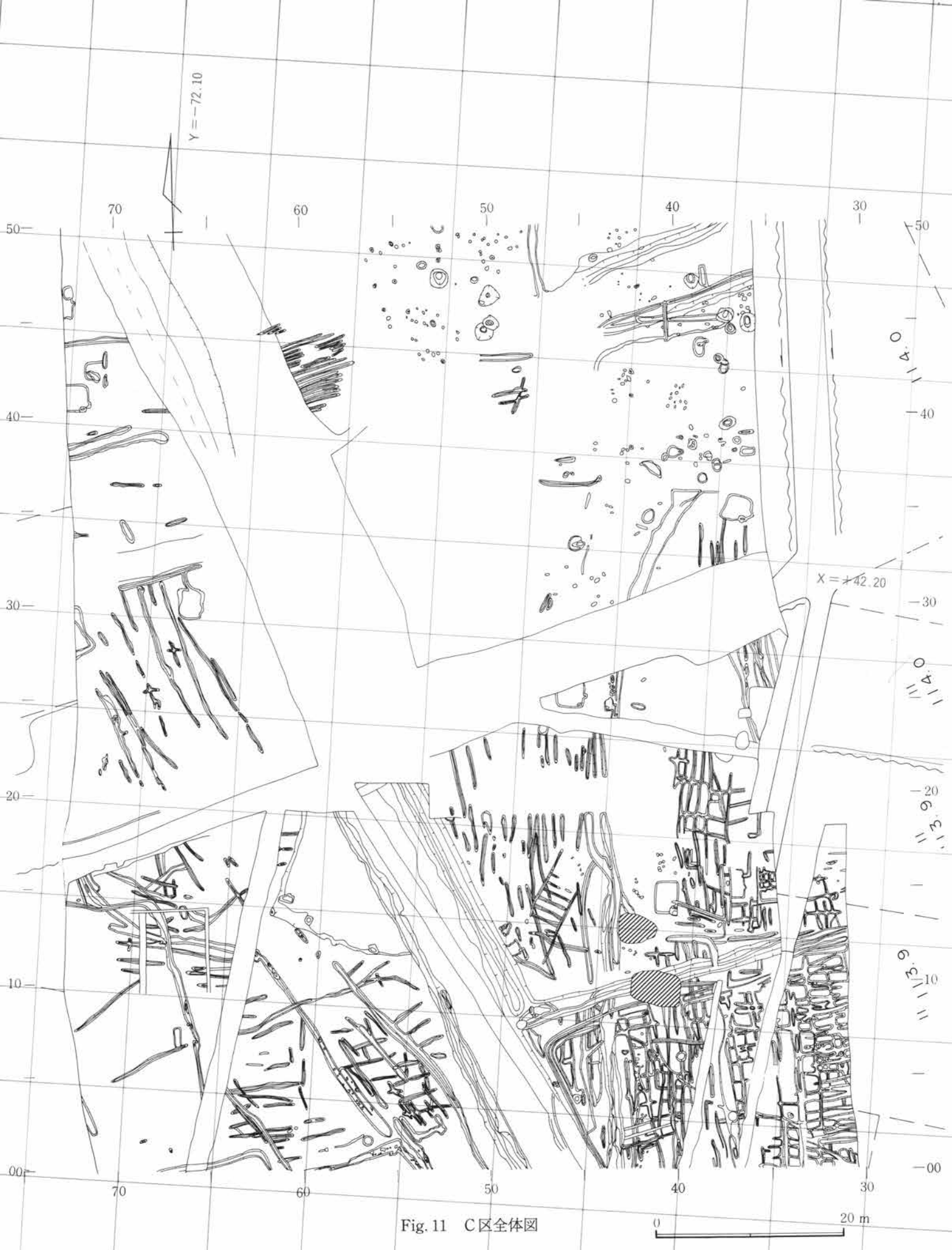


Fig. 11　C区全体図

Fig. 12　C区全体図（1）

Fig. 13　C区全体図（2）

Fig. 14　C区全体図（3）

Fig. 15　C区全体図（4）

Fig. 16　D区全体図

Fig. 17　D区全体図（1）

Fig. 18　D区全体図（2）

Fig. 19　B区全体図（3）

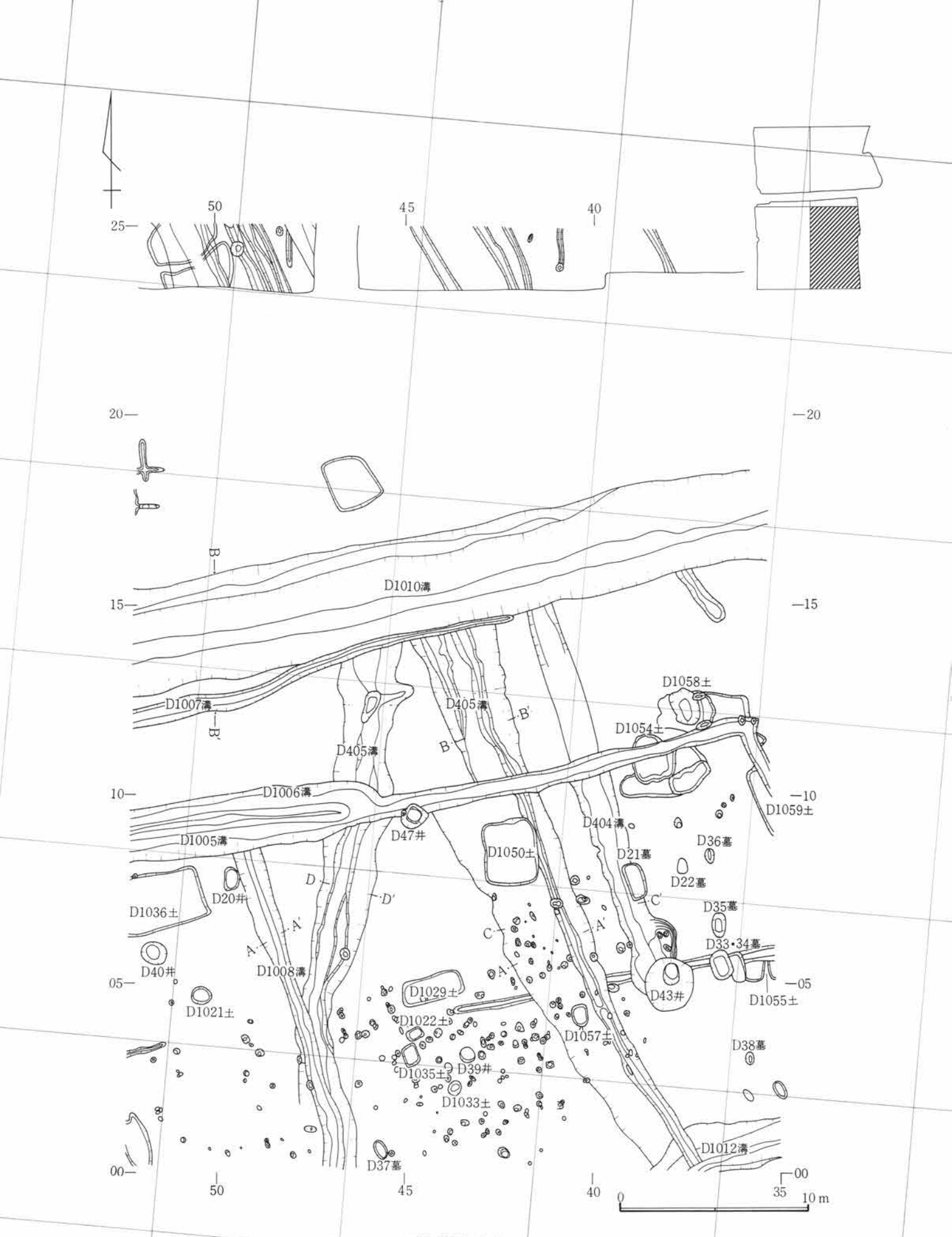


Fig. 20　B区全体図（4）

Fig. 21　E区全体図

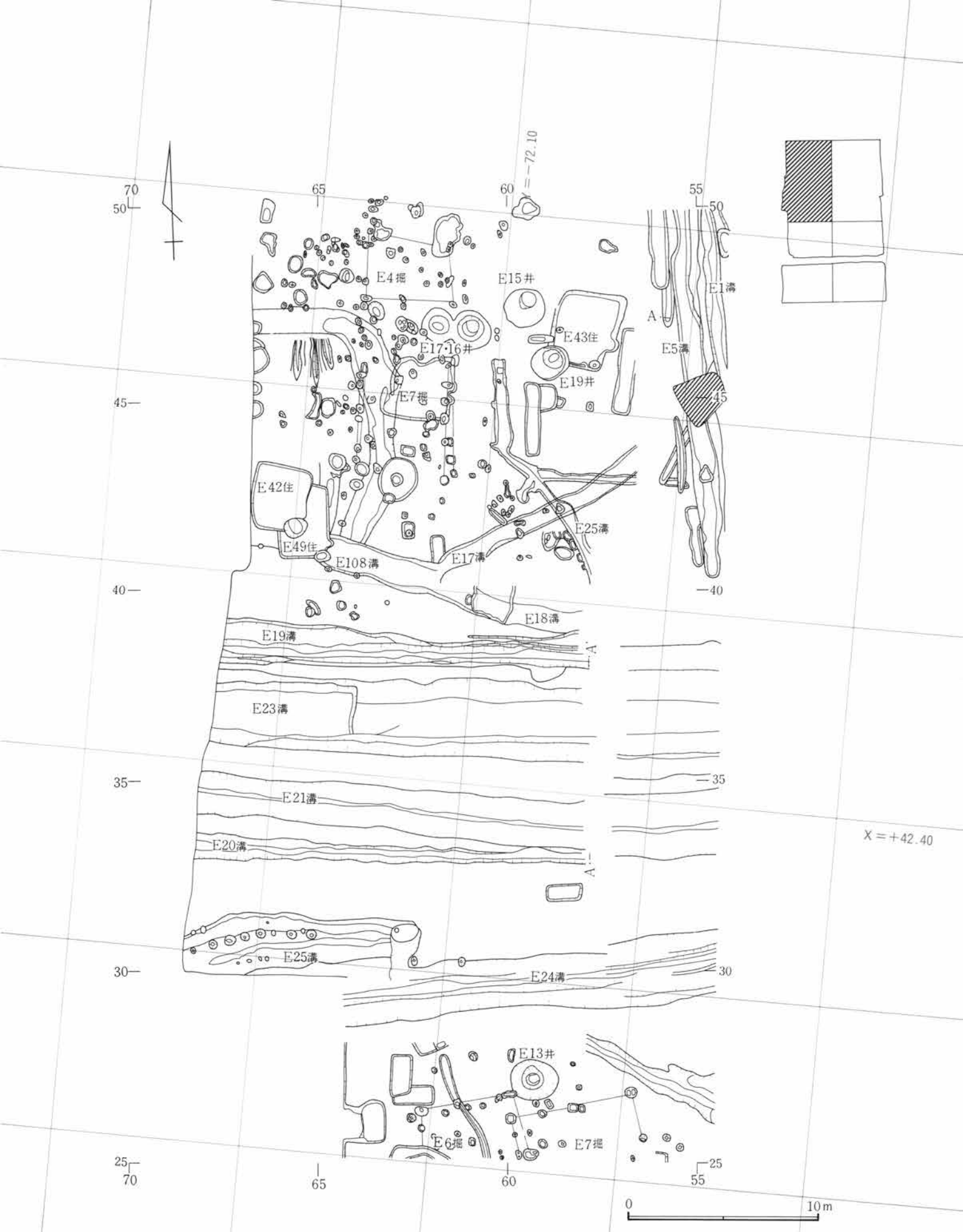


Fig. 22　E区全体図（1）

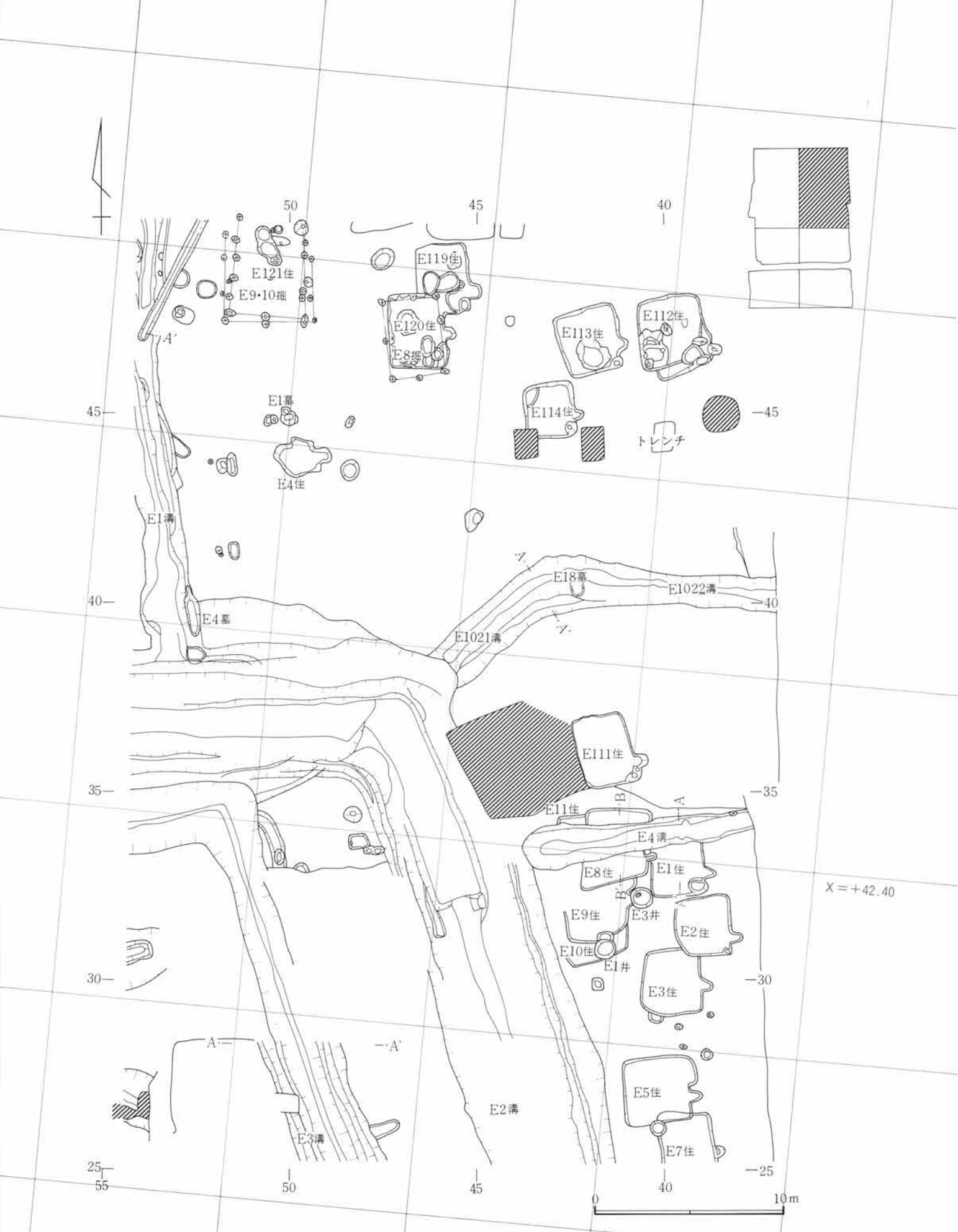


Fig. 23　E区全体図（2）

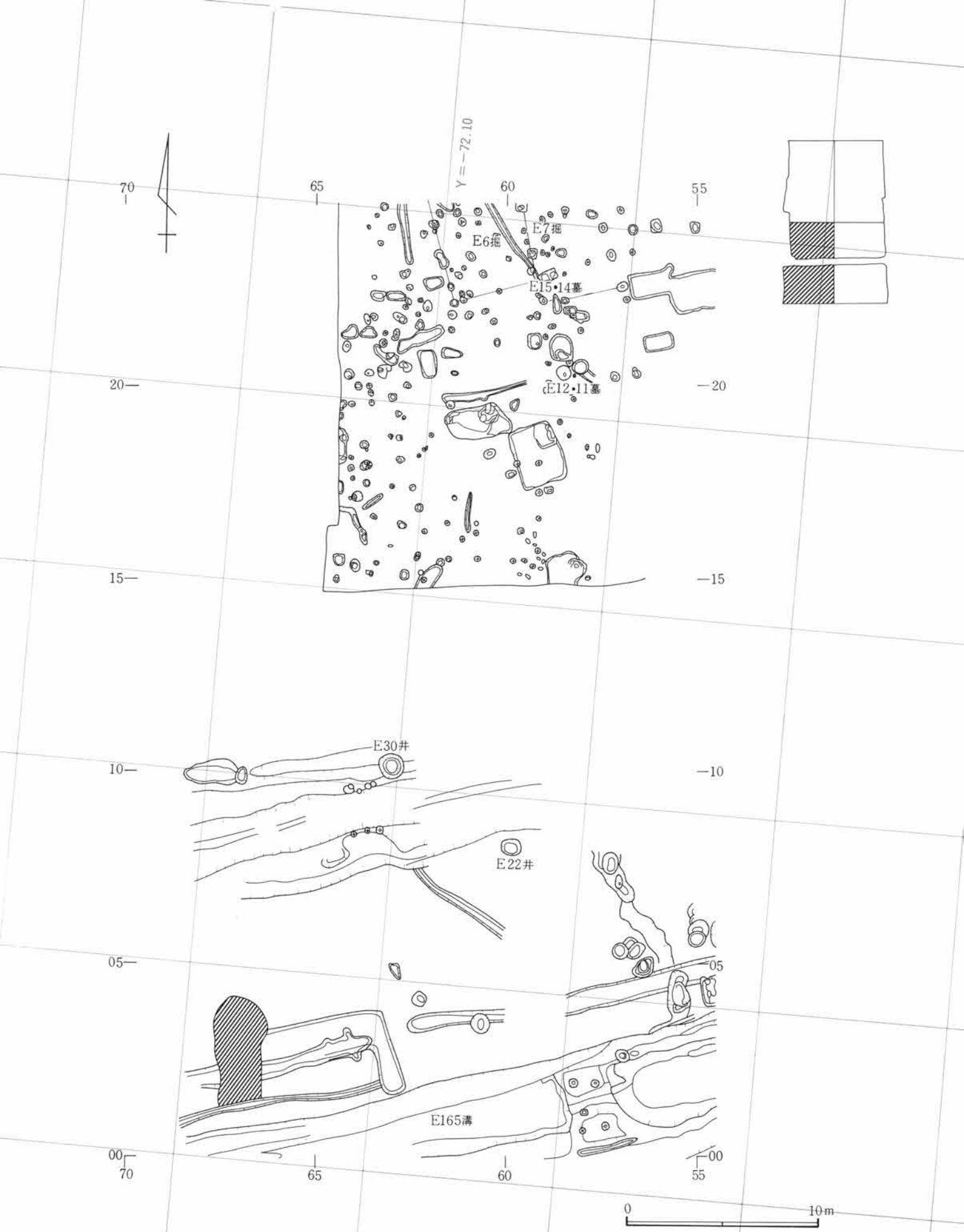


Fig. 24　E区全体図（3）

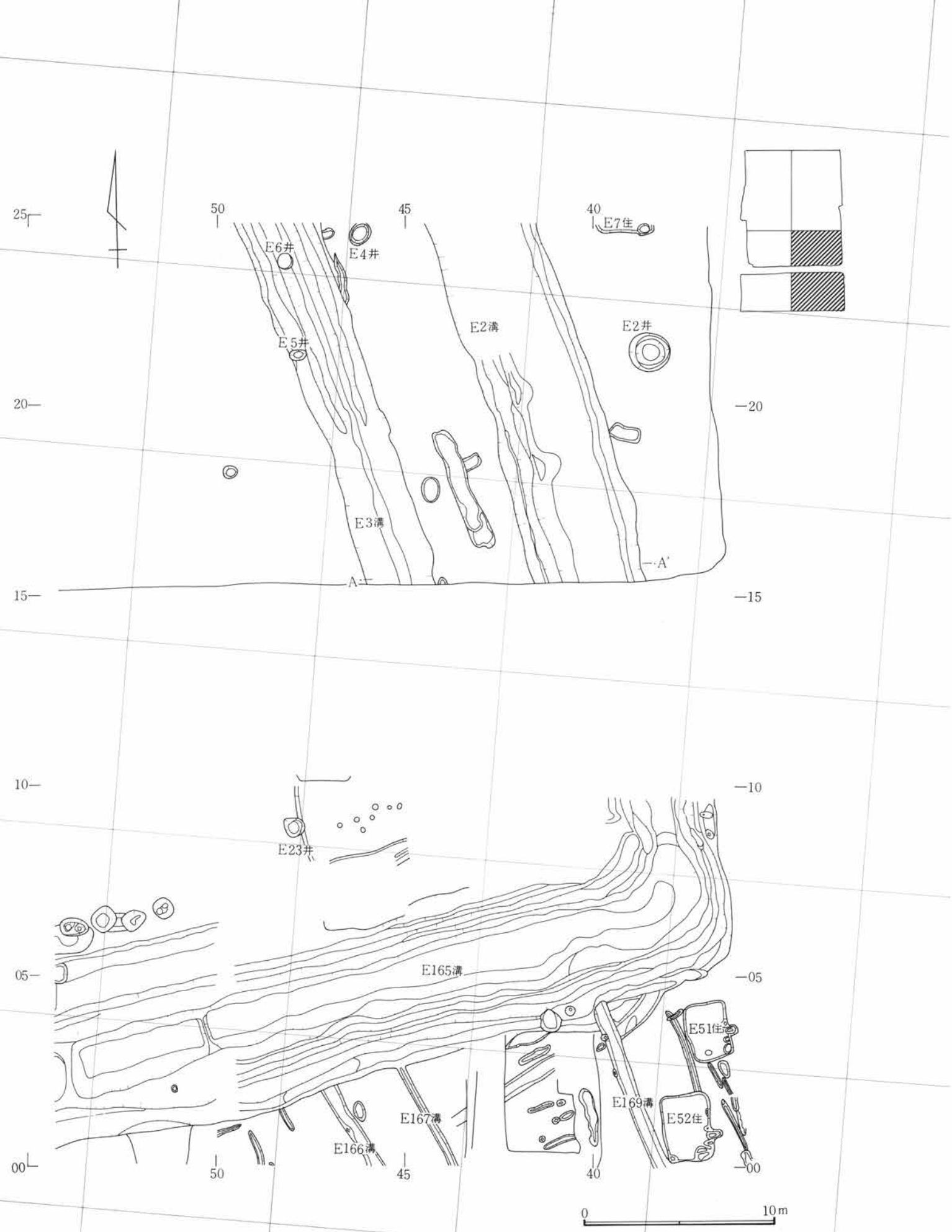


Fig. 25　E区全体図（4）

Fig. 26　F区全体図

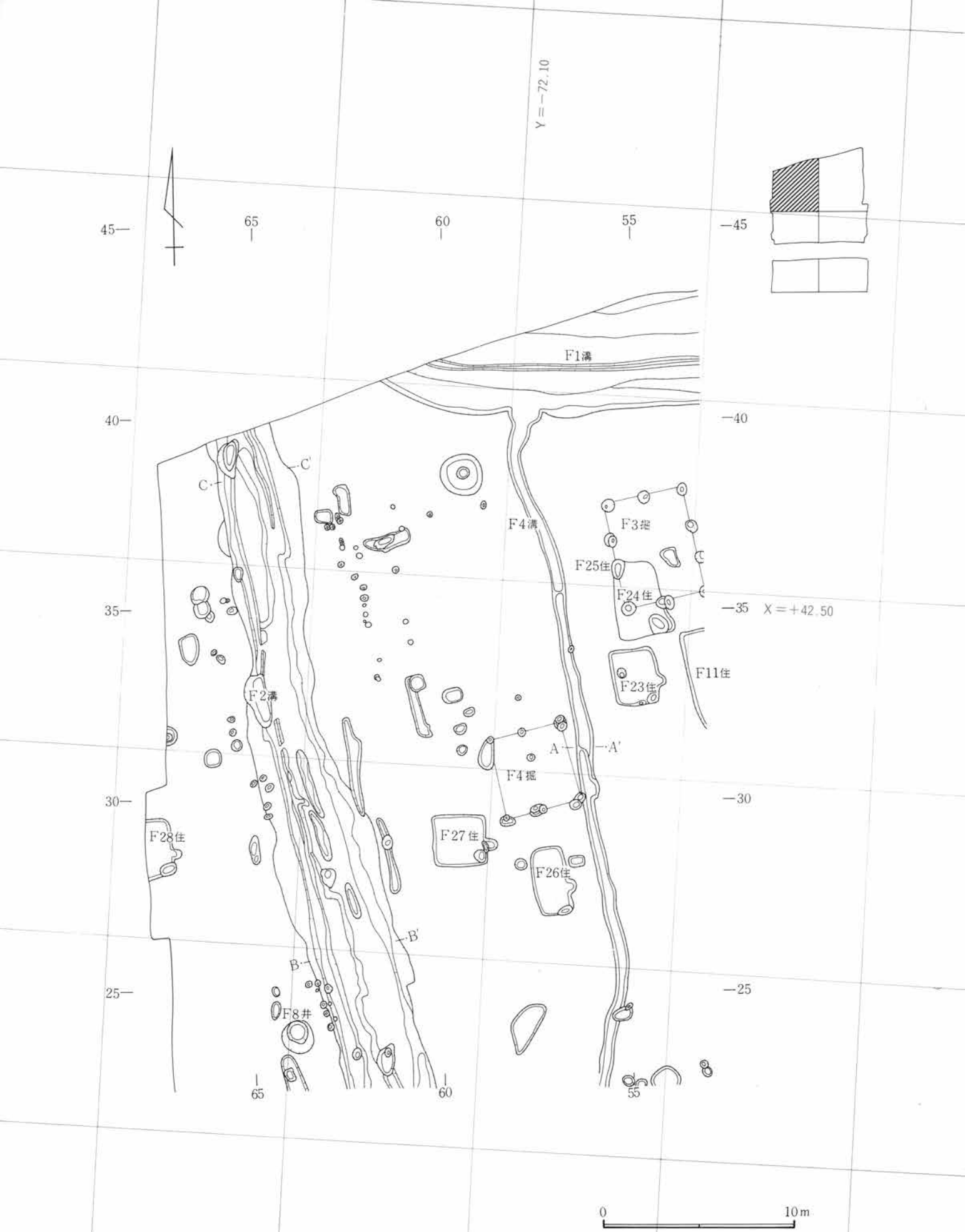


Fig. 27　F区全体図（1）

Fig. 28　F区全体図（2）

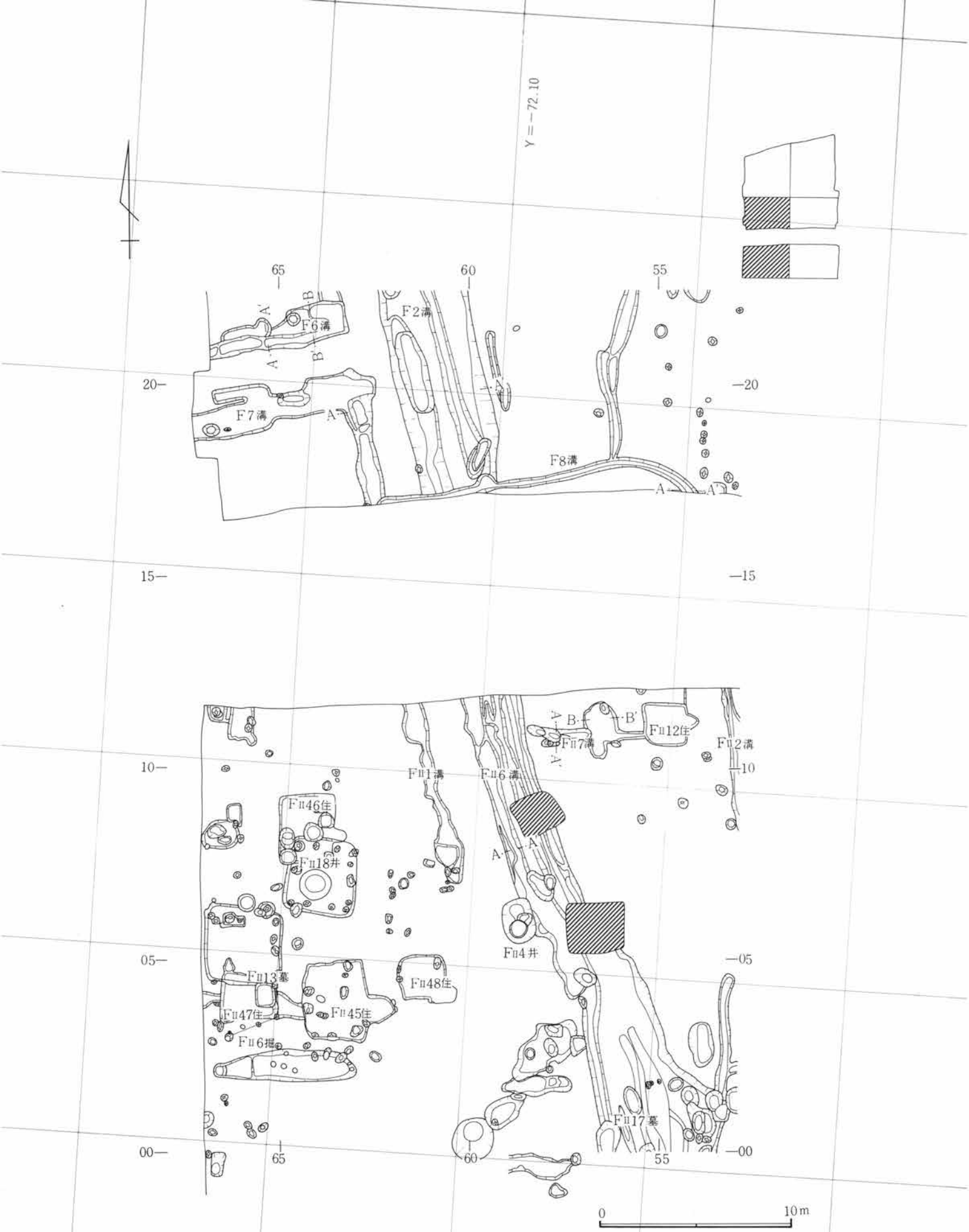


Fig. 29　F区全体図（3）

Fig. 30　F区全体図（4）

第3章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡と出土遺物

本報告になるＡ～Ｆ区は鳥羽遺跡全体のほぼ南半を占める区域外である。遺跡全域で検出された竪穴住居跡は800軒を優に越えるが、Ａ～Ｆ区では120余軒が確認されたに留まる。当該各区はさく状遺構を中心とする生産跡遺構の分布が著しく、北半の竪穴住居群を中心とした遺構内容とはかなり様相を異にしている。さく状遺構は中世ないしは中世以降の所産になるものがほとんどであるにしても、土地利用の形態は基本的にはそれをひき継ぐものであったであろう。また竪穴住居跡のもつ時間的側面では、北半のそれは古墳時代中半を端緒とする集落形成は八世紀代をピークにし、多少分散化が見られるものの十一世紀後半に至る長期に渡る営みが行なわれている。これに対しＡ～Ｆ区においては、その形成期を九世紀代まで待つことになる。(但し、北半でも群の分散化が生じるのはこの頃からで、隣接するＧ区と付合する）遺跡全体から見たこの現象は、当遺跡の東方に推定される上野国府の存在と考慮しなければならないであろう。

鳥羽遺跡北半の集落は大規模鍛冶工房跡の出現が示すように、国府の活動に紹応した成立過程と見ることができよう。その後も何らかのかかわり合いの中で集落変遷がなされたであろう。一方南半における集落形成はむしろ直接的農耕生産活動に基づいて行なわれたと考えられる。これを示す一つの現象としてＦ区の竪穴住居小群に付随する掘立柱建物跡である。相対的に掘立柱建物跡が希弱な当遺跡にあって、南半域の集落形成の意義は奈良から平安時代への社会的変動を探る手立ての１例になろうか。

Fig. 31　Ａ～Ｆ区竪穴住居跡分布図

第１節　竪　穴　住　居

Ｂ１号住居跡（Fig. 32・33、PL. 7・38）

Ｂ区の南西部に位置し、53～55Ｂ８～10の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。3.3×2.4mの規模で、壁高約15cmを測る。竈は東壁やや南側に付設し、主軸方位はＮ－102°30′－Ｅを示す。床面は竈前面を除き踏み締まりが弱く、平坦をなす。住居跡中央部に検出された楕円形土坑は埋土の観察から、住居跡より新しい時期のものと考えられる。

竈口東壁を半円形に掘り込み、両袖部は壁線より外方に右は煉瓦状の凝灰岩加工材を、左は偏平な自然石を埋設する。また、竈内には構築材の一部と思われる凝灰岩質加工材や自然石が散乱する。使用時における竈奥行き45cm・焚口幅40cmを測るが、掘形は焚口幅がやや広がり60cmである。火床は赤化焼土面を形成し、薄く黒色灰層が堆積し、竈前床面には青灰色ないしは灰白色灰層が広がる。

遺物は竈前面を中心とする中央部に点在し、床面直上のものは少ない。須恵器杯を主に土師器甕類がある。

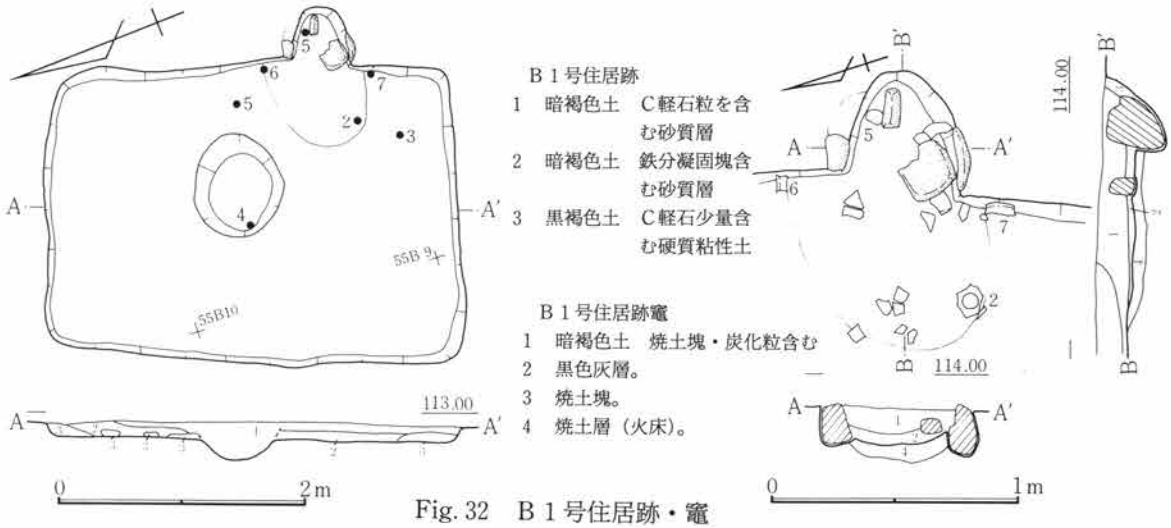


Fig. 32　Ｂ１号住居跡・竈

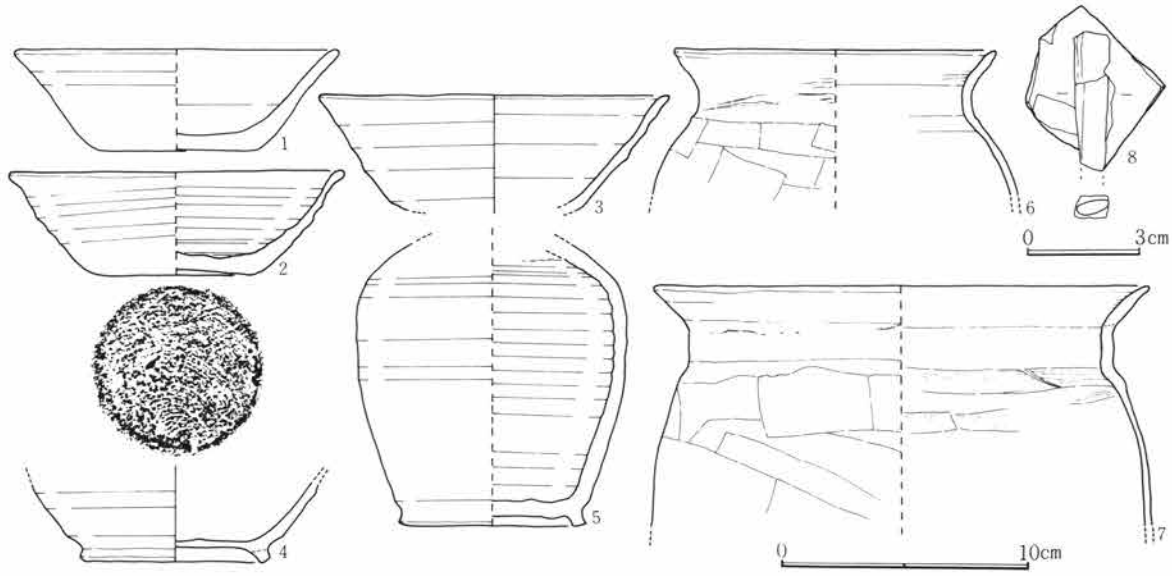


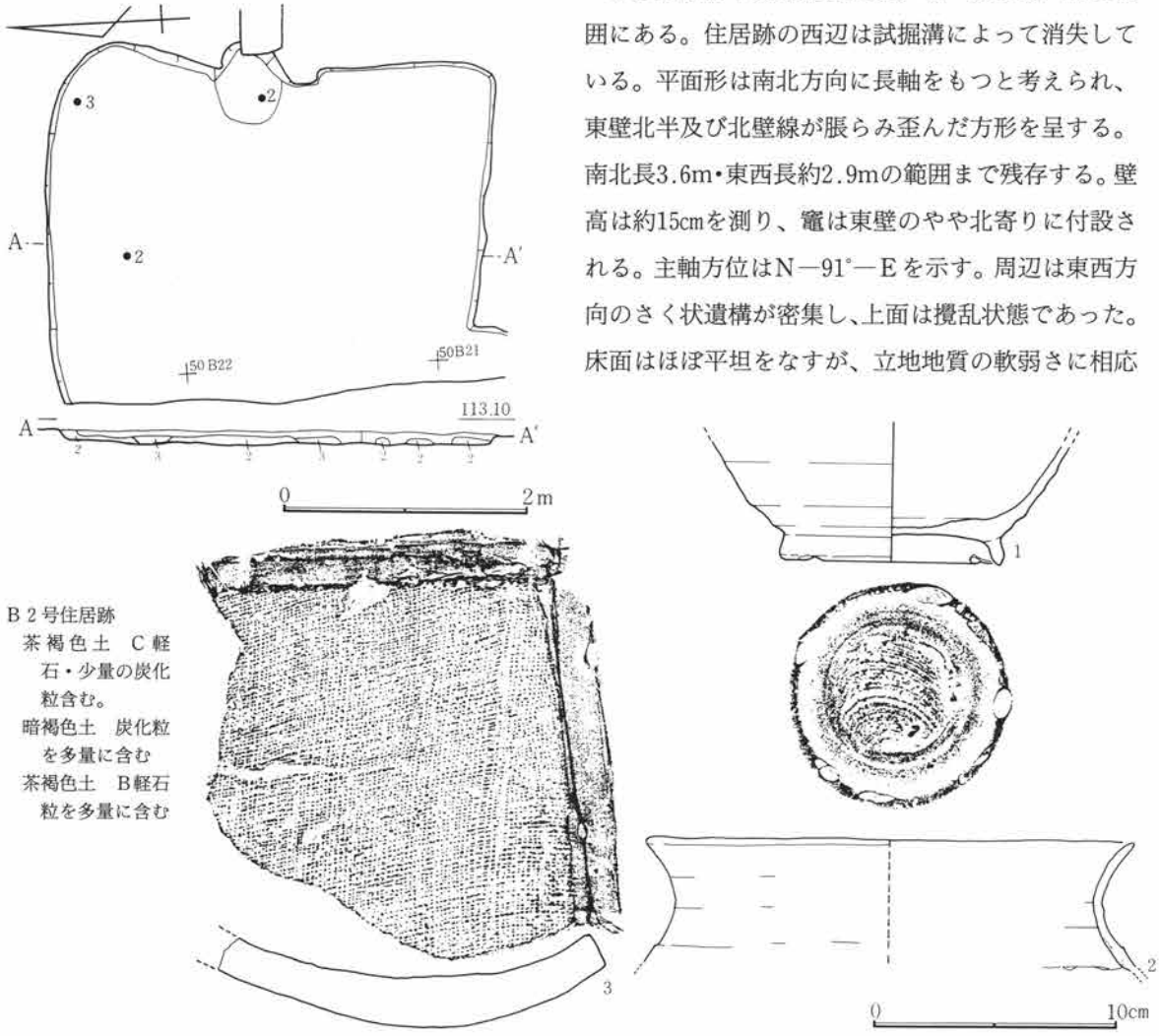
Fig. 33　Ｂ１号住居跡出土遺物

Ｂ１号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
33－1 38－1	須恵器 杯	¼	12.9×6.1 ×4.0	埋土	体部やや深く上半は緩く外反して開く。轆轤整形、回転糸切り。	①やや軟　②灰　③密
33－2 38－2	須恵器 杯	⅔	13.4×6.3 ×4.1	埋土・ ＋9	腰部に丸味をもち、口縁部強く外反して開く。体部内外面轆轤目強い。轆轤整形。右回転糸切り。内外面に黒斑あり。	①酸化気味軟　②淡黄　③やや密
33－3 38－3	須恵器 椀	底部欠損	14×－ ×(4.5)	床直・ ＋3～7	腰部に弱い丸味をもち体部は直線的に開き器肉薄い。体部吸炭部多く燻し焼成か。轆轤整形。	①やや軟　②暗灰　③やや密
33－4 38－4	須恵器 椀	体部上半欠損	－×7.0 ×3.2	床直・ ＋2	腰部に張り、体部直線的に開くか。付高台断面矩形、畳付け外傾。轆轤整形。回転糸切り。内外面黒斑あり。	①酸化軟　②橙　③密輝性極細粒混
33－5 38－5	須恵器 小型瓶	⅔口頸部欠損	－×7.5×(11.1) 最大径10.7	埋土・ ＋6～7	胴部張り少なく肩部張る。付高台断面矩形。内外面轆轤目強い。肩・頸部接合部絞り痕。水引き整形か？	①良好　②暗灰　③やや粗
33－6 38－6	土師器 小型甕	口縁～胴部¼	12.8×－ ×(5.7)	床面・ ＋5	肩部丸く張る。口縁部強く外反して開き、口唇部僅かに内屈。肩部横箆削り。口縁部に箆痕著しい。	①良好　②橙　③やや密細砂混
33－7 38－7	土師器 甕	口縁～胴部¼	19.8×－ ×(9.4)	床面・ ＋7	肩部張りなし。口縁部下半直立し上半は強く外屈するコの字口縁。肩部横・斜箆削り。内面横箆撫で。	①良好　②明橙　③やや密
33－8 38－8	鉄製品 不　明	小片	長・幅・厚 3.6×0.8×0.4	埋土	土師器杯小片に付着。他に剝落の痕跡あり。断面扁平な楕円形を呈す。	

Ｂ２号住居跡（Fig. 34、PL. 7・38）

Ｂ区のほぼ中央部に位置し、48～50Ｂ20～22の範囲にある。住居跡の西辺は試掘溝によって消失している。平面形は南北方向に長軸をもつと考えられ、東壁北半及び北壁線が脹らみ歪んだ方形を呈する。南北長3.6m・東西長約2.9mの範囲まで残存する。壁高は約15cmを測り、竈は東壁のやや北寄りに付設される。主軸方位はＮ－91°－Ｅを示す。周辺は東西方向のさく状遺構が密集し、上面は攪乱状態であった。床面はほぼ平坦をなすが、立地地質の軟弱さに相応



Ｂ２号住居跡
1　茶褐色土　Ｃ軽石・少量の炭化粒含む。
2　暗褐色土　炭化粒を多量に含む
3　茶褐色土　Ｂ軽石粒を多量に含む

Fig. 34　Ｂ２号住居跡・出土遺物

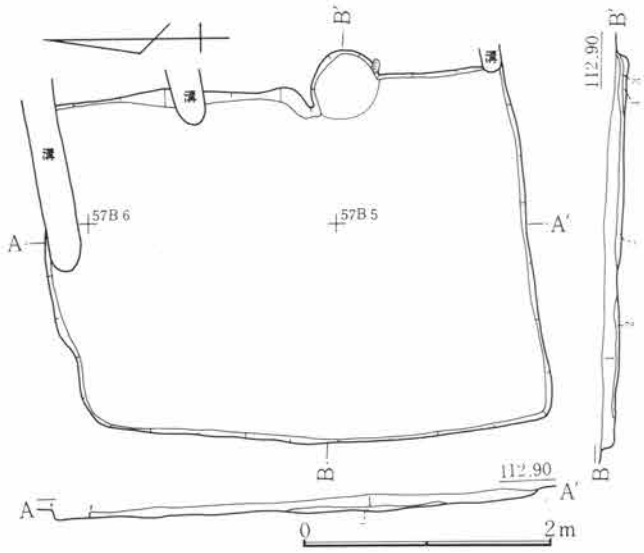
して踏み締まりは極めて弱い。

竈は東壁を僅かに掘り込み、両袖を形ばかりに作り出す狭小な形態である。石などの構築材は竈や、住居内にも見られない。火床面の赤化は弱く、薄い灰層の堆積が認められたにすぎない。開口幅55cm・奥行き30cm。

出土遺物は須恵器椀・平瓦など僅かである。

Ｂ２号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
34－1 38－1	須恵器 椀	体部上 半欠損	－×8.7 ×(5.0)	埋土	腰部やや張る。体部深目。付高台やや高く断面丸い。畳付けに２対４ケ所に棒状受け痕。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密黒色粒多量に混
34－2 38－2	土師器 甕	口縁部 小片	19.5×－ ×(5.0)	床直・ -6.5～+1.5	肩部張り少なく、口縁部強く外反して開く。器肉薄い。肩部横篦削り。口縁・肩部に接合痕。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
34－3 38－3	瓦 平　瓦	小片	厚2.1	床直・ +1	凹面布目、輪積痕あり。凸面撫で調整。側縁篦調整。	①良好　②灰　③やや密



Ｂ３号住居跡
1　茶褐色土　Ｃ軽石を多量に含み、少量のＢ軽石炭化粒を含む。
2　暗褐色土　少量のＣ軽石・炭化物を含む。
3　焼土塊層。
4　明褐色土　少量の焼土・炭化粒・Ｃ軽石を含む。

Fig. 35　Ｂ３号住居跡

Ｂ３号住居跡（Fig. 35・PL. 7）

Ｂ区南西部隅に位置し、56・57Ｂ４～６の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。3.35×2.7mの規模で壁高10cmを測る。竈は東壁やや南側に付設し、主軸方位はＮ－80°－Ｅを示す。床面は平坦をなすが顕著な踏み締まりはなく脆弱である。住居跡東方には東西方向にさく状遺構が走り、一部当跡の上面に及び壁線を断ち切っている。

竈は東壁を半円形に掘り込み、左袖は小さく突出するが、構築材などは遺存しない。火床面には灰などの堆積はほとんどなく、赤化火床は塊状の焼土層となっていた。開口部幅50cm・袖部からの奥行き45cmを測る。

出土遺物は少なく須恵器蓋が検出されたが、所在不明のため図示できない。

Ｂ４号住居跡（Fig. 36～38、PL. 38・39）

Ｂ区南西端に位置し、62～64Ｂ７・８の範囲にある。平面形は東西・南北軸ほぼ同規模な方形を呈する。東西・南北長は2.8×2.95mで壁高約22cmを測る。竈は東壁にあり、大きく南側に偏って付設される。主軸方位はＮ－86°－Ｅを示す。床面は比較的安定して踏み締まり、平坦をなす。

竈は東壁を半円形に掘り込み、右袖部が大きく突出する。なお左袖部については東壁線がそのまま竈掘り込みへ直結した状態であった。竈右袖部には風化の著しい凝灰岩質加工材が検出されているが、２次的移動の痕跡があり、袖材として埋設されたものではない。幅広で偏平な形状から、むしろ天井材と考えられるが、竈内にはこれを支えるべき構築材は遺存しておらず、当跡廃絶時以後構築材抜き取りなどの行為がなされたものと考えられる。竈内及び、右前面に薄い灰層の堆積が見られたが、火床の硬質赤化面は存在していない。

開口部幅60cm・右袖部からの奥行き85cmを測る。

遺物は竈周辺部に多く、須恵器杯・椀類のほか砥石・丸瓦などがある。

B４号住居跡

1　暗褐色土　C軽石・焼土・炭化粒を含む砂質層。
2　暗褐色土　C軽石・焼土・炭化粒を含む。
3　暗褐色土　C軽石を多量に含みやや粘性をもつ。
4　暗褐色土　焼土塊・粒を多量に含む。
5　炭化粒・焼土塊混合層。

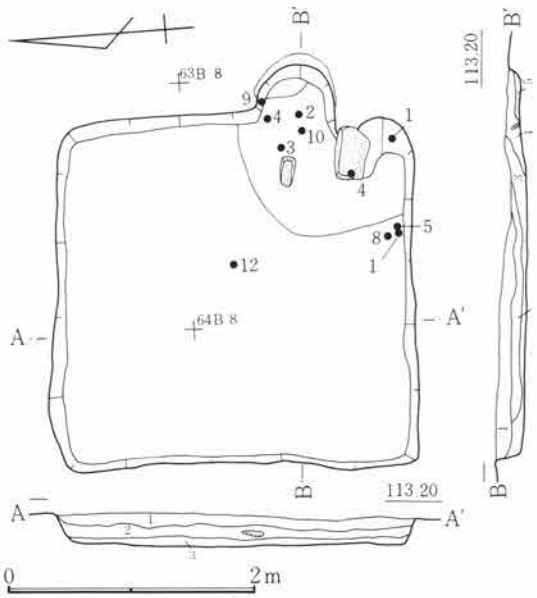


Fig. 36　B４号住居跡

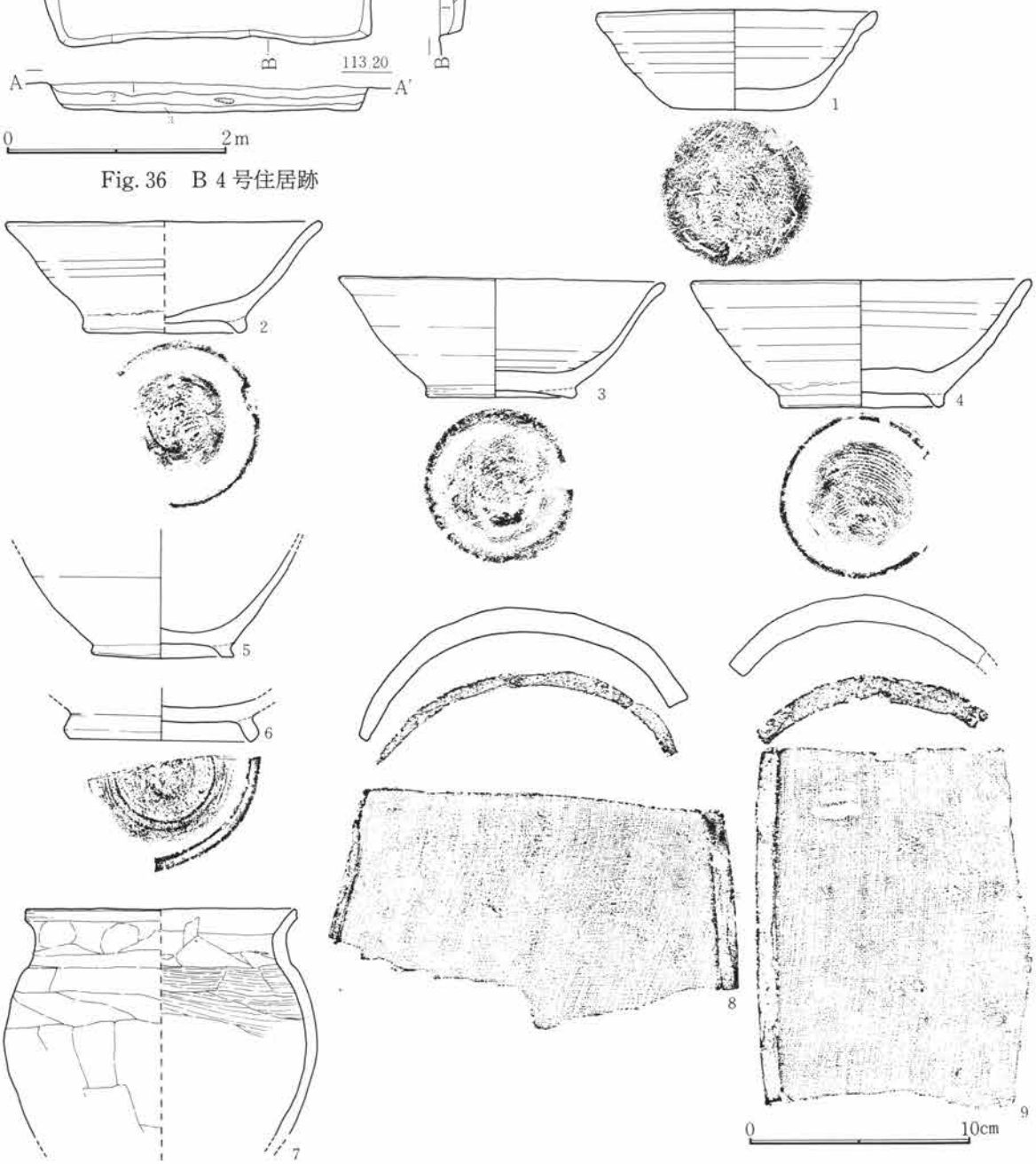


Fig. 37　B４号住居跡出土遺物（１）

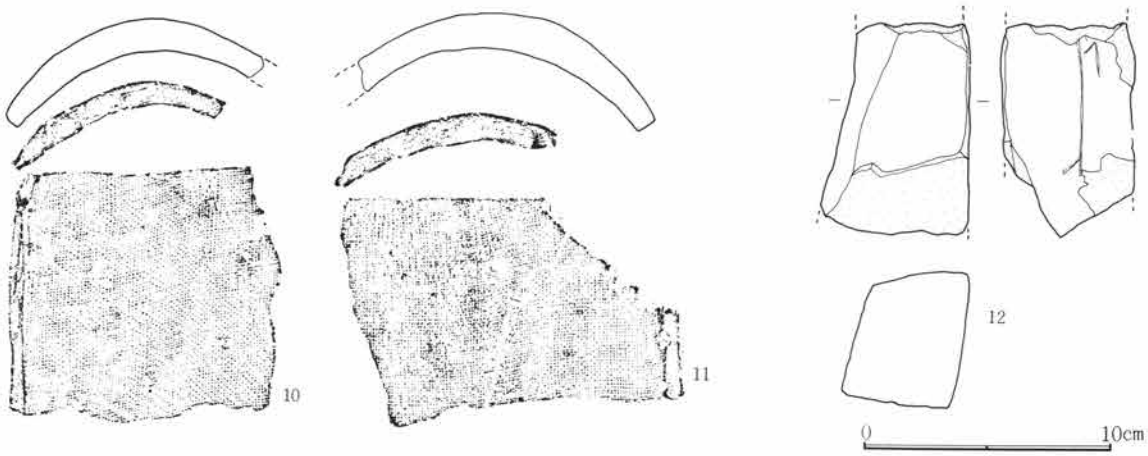


Fig. 37　Ｂ４号住居跡出土遺物（２）

Ｂ４号住居跡出土遺物観察表

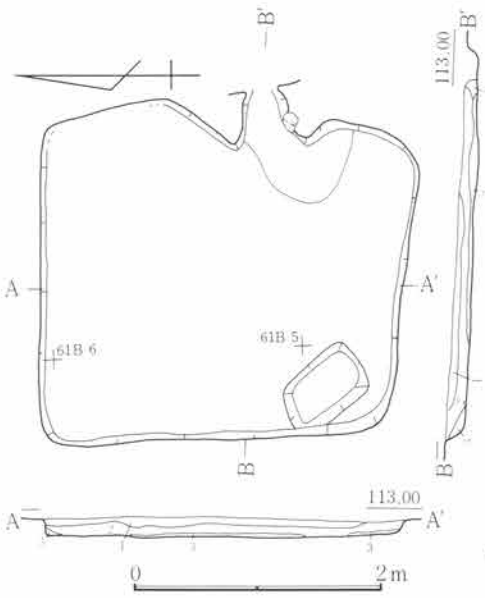
Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
37－1 38－1	須恵器 杯	ほぼ完形	12.7×6.0 ×4.4	埋土・ ＋8～16	腰部著しく肥厚し丸味強い。口唇部肥厚し僅かに外傾し内面段をなす。轆轤整形。底部周辺篦削りか。磨滅著しい。回転糸切り。	①良好　②灰　③密
37－2 38－2	須恵器 椀	⅓	14.2×7.3 ×4.9	埋土・ ＋11	体部中位僅かに張り。口唇部丸く緩く外反。付高台断面細矩形。轆轤整形。見込部著しくくぼむ。	①酸化気味軟　②灰黄　③密輝性細粒混
37－3 38－3	須恵器 椀	⅔	14.7×6.8 ×5.4	埋土・ ＋13	体部僅かに丸味をもち、口唇部丸く緩く外反。付高台低く作り雑。轆轤整形。回転糸切り。内外面黒斑部多く燻焼か	①良好　②灰　③やや粗細砂混
37－4 38－4	須恵器 椀	½	15.3×7.3 ×5.7	埋土・ ＋8～8.5	腰部に張りなく、体部直線的に開く、全体に肥厚。付高台やや低く断面丸味。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味　②灰白　③やや密
37－5 38－5	須恵器 椀	½	－×6.4 ×(5.0)	埋土	腰部張りなく深目の体部。付高台断面矩形を呈し作り雑。轆轤整形。外面著しく内面黒色付着物。	①酸化気味良好　②灰白　③やや粗
37－6 38－6	灰釉陶器 椀	底部½	－×8.8 ×(1.8)	埋土	付高台高目の略三ケ月高台。底部回転篦削り。見込部使用減著しい。	①良好　②灰白　③やや粗
37－7 39－7	土師器 甕	口～胴部⅓	12.2×－ ×(10.0)	床下埋土	胴部丸く張る。口縁下半直線的に外傾し上半は外傾するコの字口縁、口縁部指頭痕。肩部横・斜、胴部縦篦削り。	①良好　②鈍い橙　③やや粗砂粒混る
37－8 39－8	瓦 丸瓦		厚1.0	埋土・ ＋9.5	凸面篦削り後斜指頭撫で調整。凹面極細布目。側面篦調整器肉薄い。９と同一個体か？	①良好　②灰　③やや密白色微細粒混
37－9 39－9	瓦 丸瓦		厚1.1	埋土・ ＋7	凸面篦削り後斜指頭撫で調整。凹面極細布目。側面篦調整器肉薄い。８と同一個体か？	①良好　②灰　③やや密白色微細粒混
38－10 39－10	瓦 丸瓦		厚1.3	埋土・ ＋10	凸面斜篦削り後指頭撫で調整。凹面極細布目継ぎ痕あり。側面篦調整。器肉薄い。11と同一個体か？	①酸化軟　②浅黄橙　③密縞状
38－11 39－11	瓦 丸瓦		厚1.3	埋土	凸面篦削り後撫で調整。凹面極細布目。側面篦調整。器肉薄目。10と同一個体か？	①酸化軟　②浅黄橙　③密縞状
38－12 39－12	石製品 砥石		長・幅・厚 8.2×4.8×5.1	埋土	長方形砥石、長軸面は全面使用。うち２面は破損後再使用刃痕あり。317g	流紋岩（砥沢？）

Ｂ５号住居跡（Fig. 39・40、PL. ７・39）

Ｂ区南西部隅に位置し、60・61Ｂ４・５の範囲にある。平面形は略方形を呈するが、南・東壁線、とくに東壁線の歪みが大きく不整形となる。東西・南北長は3.0×2.7m、壁高は約13cmを測る。竈は東壁のやや南側に付設し、主軸方位はおよそＮ－93°－Ｅを示す。床面の踏み締まりは弱く、調査時での検出作業に困難をきたし、結果的に不整合な面をなしている。南西隅に70×45cm、深さ15cm程度の長方形落ち込みを検出したが、当跡に伴うか否かは不明である。

竈は東壁を掘り込み、両袖が小さく突出する形態をもつ狭小な作りである。開口部幅60cm・袖部からの奥行き50cmを測るが、先端部付近はさく状の溝によって攪乱を受けており、火床面も明瞭ではなかった。竈内から右前方にかけて薄い灰層の堆積が見られた。

出土遺物は散在しており、須恵器杯・椀類のほか灰釉陶器片がある。



B５号住居跡
1　暗褐色土　炭化粒・焼土粒を含みB軽石・C軽石を少量混える。
2　茶褐色土　炭化粒・焼土粒・C軽石を含む。
3　褐色土　焼土粒・炭化粒を含む。
4　焼土塊。

Fig. 39　B５号住居跡

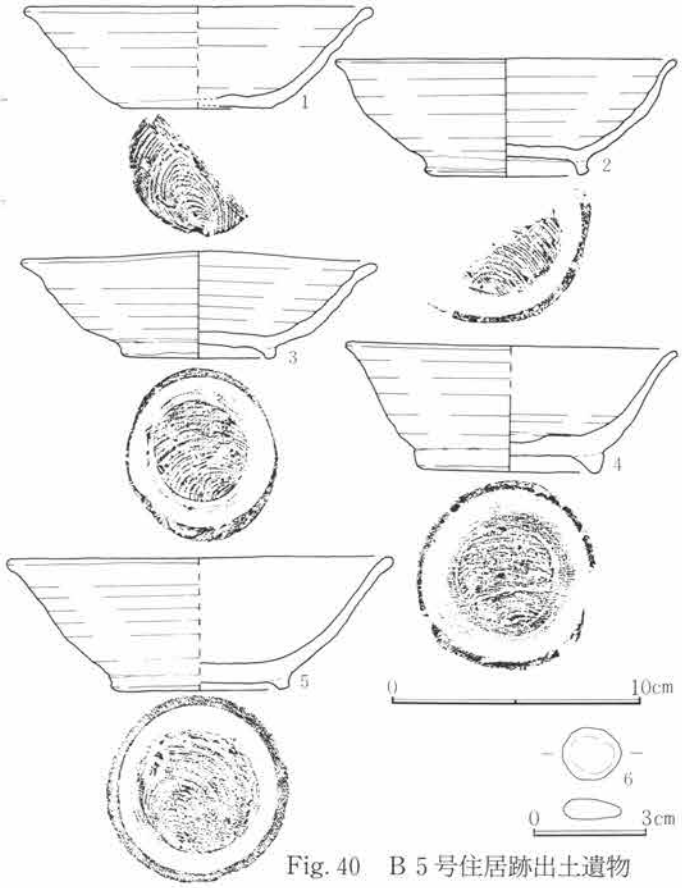


Fig. 40　B５号住居跡出土遺物

B５号住居跡出土遺物観察表

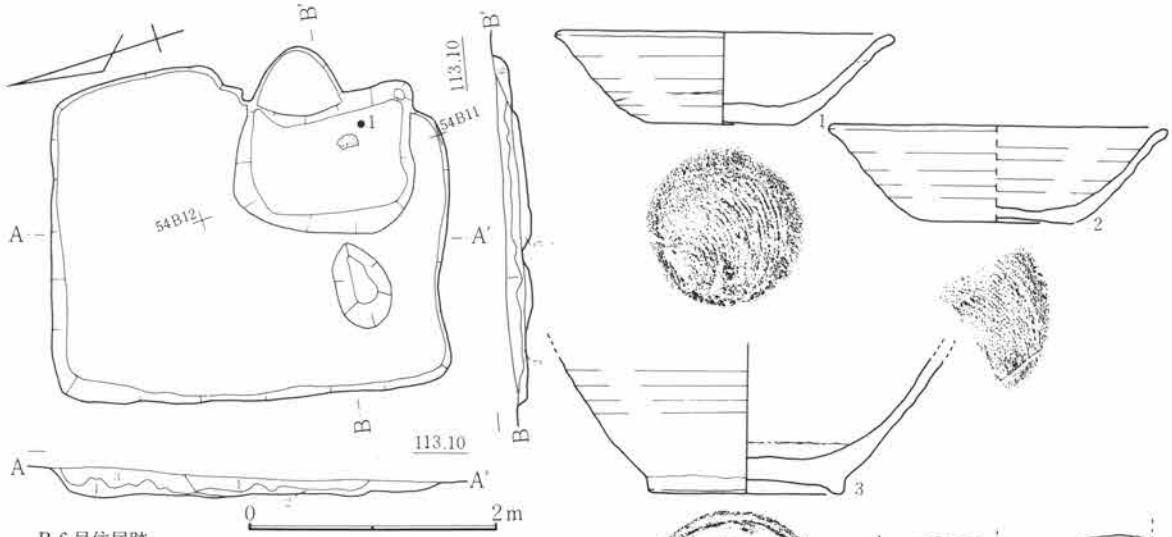
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
40－1 39－1	須恵器 杯	⅓	14.0×6.0 ×4.0	埋土	底径小さく腰部に丸味をもつ。体部轆轤目強く大きく開く。口唇部肥厚し丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
40－2 39－2	須恵器 椀	½	13.6×6.6 ×4.6	埋土	体部内外面轆轤目強く浅目で丸味をもち内湾気味に開く。口唇部強く外傾。付高台断面矩形。轆轤整形。右回転糸切。	①良好　②灰　③やや密
40－3 39－3	須恵器 椀	⅔	14.2×6.2 ×4.2	埋土	体部内外面轆轤目強い。浅く丸味をもち内湾して大きく開く。口唇部強く外傾。付高台断面矩形で粗雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密粗粒土混
40－4 39－4	須恵器 椀	⅓	13.2×7.1 ×4.9	埋土	腰部肥厚し丸味をもつが、体部深く直線的に開く。口唇部薄く強く外傾。付高台肥厚し丸い。轆轤整形。回転糸切り	①軟燻し　②褐灰 ③細砂・雲母混
40－5 39－5	須恵器 椀	⅓	15.4×7.2 ×5.2	埋土	体部丸味をもって開く。口唇部丸まり緩く外傾。付高台低く断面矩形。轆轤整形。右回転糸切り。作り丁寧。	①酸化軟　②純橙 ③密極細金雲母混
40－6 39－6	石製品 碁石？		径・厚 1.4×1.6×0.5	埋土	側縁に微弱な面取り調整痕あり。1.4g	

B６号住居跡（Fig. 41・42、PL. 7・40）

B区南西部に位置し、53・54B11・12の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ略方形を呈するが、竈を付設する東壁線の南半が大きく歪み不整な形状をなす。3.15×2.65mの規模で、壁高は北壁線沿が最も遺存がよく、約20cmを測る。主軸方位はN－100°－Eを示す。床面の踏み締まりは弱く、凹凸が著しく不安定である。竈前面は大きく方形状に窪むが、床面との落差とともに、竈焚口とも明瞭に段をなしており、掘形時の所作と考えられる。この窪み内からは須恵器杯１点が検出されているが、締まりのある埋土からすれば生活床面下に属するものであろう。

竈は東壁を半円に掘り込むが、袖部など明瞭な痕跡は残されていない。また硬質な火床面は遺存せず、崩落焼土層で埋っている。開口部幅70cm・奥行き60cmを測る。

出土遺物は竈周辺部と住居跡東側に散在しており、須恵器杯・椀類のほか、流紋岩質の砥石がある。



Ｂ６号住居跡
1　茶褐色土　Ｃ軽石と少量のＢ軽石を含む。
2　明茶褐色土　Ｃ軽石・焼土粒・炭化粒を多く含む。
3　褐色土　Ｂ軽石を多量に含み軟質。
4　茶褐色土　Ｂ軽石を多量に含み少量のＣ軽石を混える。
5　黒褐色土　少量のＣ軽石を含み粘性をもつ。
6　崩落焼土（竈）。

Fig. 41　Ｂ６号住居跡

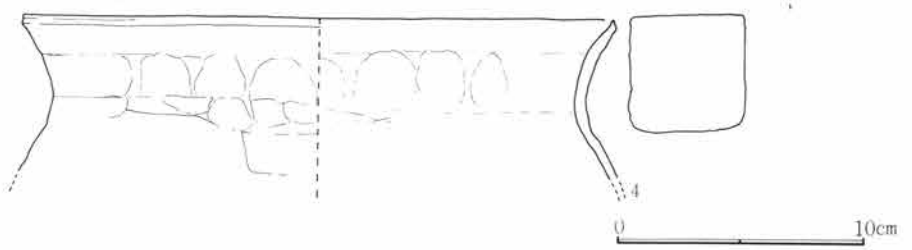


Fig. 42　Ｂ６号住居跡出土遺物

Ｂ６号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
42－1 40－1	須恵器 杯	完形	13.5×5.9 ×3.6	床直・ ＋3	体部大きく外傾して開く。口唇部丸まり強く外反。体部外面１条の巻上げ痕。器肉肥厚気味。轆轤整形右回転糸切り	①酸化気味軟　②鈍い褐　③密小石混
42－2 40－2	須恵器 杯	⅓	13.5×6.0 ×3.8	埋土	腰部丸味。口唇部丸まり外反。内外面轆轤目強い。底部薄い。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良　②灰白　③やや密小石混
42－3 40－3	須恵器 椀	底～体部	－×7.8 ×(5.4)	埋土	腰部張り少なく体部深目で直線的。底部肥厚。見込部に径８cmの重ね焼痕。付高台低く角高台。轆轤整形回転糸切り	①良好　②灰　③やや密小石混る
42－4 40－4	土師器 甕	口縁部小片	23.4×－ ×(6.0)	埋土	肩部張り少なく口縁部緩く外反。口唇部鋭り内傾気味。口縁部内外面指頭痕。肩部外面横箆削り、内面横箆撫で。	①良好　②鈍い橙　③密
42－5 40－5	石製品 砥石	残欠	長・幅・厚 8.7×4.7×4.6	埋土	長軸両端欠損。長方形状になるか。４面に使用痕うち１面に刃痕か。中砥。306.5g	流紋岩（砥沢？）

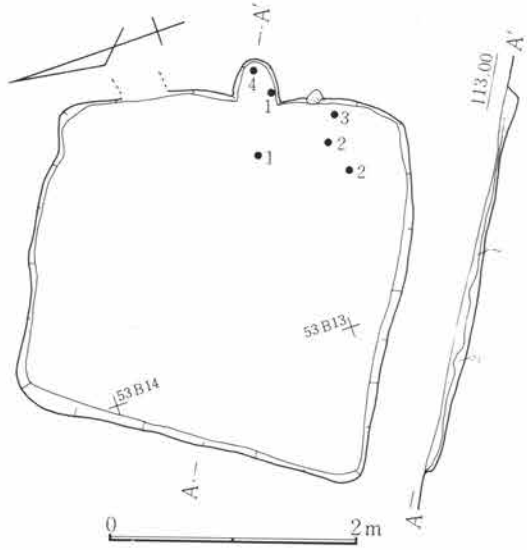
Ｂ７号住居跡（Fig. 43・44、PL. 7・40）

Ｂ区中央部に位置し、51～53Ｂ12～14の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ略方形を呈するが、

北壁線が短かくやや歪んだ形状をなす。3.0×2.9mの規模で、壁高は約12cmを測る。竈は東壁のほぼ中央に付設し、主軸方位はおよそＮ－111°－Ｅを示す。床面は踏み締まりが弱く、南西部が沈み込む個所もある。

竈は東壁を半円形に掘り込み、袖部や構築材が存在せず狭小なものである。火床面の硬質部分も残らず、内部には少量の焼土塊や炭化粒が認められたにすぎない。開口部幅35cm・奥行き30cmを測る。

出土遺物は竈及びその周辺部を主に検出され、須恵器椀・土師器甕・瓦片のほか鉄鎌と思われる鉄片などがある。



Ｂ７号住居跡
1　茶褐色土　Ｂ・Ｃ軽石を含み締りがよくない。
2　暗茶褐色土　Ｃ軽石・炭化物を含み、堅く締まる。

Fig. 43　Ｂ７号住居跡

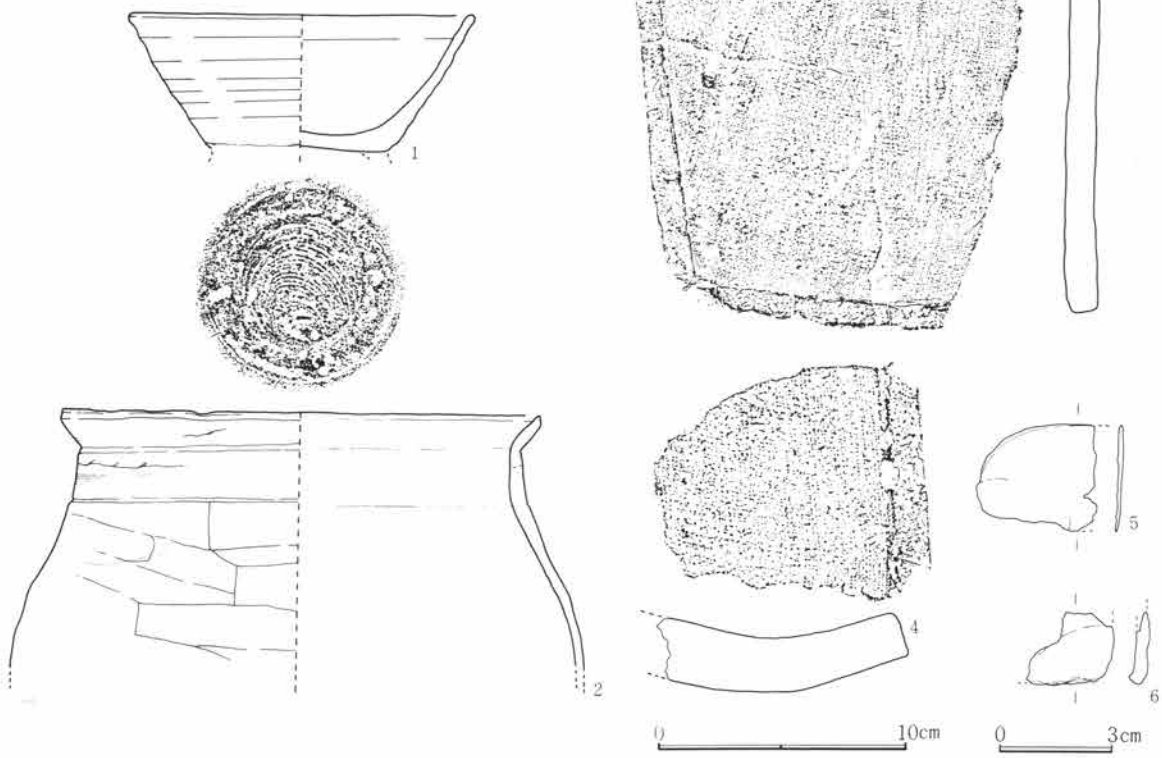


Fig. 44　Ｂ７号住居跡出土遺物

B 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
44－1 40－1	須恵器 椀	½	15.2×－×(5.4)	埋土・＋15～19	体部深く直線的。付高台剥離。轆轤整形。右回転糸切り。高台剥離面使用擦れあり。	①良好 ②灰 ③やや粗
44－2 40－2	土師器 甕	口縁～胴部¼	18.9×－×(10.3)	埋土・＋18～22	肩部張り少なく口縁下位直線的に内傾し上半は内湾気味に強く外屈するコの字口縁。肩部横・斜箆削り。内面弱い箆撫で。	①良好 ②橙 ③やや密細砂混
44－3 40－3	瓦 丸瓦		厚1.2	埋土・＋20	凸面縦箆削り後斜指撫で。凹面極細布目。側面箆調整。	①良好 ②灰 ③やや密石英粒混
44－4 40－4	瓦 平瓦		厚2.2	埋土・＋25	凹面粗い布目。側縁箆調整。	①良好 ②灰 ③粗石英粒多量混
44－5 40－5	鉄製品 不明	片端部欠損	長・幅・厚 5.2×2.8×0.6	埋土	一側縁薄く刃状をなす。緩く湾曲気味になり、鎌刃部の可能性あり。	
44－6 40－6	鉄製品 不明	小片	長・幅・厚 1.9×2.4×0.3	埋土	一側縁僅かに折れる。鎌基部の可能性あり。	

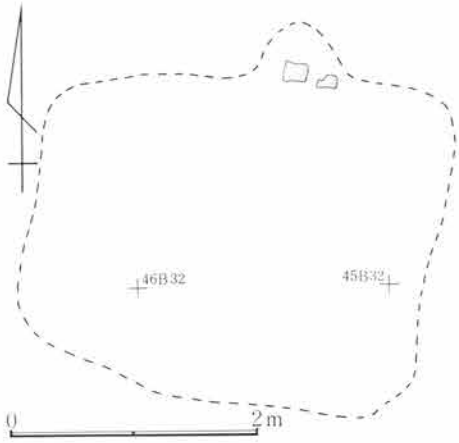


Fig. 45　B 8号住居跡

B 8号住居跡（Fig. 45）

B区中央部やや北寄りに位置し、44～46B31～33の範囲にある。遺存状態は極めて悪く、かろうじてその輪郭が知れる程度である。平面形は東西方向に長軸をもつ隅丸の方形を呈し、3.3×2.65mの規模である。

竈は北壁やや東寄りに付設され、東壁付設を通常とする当区では唯一の例である。竈構築材と思われる凝灰岩質の風化が著しい加工材が検出され、焼土・灰などは僅かに認められたにすぎない。

B 9号住居跡（Fig. 46、PL. 8）

B区中央部やや西寄りに位置し、53・54B14・15の範囲にある。平面形は南西部壁線が丸味をおび、やや不整形であるが方形を呈し、東西・南北長とも約2.7m・壁高10cmを測る。竈は東壁やや南に付設し、主軸方位はN－80°－Eを示す。床面は南東部が低く、細かな凹凸面をなしているが他部分と比較しても踏み締まりの程度に差はなく軟弱な状態である。

竈は東壁を小さく掘り込む狭小な規模で構築材などは見られず、僅かな焼土粒の堆積が認められたにすぎない。開口部幅40cm・奥行き20cmを測る。北西隅に深さ20cm・80×70cmの方形落ち込みが検出されているが、当跡に伴うか否か不明である。

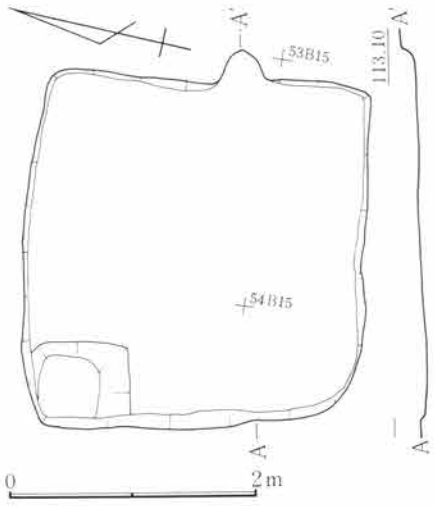


Fig. 46　B 9号住居跡

B41号住居跡（Fig. 47・48・280、PL. 40）

B区の中央部に位置し、50・51B24・25の範囲にある。当跡の北側には東西走する近世に属する溝によって切られている。全面後世の削平によって遺存部分は僅かであり、竈の火床面と考えられる焼土層が確認されている。掘形の僅かな痕跡をたどって推定

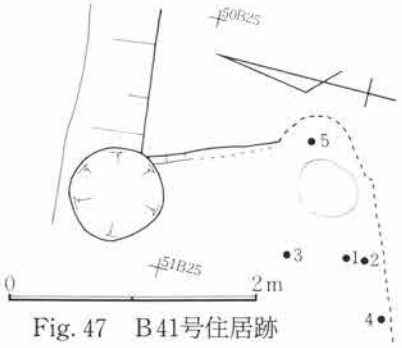


Fig. 47　B41号住居跡

される形状は東壁の南隅に竈を付設する方形であろうか。主軸方位はN－70°－Eを示す。

出土遺物は竈前面に須恵器杯・皿・椀があり、竈内にあたる個所より「八田小石次」の箆文字が書かれる平瓦がある。この平瓦に関しては遺憾ながら現在実物の所在が不明であり、図示できない。なお拓本は195頁に掲載する。

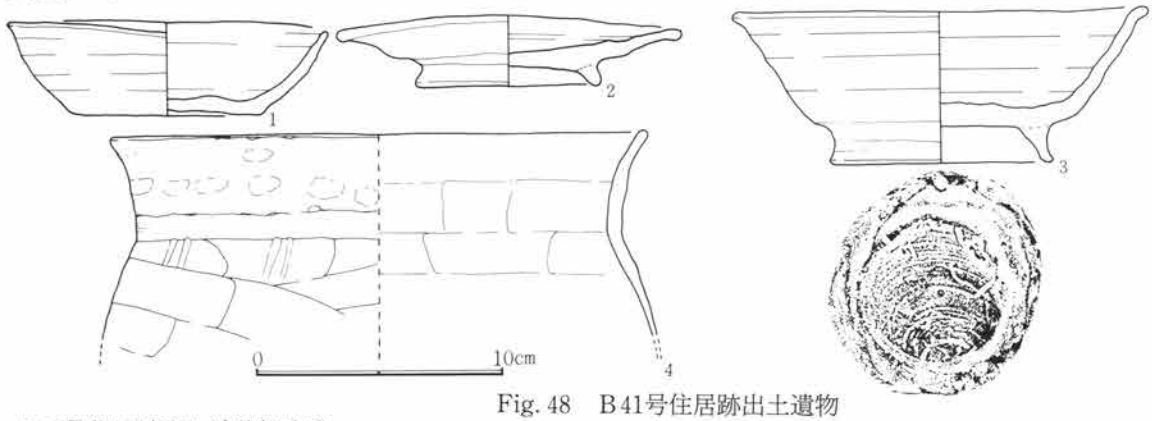


Fig. 48　B41号住居跡出土遺物

B41号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
48－1 40－1	須恵器 杯	⅔	12.8×7.4 ×3.7	床面	体部中位で僅かに張りをもち、口縁部外反気味に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密黒色粒混
48－2 40－2	須恵器 皿	ほぼ完形	14.0×7.4 ×2.8	床面	器肉厚い。腰部外面に段をなし、体部は外反して大きく開く。付高台肥厚し断面丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①燻し良好　②暗灰　③やや密
48－3 40－3	須恵器 椀	ほぼ完形	16.6×9.0 ×6.0	床面	腰部強く張り体部直線的でやや浅目。口唇部丸まり外反。付高台やや高い。轆轤整形回転糸切り。見込部巻き上げ痕	①酸化やや軟　②灰白　③密
48－4 40－4	土師器 甕	口縁～ 胴部⅓	21.4×－ ×(8.2)	床面	胴部僅かに張る。最大径は胴部にあり。口縁部は僅かに外反気味に開く。口縁部指頭痕後横撫で。肩部横箆削り。	①良好　②橙　③やや密

Ｃ１号住居跡（Fig.49・50、PL．８・41）

Ｃ区南東部に位置し、36・37Ｂ14・15の範囲にある。住居跡の西半は昭和55年度調査の範囲に含まれ、東半は昭和59年度の調査範囲の中で検出されたものである。しかし、55年度の調査時には住居跡の存在は確認されていない。平面形は方形と考えられ、東西長2.9mを測り、南北は東壁より約1.3mの範囲まで検出した。壁高は約25cmを測る。竈は東壁に南へ偏って付設され、主軸方位はN－88°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは比較的良好で、Ｃ軽石を混える貼床状の薄層を施す。

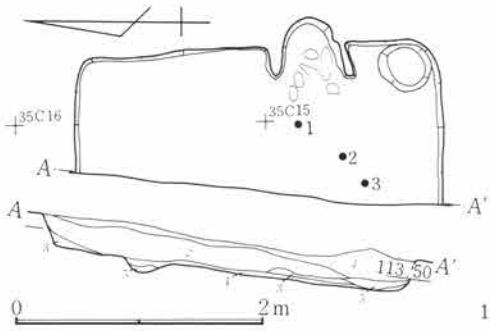


Fig. 49　Ｃ１号住居跡

竈は東壁を半円形に掘り込み、大きく突出する形態で、住居跡掘形を基盤として形成される。竈内には堅牢な火床面は遺存していない。なお竈前面には焼土粒・炭化粒を混えた貼床状の面が観察された。開口部幅45cm・袖先端よりの奥行き約50cmを測る。南東隅には径40cm・深さ20cmの貯蔵穴が検出されている。

Ｃ１号住居跡
1　暗褐色土　Ｂ軽石粒層。
2　暗褐色土　Ｂ軽石粒・Ｃ軽石粒・炭化粒含む。
3　暗褐色土　Ｂ軽石粒を多量に含む。
4　灰褐色土　Ｃ軽石粒を少量含み堅く締まる（貼床）。
5　黒褐色土　粘性あり。

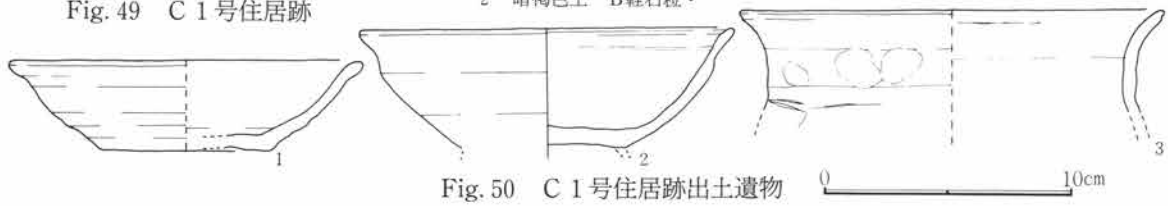


Fig. 50　Ｃ１号住居跡出土遺物

出土遺物は竈周辺に多く遺存しており、須恵器杯・椀・土師器甕片などがある。

C 1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
50－1 41－1	須恵器 杯	¼	14.0×6.8 ×3.5	床面	腰部小さくくびれ、体部に弱い丸味をもつ。口縁部緩く外傾。口唇部丸く肥厚。轆轤整形。回転糸切り。二次被熱。	①良好 ②灰白～灰褐 ③やや密
50－2 41－2	須恵器 椀	⅔高台欠損	15.0×－ ×(4.7)	床面	体部丸味をもち、上位でくびれ外反気味に開く。付高台剝落。轆轤整形。糸切り？	①酸化気味軟 ②淡黄～褐灰 ③密
50－3 41－3	土師器 甕	口縁部 ¼	17.0×－ ×(4.0)	床面	口縁部下位直に立ち上半は外反して開くコの字口縁。口唇部丸く細まり外屈し外面凹線状をなす。口縁部指頭整形後横撫で。肩部横篦削り。内面横篦撫で。	①良好 ②橙 ③やや密

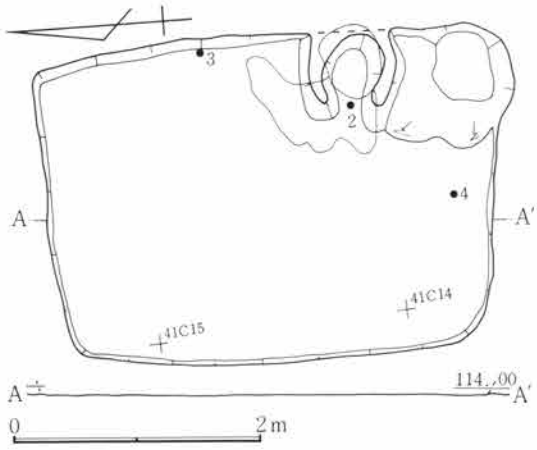


Fig. 51　C50号住居跡

C50号住居跡（Fig. 51・52、PL. 8・41）

C区の南東部に位置し、39～41C13～15の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもち、3.8×2.55mの方形をなす。壁高の残存は僅かであり、その輪郭がかろうじて観察できる4～5cmである。竈は東壁にあり、南に偏って付設される。主軸方位はN－92°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。

竈は住居跡全体の削平が著しく、形態などは不明である。火床面の赤化硬質部分とその前面から北側の床面にかけて薄い灰層が堆積する。貯蔵穴は南東隅にあり、楕円形を呈する。外縁線は住居跡壁線より外側へ膨らみ、内縁線はやや不規則で緩く擂鉢状に落ち込む。径90cm・深さ20cmを測る。

出土遺物は須恵器杯・椀類など少数であるが、床面からの出土である。

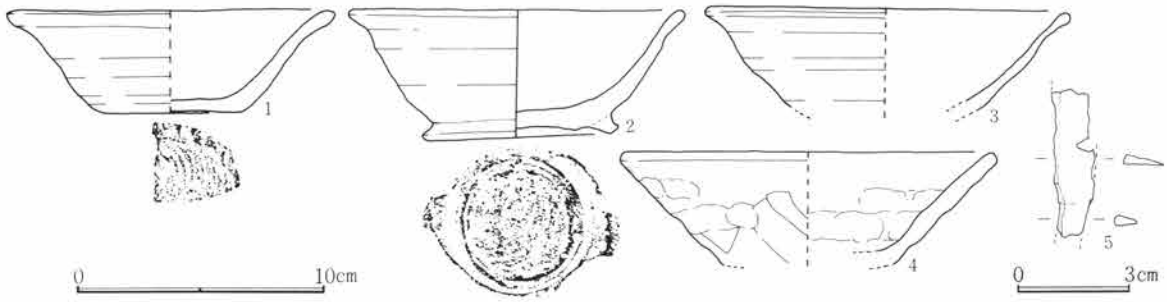


Fig. 52　C50号住居跡出土遺物

C50号住居跡出土遺物観察表

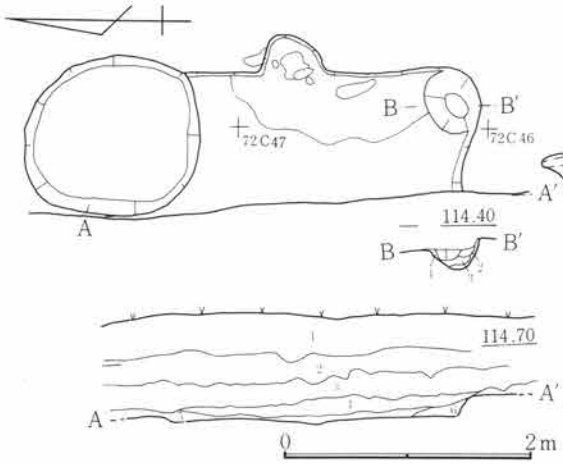
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
52－1 41－1	須恵器 杯	¼	13.0×5.6 ×4.1	埋土	体部直線的で、上半は緩く外反する。全体に肥厚する。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③やや粗
52－2 41－2	須恵器 椀	ほぼ完形	13.4×7.8 ×5.1	竈	腰部から体部丸味強い。口唇部丸く外傾して開く。付高台腰側に付く。轆轤整形回転糸切り。内外面燻し焼成。肥厚	①良好 ②暗灰～灰 ③密
52－3 41－3	須恵器 椀	¼	14.5×－ ×(4.0)	床面	体部中位やや張る。口唇部肥厚し丸まる。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③やや粗砂多く混
52－4 41－4	土師器 杯？	⅓	14.9×－ ×(4.4)	床面	体部直線的に開く。口唇部断面矩形。体部外面は2段指頭痕著しく篦撫で若干施す。内面指頭痕。	①良好 ②橙 ③やや粗細砂混
52－5 41－5	鉄製品 刀子？	小片	長(4.0) 幅1.1	埋土	刃部および柄部。片面は平造りか。	

C104号住居跡（Fig. 53・54、PL. 8・41）

C区北西部隅に位置し、71・72C46・47の範囲にある。西半部は調査区域外にかかり全体を検出していない。また北西隅は径1.2×1.4mの円形土坑によって消失している。平面形はほぼ方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。東西約1.1m・南北2.35mの範囲まで確認できる。壁高は約17cmを測る。竈は東壁に付設され、主軸方位はN—89°—Eを示す。床面は検出した範囲では北側がやや高くなるが安定した面をなし、踏み締まりは良好である。

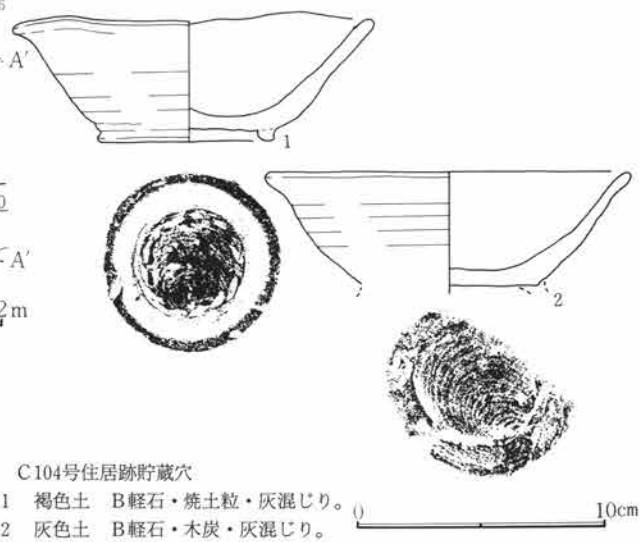
竈は東壁をやや不整半楕円形に掘り込むが、石などの構築材は検出されていない。火床と考えられる部分には小範囲で赤化硬質面が形成され、竈から南側に向かい床面直上に灰・焼土粒の薄層が帯状に堆積している。開口部幅50cm・奥行き30cmを測る。貯蔵穴と考えられる円形落ち込みが南東隅に位置し、外縁は壁線を僅かに張らませている。径約45cm・深さ15cmで、断面擂鉢状になる。埋土には床面に堆積する灰層の一部が流入している。

出土遺物は貯蔵穴周辺の床面より須恵器椀が検出されている。



C104号住居跡
1　表土。
2　灰褐色土　B軽石粒を多量に含む砂質層。
3　褐色土　C軽石を多く混じえる。粘性、締まりあり。
4　暗褐色土　C軽石・B軽石を含み、微粒を少量混じえる粘性多少あり。
5　暗灰褐色土　B軽石 砂質。粘性暗褐色土粒を混じえる。
6　灰褐色土　B軽石。粘性。

Fig. 53　C104号住居跡



C104号住居跡貯蔵穴
1　褐色土　B軽石・焼土粒・灰混じり。
2　灰色土　B軽石・木炭・灰混じり。
3　褐色土　灰混じり。粘性。
4　灰層。

Fig. 54　C104号住居跡出土遺物

C104号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
54—1 41—1	須恵器 椀	完形	14.3×7.1 ×4.8	埋土	歪み著しい。腰部丸く張り体部上半は外反気味に開く。付高台低く作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②淡黄　③やや粗
54—2 41—2	須恵器 椀	½高台欠損	14.5×— ×(4.5)	埋土	体部中位僅かに張り、上半は外反気味に開く。付高台欠損轆轤整形。回転糸切り。内外面二次被熱。	①酸化気味やや軟 ②淡黄～褐灰　③粗

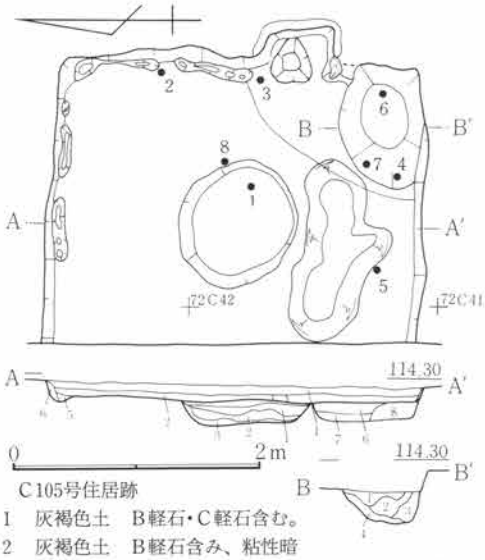
C105号住居跡（Fig. 55・56、PL. 8・41）

C区北西部隅に位置し、70～72C41・42の範囲にある。住居跡西端の僅かな部分が調査区域外に入ると考えられる。平面形は比較的壁線の整った方形をなし、東西は東壁より2.35mの範囲まで確認し、南北長は3mを測る。壁高は約10cmである。竈は東壁南寄りに付設され、主軸方位はN—92°—Eを示す。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。住居跡中央から南にかけて円形土坑・不整楕円形土坑が検出されてるが、粘性

があり堅く締った埋土の状況から床下土坑の可能性が強い。

竈は東壁を方形気味に掘り込み、右袖部が小さく突出し内縁に自然石を埋設する。また、やや奥まった左側縁部に同様な埋設された自然石がある。開口部幅60cm・奥行き50cmを測る。貯蔵穴は南東隅に設けられ、100×70cm・深さ25cmで楕円形を呈する。東壁から北壁下には溝状ないしは小穴が不規則に検出され、壁下溝の一部と考えられる。

出土遺物は須恵器椀・土師器甕などがある。



C105号住居跡
1　灰褐色土　B軽石・C軽石含む。
2　灰褐色土　B軽石含み、粘性暗褐色土を混じえる。
3　灰褐色土　B軽石含む。
4　暗褐色土　粘性あり。
5　焼土塊
6　暗褐色土　炭化粒・焼土粒少量混じる。粘性あり（床下土坑）
7　暗灰褐色土　焼土粒少量混じる。粘性あり（床下土坑）
8　灰褐色土　粘性極めて強い（床下土坑）

C105号住居跡貯蔵穴
1　暗灰色土　砂質土。粘性暗褐色土混じる。
2　褐色土　粘性。締まりあり。
3　褐色土　粘性。白色 Silt 混じる。締まりあり。
4　褐色土　灰・焼土混じる。締まりあり。

Fig. 55　C105号住居跡

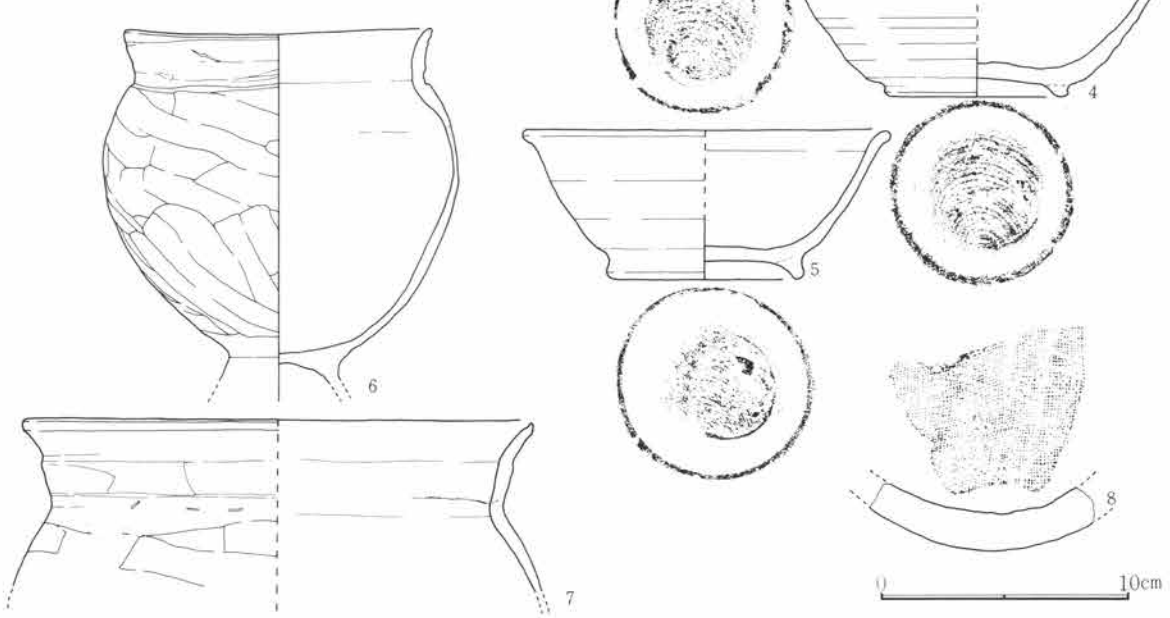


Fig. 56　C105号住居跡出土遺物

C105号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
56－1 41－1	須恵器 杯	完形	13.3×5.8 ×3.6	床下土坑	底径小さく体部丸味をもち大きく開く。口唇部丸まり僅かに外反。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや粗小石混

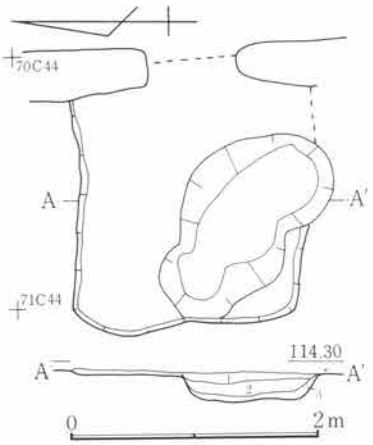
C105号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
56－2 41－2	須恵器 椀	⅓	14.8×7.2 ×5.0	床面	体部僅かに丸味をもつ。口唇部丸まって強く外屈。付高台断面矩形を呈す。轆轤整形。回転糸切り。内外面に黒斑。	①酸化気味良好 ②浅黄橙 ③やや粗
56－3 41－3	須恵器 椀	⅔	14.6×7.1 ×5.4	床面	体部僅かに丸味をもち、口唇部丸く強く外反。付高台低く断面矩形を呈す。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味やや軟 ②灰白 ③やや密
56－4 41－4	須恵器 椀	¼	15.5×7.3 ×5.7	貯蔵穴際・床面	腰部に丸味をもち体部直線的に立つ。口唇部下で小さくくびれ外傾する。付高台低く断面矩形、轆轤整形。回転糸切り	①酸化気味良好 ②灰白 ③やや粗石混
56－5 41－5	須恵器 椀	¼	14.6×7.8 ×5.9	床面・埋土	腰部やや張る。口唇部丸く小さく外反。付高台断面丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟 ②褐灰 ③密
56－6 41－6	土師器 台付甕	台部欠損	12.3×－ ×(13.7)	貯蔵穴内	胴部丸く張る。口縁部肥厚し、直立後端部小さく外反。口縁部横撫で。胴部上半斜位、下半縦箆削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
56－7 41－7	土師器 甕	口縁部 ¼	20.4×－ ×(6.7)	貯蔵穴際・床面	肩部丸味をもつ。口縁部僅かに外傾して立ち上半はやや強く外傾するコの字状口縁。口縁中位横箆撫で、肩部横箆削り。	①良好 ②橙 ③やや密
56－8 41－8	瓦 平瓦		厚1.4	埋土	凹面布目。凸面撫で調整。	①酸化気味 ②浅黄橙 ③やや粗

C106号住居跡（Fig. 57・58、PL. 8・42）

C区北西部に位置し、70・71C42・43の範囲にある。検出当初、北から南側にかけて壁線らしき方形の浅い落ち込みが確認されたが、竈その他竪穴住居跡としての条件が欠けており、むしろ竪穴状遺構とすべきであろうか。また、当跡の範囲内南西寄りに南壁線を一部切り込むように大型の不整楕円土坑が検出されている。出土遺物はすべてこの土坑内からのもので、106号住居跡とした遺構の主体はこの土坑にある可能性が強い。なおC106号住居跡とこの土坑との有機的関連及び新旧関係は不明である。竪穴東部は後世の溝状遺構によって壁線は消失している。東西長2.1m・南北長1.9m・壁高４～５cmを測る。土坑は長軸を南東から北西方向にもち、1.7×1.05m・深さ24cmを測り、底面は平坦である。埋土は砂質層を主体にして木炭粒・焼土塊などが認められるが、壁面の被熱は見られず外部からの流入が考えられる。

出土遺物は土師器杯のほか灰釉陶器椀小片がある。いずれも底面からの出土である。



C106号住居跡
1　灰色土　砂質。B軽石・C軽石少量含む。
2　灰色土　砂質。B軽石・木炭少量含む。
3　褐色土　木炭粒少量含み粘質。堅く締まる。

Fig. 57　C106号住居跡

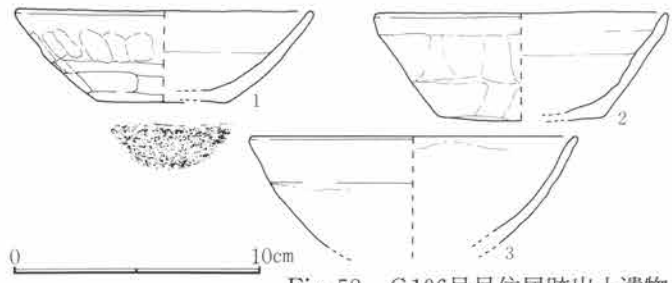


Fig. 58　C106号号住居跡出土遺物

C106号住居跡出土遺物観察表

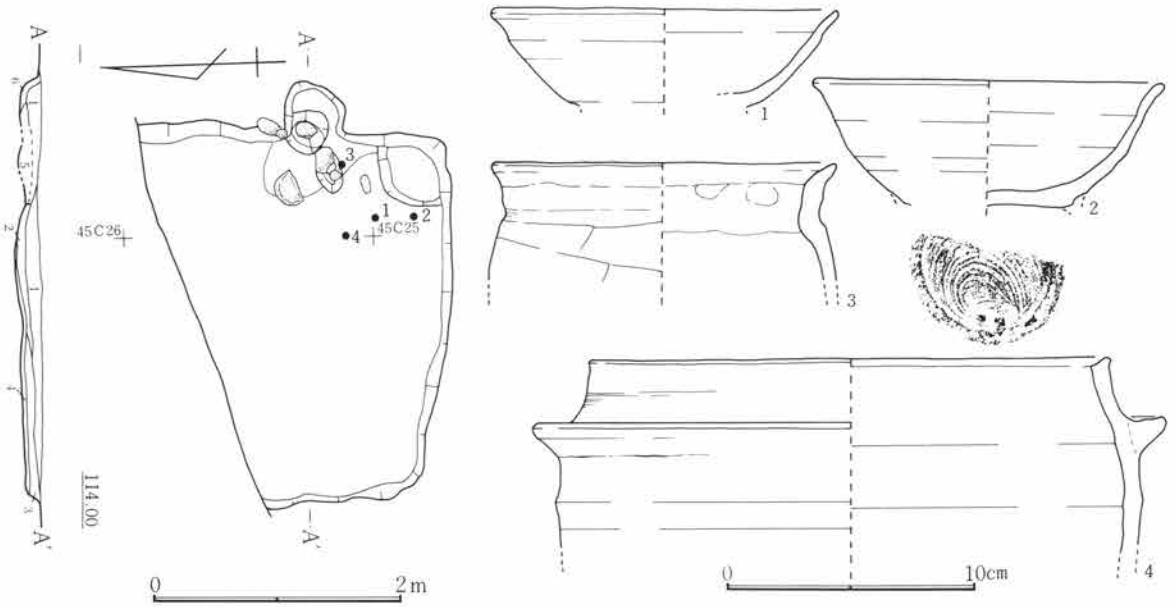
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
58－1 42－1	土師器 杯	⅓	12.0×5.4 ×3.3	埋土	平底。体部僅かに内湾して開く。体部上半指頭痕著しく、下半は横箆削り。底部砂痕。内面撫で。	①良好 ②灰褐 ③粗砂粒多い
58－2 42－2	土師器 杯	¼	11.6×6.4 ×4.3	埋土	平底。体部直線的に立ち、口縁部は凹線状に段をなし内湾気味。底部箆削り。体部下半は横箆削り、上半凹凸著しく撫で調整。口縁部撫で。	①良好 ②灰褐 ③粗砂粒多い
58－3 42－3	灰釉陶器 椀	小片	13.0×－× (4.2)	埋土	体部丸味をもつ。内外面漬け掛け施釉。	①良好 ②灰 ③緻密

Ｃ107号住居跡（Fig. 59・60、PL. 8・42）

Ｃ区中央部やや東寄りに位置し、44～46Ｃ24・25の範囲にある。住居跡北半は、調査区域内に通ずる導水路部分に入り全体を検出していない。平面形はほぼ方形を呈すると考えられるが、南から西壁にかけて、壁線は小さく波うつ。東西長3.1mを測り、南北は南壁より最大で2.5mの範囲まで確認した。竈は東壁の南寄りに付設され、主軸方位はN—93°—Eを示す。床面は東側、竈前面がやや低く窪み、全体に軟弱である。とくに南東隅部は小さな凹凸をなし、貯蔵穴と考えられる径55cm・深さ20cmの落ち込みには湧水もみられた。

竈は東壁を半楕円形に掘り込み、東壁線上の左袖部に凝灰岩質の加工材を埋設している。その他竈内及び前面には構築材の一部と考えられる川原石や凝灰岩質の破損品が散乱している。竈燃焼部に円形の小穴が穿たれ、凝灰岩質の支脚と思われる基部が残されている。火床面の赤化硬質は認められなかったが、焼土粒・灰層の堆積があった。開口部幅45cm・奥行き40cmを測る。

出土遺物は須恵器椀類・羽釜片など僅かである。



Ｃ107号住居跡・竈
1　褐色土　Ｃ軽石・焼土・炭化粒を含む。パサパサしている。
2　暗褐色土　焼土粒を含み締まりなし。
3　暗褐色土　焼土粒を含み、粘性が強い。
4　暗褐色土　堅く締まっている。
5　暗褐色土　焼土・炭化粒を多量に含む。
6　暗褐色土　焼土粒・灰混じり。締まりなし。

Fig. 59　Ｃ107号住居跡　　Fig. 60　Ｃ107号住居跡出土遺物

Ｃ107号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
60—1 42—1	須恵器 椀　？	底部欠損⅓	13.8×— ×(3.9)	床面・ 埋土	体部やや浅く、腰部から体部に丸味をもつ。上位で小さくくびれ外反し端部内湾気味。轆轤整形。	①良好　②灰白　③やや密
60—2 42—2	須恵器 椀	⅓	14.0×— ×(4.9)	床面・ 埋土	腰部から体部丸味をもつ。上半は緩く外反して開く。付高台剝落。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
60—3 42—3	土師器 小型甕	口縁～胴部 ⅓	13.8×— ×(4.7)	床面・ 埋土	肩部に小さく段状の稜をなす。口縁部肥厚し直立後上半は強く外傾しコの字口縁。口縁部横撫で。肩部横・斜篦削り	①良好　②赤褐　③やや粗白色細粒混
60—4 42—4	羽釜	口縁～胴部	20.6×— ×(7.7)	埋土	胴部僅かに張り、口縁部は外反気味に内傾。口唇部断面矩形をなす。鍔部幅広でやや上方へ強く突出。回転調整。	①酸化気味良好　②淡黄　③やや粗

Ｃ125号住居跡（Fig. 61—64・PL. 9・42）

Ｃ区の東部やや北寄りに位置し、35～37Ｃ34・35の範囲にある。平面形は各壁線が緩い脹らみをもち、南

北方向に長軸がある略方形を呈する。3.7×3.15mの規模で、壁高18cmを測る。竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。主軸方位はおよそN－90°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。貯蔵穴と考えられる落ち込みは南東隅部に位置し、85×40cm・深さ20cmの長楕円形を呈する。土器類が集中して検出され、埋土下位には薄い灰層の堆積もみられた。床面は比較的踏み締まりが良く安定しており、厚さ４～５cmの灰褐色土を用いた貼床を施している。

竈は東壁を半円形に掘り込み、頂部を小さく突出させて短い煙道部を作り出す。火床は10cm程度の深さに窪み、７～８cmの厚い灰層が堆積している。灰層の火床面には赤化硬質面が検出されず、最終的な火床面は、この灰層の上に形成されていた可能性がある。竈開口部幅80cm・奥行き80cmを測る。

出土遺物は須恵器椀類の他羽釜・鉄釘・鉱滓などがあり、貯蔵穴内から多く検出されている。

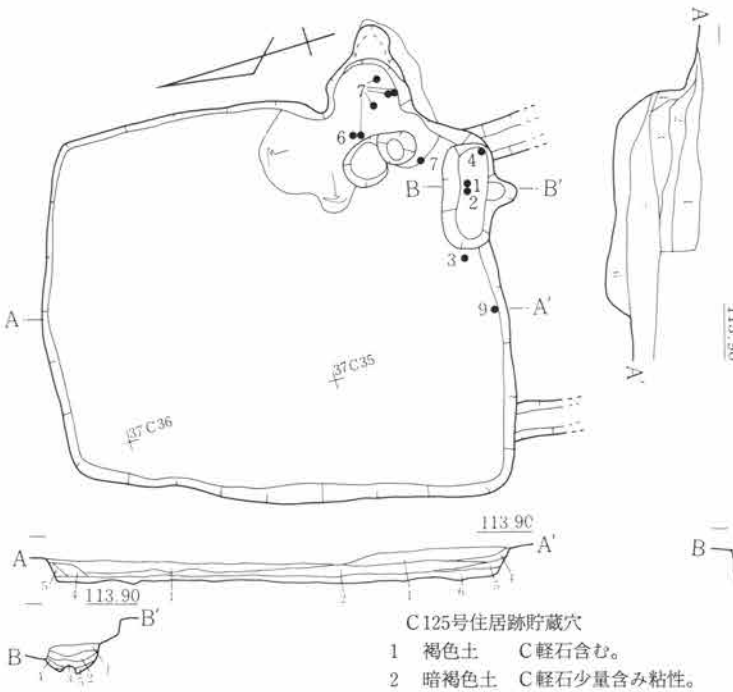


Fig. 61　C125号住居跡

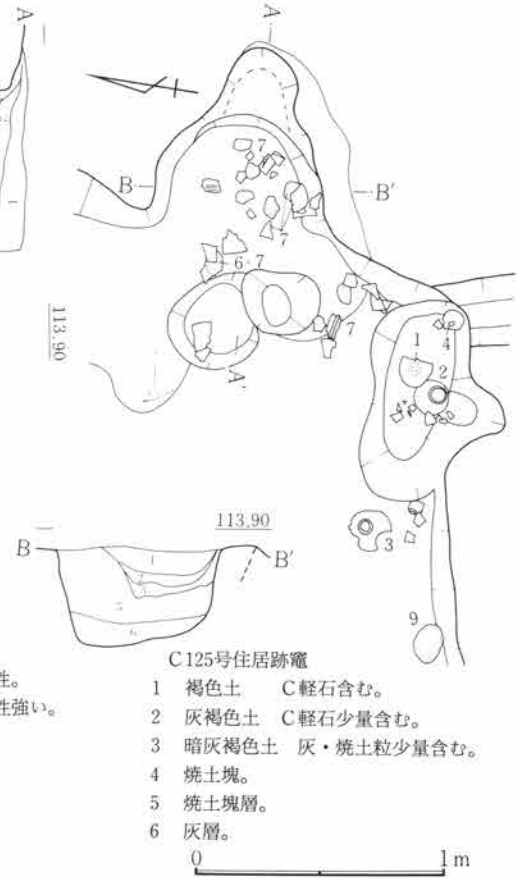


Fig. 62　C125号住居跡竈

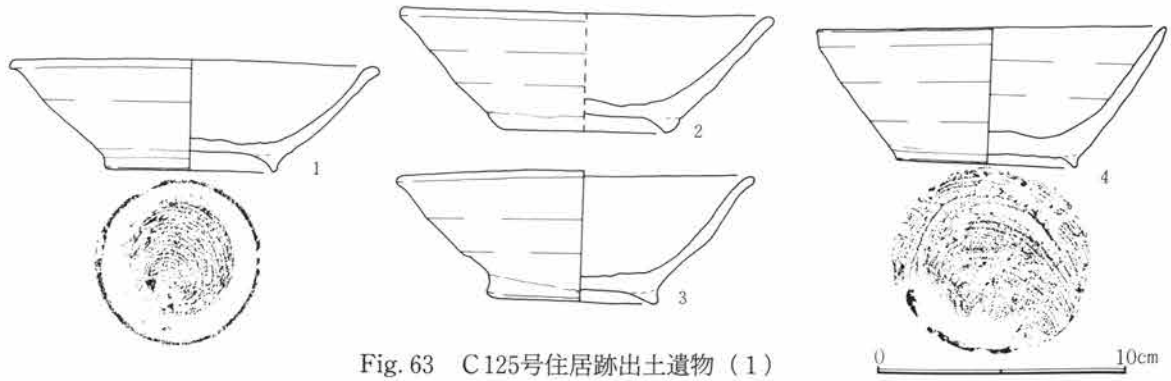


Fig. 63　C125号住居跡出土遺物（１）

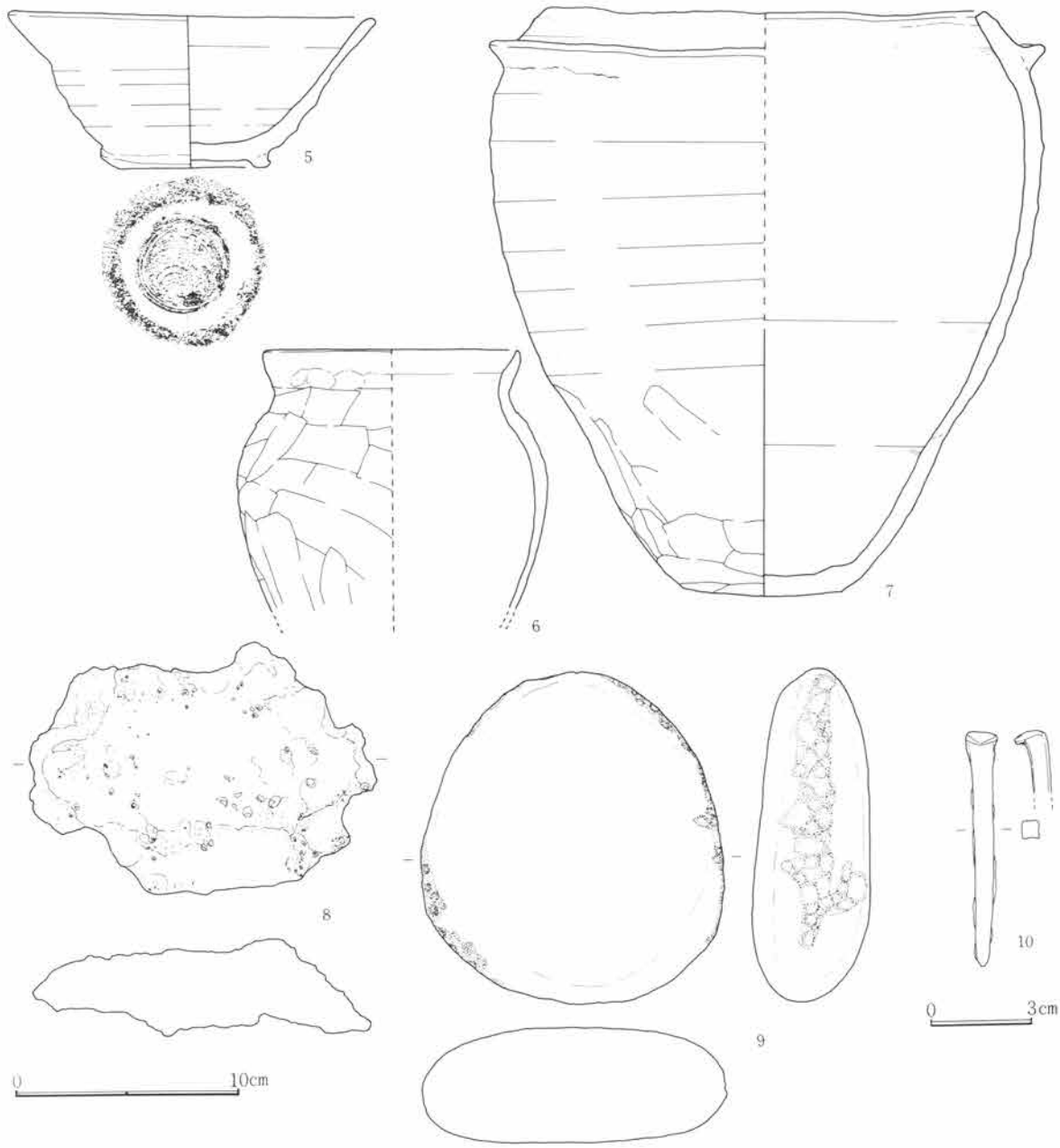


Fig. 64　C125号住居跡出土遺物（２）

C125号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
63－1 42－1	須恵器 椀	3/4	14.6×6.8 ×4.4	貯蔵穴・ 床直	体部に緩い丸味をもち、口唇部は丸く肥厚して外反。見込部に強いうず巻状のあて具痕。付高台低く断面三角。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好　②淡橙 ③やや粗
63－2 42－2	須恵器 椀	小片	15.0×7.0 ×4.7	貯蔵穴・ ＋4	体部から口唇部まで直線的。付高台作り雑。器肉肥厚気味。轆轤整形。底部切り離し不明。	①良好　②灰　③粗
63－3 42－3	須恵器 椀	ほぼ完形	14.3×6.4 ×5.1	床直・ ＋2	体部中位僅かに張り、口縁部緩く外反。付高台低く作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。体部外面回転箆撫で。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや粗
63－4 42－4	須恵器 椀	ほぼ完形	13.8×7.2 ×5.4	貯蔵穴・ ＋5	腰部に張りなく口唇部まで直線的に外傾。口唇部細る。付高台低く断面三角形。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや粗
64－5 42－5	須恵器 椀	ほぼ完形	16.3×7.5 ×6.7	貯蔵穴・ －1	腰から体部下半丸味をもち、くびれて上半は外反気味に開く。付高台作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。燻し焼成。	①やや軟　②褐灰 ③やや粗

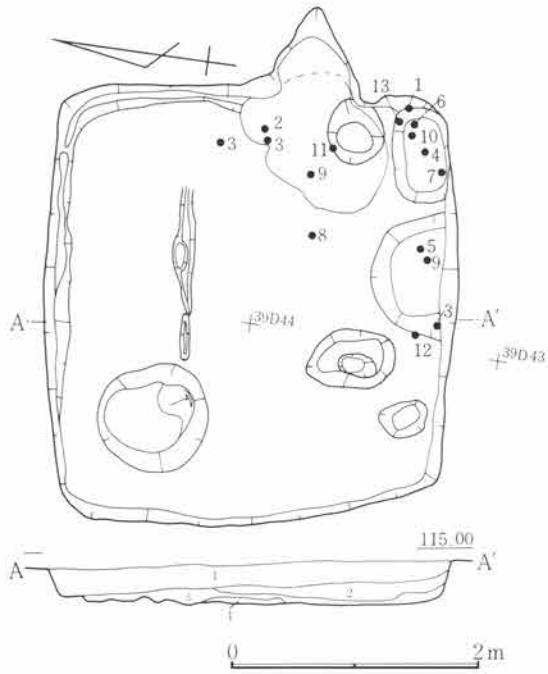
Ｃ125号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
64－5 42－6	土師器 甕	口～体 部⅓	11.4×－ ×(11.6)	竈・ －0.5	胴部上位丸く張り最大径をなす。口縁部内湾気味に開く。口縁部横撫で凹凸著しい。上半横・斜篦削り下半縦篦削り	①良好　②赤橙　③やや粗
64－7 42－7	羽釜	⅓	19.2×7.0 ×25.5	竈・ ＋0.5～ 18.5	胴部上半丸く張り、口縁部は短かく内湾して内傾。口唇上端平で内斜。鍔強く突出。胴上半・内面回転調整、下半縦・横篦削り。	①酸化気味良好　②灰～橙　③やや粗
64－8 42－8	鉱滓		重さ698g	埋土	大型の椀型鉱滓。磁気ほとんどなし。	
64－9 42－9	石		重さ1,402g	埋土	側縁全体に打撃痕あり、被熱するか。	
64－10 42－10	鉄製品 角釘	ほぼ完 形	長7.0 幅0.6	埋土	やや長目の折頭釘。	

Ｄ53号住居跡（Fig. 65～67、PL. 9・43）

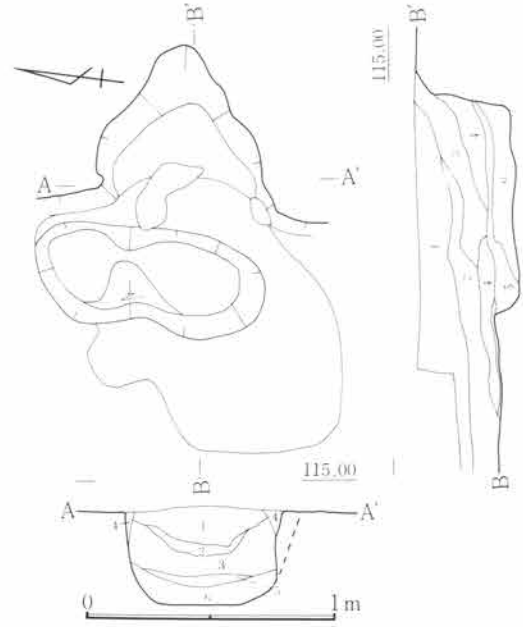
Ｄ区北東部に位置し、37～39Ｄ43・44の範囲にある。南東部で、Ｄ14号掘立柱建物跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが、南壁が短く、このため西壁線が僅かに歪む。規模は3.5×3.3m・壁高約20cmを測る。竈は東壁のやや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－84°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが、床土は掘形面より最大15cmの厚さで Loam 塊混りの粘性暗褐色土を充塡し貼床を施している。南壁沿い及び北西隅に土坑が検出され、南壁沿いの土坑は遺物の出土状況や、遺物の所属時期から当跡に伴う施設と考えられる。北西隅の土坑は当跡検出面より上位で確認されており、新しい時期のものである。

竈は東壁を半楕円に掘り込み、その頂部をさらに略三角に小さく突出させ煙道部を作り出している。竈構



Ｄ53号住居跡
1　茶褐色土　Ｃ軽石粒をやや多く含む。
2　暗褐色土　Loam 小塊を多量に含み締まり強い。
3　暗褐色土　Loam 粒を多量に含み粘性あり。
4　Loam 塊。

Fig. 65　Ｄ53号住居跡



Ｄ53号住居跡竈
1　茶褐色土　Ｃ軽石粒をやや多く含む。
2　暗褐色土　Loam 小塊・焼土粒を含む。
3　暗褐色土　焼土粒をやや多く含む。
4　崩落焼土。
5　灰層。
6　暗褐色土　炭化粒・焼土粒を少量含む（掘形）。

Fig. 66　Ｄ53号住居跡竈

築については石材など検出されていないが、掘形で右袖部の位置に縦列３個の小穴が見られ構築材の埋設痕である可能性が強い。また、東壁より突出する竈内には灰層の堆積が良好に残り、手前床面上には硬質赤化面が形成されている。これらのことから、本来の竈形態は大きく住居内に袖部を突出させるものであったと考えられる。現状での開口部幅60cm・奥行き65cmを測り、赤化面からの奥行きは約1.2mである。また、灰層は開口部寄りの位置で径30cm・深さ10cmの窪み内に充填しており灰溜りを作っている。貯蔵穴は南東隅にあり、東西75cm・南北45cmの整った楕円形を呈し、深さ25cmを測る。東壁から北壁の一部にかけて壁下溝あるいは小穴が認められた。

出土遺物は須恵器杯・椀・土師器台付甕など比較的豊富で、竈周辺の床面や貯蔵穴内からの出土が多い。

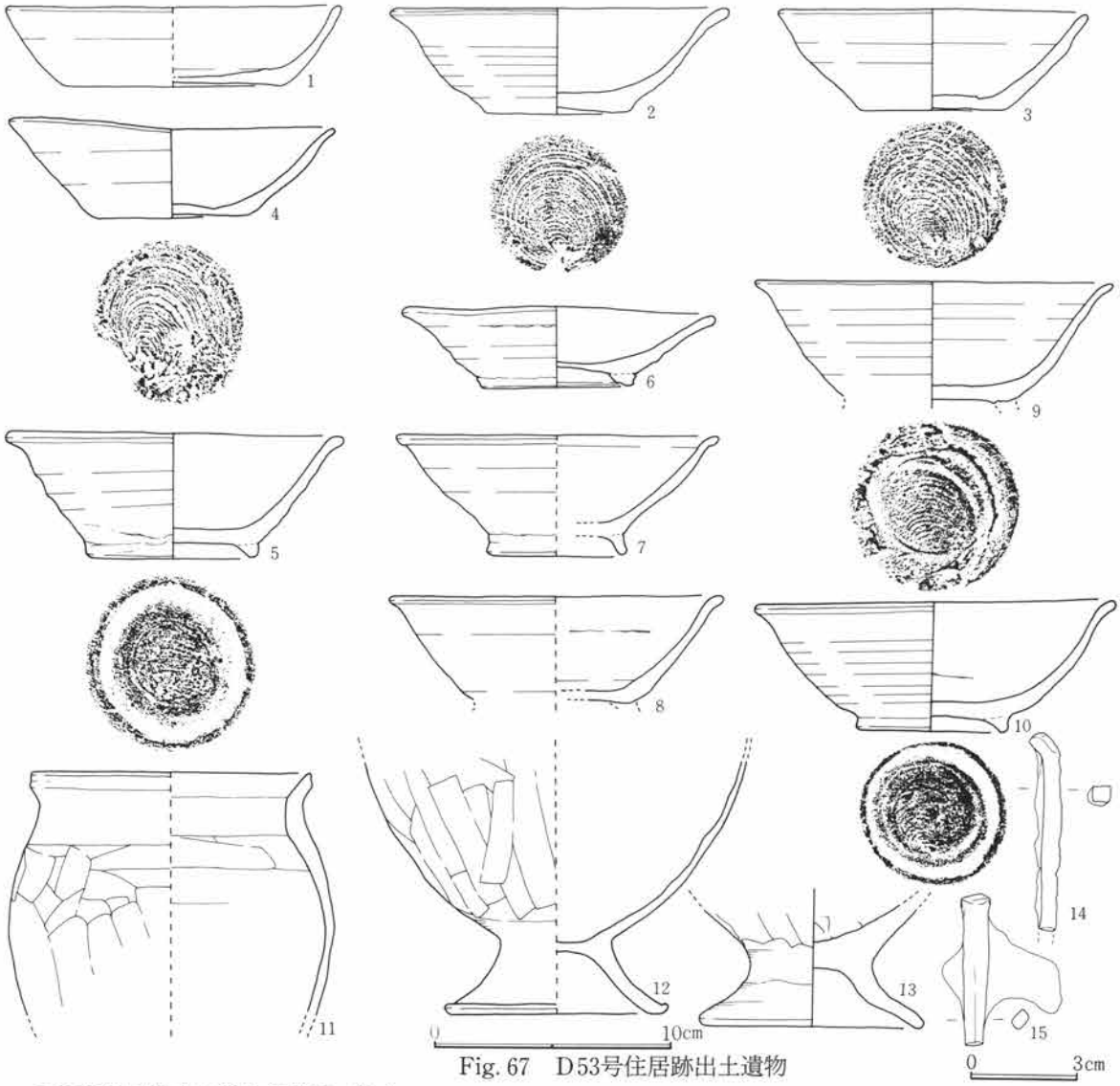


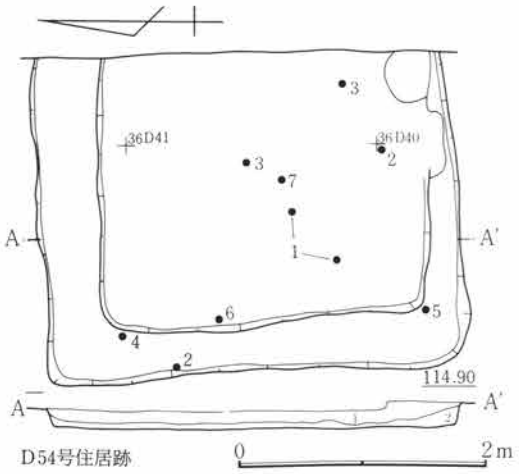
Fig. 67　D53号住居跡出土遺物

D53号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
67－1 43－1	須恵器 杯	¼	14.0×9.0 ×3.3	貯蔵穴	底径大きく、体部浅く内湾気味に立つ。内外面に重ね焼痕。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③密
67－2 43－2	須恵器 杯	ほぼ完 形	14.1×6.0 ×4.3	床面・ －4.5	底径小さい。腰部でくびれ、体部中位が張る。上半は大きく外反して開き、口唇部丸く肥厚。轆轤整形右回転糸切り	①良好　②褐灰～灰 ③やや密細砂混
67－3 43－3	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.9×6.0 ×4.2	床面・ －4.5～0	体部直線的に立ち、上半に小さな張りをもつ。見込部強い指あて痕残る。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②明褐灰　③やや粗

Ｄ53号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
67－4 43－4	須恵器 杯	⅔	13.5×6.6 ×3.7	貯蔵穴 床下・－15	体部やや大き目に開く。中位に僅かな張りをもち上半は緩く外反。轆轤整形。右回転糸切り。吸炭部分多い。	①酸化気味軟 ②淡橙～褐灰 ③やや粗
67－5 43－5	須恵器 椀	⅔	14.0×7.2 ×5.2	土坑・ －9	体部直線的に立ち、口唇部丸まって強く外反。付高台低くやや幅広。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗 小石混
67－6 43－6	須恵器 皿	⅙	13.0×6.2 ×3.4	貯蔵穴・ －4	体部上半は外反し大きく開く。口唇部丸まる。付高台低く幅広。内側は凹状に段をなす。轆轤整形。内面荒れ著しい。	①酸化軟 ②暗赤褐 ③やや粗大粒砂混
67－7 43－7	須恵器 椀	⅓	13.4×5.8 ×5.0	貯蔵穴・ －9.5	腰部窄まり、体部上半に張りをもつ。口唇部小さく丸まり外屈、付高台。轆轤整形。	①酸化やや軟 ②淡橙 ③やや粗砂混
67－8 43－8	須恵器 椀	⅓高台 欠損	14.0×－ ×4.4	埋土	体部直線的に立ち、口唇部強く外反して開く。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。内外面燻し焼成気味。	①やや軟 ②褐灰～浅黄橙 ③やや密
67－9 43－9	須恵器 椀	½高台 欠損	15.0×－ ×5.0	床面・ －6	腰部に丸味をもち、体部上半は緩く外反して開く。口唇部細まる。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟 ②淡黄～黄灰 ③密
67－10 43－10	須恵器 椀	⅔	15.0×6.2 ×5.3	貯蔵穴・ －10	腰～体部丸味強く、上半は外反して開く。口唇部丸まる。付高台小径で低い。轆轤整形。回転糸切り。見込部重ね焼	①良好 ②灰 ③やや粗細砂混
67－11 43－11	土師器 甕	上半⅓	11.0×－ ×10.0	床面・ －7	胴部やや張る。口縁部肥厚し、内傾後上位は外傾する。口唇部細り外面に鈍い凹線巡る。口縁部横撫で。肩部横・胴部縦篦削り。内面横篦撫で。	①良好 ②暗赤褐 ③やや粗
67－12 43－12	土師器 台付甕	下半⅓	－×9.4 ×10.3	床面・ －7	胴部丸く張る。台部ハの字状に開き、端部は丸まって撥ねる。胴部縦篦削り。台部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
67－13 43－13	土師器 台付甕	台部	－×9.3 ×5.1	貯蔵穴・ －6.5	台部上半はハの字状に開き、下半は僅かに内湾気味に開く腰部縦篦削り。台部横撫で。内面黒色処理。見込部炭化物。	①良好 ②赤褐 ③やや密
67－14 43－14	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長(5.5)幅 0.5	埋土	頂部折頭式の角釘。	
67－15 43－15	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長(4.3)幅 0.7	埋土	頂部角頭式の角釘。	



1　暗褐色土　粘性塊・FA・炭化物・焼土粒多く含み堅く締まる。
2　暗褐色土　炭化物少量含み、締まりやや弱い。

Fig. 68　D54号住居跡

Ｄ54号住居跡（Fig. 68～70、PL. 9・43・44）

Ｄ区北東部に位置し、35・36Ｄ39～41の範囲にある。東側は調査区域外に入り全容は不明である。平面形は比較的壁線の整った方形を呈すると考えられる。南北長3.4m・東西は西壁より2.5mまで検出した。壁高は20cmを測る。竈は東壁に付設されると思われるが未検出である。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりは弱い。

出土遺物はほとんど埋土中にあり、全体に散在し多くの小破片である。須恵器杯・椀・灰釉陶器片・鉄釘などがある。

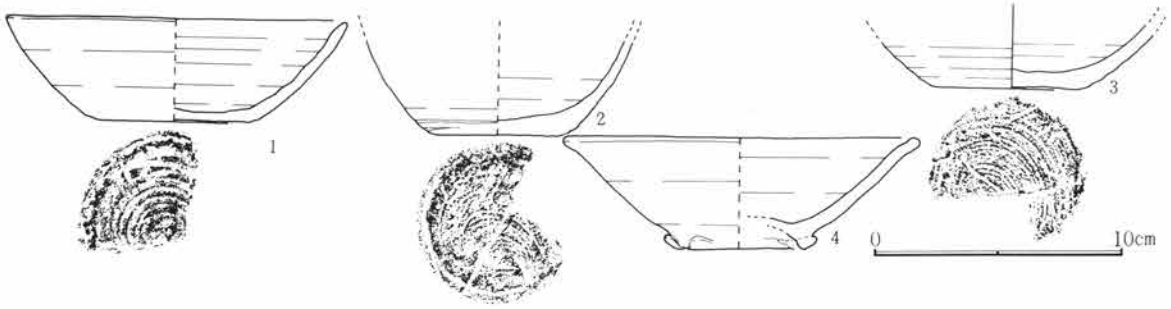


Fig. 69　D54号住居跡出土遺物（１）

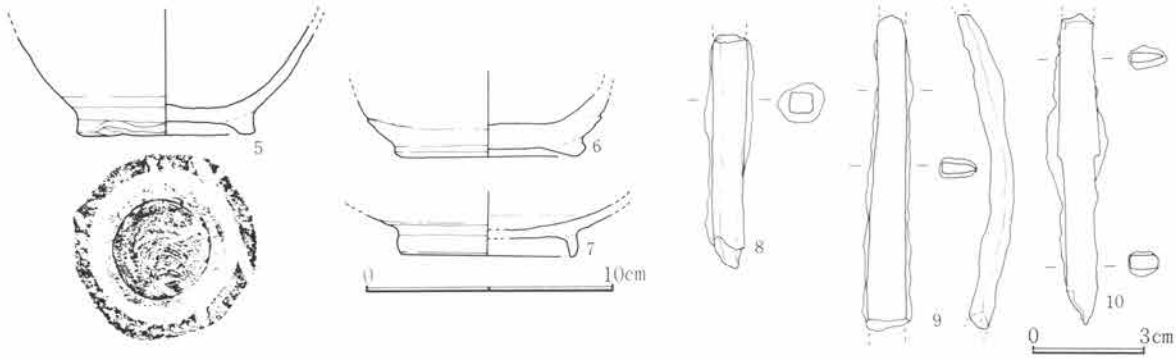


Fig. 70　D54号住居跡出土遺物（２）

D54号住居跡出土遺物観察表

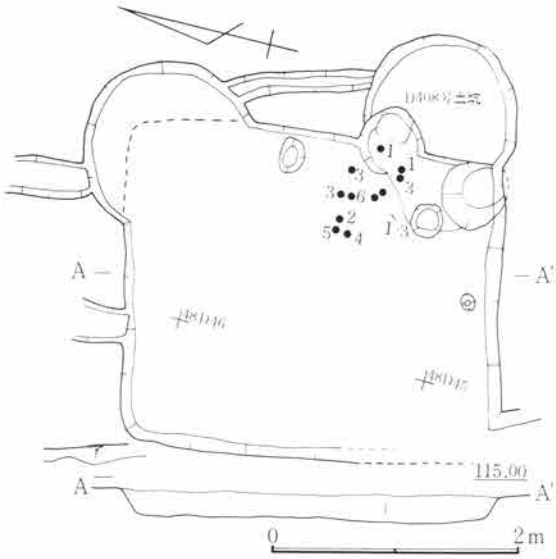
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
69－1 43－1	須恵器 杯	¼	13.6×6.0 ×4.1	埋土	体部内湾気味に立ち丸味をもつ。内面巻き上げ痕 or 轆轤目強い。轆轤整形。回転糸切り。内外面燻し焼成気味。	①やや軟　②灰～灰白　③やや密
69－2 43－2	須恵器 杯	体～底部¼	－×5.0 ×(3.7)	埋土・ －10	体部丸味をもちやや深いか。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
69－3 43－3	須恵器 杯	体～底部¼	－×6.0 ×(2.6)	埋土	腰部に緩い丸味をもつ。外面轆轤目強い。底部回転糸切り	①良好　②灰～灰白　③やや密
69－4 43－4	須恵器 椀	¼	14.2×5.2 ×(4.5)	埋土・ －9.5	体部浅く大きく開き、上半は緩く外反。口唇部丸まり、内面は小さな段状。付高台紐状の接合部あり雑。轆轤整形。	①酸化軟　②淡橙　③密
70－5 43－5	須恵器 椀	体～底部½	－×7.1 ×(4.3)	埋土	体部丸味をもち深いか。付高台たれた矩形。畳付けに棒状受け痕。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味軟　②灰～橙　③やや密
70－6 43－6	須恵器 椀	底部½	－×7.6 ×(2.5)	埋土	腰部に丸味をもち巻き上げ痕残る。付高台幅広な矩形。轆轤整形。回転糸切り。内外面燻し焼成。	①軟　②褐灰　③やや粗
70－7 44－7	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.2 ×(2.1)	埋土	見込部僅かに窪む。高台内湾気味に立つ三ケ月高台。底部撫で調整。体部漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰白　③やや密
70－8 44－8	鉄製品 角釘？	両端部 欠損	長(4.2)幅 0.6	埋土	両端部欠損の角釘か。	
70－9 44－9	鉄製品 利器	両端部 欠損	長(8.5)幅 0.7～1.2	埋土	刀子の刃部か。片端縁細まり断面契状。強く湾曲する。	
70－10 44－10	鉄製品 刀子？	両端部 欠損	長(8.2)幅 1.0	埋土	刀子の刃から柄にかけての部分か。刀部幅１cm、柄部幅0.8cm厚0.4cm	

D55号住居跡（Fig. 71・72、PL. 9・44）

D区の北側に位置し、47・48D44～46の範囲にある。西側の一部は区内の東側を長く北西～南東走し北で鉤の手状に北東方向に折れるD175号溝に切られ、南東および北東隅はともに径1.2～1.3mの円形土坑によって消失している。また全体に細いさく状遺構と切り合い遺存状態は悪い。平面形は南北方向に長軸をもち3.0×2.5mの規模で方形を呈する。壁高は良好な部分で23cmを測る。竈はほとんど遺存していないが、南東隅で切り合う円形土坑底面に僅かな痕跡が認められ、東壁の南に偏った位置に付設されたと考えられる。床面は緩い凹凸をなし、踏み締まりは比較的良好である。北・西壁に沿い小穴が多く認められるが、やや規則性に欠ける。

竈は左側縁の焼土壁がかろうじて残る程度であるが、土坑底面に見られる掘形から、東壁を半円形に掘り込んで構築される。掘形は黄色土塊に焼土粒・炭化粒を混え、堅く締まった土を上層に、灰・炭化粒・焼土粒の多い締まりの弱い土を充塡してある。南東隅に径50cm・深さ25cmの円形 Pit が検出されたが、埋土は黄色土塊などを含み堅く締まっており、貯蔵穴とは考えにくい。当跡の掘形か、旧い段階の所産であろう。

出土遺物は竈周辺部に多く検出されており、須恵器皿・土師器甕のほか平瓦などがある。いずれも床面に近い位置である。



D55号住居跡
1　暗褐色土　粘土質塊を多量に含み堅い。

Fig. 71　D55号住居跡

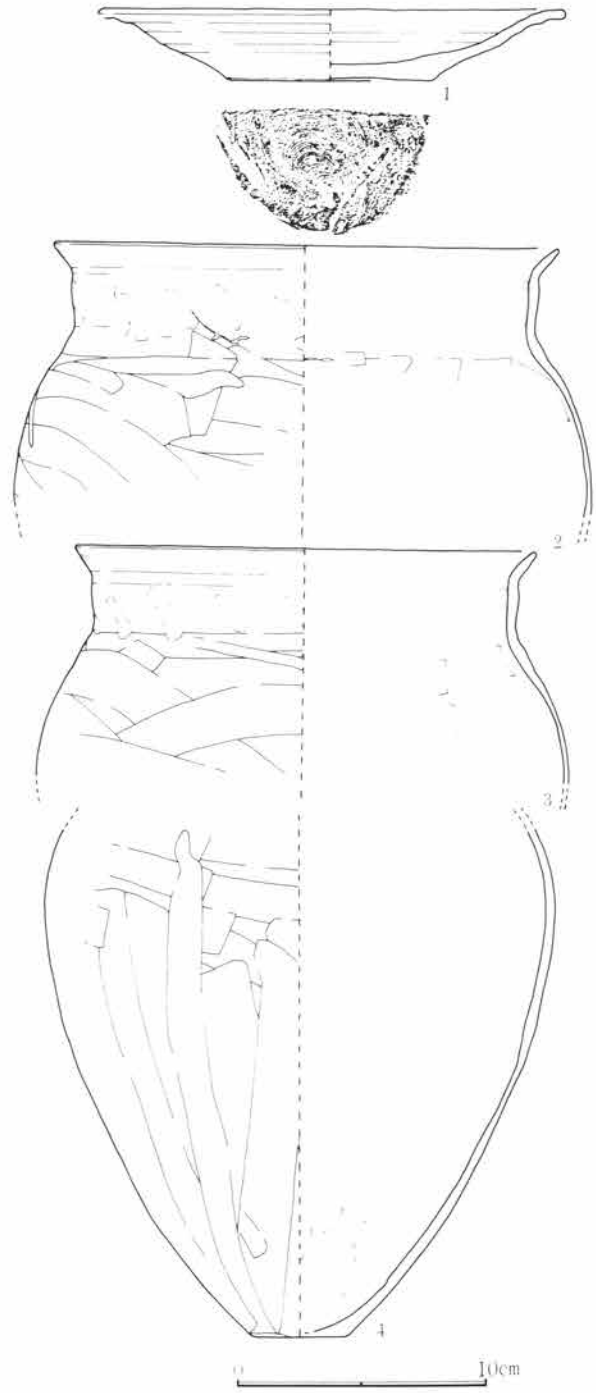


Fig. 72　D55号住居跡出土遺物

D55号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
72－1 44－1	須恵器 皿	⅓	18.6×8.0 ×2.8	床直・ 0～＋3	無高台、平底。体部直線的で大きく開き、口縁部は水平に折れる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
72－2 44－2	土師器 甕	上半部 ⅓	20.2×－ ×(10.6)	床直	肩部丸く張る。口縁部下半は直立し上半は強く外傾するコの字口縁。口縁部指頭。肩部横・胴上位斜箆削り。	①良好　②橙　③やや密
72－3 44－3	土師器 甕	上半部 ⅓	18.4×－ ×(9.2)	床直	肩部丸く張る。口縁部下半は直立し上半は強く外傾するコの字口縁。口縁部指頭。肩部。胴上位斜箆削り。	①良好　②橙　③やや密

Ｄ55号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No PL. No	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
72－4 44－4	土師器 甕	胴部¼	－×3.8 ×(19.9)	床直	胴部上位丸く張る。上位斜・下位はひき手の長い縦篦削り。内面底近く篦留め痕あり。	①良好　②橙　③やや密
72－5 44－5	瓦 平　瓦	小片	厚1.8	床直	凹面布目を粗い篦撫でで消す。凸面縄目後篦撫で。側縁部篦調整。	①良好　②灰　③やや粗
72－6 44－6	瓦 平　瓦	小片	厚1.5	床直	凹面布目、凸面篦撫で。側縁部篦調整。凹面炭化物付着。	①酸化気味やや軟 ②褐灰　③やや密

Ｄ56号住居跡（Fig. 73・75、PL. 9・44・45）

Ｄ区の北側に位置し、43～45Ｄ41～43の範囲にある。南壁西側で僅かにＤ57号と重複し、これよりも新しい時期の所産と考えられる。平面形は南北方向に長軸をもち、3.1×2.7mの規模で壁線の整った方形を呈する。壁高は遺存が悪く約５cm程度である。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－87°－Ｅを示す。床面は平坦をなすが、踏み締まりは弱い。住居跡中央部やや南寄りに径80×90cm・深さ25cmの円形土坑が検出されているが、埋土上面は貼床状に堅く踏み締まっていたことから床下土坑に類するものと考えられる。

竈は焼土層の分布からその位置を確認したが、上部構造をほとんど残していないため形状は不明である。掘形の検出で火床と思われる浅い窪みを中心に、左右とも２ケ所に構築材を埋設したような窪みを検出している。なお、火床には硬質赤化面は認められず、灰・焼土粒の混合層が堆積していた。貯蔵穴は南東隅にあり、上面は竈から流出したと思われる薄い灰層で覆われていた。径55～60cmの略円形で深さ25cmを測る。住居跡四隅に比較的掘形の明瞭な Pit（１～５）が検出され柱穴に相当すると考えられるが厳密な規則性はない。また南西隅に径45×60cm・深さ30cmの土坑は当跡に付随するものか不明である。また南・北壁下の一部には幅約10cmの壁下溝が巡る。

出土遺物は破片状のものが多く散在して検出され、須恵器椀のほか灰釉陶器小片がある。

Ｄ57号住居跡（Fig. 73～75、PL. 44・45）

Ｄ区の北側に位置し、44・45Ｄ40・41の範囲にある。北壁東側でＤ56号住居跡と重複しており、これより旧い時期の所産と考えられる。平面形は南北2.8m・東西2.7mの方形を呈するが、南壁がやや短く西壁線に歪みが見られる。壁高は低く12cm程度である。竈は東壁の僅かに南に偏って付設され、主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。床面は竈前から中央部にかけて堅く踏み締まり壁際はやや軟弱で僅かに低くなる。

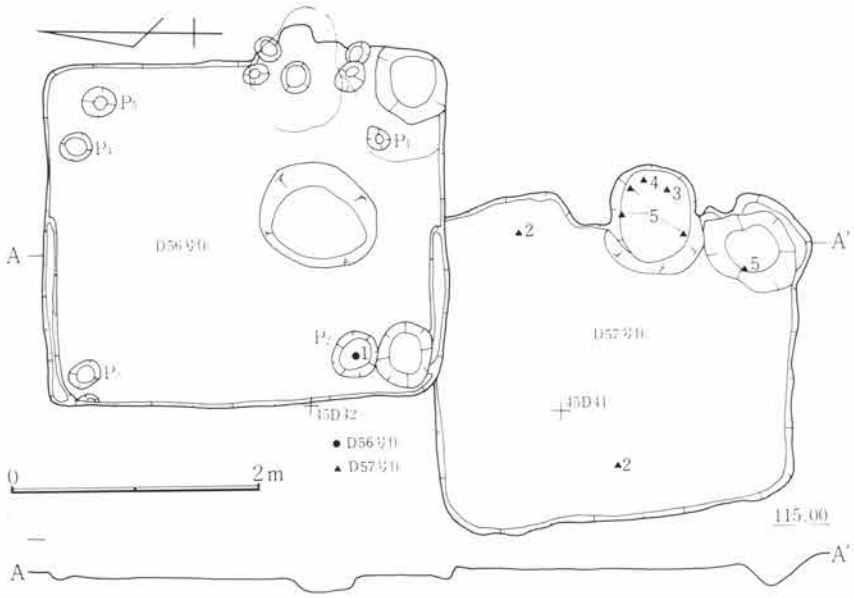
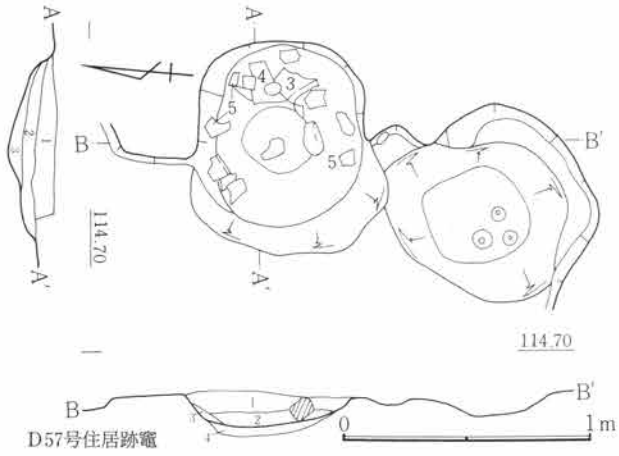


Fig. 73　Ｄ56・57号住居跡

竈は東壁をやや大きく半円形に張り出し、左側には



D57号住居跡竈

1　褐色土　C軽石・焼土粒・炭化物を多く含む。
2　焼土塊を多量に含む。炭化物を含む。
3　焼土塊を含み、黒灰が主である。
4　硬質焼土層（火床面）。

Fig. 74　D57号住居跡竈

幅広で袖状に住居内に突出する部分がある。全体に灰を混える焼土粒層が覆う程度の残存状態であり、上部構造を知ることはできない。火床と考えられる中心部は、硬質赤化面が形成されており、皿状に浅く窪んでいる。この赤化面の下には灰層などの堆積物は検出されず、掘形面を直接火床としていたものと考えられる。貯蔵穴は南東隅にあり、径70×65cmの楕円形を呈し、深さ10cm程で皿状の浅い窪みである。

出土遺物は竈内および貯蔵穴内から多く検出され、羽釜が目立つほか灰釉陶器片などがある。

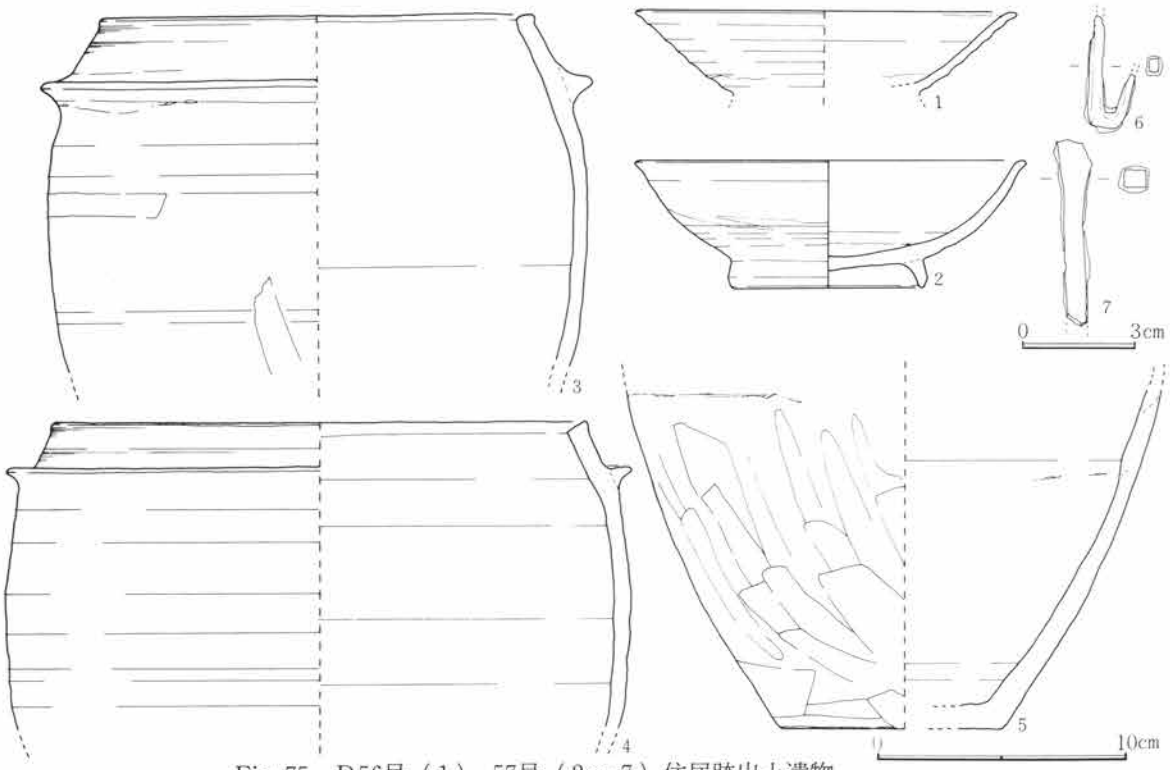


Fig. 75　D56号（1）、57号（2～7）住居跡出土遺物

D56・57号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
75－1 44－1	灰釉陶器 皿	小片	15.0×－ ×(3.2)	Pit内	体部直線的で大きく外傾する。口唇部上端面は鋭く平坦。端部尖がる。内外面施釉。光ケ丘１号窯式期？	①良好　②灰　③緻密
75－2 44－2	灰釉陶器 椀	⅔	15.4×7.9 ×5.1	埋土	体部丸く、口縁部緩く外反。高台外稜丸い三ケ月高台。体部中位まで回転篦削り。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号	①良好　②灰　③緻密
75－3 44－3	羽　釜	上半部 ⅓	17.2×－× (13.9)鍔径21.9	竈	胴部やや丸味をもち張る。口縁部内湾気味に内傾。鍔幅広で断面略三角、強く突出。内外面回転調整、外面一部篦調整。	①良好　②灰　③やや粗
75－4 45－4	羽　釜	上半部 ⅓	21.2×－× (12.1)鍔径24.8	竈	胴部僅かに張る。口縁部短かく内傾。鍔小さく突出。内外面回転調整。	①酸化気味良好　②淡橙　③やや粗
75－5 45－5	羽　釜	下半⅓	－×8.7 ×(13.3)	竈	胴部直線的。底部平底不定方向篦削り。胴部指頭状の縦撫で後縦篦削り。	①良好　②淡橙～灰 ③やや粗

Ｄ56・57号住居跡出土遺物観察表（２）

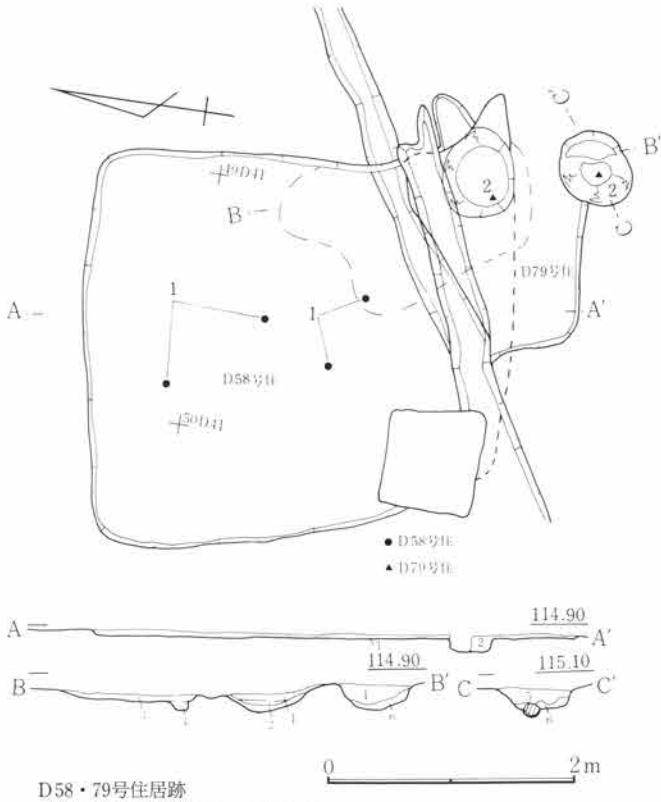
Fig.№ PL.№	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
75－６ 45－６	鉄製品 角　釘	両端部 欠損	長（3.0）幅 0.4	埋土	両端部欠損の角釘。Ｕ字状に曲がる。	
75－７ 45－７	鉄製品 角　釘	先端部 欠損	長（5.0）幅 0.6 厚0.15	埋土	頭部折頭式の角釘か。	

Ｄ58号住居跡（Fig. 76・77、PL. 10・45）

Ｄ区やや北側に位置し、48～50Ｄ39～41の範囲にある。周辺は南西～北東走するさく状遺構が著しくかなり削平を受けたためか遺存状態は悪い。南東部でＤ79号住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。なおこの重複によって南壁線は判然としないが、平面形は南北方向に長軸をもつ略方形を呈し、南壁が短いためか西壁線に歪みを生じている。南北長3.5m・東西長3.1m、壁高は僅か痕跡程度である。竈は東壁の南端に痕跡を留めるのである。東壁線を基軸にする主軸方位はＮ－81°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦となすが踏み締まりは弱い。竈周辺の床は不定形範囲で木炭粒・灰を混える灰褐色土で貼床状の埋土が施されている。

竈は東壁を小さく突出させた部分のみの検出で、火床面に相当する箇所が皿状に窪みＣ軽石混りの黒褐色土で埋まっていた。

出土遺物は少量である。



Ｄ58・79号住居跡
1　黒褐色土　木炭僅か、Ｃ軽石含む。
2　黒褐色土　Ｃ軽石含む。
3　灰褐色土　木炭粒含む。床下のパッキング層。
4　５層に類似。
5　灰褐色土　ケイ酸・ワラ灰を主とする。
6　灰褐色土　地山黄色塊含む。

Fig. 76　Ｄ58、79号住居跡

Ｄ79号住居跡（Fig. 76・77、PL. 10・45）

Ｄ58号住居跡の南東部で重複し、西壁から南壁の一部にかけての僅かな範囲である。当跡は竈などはみられず、竪穴住居跡としての積極的条件を欠いている。なお、南東部に径55cm・深さ15cmの貯蔵穴と考えられる円形土坑が検出されている。土坑は灰を多量に含む褐色土で覆われ、円礫と須恵器椀の完形品が出土している。ただ位置的に南壁線から外側に張り出しており、当跡に伴うか否かは確定できない。南壁線に基づく方位はおよそＮ－82°－Ｅを示す。壁高僅か３cm程度の痕跡である。

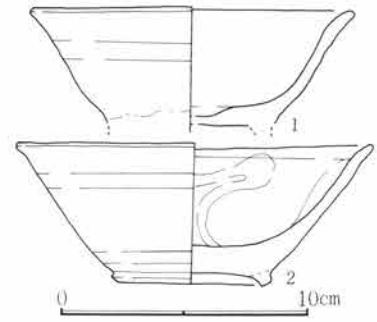


Fig. 77　Ｄ58号（１）、79号（２）住居跡出土遺物

D58号（1）・79号（2）住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
77－1 45－1	須恵器 椀	⅔高台 欠損	12.9×－ ×(4.7)	床直・ 0～＋2.5	腰部に丸味をもち、体部上半は外反して開く。付高台剝落。轆轤整形。	①酸化軟　②赤灰 ③やや粗
77－2 45－2	須恵器 椀	ほぼ完 形	14.1×6.4 ×5.7	貯蔵穴？	体部直線的に立ち口唇部は僅かに折れて外傾。底部著しく肥厚。付高台、低く断面矩形。轆轤整形。回転糸切り後丁寧な撫で。体部内外面に油煙状の付着物。	①良好　②灰　③密

D59号住居跡（Fig. 78～80、PL. 10・45）

D区やや北東部に位置し、39～41D38・39の範囲にある。住居跡全体に削平がおよび、検出部分は北壁から東壁沿いにかけての僅かな範囲である。平面形はほぼ方形を呈し、南北方向に長軸をもつと考えられる。推定南北長3.2m・東西長2.8mになろうか。竈は東壁の南側に偏って付設され、主軸方位はN－83°30′－Eを示す。削平は大部分の床面にもおよび、その詳細は不明である。北壁高は4～5cmである。

竈は東壁を掘り込んで構築されるが、薄い灰層が竈とその右前方部に広く流布しており、かろうじてその輪郭と火床面が遺存する程度である。火床面は硬質な赤化面を形成しており、その前方には支脚と考えられる川原石が埋設されている。火床面下の掘形には灰混りで締まりのない褐色土が埋土されている。竈開口部幅50cm・東壁線よりの奥行き約70cmを測る。南東隅には灰層下より浅く皿状に窪む落ち込みが検出されており貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は竈内に多く、須恵器椀類のほか片口鉢・羽釜などがある。

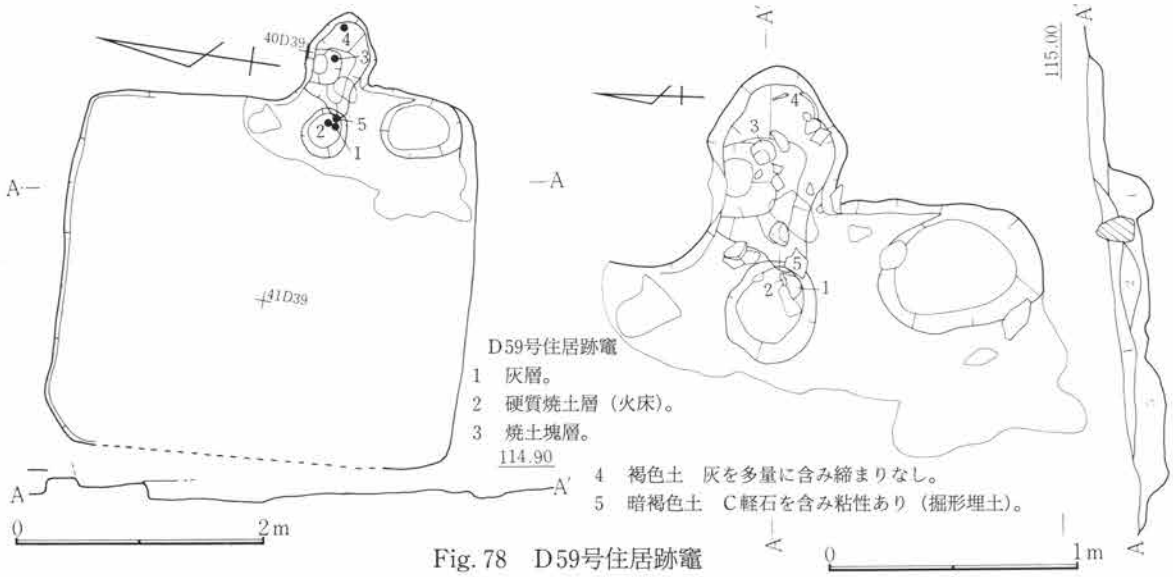


Fig. 78　D59号住居跡竈

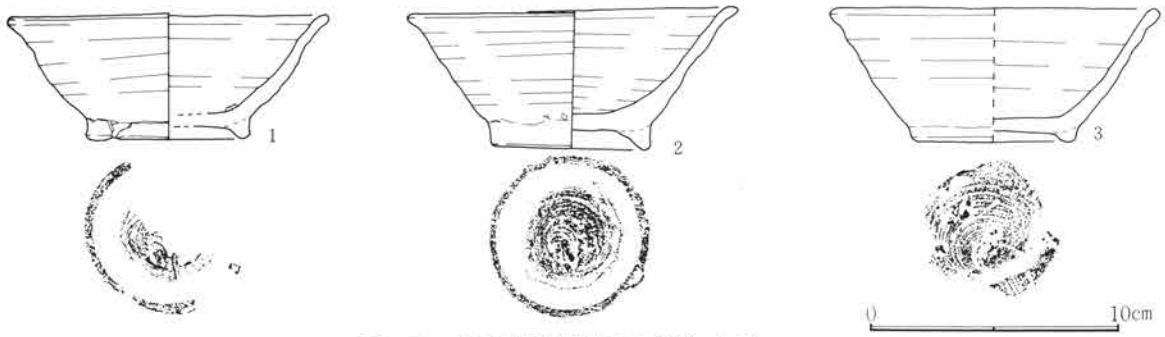


Fig. 79　D59号住居跡出土遺物（1）

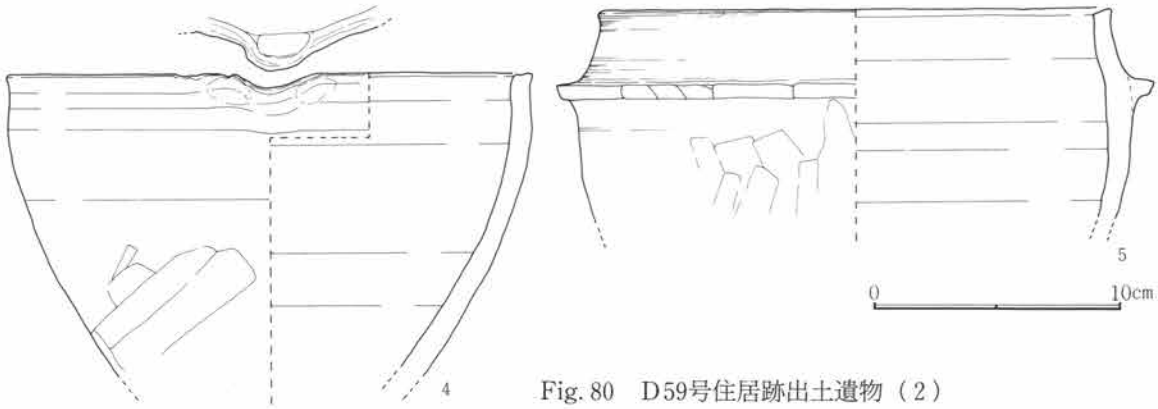


Fig. 80　D59号住居跡出土遺物（2）

D59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
79—1 45—1	須恵器 椀	½	12.7×6.5 ×5.0	竈前 pit 内	腰から体部丸味をもち、口縁部外傾して開く。付高台断面矩形を呈し紐状高台の接合部明瞭。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
79—2 45—2	須恵器 椀	⅔	13.1×6.3 ×5.8	竈前 pit 内・−0.5	腰部張りなく体部直線的。口唇部折れるように外傾。付高台断面三角。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰〜褐灰 ③粗
79—3 45—3	須恵器 椀	⅓	13.0×6.4 ×5.3	竈・+2.5	腰部僅かに張り、体部直線的。付高台低く作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②淡黄〜褐灰 ③粗
80—4 45—4	須恵器 片口鉢	口縁〜胴部¼	20.9×− ×(12.0)	竈・−8	胴部僅かに丸味をもつ。口縁部短かく直立。口唇部断面矩形。口縁部・胴上半横撫で。下半斜篦削り。	①酸化良好 ②橙 ③やや密
80—5 45—5	羽釜	口縁〜胴部破片	20.4×− ×(8.3) 鍔径23.7	竈前 pit 内	胴部に丸味をもつ短胴の釜型。口縁部外反して僅かに内傾。口唇部矩形。鍔部側面篦削り調整し矩形強く突出。胴部弱い縦篦削り。	①良好 ②灰 ③やや密

D60号住居跡（Fig. 81〜83、PL. 10・45）

D区の東部に位置し、41・42D36・37の範囲にある。南側でD61号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。平面形は南北に若干長い方形を呈し、南北長3.1m・東西長2.85m・壁高12cmを測る。竈は東壁やや南寄りに付設され、主軸方位はN—84°—Eを示す。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。床下は小さな凹凸が著しく不安定な掘形をなすが、北東部に径1.1m・深さ10cmの整った円形土坑を検出した。土坑内にはかなりの土器片が存在しており、当跡の掘形に関わる床下土坑と考えられ、床下の埋土は炭化粒を混える粘性暗褐色土を用いてある。

竈は東壁を半円形に掘り込んで構築され、袖部などが形成された痕跡は認められない。火床は厚く硬質赤化面をなしている。掘形は炭化粒・焼土粒混りの暗褐色土で埋められる。竈開口部幅80cm・東壁線よりの奥行き55cm・火床面手前からの奥行きは85cmを測る。南東隅には径40cm・深さ30cmの円形貯蔵穴が設けられる。出土遺物は床下土坑周辺から主に検出され、土師器杯・甕・須恵器杯のほか、羽口小片が数点ある。

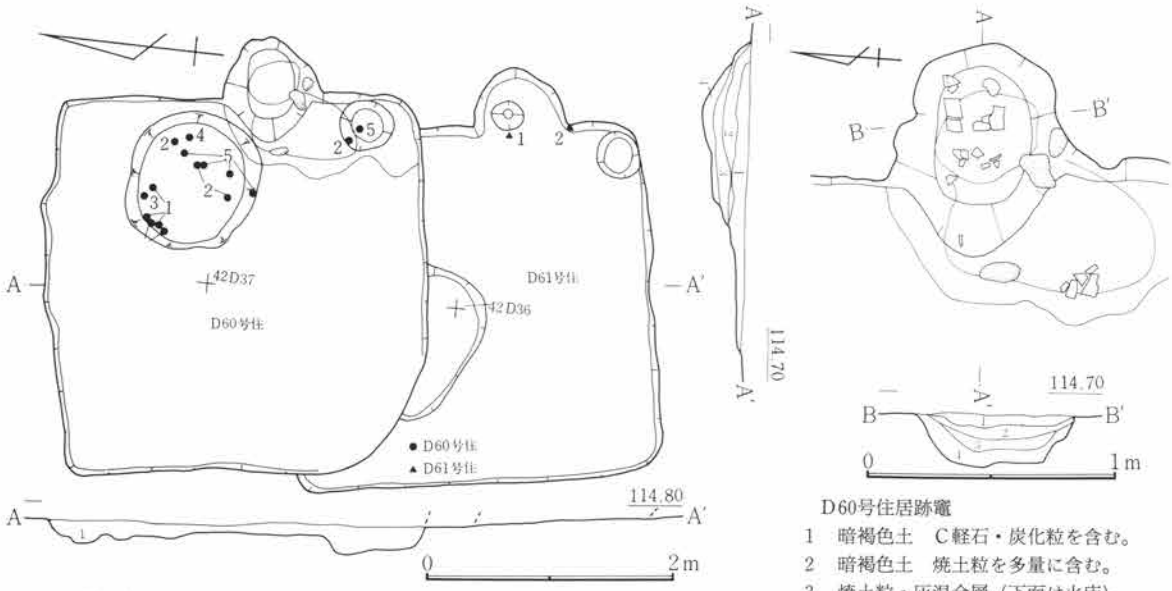
D61号住居跡（Fig. 81・84、PL. 10・46）

D60号住居跡と重複し、南側に並列した位置にある。新旧関係はD60号住居跡より旧く、北側は消失している。41・42D35・36の範囲にあり、平面形は南北軸が若干長い方形を呈する。南北長約3m・東西長2.8m壁高は立ち上がりが僅かに認められる程度である。竈は東壁の南側に偏って付設され、主軸方位はN—83°—Eを示す。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりは弱い。

竈は東壁を半円形に掘り込んで構築され、袖部などの痕跡は認められなかった。火床面は浅く皿状に窪むが顕著な硬質赤化面は残されず、焼土粒・炭化粒を多量に混える層を境に、掘形と考えられる最下面には焼

土粒を僅かに含む暗褐色土が埋土となっている。貯蔵穴と考えられる Pit は、やや小型であるが南東隅に検出されており、径40×45cm・深さ15cmの円形を呈す。

出土遺物は須恵器椀のほか鋳造鋳型の残欠がある。



D60号住居跡
1　暗褐色土　C軽石を含み、炭化物等を少量含む。やや堅い。

D60号住居跡竈
1　暗褐色土　C軽石・炭化粒を含む。
2　暗褐色土　焼土粒を多量に含む。
3　焼土粒・灰混合層（下面は火床）。
4　暗褐色土　やや大粒の焼土粒含む。

Fig. 81　D60・61号住居跡

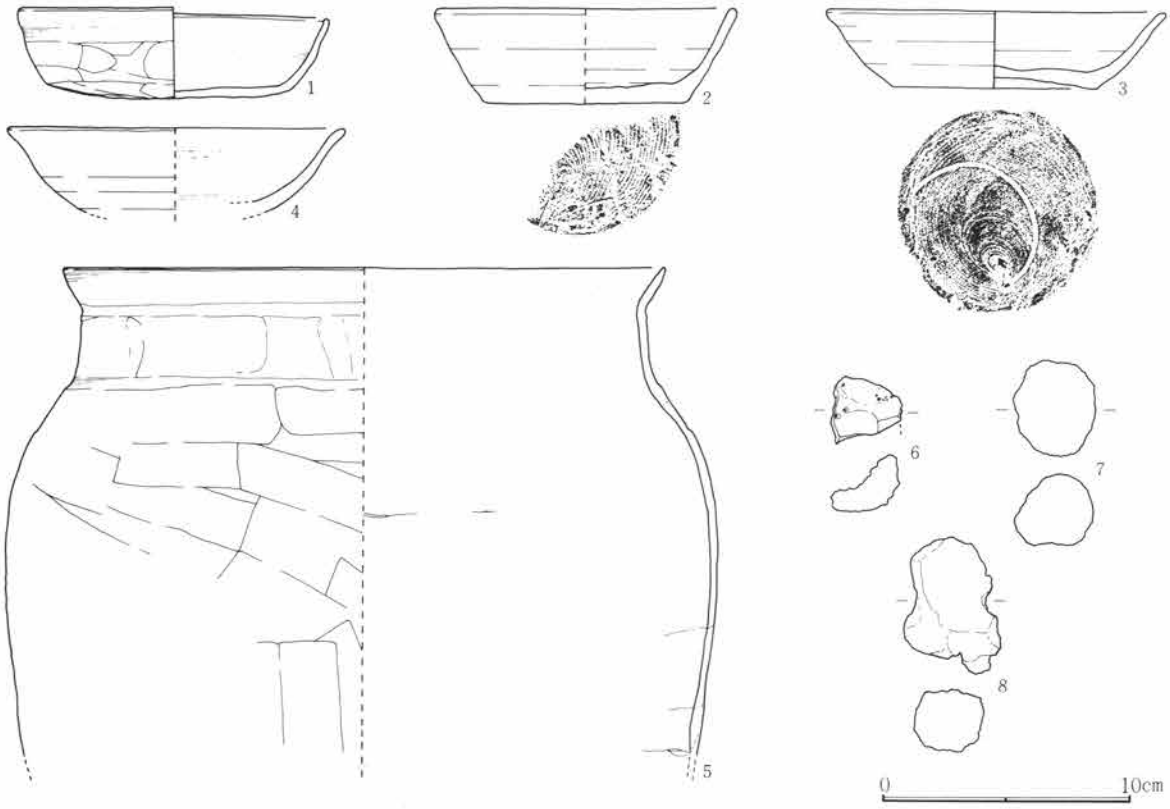


Fig. 83　D60号住居跡出土遺物

Ｄ60号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
83－1 45－1	土師器 杯	¾	12.3×－ ×3.7	床下土坑 ・＋4.5	底部平底気味。体部内湾して立ち、口唇部丸く小さく内屈。口縁部横撫で。体部指頭後篦撫で。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
83－2 45－2	須恵器 杯	¼	12.1×8.0 ×3.7	貯蔵穴・ 床下土坑	底径大きく体部直線的に立ち、やや深目。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
83－3 45－3	須恵器 杯	¾	13.4×8.2 ×3.1	床下土坑	底径大きい。体部下半に弱い丸味を有し、口唇部はくびれて僅かに外傾する。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
83－4 45－4	内黒土器 杯 or 椀	¼	13.5×－ ×(3.4)	床下土坑	腰部丸味強く、体部上半から緩く外反して開く。内面黒色処理、横細かい篦磨き。内面に黒色付着物。轆轤整形。	①酸化良好　②橙 ③密
83－5 45－5	土師器 甕	上半⅓	24.0×－ ×(19.3)	貯蔵穴・ 床下土坑	肩部張り気味。口縁部僅かに内傾して直立後上半は外屈するコの字口縁。口唇部横撫で。口縁部横篦撫で。胴部上位から横・斜位・中位に縦篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
83－6 45－6	坩堝	小片		埋土	内外面熔解	
83－7 45－7	鉄塊		長・幅 2.5×2.0	埋土		
83－8 45－8	鉄塊		長・幅 3.5×2.5	埋土		

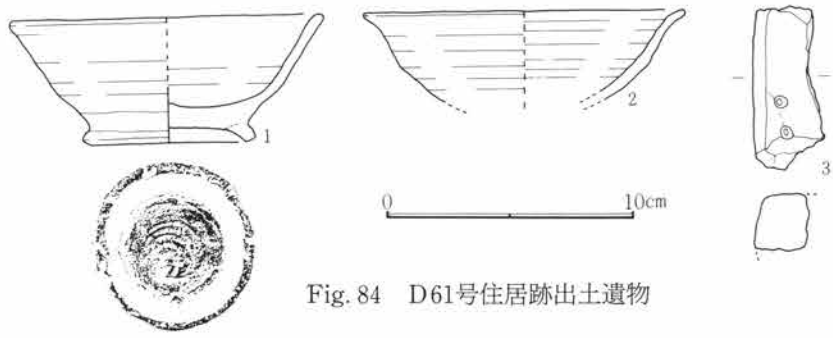


Fig. 84　Ｄ61号住居跡出土遺物

Ｄ61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
84－1 46－1	須恵器 椀	½	12.5×6.8 ×5.0	竈	腰部弱くくびれ、体部上半はやや肥厚し直線的に開く。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③粗
84－2 46－2	須恵器 椀	小片	12.8×－ ×(3.6)	竈	体部丸味をもち、口唇部大きく外反して開く。轆轤整形。内外面轆轤目強い。	①酸化気味やや軟 ②鈍い黄橙　③密
84－3 46－3	土製品 鋳型？	小片	長・幅 6.5×2.8	埋土	鋳造鋳型の残欠か。化粧土と思われる部分が残る。	細砂土

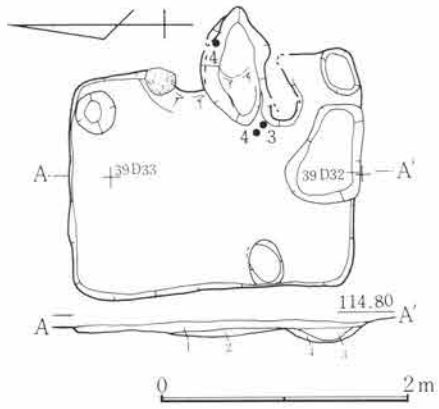
Ｄ63号住居跡（Fig. 85～87、PL. 10・46）

Ｄ区の東側に位置し、38・39Ｄ32・33の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが、かなり小規模な竪穴住居である。南北長2.3m・東西長1.8mを測り、壁高は５～６cm程度の立ち上がりを残す。竈は東壁ほぼ中央部に付設され、主軸方位はＮ－86°30′－Ｅを示す。床面は竈前面の中央が僅かに低くなり、踏み締まりの度合は他所より強い。南壁沿いに径80×55cm・深さ15cm程度の楕円形土坑が検出されているが、土坑の埋土上面は堅く踏み締められ貼床状になっており、住居掘形時のものと考えられる。また、北東隅及び西壁沿いにある径30cm・深さ20cmの Pit は、粘性の強い暗褐色土を埋土としており当住居跡に直接関わる施設ではない。

竈は東壁を大きく掘り込み、住居跡全体規模と比較して不つり合いに大型である。火床は硬質赤化面がほとんど残されていないが、掘形面と思われる窪みは粘性のある暗褐色土が埋土である。開口部幅約70cm・東

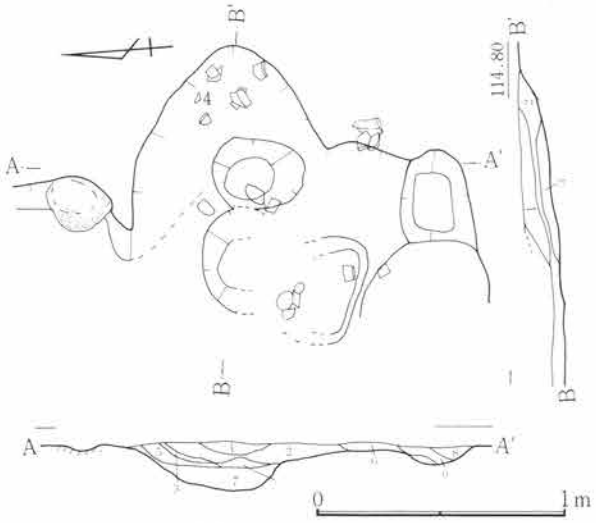
壁線より奥行き60cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径30～35cm・深さ15cmの浅い楕円形を呈し、埋土最下層には竈から流出したと思われる灰層が床面灰層より連続した状態で堆積している。

出土遺物は竈内及びその周辺に多く、須恵器杯・椀類がある。



D63号住居跡
1　暗褐色土　　C軽石を含む。
2　暗灰褐色土　炭化粒・灰を多く含む。
3　暗茶褐色土　炭化粒・焼土粒を少量含み粘性あり（床下）。
4　暗褐色土　　C軽石を含み粘性あり（床下）。

Fig. 85　D63号住居跡



D63号住居跡竈掘形・貯蔵穴
1　明褐色土　黒色灰・焼土粒を含む。
2　茶褐色土　焼土粒・炭化粒を多量に含む。
3　焼土粒・灰混合層。
4　褐色土　焼土粒・炭化粒を含み粘性あり。
5　明褐色土　灰を多量に含む。
6　灰層。
7　暗褐色土　灰・焼土粒を含み粘性あり（火床埋土）。
8　灰褐色土　焼土粒・炭化粒含む（貯蔵穴）。
9　灰褐色土　灰を多量に含む（貯蔵穴）。

Fig. 86　D63号住居跡竈

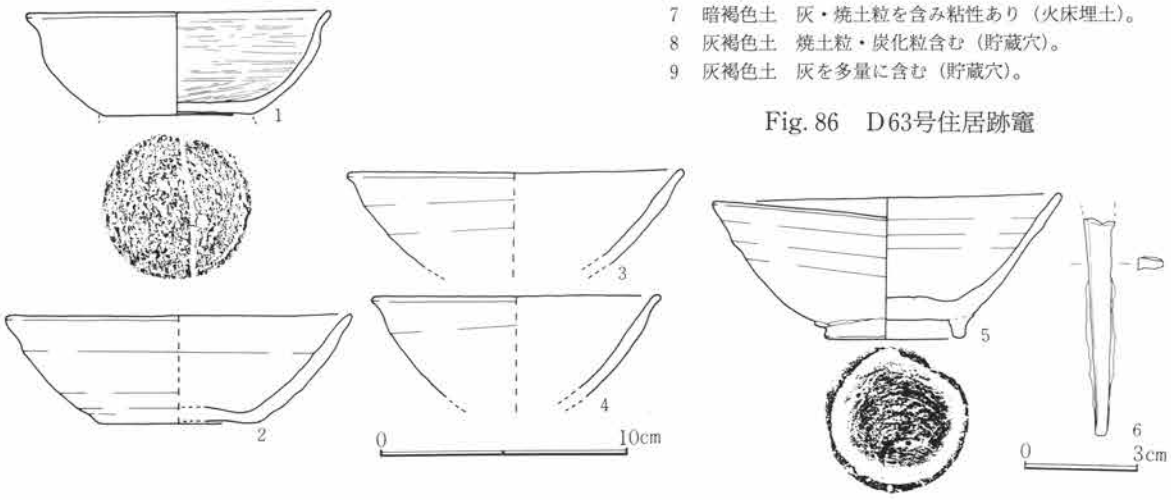


Fig. 87　D63号住居跡出土遺物

D63号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
87－1 46－1	内黒土器 杯 or 椀	ほぼ完 形	12.1×6.0 ×4.1	竈・－3	体部丸味強く、上半でくびれて小さく外反する。高台剝落の可能性あり。轆轤整形回転糸切り。内面黒色処理篦磨き	①酸化やや軟　②淡橙　③密
87－2 46－2	須恵器 杯	¼	13.8×6.2 ×4.2	竈	体部下半は直線的に立ち、上半で僅かにくびれ、外反気味に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや粗
87－3 46－3	須恵器 椀	小片	13.4×－ ×(3.5)	竈・ ＋2～4	体部丸味をもち、上半は僅かに外反。轆轤整形。	①良好　②灰褐　③粗白色粒多く混
87－4 46－4	須恵器 椀	小片	11.4×－ ×(4.0)	竈・ ＋3～5	体部丸味をもち、口唇部やや細まって小さく外傾。轆轤整形。	①良好　②灰　③粗

Ｄ63号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No PL. No	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
87－5 46－5	須恵器 椀	⅔	14.0×5.6 ×5.6	竈・ －8	体部上半で小さくくびれるが直線的に立つ。付高台歪み著しく作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
87－6 46－6	鉄製品 不　明		長・幅・厚 6.0×0.3～0.8×0.3	埋土	刀子柄部か。	

Ｄ64号住居跡（Fig. 88～91、PL. 10・46）

Ｄ区の東部中央に位置し、41・42Ｄ28・29の範囲にある。西半の大部分はＤ66号住居跡と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。また北東隅はＤ175号溝によって消失している。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈し、南北長3.4m・東西長2.7m・壁高約10cmを測る。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－93°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりはやや弱い。

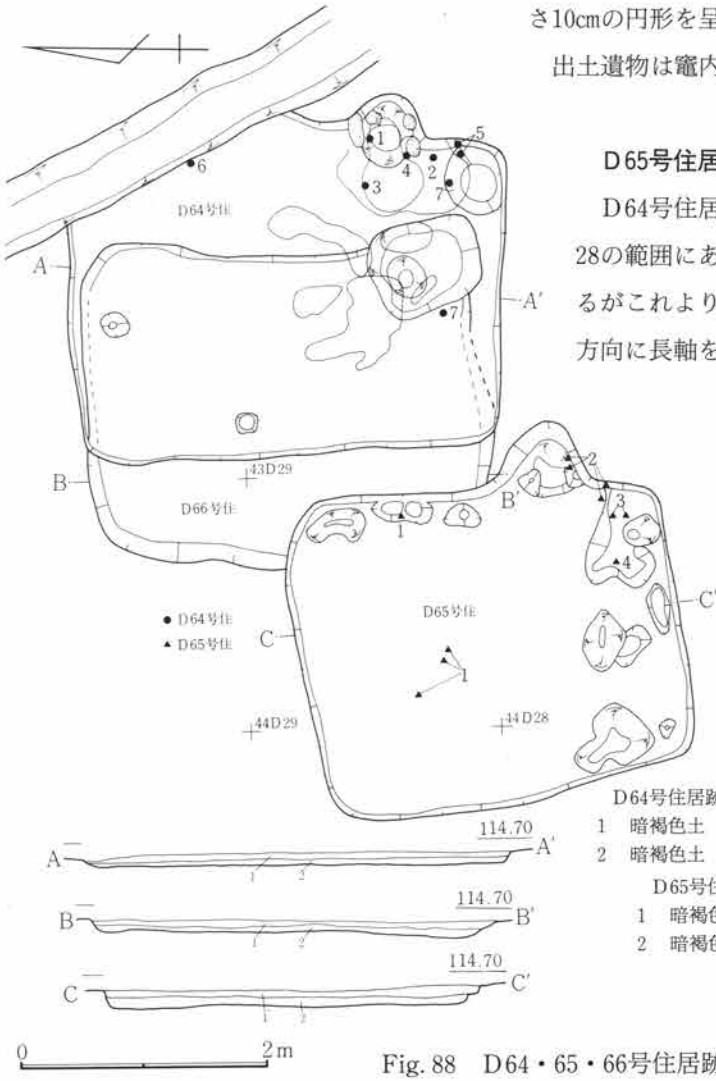
竈は東壁を半円形に掘り込み、開口部の左右、東壁線内側に凝灰岩質加工材を埋設し両袖部を作る。また燃焼部内壁左右も同質の構築材が各１個埋設される。火床は硬質赤化面が形成され、これより下位は掘形を埋める粘性黒褐色土や暗褐色土である。左右の袖材は周囲を粘性の強い暗褐色土で巻かれており、補強したものと考えられる。袖石間内法は35cm・燃焼部奥行き45～50cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径55cm・深さ10cmの円形を呈す。

出土遺物は竈内に多く須恵器椀・灰釉陶器椀などがある。

Ｄ65号住居跡（Fig. 88・92、PL. 11・47）

Ｄ64号住居跡の西に近接して位置し、42～44Ｄ27・28の範囲にある。北東辺でＤ66号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長3.05m・東西長2.55m・壁高20cmを測る。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。床面は平坦をなし、掘形も堅牢で踏み締まりは良好である。

竈は東壁を楕円形に掘り込むが、袖部などの痕跡は検出できなかった。火床には硬質赤化面は残らず、掘形の埋土は炭化粒を僅かに含む粘性暗褐色土



D64号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石・炭化物・粘土質大小塊多量に含む。
2　暗褐色土　Ｃ軽石少量含みやや粘性あり。

D65号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石を含む。
2　暗褐色土　Ｃ軽石・炭化粒少量含み粘性あり。

D66号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石多量に含む。
2　暗褐色土　炭化粒含みやや粘性あり。

Fig. 88　Ｄ64・65・66号住居跡

である。開口部幅80cm・東壁線より奥行き55cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径50×60cm・深さ15cm前後の円形である。

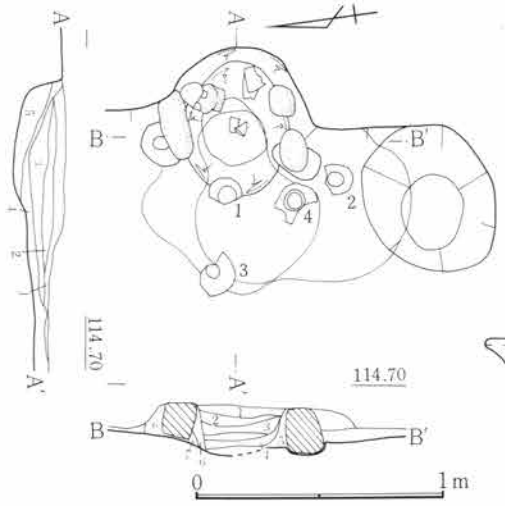
出土遺物は散在して検出され、須恵器杯・椀のほか灰釉陶器小椀がある。

D66号住居跡（Fig. 88・93、PL. 10・47）

42・43D28・29の範囲にあり、大部分はD64号住居跡と、さらに南西でD65号住居跡と重複している。新旧関係は、D64号・D65号住居跡の両者より旧い時期の所産である。遺存状態は、掘形の際にD65号住居との重複部分は消失しているが、D64号より深いためほとんどの輪郭は確認することができる。平面形は南北に長軸をもち、南北長3.25m・東西長2.5m・壁高14～15cmを測る。竈は焼土塊や灰層の分布から東壁に付設されたと考えられる。東壁線に基づく東西軸方位はN—89°—Eを示す。床面は南側にやや低くなるが、踏み締まりは総じて良好である。

竈は焼土塊や灰層の存在からおおよその位置が想定できる程度で、灰層もD64号住居跡の構築に際してのためか住居外に広がっている。形状その他は不明である。南東隅に径95×85cm・深さ15cmの楕円形土坑が検出されているが、底面に近く灰層の流入が認められ、当跡に関係する施設である可能性は高く、竈掘形か貯蔵穴と考えられる。しかし南東部の壁線を大きく突出することから、いずれとも確定できない。

出土遺物は少なく、須恵器椀がある。



D64号住居跡竈
1　暗褐色土　焼土粒・C軽石含む。
2　暗褐色土　C軽石多く含む。
3　黒褐色土　黒灰を多量に含む。
4　黒褐色土　灰を含む。
5　褐色土　竈掘形覆土
6　暗褐色土　締まりのある粘性塊含む。袖の外部。
7　暗褐色土　粘性強い。

Fig. 89　D64号住居跡竈

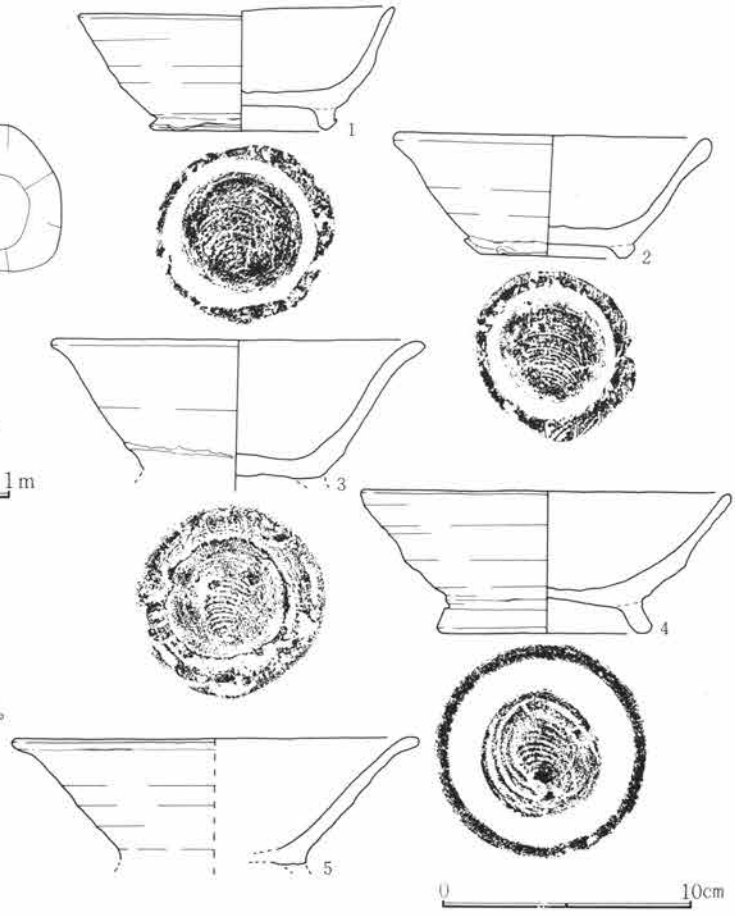


Fig. 90　D64号住居跡出土遺物（1）

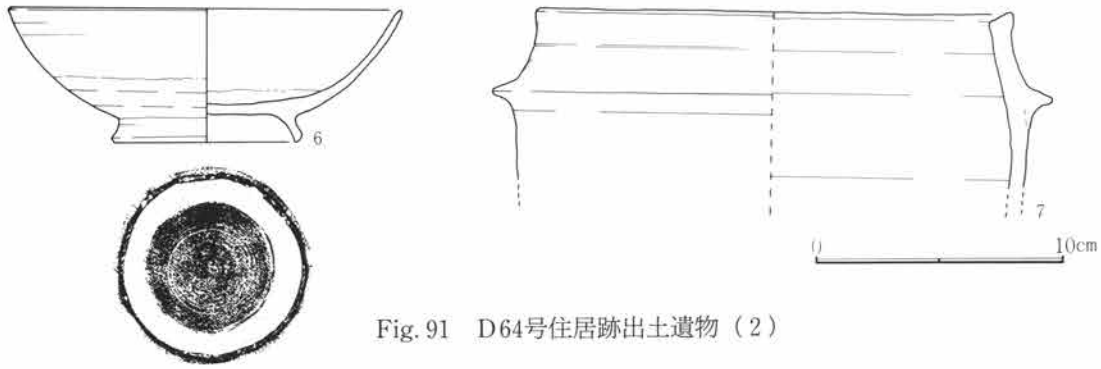


Fig. 91　D64号住居跡出土遺物（2）

D64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
90－1 46－1	須恵器 椀	⅔	12.5×6.5 ×4.6	竈・ ＋0.5	体部下半やや張り、上半は緩く外反して開く。付高台作り雑。轆轤整形右回転糸切り。口唇部細まる。内外底部吸炭	①良好　②灰白　③やや密
90－2 46－2	須恵器 椀	ほぼ完形	12.6×5.6 ×4.7	床面・ ＋7	腰部張り少なく体部上半は外反して開く。口唇部肥厚し丸まる。付高台幅広、低く雑。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②黄灰　③やや密
90－3 46－3	須恵器 椀	⅔高台欠損	14.7×－ ×(5.2)	床面・ ＋5	体部下半は直線的、上半大きく外反して開き深目。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。器肉厚い。	①良好　②灰　③やや密
90－4 46－4	須恵器 椀	ほぼ完形	14.5×8.0 ×5.6	竈・ ＋4	体部中位で強く張り、上半は直線的に外傾。付高台やや高く肉厚。轆轤整形。回転糸切り。外面轆轤目強い。	①酸化やや軟　②淡橙　③やや密
90－5 46－5	須恵器 椀	⅓底部欠損	16.1×－ ×(4.9)	貯蔵穴・ ＋1	体部直線的で大きく外傾。上端部は短かく強く外反する。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②褐灰　③やや粗
91－6 46－6	灰釉陶器 椀	⅔	15.6×7.3 ×5.25	床面・ ＋3	体部丸く内湾気味に開き、口唇部細まる。高台三ケ月形を呈しやや高い。腰部・底部回転篦調整。内外面刷毛塗り施釉。器肉薄い。光ケ丘1号窯式期。	①良好　②灰　③密
91－7 46－7	羽釜	口縁部 ⅓	18.9×－ ×(6.8)	貯蔵穴・ 埋土	胴部張りなく、口縁部は外反気味に内傾。口唇部矩形を呈し上端面は内斜。鍔水平に突出。二次被熱か。	①酸化気味良好　②灰～橙　③やや密

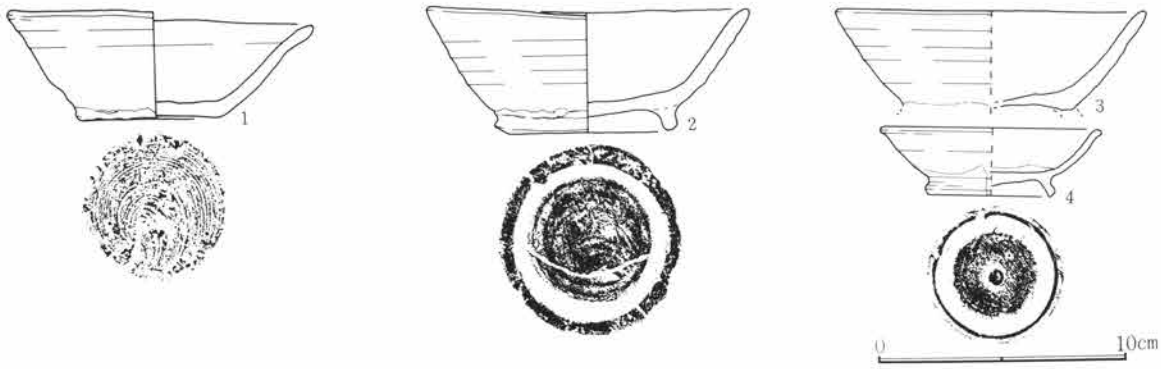


Fig. 92　D65号住居跡出土遺物

D65号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
92－1 47－1	須恵器 杯	完形	12.1×5.6 ×4.2	床面	体部下位にやや丸味をもち上半は外傾して開く。轆轤整形右回転糸切り。歪み著しい。内外面二次被熱か。外面吸炭	①良好　②灰白～褐灰　③粗
92－2 47－2	須恵器 椀	ほぼ完形	12.8×7.2 ×4.4	竈	腰部僅かに張り、体部直線的に開く。付高台断面丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②淡黄　③やや密
92－3 47－3	須恵器 椀	¼	12.4×－ ×(3.9)	貯蔵穴	腰部張りなく体部直線的に開く。付高台剝落。底部回転糸切り。内外面二次被熱か。	①酸化気味良好　②灰白～浅黄橙　③密
92－4 47－4	灰釉陶器 小椀	¼	8.8×4.8 ×2.65	貯蔵穴	体部やや丸味をもち、口唇部は丸く小さく外屈。高台明瞭な三ケ月高台。内外面漬け掛け施釉。底部丁寧な篦調整。大原2号窯式期（古式）	①良好　②灰　③やや密

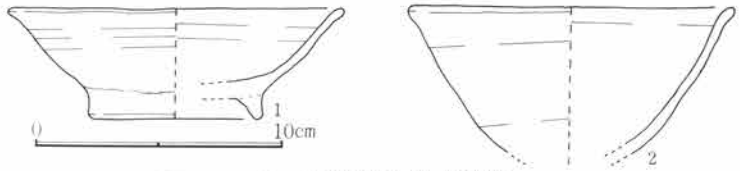


Fig. 93　D66号住居跡出土遺物

D66号住居跡出土遺物観察表

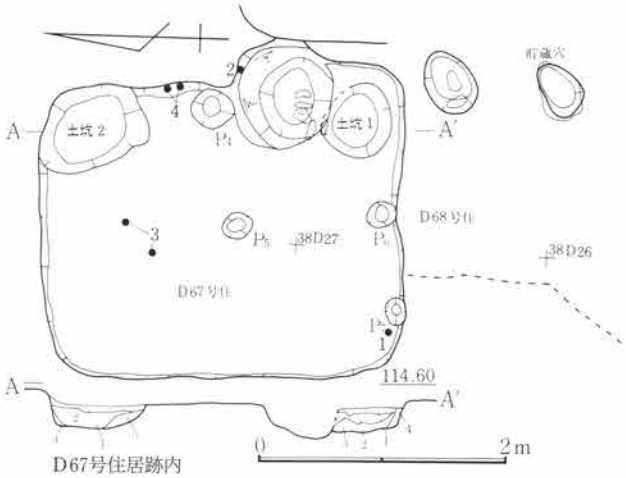
Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
93—1 47—1	須恵器 椀	⅓	13.4×6.8 ×4.4	埋土	体部下半に僅かに丸味をもち上半部は緩く外反して開く。浅い器形。付高台やや高く幅広。轆轤整形。	①酸化気味良好 ②鈍い橙 ③やや粗
93—2 47—2	須恵器 椀	体部⅓	13.2×— ×(5.8)	埋土	体部丸味強く深い。口唇部は丸く小さく外反。腰部強くすぼまる。轆轤整形。	①良好 ②褐灰 ③やや粗

D67号住居跡（Fig. 94～96、PL. 11・47）

D区の東部に位置し、37・38D26・27の範囲にある。北西でD73号住居跡と、また竈先端部がD69号住居跡と重複しているが、前者より新しく後者より旧い時期の所産である。また南側には竈と貯蔵穴のみのD68号住居跡が確認されており、想定できる範囲から重複関係にあると考えられるが、新旧関係は不明である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長2.9m・東西長2.35m・壁高10cmを測る。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はN—84°—Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、中央部が比較的良好に踏み締まり四隅はやや軟弱である。

竈は東壁を掘り込み、袖部は検出されていない。火床には硬質赤化面は残されず、灰層ないしは焼土粒層の堆積が見られた。掘形は深く灰・焼土粒などを混える粘性土で埋められている。南東・北東の各隅には比較的大型の楕円形土坑が検出されているが、埋土上面はいずれも貼床状の薄層が施され、日常生活に関わる施設ではなく住居跡掘形に伴うものと考えられる。

出土遺物は小片が多く、須恵器杯・椀・土師器甕類がある。



D67号住居跡内

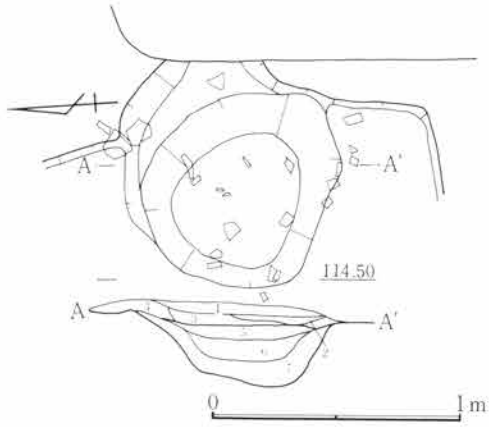
土坑1

1　灰褐色土　焼土粒・灰を混える粘質土（貼床）。
2　褐色土　Loam 塊を含む粘質土。
3　褐色土　炭化粒少量含む粘質土。
4　黄褐色土　Loam 粒層。

土坑2

1　灰褐色土　焼土粒を混える粘質土（貼床）。
2　褐色土　Loam 粒を多量に混える。
3　暗褐色土　Loam 粒を混える。

Fig. 94　D67・68号住居跡



D67号住居跡竈

1　焼土粒層。
2　灰層。
3　焼土粒層　灰が多量に混る。
4　明褐色土　焼土粒を含むが粘性あり。
5　茶褐色土　焼土粒を含み良く締まり粘性あり（掘形）。
6　茶褐色土　灰・焼土粒を含み粘性あり（掘形）。
7　暗褐色土　焼土粒・Loam 粒含み粘性あり（掘形）。

Fig. 95　D67号住居跡竈

D68号住居跡（Fig. 94、PL. 11）

D67号住居跡の南に位置し、竈と貯蔵穴と考えられる施設のみの検出で住居跡の輪郭をたどることはできない。このため、D67号住居跡と重複する範囲にあるが新旧関係は不明である。竈・貯蔵穴とも浅い皿状の窪みとなっており、上部構造は残されていない。

出土遺物は極めて少なく、貯蔵穴内に須恵器小片が検出されたのみである。

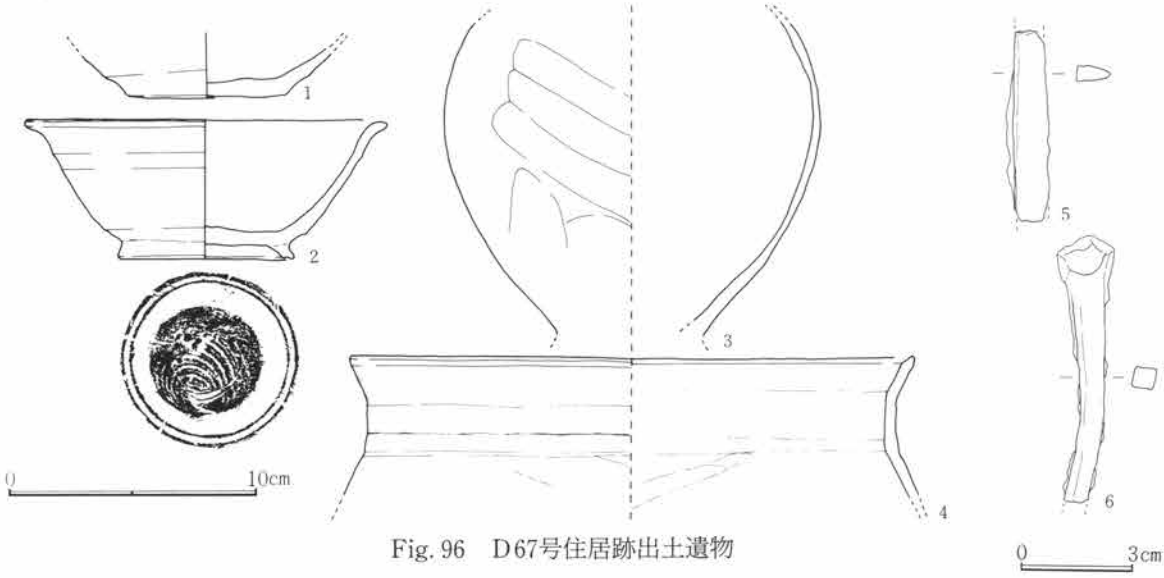


Fig. 96　D67号住居跡出土遺物

D67号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
96—1 47—1	須恵器 杯	底部	—×6.0 ×(1.7)	床直・ +0.5	轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味やや軟 ②淡黄　③やや密
96—2 47—2	須恵器 椀	⅔	14.2×7.0 ×5.4	竈・ —2	体部やや丸味をもち、上半は大きく外反して開く。付高台断面矩形を呈し畳付け段をなす。轆轤整形右回転糸切り	①良好　②灰　③やや密
96—3 47—3	土師器 台付甕	胴部⅓	—×— ×(12.6)	床直・ +2	胴部中位やや上で丸く張る。上半部斜・下半縦篦削り。	①良好　②橙　③やや密
96—4 47—4	土師器 甕	口縁部 ⅓	22.4×— ×(5.6)	埋土・ 0～+3.5	口縁部下半は直立し、上半は内湾気味に外傾するコの字口縁。肩部横篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
96—5 47—5	鉄製品 刀子？	刃部	長5.0　幅 0.9	埋土	刀子刃部か。	
96—6 47—6	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長7.0	埋土	頂部角頭式角釘か。	

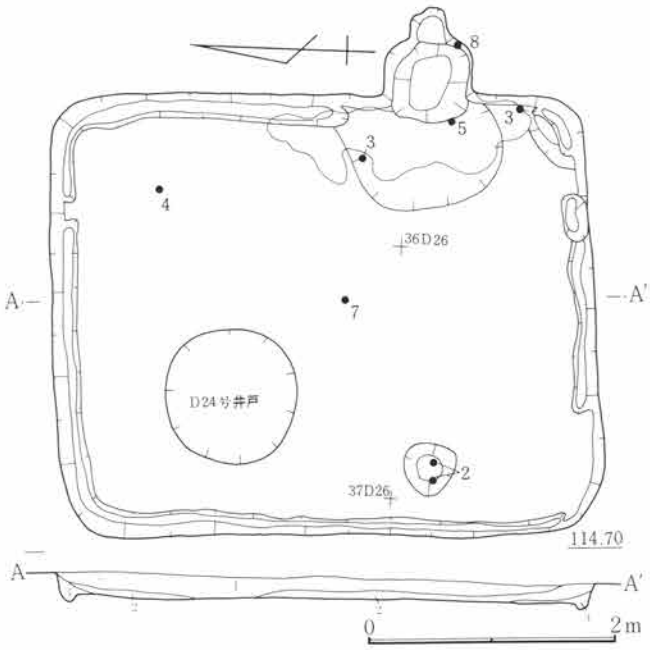
D69号住居跡（Fig. 97～99、PL. 11・47）

D区東縁に位置し、35～37D25～27の範囲にある。D67号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。また住居内北西部に中世以降に属すると考えられるD24号井戸跡がある。掘形・形状とも当該区の中では整った竪穴住居跡である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長4.35m・東西長3.5m・壁高20cmを測る。竈は東壁の南に大きく偏って付設され、主軸方位はN—89°—Eを示す。床面は平坦をなし、踏み締まりは総じて良好であるが、竈前面から中央部にかけてはとくに堅牢な面をなしている。

竈は燃焼部を大きく略方形に掘り込み、頂部小さく突出させ煙道部を作る。燃焼部側縁は硬質の焼土壁を形成するが、火床は硬質赤化面が残されず薄い黒色灰層を下面に厚い崩落焼土塊が堆積する。掘形は一回り大きく楕円形を呈し、燃焼部側縁及び底面にはC軽石粒を混える粘性暗褐色土が後込め、下込めに用いられている。袖部の痕跡はなく、石などの構築材も検出されていない。竈開口部幅70cm・燃焼部奥行き45cm・煙道部長さ25cmを測る。南東隅には貯蔵穴と考えられる落ち込みが検出されているが径45×50cm・深さ10cm程

度の楕円形を呈す。四壁下には幅10～12cm・深さ５cm程度の壁下溝が巡るが、南西隅は跡切れる。

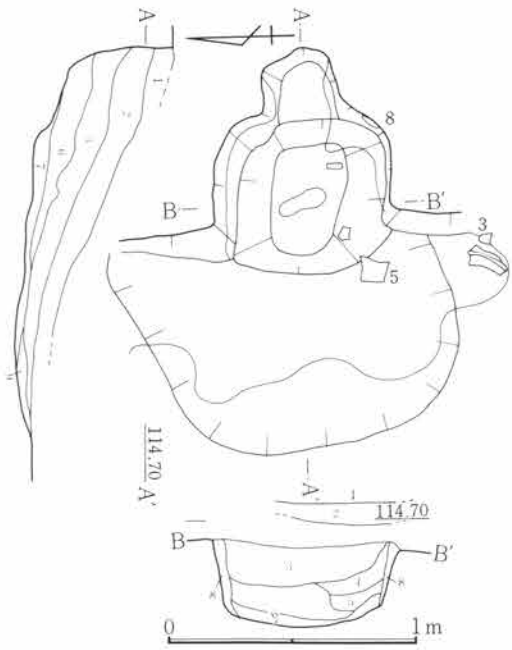
出土遺物は住居内全体に散在して検出され、小破片が多い。須恵器杯・椀・羽釜・甑・灰釉陶器・鉄釘などがある。



D69号住居跡

1　暗褐色土　C軽石粒・黄色粒を含む。
2　暗褐色土　C軽石粒・黄色土塊を多量に含む。
3　暗褐色土　C軽石粒含み締まりなし。

Fig. 97　D69号住居跡



D69号住居跡竈

1　暗褐色土　C軽石粒・黄色粒を含む。
2　暗褐色土　C軽石粒・黄色土塊を多量に含む。
3　暗褐色土　焼土塊・炭化粒を多量に含み締まりなし。
4　暗褐色土　C軽石粒・焼土粒含む。
5　暗褐色土　焼土粒・炭化粒含む。
6　焼土塊　崩落焼土。
7　黒灰層。
8　焼土壁。
9　灰層。

Fig. 98　D69号住居跡竈

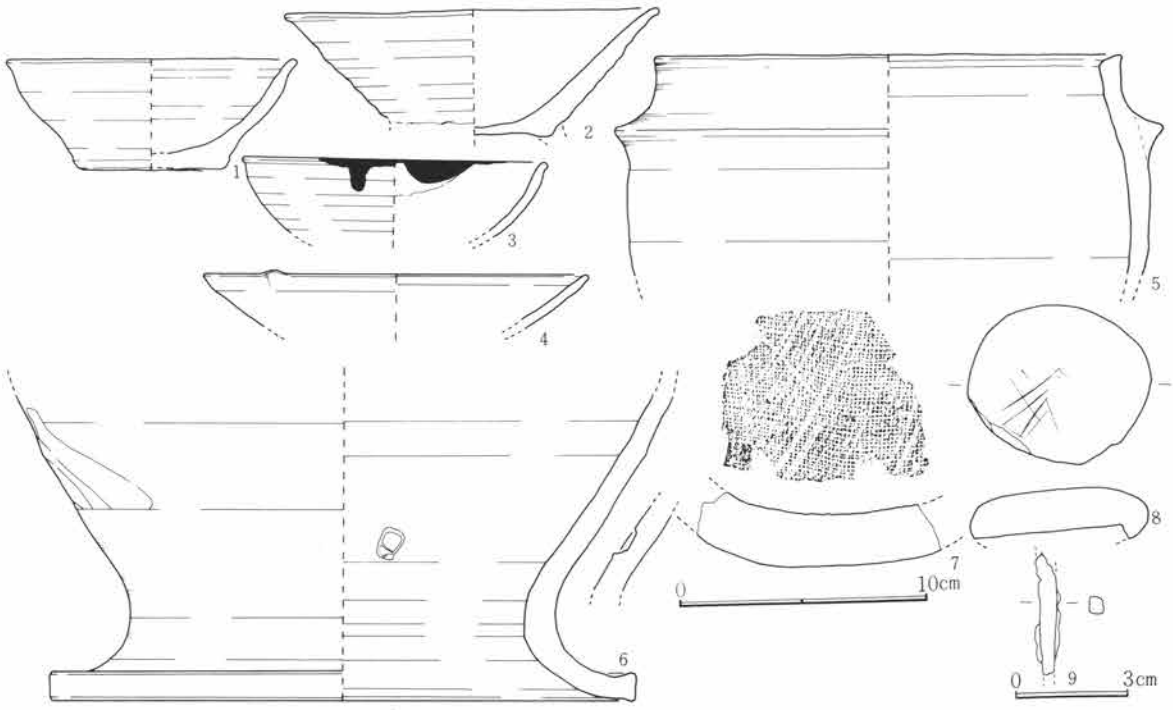


Fig. 99　D69号住居跡出土遺物

Ｄ69号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
99－1 47－1	須恵器 杯	⅓	11.5×5.8 ×4.4	埋土	腰部僅かにくびれ、体部上位に張りをもつ。口縁部外反気味。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや粗
99－2 47－2	須恵器 椀	⅓	13.2×－ ×(5.5)	床下	体部著しく肥厚し、直線的で大きく開く。口唇部小さく丸まり細まる。付高台剝落。轆轤整形。	①酸化気味良好　②淡黄　③やや粗
99－3 47－3	灰釉陶器 椀	口　縁 ～胴部	12.1×－ ×(3.0)	床面	体部丸味強い。口唇部丸く小さく外屈。口縁部内外面に油煙状付着物。漬け掛け施釉。大原２号窯式期？	①良好　②灰白　③緻密
99－4 47－4	灰釉陶器 輪花皿	口縁部 破片	15.4×－ ×(2.2)	埋土	体部直線的に開くか。釉飛び著しい。	①良好　②灰白　③密
99－5 47－5	羽　釜	口縁～胴 部小片	(8.4×－×(8.7) 鍔径21.6	竈	胴部やや張り丸味をもつ。口縁部外反気味に内傾。口唇部断面矩形をなし上端面内斜。鍔部基幅広い略三角。回転撫	①酸化良好　②橙　③やや粗
99－6 47－6	須恵器 甑	底部⅓	－×23.2 ×(12.2)	埋土	底部強く外反、湾曲し、水平に広がる。単孔式甑。内面に受け孔を穿つ。外面腰部斜篦削り後回転調整。内面黒色付着物あり。	①酸化気味　②明褐灰　③やや粗
99－7 47－7	瓦 平　瓦		厚2.1	床直	凹面布目。凸面撫で調整。	①良好　②灰　③やや密
99－8 47－8	石		長・幅・厚 6.3×7.2×(1.6)	竈	片面剝離、細線状擦痕。	
99－9 47－9	鉄製品 角　釘	両端部 欠損	長3.3　幅 0.4	埋土	角釘	

Ｄ70号住居跡（Fig. 100・101・103、PL. 11・48）

Ｄ区東縁にあり、37～39Ｄ28・29の範囲にある。Ｄ73号・Ｄ74号住居跡と重複しているが、両者より新しい時期の所産である。平面形は南北に長軸をもち、四隅の壁線が孤状に丸味の強い略方形を呈し極めて小規模な竪穴住居である。南壁線が不明確であるが、南北長約2.8m・東西長2.25m・壁高10cmを測る。竈は東壁ほぼ中央に付設され、主軸方位はＮ－89°－Ｅを示す。床面は平坦をなすが、当跡に伴うと考えられる２基の床下土坑が検出され、この上面を中心に薄層の明褐色土が貼床として施してある。

竈は東壁を半円形に掘り込むが袖部などは不明である。火床は硬質赤化面をなし、焼土壁と思われる焼土塊が左右より落ち込んでいる。火床は床面より僅かに低く、浅く皿状に窪み、竈開口部幅60cm・東壁線より奥行き45cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径80×65cm・深さ15cmの楕円形を呈す。

出土遺物は須恵器杯・砥石片がある。

Ｄ73号住居跡（Fig. 100・102・103、PL. 11・48）

37～39Ｄ27～29の範囲にある。北東部でＤ70号・Ｄ74号住居跡と重複しており、前者より旧く、後者より新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ、比較的整った方形を呈する。南北長4.4m・東西長3.7m・壁高25cmを測る。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。床面は中央部が僅かに低くなるが、全体に貼床状の黄褐色土が施され安定している。

竈は東壁を方形気味に掘り込み、頂部を小さく15cmほど突出させて煙道部を作り出す。右袖部は狭小ではあるが住居内に突出する痕跡がある。但し左側はＤ70号住居跡重複によって消失したものと考えられる。火床は硬質赤化面を形成し、火床面下には焼土塊・灰混合層が充填されている。竈開口部幅約70cm・右袖先端部からの奥行き95cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径100×70cm・深さ20cmの楕円形を呈す。壁下の溝は西壁沿いで部分的に確認されている。住居跡中央部床面に薄い灰層の分布が認められ、下位より６個のpitが検出されている。埋土にはいずれも焼土粒・炭化粒が混るが、埋土上面が踏み固められた状態のpitもあり、掘形に属する可能性が強い。

出土遺物は小片が多く、灰釉陶器などがある。

D74号住居跡（Fig. 100、PL. 11）

37～39D29・30の範囲にある。南でD70号・D73号住居跡と重複し、南半部は消失している。また北隅は東西走するD289号溝によって切られている。平面形は南東～北西方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、3.3×2.9m・壁高15cmを測る。竈は検出されていないが、東隅に灰層と焼土粒の広がりが認められ、D70号・D73号などと重複する南壁にあったと思われる。東西軸方位はN—60°—Eを示す。

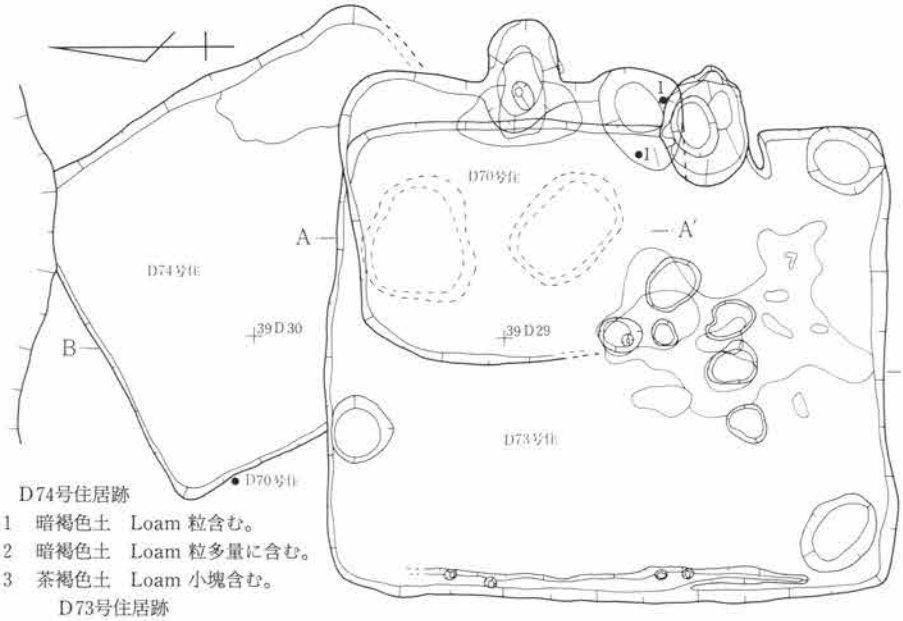


Fig. 100　D70・73・74号住居跡

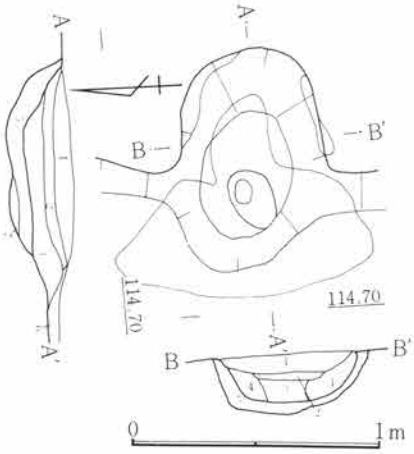


Fig. 101　D70号住居跡竈

D70号住居跡竈

1　暗褐色土　灰・焼土粒含み堅く締る。
2　黒色灰層。
3　茶褐色土　黒色灰多量に含み軟らかい。
4　焼土塊層。
5　焼土層。
6　灰・焼土混合層。
7　暗褐色土　焼土粒含む。

D73号住居跡竈

1　暗褐色土　焼土粒・炭化粒多量に混じる。
2　焼土塊層　炭化粒混じる。
3　暗褐色土　焼土塊多量に混じる。
4　黒灰層　炭化粒・焼土粒混じる。
5　焼土層　（火床)。
6　焼土塊　黒灰混合層。
7　褐色土　焼土粒混じるやや粘性あり。
8　褐色土　内法面は焼土壁（袖？)。

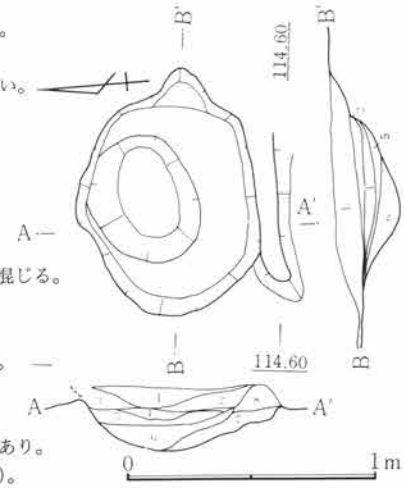


Fig. 102　D73号住居跡竈

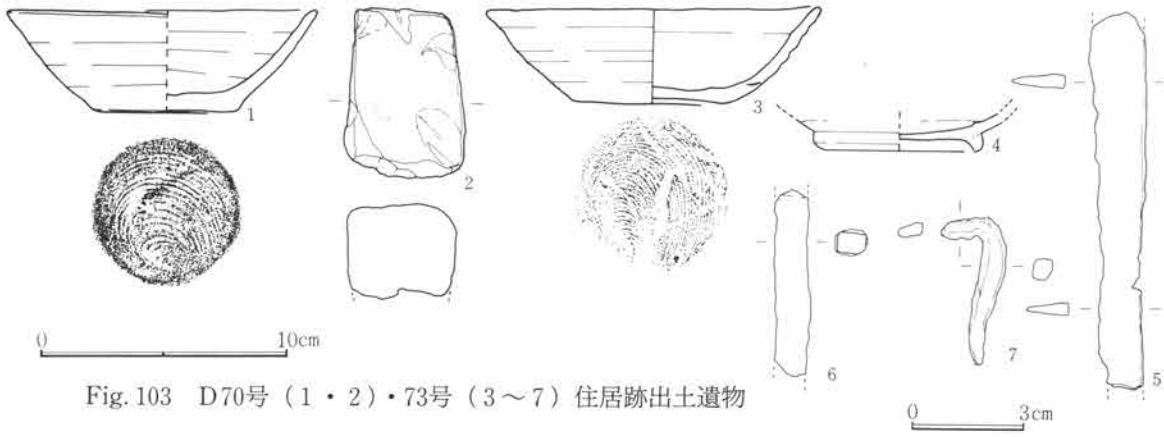


Fig. 103　D70号（1・2）・73号（3～7）住居跡出土遺物

D70号（1・2）・73号（3～7）住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
103－1 48－1	須恵器 杯	2/3	12.3×5.8 ×4.1	貯蔵穴・ ＋13	底径小さく腰部僅かにくびれる。体部ほぼ直線的で大きく開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗白色細粒混
103－2 48－2	石製品 砥石		長・幅・厚 6.6×4.5×(3.3)	埋土・ ＋1	多面使用。面の荒れ著しい。155g	流紋岩（砥沢？）
103－3 48－3	須恵器 杯	ほぼ完形	13.3×6.2 ×3.7	埋土	体部直線的に開き、口唇部やや丸まる。轆轤調整。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
103－4 48－4	灰釉陶器 椀 or 皿	底部小片	－×6.7 ×(1.5)	埋土	見込部緩く窪む。高台低く略三ケ月を呈す。内外面施釉。大原2号窯式期。	①良好　②灰白　③緻密
103－5 48－5	鉄製品 刀子	両端部欠損	長・幅・厚 [illegible]×1.5～1.0×0.4	埋土	刀子刃部か。	
103－6 48－6	鉄製品 角釘	両端部欠損	長・幅・厚 5.0×0.8×0.5	埋土	角釘。	
103－7 48－7	鉄製品 角釘	両端部欠損	長・幅・幅 4.0×0.5×0.4	埋土	角釘。頂部付近L字に折れる。	

D71号住居跡（Fig. 104、PL. 11）

D区東縁に位置し、35・36D29～31の範囲にある。南でD72号住居跡と重複しているが、周辺には溝・土坑などが著しく、両者とも遺存状態が悪く新旧関係は不明である。この重複のため南壁線は検出できていない。平面形は南北方向に長軸をもつと考えられ方形を呈するが、四壁隅は孤状をなす。南北長約3～3.1m・東西長2.5m・壁高約10cmを測る。竈は東壁の南側に偏って付設され、主軸方位はN－89°－Eを示す。竈は痕跡程度の遺存で、東壁を僅か孤状に掘り込む形状である。火床には薄い焼土粒と黒灰の混合層があり、硬質赤化面は残されていない。床面は重複する溝・土坑などで不安定である。

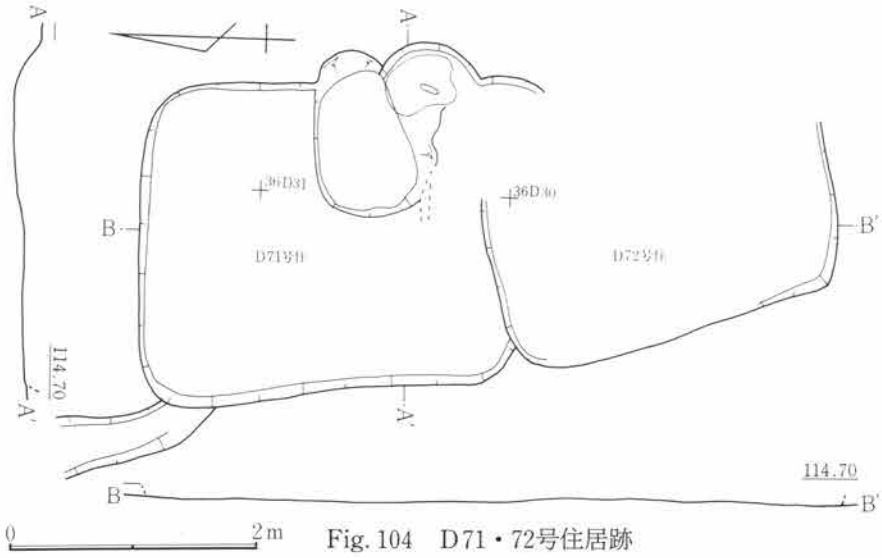


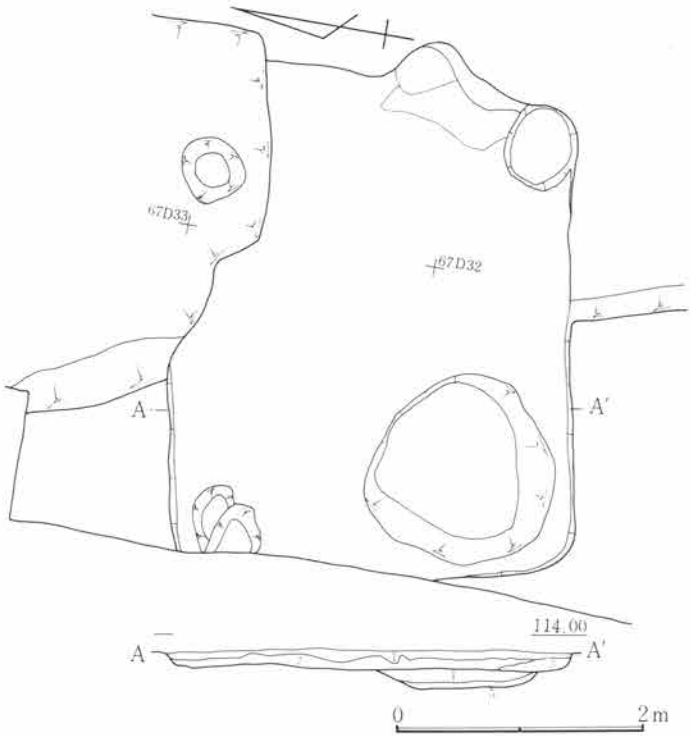
Fig. 104　D71・72号住居跡

出土遺物は須恵器小片が少量検出されたのみである。

Ｄ72号住居跡（Fig. 104、PL. 12）

Ｄ71号住居跡と北側で重複しているが、同様に遺存状態は悪い。35・36Ｄ28～30の範囲にあるが、西壁を中心に南・北壁線の一部を検出したにすぎない。平面形は略方形を呈すると考えられ、南北長2.8m・東西は西壁から1.7mの範囲まで確認した。また壁高はかろうじて壁線をたどれる程度である。竈その他の諸施設は検出されていない。西を基準にした東西軸方位はおよそＮ－72°－Ｅを示す。

出土遺物は須恵器小破片のみである。



Ｄ75号住居跡
1　暗褐色土　白色小粒軽石を多く含む。炭化粒含む。
2　暗褐色土　粘性。締り極めて良。褐色粘質土を斑点状に含む。炭化粒含む。
3　暗褐色土　白色軽石５㎜大を多く含む。炭化粒含む。
4　暗褐色土　乳白色粘質土を塊状に含む。炭化粒・焼土粒多く含む。
5　暗褐色土　焼土粒多く含み、締り良好。

Fig. 105　Ｄ75号住居跡

Ｄ75号住居跡（Fig. 105、PL. 12・48）

Ｄ区の西縁に位置し、66～68Ｄ31・32の範囲にある。東部から北部にかけて削平が著しくおよび、住居跡北東部は床面の一部が失われ、東は東壁線の痕跡を検出したにとどまった。また、西壁の一部は調査区域外にかかる。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈し、東西長3.7m・南北長3.2m・壁高約15cmを測る。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－88°30′－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりは弱い。南西隅に径1.4～1.5mの楕円形土坑が検出されたが、土坑埋土の上層は黄白色粘土塊を混える暗褐色土で覆われており床下土坑と考えられる。

竈は東壁を僅かに掘り込む形状で、火床部には薄い焼土粒層と、流出した灰層が認められたにすぎない。貯蔵穴は南東隅にあり、数個の拳大原石が出土している。

出土遺物は須恵器小破片がほとんどで散在していた。

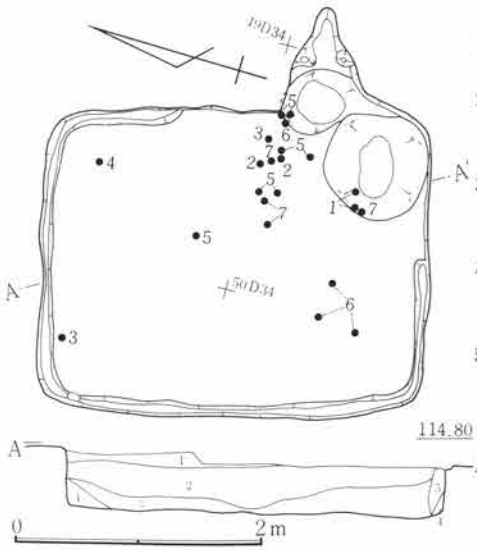
Ｄ80号住居跡（Fig. 106～109、PL. 12・48）

Ｄ区のほぼ中央部に位置し、48～50Ｄ33・34の範囲にある。上面にＤ６号竪穴状遺構が重複するが浅い掘形のため、当跡への影響は少ない。平面形は南北に長軸をもち、掘形の深い整った方形を呈する。南北長3.1m・東西長2.4m・壁高45cmを測る。竈は東壁にあって大きく南に偏って付設され、主軸方位はＮ－75°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。

竈は東壁を大きく楕円形ないしは方形気味に掘り込み燃焼部を作り、頂部にやや長目の煙道部を突出させ

る。燃焼奥部の左右、煙道部との境には各々川原石を埋設する。火床は硬質赤化面が形成され、側壁部焼土化も著しい。焚口部や袖部などの構築材を用いた形跡は認められなかった。竈開口部幅約70cm・東壁線よりの奥行き50cm・煙道部長さ35cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、一部焚口部におよぶ位置にあり、上面には竈内より流出した灰層が覆う。径80cm・深さ20cmの円形で擂鉢状を呈す。壁下の溝は幅10cm・深さ50cmで南壁下の西半から東壁北半の範囲で巡る。

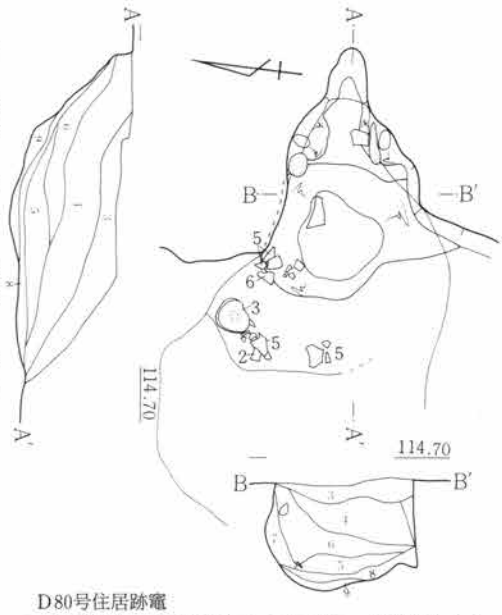
出土遺物は住居内全体に散在し、須恵器杯・椀・土師器甕のほか須恵器大型甕の口縁部片・灰釉陶器小片などがある。



D80号住居跡

1　茶褐色土　C軽石を多く含み堅く締まる。
2　暗褐色土　C軽石を少量含み、黄色土塊多量に含む。
3　暗褐色土　2層と類似するが黄色土塊少量で暗い。粘性かなり強い。
4　褐色土　C軽石をやや含み、2・3層と違い黄色土塊含まない。
5　黄褐色土　黄色土塊・粒子が主体であり、塊状に入っている。粘性強。

Fig. 106　D80号住居跡



D80号住居跡竈

1　暗褐色土　黄色土塊少量で含み暗い。粘性がかなり強い。
2　褐色土　C軽石をやや含み、1層と違い黄色土塊を含まない。
3　黄褐色土　黄色土塊・粒子が主体であり塊状に入っている。粘性強い。
4　暗褐色土　2層より混入物は少なく細かい。やや締まっている。
5　黒褐色土　焼土を少し含むが粘性あり。
6　焼土塊。
7　灰層。

0　1m

Fig. 107　D80号住居跡竈

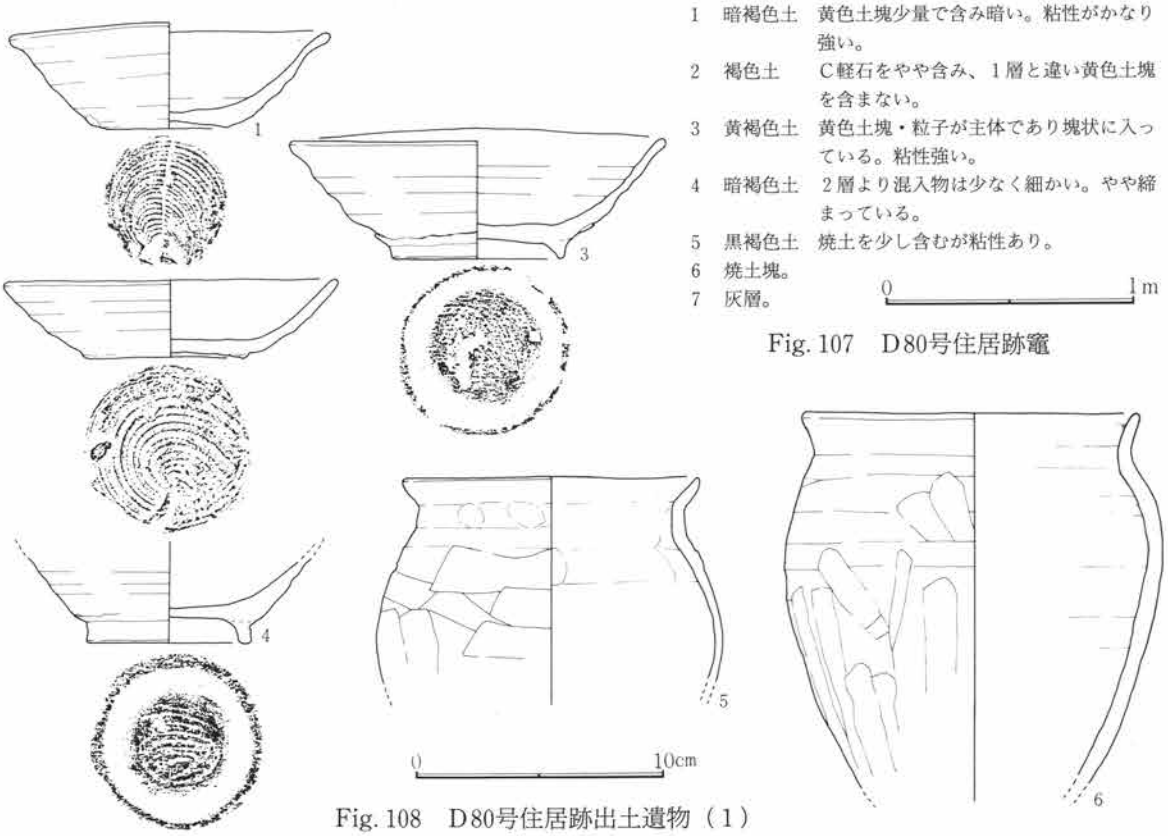


Fig. 108　D80号住居跡出土遺物（1）

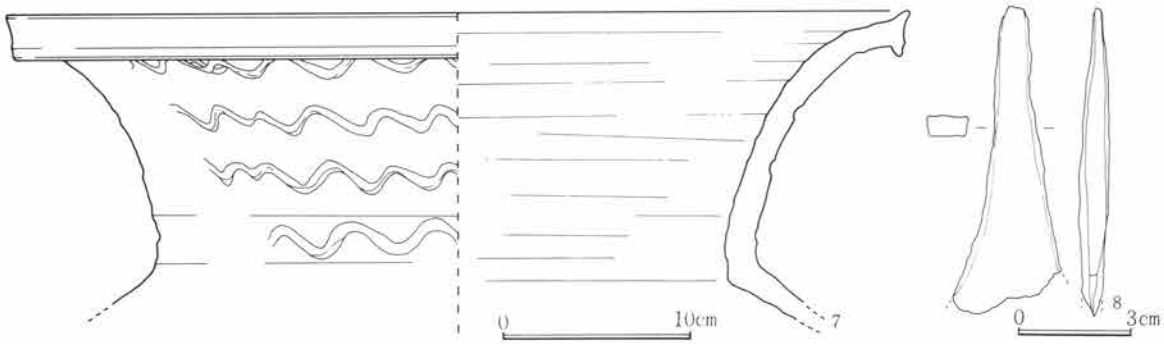


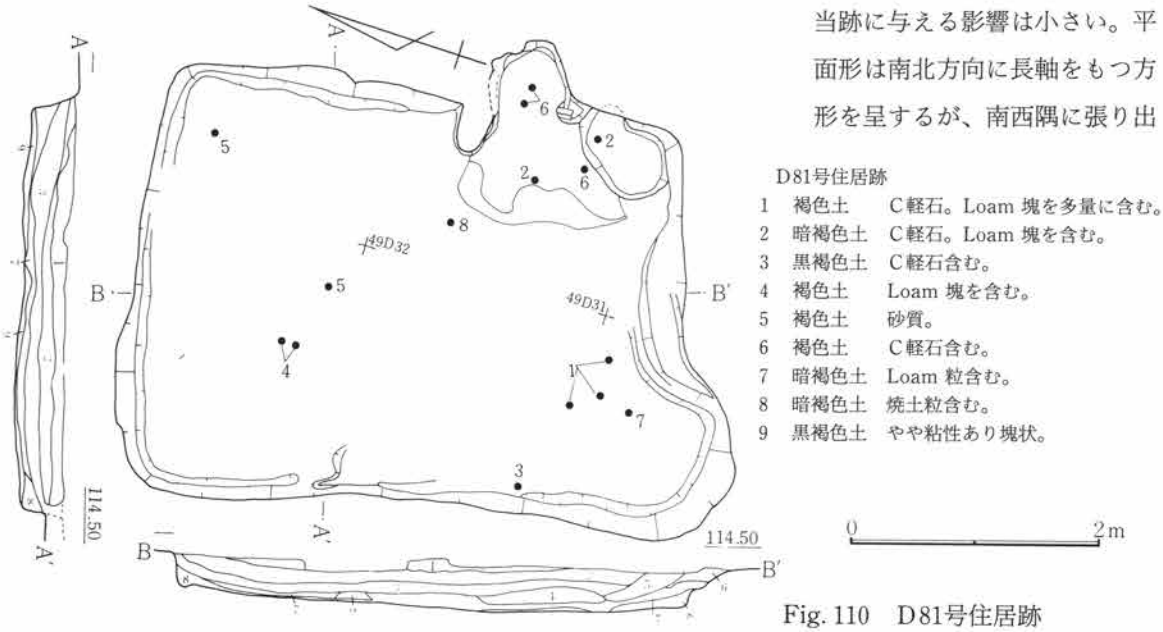
Fig. 109　D75号（８）・80号（７）住居跡出土遺物（２）

D75号（８）・D80号（１～７）住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
108－1 48－1	須恵器 杯	ほぼ完形	12.8×5.0 ×4.2	貯蔵穴	底径小さい。腰から体部下半丸味強く、上半は外反して開く。口唇部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。内外面焼成時の黒斑あり。	①良好　②灰白～灰 ③やや密
108－2 48－2	須恵器 杯	½	13.3×6.3 ×3.0	竈	体部やや丸味をもち極めて浅い。皿形になろうか。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③ やや粗
108－3 48－3	須恵器 椀	½	15.0×7.0 ×4.7	竈	体部やや丸味をもち浅い。口唇部丸く僅かに外傾。付高台やや低く、端部丸い。轆轤整形。回転糸切り。二次被熱。	①良好　②灰白一部 淡赤橙　③やや粗
108－4 48－4	須恵器 椀	底部～ 体部片	－×6.6 ×(3.4)	埋土	腰部肥厚し僅かに張る。付高台断面矩形を呈す。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③や や粗
108－5 48－5	土師器 小型甕	上半部	11.8×－ ×(8.2)	竈	胴部丸く張らむ。口縁部下半直線的に直立し上半は内湾気味に強く外屈しコの字口縁。口縁部上下横撫で、中位指頭痕。肩部横・胴中位以下縦箆削り。内面横箆撫で。	①良好　②赤橙　③ やや粗
108－6 48－6	須恵器 小型甕	⅔底部 欠損	13.5×－ ×(14.8)	竈	胴部上半でやや張る。口縁部短かく僅かに外傾。口縁部から胴上半は回転撫で。胴中位から下位は弱い縦箆削り。	①良好　②浅黄橙 ③粗
109－7 48－7	須恵器 甕	口縁部 ¼	48.0×－ ×(15.4)	貯蔵穴	口縁部強く外反して開く。口縁帯幅広く直立。口唇部上下端尖る。口縁部に幅広１条の櫛描き波状文４段施す。	①良好　②灰白～灰 ③やや密
109－8 48－8	鉄製品 不明		長・幅・厚 8.0×0.8～3.0×0.5	埋土	大きく扇状に広がり、端部は薄く刃部をなすか。	

D81号住居跡（Fig. 110～112、PL. 12・48・49）

D区中央部に位置し、48～50D30～32の範囲にある。上面でD７号竪穴状遺構と重複するが、掘形が浅く当跡に与える影響は小さい。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、南西隅に張り出



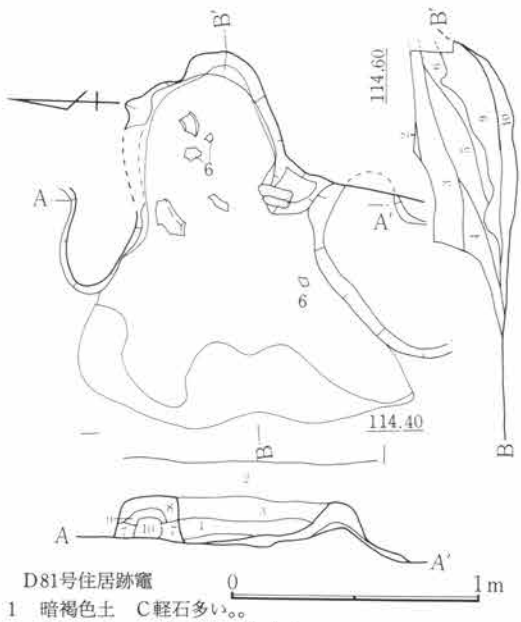
D81号住居跡
1　褐色土　C軽石。Loam 塊を多量に含む。
2　暗褐色土　C軽石。Loam 塊を含む。
3　黒褐色土　C軽石含む。
4　褐色土　Loam 塊を含む。
5　褐色土　砂質。
6　褐色土　C軽石含む。
7　暗褐色土　Loam 粒含む。
8　暗褐色土　焼土粒含む。
9　黒褐色土　やや粘性あり塊状。

Fig. 110　D81号住居跡

し部を作る。南北長約4.4m・東西長3.4m・壁高約40cmを測る。また南西隅部の張り出しは、南壁線より約70cm突出し、住居床面とは平坦に続き、特別な仕様は施されていない。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はN－82°30′－Eを示す。床面は中央部に向い僅かに低くなるが、踏み締まりは良好である。

竈は東壁を半楕円に掘り込み、住居内に突出する袖部をもつ形状である。左袖は長さ約50cmで、黒色粘質土を中心に周囲をLoam塊を混える黒褐色土で覆って形成される。右袖部は基部のみを残すが、凝灰岩質の加工材を埋設する。本来は左袖と同程度の長さであったと考えられる。燃焼部側壁は焼土化が著しく、火床も部分的に硬質赤化面が残されていた。焚口部幅約60cm・左袖からの奥行き95cmを測る。貯蔵穴は南東隅部にあり、80×60cm・深さ10cm程度の不整楕円形を呈す。貯蔵穴内には竈流出の灰層は及んでいない。壁下の溝は、部分的に跡切れるものの各壁下に巡る。

出土遺物は破片化したものが多く散在した状態で検出され、須恵器杯のほか灰釉陶器・鉄釘などがある。



D81号住居跡竈
1　暗褐色土　C軽石多い。。
2　黒褐色土　1層より混入物少ない。
3　暗褐色土　焼土粒・C軽石含み黄土塊を少量含む
4　暗褐色土　3層よりやや暗い。焼土粒多量。C軽石含む。
5　黒褐色土　地山塊を多く含む。焼土粒少ない。
6　黒褐色土　地山塊を多く含む。焼土粒極端に多い
7竈再構築に際し以前にあった床面。
8　暗褐色土　焼土粒含む。
9　崩落焼土。
10　灰層。

Fig. 111　D81号住居跡竈

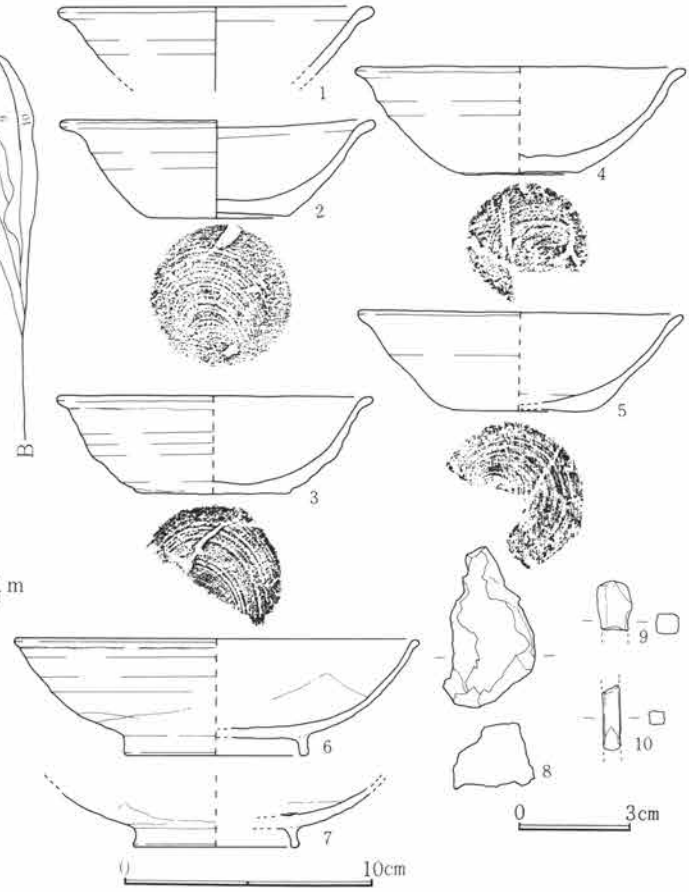


Fig. 112　D81号住居跡出土遺物

D81号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
112－1 48－1	須恵器 杯 or 椀	体部½ 底部欠	12.5×－ ×(2.7)	床直	体部やや直線的。口唇部丸く肥厚し小さく外傾。轆轤整形	①良好　②灰　③密
112－2 48－2	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.5×5.6 ×3.9	貯蔵穴	底径小さく、体部丸味をもつ。口唇部強く外傾して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
112－3 48－3	須恵器 杯	⅓	12.5×6.0 ×3.9	埋土	底径小さく体部丸く張る。口唇部丸まり外傾。体部の器肉薄目。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
112－4 48－4	須恵器 杯	¼	13.1×4.7 ×4.2	埋土	底径小さく、体部丸味強く上半は外反して開く。口唇部丸まりやや肥厚。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味やや軟 ②浅黄　③やや密
112－5 48－5	須恵器 杯	¼	13.0×5.8 ×3.9	床直	腰部やや張らみくびれて体部中位僅かに張る。口縁部小さく外傾。体部器肉薄い。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰白 ③密

D81号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
112－6 48－6	灰釉陶器 椀	¼	16.2×7.4 ×4.6	竈	体部丸味をもち、口唇部丸く小さく外屈。高台直立。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
112－7 49－7	灰釉陶器 椀	底部小片	－×6.6 ×(2.4)	埋土	腰部丸味をもつ。高台直立気味。内外面漬け掛け施釉。見込み部に重ね焼成痕。	①良好　②灰　③密
112－8 49－8	石		6.3×3.7×2.5 重さ640g	埋土		
112－9 49－9	鉄製品 角釘	小片	長1.5　幅 0.5	埋土	頂部角頭式の角釘。	
112－10 49－10	鉄製器 角釘	小片	長・幅・厚 (1.8)×0.4×0.4	埋土	角釘。	

D82号住居跡（Fig. 113～115、PL. 12・49）

D区のほぼ中央に位置し、55～57D22～24の範囲にある。南側は当区を東西走する生活道のため、全容は検出できていない。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられるが、東壁線は僅かに張らむ。東西長2.9m・南北は北壁より約３mの範囲まで確認した。壁高は約20cmを測る。竈は東壁に付設され、主軸方位はN－75°－Eを示す。床面は平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。

竈は東壁を煙道部を意図してか、先細りの形状をもって掘り込まれる。袖材などの埋設痕は検出されていないが、竈左前に凝灰岩質の大型加工材が見られる。原位置は動いているものの、当竈構築材の一部と考えられる。火床は硬質赤化面は形成されていないが、下位に一次形成と思われる灰層が堆積し、その下位は焼土粒・灰の多く混る土が充塡してある。

出土遺物は少なく竈前面の床直上に須恵器皿が検出されている。

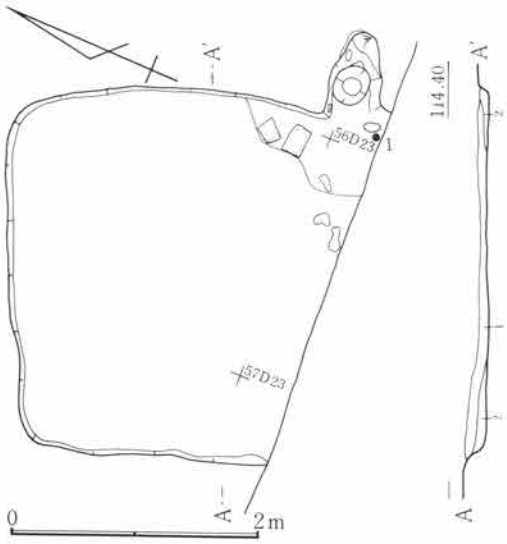


Fig. 113　D82号住居跡

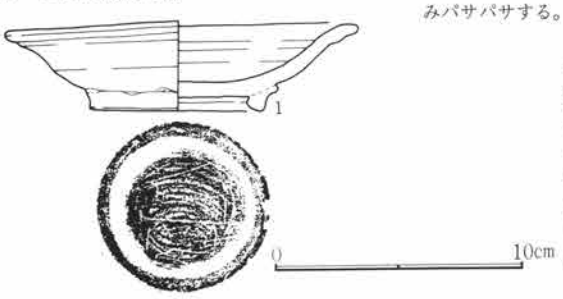
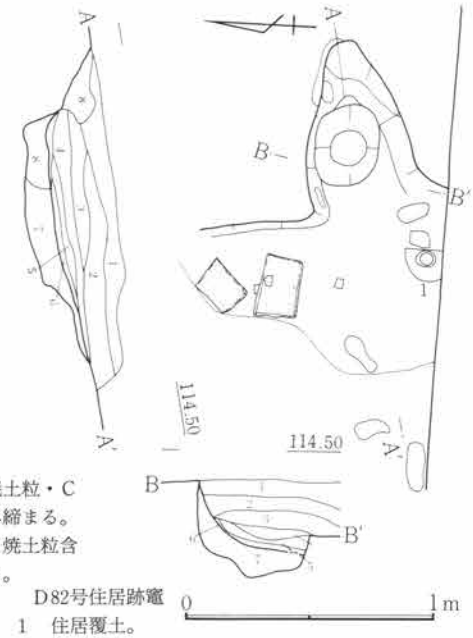


Fig. 115　D82号住居跡出土遺物



D82号住居跡
1　褐色土　木炭・焼土粒・C軽石多量に含み締まる。
2　暗褐色土　木炭・焼土粒含みパサパサする。

D82号住居跡竈
1　住居覆土。
2　住居覆土。
3　褐色土　焼土粒・炭化粒・C軽石含む。
4　暗褐色土　崩落焼土多量・C軽石含む。
5　黒褐色土　灰多量・崩落焼土含む。
6　プライマリー木炭。
7　これ以前の竈の焼土・木炭粒を含む。
8　黒褐色土　木炭・焼土粒を含む竈崩壊土。

Fig. 114　D82号住居跡竈

D82号住居跡出土遺物観察表

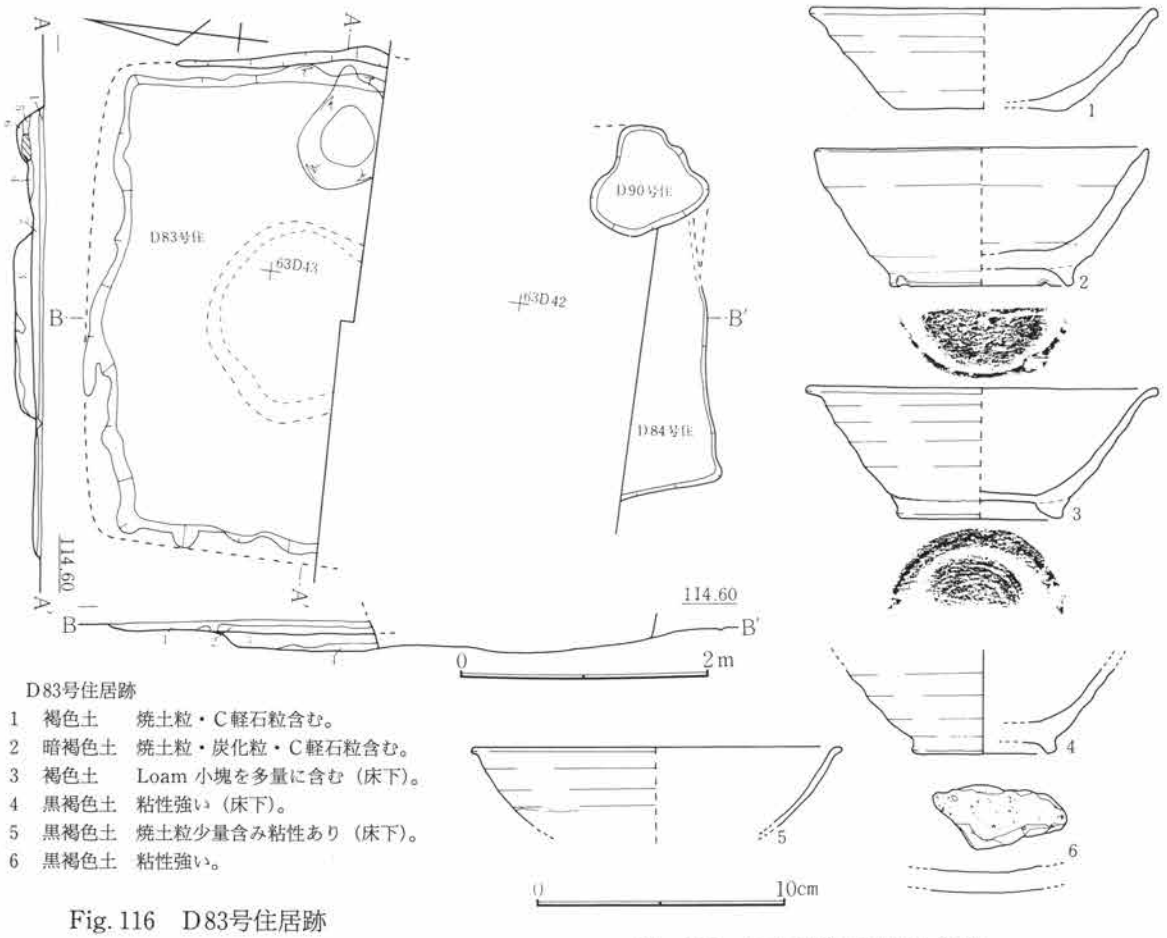
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
115－1 49－1	須恵器 皿	⅔	14.0×6.8 ×2.9	竈	体部丸味をもって開き、口唇部大きく外反する。付高台幅広で断面略矩形。器肉肥厚。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや密

D83号住居跡（Fig. 116・117、PL. 13・49）

D区北西部に位置し、62～64D41～43の範囲にある。D区西側は削平が著しく、当跡の検出は壁線をかろうじて認め得る程度である。また、住居跡中央部は当区本調査に先だって実施された東西方向設定の試掘溝によって消失している。また本調査にあたっては中央で南北に分断された各部分をもって北側をD83号・南側をD84号住居跡と認定されたが、ここでは検討の結果、両者を一括して扱いD83号住居跡とする。

平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長約5m・東西長約4mを測る。壁高は痕跡を認める程度である。竈は検出されていないが、東壁に付設された可能性がある。また貯蔵穴と考えられる落ち込みは南東隅にあり径90cmの不整楕円形を呈す。落土はほとんど感じられず、これも痕跡程度である。床面の遺存状態は悪く、全体に小さな凹凸がある。中央部やや北寄りに径1.5m・深さ20cmの円形土坑が検出されているが埋土はLoam粒混りの粘性褐色土で埋まり、床下土坑に類すると思われる。四壁には壁下溝の痕跡が認められるが不規則で詳細は不明である。東西軸方位はおよそN－87°－Eを示す。

出土遺物は小片が多く、床下土坑内からの遺物が主である。須恵器椀などのほか灰釉陶器・須恵器転用の坩堝片がある。



D83号住居跡
1　褐色土　焼土粒・C軽石粒含む。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化粒・C軽石粒含む。
3　褐色土　Loam小塊を多量に含む（床下）。
4　黒褐色土　粘性強い（床下）。
5　黒褐色土　焼土粒少量含み粘性あり（床下）。
6　黒褐色土　粘性強い。

Fig. 116　D83号住居跡

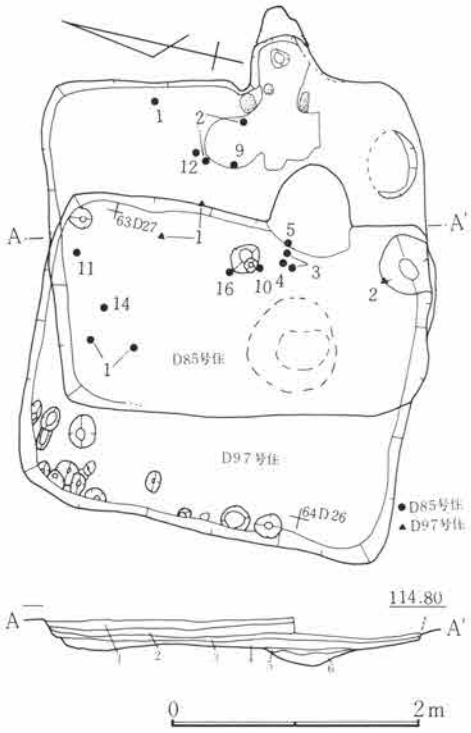
Fig. 117　D83号住居跡出土遺物

D83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
117－1 49－1	須恵器 杯	小片	14.0×6.8 ×3.8	埋土	体部直線的に開き口唇部丸まる。轆轤整形。二次被熱。	①酸化良好　②褐灰 ③粗砂粒多
117－2 49－2	須恵器 椀	⅓	13.2×7.3 ×5.5	埋土	体部上半に丸味をもち内湾気味。器肉全体に厚いが口唇部尖る。付高台、棒状受け痕あり。轆轤整形。	①酸化気味　②橙・灰　③やや粗
117－3 49－3	須恵器 椀	¼	14.0×6.7 ×5.2	埋土	体部直線的で、口唇部大きく外反して開く。付高台、幅広で雑。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟　②灰　③やや粗
117－4 49－4	須恵器 椀	底部～ 体部¼	－×5.7 ×(3.4)	埋土	体部直線的か。付高台やや低目。轆轤整形。	①酸化軟　②橙　③やや密
117－5 49－5	灰釉陶器 椀	小片	14.6×－ ×(3.2)	埋土	体部丸味をもち、口唇部丸く小さく外反。体部内外面刷毛塗り施細か？形態は大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
117－6 49－6	須恵器 坩堝	小片	厚0.8	埋土	内面熔解発泡。須恵器片転用か？	①良好　②灰　③やや粗

D85号住居跡（Fig. 118～121、PL. 13・49）

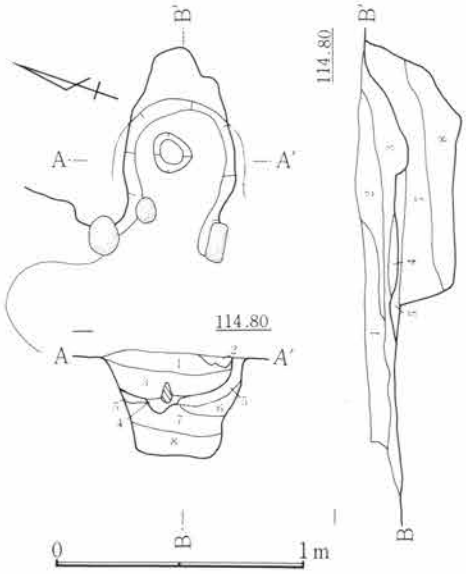
D区の西側中央部に位置し、62・63D25～27の範囲にある。住居跡の西半はD97号住居跡と重複しているが、これより新しい時期の所産である。また南半は試掘溝により上位面は破壊を受けている。平面形は南北方向に僅かに長い方形を呈する。南北長３m・東西長2.65m・壁高約15cmを測る。竈は東壁のやや南に付設され、主軸方位はN－76°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなすが、西半はD97号住居跡との重複のためかやや不安定である。



D85号住居跡
1　暗褐色土　少量の炭化粒混じる。
2　暗褐色土　多量の炭化粒混じる。

D97号住居跡
3　暗褐色土　Loam 塊・炭化粒含み粘性（D85号の床土か）。
4　暗褐色土　焼土粒・炭化粒含む。
5　暗褐色土　やや粘性あり。
6　灰層（竈）。

Fig. 118　D85・97号住居跡



D85号住居跡竈
1　黒褐色土　焼土粒・炭化粒少量含む。
2　黒褐色土　焼土粒・炭化粒を多量に含む。
3　焼土粒層。
4　灰層。
5　焼土層（火床・壁）。
6　焼土粒層（掘形）。
7　黒褐色土。
8　暗褐色土　焼土小塊・炭化粒・灰を含む。

Fig. 119　D85号住居跡竈

竈は東壁を楕円形に掘り込み、先端部に煙道を意図してか段を作ってさらに小さく突出させる。焚口部は袖材として左右に角礫と凝灰岩質加工材を埋設する。燃焼部中央には支脚を埋設したと思われる小穴が穿たれ、支脚破損片が残る。また側壁の一部に川原石が用いられている。火床には薄い硬質赤化面が形成され、掘形には厚く黒褐色土と最下層に焼土塊・炭化粒の混合土が充填されていた。両袖石間内法35cm・燃焼部奥行き60cm。先端部は段をなした後、緩い傾斜で20cm程突出する。

出土遺物は破片が多く散在的である。須恵器杯・椀のほか灰釉陶器・板状鉄製品などがある。

Ｄ97号住居跡（Fig. 118・122、PL. 13・50）

東半がＤ85号住居跡と重複しており、これより旧い時期の所産である。やや掘形が深く、重複部分の壁線や竈の存在も明らかになった。62～64Ｄ25～27の範囲にある。平面形は南北方向にやや長く方形を呈する。南北長3.1m・東西長2.5m・壁高25cmを測る。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－86°－Ｅを示す。床面は緩く起伏するが踏み締まりは比較的良好である。

竈は東壁を楕円形に掘り込むが、上部はＤ85号住居跡の構築によってほとんど破壊され、火床には薄い灰層と硬質赤化面が確認できたにとどまる。開口部幅70cm・奥行き60cmを測る。貯蔵穴は南東部に検出され、径40cm・深さ20cm程度の擂鉢状を呈する。北西から西壁下には集中的に小穴が見られるが、さほど規則性は感じられない。

出土遺物は少数で須恵器椀がある。

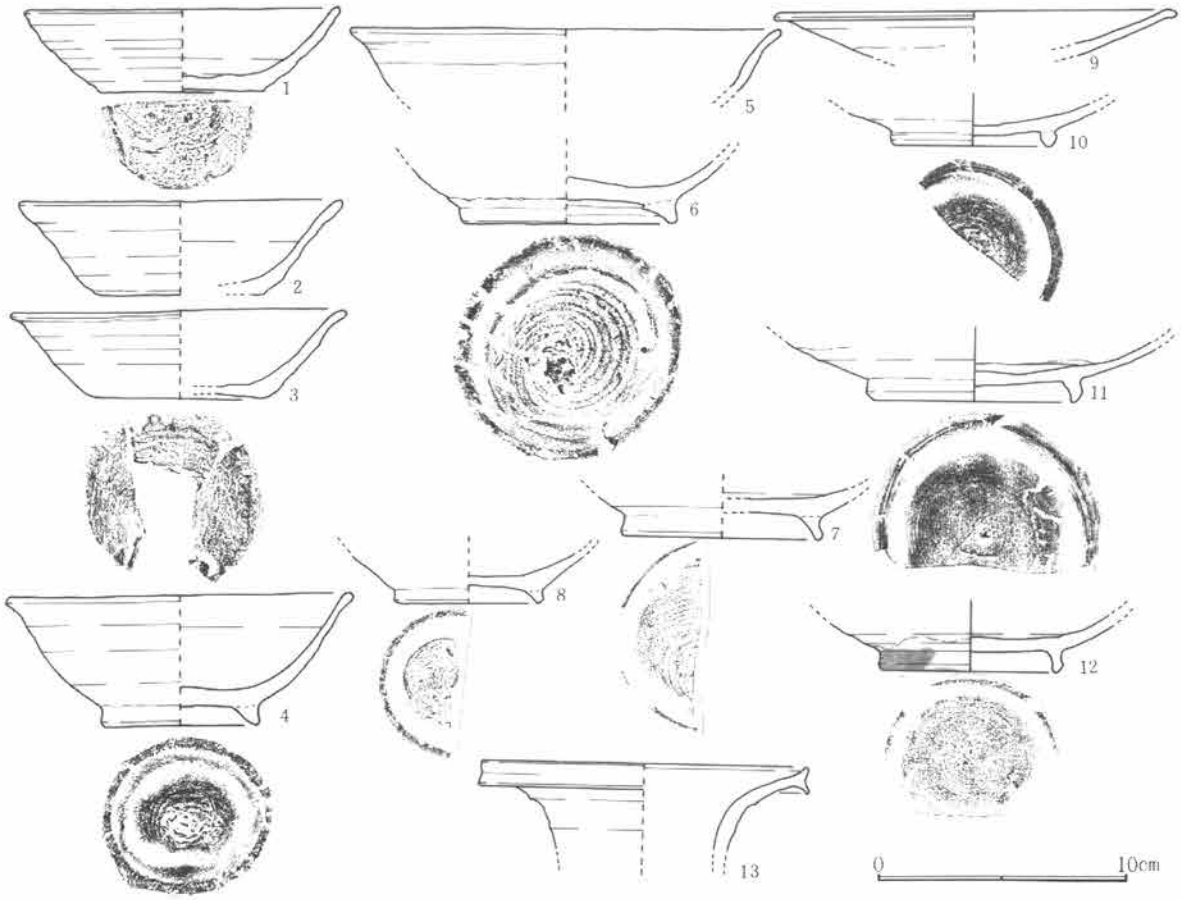


Fig. 120　Ｄ85号住居跡出土遺物（１）

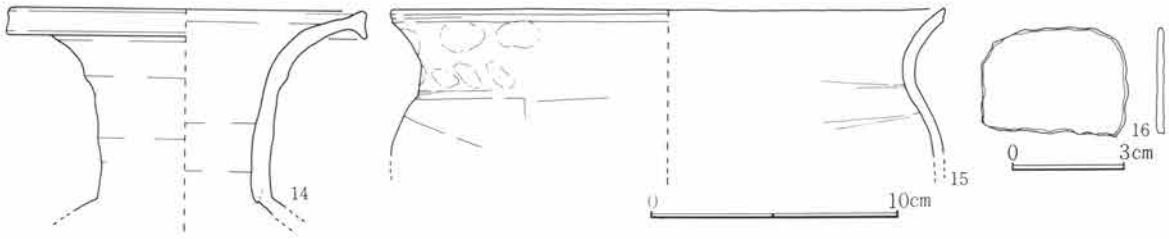


Fig. 121　D85号住居跡出土遺物（２）

D85号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
120－1 49－1	須恵器 杯	⅓	12.4×6.4 ×3.3	床直・ 0～＋6	腰部に僅かなくびれをなし、体部丸味をもつ。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②青灰　③粗小石混
120－2 49－2	須恵器 杯	⅓	12.8×6.6 ×3.8	床直・ ＋3	腰部僅かに張り、体部外反気味に開く。轆轤整形。	①良好　②灰白　③粗小石混
120－3 49－3	須恵器 杯	⅓	13.2×6.8 ×3.5	埋土・ ＋5～8	体部下半は直線的。上位は緩く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰白　③密
120－4 49－4	須恵器 椀	⅔	13.8×6.2 ×5.2	床直・ ＋3	腰から体部丸味強く、上位は緩く外反して開く。口唇部断面矩形気味。付高台断面丸くハの字状。轆轤整形回転糸切	①良好　②灰白　③やや粗
120－5 49－5	須恵器 杯 or 椀	口縁部 ⅓	17.0×－ ×(2.5)	埋土	体部上位丸く張り、口縁部外反して開く。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
120－6 49－6	須恵器 椀	底部	－×8.6 ×(2.5)	床直・ ＋1	腰部に丸味をもつか。付高台幅広で作りやや雑。轆轤整形。右回転糸切り。やや大型の椀か。	①良好　②灰白　③やや粗
120－7 49－7	須恵器 皿	底部 ½	－×8.0 ×(2.0)	埋土	付高台端部丸くハの字状に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
120－8 49－8	須恵器 椀	底部 ½	－×6.0 ×(2.1)	埋土	腰部張りなく直線的、付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟　②淡橙　③密
120－9 49－9	灰釉陶器 皿	口縁部 小片	15.8×－ ×(1.8)	床直・ －8	体部直線的で大きく開き、口唇部丸まって強く外屈。外面刷毛塗り施釉。内面釉飛び。光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰白　③緻密
120－10 49－10	灰釉陶器 皿	口縁部 欠損	－×6.2 ×(1.7)	床直・ ＋5	高台やや低く断面丸い。内面全面施釉。外面腰部上位まで施釉。	①良好　②灰　③やや粗
120－11 49－11	灰釉陶器 皿	口縁部 欠損	－×8.0 ×(2.4)	床直・ ＋3	大型になるか。高台外稜丸味をもつ三ケ月高台。腰部回転篦削り。、底部篦調整。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号期	①良好　②灰　③緻密
120－12 49－12	灰釉陶器 椀	底部 ½	－×7.2 ×(2.3)	床直	腰部に丸味。高台外稜あり内側内湾して立つ。底部回篦調整後周辺撫で。内外面刷毛塗り施釉。見込部一筆施釉。底部内外面に油煙状付着物。黒笹90号窯式期？猿投産か	①良好　②灰　③やや密
120－13 49－13	須恵器 瓶	口頸部 破片	13.0×－ ×(3.0)	埋土	頸部上半は強く外反し水平に近く開く。口縁帯弱いＶ字状に折れ上下端尖がる。轆轤整形。	①良好　②オリーブ灰　③やや粗
121－14 49－14	須恵器 瓶	口頸部 小片	14.2×－ ×(7.5)	床直	頸部直立し上半で強く外反して開く。口縁帯上下端尖がる。	①良好　②灰　③密
121－15 49－15	土師器 甕	口縁部 小片 ⅓	22.0×－ ×(6.0)	埋土	肩部やや丸く張る。口縁部外反して開く。口唇部外面に凹線巡り、上端部細まる。口縁部指頭痕と横撫で。肩篦削り胴部との接合は中込め。	①やや軟　②赤橙　③やや粗

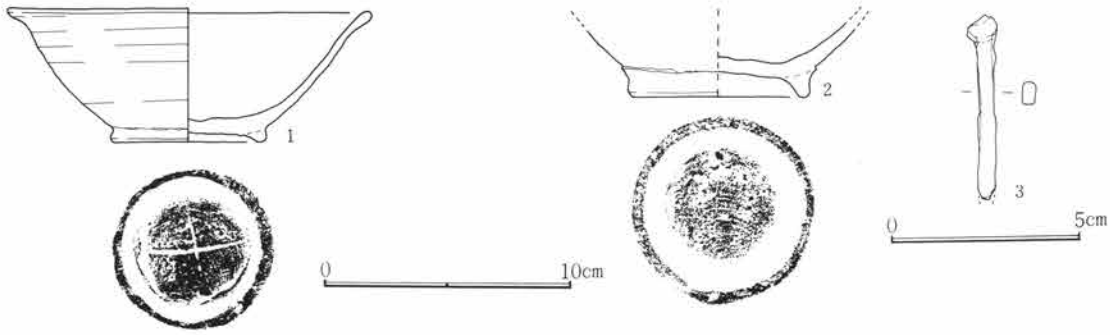
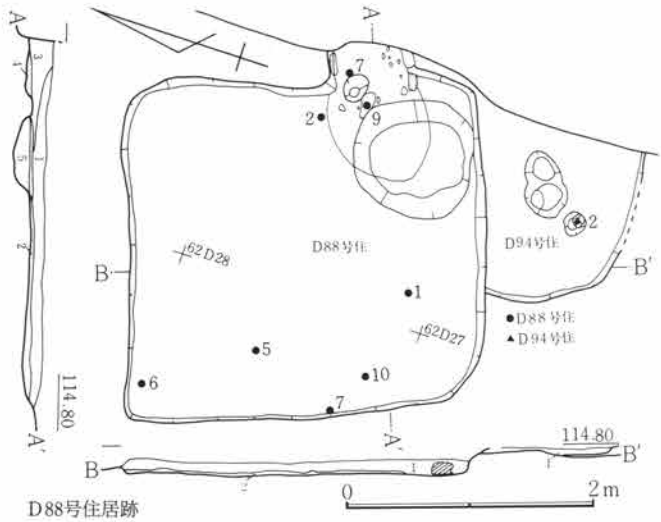


Fig. 122　D97号住居跡出土遺物

Ｄ97号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
122－1 50－1	須恵器 椀	¾	14.5×6.2 ×5	埋土	腰から体部に丸味をもち、口唇部は丸く緩く外反する。付高台、やや低く断面丸い。底部に×篦描き。轆轤整形。	①酸化気味良好 ②灰褐 ③やや密
122－2 50－2	須恵器 椀	底部	－×－7.0 ×(2.7)	貯蔵穴・＋1	付高台幅広で断面丸い。轆轤整形。	①良好 ②褐灰 ③やや粗
122－3 50－3	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長・幅・厚 4.5×0.3×0.6	埋土	頂部折頭式角釘。	

Ｄ88号住居跡（Fig. 123・125、PL. 13・50）



D88号住居跡
1　暗褐色土　C軽石含む。
2　暗褐色土　炭化粒含み粘性あり。
3　暗褐色土　焼土粒多量に含み締まりなし（竈埋土）。
4　灰層（竈）。
5　焼土層（火床）。

D94号住居跡
1　暗褐色土　C軽石・焼土粒含み締まりなし。

Fig. 123　D88・94号住居跡

Ｄ区の西部に位置し、61～62Ｄ26～28の範囲にある。南でＤ94号住居跡と、北でＤ99号・Ｄ100号住居跡と重複しており、Ｄ94号・Ｄ100号住居跡より新しい時期の所産である。但しＤ99号住居跡との新旧関係は不明である。平面形は南北軸が僅かに長い方形を呈するが、四隅の壁線は丸い。南北長2.85m・東西長2.7m・壁高10cmを測る。竈は東壁の南に偏って付設されるが、先端部は試掘調査時の試掘溝によって消失している。主軸方位はN－73°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。

竈は先端部が試掘溝によって消失しており、全容は不明である。右袖部には凝灰岩質の加工材が埋設される。焼成部は火床に硬質赤化面が形成され、全体に薄い灰層が存在していた。開口部幅約65cmを測る。南東隅部には径１m・深さ20cmの円形土坑を検出したが、その範囲は竈前まで大きく及んでいる。規模・位置から、貯蔵穴とは考えられず床下土坑に類する可能性もある。貼床の有無は確認できなかったが、平面的には、竈内から流出した灰層が覆っていた。

出土遺物は小破片が多く散在的な状況である。須恵器椀・羽釜のほか灰釉陶器片が多く、刀子の出土もある。

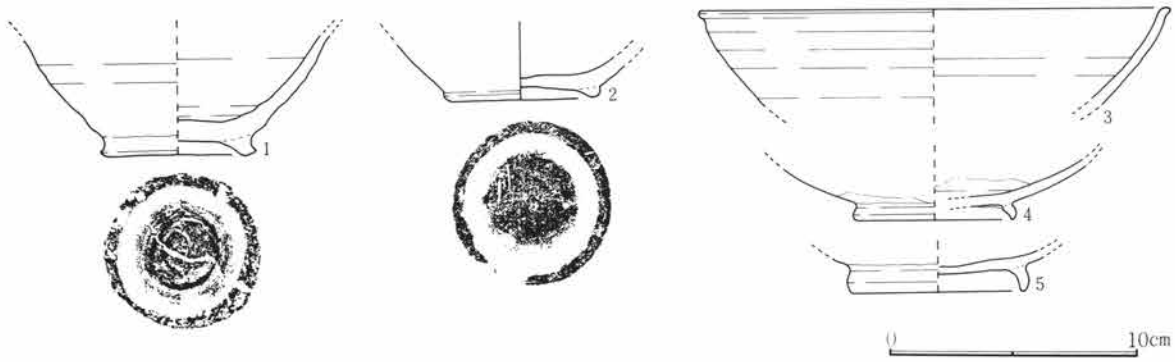


Fig. 124　D88号住居跡出土遺物（１）

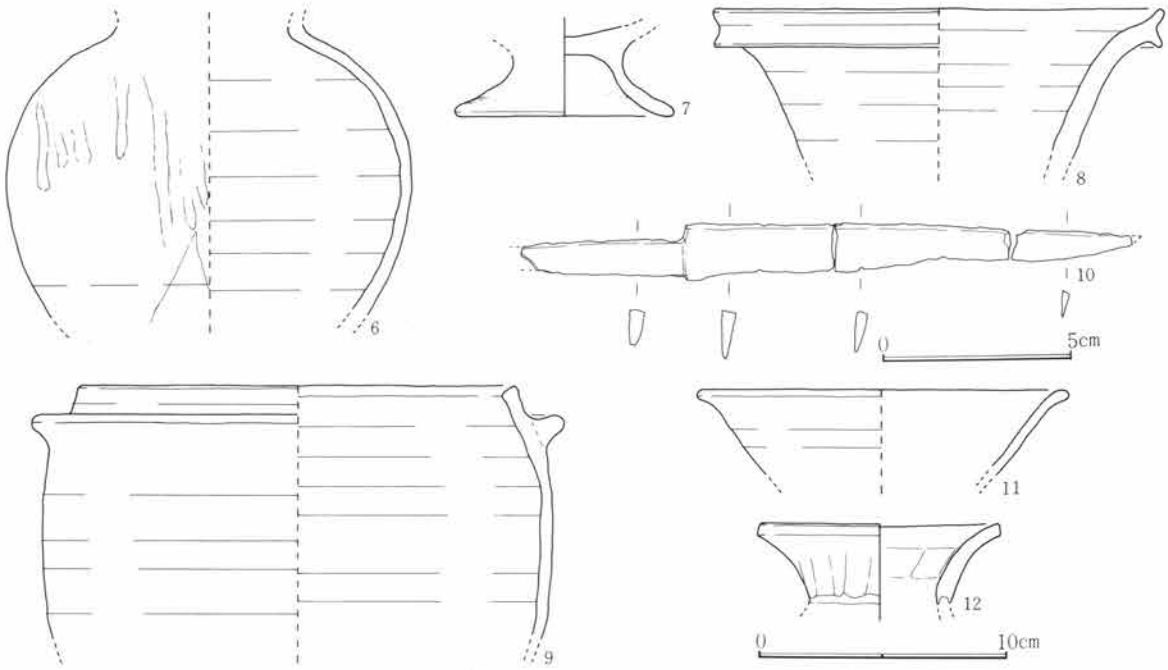


Fig. 125　D88号（６～10）・94号（11・12）住居跡出土遺物（２）

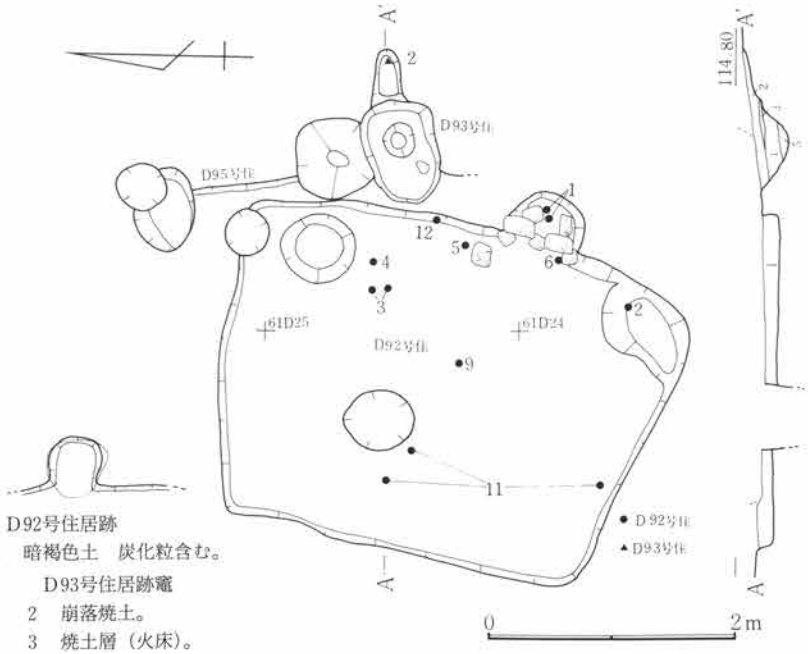
D88号（１～10）・94号（11・12）住居跡出土遺物観察表

Fig. № PL. №	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
124－1 50－1	須恵器 椀	底部～ 体部	－×6.2 ×(4.8)	床直・ ＋4	腰部に張りなく、体部直線的に立ちやや深いか。付高台。轆轤整形。回転糸切り？内面黒味強く燻し気味。	①酸化気味良好　②褐灰　③やや粗
124－2 50－2	須恵器 椀	底部	－×6.2 ×(2.3)	床直・ －2.5	腰部張りなし。付高台低く断面丸い。轆轤整形。底部箆調整。	①酸化軟　②橙　③密
124－3 50－3	灰釉陶器 椀	口縁部 小片	18.8×－ ×(4.8)	埋土	体部やや丸味をもつ。口唇部断面丸味をもち強く外屈。内外面刷毛塗り施釉？腰部回転箆調整。光ケ丘１号窯式期	①良好　②灰　③密
124－4 50－4	灰釉陶器 皿	底部⅓	－×6.5 ×(2.4)	埋土	高台外稜丸く、内湾して立つ三ケ月高台。底部回転箆調整内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
124－5 50－4	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.2 ×(1.6)	床直・ ＋4	高台やや高く外稜丸く内湾して立つ。内面全面施釉。底部回転箆調整。	①良好　②灰白　③密
125－6 50－6	灰釉陶器 瓶	胴部⅓	－×－ ×(11.6)	床直・ ＋4	胴部丸く張り球形を呈す。胴下半は回転箆削り。	①良好　②灰白　③やや粗
125－7 50－7	土師器 台付甕	台部	－×8.7 ×(3.6)	床直	台部強く外反して開く。内外面横撫で調整。内外面吸炭部分多い。	①良好　②灰褐　③やや粗
125－8 50－8	須恵器 瓶	口頸部 ¼	18.0×－ ×(6.0)	埋土	頸部上方は強く外反して開き、端部は下方に強く外屈し口縁帯下半となる。口唇部接合。口縁帯断面くの字。轆轤。	①酸化気味軟　②淡黄橙　③やや粗
125－9 50－9	羽釜	口縁 ～胴部	17.2×－ ×(10.1)	床直	胴部やや脹らみ、口縁部短く内湾気味に内傾。鍔部幅広で断面丸くやや上方へ強く突出。回転調整。	①酸化気味良好　②橙～灰褐　③やや粗
125－10 50－10	鉄製品 刀子	茎端部 欠損	長(16.5)	床直	刃部先端の減り著しい。刃部長12.2cm・幅1.5cm・棟厚0.4cm、茎部長(4.3)cm・幅0.9cm・厚0.4cm。	
125－11 50－11	須恵器 椀	口縁 ～胴部 ¼	14.8×－ ×(3.4)	埋土	体部やや丸味をもつ。口唇部外反して開く。轆轤整形。	①酸化気味良好　②明褐灰　③粗
125－12 50－12	須恵器 瓶	口頸部	9.5×－ ×(3.3)	埋土	口縁部外反して開き、口唇部矩形。外面強い箆撫で。胴部との接合部は凹状をなす女型。	①酸化良好　②淡橙　③やや密

D94号住居跡（Fig. 123・125、PL. 13・50）

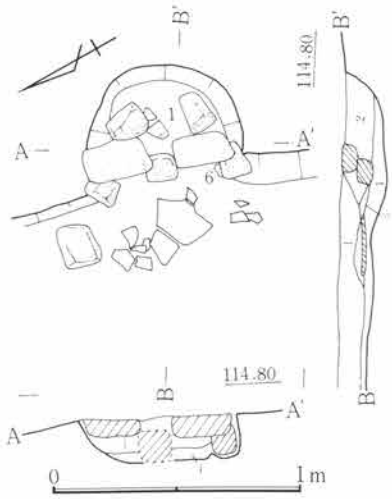
D88号住居跡の南側に位置し、61D26・27の範囲にある。東部のほとんどは試掘調査時の試掘溝によって消失して遺存部分は住居跡南西部のごく狭小な範囲で、D88号住居跡より旧い時期の所産である。検出規模は南壁より北へ1.3m・西壁より東へ1.6mである。壁高は５cm程度である。

出土遺物は少なく、床面より須恵器瓶の小片がある。



D92号住居跡
1　暗褐色土　炭化粒含む。
D93号住居跡竈
2　崩落焼土。
3　焼土層（火床）。
4　暗褐色土　焼土粒含む（掘形）。
5　暗褐色土　焼土粒を多量に含む（掘形）。

Fig. 126　D92・93・95号住居跡



D92号住居跡竈
1　黒褐色土　炭化粒を多量に含む。
2　崩落焼土　炭化粒を多量に含む。
3　黄灰色土　粘性強い。
4　暗褐色土　粘性あり。

Fig. 127　D92号住居跡竈

D92号住居跡（Fig. 126～128、PL. 13・50・51）

D区の西に位置し、60・61D23～25の範囲にある。当跡の周辺には遺構の全容を知ることのできない、D93号・D95号住居跡などの竈跡や焼土が集中して検出される個所があり、数軒の竪穴住居跡と重複しているものと考えられる。しかし重複による新旧関係を決定することはできない。また上面にはB軽石粒を埋土とする浅い方形の落ち込みが認められている。

平面形は南北に長軸をもつ方形であるが、西壁線がやや短く台形状を呈する。南北長3.7m・東西長約2.7m・壁高13cmを測る。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はN－104°－Eを示す。床面は平坦をなし、踏み締まりは弱いが安定している。住居内には数個の円形土坑が検出されているが、土坑埋土にはB軽石粒の混入があり、いずれも中世以降に属している。

竈は東壁を半円形に掘り込み構築される。東壁線上には凝灰岩質の加工材が埋設され、両袖に刺し渡して同質材板状天井部が架してある。火床には硬質赤化面は残されていないが、浅い掘形は粘性のある暗褐色土を埋土としている。袖部内法45cm・燃焼部奥行き50cmを測る。

出土遺物は比較的多く、須恵器椀・灰釉陶器などの他、須恵器大型甕片・鉄製刀子がある。

D93号・D95号住居跡（Fig. 126・129、PL. 13・51）

D93号住居跡は竈跡のみの検出である。住居の壁線はほとんど確認されていないが、位置的にD92号住居跡の東側に接してあり重複部分が多いと考えられる。竈は東壁の付設が推定され、楕円形に掘られた燃焼部の先端に長さ40cm程度の煙道部が延びるようである。燃焼部は崩落と考えられる焼土塊で埋まり、火床には薄い硬質赤化面が形成されている。また掘形の埋土は焼土粒を混える暗褐色土である。燃焼部径60×80cmを測る。

出土遺物は、灰釉陶器・羽釜などがある。

D95号住居跡はD92号住居跡の北東部に竈燃焼部の痕跡が検出された。径60×50cmの浅い窪みの範囲に焼

土粒層の堆積のみである。

D92号住居跡の北西部に焼土粒層の分布が認められているが、削平が著しく竈掘形状の窪みが検出されたのみで遺構としての性格その他は不明である。

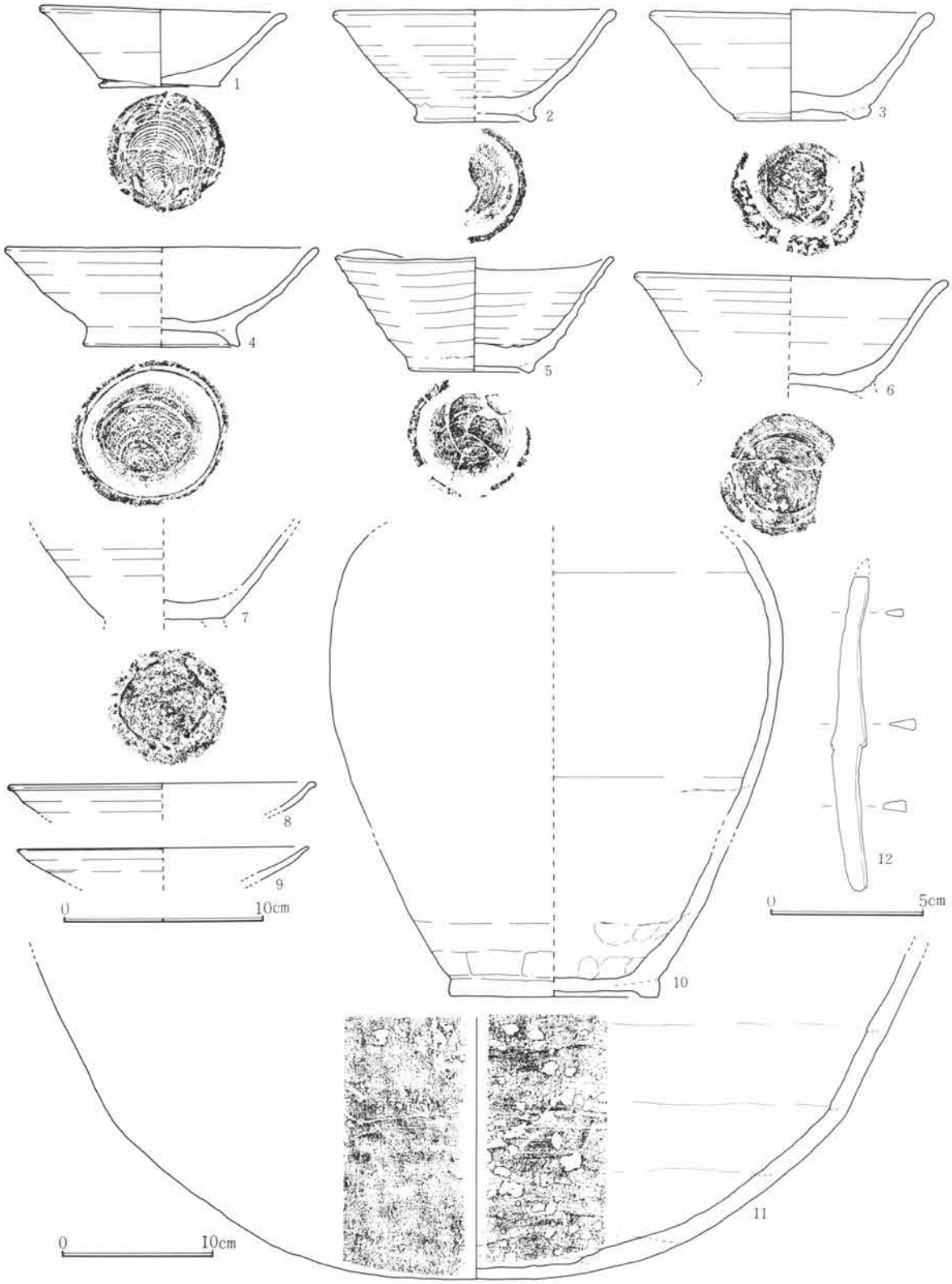


Fig. 128　D92号住居跡出土遺物

D92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
128－1 50－1	須恵器 杯	完形	12.2×6.0 ×4.1	竈	腰部張りなく、体部直線的に外傾。口唇部丸く小さく外反見込部指なで強い。轆轤整形。右回転糸切り。二次被熱。	①酸化気味良好　②鈍い赤橙　③やや密
128－2 50－2	須恵器 椀	½	14.0×6.0 ×5.5	貯蔵穴	底径小さく腰部張りなし。体部直線的。口唇部丸く肥厚し小さく外傾。付高台。轆轤整形。回転糸切り。二次被熱。	①良好　②灰白　③やや粗
128－3 50－3	須恵器 椀	完形	13.9×5.7 ×5.5	床直	腰部張りなく体部直線的。口唇部丸く肥厚し小さく外傾。付高台低く幅広作り雑。轆轤整形回転糸切り。全体に肥厚	①酸化気味良好　②褐灰～鈍橙　③粗
128－4 50－4	須恵器 椀	¾	15.4×7.7 ×4.9	床直	体部浅く丸味をもって開く。付高台畳付けに弱い段あり。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②褐灰～灰白　③粗
128－5 50－5	須恵器 椀	ほぼ完形	13.8×6.2 ×5.6	埋土	体部直線的に立つ。底部著しく肥厚。付高台低い。轆轤整形。底部回転撫で。内外面轆轤目強く器形の歪み著しい。	①良好　②灰　③やや粗
128－6 50－6	須恵器 椀	⅓	15.4×－ ×(5.7)	竈・埋土	腰部に僅かに丸く張り、体部上半は外反して開く。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟　②灰白～浅橙　③密
128－7 50－7	須恵器 椀	体部小片	－×－ ×(4.1)	埋土	腰部張りなく体部直線的、付高台剝落。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味軟　②鈍い橙　③やや粗
128－8 51－8	灰釉陶器 皿	口縁部小片	15.2×－ ×(1.4)	埋土	体部上半に丸味をもち、口唇部は丸く小さく外屈。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
128－9 51－9	灰釉陶器 皿	口縁部¼	14.4×－ ×(1.7)	床直	体部直線的。口縁部僅かに外反。口唇部細まる。内面施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
128－10 51－10	須恵器 甕	口縁部欠損	－×14.0 ×(30.2)	竈	胴部下半直線的に立ち、上半部丸く張る。腰部に弱い横篦削り。内面下位は強い撫でつけ。付高台低く矩形を呈す。	①良好　②褐灰　③やや密
128－11 51－11	須恵器 甕	底部	－×－×(22.2) 最大幅58.2	床直	丸底。内外面ともあて具・叩き締具の痕跡なし。見込部に打撃痕著しい。底部篦削り。内面横指撫で。	①良好　②灰　③やや粗
128－12 51－12	鉄製品 刀子	先端部欠損	長(10.5)	東壁際	刃部から茎部にかけて緩く反る。刃長5.5cm・幅0.6～1.0cm・棟厚0.3～0.4cm、茎長５cm・幅0.7cm・厚0.4cm。	

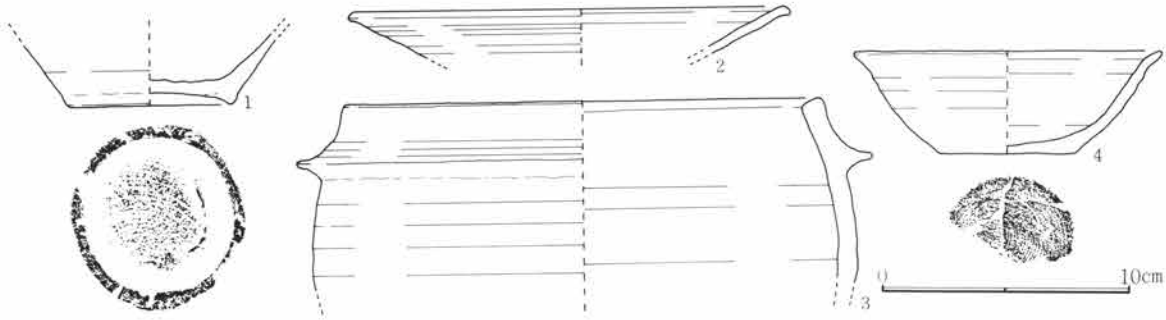


Fig. 129　D93号（１～３）・95号（４）住居跡出土遺物

D93号（１～３）・95号（４）住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
129－1 51－1	須恵器 椀	底部	－×6.7 ×(2.8)	埋土	腰部にくびれなく高台より体部直線的に立つ。付高台低く断面略三角形で雑。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟　②灰白　③やや密
129－2 51－2	灰釉陶器 皿	口縁部小片	17.4×－ ×(1.9)	埋土	体部直線的で大きく開き、口唇部強く外屈。内外面施釉。口唇部外屈形態は光ケ丘１号窯式期か。	①良好　②灰白　③緻密
129－3 51－3	羽釜	口縁～胴部	19.0×－× (7.3)鍔径22.8	埋土	胴部やや丸味をもって張る。口縁部内湾気味に内傾。鍔部強く突出するが端部細まる。回転撫で調整。	①環元やや軟　②灰　③やや密
129－4 51－4	須恵器 杯	⅓	12.2×5.5 ×4.1	貯蔵穴	底径小さく、体部やや内湾し丸味をもつ。口唇部外傾して開く。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味　②鈍い橙　③やや粗細砂混

D98号住居跡（Fig. 130～132、PL. 13・51）

D区西側に位置し、64・65D26～27の範囲にある。D101号・102号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産と考えられる。住居跡の北半は削平が深くおよび、北壁を中心に東・西壁線の一部は消失している。平面形は方形を呈すると考えられ、東西約2.5m・南北は南壁線より約2.4mの範囲まで床面の確認ができた。

壁高は僅か4～5cmである。竈は東壁に付設され、主軸方位はおよそN－78°－Eを示す。南半に残る床面は緩い起伏をなし、踏み締まりは弱い。

竈は東壁を小さく半円形に掘り込んで構築されるが袖材などは遺存していない。燃焼部側壁は基盤Loam層がやや焼土化しているが、火床部には硬質赤化面は形成されていない。開口部幅45cm・奥行き50cmを測る。南西隅の床面には焼土塊の分布が認められたが、D101号住居跡に関連する可能性も考えられる。

出土遺物は須恵器椀・灰釉陶器・土師器甕のほか砥石類がある。

D101号住居跡（Fig. 130・133、PL. 13・52）

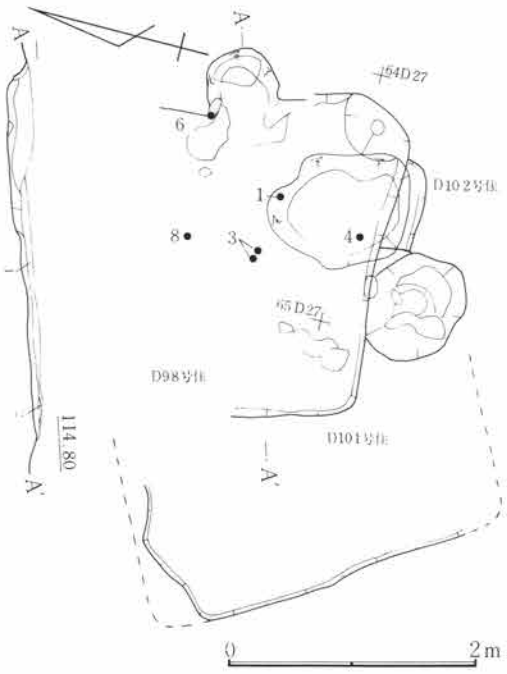
東側はD98号住居跡とD102号住居跡の双方と重複し、前者より旧く、後者より新しい時期の所産である。64～66D26・27の範囲にあると考えられるが、全体に削平が深く検出時にはかろうじて南壁床面の確認にとどまった。平面形は方形が想定され、南北2.9m・東西2.4m程度の規模になろう。竈は認められていないがD98号住居跡の床下に木炭粒を含む不整楕円形の落ち込みが検出され、位置的に当跡竈の掘形の可能性が強い。これが竈の痕跡とすれば東壁に付設され、主軸方位はN－62°－Eを示す。

出土遺物には須恵器杯・椀のほか、灰釉陶器小片がある。

D102号住居跡（Fig. 130・134、PL. 13・52）

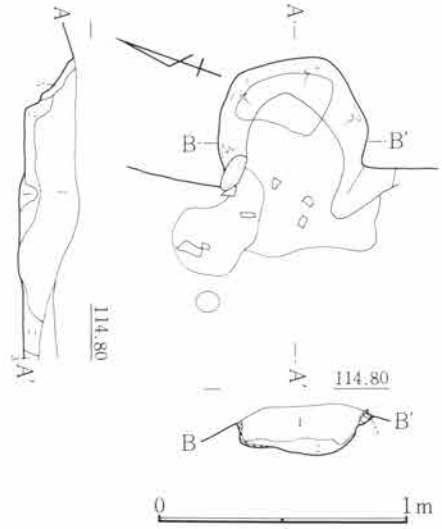
当跡はD98号住居跡の南壁沿いにあり、ごく狭小な部分を検出したにすぎない。D98号・101号住居跡と重複しているが両者より旧い時期の所産である。形状・規模などは不明であり、遺存は南東隅の壁線である。

出土遺物は須恵器椀・灰釉陶器など少量が検出されているが、当跡に伴うかは不明である。



D98・101・102号住居跡
1　褐色土V～IX　C軽石を含む。竈寄りには焼土あり。
2　褐色土V～VIII　床か？。

Fig. 130　D98・101・102号住居跡



D98号住居跡竈
1　茶褐色土V～IX　焼土・カーボン焼土・白色灰分を含む。
2　褐色土　1に比べ灰分多く、よく締まる。1に似る。
3　褐色土　V～VIII　2に似るが貼床か？。
4　褐色土　2に比べVIIIが主体。
5　赤褐色土　ベースのローム漸移層の焼土部分。

Fig. 131　D98号住居跡竈

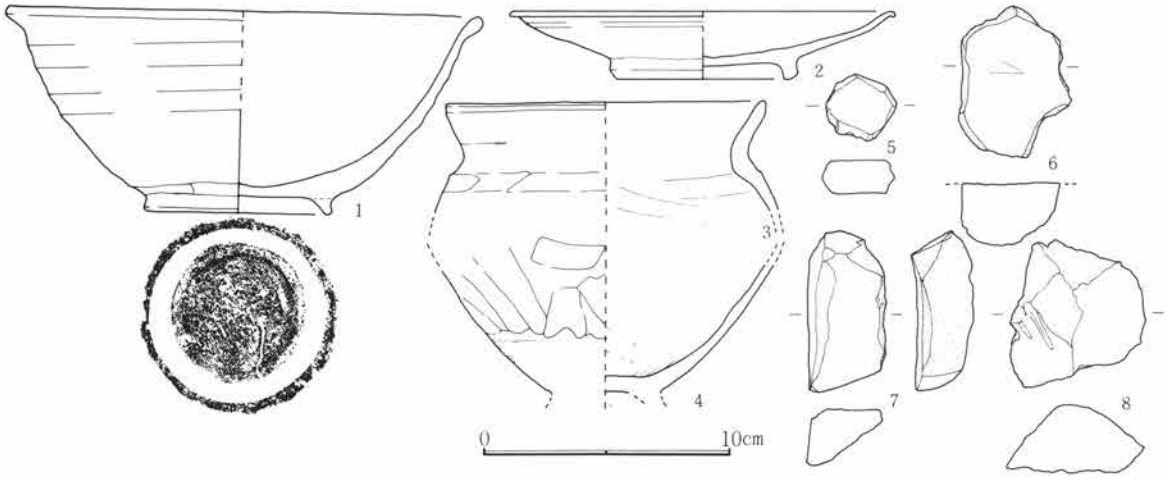


Fig. 132　D98号住居跡出土遺物

D98号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
132－1 51－1	須恵器 椀	⅓	19×7.4 ×8	床下土坑	体部丸味強く深い。口唇部丸く肥厚し外傾する。付高台低く径は小さい。轆轤整形。回転糸切り。内外面燻し焼成か。	①酸化気味軟　②黒褐　③やや粗
132－2 51－2	灰釉陶器 皿	¼	15.3×6.6×2.7	埋土	体部上半で僅かに張る。口唇部鋭く尖がり強く外屈する。高台外稜の丸い略三ケ月。施釉方不明。光ケ丘1号窯式期	①良好　②灰白　③緻密
132－3 51－3	土師器 小型甕	口縁部 ⅓	12.8×－ ×(4.3)	床直	口縁部内湾気味に外反。口唇部外面に弱い凹線巡りやや細まる。肩部横箆削り。内面横箆撫で。口縁部に接合痕。	①良好　②赤褐　③やや密
132－4 51－4	土師器 台付甕	胴部下位	－×(－) ×(5.5)	床下土坑	胴部下位は縦箆削り。腰部横撫で。内面箆撫で。底部は台部上端面をなし胴部を充塡する。外面に煤状付着物あり。	①良好　②灰橙　③やや粗
132－5 51－5	須恵器 メンコ状		長・幅・厚 1.25×2.8×2.6	埋土	須恵器甕片を転用。縁辺を割欠き円形状に整形。	①良好　②灰　③やや密
132－6 51－6	石製品 砥石		長・幅・厚 2.4×6.0×4.4	竈	使用痕1面残る。	流紋岩（砥沢？）
132－7 51－7	石製品 砥石		長・幅・厚 2.2×6.4×3.1	埋土	使用痕2面残る。	流紋岩(砥沢？)
132－8 51－8	石製品 砥石		長・幅・厚 2.7×5.3×6.0	埋土	2面使用。	角閃石安山岩

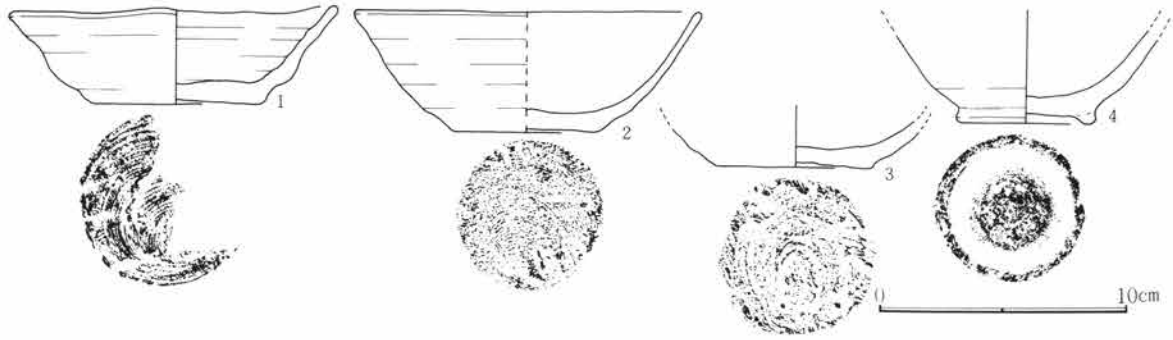


Fig. 133　D101号住居跡出土遺物

D101号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
133－1 52－1	須恵器 杯	⅔	13.1×6.7 ×3.6	埋土 －1～－3	腰部強くくびれ、体部直線的に開く。轆轤整形。右回転糸切り。底部著しく肥厚。	①良好　②青灰　③やや密
133－2 52－2	須恵器 杯	⅓	13.8×5.8 ×4.8	埋土・ －2	体部やや深目。腰部に弱いくびれ。体部内湾気味に開く。轆轤整形。右回転糸切り。体部薄く底部肥厚。	①良好　②灰　③やや粗

D101号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
133－3 52－3	須恵器 杯	底部	－×6.2 ×(1.5)	埋土・ -3～-5.5	腰部に僅かなくびれをなし、体部は丸味をおびるか。轆轤整形。右回転糸切り。底部肥厚。	①良好 ②灰 ③やや粗
133－4 52－4	須恵器 椀	底～体部⅓	－×5.6 ×(3.4)	埋土	体部丸味をもつ。付高台断面丸味をもち低い。轆轤整形。	①酸化気味軟 ②浅黄橙 ③やや粗

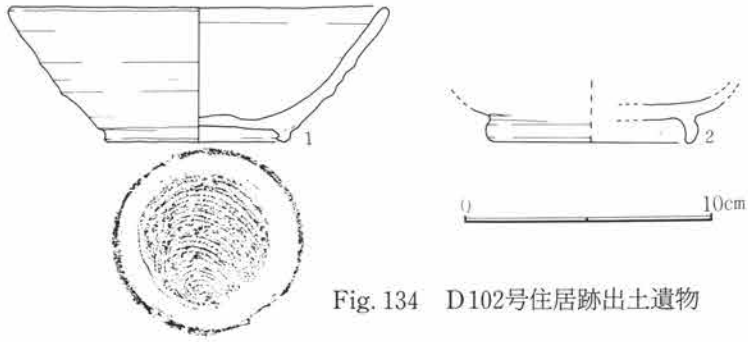
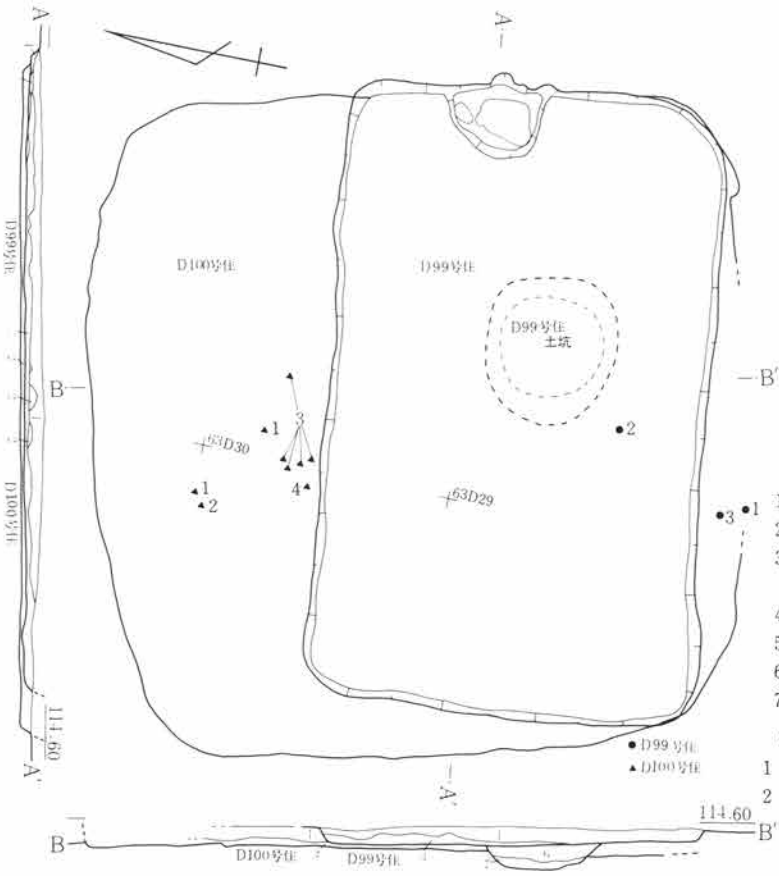


Fig. 134　D102号住居跡出土遺物

D102号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
134－1 52－1	須恵器 椀	⅔口縁欠損	15.2×7.3 ×5.3	埋土	体部直線的に開く。付高台低く断面矩形。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
134－2 52－2	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×8.3 ×(1.8)	埋土	高台やや高く内湾気味に立つ。	①やや軟 ②灰白 ③密



D99号住居跡（Fig. 135・137、PL. 14・52）

D区西側に位置し、61～63D 28・29の範囲にある。D88号・D100号住居跡と重複し、新旧関係はD100号より新しく、D88号住居跡との新旧は不明である。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが南側は削平が深く、南壁線は僅かに観察できる

D99号住居跡
1　黒褐色土　C軽石粒多量に含む。
2　黒褐色土　FA 塊含む。
3　黒褐色土　C軽石粒多量に含み粘性あり（土坑張床）。
4　黒褐色土　炭化粒含む。
5　焼土床。
6　暗褐色土　炭化粒少量含む。
7　褐色土　乳白色粘土含み粘性あり。

D100号住居跡
1　黒色土　FA 塊・C軽石粒含み粘性あり。
2　灰褐色土　粘性あり。

0　2m

Fig. 135　D99・100号住居跡

程度である。東西長5.3m・南北長3.1m・壁高約15cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈は東壁ほぼ中央に付設されたと考えられるが、壁近くに硬質な赤化焼土面の火床が残されているにすぎず、上部構造や規模など不明である。住居跡中央部に径1.2×1.05m・深さ18cmの円形土坑を検出したが、上面は当跡の床面が貼床状に踏み固められており、土坑内から出土する土器片も年代的な差は認められない。

出土遺物は細片が多く散在して検出されているが、須恵器椀・灰釉陶器・土師器甕などのほか鉄釘・土錘がある。

D100号住居跡（Fig. 135・136・138、PL. 14・52）

D99号住居跡と重複し、61～64D27～30の範囲にある。新旧関係はD99号住居跡より旧い時期の所産である。平面形は隅丸の方形を呈し、南北長5.7m・東西長5.3mを測り、南北方向に長軸をもっている。壁高は約20cmであるが、南壁は削平が深く痕跡程度の検出にとどまった。床面は緩い凹凸をなし、住居跡中央部は僅かに低くなるが、この部分の踏み締まりは良好である。大小の Pit が検出されているが、主柱穴と考えられるものは P_1～P_4 である。柱穴掘形規模は上端径40～30cm・深さ42～37cmを測る。断面形はいずれも漏斗状を呈し、床面よりおよそ⅔程度の深さで掘形径を15～10cmへと著しく減じており、なおかつ先細りする。上位面での柱痕は確認できていないが、柱穴断面形からは、柱材の下端が尖がっていた可能性もある。各柱間は、P_1～P_2 間2.65m・P_2～P_3 間2.55m・P_3～P_4 間2.8m・P_1～P_4 間2.6mを測る。炉はやや北東部に偏っ

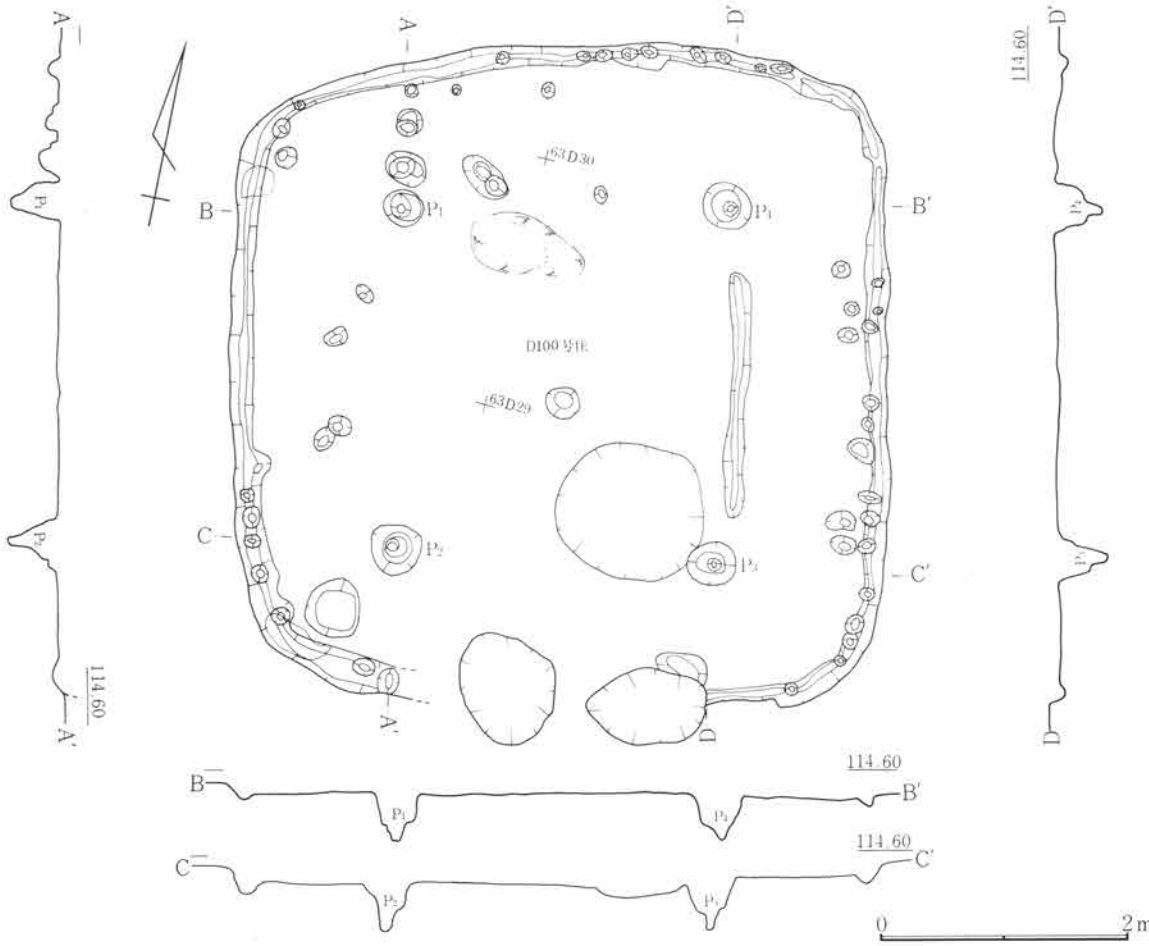


Fig. 136　D100号住居跡掘形

た位置にあり、P_1 と P_4 を結ぶ柱間線の内側、P_1 に近く設けられる。硬質赤化した火床は南北30cm・東西20cmの楕円形に形成され、火床外縁の南側に炭化粒の薄層が広がる。炉の掘形は南北95cm・東西45cmの浅い窪みとなっている。北西隅に40×45cm・深さ28cmの方形気味の落ち込みが検出されており、貯蔵穴の可能性がある。壁沿いには幅10cm前後の壁下溝が巡り、多数の小穴が検出されている。また P_3～P_4 間には幅15cm程度の浅い溝が延びる。性格は不明であるが、間切り的な施設であろうか。

出土遺物は小破片が散在して検出され、土師器大甕・鉄製鎌などがある。

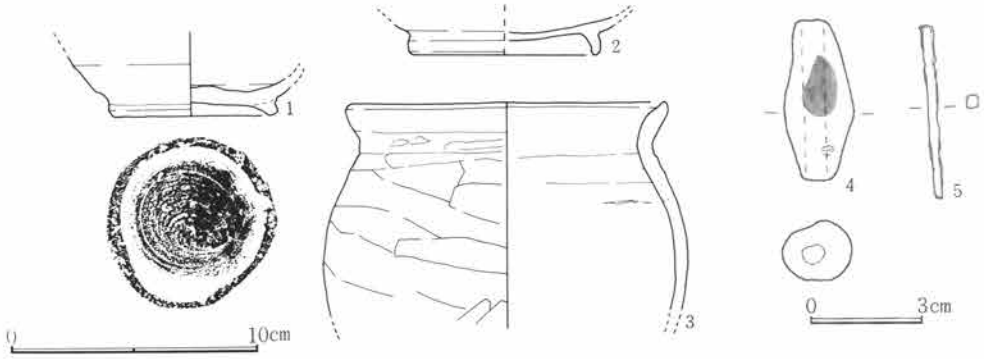


Fig. 137　D99号住居跡出土遺物

D99号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
137－1 52－1	須恵器 椀	底部	－×6.7 ×(2.4)	土坑内・ －1	付高台低く作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化軟　②鈍い橙 ③密
137－2 52－2	灰釉陶器 椀　？	底部	－×7.6 ×(1.5)	床直・ ＋4	高台外稜丸い三ケ月高台。底部回転後箆撫で調整。光ケ丘１号～大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
137－3 52－3	土師器 小型甕	口～胴 ½	12.8×－ ×(8.3)	住居外・ ＋2.5	胴丸く張り、口縁部短く内湾気味に開く。器肉厚目。口縁部横撫で。胴部上半横箆削り。内面横撫で。	①良好　②明赤褐③ やや粗
137－4 52－4	土製品 土錘	完形	長4.3　幅 1.8	埋土	手捏ね。縦方向に穿孔。吸炭。	①良好　②灰褐　③ 密
137－5 52－5	鉄製品 角釘	両端部 欠損	長4.5　幅 0.3	埋土	細身の角釘か。	

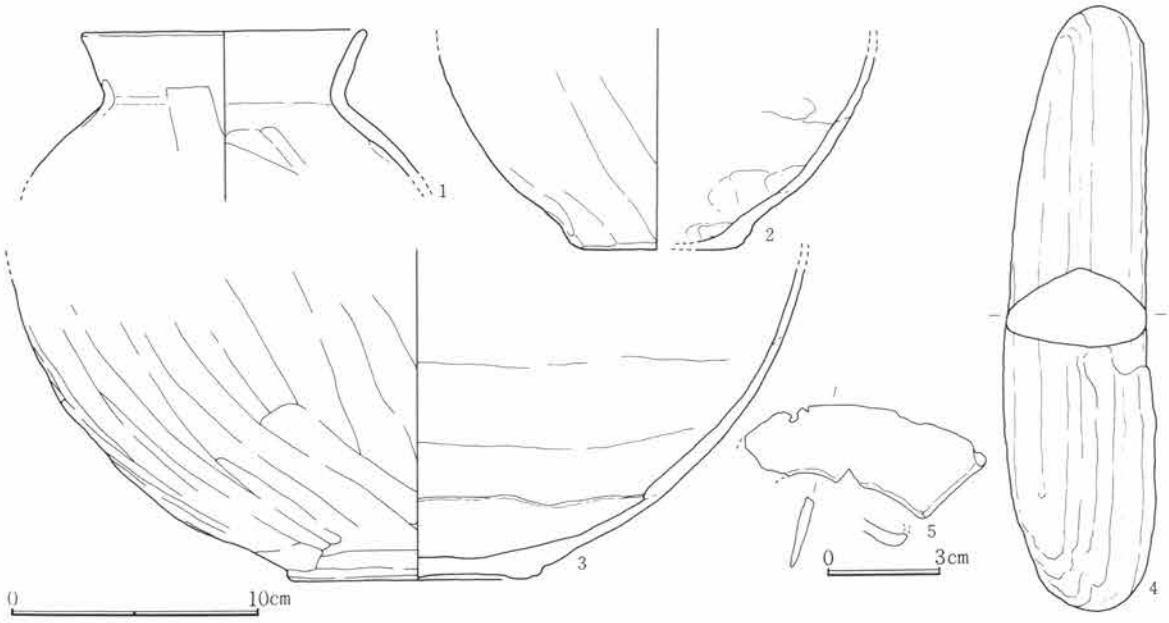


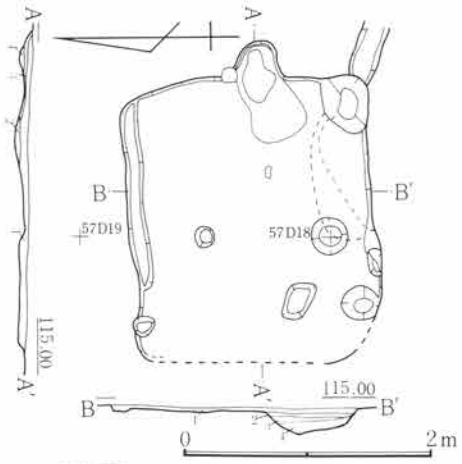
Fig. 138　D100号住居跡出土遺物

Ｄ100号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
138－1 52－1	土師器 甕	口縁部 ½	10.3×－ ×(5.7)	床直・ ＋６～8.5	胴部丸く張り球形を呈すか。口縁部くの字状に強く外傾。口縁部横撫で。胴部弱い縦篦削り。内面強い指撫で。２と同一個体か。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗砂粒多
138－2 52－2	土師器 甕	底部½	－×6.8 ×(7.7)	床直・ ＋45	腰部緩くくびれ胴部丸く張る球形を呈すか。胴部縦篦？削り。内面接合部に強い指頭撫で。１と同一個体？	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗砂粒多
138－3 52－3	土師器 大甕	胴部下半	－×10.0 ×(12.7)	床直・ +0.5～4.5	僅かに突出する平底から丸く強く張る球形の胴部。胴部外面縦篦削り、内面接合部分指撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗砂粒多
138－4 52－4	石		長・幅・厚 24.0×5.5×3.0	床直・ ＋６	使用痕・調整痕なく自然石。680ｇ	緑泥片岩
138－5 52－5	鉄製品 鎌		長・幅・厚 6.7×2.0×0.3		先端部欠損。茎部折れる。	

Ｄ126号住居跡（Fig. 139、PL. 14）

Ｄ区の中央部やや南寄りに位置し、56・57Ｄ17・18の範囲にある。周辺は削平が著しく一壁線がかろうじて残る程度で、とくに西壁は明瞭な立ち上がりも確認できなかった。平面形は東西に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、東西長約2.3m・南北長２ｍを測る。竈は東壁の僅かに南に寄って付設され、主軸方位はおよそＮ－86°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、安定しているが踏み締まりは弱い。南壁沿いの不整楕円形落ち込みの埋土最上層は堅く踏み締められており、当跡構築に関わるものと想定され、床下土坑であろう。



Ｄ126号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を多量に含む。
2　褐色土　Ｃ軽石粒少量含み粘性・締まりあり（貼床）。
3　焼土層（火床）。
4　灰層。

Fig. 139　Ｄ126号住居跡

竈は東壁を半楕円形に掘り込み、東壁線上の左袖部として埋設されている凝灰岩質袖材は基部のみを残し切り取られた状態で遺存する。火床は硬質赤化面を形成するが、火床下には掘形の痕跡はなく基盤層がそのまま被熱した褐色を呈している。竈開口部幅35cm・奥行き30cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、35×40cm・深さ７～８cmの緩い窪みをなす楕円形を呈す。壁下溝は北壁沿いのみに検出されている。

出土遺物は極めて少なく、須恵器細片を数点検出したのみである。

Ｄ127号住居跡（Fig. 140・142、PL. 14・52・53）

Ｄ区中央部やや南に位置し、52～54Ｄ17～19の範囲にある。Ｄ128号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。平面形は南北軸が僅かに長く略方形を呈するが、四隅の壁線は丸味をおび、とくに北東隅の壁線が大きく孤を描く。南北長3.5m・東西長3.4m・壁高15cmを測る。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はおよそＮ－85°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。

竈は東壁を小さく半円形に掘り込み、石などの構築材は残されていないが竈開口部の左右にはほぼ壁線上で袖材を埋設したと考えられる痕跡がある。竈内およびその前面の床には崩落焼土の小塊が広く分布している。火床には薄い焼土面が形成され、掘形は灰混りの粘性土で埋まっている。袖部内法約50cm・燃焼部奥行き45cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、不整楕円形の擂鉢状を呈する。径65×85cm・深さ25cmである。南壁沿いの一部を除き幅10～15cmの壁下溝が巡る。住居跡中央部と北壁近くに円形土坑が検出されているが、上

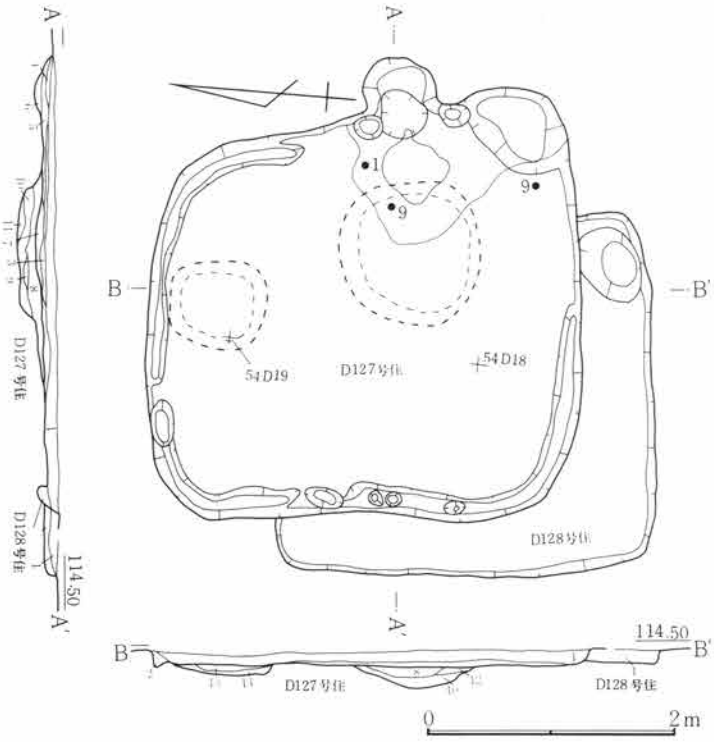


Fig. 140　D127・128号住居跡

面はいずれも貼床状の薄層が施され床下土坑と考えられる。中央部の土坑内より須恵器・土師器・灰釉陶器などの細片が出土している。

出土遺物は須恵器杯・椀・灰釉陶器などのほか鉄製刀子がある。

D127号住居跡
1　暗褐色土　C軽石粒含む。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　炭化粒含む。
（住居跡埋土）
4　焼土粒層。
5　灰層
6　暗褐色土　灰含み粘性あり。
（竈）
7　灰褐色土　C軽石粒含み堅く締る。貼床。
8　暗灰褐色土　C軽石粒含む。
9　炭化粒層。
10　暗灰褐色土　炭化粒含む
11　褐色土　粘性あり。
12　暗灰褐色土。
（床下土坑１。）
13　暗灰褐色土
14　褐色土　粘性あり。
（床下土坑２。）

D128号住居跡
1　暗褐色土　C軽石粒多量に含む。
2　暗褐色土　C軽石粒少量含み粘性あり。

D128号住居跡（Fig. 140・141・143、PL. 14・53）

53・54D17・18の範囲にある。D127号住居跡と重複し、これより旧い時期の所産である。検出部分は南壁から西壁線沿いにかけての挟小な範囲で、大部分は重複によって消失している。平面形は南北軸がやや長い方形を呈すると考えられ、南北長３m・東西長2.85m・壁高10cmを測る。竈はD127号住居跡の床面下から掘形の状態で検出されている。東壁の南に偏って付設され、主軸方位はおよそN－83°－Eを示す。貯蔵穴は南東隅にあり、径45×65cm・深さ15cmの楕円形擂鉢状を呈す。床面は南壁から西壁線沿いを除きほとんどD127号住居跡による削平を受け、掘形面として捉えられる。この掘形面の調査によれば、北壁線が想定される位置よりおよそ70cm南側に東西走する直線的な立ち上がりが存在した。新たな重複の可能性も考えられたが、東・西端は各々、東壁・西

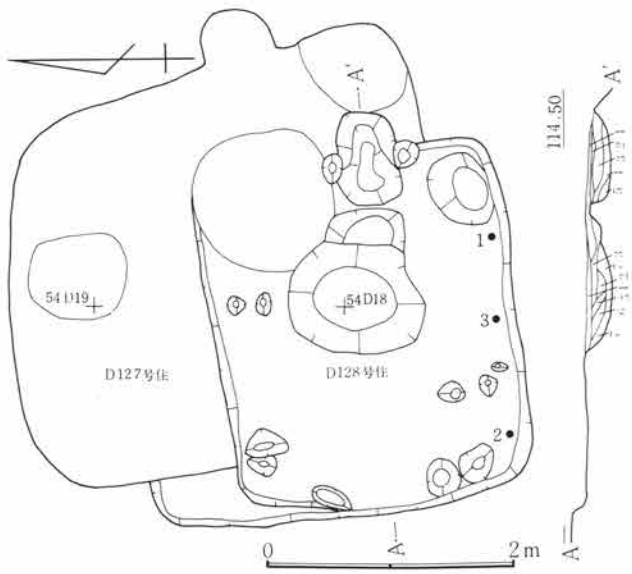


Fig. 141　D128号住居跡

D128号住居跡床下土坑
1　灰褐色土　堅く締る（張り床）。
2　焼土粒層。
3　灰褐色土　細C軽石粒含む。
4　暗褐色土。
5　暗褐色土　C軽石粒含む。
6　暗褐色土。
7　暗褐色土　黄褐色土粒含む。

D128号住居跡竈
1　灰層。
2　焼土粒層。
3　暗褐色土　焼土粒少量含む。
4　黄褐色土塊層
5　暗褐色土。
（掘形埋土。）

壁線へ整合するように繋がること、また、立ち上がりの走向はD128号住居跡の東西軸にほぼ一致していることなどから、建て替え、拡張を示すものであろう。東西は同規模、南北長は2.7mを測り、東西に長軸をもつ形態になる。竈は楕円形の掘形を有し、東壁線上の左右袖部に相当する位置には円形の小穴が穿たれており、構築材の埋設痕と考えられる。掘形上面には硬質赤化面が残され、以下は暗褐色土や Loam 塊が充填されている。竈掘形規模は75×50cm・深さ15cmである。住居跡中央部は楕円形土坑が検出されているが、薄く堅く締まった灰褐色土が貼床として施されている。

出土遺物は少なく、須恵器椀の他灰釉陶器小破片がある。

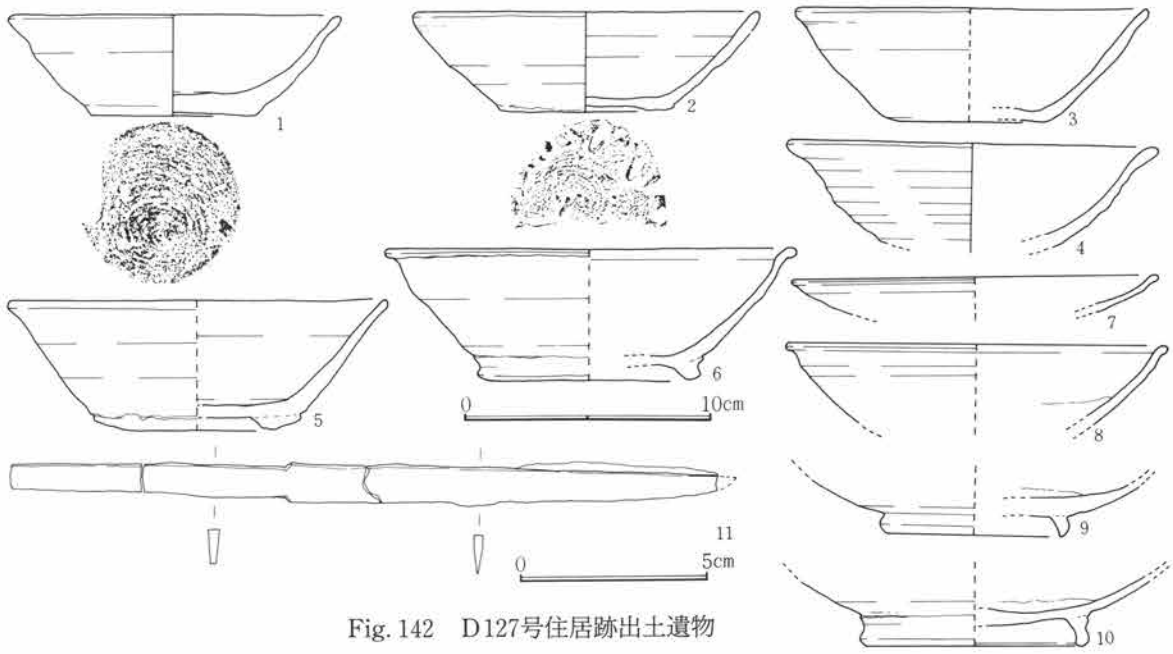


Fig. 142　D127号住居跡出土遺物

D127号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
142－1 52－1	須恵器 杯	½	12.8×6.4 ×4.0	床直・ －0.5	体部直線的に立つが中位で僅かに張る。底部肥厚。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟　②灰褐　③やや密
142－2 52－2	須恵器 杯	½	13.8×6.8 ×4.0	埋土	体部下半は直線的、上半は内湾気味に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
142－3 52－3	須恵器 杯	⅓	14.0×6.0 ×(4.5)	埋土 ＋2	体部下半は直線的、中位で僅かに張り上半は小さくくびれる。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや粗砂混
142－4 53－4	須恵器 椀	体部⅓	14.8×－ ×(4.0)	埋土	腰部から体部丸味強く、体部上半は大きく外反して開く。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
142－5 53－5	須恵器 椀	⅓	15.2×8.2 ×5.2	埋土	腰部に張りなく、体部直線的。上半は緩く外反傾向。付高台低く幅広不均一で雑な作り。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟　②明褐灰　③密
142－6 53－6	須恵器 椀	¼	16.4×8.8 ×5.2	埋土・ ＋16	体部下半は直線的、上位で張りをもつ。口唇部は丸まって強く外屈。付高台断面矩形。轆轤整形。	①酸化気味軟　②浅黄橙　③やや密
142－7 53－7	灰釉陶器 皿	口縁部 小片	14.6×－ ×(1.5)	埋土	体部僅かに丸味。口唇部丸まり小さく外屈気味。内外面施釉。大原２号窯式期？	①良好　②灰　③やや密
142－8 53－8	灰釉陶器 椀	口縁部 小片	15.2×－ ×(3.2)	埋土	体部僅かな丸味。口唇部丸く、小さく外屈。内面施釉。大原２号窯式期？	①良好　②灰　③密
142－9 53－9	灰釉陶器 椀	底部¼	－×7.4 ×(2.1)	床直・ －1.5	腰部やや張り気味。高台外稜丸く断面略三角形を呈す。内面施釉。大原２号窯式期？	①良好　②灰白　③やや粗
142－10 53－10	灰釉陶器 椀	底部½	－×9.0 ×(2.7)	床直・ ＋1	高台やや高目。外稜丸味をもつか略三ケ月高台を呈す。内面施釉。底部撫で調整。大原２号窯式期？	①良好　②灰　③密
142－11 53－11	鉄製品 刀子	ほぼ完 形	長19.3	埋土	刃部長12cm・幅１cm・棟厚0.3cm、茎部長7.3cm・幅0.8cm・厚0.3cm。	

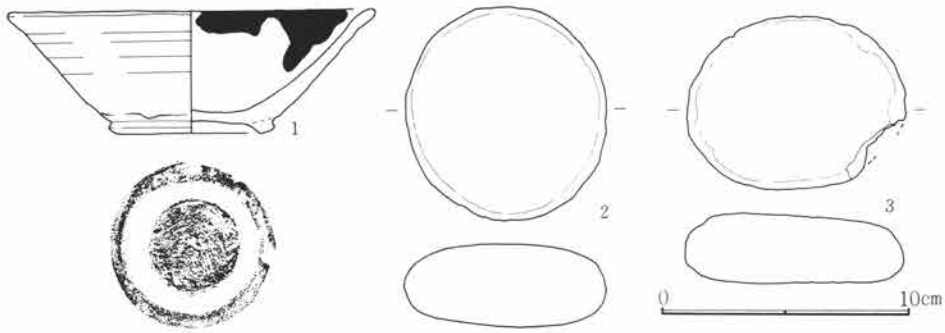
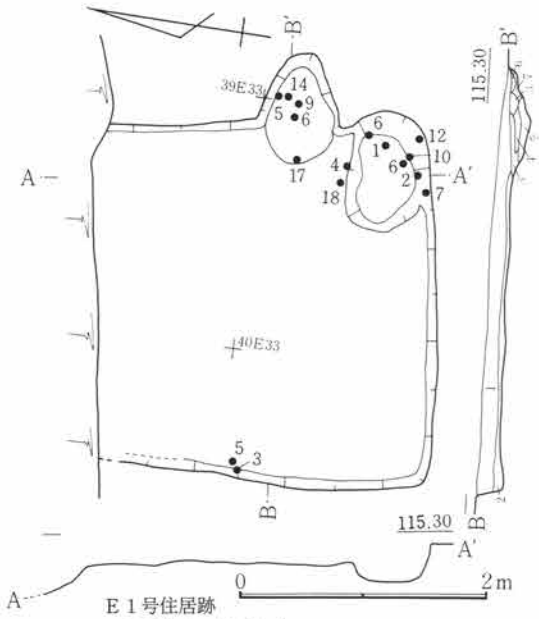


Fig. 143　D128号住居跡出土遺物

D128号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
143－1 53－1	須恵器 椀	½	14.6×6.5 ×4.9	床直・ －1	体部直線的に開き、口唇部僅かに外傾。付高台低く断面矩形。轆轤整形回転糸切り。内面及び外面口縁部に油煙付着	①酸化気味軟　②淡黄　③やや密
143－2 53－2	石		長・幅・厚 8.4×8.1×3.2	床直・ －1	扁平な円礫。両面摩耗あり。343.6g	
143－3 53－3	石		長・幅・厚 6.8×8.7×2.6	床直	扁平な楕円礫。両面摩耗。231.2g	



E１号住居跡
1　黒褐色土　軽石含む。
2　黒褐色土　軽石少量含む。
3　黒褐色土　焼土塊含む。
4　黒色土　黒色灰多く含む。
5　褐色土　焼土・竈床面か。
6　黒褐色土　黒色灰と焼土塊含む。
7　褐色土　焼土・灰僅かに含む。

Fig. 144　E１号住居跡

E１号住居跡（Fig. 144・145、PL. 14・53・54）

E区の東縁に位置し、38～40E32・33の範囲にある。住居跡北縁にはE４号溝が東西走しており北壁線は消失している。また西側にはE８号住居跡があり、竈先端部が僅かに当跡にかかり、西壁の一部を毀している。平面形は方形を呈すると考えられ、東西長2.9m・南北は南壁線より北へ2.7mの範囲まで確認した。壁高は15～17cmを測る。竈は東壁の南に偏った位置に付設され、主軸方位はN－82°－Eを示す。床面は北側で緩く大きな起伏をなしやや不安定であり、全体に踏み締まりは弱い。

竈は東壁を半楕円に掘り込み、火床は硬質赤化面を形成する。火床面下部には掘形を充填する行為は認められず、基層面をそのまま火床面としている。竈やその周辺には構築材やその埋設に関わる痕跡は検出されていない。竈開口部幅65cm・東壁線よりの奥行き60cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、長径１m・短径65cm・深さ15cm程度の楕円形を呈す。貯蔵穴上面には土器類が比較的多量に検出されているが、いずれも貯蔵穴埋没後に破棄された様相がある。

出土遺物は、竈内・貯蔵穴上面に集中して検出され、土師器杯・須恵器杯・椀・土師器甕・灰釉陶器・緑釉陶器細片のほか刃子・鉄釘などの鉄製品がある。

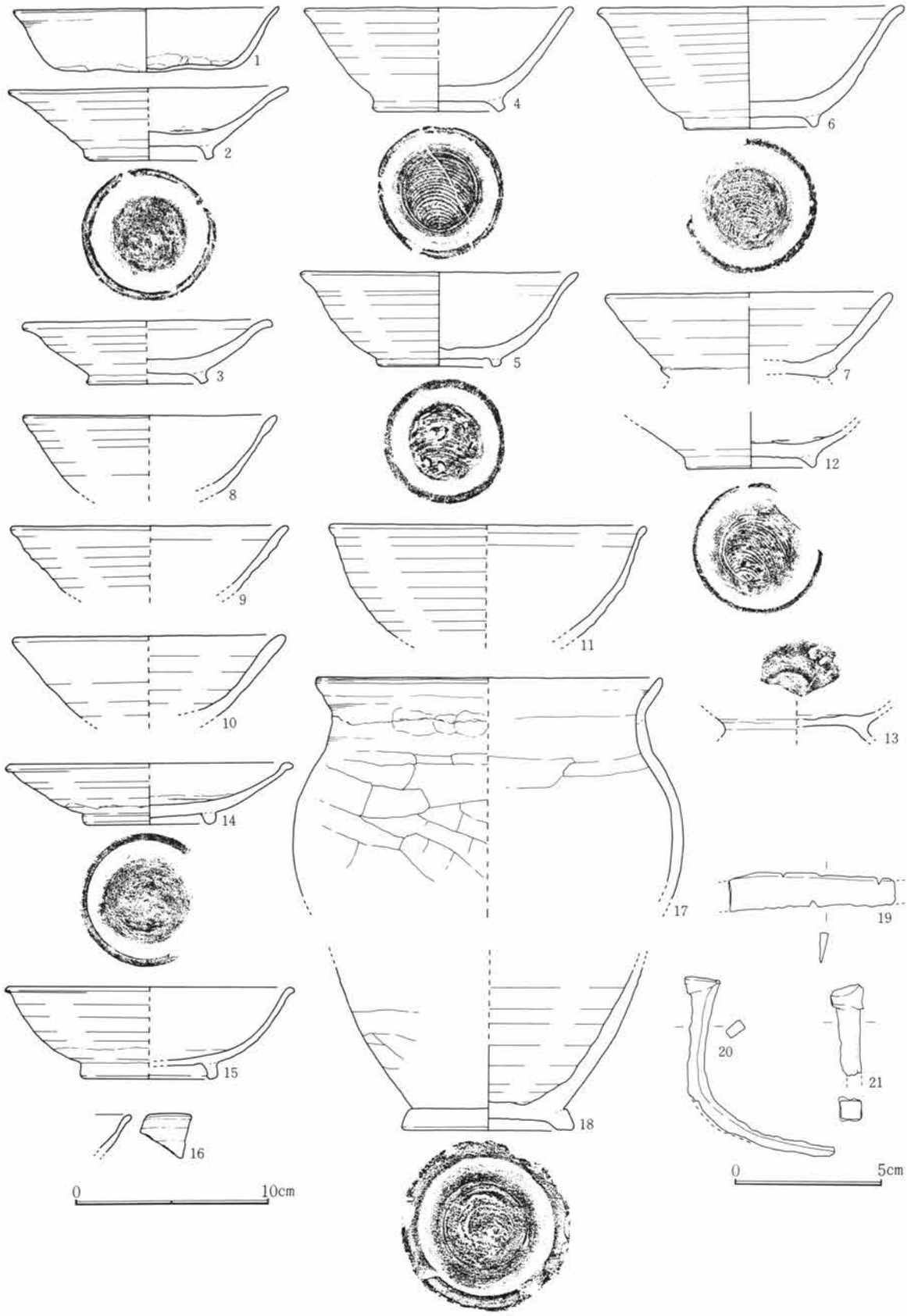


Fig. 145　Ｅ１号住居跡出土遺物

Ｅ１号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
145－1 53－1	土師器 杯	½	13.6×－ ×3.2	貯蔵穴	器肉著しく薄い。底部指頭著しくしぼり状の皺。腰部丸味をもち体部上半は外反して開く。体部内外面撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
145－2 53－2	須恵器 皿	½	14.3×6.6 ×3.6	貯蔵穴・埋土	体部やや深く直線的。上位はやや強く開く。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや粗
145－3 53－3	須恵器 皿	¼	12.8×6.2 ×3.2	床直	体部丸味をもちやや深目。上位は強く外反して開く。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②褐灰～灰白 ③やや粗
145－4 53－4	須恵器 椀	⅓	13.7×6.8 ×5.2	貯蔵穴	体部直線的。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
145－5 53－5	須恵器 椀	½	14.2×6.4 ×4.8	竈	腰部から体部にかけて丸く張る。上位は大きく外反して開く。付高台低く断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味軟 ②鈍い橙 ③やや密
145－6 53－6	須恵器 椀	½	15.6×6.8 ×6.3	竈・貯蔵穴	腰部丸く張り、体部上半は緩く外反して開く。付高台やや低く断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。内外面部分的吸炭。	①良好 ②灰～灰白 ③やや粗
145－7 53－7	須恵器 椀	¼	14.7×－ ×(4.3)	貯蔵穴	体部浅く、直線的。器肉厚い。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。内外面部分的に吸炭。	①良好 ②灰白 ③やや粗
145－8 53－8	須恵器 椀	⅓底部欠損	13.0×－ ×(4.0)	竈	腰部丸味強い。体部上位はやや肥厚して外傾。轆轤整形。	①酸化気味軟 ②淡黄 ③やや密
145－9 53－9	須恵器 椀	体部¼	14.1×－ ×(3.4)	竈	体部直線的。轆轤整形。外面轆轤目強い。	①良好 ②灰 ③やや粗
145－10 54－10	須恵器 椀	体部⅓	13.9×－ ×(4.2)	貯蔵穴	体部肥厚し、やや浅く直線的。轆轤整形。内外面燻し焼成。	①良好 ②褐灰 ③やや粗
145－11 54－11	須恵器 椀	体部⅓	16.2×－ ×(5.7)	埋土	体部丸味強く深い。口唇部丸まって外屈。器肉薄い。轆轤整形。外面轆轤目強い。	①良好 ②灰 ③やや密
145－12 54－12	須恵器 皿	底部	－×6.7 ×(2.1)	貯蔵穴	やや深目になるか。付高台断面やや丸味。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗茶色粒混
145－13 54－13	須恵器 椀	底部破片	－×－ ×(1.6)	埋土	器肉薄い。轆轤整形。回転糸切り。見込部に箆描き『×』あり。	①良好 ②淡黄 ③やや密
145－14 54－14	灰釉陶器 皿	⅔	14.6×6.8 ×3.1	竈・埋土	体部丸味をもち、口唇部強く折れて外屈。高台やや低く断面矩形気味。腰部回転箆削り。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
145－15 54－15	灰釉陶器 椀	¼	14.7×7.0 ×4.6	貯蔵穴	腰部強く張り体部にかけて丸味強い。口唇部強く外反。高台やや高く断面矩形。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
145－16 54－16	緑釉陶器 椀	小片		埋土	小椀になるか。釉は薄く色調は淡緑灰。焼成は硬く須恵質	①良好 ②灰 ③密
145－17 54－17	土師器 甕	上半¼	17.6×－ ×(11.2)	竈・埋土	胴部丸く張り強い。口縁部下半直線的に内傾し、上半は強く外傾して開く。口縁部指頭後横撫で。肩部横箆、胴部斜箆削り。口縁部中位に接合痕。内面横箆撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
145－18 54－18	須恵器 瓶	下半¼	－×8.8 ×(8.3)	貯蔵穴	胴部下半直線的に立つ。付高台幅広で低く断面矩形。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③やや粗
145－19 54－19	鉄製品 刀子	刃部小片	長(5.6) 幅1.2	埋土	刀子の刃部。棟厚0.3cm	
145－20 54－20	鉄製品 角釘	端部欠損	長・幅・厚 (9.3)×0.6×0.3	埋土	頭部形状折頭式の角釘か。大きく曲がる。	
145－21 54－21	鉄製品 角釘	身部欠損	長・幅・厚 3.0×0.7×0.6	埋土	頭部形状折頭式の角釘か。	

Ｅ２号住居跡（Fig. 146～148、PL. 14・54）

Ｅ区の東縁に位置し、38・39Ｅ30～32の範囲にある。当跡の北にはＥ１号住居跡が近接し、南西隅はＥ３号住居跡と重複関係にある。調査時点での新旧は当跡が新しく表わされているが、出土遺物では逆転する可能性がある。平面形は南北軸が僅かに長い略方形を呈するが、北壁線は覆く蛇行し、西壁線は弧を描き南西・北西隅部は丸まる。南北長3.25m・東西長３m・壁高15cmを測る。竈は東壁にあり、大きく南へ偏って付設される。主軸方位はN－86°30′－Eを示す。床面は踏み締まりが弱く、中央付近にやや起伏が見られる。

竈は東壁を半楕円形に大きく掘り込む。壁線上左袖部には人頭大の角礫を埋設し、右側は壁線よりやや奥まった側壁部に同大の川原石を据える。燃焼部は僅かに窪み灰層が薄く堆積するが、火床には硬質赤化面は

残されず、塊状の焼土が認められる。また、火床下の掘形はなされていない。竈開口部幅55cm・奥行き60cmを測る。貯蔵穴は南東隅に検出されているが、径35×50cm・深さ10cm前後の小規模な楕円形を呈す。貯蔵穴内より須恵器小型甕２個体、灰釉陶器小瓶などが検出されている。

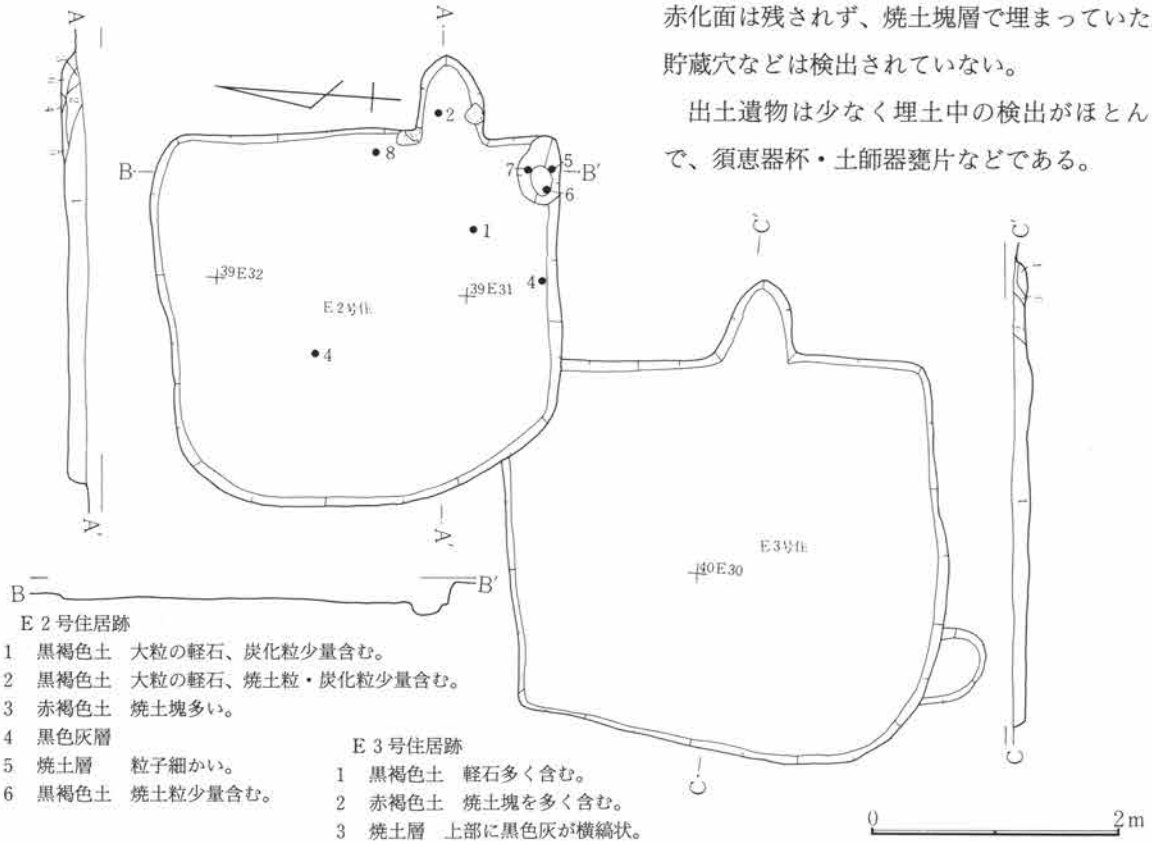
出土遺物は上記器種のほか羽釜などがある。

Ｅ３号住居跡（Fig. 146・149、PL. 14・55）

Ｅ２号住居跡と北東部で重複しており、調査時点ではこれより旧い時期として表わされているが、出土遺物からは新旧関係の逆転も考えられる。38～40Ｅ29・30の範囲にある。平面形は略方形を呈するが、南壁から西壁線にかけて大きく弧を描き南西隅部の壁線は緩く脹らむ。南北軸がやや長く、約3.6m・東西方向3.25m・壁高８～９cmを測る。竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はＮ－86°－Ｅを示す。床面は緩やかな起伏をなし、住居跡中央部がやや顕著な窪みとなっている。

竈は東壁を半楕円形に掘り込むが、構築材およびそれらの埋設痕なども認められなかった。火床には硬質赤化面は残されず、焼土塊層で埋まっていた。貯蔵穴などは検出されていない。

出土遺物は少なく埋土中の検出がほとんどで、須恵器杯・土師器甕片などである。



Ｅ２号住居跡
1　黒褐色土　大粒の軽石、炭化粒少量含む。
2　黒褐色土　大粒の軽石、焼土粒・炭化粒少量含む。
3　赤褐色土　焼土塊多い。
4　黒色灰層
5　焼土層　　粒子細かい。
6　黒褐色土　焼土粒少量含む。

Ｅ３号住居跡
1　黒褐色土　軽石多く含む。
2　赤褐色土　焼土塊を多く含む。
3　焼土層　上部に黒色灰が横縞状。
4　褐色土　　焼土含む。

Fig. 146　Ｅ２・３号住居跡

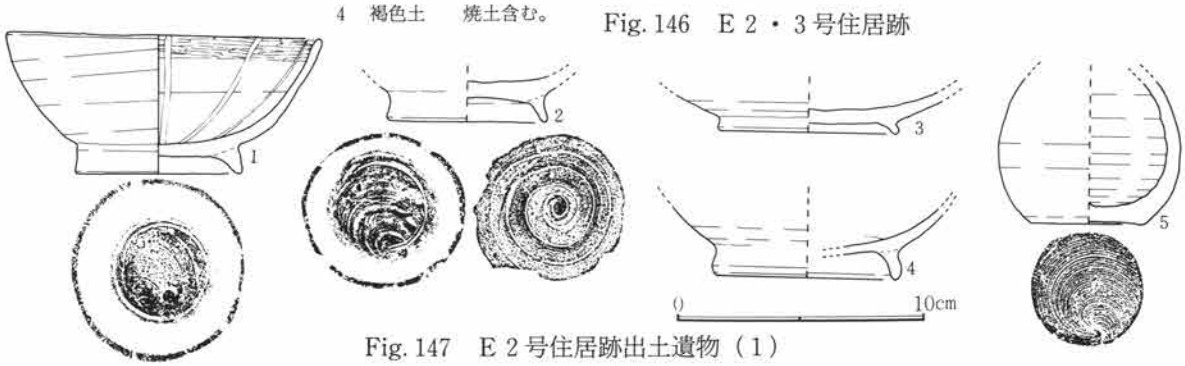


Fig. 147　Ｅ２号住居跡出土遺物（１）

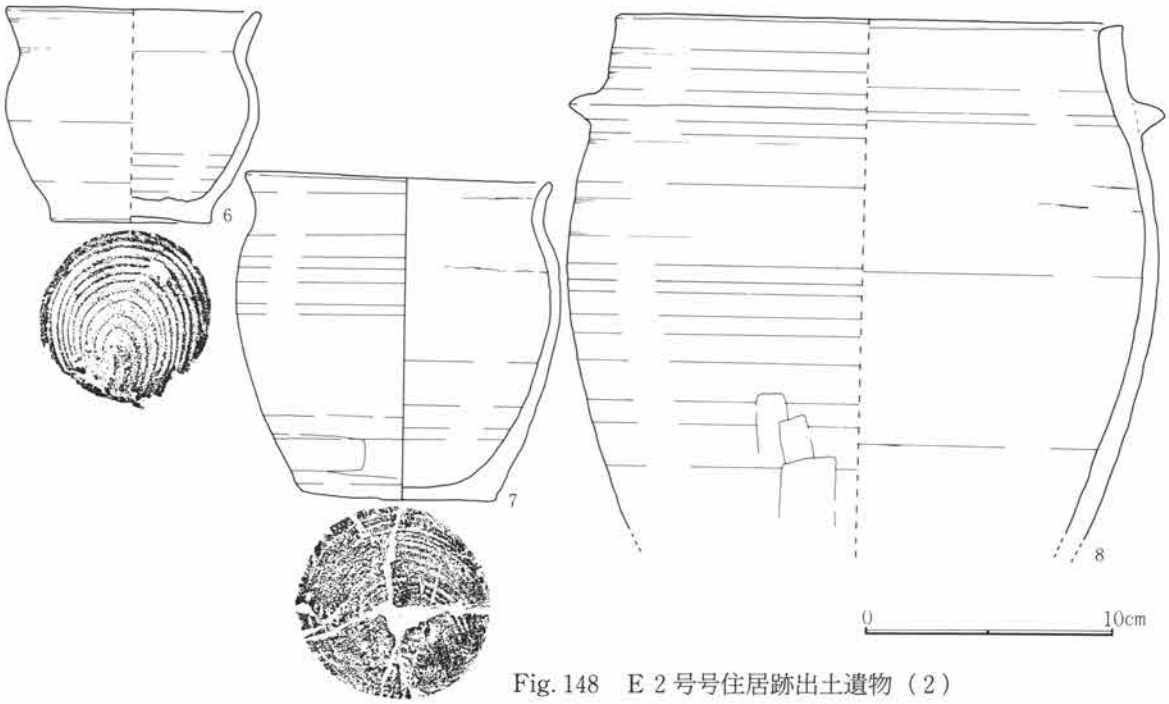


Fig. 148　Ｅ２号号住居跡出土遺物（２）

Ｅ２号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
147－1 54－1	須恵器 内黒椀	⅔	12.5×6.6 ×5.6	床直	体部丸味強く内湾して開く。付高台幅広な断面三角。内面黒色処理し10条程の放射状幅広な篦磨き。口縁部横篦磨き轆轤整形右回転糸切り。	①酸化良好　②淡橙 ③やや粗細砂混
147－2 54－2	須恵器 椀	高台部 のみ	－×6.3 ×(1.9)	竈	付高台。見込部うず巻き状の強い篦工具の調整痕あり。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化良好　②橙 ③やや粗細砂混
147－3 54－3	灰釉陶器 椀　？	上半欠 損	－×7.2 ×(1.7)	埋土	高台低く断面丸い。内外面施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好　②淡黄　③ 緻密
147－4 54－4	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.3 ×(2.9)	床直	腰部丸味をもつ。高台やや高く内湾気味に立つ。内面施釉。腰部回転篦削り。	①良好　②灰　③密
147－5 54－5	灰釉陶器 小瓶	胴部¼	－×4.4×(5.7) 最大径7.3	貯蔵穴	胴部下脹れ状に丸く張る。胴上半に施釉。底部縁辺に油煙状の付着物。底部右回転糸切り。腰部回転篦削り。	①良好　②灰　③密
148－6 54－6	須恵器 小型甕	⅔	10.2×6.4 ×8.4	貯蔵穴	腰部小さくくびれ、胴部やや上位で張る。口縁部直線的に外傾。底部肥厚し内面コテ状痕強い。轆轤整形右回転糸切	①酸化良好　②浅黄 橙　③やや粗
148－7 54－7	須恵器 小型甕	¾	12.2×7.7 ×12.9	貯蔵穴	胴下半直線的に立ち、肩部で僅かに張る。口縁部短かく外反気味に小さく開く。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　② 灰黄　③やや粗
148－8 54－8	羽釜	⅓	20.1×－ ×(20.3)	竈	胴部脹らみをもつ。口縁部肥厚し直線的に内傾。口唇部矩形を呈す。鍔部幅広な三角、強く突出。内外面回転撫で。	①酸化気味良好　② 褐灰　③やや粗

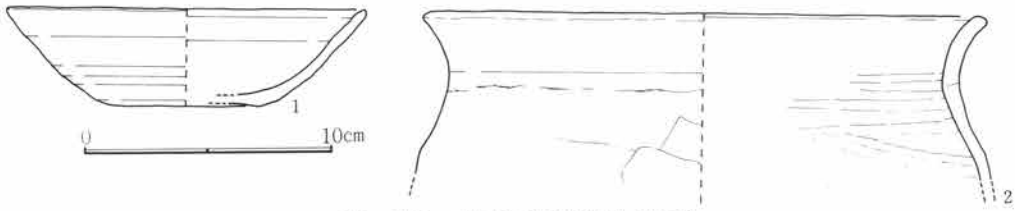


Fig. 149　Ｅ３号住居跡出土遺物

Ｅ３号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
149－1 55－1	須恵器 杯	小片	13.8×5.6 ×4.0	埋土	底径小さく、体部内湾気味に大きく開く。轆轤整形。回転糸切り。内外面黒色を呈し燻し焼成か。	①酸化気味軟　②褐 灰　③やや粗
149－2 55－2	土師器 甕	口縁部 小片	22.4×－ ×(6.5)	埋土	肩部張りなく、口縁部やや肥厚し外反して開く。口縁部下位に輪積接合痕。口縁部横撫で。肩部篦削り。内面篦撫で	①良好　②明橙　③ 密

Ｅ４号住居跡

Ｅ区北側に位置し、49・50Ｅ43・44の範囲にある。削平が著しく、竈跡と考えられる不整楕円形が認められたにすぎない。煙道部と思われる東に短く突出した部分に焼土が集中的に検出されたものである。

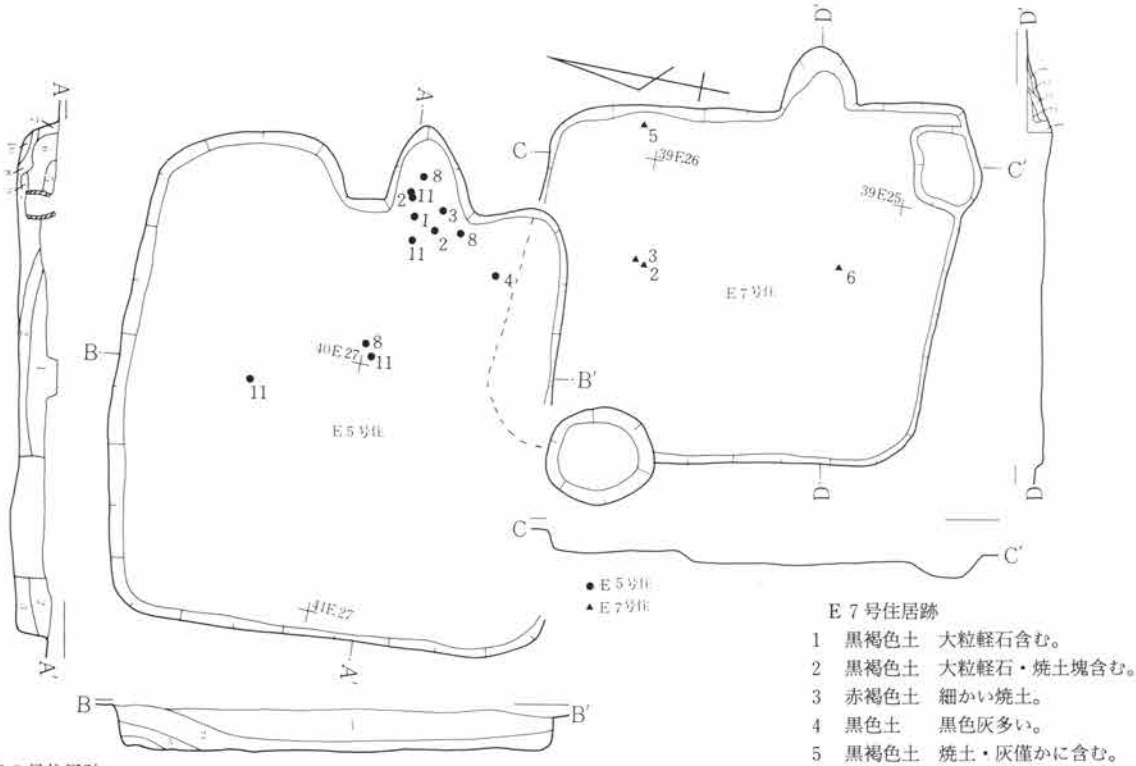
出土遺物は須恵器細片が少量検出のみである。

Ｅ５号住居跡（Fig. 150～152、PL. 15・55）

Ｅ区の東縁に位置し、39～41Ｅ26・27の範囲にある。南東部でＥ７号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。平面形は東西方向に長軸をもつ略方形を呈するが四隅の壁線は弧状になる。また南壁の西半は試掘溝により消失している。東西長3.95m・南北長3.5m・壁高30cmを測り、掘形は比較的深い。竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はＮ―87°―Ｅを示す。床面は僅かな起伏が見られるが、踏み締まりは比較的安定している。

竈は東壁を大きく半楕円形に掘り込み、両袖部が住居内に突出する形態をもつ。両袖とも、住居跡掘形基盤層をそのまま掘り残して構築されるが、左側は方形状の幅広をなし、右袖は小さく先細り形状である。火床には硬質赤化面は残されず、竈内にはかなりの崩落焼土と考えられる焼土塊が目立つ。竈内には大型羽釜が倒置状態で検出されている。袖部内法約70cm・袖先端よりの奥行き60～70cmを測る。貯蔵穴などの諸施設は認められなかった。

出土遺物は床面出土のものが多く、須恵器杯・椀・灰釉陶器片などのほか比較的大型の羽釜がある。



E７号住居跡
1　黒褐色土　大粒軽石含む。
2　黒褐色土　大粒軽石・焼土塊含む。
3　赤褐色土　細かい焼土。
4　黒色土　黒色灰多い。
5　黒褐色土　焼土・灰僅かに含む。

E５号住居跡
1　暗褐色土　焼土・炭化粒・FP 多量含む。
2　暗褐色土　焼土・炭化粒含む。締まり良。FP 含む。
3　暗褐色土　粘質・FP 少量含む。
4　暗褐色土　焼土・炭化粒・FP 含む。
5　暗褐色土　焼土・炭化粒・FP 含む。
6　暗褐色土　焼土・粘土塊・軽石（FP）含む。
7　暗褐色土　焼土塊多量・炭化粒・FP 含む。
8　赤褐色土　焼土塊多量に含む。
9　黒色土　黒色灰多量、焼土塊含む。
10　黒色土　黒色灰・焼土塊含む。

0　2m

Fig. 150　Ｅ５号・７号住居跡

Ｅ７号住居跡（Fig. 150・153、PL. 15～55）

Ｅ５号住居跡と北側で重複し、38～40Ｅ24～26の範囲にある。新旧関係はＥ５号住居跡より旧い時期の所産であり、当跡の掘形が浅いため北壁のほとんどと床面の一部は消失している。平面形は東西軸と南北軸が歪んだ方形を呈し、南北長約3.45m・東西長2.8m・壁高約15cmを測る。竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はＮ－81°－Ｅを示す。床面は中央部にやや顕著な窪みがあり、踏み締まりは弱い。

竈は東壁を半楕円形に掘り込まれるが袖部などの構築材や、それらの埋設痕は検出されていない。また火床には明確な硬質赤化面は残されず、細粒化した焼土粒層が堆積していた。竈開口部幅60cm・奥行き50cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、70～50cm・深さ10cmで不整方形を呈す。

出土遺物は散在的で埋土中からの検出が多い。灰釉陶器・刀子・砥石などがある。

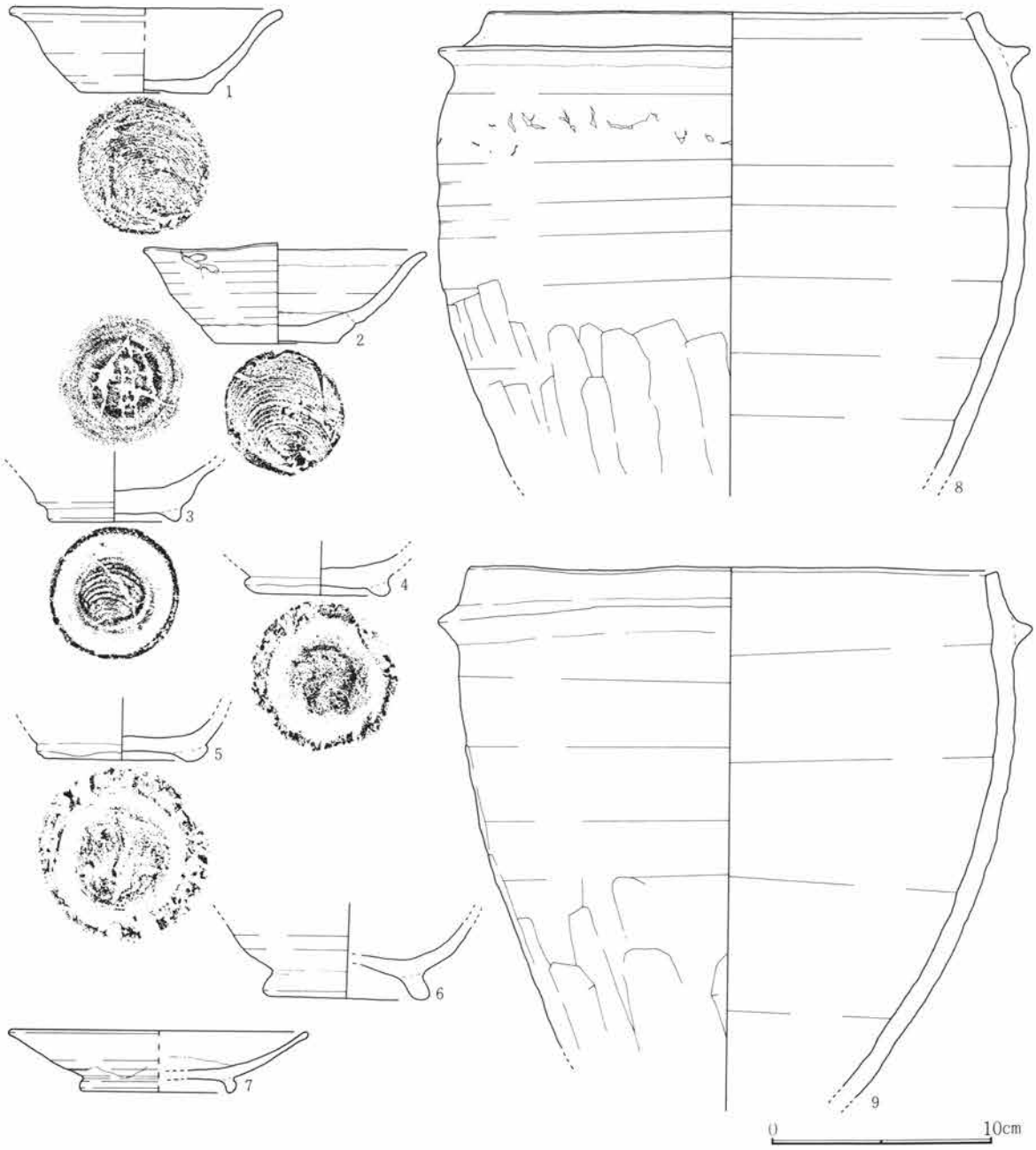


Fig. 151　Ｅ５号住居跡出土遺物（１）

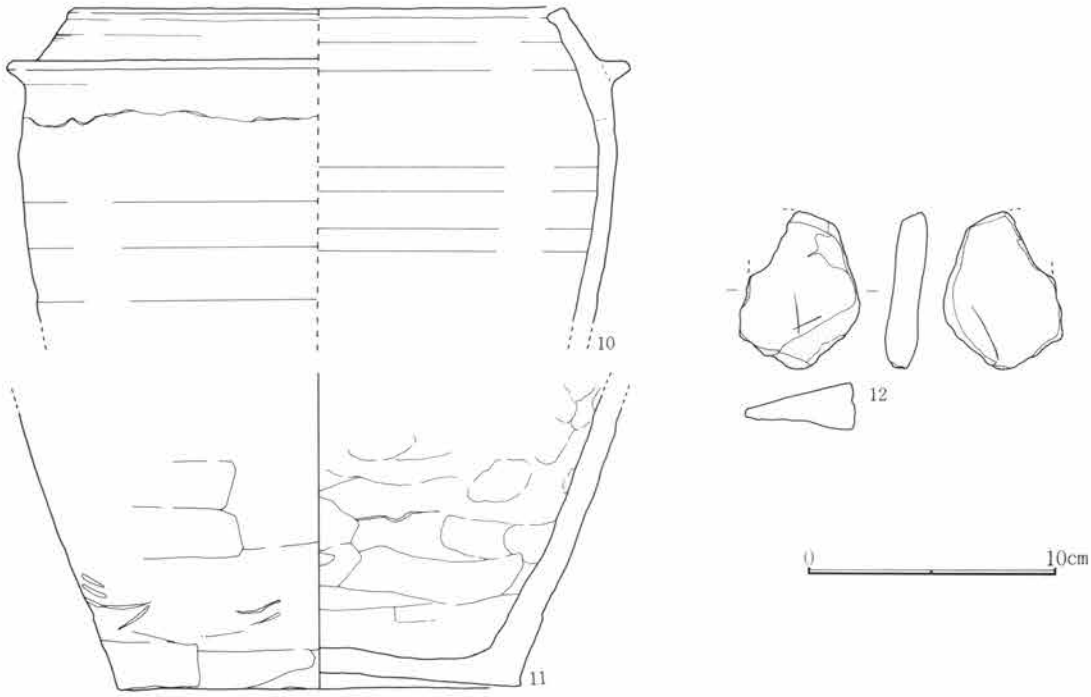


Fig. 152　E 5号住居跡出土遺物（2）

E 5号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
151－1 55－1	須恵器 杯	⅔	12.3×5.6 ×3.8	埋土	体部下半直線的。上位で大きく外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②褐灰　③粗石英粒多混
151－2 55－2	須恵器 杯	¾	12.8×5.5 ×4.5	竈	腰部にくびれをもち、体部上位で大きく外反して開く。腰部に底・体部の接合明瞭。口縁部に合せ痕あり。轆轤整形。右回転糸切り。底部肥厚。	①やや軟　②灰　③密
151－3 55－3	須恵器 椀	底部	－×5.9 ×(2.2)	竈	底部肥厚。腰部で強く屈する。付高台低く断面丸い。見込部に『主』の箆描き。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟　②橙　③やや粗
151－4 55－4	須恵器 椀	底部	－×6.6 ×(2.0)	床直	底部肥厚。付高台低く作り雑。轆轤整形。	①酸化気味やや軟　②褐灰　③やや粗
151－5 55－5	須恵器 椀	底部	－×6.7 ×(1.8)	埋土	付高台低く極めて作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟　②灰　③やや密
151－6 55－6	須恵器 椀	底部½	－×7.4 ×(3.2)	埋土	腰部張る。付高台やや高く幅広で断面丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
151－7 55－7	灰釉陶器 皿	¼	13.5×7.1 ×2.7	埋土	体部丸味少なく直線的に開く。高台断面丸く内湾して立つ。内外面漬け掛け施釉。虎渓山1号窯式期。	①良好　②灰　③密
151－8 55－8	羽釜	口縁・ 胴部½	22.2×－ ×(20.6) 鍔径26.5	竈	胴部上半丸く張る。口縁部やや短かく、内湾気味に内傾。口唇部断面矩形。鍔部断面略三角強く突出。口縁部・胴上半・内面横撫で。胴下半縦箆削り。	①やや軟　②灰褐　③やや粗
151－9 55－9	羽釜	底部欠損	23.6×－ ×(23.6) 鍔径26.6	竈	胴部上半にやや脹らみをもち、口縁部は直線的に内傾、口唇部断面矩形、鍔部幅広で断面三角。口縁部・胴上半・内面横撫で。胴下半縦箆削り。器体の歪み著しい。	①良好　②灰　③やや粗
152－10 55－10	羽釜	口縁・ 胴部 ⅓	19.8×－ ×(12.5) 鍔径24.8	埋土	胴部上半やや張る。口縁部直線的に内傾。口唇部断面矩形。内側端部小さく突出。鍔部断面矩形。口縁部・胴部上半・内面横撫で。	①酸化気味やや軟　②橙～褐灰　③やや密
152－11 55－11	須恵器 甕	底部	－×16.0 ×(11.0)	竈・埋土	平底から胴部は直線的に立ち上がる。胴部外面粗い横箆撫で。内面は横位に強い指頭撫でを施す。	①良好　②暗青灰　③やや密
152－12 55－12	石製品 砥石		長・幅・厚 6.3×4.7×1.8	竈	破損後も使用。多面使用。刃痕あり。44.3g	流紋岩（砥沢）

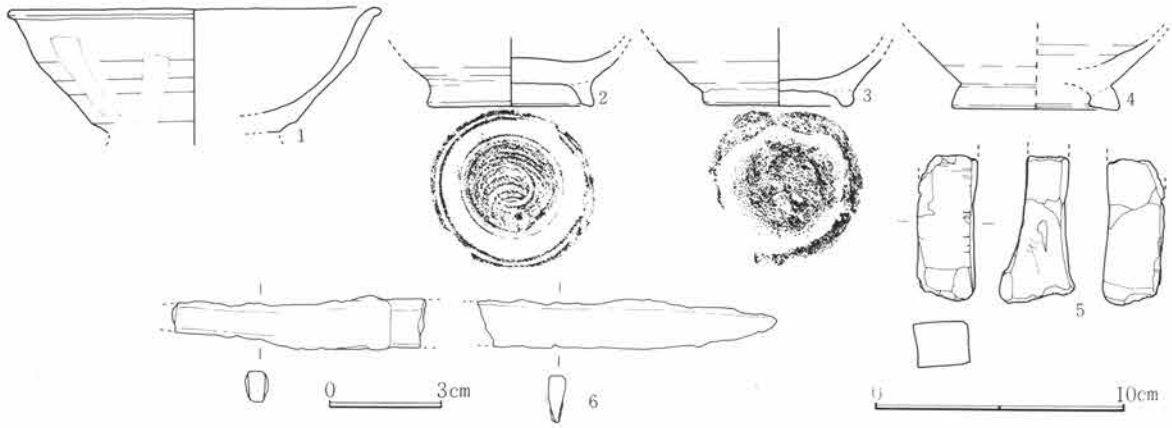


Fig. 153　Ｅ７号住居跡出土遺物

Ｅ７号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
153－１ 55－１	須恵器 椀	¼	14.8×－ ×(4.8)	埋土	体部下半直線的で中位にやや強い張りをもつ。口唇部強く外屈。付高台欠損。轆轤整形。体部外面に縦位弱い撫で。	①酸化気味やや軟 ②褐灰　③密金雲母
153－２ 55－２	須恵器 椀	底部	－×6.6 ×(2.2)	竈	腰部にやや丸味。付高台断面矩形。畳付け弱い段をなす。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
153－３ 55－３	須恵器 椀	底部	－×6.0 ×(2.3)	埋土	付高台断面丸く作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化軟　②浅黄橙 ③やや密金雲母混
153－４ 55－４	須恵器 瓶	底部	－×6.6 ×(2.6)	埋土	付高台幅広。畳付け平らで内斜。轆轤整形。	①良好　②灰　③密
153－５ 55－５	石製品 砥石		長5.8 最大幅3.0	埋土	長方形。中央部使い減り著しく、えぐれ強い。長軸４面使用。両端欠損。刃痕あり。	流紋岩（砥沢？）
153－６ 55－６	鉄製品 刀子	茎端部 欠損	長(14.7)	埋土	刃部一部欠損。刃部現存長9.0cm・刃幅1.2cm・棟厚0.4cm、茎現存長5.8cm・幅12～0.8cm・厚0.5cm。	

Ｅ８号住居跡（Fig. 154・155、PL. 15・56）

Ｅ区東縁に位置し、40～42Ｅ32～34の範囲にある。南側でＥ９号住居跡と、また西側でＥ11号住居跡と重複している。新旧関係は両者より新しい時期の所産と考えられる。しかし、Ｅ９号住居跡との重複のため、南壁線は明らかにすることはできなかった。また当跡のほぼ中央には上層に浅間山降下のＢ軽石粒の二次堆積層をもち東西走する幅1.5～2.2mのＥ４号溝があり、南北に分断している。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。東西長は3.3mを測り、南北は北壁より南へ3.6mの範囲まで確認できた。壁高は約30cmで比較的深い掘形である。竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はおよそＮ－90°－Ｅを示すが、竈中心軸は東壁線に対し20°北へ傾いている。床面はほぼ平坦をなし、踏み締りは良好である。竈は東壁をやや小さ目な楕円形に掘り込み、両袖部が痕跡程に突出する形態をもつ。火床はわずかな窪みをなしているが硬質赤化面は認められない。また竈前方の床面には竈内から流出したと考えられる薄い灰層が分布する。竈開口部幅約40cm・奥行き60～65cmを測る。貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は極めて少なく、竈前方の灰層直上より須恵器杯がある。

Ｅ９号住居跡（Fig. 154・155、PL. 15・56）

Ｅ８号・Ｅ10号住居跡と重複し、前者より旧く後者より新しい時期の所産である。40～42Ｅ30～32の範囲にある。北側はＥ８号住居跡との重複で消失しており、さらに西壁線の一部は中世館跡の外堀と考えられる。Ｅ２号溝の縁辺にかかり削平を受けたためか壁線を検出することができなかった。平面形は略方形が想定さ

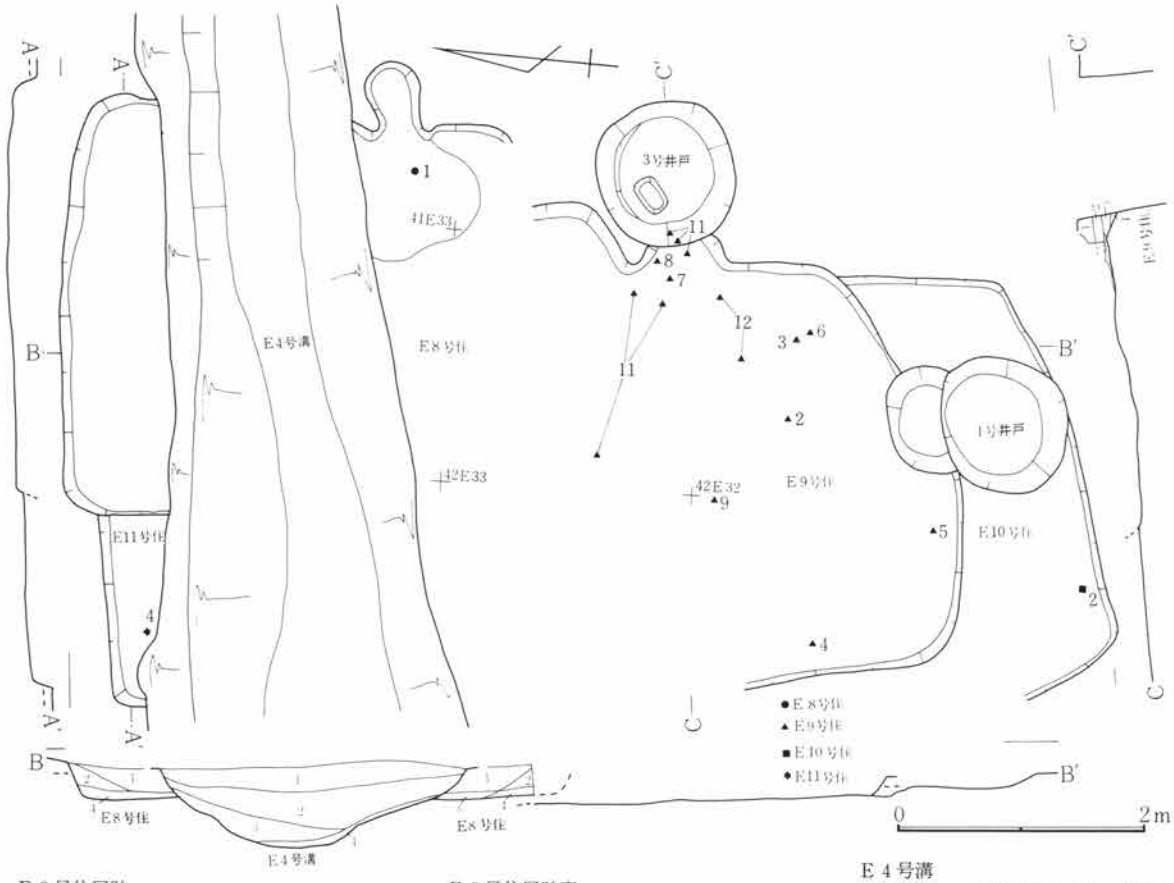
れるが、南壁線は大きく脹らみかなり歪んだ形状を呈す。東西長は北寄りで４m、南寄りでは3.3mを測り、南北長は南壁線より北へ3.3mの範囲まで確認した。壁高は約20cmを測る。竈は東壁に付設されるが、先端部はＥ３号井戸跡によって破壊されている。主軸方位はおよそＮ－86°－Ｅを示す。また南壁線の一部はＥ１号井戸跡の掘形によって消失している。床面はほぼ平坦をなすと思われるが踏み締まりが弱いためか床面検出に困難をきたし床面の掘抜き個所も多く生じてしまった。

竈は遺存部分が少なく全体の形状を知ることはできないが、左袖部は住居跡の基層をやや大きく掘り残し突出させている。また竈を中心に東壁は南・北が一線に乗らず北側が東へ張り出している。火床には硬質赤化面が形成され、上面には薄い灰層が残されていた。開口部幅70cm・奥行き20cmまで残る。

出土遺物は比較的多く、とくに竈内や前面からの検出が目立つ。須恵器杯・椀・須恵器鉢・土師器甕などがある。

Ｅ10号住居跡（Fig. 154・156、PL. 15・56）

Ｅ９号住居跡と重複しており、これより旧い時期の所産である。この重複のため、当跡の検出は部分的であり、41・42Ｅ30・31の範囲で、さらに検出部の中央にはＥ１号井戸跡が存在しておりごく狭小な範囲を知るのみである。西壁は、Ｅ９号住居と同様にＥ２号溝の縁辺にかかっており削平されている。平面形は方形



Ｅ８号住居跡
1　暗褐色土　Loam 粒を含む。
2　暗褐色土　Loam が暗褐色土と互層に流入。
3　褐色土　Loam 粒多く焼土粒・炭化粒を含む。
4　黄褐色土　Loam 粒多量に含む。

Ｅ９号住居跡竈
1　暗褐色土　Loam 小塊を多量に含む。
2　暗褐色土　炭化粒を多量に含む。
3　炭化粒層
4　暗褐色土　炭化粒・Loam 粒を多量に含む。

Ｅ４号溝
1　暗褐色土　B軽石粒を多量、炭化粒僅かに含む。
2　暗褐色土　B軽石粒を含む。
3　暗褐色土　Loam 塊を多量に含み、B軽石粒僅かに含む。
4　褐色土　Loam 互層。

Fig. 154　Ｅ８・９・10・号住居跡

を想定され、東西長約3.5m・南北は南壁線より北へ1.5mの範囲を確認した。壁高は約15cmを測る。

竈は遺存せず、その存在も確認されていない。東壁線に対する南壁線の東西軸方位はおよそN—70°—Eを示す。床面は検出部分が壁際のためか踏み締まりは弱い。

出土遺物は少なく須恵器杯がある。

E11号住居跡（Fig. 154・156、PL. 15・56）

E８号住居跡とE４号溝との重複により、検出は北西隅の極めて小部分で、42E34の範囲にある。壁高は約20cmを測る。竈をはじめ諸施設はなんら認められていない。

出土遺物は少なく須恵器椀があり特殊な遺物としては土製坩堝片がある。

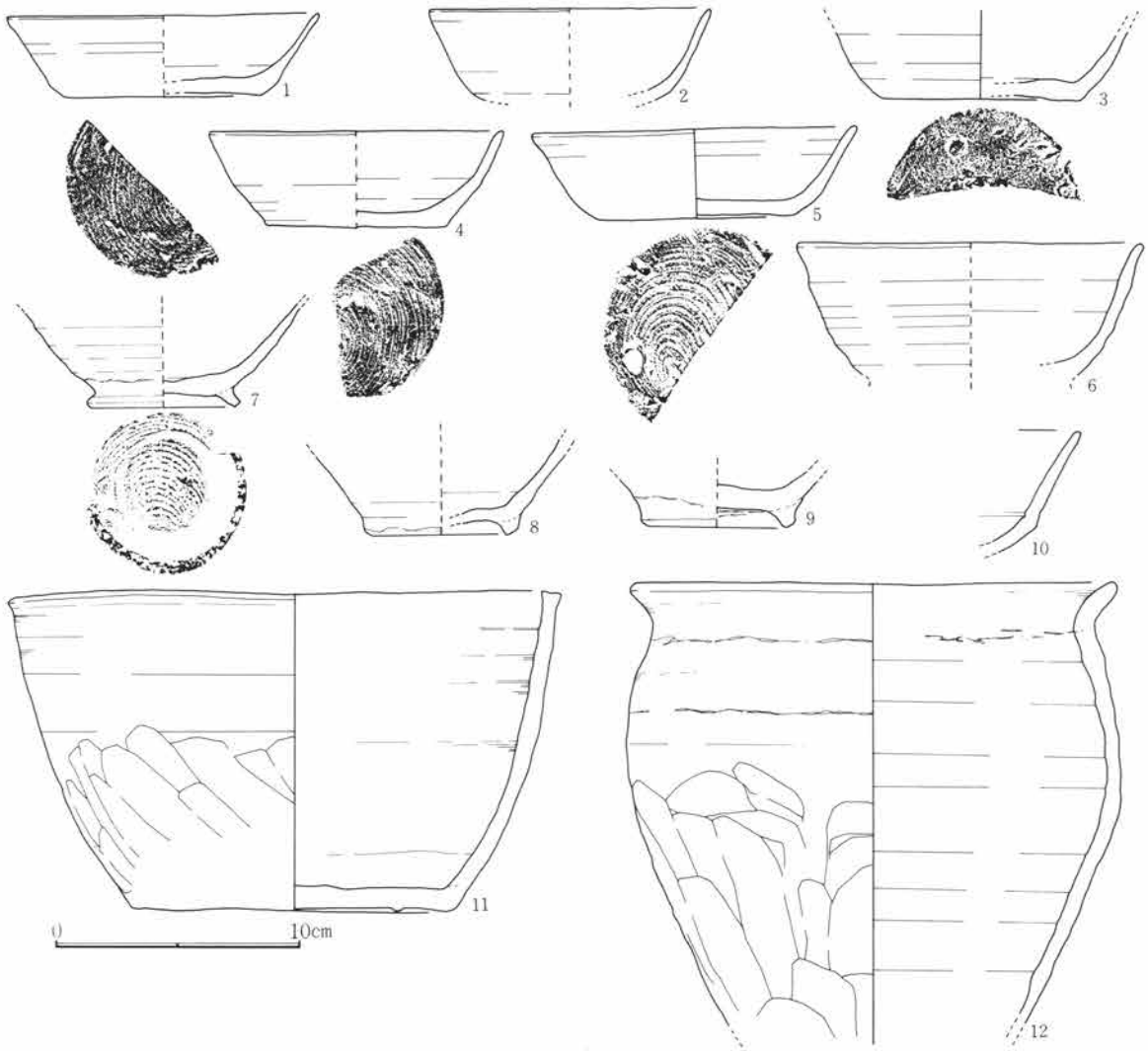


Fig. 155　E８号（１）・E９号（２～12）住居跡出土遺物

E８号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
155—１ 56—１	須恵器 杯	⅓	12.6×8.0 ×3.3	竈	底径大。体部やや外反気味に開き、器肉著しく薄い。口唇部尖がる。轆轤整形回転糸切り。外面燻し焼成気味。	①良好　②灰白　③密

Ｅ９号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
155－２ 56－２	須恵器 杯	口縁～ 体部小片	11.3×－ ×(3.6)	床直	腰部から体部下半丸味強く、上半は直線的。丸底になるか。轆轤整形。腰から底部回転篦削り。	①良好　②灰　③やや密白色微細粒混
155－３ 56－３	須恵器 杯	底部½	－×8.2 ×(2.7)	床直	底径大。轆轤整形。底部回転篦切り後撫調整。	①良好　②灰　③やや密白色微細粒混
155－４ 56－４	須恵器 杯	⅓	11.9×7.4 ×3.8	床直	底径大き目。腰部ややくびれて、体部中位で小さく折れる。体部下半・上半直線的。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟　②鈍い黄橙～灰　③やや密
155－５ 56－５	須恵器 杯	½	13.1×8.0 ×3.5	床直	底径大。腰部に丸味をもち、体部外反気味に開く。轆轤整形右回転糸切り。体部外面吸炭し蓋状器物との重ね焼きか。	①良好　②灰白　③やや密
155－６ 56－６	須恵器 椀	口縁～ 体部小片	14.0×－ ×(5.3)	床直	腰部から体部に丸味をもち、体部上位は緩く外反する。轆轤整形。	①良好　②灰赤　③やや密
155－７ 56－７	須恵器 椀	底部	－×6.2 ×(3.9)	床直	腰部やや丸味をもつ。付高台断面矩形を呈し強く開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③粗
155－８ 56－８	須恵器 椀	底部⅓	－×6.2 ×(3.1)	床直	腰部直線的。付高台作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密白色微細粒混
155－９ 56－９	須恵器 椀	底部	－×6.2 ×(2.3)	床直	付高台作り雑。轆轤整形。転糸切り。	①酸化気味やや軟　②鈍い橙～灰　③粗
155－10 56・10稜	緑釉陶器 綾椀	小片		埋土	腰部で強く折れ、体部は僅かに外反気味。内面屈折部に凹線巡る。内外面篦磨き。釉調淡緑灰を呈し光沢あり。	①良好　②灰　③密
155－11 56－11	須恵器 鉢	½	22.2×13.0 ×12.6	井戸内	径の大きい平底。体部下半は僅かに丸味をもち上半は直線的に立つ。口唇部断面矩形を呈す。胴部内外面回転撫で、外面下半は斜篦削り。底部に３条の下駄痕状凸帯あり。	①酸化良好　②橙～灰　③粗
155－12 56－12	土師器 甕	½底部 欠損	19.6×－ ×(17.6)	床直	肩部に弱い丸味をもち、口縁部短かく強く外屈する。口縁部・胴上半横撫で。胴下半は強い縦篦削り。内面強い横撫	①良好　②橙～褐灰　③やや粗

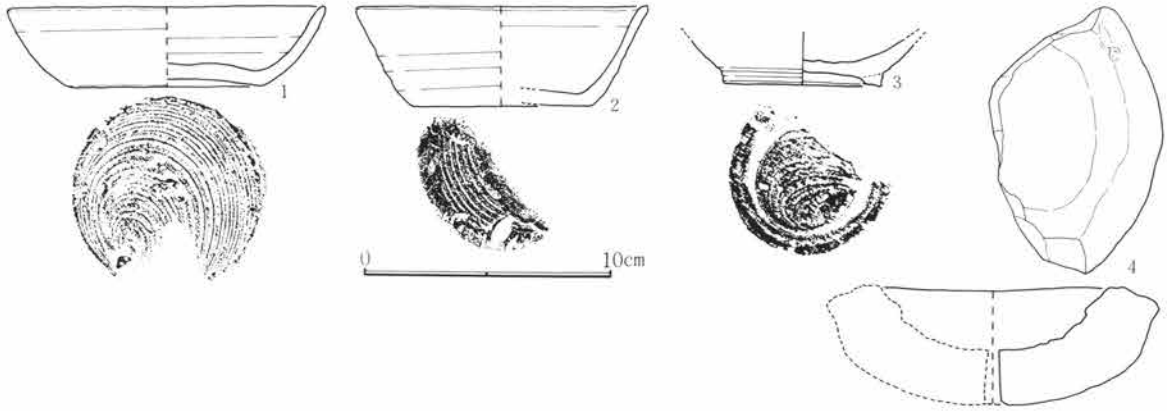


Fig. 156　Ｅ10号（１・２）・Ｅ11号（３・４）住居跡出土遺物

Ｅ10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
156－１ 56－１	須恵器 杯	体部⅚ 欠損	12.5× 7.5×3.3	埋土	底径大きく体部丸味をもち内湾気味に立つ。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
156－２ 56－２	須恵器 杯	¼	11.6×7.2 ×3.9	床直	底径やや大きく体部直線的に立ち深目。腰部に僅かな丸味。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗黒色粒混

Ｅ11号住居跡出土遺物観察表

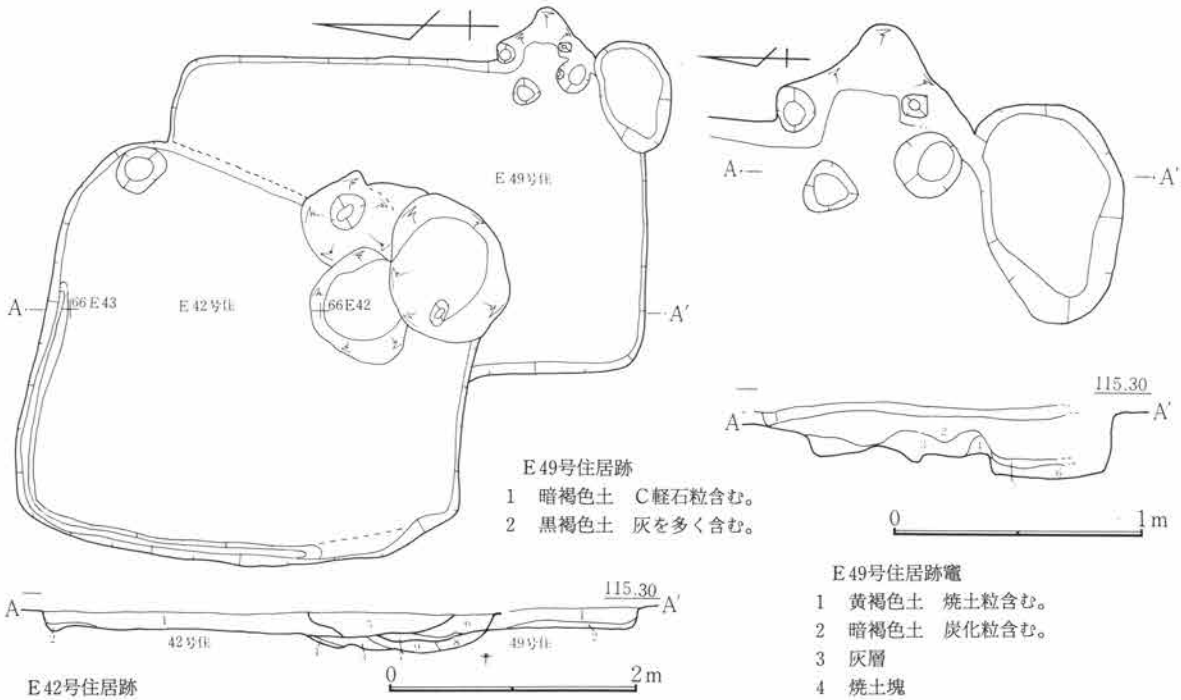
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
156－３ 51－３	須恵器 椀	底部⅔	－×6.2 ×(1.7)	埋土	付高台、低く断面矩形をなす。畳付け段をなす。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化軟　②橙　③やや粗
156－４ 56－４	土製品 坩堝	⅓	13.0×－×(4.5) 厚2.5	埋土	手捏ね土製品。内面赤銅色・黒色に溶解。銅錆付着。	白色細粒混る、やや粗雑な胎土

E42号住居跡（Fig. 157・159、PL. 15・56・57）

E区の北西部に位置し、65・66E41～43の範囲にある。上位面は中世以降に属する溝・さく状遺構等の存在によってかなり削平などの影響を受けている。住居跡東半部はE49号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。この重複のため東壁線の検出は不明瞭なものになってしまった。平面形は南壁線が短かくやや歪んだ方形を呈し、南北長3.5m・東西最大長3.2m・壁高18cmを測る。竈は東壁の南寄りに付設され、主軸方位はおよそN－105°－Eを示す。床面は緩く小さな凹凸が見られ、踏み締まりも堅牢とはいえないが比較的安定している。

竈は遺存状態が悪く、詳細は不明である。先端部が小さく尖がる楕円形の掘形をもち、東壁線を掘り込む部分は僅かである。竈前面には径90×60cm・深さ10cm前後の落ち込みが検出され、底面には灰混り黒褐色土の堆積が認められるが、上面床土が覆っていることから床下土坑に類するものと考えられる。南東隅には径1×1.5m・深さ15cmの楕円形土坑が検出されている。位置的には当住居跡に付随する貯蔵穴とも考えられるが、その規模や、壁線を大きく逸脱するあり方、さらに不明確ではあるが土層観察から当跡と重複する土坑の可能性が強く、竈もこれによって消失している部分が多いと考えられる。なお出土遺物の多くはこの土坑より検出されている。壁下の溝は北壁から西壁にかけて部分的に検出されている。

出土遺物には須恵器杯・椀・羽釜・灰釉陶器のほか青磁小片・砥石などがある。



E42号住居跡
1　黒褐色土
2　黒褐色土　粘性あり。
3　暗褐色土　Loam 粒含む（床下）。
4　黒褐色土　灰を多く含む（床下）。
5　暗褐色土　Loam 粒含む（土坑）。
6　暗褐色土　粘性あり（土坑）。
7　暗褐色土　Loam 粒含む（土坑）。
8　黒褐色土　Loam 粒含む（土坑）。
9　黒褐色土　灰を多く含む（土坑）。

Fig. 157　E42・49号住居跡

Fig. 158　E49号住居跡竈

E49号住居跡（Fig. 158・160、PL. 15・57）

E42号住居跡と北西部で重複し、これより旧い時期の所産である。64～66E40～42の範囲にあるが、E42号住居跡によって北西部は消失している。平面形は南北に長軸をもち比較的整った方形を呈する。南北長3.8m・東西長2.5m・壁高約20cmを測る。竈は東壁の南側に大きく偏って付設され、主軸方位はおよそN－90°

―Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが、踏み締まりはやや弱い。

竈は東壁を掘り込み、頂部をやや細めて煙道部を形成していると考えられる。袖部左右には袖材を埋設したと思われる小穴が穿たれる。火床にはさほど明瞭な硬質赤化面は形成されず比較的厚い灰層の堆積が見られた。竈開口部幅約60cm・奥行き50cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり90×55cm・深さ15cmの楕円形を呈し、壁線より外側を迫り出している。

出土遺物は小量で、須恵器椀などがある。

Fig. 159　Ｅ42号住居跡出土遺物

Ｅ42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
159－1 56－1	須恵器 杯	⅓	12.3×5.4 ×3.6	埋土	体部直線的で上半は緩く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰白 ③粗
159－2 56－2	須恵器 杯	⅓	12.6×6.0 ×4.2	埋土	腰部直線的に立ち体部中位でくびれ上半は緩く外反して開く。作り雑で歪み大きい。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味軟　②鈍い橙　③やや粗
159－3 56－3	須恵器 杯	⅓	13.4×7.7 ×4.7	埋土	底径大きく体部直線的でやや深目。歪み大きい。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
159－4 56－4	須恵器 椀	¼	13.2×6.0 ×5.1	埋土	体部やや深目で直線的。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟　②淡赤橙　③粗
159－5 56－5	須恵器 椀	小片	12.0×6.2 ×5.9	埋土	体部深い。直線的で外傾度小さい。付高台断面丸味のある矩形。轆轤整形。	①良好　②灰白　③粗
159－6 57－6	須恵器 椀	完形	12.7×7.2 ×5.5	床下土坑	腰部張りなく、体部深目で直線的に立つ、付高台外面直立轆轤整形粗条回転糸切り、燻焼成か内面に火襷状痕。肉厚	①良好　②暗灰～灰白　③やや密細砂混
159－7 57－7	須恵器 椀	½	13.8×6.6 ×5.6	床下土坑	体部深目で直線的に開く。付高台畳付内側は段をなす。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②褐灰　③やや粗砂多混
159－8 57－8	須恵器 椀	⅓	12.7×6.9 ×4.6	埋土	体部丸味強く張る。上半は強く外傾して開く。口唇部丸い。付高台断面幅広な矩形。轆轤整形回転糸切り。肉厚。	①酸化軟　②鈍い褐 ③やや密
159－9 57－9	須恵器 椀	⅓	12.2×6.4 ×4.9	床下土坑	体部中位やや張る。上半は緩く外反気味。付高台低く幅広で雑な作り。轆轤整形。回転糸切り。肉厚。	①良好　②灰　③粗 砂多混
159－10 57－10	灰釉陶器 椀	体部 小片	12.2×－ ×(3.0)	埋土	小型椀か。体部丸味をもち、口唇部丸まって小さく外屈。内外面施釉。腰部回転篦削り。	①良好　②灰　③緻密
159－11 57－11	灰釉陶器 皿	底部½	－×5.4 ×(1.5)	埋土	腰部丸味をもつ。高台やや低く断面丸い。内外面施釉。腰部回転篦削り。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
159－12 57－12	青磁 輪花椀？	口縁部 小片		床下土坑	口唇部の輪花の痕跡、内面花弁状の片刃彫り。釉は薄く明青灰色を呈す。	①良好　②灰白　③密
159－13 57－13	須恵器 小型甕	½	11.0×7.0 ×10.5	竈	胴部上半部に最大径をもち、僅かに張る。口縁部短かく小さく外反して立つ。口唇部丸い。轆轤整形左回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや密
159－14 57－14	土師器 甕	下半¼	－×3.5 ×(10.0)	埋土	胴部縦篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
159－15 57－15	羽釜	口縁～ 胴部¼	18.0×－×(9.9) 鍔径22.1	竈・床下土坑	胴部やや丸く張る。口縁部短かく外反気味に内傾。口唇上端平坦。鍔部幅広な三角でやや上向き、外面回転撫で調整	①酸化気味良好　②灰白　③やや粗
159－16 57－16	羽釜	口縁～ 胴部片	21.3×－×(12.0) 鍔径24.5	埋土	胴部やや丸く張る。口縁部短く内傾。口唇部矩形で上端平坦。鍔部三角で水平。外面回転調整痕強い。	①酸化やや軟　②橙 ③やや密小石混
159－17 57－17	石製品 砥石		長・幅・厚 (5.7)×4.7×2.4	埋土	長方形砥石の破損品。表裏・両側面使用。破損部も再利用刃痕あり。139.0g	流紋岩

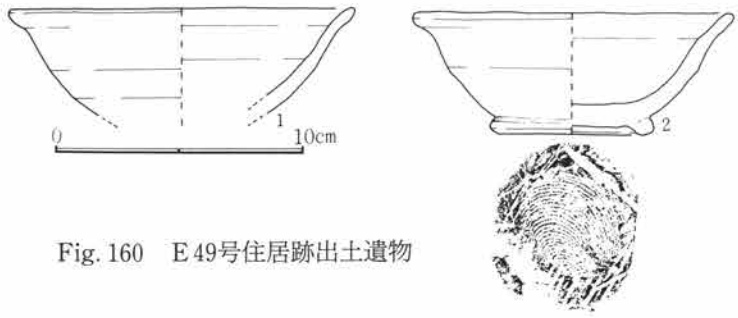


Fig. 160　Ｅ49号住居跡出土遺物

Ｅ49号住居跡出土遺物観察表

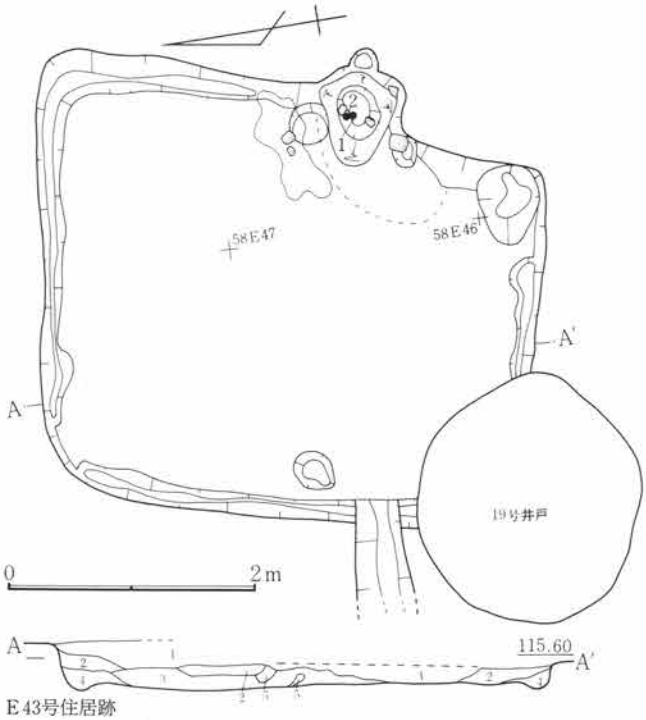
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
160－1 57－1	須恵器 椀	体部⅓	13.7×－ ×(4.2)	埋土	体部下半丸味強く、上半は緩く外傾して開く。轆轤整形。	①酸化気味軟　②鈍い黄橙　③やや密
160－2 57－2	須恵器 椀	½	12.7×6.5 ×4.8	埋土	腰部から体部中位に丸味。上半は外傾して開く。口唇部丸い。付高台作り雑。轆轤整形右回転糸切り。燻焼成。肉厚	①良好　②褐灰～灰白　③やや粗細砂混

Ｅ43号住居跡（Fig. 161～163、PL. 15・57）

Ｅ区北部に位置し、57～59Ｅ45～47の範囲にある。南西隅にはＥ19号井戸跡があり、壁線の一部が消失している。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈するが南壁に対し北壁線が長くやや歪んでいる。南北長4.1m・東西長3.5m・壁高約30cmを測る比較的掘形の明瞭な竪穴住居跡である。竈は東壁の僅かに南側に付設され、主軸方位はＮ－113°－Ｅを示す。床面は緩く波うつが Loam 面を基盤にするため極めて安定している。

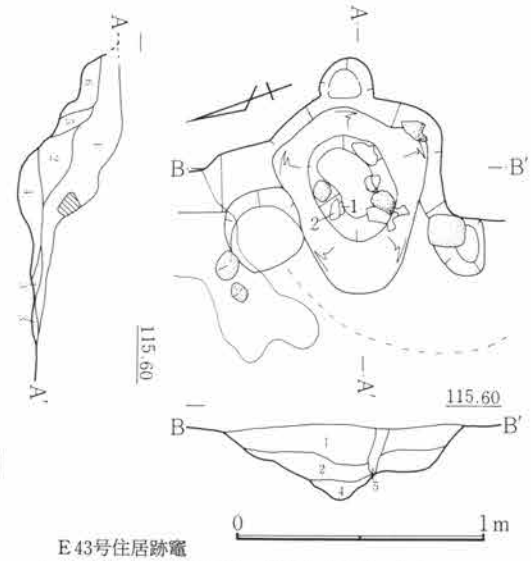
竈は東壁を方形気味に掘り込み、先端部を丸く小さく突出させ煙道孔を設ける。東壁線上の袖部には、袖材の埋設痕と考えられる小穴が穿たれ、右袖部には凝灰岩質の小塊が残されている。燃焼部は擂鉢状に窪み、最下部には、灰・炭化粒・焼土粒・Loam 小塊の混合層が充填されている。火床面である硬質赤化面は形成されていないが、やや厚目の灰層が堆積する。袖部内法約50cm・燃焼部奥行き75cm・煙道部は15cm程突出する。南東隅に小穴が検出されているが、貯蔵穴としては規模的にそぐわない。四壁下には幅10cm前後、深さ５cmの明瞭な溝が巡る。

出土遺物は土師器杯・須恵器杯・椀があり、竈内から主に出土している。



Ｅ43号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を含み締まりなし。
2　暗褐色土　粘性あり。
3　暗褐色土
4　暗褐色土　Loam 小塊を含む。
5　Loam 塊

Fig. 161　Ｅ43号住居跡



Ｅ43号住居跡竈
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒・焼土粒を多量に含む。
2　暗褐色土　焼土粒・灰を多量に含む。
3　灰層
4　暗褐色土　灰・炭化粒・焼土粒・Loam 小塊混合層（火床下）。
5　焼土塊
6　暗褐色土　焼土塊を含む。

Fig. 162　Ｅ43号住居跡竈

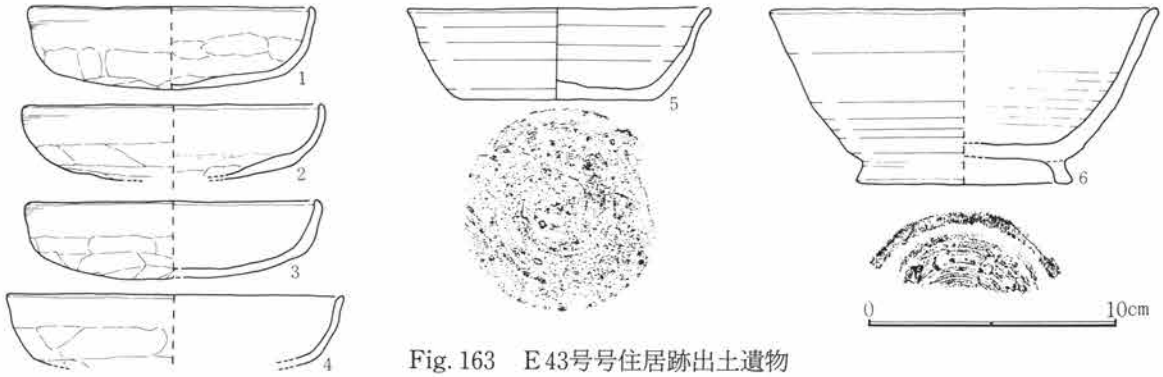


Fig. 163　Ｅ43号号住居跡出土遺物

Ｅ43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
163－1 57－1	土師器 杯	½	11.2×－ ×3.3	竈・ －17	平底気味。体部内湾気味に立ち、口唇部内屈。口縁部横撫で。体部指頭痕後篦撫で。底部篦削り。内面指頭痕。	①良好　②橙　③やや密
163－2 57－2	土師器 杯	¼	11.9×－ ×(3.0)	竈・ －8.5	扁平な丸底。体部内湾して立つ。口縁部横撫で。体部篦撫で。底部篦削り。内面見込部指頭痕著しい。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
163－3 57－3	土師器 杯	¼	11.8×－ ×3.1	埋土	扁平な丸底。体部内湾して立つ。口縁部横撫で。体部篦撫で。底部篦削り。内面見込部指頭痕。黒色付着物あり。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
163－4 57－4	土師器 杯	口縁部 ¼	14.0×－ ×(3.0)	埋土	平底気味の底部か。体部内湾して立ち上半は緩く外反。口縁部横撫で。体部篦撫で。底部指頭痕目立つ。	①良好　②鈍い橙 ③やや粗
163－5 57－5	須恵器 杯	¾	12.0×7.4 ×3.7	埋土	腰から体部下半丸味をもち、上半は強目に外反。轆轤整形。底部右回転篦削り。	①良好　②灰　③密
163－6 57－6	須恵器 椀	⅓	15.4×8.6 ×7.0	埋土	体部丸味をもち張り気味で深い。口縁部緩く外反。付高台やや高く強く張り断面矩形。内面コテ痕か。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗小石混る

Ｅ51号住居跡（Fig. 164～166、PL. 15・57）

Ｅ区の南東隅に位置し、36・37Ｅ２～４の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ比較的小規模な方形を呈し、西壁線南が僅かに歪む。南北長３m・東西長2.25m・壁高15cmを測る。竈は東壁僅かに南へ寄って付設され、主軸方位はＮ－78°－Ｅを示す。床面は平坦をなし、踏み締まりもほぼ良好である。

竈は東壁を楕円形に掘り込み、左右袖部には袖材の埋設痕と考えられる小穴が穿たれている。燃焼部内及び竈前面にかけ、崩落焼土が多量に残されているが、側壁部や火床には硬質赤化面が形成されている。また燃焼部中央の火床の一部が乱れ、下位より支脚を据えたと考えられる小穴が検出された。しかし、石材などの竈構築に用いた材は認められない。竈袖部埋設痕の内法約50cm・燃焼部奥行き約90cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径50cm・深さ12cmの円形を呈す。

出土遺物は極めて少量で、土師器杯・甕などがある。

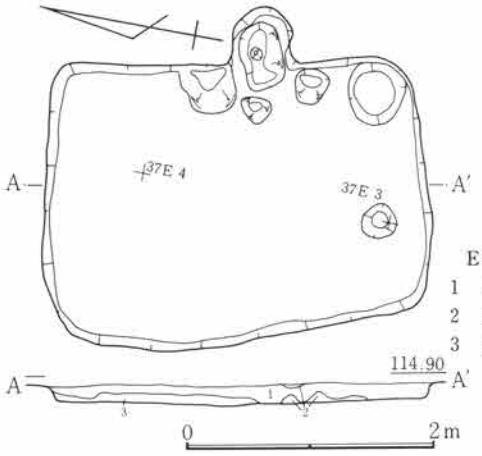


Fig. 164　Ｅ51号住居跡

Ｅ51号住居跡
1　黒褐色土　砂質。
2　黒褐色土　粘性塊状。
3　黒褐色土　焼土粒・炭化粒含む。

Ｅ51号住居跡竈
1　黒褐色土　焼土粒・炭化粒含む。
2　崩落焼土
3　焼土　　硬質赤化面（火床）。
4　黒褐色土　締まりなし。

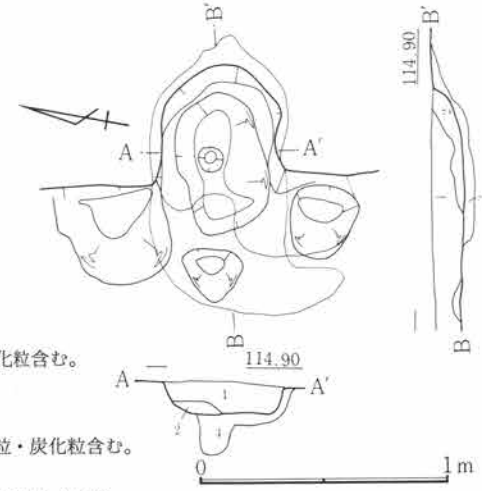


Fig. 165　Ｅ51号住居跡竈

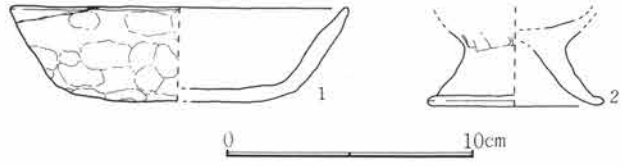


Fig. 166　Ｅ51号住居跡出土遺物

Ｅ51号住居跡出土遺物観察表

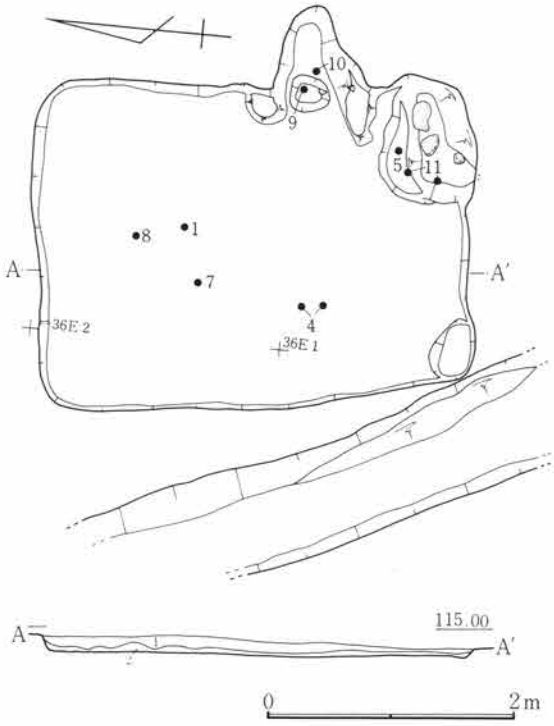
Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
166－1 57－1	土師器 杯	⅓	14.0×8.6 ×3.3	埋土	平底気味。体部直線的に開き、口唇部細る。外面指頭痕強く凹凸著しい。上半に巻上げ痕。底部砂底。	①良好　②赤褐　③やや密
166－2 57－2	土師器 台付甕	台部½	－×7.0 ×(3.4)	埋土	小型の台部、ハの字状に開く。端部丸まり撥ね気味。腰部篦痕。台部横撫で。器肉厚い。	①良好　②赤褐　③やや密

Ｅ52号住居跡（Fig. 167～169、PL. 16・58）

Ｅ区の南東隅部に位置し、36～38Ｅ０～２の範囲にある。北側にはＥ51号住居跡が間近に位置する。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、南壁がやや短いため西壁線に歪みが生じている。南北長3.5m・東西長2.6m・壁高15cmを測る。竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はＮ－85°30′－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりも良好で安定している。

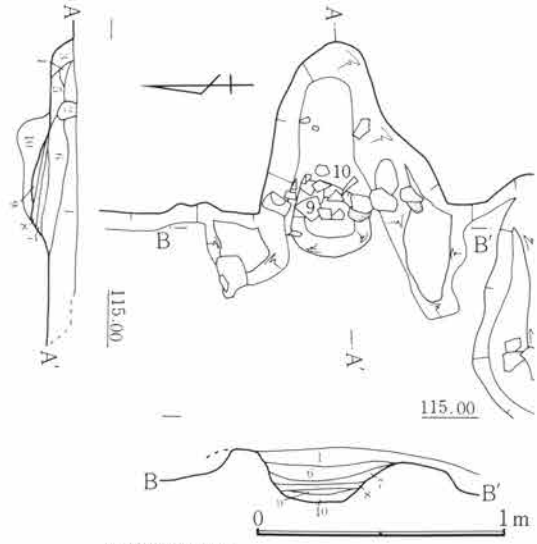
竈は東壁をやや大きく楕円形に掘り込む。燃焼部は僅かに窪み、先端へ向い緩い傾斜をもつ。火床には硬質赤化面が形成され、黒色灰層が薄く堆積する。袖材などの埋設痕は認められず、石材も検出されていないが、竈両袖にあたる部分に若干の高まりが認められるところから、本来は基盤層を掘り残し住居内に袖部を突出させる形態をもつと考えられる。袖部内法幅50cm・奥行き約１mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、0.8×１m・深さ10cmの不整楕円形を呈す。

出土遺物は竈内や貯蔵穴内に比較的多く検出され、須恵器杯・椀・灰釉陶器・土師器甕などがある。



Ｅ52号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を多く含み粘性なし。
2　黒褐色土　炭化粒を少量含みやや粘性あり。

Fig. 167　Ｅ52号住居跡



Ｅ52号住居跡竈
1　黄褐色土　焼土粒を多く、Ｃ軽石を含む。
2　焼土塊
3　暗褐色土　Ｃ軽石・焼土粒を含む。
4　黄褐色土塊
5　暗赤褐色土　焼土小塊含む。
6　暗褐色土　焼土小塊・灰を含む。
7　黒褐色土　灰多量・焼土粒少量含む。
8　黒色灰層
9　焼土層（火床）。
10　黄褐色土　Loam 小塊と灰層が互層。

Fig. 168　Ｅ52号住居跡竈

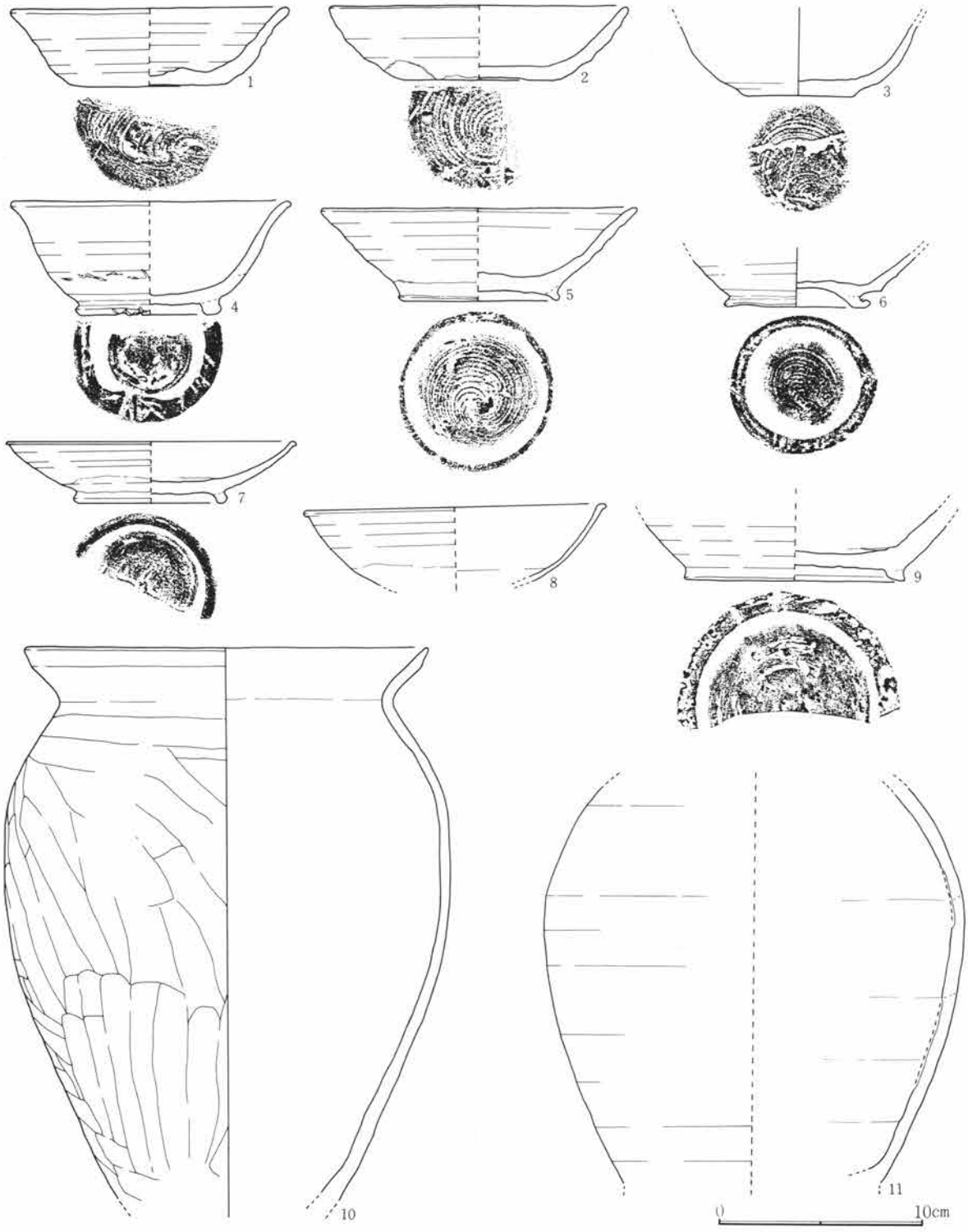


Fig. 169　E52号住居跡出土遺物

E52号住居跡出土遺物観察表（1）

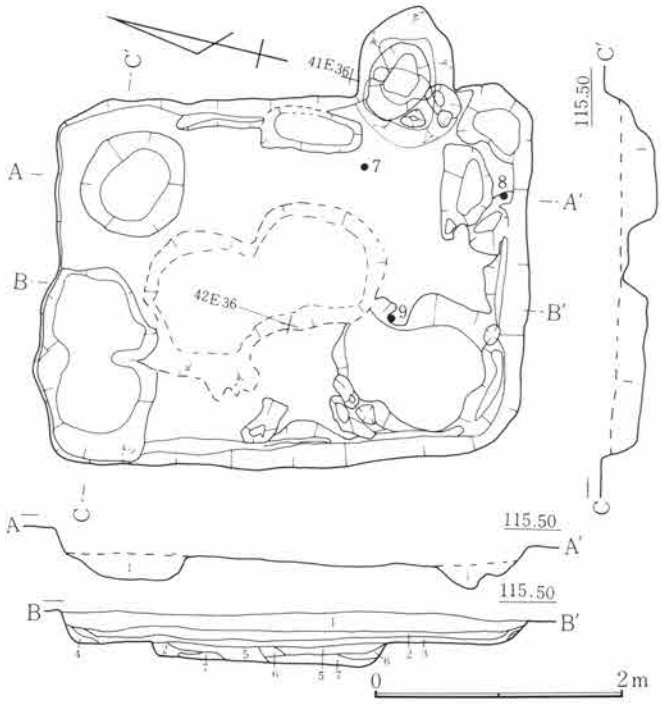
Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
169－1 58－1	須恵器 杯	⅓	13.5×7.5 ×3.8	床直	腰部やや張る。体部上半は緩く外反。口唇部丸い。轆轤整形。回転糸切り。周縁篦削りか。外面轆轤目強い。肉厚。	①良好　②灰白　③やや密
169－2 58－2	須恵器 杯	½	14.5×7.5 ×3.6	埋土	体部浅く、内湾気味で大きく開く。底径大。轆轤整形。回転糸切り。肉厚。	①良好　②灰白　③やや粗

E 52号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
169－３ 58－３	須恵器 杯	底部 ½	－×5.4 ×(3.6)	床直	底径小さく腰部の丸味強い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
169－４ 58－４	須恵器 椀	½	13.5×7.1 ×5.4	床直	腰部から体部丸味をもち張る。上半部は外反して開く。付高台幅広。轆轤整形。回転糸切り。	①良好軟　②灰白　③やや密
169－５ 58－５	須恵器 椀	⅓	15.3×7.8 ×4.5	貯蔵穴	体部直線的で大きく開き浅い。付高台低く肉薄。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや粗石英粒多混
169－６ 58－６	須恵器 椀	底部	－×7.1 ×(2.7)	埋土	腰部直線的。付高台作り雑で端部上方へ撥ねる。轆轤整形。右回転糸切り。肉薄で底部著しい。	①酸化気味軟　②灰白　③密
169－７ 58－７	灰釉陶器 皿	¼	14.0×7.4 ×3.0	床直	体部丸味をもち開く。口唇部小さく外屈し端部尖がる。高台外稜丸く矩形。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期	①良好　②灰　③やや密
169－８ 58－８	灰釉陶器 椀	小片	14.6×－ ×(3.7)	床直	体部丸味をもち、口唇部は小さく外屈する。内外面刷毛塗り施釉。肉薄。	①良好　②灰　③やや密
169－９ 58－９	須恵器 瓶	底部½	－×10.6 ×(3.5)	竈	付高台、低く断面矩形。見込部、腰部に自然釉か。腰部回転箆削り。	①良好　②灰～灰褐　③密
169－10 58－10	土師器 甕	½底部 欠損	19.7×－ ×(26.5)	竈	やや長胴を呈し上半部に最大径をもち張る。口縁部くの字状に外傾し口唇部は稜をなして外傾。口縁部横撫で。肩部横位、胴部上半は斜位、下半は縦位箆削り。	①良好　②橙　③やや粗砂多混
169－11 58－11	須恵器 瓶	胴部⅓	－×－ ×(19.0)	貯蔵穴	胴部やや丸味をもち胴最大径は上半にある。内外面の器表剝離が著しい。燻し焼成気味。	①酸化気味軟　②暗灰　③やや密

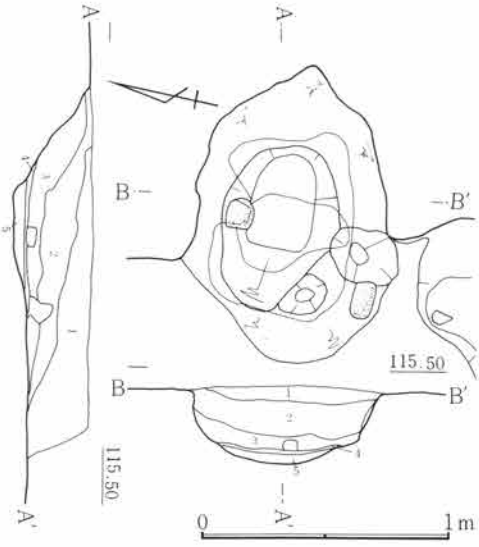
E 111号住居跡（Fig. 170～172、PL. 16・58・59）

E区の東部やや北寄りに位置し、40～42E 35～37の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ、比較的整った方形を呈する。南北長3.9m・東西長2.9m・壁高25cmを測る。竈は東壁の南側に偏って付設され、主軸方位はN－77°30′－Eを示す。床面は床下土坑の存在が



E 111号住居跡
1　暗褐色土　C軽石・焼土粒を多量に含む。
2　暗褐色土　C軽石・焼土粒を少量含む。
3　黒褐色土　やや粘性あり。
4　暗褐色土　やや粘性あり。
5　暗褐色土　C軽石多量・焼土粒僅かに含み堅く締まる（床下）。
6　暗褐色土　細粒C軽石含み締まり粘性強い（床下）。
7　暗褐色土　粘性褐色土を塊状に含み粘性強い（床下）。

Fig. 170　E 111号住居跡



E 111号住居跡竈
1　暗褐色土　C軽石・焼土粒・炭化物を多量に含む。
2　暗褐色土　焼土小塊・炭化粒を多量に含む。
3　焼土塊　炭化粒混合層。
4　黒灰層
5　黒褐色土　焼土粒・黒灰を少量含む。

Fig. 171　E 111号住居跡竈

予想され、緩く大きな起伏をなすが踏み締まりは良好である。

竈は東壁を先端部が小さく細まる楕円形に掘り込んで構築されるが、袖部などの痕跡は明確でなく、石等の構築材も検出されていない。火床には硬質赤化面は形成されず、薄い黒色灰層の堆積が見られ、燃焼部全体は崩落焼土を主体とする暗褐色土で埋まっていた。燃焼部幅約80cm・奥行き95cmを測る。南東隅には径65×80cm・深さ15～16cmの楕円形を呈す貯蔵穴が検出されている。床下には円形ないしは楕円形の土坑が5基検出され、いずれも焼土粒を若干含み粘性のある暗褐色土が充填されている。

出土遺物には土師器杯・須恵器杯・椀・蓋などのほか鉄製品3点がある。

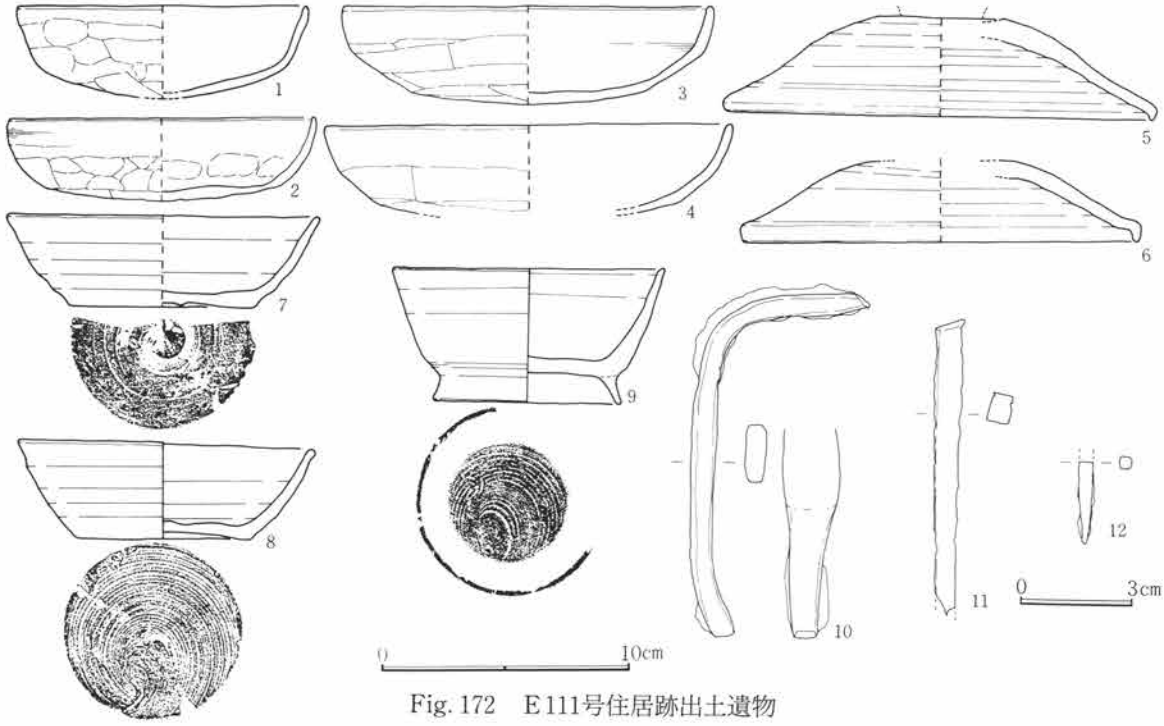


Fig. 172　E111号住居跡出土遺物

E111号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
172－1 58－1	土師器 杯	⅓	11.6×－ ×(3.7)	床下・ 埋土	丸底を呈し深目。体部内湾気味に開き、上半はくびれて直立。口縁部横撫で。体部不鮮明な指頭痕。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
172－2 58－2	土師器 杯	½	12.3×－ ×3.3	床下・ 埋土	扁平な丸底。体部内湾して立つ。口縁部横撫で。体部指頭痕後篦撫で。底部篦削り。内面指頭痕で凹凸著しい。	①良好　②鈍い橙　③やや粗砂粒混
172－3 58－3	土師器 杯	⅓	14.2×－ ×3.9	床下・ 埋土	扁平な丸底。体部下半は直線的で強く開き、上半は内湾して立つ。口縁部横撫で。体部篦足の長い横削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
172－4 58－4	土師器 杯	口縁部 破片	16.1×－ ×(3.5)	埋土	扁平な丸底。体部下半は外傾し、上半は内湾気味に開く。口縁部横なで。体部篦足の長い横削り。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
172－5 58－5	須恵器 蓋	½	17.2×－ ×(3.9)	竈・ 埋土	天井部やや丸味をもち、口唇部は短かく直に折れる。天井部から体部上半は右回転篦削り。轆轤整形。摘み欠損。	①良好　②灰　③やや粗
172－6 58－6	須恵器 蓋	小片	15.7×－ ×(3.2)	埋土	体部直線的に開く。口唇部強く折れて直立しやや長い。天井部から体部上半は右回転篦削り。轆轤整形。摘み欠損。	①良好　②灰白　③やや密
172－7 58－7	須恵器 杯	⅔	12.3×7.5 ×3.6	埋土・ ＋9	腰部僅かにくびれ、体部やや丸味をもって開く。口唇部直線的に外傾。轆轤整形。底部右回転篦切り。	①良好　②灰　③やや密黒色粒混
172－8 58－8	須恵器 杯	完形	11.7×6.8 ×4.0	埋土・ ＋6.5	体部丸味をもち内湾気味に開く。口唇部僅かにくびれて丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
172－9 58－9	須恵器 小椀	ほぼ完 形	10.9×7.5 ×5.4	床直・ ＋4.5	腰部張る。体部直線的に立つ。付高台やや高くハの字状に張る。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
172－10 59－10	鉄製品 不明	両端欠 損	長・幅・厚 12.3×1.5×0.5	埋土	厚味のある板状を呈し下半はやや細まる。	

Ｅ111号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No PL. No	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
172—11 59—11	鉄製品 角　釘	身部先 端欠損	長・幅・厚 (7.8)×0.8×0.6	埋土	頭部形状折頭式の角釘か。	
172—12 59—12	鉄製品 角　釘	身部先 端	長・幅・厚 (2.2)×0.35×0.35	埋土	角釘	

Ｅ112号住居跡（Fig. 173～175、PL. 16・59）

Ｅ区の北東部に位置し、38～40Ｅ45～47の範囲にある。Ｅ122号住居跡との重複部分が大きく、調査過程では重複の認識がおくれ、同時に検出してしまった。このため、Ｅ122号住居跡より新しい時期の所産にもかかわらず掘形の浅い当住居跡は北壁から西壁にかけての立ち上がりを消失してしまった。平面形は方形を呈すると考えられ、規模は東西長３ｍ・南北長2.8ｍ程度であろう。壁高は10cm前後である。竈は東壁の大きく南に偏って付設され、主軸方位はおよそＮ—74°—Ｅを示す。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。

竈は東壁を楕円形に掘り込むが袖部などは検出されていない。燃焼部は崩落焼土塊で埋まり、火床は硬質赤化面が形成される。燃焼部幅60cm・奥行き70cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、竈に接して位置する。径80×50cm・深さ25cmを測る。貯蔵穴の埋土には灰層などの流入はみられない。竈前方にはやや大型の円形土坑が検出され当初Ｅ122号住居跡の貯蔵穴とも考えられたが、Ｅ122号住居跡の壁線を大きくはずれ、また竈の掘形の一部を切り込んでいたことから、当住居跡の床下土坑であることが判明した。径1.2×１ｍ・深さ24cmを測る。

出土遺物は須恵器杯・椀の他、灰釉陶器が目立ち、鉄釘なども検出されている。

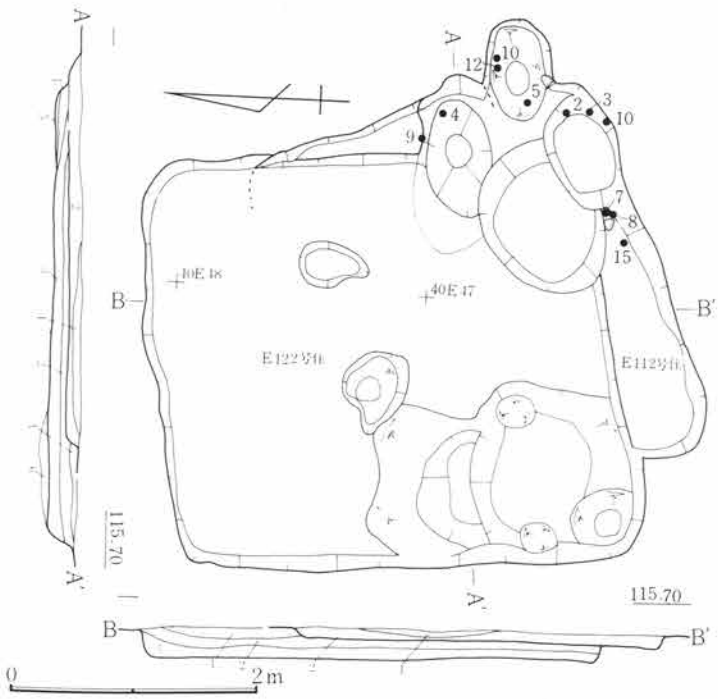


Fig. 173　Ｅ112・122号住居跡

Ｅ112号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を多量に含む。
2　暗褐色土　Ｃ軽石粒を含みやや粘性あり。

Ｅ112号住居跡竈
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を含む。
2　崩落焼土
3　焼土粒・灰混合層
4　黒灰層
5　暗褐色土　Ｃ軽石粒・焼土粒含む（掘形）。

Ｅ122号住居跡（Fig. 173・174、PL. 16）

Ｅ112号住居跡と重複し、39～41Ｅ46～48の範囲にある。調査当初、Ｅ112号住居跡との重複にもかかわらず平面形を一体のものとして検出してしまった。しかしＥ112号住居跡の掘形調査に及んで、床下より当住居跡の竈の痕跡を確認するに至ったものである。Ｅ112号住居跡との新旧関係は当跡が旧い時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長3.7ｍ・東西長3.3ｍ・壁高は20cmを測る。竈は東壁の南側に付設され、主軸方位はＮ—82°—Ｅを示す。床面は南西部が不安定な面をなすが、ほぼ平坦をなす。

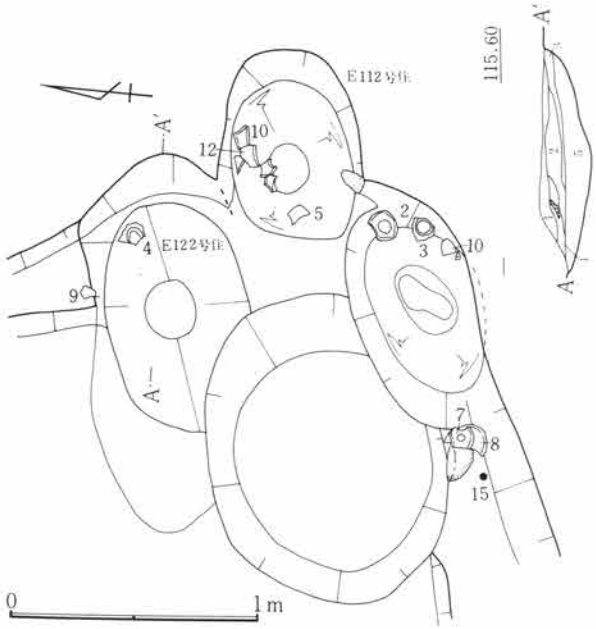


Fig. 174　E112・122号住居跡竈

竈は東壁を楕円形で擂鉢状に掘り窪めるが、袖部などの形跡は検出されなかった。燃焼部底面には灰層の堆積が認められたものの火床の硬質赤化面は顕著には形成されていない。燃焼部幅55cm・長さ85cmを測る。また、一部はE112号住居跡の床下土坑によって消失している。住居跡南西部の不安定な床面下には不整方形を呈す床下土坑状の落ち込みが検出されている。

出土遺物は少量で土師器・須恵器の小片が検出されたのみである。

E122号住居跡
1　暗褐色土　C軽石粒含む。
2　暗褐色土　小粒C軽石を含み締まりあり。
3　暗褐色土　炭化粒を含み粘性あり。
4　崩落焼土（竈）
5　灰層（竈）
6　褐色土　　C軽石粒含み粘性あり（掘形）。

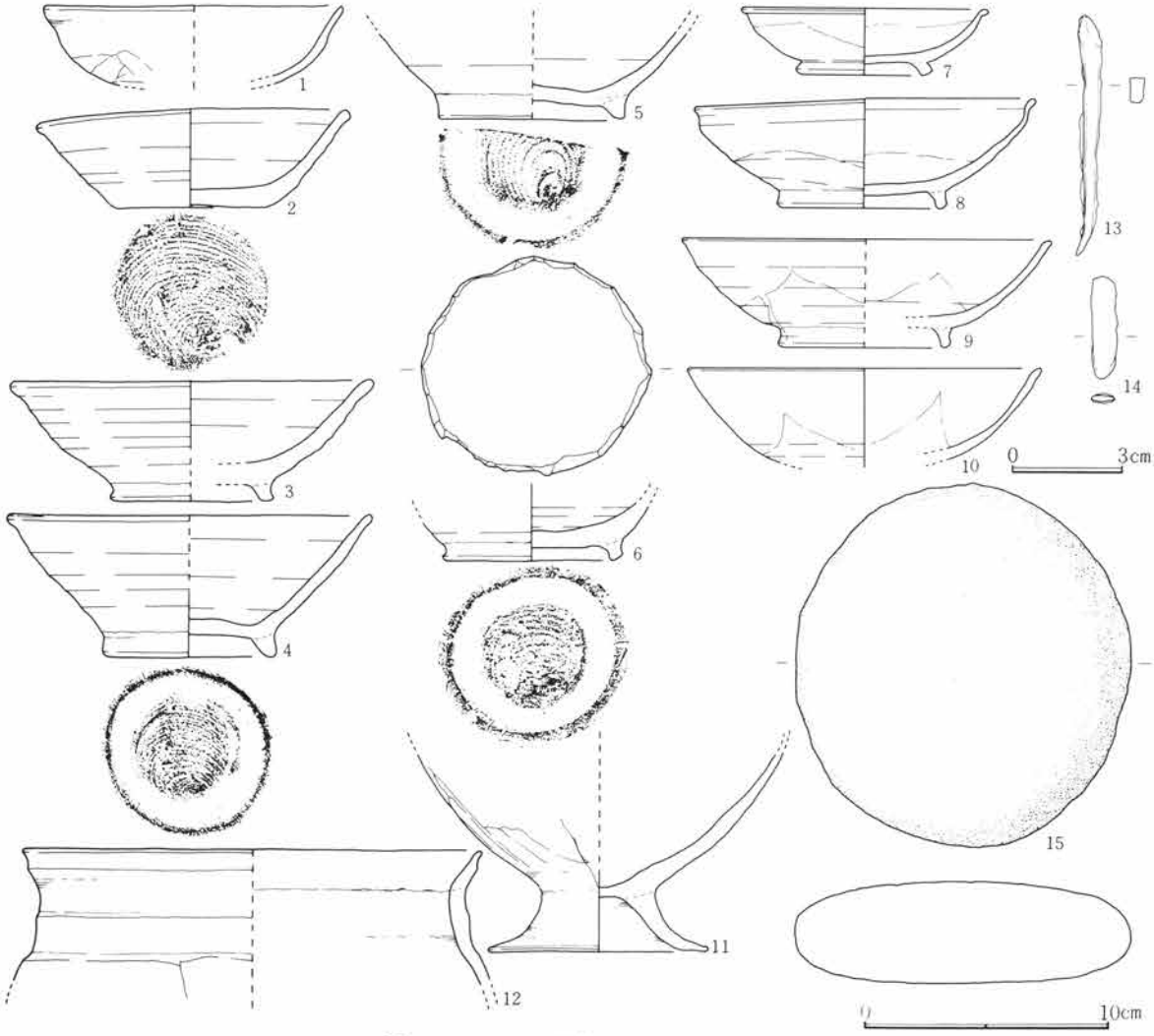
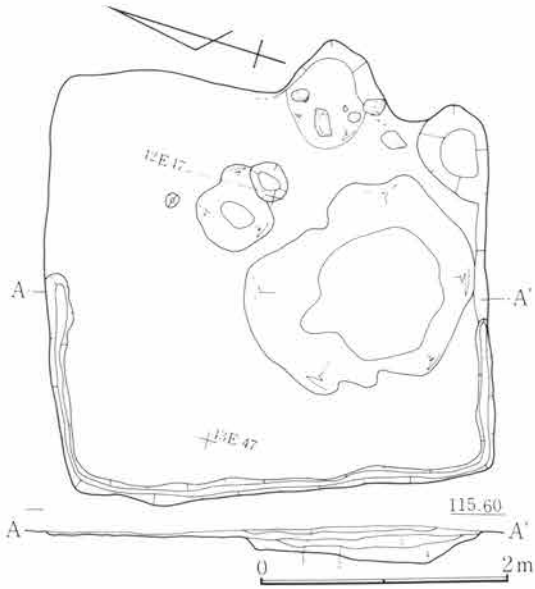


Fig. 175　E112号住居跡出土遺物

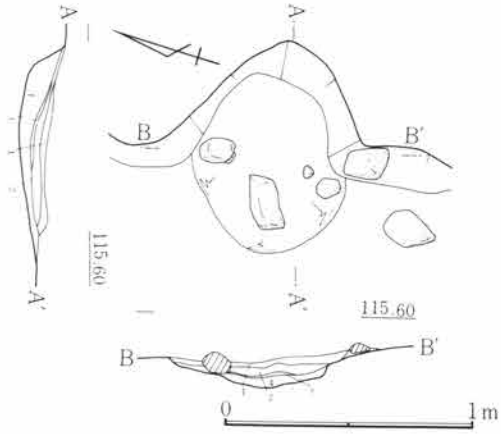
Ｅ112号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
175－1 59－1	土師器 杯	¼	12.0×－ ×(3.1)	埋土	体部下半は丸味強く、中位で緩くくびれて上半は内湾気味に開く。体部上半横撫で、下半は弱い篦撫で。	①堅い　②暗赤褐 ③密
175－2 59－2	須恵器 杯	½	12.6×6.0 ×4.0	貯蔵穴・ ＋10	体部直線的。器肉厚い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗白色微細粒混
175－3 59－3	須恵器 椀	⅓	14.7×6.6 ×4.0	埋土	腰部にやや丸味をもち、体部上半は緩く外反して開く。体部浅目。付高台断面丸味のある矩形。轆轤整形。	①良好　②灰　③粗
175－4 59－4	須恵器 椀	½	14.8×7.0 ×5.6	竈・貯蔵 穴・＋9.8	体部直線的でやや深目。付高台幅広で断面丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
175－5 59－5	須恵器 椀	底部	－×7.6 ×(3.5)	竈・貯蔵 穴	腰部に僅かな丸味をもつ。付高台幅広で断面丸味のある三角。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③粗
175－6 59－6	須恵器 椀	底部	－×7.2 ×(2.1)	貯蔵穴・ 埋土	器肉厚い。腰部丸く張る。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
175－7 59－7	灰釉陶器 椀	完形	10.0×5.5 ×2.7	床直・ 埋土	体部丸味強く、口唇部丸まって強く外屈。高台断面矩形。内外面漬け掛け施釉。光ケ丘１号～大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
175－8 59－8	灰釉陶器 椀	½	13.8×6.9 ×4.4	床直	体部に丸味をもち、口唇部強くくびれて外反。三ケ月高台内外面刷毛塗り施釉。腰部回転篦削り。光ケ丘１号窯式期	①良好　②灰　③密
175－9 59－9	灰釉陶器 椀	⅓	15.0×7.0 ×4.4	床直	体部丸味をもつ。高台断面丸い。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
175－10 59－10	灰釉陶器 椀	¼	14.2×－ ×(3.8)	竈・ ＋７～８	体部丸味をもつ。内外面漬け掛け施釉。腰部回転篦削り。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
175－11 59－11	土師器 台付甕	口縁欠 損⅓	－×9.0 ×(8.0)	埋土	胴部やや丸味をもつ。脚端部水平に開く。胴部縦篦削り。台部横撫で。	①良好　②鈍い橙 ③やや粗
175－12 59－12	土師器 甕	口縁～ ⅓	18.4×－ ×(2.2)	竈	肩部張り少なく、口縁部２段に外反して開く。口唇部細る。肩部横篦削り。口縁部下位篦撫で、上半は横撫で。	①良好　②赤橙　③粗
175－13 59－13	鉄製品 角釘		長・幅・厚 6.5×0.4×0.7	埋土	頂部欠損の角釘。	
175－14 59－14	鉄製品 不明	小片	長・幅・厚 (2.8)×0.6×0.15	埋土	両側縁は刃状に細まり鉄鏃の鏃部か。	
175－15 59－15	石製品 礫		長・幅・厚 13.6×14.5×4.0	床直・ －２	偏平円礫、表裏面摩耗のためか滑らか、側面は多数の筋状打堅痕あり。1306g	



Ｅ113号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を含み締まりなし。
2　暗褐色土　Ｃ軽石粒・焼土粒を少量含み粘性あり。
3　暗褐色土　焼土粒を少量含み粘性・締まり強い（貼床）。
4　暗褐色土　粘性強く混入物少ない。

Fig. 176　Ｅ113号住居跡



Ｅ113号住居跡竈
1　焼土小塊層
2　暗褐色土　白色粘土塊を含む。
3　黒灰層
4　暗褐色土　黒灰・焼土粒を少量含む。

Fig. 177　Ｅ113号住居跡竈

E113号住居跡（Fig. 176・177、PL. 16）

E区の北東部に位置し、41～43E45～47の範囲にある。平面形は南北方向に僅かに長い軸をもつ方形を呈する。南北長3.5m・東西長3.3mを測る。壁線は削平が深くおよんでおり、壁高の遺存状況は5cm程度である。とくに東壁から北壁にかけては僅かに痕跡を辿れるにすぎない。竈は東壁の南側に偏って付設され、主軸方位はN－76°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。

竈は東壁を略三角形に約40cm掘り込んで構築される。竈内には構築材と考えられる凝灰岩質加工材や川原石が検出されているが、いずれも残欠状の小塊となっており埋設された原位置は保たれていない。燃焼部は浅い窪みをなして黒灰層が堆積し、最下面には火床の硬質赤化面が僅かながら形成されている。燃焼部幅約60cm・長さ85cmを測る。貯蔵穴と考えられる Pit は南東隅にあるが、やや規模が小さく25×40cmの楕円形を呈す。壁下の溝は西壁を中心に北壁・南壁の一部にかけて見られ、幅10cm・深さ4～5cmである。住居跡中央南寄りに床下土坑と考えられる落ち込みがあり、上層は焼土粒を含む暗褐色土で覆われている。粘性・締まりともあり、貼床を意識していたものと思われる。

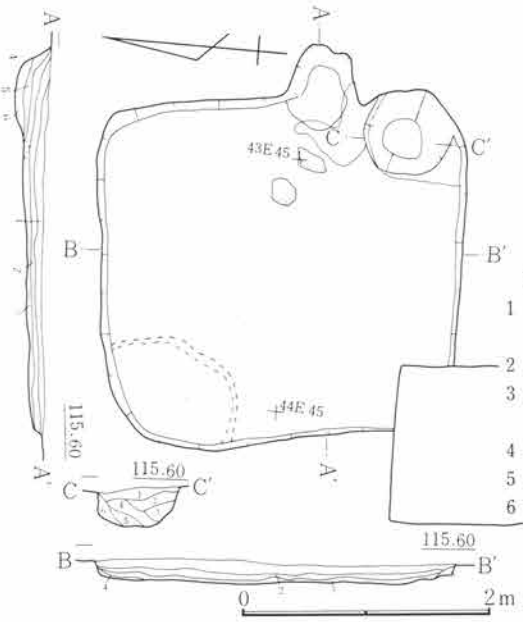
出土遺物はほとんど検出されていない。

E114号住居跡（Fig. 178・179、PL. 16・59）

E区の北東部に位置し、42～44E44・45の範囲にある。平面形は南西隅部が攪乱土坑で消失しているが南北方向に若干長い軸をもつ比較的整った方形を呈す。南北長2.95m・東西長2.7m・壁高約17cmを測るが、南壁の立ち上がりはやや乱れている。竈は東壁のやや南側に付設され、主軸方位はN－82°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。

竈は東壁を半楕円に掘り込むが、袖部などの施設は残されていない。竈前面には凝灰岩質加工材が検出されているが、埋土のかなり上面にあり、当跡に直接関わる石材とは考えられない。竈内及びその前面には崩落と考えられる焼土が流出している。火床は硬質赤化面を形成しており、火床下の掘形はなされていない。燃焼部幅50cm・奥行き65cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径70cm・深さ20cmの円形を呈す。貯蔵穴上面には隣接する竈から流出した灰層が一面に覆っていたが、埋土下層への流入は見られない。北壁を中心に東壁及び西壁の一部にかけて幅10cm・深さ3～4cmの壁下溝が巡るが、南壁下には検出されていない。北西隅には半円形の床下土坑が検出され、埋土上層にはかなりの焼土粒が混入している。

出土遺物は少なく、竈内より須恵器椀が検出されている。



E114号住居跡

1　暗褐色土　C軽石多量・焼土粒少量含む。
2　暗褐色土　Loam 塊を含む。
3　暗褐色土　焼土粒・炭化粒を少量含み粘性あり。
4　暗褐色土　焼土粒を多量に含む（竈）。
5　焼土粒　灰混合層（竈）。
6　焼土塊層（竈）。

E114号住居跡貯蔵穴

1　暗褐色土　焼土粒を多量に含む。
2　暗褐色土　C軽石粒を少量含む。
3　黒褐色土　C軽石粒を少量含む。
4　暗褐色土　Loam 小塊を含む。
5　暗褐色土　Loam 塊を含む。
6　Loam 塊

Fig. 178　E114号住居跡

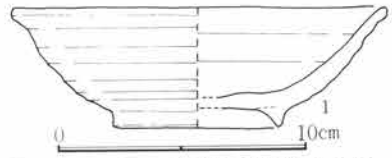


Fig. 179　E114号住居跡出土遺物

Ｅ114号住居跡出土遺物観察表

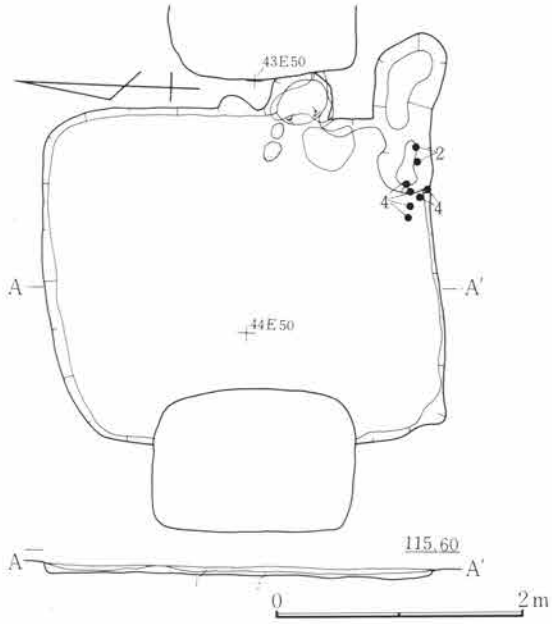
Fig. No PL. No	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
179—1 59—1	須恵器 椀	½	14.8×6.7 ×6.8	竈・ ＋2	体部丸く張り口唇部緩く外反。付高台断面矩形。轆轤整形。体部外面轆轤目強い。底部回転糸切り。素地粒状に浮く。	①良好　②灰　③やや密

Ｅ117号住居跡（Fig. 180・182、PL. 17・59・60）

Ｅ区の北東部に位置し、北半はＦ区にかかり43・44Ｅ49・Ｆ０の範囲にある。東・西は攪乱土坑のため一部が消失している。平面形は南北方向に若干長い軸をもつ方形を呈する。南北長3.1m・東西長2.65m・壁高は削平が深くおよんでいるためか僅か７～８cmである。竈は東壁のやや南に偏って付設され、N—87°—Ｅを示す。床面は緩い起伏をなすが比較的安定している。

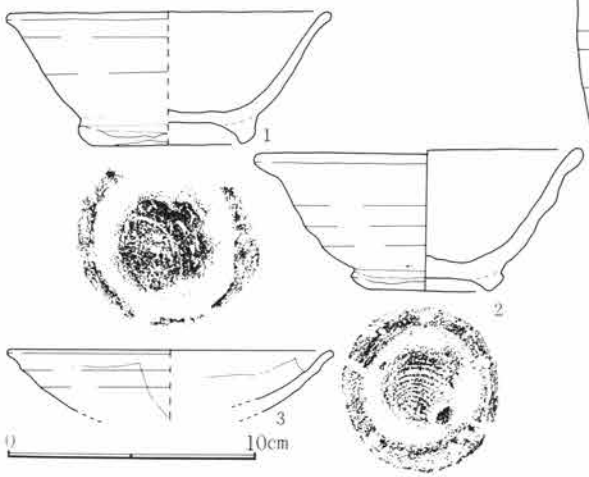
竈は東壁を小さく掘り込み構築されるが先端は攪乱土坑にかかるため遺存は悪く詳細は不明である。燃焼部には火床硬質赤化面は残されず焼土粒の堆積が見られ、掘形底面も浅く窪む程度である。燃焼部幅50cmを測り、奥行き40cmまで確認した。南東隅に遺物が集中して検出され、僅かに窪みをなし貯蔵穴を思わせるが、この窪みは南壁沿いに東壁線を大きく逸脱して延びている。この逸脱部分を含めて貯蔵穴とすべきかは確定できない。長径1.2m・幅50cmの不整楕円形を呈し、深さ５～10cmの不均一な底面をなす。

出土遺物は南東隅部に集中しており、須恵器椀・灰釉陶器・羽釜などがある。



Ｅ117号住居跡
1　褐色土　Ｃ軽石粒を多量に含む。
2　褐色土　Ｃ軽石粒を少量含み粘性白色土混じる。

Fig. 180　Ｅ117号住居跡



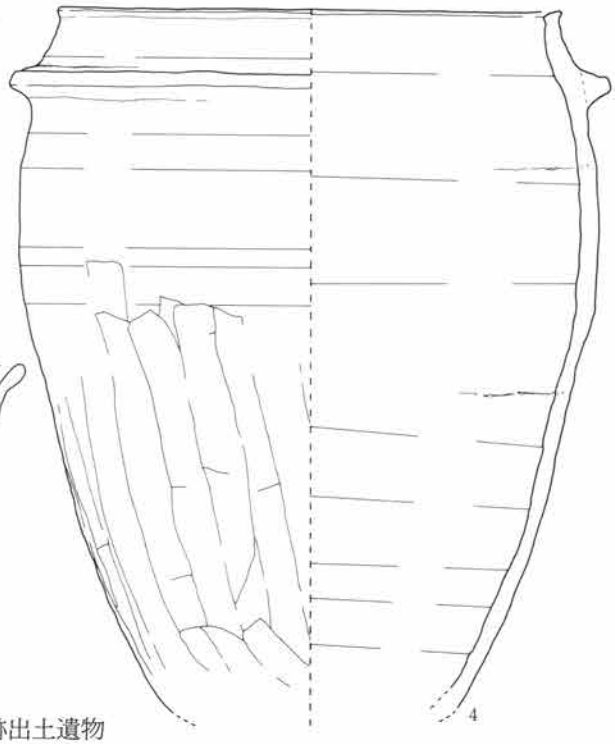


Fig. 181　Ｅ117号住居跡出土遺物

Ｅ117号住居跡出土遺物観察表

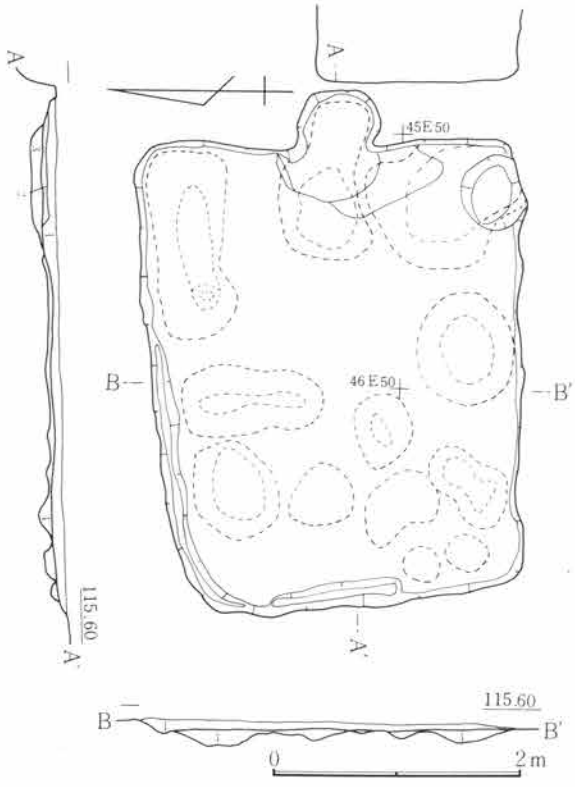
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
181－1 59－1	須恵器 椀	½	13.0×6.0 ×5.3	埋土	腰部僅かに丸味をもち、体部上半は緩く外反。付高台幅に狭広あり作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③粗
181－2 59－2	須恵器 椀	⅔	13.2×5.0 ×5.5	貯蔵穴？	腰部僅かに丸味をもつ。体部整形時の凹凸著しいが直線的に立つ。上半はやや強く外反。付高台幅広で作り雑。器肉厚い。轆轤整形。回転糸切り。	①軟　②褐灰　③やや密
181－3 60－3	灰釉陶器 皿	小片	13.0×－ ×(2.4)	埋土	体部僅かに丸味をもつ。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
181－4 60－4	羽釜	⅓底部 欠損	20.0×－ ×(27.0)	貯蔵穴？	胴部やや長く寸胴形を呈す。口縁部外反気味に内傾。鍔部幅広で断面矩形を呈し強く突出。口縁部胴部・内面横撫で中位から下位足の長い縦箆削り。	①良好　②灰　③粗

Ｅ118号住居跡（Fig. 182・183、PL. 17・60）

Ｅ区の北東部に位置し、北半はＦ区にかかり、44～46Ｅ49～Ｆ１の範囲にある。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈し、東西長3.6～3.7m・南北長3.05mを測る。壁高は削平が深くおよんでいるためか、僅か７～８cmである。竈は東壁のほぼ中央に付設され、主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。床面は全体に起伏をもちやや不安定である。

竈は東壁を半円形に掘り込んで構築されるが袖部などの構造は明らかにできなかった。燃焼部は焼土小塊で覆われ、竈右前方には流出したと考えられる灰層が広がっていた。火床は掘形が二次的に埋められた土質のためかそれほどの硬質化が進んでいないが、赤化面を形成している。燃焼部幅約60cm・東壁線よりの奥行きは50cmを測る。貯蔵穴と考えられる落ち込みは南東隅に検出されたが、径50×60cmの略円形を呈し、浅い皿状の窪みをなす程度である。壁下の溝は北壁から西壁の一部にかけて検出されている。床下土坑は住居跡中央部を除き、多数確認されている。円形ないしは楕円形を呈し、いずれもＣ軽石粒・焼土粒などが混在する暗褐色土が充填してあるが、床面の不安定さはこの床下土坑の多さに起因している。

出土遺物は少なく須恵器杯・椀・灰釉陶器片が少数認められた。



Ｅ118号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石を含み粘性あり。
2　焼土粒・灰混合層
3　暗褐色土　焼土粒を含み上面は赤化。
4　暗褐色土　Ｃ軽石・焼土粒を含む（掘形）。

Fig. 182　Ｅ118号住居跡

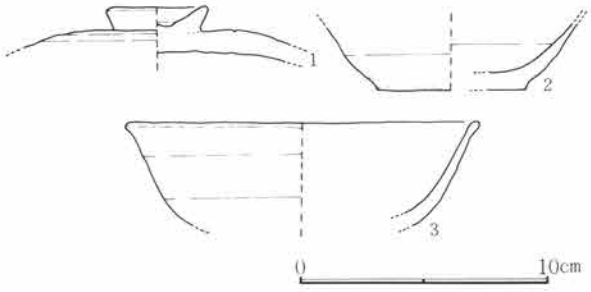


Fig. 183　Ｅ118号住居跡出土遺物

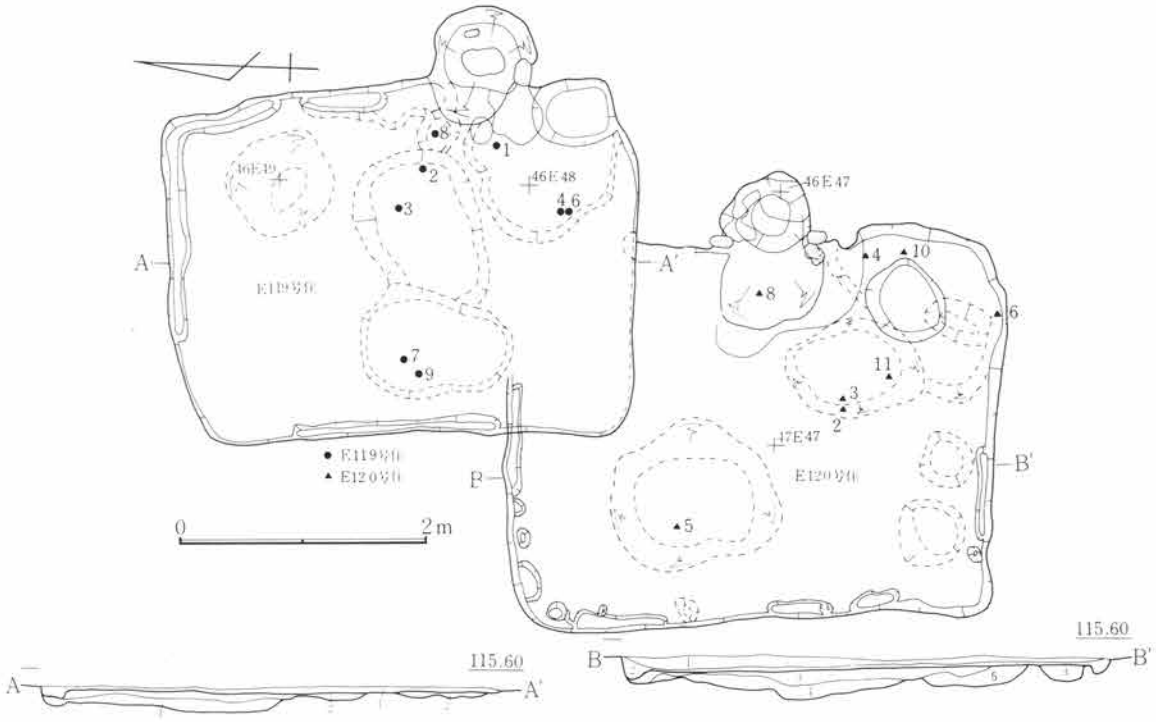
E118号住居跡出土遺物観察表

Fig.№ PL.№	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
183－1 60－1	須恵器 蓋	小片	－×4.2 ×(2.3)	埋土	環状摘み、天井部回転篦削り。器肉厚い。	①良好　②灰　③やや密
183－2 60－2	須恵器 杯	小片	－×6.0 ×(2.5)	埋土	腰部にやや丸味をもつ。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰黄褐 ③やや密
183－3 60－3	須恵器 椀	小片	14.0×－ ×(4.1)	埋土	体部に丸く張り、口唇部丸まって緩く外反。轆轤整形。	①酸化軟　②橙　③やや密

E119号住居跡（Fig. 184・185・187、PL. 17・60）

E区北部に位置し、45～47E47～49の範囲にある。当跡南西部でE120号住居跡およびE8号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係については調査時点ではE120号住居跡より新しい時期として表現されている。しかし出土遺物の比較では当跡に属する遺物がやや古い要素をもつものが見られることから現段階では確定できない。またE8号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。南北長3.7m・東西長2.75m・壁高は削平が著しいためか僅か4～5cmである。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はN－86°－Eを示す。床面は緩い起伏をもち、やや不安定な踏み締まりである。

竈は東壁を半円形に掘り込み、燃焼部右側の東壁線上には風化著しい凝灰岩質の加工材が検出されている。明らかな埋設状態ではないが、ほぼ原位置を保っていると考えられ、袖材の一部であろう。火床はやや深めに窪み、硬質赤化面の形成が著しい。この火床面は基盤層を地床としており、掘形後の埋土などではなされ



E119号住居跡
1　暗褐色土　C軽石粒を含み粘性あり。
2　暗褐色土　C軽石・焼土粒を多量に含み堅く締まる（貼床）。
3　暗褐色土　2より混入物少ない。粘性あり。

E120号住居跡
1　暗褐色土　C軽石粒を多量に含む。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化粒を少量含み粘性あり。
3　暗褐色土　C軽石粒を含み粘性。堅く締まる。
4　黒褐色土　黄色粘土塊を多量に含む。
5　赤褐色土　焼土塊を多量に含む。

Fig. 184　E119・120号住居跡

ていない。燃焼部幅約80cm・燃焼部の奥行き90cm・東壁線より約55cm突出している。貯蔵穴は南東隅にあり、径50×70cm・深さ18cmの楕円形を呈し埋土上層から下層にかけて灰層の流入がみられる。壁下の溝は東壁から北壁の一部と西壁の中央部に施される。床下土坑は住居跡中央部に２基・南東部に１基検出され、埋土上層はＣ軽石・焼土粒を多量に含んだ暗褐色が堅く突き固められた様子があり貼床状を呈する。

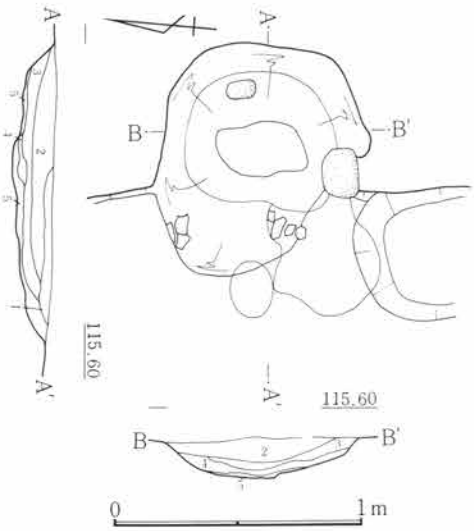
出土遺物は床下土坑内から多く、土師器杯類・須恵器杯・椀などのほか布目丸瓦などがある。

Ｅ120号住居跡（Fig. 184・186・188・189、PL. 17・60・61）

Ｅ119号住居跡、Ｅ８号掘立柱建物跡と重複しており、45～47Ｅ46～48の範囲にある。新旧関係についてはＥ119号住居跡の項で述べたように検討の余地がある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、北東部の壁線は重複のため検出されていない。南北長4.1m・東西長3.0m・壁高は低く約10cmを測る。竈は東壁のほぼ中央に付設され、主軸方位はＮ―88°―Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが全体に踏み締まりが弱く不安定な感がある。

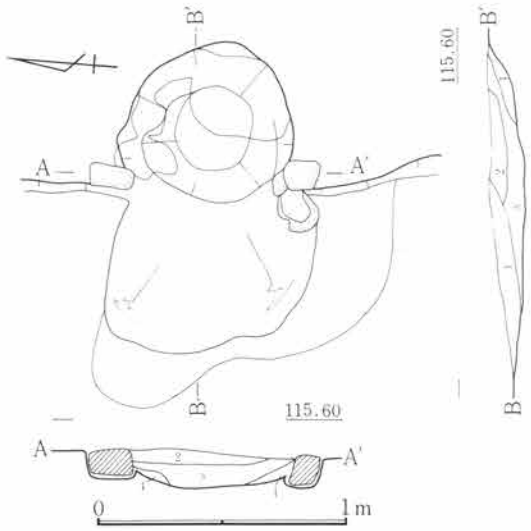
竈は東壁を円形気味に掘り込み、燃焼部左右の東壁線上には凝灰岩質の加工材が各々検出された。加工材の風化は著しいものの埋設が確認できるところから原位置と考えられ、袖材として機能していたものであろう。燃焼部は焚口と思われる床面側から僅かな窪みをなしている。火床には硬質赤化面が認められないが、掘形に埋土を施すことなく地床と考えられる。燃焼部はほぼ東壁線外にあり、約60cmの奥行きをもつ。また袖材間内法は55cmを測る。貯蔵穴と考えられる落ち込みは南東隅からやや内側にあり径60cm・深さ15cmの楕円形を呈す。埋土上層は焼土粒を多量に混入する。北壁から西壁・南壁下には溝ないしは小穴がやや不規則な間隔で検出されている。床下土坑は３基程確認され、埋土上層はＣ軽石を含み固く締まった粘性土で覆われていた。

出土遺物は床下土坑内の検出が多く、土師器杯・甕・須恵器杯類のほか丸瓦などがある。



Ｅ119号住居跡竈
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を含む。
2　明褐色土　Ｃ軽石粒少量・焼土粒多量に含む。
3　黒灰層
4　暗褐色土　黒灰を多量に含む。
5　焼土層（火床）

Fig. 185　Ｅ119号住居跡竈



Ｅ120号住居跡竈
1　暗褐色土　Ｃ軽石粒を多量に含む。
2　崩落焼土塊層
3　暗褐色土　Ｃ軽石を含み焼土粒・炭化粒を少量含む。
（下面は硬質赤化面）
4　崩落焼土塊

Fig. 186　Ｅ120号住居跡竈

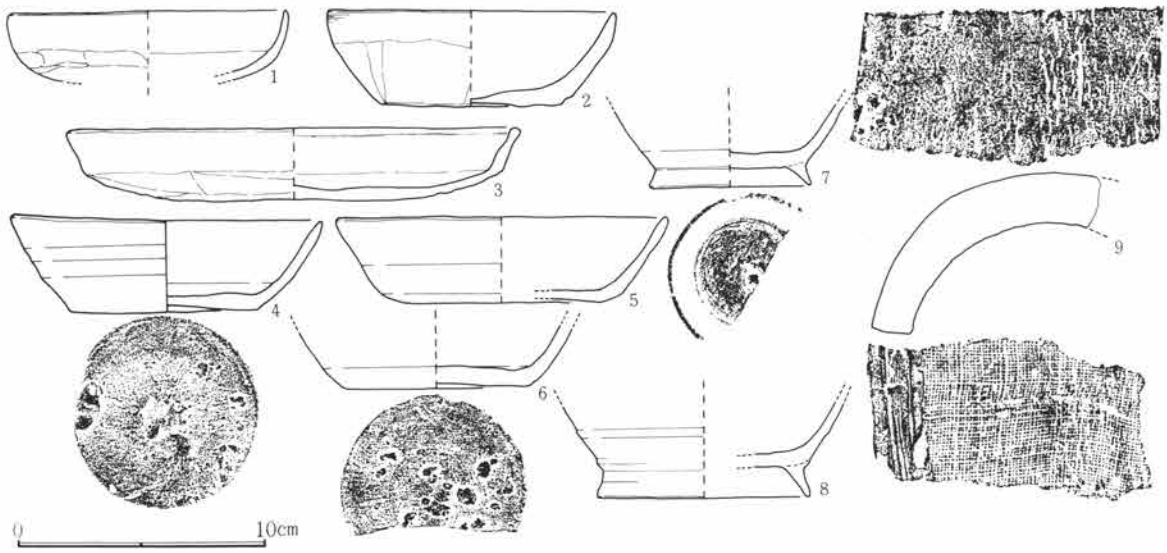


Fig. 187　E119号住居跡出土遺物

E119号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
187－1 60－1	土師器 杯	小片	11.1×－ ×(2.7)	床直・ ＋2	底部弱い丸底。体部内湾気味に直立。口縁部横撫で。体部篦撫で。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
187－2 60－2	土師器 杯	小片	11.5×7.0 ×3.8	床直・ －1	平底。体部直線的に外傾し口縁部は屈して直立気味に立つ。器肉厚い。口縁部横撫で。体部幅広横篦削り。底部篦削り	①良好　②橙　③やや密
187－3 60－3	土師器 盤	小片	18.0×－ ×2.9	埋土・ ＋7	底部平底気味。口縁部短かく直線的に外傾し浅い。口唇部丸まる。口縁部横撫で。底部不定方向篦削り。	①良好　②鈍い橙　③やや密
187－4 60－4	須恵器 杯	ほぼ完形	12.4×7.4 ×4.0	埋土・ ＋9.5	体部やや深目で僅かに内湾して立つ。轆轤整形。回転篦切り後撫で調整。	①良好　②灰　③やや粗細砂混
187－5 60－5	須恵器 杯	小片	13.2×7.8 ×3.4	埋土	腰部に丸味をもち体部直線的に立つ。轆轤整形。底部篦削り。	①酸化気味やや軟　②明褐灰　③やや粗
187－6 60－6	須恵器 杯	¼	－×7.4 ×(2.4)	埋土・ ＋9.5	体部やや深くなるか。轆轤整形。底部回転篦切り後右回転篦削り。	①良好　②灰　③密
187－7 60－7	須恵器 小椀	底部½	－×6.4 ×(3.1)	埋土・ ＋14.5	体部直線的で深くなるか。付高台ハの字状に強く張る。轆轤整形、底部回転篦切り。	①良好　②灰　③やや粗白色細粒混
187－8 60－8	須恵器 小椀	底部¼	－×8.4 ×(3.7)	床直・ －3	体部直線的で深くなるか。付高台やや高くハの字状に張る。轆轤整形。	①良好　②灰白　③やや粗
187－9 60－9	瓦 丸瓦	小片	厚2.0cm	埋土・ ＋14.5	凸面撫で、凹面布目、側縁部篦調整。	①良好　②灰白　③粗

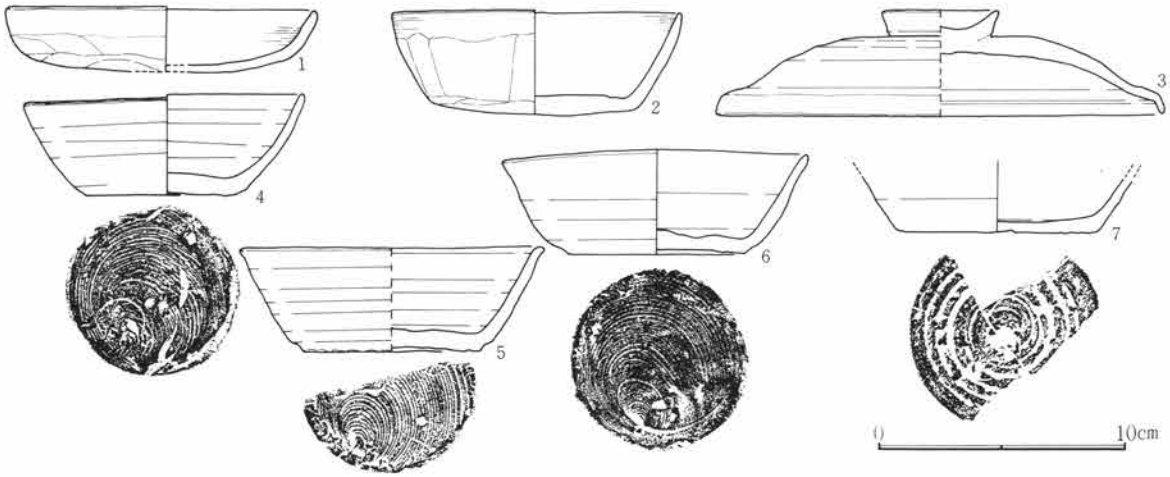


Fig. 188　E120号住居跡出土遺物（1）

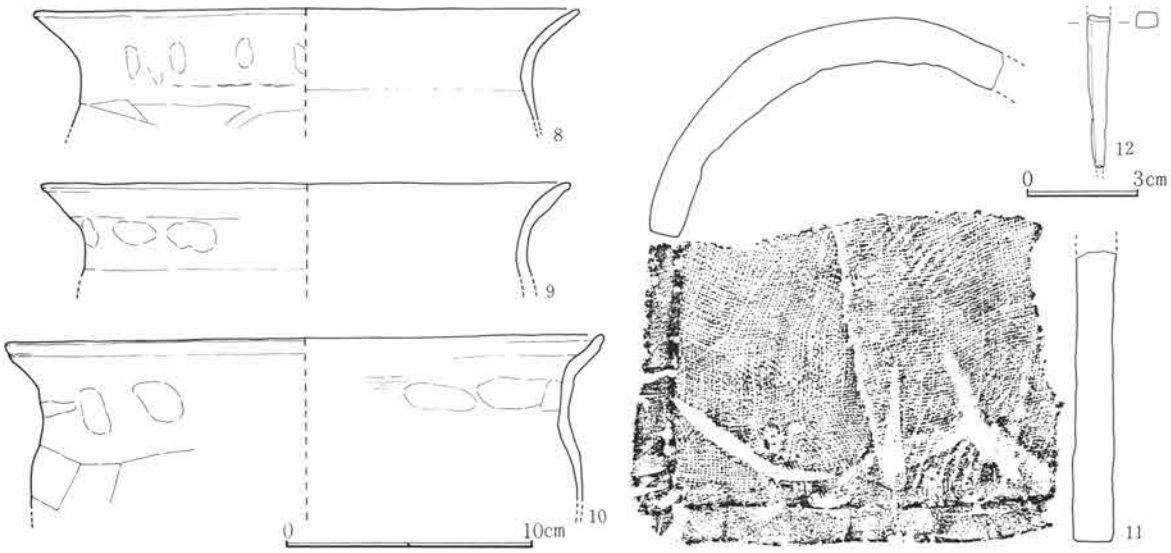


Fig. 189　E120号住居跡出土遺物（２）

E 120号住居跡出土遺物観察表

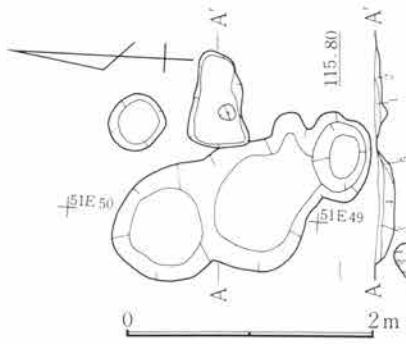
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
188－1 60－1	土師器 杯	¾	12.5×－ ×3.0	竈	扁平な丸底。体部直立後口唇部僅かに内湾。口縁部横撫で体部篦撫で。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
188－2 60－2	土師器 杯	⅔	11.7×8.4 ×4.3	床下土坑	平底気味な底部僅かに張る。体部内湾して立ち深い。口唇部鋭る。口縁部横撫で。体部幅広な横篦削り。底部篦削り	①良好　②橙　③密
188－3 60－3	須恵器 蓋	½	17.7×－ ×4.2	床下土坑 ・＋0.5	体部丸く張り、口縁部くびれて開く。口唇部ハの字状に屈する。環状摘み。轆轤整形。天井部回転篦削り。	①良好　②灰　③やや密
188－4 60－4	須恵器 杯	完形	11.2×6.2 ×4.0	床直	体部内湾して立ち丸味をもち深目。轆轤整形。右回転糸切り。底部縁辺手持ち篦削り。	①良好　②褐灰　③密
188－5 60－5	須恵器 杯	⅓	11.8×7.1 ×4.0	床下土坑 ・＋7	底径大きく体部直線的に立ち深目。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③密
188－6 60－6	須恵器 杯	⅔	12.1×7.0 ×4.0	床直	腰部僅かにくびれ体部下半に丸味をもつ。上半は僅かに外傾し深目。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
188－7 60－7	須恵器 杯	底部⅔	－×8.0 ×(2.2)	竈	轆轤整形。底部回転篦切り後、凹状沈線の明瞭な回転篦削り。	①良好　②灰白　③密
189－8 60－8	土師器 甕	口縁部 ¼	21.0×－ ×(3.4)	床直	口縁部強く外反して開く。口縁部指頭痕後横撫で。胴部篦削り。口縁部下位に輪積接合痕あり。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
189－9 60－9	土師器 甕	口縁部 ¼	21.0×－ ×(3.5)	竈	口縁部強く外反して開く。口唇部丸まる。口縁部指頭痕後横撫で。胴部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
189－10 60－10	土師器 甕	口縁部 ¼	23.7×－ ×(6.5)	竈・ －3	肩部張り少なく口縁部下位直立し上半は内湾気味に外傾するコの字口縁。口縁部指頭痕後横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
189－11 61－11	瓦 丸瓦		厚1.5cm	床下土坑 ・＋0.5	凸面篦撫で、凹面布目継き目あり。側縁部篦調整。	①酸化気味やや軟 ②淡橙　③やや粗
189－12 61－12	鉄製品 角釘	身部両 端欠損	長・幅・厚 (4.0)×0.6×0.4	埋土	頂部欠損角釘。	

E 121号住居跡（Fig. 190・191、PL. 17・61）

E区の北端に位置するがほとんどが削平を受け、住居跡の平面形態、規模などまったく不明である。検出できたのは、竈燃焼部の残欠、貯蔵穴のほかは床下土坑と考えられる落ち込みである。検出は50・51E48・49の区画にかかり南北２m・東西1.7mの範囲である。竈と貯蔵穴の位置関係から竈は東壁に付設され、貯蔵穴の南東隅に設けられる当区における竪穴住居跡の通常形態を有すると想定できる。竈燃焼部は最下面に焼土塊が堆積し、貯蔵穴内には黒色灰を混える暗褐色土が埋土としてある。

なおＥ９号・Ｅ10号掘立柱建物跡の中央部分に位置し重複関係にあるが、新旧は不明である。

当跡に伴うと考えられる遺物には竈部分からの土師器杯・須恵器蓋・椀のほか灰釉陶器がある。



Ｅ121号住居跡
1　炭化粒・灰混合層（竈）
2　焼土小塊層（竈）
3　暗褐色土　Ｃ軽石・炭化粒含む。
4　暗褐色土　Ｃ軽石を含み締まり強い。
5　Loam塊

Fig. 190　Ｅ121号住居跡

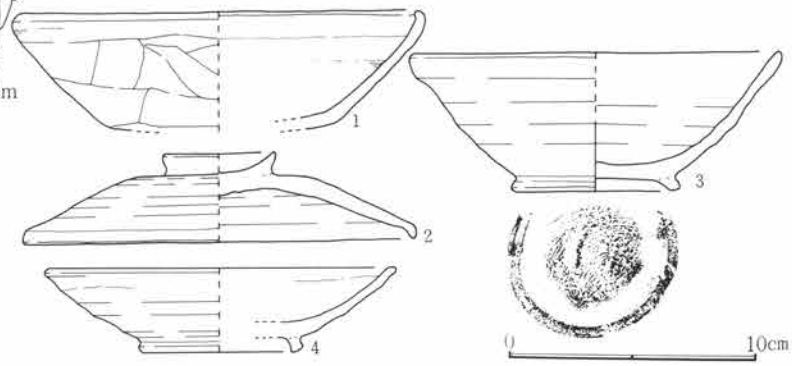
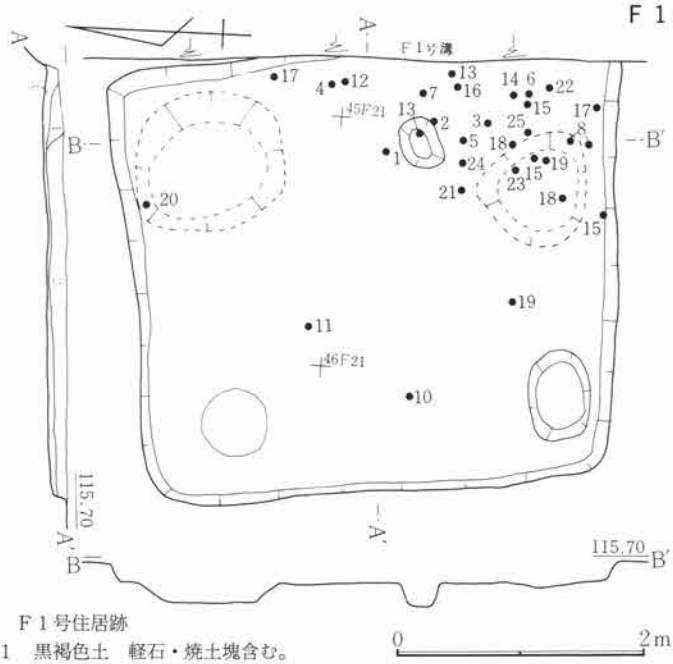


Fig. 191　Ｅ121号住居跡出土遺物

Ｅ121号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
191－1 61－1	土師器 杯　？	小片	16.2×－ ×(4.7)	竈袖・ 埋土	底部不安定な平底。体部直線的に開き、上位は内湾し口唇部は丸まる。体部横２段篦削り。上位は横撫で。	①良好　②橙　③やや密
191－2 61－2	須恵器 蓋	小片	15.6×4.5 ×3.5	竈袖・ 埋土	天井部平坦をなし、体部直線的に開く。口縁部直に折れる環状摘み。轆轤整形。天井部回転篦削り。	①良好　②灰　③やや密
191－3 61－3	須恵器 椀	½	14.8×6.8 ×5.5	竈袖・ 埋土	体部僅かに丸味をもつ。口唇部やや肥厚。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
191－4 61－4	灰釉陶器 椀	小片	14.0×6.0 ×3.3	埋土	体部僅かに丸味をもち、やや浅い。三ケ月高台。内外面漬け掛け施釉。	①良好　②灰　③緻密



Ｆ１号住居跡
1　黒褐色土　軽石・焼土塊含む。
2　黒褐色土　軽石（FP）含む。
3　褐色土　粘土塊含む。

Fig. 192　Ｆ１号住居跡

Ｆ１号住居跡（Fig. 192～195、PL. 17・61～63）

Ｆ区の東側中央部に位置し、44～46Ｆ20・21の範囲にある。東壁線の一部はＦ３号溝と重複するため消失している。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、南北長４ｍ・東西長3.5ｍ・壁高は18～20cmを測る。竈は南・北・西壁のいずれにも検出されず、Ｆ３号溝と重複する東壁線の南側に付設されていた可能性が高い。平面形状からの東西軸方位は、およそＮ－81°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、住居跡中央部が安定しており堅く踏み締まっている。北西隅床面には径60cm程度の範囲で灰の分布が認められたが、僅かに皿状に窪みをなす程度で周縁や底面は焼土化の痕跡が見ら

れず地床炉的な施設ではない。床下土坑は北壁沿いと南壁沿いに各々楕円形のものが検出されている。

出土遺物は多量に検出され、とくに南東部に集中している。ほとんどが床面に近く完形を保つ遺物も多い。しかし、住居跡廃絶時にそのまま放置されたとは思われず、廃絶後住居内に埋土の堆積がそれほど進行しない短期日のうちに遺物の一括投棄がなされたと考えられる。須恵器杯・椀類・灰釉陶器・土師器甕などのほか、瓦・鉄釘など量・種類とも豊富である。

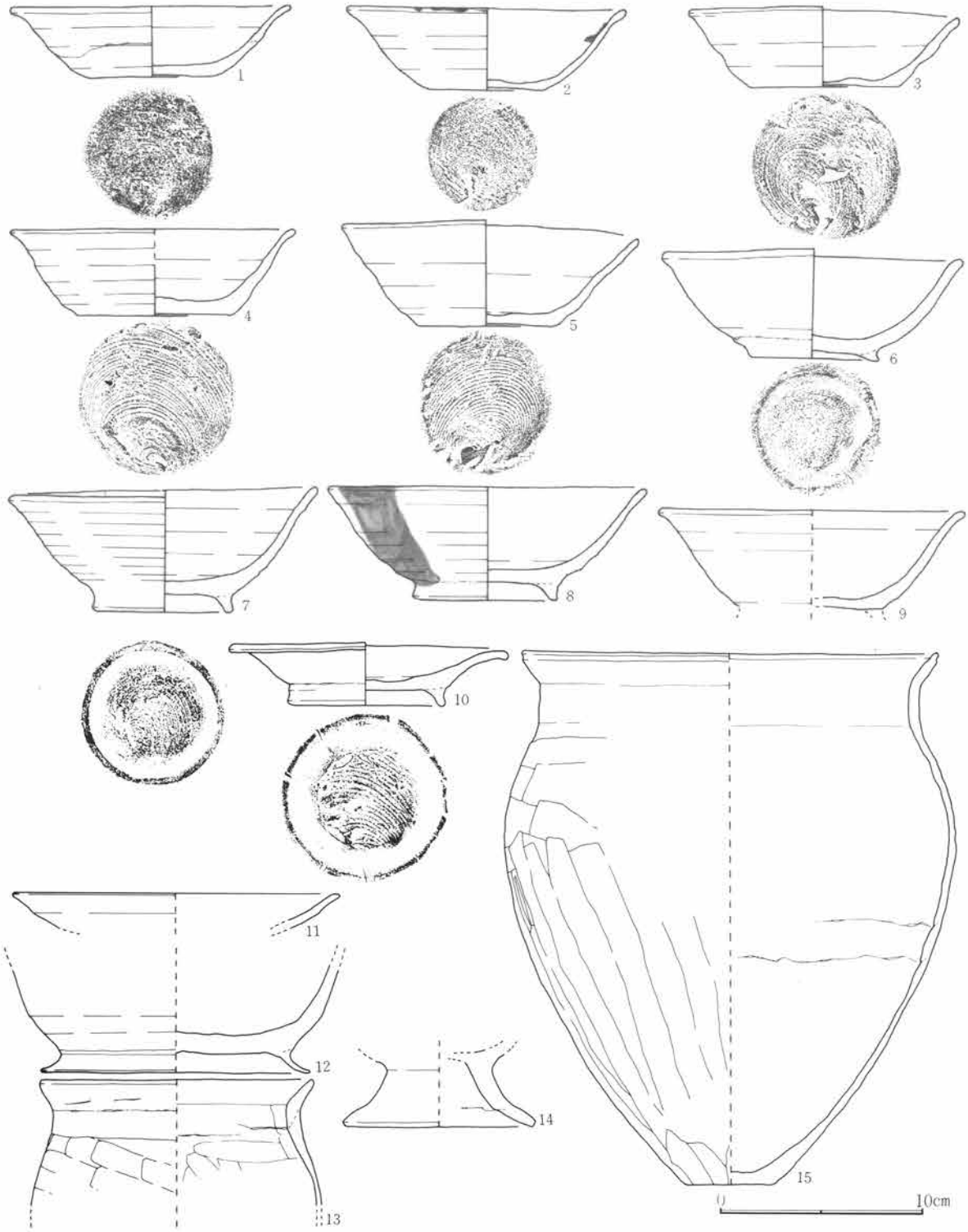


Fig. 193　Ｆ１号住居跡出土遺物（１）

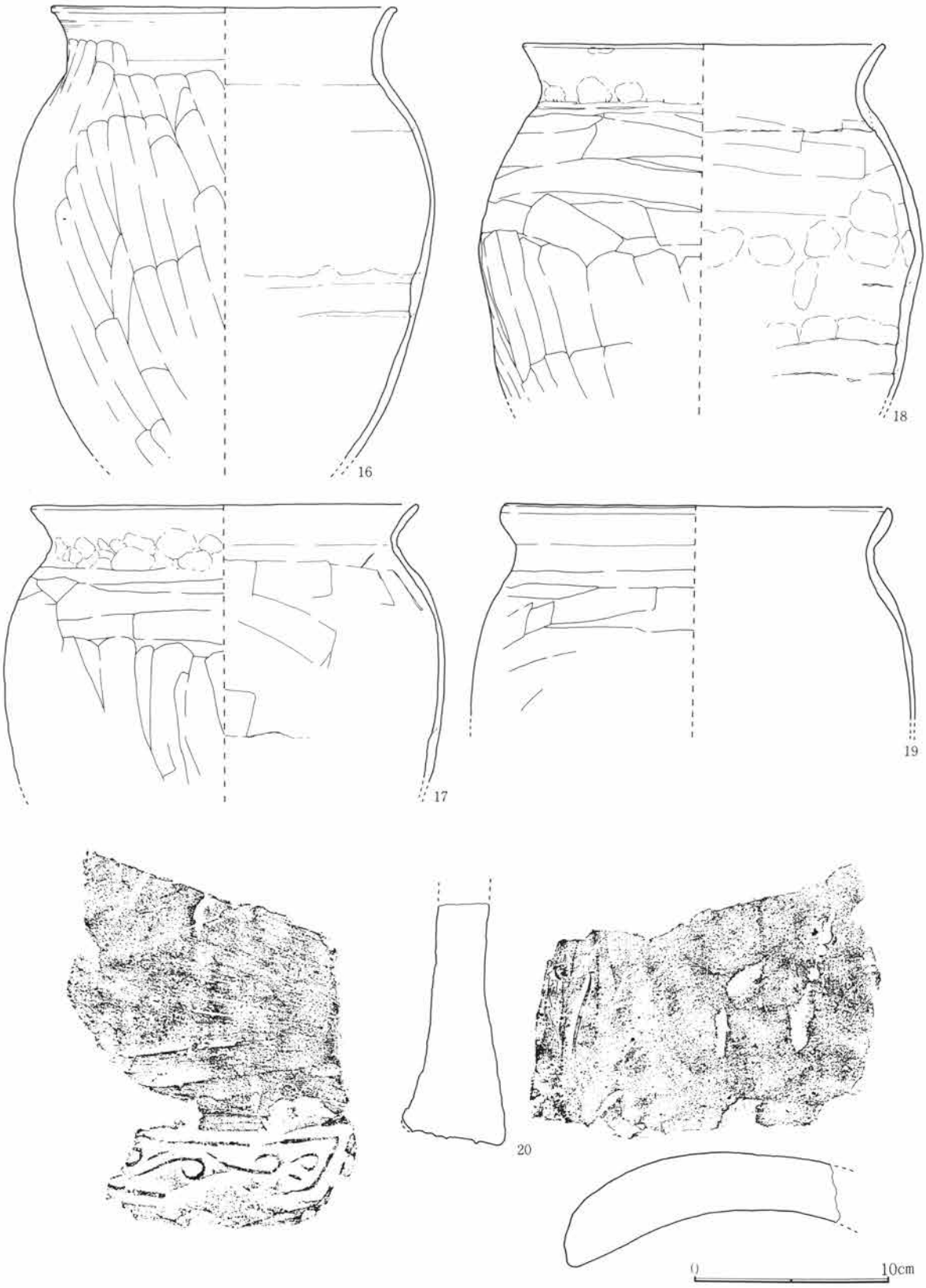


Fig. 194　Ｆ１号住居跡出土遺物（２）

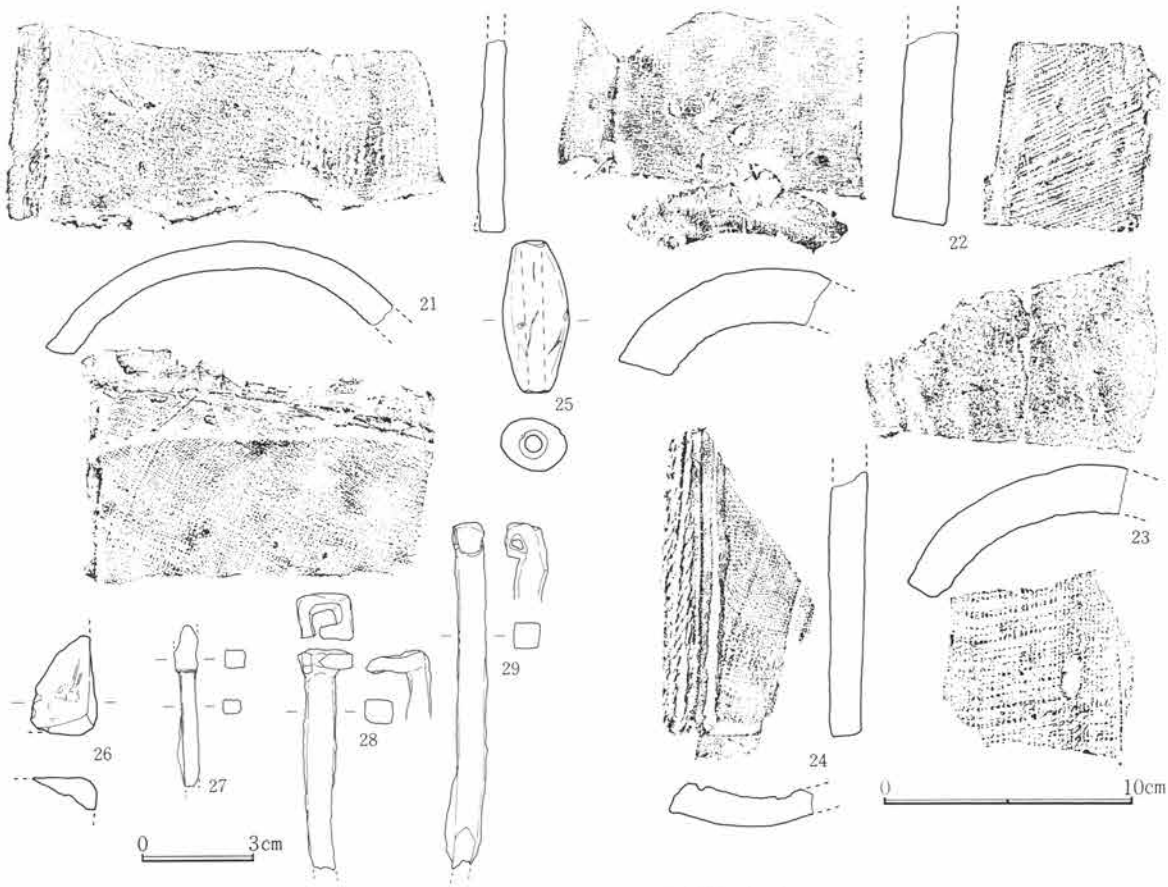


Fig. 195　Ｆ１号住居跡出土遺物（３）

Ｆ１号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
193－1 61－1	須恵器 杯	完形	13.6×6.4 ×3.4	床直	体部やや丸味をもち、上半は外反して開く。体部に右上がり１条の巻き上げ痕。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
193－2 61－2	須恵器 杯	完形	13.5×5.3 ×3.9	Pit内	体部やや丸味をもち、口縁部は短かく外傾して開く。底径小。内面・口唇部に油煙状付着物。轆轤整形右回転糸切り	①良好　②灰白　③やや粗砂混
193－3 61－3	須恵器 杯	完形	13.2×7.2 ×3.9	床直	体部直線的だが凹凸著しい。底径大きく中心部器肉極薄、口唇部２次被熱か。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②褐灰　③やや密小石混
193－4 61－4	須恵器 杯	ほぼ完形	13.8×7.4 ×4.2	床直	体部直線的に開き、口縁部細まって小さく外傾。底部肥厚し、径大。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②灰白～淡橙　③密
193－5 61－5	須恵器 杯	ほぼ完形	14.4×6.6 ×5.1	床直	体部深く直線的。口唇部やや尖がり気味。轆轤整形。左回転糸切り。	①酸化気味やや軟　②鈍い灰褐　③密
193－6 61－6	須恵器 椀	完形	16.6×6.2 ×5.3	床直	腰部から体部丸味強く、口縁部は緩く外反し開く。口唇部丸い。付高台低く雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味やや軟　②灰白　③粗砂粒混
193－7 61－7	須恵器 椀	ほぼ完形	15.0×6.8 ×5.9	床直	腰部から体部にやや丸味をもち上半は直線的に外傾する。付高台断面矩形を呈し丁寧。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味やや軟　②鈍い橙　③やや粗
193－8 61－8	須恵器 椀	ほぼ完形	15.4×7.0 ×5.5	床下土坑	体部下半僅かに丸味をもち、上半は直線的に外傾。付高台断面矩形、轆轤整形。回転糸切り。内外面に油煙状付着物。	①酸化軟　②鈍い橙　③密
193－9 61－9	須恵器 椀	⅓高台欠損	14.6×－ ×(4.8)	埋土	体部にやや丸味をもち、口縁部は緩く外反して開く。付高台欠落。轆轤整形。	①やや軟　②灰白～灰褐　③やや粗
193－10 61－10	須恵器 皿	⅔	13.6×7.8 ×3.0	床直・埋土	体部大きく外反して開く。口唇部丸い。付高台やや高く端部丸い。轆轤整形回転糸切り。内面重ね焼き痕、底径７cm	①良好　②灰　③やや密
193－11 61－11	灰釉陶器 皿	小片	16.0×－ ×(1.7)	床直	口縁部緩く外反。内外面施釉。大原２号窯式期？	①良好　②灰　③やや粗
193－12 61－12	須恵器 椀	底部	－×13.0 ×(5.0)	床直	腰部張り気味。深身になるか。付高台薄く強く外反して開く。腰部・底部回転篦削り。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
193－13 61－13	土師器 甕	口～胴 ½	13.2×－ ×(6.0)	Pit内	胴部やや張る。口縁部内傾気味に立ち上半は内湾して開く弱いコの字口縁。口縁部横撫で。胴部上半斜篦削り。	①良好　②鈍い赤褐　③やや密

Ｆ１号住居跡出土遺物観察表（２）

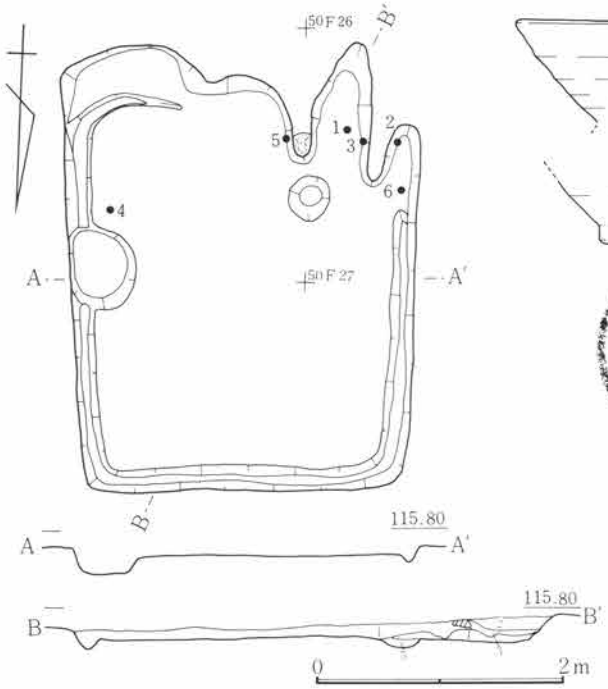
Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
193—14 61—14	土師器 台付甕	台部⅓	－×9.4 ×(3.6)	床直	台部ハの字状に開く。端部明瞭な矩形を呈す。内面に巻き上げ痕。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
193—15 61—15	土師器 甕	⅓	20.0×4.2 ×25.5	床直	胴部上位が張り最大径をなす短胴。口縁部直立し上半は外傾するコの字口縁。肩が胴上位横、中位から下位縦篦削り。口唇部外に凹線巡り細まる。	①良好　②橙　③やや密細砂混
194—16 62—16	土師器 甕	⅓底部 欠損	17.5×－×(22.5) 最大径21.3	床直・埋土	胴部上位やや張り最大径をなす。口縁部直立気味に立ち上半は緩く外反。口縁部横撫で。胴部縦篦削り。内面接合痕	①やや軟　②鈍い橙 ③やや密細砂混
194—17 62—17	土師器 甕	上半部 ⅓	19.6×－ ×(14.0)	床直・埋土	胴部上半は丸く張り球胴を呈す。口縁部下半は内湾気味で中位より強く外傾する。最大径は胴部上位。口縁部指頭痕著しい。肩部横・胴部縦篦削り。内面篦撫で。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
194—18 62—18	土師器 甕	上半部 ⅓	18.8×－ ×(17.9)	床下土坑	胴部中位接合部でくびれ著しい。上半は緩く張り気味。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。肩から胴上半は横、中位は縦篦削り。内面横篦撫で。接合痕顕著で指首頭調整著しい。	①良好　②鈍い橙 ③やや密細砂混
194—19 62—19	土師器 甕	上半部 ¼	19.6×－ ×(10.6)	床下土坑 ・埋土	胴部張り緩く丸味をもつ。口縁部肥厚し内湾気味に開く。口縁部横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや密
194—20 62—20	瓦 軒平瓦	小片	厚2.9cm	床下土坑	右扁行唐草文。凹凸面篦削り。	①良好　②鈍い赤褐 ③やや密白微粒混
195—21 62—21	瓦 丸瓦	小片	厚1.15cm	床直	凸面縄目若干残る撫で調整。凹面細布目。側縁部篦調整。	①良好　②灰　③やや密
195—22 62—22	瓦 丸瓦	小片	厚2.1cm	床直	凸面縄目若干残る撫で調整。凹面布目、引き抜き痕あり。側面篦調整。	①良好　②浅黄橙 ③やや密
195—23 62—23	瓦 平瓦？	小片	厚1.8cm	床下土坑	凹面粗い布目。篦描き陰刻文字の痕跡あり。凸面縄目若干残る撫調整。側縁部篦調整。	①良好　②灰褐～灰 ③やや粗
195—24 62—24	瓦 平瓦	小片	厚1.4cm	床直	凹面布目。模骨痕。凸面縄目若干残る撫で調整。側縁部篦調整。長側面に縄目痕。	①良好　②灰　③やや密
195—25 62—25	土製品 土錘	完形	径2.6×長6.0 ×孔径0.6	床直	手捏ね28.8g	①良好　②淡橙　③やや密
195—26 62—26	石製品 砥石	小片	長・幅・厚 3.5×2.5×0.7	埋土	長方形か。多面使用。	流紋岩（砥沢？）
195—27 63—27	鉄製品 鉄鏃	柄部小片	長(4.3)	埋土	茎及び篦被部の小片。茎部現存長３cm、幅0.5×厚0.3cm、篦被部現存長1.3cm、幅0.6×厚0.5cm。	
195—28 63—28	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長・幅・厚 5.8×0.8×0.6	埋土	頭部形状は折頭式を呈するが、頭部平環状の角釘。	
195—29 63—29	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長・幅・厚 (9.0)×0.7×0.7	埋土	頭部形状は折頭式を呈するが、頭部側環状の角釘。	

Ｆ２号住居跡（Fig. 196・197、PL. 18・63）

Ｆ区中央部に位置し、49・50Ｆ26・27の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、南壁の東側壁線が乱れ外方へ突出して全体形を歪めている。この南壁の歪みは壁下溝の位置に符合しないことから、壁面の崩壊とも考えられるが、床面の高低には変化が見られず、拡張ないしは意図的な施設として機能していたものであろう。最大南北長3.5m・東西長2.8m・壁高15cmを測る。竈は南壁の西端に付設されるが当区では唯一の例である。また竈中心軸は東壁下溝を参考にした東西軸に対しやや西へ傾いており、むしろ歪んだ東壁線軸に直行する軸方向であり、Ｅ—98°—Ｗを示す。床面は僅かに西側が低くなるが踏み締まりは良好である。

竈は住居内に大きく突出する袖部を有する形態をもち、燃焼部が狭長になる。左袖先端には凝灰岩質の加工材が埋設する。火床面には極めて細密な黒色灰層が薄く堆積し、硬質赤化の度合いは弱い。袖部長さは35～40cmで、袖間内法は約40cm・袖先端からの奥行き約1.1mを測る。壁下の溝は東壁の一部を除き幅10cm・深さ２～６cmで各壁下に巡る。

出土遺物は竈内及び周辺に検出され、須恵器椀・灰釉陶器・瓦などがある。



F２号住居跡
1　黒褐色土　焼土粒・粘土粒含む。　4　黒色灰層
2　黒褐色土　黒色灰・粘土塊含む。　5　黒色灰・焼土粒混合層
3　黄褐色粘土塊

Fig. 196　F２号住居跡

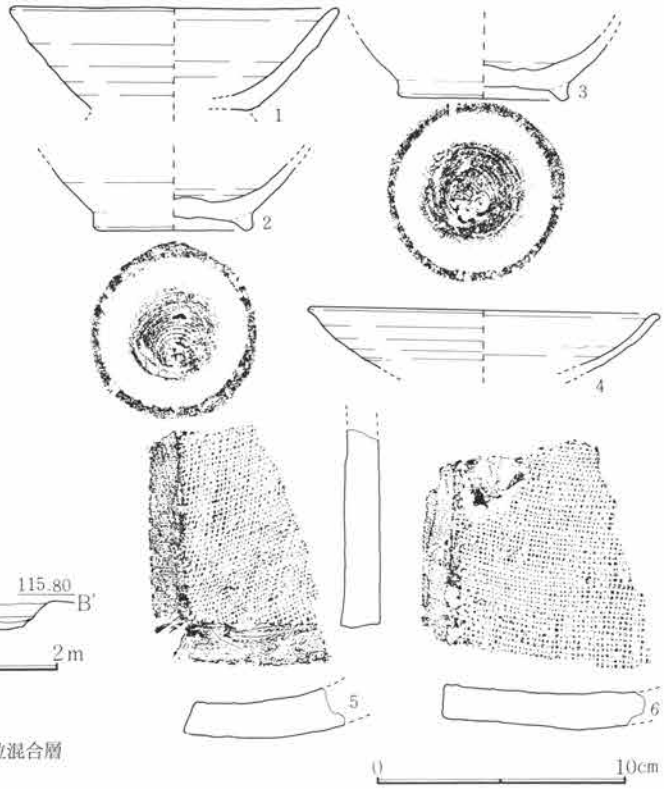


Fig. 197　F２号住居跡出土遺物

F２号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
197－1 63－1	須恵器 椀	体部¼	13.2×－ ×(4.3)	竈	体部から口縁部まで直線的に外傾。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
197－2 63－2	須恵器 椀	底部	－×6.4 ×(2.7)	竈右袖	腰部張りなし。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③粗
197－3 63－3	須恵器 椀	底部	－×6.8 ×(2.6)	竈	腰部僅かに丸味。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。見込み部うず巻き状の強い撫で痕。	①良好　②灰　③粗
197－4 63－4	灰釉陶器 皿	体部小片	14.0×－ ×(2.4)	埋土	体部僅かに丸味。口唇部小さく外屈。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
197－5 63－5	瓦 平瓦	小片	厚1.4cm	竈左袖	凹面布目、側面篦調整。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや粗
197－6 63－6	瓦 平瓦	小片	厚1.3cm	埋土	凹面布目、側面篦調整。	①酸化気味良好　②橙　③やや粗

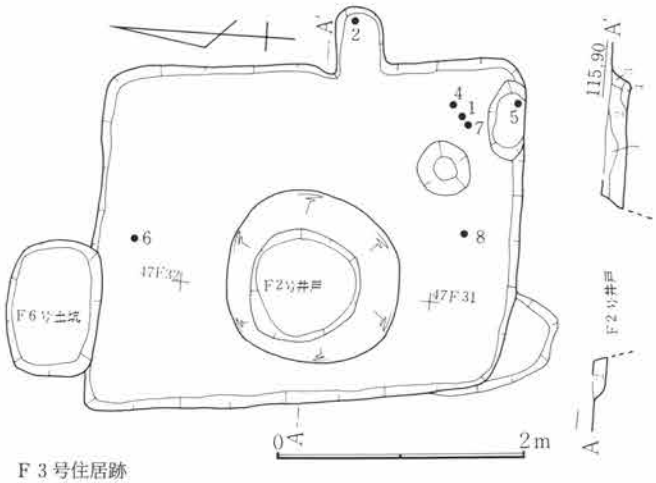
F３号住居跡（Fig. 198・199、PL. 18・63）

F区やや北東部に位置し、45～47F30～32の範囲にある。住居跡の中央部にはF２号井戸跡が穿たれ、北西部は楕円形土坑と重複し北壁線の一部は消失している。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長3.4m・東西長2.7m・壁高は約20cmを測る。竈は東壁僅か南側に付設され、主軸方位はN－85°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりはさほど強くないが安定している。

竈は東壁をやや狭長に掘り込むが、袖材などの構築材は検出されない。火床はあまり顕著ではないが掘形基盤面が赤化している。貯蔵穴は南東壁部にあり、径30×60cm・深さ27cmの楕円形で底面より完形須恵器椀が出土している。

出土遺物には須恵器杯・椀類のほか鉄製紡錘車の輪部がある。完形度の高い遺物は貯蔵穴周辺に多く、床

面より５cm程度高い位置より出土している。



F３号住居跡
1　黒褐色土　軽石（FP？）含む。
2　黒褐色土　粘土塊含む。
3　黒褐色土　焼土粒含む。
4　黒褐色土　黒色灰・焼土粒含む。

Fig. 198　F３号住居跡

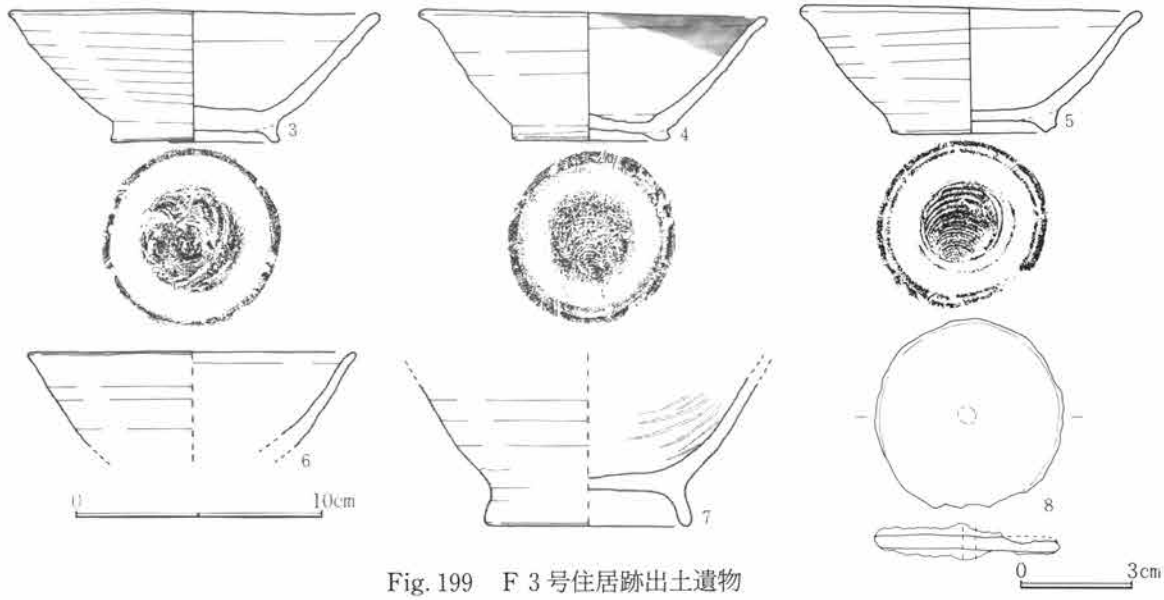


Fig. 199　F３号住居跡出土遺物

F３号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
199－1 63－1	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.3×6.9 ×3.5	床直	体部直線的に開き、口唇部は丸く肥厚し外傾する。轆轤整形。回転糸切り。底部周辺部は摩滅著しい。	①良好　②灰　③粗 石英・輝性黒色粒混
199－2 63－2	須恵器 椀　？	½	12.9×7.3 ×5.1	竈	体部下半肥厚。腰部強く張り、体部上半は内湾気味に開く。付高台著しく低く痕跡程度。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化良好　②橙 ③やや粗
199－3 63－3	須恵器 椀	体部½ 欠損	14.8×6.8 ×5.2	埋土	腰部僅かに丸味。体部から口縁部は直線的に開く。付高台低い。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③や や密
199－4 63－4	須恵器 椀	完形	13.9×6.4 ×5.1	床直	体部直線的。口縁部外反気味に開く。付高台低い。轆轤整形。回転糸切り。口縁部内外に油煙状付着物。	①良好　②灰　③粗
199－5 63－5	須恵器 椀	完形	13.6×6.6 ×5.2	貯蔵穴・ 埋土	体部僅かに丸味をもち、口唇部丸く外傾する。付高台断面矩形。畳付け凹線状段をもつ。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③や や粗細砂多混
199－6 63－6	須恵器 杯 or 椀	体部⅓	13.1×－ ×(3.7)	床直	体部丸味をもち、口縁部緩く外反。轆轤整形。二次被熱。	①酸化やや軟　②淡 赤橙　③密

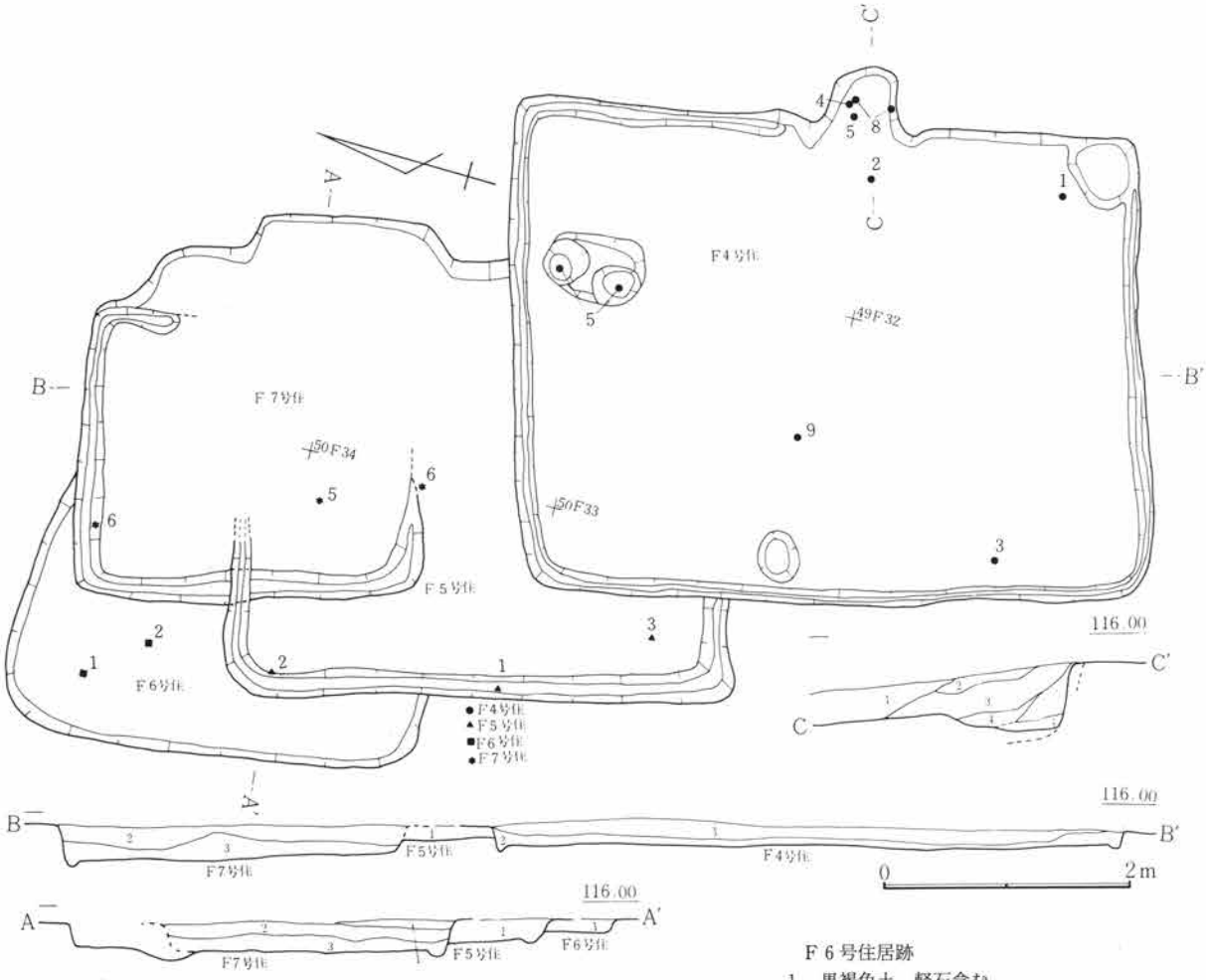
Ｆ３号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig.№ PL.№	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
199－７ 63－７	須恵器 椀	体部上 半欠損	－×8.2 ×(5.6)	床直	体部直線的。付高台高く内湾気味に張る。轆轤整形。回転糸切り。内面斜位太目の篦磨き・見込部一定方向篦磨き。	①良好　②灰白　③やや密
199－８ 63－８	鉄製品 紡錘車	紡輪部	径5.0　厚 0.4	床直	両面の中央部に軸棒状の残欠があり紡錘車の紡輪部と考えられる。	

Ｆ４号住居跡（Fig. 200・201、PL. 18・63・64）

Ｆ区中央部北寄りに位置し、48～50Ｆ30～33の範囲にある。北西部でＦ５号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ比較的整った方形を呈する。南北長５m・東西長3.9mを測り、当区では大型の竪穴住居跡に属する。壁高は遺存の良好な東壁で約25cmを測る。竈は東壁のほぼ中央に付設され、主軸方位はN－80°－Eを示す。床面は住居跡中央部が僅かに窪みがちであるが全体に踏み締まりは良好で安定している。

竈は東壁を住居規模に比して小さく掘り込むが、袖部は掘形を残し僅かに住居内に突出させる形態をなす。



Ｆ４号住居跡
1　黒褐色土　軽石・粘土塊含む。
2　黒褐色土　軽石・粘土塊少量含み粘性あり。
3　焼土塊層
4　黒色灰層
5　褐色土　焼土粒含む。

Ｆ４号住居跡竈
1　黒褐色土　焼土・粘土塊・軽石含む。
2　褐色土　焼土粒含む。

Ｆ５号住居跡
1　黒褐色土　粘土塊含む。

Ｆ６号住居跡
1　黒褐色土　軽石含む。

Ｆ７号住居跡
1　黒褐色土　軽石含む。
2　黒褐色土　炭化物・灰・軽石・粘土塊含む。
3　黒褐色土　粘土塊含む。

Fig. 200　Ｆ４・５・６・７号住居跡

竈側壁および火床は厚い硬質赤化面を形成している。燃焼部内には崩落焼土塊と火床面直上には厚く黒色灰層が堆積する。両袖部は東壁線より僅か15～20cm程度突出するのみで石などの構築材は検出されていない。袖部内法約60cm・燃焼部奥行き約70cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径55×60cm・深さ40cmの楕円形を呈する。各壁下には幅10cm・深さ４～５cmの壁下溝が明瞭に巡るが、東壁南側の貯蔵穴から竈の間には施されない。北壁沿いには浅い Pit 状落ち込みが検出されているが、位置的にはＦ５号住居跡に属する施設の残痕の可能性がある。

出土遺物は散在して検出されており、土師器杯・須恵器杯などのほか土錘・鉄釘がある。

Ｆ５号住居跡（Fig. 200・202、PL. 18・64）

Ｆ４号・Ｆ６号・Ｆ７号住居跡と各々重複しており、検出部分は西壁線を中心に北・南壁にかけてと、東壁線のごく僅かな部分で、49・50Ｆ32～34の範囲である。重複する遺構の調査時での新旧関係は、Ｆ４号・Ｆ７号住居跡より旧く、Ｆ６号住居跡より新しいと認識されている。しかし出土遺物からはＦ７号住居跡より新しくなる可能性もある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、南北長４m・東西長3.5m・壁高は遺存良好な西壁で約15cmを測る。竈は検出されず、これを中心とする主軸方位は不明である。西壁線を基軸にする東西軸方位はＮ―78°―Ｅを示す。床面を確認できた範囲は西壁に沿った狭小な部分で、比較的平坦をなすが踏み締まりは弱い。西壁から北・南壁の一部にかけて幅12cm・深さ５cm程度の壁下の溝が巡る。竈・貯蔵穴などの諸施設は確認されていないが、Ｆ４号住居跡の北側やや東の床面に浅い落ち込みが見られ、当跡に属する竈あるいは貯蔵穴の残痕とも考えられる。

出土遺物は少なく須恵器杯・土師器甕などで、いずれも小片である。

Ｆ６号住居跡（Fig. 200・203、PL. 18・64）

Ｆ５号・Ｆ７号住居跡と重複するが、両者より旧い時期の所産である。この重複のため住居跡の東半は消失しており、検出は50・51Ｆ33・34の範囲で、西壁を中心に北・南壁の一部である。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長約3.3m・東西は西壁線より東へ約２mまで確認した。壁高は西壁で約７～８cmを測る。竈などの諸施設は検出されていない。西壁線を基軸にする東西軸方位はＮ―83°―Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱い。

出土遺物は少なく、須恵器蓋・砥石がある。

Ｆ７号住居跡（Fig. 200・203、PL. 18・64）

Ｆ５号・Ｆ６号住居跡と重複し、調査時にはこれらより新しい時期の遺構と認識されていたが、Ｆ５号住居跡との新旧関係は出土遺物の比較から新旧が逆転する可能性がある。49・50Ｆ33・34の範囲にある。平面形は東壁線が突出する不整方形を呈する。しかし壁下の溝は東壁線沿いには付随せず、突出部の手前で折れる。この壁下溝は南壁線を示すと思われる壁下溝に整合していることから、突出する東壁線は他の遺構が重複している可能性が強い。壁下溝を当跡の範囲とする場合の平面形は南北に長軸をもつ方形を呈し、南北長約2.8m・東西長2.3mのかなり小規模な住居跡になる。壁高は約15cmを測る。竈などの諸施設は検出されず、西壁線を基軸にする東西軸方位はＮ―84°―Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりは弱く、Ｆ５号住居跡の床面との区別はできていない。

出土遺物は土師器杯・須恵器杯・椀・鉄製品などがある。

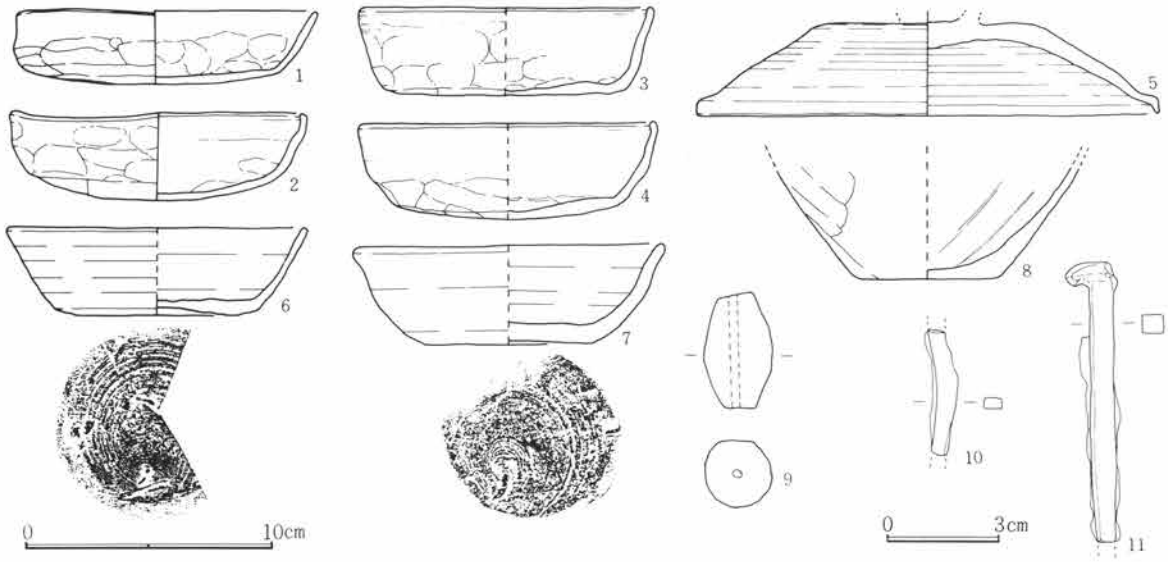


Fig. 201　Ｆ４号住居跡出土遺物

Ｆ４号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
201－1 63－1	土師器 杯	ほぼ完形	12.0×10.0 ×3.0	床直	底部扁平で浅い。口縁部外反気味に直立。口縁部横撫で。体部横篦削り、底部篦削り。内面指頭痕顕著。	①良好　②橙　③やや粗細砂混
201－2 63－2	土師器 杯	⅔	12.0×10.0 ×3.4	床直	底部やや丸い。体部波うって立つ。口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。体部弱い指頭痕と篦撫で。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
201－3 63－3	土師器 杯	⅓	11.8×9.4 ×3.5	床直	底部平底。体部緩く外反し、口唇部丸まって僅かに内屈。口縁部横撫で。体部指頭痕・篦削り、底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
201－4 63－4	土師器 杯	¼	12.0×10.0 ×3.8	竈	底部平底。体部内湾気味に立ち口唇部丸く内屈。口縁部横撫で。体部篦削り指頭痕。底部篦削り。内面弱い指頭痕。	①良好　②橙　③やや粗
201－5 63－5	須恵器 蓋	摘欠損	18.4×－ ×(4.0)	竈	体部深く、肩張る。天井平ら、回転篦削り。体部緩く丸味をもち口縁部短かく水平気味開く。口唇部直下に折れる。	①良好　②灰白　③やや密
201－6 63－6	須恵器 杯	⅔	12.0×8.0 ×3.5	埋土	体部僅かに内湾して立つ。見込部・体部の変換強い。腰部強い指頭のくい込み。轆轤整形右回転糸切り。底部自然釉	①良好　②灰　③やや密
201－7 64－7	須恵器 杯	¼	12.4×6.5 ×3.9	埋土	腰部・体部丸く張り、上半は外反気味。口唇部丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
201－8 64－8	土師器 甕	底部	－×5.6 ×(4.4)	竈	外面縦位篦削り。内面篦撫で。底部小さく篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
201－9 64－9	土製品 土錘	完形	長4.5　径 2.7 重32.8g	床直	手捏ね。中心部縦位に径４㎜の焼成前穿孔。	①良好　②灰　③やや密
201－10 64－10	鉄製品 不明	両端部 欠損	長・幅・厚 (3.4)×0.5×0.3	埋土	角釘状を呈するが幅・厚の差が大きく鉄鏃柄部などの可能性がある。緩く湾曲。	
201－11 64－11	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長・幅・厚 (7.4)×0.5×0.5	埋土	先端部欠損。頭部形状折頭式の角釘。	

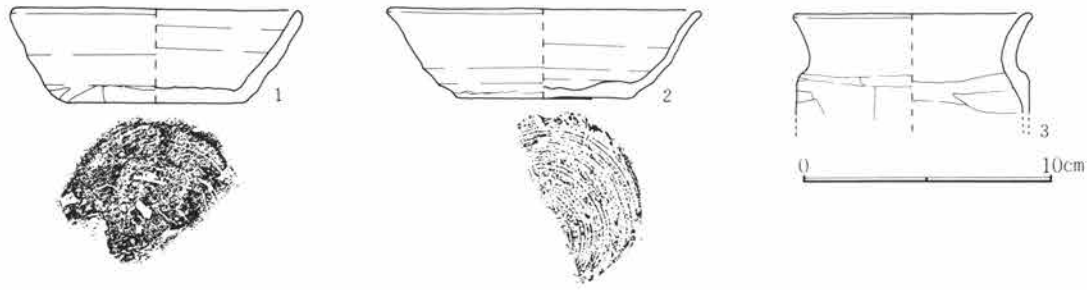


Fig. 202　Ｆ５号住居跡出土遺物

Ｆ５号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.*	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
202－1 64－1	須恵器 杯	¼	11.5×6.9 ×3.7	西壁際	全体に器肉厚い。体部僅かに内湾して立つ。口唇部丸まる。轆轤整形。腰部・底部手持ち篦削り。見込・体部強く折れる。	①良好　②灰　③やや密白色小石混
202－2 64－2	須恵器 杯	⅓	12.5×6.9 ×3.5	西壁際	腰部やや丸味をもち、体部上半は緩く外反して開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
202－3 64－3	土師器 小型甕	口縁部 ¼	9.5×－ ×(4.0)	埋土	肩部強く張り、口縁部緩く外反して開く。肩部から口縁部著しく肥厚。口縁部横撫で。肩部外面横篦削り。内面指撫	①良好　②橙　③やや密

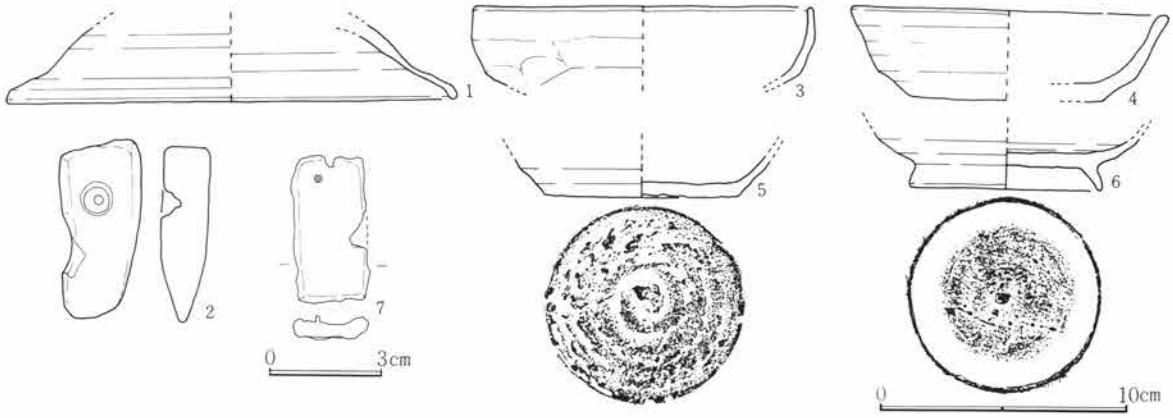


Fig. 203　Ｆ６号（１・２）・Ｆ７号（３～７）住居跡出土遺物

Ｆ６号（１・２）・Ｆ７号（３～７）住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
203－1 64－1	須恵器 蓋	¼ 部欠損	18.0×－ ×(3.0)	床直	体部丸く張り、口縁部大きくくびれる。口唇部ハの字状に開く。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
203－2 64－2	石製品 砥石		長7.1　幅3.8 厚1.8　重565g	床直	楔形。全面使用。片面の未貫通の穿孔あり。深さ７㎜、径1.4cm。	流紋岩（砥沢？）
203－3 64－3	土師器 杯	¼	13.5×－ ×(3.2)	埋土	体部内湾気味に立つ。口縁部横撫で。体部上半撫で、下半指頭及び篦削り。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
203－4 64－4	須恵器 杯	¼	12.6×7.6 ×3.6	埋土	体部中位丸く張り、口唇部丸まって外反。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②褐灰　③密
203－5 64－5	須恵器 杯	¼	－×7.8 ×(1.6)	埋土	轆轤整形。右回転篦切り。	①良好　②灰　③やや密
203－6 64－6	須恵器 椀	¼	－×7.7 ×(2.2)	埋土	付高台、やや内湾気味に強く張る。轆轤整形。回転篦切り。	①良好　②灰　③やや粗
203－7 64－7	鉄製品 留め金具		長・幅・厚 3.9×2.0×0.4	埋土	裏面縁をもち凹状をなし、１角に鋲が残る。	

Ｆ８・９号住居跡（Fig. 204～206、PL. 18・64・65）

Ｆ区北部に位置し、46～48Ｆ35～37の範囲にある。当跡は２基の竈が検出されていることから、調査当初重複する２軒の住居跡としてＦ８号・Ｆ９号住居跡の名称が付されたものである。しかし、ここでは２基の竈の遺存度の比較や、床面、平面形の状態から同一住居跡の拡張ないしは拡張に伴う建て替えが行なわれたものとして扱い、Ｆ８号住居跡に統一する。また竈に関しては東壁付設のものＡ竈、北壁のものはＢ竈とする。

Ｆ８号住居跡は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが南東隅から南壁にかけて壁線に乱れが生じている。また、全体の壁線はやや膨らみ気味で丸味をもつ。南北長５ｍ・東西長3.4ｍ・壁高は20cmを測る。Ａ竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－79°－Ｅを示す。東壁を略三角形に掘り込み袖部を小さく突出さ

せる形態をもつ。燃焼部は床面より僅かに窪み、奥壁は急角度で立ち上がる。火床および側壁は硬質赤化面を形成し火床面直上には薄い灰層の堆積がある。左袖部には土師器甕が半截内面上向きの状態で検出されたが、埋設された痕跡もなく、竈の構築や補強材としての機能は考えられない。また石などの構築材も見られない。燃焼部幅50cm・火床面窪みからの奥行き90cmを測る。Ｂ竈は北壁にあり大きく東に偏って付設される。Ｂ竈の中心を通る基軸方位はＮ－30°－Ｅを示す。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、両袖部には風化が進み良好な形状をとどめないが凝灰岩質の加工材が埋設される。両袖に跨り、長さ50cm・20×15cm角の凝灰岩質加工材が焚口天井部を作る。僅かに窪む火床には薄い灰層が堆積し硬質赤化面を形成し奥壁は緩く立ち上がる。袖部内法35cm・火床面窪みからの奥行き約90cmを測る。床面は南半が僅かに低くなるが踏み締まりは良好である。壁下の溝は西壁を中心に南・北壁の一部にかけて施されるが北西隅部で大きく内側に幅を広げる。床下土坑は南東隅部にある。径1.3m・深さ10cmの楕円形を呈し、埋土中には焼土塊・灰層などが混入しており部分的に踏み固めた痕跡が認められる。

当住居跡における２基の竈はその遺存状態から、同時使用は考えられず東壁Ａ竈付設の後、北壁Ｂ竈が構築されたものであろう。しかし、Ａ竈からＢ竈の変更に際しては、Ａ竈の完全な撤去はなされず、構築材などの抜き取りのみが行なわれたものであろう。そして竈付設位置の変更は北西壁下溝に示されるように住居跡の拡張ないしは建て替えに伴ってなされたと考えられる。

出土遺物は比較的多く、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・鉄製品などが検出されているが、大型須恵器甕の存在が特徴的である。

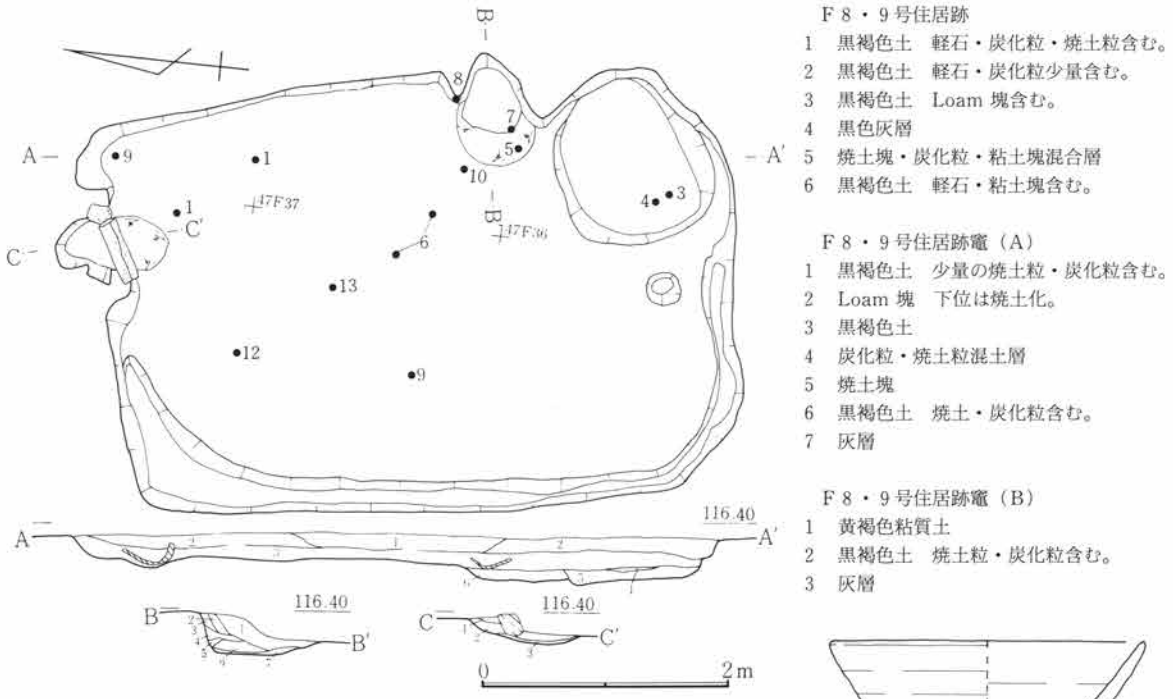


Fig. 204　Ｆ８・９号住居跡

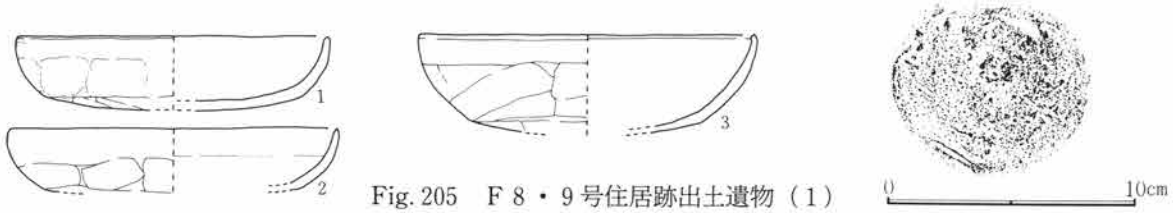


Fig. 205　Ｆ８・９号住居跡出土遺物（１）

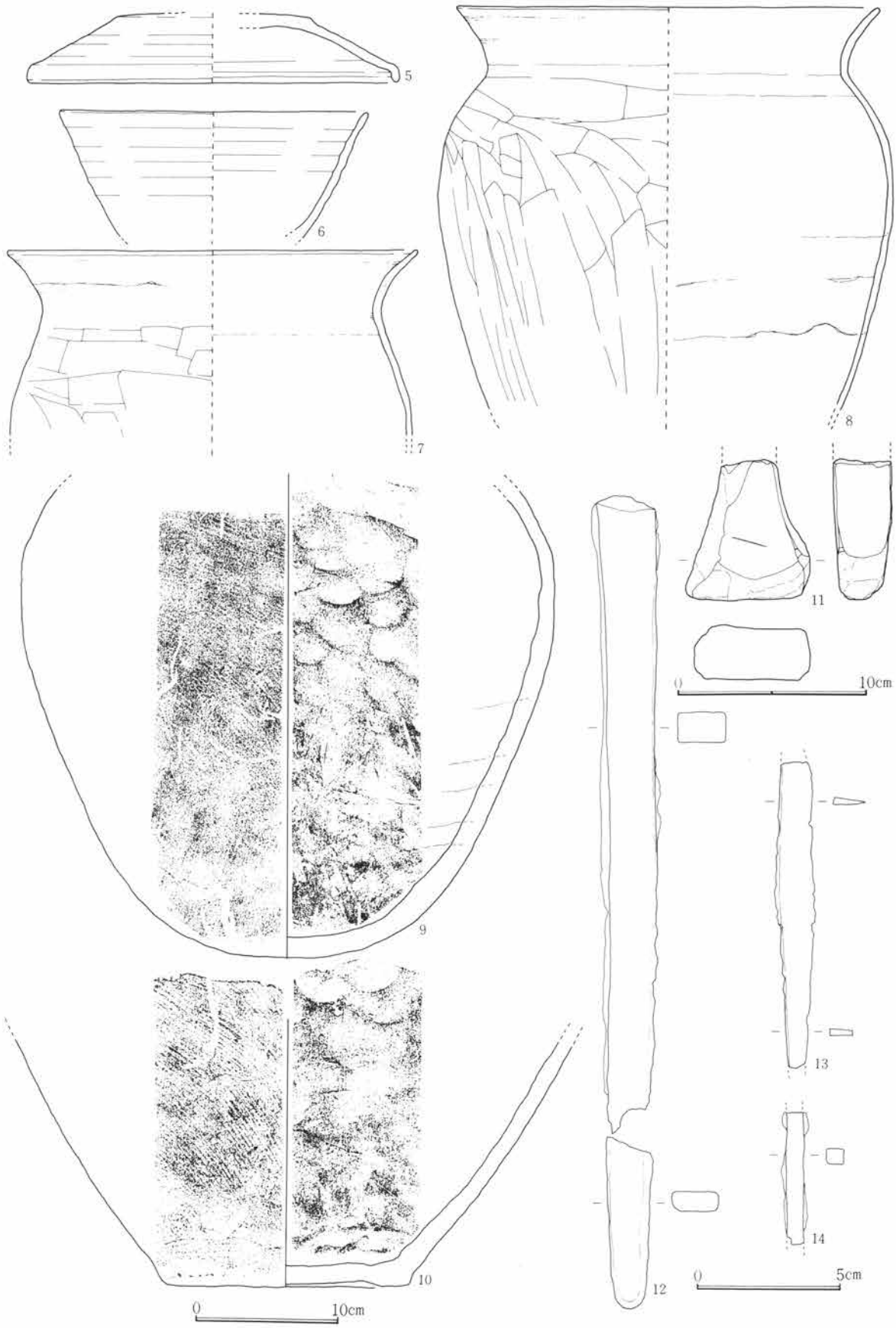
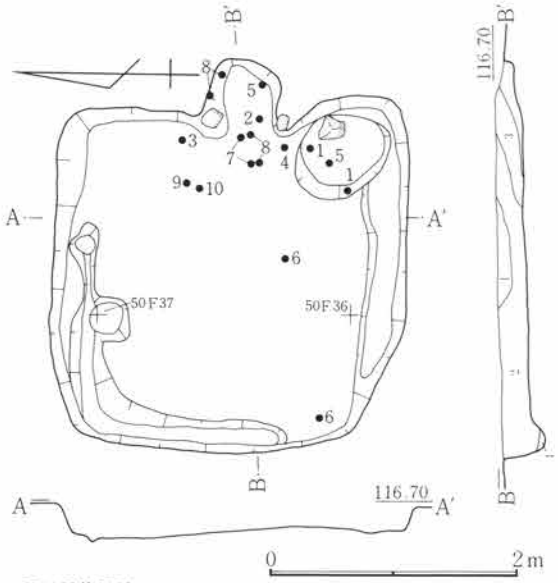


Fig. 206　Ｆ８・9号住居跡出土遺物（２）

Ｆ８・９号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
205－1 64－1	土師器 杯	口～底 小片	12.4×－ ×(3.0)	埋土	扁平で不安定な底部。腰部丸く、体部内湾気味に立つ。体部横撫で。腰部指押え。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
205－2 64－2	土師器 杯	口～体 小片	13.0×－ ×(2.5)	埋土	扁平で不安定な底部。腰部丸く、体部内湾して僅かに開く。体部横撫で。腰部横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
205－3 64－3	土師器 杯	口～底 小片	13.4×－ ×(3.9)	床下土坑	不安定な平底か。体部深く内湾気味に立つ。口唇部丸まって内屈。口縁部横撫で。体部弱い篦削り。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
205－4 64－4	須恵器 杯	口～底 ½	12.4×7.2 ×3.7	床下土坑	体部やや深目。緩く内湾気味に開く。轆轤整形。回転篦切り後弱い撫で。	①良好　②灰　③やや密
206－5 64－5	須恵器 蓋	⅓摘み 欠損	19.4×－ ×(3.6)	竈	天井部平坦をなし回転篦削り。体部直線的に開き、端部強く折れ直立。轆轤整形。	①良好　②灰白　③やや密
206－6 64－6	須恵器 椀　？	⅓底部 欠損	16.0×－ ×(6.7)	床直	体部深く直線的。腰部にやや丸味をもつか。轆轤整形。	①良好　②灰　③密
206－7 64－7	土師器 甕	口縁部 小片	21.2×－ ×(9.7)	竈	胴部上半やや張りをもち、口縁部強く外反して開く。口縁部横撫で。胴上半横篦削り。	①良好　②橙　③やや密
206－8 65－8	土師器 甕	⅓下半 欠損	22.0×－ ×(21.0)	竈	肩部やや強く張る。口縁部強く外反して開く。口縁部横撫で。肩部横・胴上半より斜から縦方向に篦削り。内面下半に胴上下の接合痕あり。	①良好　②鈍い橙　③やや粗
206－9 65－9	須恵器 甕	口縁欠 損	－×－×(32.5) 最大幅37.2	床直・ 埋土	丸底。胴上半で強く張る。内面左上がりの紐巻き上げ痕顕著。外面平行叩き文、内面楕円状あて具痕。	①良好　②灰　③やや密
206－10 65－10	須恵器 甕	底部の み	－×17.0 ×(18.6)	床直	平底。胴部直線的。底部と胴部の接合痕あり。外面平行叩き文。内面楕円状あて具痕及び撫で。	①良好　②灰　③やや粗
206－11 65－11	石製品 砥石		長・幅・厚 7.2×6.0×2.7	埋土	長方形を呈すか½欠損。表裏面及び長軸側面使用。使い減り著しい。	流紋岩（砥沢？）
206－12 65－12	鉄製品 不明	完形	長・幅・厚 28.2×2.0×1.0	床直	厚みのある板状を呈し、片端へ向かい幅を狭くする。先端部は細くなり丸まる。製品素材か。	
206－13 65－13	鉄製品 刀子	両端部 欠損	長・幅・厚 10.6×1.3×0.3	床直	刃部及び茎部の先端は欠損。遺存刃部長5.6cm・幅1.3cm、茎部長5.0cm、最大幅1.1cm。	
206－14 64－14	鉄製品 角釘	両端部 欠損	長・幅・厚 (4.6)×0.6×0.5	埋土	両端部欠損。角釘。	



Ｆ10号住居跡

1　黒褐色土　Loam 塊含む。
2　黒褐色土　軽石粒含む。
3　黒褐色土　炭化粒・焼土粒少量含む。
4　黒褐色土　僅かに Loam 塊含み粘性あり。
5　黒褐色土　焼土粒多量に含む。

Fig. 207　Ｆ10号住居跡

Ｆ10号住居跡（Fig. 207・208、PL. 18・65・66）

Ｆ区北部に位置し、49・50Ｆ35～37の範囲にある。重複はなく単独遺構である。平面形は南北・東西軸とも同規模で長さ2.8mの方形を呈する。壁高は約25cmを測る。竈は東壁ほぼ中央に付設され、主軸方位はＮ－90°－Ｅを示す。床面は北東部がやや低くなるが、踏み締まりは良好で安定している。

竈は東壁を楕円形に掘り込んで建築され、両袖が小さく住居内に突出する形態をもつ。この両袖部には構築材として川原石が埋設されている。燃焼部は黒灰混りの焼土塊で埋まり、火床は硬質赤化面が形成される。両袖間内法約45cm・燃焼部奥行き60cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり径60×85cm・深さ15cmの楕円形を呈する。壁下の溝は南壁と西壁から北壁の一部にかけて施され、かなり幅広なものとなっている。なお北壁際及び中央部に Pit が検出されているが当跡に属するかは不明である。

出土遺物は土師器杯・甕・須恵器杯・鉄製刀子などがあり、2個体の土師器甕は竈内より検出されている。

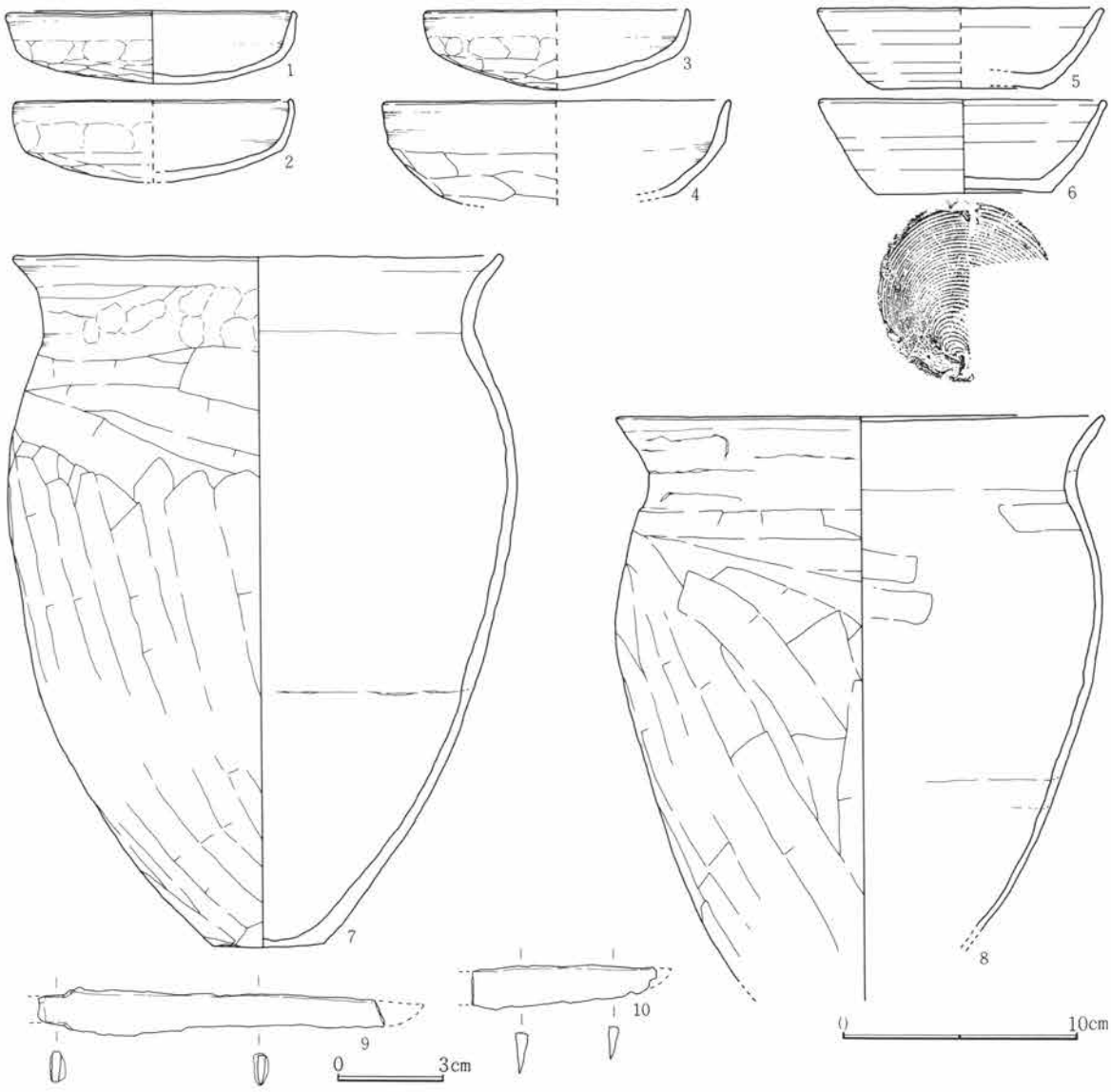


Fig. 208　F10号住居跡出土遺物

F10号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
208—1 65—1	土師器 杯	⅔	12.2×— ×3.0	貯蔵穴	底部不安定な平底。腰部丸く、体部直線的で僅かに外傾。体部横撫で。腰部指押え。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
208—2 65—2	土師器 杯	¼	11.8×— ×(3.4)	竈・埋土	底部不安定な平底気味。腰部から体部内湾して立つ。体部横撫で。腰部指押え。底部不定方向篦削り。	①良好　②鈍い橙　③やや粗
208—3 65—3	土師器 杯	¼	11.2×— ×3.3	床直	底部尖がる。腰部丸く、体部内湾気味に立つ。体部横撫で。腰部指押え。底部不定方向篦削り。	①良好　②鈍い橙　③やや粗砂粒混
208—4 65—4	土師器 杯	⅓	14.1×— ×(4.1)	床直・Pit 内埋土	底部不安定な平底か。腰部直線的に外傾し、稜をなして体部外反気味に立つ。体部横撫で。腰部二段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
208—5 65—5	須恵器 杯	¼	12.1×6.1 ×3.3	竈・貯蔵 穴	体部内湾気味に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
208—6 65—6	須恵器 杯	½	12.1×7.4 ×4.0	床直	体部直線的に開き深目。口唇部丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗

Ｆ10号住居跡出土遺物観察表（２）

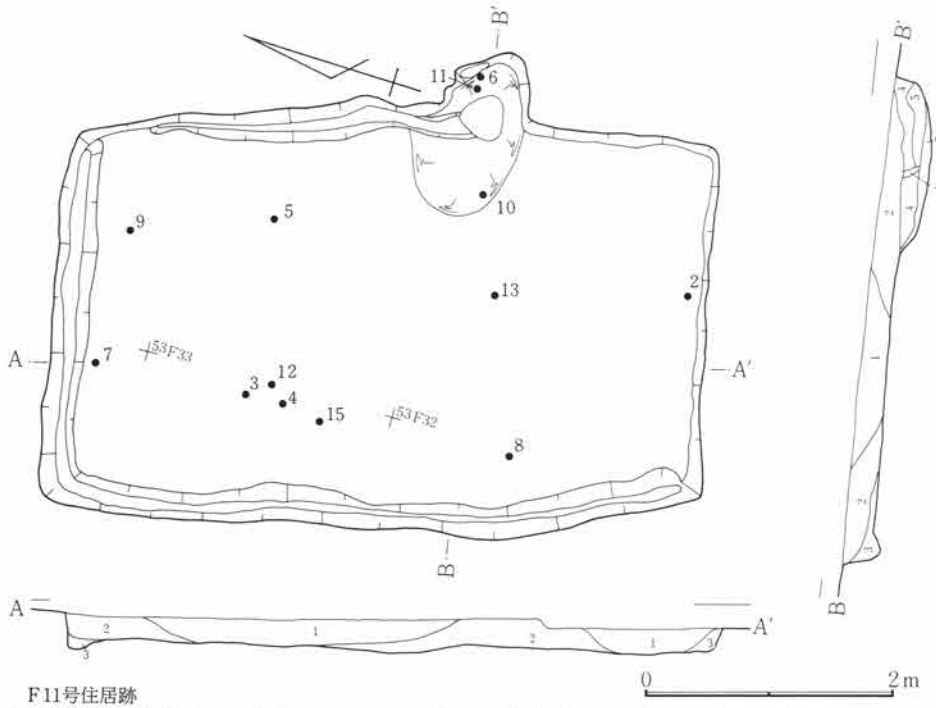
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
208－7 66－7	土師器 甕	ほぼ完形	20.4×4.6 ×28.5	竈・埋土	短胴、胴下半強く窄まり、上半に最大径をなす。口縁部外反気味に外傾し、上半は内湾気味に開く。口縁部指頭痕及び横指撫で後横撫で。胴上位横・斜・中から下位は縦箆削り。内面胴部やや下位に上下の接合痕あり。	①良好 ②橙 ③やや粗
208－8 66－8	土師器 甕	底部欠損	20.6×－ ×(23.4)	竈・埋土	胴部上半張り、下半強く窄まる。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。肩部横、上半から下半斜・縦箆削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
208－9 66－9	鉄製品 刀子	両端部欠損	長(9.7)cm	床直	刃部切先欠損。現存長9.0cm、幅1.0cm、棟厚0.2cm、茎部現存長0.7cm、幅0.8×厚0.2cm	
208－10 66－10	鉄製品 刀子	刃部小片	長(5.2)cm	床直	切先欠損。幅1.1cm、棟厚0.35cm。	

Ｆ11号住居跡（Fig. 209・210、PL. 18・66）

Ｆ区の中央部やや北側に位置し、51～53Ｆ30～33の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ比較的整った方形を呈する。規模的には当住居跡に近接する住居群のうちＦ４号・Ｆ８号・Ｆ９号住居跡に近似した大型竪穴住居跡である。南北長5.2m・東西長3.8～3.9m・壁高約20cmを測る。竈は東壁やや南寄りに付設され、主軸方位はＮ－79°－Ｅを示す。床面には緩い起伏が認められるが、踏み締まりは良好で安定している。

竈は東壁を半楕円形に掘り込み、住居内に大きく焚口部から燃焼部の窪みを作る。燃焼部底面には硬質赤化面の火床が形成され、直上には灰層が堆積する。燃焼部幅約85cm・焚口部の窪みからの奥行き1.25mを測る。壁下の溝は西壁から北壁・東壁にかけて巡り、南壁と東壁の一部には設けられていない。また貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は住居内に散在して検出され、土師器杯・甕・須恵器杯・椀などがある。



Ｆ11号住居跡

1　黒褐色土　軽石・Loam 塊含む。
2　黒褐色土　軽石・焼土粒少量含む。
3　黒褐色土
4　褐色土　Loam 粒・焼土粒含む。
5　灰層　焼土塊含む。
6　灰層
7　灰層　焼土塊含む。

Fig. 209　Ｆ11号住居跡

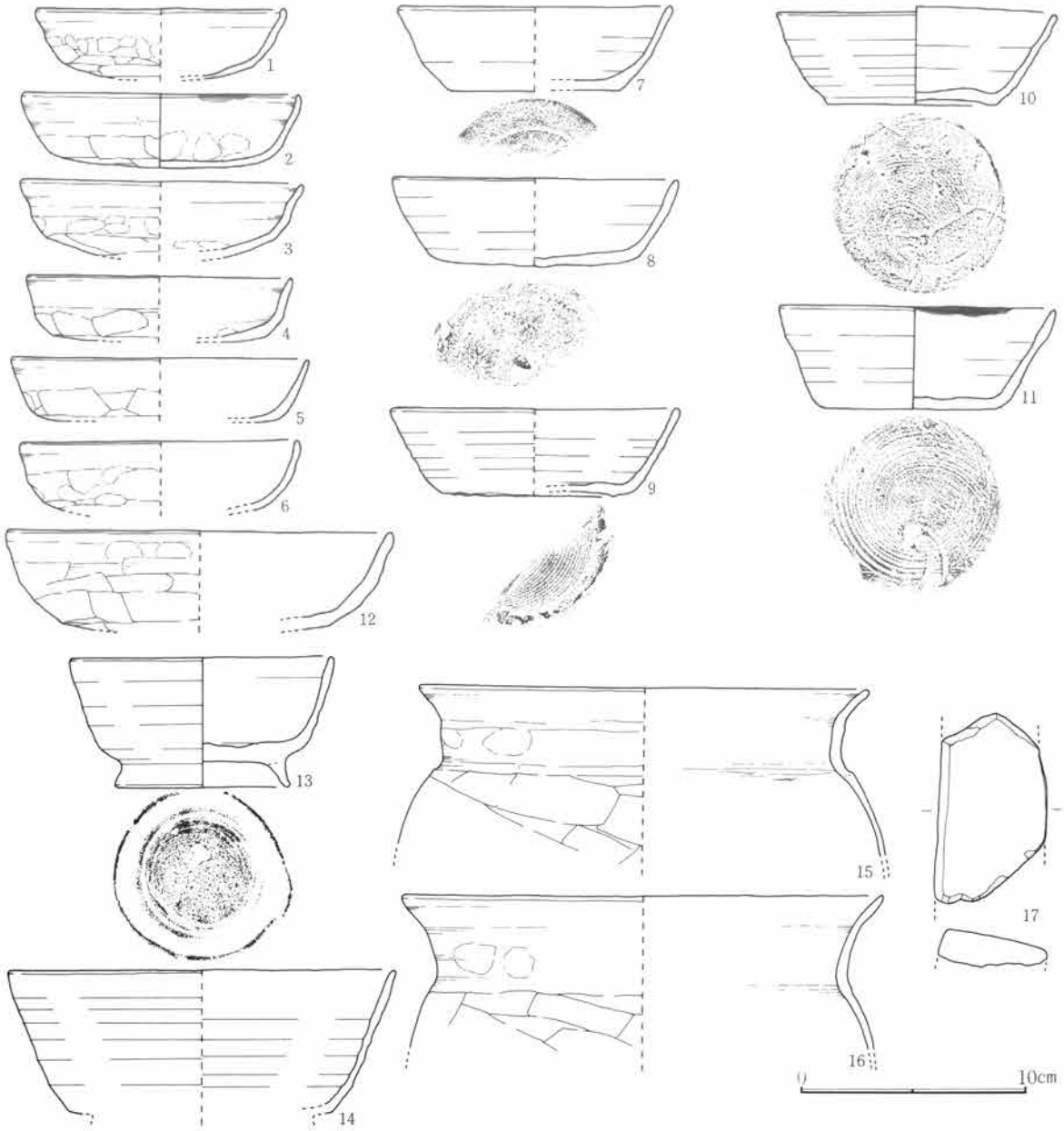


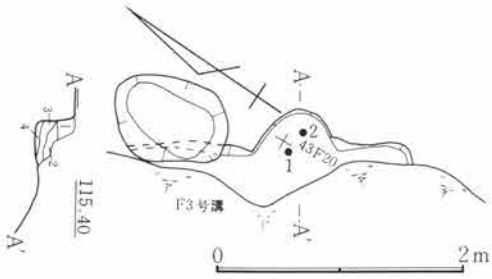
Fig. 210　F11号住居跡出土遺物

F11号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
201－1 66－1	土師器 杯	¼	11.0×－ ×(3.1)	埋土	丸底気味。腰から体部下半は丸く、中位で小さくくびれて上半は内湾。口唇部小さく丸まって内屈。体部上半横撫で下半は指頭痕。腰部狭めな横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
210－2 66－2	土師器 杯	⅔	12.2×－ ×3.2	南壁際	平底気味。腰部丸味をもつ。体部中位で小さくくびれ、上半は内湾気味に立つ。口唇部に油煙状付着物。体部横撫で及び篦撫で。腰部1段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
210－3 66－3	土師器 杯	¼	12.4×－ ×(3.3)	埋土	丸底気味。腰部丸く張り、強くくびれて体部外反気味に開く。体部横撫で。腰部指頭痕。底部不定方向篦削り。	①良好　②淡橙　③やや密
210－4 66－4	土師器 杯	⅓	11.6×－ ×(2.8)	埋土	平底気味。腰部やや直線的に折れ、体部は外反気味に立つ。体部横撫で。腰部1段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
210－5 66－5	土師器 杯	⅓	13.0×－ ×(2.8)	埋土	平底。体部直線的に立つ。体部上半横撫で。下半は1段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗細砂粒多混

Ｆ11号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
210－6 66－6	土師器 杯	⅓	12.2×－ ×(2.8)	竈・ 埋土	底部丸味をもつか、腰部丸味をもち、体部は小さくくびれ内湾気味に立つ。体部上半横撫で、下位は不明瞭な指頭痕及び撫で。腰部狭く篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
210－7 66－7	須恵器 杯	⅓	12.0×7.5 ×3.9	埋土	底径大。体部中位で僅かに張りやや深目。体部器肉薄く、口唇部細る。轆轤整形。底部回転篦切り後撫で調整。	①良好　②灰　③密
210－8 66－8	須恵器 杯	⅓	12.5×9.0 ×3.8	床直	底部大きくやや不安定。体部緩く内湾しやや深目。轆轤整形。底部回転篦切り後回転篦削り。体部外面吸炭し蓋状器物との重ね焼きか。	①良好　②灰白　③密
210－9 66－9	須恵器 杯	⅓	12.6×8.2 ×3.7	竈前床直	底径大。体部直線的で深目。轆轤整形。回転糸切り。体部外面吸炭気味で蓋状器物との重ね焼きか。	①良好　②灰白　③密
210－10 66－10	須恵器 杯	ほぼ完形	12.2×7.4 ×4.3	竈・ 埋土	底径大。体部直線的で深い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③密
210－11 66－11	須恵器 杯	完形	12.0×8.0 ×4.5	竈	底径大。体部直線的で深いが上半で緩くくびれて僅かに肥厚。口唇部に油煙状付着物。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③密
210－12 66－12	土師器 杯	小片	16.8×(－) ×(4.3)	埋土	器肉厚く鉢型になるか。不安定な平底。腰部直線的に開き体部外反気味に開く。体部上半横撫で、下半横篦撫で。腰部２段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
210－13 66－13	須恵器 椀	⅔	11.4×7.6 ×5.6	埋土	腰部強く折れて張る。体部直立気味で深い。付高台やや高い。轆轤整形。右回転糸切り。内面体部及び外面口縁周辺に釉がかかる。同器種の重ね焼きか。	①良好　②灰　③密
210－14 66－14	須恵器 椀　？	小片	17.0×－ ×(6.2)	埋土	腰部強目に張るか。体部直線的で深い。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
210－15 66－15	土師器 甕	口縁部 ¼	21.0×－ ×(7.7)	埋土	肩部やや丸く張る。口縁部下位直立し、上半は折れて外傾するコの字口縁。口縁部指頭痕及び横撫で。肩部横・斜篦削り。内面横撫で。	①良好　②橙　③やや粗
210－16 66－16	土師器 甕	口縁部 ¼	19.6×－ ×(7.0)	埋土	肩部やや丸く張る。口縁部下半緩く外傾し、上半は内湾気味に開く。口縁部指頭痕、横撫で。肩部横・斜篦削り。内面横撫で。	①良好　②橙　③やや粗
210－17 66－17	石製品 砥石		長・幅・厚 (7.9)×4.7×1.5	埋土	表面及び長辺の側面使用。裏面は剝離状面様をなすが部分的に使用痕を認める。74.9g	流紋岩（砥沢？）



Ｆ12号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒・炭化粒多量に含む。
2　焼土塊層　炭化粒多量に含む。
3　暗褐色土　焼土塊・黒色灰多量に含む。
4　黒色灰層

Fig. 211　Ｆ12号住居跡

Ｆ12号住居跡（Fig. 211・212、PL. 18・67）

Ｆ区の東部に位置し、42・43Ｆ19・20の範囲にある。当跡はそのほとんどがＦ３号溝によって消失しており、検出できたのは東壁の一部と竈のみである。平面形は方形を呈すると考えられるが規模などはまったく不明である。主軸方位はＮ－63°－Ｅを示すか。竈燃焼部火床は硬質赤化面が形成され、焼土塊が堆積している。奥壁は急角度で立ち上がる。

出土遺物は竈内より須恵器高台付盤・土師器甕が検出されている。

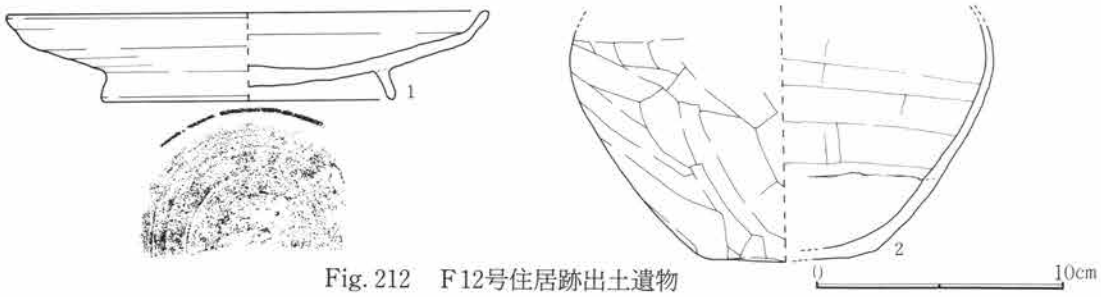


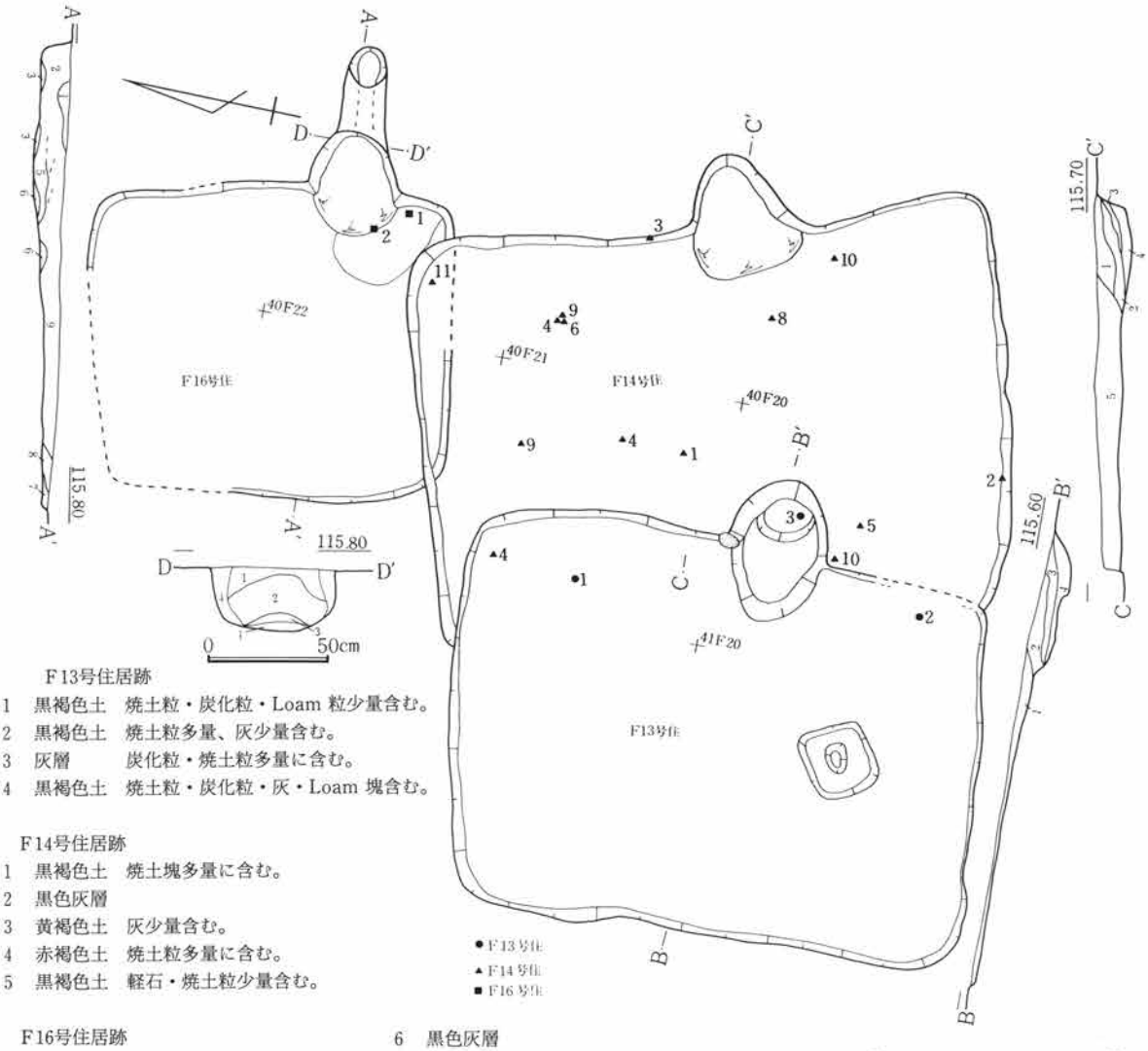
Fig. 212　Ｆ12号住居跡出土遺物

Ｆ12号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
212－1 67－1	須恵器 盤	口～台 小片	19.6×11.8 ×3.4	竈	底部から体部にかけ直線的で大きく開き、口縁部強く折れる。付高台高く直線的に張る。轆轤整形底部右回転篦削り	①良好　②鈍い赤褐 ③やや密
212－2 67－2	土師器 甕	胴部⅓	－×6.4 ×(9.2)	竈	不安定な平底気味。胴部丸く上位は特に強く張る。胴上位横、中位幅狭く縦・下位斜篦削り。底部不定方向篦削り。内面下位接合痕。中位は三段の横篦撫で。	①良好　②鈍い橙 ③やや粗

Ｆ13号住居跡（Fig. 213・214、PL. 18・67）

Ｆ区の東部に位置し、40～42Ｆ18～20の範囲にある。当跡の東でＦ14号住居跡と重複しており、これより新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長4.35m・東西長3.3mを測る。壁高は南半の削平が著しく壁線は痕跡をたどれる程度である。遺存良好な北半で約10cmを測る。竈は東壁のほぼ中央に付設され、主軸方位はＮ－88°30′－Ｅを示す。床面は南半と北半でその基盤層が異なり、凝灰岩質



Ｆ13号住居跡
1　黒褐色土　焼土粒・炭化粒・Loam 粒少量含む。
2　黒褐色土　焼土粒多量、灰少量含む。
3　灰層　炭化粒・焼土粒多量に含む。
4　黒褐色土　焼土粒・炭化粒・灰・Loam 塊含む。

Ｆ14号住居跡
1　黒褐色土　焼土塊多量に含む。
2　黒色灰層
3　黄褐色土　灰少量含む。
4　赤褐色土　焼土粒多量に含む。
5　黒褐色土　軽石・焼土粒少量含む。

Ｆ16号住居跡
1　焼土層（竈煙道部天井）
2　暗褐色土　焼土粒・灰含み締まり弱い。
3　暗青灰色灰層
4　褐色土　内側焼壁化
5　褐色土　焼土塊多量に含む。
6　黒色灰層
7　黄褐色土
8　黄褐色土塊
9　黒褐色土　軽石・炭化小粒含む。

Fig. 213　Ｆ13・14・16号住居跡

層を床面にする南半は安定するが、北半は暗褐色土を床面にするためやや不安定である。

竈は東壁を約60cm半楕円形に掘り込むが、F14号住居跡との重複で確認がおくれ、上位の遺存状態は悪い。燃焼部は楕円形を呈し顕著に窪むが、燃焼部最下層の焼土・灰などを含む黒褐色土は掘形に属すると考えられる。竈の形態は住居内に突出する袖部を有さないが、左壁線上には凝灰岩質の風化が進んだ小塊が残る。燃焼部幅70cm・燃焼部奥行き1.1mを測る。貯蔵穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。南側中央に方形状の Pit が穿たれるが当跡に属するかは不明である。

出土遺物は散在しており、土師器杯・須恵器杯などがある。

F 14号住居跡（Fig. 213・215、PL. 19・67）

F区の東縁に位置し、38～41 F18～21の範囲にある。西側でF13号住居跡と、北側でF16号住居跡と各々重複しており、新旧関係は両者より旧い時期の所産である。F13号住居跡との重複によって西壁線は消失している。平面形は南北方向に長軸を呈すると考えられ、南北長4.8m・東西は東壁線より西へ約3.3mの範囲まで確認した。壁高は遺存の良好な東壁から北壁にかけての部分で約30cmを測る。竈は東壁僅かに南に寄って付設されており、主軸方位はN－74°－Eを示す。床面は調査時での認識が一定しなかったためか、結果的には不安定な状態になってしまった。

竈は東壁約60cmを半楕円形に掘り込み、燃焼部は緩く窪む。袖部などの構築は見られなかった。燃焼部幅約90cm奥行き１mを測る。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されていない。

出土遺跡は散在しており、土師器杯・椀・刀子・鉄釘などがある。また灰釉器細片も出土している。

F 16号住居跡（Fig. 213・216、PL. 19・67）

F区の東縁に位置し、38～40 F21・22の範囲にある。南側でF14号住居跡と重複しており、これより新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。南北長３m・東西長2.5m・壁高約10cmを測りやや小規模な住居跡である。竈は東壁の大きく南に偏って付設され、主軸方位はN－81°－Eを示す。床面は西側にやや高まりをなすが踏み締まりは固く安定している。

竈は東壁を約50cmほど半楕円形に掘り込み、さらに狭長な煙道部が設けられる。煙道天井部の崩落はなくそのまま遺存している。床面より若干の窪みをもつ燃焼部よりほとんど段差をもたない煙道底面は煙出し孔に至り急角度で立ち上がる。燃焼部幅75cm・奥行き80cm・煙道部長さ70cm・径35cmを測る。なお袖部構築については確認されていない。

出土遺物は少量で、須恵器杯・灰釉陶器片などがある。

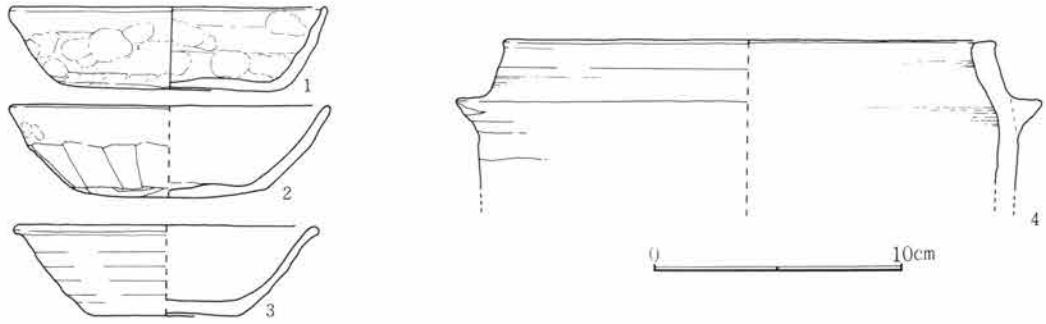


Fig. 214　F13号住居跡出土遺物

Ｆ13号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
214－1 67－1	土師器 杯	完形	12.7×8.0 ×3.3	埋土	平底。体部緩く波うって立つ。口唇部丸まって僅かに内屈口縁部横撫で。体部粗い指頭痕。底部篦削り。内面指頭痕。	①良好　②橙　③やや密
214－2 67－2	土師器 杯	⅓	12.8×7.5 ×3.7	床直	僅かに張る平底。体部直線的に折れる。口縁部横撫で。体部幅広な横篦削り。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや密
214－3 67－3	須恵器 杯	¼	12.2×5.8 ×3.6	竈	体部僅かな丸味をもち、口唇部は緩く外反。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
214－4	羽釜	口縁部 小片	19.6×－×(6.0) 鍔径23.2	埋土	口縁部外反気味に内傾。口唇部断面矩形を呈し、上端面は平坦。鍔部断面三角をなし強く突出。	①環元良好　②灰 ③やや粗

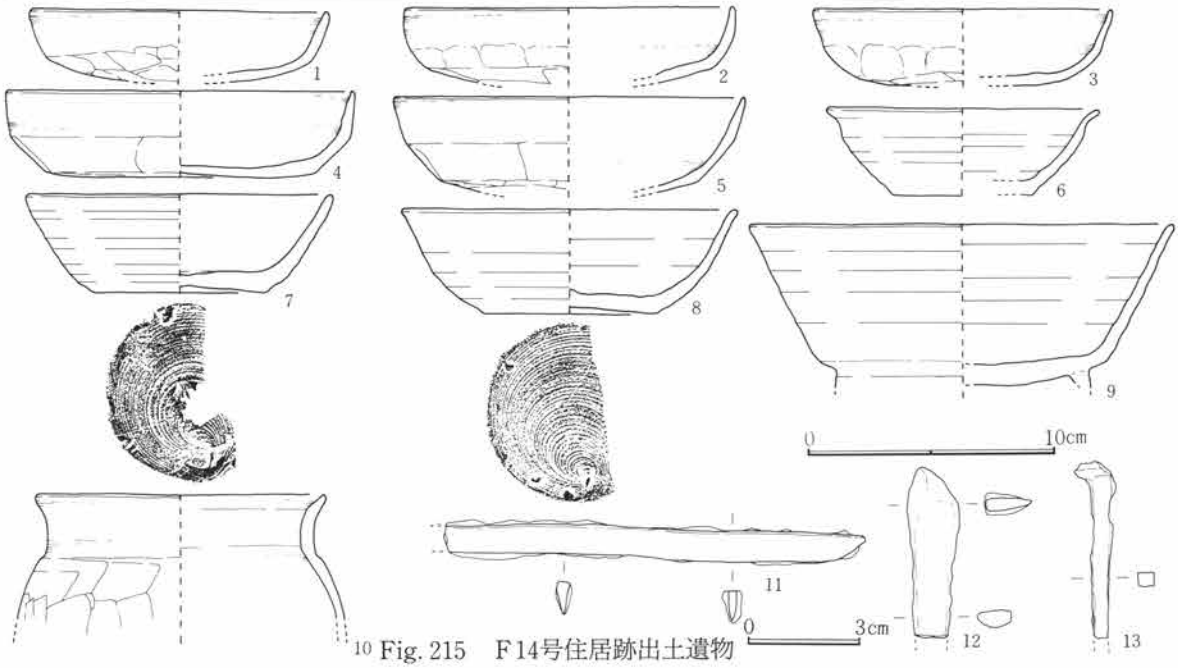


Fig. 215　Ｆ14号住居跡出土遺物

Ｆ14号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
215－1 67－1	土師器 杯	⅓	12.0×－ ×(2.8)	埋土・ 床面下	底部不安定な平底。体部直線的で僅かに外傾。体部横撫で底部不定方向篦削り。腰部弱い篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
215－2 67－2	土師器 杯	¼	13.2×－ ×(3.0)	南壁際	底部不安定な平底。体部内湾して立つ。体部横撫で。腰部指頭押え。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
215－3 67－3	土師器 杯	¼	12.0×－ ×(3.0)	竈外	底部不安定な平底。腰部やや丸味をもち、体部緩く波打って外傾。体部横撫で。腰部指頭押え。底部不定方向篦削り	①良好　②橙　③やや粗
215－4 67－4	土師器 杯	⅔	14.0×10.8 ×3.4	埋土	平底。腰部直線的に外傾し、体部直立気味に立つ。体部横撫で。腰部一段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
215－5 67－5	土師器 杯	¼	14.0×－ ×(3.8)	床直	底部不安定な平底。腰部直線的に外傾し、体部は折れて僅かに外傾。体部横撫で。腰部一段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
215－6 67－6	須恵器 杯	⅓	10.9×5.4 ×3.4	埋土・ 床面下	体部丸味をもち、口縁部強くくびれて外反して開く。轆轤整形。底部回転糸切りか。	①良好　②暗灰　③密
215－7 67－7	須恵器 杯	¼	12.3×7.0 ×3.9	埋土・ 床面下	体部内湾気味に開く。腰部に強いあて。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
215－8 67－8	須恵器 杯	⅔	13.4×6.8 ×4.1	埋土・ 床面下	体部やや丸味をもち、上半は緩く外反気味。腰部に強いあて。体部深目。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
215－9 67－9	須恵器 椀	⅓	17.0×－ ×(6.5)	床直	腰部強く折れ、体部深く直線的に立つ。底部やや凸気味。付高台直立か。轆轤整形。回転糸切り後周辺手持篦削り。	①良好　②灰　③密 発泡性黒色粒混
215－10 67－10	土師器 小型甕	口縁部 ⅔	11.6×－ ×(5.0)	埋土	肩部小さな段をなし、口縁部下半は直立。上半は小さく内湾気味に外傾。口縁部横撫で肩部横。胴部縦篦削り。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
215－11 67－11	鉄製品 刀子	刃部	長(11.2)	埋土	刃部幅0.8cm。棟厚0.3cm。	

Ｆ４号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
215—12 67—12	鉄製品 不　明	片端部 欠損	長(4.5)	埋土	先端部は刃部をなし幅広で緩く左に曲がる。基部は厚味のある板状を呈す。刃部幅1.4×厚0.3cm、基部0.9×0.4鈍？	
215—13 67—13	鉄製品 角　釘	端部欠 損	長・幅・厚 (4.7)×0.5×0.4	埋土	頭部形状折頭式の角釘。	

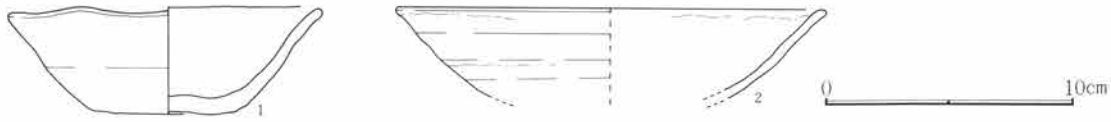


Fig. 216　Ｆ16号住居跡出土遺物

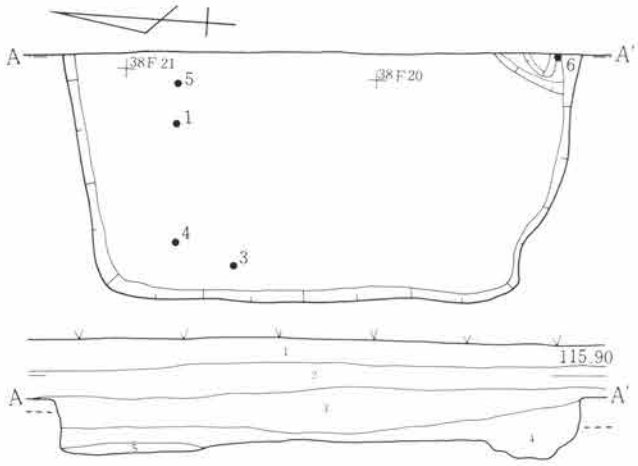
Ｆ16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
216—1 67—1	須恵器 杯	完形	12.6×5.9 ×4.3	竈前床直	腰から体部に丸味をもち、体部上半はゆるく外傾。轆轤整形。回転糸切り。底部周縁は磨滅著しい。	①良好やや軟　②灰 ③やや密砂混
216—2 67—2	灰釉陶器 皿	小片	(17.2)×— ×(3.3)	竈前床直	腰部丸味をもち体部大きく開く。体部中位まで回転篦削り内全面、外体部上半に施釉。刷毛塗か。光ケ丘～大原(大)	①良好　②灰白　③ 密

Ｆ15号住居跡（Fig. 217・218、PL. 19・68）

Ｆ区の東縁に位置し、東半は調査区域外にかかるため、全体は検出できていない。検出は37・38Ｆ19～21の範囲である。他の遺構との重複はないが、西に近接してＦ13号・Ｆ14号・Ｆ16号住居跡などがある。平面形は方形を呈すると考えられるが南西隅の壁線が小さく蛇行して乱れる。南北長は4.1mを測り、東西は西壁線より東へ約２mの範囲まで確認した。壁高は調査区域外に面する上層断面では約45cmを測り、表土下の粘性のある褐色土を掘り込んでいる。また西壁線に基づく東西軸方位はN—88°—Eを示す。竈・壁下の溝など諸施設は検出されないが、南壁線沿いに深さ10cm程度の落ち込みがあり、埋土より鉄製利器の小破片が出土している。床面は北壁沿いが段状に低くなるが踏み締まりは比較的安定している。

出土遺物は散在しており、須恵器杯・椀のほか鉄製刀子がある。



Ｆ15号住居跡
1　表土
2　黒褐色土（耕作土）
3　黒褐色土　軽石・炭化粒・焼土粒・粘土塊含む。
4　黒褐色土　粘土塊含む。
5　黒褐色土　褐色土塊多量に含む。

Fig. 217　Ｆ15号住居跡　0　2m

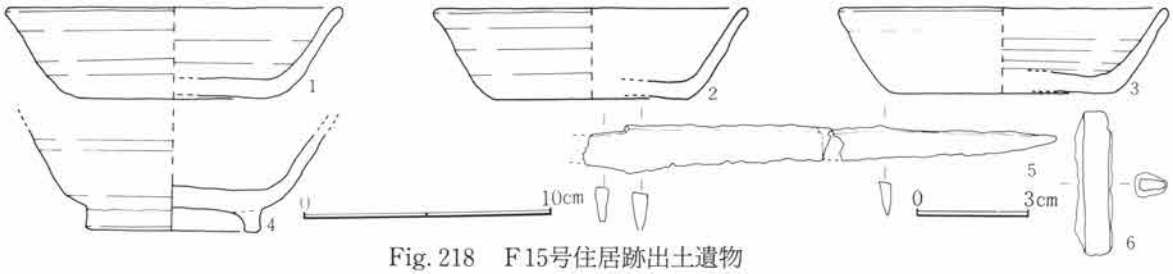


Fig. 218　Ｆ15号住居跡出土遺物

Ｆ15号住居跡出土遺物観察表

Fig.№ PL.№	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
218－1 68－1	須恵器 杯	¼	13.6×7.6 ×3.6	埋土	腰部に丸味をもち、口唇部は丸まり緩く外反。轆轤整形。回転糸切り、器肉厚目。	①良好　②灰　③やや粗
218－2 68－2	須恵器 杯	¼	12.4×7.8 ×3.6	埋土	体部直線的に立ち、口唇部丸い。轆轤整形。回転糸切り。器肉厚目。	①良好　②灰　③やや粗
218－3 68－3	須恵器 杯	小片	13.0×8.6 ×3.4	埋土	体部やや直線的に立つ。口唇部丸い。轆轤整形。回転糸切り。器肉厚目。	①良好　②灰白　③やや粗
218－4 68－4	須恵器 椀	口縁部 欠損	－×7.0 ×(3.9)	埋土	腰部丸く張り、体部直線的か。付高台断面矩形を呈し直立する。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
218－5 68－5	鉄製品 刀子	茎部欠損	長(12.7)cm	埋土	刃部は切先に向い幅を減じ磨き減り著しい。刃部長11.4cm・幅1.3cm、棟厚0.4cm。茎部幅1.0cm・厚0.3cm。	
218－6 68－6	鉄製品 不明	両端部 欠損	長・幅・厚 (3.8)×0.7×0.3	埋土	片側縁は厚さを減じており、刀子の茎部の可能性あり。	

Ｆ17号住居跡（Fig. 219～221、PL. 19・68）

Ｆ区の東部に位置し、40～42Ｆ22～25の範囲にある。Ｆ20号・Ｆ21号住居跡と重複するが、両者より新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつが、南壁に比べて北壁線が長い台形状の歪んだ方形を呈す。南北長約5.65m・東西長は4.6mを測るが、北壁線の長さが約4.4mに対して、南壁線は3.2mである。壁高は遺存の良好な南東部で13～15cmである。竈は東壁の大きく南に偏った位置に付設され、主軸方位はＮ－95°－Ｅを示す。床面は踏み締まりが弱く不安定なためか、検出状況ではかなり高底差が生じている。

竈は東壁を先細りの楕円形に約80cm掘り込んで構築される。燃焼部左側の東壁線上には凝灰岩質加工材の残欠が埋設されている。竈前方は浅い大きな窪みをなし黒色灰が堆積する。硬質赤化面は形成されていないものの、この部分が燃焼部の範囲に含まれると考えられることから、東壁線上に埋設された石材は位置的に袖材ではなく竈側縁部を構成するものであろう。燃焼部幅90cm・火床の窪みを含む竈全長1.6mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり径40×55cm・深さ15cm程度の不整楕円形を呈す。住居内には数個の Pit が検出されているが当跡に属するものかは不明である。また北東部床面には径1.9mの浅い不定形の窪みがあり、窪みの東辺に灰層が確認されている。この灰層は当跡の北に重複して存在するＦ21号住居跡に属するものと考えられる。

出土遺物は小片が多く散在して検出され、須恵器杯・甕・羽釜・灰釉陶器のほか、砥石・鉄鏃などがある。

Ｆ19号住居跡（Fig. 219・222、PL. 68・69）

Ｆ区の東縁部に位置し、38・39Ｆ22～24の範囲にある。Ｆ20号・（Ｆ22号）住居跡と重複しており、これより旧い時期の所産と考えられる。東壁線はその南半で東に属し、調査区域外に延びる様相が見られ、南壁もその東端が調査区域外に入る。このため平面形の全体は確認できないが、南東部に突出部をもつ方形形状になろうか。現状では南北方向に長軸をもち、南北長2.25m・東西長1.35m・突出部分の東西長は西壁線より1.4mの範囲まで確認した。壁高は約15cmを測る。当跡は竈などの検出はされず、住居跡としての確証はないが、東壁突出部に竈の存在も考えられる。なお西壁線を基軸にする東西軸方位はＮ－81°－Ｅを示す。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。北西隅には径70cm・深さ26cmの円形 Pit が検出されているが当跡に属するかは不明である。

出土遺物は散在して検出され、須恵器杯・椀・灰釉陶器・羽釜のほか鉄釘がある。

Ｆ20号（Ｆ22号）住居跡（Fig. 219・223、PL. 19・69）

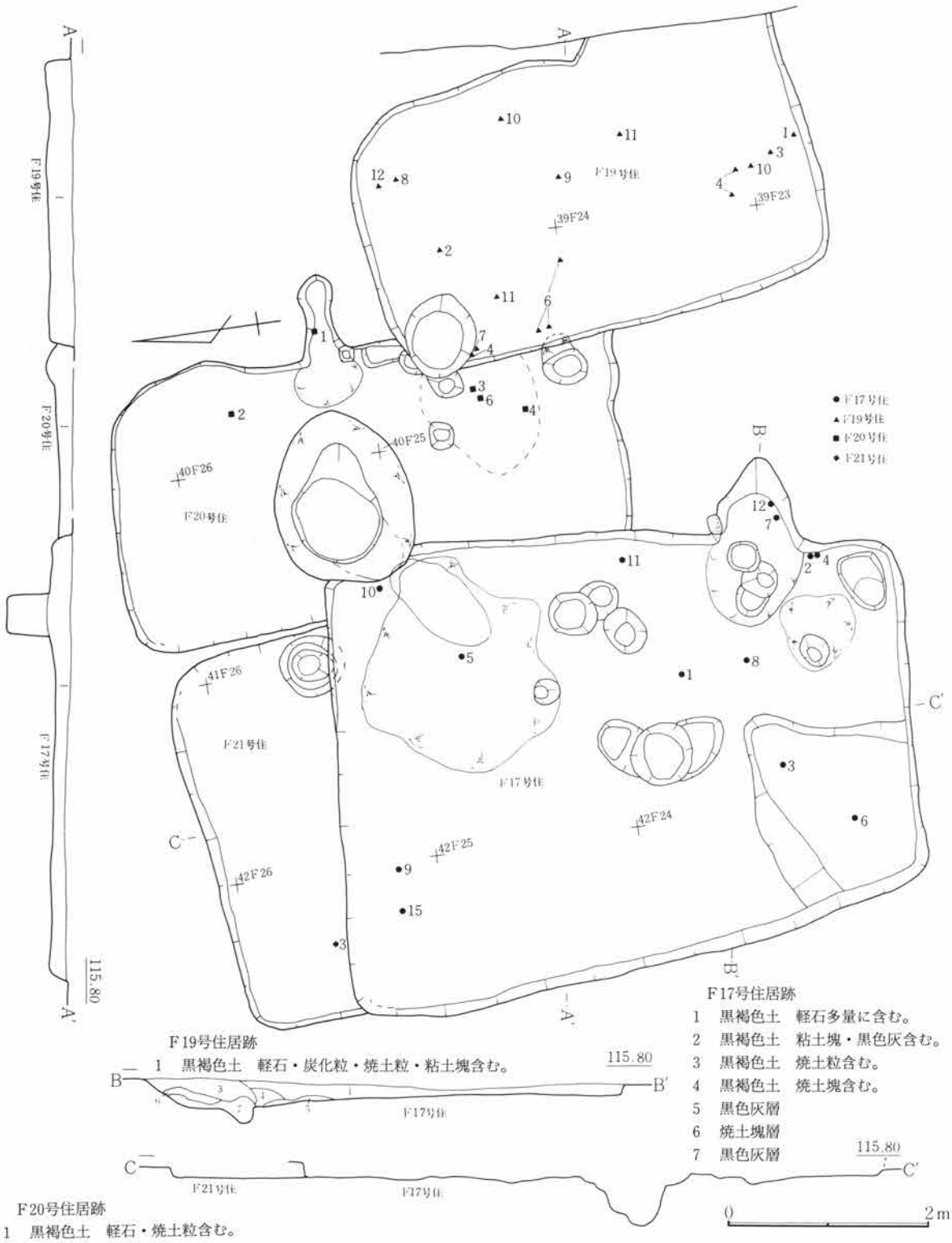


Fig. 219　F17号・F19号・F20号・(F22号)・F21号住居跡

F区の東部に位置し、39・40F23～26の範囲にある。当跡は北側のF20号と南側のF22号住居跡とが重複したものである。しかし、両者の壁線の軌跡は東・西で各々重複するF17号・F19号住居跡によって消失しており、その範囲を確認できない。また、相互に重なり合う部分でも壁線の検出はできず、両者の新旧関係は不明である。しかし、F20号住居跡の竈は燃焼部の窪みが比較的明瞭に残存しており、この点を考慮すれ

ばＦ20号住居跡が新しい。他遺構との重複は、前述のＦ17号・Ｆ19号住居跡のほかＦ21号住居跡とも重複している。新旧関係は前二者より旧い時期の所産である。Ｆ20号住居跡については検出時において直接の重複部分が認められず確定はできないが、出土遺物からの比較では当跡が新しい時期と考えられる。住居跡内中央部にはＦ６号井戸跡が検出されているが、これは中世以降の時期に属する。平面形は双方とも方形を呈すると考えられ、Ｆ20号住居跡の東西長1.4mの規模が知れるほかは全く不明である。南北通じての規模は5.05mを測る。壁高は両者とも10cm前後である。Ｆ20号住居跡の竈は東壁に付設され、主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。Ｆ22号住居跡は南壁線による東西軸方位は、およそＮ－90°－Ｅである。床面は両住居跡ともほぼ平坦をなし、比較的良好に踏み締まる。

Ｆ20号住居跡の竈は東壁を75cm程度狭長に掘り込む。先端部が円形になる煙出し孔をなしており、東壁部分の掘り込みは煙道部にあたると考えられる。前述したように竈燃焼部は住居内に浅い窪みとなっている。その範囲からみて竈は本来突出する袖部を有する形態であったと考えられるが、その構築痕は検出されていない。燃焼部幅は50～60cmで、燃焼部を含む竈全長は1.2mを測る。Ｆ22号住居跡の竈は検出されていないが、東壁に接して、床面上に灰層の分布があり、竈から流出したものと思われる。南東隅には径50cm・深さ13cmの円形 Pit があり、角礫数個が検出されており位置的にはＦ22号住居跡の貯蔵穴であろう。なおＦ20号住居跡に属する貯蔵穴は確認されていない。

出土遺物は散在しており、須恵器椀の他平瓦片がある。また完形の須恵器椀が20号住居跡竈煙道部より出土している。

Ｆ21号住居跡（Fig. 219・224、PL. 19・69）

Ｆ区の東部に位置し、40～42Ｆ25・26の範囲にある。遺構のほとんどがＦ17号住居跡との重複によって消失しており詳細は不明である。また検出部分の平面位置では示されないが、Ｆ20号・Ｆ22号住居跡とも重複する。新旧関係はいずれより旧い時期の所産である。平面形は方形を呈すると考えられ、東西長3.75mを測る。南北は北壁より南へ1.8mの範囲まで確認している。なお、Ｆ17号住居跡の床下より検出した灰層が当跡の竈の痕跡とすれば、竈は東壁に付設されていたことになり、さらに不整楕円の落ち込みまで含む範囲を当跡とすれば、南北長は少なくとも４mとなる。壁高は約10cmを測る。北壁線の示す東西軸方位はＮ－82°－Ｅである。

出土遺物はほとんどは埋土中より検出され、僅かである。

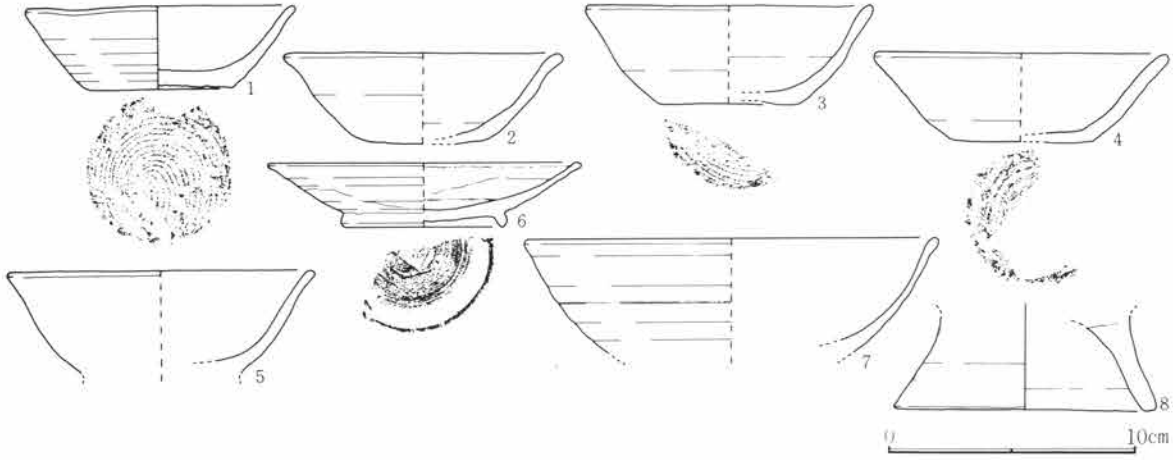


Fig. 220　Ｆ17号住居跡出土遺物（１）

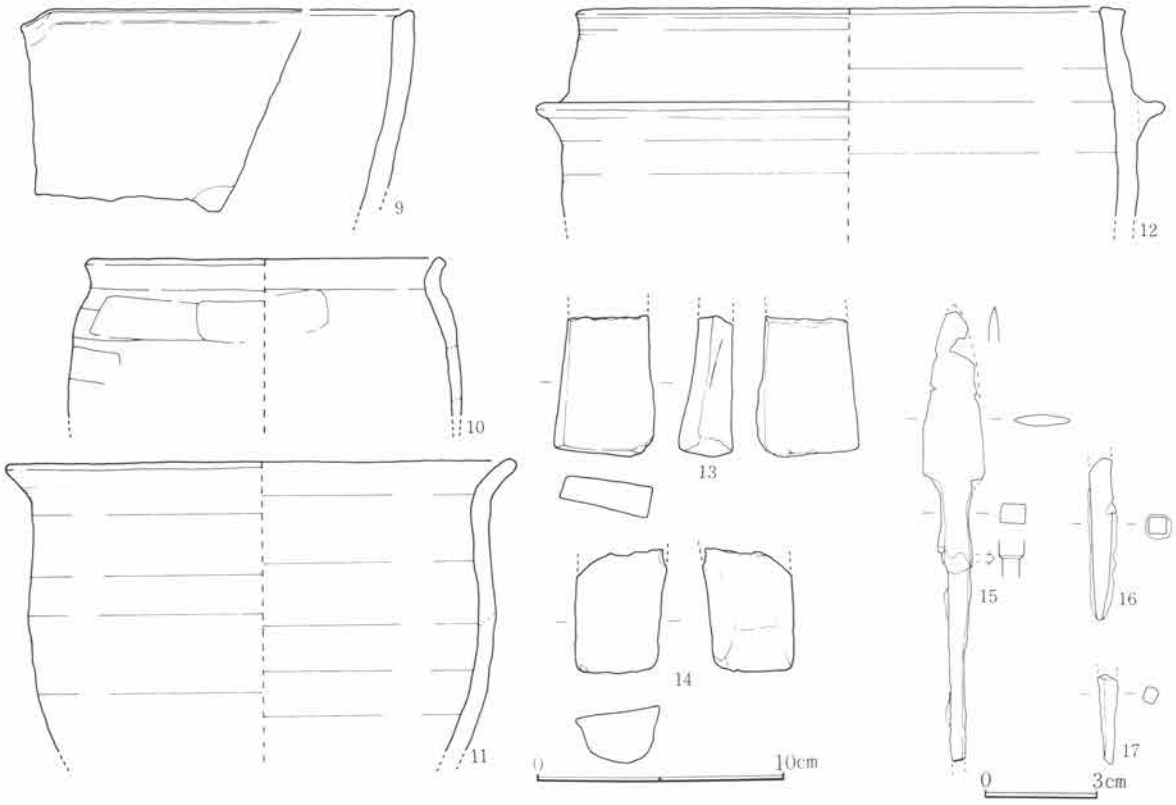


Fig. 221　F17号住居跡出土遺物（２）

Ｆ17号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
220－1 68－1	須恵器 杯	⅔	10.8×6.0 ×3.4	床直	体部直線的に開く。口唇部やや細る。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化やや軟 ②橙 ③やや密
220－2 68－2	須恵器 杯	¼	11.1×5.0 ×3.6	竈右床面	底径小さく、体部中位に張りをもつ。口縁部緩く外反し、口唇部丸まる。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好 ②褐灰③やや粗砂粒混
220－3 68－3	須恵器 杯	¼	11.4×5.4 ×3.9	埋土	体部中位に張りをもちやや深目。口縁部内湾気味に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好 ②灰 ③やや粗細砂混
220－4 68－4	須恵器 杯	⅓	11.5×5 ×3.5	竈右床面・埋土	底径小さく、口縁部緩く外反。口唇部肥厚気味で丸い。燻し焼成。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②黒灰 ③やや粗細砂多く混
220－5 68－5	須恵器 椀	底部欠損	12.2×－ ×(4.1)	埋土	体部丸味強く、口縁部緩く外反して開く。轆轤整形。	①酸化良好 ②淡黄 ③やや粗細砂多混
220－6 68－6	灰釉陶器 皿	⅙小片	12.4×6.8 ×2.6	埋土	体部僅かに丸味をもち、口唇部丸まる。高台低く丸味をもつ。内外面漬け掛け施釉。虎渓山２号窯式期。	①良好 ②灰白 ③密
220－7 68－7	灰釉陶器 椀	小片	16.5×－ ×(4.5)	竈	腰部から体部丸味強い。口縁部緩く外反して開き、口唇部僅かに肥厚。漬け掛け施釉。虎渓山２号窯式期。	①良好 ②灰白 ③密
220－8 68－8	須恵器 椀？	脚部	－×10.4 ×(3.8)	埋土	足高高台付椀の台部、高くハの字状に開く。端部断面矩形。轆轤整形。身部との剥離面に回転糸切り残る。	①良好 ②灰 ③やや粗白色小礫混
221－9 68－9	須恵器 片口鉢	小片	27.2×－ ×(7.8)	埋土	張り少なく、胴部上半より直線的に口唇部に至る。口唇部上端面段をなし、断面矩形。巻き上げ轆轤整形。	①やや軟 ②灰 ③細砂粒混る
221－10 68－10	土師器 小型甕	小片	14.2×－ ×(6.2)	床直	肩部僅かに張り、口縁部低く小さく外反気味に開く。巻き上げ成形。肩部狭い幅で横位篦削り。口唇部断面丸い。	①良好 ②赤橙 ③やや粗
221－11 68－11	須恵器 甕	小片	20.2×－ ×(11.5)	埋土	胴部張り少ない。肩部との変換なく小さく外反する口縁部に至る。口唇部断面丸い。巻き上げ轆轤整形。下半篦削り。	①酸化やや軟 ②淡橙 ③やや密
221－12 68－12	羽釜	小片	21.8×－×(8.3) 鍔径24.8	竈	口縁部やや高く直線的で僅かに内傾。口唇部矩形。鍔部張い水平に突出。	①酸化良好 ②橙 ③やや密
221－13 68－13	石製品 砥石		長・幅・厚 5.7×3.5×1.2	埋土	長方形、中央部薄く使い減りか。表裏および各側面使用。重50.0g	流紋岩
221－14 68－14	石製品 砥石		長・幅・厚 4.8×3.6×2.0	埋土	表面の使用特に著しい。46.9g	流紋岩

F 17号住居跡出土遺物観察表（2）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
221—15 68—15	鉄製品 鉄鏃	茎端部 欠損	長(11.8)cm	埋土	鏃先は柳葉形を呈し、長・幅・厚は4.5×1.6×0.3cm、篦被長・幅・厚は2.0×0.7×0.5cm、茎は5.3×0.5×0.4cm。	
221—16 68—16	鉄製品 角釘	頭部欠損	長・幅・厚 (4.2)×0.5×0.4	埋土	角釘。	
221—17 68—17	鉄製品 角釘	先端部	長・幅・厚 (2.4)×0.4×0.3	埋土	角釘。	

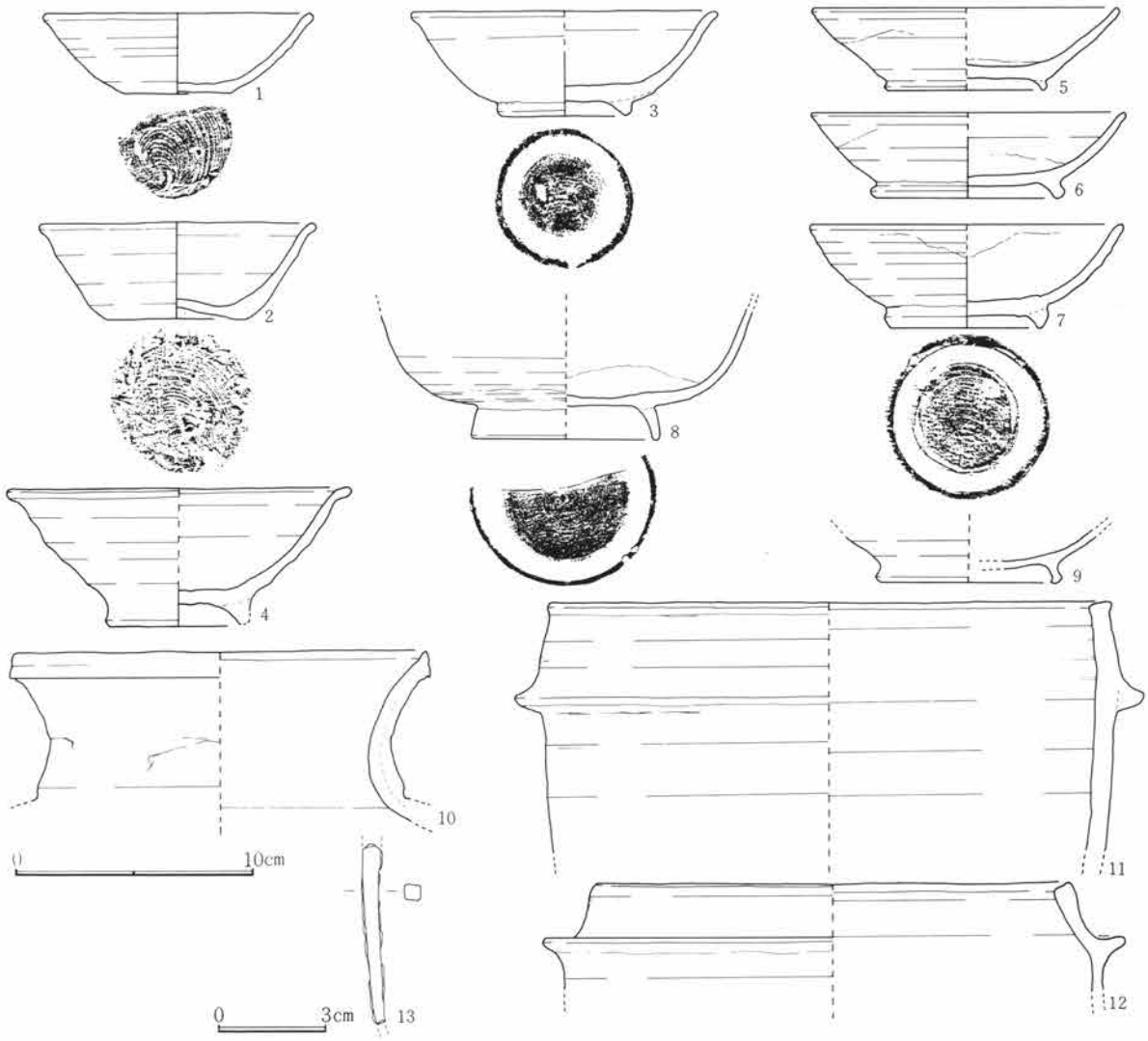


Fig. 222　F19号住居跡出土遺物

F 19号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
222—1 68—1	須恵器 杯	¾	11.1×4.5 ×3.3	床直	底径小さく体部丸味をもって内湾して開く。口唇部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好　②鈍い橙　③やや密
222—2 68—2	須恵器 杯	⅔	11.4×5.7 ×40	埋土	腰部肥厚し丸味をもつ。体部直線的に開き、口唇部丸く緩く外反。底部部分的に凹む。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好　②褐灰　③やや密
222—3 68—3	須恵器 椀	½	12.5×5.5 ×4.3	床直	腰部から体部丸味強く、内湾して大きく開く。口唇部緩く外反。付高台断面丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化良好　②浅黄橙　③やや粗砂粒混

Ｆ19号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
222－4 69－4	須恵器 椀	⅓	14.2×(6.0) ×5.6	Pit際・ 埋土	体部中位丸味をもち僅かに張る。口唇部丸く強く外屈して開く。付高台断面矩形か。轆轤整形。底部撫で調整。	①良好　②灰　③粗
222－5 69－5	灰釉陶器 皿	小片	12.6×6.7 ×3.4	埋土	体部直線的に開く。高台低く小さい。底部に回転糸切り痕。体部内外面上半漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好　②灰白　③緻密
222－6 69－6	灰釉陶器 椀	口縁一部欠損	12.9×8.0 ×3.5	埋土	体部僅かに丸味をもつ。高台断面丸く、幅広。底部回転篦削り。内外面体部漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好　②灰白　③緻密
222－7 69－7	灰釉陶器 椀	½	12.9×6.7 ×4.2	Pit際・ 埋土	体部丸味をもつ。高台稜丸く断面略三角。底部回転糸切り。内外面体部漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好　②灰白　③やや粗
222－8 69－8	灰釉陶器 深椀	⅓口縁部欠損	－×7.8 ×(5.2)	埋土	腰部丸く強く張り回転篦削り。高台やや高く内湾して立つ底部回転篦削り。内外面体部漬け掛け施釉。虎渓山１号窯	①良好　②灰　③やや密
222－9 69－9	灰釉陶器 椀・皿	底部小片	－×7.7 ×(1.9)	床直	腰部直線的。高台外稜鋭く三ケ月高台。底部回転篦削り。大原２号窯式期？	①良好　②灰白　③緻密
222－10 69－10	須恵器 甕	口縁部 ½	17.0×－ ×(7.0)	埋土	口縁部下位で緩く内傾し上半は強く外反する。口縁帯端部は丸く小さく突出、上端部細まる。巻上げ痕あり。	①良好　②灰　③やや密
222－11 69－11	羽釜	口～胴部小片	22.9×－ ×(10.3)	埋土	胴部張りなく、口縁部直線的で僅かに内傾して立つ。口唇部断面矩形で上端面内斜。鍔強く張り断面丸味ある略三角	①酸化気味良好　②灰褐　③やや密
222－12 69－12	羽釜	口縁部小片	19.2×－ ×(4.4)	埋土	口縁部肥厚し内湾気味で内傾度強い。鍔強く張り上方へ撥ねる。	①酸化気味良好　②灰褐　③やや密
222－13 69－13	鉄製品 角釘	両端欠損	長・幅・厚 (5.0)×0.5×0.4	埋土	角釘。	

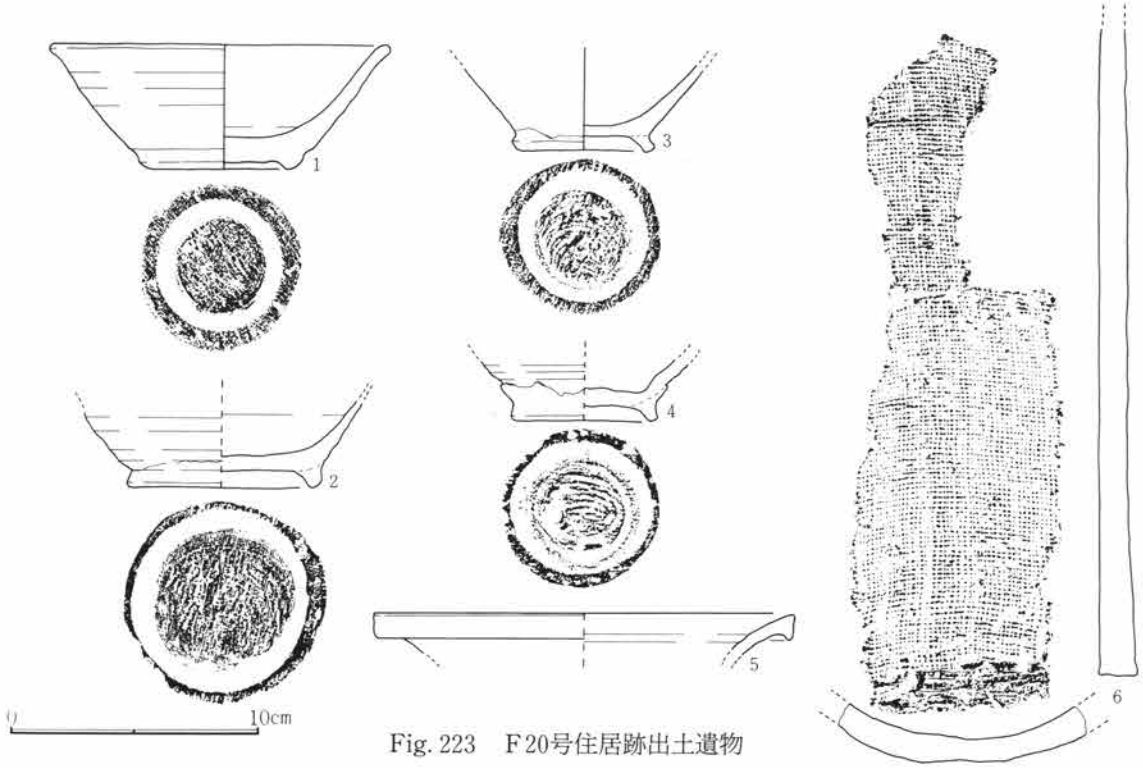


Fig. 223　Ｆ20号住居跡出土遺物

Ｆ20号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
233－1 69－1	須恵器 椀	ほぼ完形	13.5×5.5 ×5	竈	体部丸味少なく直線的に立ちやや深い。口唇部丸く外反。付高台低く幅広な矩形。轆轤整形回転糸切り。燻し焼成か。	①良好　②灰　③粗砂粒多い
233－2 69－2	須恵器 椀	口部欠損	－×5.0 ×(3.4)	床直	体部丸味をもち内湾気味に立つ。付高台断面矩形。轆轤整形。底部撫で調整。	①酸化軟　②明赤橙　③密輝性細粒混
223－3 69－3	須恵器 椀	口部欠損	－×7.2 ×(3.5)	埋土	体部直線的で深目。付高台断面矩形雑な作り。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化やや軟　②鈍い橙　③やや粗砂混

F 20号住居跡出土遺物観察表（2）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
223－4 69－4	須恵器 椀	底部	－×6.0 ×(2.3)	埋土	体部直線的に立つか。付高台断面矩形を呈すが作りは雑。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好 ②浅黄橙 ③やや粗
223－5 69－5	灰釉陶器 広口瓶	口縁部 ¼	16.7×－ ×(1.7)	埋土	口縁部縁帯はほぼ直立し、上端部は鋭る。内外面に施釉。	①良好 ②灰白 ③密
223－6 69－6	瓦 平瓦		厚1.0cm	埋土	凹面粗い布目、凸面面取り状幅広篦調整。側面篦調整。	①酸化気味軟 ②褐灰 ③やや粗

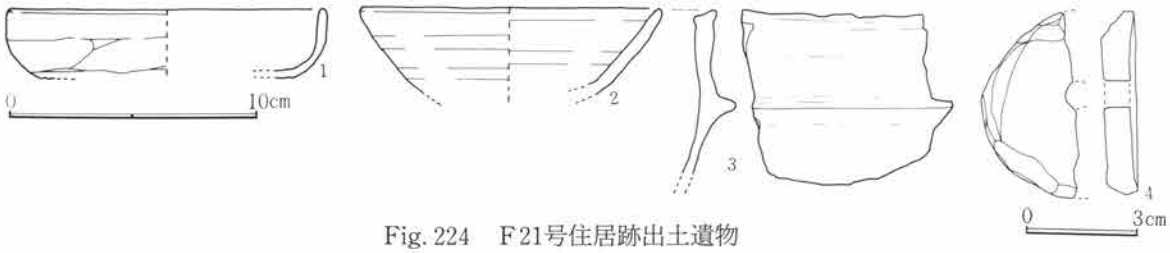
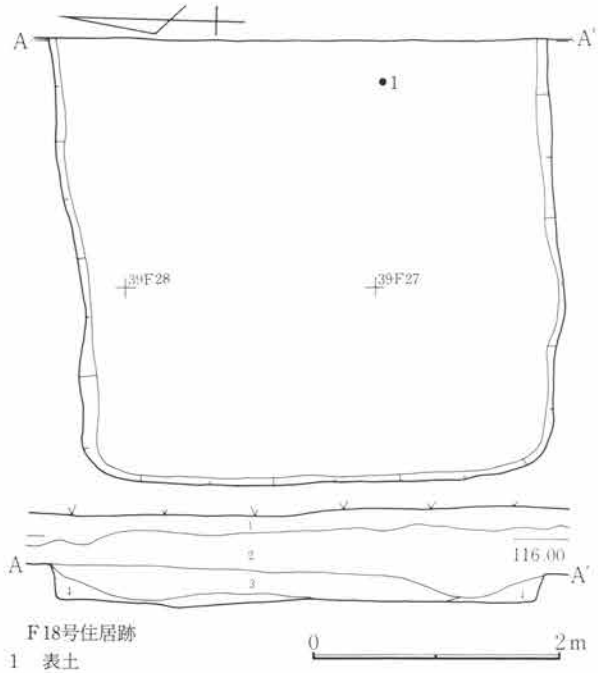


Fig. 224　F21号住居跡出土遺物

F 21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
224－1 69－1	土師器 杯	⅓底部 欠損	12.4×－ ×(2.4)	埋土	底部平底をなし浅い。体部直に立つ。口縁部横撫で。体・底部手持ち篦削り。	①良好 ②橙 ③やや密
224－2 69－2	須恵器 杯	¼底部 欠損	12.0×－ ×(3.4)	埋土	体部丸味をもち、内湾して開く。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③密
224－3 69－3	羽釜	小片		埋土	鍔部略三角に突出し、口縁部は僅かに内傾。口唇部上端は内斜。	①酸化軟 ②明橙 ③やや密
224－4 69－4	土師器 紡錘車	½	直径5.0 厚0.7	埋土	土師器底部転用の紡錘車。円形に成形し縁辺は面取り状に調整。中央部に径0.7cmの穿孔。	①良好 ②橙 ③やや密



F18号住居跡
1　表土
2　黒褐色土（耕作土）砂質。
3　黒褐色土　軽石・焼土粒・炭化粒多量に含む。
4　黒褐色土　Loam 小塊多量に含む。

Fig. 225　F18号住居跡

F 18号住居跡（Fig. 225・226、PL. 19・70）

F区の東縁に位置し、東半は調査区域外にかかるため、全容を知ることはできない。検出は38・39F26～28の範囲である。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長4m・東西は西壁線より約3.5mの範囲まで確認した。壁高は約28cmを測る。西壁線を基軸とする東西軸方位はN－88°－Eを示す。竈や貯蔵穴などの諸施設は検出されず、これは調査区域外の東壁沿いに付設されているものと考えられる。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりはやや弱い。

出土遺物は散在して検出され、小破片のものが多い。須恵器杯のほか鉄釘があり、埋土中より常滑様の陶片が見られる。

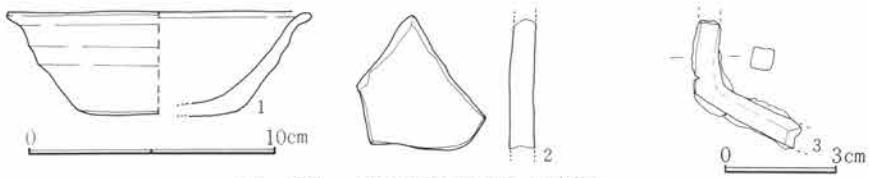


Fig. 226　F18号住居跡出土遺物

F18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
226－1 70－1	須恵器 杯	⅓	12.2×6.2 ×4.1	床面	体部やや丸味をもち、口唇部丸まって外屈する。轆轤整形。	①酸化気味 ②褐灰 ③やや粗
226－2 70－2	陶磁器 杯 or 椀	小片		埋土		
226－3 70－3	鉄製品 角釘	両端欠損	長・幅・厚 (4.7)×0.6×0.55	埋土	角釘。くの字状に折れ曲がる。	

F23号住居跡（Fig. 227・228、PL. 19・70）

F区のやや北寄りに位置し、54・55F31・32の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。南北長3.1m・東西長2.25m・壁高17cmを測り、小規模な住居跡である。竈は東壁の南に偏って付設されており、主軸方位はN－82°－Eを示す。床面は中央部が僅かに盛り上がり、踏み締まりは安定している。

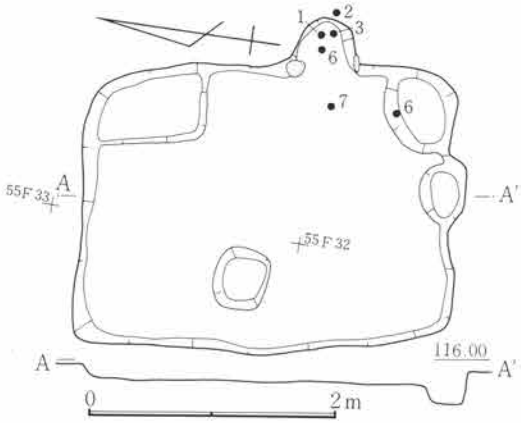


Fig. 227　F23号住居跡

竈は東壁を35cm程度半楕円形に掘り込み、開口部の左右、東壁線上には各々川原石が埋設される。燃焼部は浅く窪み、黒色灰層の堆積が認められる。燃焼部幅50cm・全長約60cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、70×60cm・深さ23cmの楕円形を呈する。そのほか、南壁沿いや住居中央やや西寄りに深さ10～20cmの Pit 状落ち込みが検出されているが、当跡に属するかは不明である。

出土遺物は主に竈内より検出され、須恵器杯・椀のほか丸瓦がある。

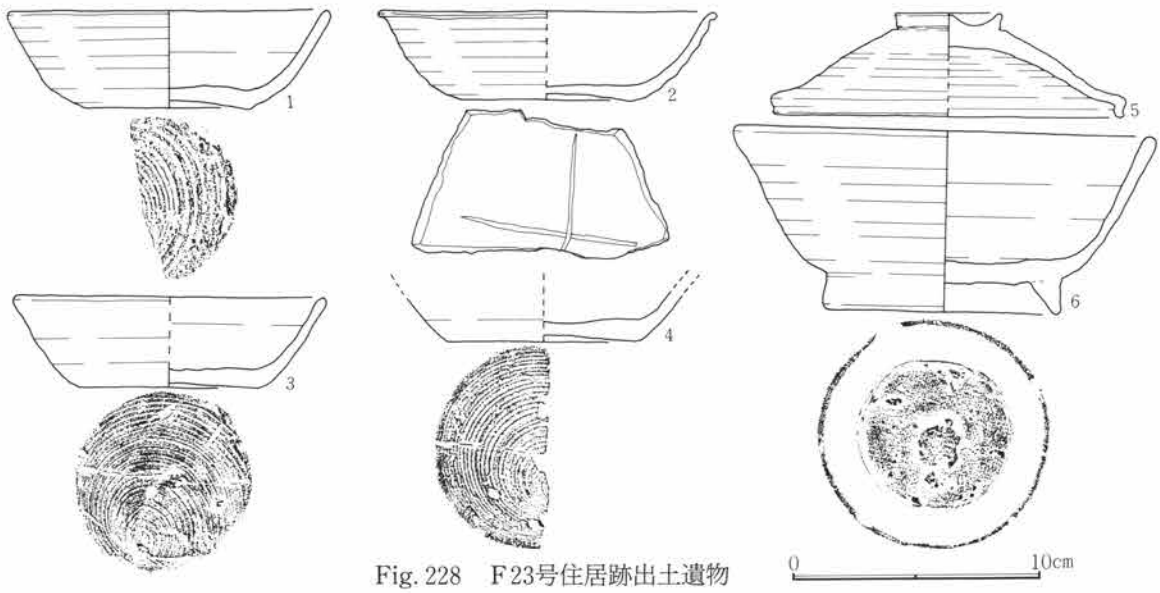


Fig. 228　F23号住居跡出土遺物

Ｆ23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
228－1 70－1	須恵器 杯	½	12.8×6.5 ×3.9	竈	腰部に丸味をもち、体部上半は直線的に開く。轆轤整形。回転糸切り。外面燻し気味で暗灰色。	①やや軟　②灰　③やや密
228－2 70－2	須恵器 杯	¼	13.5×6.7 ×3.5	竈外	体部丸味をもって開き、口唇部小さく丸まって外屈。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
228－3 70－3	須恵器 杯	⅓	12.4×7.2 ×3.6	竈	体部直線的。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密発泡性黒色粒混
228－4 70－4	須恵器 杯	底部½	－×8.0 ×(2.0)	埋土	底径大。腰部直線的。見込部に「＋」の篦描きあり。轆轤整形。回転糸切り。内外面燻し焼成か。	①良好　②灰白～灰　③やや密
228－5 70－5	須恵器 蓋	⅓	14.0×4.2×4.0 摘径4.3	埋土	器高高く、摘部より体部急傾斜で開く。端部強く折れて外反気味に直立。環状摘。天井部回転篦削り。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密発泡性黒色粒混
228－6 70－6	須恵器 椀	⅔	16.8×9.5 ×7.1	竈・貯蔵穴	腰部強く張り角度をもって折れ体部直線的に立つ。口唇部肥厚。付高台やや高く直線的でハの字状に立つ。轆轤整形。回転篦切り。	①良好　②灰～灰白　③やや密

Ｆ24号住居跡（Fig. 229・230、PL. 20・70）

Ｆ区の北側に位置し、53～55Ｆ33～35の範囲にある。後世の削平が深くおよんでおり、南東部を除き壁線は痕跡を留める程度であり、削平が床面に達する部分も多い。Ｆ３号掘立柱建物跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられるが、東壁線南側は、やや東に突出しており住居跡の南半が広がる形態になる。竈は東壁のやや南に偏って付設され、主軸方位はＮ—82°—Ｅを示す。床面は部分的に削平が及び一様ではないが、比較的安定して踏み締まっている。

竈は東壁を約50cm掘り込み、壁線上左右に凝灰岩質の角状加工材を袖部として埋設する。なお竈燃焼部下にはＦ３号掘立柱建物跡の南辺柱列中央柱穴が位置している。竈火床面の検出は不明確であるが、竈内に堆積する灰層に乱れがなく、これによって両者の新旧関係が決定づけられた。袖部幅内法50cmを測る。住居跡南東部には径１×0.9m・深さ25cmの落ち込みが検出されている。規模からみて床下土坑の可能性もある。しかし、上面には貼床を施した形跡はなく、埋土は多数の土器片と灰・焼土の混入が著しく貯蔵穴と考える。

出土遺物は土師器杯が多く、貯蔵穴内から検出されている。

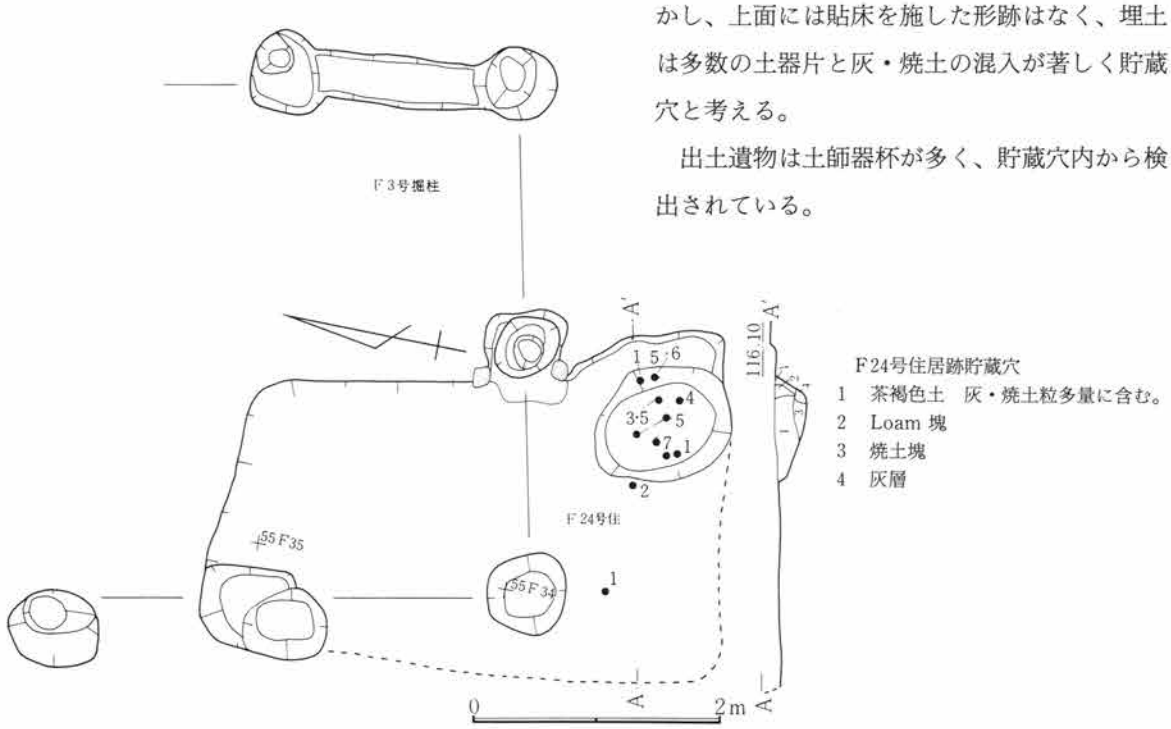


Fig. 229　Ｆ24号住居跡

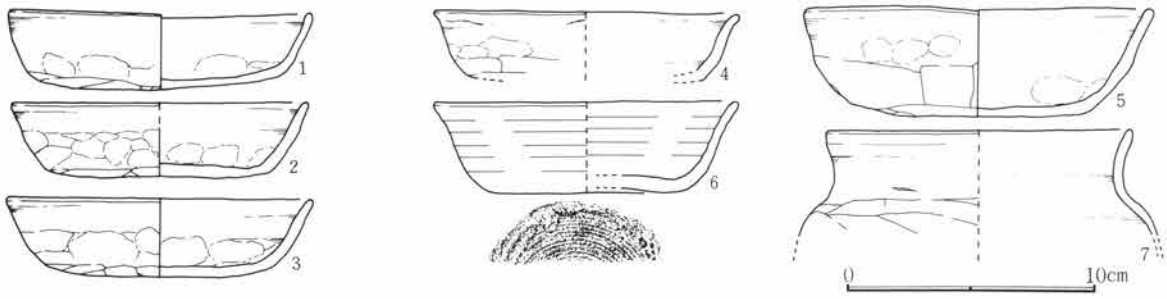


Fig. 230　F24号住居跡出土遺物

F 24号住居跡出土遺物観察表

Fig. № PL. №	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
230－1 70－1	土師器 杯	ほぼ完形	12.1×－ ×3.2	床直・貯蔵穴	底部不安定な平底。体部やや内湾気味に立つ。体部指押後撫で、上半は横撫で。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
230－2 70－2	土師器 杯	¾	11.8×－ ×3.0	床直	ほぼ平底。体部僅かな丸味をもち、上半は僅かに外反。体部下半指押後篦撫で、上半は横撫で。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
230－3 70－3	土師器 杯	½	12.2×－ ×3.1	貯蔵穴	不安定な平底。腰部丸味をもち体部上半は緩く外反して開く。腰・体部下半は指押え後撫で、上半は横撫で。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
230－4 70－4	土師器 杯	⅓	12.2×－ ×2.55	貯蔵穴	底部平底気味？。直線的な腰部から体部外反気味。口唇部やや強く外反。体部上から横撫で・指押え。腰部強い篦撫で。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや密
230－5 70－5	土師器 杯	ほぼ完形	13.8×－ ×4.3	貯蔵穴	不安定な平底。体部深く下半傾斜やや大きく上半は僅かにくびれて直線的。口唇部小さく丸まる。体部上半指押後横撫で、下半は横一段の篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
230－6 70－6	須恵器 杯	½	12.2×7.6 ×3.6	貯蔵穴	腰部丸く、体部緩く外反して開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密発泡性黒色粒混
230－7 70－7	土師器 小型甕？	口縁部 ⅓	12.2×－ ×(4.2)	貯蔵穴	肩部やや強く張る。口縁部下半直立し、上半は内湾気味に開く。口縁部横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや密

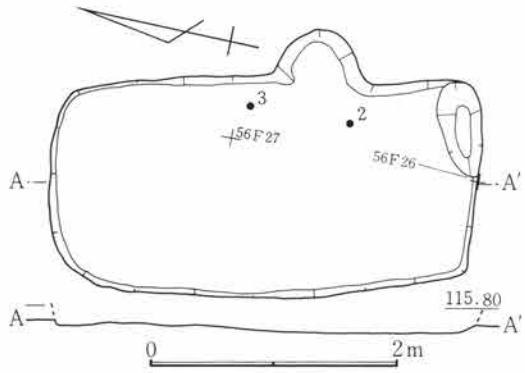


Fig. 231　F26号住居跡

F 26号住居跡（Fig. 231・232、PL. 20・70）

F区の中央部やや西側に位置し、56・57F26・27の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長3.45m・東西長1.7m・壁高約10cmを測る。竪穴住居跡としてはかなり小規模で南北に狭長な形態をなす。竈は東壁の南に偏った位置に付設され、主軸方位はN－79°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりはやや弱い。

竈は東壁を約40cm掘り込むが石などの構築材は残されていない。燃焼部は浅い窪みをなし、灰層・焼土塊などの堆積が見られる。燃焼部幅70cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径75×35cm・深さ約10cmを測る。南壁線に沿う狭長な楕円形を呈する。

出土遺物は極めて少量で須恵器椀などがある。

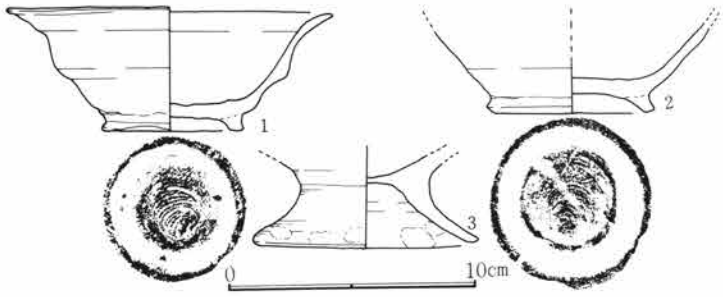


Fig. 232　F26号住居跡出土遺物

Ｆ26号住居跡出土遺物観察表

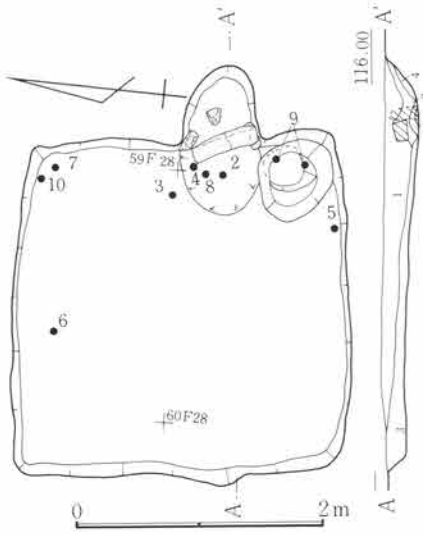
Fig.№ PL.№	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
232－1 70－1	須恵器 椀	ほぼ完 形	13.0×5.7 ×4.9	床直	腰部小さく丸味をもち、体部中位で強く張る。上半は強く外反して開く。口唇部尖がる。付高台断面矩形。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②橙～灰　③やや粗
232－2 70－2	須恵器 椀	底部	－×6.7 ×(3.2)	床直	腰部直線的。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化軟　②淡橙 ③密茶色粒混
232－3 70－3	土師器 台付甕	台部	－×9.0 ×(3.4)	埋土	台部大きく外反して開く。端部細る。底部器肉著しく薄い。内外面指頭調整後横撫で。	①良好　②橙　③やや密

Ｆ27号住居跡（Fig. 233～236、PL. 20・70・71）

Ｆ区の中央やや西寄りに位置し、58～60Ｆ27・28の範囲にある。平面形は南北長・東西長とも2.7mを測り、比較的整った方形を呈す。壁高は約15cmを測る。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はＮ－85°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。

竈は東壁を約65cm掘り込み、東壁線上の左右には凝灰岩質の加工材を袖部として埋設する。この袖部には同質材で長さ55cm・厚さ15cm程度の天井が架されるが、中央で折れて竈内に落ち込んだ状態で検出されている。また、袖材と掘形の間には粘土を用いた後込めが見られ、左袖には白色粘土を、右袖には内側に黒褐色粘土を、外側には白色粘土が各々充塡される。燃焼部内には角柱状の川原石が立ち、支脚と考えられるが、やや左側に偏っており原位置を保っているかは不明である。火床には硬質赤化面が形成され、竈前面より緩やかな窪みをなしている。両袖間内法45cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径60cm・深さ36cmの円形を呈す。

出土遺物は完形品が多く、竈前面の床面からの検出である。須恵器杯を中心に内黒土器・灰釉陶器などがある。



Ｆ27号住居跡・竈
1　暗褐色土　軽石多量に含む。
2　黒褐色土　焼土粒・灰多量に含む。
3　暗褐色土　軽石少なく粘性あり。
4　灰層
5　火床　灰層堆積
6　焼土塊
7　暗褐色土（竈）
8　黒褐色土（竈）
9　白色粘土（竈）

Fig. 233　Ｆ27号住居跡

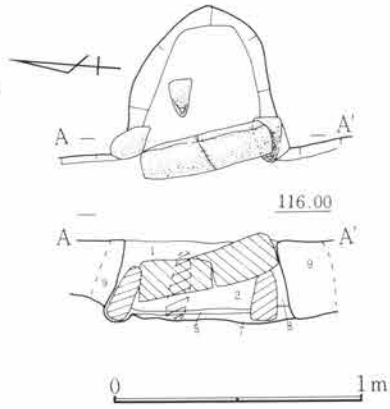


Fig. 234　Ｆ27号住居跡竈

Fig. 235　Ｆ27号住居跡出土遺物（１）

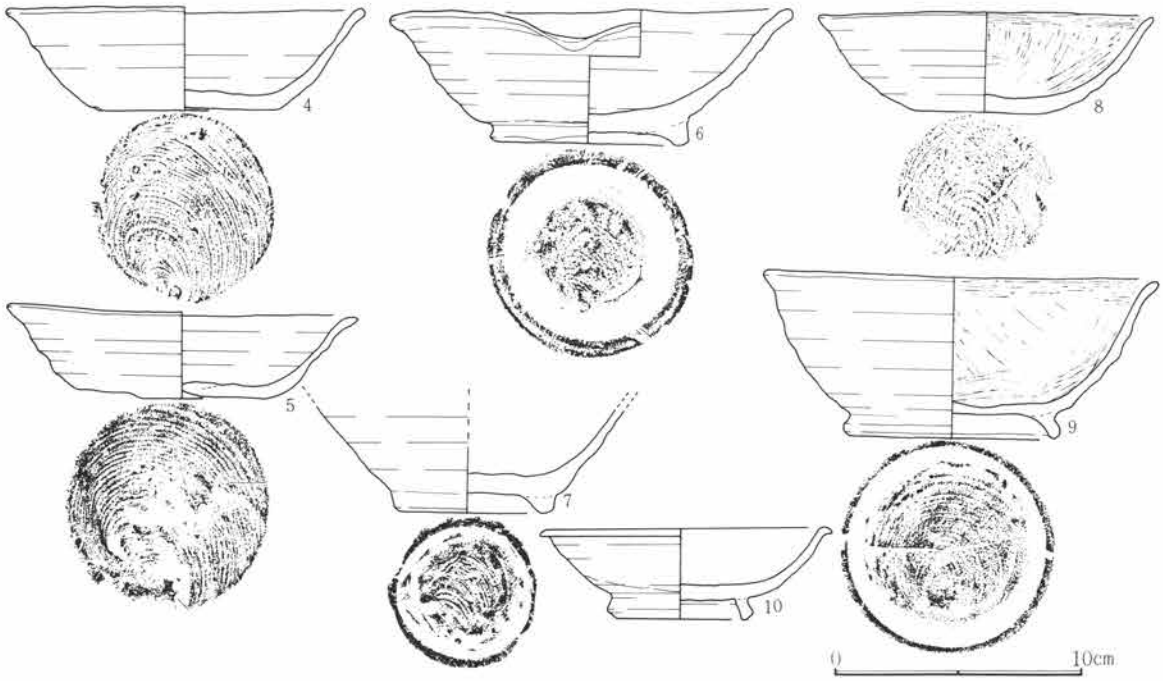


Fig. 236　F27号住居跡出土遺物（２）

Ｆ27号住居跡出土遺物観察表

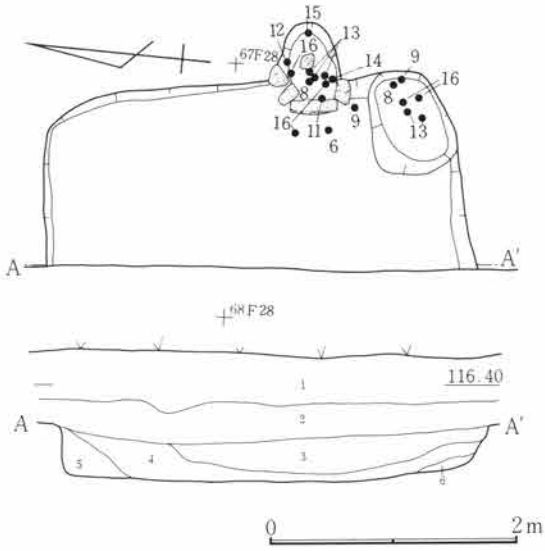
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
235－1 70－1	土師器 杯	小片	13.0×－ ×(4.3)	埋土	平底。体部深く直線的。腰部横１段篦削り。体部２段の指頭痕。底部篦削り。内面撫で調整。	①良好 ②橙 ③やや密
235－2 70－2	須恵器 杯	ほぼ完形	12.5×5.6 ×3.8	竈	底径小。腰部丸味強い。体部上半器肉薄く、外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好 ②褐灰～灰 ③やや粗
235－3 70－3	須恵器 杯	ほぼ完形	13.0×7.4 ×3.7	竈前床直	底径やや大。腰部僅かに張り、体部外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
236－4 70－4	須恵器 杯	完形	14.2×7.4 ×4.1	竈	体部下半僅かに丸味をもち、上半は外反気味に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
236－5 71－5	須恵器 杯	完形	14.0×7.9 ×3.4	床直	腰部に丸味をもち、体部上半は強く外反して開く。見込部に付加貼付痕あり。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや密
236－6 71－6	須恵器 椀	完形	16.4×8.0 ×5.5	床直	体部やや丸味をもち、上位で外反気味に開く。口唇の一部大きく反り片口状を呈す。付高台やや低く断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗長石粒多混
236－7 71－7	須恵器 椀	口縁部欠損	－×6.1 ×(3.7)	床直	体部直線的。付高台。正円をなさず繩輪接合明瞭で作り雑轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
236－8 71－8	内黒土器 杯	ほぼ完形	13.4×5.9 ×4.0	竈	底径小。腰部から体部にかけて丸味強い。口縁部小さく外傾して開く。内面黒色処理。口縁部横・体部放射状篦磨き横十文字に撫で。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③やや密
236－9 71－9	内黒土器 椀	¾	15.7×8.6 ×6.4	貯蔵穴	腰部から体部丸味強い。口縁部小さく外傾して開く。内面黒色処理。口縁部横、体部斜篦磨き。見込部に付加付高台端部面取状で明瞭。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③やや密
236－10 71－10	灰釉陶器 小椀	¾	11.8×6.0 ×3.4	床直	体部に丸味をもち、口唇部強く外屈し鋭く尖がる。高台やや高く稜明瞭。内面全面施釉。外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや粗

Ｆ28号住居跡（Fig. 237～240、PL. 20・71・72）

Ｆ区の西縁に位置し、西半部は調査区域外に入り全体を知ることはできない。検出部分は66・67Ｆ27・28の範囲にある。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長3.5m・東西は東壁線より西へ約1.5mまで確認した。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はＮ－83°－Ｅを示す。床面は比較的良好に踏み締まるが、南・北より中央に向かい僅かに窪む。

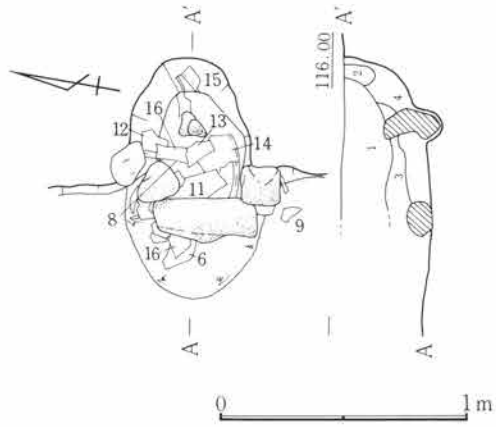
竈は東壁を約50cm掘り込み、壁線上の左右には凝灰岩質加工材を埋設して袖部を作る。また両袖に架されていたと考えられる同質材で、長さ55cm・幅15cm・厚さ10cmの角柱状天井材が焚口部に落下した状態で検出されている。燃焼部は僅かに窪み、火床には硬質赤化面が形成される。両袖間内法40cm・焚口部からの竈全長は約95cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径85×70cm・深さ12～13cmの方形気味の楕円形を呈す。

出土遺物は竈、および貯蔵穴内から検出され、とくに竈内からの遺物には土師器甕・羽釜が目立つ。その他、須恵器杯類とともに灰釉陶器・鉄鏃などがある。竈内に集中して検出された土師器甕・羽釜は複数個体になり、須恵器の大型甕の破片も多く混在しており、遺構廃棄時の一括投棄と考えられる。



F28号住居跡
1　表土層
2　暗褐色土　軽石多量・焼土粒少量含む。
3　黒褐色土　軽石多量・焼土粒・Loam 塊少量含む。
4　黒褐色土　軽石・Loam 塊多量に含む。
5　黒褐色土　締まりあり。
6　黒褐色土　粘性あり。

Fig. 237　F28号住居跡



F28号住居跡竈
1　暗褐色土　Loam 粒多量に含む。
2　明褐色土塊
3　黒褐色土　焼土粒少量、灰多量に含む。
4　黒褐色土　炭化粒・焼土粒多量に含む。

Fig. 238　F28号住居跡竈

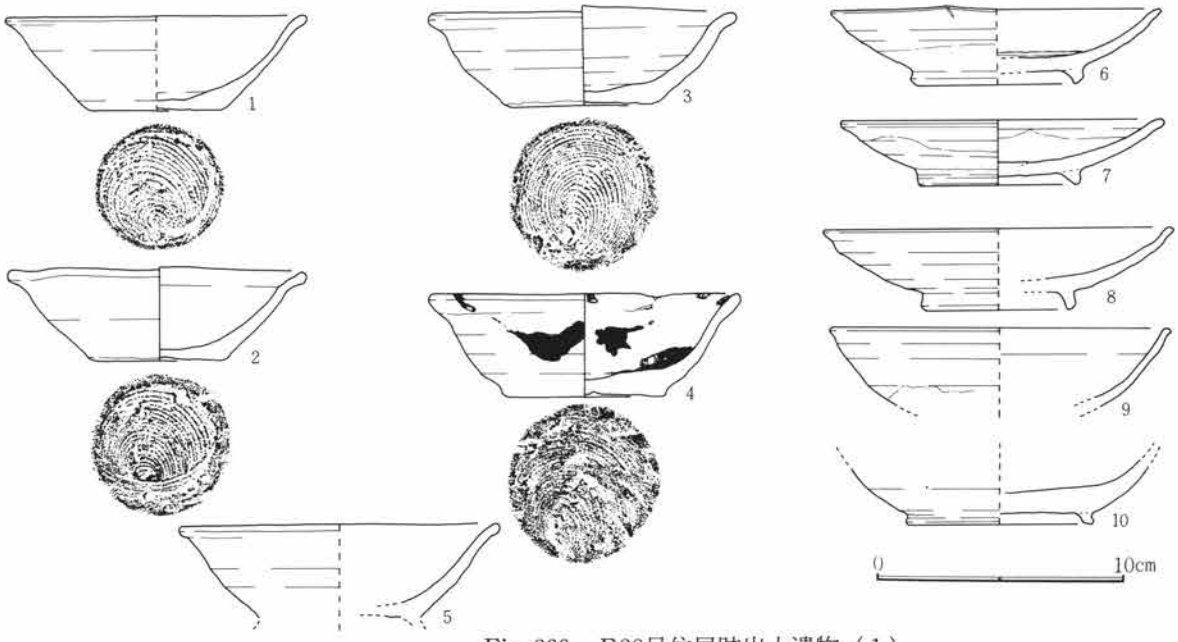


Fig. 239　F28号住居跡出土遺物（1）

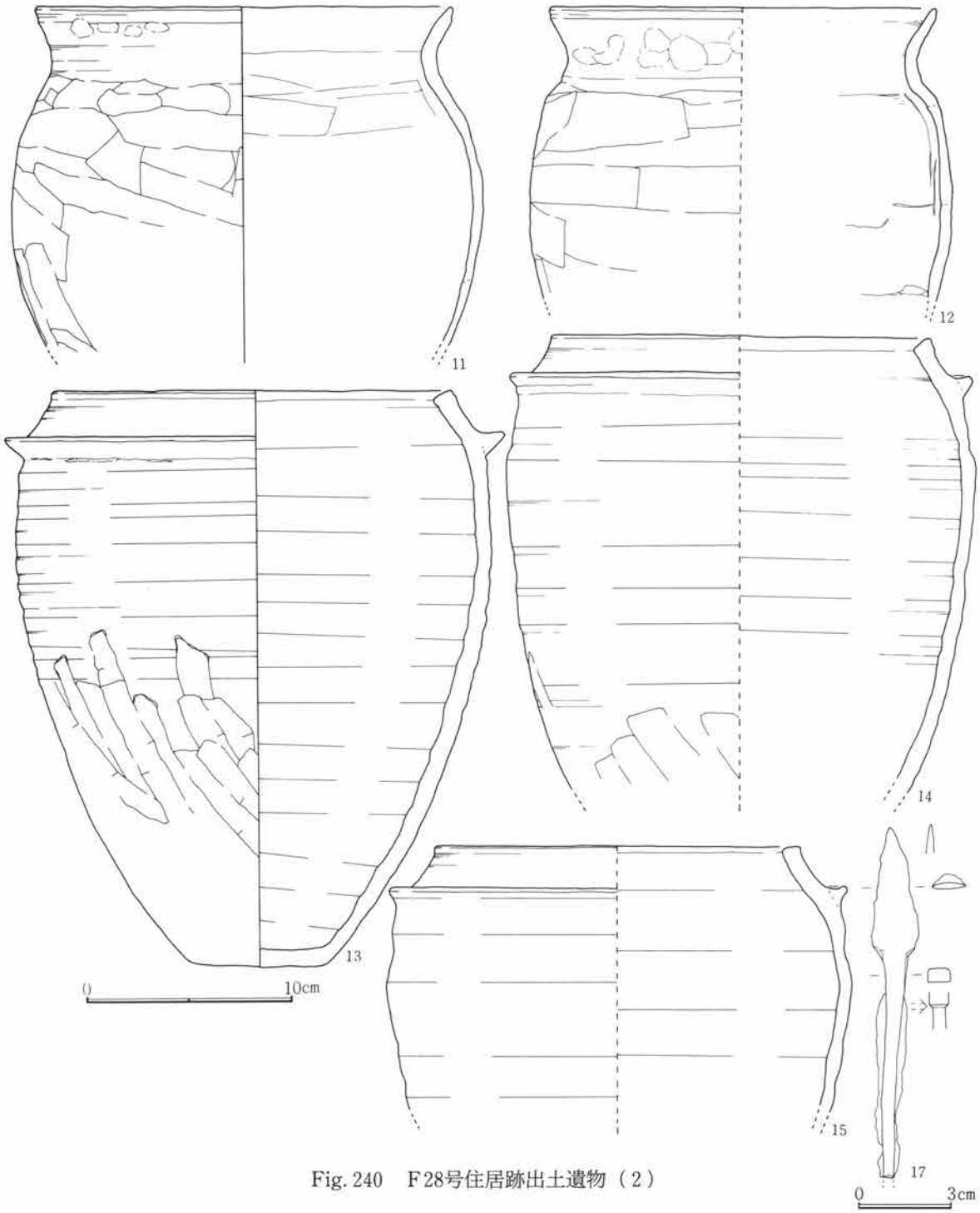


Fig. 240　Ｆ28号住居跡出土遺物（２）

Ｆ28号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
239—１ 71—１	須恵器 杯	¼	12.0×5.2 ×4.7	埋土	底径小さく、体部直線的。口唇部小さく丸まり緩く外反する。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好　②浅黄橙　③やや粗
239—２ 71—２	須恵器 杯	完形	11.9×5.2 ×3.7	埋土	底径小さく、体部直線的。上半はやや強く折れて外傾。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや粗
239—３ 71—３	須恵器 杯	完形	12.2×5.7 ×4.0	埋土	器肉厚い。体部中位に張りをもち、上半は強く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②浅黄橙　③やや粗

Ｆ28号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
239－4 71－4	須恵器 杯	¾	12.4×6.4 ×5.1	埋土	底部肥厚。体部下半丸く張り、上位強く外反して開く。口唇部丸く肥厚。口縁部に接合痕。内外面に油煙状付着物。	①酸化気味やや軟 ②灰褐　③やや密。 轆轤整形。右回転糸切り。
239－5 71－5	須恵器 椀	⅓高台欠損	12.8×－ ×(4.7)	埋土	体部中位で僅かに張り、上位は強く外反して開く。付高台剝離。轆轤整形。二次被熱。	①良好　②灰　③粗
239－6 71－6	灰釉陶器 輪花皿	⅔	13.2×6.3 ×3.2	竈	体部僅かに丸味をもち、上位で小さくくびれて口縁部小さく外反。口唇部細る。輪花爪押し１ケ所あり。三ケ月高台。内外面刷毛塗り施釉。見込部に重ね焼き痕あり。光ケ丘	①良好　②灰　③密
239－7 71－7	灰釉陶器 皿	ほぼ完形	12.9×6.3 ×2.6	埋土	体部僅かに丸味をもち、上位は小さく外反。高台やや低く丸味のある三角。腰部回転篦削り。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
239－8 71－8	灰釉陶器 皿	⅓	14.0×5.7 ×3.3	貯蔵穴	体部丸味強く、上位はやや強く外反。高台稜丸い。内外面全面施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
239－9 71－9	灰釉陶器 椀	底部欠損	13.6×－ ×(3.2)	貯蔵穴 竈	体部丸味強く、口唇部小さく外反。内外面漬け掛け施釉。	①良好　②灰　③密
239－10 71－10	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.4 ×(2.5)	埋土	底部肥厚。腰部強く張る。高台小さく角高台。底部回転篦削り。内面全面施釉。黒笹14号窯式期。（猿投窯）	①良好　②灰　③やや密
240－11 71－11	土師器 甕	下半欠損	20.0×－ ×(15.8)	竈	胴部張り強く球胴形を呈す。口縁部外反して開く。口縁部横撫で。胴部上半横・斜篦削り。中位から下半は縦篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②橙　③やや密
240－12 71－12	土師器 甕	上半⅓	18.6×－ ×(13.9)	竈	肩部小さく張り、胴部やや直線的。口縁部外反して開き、上位僅かに内湾気味。口縁部指頭痕後横撫で。胴部上半横篦削り。下半縦篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②橙　③やや密
240－13 71－13	羽釜	ほぼ完形	19.2×4.6 ×27.2	竈・貯蔵穴	胴部の張り少なく、下半部は直線的。口縁部直線的に内傾。口唇部断面矩形。鍔部上方へ強く突出。口縁部・胴部内外面回転撫で。胴部下半は縦篦削り。	①酸化気味良好　②橙～灰　③やや密
240－14 72－14	羽釜	下半欠損⅓	18.0×－ ×(21.5)	竈	胴部張り小さく、鍔部下より口縁部直線的に内傾。口唇部矩形。鍔部やや小さく断面矩形。口縁部・胴部内外面粗い横撫で。胴部下位は縦篦削り。	①酸化気味良好　②橙～灰　③やや粗
240－15 71－15	羽釜	下半欠損⅓	17.6×－ ×(12.5)	竈	胴部上位でやや強く張る。口縁部外反気味に内傾。口唇部矩形。鍔部丸味のある略三角小さく突出。内外面回転撫で	①良好　②灰　③やや粗
72－16	須恵器 甕	底部～胴部片		竈・貯蔵穴	大型の甕底部。丸底。内面に孤状の強いあて目痕。内面ていねいに撫で調整。	①良好　②灰　③やや密
240－17 72－17	鉄製品 鉄鏃	茎部端欠損	長(11.0)cm	埋土	鏃先は柳葉形を呈し、長・幅・厚は4.0×1.5×0.2cm、篦被部は1.5×0.7×0.4cm。茎部は5.6×0.4×0.4cm。	

ＦⅡ１号住居跡（Fig. 241・242）

Ｆ区の南東部に位置し、北は調査区域内を東西走する現生活道下に及び未検出である。検出部分は43・44

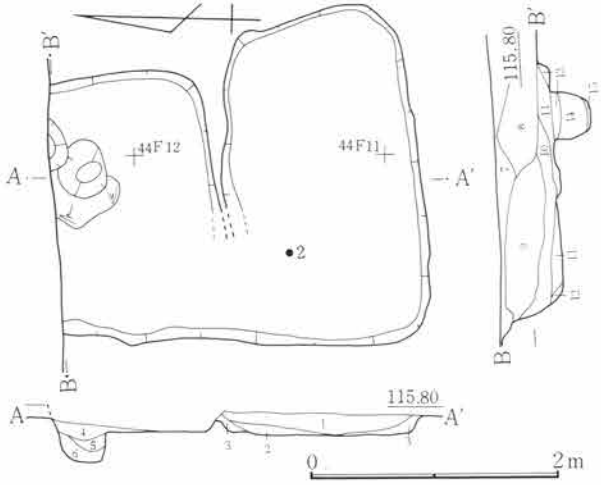


Fig. 241　ＦⅡ１号住居跡

ＦⅡ１号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒・炭化粒・Ｃ軽石多量に含む。
2　暗褐色土　焼土粒・Ｃ軽石含む。
3　暗褐色土　Loam 粒含む。
4　暗褐色土　焼土粒少量含み粘性あり。
5　暗褐色土　締まり弱い。
6　暗褐色土　Loam 塊含み粘性あり。
7　表土層
8　暗褐色土　Ｂ軽石多量に含む砂質。
9　暗褐色土　焼土粒・炭化粒多量に含む。
10　暗褐色土　Loam 粒多量、焼土粒・炭化粒含む。
11　暗褐色土　Loam 粒多量に含み粘性・締まりあり。
12　褐色土　Loam 粒層。
13　暗褐色土　焼土粒を含む。
14　暗褐色土　締まりなく焼土粒少量含む。
15　暗褐色土　灰白色粘土塊含み粘性あり。

F10～12の範囲にある。当跡は竈などの諸施設は確認されず竪穴住居跡として調査記録されているが、積極的な根拠はない。また西側の壁線は一連のものとして検出してあるが東壁線は連続したものではなく、各々南・北壁を形成する状況にある。これらのことから当跡は東西方向に長軸をもつ方形土坑が併列している可能性が強い。これによれば、南側土坑は東西長2.6m・南北長1.6m・壁高約10cmを測り、北側土坑は東西長2.1m・南北は現状で1.3mである。壁高は、土層断面によれば約45cmである。埋土は焼土粒・炭化粒を多量に含んで暗褐色土が主体を占める。なお、北側土坑の上層にはB軽石粒を混える土層が認められるが後世の遺構が重複していると考えられる。また北縁に Pit が検出されているが、土坑の底面を形成する土質の一部が Pit 上面を覆っていたことから当跡より旧い時期に属すであろう。

出土遺物は主に南側土坑内より検出され、須恵器椀・皿・灰釉陶器椀がある。

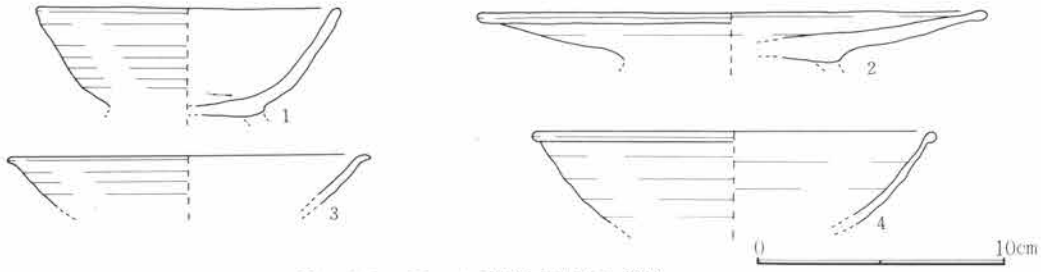


Fig. 242　F II 1号住居跡出土遺物

F II 1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
242－1 72－1	須恵器 椀	与高台 欠損	12.1×－ ×(4.0)	埋土	腰部丸く張り、体部上半は内湾気味に開く。付高台欠損。外面轆轤目強く、底部回転糸切り痕。燻し焼成気味に吸炭	①やや軟　②浅黄橙～褐灰　③やや粗
242－2 72－2	須恵器 皿	小片	20.2×－ ×(2.0)	床直	体部水平に近く直線的に開く。口唇部丸まる。付高台欠損。轆轤整形。底部回転糸切り痕。	①酸化気味良好　②灰白　③やや密
242－3 72－3	灰釉陶器 椀	小片	14.4×－ ×(2.0)	埋土	体部直線的。口唇部強く外屈し端部尖がる。内外面施釉。光ケ丘1号窯式期。	①良好　②灰　③密
242－4 72－4	灰釉陶器 椀	小片	16.0×－ ×(3.6)	埋土	体部やや丸味をもつ。口唇部丸まって外屈。内面施釉。黒笹90～光ケ丘1号窯式期。	①良好　②灰白　③緻密

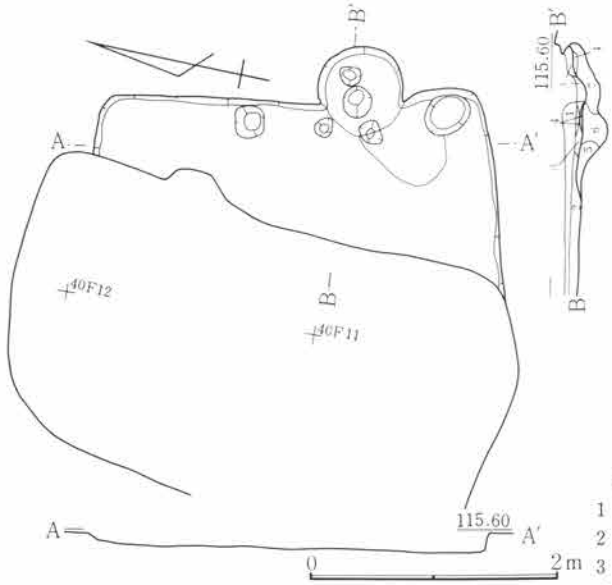


Fig. 243　F II 2号住居跡

F II 2号住居跡（Fig. 243・244、Fig. 20・72・73）

F区の南東部に位置し、38・39F10・11の範囲にある。西半は攪乱坑によって消失しており、全体を知ることはできない。平面形は方形を呈すると考えられ、南北長3.2m・東西は東壁線より西へ1.6mの範囲まで遺存している。壁高は約13cmを測る。

竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はN—79°—Eを示す。竈燃焼部は東壁を約40cm掘り

F II 2号住居跡
1　褐色土　焼土粒・炭化粒含む。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化粒含む。
3　灰層
4　焼土層
5　灰・焼土互層　締まりあり。
6　灰層　混入物少ない。
7　Loam 塊層　焼土粒・炭化粒混じる。

込み、円形を呈する。火床は硬質赤化面が全体に形成されるが、中央部には支脚埋設痕と思われる小穴状の窪みが残る。火床下の掘形は深さ約20cmで底はかなり凹凸が見られる。埋土には混りのない灰の部分や、灰と焼土が混在し、締まった部分、さらにはLoamを主体にして焼土・炭化粒が混じる部分などがある。燃焼部幅65cm・掘形を含む全長は95cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、径35cm・深さ15cm程度の小規模な円形である。埋土中には竈から流出した灰層が見られる。

出土遺物は灰釉陶器が多く検出され、須恵器椀・鉄釘などがある。

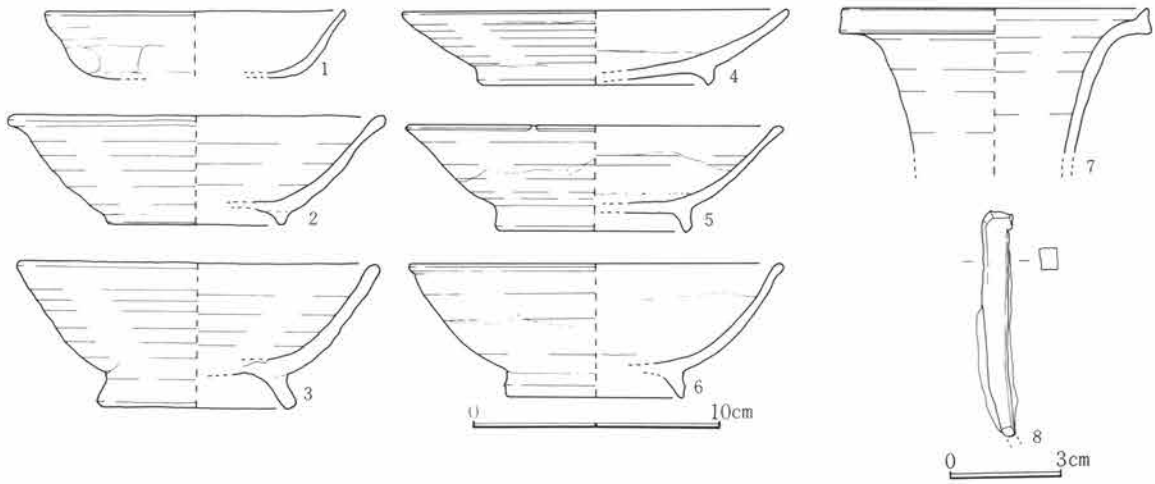


Fig. 244　F II 2号住居跡出土遺物

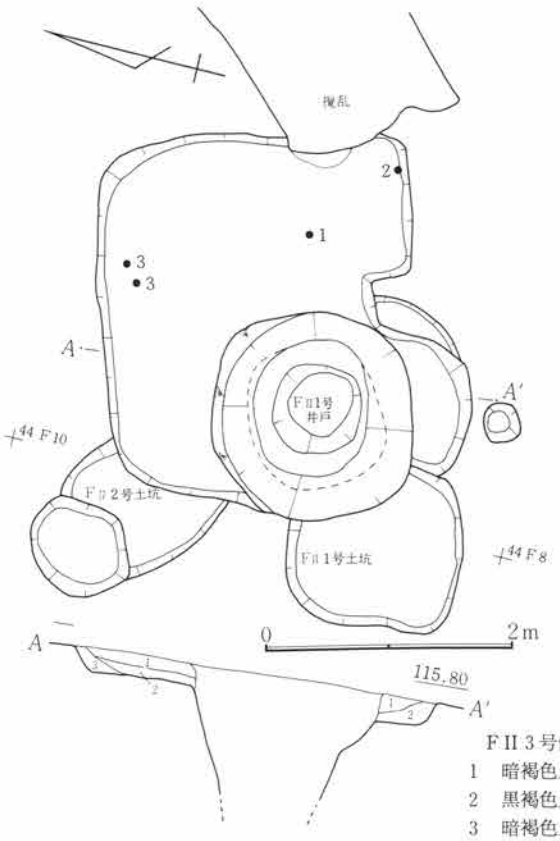
F II 2号住居跡出土遺物観察表

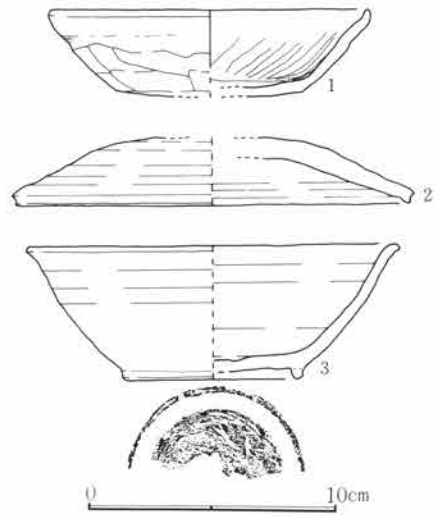
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
244－1 72－1	土師器 杯	¼	12.0×－ ×(2.2)	埋土	平底気味。腰部丸味を帯び体部は内湾気味に開く。底部篦削り。腰部指頭後撫で調整。器肉薄い。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
244－2 72－2	須恵器 椀	¼	15.0×7.1 ×4.3	埋土	体部やや丸味をもち上半は外反して開く。口唇部丸まって肥厚。付高台低い。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
244－3 72－3	須恵器 椀	小片	14.4×7.9 ×5.7	埋土	体部下半丸味をもち、上半は直線的に開く。付高台やや高くハの字状に開く。轆轤整形。器肉厚目。	①酸化気味やや軟 ②灰黄　③やや粗
244－4 72－4	灰釉陶器 皿	¼	15.4×9.4 ×2.9	埋土	体部直線的に開く。高台端部尖がり三ケ月高台。外面無釉・内面体部刷毛塗り施釉。大原2号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
244－5 72－5	灰釉陶器 椀	½	15.0×7.8 ×4.2	埋土	腰部僅かに丸味をもち、体部外反気味に開く。高台外稜鈍い。体部内外面漬け掛け施釉。大原2号窯式期。	①良好　②灰　③密
244－6 73－6	灰釉陶器 椀	¼	14.8×7.0 ×5.3	住居跡周辺	体部丸味をもちやや深目。口唇部丸く小さく外傾。高台外稜強く擬似三ケ月高台。内外面漬け掛け施釉。大原2号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
244－7 73－7	須恵器 瓶	口頸部 ⅓	12.2×－ ×(5.7)	住居跡周辺	頸部僅かに外傾して立ち・上半は強く外反して開く。口縁帯幅広く内傾して立つ。轆轤整形。	①良好　②灰　③密
244－8 73－8	鉄製品 釘	端部欠損	長・幅・厚 (5.9)×0.6×0.5	埋土	頭部形状は角頭式の角釘。先端部緩く曲がる。	

F II 3号住居跡（Fig. 245・246、PL. 20・73）

F区の南東部に位置し、42～44F 8・9の範囲にある。南西部でF II 1号井戸と重複しており、壁線の一部が消失している。また同じ南西と北西部には土坑との重複があるが、これより新しい時期である。平面形は、ほぼ方形を呈するが、南壁線の中央部が凹状に窪み、西側に孤状の張り出しをもつ。東西方向に長軸をもち東西長2.9m・南北長2.5m・壁高25cmを測る。張り出し部は凹状の窪みより約70cm突出する。竈は東壁の南寄りに付設されるが攪乱坑によってほとんど消失しており、かろうじて灰層の存在で確認できたものである。東壁を基軸にする東西軸方位はN－77°－Eを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。

出土遺物は散在して検出されているが小破片が多い。なお須恵器椀の完形２個体は紛失のうき目にあい図示することはできない。





F II 3号住居跡
1　暗褐色土　白色軽石多量、焼土・炭化粒少量含む。
2　黒褐色土　焼土・炭化粒・灰黒色灰多量に含む。
3　暗褐色土　灰黒色灰・Loam 混土層。

Fig. 245　F II 3号住居跡　　Fig. 246　F II 3号住居跡出土遺物

F II 3号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
246－1 73－1	土師器 杯	¼	12.8×7.4 ×(3.4)	床直	やや不安定な平底。体部下半は直線的。中位で僅かにくびれ上半は内湾気味に開く。体部上半は横撫で。下位は２段横篦削り。底部不定方向篦削り。内面体部放射状篦磨き。	①良好 ②橙 ③やや密輝性黒色粒混
246－2 73－2	須恵器 蓋	¼摘み欠損	15.6×－ ×(2.7)	床直	天井部平担。体部直線的に開く。器肉全体に厚い。轆轤整形。天井部回転篦削り。	①良好 ②灰 ③やや密
246－3 73－3	須恵器 椀	⅓	14.8×7.2 ×5.3	床直	体部中位で僅かに張る。体部上位は緩く外反気味。付高台低く狭小。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰～オリーブ灰 ③やや粗

F II 4号住居跡（Fig. 247～249・PL. 21・73）

F区の南部に位置し、49～51 F11・12の範囲にある。当跡を含み９軒の住居跡が重複する密集地点である。直接はF II 5号・F II 6号・F II 9号・F II17号住居跡と各々重複しており、F II 6号住居跡より旧いほかはいずれの住居跡より新しい時期の所産である。このF II 6号住居跡との重複によって西半の壁線は消失しているほか、北側は現生活道路下にかかり、住居跡の検出は狭小な部分である。さらに南壁線はF II17号住居跡埋土との識別が困難で明確にできなかったが、平面形は方形を呈すると考えられる。南北は推定南壁線から北へ約２mを、また東西は東壁線より西へ約2.5mの範囲まで確認した。壁高は土層断面の観察では約35cmを測る。竈は東壁の南側に付設され、主軸方位はおよそN－87°－Eを示す。竈燃焼部は東壁を約50cm掘り込み、東壁線上左側に袖材と考えられる川原石が埋設される。燃焼部先端には長径35cmの川原石が検出されているが、竈埋土中にあり原位置を保ってはいない。燃焼部幅約60cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。床面南西部に径１mの範囲で白色灰層の分布が見られるが当跡に伴うかは不明

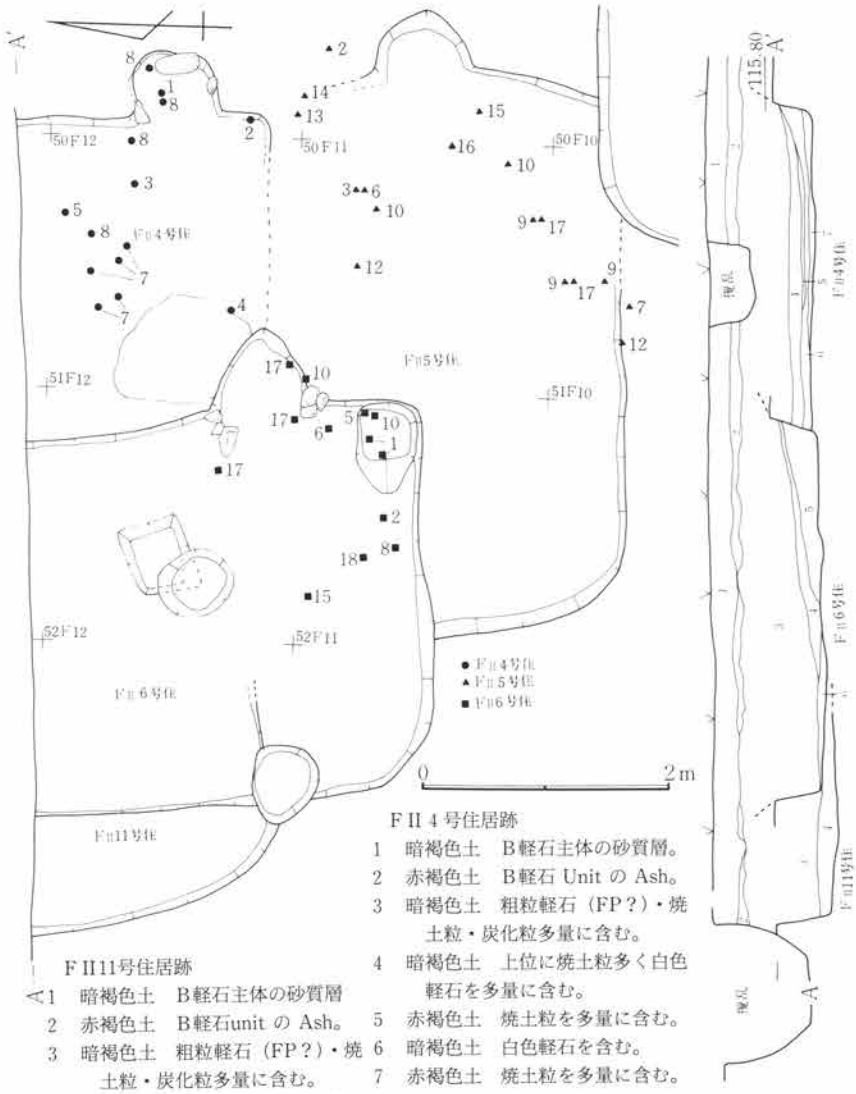
である。

出土遺物は住居跡中央部を中心に検出され、須恵器椀類や羽釜が多い。

ＦⅡ５号住居跡（Fig. 247・248・250・251、PL. 21、74）

Ｆ区南部に位置し、49～51Ｆ９～11の範囲にある。ＦⅡ４号・ＦⅡ６号・ＦⅡ10号・ＦⅡ17号住居跡と重複するが新旧関係は、ＦⅡ４号・ＦⅡ６号・ＦⅡ10号住居跡より旧く、ＦⅡ17号住居跡より新しい時期の所産である。平面形は方形を呈すると考えられるが、北から西側にかけての壁線はＦⅡ４号およびＦⅡ６号住居跡によって消失している。東西長4.45m・南北は南壁線より北へ約2.8mの範囲まで確認した。壁高は遺存の良好な部分で約20cmを測る。竈は東壁に付設され、主軸方位はおよそＮ－90°－Ｅを示す。竈床面はほぼ平坦をなすが、下位に構築されるＦⅡ17号住居跡との重複部分はやや不安定である。燃焼部は東壁を半円形に約40cm掘り込むが、袖部などの構築材は検出されていない。

出土遺物は散在して検出され、須恵器杯・椀類や土師器甕類が多く、灰釉陶器・土師器杯・鉄釘などがある。



ＦⅡ４号住居跡
1　暗褐色土　Ｂ軽石主体の砂質層。
2　赤褐色土　Ｂ軽石 Unit の Ash。
3　暗褐色土　粗粒軽石（FP？）・焼土粒・炭化粒多量に含む。
4　暗褐色土　上位に焼土粒多く白色軽石を多量に含む。
5　赤褐色土　焼土粒を多量に含む。
6　暗褐色土　白色軽石を含む。
7　赤褐色土　焼土粒を多量に含む。

ＦⅡ11号住居跡
1　暗褐色土　Ｂ軽石主体の砂質層
2　赤褐色土　Ｂ軽石unit の Ash。
3　暗褐色土　粗粒軽石（FP？）・焼土粒・炭化粒多量に含む。
4　暗褐色土　Loam 塊・炭化粒多量に含む。

Fig. 247　ＦⅡ４号・ＦⅡ５号・ＦⅡ６号・ＦⅡ11号住居跡

ＦⅡ６号住居跡（Fig. 247・248・252・253、PL. 21・75）

Ｆ区の南部に位置し、50～52Ｆ10～12の範囲にある。ＦⅡ４号・ＦⅡ５号・ＦⅡ17号・ＦⅡ11号住居跡と各々重複しており、新旧関係はいずれよりも新しい時期の所産である。北側は現生活道にかかり、全容は明らかではない。平面形は方形を呈すると考えられ、東西長3.1m・南北は南壁線より北へ3.1mの範囲まで確認した。壁高は土層断面観察によれば、約40cm

ＦⅡ６号住居跡
1　暗褐色土　Ｂ軽石主体の砂質層
2　赤褐色土　Ｂ軽石 Unit の Ash。
3　暗褐色土　粗粒軽石（FP？）・焼土粒・炭化粒多量に含む。
4　黒褐色土　焼土粒・炭化粒多量に含み締まり弱い。
5　暗褐色土　焼土粒・炭化粒含みやや粘性あり。
6　黒褐色土　灰・炭化粒を多量に含み締まりなし。

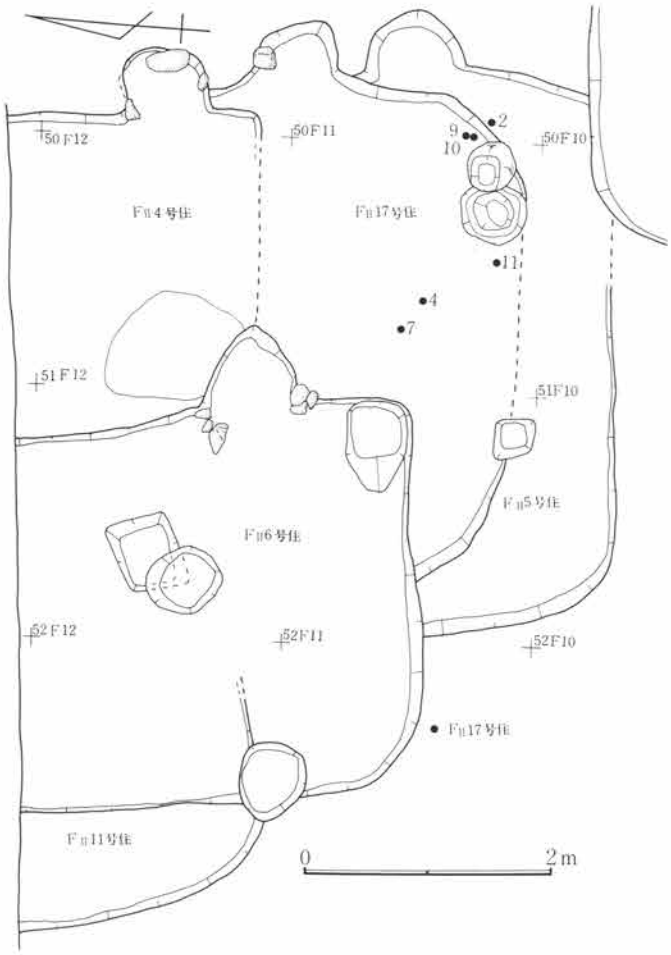


Fig. 248　FⅡ４・５・６・11・17号住居跡

を測る。竈は東壁やや南寄りに付設され、主軸方位はN－85°－Eを示す。床面は西側に向かい僅かに低く、踏み締まりが弱くやや不安定である。

竈は東壁を先細りの楕円形に約60cm掘り込み、壁線上に凝灰岩質の加工材を袖石として埋設する。これら竈構築の一部は風化が進み、竈前面に崩落している。袖材間内法約60cmを測る。貯蔵穴は南東隅にあり、70×50cm・深さ約20cmの楕円形を呈す。

出土遺物は竈周辺および貯蔵穴内に検出され、須恵器杯・椀類・灰釉陶器・緑釉陶器などのほか、鉄製品では鉋・鎌・鉄釘がある。また流紋岩製砥石・土製玉なども出土している。

FⅡ11号住居跡（Fig.247・248、PL. 21）

F区の南に位置し、52・53F11・12の範囲にある。FⅡ６号住居跡と重複し、これより旧い時期の所産と考えられる。当跡の掘形はFⅡ６号住居跡より若干深く検出されたが、FⅡ６号住居跡の範囲内では僅かに追跡できたのみである。また北側は現生活道路にかかり、当跡の検出は南西部の狭小な範囲である。規模・形態など全く不明であるが、壁高は土層観察によれば約45cmを測る。

出土遺物は土師器甕片数点の検出である。

FⅡ17号住居跡（Fig. 248・254・255、PL. 21・76）

F区の南部に位置し、49～51F10・11の範囲にある。FⅡ４号・FⅡ５号・FⅡ６号・FⅡ９号住居跡と重複し、新旧関係はFⅡ９号住居跡より新しく他よりは旧い時期の所産である。当跡の大部分はFⅡ５号住居跡の構築面下に検出されたものである。平面形は隅丸の方形を呈すると考えられ、東西長は４m前後・南北は推定南壁線より北へ約2.1mの範囲まで確認された。壁高は検出面より約20cmを測る。竈は東壁に付設され、主軸方位はおよそN－88°－Eを示す。

竈は東壁を約50cm掘り込み、燃焼部左側壁部には埋設されたと思われる川原石２個が検出されている。しかし袖部に相当する位置には構築材は存在していなかった。燃焼部幅約70cmを測る。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。貯蔵穴は南東部の南壁線沿いに僅か西へ寄って設けられるが径50cmの円形である。

出土遺物は須恵器杯・椀・土師器杯・甕などのほか片岩製紡錘車・鉄釘などがある。

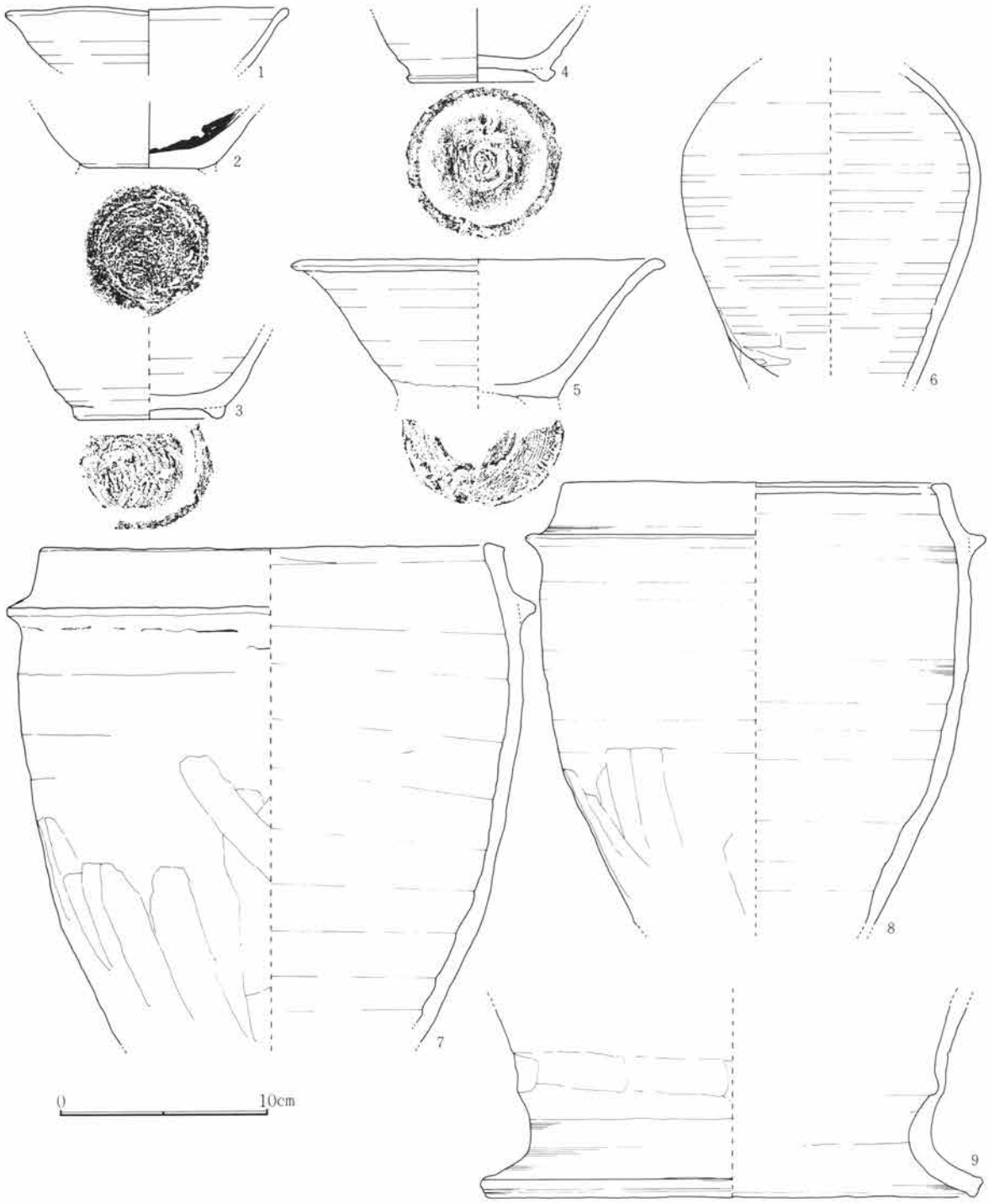


Fig. 249　F II 4号住居跡出土遺物

F II 4号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
249－1 73－1	須恵器 杯？椀	底部欠損	13.4×－ ×(2.9)	竈	体部上半にやや丸味をもち、口縁部僅かに外傾。口唇部丸い。轆轤整形。	①酸化気味良好　②浅黄橙　③やや密
249－2 73－2	須恵器 杯	底部	－×5.6 ×(2.6)	埋土	腰部僅かに丸味。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。内面に油煙状付着物。内面吸炭部分あり。	①酸化気味軟　②浅黄橙　③密
249－3 73－3	須恵器 椀	体底部	－×7.2 ×(3.8)	床直	腰部やや張る。付高台低く断面丸い。轆轤整形。右回転糸切り。内外面に吸炭部分あり。	①酸化気味良好　②褐灰　③粗

F II 4号住居跡出土遺物観察表（2）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
249－4 73－4	須恵器 椀	底部	－×7.1 ×(3.0)	埋土	腰部張りなし。付高台端部上方へ撥ねる。高台接合部強い撫で。轆轤整形。回転糸切り？内外面に吸炭部分あり。	①良好　②灰　③やや粗
249－5 73－5	須恵器 椀	⅓	17.8×－ ×(6.5)	床直	大型品。体部直線的。上半は緩く外反して開く。口唇部は強く外屈。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
249－6 73－6	須恵器 甕	胴部⅓	－×－×(29.0) 最大径28.2	埋土	胴部上半は丸く張り、下半は直線的に窄む。胴部弱い回転調整。下位不定方向の箆削り。	①良好　②灰　③やや密
249－7 73－7	羽釜	底部欠損	22.0×－ ×(23.4)	床直	胴部張りなし、下位やや窄まる。口縁部外反気味に内傾。口唇部上端は平坦で内側に突出。鍔部やや上向きに突出。口縁・胴部回転調整。下位縦箆削り。二次被熱。	①良好　②褐灰　③粗
249－8 73－8	羽釜	底部欠損	18.2×－ ×(20.9) 鍔径21.8	竈	胴部上半僅かに張らむ。口縁部直線的に内傾。口唇部上端外斜。鍔部断面矩形気味に突出。口縁・胴部弱回転調整。胴下半粗い縦箆削り。胴部上半に媒状付着物。	①酸化気味軟　②褐灰～橙　③密
249－9 73－9	須恵器 甑	底部	－×23.8 ×(9.0)	埋土	腰部直線的に外傾し、底部強く外反して開く。端部断面矩形。内面に中敷受けの窪みあり。腰部粗い横箆削り。底袖部は回転調整。	①酸化良好　②橙　③やや密

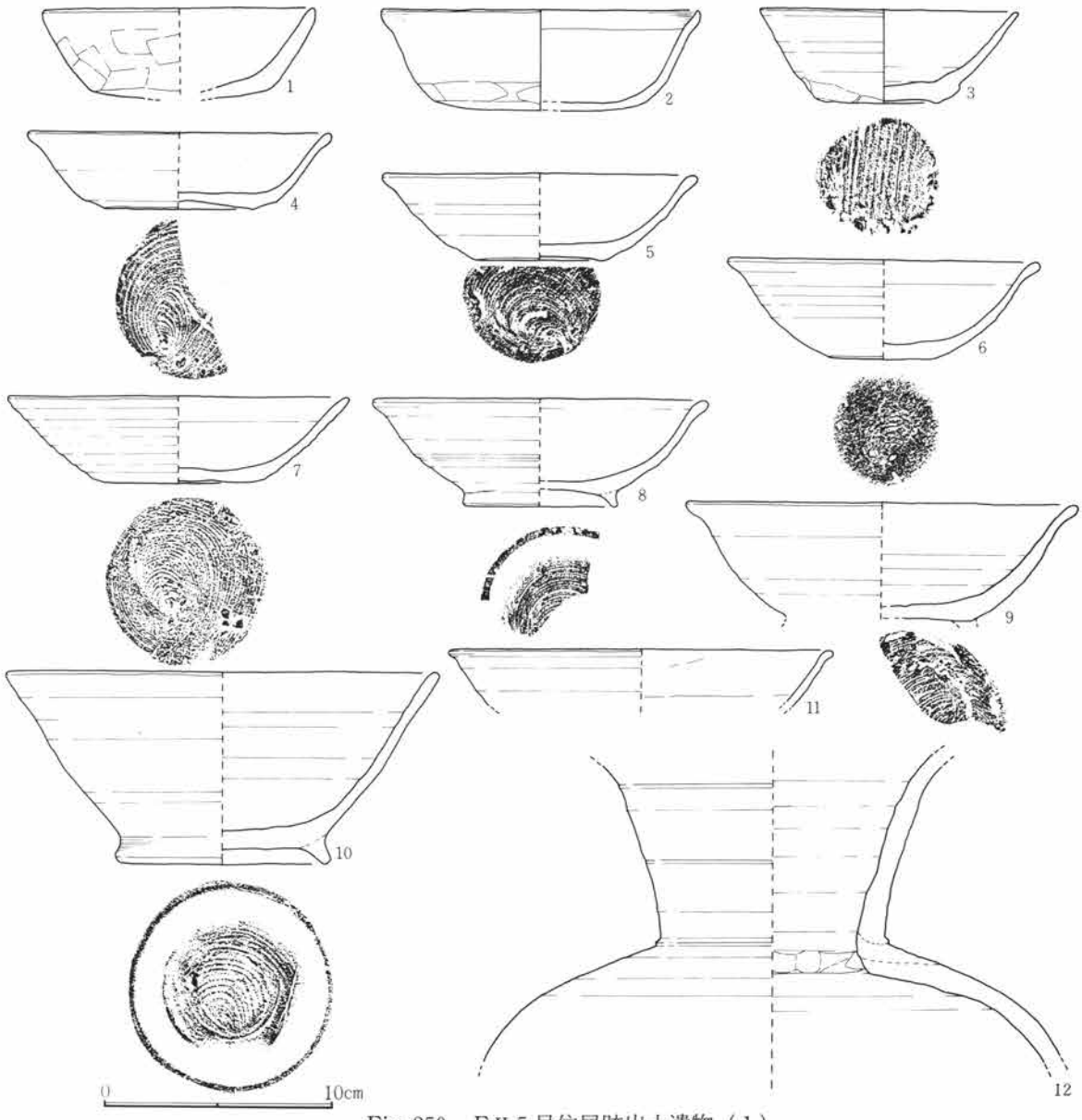


Fig. 250　F II 5号住居跡出土遺物（1）

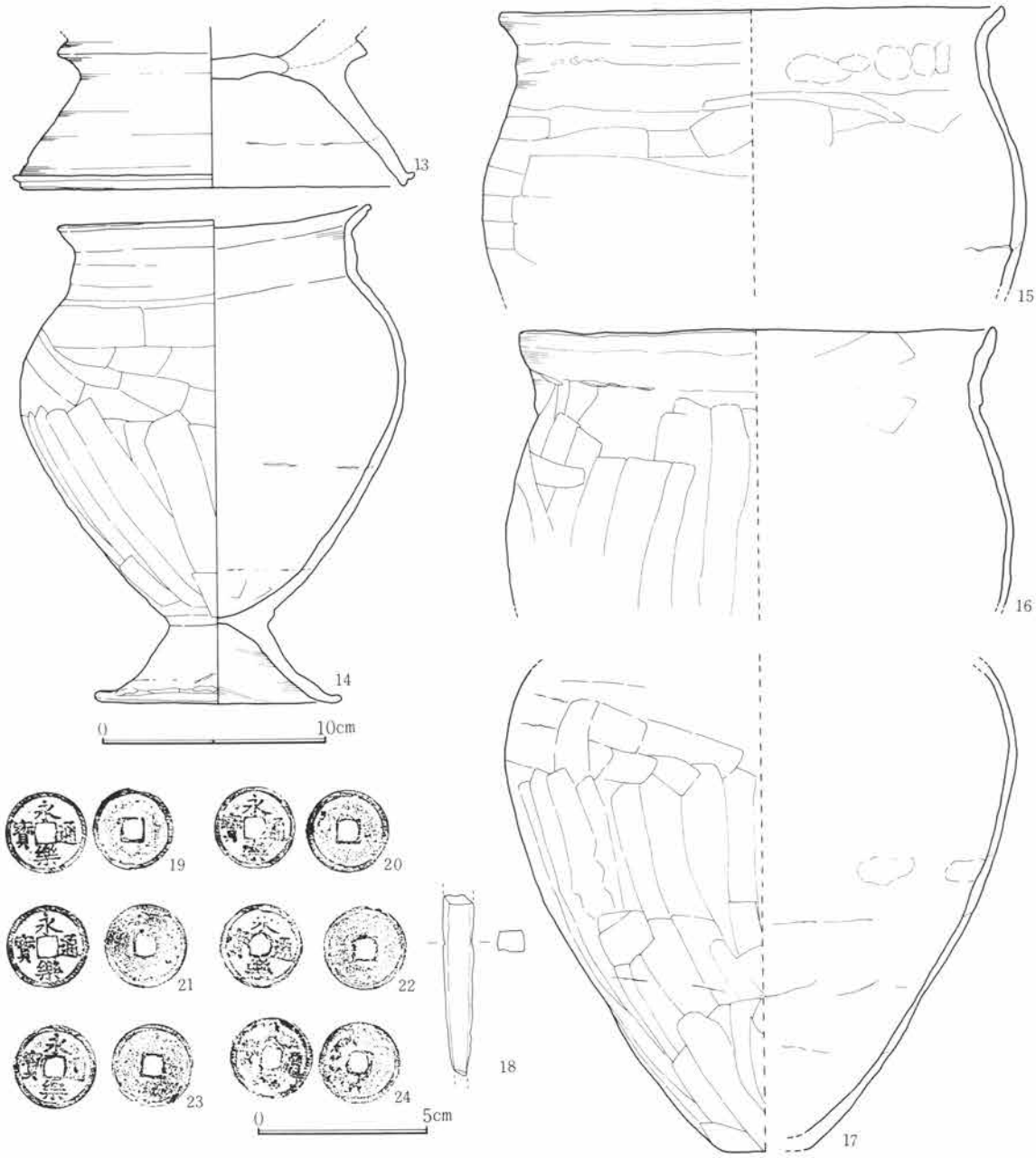


Fig. 251　F II 5号住居跡出土遺物（2）

F II 5号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
250－1 74－1	土師器 杯	¼	11.8×7.8 ×3.9	埋土	体部内湾気味に開く。底部やや張らむが平底気味。体部弱い横篦削り。底部不定方向篦削り。全体に肥厚。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
250－2 74－2	土師器 杯	½	13.8×－ ×4.3	竈外	腰部に丸味をもち、口縁部内湾する。底部平底。口縁部横撫で。体部中位指押え、腰部から底部篦削り。	①良好　②橙　③やや密石英輝性黒粒混
250－3 74－3	須恵器 杯	ほぼ完形	11.1×6.2 ×4.1	床直	体部直線的に開き、口唇部断面矩形。轆轤整形。静止糸切り。腰部手持篦削り。体部薄く、底部著しく肥厚。	①酸化良好　②橙 ③やや密赤橙粒混
250－4 74－4	須恵器 杯	⅓	13.1×6.5 ×3.3	埋土	腰部強い指あて。体部下半丸味をもち上半は緩く外反。口唇部丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③密 発泡性黒色粒多混
250－5 74－5	須恵器 杯	⅓	13.6×5.6 ×3.7	埋土	体部丸味をもち、口縁部緩く外反。口唇部丸まる。小底径。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰　③ やや密

F II 5号住居跡出土遺物観察表（2）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
250－6 74－6	須恵器 杯	⅔	13.4×4.5 ×4.2	床直	体部丸味強く、口縁部外反して開く。口唇部丸まる。極めて小底径。轆轤整形。右回転糸切り。	①軟 ②灰～灰白 ③密
250－7 74－7	須恵器 杯	⅓	14.7×6.4 ×3.7	南壁外	体部から口縁部直線的に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
250－8 74－8	須恵器 椀	小片	14.4×6.7 ×4.6	埋土	体部に強い丸味をもち、口縁部外反して開く。口唇部丸まる。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
250－9 74－9	須恵器 椀	小片	16.7×－ ×(4.8)	床直	腰から体部丸味をもち浅目。口縁部外反して開く。口唇部丸まる。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰黄褐 ③やや粗
250－10 74－10	須恵器 椀	小片	18.6×9.3 ×8.2	床直	大型品、体部深く直線的に開く。付高台ハの字状に強く張る。轆轤整形。回転糸切り。外面は粗い回転撫で。	①良好 ②灰 ③やや密
250－11 74－11	灰釉陶器 椀	口縁部 破片	16.6×－ ×(2.4)	埋土	体部やや丸味をもち、口唇部丸まって強く外屈。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘1号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
250－12 74－12	須恵器 壺	上半部 破片	－×－×(13.1) 頸部径9.6	埋土	肩部丸く大きく張る。頸部直線的に外傾し上半は外反するか。肩・頸部接合2段。頸基部回転篦削り。	①良好 ②灰 ③やや密
251－13 74－13	須恵器 台付鉢	台部	－×17.6 ×(7.0)	埋土	台部直線的に開き、端部は小さく凸帯状に突出。腰部に断面三角の強い凸帯巡る。台部・体部・底部3段接合。	①酸化気味良好 ②浅黄橙 ③やや密
251－14 74－14	土師器 台付甕	ほぼ完形	13.7×10.8 ×21.1	埋土	胴部上半丸く張り最大径をなす。口縁部下半直立し上半は強く外屈しコの字口縁。台部ハの字状に開き端部やや撥る	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗砂粒多混
251－15 74－15	土師器 甕	底部欠損	22.4×－ ×(12.4)	埋土	胴部上位やや脹らみ、肩部張りなし。口縁部下半直線的に内傾し上半は内湾気味に強く外屈する弱いコの字口縁。口縁部横撫で。胴部横篦削り。内面指頭痕。横指頭撫で。	①良好 ②明褐灰 ③やや密
251－16 74－16	土師器 甕	底部欠損	21.0×－ ×(12.1)	埋土	胴部僅かに張る。口縁部弱く外反して立ち上半は内湾気味に立つ。口縁部横撫で。胴部縦篦削り、一部横篦削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗
251－17 74－17	土師器 甕	胴部⅓	－×3.8 ×(21.3)	埋土	胴部上位強く張る。胴上部横・斜篦削り。中位から下位は縦篦削り。内面指頭痕、接合痕あり。外面上位煤状付着物	①良好 ②橙 ③やや密
251－18 74－18	鉄製品 角釘	頭・端部欠損	長・幅・厚 (5.9)×0.8×0.6	埋土	角釘。	

Fig. No. PL. No.	遺構名	部位 残存量	計測値 径(cm)	備考
251－19 74－19	F II 5号住居跡		2.35	永楽通宝　銅 明　永楽6年1408
251－20 74－20	F II 5号住居跡		2.35	〃 〃
251－21 74－21	F II 5号住居跡		2.35	〃 〃

Fig. No. PL. No.	遺構名	部位 残存量	計測値 径(cm)	備考
251－22 74－22	F II 5号住居跡		2.4	永楽通宝　銅 明　永楽6年1408
251－23 74－23	F II 5号住居跡		2.4	〃 〃
251－24 74－24	F II 5号住居跡		2.35	〃 〃

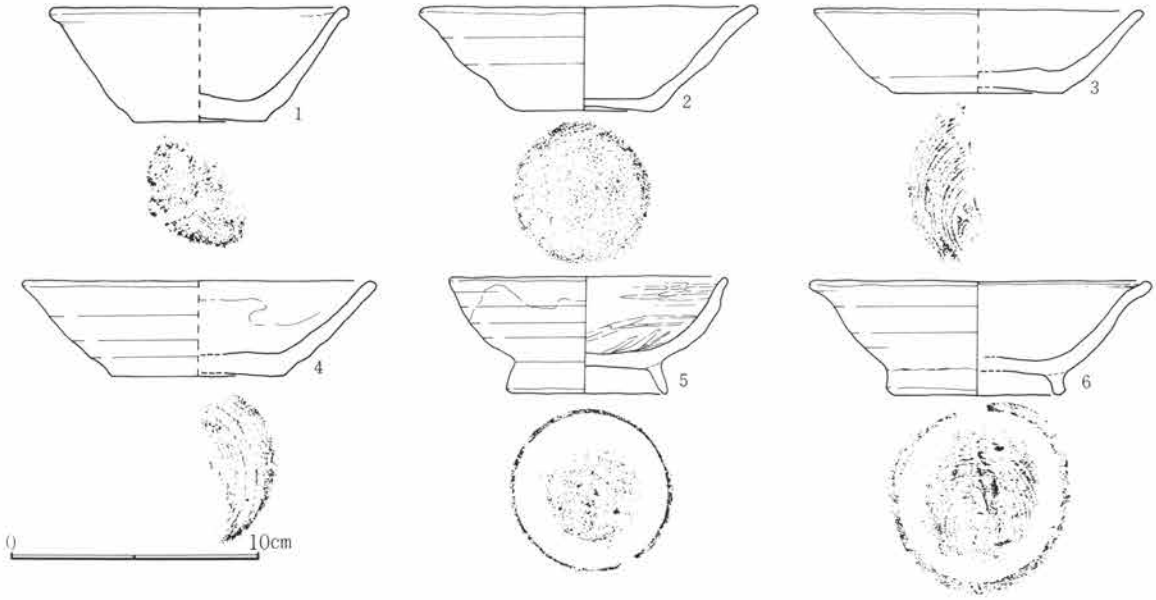


Fig. 252　F II 6号住居跡出土遺物（1）

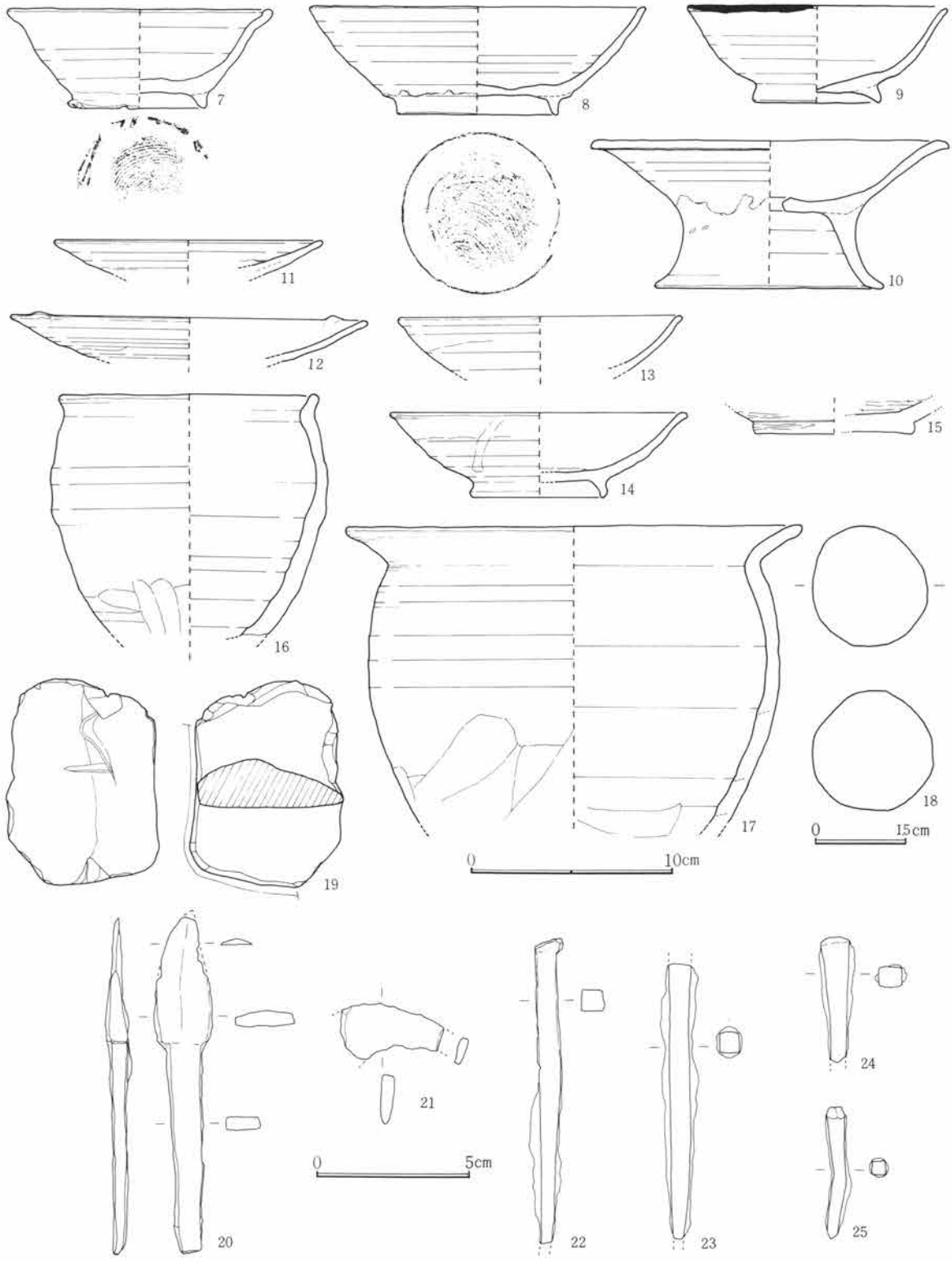


Fig. 253　ＦⅡ６号住居跡出土遺物（２）

ＦⅡ６号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
252－１ 75－１	須恵器 杯	¼	11.9×5.2 ×4.5	貯蔵穴	体部直線的で外傾度少なく深目。口唇部丸まって外屈。轆轤整形。底部回転糸切りか。二次被熱。	①良好　②赤橙　③粗

ＦⅡ６号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
252－２ 75－２	須恵器 杯	完形	13.5×5.6 ×4.1	床面	腰部ややくびれ体部直線的で大きく開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③粗
252－３ 75－３	須恵器 杯	¼	13.0×6.8 ×6.3	床下	底径大きめ。体部浅く直線的に開く。轆轤整形。回転糸切り。内外面剝離著しい二次被熱のためか。	①良好　②褐灰　③やや密白色微粒混
252－４ 75－４	須恵器 杯	¼	14.0×6.8 ×3.8	床下	体部浅く直線的に開く。轆轤整形。回転糸切り。内面口縁部に黒色付着物あり、油煙か。	①良好　②褐灰　③やや密
252－５ 75－５	内黒土器 小　椀	⅚	12.0×6.4 ×4.7	貯蔵穴	体部丸味強く、口唇部緩く外反。付高台やや高くハの字状に張る。轆轤整形。内面黒色処理、篦磨き。口縁部に油煙。	①酸化良　②淡橙　③やや密
252－６ 75－６	須恵器 椀	⅔	13.7×7.2 ×4.5	床面	体部下半丸く張り上半は大きく外反。口唇部丸く小さく内屈。付高台作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味軟　②浅黄橙　③粗
253－７ 75－７	須恵器 椀	⅓	13.0×6.8 ×4.8	埋土	体部丸味をもち上半で強くくびれ内湾。口唇部小さく内屈。付高台畳付けに棒状受痕、作り雑。轆轤整形回転糸切り	①良好　②灰　③やや密輝性微粒混
253－８ 75－８	須恵器 椀	⅓	16.4×8.0 ×5.4	埋土	体部丸味をもち内湾気味に大きく開く。付高台。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
253－９ 75－９	須恵器 椀	⅔	12.7×6.3 ×4.7	埋土	体部に強い丸味をもち、口縁部外反して開く。付高台内湾して強く張る。轆轤整形。口唇部内外面に油煙状付着物。	①良好　②灰～暗灰　③密
253－10 75－10	須恵器 高　杯	¼	17.0×10.2 ×7.4	貯蔵穴・ 竈横Pit	体部浅く大きく開き、口唇部は外屈気味に外反。高台高く外反して開く。見込み部焼成前の径１cmの穿孔。轆轤整形	①良好　②灰　③やや密
253－11 75－11	灰釉陶器 皿　？	小片	13.1×－ ×(1.4)	埋土	体部緩く内湾気味に開く。口唇部丸い。内外面施釉。見込部に重ね焼痕。大原２号窯式期？釉調は透明。	①良好　②灰白　③緻密
253－12 75－12	灰釉陶器 輪花皿	小片	16.7×－ ×(2.7)	埋土	体部僅かに丸味大きく開く。内外面施釉。腰部無釉で回転篦削り。大原２号窯式期。釉調は淡緑色。	①良好　②灰　③やや密
253－13 75－13	灰釉陶器 椀	小片	13.9×－ ×(3.0)	埋土	体部に弱い丸味をもち、口唇部は丸く小さく外反。外面体部上位、内面見込部まで施釉。	①良好　②灰白　③緻密
253－14 75－14	灰釉陶器 椀	小片	(14.5)×(6.7) ×(4.1)	埋土	体部弱い丸味をもつ。口唇部丸く緩く外反。高台外面稜不明瞭。外面上位から内面下位まで施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰白　③密
253－15 75－15	緑釉陶器 椀	底部¼	－×7.8 ×(1.6)	埋土	底部削り出し平底高台。内外全面篦磨きを施す。焼成は硬質で須恵質。釉調はオリーブ灰で薄い施釉。畿内産。	①良好　②灰　③密
253－16 75－16	須恵器 小型甕	底部欠損	12.7×(－) ×(11.5)	埋土	胴部上半張り最大径(13.5)。口縁部短かく外傾。轆轤整形。底部剝離面に回転糸切り。腰部縦・横篦削り。	①良好　②灰　③やや粗
253－17 75－17	須恵器 甕	上半½	22.2×－ ×(14.5)	竈	胴部丸く張り、口縁部強く折れて外傾。胴部上半轆轤調整、下半斜位篦削り。内面に輪積み痕残る。	①酸化気味軟　②浅黄橙　③やや密
253－18 75－18	土製品 玉	完形	2.0×1.9 重6.9g	床直	手捏ね。	①良好　②橙　③やや密
253－19 75－19	石製品 砥　石		長・幅・厚 10.1×17.5×12.4	床直	長方板状。両面・図面使用。裏面は破損後も使用。221.4g	流紋岩（砥沢）
253－20 75－20	鉄製品 鉋	ほぼ完形	長・幅・厚 10.8×2.0×0.5	埋土	刃部僅かに反り、平面中軸から右に緩く曲がる。両刃で表面に鎬。鉋長４cm、刃長２cm、柄長6.8cm。	
253－21 75－21	鉄製品 不　明	小片	長・幅・厚 (3.4)×1.8×0.4	埋土	緩く弧状を呈す。鎌柄の基部か。	
253－22 75－22	鉄製品 角　釘	端部欠損	長・幅・厚 (9.9)×0.6×0.7	埋土	頭部形状は折頭式の角釘か。端部僅かに曲り気味。	
253－23 75－23	鉄製品 角　釘	頭・端部欠損	長・幅・厚 (8.8)×0.8×0.6	埋土	角釘。	
253－24 75－24	鉄製品 不　明	両端部欠損	長・幅・厚 (4.1)×(1×0.4)	埋土	断面角状を呈するが幅・厚の差が大きく、刀子類の柄部とも考えられる。	
253－25 75－25	鉄製品 角　釘	頭部欠損	長・幅・厚 (4.2)×0.5×0.5	埋土	角釘。緩くくの字状に折れ曲がる。	

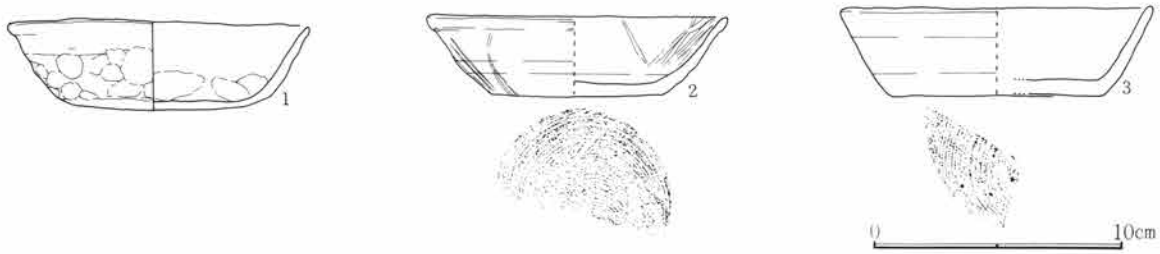


Fig. 254　ＦⅡ17号住居跡出土遺物（１）

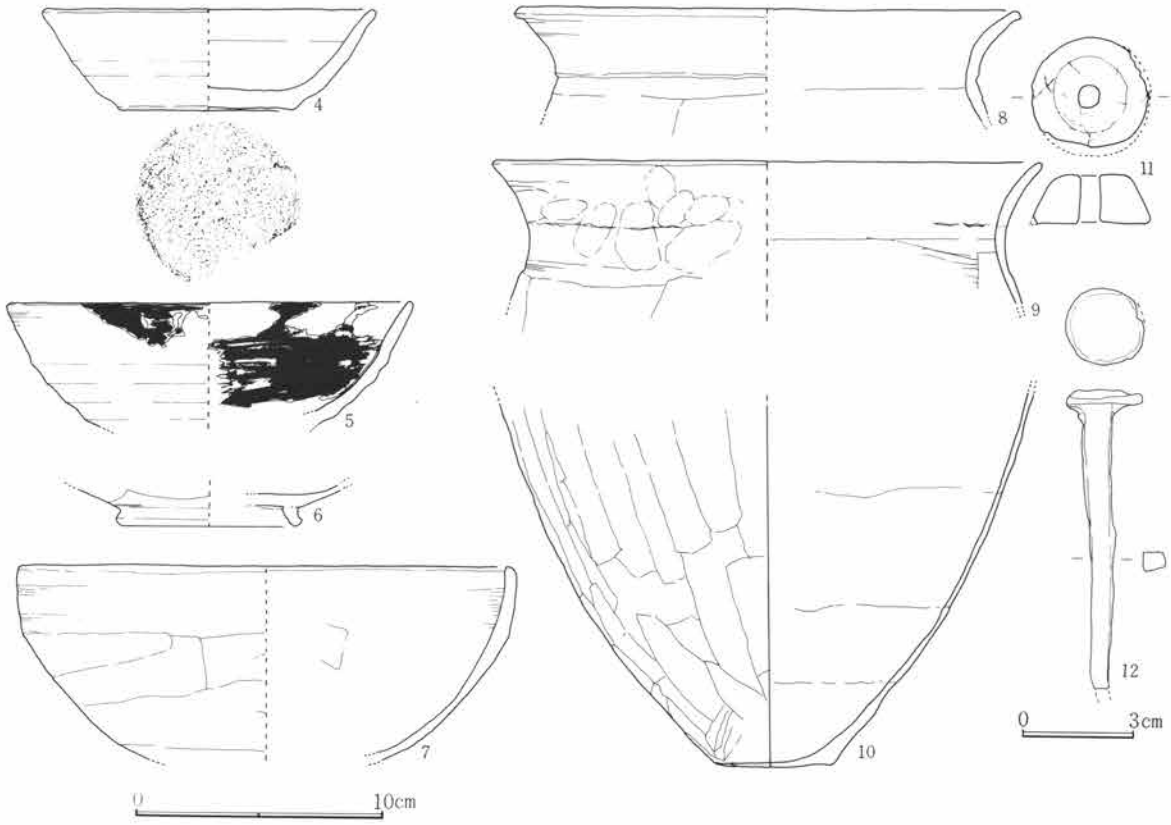


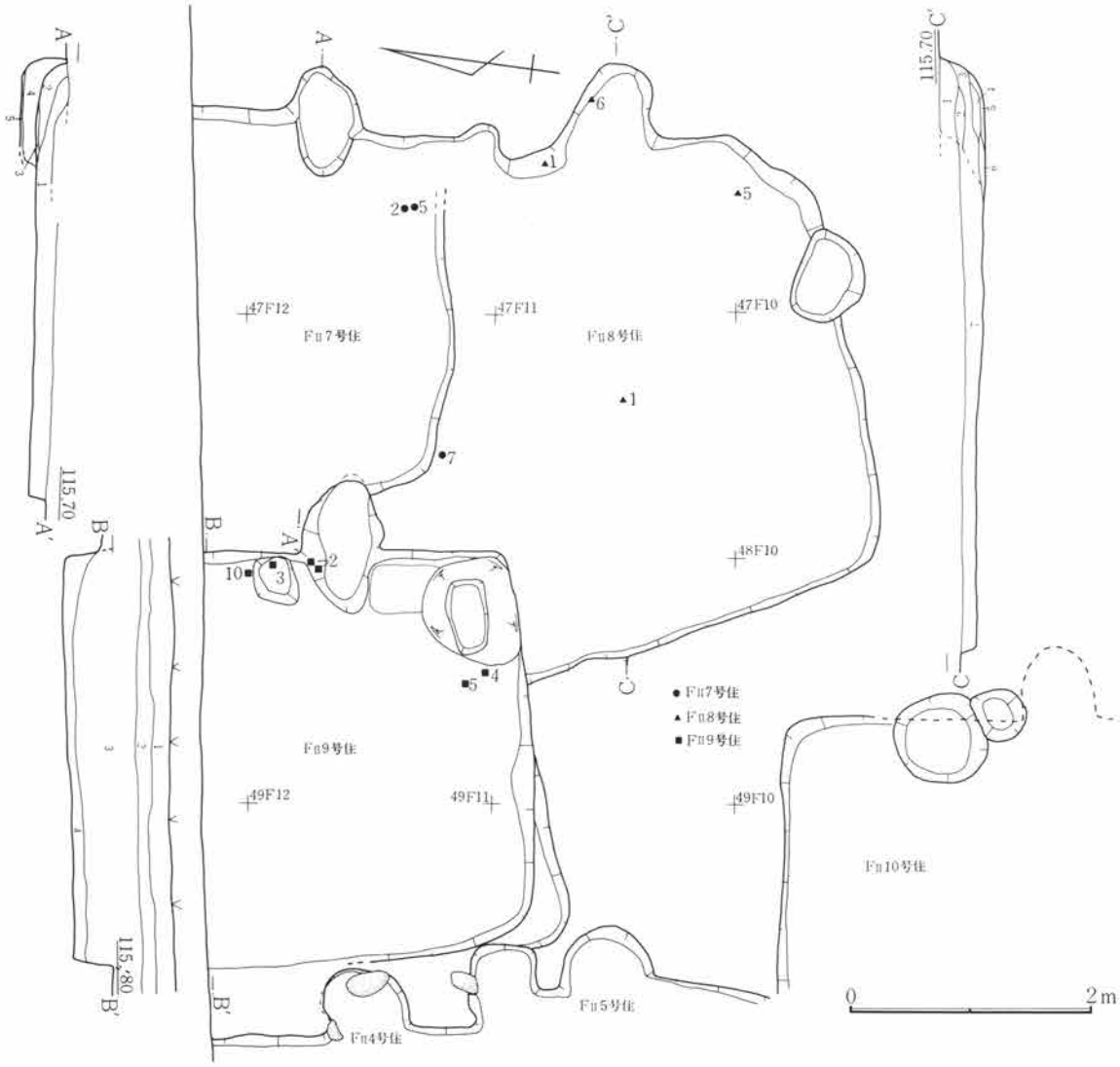
Fig. 255　ＦⅡ17号住居跡出土遺物（２）

ＦⅡ17号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
254－1 76－1	土師器 杯	¾	12.1×8.1 ×3.5	埋土	不安定な平底。腰部丸く、体部中位で小さくくびれて上半は内湾気味に開く。体部上位横撫で。中位から腰部指頭痕著しい。底部不定方向篦削り。内面僅かに指頭残り横撫で	①良好　②橙　③やや密輝性黒色粒混
254－2 76－2	須恵器 杯	⅓	12.1×6.8 ×3.2	住居外	腰部僅かに丸味をもち体部は直線的。口唇部やや肥厚する。内外面に火襷。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②オリーブ灰　③やや密
254－3 76－3	須恵器 杯	⅓	12.4×8.2 ×3.5	埋土	体部外傾度小さく直線的。内外面燻し状色調。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
255－4 76－4	須恵器 杯	⅓	13.4×6.9 ×4.0	埋土	底径やや小さく、体部に丸味をもつ。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰　③やや密
255－5 76－5	須恵器 椀	¼底部 欠損	16.4×－ ×(5.0)	埋土	体部丸味強く、上半は外反気味に開く。内外面に漆し状付着物。轆轤整形。	①良好　②灰　③密白色微細粒混
255－6 76－6	灰釉陶器 皿	底部⅓	－×7.4 ×(1.4)	埋土	高台外稜強いが断面丸味をもつ。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
255－7 76－7	土師器 鉢	¼	20.0×－ ×(7.7)	埋土	底部丸底気味か。体部丸く、上位はやや肥厚し内湾して立つ。上位横撫で、体部横篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
255－8 76－8	土師器 甕	口縁部 ¼	20.4×－ ×(4.2)	埋土	肩部張りなく、口縁部強く外反して開く。口縁部横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
255－9 76－9	土師器 甕	口縁部 ¼	22.0×－ ×(5.6)	埋土	肩部張りなく、口縁部外反して開く。口縁部指頭痕著しい肩部横篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②橙　③やや粗
255－10 76－10	土師器 甕	下半	－×4.8 ×(14.5)	埋土	底部小さく、胴部やや脹らみをもって立ち上がる。底部篦削り。胴部縦篦削り。	①良好　②鈍い橙　③やや粗
255－11 76－11	石製品 紡錘車	ほぼ完 形	径(4.8)厚1.9 孔径0.8	埋土	全面磨き調整。側面２ケ所に『×』印の陰刻。53g。	緑泥片岩
255－12 76－12	鉄製品 角釘	端部欠 損	長・幅・厚 8.0×0.8×0.6	埋土	頭部状形円頭式の角釘。円頭部径2.0cm。	

ＦⅡ７号住居跡（Fig. 256～258、PL. 21・76）

Ｆ区の南部に位置し、46・47Ｆ11・12の範囲にある。ＦⅡ８号・ＦⅡ９号住居跡と重複しているが前者より新しく、後者より旧い時期の所産と考えられる。これらは前項のＦⅡ４号住居跡をはじめとする住居跡群から一連の重複関係にある。平面形は方形が想定されるが、北側は現生活道のため未検出である。また、西壁線は明確にできなかった。東西長約3.1m・南北は南壁線より北へ2.1mの範囲まで確認した。壁高は土層観察によれば約40cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、比較的堅く踏み締まる。竈は東壁に付設され、主軸方位はおよそＮ－95°－Ｅを示す。



ＦⅡ７号住居跡（A－A'）
1　暗褐色土　多量の焼土・灰・Loam塊混じる。
2　暗褐色土　多量の焼土・灰混じる。
3　灰層
4　黒褐色土　焼土塊多量に含む。
5　灰層

ＦⅡ８号住居跡（C－C'）
1　暗褐色土　焼土粒・炭化粒含む。
2　黒褐色土　焼土粒含む。
3　黒褐色土　焼土粒・炭化粒多量に含む。
4　焼土塊
5　焼土塊と炭化粒混合層
6　炭化粒層
7　暗褐色土　炭化粒含む。

ＦⅡ９号住居跡（B－B'）
1　暗褐色土　B軽石主体砂質層
2　暗茶褐色土　B軽石 unit の一部 Ash 層。
3　暗褐色土　大粒焼土粒・炭化粒・軽石（FA？）を多量に含む。
4　暗褐色土　炭化粒多量に含みやや粘性あり。

Fig. 256　ＦⅡ７号・ＦⅡ８号・ＦⅡ９号住居跡

竈燃焼部は東壁を約50cm掘り込んで構築されるが袖部などの痕跡は確認されていない。燃焼部内には床面とほぼ同一の高さに薄い灰層が堆積している。灰層下には明瞭な火床の形成は認められず焼土塊を多量に含む黒褐色土で埋まり、掘形底面にはさらに一層の薄灰層が検出されている。上下２層の灰層はともに混入物が少なく竈使用に際しての堆積と考えられる。燃焼部幅約60cm・全長90cmを測る。

出土遺物は散在して検出され、土師器杯・須恵器杯・椀類のほか土錘がある。

ＦⅡ８号住居跡（Fig. 256・259、PL. 21・76・77）

Ｆ区の南部に位置し、46～48Ｆ９～11の範囲にある。ＦⅡ７号・ＦⅡ９号住居跡と重複しているが、両者より旧い時期の所産としてとらえられている。しかしＦⅡ７号住居跡出土遺物との比較では新旧に矛盾するものもある。平面形は隅丸でやや不整な方形を呈すると考えられるが、両住居跡との重複によって北壁線は消失している。東西長4.15m・南北は南壁線より北へ約４mの範囲まで確認している。壁高約35cmを測り、床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。竈は東壁やや南に偏って付設され、主軸方位はおよそＮ―84°―Ｅを示す。

竈燃焼部は東壁を約70cm掘り込み構築される。開口部左側は壁線が幅広に住居内に突出し袖部を作り出すようであるが右側には認められない。火床にはほとんど窪みがなく、底面には焼土小塊が混る灰層が堆積する。燃焼部幅約90cm・左側突出部からの奥行き約85cmを測る。

出土遺物は竈内およびその周辺に多く検出され、須恵器杯・蓋・椀類・灰釉陶器・土師器甕のほか流紋岩・安山岩製の小型砥石がある。

ＦⅡ９号住居跡（Fig.256・260、PL. 21・77）

Ｆ区南部に位置し、47～49Ｆ10～12の範囲にある。北側は現生活道路下に入り全体は検出できなかった。ＦⅡ４号・ＦⅡ17号・ＦⅡ７号・ＦⅡ８号住居跡と重複するがＦⅡ４号住居跡より旧いが他のいずれより新しい時期の所産である。平面形は方形を呈すると考えられ、東西長3.3m・南北は南壁線より北へ2.7mの範囲まで確認した。壁高は北側の土層観察によれば約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなし比較的安定している。竈は東壁に付設され、主軸方位はＮ―90°―Ｅを示す。

竈燃焼部は東壁を60cm程度掘り込むが袖部などの痕跡は検出できなかった。火床は硬質赤化面は残存せず、掘形は約20cmの深さに窪み灰・焼土塊の混合層で埋っていた。燃焼部幅70cm・火床落ち込みからの奥行き約1.1mを測る。貯蔵穴は南東隅にあり上端面は径85cmの不整楕円形を呈するが、下端は方形で深さ30cmの明瞭な掘形をもっている。貯蔵穴上面には竈内から流出したと考えられる灰層が覆っていた。

出土遺物は貯蔵穴周辺に多く検出されたほかは散在している。須恵器杯・皿・椀・灰釉陶器のほか安山岩製砥石・鉄釘などがある。

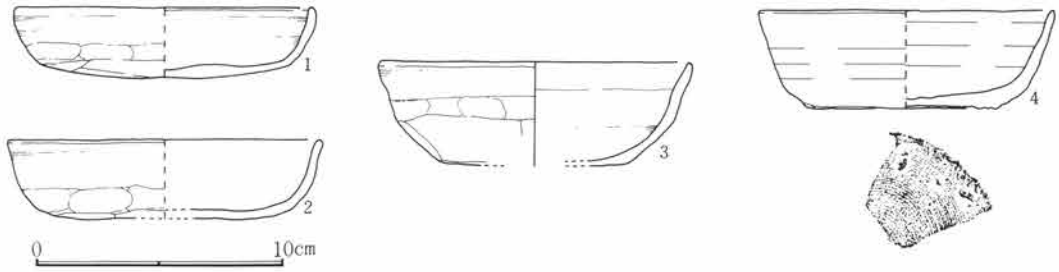


Fig. 257　ＦⅡ７号住居跡出土遺物（１）

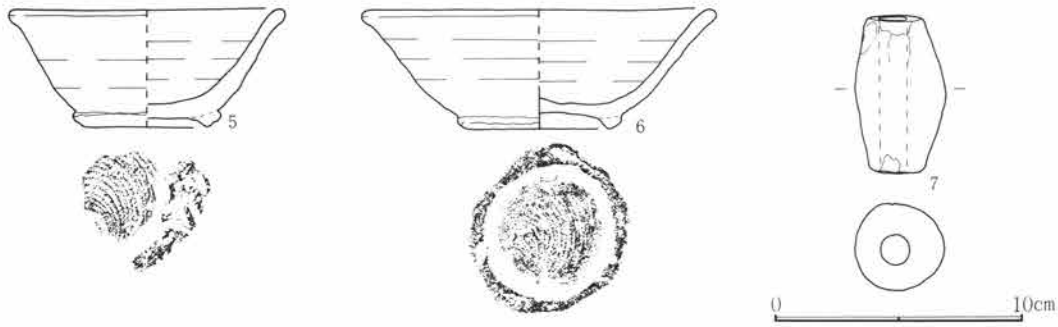


Fig. 258　ＦⅡ７号住居跡出土遺物（２）

ＦⅡ７号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
257－１ 76－１	土師器 杯	⅓	11.8×－ ×2.8	竈	底部不安定な平底。腰部短かく丸味をもち、体部内湾して立つ。体部横撫で。腰部指押え後篦撫で。底部篦削り。	①良好　②橙　③やや密
257－２ 76－２	土師器 杯	⅓	12.6×－ ×(3.2)	埋土	平底。腰部丸味をもち体部僅かに外反。体部横撫で。腰部指押え後篦撫で。底部不定方向篦削り。	①良好　②鈍い橙 ③やや密
257－３ 76－３	土師器 杯	⅓	12.6×7.4 ×(4.1)	竈	平底気味。腰部深く直線的。体部緩く波うち内湾気味に開く。体部上半横撫で、下半指押え後篦撫で。腰部一段横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
257－４ 76－４	須恵器 杯	¼	11.9×7.3 ×3.7	埋土	底径大きく腰部に丸味をもつ。体部内湾気味に立ちやや深目。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
258－５ 76－５	須恵器 椀	¼	11.0×5.8 ×4.7	埋土	腰部やや丸く張り、体部外反して開く。全体に肥厚。口唇部丸まる。付高台低く作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③やや粗
258－６ 76－６	須恵器 椀	⅖	14.2×6.5 ×4.8	竈	腰部僅かに丸味をもち、体部外反して大きく開く。口唇部丸い。付高台低く作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②明褐灰　③粗
258－７ 76－７	手捏ね 土錘	完形	長6.2幅3.6 重69.5g	住居外	手捏ね成形。両上端面は平らに篦調整。孔径1.0cm。	①良好　②鈍い橙 ③やや密

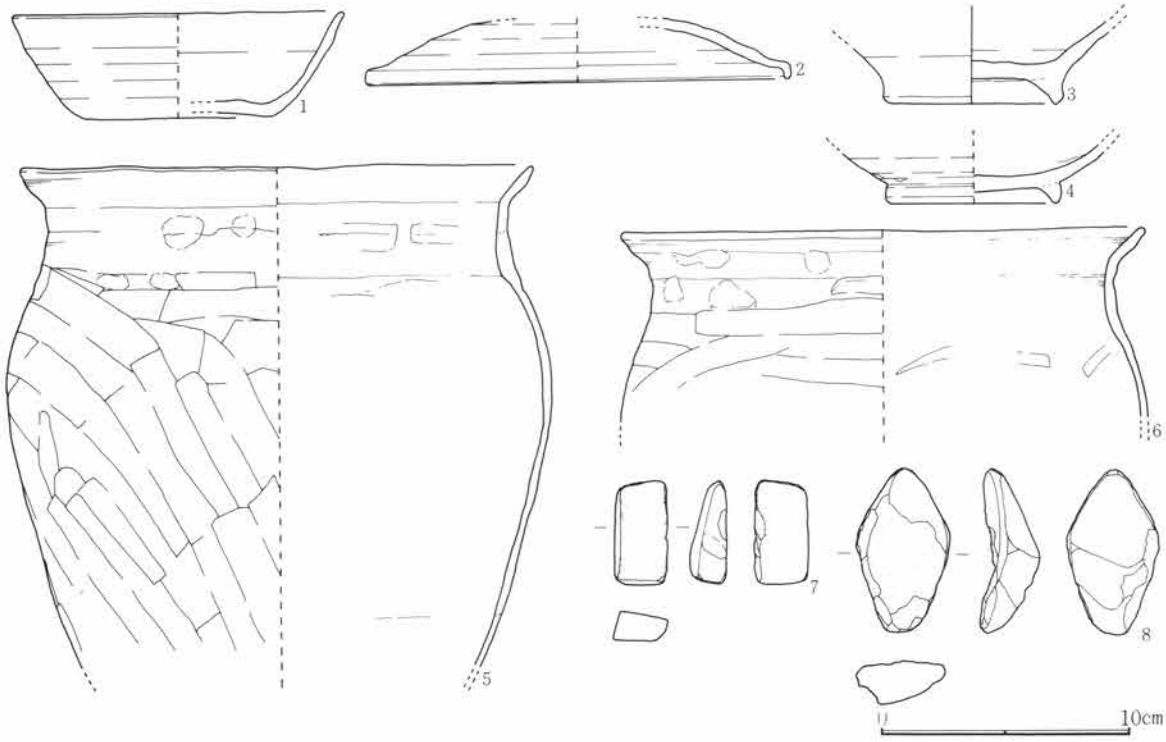


Fig. 259　ＦⅡ８号住居跡出土遺物

ＦⅡ８号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
259－１ 76－１	須恵器 杯	⅓	13.2×7.4 ×4.1	埋土	底径やや大きく、体部内湾気味に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
259－２ 76－２	須恵器 蓋	体部¼ 摘欠損	17.0×－ ×(2.5)	竈	体部やや丸味をもつ。端部直に折れて立つ。天井部回転篦削り。轆轤整形。	①良好　②暗灰　③密
259－３ 76－３	須恵器 椀	底部	－×7.1 ×(3.3)	埋土	腰部直線的。付高台やや肉厚で高目。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
259－４ 77－４	灰釉陶器 椀	底部⅔	－×7.0 ×(2.3)	埋土	腰部やや丸味をもつ。高台低く断面丸味をもち内湾して立つ。底部回転撫で調整。内外面漬け掛け施釉。虎渓山１号	①良好　②灰　③やや密
259－５ 77－５	土師器 甕	上半部 ⅓	20.4×－ ×(20.0)	埋土	胴上半部やや強く張り肩部をなす。口縁部下半直立し上半は内湾気味で強く外屈するコの字口縁。口縁部横撫で。肩部横・上半より下半にかけて斜から縦方向の篦削り。	①良好　②橙　③やや密
259－６ 77－６	土師器 甕	口縁胴 部¼	21.0×－ ×(7.5)	竈	肩部丸く張る。口縁部直線的で僅かに内傾し上半は強く外屈するコの字口縁。口縁部指押え後横撫で。肩部横篦削り	①良好　②橙　③やや密
259－７ 77－７	石製品 砥石		長・幅・厚 4.1×2.1×1.2	埋土	楔型。全面使用。重16.0g。	流紋岩（砥沢？）
259－８ 77－８	石製品 砥石		長・幅・厚 6.5×3.7×1.8	埋土	不定形。破損砥石を再利用したか。多面使用。重37.8g。	安山岩

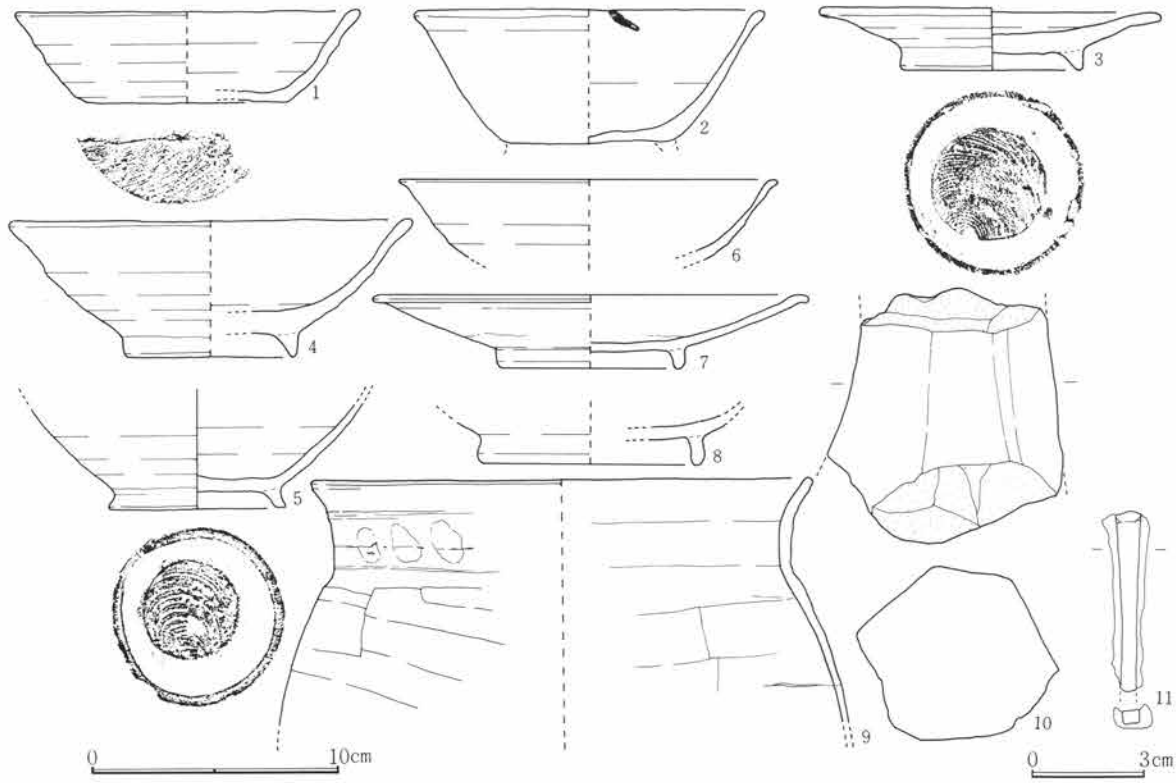


Fig. 260　ＦⅡ９号住居跡出土遺物

ＦⅡ９号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
260－１ 77－１	須恵器 杯	¼	13.8×8.0 ×3.6	埋土	底径大。体部下半僅かに張り、上半は緩く外傾して開く。轆轤整形。回転糸切り。外面吸炭。	①良好　②灰白　③やや密
260－２ 77－２	須恵器 椀	⅕	14.0×6.4 ×5.2	竈	体部深く、下半にやや丸味。上半は直線的。付高台剝離。轆轤整形。回転糸切り。口唇部に油煙状付着物。	①やや軟　②灰　③密
260－３ 77－３	須恵器 皿	ほぼ完 形	13.6×7.4 ×2.5	Pit内	体部直線的。上半は水平に開く。付高台断面細三角で直立する。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②灰白　③やや密

ＦⅡ９号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
260－４ 77－４	須恵器 椀	¼	16.0×7.0 ×5.4	埋土	体部下半にやや丸味をもつ。上半は緩く外反して開く。付高台断面細三角で直立する。轆轤整形。	①良好　②灰白　③やや密
260－５ 77－５	須恵器 椀	体～底部	－×7.1 ×(4.0)	埋土	腰部張りなく、体部丸味をもつか。付高台断面矩形。轆轤整形右回転糸切り。内外面漆黒部分あり黒色処理の可能性	①良好　②灰白　③やや密
260－６ 77－６	灰釉陶器 椀	体部¾	15.0×－ ×(3.0)	埋土	体部下半に丸味をもつ。口唇部小さく外屈する。外面体部中位まで回転篦削り。内外全面施釉。光ケ丘１号、窯式期。	①良好　②灰　③やや密
260－７ 77－７	灰釉陶器 皿	¼	17.4×7.2 ×2.9	埋土	体部直線的に大きく開く。口唇部丸まり強く外屈。内外面体部施釉。高台断面丸く直立。	①良好　②灰　③緻密
260－８ 77－８	灰釉陶器 椀	底部小片	－×9.0 ×(2.0)	埋土	見込部刷毛施釉。高台やや高く内湾気味に直立。断面丸い。	①良好　②灰　③密
260－９ 77－９	土師器 甕	口～胴小片	20.0×－ ×(9.7)	埋土	肩部やや丸く張る。口縁部下半直立し、上半は折れて外傾するコの字口縁。口縁部中位接合痕及び指頭痕。肩部横・斜篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②橙　③やや密
260－10 77－10	石製品 砥石		長・幅・厚 9.7×8.0×6.6	埋土	大型砥石。多面使用。454g	砂岩
260－11 77－11	鉄製品 角釘	端部欠損	長・幅・厚 (4.8)×0.6×0.4	埋土	頭部形状角頭式の角釘。	

ＦⅡ10号住居跡（Fig. 261・262、PL. 21・77・78）

Ｆ区の南に位置し、48～50Ｆ８・９の範囲にある。北西部でＦⅡ５号住居跡と重複し、これより新しい時期の所産である。平面形は方形を呈すると考えられるが、南東は部分的に削平が深くおよび、東・南壁の一部が消失している。南北長3.8m・東西長3.7m・壁高は約30cmを測る。竈は東壁に付設されるが、削平が著しく痕跡程度の残存状態である。主軸方位はおよそＮ－89°－Ｅを示す。貯蔵穴は南東部にあり、90×50cm・深さ39cmを測り楕円形を呈す。その他住居内には数ケ所に Pit 状落ち込みが検出されているものの当跡に属するのは南壁沿いと北西隅のものと考えられる。これらの性格は不明である。

出土遺物は貯蔵穴内と南壁沿い Pit の周辺に多く検出されて須恵器椀と灰釉陶器が多く、そのほか土錘などがある。

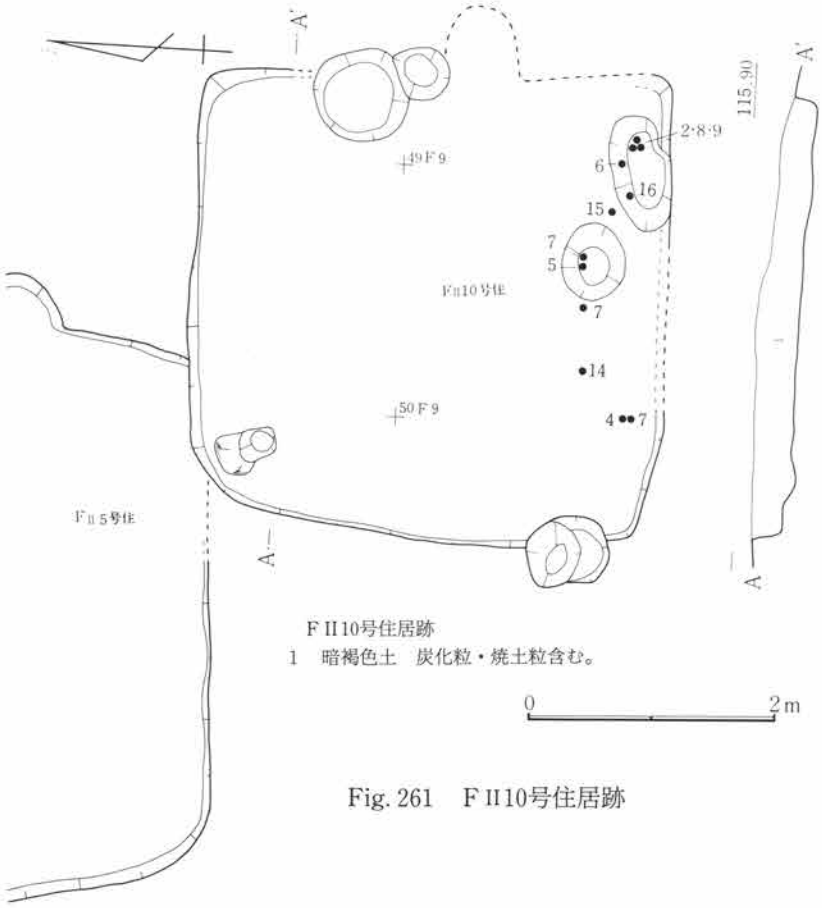


Fig. 261　ＦⅡ10号住居跡

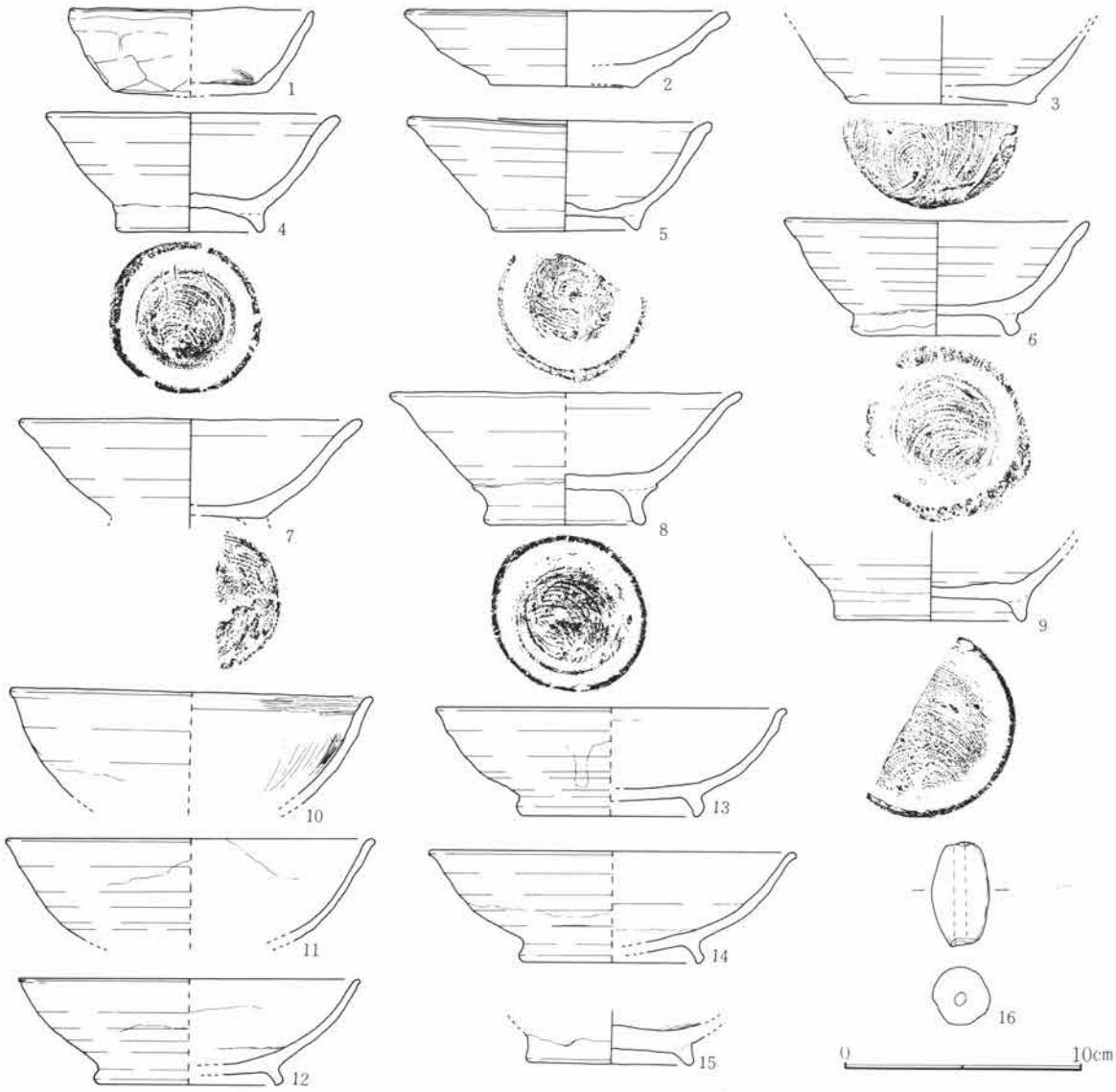


Fig. 262　F II10号住居跡出土遺物

F II10号住居跡出土遺物観察表（1）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
262－1 77－1	土師器 杯	¼	10.2×6.4 ×(3.5)	埋土	平底。体部内湾気味で深め。体部上半指押え後、横撫で。下半弱い篦削り。底部不定方向篦削り。内面撫で痕顕著。	①良好　②橙　③やや密
262－2 77－2	須恵器 皿	⅔	13.5×6.0 ×3.1	貯蔵穴	底径小さい。腰部くびれる。体部僅かに丸味をもち、上位は外傾する。口唇部凹線状に小さな段をなす。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
262－3 77－3	須恵器 杯	底部	－×7.4 ×(2.9)	埋土	腰部僅かに張り気味。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③密
262－4 78－4	須恵器 椀	¾	12.2×6.2 ×4.9	埋土	体部中位僅かに丸味をもつ。上半は小さく外傾して開く。口唇部やや肥厚。付高台断面矩形直立。見込部に強いうず巻き痕。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味やや軟　②浅黄橙　③やや粗
262－5 78－5	須恵器 椀	½	12.6×6.1 ×4.7	Pit内	体部中位僅かに丸味をもつ。上半はやや肥厚して口唇部小さく外反。付高台断面三角。見込部に強い指あて痕。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
262－6 78－6	須恵器 椀	¾	12.7×7.0 ×4.8	貯蔵穴	腰部から体部やや張る。上半はくびれて外傾。付高台作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味軟　②明褐灰　③密
262－7 78－7	須恵器 椀	½	14.2×－ ×(4.1)	埋土	体部中位僅かに張り、上半は緩く外反して開く。付高台剝落。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟　②黄橙　③やや粗

ＦⅡ10号住居跡出土遺物観察表（２）

Fig.No PL.No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
262－8 78－8	須恵器 椀	⅔	14.5×6.7 ×5.5	貯蔵穴	体部直線的に開き、口縁部強く外傾する。付高台やや高く端部丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰～褐灰 ③やや粗
262－9 78－9	須恵器 椀	底部	－×8.0 ×(3.0)	貯蔵穴	腰部張りなし。付高台直立気味。端部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③密
262－10 78－10	内黒土器 椀	小片	15.1×－ ×(4.5)	埋土	体部丸味強く、上半は緩く外反して開く。内面黒色処理し口縁部横・体部放射状篦磨き。外面一部に黒色斑及ぶ。轆轤整形。15と同一個体と考えられる。	①酸化やや軟　②橙 ③やや密
262－11 78－11	灰釉陶器 椀	体部小片	15.8×－ ×(4.3)	埋土	体部丸味をもち、口唇部丸く僅かに外傾。腰部回転篦削り内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰白　③密
262－12 78－12	灰釉陶器 椀	小片	14.1×7.8 ×4.4	埋土	体部やや丸味をもち、口唇部小さく外屈する。高台矩形気味の三ケ月型。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰白　③緻密
262－13 78－13	灰釉陶器 椀	小片	14.6×7.8 ×4.5	埋土	体部丸味強く、口唇部丸く小さく外屈。高台丸く内湾して立つ。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③やや密
262－14 78－14	灰釉陶器 椀	小片	15.3×7.7 ×4.6	埋土	腰部から体部丸味をもち、口唇部僅かに外反し口唇部小さく尖がる。高台丸味のある三ケ月型。内外面漬け掛け施釉大原２号窯式期。	①良好　②灰白　③密
262－15 78－15	内黒土器 椀	底部	－×7.0 ×(1.7)	埋土	10と同一個体と考えられる。内面黒色処理し、見込部は放射状篦磨き。付高台。轆轤整形。	①酸化やや軟　②橙 ③やや密
262－16 78－16	土製品 土錘	完形	長4.3幅2.4	貯蔵穴	手捏ね。孔径0.5cm。	①良好　②淡橙　③やや密

ＦⅡ12号住居跡（Fig. 263・264、PL. 21・78）

Ｆ区の南やや西側に位置し、54・55Ｆ10・11の範囲にある。北側は現生活道にかかり北壁の検出はされていない。平面形は方形を呈すると考えられ、比較的小規模な住居跡である。東西長2.2m・南北は南壁線より北へ2.95mの範囲まで確認される。壁高は現状で約15cmを測る。床面は中央部が僅かに高まりをなす。竈は東壁やや南側に付設され、主軸方位はＮ－88°－Ｅを示す。

竈燃焼部は東壁を約65cm掘り込み、略三角形を呈し、袖部などの痕跡はない。火床はゆるい窪みをなし焼土・Loam 塊・灰の混合土が堆積する。硬質赤化面は残されていない。燃焼部最大幅70cmを測る。

出土遺物は少なく、いずれも破片で須恵器椀などがある。

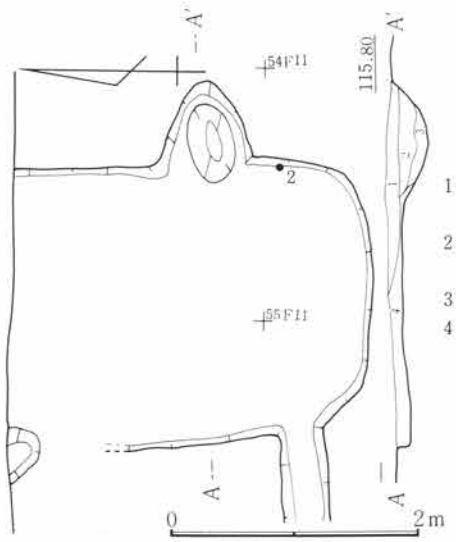
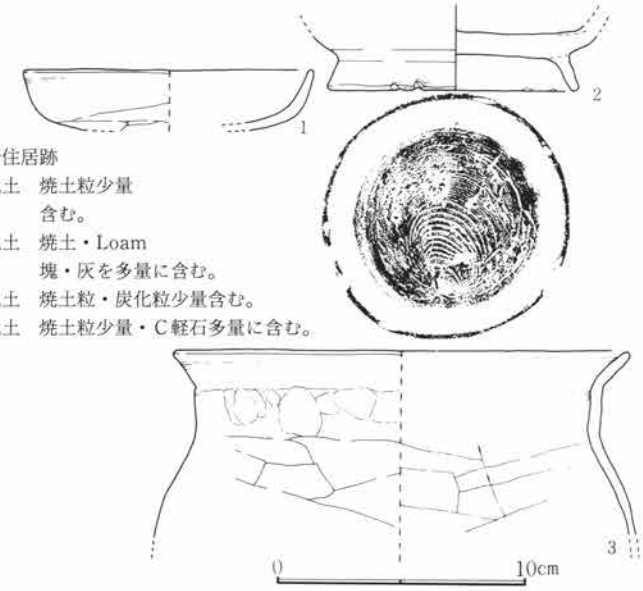


Fig. 263　ＦⅡ12号住居跡



ＦⅡ12号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒少量含む。
2　暗褐色土　焼土・Loam 塊・灰を多量に含む。
3　黒褐色土　焼土粒・炭化粒少量含む。
4　暗褐色土　焼土粒少量・Ｃ軽石多量に含む。

Fig. 264　ＦⅡ12号住居跡出土遺物

ＦⅡ12号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器　種 器　形	部　位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
264－1 78－1	土師器 杯	小片	11.6×－ ×(2.4)	埋土	底部扁平な丸底か。腰部丸く、体部短かく立つ。体部横撫で。腰部弱い篦撫で。底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや密
264－2 78－2	須恵器 椀	底部	－×10.0 ×(2.6)	埋土	腰部強く張る。付高台、やや高く直線的に立つ。畳付けに２対の棒状受け痕あり。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
264－3 78－3	土師器 甕	口縁～ 胴部 小片	(18.0)×－ ×(6.7)	埋土	肩部やや張り気味。口縁部下位は直立し、上半は強く外屈するコの字口縁。口縁部上半横撫で、下半は指頭痕顕著。肩部斜篦削り。内面口縁横撫で、肩部斜篦撫で。	①良好　②橙　③やや密

ＦⅡ45号住居跡（Fig. 265・266、PL. 22・78）

Ｆ区の南西隅に位置し、62～64Ｆ２～５の範囲にある。周辺は削平が著しく、壁線などの遺存状態は不良である。また、当跡の中央を東西走する溝によって床面もかなり攪乱を受けている。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈し、南北長4.3m・東西長3.3m・壁高15cmを測る。竈は東壁に付設されたと考えられるが、上記した溝によって消失している。東壁線に基づく東西軸方位はおよそＮ－86°－Ｅを示す。住居内には大小の Pit が多数検出されているが、これらのほとんどは上層面で確認された浅間山降下火山灰のＢ軽石粒を含み、中世以降に属するものである。貯蔵穴は南東隅に検出され、60×80cm・深さ20cmの方形を呈する。

出土遺物は少なく、須恵器杯・椀・小瓶・灰釉陶器などがある。

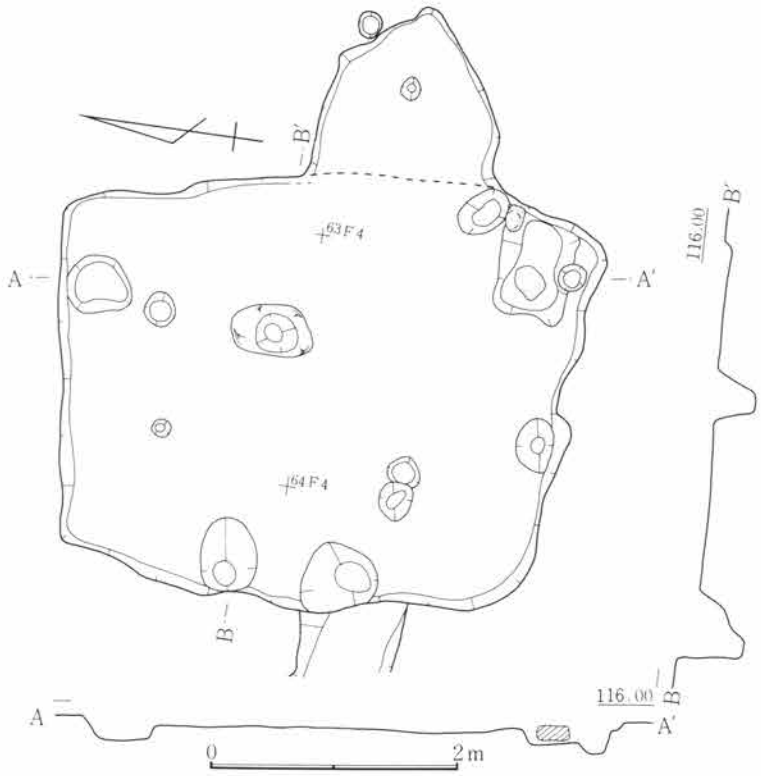


Fig. 265　ＦⅡ45号住居跡

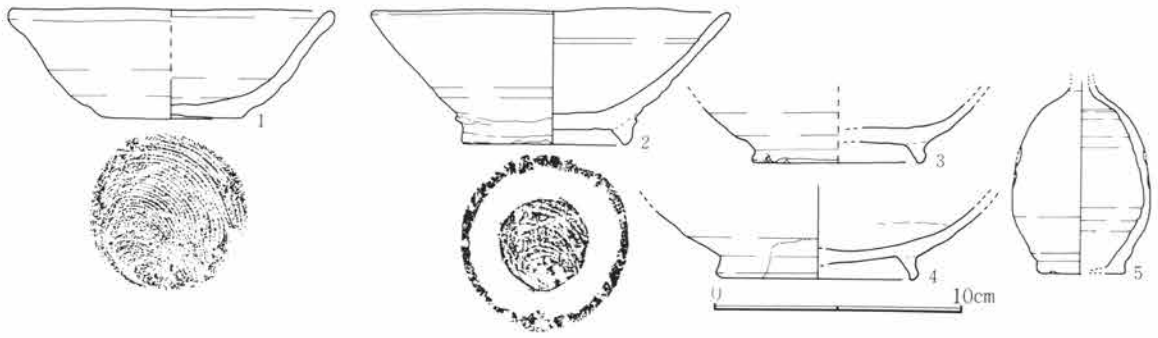


Fig. 266　ＦⅡ45号住居跡出土遺物

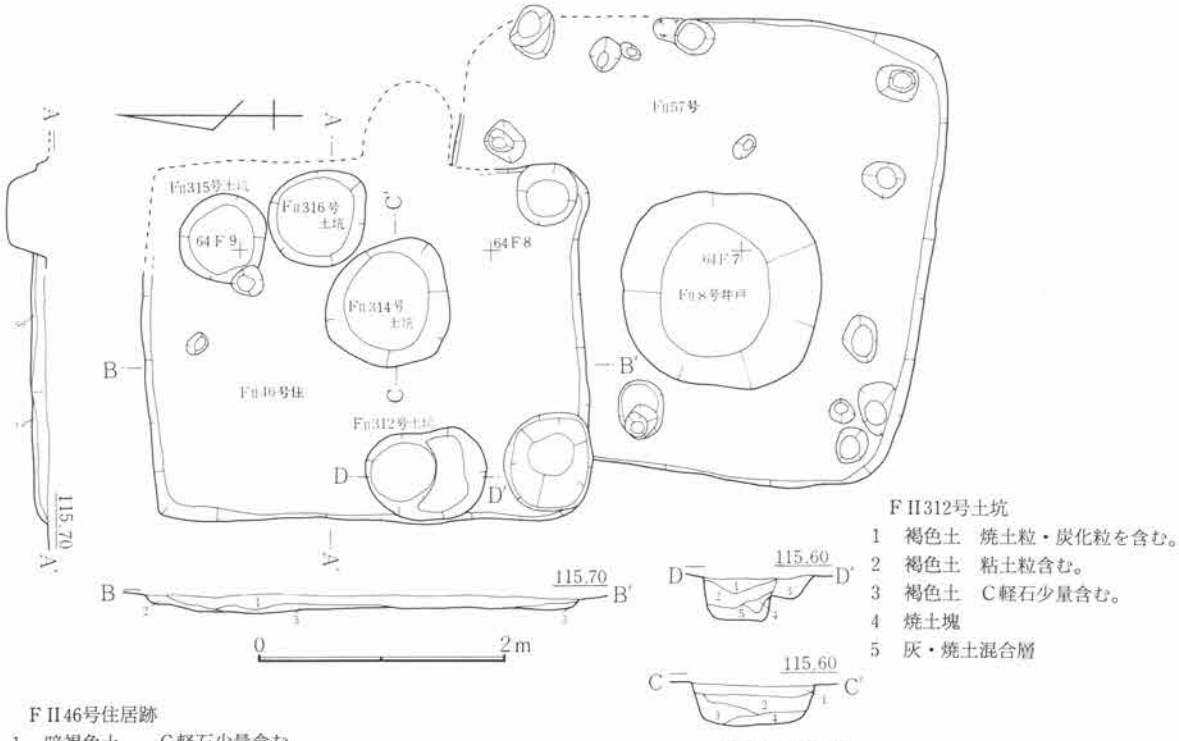
ＦⅡ45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
266－1 78－1	須恵器 杯	½	13.0×5.8 ×4.3	埋土	体部下半やや丸味をもち、上半は外反気味。口唇部丸く肥厚。轆轤整形。右回転糸切り。見込部コテあてうず巻き痕。	①良好　②灰　③やや粗
266－2 78－2	須恵器 椀	⅔	14.3×6.8 ×5.2	埋土	体部直線的で大きく外傾して開く。付高台断面略三角で作り雑。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味やや軟 ②灰褐　③密
266－3 78－3	黒色土器 椀	底部½	－×7.0 ×(2.2)	埋土	腰部僅かに張る。付高台作り雑。轆轤整形。回転糸切り。内外面黒色処理。	①良好　②灰　③やや粗
266－4 78－4	灰釉陶器 椀	底部½	－×8.2 ×(2.6)	埋土	腰部丸味をもつ。高台外稜強く略三ケ月高台。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰　③密
266－5 78－5	須恵器 小瓶	½口頸 部欠損	－×3.4 ×(7.5)	埋土	胴部細長くふくらみをもつ。底部ベタ高台になるか。口頸部は長頸になる可能性あり。二次被熱あり。轆轤整形。	①良好　②灰黄　③密

ＦⅡ46号住居跡（Fig. 267・268、PL. 22・79）

Ｆ区南西部に位置し、63～65Ｆ７～９の範囲にある。上層面には浅間山降下火山灰のＢ軽石粒を主な埋土とする中世以降の Pit 群が検出されており、その掘形が当跡床面まで達している。また東側は削平が深く、東壁線は不明瞭で痕跡程度である。南側でＦ57号竪穴遺構と重複し、これより旧い時期の所産である。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈し、南北長3.5m・東西長2.8m・壁高13cmを測る。竈は東壁約65cm掘り込んで付設されるが位置を確認できる程度で詳細は不明である。西壁線に基づく東西軸方位はおよそＮ－90°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは良好である。貯蔵穴と考えられる Pit は南東隅にあり、径50cm・深さ20cmの円形を呈す。住居跡中央部には径１m・深さ30cmの円形土坑が検出されたが、埋土上層は堅く締まり床下土坑の可能性が強い。また南西部には掘形の明瞭な Pit が認められるが当跡に属するかは不明である。

出土遺物は須恵器杯・椀のほか土師器甕がある。



ＦⅡ312号土坑
1　褐色土　焼土粒・炭化粒を含む。
2　褐色土　粘土粒含む。
3　褐色土　Ｃ軽石少量含む。
4　焼土塊
5　灰・焼土混合層

ＦⅡ46号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石少量含む。
2　暗黄褐色土　焼土粒・Ｃ軽石を少量含む。
3　黒褐色土　Ｃ軽石を多量に含む。

ＦⅡ314号土坑
1　暗褐色土　Ｃ軽石・焼土粒含む。
2　暗褐色土　Ｃ軽石・焼土粒少量含み締まりなし。
3　暗褐色土　Loam 塊含み粘性あり。
4　暗褐色土

Fig. 267　ＦⅡ46号住居跡

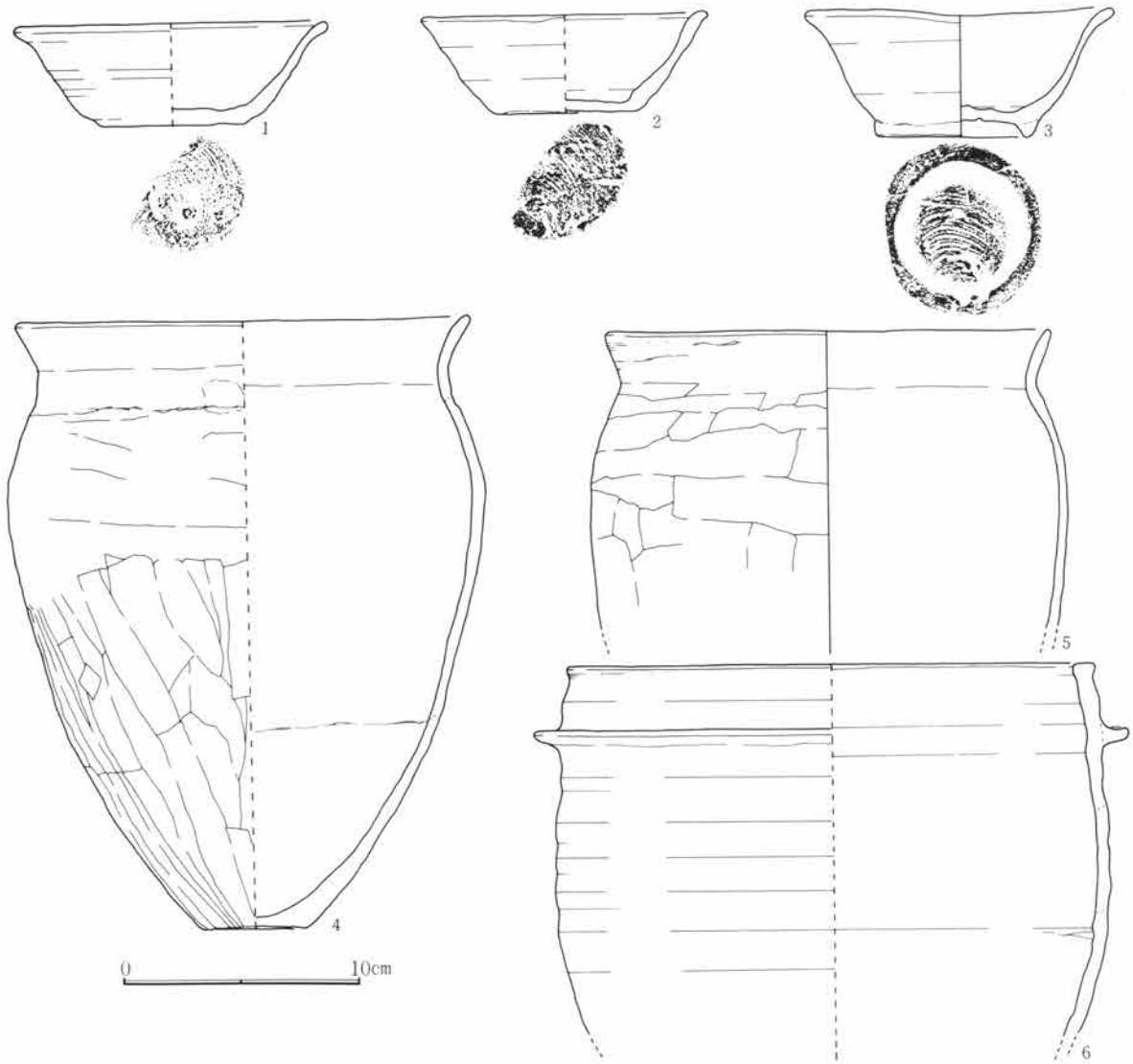
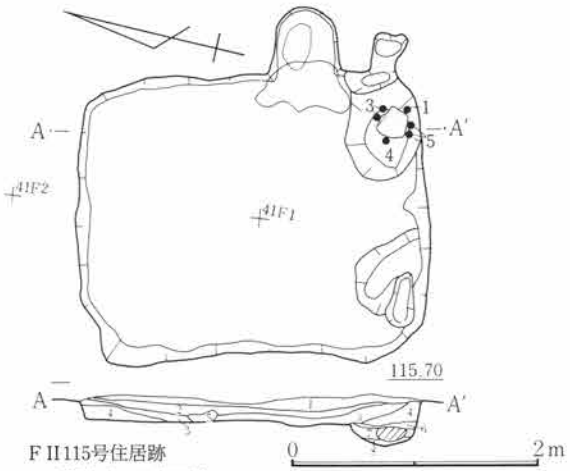


Fig. 268　F II46号住居跡出土遺物

F II46号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置 (cm)	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
268－1 79－1	須恵器 杯	⅓	13.0×6.0 ×4.2	埋土	腰部から体部下半丸味をもつ。上半は外反して開く。口唇部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い黄橙　③やや粗
268－2 79－2	須恵器 杯	⅓	11.9×6.2 ×4.1	埋土	体部直線的に開き、上半部・腰部やや肥厚する。轆轤整形右回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍い橙　③粗
268－3 79－3	須恵器 椀	ほぼ完形	12.8×6.7 ×5.2	埋土	腰部から体部丸く張り、上半部は大きく外反して開く。口唇部丸く肥厚。付高台。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
268－4 79－4	土師器 甕	⅓	19.0×4.4 ×24.9	埋土	最大径胴上位にあり、やや張る。口縁部緩く外反して開く。口縁部粗い横撫で。胴上位横・中下半縦箆削り。砂底。	①良好　②赤橙　③粗
268－5 79－5	土師器 甕	上半部 ⅔	18.4×－ ×(12.2)	埋土	胴部丸く張り最大径をもつ。口縁部くの字状に外傾。口縁部横撫で。胴上位横・中位から縦箆削り。内面横箆撫で。	①良好　②赤橙　③粗
268－6 79－6	羽釜	口～体 ⅕	22.0×－ ×(15.0)	埋土	胴部全体に弱い脹らみをもち寸胴を呈すか。口縁部内湾気味小さく内傾。鍔強く突出断面丸い。口縁部・胴回転調整	①良好　②灰　③やや粗



F II115号住居跡

1　暗褐色土　B軽石含む。
2　暗褐色土　C軽石少量含み締まりあり。
3　暗褐色土　C軽石少量含み締まりなし。
4　暗褐色土　C軽石微量含み締まりなし。
5　白色粘土塊
6　暗褐色土　C軽石含み締まりあり。
7　暗褐色土　C軽石少量含み粘性あり。
8　暗褐色土　粘性あり。

Fig. 269　F II115号住居跡

F II115号住居跡（Fig. 269・270、PL. 22・79）

F区の南東部に位置し、40・41F０・１の範囲にある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長2.85m・東西長2.25m・壁高約20cmを測り、比較的小規模な住居跡である。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はN—85°—Eを示す。床面は南側へ僅かに低くなるが全体に踏み締まりは良好である。

竈は東壁を約50cm掘り込んで構築されるが削平が著しく、袖部などの痕跡は認められなかった。また検出時には火床面に堆積する灰層が直に認められたが硬質赤化面は部分的に残存する程度である。燃焼部幅約50cmを測り、底面の掘形に住居跡床面とはほとんど高低の差はない。貯蔵穴は南東隅にあり、径80×60cm・深さ17cmで楕円形を呈する。

出土遺物は少量であるが大半は貯蔵穴内から検出されており、須恵器杯・灰釉陶器小瓶などのほか鉄釘がある。

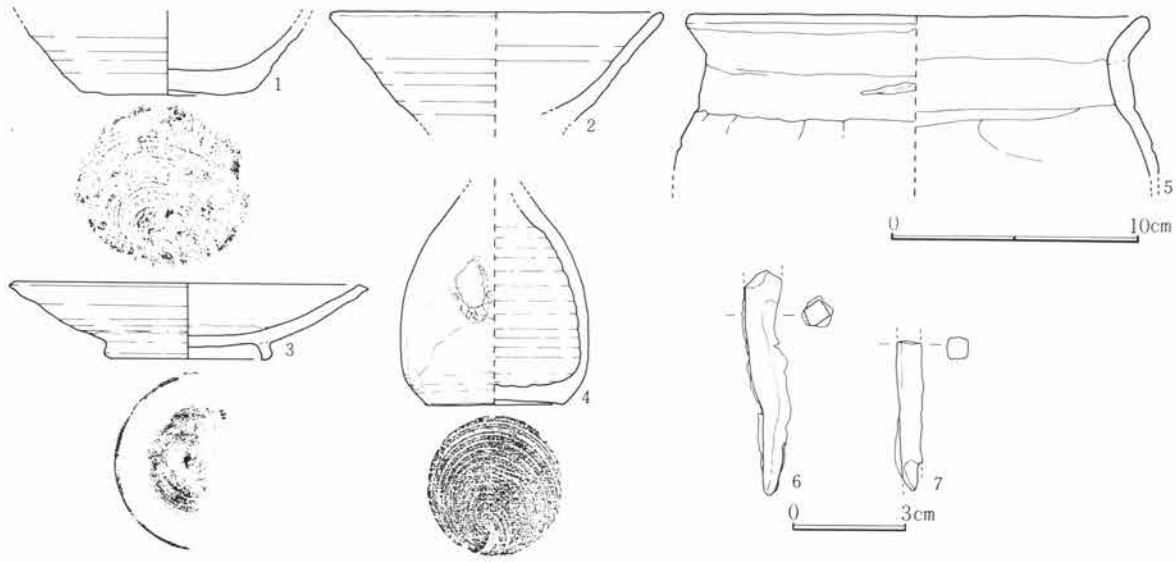


Fig. 270　F II115号住居跡出土遺物

F II115号住居跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
270—1 79—1	須恵器 杯	底部	—×7.0 ×(2.7)	貯蔵穴	腰部から底部著しく肥厚し腰部丸味をもつ。体部直線的で深いか。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
270—2 79—2	須恵器 椀　？	小片	13.3×— ×(4.4)	埋土	体部直線的に開く。底部は小径か。轆轤整形。内外面に黒色斑あり。	①酸化軟　②橙　③密
270—3 79—3	灰釉陶器 皿	½	14.4×6.7 ×3.0	貯蔵穴	体部僅かに丸味をもち、口唇部内面折れて先端部鋭る。高台外面稜不明瞭、内面強く内湾。底部撫で調整。腰部回転篦削り。内外面体部刷毛塗り施釉。内外面使用擦れ著しい光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰　③緻密

ＦⅡ115号住居跡出土遺物観察表（２）

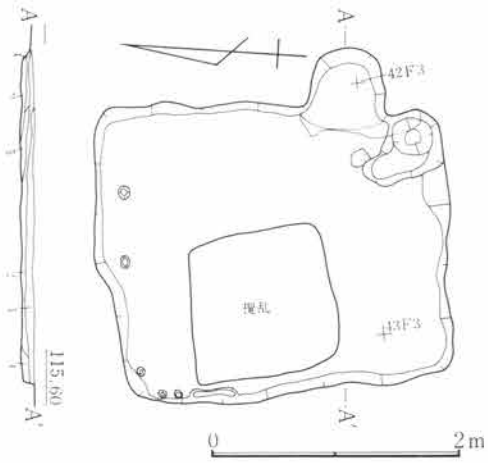
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
270－4 79－4	須恵器 小型壺？	⅔	－×5.5 ×(8.3)	貯蔵穴	最大径は胴部最下位にあり下脹れ。肩部張り少ない。腰部回転篦削り。底部右回転糸切り。内面轆轤目強い。底部光沢あり磨滅著しく、用途不明の転用。内面に黒色付着物。	①良好　②灰　③やや粗
270－5 79－5	土師器 甕	口縁部 ¼	18.2×－ ×(6.6)	埋土	肩部小さく張り、口縁部肥厚し直線的に内傾後上半は外屈するコの字口縁。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや粗
270－6 79－6	鉄製品 角釘	頭部欠損	長・幅・厚 (6.0)×0.8×0.5	埋土	角釘。	
270－7 79－7	鉄製品 角釘	身部片	長・幅・厚 (3.9)×0.6×0.6	埋土	角釘。	

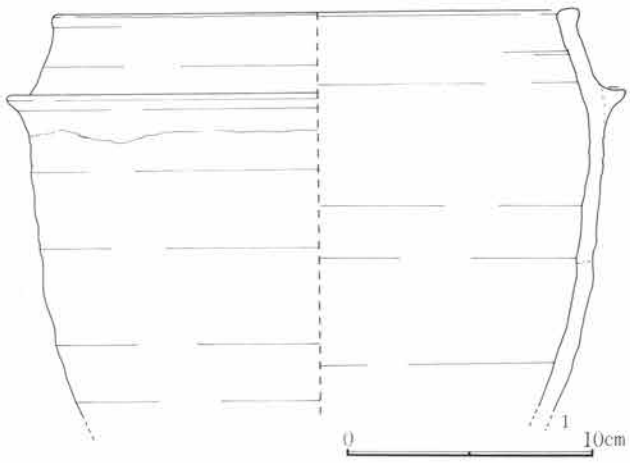
ＦⅡ116号住居跡（Fig. 271・272、PL. 22・79）

Ｆ区の南東部に位置し、41～43Ｆ２～４の範囲にある。住居内西側に攪乱土坑がある。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長2.85m・東西長2.45m・壁高約10cmを測る比較的小規模な住居跡である。竈は東壁の南に偏って付設され、主軸方位はＮ－95°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは弱いが安定している。

竈は東壁を40～50cm掘り込み構築されるが、袖部などは検出されていない。燃焼部幅65cmを測る。火床は僅かに窪み、かなり厚い硬質赤化面が形成されている。火床面直上には多量に黒灰が堆積しており、この一部は南東隅の貯蔵穴底面に流れ込んでいた。貯蔵穴は径45×55cm・深さ10cm程度の不整楕円形を呈する。

出土遺物は少なく羽釜片のほか、鉄製品がある。なお鉄製品は遺存状況が悪く、採取する際細片化してしまい形状その他は不明である。





ＦⅡ116号住居跡
1　褐色土　Ｃ軽石多量に含む。
2　褐色土　Ｃ軽石少量、Loam 小塊を含む。
3　暗褐色土
4　暗褐色土　焼土粒・黒灰を多量に含む。
5　焼土塊層（崩落）
6　焼土層（火床）

Fig. 271　ＦⅡ116号住居跡

Fig. 272　ＦⅡ116号住居跡出土遺物

ＦⅡ116号住居跡出土遺物観察表

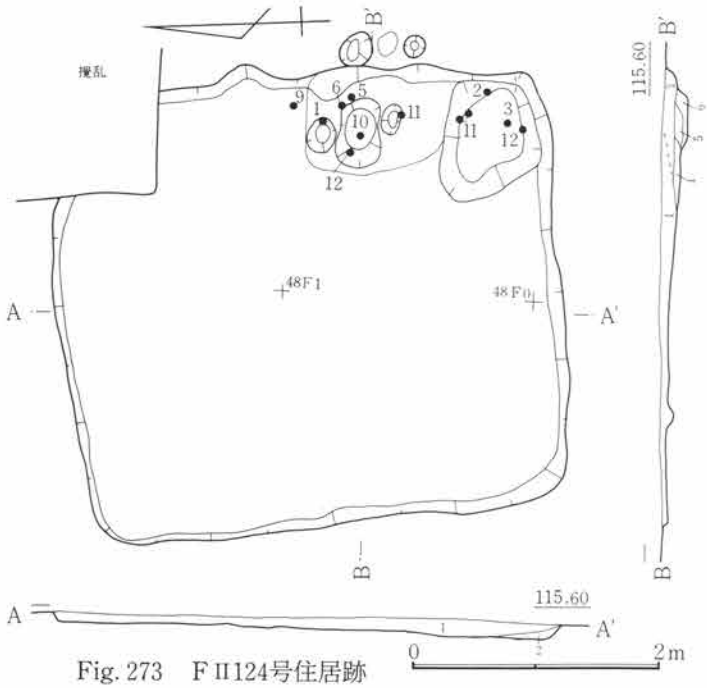
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
272－1 79－1	羽釜	底部欠損	21.0×－ ×(16.0)	床面	胴部緩く張り、口縁部内傾する。口唇部やや幅広になる。鍔部水平に突出し断面三角。回転整形、内面篦撫で。	①酸化気味　②鈍い橙　③やや粗

Ｆ Ⅱ124号住居跡（Fig. 273～275、PL. 22・79・80）

Ｆ区の南東部に位置するが南側は一部Ｅ区におよび、47・48Ｅ49～Ｆ１の範囲にある。北東の一部攪乱跡によって消失している。平面形は南北方向に長軸をもつ方形を呈し、南北長４m・東西長3.6mを測る。全体に削平が深く、壁高は良好な箇所で約10cmを測る。竈は東壁のやや南側に偏って付設されたと考えられるが東壁の掘り込みも削平によって消失している。東壁線に基づく東西軸方位はＮ―86°―Ｅを示す。

竈は前述したように形状など不明であるが、東壁線外に小範囲の赤化面が認められている。また東壁に接する床面には黒色灰が110×80cmの範囲に広がり、壁際は焼土粒・灰を混える埋土で僅かな窪みをなす。床面は緩い凹凸をなすが踏み締まりは比較的良好である。貯蔵穴は南東隅にあり、径85×100cm・深さ18cmの不整楕円形を呈す。

出土遺物は竈前面と考えられる東壁際の灰層上と貯蔵穴内より多く検出され、須恵器杯・椀・皿・土師器甕のほか土錘などがある。なお須恵器製品には遺存度の高いものが多い。



Ｆ Ⅱ124号住居跡
1　暗褐色土　Ｃ軽石多量に含む。
2　暗褐色土　Loam 粒少量含む。
3　暗褐色土　焼土粒多量に含む。
4　黒灰層
5　焼土・灰混合層
6　暗褐色土（掘形）焼土粒少量含み粘性あり。

Fig. 273　Ｆ Ⅱ124号住居跡

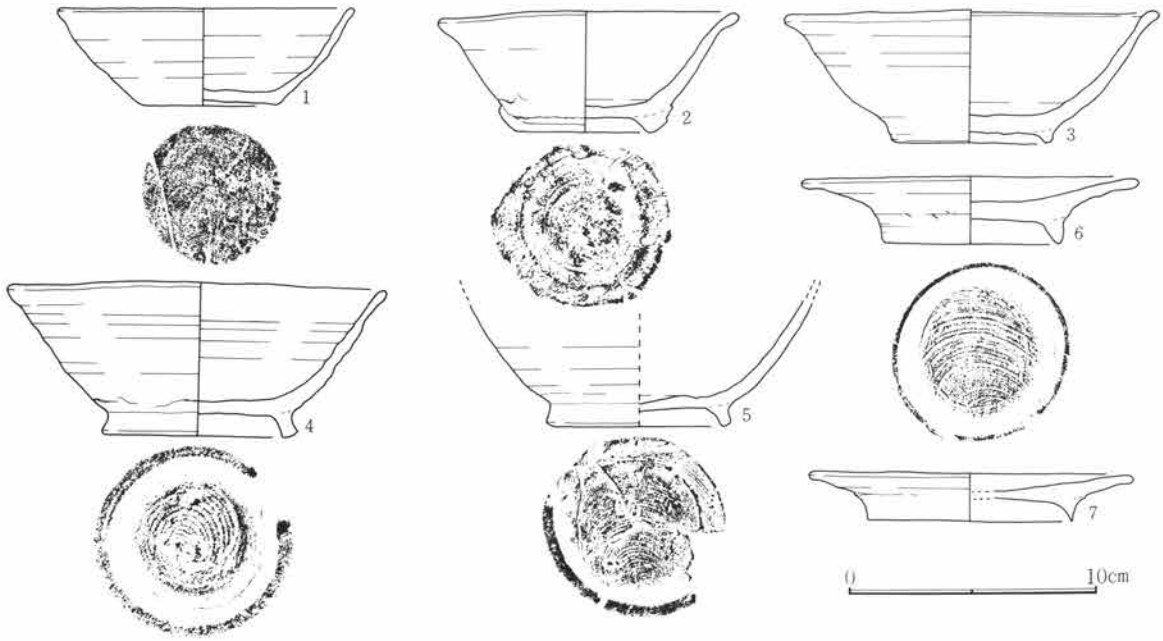


Fig. 274　Ｆ Ⅱ124号住居跡出土遺物（１）

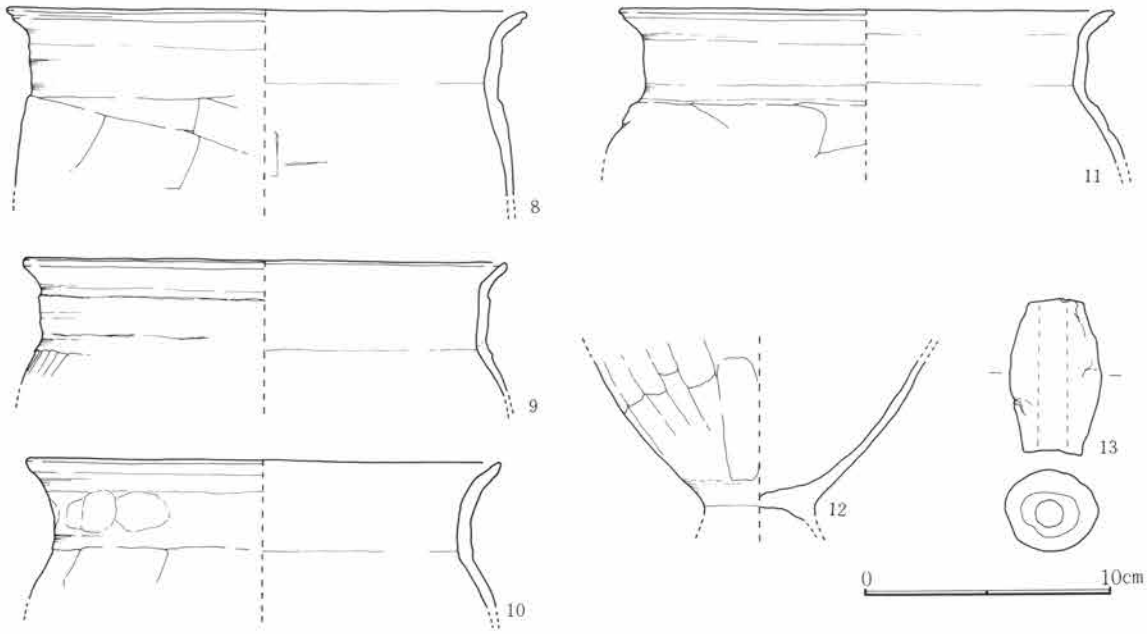


Fig. 275　F II124号住居跡出土遺物（２）

F II124号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
274－1 79－1	須恵器 杯	⅔	11.8×5.5 ×3.9	竈	体部中位で僅かに張る。器肉薄い。轆轤整形。回転糸切り。二次被熱。	①酸化やや軟　②淡橙　③やや密小石混
274－2 79－2	須恵器 椀	完形	12.0×6.6 ×4.8	貯蔵穴	体部中位僅かに丸味をもつ。上半はやや強めに外傾して開く。口唇部丸い。付高台幅広で作り雑。轆轤整形回転糸切	①良好　②灰　③やや粗砂粒多混
274－3 79－3	須恵器 椀	ほぼ完形	15.0×6.3 ×5.3	貯蔵穴	体部丸く張り気味。口唇部丸まり小さく外反。付高台低く断面矩形。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰～褐灰　③やや粗細砂混
274－4 79－4	須恵器 椀	⅔	15.1×7.8 ×6.1	埋土	腰部小さく張る。体部直線的で口縁部緩く外傾。付高台断面矩形を呈し強く張る。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②浅黄～灰褐　③やや粗
274－5 80－5	須恵器 椀	¼	×－7.4 ×(4.9)	竈	腰部に丸味をもつ。付高台断面矩形を呈す。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味やや軟　②淡橙～褐灰　③密
274－6 80－6	須恵器 皿	⅔	13.4×7.2 ×2.7	竈	体部大きく外反して開き、口縁部水平。付高台略三角で直に立つ。轆轤整形。右回転糸切り。底部円形に爪先痕あり。	①良好　②灰　③やや密
274－7 80－7	須恵器 皿	⅙小片	12.8×8.2 ×1.9	床下	体部水平に近く開く。付高台三角形を呈し直に立つ。端部鋭く尖がる。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白～灰　③やや密
275－8 80－8	土師器 甕	口縁部 小片	20.8×－ ×(7.2)	床下	肩に張なし。口縁部下位は直立し、上位で強く外屈するコの字口縁。口唇部外面に凹線巡る。口縁部横撫で。肩部横・斜篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②橙　③やや密
275－9 80－9	土師器 甕	口縁部 ¼	19.4×－ ×(5.0)	埋土	口縁部下位は直立し、上半は内湾気味に強く外屈するコの字口縁。口縁部横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③密
275－10 80－10	土師器 甕	口縁部 ⅓	19.0×－ ×(5.7)	竈	肩部やや丸味をもつ。口縁下位外反気味小さく外傾し、上位は内湾気味に外反するコの字口縁。口縁部横撫で。肩部横篦削り。内面横篦撫で。	①良好　②橙　③密
275－11 80－11	土師器 甕	口縁部 ⅓	19.8×－ ×(5.8)	貯蔵穴	肩部やや張る。口縁部下位は直立し上位は強く外反して開くコの字口縁。口唇部外面に凹線巡る。口縁部横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや密
275－12 80－12	土師器 台付甕	胴部下 半	－×－×(6.5) 高台基部径(4.4)	竈・貯蔵 穴	腰部直線的。胴部縦篦削り、基部横撫で。内面篦調整痕あり。	①良好　②赤橙　③やや粗
275－13 80－13	土製品 土錘	完形	長6.2径3.7 孔径1.1	埋土	大型土錘。手捏ね。重66.9g	①良好　②浅黄橙　③やや密

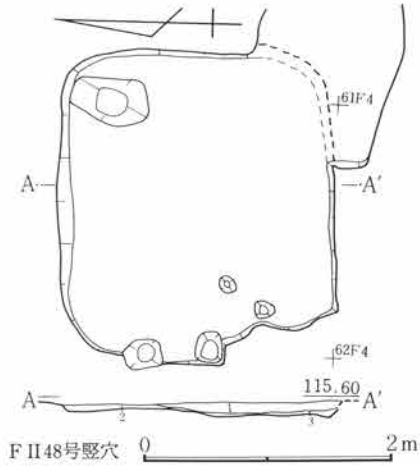
２．竪穴状遺構

竪穴状遺構は、性格不明でかなり曖昧な遺構である。通常、考古学上にいう各時代通じて、竈・炉跡等の生活施設が欠如しており、竪穴住居跡として認定しがたい遺構に対して名付けられているようである。このような認識が現状であるとすれば、一般に土坑と呼ばれる遺構、とくに大型土坑との識別はかなり困難である。本報告になる竪穴状遺構は以下に掲載する４基であるが、土坑等との区別はなく条件規定などまったく考慮していないことをお断わりしておく。ただ今後の可能性として、掲げた４基のうちＦⅡ56号・ＦⅡ57号竪穴は立体的構造物を想定できる Pit 施設をもつ遺構であり、形態上の規定がなされようか。

ＦⅡ47号竪穴（Fig. 272・279、PL. 22・80）

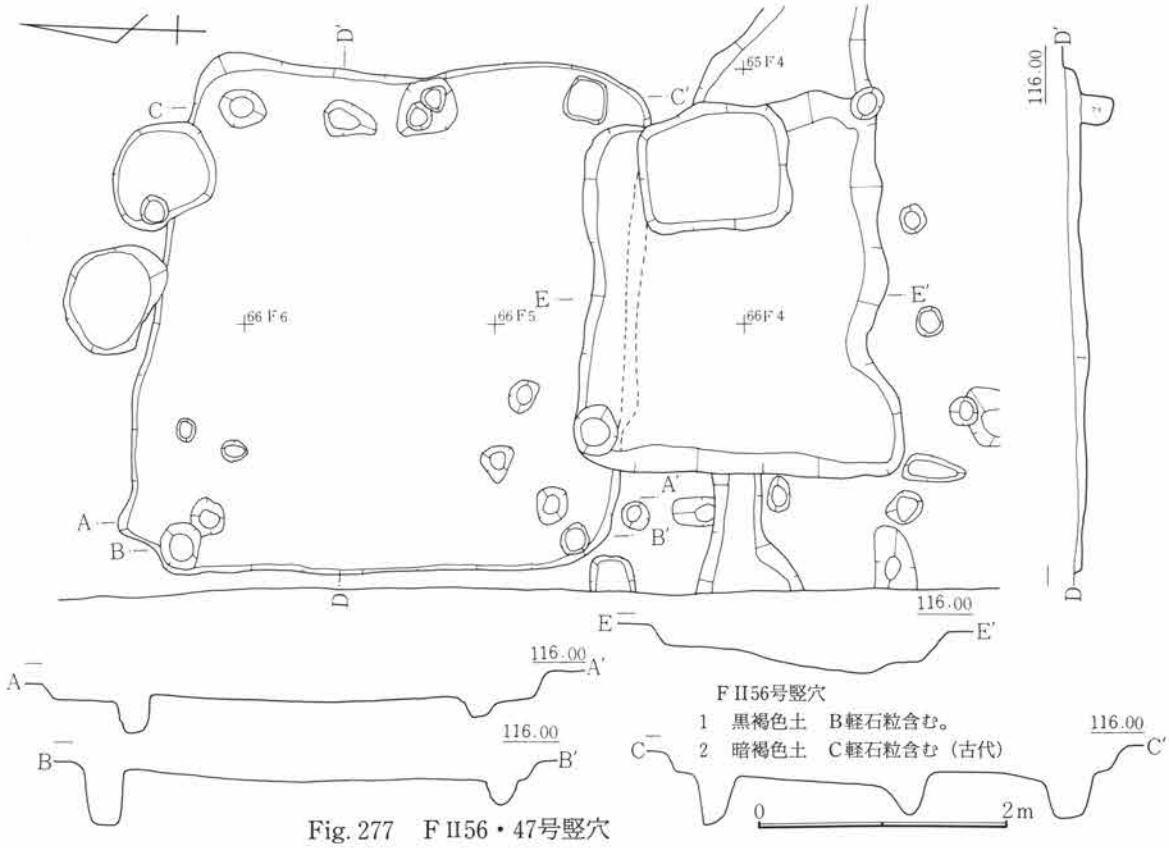
Ｆ区南西部に位置し、65・66Ｆ３・４の範囲にある。検出面は浅間山降下、Ｂ軽石粒層直下にあり、埋土はＢ軽石粒層を主体とする。重複は著しく、ＦⅡ56号竪穴、ＦⅡ13号墓、ＦⅡ６号掘立柱建物跡などと切り合い関係にある。新旧は13号墓より旧いが他とは不明である。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが東壁はやや歪む。壁線は不規則に波うち、とくに南壁線の乱れが著しい。東西長2.9m・南北長2.65m・壁高約15cmを測る。西壁線に基づく東西軸方位はおよそＮ―90°―Ｅを示す。床面はやや不安定で南に向かい大きく窪む。当跡に付随する Pit などの施設は全く検出されていない。

出土遺物は鉄釘１点のみである。



ＦⅡ48号竪穴
1　暗褐色土
2　暗褐色土　Ｃ軽石含む。
3　黒褐色土　粘質土

Fig. 276　ＦⅡ48号竪穴



ＦⅡ56号竪穴
1　黒褐色土　Ｂ軽石粒含む。
2　暗褐色土　Ｃ軽石粒含む（古代）

Fig. 277　ＦⅡ56・47号竪穴

ＦⅡ48号竪穴（Fig. 276、PL. 22）

Ｆ区の南西部に位置し、60・61Ｆ４・５の範囲にある。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒層を主体とする。平面形は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが、南西隅は鉤の手状に折れる。東西長2.5m・南北長2.2m・壁高約10cmを測る。東西軸方位はおよそＮ―90°―Ｅを示す。床面の踏み締まりは弱く、南半部がやや低くなる。炉など生活跡を想定できる施設はない。北東隅には40×65cm・深さ10cmの楕円形土坑が検出されている。また西壁に接して径20cm程度の Pit ２個が認められたが両者は深さに著しく差があり関連するものとは考えられない。

出土遺物は検出されていない。

ＦⅡ56号竪穴（Fig. 277・279、PL. 22・80）

Ｆ区の南西部に位置し、65・66Ｆ４～６の範囲にある。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。重複はＦⅡ47号竪穴、ＦⅡ13号墓、ＦⅡ６号掘立柱建物跡などと切合い関係にある。新旧関係はＦⅡ13号墓より旧い時期であるが他の遺構とは不明である。平面形は方形を呈するが東西・南北長とも同規模で約４m・壁高10cmを測る。東壁線に基づくが東西軸方位はおよそＮ―90°―Ｅを示す。床面は緩い起伏をもつ程度であるが踏み締まりは弱い。四隅には柱穴と考えられる Pit が検出されている。北西と南西隅部にはやや内側で相対する位置に Pit が存在しているが、これらが同時に機能していたかは不明である。また東壁沿いに北東・南東隅の Pit のほぼ中間位置に Pit が認められ、両者を結ぶ線上に一致することから一連のものと考えられる。Pit は径30～25cm・深さ44～12cmの規模をもつ。なお炉跡等の施設は検出されていない。

出土遺物は少なく、楔状鉄製品がある。

ＦⅡ57号竪穴（Fig. 278・279、PL. 22・80）

Ｆ区南西部に位置し、63・64Ｆ６～８の範囲にある。竪穴内の中央部やや南西寄りにＦⅡ18号井戸跡が検出され、当跡はこれに掛かる上屋としての機能が想定されたが、土層観察によって井戸跡は当跡の埋土を掘り込んで構築されていることが確認された。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体としている。

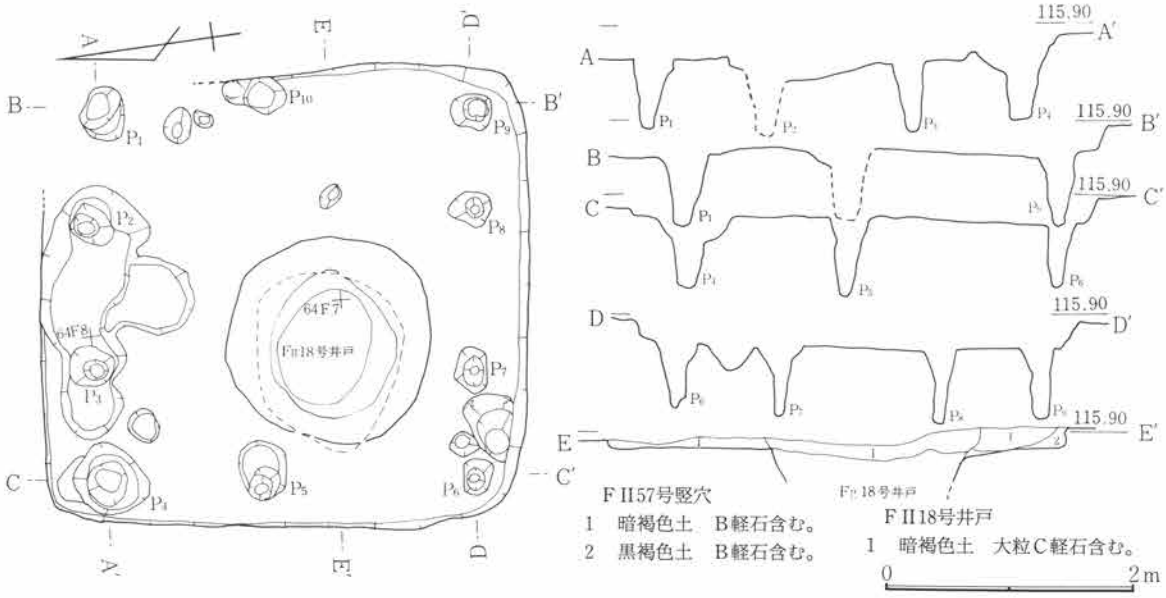


Fig. 278　ＦⅡ57号竪穴

平面形は整った方形を呈するが南北軸が僅かに長く、南北長4.9m・東西長3.65mの規模をもち壁高は約15cmを測る。東西軸方位はN－98°－Eを示す。四辺壁沿いには P_1 から P_{10} の柱穴と考えられる Pit が検出されている。南・北壁辺は柱間３間、東・西壁辺の柱間は２間で各々相対する壁辺は同一の柱間となっている。南・北壁辺の P_1～P_4・P_6～P_9 の柱間で P_1・P_2 と P_3・P_4 は0.9m、P_6・P_7 と P_8・P_9 は0.8mの間隔をもつ。そして P_2・P_3 は1.15m、P_7・P_8 は1.3mとなり、両壁辺とも中央柱間が大きい。また東・西壁辺では P_1・P_{10} が1.3m、P_9・P_{10} が1.7m、P_4・P_5 が1.25m、P_5・P_6 が1.7mの間隔となり、いずれも南寄りの柱間が大きくなっている。各々の柱穴は上面の大きく開く漏斗状の掘形をもつものもあるが径30～45cm・深さ50～55cmの規模をもつ。なお炉跡などの施設は検出されていない。

出土遺物は少なく、須恵器小杯がある。

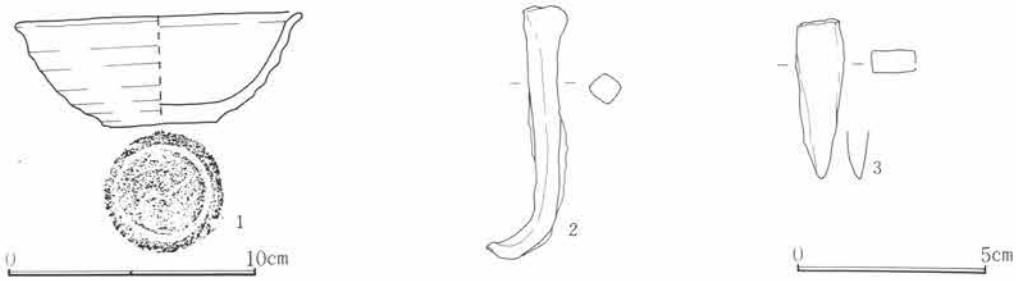


Fig. 279　ＦⅡ区竪穴状遺構出土遺物（57号（１）・47号（２）・56号（３））

ＦⅡ57・47・56号竪穴遺構出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	出土位置 （cm）	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
279－１ 80－１	須恵器 小杯	⅓	11.3×4.7 ×4.2	埋土	底部極めて小径。体部丸味をもち深身。上半は強く外反して開く。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味良好　②鈍橙　③やや密
279－２ 80－２	製器 角釘	完形	長6.5幅0.6	埋土	頂部角頭式角釘。先端部U字状に曲がる。	
279－３ 80－３	鉄製品 不明		長・幅・厚 4.2×1.2×0.6	埋土	片端部薄く刃部をなす楔状鉄製品。	

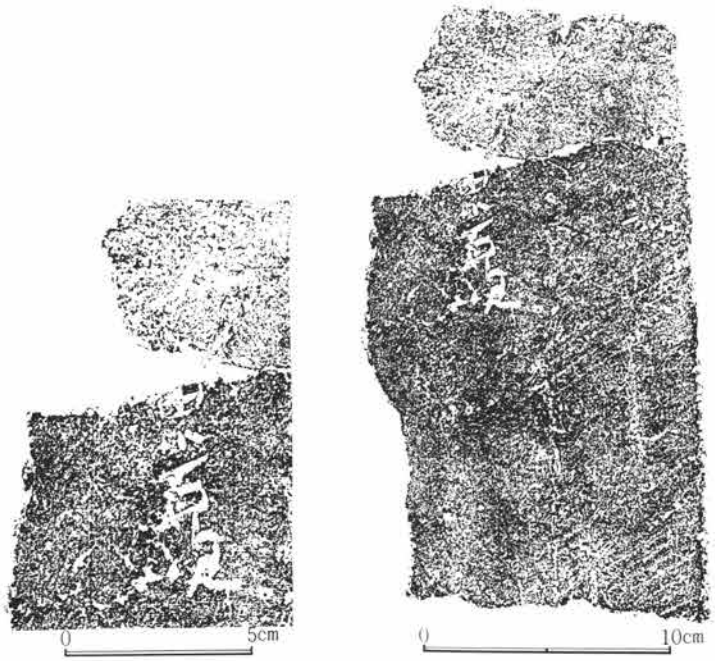


Fig. 280　Ｂ41号住居跡出土遺物

第２節　その他の遺構

当節で扱うその他の遺構とは、鳥羽遺跡で検出された竪穴住居跡を除く全ての遺構を示す。主な物には掘立柱建物跡・井戸跡・墓跡・溝跡・道路状遺構・館跡・鋳造跡およびその関連遺構・生産跡（水田跡・さく状遺構）・土坑などが相当する。なお、溝跡や土坑・pit 群などについての記述は比較的大規模なものや完形度の高い遺物が伴ったり、特殊な遺物が検出された遺構に限り、他は全体図に掲載するに留める。

１．掘立柱建物跡（Fig.282～294・PL. 23・24）

鳥羽遺跡で検出された掘立柱建物跡は23棟であり、遺跡全体の調査面積の広さや、807棟を数える竪穴住居跡の多さからすればその比率は極めて低い。23棟の掘立柱建物跡の時期的な内分けは古代期13棟、中世期８棟、時期不明２棟である一般に畿内と比較して東国における掘立柱建物跡の展開は著しく劣っているとは言え近年では竪穴住居跡に対する比率が50％を超える県内の遺跡も知られており、集落構造上掘立柱建物跡の存在は大きな役割をもっているようである。しかし当遺跡については竪穴住居跡に対する古代期掘立柱建物跡の比率は僅か0.016％にすぎず、集落構成上で掘立柱建物跡の棟数はほとんどその役割を負っていないようである。このことは、鳥羽遺跡が居住空間とし未発達な遺跡であったためとは考えられず、遺跡周辺の歴史的環境に深く関わる現象であろう。むしろ掘立柱建物跡の希薄さを、集落の性格・成立過程・構造の一端を暗示するものとして積極的にとらえたい。

当報告になるＡ～Ｆ区の掘立柱建物跡は13棟でうち古代期の建物跡は７棟、中世期は６棟でうち２棟は館跡に付随する建物跡である。分布的にはＦ区に最も集中して存在しているが、北に続くＧ区にも集中化傾向が窺われ、一連の分布域とも考えられる。建物跡の構造は中世期に属するＢ１号掘立柱建物跡が唯一総柱形態をもつほかは全て側柱形式である。また庇付と考えられる建物跡ではＥ５号・Ｅ10号掘立柱建物跡がある。

各区で検出された建物跡はＢ区１棟・Ｄ区２棟・Ｅ区４棟・Ｆ区４棟である。

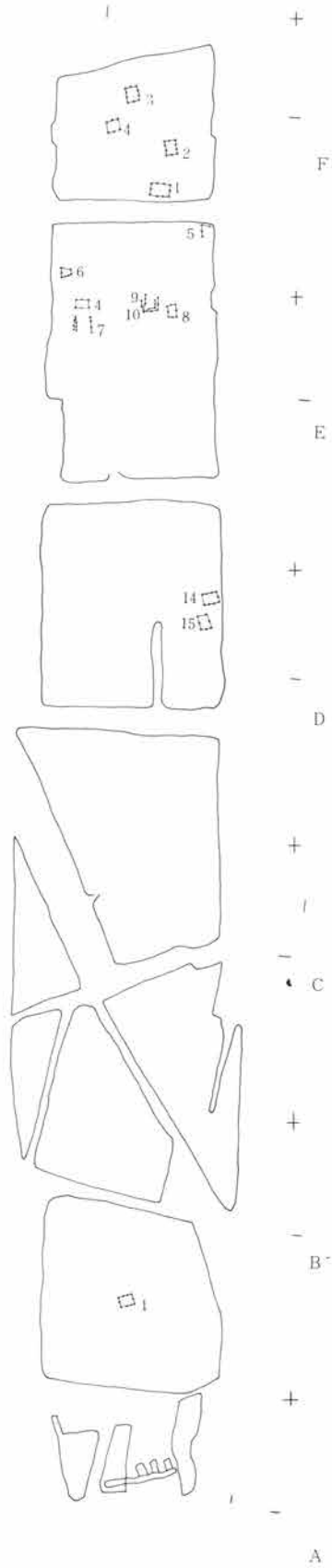


Fig. 281　掘立柱建物跡分布図

Ｂ１号掘立柱建物跡

Ｂ区のほぼ中央に位置し、46～50Ｂ14～17の範囲にある。東西棟建物で３間×２間の総柱である。柱間距離はやや不揃いで歪んだ方形を呈する。桁行中央の柱筋（P_5～P_8）に基づく主軸方位はＮ－70°－Ｅを示す。柱間寸法は桁行比例（P_1～P_4）が2.25m－2.7m－1.5m・中央列（P_5～P_8）は2.2m－2.8m－2.0m・南列（P_9～P_{12}）は2.4m－2.6m－2.3m・梁行西列（P_1～P_9）は1.6m－1.95m・西中央列（P_2～P_{10}）が1.85m－1.9m・東中央列（P_3～P_{11}）は各々1.9m・東列（P_4～P_{12}）は2.2m－1.9mを測る。なお梁行東列の P_{12}南延長上2.6mを隔てて P_{13}が検出され

ているが当建物跡に属するかは不明である。

柱穴は掘形は略方形のものが多く、深さも30～35cmを有し概ねそろう。ただ梁行東列（P_4～P_{12}）は他と比べ掘形が10～20cmと浅い。この梁行東列は他の柱列の中で歪みが大きく、さきの掘形の浅さなど考慮すれば西側２間×２間の主屋に付く廂の可能性が高い。柱穴の埋土は浅間山降下のＢ軽石粒混土層であり、中世以降の所産であろう。

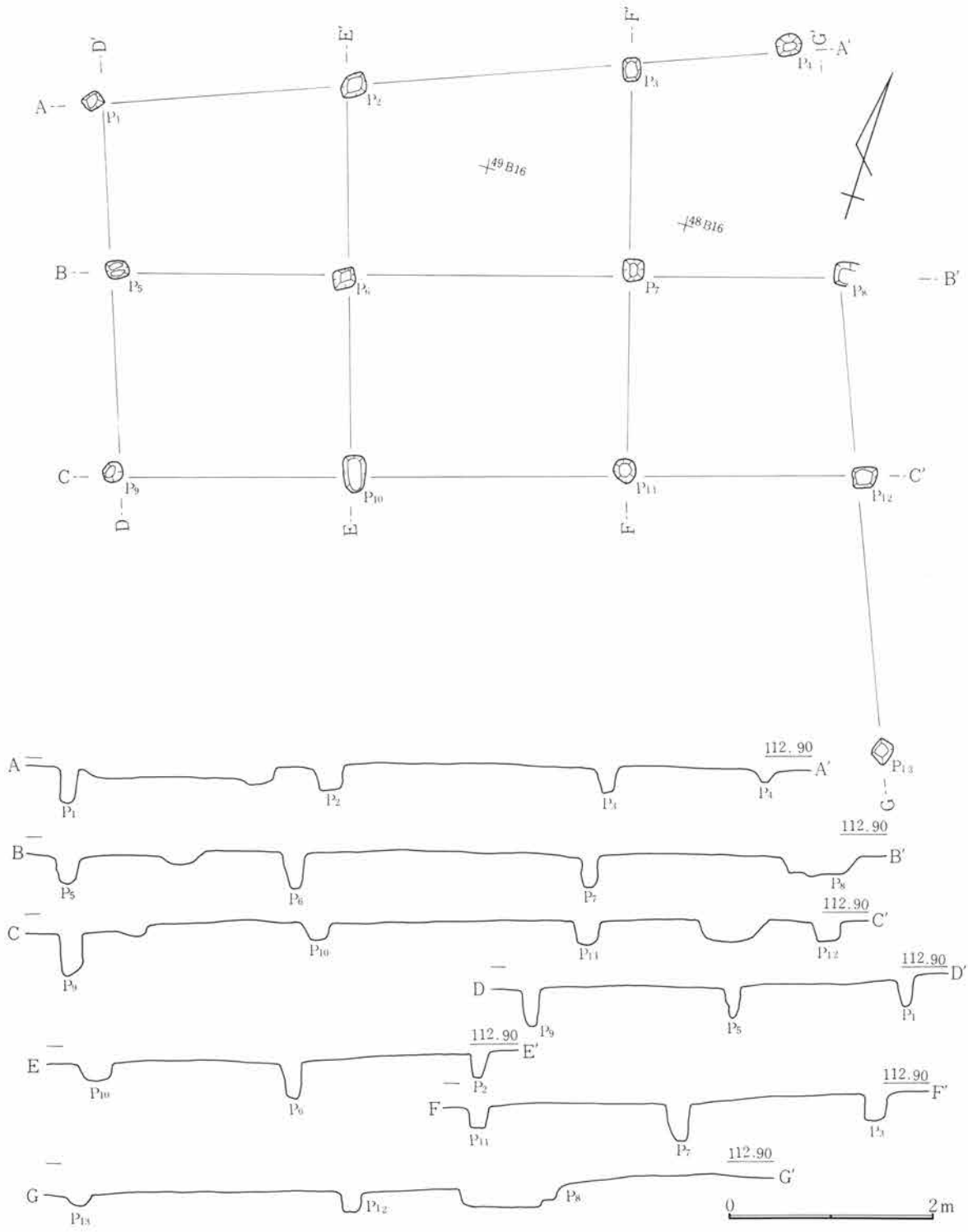
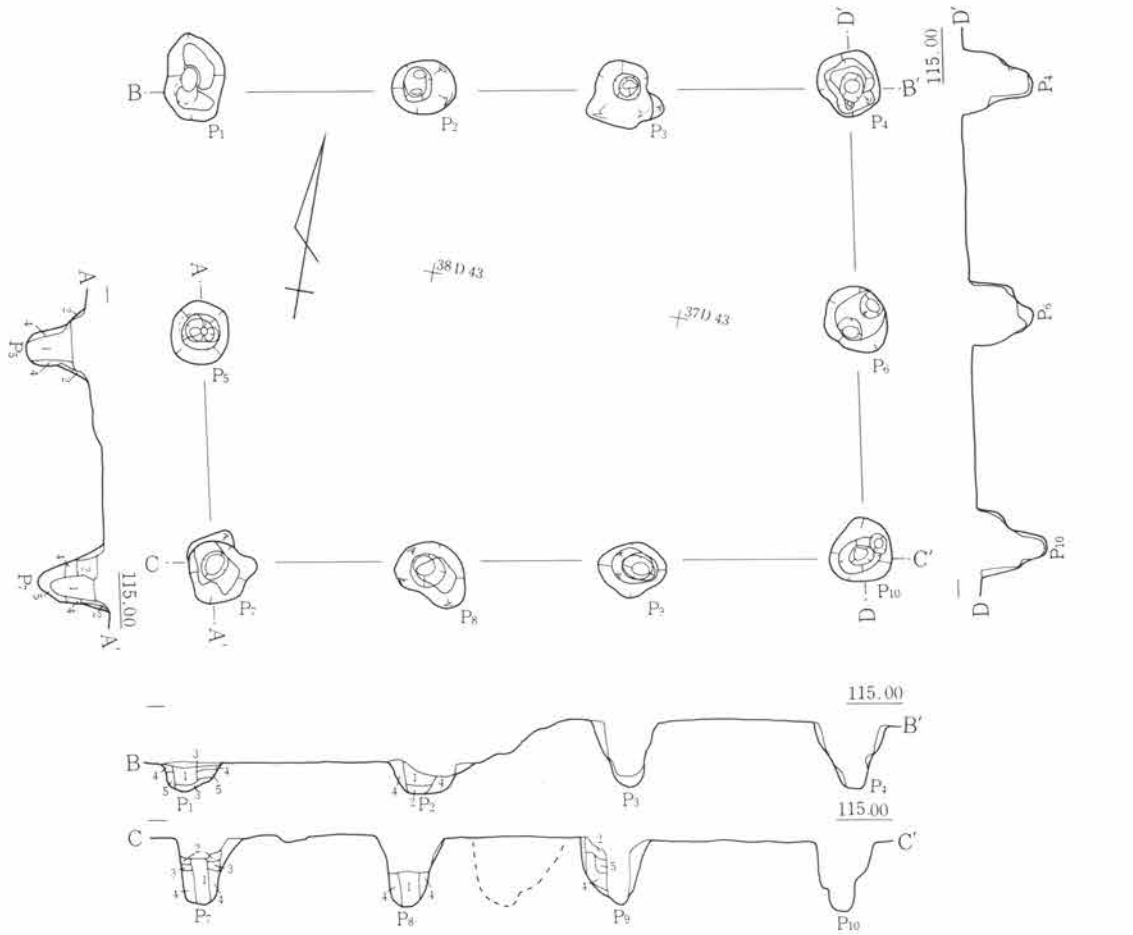


Fig. 282　Ｂ１号掘立柱建物跡

Ｄ14号掘立柱建物跡

Ｄ区の北東部に位置し、36～39Ｄ41～44の範囲にある。北西部でＤ53号住居跡と重複するがこれより旧時期の所産と考えられる。東西棟建物で３間×２間（5.25m×3.7m）の規模をもつ。柱間寸法は桁行（P_1～P_4・P_7～P_{10}）が1.7m、梁行（P_1・P_5・P_7・P_4・P_6・P_7）が1.8mのほぼ等間隔である。主軸方位はＮ－80°－Ｅを示す。

柱穴の掘形は上半を径50cmで掘り込を下半を窄める漏斗状のものが多く、深さは約55cmでほぼ一定している。断割による土層観察で柱痕を確認できた柱穴では柱痕径15～20cmを測り、柱材設置後粘性黒褐色地ないしは Loam 塊混り黒色土を充塡し埋土とする。出土遺物な無く、時期は不明であるが、Ｄ53号住居跡とその重複などから奈良時代後半から平安時代初期にかけての所産であろう。



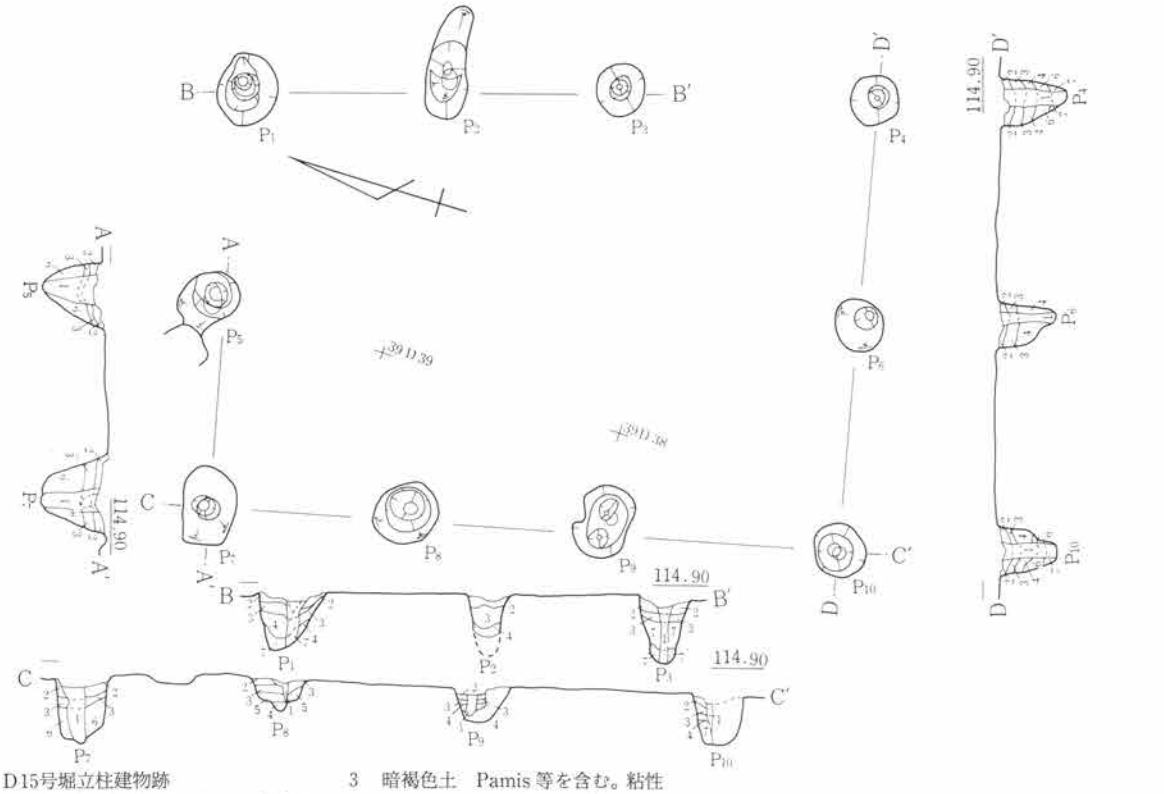
Ｄ14号掘立柱建物跡
1　暗褐色土　黒色土＋ Loon 漸移層土。粘性ややあり
2　茶褐色土　C-Pamis を含む。Loom 漸移層土。粘性を欠くがよく締まる
3　明褐色土　上部シルト質土（白色）＋ Loom ＋ Loam 漸移層。粘性やや弱いがよく締まる
4　暗褐色土　Loam が主体であり、粘性特によく締まる
5　暗褐色土　C・Pamis を含み、粘性弱くよく締まる

Fig. 283　Ｄ14号掘立柱建物跡

Ｄ15号掘立柱建物跡

Ｄ区北東部に位置し、37～39Ｄ36～39の範囲にある。南北棟建物で３間×２間（５ｍ×3.5m）の規模をもち主軸方位はＮ－17°－Ｗを示す。桁行東列 P_1～P_4柱筋は P_1が若干内側に位置し形状が歪む。柱間寸法は桁行 P_1～P_4が1.65m－1.35m－2.0m。P_7～P_{10}が1.6m－1.55m－1.9m。梁行 P_1・P_5・P_7は1.7m－1.65m。P_4・P_6・P_{10}が1.7m－1.85mを測る。

柱穴掘形は平面円形を呈し、上面径40～60cmの大きさで先細り形状が多い。深さは45～50cmを測るが、桁行西列の中央柱穴 P_8と P_9は他より浅く30～35cmである。柱穴断面では径15cm程度の柱痕が確認され、柱材設置後粘性の強い黒色土を充填し埋土とする。出土遺物はなく時期不明であるが柱痕埋土からＤ14号掘立柱建物跡と大きな時期差はないと考えられる。



D15号堀立柱建物跡
1　暗褐色土　若干の Pamis を含む粘性やや弱くよく締まる。
2　茶褐色土　Pamis 等を含む。粘性やや弱くよく締まる。
3　暗褐色土　Pamis 等を含む。粘性やや強くよく締まる。
4　黒色土　多くの Pamis(c か？)を含む。粘性強くよく締まる。
5　黒色土　Loam 細粒を含む。

Fig. 284　Ｄ15号掘立柱建物跡

Ｅ４号掘立柱建物跡

Ｅ区の北西部に位置し、61～64Ｅ47～49の範囲にある。僅かに南北が長い２間×２間（4.1m×3.7m）の規模を有するが、南東隅の柱穴は検出されていない。近接するＥ17号井戸跡の縁辺にあたっており、消失したことも考えられる。主柱穴は P_1～P_{11}がこれに相当すると考えられるが、北列の P_2と西列の P_7は柱筋に乗らない。また各柱間は著しく統一性に欠け、主柱の認定にやや疑問の残るものもある。さらに中央部に P_{12}が検出されており、構造的には総柱建物跡の可能性が強い。柱間寸法は西列（P_1・P_4・P_6・P_7・P_{10}）が1.1m－1.1m－1.0m－1.0m。東列（P_3・P_5・P_8・P_9）は0.6m－1.9m－0.45m。北列（P_1・P_2・P_3）は2.0m－1.7m。南列（P_{10}・P_{11}）は1.8mである。P_{12}は各柱筋より1.8～2.1mの間に位置しており、ほぼ中央柱となっている。当建物跡柱列の外縁には各々１～３個所に柱列が検出されており、付属施設あるいは掘立柱建物跡の

重複も考えられる。

柱穴掘形は比較的小規模で径15cm前後のものが多い。柱穴の深さは20cm前後がほとんどであるが、P_6は最も深く約50cmを有する。柱穴埋土は浅間山降下のＢ軽石粒を含む暗褐色土を主体とし、柱材設置に伴う充填埋土は明瞭には認められていない。中世以降の所産と考えられる。

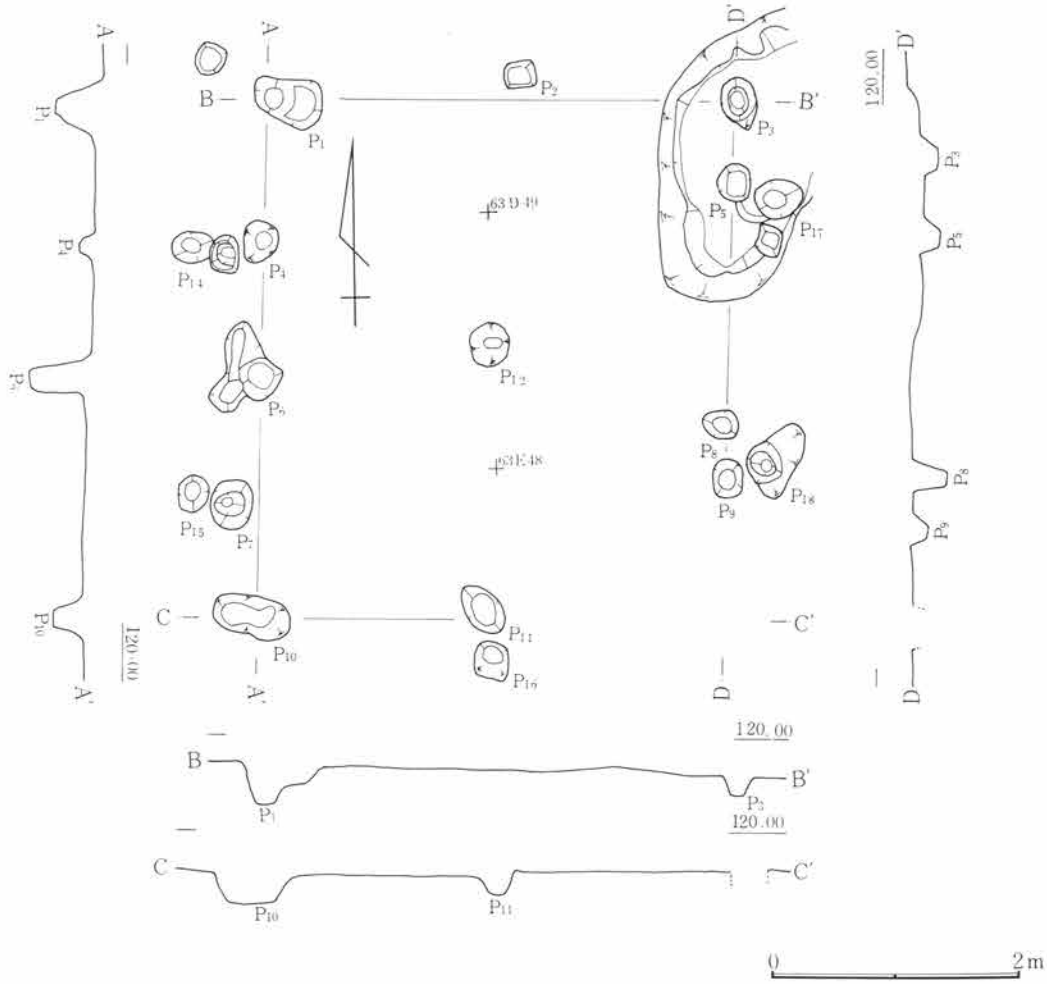
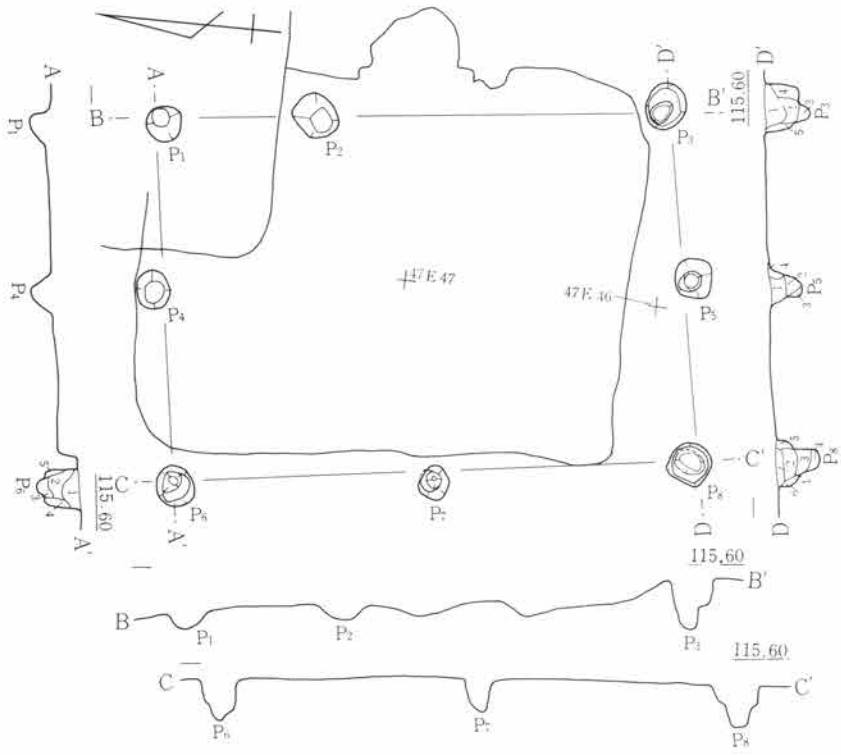


Fig. 285　Ｅ４号掘立柱建物跡

Ｅ８号掘立柱建物跡

Ｅ区の北東部に位置し、46・47Ｅ45～48の範囲にある。Ｅ119号・Ｅ120号住居跡と重複するが、これらより新しい時期の所産と考えられる。南東棟建物で２間×２間（4.1m×2.8m）の規模をもつ。桁行東列の柱間P_1とP_2の距離が狭くP_2とP_3間で南側に大きな間口をとる。柱間寸法は桁行東列（P_1・P_2・P_3）が1.8m—2.7m、西列（P_6・P_7・P_8）が2.1mの等間である。梁行北列（P_1・P_4・P_6）は1.35m—1.5m、南列（P_3・P_5・P_8）が1.35m—1.4mの柱間寸法である。主軸方位はN—８°—Wを示す。

柱穴掘形は平面・深さとも比較的小型で、上面径30～35cm・深さ25～30cmを測る。断面形は一部に漏斗状を有するものがあり、柱痕径は15cm程度である。掘形に充填される土質は粘性の強い暗褐色土を用いる。埋土は浅間山降下Ｃ軽石粒混りの暗褐色土が主体である。 出土遺物は検出されず時期は不明であるが、重複する住居跡との新旧関係や埋土の状況から平安時代後半期の所産と考えられる。



E８号掘立柱建物跡

P_6
1　暗褐色土　C軽石を含みサラサラ。
2　暗褐色土　C軽石を含み、やや暗い。
3　暗褐色土　C軽石を含まずやや粘質。
4　暗褐色土　粘質強い。
5　暗褐色土　４層に類似。

P_8
1　暗褐色土　C軽石を含む。
2　暗褐色土　１層に類似。やや暗い。
3　C軽石を若干含み、やや粘質。
4　３層に類似するが、C軽石を含まず。
5　褐色土　堅く締まる。
6　暗褐色土　粘質。

P_5
1　暗褐色土　C軽石、黄色土塊を含む。
2　暗褐色土　１層よりも混入物多い。
3　暗褐色土　混入物なし。やや粘質。
4　褐色土　堅く締まる。

P_3　1　暗褐色土　C軽石、黄色土塊を含む。
2　暗褐色土　１層より混入物少ない。
3　暗褐色土　混入物なし。粘質。
4　暗褐色土　２層に類似するが粘質。
5　暗褐色土　粘性強い。

0　2m

Fig. 286　E８号掘立柱建物跡

E９号掘立柱建物跡

E区の北部に位置し、49～51E47～49の範囲にある。E10号掘立柱建物跡の外側にありこれと重複する状態であるが、新旧関係は不明である。南北棟建物で３間×２間の柱間をもつが、桁・梁行がともに4.6mの同規模の正方形を呈すと考えられる。しかし、南東角の柱穴が検出されないことと、北東角の柱穴がやや不明瞭な落ち込みとなっており、建物跡として若干疑問の残る遺構である。主軸方位はN－１°－Eを示す。柱間寸法は南北桁行の西列（P_1・P_4・P_6・P_8）が1.2m－1.9m－1.35mで P_4と P_6の中間部の間口が大きい。東列（P_3・P_5・P_7・推定南東角）が1.2m－2.0m－1.35mで西列と同じく中間間口が大きくなっている。梁行の北列（P_1・P_2・P_3）は2.5m－2.0mを測るが P_2は P_1と P_3の柱筋から外側へ僅かにはずれている。南列（P_8・P_9・推定南東角）は2.1m－2.35mである。

柱穴掘形は比較的小さく径25～30cm・深さ25cm程度のものが多い。埋土は浅間山降下B軽石粒を含む暗褐色土が主体である。

出土遺物はなく時期は不明であるが埋土の状況から中世以降の所産と考えられる。

E10号掘立柱建物跡

E区の北部に位置し、49～51E47～49の範囲にある。E９号掘立柱建物跡の内側に検出され、これより小規模で軸線が僅かに異なずが相似形に近い。南北棟建物と考えられるが２間×２間の柱間をもち、桁行3.95m、桁行3.7mの規模をもつ。主軸方位はN－２°－Eを示す。柱間寸法は南北桁行の西列（P_1・P_4・P_6・P_7）・東列（P_3・P_5・P_8）がともに2.0m－1.9m。梁行の北列（P_1・P_2・P_3）は2.0m－1.7mで P_1と P_3を結ぶ柱筋から P_2が僅かに外側に位置する。南列（P_6・P_7・P_8）は1.7m－2.0mを測り、梁行南北列の柱間は対角に同寸法である。中央部に P_9が検出され総柱建物跡の可能性がある。この P_9はE９号掘立建柱建物跡にも対

応するが、梁行柱筋の位置からはＥ10号に伴うほうが妥当性があろう。また梁行北列 P_1・P_3の延長上約60cmの位置に P_{10}・P_{11}があり庇に相当しようか。

柱穴掘形は規模にやや差があり径25～50cm・深さ20～50cmを測る。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を含む暗褐色土が主体である。

出土遺物はなく時期は不明であるが、柱穴埋土にＢ軽石粒が含まれることから中世以降の所産と考えられＥ９号掘立柱建物跡と時期的に差がない項であろう。

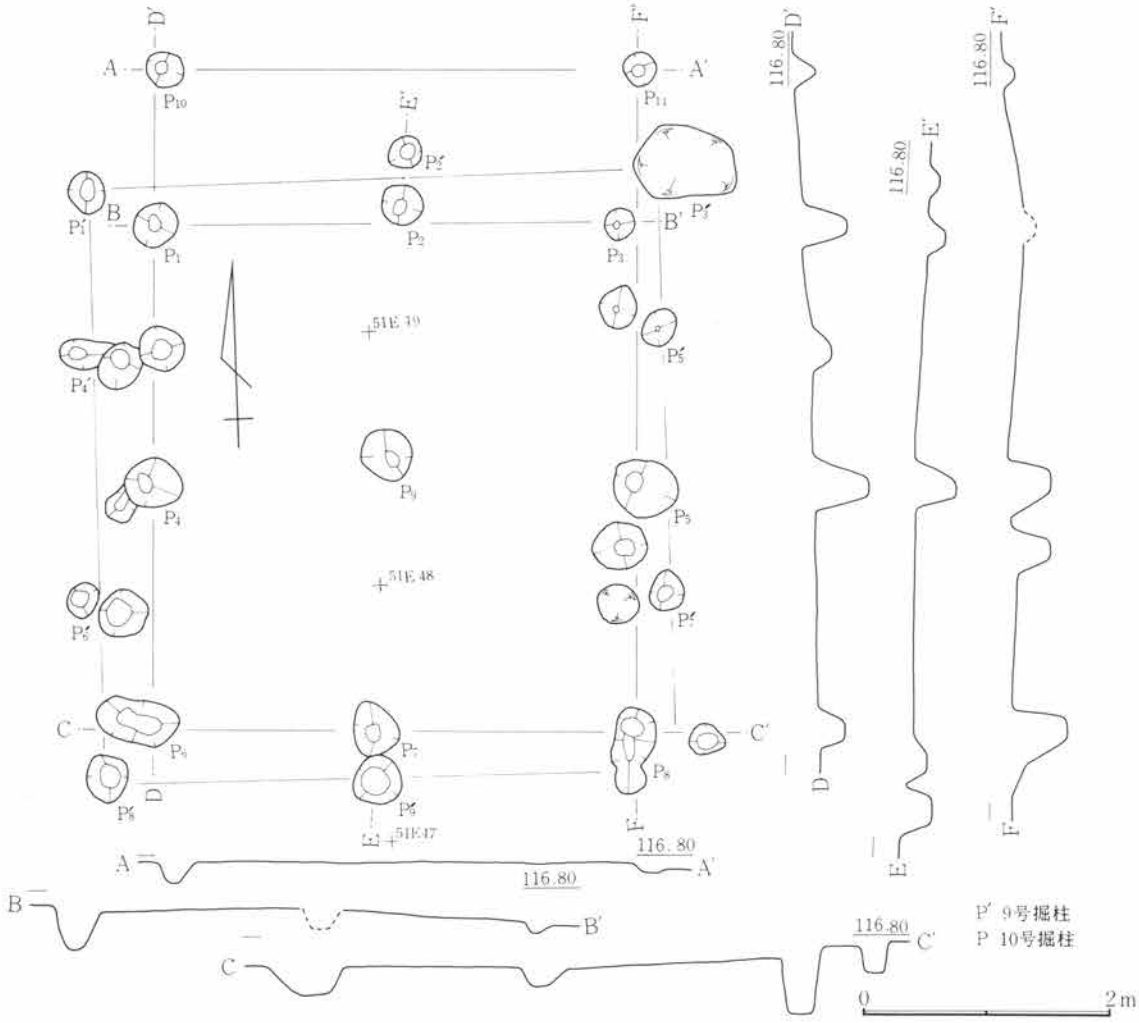


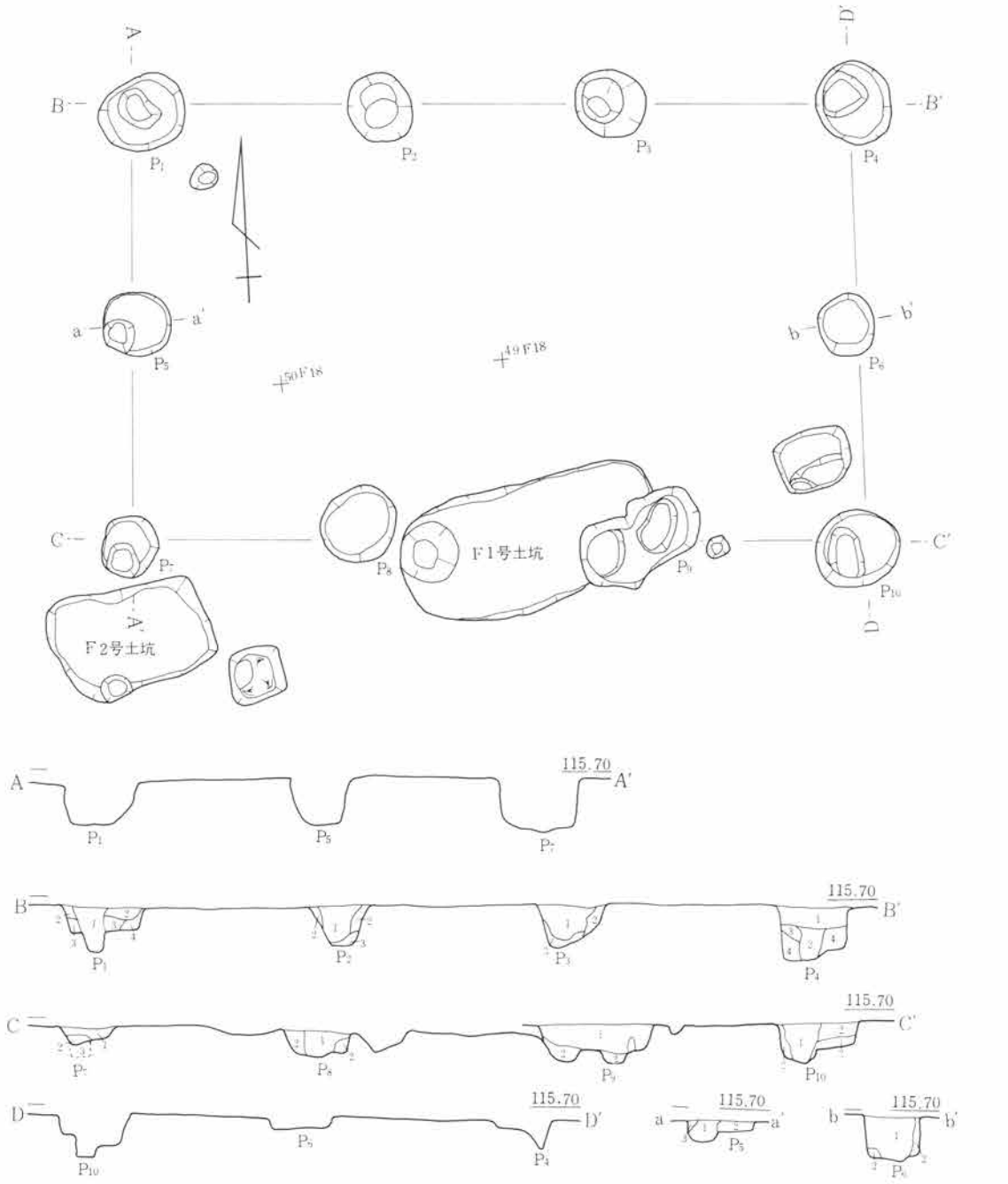
Fig. 287　Ｅ・9号掘立柱建物跡

Ｆ１号掘立柱建物跡

Ｆ区の中央部に位置し、47～50Ｆ34～36の範囲にある。東西棟建物で３間×２間の柱間をもち、桁行6.4m・梁行4.0mの規模をもつ。主軸方位はＮ―97°―Ｅないしは Ｎ―84°―Ｗを示す。柱間寸法は梁行北列（P_1・P_2・P_3・P_4）と南列（P_7・P_8・P_9・P_{10}）はともに2.2m―2.1m―2.2mで同寸法である。ただし、南列 P_8は柱筋から僅かに内側へはずれる。梁行西列（P_1・P_5・P_7）と東列（P_4・P_6・P_{10}）は2.0mの同寸法である。

柱穴掘形は径50～70cm・深さ30～40を測り、柱痕は約20～25cmである。掘形に充填される土質は粘性の強い黒褐色土を用い、柱痕の埋土は浅間山降下のＣ軽石粒を僅かに含む。

出土遺物はなく時期は不明であるが、埋土の状態から平安時代の所産と考えられる。



F1号掘立柱建物跡

P_1
1　黒色土　軽石含み砂質
2　黒色土　軽石・粘土塊少量含む砂質
3　黒褐色土　粘土塊含み粘性・締りあり
4　里色土　砂質

P_2
1　黒色土　少量の粘土塊含む砂質
2　黒色土　砂質
3　黄色土　粘土塊含み粘性・締りあり

P_3
1　黒色土　炭化粒少量含み砂質
2　黄黒色土　粘土塊多量に含み粘性あり
3　黄黒色土　粘土塊含み砂質

P_4
1　黒色土　軽石多く、炭化粒含む砂質
2　黒色土
軽石・粘土粒少量含む砂質
3　黒色土　軽石・粘土少量含む砂質
4　黒色土　粘土粒少量含み締りあり

P_5
1　黒色土　砂質
2　黒褐色土　粘土塊を多量に含む
3　Loam 塊

P_6
1　黒褐色土　軽石含みやや砂質
2　黒色土　締りあり

P_7
1　黒色土　粘土塊少量含む砂質
2　黒褐色土　粘土塊多量に含む
3　黒褐色土　粘土塊含む

P_8
1　黒色土　砂質
2　黒色土　粘土塊含む砂質

P_9
1　黒色土　砂質
2　黄色土　粘質
3　黒色土　砂質

P_{10}
1　黒色土　軽石・粘土粒含みやや砂質
2　黒褐色土　少量の軽石・粘土塊含み締りあり
3　黒色土　少量の軽石含み締りあり

0　2m

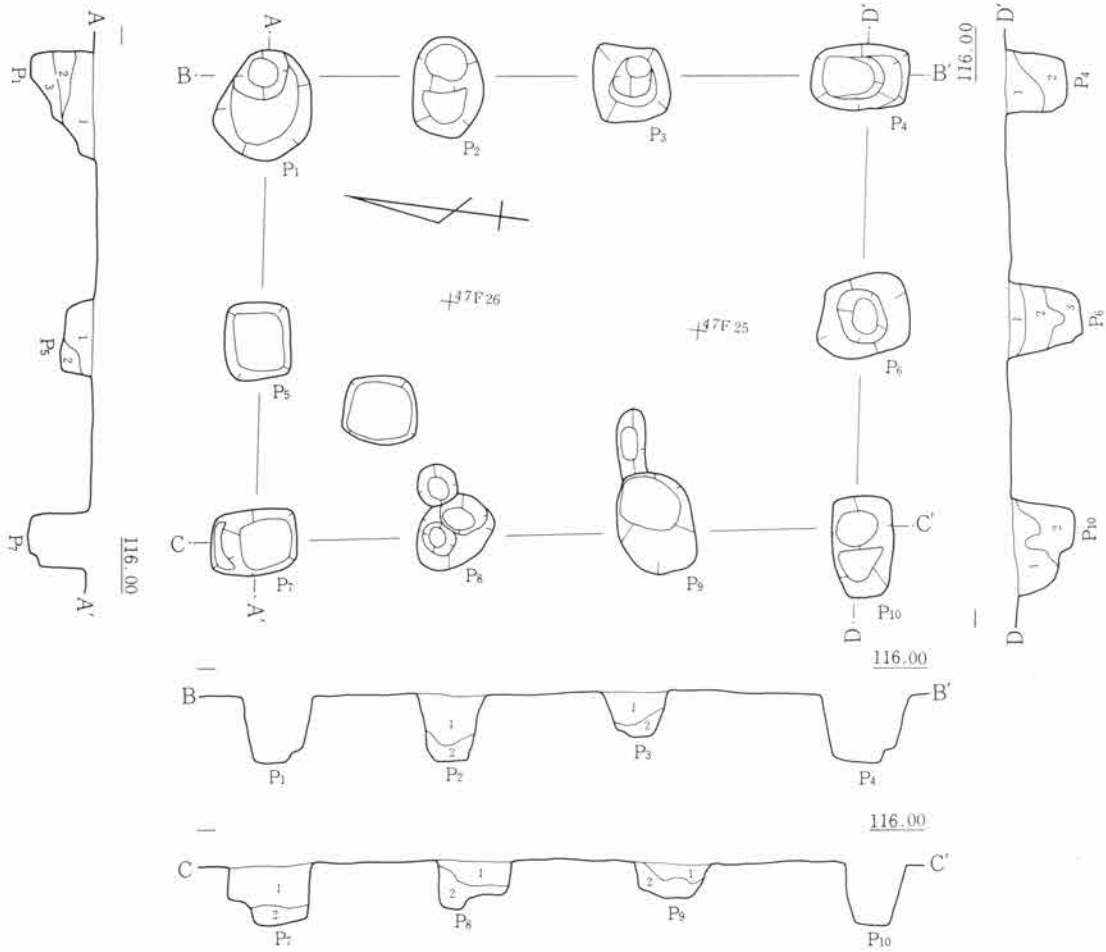
Fig. 288　F1号掘立柱建物跡

Ｆ２号掘立柱建物跡

Ｆ区中央部やや東寄りに位置し、45～48Ｆ24～26の範囲にある。南北棟建物で３間×２間の柱間をもち、桁行4.7m・梁行3.7mの規模をもつ。主軸方位はN－７°－Wを示す。柱間寸法は桁行北列（P_1・P_2・P_3・P_4）南列（P_7・P_8・P_9・P_{10}）が1.5m－1.5m－1.7mで伴に東側間口の広い同一寸法である。また梁行西列（P_1・P_5・P_7）と東列（P_4・P_6・P_{10}）も2.0m－1.7を測り同寸法で伴に北側間口が広い。

柱穴掘形は方形に掘られるものが多く、60～80cm×50～70cmで深さ50cmの規模をもつ。埋土は浅間山降下Ｃ軽石粒を含む黒褐色土を主体とし、掘形充填には粘性の強い黒褐色土を用いている。

出土遺物はなく時期は不明であるが、埋土から奈良～平安時代の所産と考えられる。



Ｆ２号掘立柱建物跡

P_2　P_3
1　黒褐色土　軽石含みやや砂質
2　黒褐色土　粘土塊含む

P_4
1　黒褐色土　やや砂質
2　黒褐色土　粘土塊含み砂質

P_7　P_8　P_9
1　黒褐色土　やや砂質
2　黒褐色土　粘土塊含む

P_1
1　黒色土　褐色粘土塊含み砂質
2　黒色土　褐色粘土塊含み砂質

P_5
1　黒色土　粘土塊含み砂質
2　黒色土　砂質

P_6
1　黒褐色土　軽石・粘土塊含み砂質
2　黒褐色土　軽石含み砂質
3　灰褐色土　褐色・白色粘土塊含む埋土？

P_{10}
1　黒褐色土　褐色粘土小塊、炭化粒含む
2　灰褐色土　褐色・白色粘土塊含む埋め土？

Fig. 289　Ｆ２号掘立柱建物跡　　0　2m

Ｆ３号掘立柱建物跡

Ｆ区の北部に位置し、52～55Ｆ33～37の範囲にある。Ｆ24号住居跡と重複するが、柱穴の一つP_6がＦ24号住居跡の竈位置に重なり、竈はP_6の埋土上に構築されていることから当跡がこれより旧い時期の所産であることが判明した。東西棟建物で３間×２間の柱間で桁行5.55m、梁行2.1mの規模をもつ。主軸方位はN—13°—Wを示す。柱間寸法は桁行東列（P_1・P_2・P_3・P_4）と西列（P_7・P_8・P_9・P_{10}）は名々等間隔で1.85m、梁行北列（P_1・P_5・P_7）と南列（P_4・P_6・P_{10}）も等間隔の2.1mを測り同寸法である。なお桁行来列のP_3・P_4間は幅40cm・深さ10cmの浅い溝が結んでいる。

柱穴掘形は円形あるいは楕円形を呈し径100×65cm～60×50cm・深さ30～50cmの規模をもつ。埋土及び充填に用いる土質は前者が浅間山降下Ｃ軽石を含み、後者は粘性のある黒褐色土である。

出土遺物はなく時期不明であるが埋土及び平安初期と考えられるＦ24号住居跡との重複から奈良時代後半の年代が想定される。

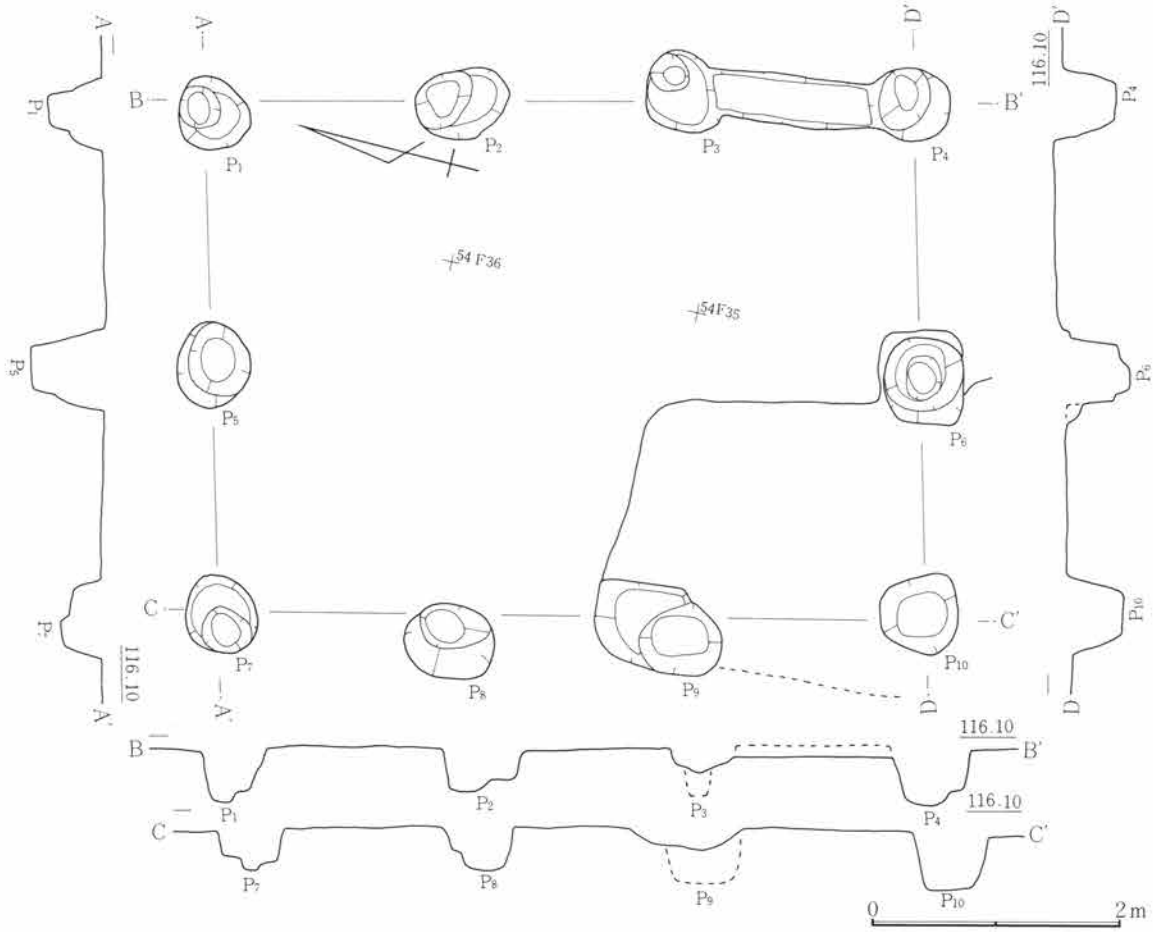


Fig. 290　Ｆ３号掘立柱建物跡

Ｆ４号掘立柱建物跡

Ｆ区の北西部に位置し、56～58Ｆ28～31の範囲にある。東西２間、南北１間で、柱穴の配置から南北に桁をもつ建物と考えられる。桁行3.7m、梁行4.3mの規模である。桁行方位はN—88°—Ｅを示す。柱間寸法は桁行北列（P_1・P_2・P_3）及び南列（P_4・P_5・P_6）が伴に1.7m—2.05m、梁行西列（P_1・P_4）と東列（P_3・P_6）は4.3mである。

柱穴掘形は円形ないしは楕円形を呈し上面径80cmから35cmで深さ25cmから40cmを測る。埋土の状態は不明である。

出土遺物はなく時期は不明であるが、柱筋方向はＦ２号・Ｆ３号掘立柱建物跡と同一であり、これらとほぼ同一時期の奈良から平安時代にかけての所産と考えられる。

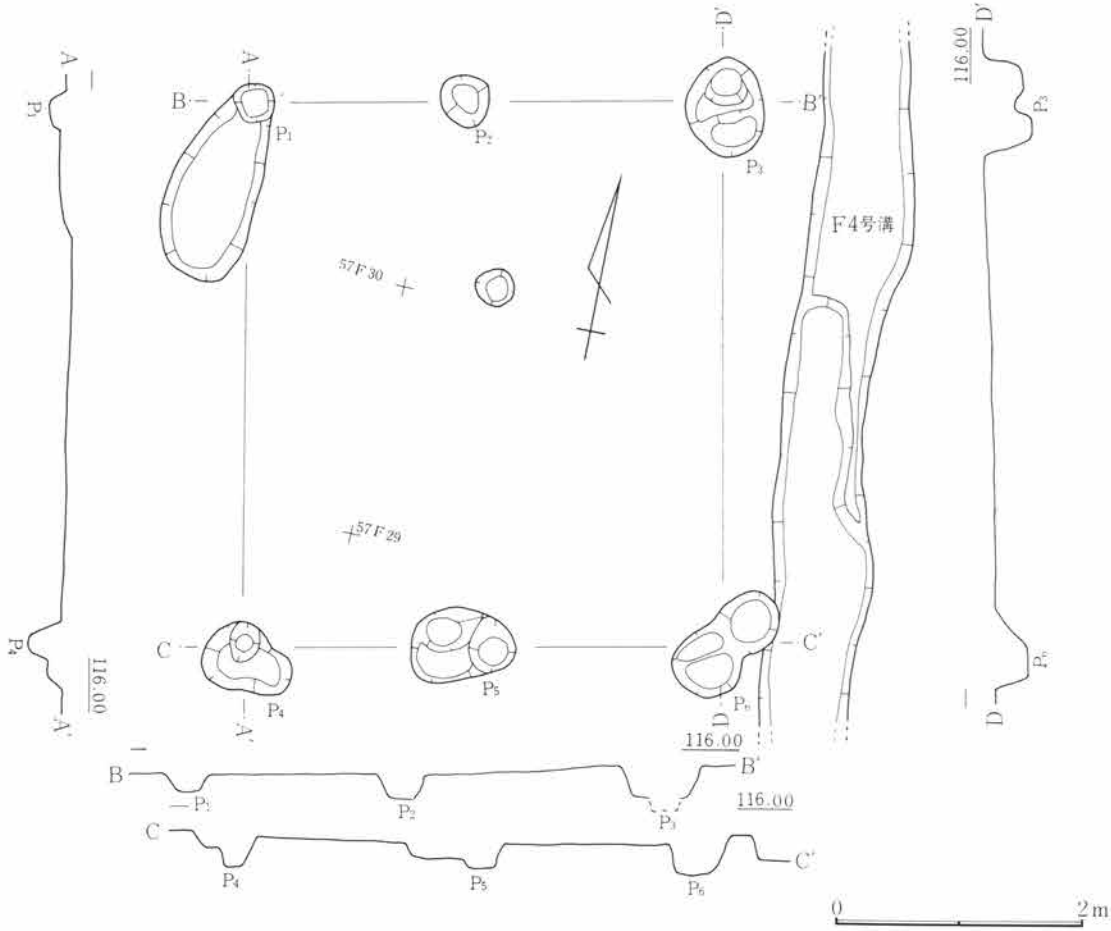


Fig. 291　Ｆ４号掘立柱建物跡

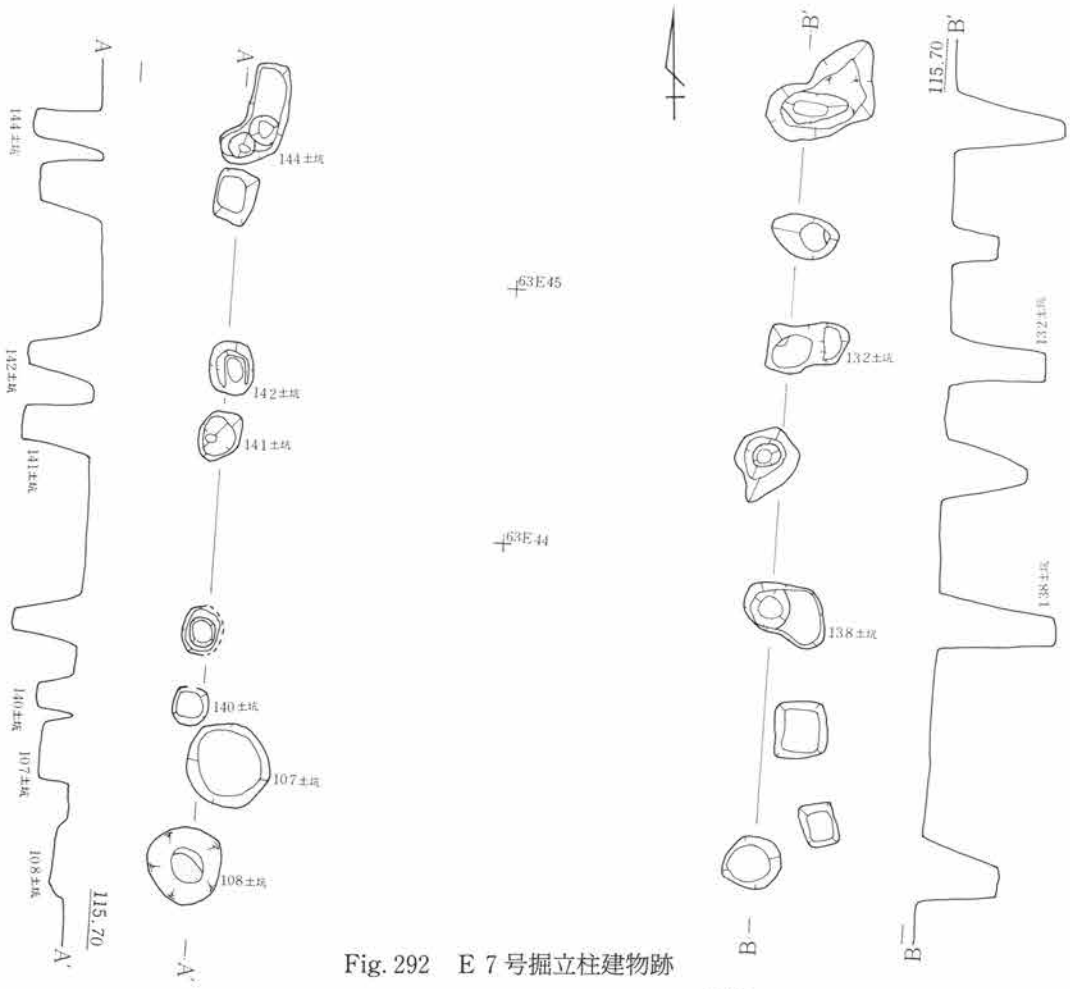


Fig. 292　E 7 号掘立柱建物跡

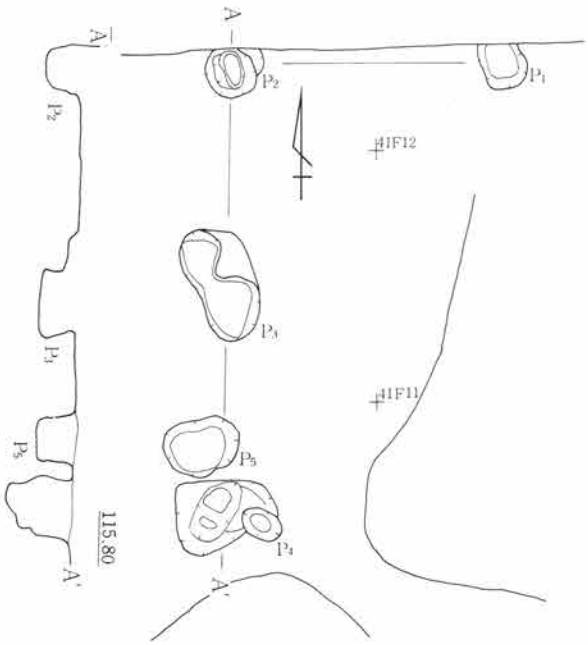


Fig. 293　F II 5 号掘立柱建物跡

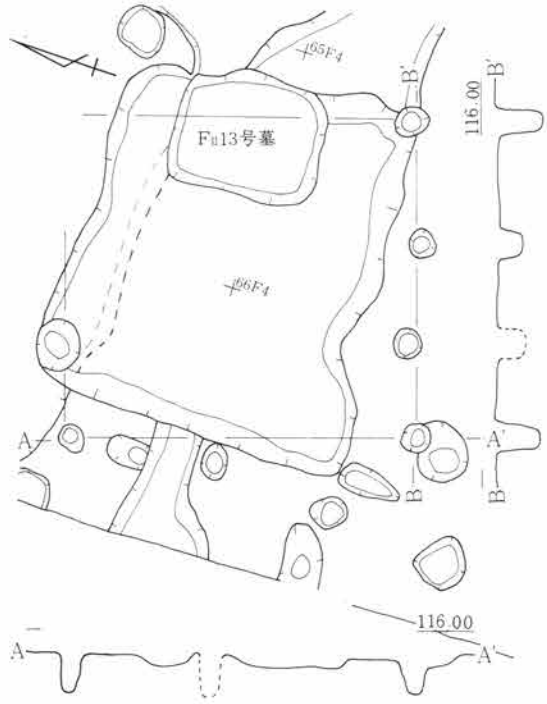


Fig. 294　F II 6 号掘立柱建物跡

0　2m

２．井　戸　跡（Fig. 295～314　PL. 24～29・80～86）

鳥羽遺跡では総数86本余りの井戸跡が検出されているが、近・現代に属する井戸跡は９本あり調査前に移築した民家に関わるものである。これらは遺跡内で検出された他の井戸跡に比べ、かなりの深さをもったため最初に手がけたＪ６号井戸の掘り下げ状況からかなりの危険が伴ない近・現代と考えられた井戸跡については平面位置を確認したに留めた。

遺跡内における分布状況は調査区によってかるい粗密の差があるものの、総体的には北が薄く南に濃い分布傾向が認められ、遺跡南部のＡ～Ｆ区では50本が検出され全体の64％を占める。このような分布の偏りは１つに地勢に規制された占地が、他には遺構の構成内容に左右された結果が考えられる。

鳥羽遺跡は全長約1200m、北から南に向い視覚的にはほとんど感じとれない程度の緩傾斜となっている。しかし南端と北端との現地表での比高差は約11mにおよぶ。もちろん地表での高底がそのまま地下水脈の高底に一致するとは限らないが標高の高い遺跡地北部での鑿井に何らかの影響をおよぼしている可能性がある。例えば、遺跡内で最北部に検出されたＬ１号井戸跡は地下水位の変化が生じたためとも考えられるが、調査時での湧水や帯水はまったく観察されていない。これに対し、南部は低地帯が間近にせまる凝灰岩質層をのせる台地縁辺部にあたり、地下水位までの鑿井が比較的容易に行ない得たものであろう。

当遺跡で検出された井戸跡86本のうち上述した近・現代の９本を除きそのほとんどは中世を中心とした時期が考えられ、唯一古代の所産とできる井戸跡は、埋土に浅間山降下火山灰 FA 層をもつＪ３号井戸跡にすぎない。井戸はその機能上日常生活空間に設けられる性格のものであろう。館址・鋳造跡・溝跡など鳥羽遺跡における中世に属する遺構の多くはＡ～Ｆ区に集中しており、必然的に井戸跡もこれに伴って鑿井されている。なお中世遺構と井戸跡の直接的関連は明らかにしがたいが、館跡及び鋳造跡周辺には他を圧到して井戸跡が集中的に検出されている。

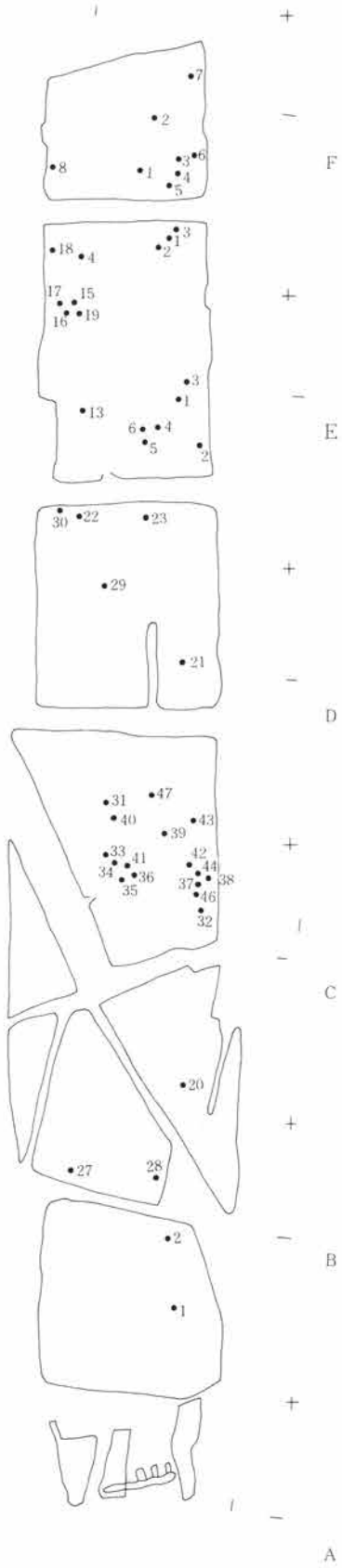


Fig. 295　井戸分布図

Ｂ１号井戸

Ｂ区の東側に位置し、41・42Ｂ15・16の範囲にある素掘井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とした砂質層であるがとくに１層はＢ軽石粒の混入が著しい。平面は径1.2mの円形を呈する。断面は検出面より1.15mまで筒円筒形をなすが底面中央部を Pit 状に掘り込む。Pit は径40cmで深さ80cmに達し、井戸跡全体の深さは２mである。この底面に穿たれた Pit の性格は不明であるが、調査時には湧水もほとんどなく、また壁面の崩落も見られなかった。これらは、往時も井戸跡としては機能していなかったと考えられ、未完掘の状態で放棄された遺構である可能性がある。とすれ

ば底面に穿たれた Pit は当時の鑿井工程を示すものであろうか。なお出土遺物は検出されず時期は不明であるが埋土の状態から中世ないしは中世以降の所産と考えられる。

Ｂ２号井戸

Ｂ区の北東部に位置し、42Ｂ28の範囲にある。埋土は全体に浅間山降下Ｂ軽石粒の混入が著しい。平面は0.8mの円形を呈し、深さ70cmを測る。井戸跡としては平面径・深さとも小規模で未完掘とも考えられるが、土坑の可能が強い。出土遺物はなく時期不明であるが、Ｂ軽石粒の混入から中世以降の所産であろう。

Ｂ27号井戸

Ｂ区の北西部に位置し、59・60Ｂ39・40の範囲にある素掘井戸である。埋土上位は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする砂質土で埋まり、部分的に粘質土の溝層が存在する。下位には大小の川原石が多数存在しており故意に投棄充塡されたと考えられる。平面はほぼ円形を呈し、平面は径2.1×2.4mの楕円形を呈し、上半部70cmの深さまで大きく開口し以下径95cmの筒円筒で断面形は漏斗状になる。深さ2.4mを測り、調査時には多小の湧水が見られたが壁面の崩落はほとんど認められなかった。出土遺物には軟質陶器すり鉢片・布目平瓦片などがある。中世の所産と考えられる。

Ｂ28号井戸

Ｂ区の北東部に位置し、43・44Ｂ38・39の範囲にある素掘の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体にするが、下位堆積土にはＢ軽石層の unit（軽石粒と灰の互層）を思わせる部分がある。平面は径1.5mの円形を呈する。断面は上半部70cmまで緩く開口し、以下径90cmの筒円筒で弱い漏斗状になる。深さ1.65mを測り、深さ約90cmの壁面白色 Silt 層と砂層間に小さな段を形成する崩落が認められた。この部分が湧水個所と考えられるが調査時の帯水量は僅かである。出土遺物は検出されていない。なお、下位に堆積するＢ軽石 unit 状の層が一次堆積によるものとすれば当跡の鑿井はＢ軽石降下（天仁元年）以前の可能性がある。

Ｃ20号井戸

Ｃ区南東部に位置し、39・40Ｃ５・６の範囲にある。素掘りの井戸で、埋土は深さ1.5m程度まで浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする砂質であるが、黒褐色土の大型土塊が混入しておりこの土塊は人為的に投入された可能性がある。下位の埋土は黒褐色砂質土や泥土となる。平面は径約1.0mで上位は隅丸方形を呈し、以下円形になり、深さ約３mを測る。壁面の崩落はほとんど認められず整った筒円筒形をなすが、底面近くの壁面は Silt の堆積層からなり大きなえぐれを形成している。この Silt 層が滞水層と考えられるが湧水量は少なく調査時で底面より約30cmの水位であった。出土遺物は軟質陶器甕・曲物製柄杓（柄欠損）がある。埋没は中世以降と考えられる。

Ｃ32号井戸

Ｃ区の北東部に位置し、36Ｃ39にある。素掘りの井戸で、埋土は全体に浅間山降下Ｂ軽石粒を主とし、部分的に黄色土粒ないしは土塊を含む層が堆積する。中位には人頭大の川原石が検出されているが数量は２～３個程度である。平面は径1.6～1.7mの円形を呈し、上半部50cmの深さまで大きく開口して以下径70cmの筒円筒となる断面形漏斗状である。1.9mの深さをもつが調査時の湧水は認められなかった。壁面の崩落は少な

いが、底面付近の砂質層からなる壁面にえぐれが形成されている。出土遺物は検出されない。埋没は中世以降であろう。

Ｃ33号井戸

Ｃ区の北端部に位置し、52・53Ｃ48にある。素掘りの井戸で、埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。平面は比較的小型で径80～90cmの円形を呈す。上半部の開きも少なく、ほぼ筒円筒の断面形である。深さ約2.1mを測り、小径に比して深度をもつ井戸である。壁面の崩落はほとんど認められず、調査時においても湧水に見まわれることはなかった。出土遺物はない。埋没は中世以降であろう。

Ｃ34号井戸

Ｃ区の北端部に位置し、52・53Ｃ47・48の範囲で北に近接してＣ33号井戸がある。素掘り掘形で、埋土は中位に明らかに浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする堆積土が認められ、下位粗粒の砂質土で埋まる。平面は径２mの円形を呈し、上半部深さ１mまで大きく開口する。中位で径60cmと最も小径になり、下位径80cmと広がる。深さ2.05mで断面形漏斗状を呈す。調査時の湧水はほとんど認められなかったが、下位壁面には多少の荒れが見られるところから小規模ながら崩落があったようである。出土遺物はない。中世以降の埋没と考えられる。

Ｃ35号井戸

Ｃ区の北部に位置し、49Ｃ44にある。Ｃ36号井戸と重複するが、これより旧い所産である。素掘り掘形で埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする砂質土で、自然堆積と考えられる。平面は径２mの略円形を呈し、上半部は深さ90cmまで大きく開口するが井戸の中心部からは南側に開く度合が大きい。中位で約70cmの径に狭まり、底面ではさらに30cm程度になる。深さ2.7mを測り、断面形は漏斗状を呈す。壁面の崩れは少なく湧水層も明確ではないが、深さ1.4mの地点に砂粒混じりの Silt 層があり若干のえぐれが認められている。出土遺物はないが、Ｂ軽石粒主体の埋土から、埋没は中世以降であろう。

Ｃ36号井戸

Ｃ35号井戸を切り込んでいる。49Ｃ44・45の範囲にあり素掘り掘形である。埋土はＣ35号井戸と同じく浅間山降下Ｂ軽石粒を主体としている。平面は径1.7mの円形を呈し、上半部約80cmの深さまで大きく開口する。中位は径80cmに狭まる。深さ2.1mから底面までの約50cmの間は壁面に接して乳白色粘質土が厚さ10～13cmで認められている。木材などは検出されていないが筒状の井戸枠の存在も考えられる。深さ約2.6mを測り、断面形漏斗状をなす。壁面の崩落は僅かに認められるがＣ35号井戸と同一層が若干軟弱であった。出土遺物はないが、Ｃ35号井戸とそれほどの時期差のない埋没であろう。

Ｃ37号井戸

Ｃ区の北東部に位置し、36Ｃ44にある。北側でＣ44号井戸に接するが新旧関係は不明である。平面は径1.4mの円形を呈し、深さ40cmまで僅かに開き気味である。井戸本体の掘形は素掘りであり一辺１mの方形を呈する。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒で埋まり自然堆積の状態を示す。東壁面50cmから１mの個所にかけて壁面に密着した状態で自然木と思われる木片が検出されている。深さ2.3mを測り、断面形漏斗状を呈するが、下部

壁面は下脹山状に広がり崩落が観察され、湧水点と考えられる。出土遺物はない。中世以降の埋没であろう。

C38号井戸

C区の北東部に位置し、35C44・45の範囲にある素掘り井戸である。西側にはC37号・C44号井戸が近接してある。また東端は調査区域外に一部かかる。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体とする自然堆積状態を示す。平面は径1.9mの円形を呈し、深さ約70cmまで大きく開口する。開口の度合は南側が大きい。中位で約85cmに狭まるが、下半は底部に至るまで強く下脹れ状に広がる。この広がりはおそらく壁面の崩落によるものと考えられ、底面近くが湧水個所であろう。また底面には40×60cm大の礫が検出されているが、壁面の構成層にはこの種の礫を含むものが存在していないことから人為的に投下されたものと考えられる。深さ2.15mを測り、断面形は漏斗状形態に属するであろう。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

C41号井戸

C区の北部に位置し、49C46にある素掘り掘形の井戸である。南西部で土坑と重複するが、これを切って構築される。埋土は浅間山降下B軽石粒ないしは粗粒の砂質土を主体とするが、全体にLoam粒の混入が多く見られ人為的な埋め戻しの可能性もある。平面は径1.8mの円形を呈し、深さ約60cmまで大きく開口する。以後底面に至るまで径60cmを保ち垂直に近い壁面をなす。深さ1.45mを測り、断面漏斗状である。壁面の崩落はほとんど見られず、調査時においても湧水はなかった。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられる。

C42号井戸

C区の北東部に位置し、38C46・47の範囲にある素掘り掘形の井戸である。東側でC24号墓と接するが、これより新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体とするが、上面近くには粘性褐色土の大塊が観察され、人為的な埋め戻しが行われた可能性もある。平面は径1.5mの円形を呈し、深さ40～50cmまで大きく開口し、とくに南へ開く。以下80cmの径をもつ。深さ2.4mを測り、断面漏斗状を呈す。壁面の崩落は僅かであるが、底面より60cmの高さで砂質層に小さなえぐりがある。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられる。

C44号井戸

C区の北東部に位置し、36C44・45の範囲にある素掘り掘形の井戸である。南にC37号井戸と接するが新旧関係は不明である。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体としており、自然堆積と考えられる。平面は径1.4～1.5mのほぼ円形を呈し、深さ50cm程度までやや大きく開口する。中位は径90cmで底面に近く撥状に開く。底面近くの壁面は軟弱な砂層よりなっており、湧水に伴う壁面崩落があったと思われる。深さ1.8mを測り、断面形は漏斗状に属する。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられる。

C46号井戸

C区北東部に位置し、36・37C42・43の範囲にある素掘り掘形の井戸である。南側で浅間山降下B軽石層を埋土とする土坑と重複するが、これより新しい時期の所産である。埋土はB軽石粒を主体とする。平面は径１mの円形を呈し、上位は僅か15cmの深さまで大きく開口した後径60cmに狭まる。深さ1.8mを測り、中位から下位は僅かに脹らみをなく壁面となるが崩落の痕跡は認められない。断面形は上位開口部の度合から筒

円筒形と考える。出土遺物は大型に属する鉄鎌がある。中世以降の埋没と考えられる。

D21号井戸

D区の中央部東側に位置し、41D32にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体としている。平面は径約1.0mの円形を呈し、深さ2.6mを測る。断面形は筒円筒形状である。壁面の崩落は少なく整っているが、深さ1.5～1.8mと底面近くの壁面砂層が湧水点と考えられる。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられる。

D29号井戸

D区北部やや西寄りに位置し、55D45にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体とする砂質層である。当区を北北西から南南東へ走るD404号溝と重複するが新旧関係は確かめられていない。平面は径1.1～1.2mの円形を呈し、上位がやや大き目に開口する形状である。以下は径60～70cmで底面に至り若干径を増している。深さ3.45mを測り、断面形は筒円筒形である。当跡は周辺の井戸の中でも比較的深い鑿井であるが壁面の崩落は少なく、湧水点は深さ２mの Silt と細砂からなる厚さ20cmの層と底面に近い礫・砂の混合層と考えられる。出土遺物には安山岩製のくぼみ石状の石製品がある。中世以降の埋没であろう。

D31号井戸

D区の南部に位置し、北に近接して東西走するD1005号・1006号溝がある。53D７にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体とするが Loam 粒･塊を混入する層が多く、また、深さ1.4～1.5mには10～15cm大の川原石も検出され人為的な埋め戻しの可能性もある。平面は径1.4mの円形を呈し、上半部50cmの深さまで大きく開口し、径約70cmに狭まって底面に至る。深さ３mを測り、断面形漏斗状になる。壁面の崩落は少ないが、深さ約２mの砂質層壁面に小さなえぐれが生じており、湧水点と考えられる。出土遺物は軟質陶器鉢底部及び石臼がある。中世以降の埋没と考えられる。

D39号井戸

D区の南部に位置し、43D２・３の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体とするが、上層の堆積層中には多量の焼土・炭化粒を混えている。当跡はD1058号土坑を中心的施設と考えられる鋳造跡関係遺構群の範囲にあり、近接しては、鋳造跡関連 Pit 群や鉱滓を多量に出土する土坑などがある。焼土・炭化粒はこれらからもたらされたものと考えられるが、埋土中でも上位層に限られるため、鋳造跡の操業時期とはかなり時期的な隔りがあろう。平面は径0.75mの比較的小規模な円形を呈し、上位から下位に至るまで径に差のない断面形筒円筒状をなす。深さ約2.05mを測り、上面から１mの深さで壁面の崩落があり若干脹らむ。この壁面はやや軟弱な砂質層より構成され、湧水点と考えられる。出土遺物はなく中世以降の埋没であろう。

D40号井戸

D区の南部に位置し、51D５にある。調査時に検出面の状況から井戸跡として扱ったが、土坑とすべき遺構である。平面形は径1.3mの円形を呈し、深さ60cmを測る。埋土には浅間山降下のB軽石粒は見られない。

上面より人頭大・挙大の川原石とともに須恵器杯・椀・羽釜などが出土している。平安時代後半期の所産であろう。

D43号井戸

D区の南東部に位置し、37・38D４・５の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下B軽職粒を主体とする。平面は1.5～1.8mのほぼ円形を呈し、上半部90cmの深さまで大きく開口し、南か西側にかけてとくに大きく開く。以下は径0.9m～1.2mに狭まる。深さ3.05mを測り断面形漏斗状を呈す。壁面の崩落は著しく、とくに北・南壁面は原形を大きく損ねている。上面から深さ0.5～2.8mの間は軟弱な砂層ないしは砂礫層で構成され複数の湧水点が存在したようである。出土遺物は極めて多く、軟質陶器すり鉢４点の他、鋳造鋳型片、溶解炉窯壁片などがある。これらの遺物は井戸内上位から、中位にかけて集中しており投棄行為が看取された。当跡は鋳造関連遺構の範囲内にあり、遺物出土状況から、鋳造跡の一施設として機能していた可能性は極めて高く、鋳造操業の停止とともにその役割を終えたものであろう。なお鋳造に直接関係する遺物は鋳造跡項に一括して掲載してある。

D47号井戸

D区の南部やや東側に位置し、44・45D９の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は粘性のある暗褐色土を主体とする。平面は1.1～1.2mの隅丸方形を呈し、上面より約35cmの深さまで大きく開くが底面に至るまで一辺85cmの方形掘形である。深さ約１mを測り断面漏斗状を呈す。壁面の構成堆積層は砂・礫層に達しておらず崩落などはまったく見られないことから土坑とすべきかもしれない。出土遺物は検出されていないが、埋土中にB軽石粒が存在しないことから、平安期の埋没と考えられる。

E１号井戸

E区の中央部東側に位置し、41E30にある素掘り掘形の井戸である。E10号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。埋土は上層にE10号住居跡によると思われる炭化粒混りの暗褐色土がみられるが、下位層は浅間山降下B軽石粒を主体とした埋土である。平面は径約１mの円形を呈し、深さ1.3mで断面形は筒円筒状をなす。壁面の崩落はなく、顕著な湧水層は認められない。底面には泥層が堆積するが出土遺物は検出されていない。中世以降の埋没と考えられる。

E２号井戸

E区の東部に位置し、38・39E21の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下B軽石粒を多く含む上位層が厚く堆積するが、下位層には粒性の強い褐色土塊層が主体となっており、人為的な埋め戻しがなされた可能性がある。平面は径２mの円形を呈し、深さ80cmまで大きく開口する。中位は径80cmに狭まる。約1.7mの深さで壁面の崩落が著しく大きなえぐれが生じており、これより下位の掘り下げは危険を避けるために中止した。深度確認によれば、上面より約2.9mを測り、断面形は漏斗状をなすと考えられる。出土遺物は検出されていない。中世以降の埋没であろう。

E３号井戸

E区の中央部東側に位置し、39E31・32の範囲にある素掘り掘形である。E９号住居跡の竈先端部を切っ

て構築される。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とするが、底面には薄く泥層が堆積する。平面は径１～1.5mの円形を呈し、深さ1.2m、断面形は筒円筒状である。壁面の崩落はなく、顕著な湧水層も認められていない。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられるが井戸跡としてはやや疑問が残る。

Ｅ４号井戸

Ｅ区中央部に位置し、46Ｅ24にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。平面は1.1～1.3mの円形を呈し、深さ１mの断面形筒円筒状である。壁面の崩落はなく、湧水層は認められない。形状・規模ともＥ３号井戸に類似しており、同様に井戸跡としては疑問が残る。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｅ５号井戸

Ｅ区中央部に位置し、48・49Ｅ20の範囲にある素掘り掘形である。中世館址内堀にあたるＥ３号溝の中にあり、上面は溝構築によって削平している。埋土は中位に浅間山降下Ｂ軽石粒と考えられる砂層の堆積が見られる。平面は径60cmの円形を呈し、深さ約１mの断面形筒円筒状になる。壁面の崩落は見られず、湧水層も確認されていない。規模・形状はＥ３号・Ｅ４号井戸跡に類似する。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられる。

Ｅ６号井戸

Ｅ区中央部に位置し、48Ｅ23・24の範囲にある素掘り掘形の井戸である。館跡内堀にあたるＤ３号溝東辺の底面に検出され、上面は溝の開削によって消失している。平面は径80cmの円形を呈し、深さ1.1mを測るが溝により削平を考慮すれば本来は深さ２m以上の規模であったと考えられる。断面形は現状で筒円筒状になる。壁面の崩落は見られず、湧水層も確認していない。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｅ13号井戸

Ｅ区の中央部やや西側に位置し、56･57Ｅ26.27の範囲にある素掘り掘形の井戸である。当区には館跡と有機的に関わると考えられる井戸跡は当跡のみで館跡内部にある。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とするが上位層には黄褐色粘性土が塊状に多く見られる。平面は2.1～2.5mの円形を呈し、上面より深さ80cmまでは大きく開口するが中位で径約1.1mに狭まる。深さ約2.85mを測り断面形は漏斗状になる。壁面はやや荒れ気味で、とくに底面近くにえぐりが生じており湧水層と考えられる。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｅ15号井戸

Ｅ区の北西部に位置し、59・60Ｅ47の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒が主体となっている。平面は2.0～2.1mの円形を呈す。上面より深さ１mまで大きく開口するが、中位で径80cmに狭まる。深さ2.25mを測り、断面形は漏斗状である。壁面の崩落は深さ1.4～1.9の範囲にみられ、大きなえぐれが生じている。出土遺物はなく、中世以降の埋没と考えられる。

Ｅ16号井戸

Ｅ区の北西部に位置し、60・61Ｅ46・47の範囲にある素掘り掘形の井戸である。西側にはＥ17号井戸が接

しており、新旧関係は当跡が新しい。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とするが、全体に Loam 塊の混入が多く人為的な埋め戻しがなされた可能性が高い。平面は径2.0mの円形を呈す。上面より1.5mの深さまで大きく開口するが、径80cmに狭まり底面に至る。深さ2.75mを測り、断面形は漏斗状である。壁面の崩落は少ないが深さ2.0mで小さなえぐれが生じている。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｅ17号井戸

Ｅ区の北西部に位置し、61・62Ｅ46・47の範囲にある素掘り掘形の井戸である。東側でＥ16号井戸に接しており、上面縁辺はこれに切られている。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。平面は径1.4～1.5mの円形を呈す。上位は僅かに開くが明瞭な漏斗状をなさない。壁面は南側の崩落が大きく、段状のえぐれを生じている。深さ約2.6mを測り、底面径は65cmである。出土遺物は土師器・須恵器など平安時代に属する土器が検出されている。埋土の状況から中世以降の埋没と考えられる。

Ｅ19号井戸

Ｅ区の北西部に位置し、58・59Ｅ45・46の範囲にある素掘り掘形の井戸である。Ｅ43号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。平面は1.8～2.1mの円形を呈する。上面より約１mの深さまで大きく開口するが、下位は径90cmに狭まる。深さ2.6mを測り、断面形は漏斗状になる。壁面は中位が大きく崩落し、えぐれが生じている。出土遺物は数片の土器類が検出されているが平安時代に属する。埋土の状況から中世以降の埋没であろう。

Ｅ22号井戸

Ｅ区の南西部に位置し、59Ｅ８にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒と思われる砂質土が主体的であるが、粘性の強い黒褐色土塊が多量に見られ、一時的な埋没の様相も窺われ人為的埋め戻しがなされた可能性もある。平面形は0.9×0.95mの隅丸方形を呈する。深さ3.6mを測り、断面形は筒円筒状になる。壁面の崩落は少なく比較的整っているが、調査時には多少の湧水もみられた。出土遺物には青磁小片と骨角製の笄と考えられる小片がある。中世以降の埋没と考えられる。

Ｅ23号井戸

Ｅ区の南東部に位置し、47・48Ｅ８・９の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とするが、上位及び底面近くに大小多量の礫群が検出され、人為的な埋め戻しが考えられる。平面は径１mの円形を呈す。上位が僅かに開くが、深さ3.2mを測り断面形筒円筒状である。壁面は深さ２m以下に崩落があり、この付近に湧水層があったと思われる。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｅ30号井戸

Ｅ区の南西部に位置し、62・63Ｅ10の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。平面は径1.2～1.3mの円形を呈し、上端部が僅かに開くが径80mに狭まり底面に至る。深さ1.9mを測り、断面形は弱い漏斗状である。出土遺物は石臼２点があり、１点は上臼である。中世以降の埋没であろう。

Ｅ31号井戸

調査時の位置 Point 及び全体図への記入がなされず検出位置を示すことができない。埋土は浅間山降下Ｃ軽石粒・焼土塊・炭化粒を多量に含む暗褐色土が上位層に堆積する。平面は1.9～2.0mの円形を呈する。深さ約1.9mを測り、断面形はＶ字状に近く底面径は30cmと著しく狭まる。出土遺物は検出されていない。Ｂ軽石粒を含まない埋土の状況から、中世以前の埋没であろう。

Ｆ１号井戸

Ｆ区の中央部に位置し、48・49Ｆ21の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は上位層に浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする堆積層がある。下位はやや粒子の粗い砂層である。平面は径90cmの円形を呈し、深さ2.7mで断面形は筒円筒状になる。壁面の崩落は上・下２個所に見られる。上位は上面より0.6～1.1mの範囲で、下位は2.0～2.5mの範囲である。壁面のえぐれは下位部分が大きく、主な湧水点であったと考えられる。出土遺物は須恵器小片があり平安時代の椀型である。中世以降の埋没と考えられる。

Ｆ２号井戸

Ｆ区のやや北部に位置し、46・47Ｆ31の範囲にある素掘り掘形の井戸である。Ｆ３号住居跡の中央部に鑿井され、これより新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体と見られる砂質層で埋まる。平面は径1.35mの円形を呈する。上面より40cmまで小さく開口し、径80cmに狭まる。深さ2.9mを測り、断面形は壁面が緩い胴張り状に脹らむ漏斗状になる。湧水層と考えられるえぐりは深さ2.3m付近に生じている。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｆ３号井戸

Ｆ区の東部に位置し、42・43Ｆ23の範囲にある素掘り掘形の井戸である。南に近接してＦ４号井戸がある埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする砂質層である。平面は径1.4mの円形を呈す。深さ2.2mを測り、断面形は筒円筒状になる。壁面は整わず緩い起伏をもって底面に至るが崩落の度合は小さい。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

Ｆ４号井戸

Ｆ区の東部に位置し、42Ｆ21・22の範囲にある素掘り掘形の井戸である。Ｆ３号井戸は北に近接している。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒と思われる砂質層である。平面は径1.5mの円形を呈する。深さ約１mまで大きく開口するが、径約60cmまで狭まる。下位は下脹れ状に広まり壁面の崩落があったと思われるが底面近くで再び狭まっている。深さ2.2mを測り、断面形は漏斗状になる。出土遺物は白磁小片が検出されている。中世以降の埋没であろう。

Ｆ５号井戸

Ｆ区の東部に位置し、44Ｆ20にある素掘り掘形の井戸である。Ｆ区東側を南北走し、中央部で東へＬ字に折れるＦ３号溝の折れ部付近の底面に検出された。上面は３号溝によって削平され、西側縁辺にはＦ３号溝に関わる列石がかかる。埋土は浅間山降下Ｂ軽石と思われる砂質層である。平面は径1.2mの円形を呈する。上面より70cmまで大きく開口し、径80cmに狭まる。現状での深さ2.2mを測り、断面形は漏斗状である。壁面

は深さ1.5mから底面に至るまで著しく崩落し、下位は強く撥状に開く。出土遺物は比較的多く、須恵器、茶臼などの他板碑が検出されている。中世以降の埋没と考えられる。

Ｆ６号井戸

Ｆ区の東部に位置し、39・40Ｆ24・25の範囲にある素掘り掘形の井戸である。Ｆ20号住居跡の中央部に穿たれ、Ｆ17号住居跡とも重複し、両者より新しい時期の所産である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒と思われる砂質層が主体である。平面は径1.4～1.7の円形を呈し、上端部はやや東に広く開く。深さ2.2mを測り、現状での断面形は筒円筒状であるが壁面の荒れがかなり観察される。底面径は約70cmを測り、本来漏斗状であった可能性もある。出土遺物はなく、中世以降の埋没になろうか。

Ｆ７号井戸

Ｆ区の北東部に位置し、39～41Ｆ37～39の範囲にある大型素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とするが、上位に多量の于群が集中して検出されている。また礫群直上にLoam塊を多く混える堆積層があり人為的に埋め戻された可能性が高い。平面は径2.75～3.05mの円形を呈す。上半部は大きく開口し、深さ2.7mの断面形漏斗状になる。壁面は東側が大きく乱れ、崩落によって段状になる。底面径は1.6mを測る。出土遺物は礫群中に検出され、須恵器片・軟質陶器より鉢・鉄釉茶碗のほか数点の布目瓦がある。礫群とともに一括投棄されたものと考えられる。中世以降の埋没であろう。

Ｆ８号井戸

Ｆ区の西部に位置し、63・64Ｆ22・23の範囲にある素掘り掘形の井戸である。埋土は浅間山降下軽石粒を主体にするが、中位に人頭大の川原石が二個検出されている。また川原石包含層はLoam塊を多量に混えている。川原石およびLoam塊の存在から当跡は人為的な埋め戻しがなされた可能性がある。平面形は径1.6～1.7mの円形を呈し、上面より深さ約75cmまで大きく開口する。下位は径約85cmに狭まり、底面に至り径5.5cmを測る。深さ2.3mを測り、断面形は漏斗状である。出土遺物はない。なお調査時の土層観察では１・２層に浅間山降下のＡ軽石（天明３年）を含むと記録されるが、当跡の近世井戸跡と断面形・深さなどに相違点が見られ、むしろ中世に属する遺構と考えられる。Ａ軽石とされるものはＢ軽石の可能性もある。

ＦⅡ１号井戸

Ｆ区の南東寄りに位置し、43Ｆ８・９の範囲にある素掘り掘形の井戸である。ＦⅡ３号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。埋土は上位層に炭化粒・Loam塊を混える暗褐色土の堆積があり、下位は粗粒の砂あるいは砂礫層で埋まる。平面は径1.6mの円形を呈し、上面より約１mの深さまで大きく開口する。下位は径65cm程度に狭まり底面に至る。深さ3.4mを測り、断面形は漏斗状になる。壁面は下位で崩落が見られ、深さ2.3～3.1mの間に湧水層がある。出土遺物は布目瓦片や須恵器甕などが底面近くより検出されている。埋没時期は浅間山降下Ｂ軽石粒の堆積が見られないことや、出土遺物から平安時代後半と考えられる。

ＦⅡ２号井戸

Ｆ区の南東寄りに位置し、ＦⅡ１号井戸に隣接している。44～46Ｆ６～８の範囲にある比較的大型な素掘

り掘形の井戸である。埋土は上層中央部に浅間山降下Ｂ軽石粒の堆積が見られるが下位層には混入しない。平面は径3.1mの隅丸方形を呈し、深さ80cmで明瞭な段をなす。下位は径80cmに狭まるが上面と同じく隅丸方形の掘形をもつ。深さ1.5m地点より下位は壁面の崩落が著しく、１m以上のえぐりとなっている。調査時においても崩落の危険があったため、下位への掘り下げを中止し探査棒による底面の確認にとどめた。それによれば当井戸の深さは4.2mに達する。断面形は漏斗状である。出土遺物は上位の開口部に最も多く検出され、須恵器類が目立つ。また、壁面崩落部下位からは木材片などが確認されている。当跡の埋没時期に関しては出土遺物や堆積土から平安時代と推定される。最上層中央部のＢ軽石粒層は、井戸埋没後に生じた大きな壁面崩落によって中央部が陥没し、再度堆積したものと考える。

ＦⅡ３号井戸

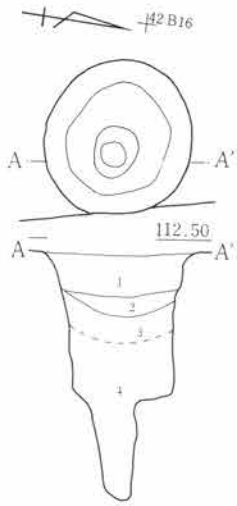
Ｆ区の南東寄りに位置し、42Ｆ12にある素掘り掘形の井戸である。北半は生活道にかかり完掘していない埋土上層は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とし下位は粗粒砂質層からなる。平面は径1.1mの円形になろう。深さ2.75mを測り、断面形は筒円筒状をなす。壁面の崩落はなく整った掘形である。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。

ＦⅡ４号井戸

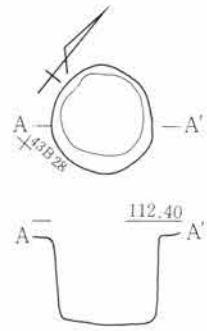
Ｆ区の南西寄りに位置し、58・59Ｆ５・６の範囲にある素掘り掘形の井戸である。Ｆ区西側を南北走するＦ２号溝と重複するが新旧関係は確認できない。埋土は砂質層の堆積はなくやや粘性のある暗褐色土・黒褐色土からなる。平面は径1.7～2.25mの楕円形を呈するが、上面北側が広く段状の掘形をもつためである。深さ１mで径65cmに狭まり、そのまま底面に至る。深さ2.65m、断面形は漏斗状になる。壁面の崩落はなく整っている。出土遺物は布目瓦数片がある。埋土の状況から平安時代後半の埋没と考えられる。

ＦⅡ18号井戸

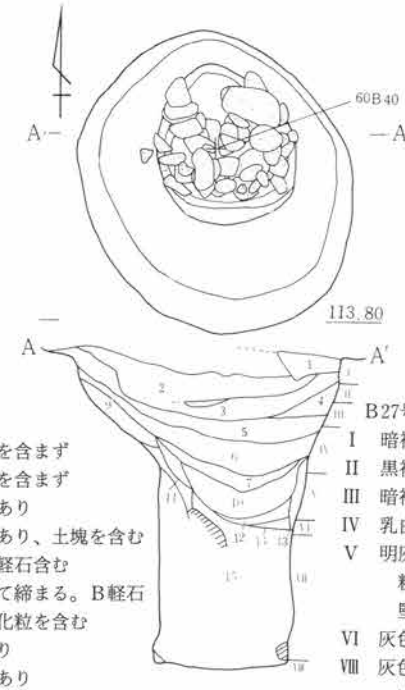
Ｆ区の南西部に位置し、63・64Ｆ６・７の範囲にある素掘り掘形の井戸である。調査時にはＦ57号竪穴が当跡の上屋遺構と考えられていたが、土層記録の検討からＦⅡ18号井戸がＦ57号竪穴の埋土を切り込んでいることが明らかになった。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体とする。平面は径1.6mの円形を呈する。上面より深さ50cmまで僅かに開口し、径約１mに狭まって底面に至る。深さ3.05mを測り、断面形は弱い漏斗状になる。壁面は深さ1.2mから下位に崩落が生じている。出土遺物はなく、中世以降の埋没であろう。



B1号井戸



B2号井戸



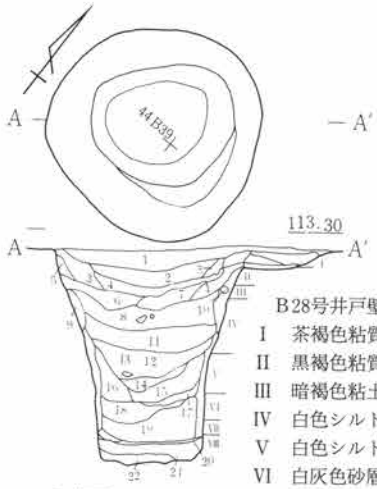
B27号井戸

1　暗褐色土　軽石を含まず
2　暗褐色土　軽石を含まず
3　暗褐色土　粘性あり
4　暗褐色土　粘性あり、土塊を含む
5　暗灰褐色土　B軽石含む
6　灰褐色土　極めて締まる。B軽石・酸化粒を含む
7　灰色土　粘性あり
8　黒褐色土　粘性あり
9　暗褐色土　酸化粒含む、締まりあり
10　暗灰褐色土　B軽石含む
11　黒褐色土　粘性あり
12　灰褐色土　B軽石含む
13　黒褐色土　粘性あり
14　白色粘土層　締まりなし
15　暗灰褐色　B軽石含む。粘性あり

B27号井戸壁面

Ⅰ　暗褐色土
Ⅱ　黒褐色土　粘性
Ⅲ　暗褐灰色土シルト
Ⅳ　乳白色シルト
Ⅴ　明灰茶褐色土　砂質粒子荒い　極めて堅い
Ⅵ　灰色細砂層　堅い
Ⅶ　灰色砂礫層　硬小さい　極めて堅く締まる
Ⅷ　酸化砂層

B27号井戸

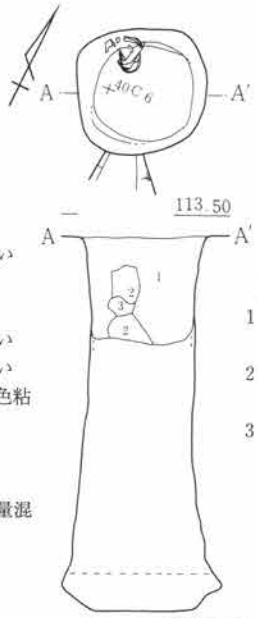


B28号井戸壁面

Ⅰ　茶褐色粘質土
Ⅱ　黒褐色粘質土
Ⅲ　暗褐色粘土層
Ⅳ　白色シルト層
Ⅴ　白色シルト縞状　灰色砂層
Ⅵ　白灰色砂層　荒い　極めてよく締まる
Ⅶ　灰色砂層　やや堅く締まる
Ⅷ　こぶし大の石　灰色細砂層混じる

1　B軽石
2　B軽石　灰褐色砂質土
3　灰褐色砂質土
4　B軽石　灰色砂質土
5　粘性褐色土
6　灰色砂質土　B軽石　粘性黄褐色シルト土粒を多く含む
7　灰色砂質土　白色シルト混　粘性　縞状
8　灰色砂質土　粘性褐色土を混える
9　灰色砂質土　粘性極めて強い　締まりあり
10　褐色粘質土塊
11　暗灰褐色砂質土　B軽石　茶褐色土粒を混える
12　暗灰褐色砂質土　B軽石　茶褐色土粒を混える　粘性あり
13　白色シルト塊
14　暗褐色土　B軽石　粘性強い
15　暗褐色土　粘性強い
16　褐色土　B軽石　粘性強い
17　黒褐色土　B軽石　粘性強い
18　黒褐色土　B軽石　砂質強い
19　暗褐色砂質土層　壁際に白色粘土粒を混える
20　暗灰色粘土層
21　暗灰色砂質層
22　暗灰色粘土層　B軽石を少量混える

B28号井戸



C20号井戸

1　暗黒褐色土　汚れたB軽石を主とする　砂質
2　地山シルト（砂質）　大形黄灰色塊を含む
3　大形　地山シルト塊

C20号井戸

Fig. 296　B1・2・27・28・C20号井戸

0　2m

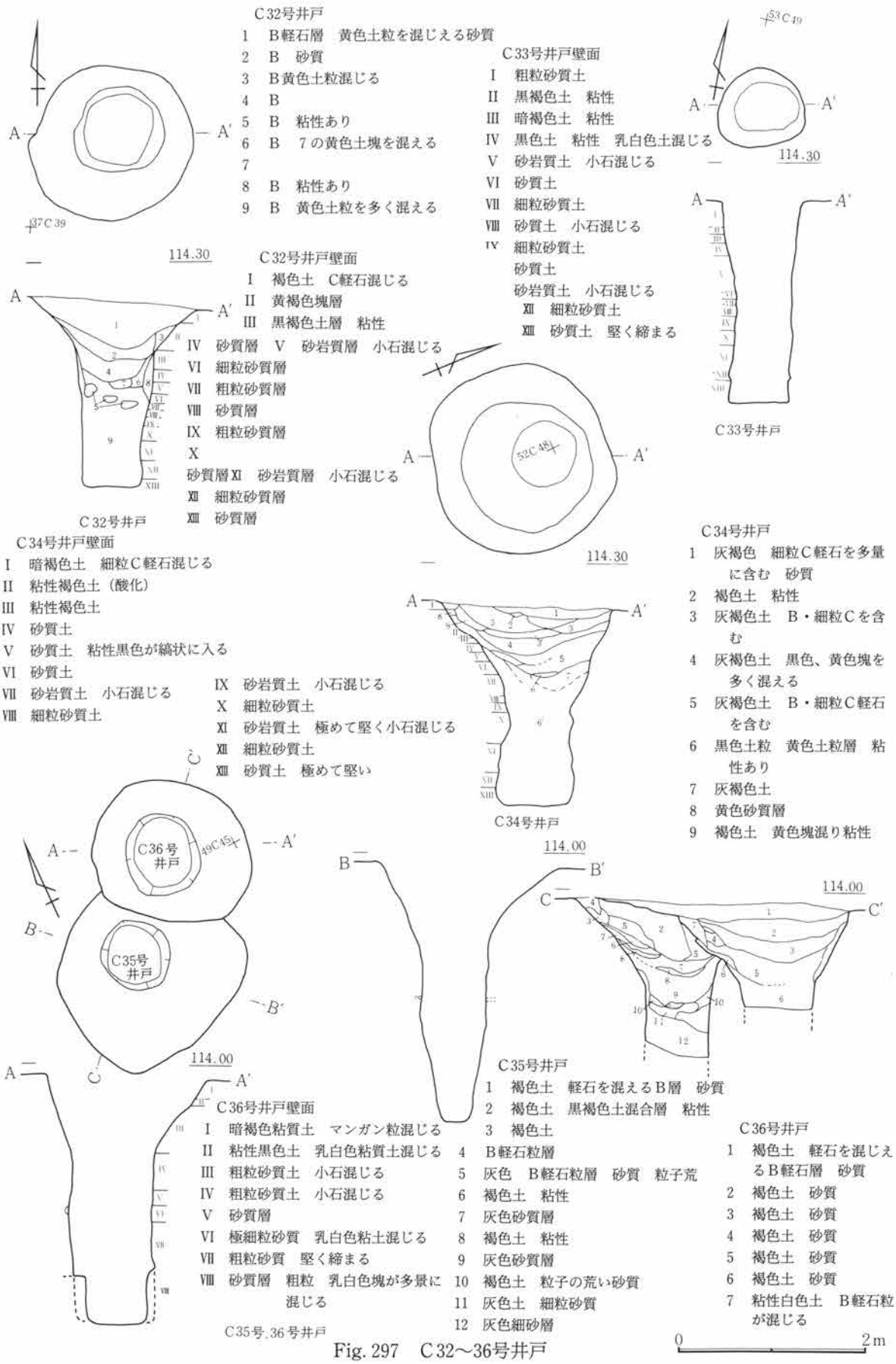


Fig. 297　C32～36号井戸

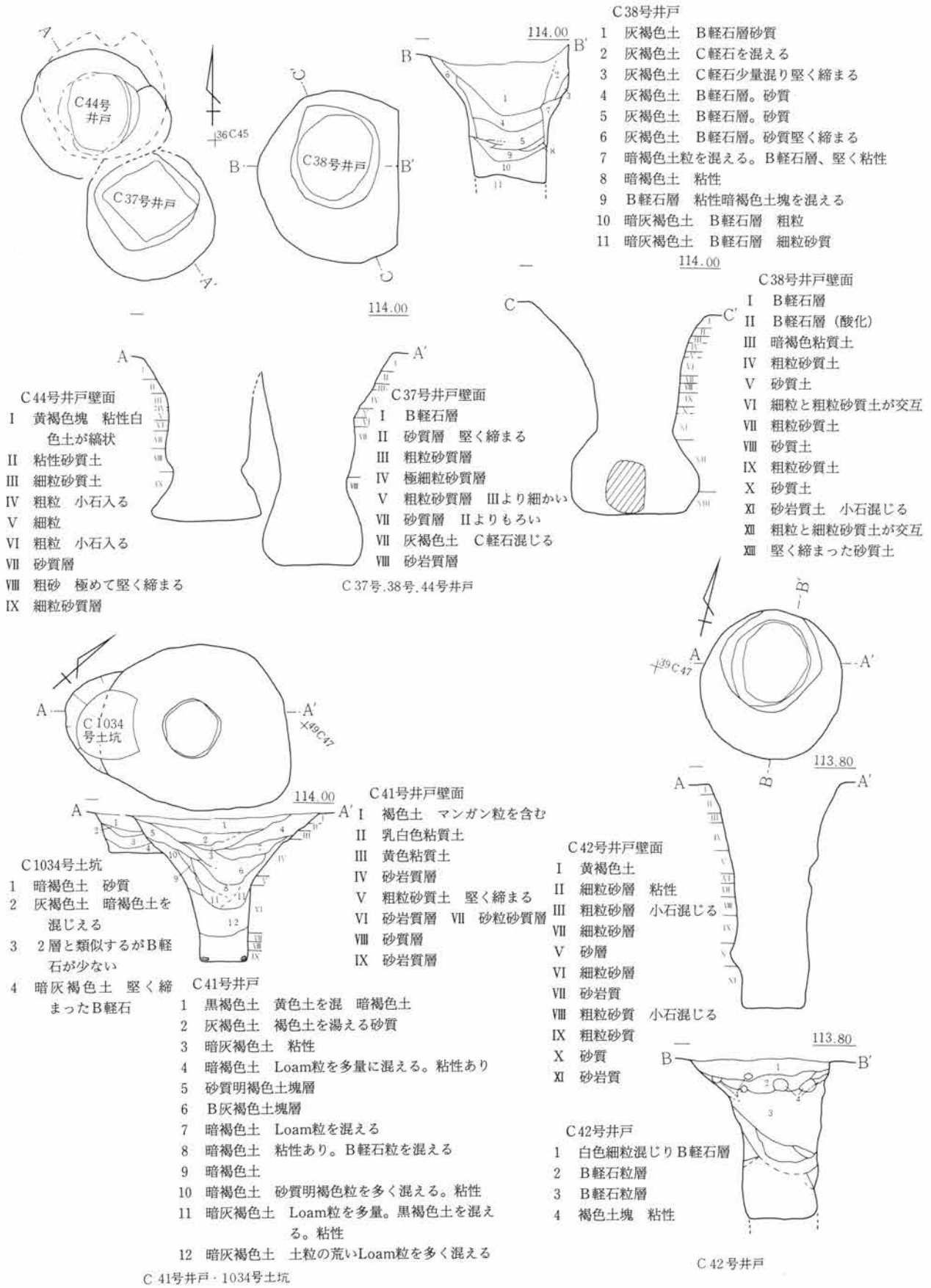


Fig. 298　C37・38・41・42・44号井戸・1034号土坑

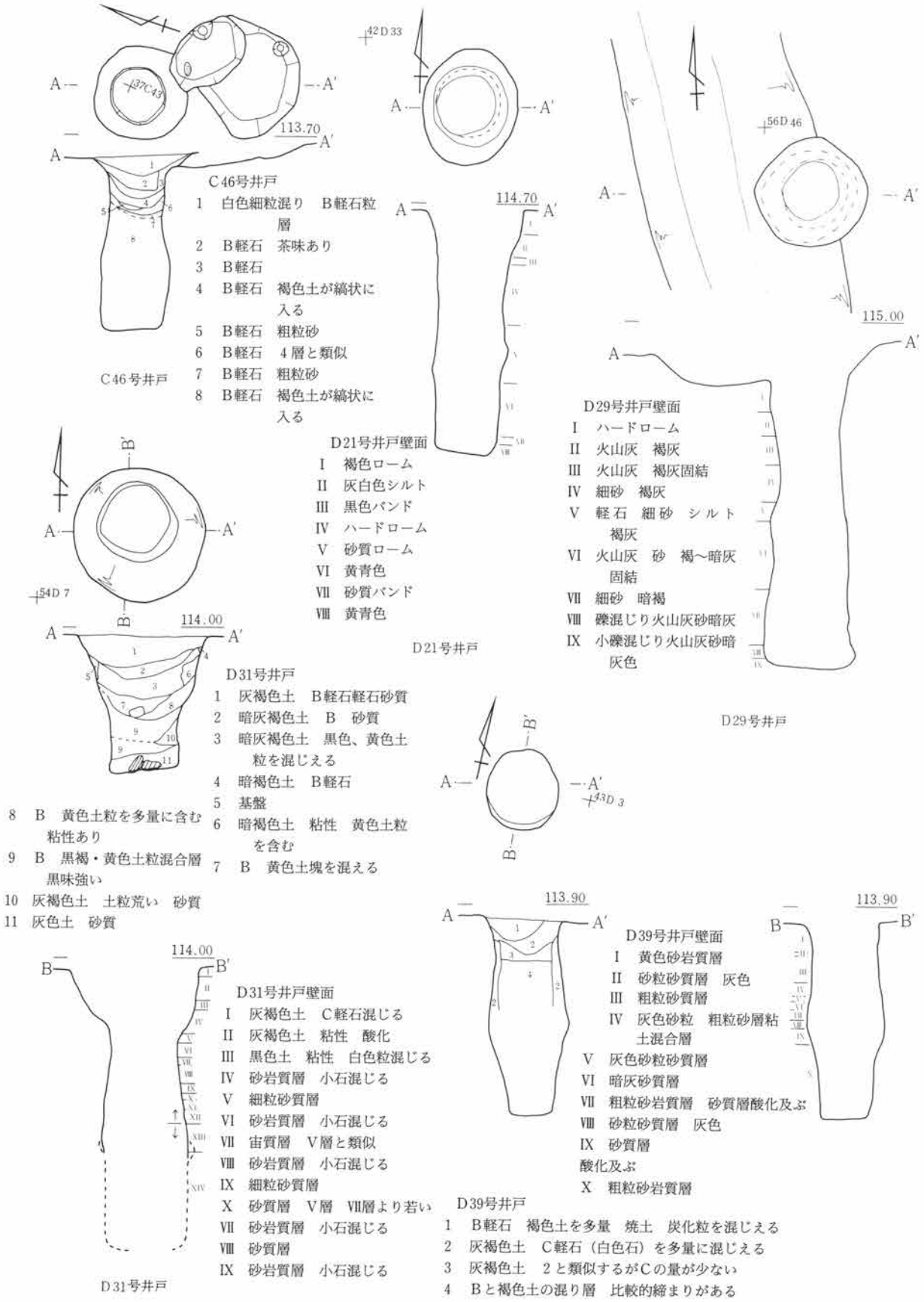


Fig. 299　C46・D21・29・31・39号井戸

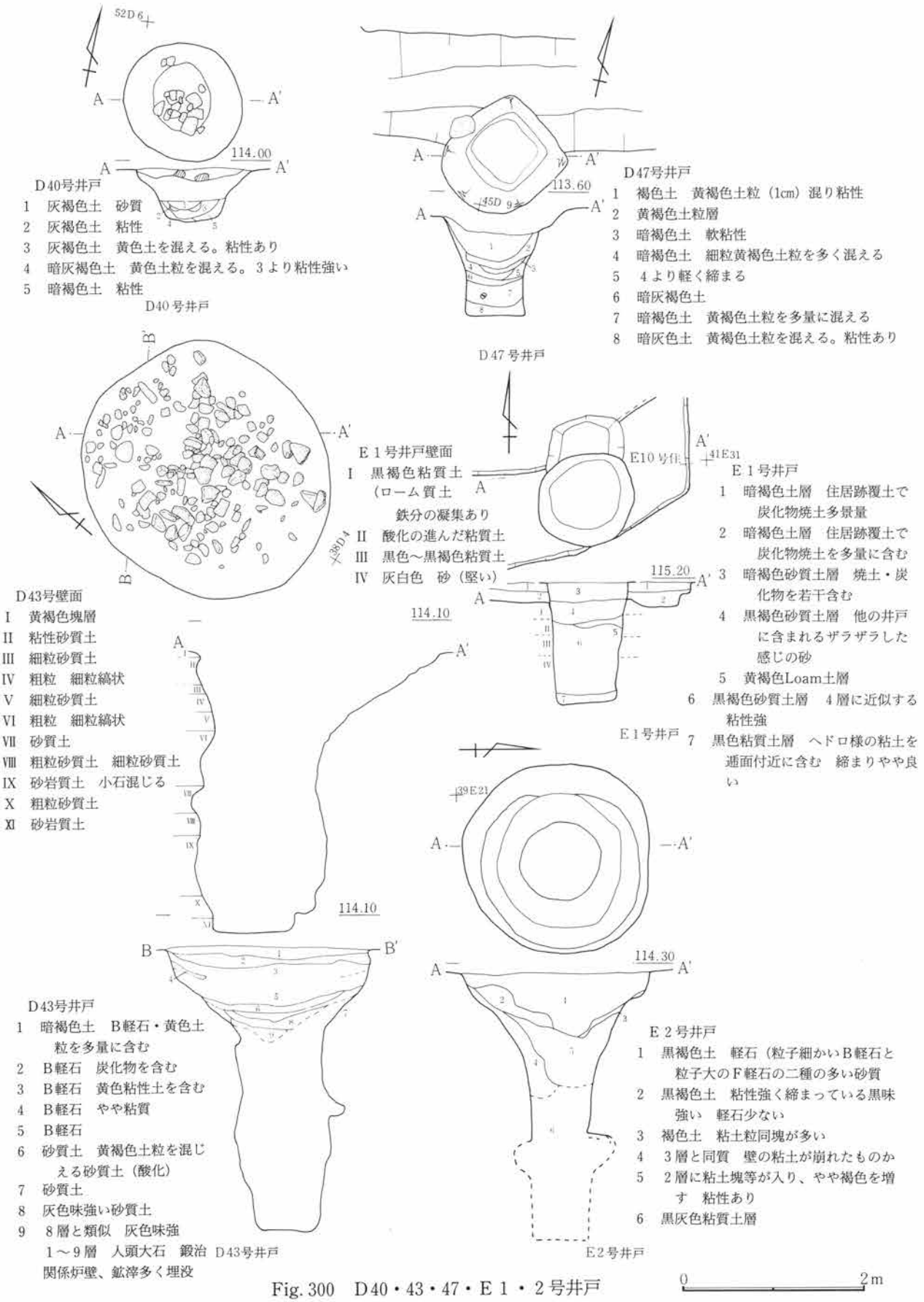
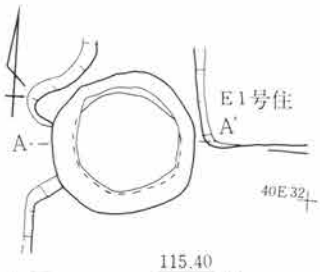


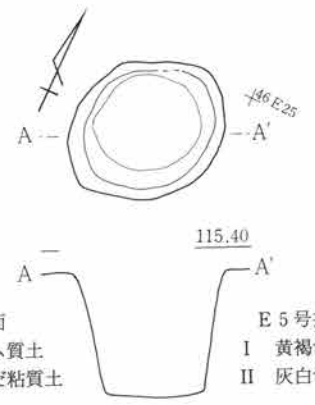
Fig. 300　D40・43・47・E1・2号井戸



E３号井戸壁面
I　黄褐色ローム質土
II　酸化の進んだ粘質土
III　黒色粘質土
IV　灰白色砂（堅い）

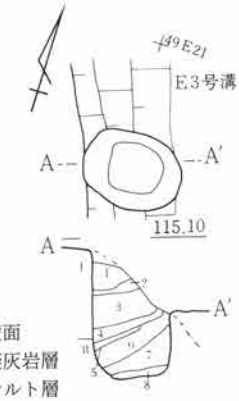
E３号井戸
1　暗褐色　浅間B軽石を主体とし、僅かに暗褐色を含む　もろく締まり弱い
2　暗褐色　黄褐色土塊を含む　締まり弱い
3　暗褐色　黄褐色土塊は２より小さく量も少ない　暗褐色土塊を多く含む
4　暗褐色　黄褐色塊質土　褐色土の粗粒を多く含む　B軽石の混入は１～３より少ない
5　暗褐免　灰白色　褐色粘質土を多く含む　粘性あり　B軽石は少ない
6　黒色土　ヘドロ状の粘質土と灰白色砂の混在層、締まりやや良い

E３号井戸



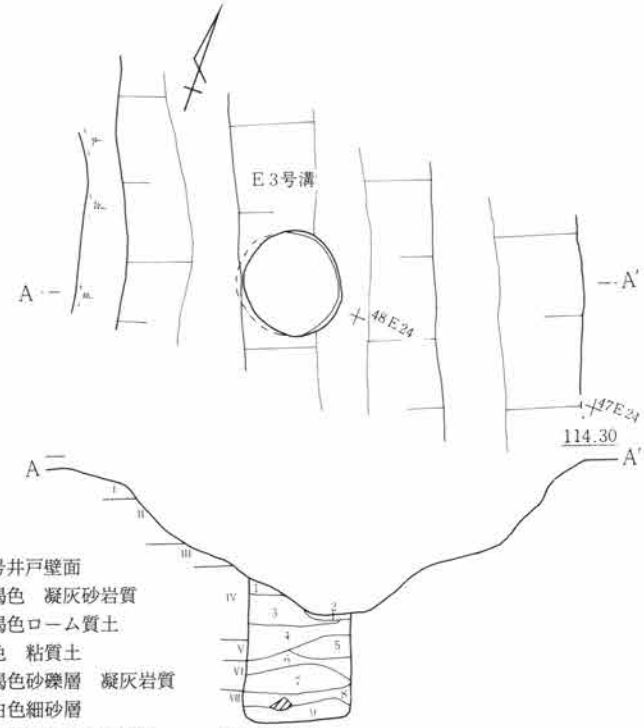
E４号井戸

E５号井戸壁面
I　黄褐色　凝灰岩層
II　灰白色　シルト層



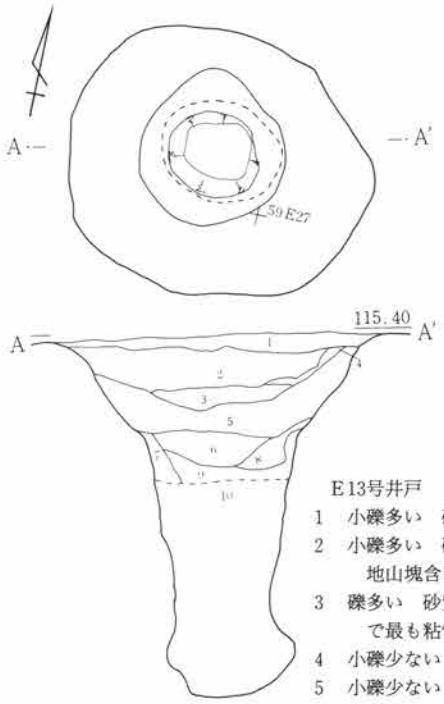
E５号井戸
1　暗褐色　粘土質土層
2　黄褐色　凝灰岩塊
3　黒褐色　砂質土層＋凝灰岩塊
4　黄褐色　凝灰岩塊
5　黒褐色　砂質土層
6　黒褐色　５と類似
7　黒褐色　砂質土層＋凝灰岩塊少量含む
8　黒褐色　粘質土層

E５号井戸



E６号井戸壁面
I　茶褐色　凝灰砂岩質
II　黄褐色ローム質土
III　黒色　粘質土
IV　黄褐色砂礫層　凝灰岩質
V　灰白色細砂層
VI　灰白色シルト～細砂層
VII　灰白色細砂層

E６号井戸
1　暗褐色土　粘性強く　締まり良い　２に対し小礫を含まない
2　暗褐色土　崩壊した　砂礫を多く含む　ややもろい　締まり良い　３号溝底面にあたり鉄分凝集が認められる
3　暗褐色土　崩壊した　砂礫を多く含む　もろい　締まりやや弱い
4　黒褐色土　１～３より暗い　B軽石を主体とする　締まりやや弱い
5　暗褐色土　４に砂礫（凝灰岩質）塊が混在したもの　４より締まり弱くもろい
6　暗褐色土　４に均質に細砂～小礫を含む　もろく４より締まり弱く５より良い
7　暗褐色土　B軽石を主体とし　小礫をほとんど含まない　締まり弱い　粘性少ない
8　くすんだ灰褐色　７に灰白色細砂～シルトを多く含む　締まり弱い
9　黒褐色～黒色　ヘドロ様の粘質土　締まり８より良い

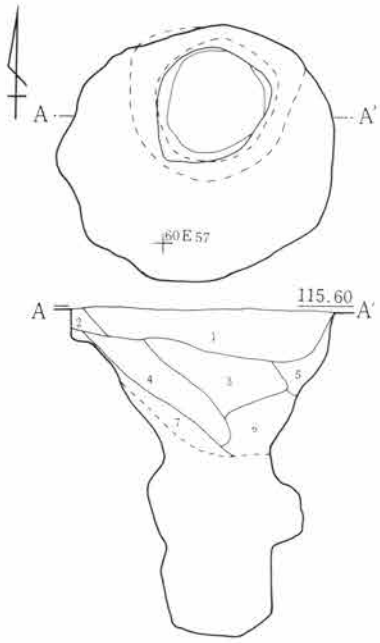


E13号井戸
1　小礫多い　砂質でやや褐色
2　小礫多い　砂質でやや褐色　小礫・地山塊含む
3　礫多い　砂質でやや褐色　埋土の中で最も粘性　地山塊多い
4　小礫少ない　砂質で黒褐色　５と同質
5　小礫少ない
砂質
6　小礫ない　砂質で５より硬質
7　小礫ない　やや粘質で質感は５、６と同じ
8　小礫少ない　６より砂質
9　小礫少ない　６、８より粘質

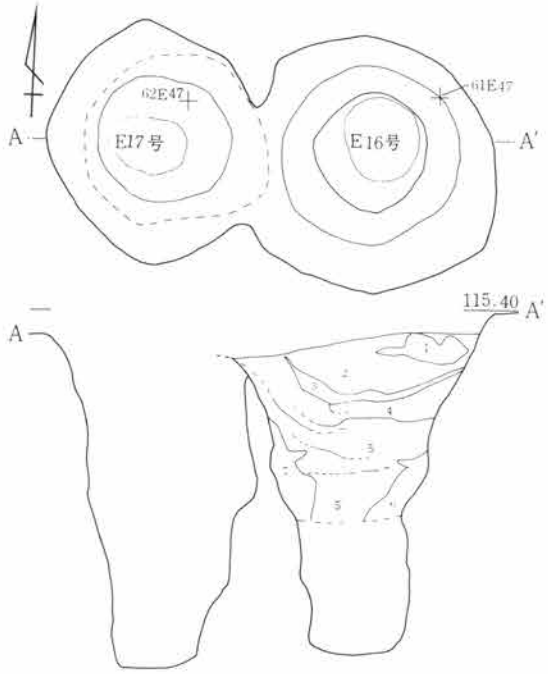
E13号井戸

0　2m

Fig. 301　E３～６・13号井戸

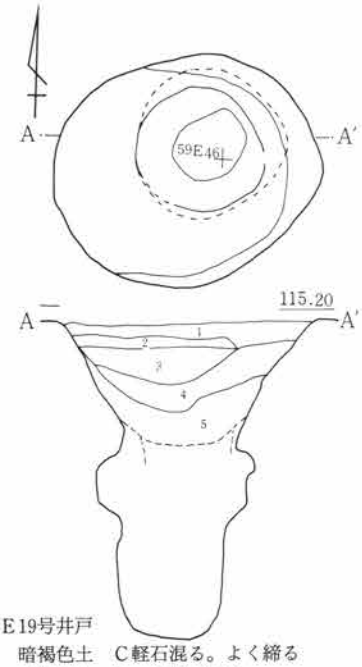


E15号井戸
1　暗褐色砂質土層　B・C軽石混じる。締まりあり
2　暗褐色土層　C軽石混（1～5㎜）のもの
3　極暗褐色砂質土層　B軽石・炭化物粒混る
4　極暗褐色砂質土層　地山塊50%（1－5㎝）up.C軽石・炭化物混る
5　極暗褐色砂質土層　B軽石炭化物混り、3層より粗　締まり弱い
6　黒粟色土層　B軽石主体、炭化物粒混る
7　暗褐色粘質土層　粒子細かい



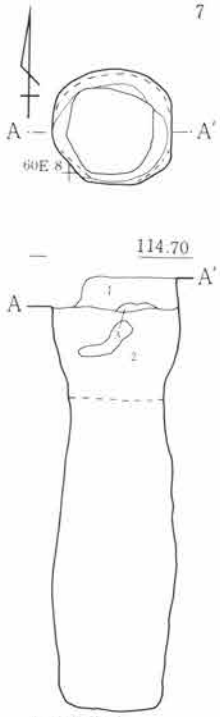
E16号井戸
1　褐色　地山細塊を含む。B軽石含む
2　黒褐色　B軽石を含む
3　黒褐色　B軽石を含む、さらに木炭層が加わる
4　B軽石を含む。地山塊やや多い
5　B軽石を含む。さらに塊多い
5′　井戸が空の状態で生じたすきまの多い層
6　黒褐色　B軽石を含む。地山塊を多く含む。砂質
7　6と同様。相対する層

E15号井戸



E19号井戸
1　暗褐色土　C軽石混る。よく締る
2　暗褐色土　B・C軽石混る
3　暗褐色土　B軽石主体　地山塊少量混る
4　黒褐色土　B軽石主体　粘質土．炭化物含む
5　暗褐色土　B軽石主体　炭化物含む

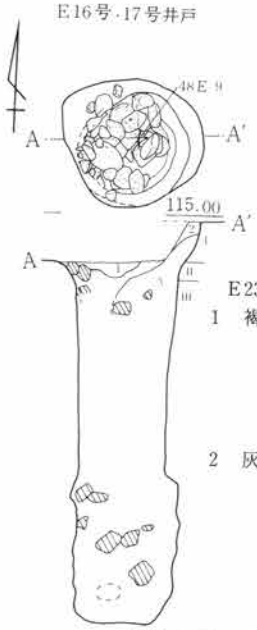
E19号井戸



E22号井戸
1　黒褐色　砂質
2　黒褐色　砂質　1層より少し黒い
3　黒褐色粘性土

E22号井戸

E16号・17号井戸



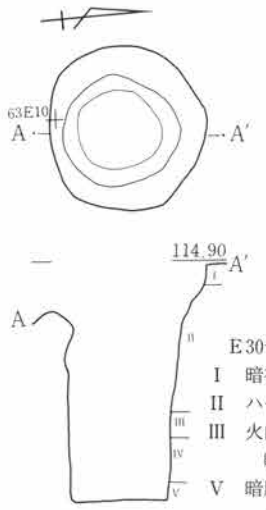
23号井戸壁面
I　暗褐色土
II　暗赤褐色土
III　淡黄灰色

E23号井戸
1　褐色土層　C軽石風化スコリア等を含み、B軽石を多く含む。やや細粒のシルトにて粘性強くよく締まっている若干のカーボンを含む
2　灰褐色土層　C軽石風化スコリアカーボンを若干含み、B軽石を多く含む。砂質シルトにて粘性やや弱く。よく締まるが軟質である。淡黄灰色が基調
3　暗褐色土層　C軽石及びカーボンを希に含むB軽石を多く含む。細粘のシルトにて粘性2に比べても弱くよく締まりやや硬質である。暗褐色土が基調

E23号井戸

0　2m

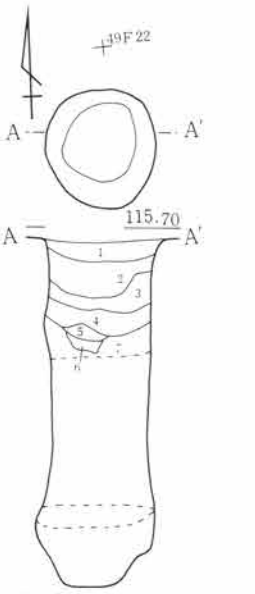
Fig. 302　E15～17・19・22・23号井戸



E30号井戸壁面
I　暗褐色土
II　ハードローム
III　火山灰砂(褐)固結　IV　暗灰色土　細砂
V　暗灰色土　小礫混じり火山灰砂　固結

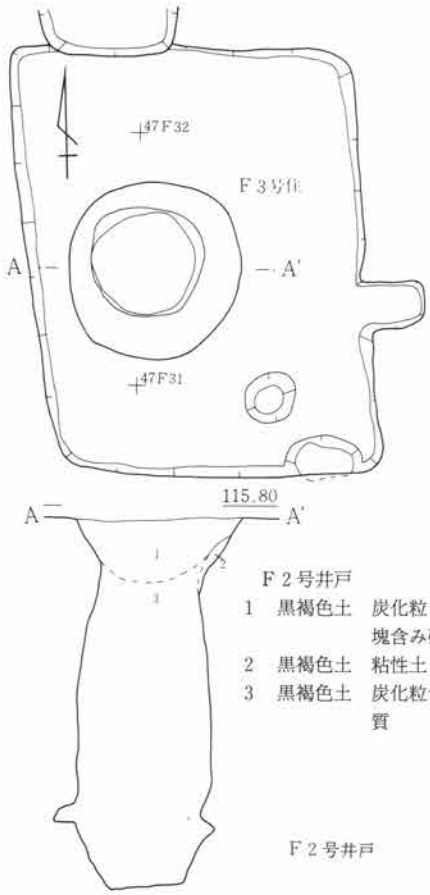
E30号井戸

E31号井戸
1　暗褐色土　C軽石・焼土塊・炭化物が多量に混在
2　暗褐色土　1より粒が細かく混在
3　暗褐色土　混入物が少ない
4　暗褐色土　褐色粘性土を含む
5　暗褐色土　CC軽石あまり含まず炭化物多い
6　明暗褐色土　C軽石を含まず白桃色粘土粒を含む
7　褐色土　暗褐色土をベースとするが褐色粘性土を多量に含む
8　明暗褐色土　6層に類似するが明かるい
9　明暗褐色土　6層に類似　やや混入物多い
10　暗褐色土　6層に類似するが白桃色粘性土混在しない　粘性あり
11　暗褐色土　10層に類似するがC軽石を含む　粘性あり
12　暗褐色土　10層に類似するが　10層より明かるい　粘性あり
13　暗褐色土　10層とほとんど同じ　粘性強い
14　白色粘土　白色粘土塊　粘性強い
15　暗灰褐色土　白色粘土が褐色土と混在した層　粘性強い
16　白桃色粘土　塊　粘性強い
17　暗褐色土　灰色がかった層　少砂を若干含む　粘性強い
18　暗褐色土　灰色がかった層　少砂を多量に含む　粘性強い　E31号井戸



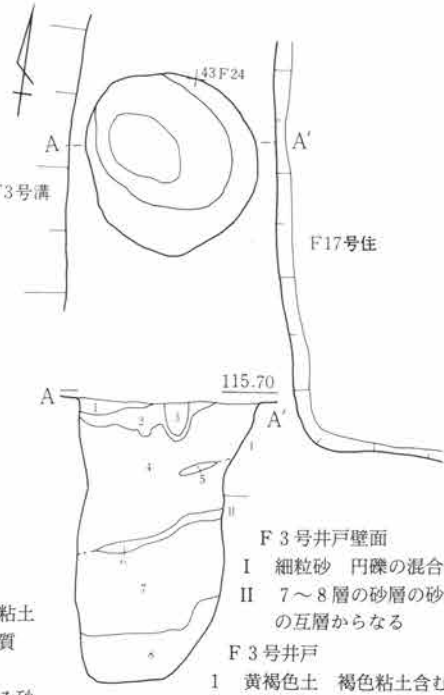
F1号井戸
1　黒色土　B軽石　粘土塊含み砂質
2　黒色土　砂利・褐色土塊・B軽石含み砂質
3　浅褐色土　褐色土塊多量に含み砂質
4　浅黄色土　上位に粘土塊レンズ状に堆積し砂質
5　褐色土塊
6　粘土塊
7　黒色土　砂質

F1号井戸



F2号井戸
1　黒褐色土　炭化粒・粘土塊含み砂質
2　黒褐色土　粘性土
3　黒褐色土　炭化粒含み砂質

F2号井戸



F3号井戸壁面
I　細粒砂　円礫の混合層
II　7～8層の砂層の砂層の互層からなる

F3号井戸
1　黄褐色土　褐色粘土含む
2　黒褐色土　粘性あり
3　黒色土　B軽石　砂質
4　黒色土　B軽石　砂質　褐色粘土塊含む
5　褐色土　粘性
6　褐色土　粘性
7　黒色土　B軽石　砂質　褐色粘土塊含む
8　褐色粘質土とB軽石砂質の混合層

F3号井戸

Fig. 303　E30・31・F1～3号井戸

0　2m

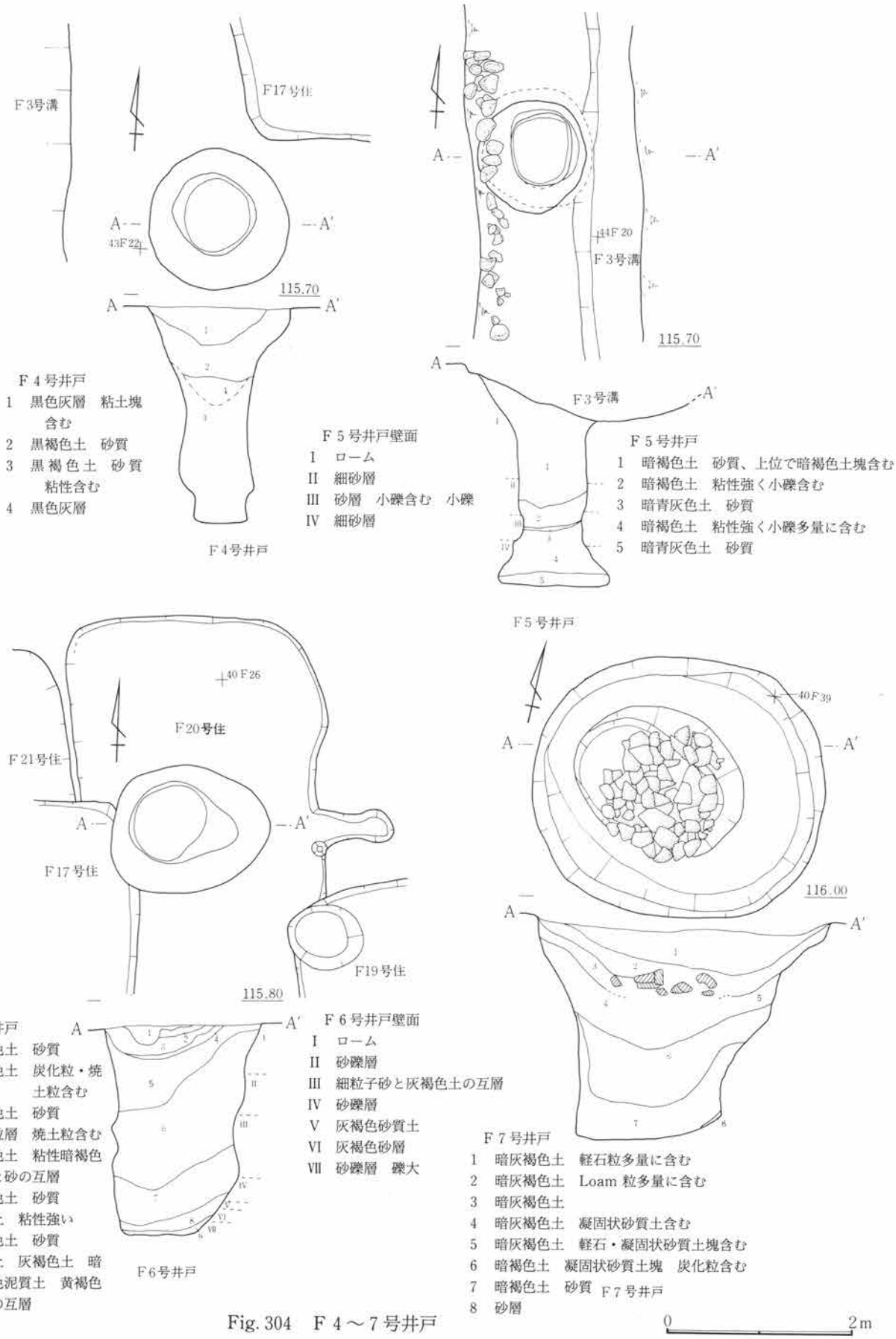


Fig. 304　F４～７号井戸

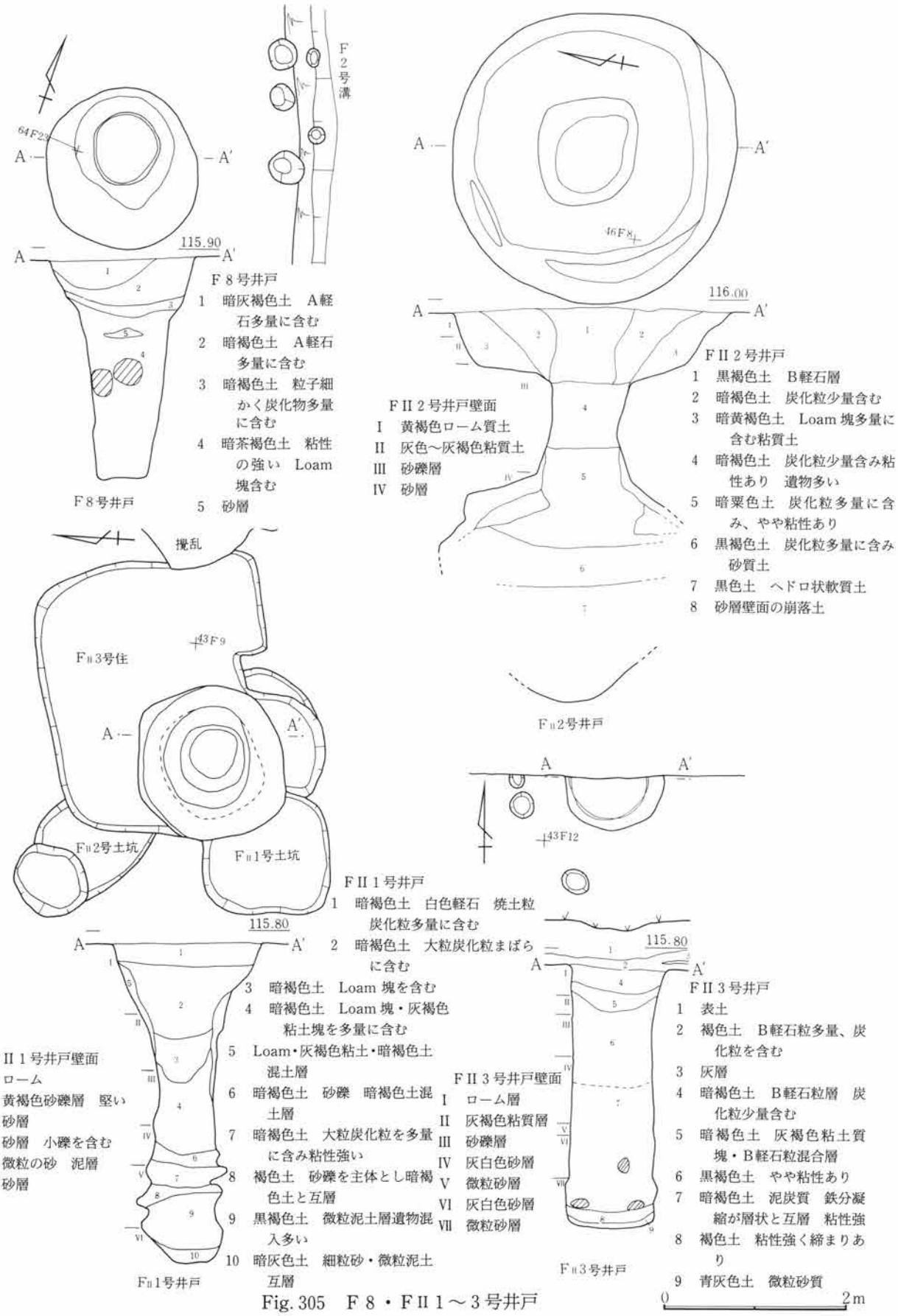


Fig. 305　F８・FII１～３号井戸

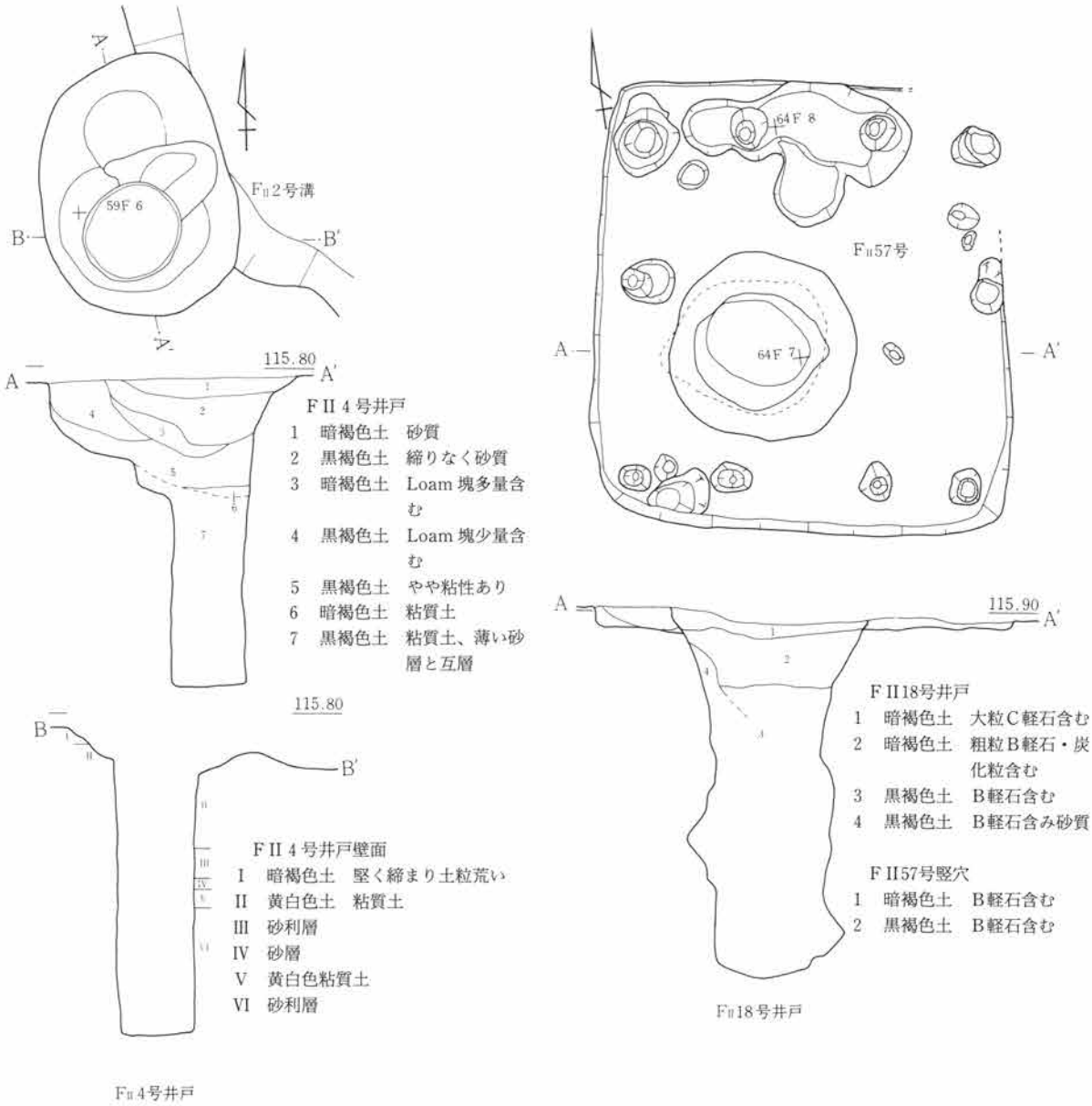


Fig. 306　FII4・18号井戸

0　2m

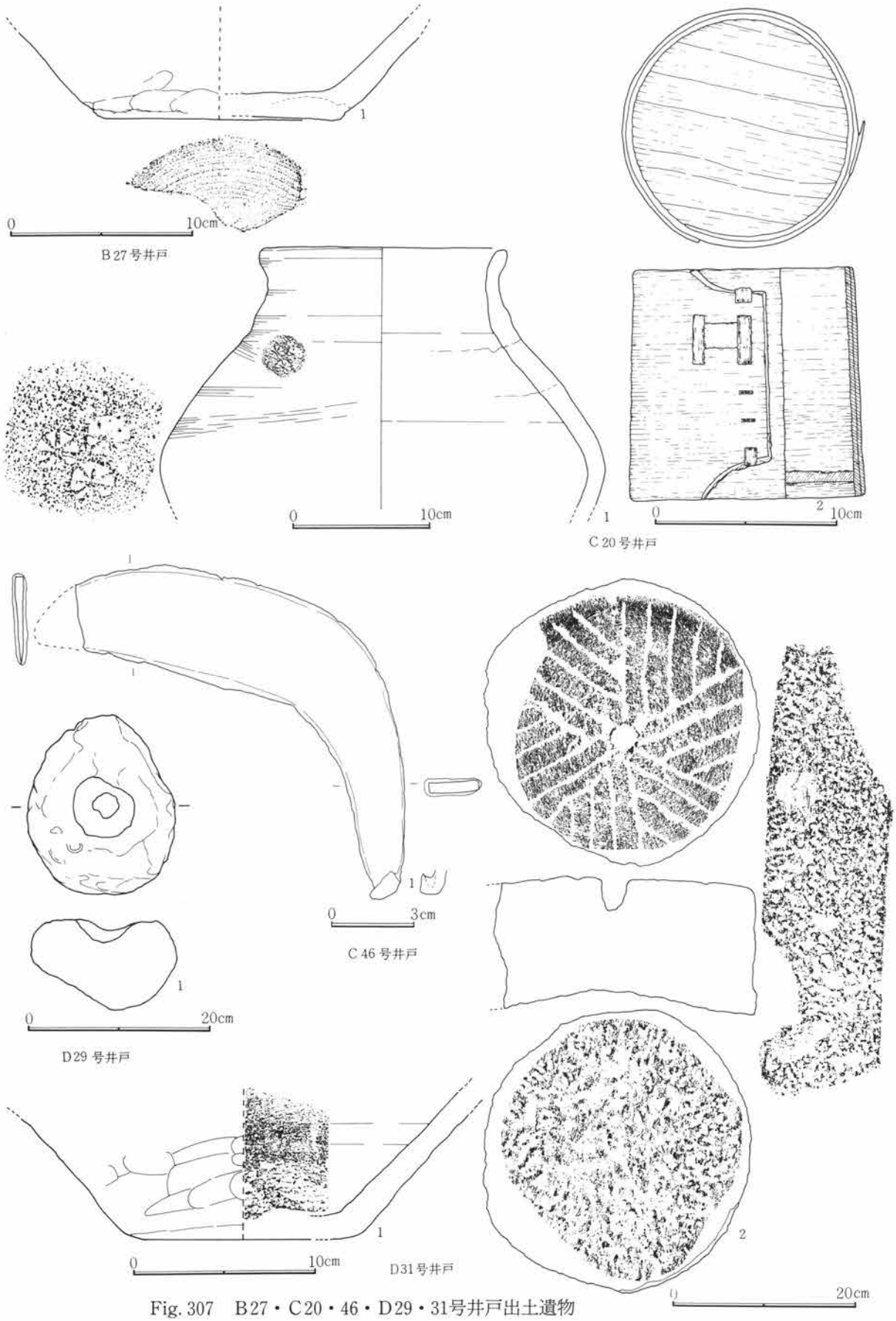
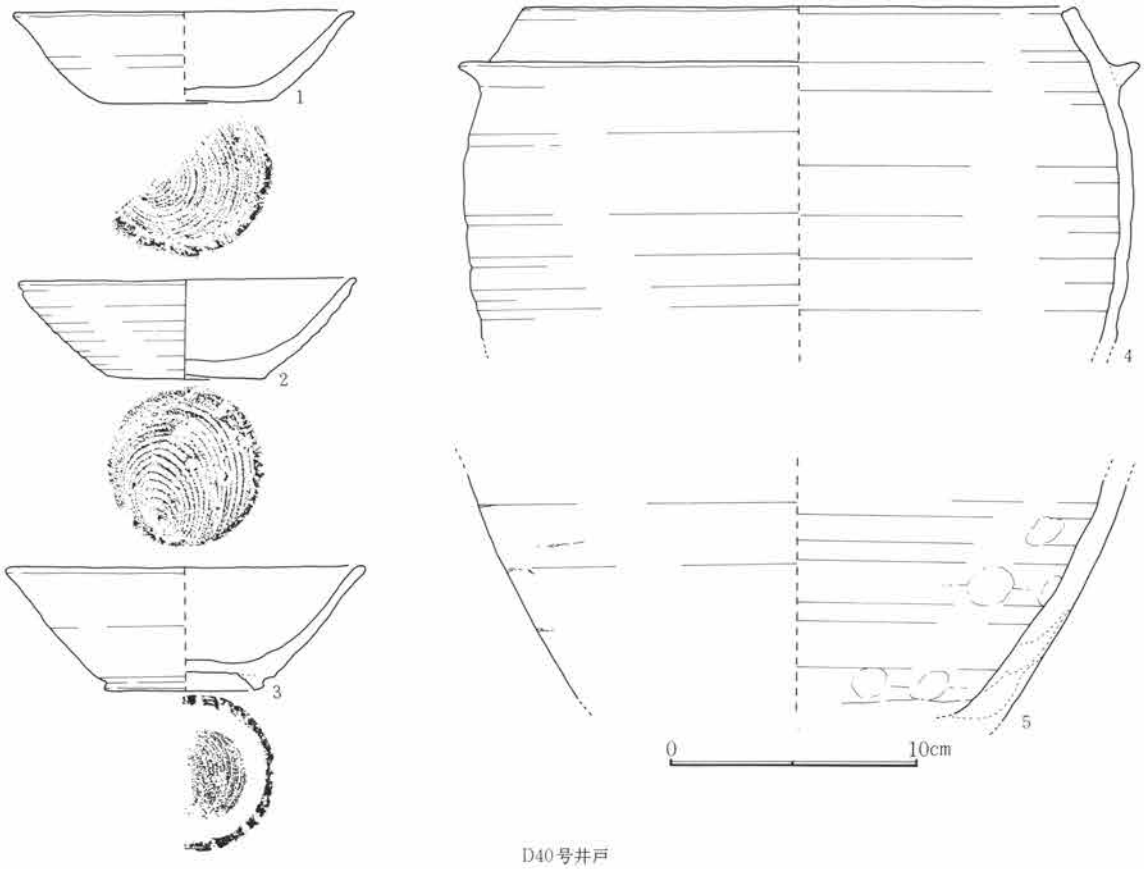
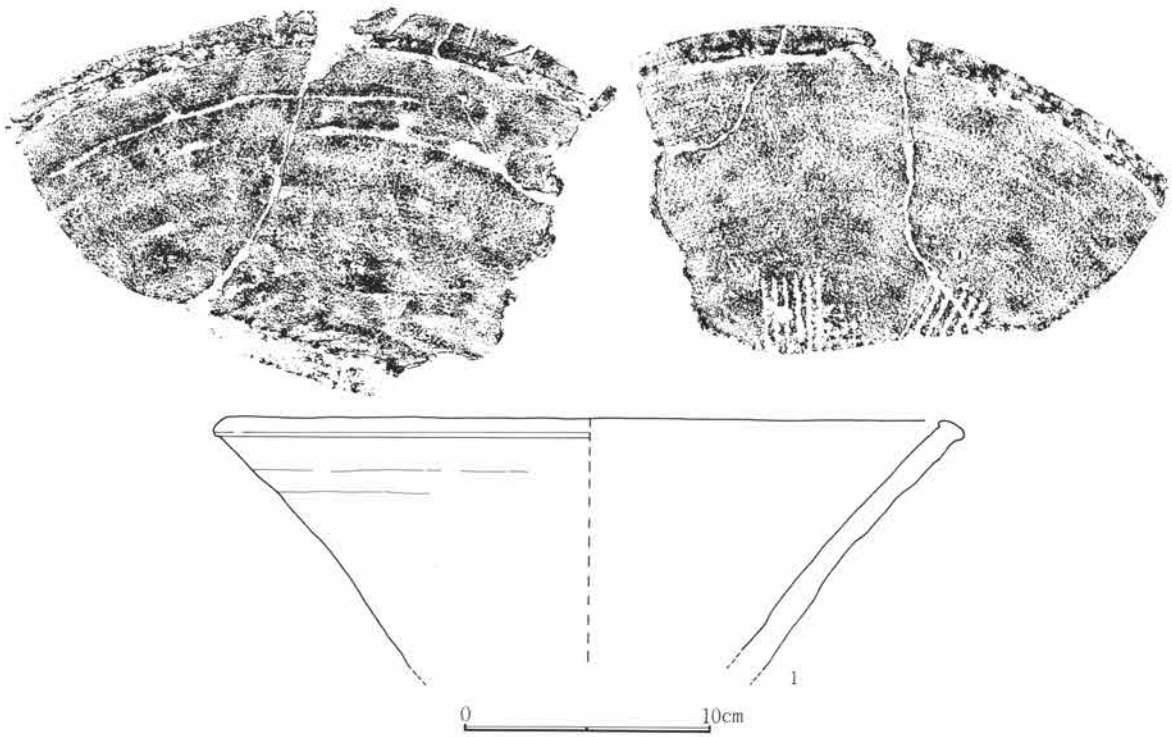


Fig. 307　B27・C20・46・D29・31号井戸出土遺物



D40号井戸



D43号井戸（1）

Fig. 308　D40・43号井戸出土遺物

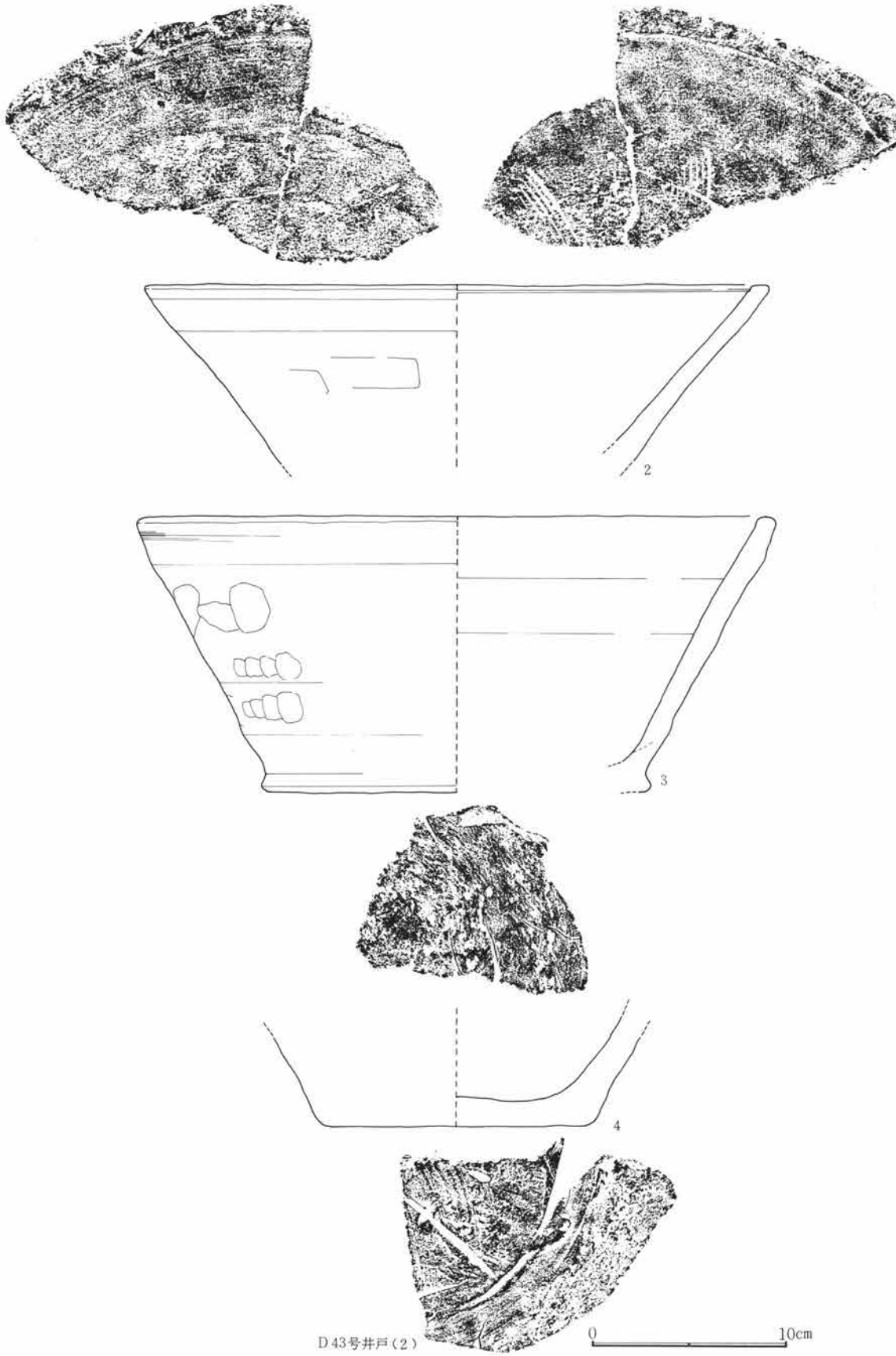


Fig. 309　D43号井戸出土遺物

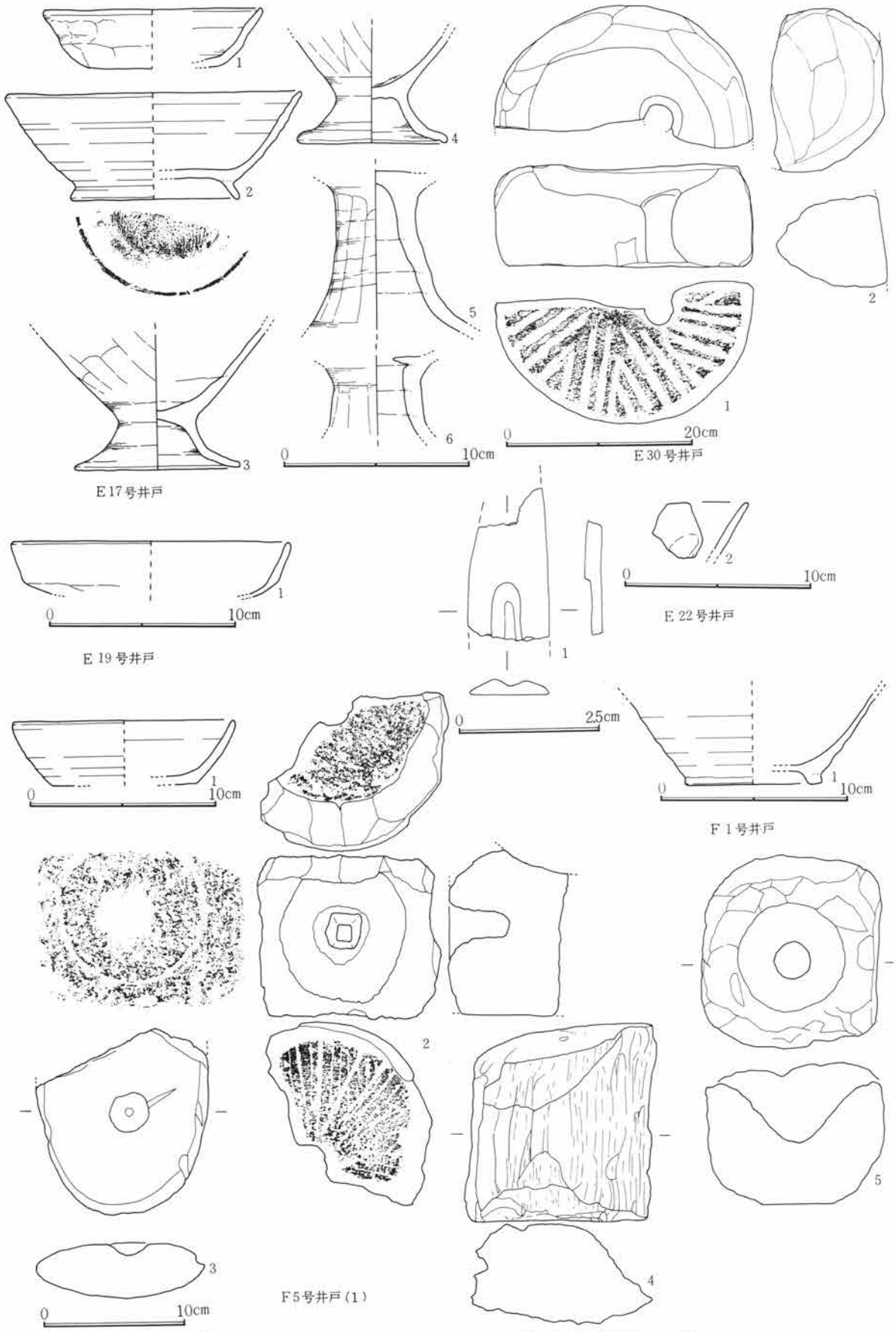


Fig. 310　E17・19・22・30・F１・５号（１）井戸出土遺物

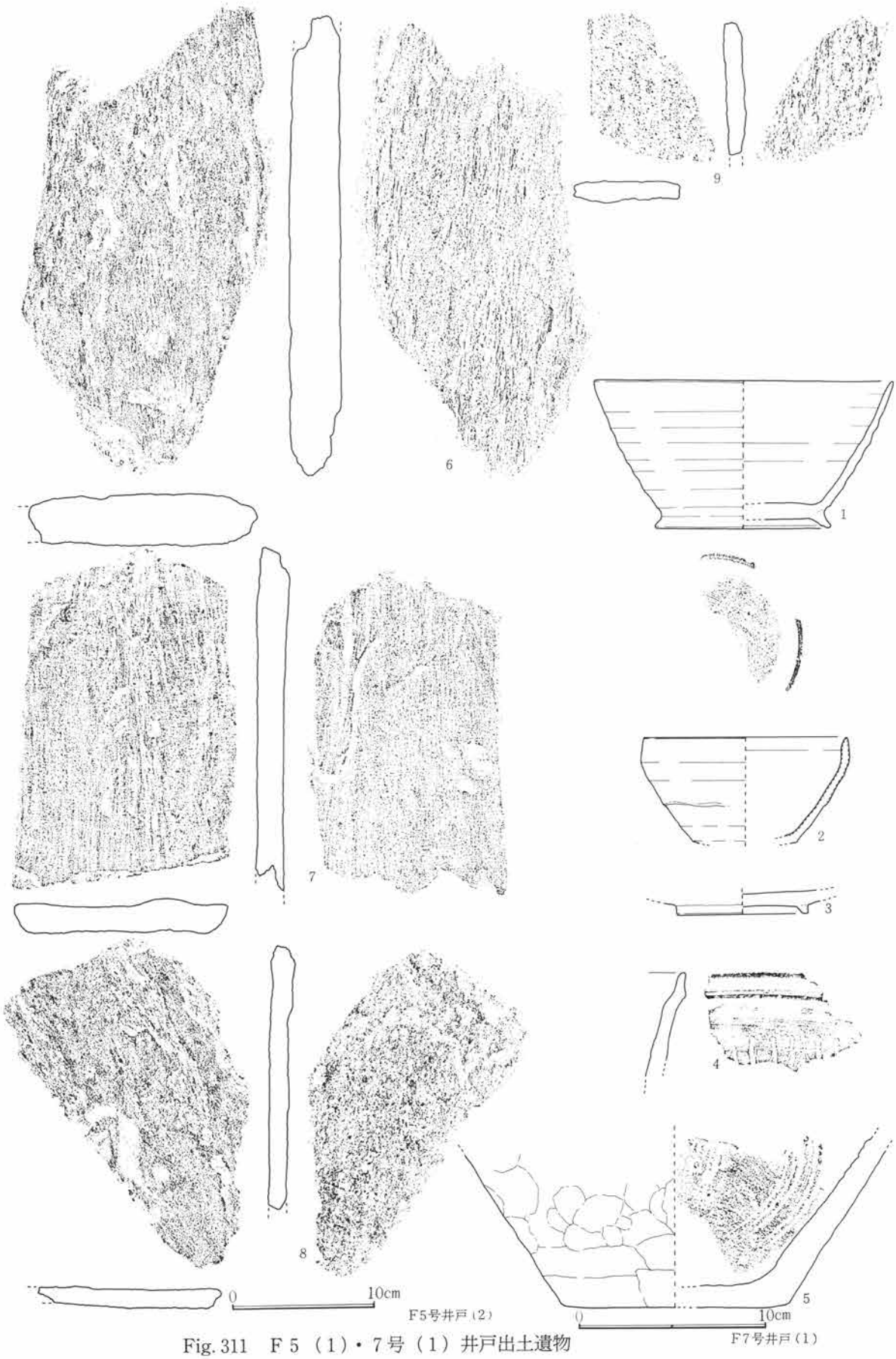
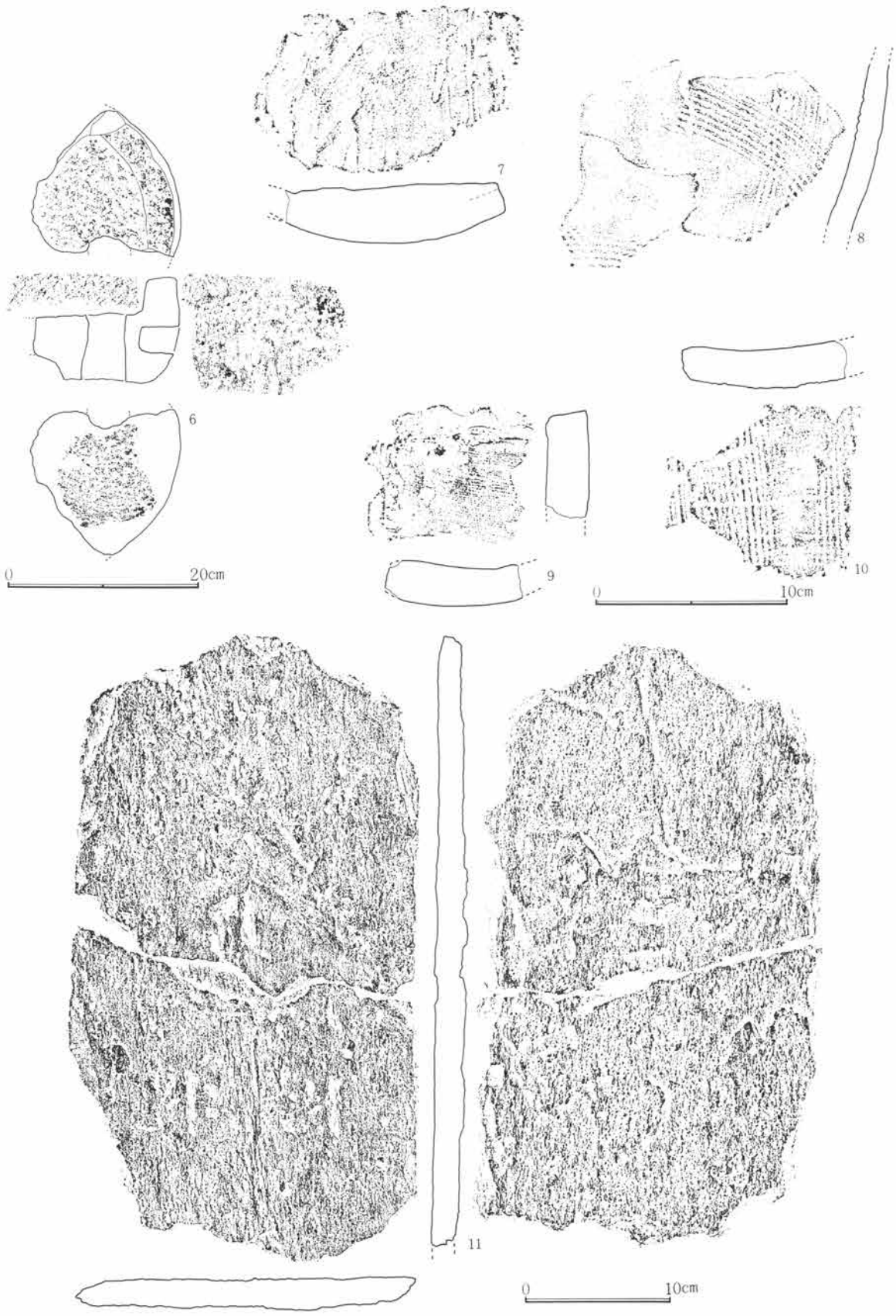
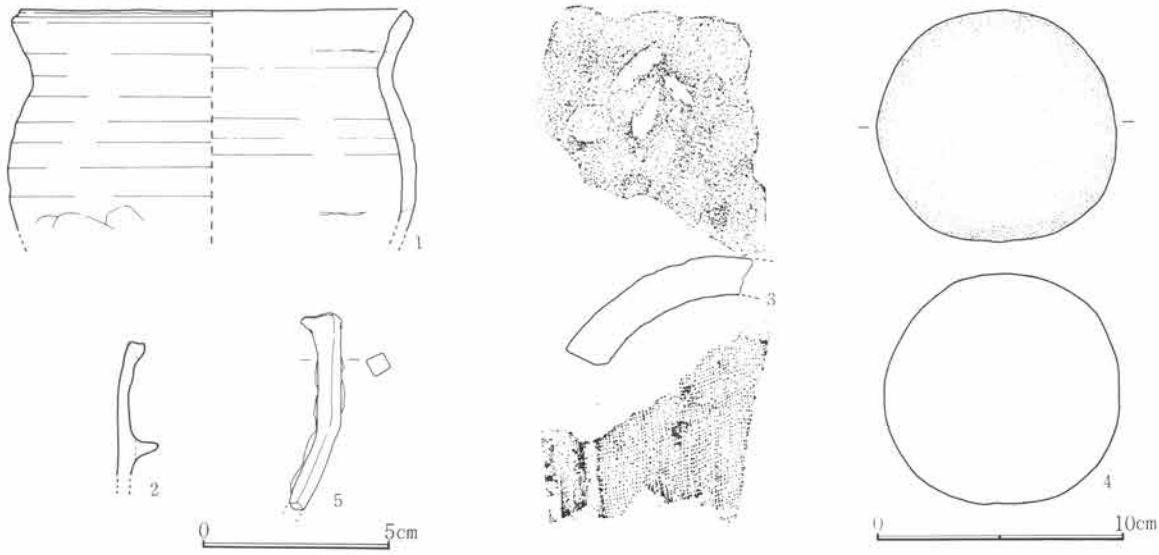


Fig. 311　F 5（1）・7号（1）井戸出土遺物

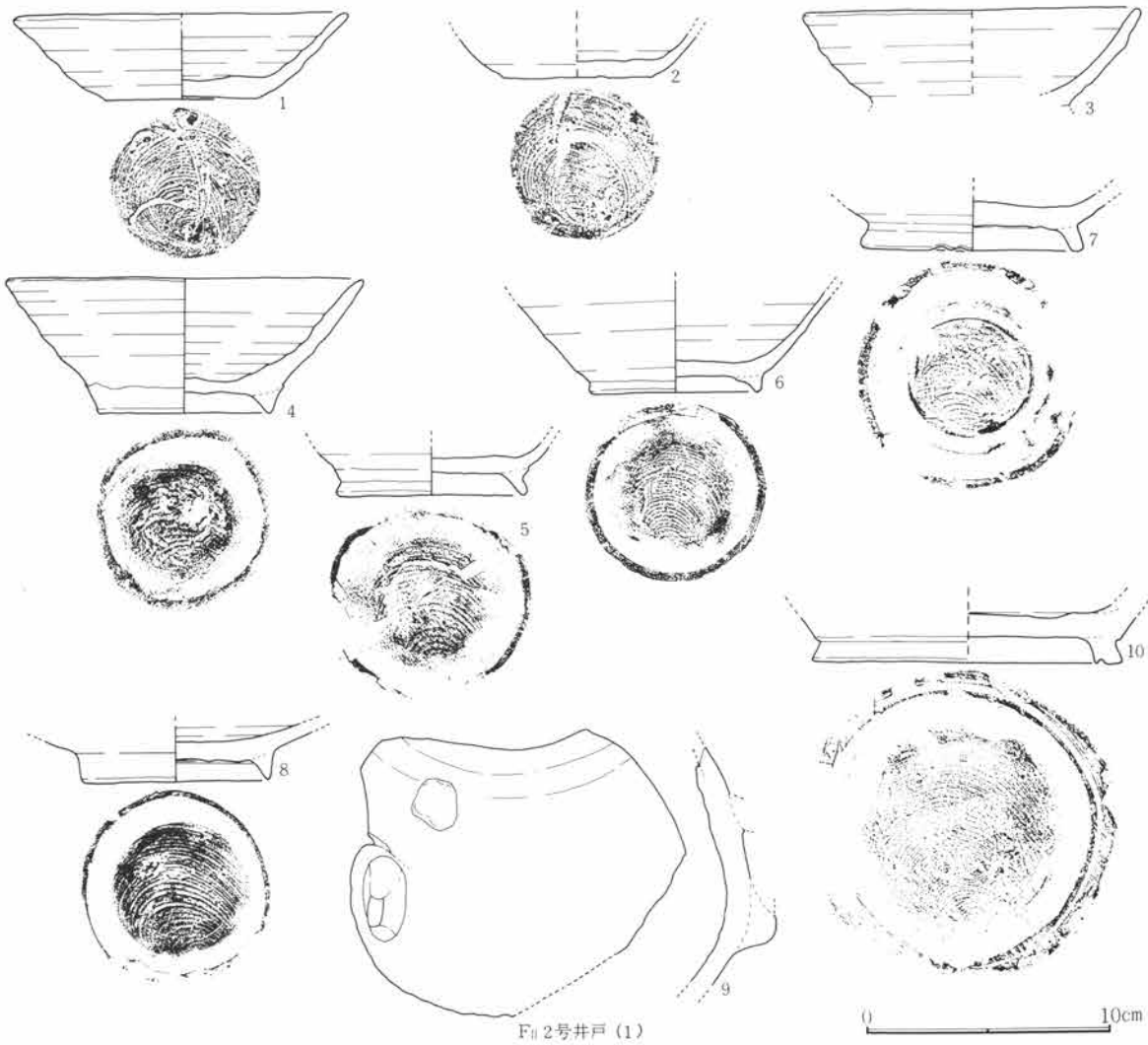


F7号井戸(2)

Fig. 312　Ｆ７号井戸出土遺物（２）



FⅡ1号井戸



FⅡ2号井戸（1）

Fig. 313　FⅡ1・2号（1）井戸岩土遺物

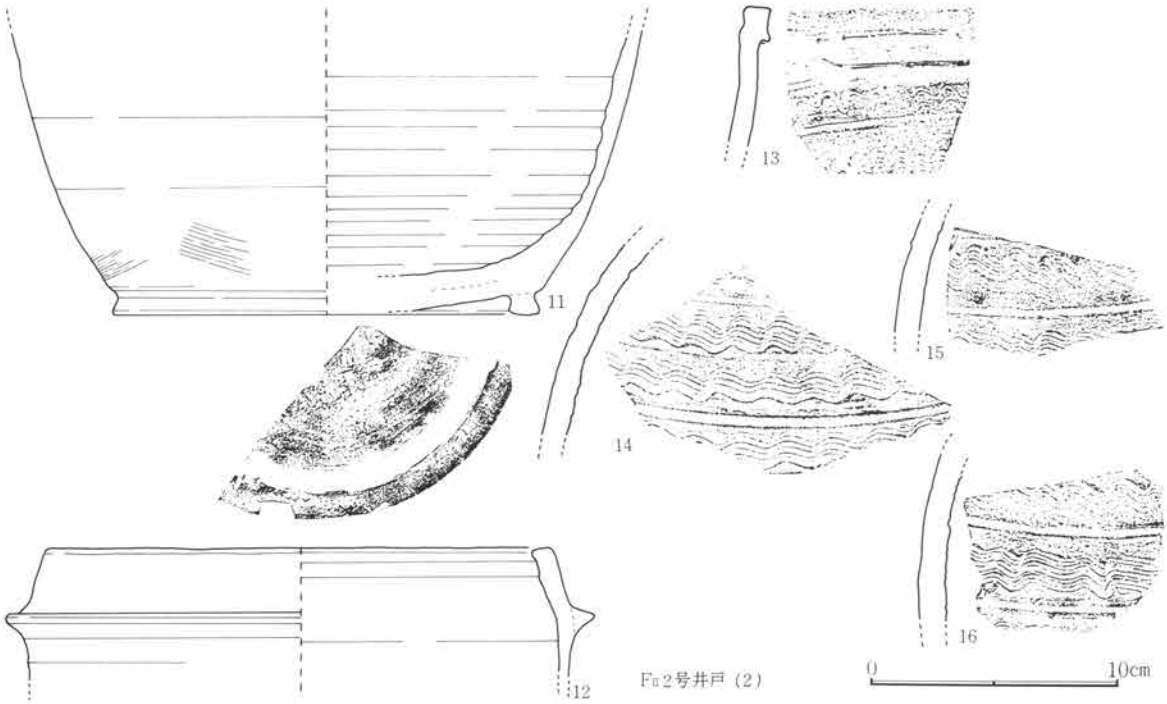


Fig. 314　ＦⅡ２号井戸出土遺物（２）

Ｂ～Ｆ区井戸跡出土遺物観察表（１）

Fig. No PL. No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
307－１ 80－１	Ｂ27井戸 埋土	軟質陶器 擂鉢	底部¼	－×13.2× (5.6)	体部直線的。腰部指頭後撫で。底部回転糸切り。内面摩耗著しく滑沢あり。	①良好 ②灰 ③やや粗白色粒混
307－１ 80－１	Ｃ20井戸	軟質陶器 甕	下半部 欠損	18.4×－× (18.3)	口縁部短かく小さく外反。肩部なで肩。体部外面篦削り後撫で。整形は紐作り。外面肩部に印花文。	①燻し軟質 ②灰 ③やや粗
307－２ 80－２	Ｃ20井戸	木製品 杓	柄部欠 損		杓曲物部。板の巻込部の奥に刻目あり。体部上方に柄の着装透し孔あり。板の巻込部留は桜樹皮使用。	
307－１ 80－１	Ｃ46井戸	鉄製品 鉄鎌	切先き 欠損	長(14.0) 刃幅4.0	峯部緩く孤を描く。刃線は直線的。柄付部大きく鈍角になる。柄付先端は小さく折れる。	
307－１ 81－１	Ｄ29井戸	石製品 凹石	完形	18.0×15.0 ×9.0	不定形人頭大の石を使用。片面に径６cm。深さ３cmの凹みを作り側縁に窪みをもつ。	粗粒安山岩
307－１ 85－１	Ｄ31井戸	須恵器 擂鉢	底部¼	－×12.0× (8.0)	体部巻き上げ調整。指頭痕著しい。内面見込部付近は使用による摩滅著しい。	①良好 ②暗灰 ③ やや粗
307－２ 81－２	Ｄ31井戸	石製品 石臼	下臼 ほぼ完	径28.0 高13.8	表面臼目は六分画切線主溝型。中央に未貫通の芯棒孔あり、臼目の刻み粗略。	安山岩
308－１ 81－１	Ｄ40井戸	須恵器 杯	⅓	13.7×6.7 ×3.6	腰部から体部下半にかけて僅かに丸味をもち、体部上半は緩く外反して開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗黒色粒混
308－２ 81－２	Ｄ40井戸	須恵器 杯	完形	13.5×6.3 ×3.9	底径やや小さく、体部僅かに丸味をもつ。口唇部下位で小さくくびれ口唇部細る。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
308－３ 81－３	Ｄ40井戸	須恵器 椀	¼	14.4×6.5 ×4.9	体部直線的で、上半は僅かに外反。付高台低く断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟 ②淡 黄橙 ③やや粗
308－４ 82－４	Ｄ40井戸	羽釜	上半部 ⅓	22.2×－× (13.3) 鍔径27.2	器肉薄目。胴部張りをもつ。口縁部直線的に内傾。鍔部やや上方へ強く突出。断面丸い三角。内外面回転撫で調整。	①酸化気味良好 ② 灰 ③やや粗
308－５ 82－５	Ｄ40井戸	須恵器 甕	腰部¼	－×－× (9.0)	外面に弱い横篦調整。内面指頭痕。断面に著しい接合痕。	①良好 ②灰 ③や や密
308－７ 82－１	Ｄ43井戸	軟質陶器 擂鉢	体部上 半¼	30.0×－× (9.0)	体部外反気味に開く。口唇部断面矩形をなし内外端小さく突出。内面６単位の放射状櫛目。外面巻き上げ指頭調整。	①良好 ②灰 ③や や粗
309－２ 82－２	Ｄ43井戸	軟質陶器 擂鉢	体部⅙	31.5×－× 9.0	体部外反気味に開く、口唇部断面矩形をなし内端小さく突出。片口か。内面７単位の放射状櫛目。巻き上げ撫で調整	①良好 ②灰 ③や や粗
309－３ 82－３	Ｄ43井戸	軟質陶器 擂鉢	¼底部 欠損	32.5×19. 8×13.8	体部直線的、口唇部断面矩形。内面下位使用による摩滅著しい。外面粗い指頭痕あり。内外面燻し焼成。	①酸化気味やや軟 ②灰 ③やや密

B～F区井戸跡出土遺物観察表（2）

Fig.No. PL.No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
309－4 82－4	D43井戸	軟質陶器 擂鉢	底部¼	－×13.5×(6.0)	見込部及び、下半の摩耗著しい。	①良好 ②灰 ③やや密
310－1 82－1	E17井戸 埋土	土師器 杯	⅓	11.8×－×(2.9)	平底。体部下半に丸味をもち、くびれて上半は内湾気味に開く。口唇部丸まって小さく内屈。体部上半は指頭後横撫で、下半は指頭後弱い篦撫で。底部篦削り。口唇部に油煙状付着物。	①良好 ②橙 ③やや密輝性黒色
310－2 82－2	E17井戸 埋土	須恵器 椀	⅓	15.8×9.0×5.6	底径大きく、体部内湾気味に開き浅目。付高台端部丸くハの字状に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
310－3 82－3	E17井戸 埋土	土師器 台付甕	台部	－×8.8×(7.2)	胴部下半は直線的に開く、台部ハの字状。胴部下半縦篦削り。腰部・台部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや密
310－4 82－4	E17井戸 埋土	土師器 台付甕	台部	－×8.0×(5.6)	台部ハの字状に開き、端部内側に小さく屈する。胴部縦篦削り。腰部・台部横撫で。	①良好 ②鈍い橙 ③やや密
310－5 82－5	E17井戸 埋土	須恵器 高杯？	脚部	－×－×8.5 基部径4.2	紐巻き上げ。縦位篦削り後横撫で。	①良好 ②暗灰 ③やや密黒色粒混
310－6 82－6	E17井戸 埋土	須恵器 高杯	脚部	－×－×4.1 基部径4.6	紐巻き上げ。縦位篦削り後横撫で。	①良好 ②灰 ③密
310－1 83－1	E19井戸 埋土	土師器 杯	小片	14.9×－×(2.8)	底部不安定な平底か。口縁直線的に外傾。底部篦削り、口縁部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
310－1 83－1	E22井戸	骨角製 斧	小片		暗茶灰色で長軸方向に繊維状の筋が見える。斧頭部に樋溝一条。背は扁平で表は丸味をもつ。鹿角か骨製。	
310－2 —	E22井戸	青磁 椀？	小片		口唇部僅かに外反。施釉薄く淡いオリーブ灰、龍泉窯系。	①良好 ②青灰 ③緻密
310－1 83－1	E30井戸	石製品 石臼	上臼½	径2.0 高10.8	上縁高2.4cm・幅4.8～1.8cm、くぼみには粗い鑿痕。ものくばりの痕跡あり、裏面の臼目は八分画こぼれ目型(伊奈臼)	石英閃緑岩
310－2 83－2	E30井戸	石 不明		18.0×12.0×9.0	不明石製品。上端面は滑らかで使用痕か。	安山岩
310－1 83－1	F1井戸 埋土	須恵器 椀	小片	—×7.2×(4.8)	体部直線的に開く。付高台やや低く、断面矩形。轆轤整形。切り離し不明。	①軟 ②灰 ③密
310－1 83－1	F5井戸 埋土	須恵器 杯	¼	11.8×7.6×3.4	体部内湾気味に開き、口唇部細まる。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗黒色粒混
310－2 83－2	F5井戸	石製品 石臼	上臼	高(11.0)	茶臼の上臼。上縁は欠損。側面挽き木打込孔は方形で、周辺は径9cmの円形が凸に形どられる。裏面は切線主溝の目	安山岩
310－3 83－3	F5井戸	石製品 凹石？	½	13.0×12.0×3.5	扁平な楕円形。片面に径2.5cm・深さ0.8cmの凹みを作る。	安山岩
310－4 83－4	F5井戸	石 不明		長14.0 幅・厚 12.8×6.8	長軸両端面の摩耗著しい、用途不明。	緑泥片岩
310－5 83－5	F5井戸	石製品 凹石	完形	1.2×1.2×9.6	片端平坦面を深さ5.2cm窪ませる。側面の一部は砥石転用の痕跡あり。	安山岩
311－6 84－6	F5井戸	板碑	下半部⅓	(3.2)×16.0×3.6	紀年銘等の彫り込みは一切見られない。上端部に半円形の割れ口があり、表面が若干磨れていることから転用か。	緑泥片岩
311－7 84－7	F5井戸	板碑	上半部½	(24.0)×16.0×2.0	小型板碑。碑面に2ケ所程、種子の一部らしきものが見えるものの、摩滅のため判読不可。二条線なし。	緑泥片岩
311－8 84－8	F5井戸	板碑	上半部破片	(22.0)×14.0×1.6	主尊である「キリーク」(阿弥陀)種子の一部を残す。極めて浅い薬研彫り。二条線はなく、全体にやや摩滅。	緑泥片岩
311－9 84－9	F5井戸	板碑	破片	(9.2)×(7.6)×1.2	彫り込みは一切見られず、裏面は剝離、表面は摩滅のため、部位さえ不明。	緑泥片岩

B～F区井戸跡出土遺物観察表（3）

Fig.No. PL.No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
311－1 84－1	F7井戸 埋土	須恵器 椀	¼	15.8×9.4×7.8	体部直線的に立ち上がり深身。付高台ハの字状に開き、下端面に段をもつ。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
311－2 84－2	F7井戸 石群上部	陶器 椀	体部小片	10.6×－×(5.5)	体部上半でくびれ直立気味、口唇部細まる。内面及び外面上半部は褐釉。外面腰部は無釉で篦削りを施す。	①良好 ②灰 ③やや粗
311－3 84－3	F7井戸 埋土	灰釉陶器 椀？	底部小片	－×7.0×(1.2)	高台は低目で断面矩形の角高台を呈す。内面全面施釉。黒笹14号窯式期。	①良好 ②淡黄 ③やや粗黒色細粒混

Ｂ～Ｆ区井戸跡出土遺物観察表（４）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
311－4 84－4	Ｆ７井戸 埋土	須恵器 甕	口縁部 小片	厚0.9	口唇部やや細まり外面直下は凸帯状に張る。口縁部粗い櫛描波状文を施す。	①やや甘　②淡橙灰 ③密
311－5 84－5	Ｆ７井戸 埋土	軟質陶器 擂鉢	下半部 ½	－×11.6× (8.2)	内面６条１単位の櫛目を７単位孤状に配す。外面腰部横篦削り、体部下半は指頭調整。	①良好　②灰　③粗 砂粒多混
312－6 84－6	Ｆ７井戸	石製品 石臼	上臼小 片	高10.5	縁高４cm・幅３cm。供給口径約５cm。側面に挽き木打込孔あり。裏面は摩耗のためか臼目不明。中央に芯棒受け孔。	安山岩
312－7 85－7	Ｆ７井戸 埋土	瓦 平瓦	小片	厚3.0	凹面指頭による強い撫で。凸面篦撫で。側縁部篦調整。焼成はやや甘く燻し気味。	①軟　②暗灰　③やや粗
312－8 85－8	Ｆ７井戸 石群上部	軟質陶器 擂鉢	体部小 片	厚1.4	内面８条１単位の櫛目を斜交に施し、４個所に配すか、外面中位から下位は指頭後篦撫で。上位は横撫で調整。	①良好　②灰褐　③ やや粗
312－9 85－9	Ｆ７井戸 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.2	凹面細布目。凸面撫で。側縁部篦調整。	①良好　②灰　③やや密
312－10 85－10	Ｆ７井戸 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面篦撫で。凸面回転縄目後弱い篦撫で。側縁部篦調整。焼成はやや甘く燻し気味。	①軟　②暗灰　③やや密白色細粒多混
312－11 85－11	Ｆ７井戸	板碑	上半部 ⅔	(42.0)× 23.2×2.0	極めて浅い竹彫りの「キリーク」（阿弥陀）種子の一部を残す。蓮座及び紀年銘は不明。二条線なし。摩滅著しい。	緑泥片岩
313－1 85－1	ＦⅡ１井 戸埋土	須恵器 甕	小片	16.0×－× 8.8	胴部丸く張らみをもち、口縁緩く外傾して開く。口唇部断面矩形をなし、上端面小さな段をなす。轆轤整形。胴下半は篦削りを施す。	①良好　②灰　③粗 白色粒混
313－2 85－2	ＦⅡ１井 戸　３層	羽釜	小片		口縁部高く外反気味に直立。鍔部鋭く三角形に尖がる。口唇部外端は小さく外へ突出。器肉薄い。	①良好　②灰　③やや密
313－3 85－3	ＦⅡ１井 戸４層	瓦 丸瓦	小片	厚1.6	凸面撫で。凹面布目。側縁部篦調整。	①やや軟　②橙　③ やや密
313－4 85－4	ＦⅡ１井 戸埋土	石		9.4×9.0 重1150g	整った球形を呈するが、磨きなどの調整を施した痕跡がなく自然石と考えられる。	
313－5 85－5	ＦⅡ１井 戸	鉄製品 角釘	端部欠 損	長(5.2) 幅・厚0.5×0.5	頭部形状は折頭式の角釘。	
313－1 85－1	ＦⅡ２井 戸　７層	須恵器 杯	⅔	13.6×6.0 ×3.4	体部浅身で大きく直線的に開く。底部肥厚。内外面轆轤目強い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②褐灰　③ やや密
313－2 85－2	ＦⅡ２井 戸　７層	須恵器 杯	底部	－×6.0× 1.7	腰部小さくくびれ丸味をもつ。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密黒色粒混
313－3 85－3	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 椀	体部¼	14.6×－× 3.9	体部やや浅身で僅かに内湾して開く。口唇部丸まる。高台欠損。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密黒色粒多混
313－4 86－4	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 椀	⅔	14.6×7.0 ×5.4	腰部に張りなく、体部直線的に開く。器肉は全体に肥厚気味。付高台断面細三角形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③ やや粗
313－5 86－5	ＦⅡ２井 戸４･５層	須恵器 椀	底部	－×7.8× 2.2	付高台、ハの字状に開き断面丸い。轆轤整形。回転糸切り。体部上半は故意に打ち欠いたものか。	①良好　②灰　③やや密黒色粒多混
313－6 86－6	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 椀	上半欠 損	－×6.8× 3.8	体部下半に僅かな丸味をもつ、やや低目の付高台。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰褐　③ やや密白色細粒混
313－7 86－7	ＦⅡ２井 戸	須恵器 椀	底部	－×9.0× 2.3	腰部張る。底部肥厚、付高台幅広で断面細矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
313－8 86－8	ＦⅡ２井 戸　７層	須恵器 皿	底部	－×7.6× 2.2	付高台やや高く直立する、断面略三角形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③ やや密
313－9 86－9	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 瓶	肩部		肩部に把手を装着する耳付き瓶	①良好　②灰　③やや密
313－10 86－10	ＦⅡ２井 戸　７層	須恵器 瓶　？	底部	－×12.6× 2.4	付高台低く幅広で断面矩形。内面及び破面に二次被熱の痕跡あり、底部右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや密
314－11 86－11	ＦⅡ２井 戸　７層	灰釉陶器 瓶	底部⅓	－×17.0× 11.3	胴部やや張らみをもつ、付高台低く幅広で断面矩形。胴部篦撫で。	①良好　②灰　③密
314－12 86－12	ＦⅡ２井 戸　埋土	羽釜	口縁部 小片	20.0×－× 5.6	口縁部内傾し、口唇部内端は丸く屈する。内面燻し気味で黒色、鍔部三角形で突出。	①やや軟　②灰褐 ③やや密
314－13 86－13	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 鉢　？	口縁部 小片	厚0.9	口縁部直線的、口唇部断面矩形を呈し、幅広で薄い口縁帯が巡る。口縁部浅い凹線が巡り上下に波状文を施す。	①良好　②灰　③密
314－14 86－14	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 甕	口縁部 小片	厚1.0	口縁部６～７条単位の波状文を４組施し、各波状文は凹線で区切る。	①良好　②灰　③やや密
314－15 86－15	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 甕	口縁部 小片	厚1.0	８条単位の波状文を施す。各波状文は凹線で区切る。	①良好　②灰　③やや密
314－16 86－16	ＦⅡ２井 戸　埋土	須恵器 甕			15と同一個体	

３．墓　　跡（Fig. 315～325　PL. 29～32・86～89）

鳥羽遺跡で検出された墓跡は総数39基にのぼる。そのうち今回の報告になるＡ～Ｆ区では22基が確認されているが、時代的な内訳は平安時代に属する墓跡は12基、中世10基である。分布はＣ区からＤ区にかけての範囲に集中する。埋葬形態には土葬土壙墓と火葬土壙墓が存在する。火葬土壙墓と考えられるＣ25号・Ｄ20号・Ｄ37号・ＦⅡ17号墓はいずれも中世に属し、遺構の検出状況から明らかに荼毘所と考えられるが、細片化した焼骨や、一体分としては量的にやや疑問の残る骨片から火葬土壙すなわち火葬土壙墓とするには十分確証は得られない。ところでＢ区で検出されている SK 332号（SKは土坑の略）は昭和55年の調査で明らかになった土坑である。中央部に高まりを残しておりドーナツ型土坑と呼ばれていたものである。12世紀初頭の年代的根拠の定点として重要視されている。浅間山降下Ｂ軽石の unit 堆積が確認されたことにより出土遺物の年代推定が可能なため注目されている遺構である。遺構の性格については、当時発行されていた調査速報の中で宗教的な遺構として紹介されている。近年県内ではこの SK 332に類似する遺構が数列知られるようになり、それらの中には明らかに被熱したと認められる焼骨を納めた小瓶形態の骨蔵器が伴う遺構がある。鳥羽遺跡検出の SK 332では骨蔵容器は検出されていないが、遺構形態が同一であること、出土遺物から見て他例と極めて近い年代であることなどから墓跡関連の遺構である可能性が高い。

鳥羽遺跡では奈良時代まで遡ぼる例は現在のところ知られていない。平安時代の墓制は既に報告したＪ１号墓があるのみで、今報告になる SK 332がこれにあたるとすれば２例にすぎない。この時代はほとんどが土葬土壙形態をもち長方形で長軸規模から伸展葬形式をとるものが主体的である。また小数ながらやや長軸の短かい長方形や隅丸長方形を呈するものもある。前者ではＣ17号・Ｃ24号・Ｄ16号・Ｄ21号・Ｄ34号墓が、後者にはＢ１号・Ｄ19号・Ｄ22号墓が各々相当し、これらには須恵器・灰釉陶器・縁釉陶器類が副葬品として用いられている事例業多い。中世は上述した火葬墓形式のほか、隅丸長方形・楕円形・円形を呈する土葬土壙墓がある。土葬土壙墓にはＤ35号・Ｄ36号・Ｄ38号・Ｅ11号・Ｅ14号・Ｅ15号・Ｅ18号・ＦⅡ13号墓がある。比較的頭蓋骨や主要骨格が残る例も多く、それらから屍体の埋葬形式は横臥屈葬と考えられる。火葬墓形式のものにはほとんど副葬品は検出されていないが土葬土壙墓には古銭とともに酸化焼成の坏・皿などが副葬される。屍体埋納施設には木棺などが考えられるが、Ａ～Ｆ区での墓跡からはそれを想定できる部材や鉄釘などは検出されていない。

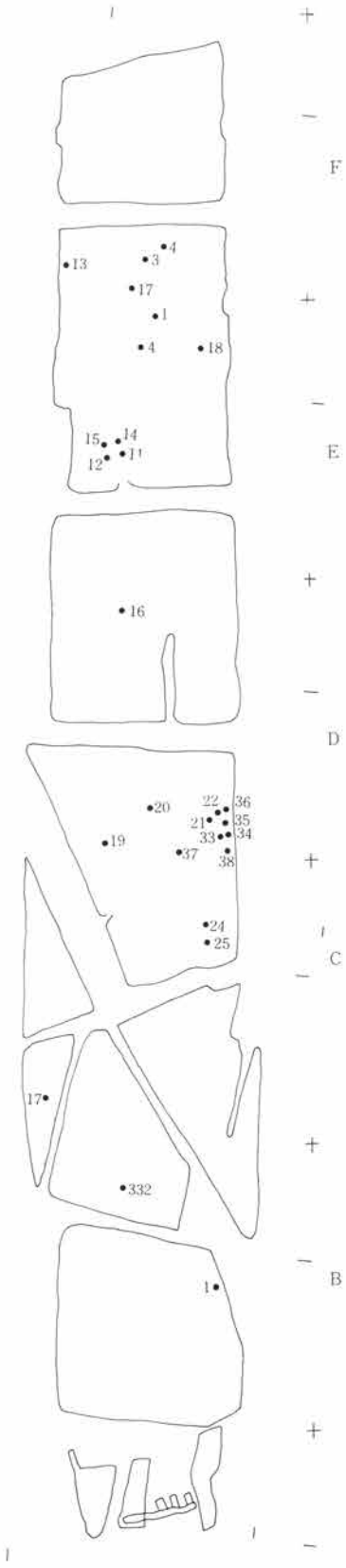


Fig. 315　墓分布図

Ｂ332号土坑

Ｂ区の北部に位置し、52・53・Ｂ40・41の範囲にある。形状は中央に高まりを残し、周囲に溝を巡らすいわゆるドーナツ型の土坑である。この特異な形状のためか、調査時から今日に至るまで明確な性格付けはなされていない。ただ、昭和54年当時に発行されていた調査速報では〝人間生活の不可解な部分〟〝宗教的な遺構〟であろうと推測されていた。近年、これに類似する遺構が存在することが知見に上り、葬制あるいは墓制に関連するであろう見通しを得た。ここでは調査記録による記述にとどめ、詳細は後段にゆずる。

平面形は上述のように円形ドーナツ型を呈し、全体径は1.7～1.9mを測る。中央部の円形高まりの上端径は1.1m、周囲を巡る溝の上幅径約80cmを測る。溝の断面形はＵ字状を呈し、深さ40～50cmである。中央部の高まりは検出面より約10cm低く、断面形は中心に向かい緩く脹らむ。溝底面からのは最高で約40cmの高さをもつ。埋土は検出面でほぼ遺構範囲に浅間山降下Ｂ軽石粒の分布が認められ、部分的に赤褐色灰層が、さらに下位に粒状軽石が堆積する。このようなＢ軽石の堆積状況は通常、純層・一次堆積、unit 堆積といわれ、天仁元年（1108）噴火によって直接もたらされたものと考えられている。Ｂ軽石層は東辺の溝内に最も厚く堆積しており層の厚さは約18cmである。ただＢ軽石の降下時における遺構の外観は、周溝をかろうじて認める程度のものであったと考えられる。Ｂ軽石層下には木炭粒を多量に含む粘性黒褐色土が堆積し、この上面には径10cm前後の多数の小穴が検出され、小穴内にはＢ軽石粒が堆積していたようである。最下層は木炭粒を僅かに含む茶褐色土である。

出土遺物は小型皿型土器が５点で、溝底面に近く検出されている。全て完品で５点中２点は伏せた状態での出土である。

Ｂ１号墓

Ｂ区の東部に位置し、37Ｂ26にある。遺構掘形の遺存状況は悪く、かろうじてその形状を認める程度である。埋土の残りは薄く、浅間山降下Ｂ軽石粒が認められた。平面形は長軸をほぼ南北にもつ長楕円形を呈す。現状で南北長1.3m、東西幅70cmを測る。遺骨は白色蠟化した少片が２個所に残るが形状、骨格部位などは不明である。遺体埋納施設などの痕跡は認められていない。中世以降の土葬・土壙墓であろう。

Ｃ17号墓

Ｃ区の南西部に位置し、66Ｃ７・８の範囲にある。南端は東西走するさく状の溝に切られる。平面形は南北に長軸をもつやや隅丸の長方形を呈す土坑である。遺骨は検出されていないが、土坑形態や遺物の埋納から考えて墓跡であろう。南北長2.0m・東西幅70cmを測る。深さは現状で13cmにみたないが、周辺には耕作跡とみられるさく状遺構が多くかなり削平されたものと思われる。南北軸方位はＮ－５°－Ｗを示す。埋土は浅間山降下Ｃ軽石粒を含む暗褐色である。出土遺物は須恵器杯・小壺・内面黒色椀・灰釉陶器瓶がある。灰釉陶器瓶は破欠損していたが削平の為と思われる。遺体埋納施設は認められていないが、平安時代後半の土葬・土壙墓であろう。

Ｃ24号墓

Ｃ区の北東部に位置し、37Ｃ46・47の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ方形土坑である。遺骨は確認されていないが、Ｃ17号墓と同形態の墓跡であろう。南北長2.4m・東西幅75cm、深さは現状で10cmを測る。南北軸方位はＮ－３°－Ｗを示す。埋土は黄色土塊を混えるやや粘性のある暗褐色土で人為的な充填が窺われ

る。遺体埋納施設に関しては土坑内南東隅部に板状の木痕が検出され、箱状の木棺が想定される。出土遺物は須恵器の杯・灰釉陶器皿・椀がありいずれも土坑内北側から検出されている。平安時代後半の土葬・土壙墓であろう。

Ｃ25号墓

Ｃ区の北東部に位置し、37・38Ｃ43・44の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ楕円形の土坑である。南北径1.15m・東西径85cm・深さ13cmを測るが、土坑中央部はさらに10cmの深さですり鉢状に窪む。また東壁中央には幅25cm・長さ40cmの突出部が作り出され、緩やかな傾斜をもって土坑中央部の窪みに接続する。土坑内は浅間山降下Ｂ軽石粒とともに多量の炭化物・炭化粒で埋まり、混存した状態で細片化した焼骨が認められた。これら焼骨の中には数点の歯片もあり、その形態より焼骨は人骨と考えられる。土坑検出面では輪郭に沿って著しい焼土が線状に巡っていたが壁面下位及び底面での焼土化は弱い。当跡の性格については、すでに刊行した鳥羽遺跡調査報告書第３巻『鳥羽遺跡Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ区』1990掲載のＧ５号墓を酷似することを考慮すれば、多量の炭化物・焼骨と焼土化した壁面など火葬施設として性格付けられよう。また、Ｇ５号墓同様、１体分に未たない遺骨量から火葬墓としてよりは火葬場的機能が強く窺える。出土遺物には北宋銭聖宋元宝（北宋建中靖国元年・西暦1101年初鋳）１点が出土している。強く被熱の痕跡があり遺体火葬時から存在していたと考えられる。当跡の営まれた時期はＢ軽石粒の存在から中世以降になろうか。

Ｄ16号墓

Ｄ区のやや北西寄りに位置し、55・56Ｄ44の範囲にある。Ｄ404号溝と重複し、これより旧い時期の所産である。平面形は南北に長軸をもつ方形土坑である。南北長1.95m・東西幅85cm・深さ57cmを測る。南北軸方位はＮ－13°－Ｗを示す。埋土は３層確認されており、いずれも粘土塊を混えている。遺骨や遺体埋納施設は検出されていないが、埋土下位の２層は締まりがなく、上層は堅く締まり人為的な叩き締めが行なわれた可能性がある。またこの上位層は縁辺部からやや内側に堆積する。土層断面からは下位中に落ち込む状態が看取でき、何らかの遺体埋納施設が朽ちることによって陥没した痕跡とも考えられる。出土遺物は須恵器杯・灰釉陶器椀・緑釉陶器小椀が検出され、いずれも完品である。出土遺物・埋土などから平安時代後半の土葬・土壙墓であろう。

Ｄ19号墓

Ｄ区の南西部に位置し、58Ｄ１・２の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ方形土坑である。南北長は1.2m・東西幅60～80cmを測る。長軸方位はＮ－30°－Ｗを示す。削平が著しいためか、遺存状態は悪い。北東隅には径20cm・深さ５cm程度の浅い窪みがある。遺骨などは検出されず、墓跡としての積極的な根拠に乏しい。埋土中には灰・焼土粒が混じる。出土遺物は須恵器・灰釉陶器が検出されているが、いずれも小片である。平安時代後半に属しようか。

Ｄ20号墓

Ｄ区の南部に位置し、49Ｄ７にある。平面形は南北に長軸をもつ楕円形土坑である。南北長95cm・東西幅65cmを測る。掘形は削平が著しく僅か５cm程度である。埋土はほとんど残らず、検出時にはすでに骨片と炭化材細片ないしは炭火粒が混り合った状態であった。壁面及び底面は焼土化は認められないものの明らかに

被熱している状況が窺われた。骨片は全て焼骨であり、炭化材の存在から当跡はC25号墓と同様、火葬施設と考えられる。また形態的にも削平によって上部が失われたものの類似した施設であったと推定される。

D21号墓

D区の南東部に位置し、38・39D７・８の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ隅丸方形の土坑である。南北長２m・東西幅80cm・深さ39cmを測る。長軸方位はN－21°－Wを示す。埋土は上位層にLoam塊を多く含む暗褐色土が充填される。遺骨は細片ながら土坑中軸を中心に認められ、北側には数点の歯が検出されている。骨格等の詳細は不明であるが、土坑の規模・歯の分布位置などから頭部を北にする成人伸展葬が想定される。遺体埋納施設は検出されていない。なお土坑南側の遺体足もとと考えられる位置には人頭大の角礫が置かれ、埋葬に関して何らの呪術的意味があろうか。出土遺物は西壁沿いに２個体の内黒土器が検出されている。平安時代後半の土葬・土壙墓であろう。

D22号墓

D区の南東部に位置し、37D７・８の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ方形の土坑で、北東隅が鉤の手状になる。南北長85cm・東西幅48cmを測り、長軸方位はN－１°－Eを示す。掘形は削平が著しく遺存は僅かで、底面中央部が弱いU字状に窪み、埋土は締まりのない黒褐色土である。遺骨は土坑中央部に少量検出され、骨格等詳細は不明である。土坑の規模から横臥屈葬の可能性があり、中世以降の土葬・土壙墓であろうか。

D33号墓

D区の南東部に位置し、36D５にある。平面形は南北に長軸をもつ隅丸方形の土坑である。D34号墓と重複し、これより新しい時期の所産である。南北長1.5m・東西幅約１m・深さ40cmを測り、長軸方位はN－22°－Wを示す。埋土はLoam塊を混え粘性であり、全体に人為的充填されたと考えられる。遺体は北に頭部を置く横臥屈葬である。出土遺物は45枚の渡来銭と２個体のかわらけがある。遺体埋納施設は確認されていない。古銭及び遺体埋葬形態から中世以降の土葬・土壙墓であろう。なお渡来銭は太平通宝・皇床通宝・明道元宝・永楽通宝などがある。

D34号墓

D区の南東部に位置し、35・36D４・５の範囲にある。南端は削平によって消失しているが、平面形は南北に長軸をもつ方形土坑である。D33号墓と重複するが、これより旧い時期の所産である。長北長は2.1m以上・東西幅95cm・深さ15cmを測り、長軸方位はN－12°－Wを示す。遺骨は検出されていないが、土坑の形状・規模より成人伸展葬が想定できる。出土遺物は北東隅に須恵器椀が２個体検出されている。平安時代後半の土葬・土壙墓であろう。

D35墓

D区の南東部に位置し、36Dにある。平面形は南北に長軸をもつ楕円形土坑である。南北長1.2m・東西幅6.2cm・深さ40cmを測り、断面形はややすり鉢状を呈す。長軸方位はN－４°－Wを示す。埋土はLoam塊を混える粘性土が主体的で、全体に締まりが強く人為的な充填が考えられる。遺骨は検出されていない。遺体

埋納施設は認められていないが、自然木一点がある。出土遺物はかわらけ皿２点がある。中世以降の土葬・土壙墓と考えられる。

D36号墓

Ｄ区の南東部に位置し、36・37Ｄ７の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ楕円形土坑である。南北長80cm・東西幅45cm・深さ11cmを測り、断面形は緩いすり鉢状を呈す。長軸方位はN－７°－Wを示す。埋土は炭化粒・焼土粒を僅かに含む暗灰褐色土であるが、土坑そのものが被熱した痕跡はない。遺骨は北側に下顎部が検出されており、土坑形態・規模から北側に頭部を置く横臥屈葬と考えられる。また、東西幅から遺体は小児の可能性もある。遺物は検出されていないが、土坑形態より中世以降の土葬・土壙墓と考えられる。

D37号墓

Ｄ区の北端に位置し、45Ｄ０にある。平面形は南北に長軸をもつ楕円形土坑を呈するが、東辺中央部が小さく突出する様相がある。検出時より多量の炭化材・炭化粒とともに釉片化した焼骨が混在状態で認められ周壁及び底面には被熱の痕跡がある。Ｃ25号墓やＤ20号墓と共通しており同形態のものと考えられ、Ｄ20号墓と同様、かなりの削平を受けているであろう。南北長1.5m・東西幅約60cm・深さ10cmを測り、長軸方位はN－22°－Wを示す。出土遺物はなく中世以降の所産になろう。

D38号墓

Ｄ区の南東部に位置し、35Ｄ２・３の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ小規模な楕円形土坑であず。南北長68cm・東西幅45cmを測り、深さ５cm程度の浅い皿状の窪みとなっておりかなり削平を受けている可能性がある。長軸方位はN－11°－Wを示す。埋土は締まりのない砂質暗褐色土である。当跡では遺骨の検出はなく、形状・規模などからも墓跡としての性格付けはできない。出土遺物は渡来銭１点のほか僅かながら、鉱滓が検出されている。当区は鋳造関連遺構群が存在しており、これに関わる遺構である可能性が強い。なお渡来銭は元豊通宝（北宋　元豊元年1078年初鋳）である。

E11号墓

Ｅ区のほぼ中央、中世館跡内に位置し、57・58Ｅ20の範囲にあり、西に近接してＥ12号墓がある。平面形は円形土坑である。径35×45cm・深さ15cmを測る。埋土は下位で黄色土塊を含む黒褐色土が充填されている。遺骨は検出されていない渡来銭３枚が出土しており土壙墓と思われる。中世以降の所産であろう。

E12号墓

Ｅ区のほぼ中央、中世館跡内位置し、58Ｅ20にある。東に近接してＥ11号墓がある。平面形は径38cm・深さ25cmのすり鉢状の円形土坑である。埋土は最下層に浅間山降下Ｂ軽石粒が堆積する。遺骨は検出されていないが、調査時の所見はよれば、かわらけ質小杯が２点出土している。なお出土遺物は所在不明のため掲載していない。中世以降の土壙墓であろう。

E14号墓

Ｅ区のほぼ中央・中世館跡内に位置し、58Ｅ22にある。西に近接してＥ15号墓が、また南側間近にＥ11号・

Ｅ12号墓がある。平面形は南北に長軸をもつ隅丸方形を呈する土坑と考えられるが、北辺は楕円状になる。南北長80cm・東西幅40cm・深さ14cmを測る。長軸方位はほぼ真北になる。遺骨は土坑内にほとんど隙間なく納まり、頭部を北にする横臥屈葬である。調査時の所見によれば、脛骨が人為的に折られた痕跡が認められるようである。土坑の規模から考慮して、埋葬時の所作とも考えられる。出土遺物は検出されていない。中世以降の所産であろう。

Ｅ15号墓

Ｅ区中央部、中世館跡内に位置し、58・59Ｅ22の範囲にある。平面形は径50×60cm・深さ20cmのすり鉢状の円形土坑である。遺骨は検出されていない。なお、当跡は中世館跡内の Pit 群中にあり、掘立柱建物跡の柱筋に一致する可能性もあるため墓跡との断定はできない。出土遺物はかわらけ質皿がある。中世以降の所産であろう。

Ｅ18号墓

Ｅ区の北東部に位置し、42Ｅ40にある。Ｅ1021号溝中にあり、これより旧い時期の所産である。Ｅ1021号溝の南縁にあるため、溝底面に向かう北側の立ち上がりは消失している。平面形は南北に長軸をもつ楕円形の土坑である。南北長は約90cm・東西幅65cm・深さ28cmを測る。長軸方位はＮ－19°－Ｗである。遺骨は土坑内南側に脚骨類がまとまり、頭蓋骨は検出されないが、土坑北側に数点の歯が検出されている。土坑の規模からして頭部を北にする横臥屈葬と考えられる。遺物は渡来銭５枚が胸部あるいは背部から、また土坑北側には４個体のかわらけ皿が検出されている。かわらけは各々高低差があり北西部壁際より落ち込む様相が見られる。ただし１点は底面にかなり近い位置にある。遺物の出土状況から、これらは遺体埋葬後埋土の上面に献納され、埋土の陥没に伴って落ち込んだものと考えられる。また人頭大川原石がかわらけの上にあり、埋土上に墓標的な意味合いから置かれたものであろうか。中世以降の土葬・土壙墓である。

ＦⅡ13号墓

Ｆ区の南西部に位置し、65Ｆ３・４の範囲にある。Ｆ47号住居跡・Ｆ36号竪穴状遺構と重複するが両者より新しい時期の所産である。平面形は南北にやや長い隅丸方形の土坑である。南北長1.2m・東西幅約１m・深さ43cmで、長軸方位はＮ－11°－Ｗを示す。遺骨は残存状態が良好で、頭部を南にする横臥屈葬である。なお、遺骨の残存で知りうる限り、当遺跡で頭部を南にする埋葬形態はＦⅡ13号墓が唯一のものである。遺体埋釉施設については調査時の所見に棺材の一部が認められたとされている。また埋土は４層の遺骨位置層がかなり軟かく、一部に空洞部分が残されている。上位１、２層はこの棺材の腐食のためか陥没した状況が窺われる。また土坑壁際には堅く締った埋土が認められており遺体埋納施設の役込め的に充填されたまのであろうか。遺骨の位置や埋土の観察から埋納施設は95×58cm程度の方形状の棺が想定される。出土遺物は渡来銭６枚、かわらけ皿大・中・小の３個体がある。埋土中のＢ軽石粒の混在や古銭の年代から中世以降の土葬・土壙墓と考えられる。

ＦⅡ17号墓

Ｆ区南西部に位置し、55Ｆ１にある。Ｆ２号溝中にあり、これより新しい時期の所産である。平面形は不整楕円ないしは長方形を呈し長軸を南北方向にもつ土坑である。南北長1.4m・東西幅70cm・深さ25cmを測り

長軸方位はN—33°—Eを示す。埋土は浅間山降下B軽石層を主体と一部に直接降下を思わせる unit 堆積状の層序が認められる。土坑内の下位には比較的時塊の遺骨が残され、さらに土坑内及びその周辺にも細片化して広範囲に散逸した状態で分布するが遺骨は全て焼骨である。また骨片とともに灰・焼土粒の分布も著しく、とくに土坑最下位には灰層が薄く堆積する。直接土坑に伴う出土遺物は検出されていないが、須恵器甕片などが遺構検出面にみられた—焼骨や灰・焼土などの存在から当跡は火葬施設ないしは火葬墓いずれかと考えられるが、細片化した焼骨のあり方に疑問が残る。当跡の時期については、土坑内に堆積するB軽石層から、浅間山噴火によるB軽石降下直前に営われたことが想定される。しかし、B軽石層の堆積からは、開放状態にある土坑が考えられ不自然である。他方、B軽石降下直後の所作で、unit 堆積状にある土層をそのまま埋土とした可能性もあり、いずれにしてもB軽石降下の時期とさほど隔りのない頃と思われる。

以下の遺構は、調査時において墓跡として名称を付されなかった遺構である。しかし現時点で出土遺物ないしは遺構の形状から、墓跡の可能性が考えられ、ここに記述するものである。ただし、遺構名称については将来、調査諸資料に混乱を招くおそれがあるため、そのままの名称を用いる。

Ｅ１号 Pit

Ｅ区の北部に位置し、50Ｅ44にある。平面形は不整楕円形を呈する土坑である。径65×90cm・深さ17cmを測る。埋土は浅間山降下Ｃ軽石粒を含む暗褐色土である。遺骨は検出されていない。出土遺物は２個体重った状態の土師器杯と灰釉陶器椀がある。いずれも完形品である。

Ｅ４号 Pit

Ｅ区の北部に位置し、52Ｆ39にあるＥ11号溝（Ｆ２号溝と同じ）の東縁と重複するが新旧関係は不明である。平面形は南北に長軸をもつ隅丸の長方形土坑である。南北長2.05m・東西幅65cm・深さ25cmを測り、長軸方位はN—13°—Wを示す。遺骨は検出されていない。出土遺物は土坑南側底面より須恵器杯・椀が検出されている。

ＦⅡ３号 Pit

Ｆ区の南部に位置し、50・51Ｆ５の範囲にある。平面形は東西に長軸をもつ方形の土坑である。東西長1.35m・南北幅85cm・深さ15cmを測り、長軸方位はN—74°—Eを示す。底面及び壁面は被熱を受け赤化して土坑最下層には焼土粒と灰の堆積が見られる。また埋土中には多量の炭化粒を含む。骨片などは認められない。出土遺物は埋土中に須恵器杯が認められるが、所在不明のため掲載できない。

ＦⅡ４号 Pit

Ｆ区の南部に位置し、48Ｆ６．７の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ長方形土坑である。南北長1.85m・東西幅63cm・深さ10cmを測り、長軸方位はN—２°—Eを示す。埋土中には少量の炭化粒を含むが、壁面などに被熱の痕跡は認められない。骨片などは検出されず、出土遺物は磨きのかかった挙大の球石がある。

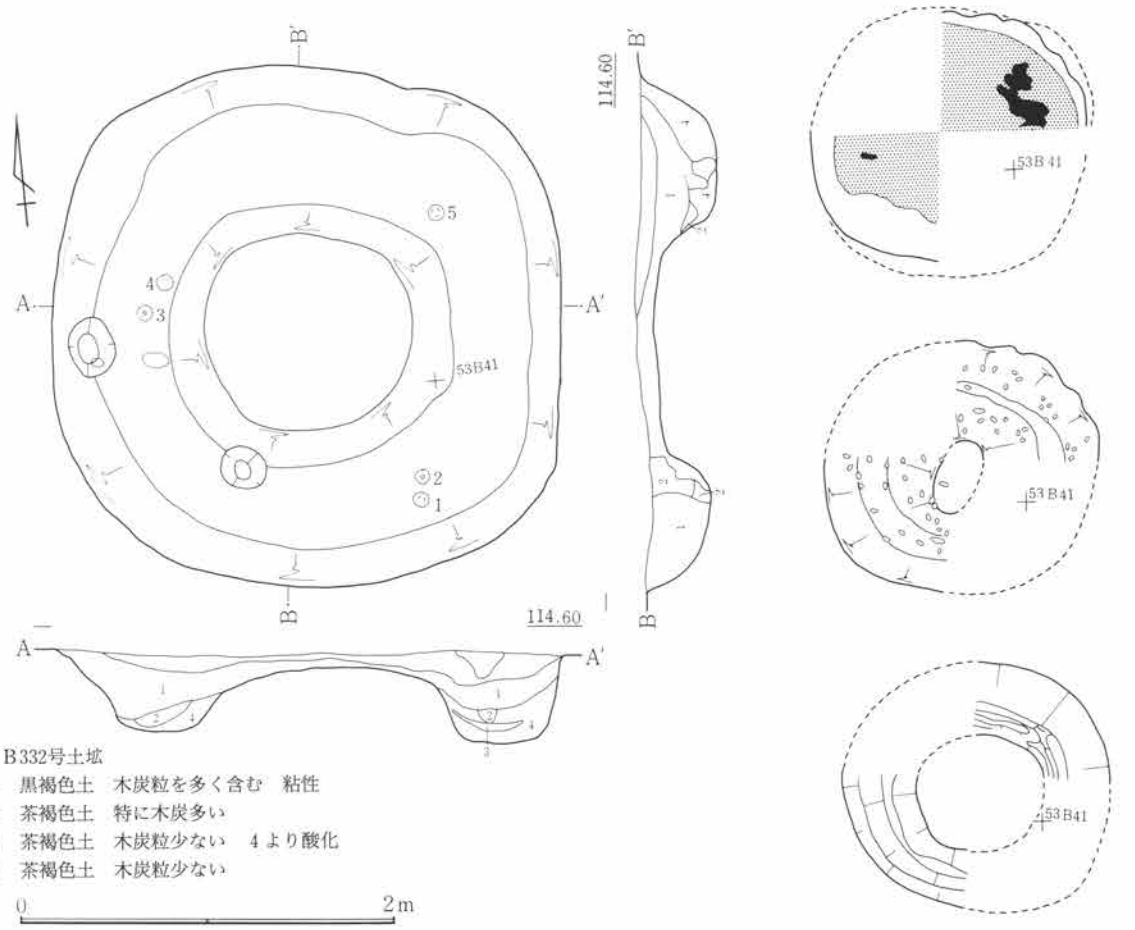


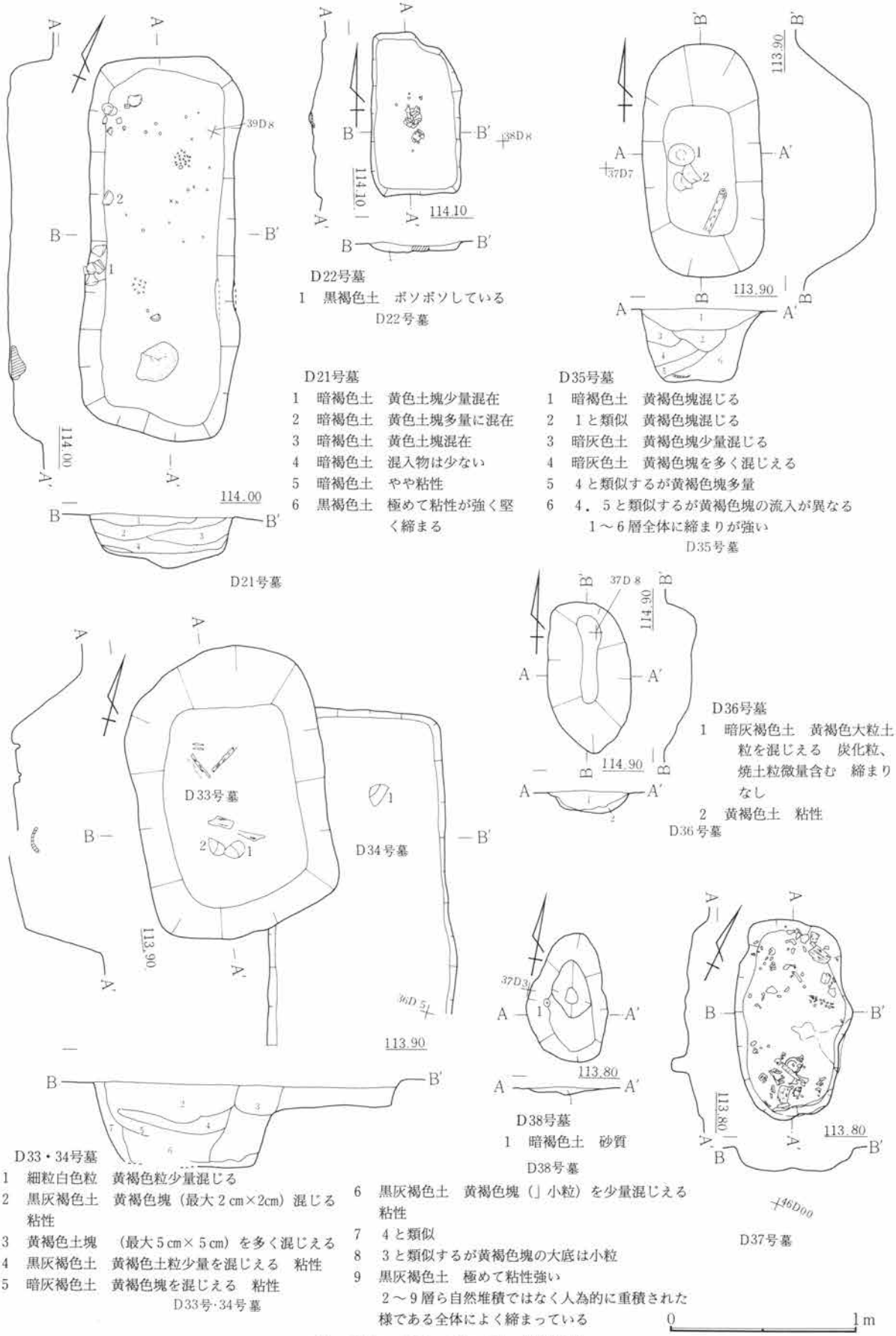
Fig. 316　B332号土坑

Fig. 317　B332号土坑

B区332号土坑出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
317－1 86－1	B332号 土坑,底面	土器 小杯	完形	8.0×5.8× 1.3	器高は著しく低い。見込部縁辺強い押えで凹み中央は環状に凸る。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③密、小石混
317－2 86－2	B332号 土坑,底面	土器 小杯	完形	8.0×5.6× 1.4	器高は著しく低い。見込部縁辺強い押えで凹み中央は環状に凸る。轆轤整形。右回転糸切り。内面に褐色付着物。	①酸化良好 ②淡橙 ③密、小石混
317－3 86－3	B332号 土坑,底面	土器 小杯	完形	8.1×5.4× 1.5	器高は著しく低い。見込部縁辺強い押えで凹み中央は環状に凸る。轆轤整形。右回転糸切り。内面油煙状付着物。	①酸化良好 ②橙 ③密、小石混
317－4 86－4	B332号 土坑,底面	土器 小杯	完形	8.0×5.6× 1.2	器高は著しく低い。見込部縁辺強い押えで凹み中央は環状に凸る。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②橙 ③密、小石混
317－5 86－5	B332号 土坑,底面	土器 小杯	完形	8.3×5.7× 1.3	器高は著しく低い。見込部縁辺強い押えで凹み中央は環状に凸る。轆轤整形。右回転糸切り。外面及び底部油煙付着	①酸化良好 ②淡橙 ③密、小石混

Fig. 318　B1・C17・24・25・D16・19・20号墓



D22号墓
1　黒褐色土　ボソボソしている

D21号墓
1　暗褐色土　黄色土塊少量混在
2　暗褐色土　黄色土塊多量に混在
3　暗褐色土　黄色土塊混在
4　暗褐色土　混入物は少ない
5　暗褐色土　やや粘性
6　黒褐色土　極めて粘性が強く堅く締まる

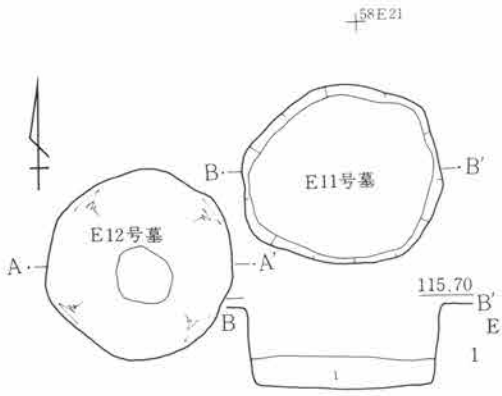
D35号墓
1　暗褐色土　黄褐色塊混じる
2　１と類似　黄褐色塊混じる
3　暗灰色土　黄褐色塊少量混じる
4　暗灰色土　黄褐色塊を多く混じえる
5　４と類似するが黄褐色塊多量
6　４．５と類似するが黄褐色塊の流入が異なる
１～６層全体に締まりが強い

D36号墓
1　暗灰褐色土　黄褐色大粒土粒を混じえる　炭化粒、焼土粒微量含む　締まりなし
2　黄褐色土　粘性

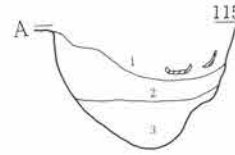
D38号墓
1　暗褐色土　砂質

D33・34号墓
1　細粒白色粒　黄褐色粒少量混じる
2　黒灰褐色土　黄褐色塊（最大２cm×2cm）混じる粘性
3　黄褐色土塊　（最大５cm×５cm）を多く混じえる
4　黒灰褐色土　黄褐色土粒少量を混じえる　粘性
5　暗灰褐色土　黄褐色塊を混じえる　粘性
6　黒灰褐色土　黄褐色塊（」小粒）を少量混じえる粘性
7　４と類似
8　３と類似するが黄褐色塊の大底は小粒
9　黒灰褐色土　極めて粘性強い
２～９層ら自然堆積ではなく人為的に重積された様である全体によく締まっている

Fig. 319　D21・22・33～33号墓

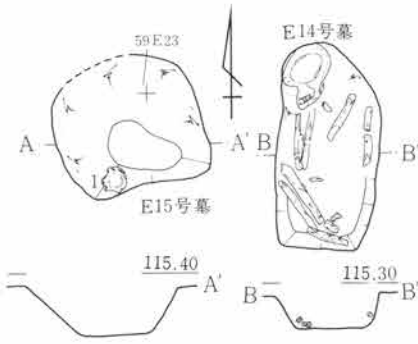


E11号墓
1　黒褐色土　地山塊を少し含む（木炭粒少ないが古銭２枚を含むため墓坑と考えられる）

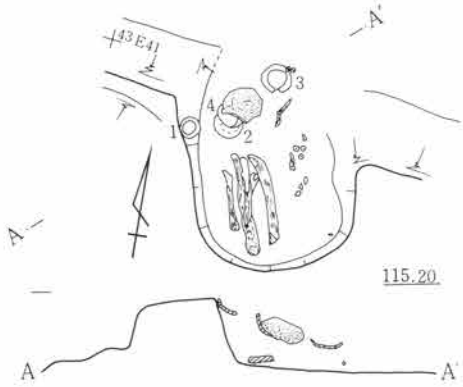


E12号墓
1　地山黄灰色小塊を多く含む
2　黒褐色土　砂質　小塊僅かに含む
3　砂質　汚れたB軽石

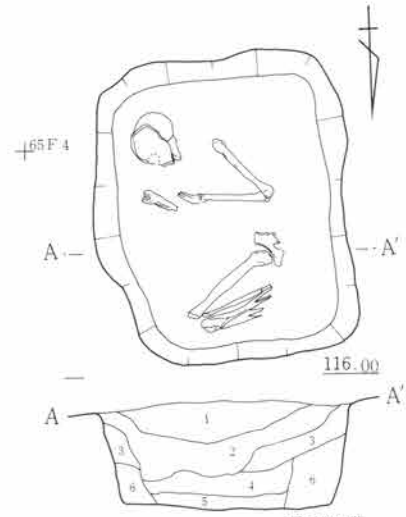
E11号･12号墓



E14号･15号墓

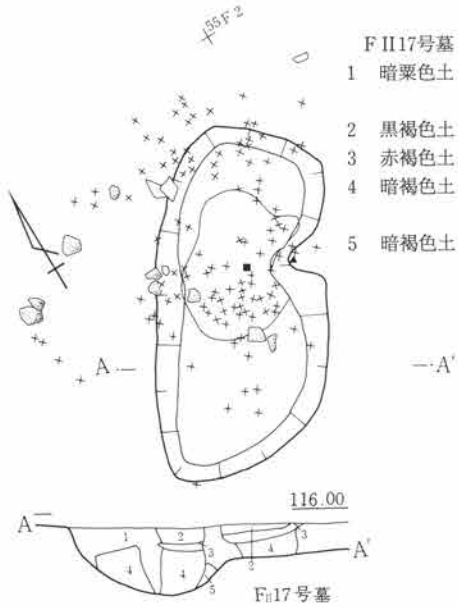


E18号墓



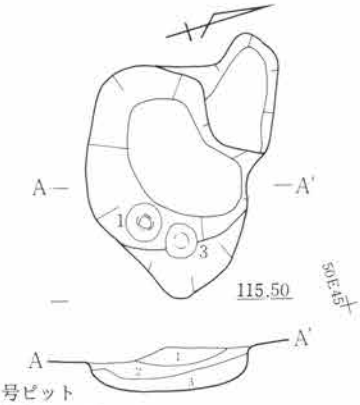
F II13号墓
1　暗茶褐色土　軽石含みやや締まる
2　黄褐色土　軽石含み堅く締まる
3　褐色土　軽石多量に含み締まる
4　暗紫色土　軽石含み軟らかく蛋白質の腐蝕を思わせる
5　淡黄褐色土　堅く締まる
6　暗褐色土　堅く締まる

F II13号墓



F II17号墓
1　暗栗色土　B軽石粒多量に含む　砂質土　骨片多い
2　黒褐色土　黒色灰　B軽石 Unit
3　赤褐色土　赤褐色灰　B軽石 Unit
4　暗褐色土　B軽石層　砂質　B軽石 unit
5　暗褐色土　粘性あり

F II17号墓



E１号ピット
1　暗褐色土　白色細粒の浮石を多量に含む　締まりよい　粘性少ない
2　暗褐色土　白色粗粒のパミスをまばらに含む　締まり１より弱く粘性あり
3　暗褐色土　白色細粒の浮石を多く含む　２より明かるい　ローム質土を多く含む　粘性２より強い

E１号

Fig. 320　E11・12・14・15・18・F II13・18・17号墓・E１号ピット

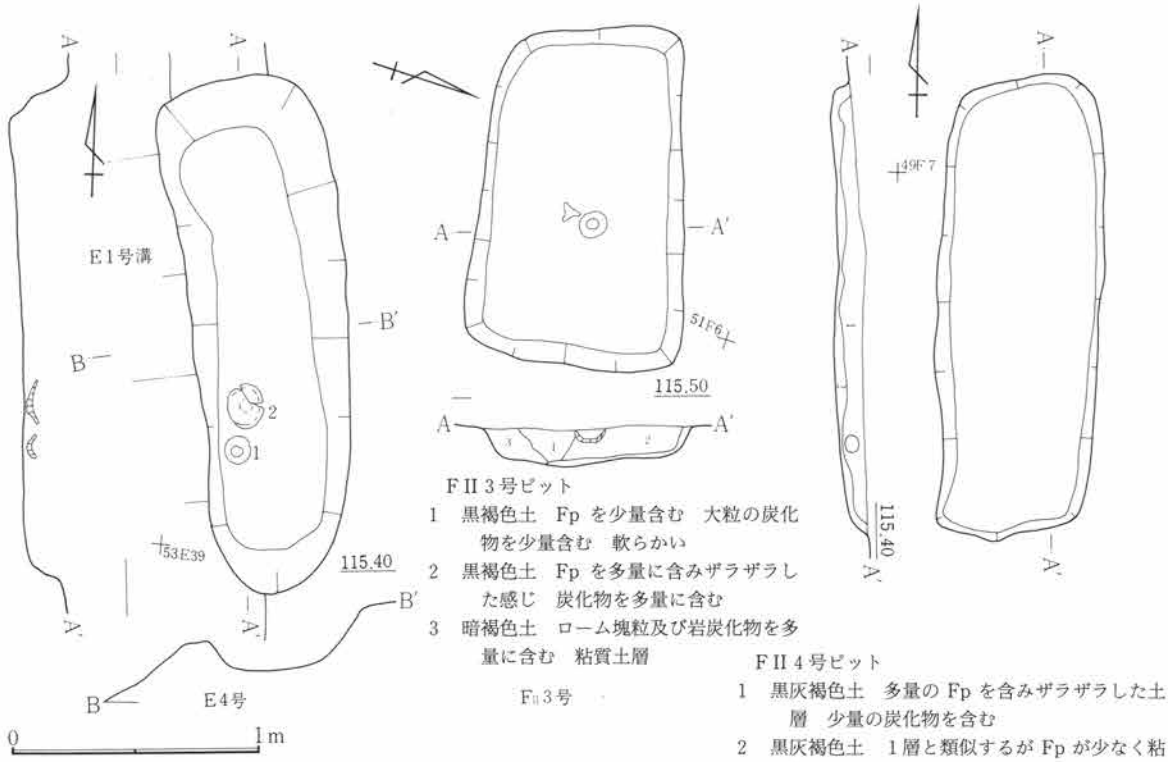


Fig. 321　E 4・FⅡ3・4号ピット

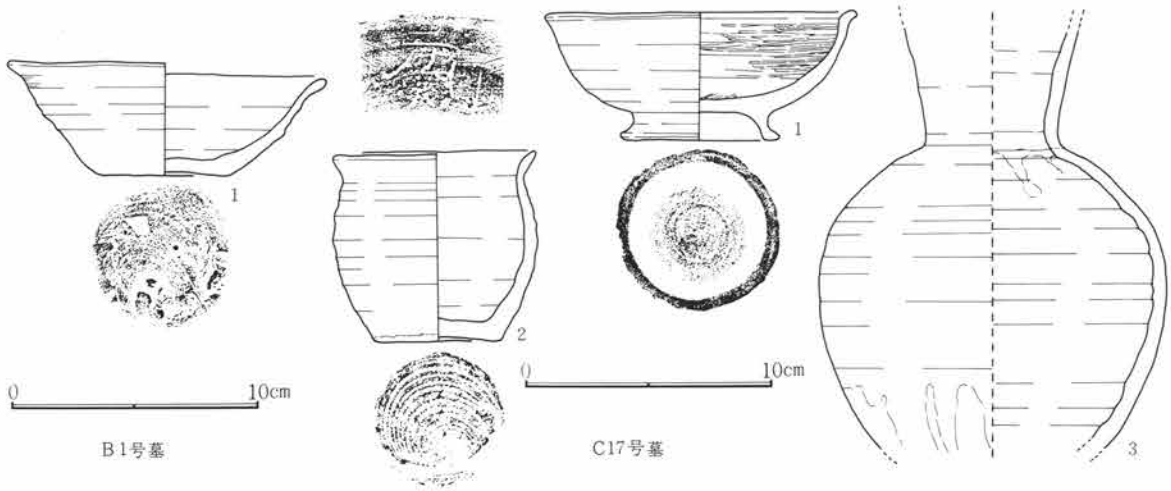


Fig. 322　B 1・C17号墓出土遺物

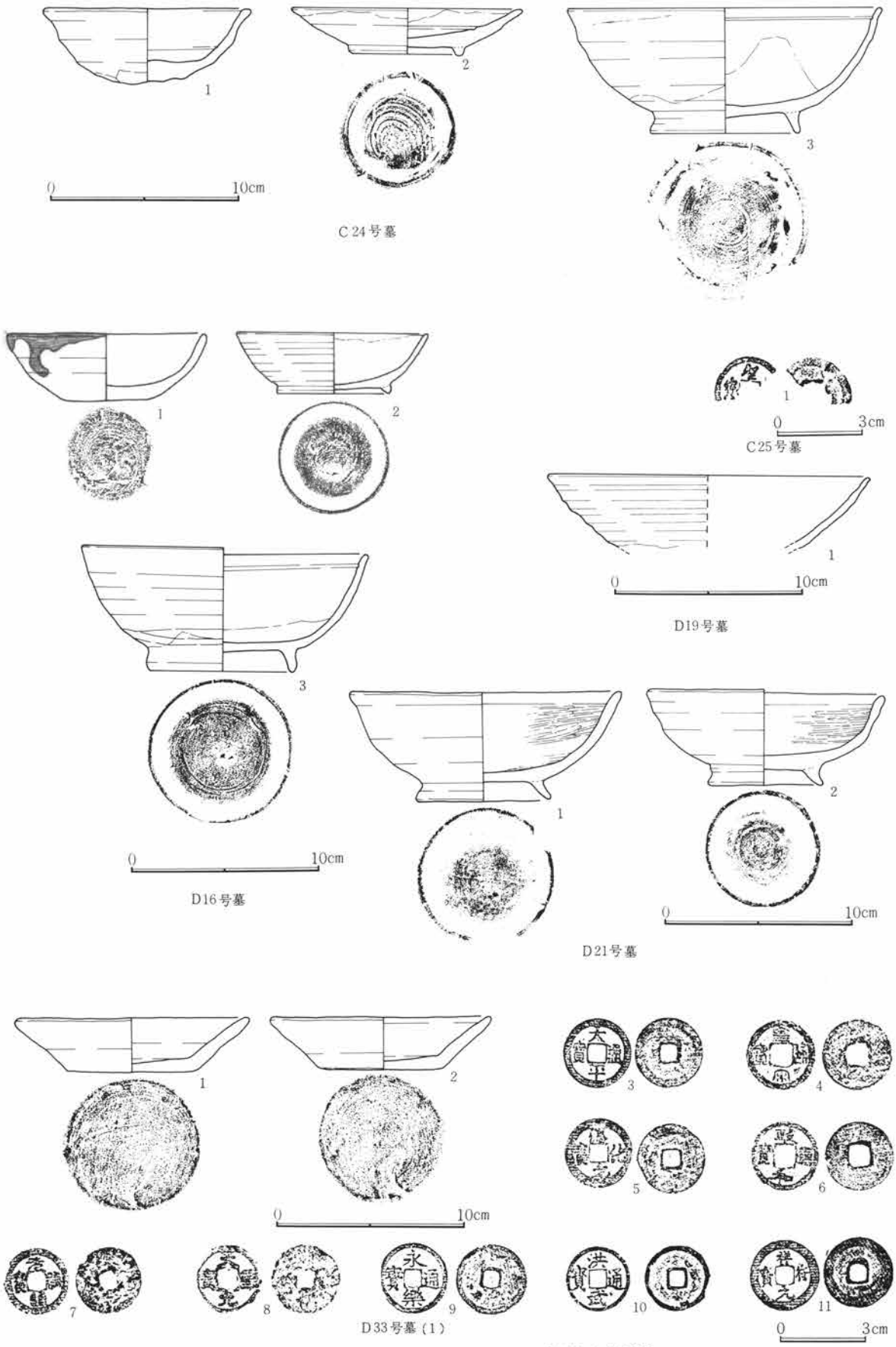


Fig. 323　C24・D16・19・21・33号墓出土遺物

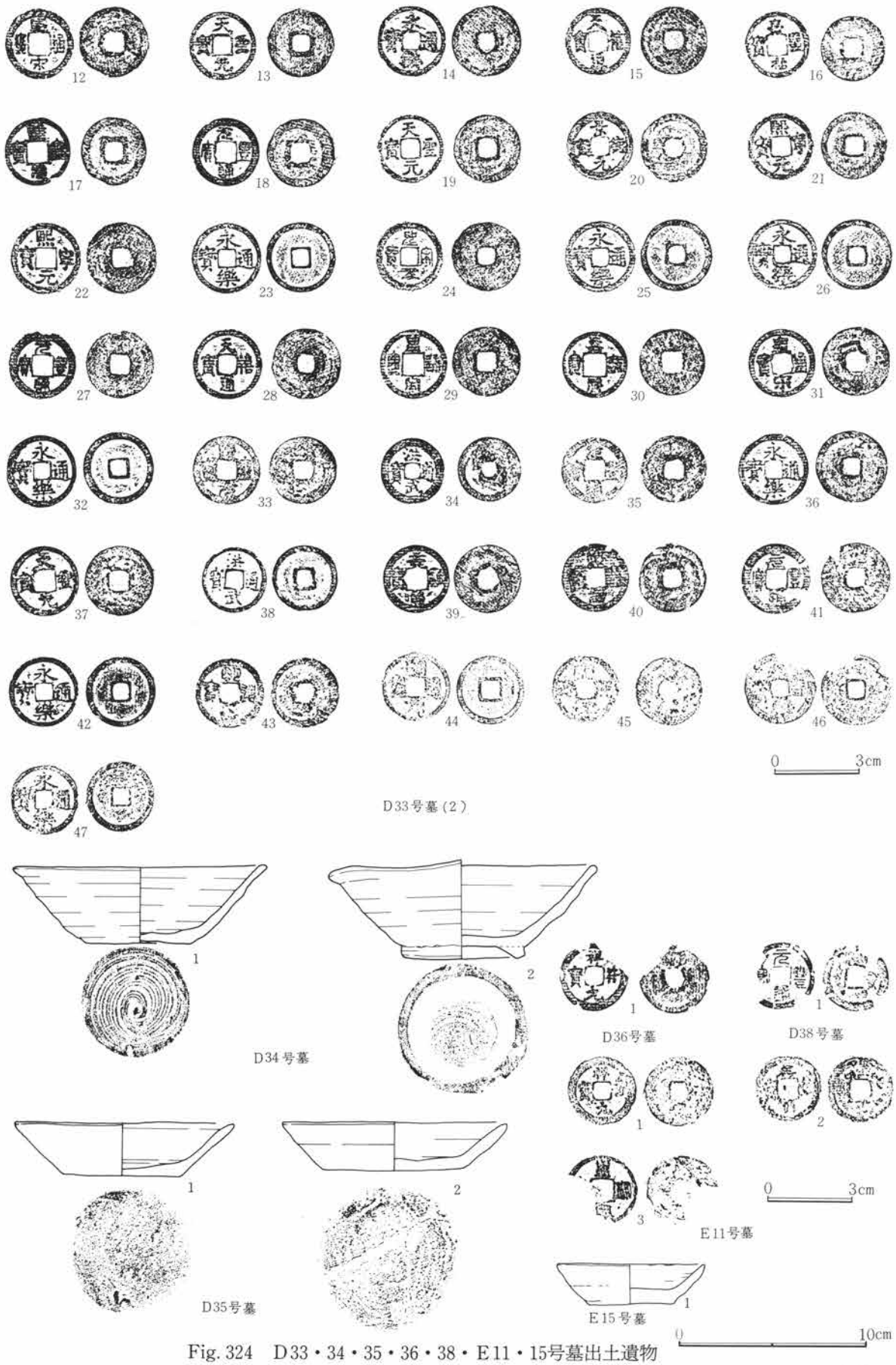


Fig. 324　D33・34・35・36・38・E11・15号墓出土遺物

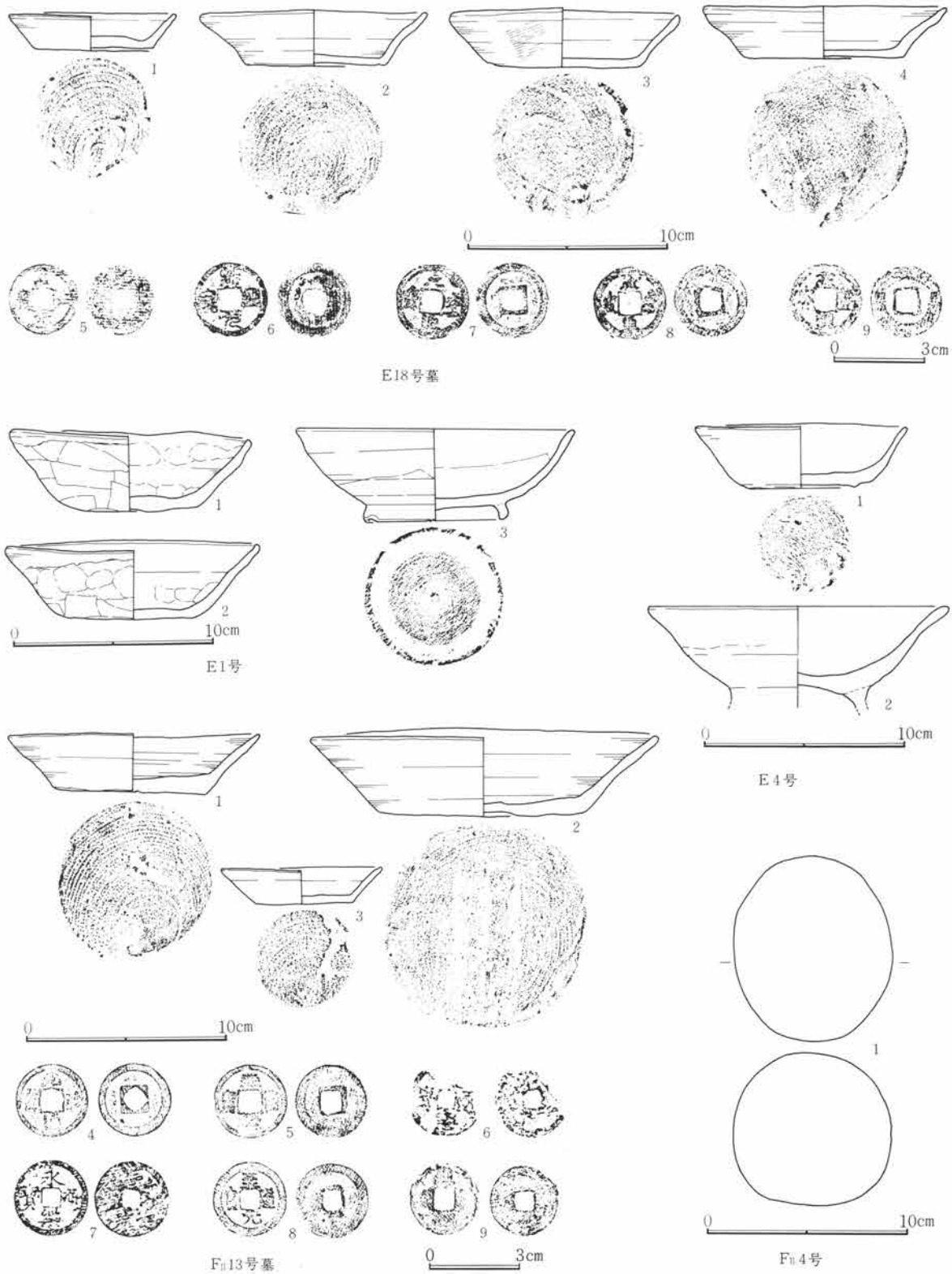


Fig. 325　E18・FⅡ13号墓・E１・４・FⅡ４号ピット出土遺物

B～FⅡ区墓跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
322－1 86－1	B１号墓	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.7×5.7 ×4.3	底径小さく、体部中位で緩く張る。口縁部大きく外反して開く。轆轤整形。体部外面轆轤目強い。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③密

Ｂ～Ｆ区墓跡出土遺物観察表（２）

Fig. No PL. No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
322－1 86－1	C17号墓	内黒土器 椀	完形	12.5×6.5 ×5.1	体部丸く強く張る。口縁部小さく折れて外屈。付高台高くハの字状に開く。内面黒色処理。横位篦磨き。体部外面にの焼成後篦文字。	①酸化良好 ②橙 ③やや密
322－2 86－2	C17号墓	須恵器 小型甕	完形	8.1×5.0× 7.5	胴部僅かに張り、口縁部短かくくの字状に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗 軽石粒多混
322－3 87－3	C17号墓	灰釉陶器 瓶	胴部⅓	－×－× 16.6	胴部丸く張り、球形を呈す。頸部僅かに外反して立ち上がる。外面・頸部内面施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
323－1 87－1	C24号墓	土師器 杯	⅔	11.0×－× 4.0	底部肥厚し丸底 体部丸味をもち口縁部緩く外反して開く。轆轤整形。回転糸切り。腰部に粗い篦削り。	①良好 ②橙 ③やや粗砂粒多混
323－2 87－2	C24号墓	灰釉陶器 段皿	完形	12.2×6.2 ×2.4	体部直線的に開く。内面に明瞭な段をなす。高台断面丸く低い。底部回転糸切り。口縁部内外面漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
323－3 87－3	C24号墓	灰釉陶器 椀	完形	16.6×8.0 ×6.5	体部丸く張り深身。口縁部僅かに外反気味。内面口縁部凹線巡る。高台やや高くハの字状に張る。腰部回転篦削り。内外面漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
323－1 87－1	D16号墓 床直上	須恵器 杯	完形	10.5×4.5 ×3.5	底径小さく肥厚す。体部丸味をもち内湾して開く。口唇部丸い、轆轤整形。右回転糸切り。外面に黒色付着物。	①酸化・軟 ②浅黄橙 ③やや密
323－2 87－2	D16号墓 床直上	緑釉陶器 椀	完形	10.0×6.0 ×3.2	体部浅目緩く内湾気味に開く。体部器肉薄く均一。付高台低く丁寧。轆轤整形。右回転糸切り。釉調濃緑色。使用擦	①良好 ②灰白 ③やや密硬質
323－3 87－3	D16号墓 床直上	灰釉陶器 椀	完形	15.1×7.7 ×6.5	体部深く丸味強い。口唇部僅かに外反。内面口唇下に明瞭な凹線巡る。付高台、内湾気味に立ち高目。轆轤整形。回転篦削り。腰部手持ち篦削り。漬け掛け施釉。口縁、畳付け使用擦れ。虎渓山１号窯式。	①良好 ②灰白 ③やや密
323－1 87－1	D19号墓	灰釉陶器 椀	体部¼	17.0×－× (3.7)	体部緩い丸味をもち大きく開きやや浅身。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
323－1 87－1	D21号墓	内黒土器 椀	⅔	14.3×7.1 ×5.7	体部丸味をもち、口縁部は緩く外反して開く。付高台、やや高く大きくハの字状に開く。内面黒色処理。篦磨き。轆轤整形。	①良好 ②淡橙 ③やや密砂粒多混
323－2 87－7	D21号墓	内黒土器 椀	ほぼ完形	12.6×6.1 ×4.9	体部丸味をもち、中位でやや強く張る。口縁部外反気味。付高台やや高くハの字状に開く。内面黒色処理。篦磨き。	①良好 ②淡黄 ③やや密砂粒多混
323－1 87－1	D33号墓	土器 小杯	完形	12.3×6.9 ×2.8	器肉厚目。体部中位で小さくくびれ、上半は内湾気味で大きく開く。轆轤整形。左回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや粗砂粒多混
323－2 87－2	D33号墓	土器 小杯	完形	11.7×6.5 ×2.7	器肉厚目。体部中位で僅かにくびれ、上半は内湾気味に大きく開く。胎内吸炭。轆轤整形。左回転糸切り。	①良好 ②淡黄 ③やや粗砂粒多混
324－1 87－1	D34号墓	須恵器 杯	ほぼ完形	13.5×5.7 ×4.0	底部小径。腰部に僅かな丸味をもち、体部外反気味に大きく開く。轆轤整形。右回転糸切り（中心切り）。	①良好 ②灰白 ③やや密
324－2 87－2	D34号墓	須恵器 椀	完形	14.4×6.6 ×4.8	体部直線的に大きく開く。付高台、断面矩形でやや幅広。轆轤整形。回転糸切り。器肉厚目。	①良好 ②灰 ③やや粗黒色粒混
324－1 88－1	D35号墓 床面	土器 皿	ほぼ完形	11.7×6.1 ×2.75	体部大きく外傾して直線的に開く。轆轤整形。器面の摩耗著しい。底部篦調整か。	①軟 ②淡橙 ③やや粗
324－2 88－2	D35号墓 床面	土器 皿	ほぼ完形	11.9×7.2 ×2.45	体部大きく外傾して直線的に開く。轆轤整形。器面の摩耗著しい。底部回転糸切り後篦調整か。	①軟 ②淡橙 ③やや粗
324－1 —	E15号墓	土器 小皿	ほぼ完形	8.0×4.4× 2.0	体部内湾気味に開き、口唇部尖がる。底部肥厚。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325－1 88－1	E18号墓	土器 小杯	完形	8.2×5.6× 1.8	見込部僅かに凸る。体部は直線的に外傾する。轆轤整形。左回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325－2 88－2	E18号墓	土器 小杯	完形	11.4×7.1 ×2.7	体部中位で大きく折れ、やや内湾気味に開く、轆轤整形。左回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325－3 88－3	E18号墓	土器 小杯	ほぼ完形	11.4×7.5 ×2.9	体部中位で小さくくびれ、上半は内湾気味で大きく開く。口唇部やや肥厚。轆轤整形。左回転糸切り。胎内吸炭。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325－4 88－4	E18号墓	土器 小杯	完形	12.0×8.0 ×2.5	体部下半外反気味。中位から大きく内湾気味に開く。轆轤整形。左回転糸切り。見込部強い撫で。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325－1 88－1	E1ピット	土師器 杯	完形	12.0×6.2 ×3.8	不安定な平底。体部直線的でやや深身。体部指頭後全体に横篦削り。底部手捏整形。巻き上げ痕あり。	①良好 ②橙 ③やや粗細砂粒混
325－2 88－2	E1ピット 埋土	土師器 杯	ほぼ完形	12.6×6.2 ×3.3	不安定な平底。体部中位で小さくくびれ、上半は内湾気味に開く。口唇部小さく内屈。体部中位指頭痕。腰部篦削り底部一定方向篦削り。	①良好 ②浅黄橙 ③やや粗細砂粒混
325－3 88－3	E1ピット 埋土	灰釉陶器 椀	完形	13.8×7.2 ×4.5	体部丸味をもつ浅身。腰部・底部回転篦削り。高台内湾気味に立つ、内外面漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密細砂粒混
325－1 89－1	E4ピット	須恵器 杯	完形	10.4×5.2 ×3.0	腰部丸く張り、体部上半は緩く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや粗砂粒多混

Ｂ～Ｆ区墓跡出土遺物観察表（３）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
325－2 89－2	E４ピット	須恵器 椀	高台欠損	14.8×－×(5.0)	体部下半に丸味をもち上半は大きく外反して開くやや浅身付高台。轆轤整形。	①良好 ②橙 ③やや密細砂粒混
325－1 89－1	F Ⅱ13号墓	土器 杯	完形	12.4×7.6×2.9	底部肥厚。体部下半緩く外反気味に開き、中位で小さくくびれ上半は内湾気味に開く。轆轤整形。左回転糸切り。	①良好②淡橙 ③やや密
325－2 89－2	F Ⅱ13号墓	土器 杯	完形	17.1×10.0×4.2	体部下半は外反気味に開き、上半は緩く内湾して大きく開く。轆轤整形。左回転糸切り。	①良好 ②淡橙 ③やや密
325－3 89－3	F Ⅱ13号墓	土器 杯	完形	8.0×5.0×1.8	口縁部内湾気味に開く。内面体部中位に弱い段をなす。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化良好 ②灰褐 ③密
325－1 89－1	F Ⅱ４ピット 埋土	石		9.1×7.7×7.5 重750g	自然石。表面人工的摩耗の可能性あり。	

墓　古銭

Fig. No. PL. No.	遺構名	部位 残存量	計測値 径(cm)	備考
323－1 87－1	C25号墓	⅓	径2.4	聖宋元宝（真）銅 北宋 建中靖国元年1101
323－3 88－3	D33号墓	完形	径2.4	太平通宝 銅銭 北宋 大平興国元年976
323－4 88－4	D33号墓	〃	径2.4	皇宋通宝（篆）銅銭 北宋 宝元２年1039
323－5 88－5	D33号墓	〃	2.3	淳化元宝（行）銅銭 北宋 淳化元年990
323－6 88－6	D33号墓	〃	2.3	政和通宝（真）銅銭 北宋 政和元年1111
323－7 88－7	D33号墓		2.3	元祐通宝（篆）銅銭 北宋 元祐元年1086
323－8 88－8	D33号墓	〃	2.3	元聖元宝（真）銅銭 北宋 天聖元年1023
323－9 88－9	D33号墓	〃	2.4	永楽通宝 銅銭 明 永楽６年1408
323－10 88－10	D33号墓	〃	2.2	洪武通宝 銅銭 明 洪武元年1368
323－11 88－11	D33号墓	〃	2.4	祥符元宝 銅銭 北宋 大中祥符元年1008
324－12 88－12	D33号墓	〃	2.4	皇宋通宝（真）銅銭 北宋 宝元２年1039
324－13 88－13	D33号墓	〃	2.3	天聖元宝（真）銅銭 北宋 天聖元年1023
324－14 88－14	D33号墓	完形	2.4	永楽通宝 銅銭 北宋 永楽６年1408
324－15 88－15	D33号墓	〃	2.3	天禧通宝 銅銭 北宋 天禧年間1017～
324－16 88－16	D33号墓	〃	2.3	嘉祐通宝（真）銅銭 北宋 嘉祐元年1056
324－17 88－17	D33号墓		2.3	？
324－18 88－18	D33号墓		2.4	元豊通宝（篆）銅銭 北宋 元豊元年1078
324－19 88－19	D33号墓	〃	2.3	天聖元宝（真）銅銭 北宋 天聖元年1023
324－20 88－20	D33号墓		2.4	景徳元宝 銅銭 北宋 景徳元年1044
324－21 88－21	D33号墓	〃	2.3	熙寧元宝（真）銅銭 北宋 熙寧元年1068
324－22 88－22	D33号墓	〃	2.5	熙寧元宝（真）銅銭 北宋 熙寧元年1068
324－23 88－23	D33号墓	〃	2.4	永楽通宝 銅銭 明 永楽６年1408
324－24 88－24	D33号墓		2.4	聖宋元宝（篆）銅銭 北宋 建中靖国元年1101
324－25 88－25	D33号墓	〃	2.5	永楽通宝 銅銭 北宋 永楽６年1408
324－26 88－26	D33号墓	〃	2.4	永楽通宝 銅銭 北宋 永楽６年1408
324－27 88－27	D33号墓	〃	2.4	元豊通宝（篆）銅銭 北宋 元豊元年1078
324－28 88－28	D33号墓	〃	2.4	天禧通宝 銅銭 北宋 天禧年間1017～
324－29 88－29	D33号墓	〃	2.4	皇宋通宝（篆）銅銭 北宋 宝元２年1039
324－30 88－30	D33号墓	〃	2.3	？
324－31 88－31	D33号墓	〃	2.4	皇宋通宝（篆）銅銭 北宋 宝元２年1039
324－32 88－32	D33号墓	完形	2.5	永楽通宝 銅銭 明 永楽６年1408
324－33 88－33	D33号墓	〃	2.4	？
324－34 88－34	D33号墓	〃	2.3	洪武通宝 銅銭 私鋳銭 天正～元禄1580～
324－35 88－35	D33号墓	〃	2.3	元豊通宝（篆）銅銭 北宋 元豊元年1078
324－36 88－36	D33号墓	〃	2.5	永楽通宝 銅銭 明 永楽６年1408
324－37 88－37	D33号墓	〃	2.4	天聖元宝（真）銅銭 北宋 天聖元年1023
324－38 88－38	D33号墓	〃	2.3	洪武通宝 銅銭 私鋳銭 筑前 天正～元禄1580
324－39 88－39	D33号墓	〃	2.3	？
324－40 88－40	D33号墓	〃	2.4	？
324－41 88－41	D33号墓	〃	2.4	元豊通宝（篆）銅銭 北宋 元豊元年1078
324－42 88－42	D33号墓	〃	2.4	永楽通宝 銅銭 明 永楽６年1408
324－43 88－43	D33号墓	〃	2.4	明道元宝（篆）銅銭 北宋 明道元年1023
324－44 88－44	D33号墓	完形	2.4	開元通宝 銅銭 唐武徳４年621
324－45 88－45	D33号墓	〃	2.4	治平元宝（篆）銅銭 北宋 治平元年1064
324－46 88－46	D33号墓	〃	2.5	永楽通宝 明 永楽６年1408

Fig. No. PL. No.	遺構名	部位 残存量	計測値 径(cm)	備考
324—47 88—47	D33号墓	〃	2.4	永楽通宝　銅 明　永楽6年1408
324—1 87—1	D36号墓	⅘	2.4	祥符元宝　銅 北宋　大中祥符元年1008
324—1 87—1	D38号墓	⅘	2.3	元豊通宝（篆）銅 北宋　元豊元年1078
324—1 88—1	E1号墓	完形	2.4	祥符元宝　銅 北宋　大中祥符元年1008
324—2 88—2	E11号墓	完形	2.3	元豊通宝（真）銅銭 北宋　元豊元年1078
324—3 88—3	E11号墓	⅔	2.5	?
325—5	E18号墓	完	2.3	景祐元宝 北宋景祐元年1034?
325—6	E18号墓	完	2.4	熙寧元宝 北宋　熙寧元年1068
325—7	E18号墓	完	2.4	元豊通宝（真） 北宋　元豊元年1078
325—8 88—8	E18号墓	完	2.4	元豊通宝（真）銅銭 北宋　元豊元年1078
325—9 88—9	E18号墓	完	2.4	元豊通宝（篆）銅銭 北宋　元豊元年1078
325—4 89—4	FⅡ13号墓	完	2.4	元祐通宝（真）銅銭 北宋　元祐元年1086
325—5 89—5	FⅡ13号墓	完形	2.4	天聖元宝（篆）銅銭 北宋　天聖元年1023
325—6 89—6	FⅡ13号墓	⅔	2.4	永楽通宝　銅銭 明　永楽6年　1408
325—7 89—7	FⅡ13号墓	完形	2.45	永楽通宝　銅銭 明　永楽6年　1408
325—8 89—8	FⅡ13号墓	〃	2.4	至道元宝（真）銅銭 北宋　至道元年995
325—9 89—9	FⅡ13号墓	〃	2.3	?

4．溝　　跡（Fig. 331～345　PL. 32～34・89～98）

A～E区にかけては各々大小多数の溝が検出され、その概数は 67条にのぼる。それらのほとんどは、埋土の上位層に浅間山降下のB軽石粒を主体とする土層が堆積する。鳥羽遺跡でのB軽石に対する基本的な認識では、B軽石層の第1次堆積（灰と砂粒の unit）を基準にして、純堆積の見られないB軽石粒層は降下以降の時期と判断されている。この基準に従えば、ほとんどの溝跡はB軽石降下以降の時期に属する。これらの中で唯一軽石降下以前で古代の所産と考えられる溝はD区からE区にまたがって調査区を南北走するE405号溝である。E405号溝での土層堆積は、溝の埋土としてC軽石粒を混える暗褐色で埋没し、覆土の状態で第一次 unit 堆積するB軽石層が確認されている。

溝跡の多くは地割機能としての性格が考えられるが、F～E区にまたがりコの字状に検出されているF3号溝などは館址を構成する溝の一部である可能性が強く、別に項を設けて述べる。また、鳥羽遺跡の各調査区においては最も初期に実施されたA区では、上幅9mにおよぶ大規模な溝をはじめ数条の溝が検出されている。これら溝跡とともに道路状遺構が存在しており、両者は有機的に関連する遺構と考えられ、一括して報告する。

A区道路状遺構

A1号道路状遺構

A1号道路状遺構はA区調査域の西側に位置し、56～59A32・33の範囲にある。検出は浅間山降下のB軽石粒を多量に含む第3層の下にある。路面には盛土や敲き締めの痕跡は認められていないが、基層となる粘性黒色土の僅かな盛り上がりとして観察される。検出全長は約6mの狭少な範囲で、幅員1.8mを測る。走向は西北西から東北東へ約20°の傾きをもちN—78°—Eを示す。1号道路状遺構の北と南の両側には各々3号・4号溝が併走して設けられ、さらに北縁辺より北へ5.5mの間隔をおいてほぼ平行走向する幅10mあまりの1号溝がある。当跡はB軽石粒を多量に含む茶褐色土で覆われていたことから、B軽石降下以前の構築になると考えられている。また、1号道路状遺構の東側延長線上に検出されている2号道路状遺構は、同じB軽石粒混りの茶褐色土を掘り込んで構築されていることから、当跡より新しくB軽石降下以後の所産であり、1号道路状遺構上に形成された2次路面と考えられている。

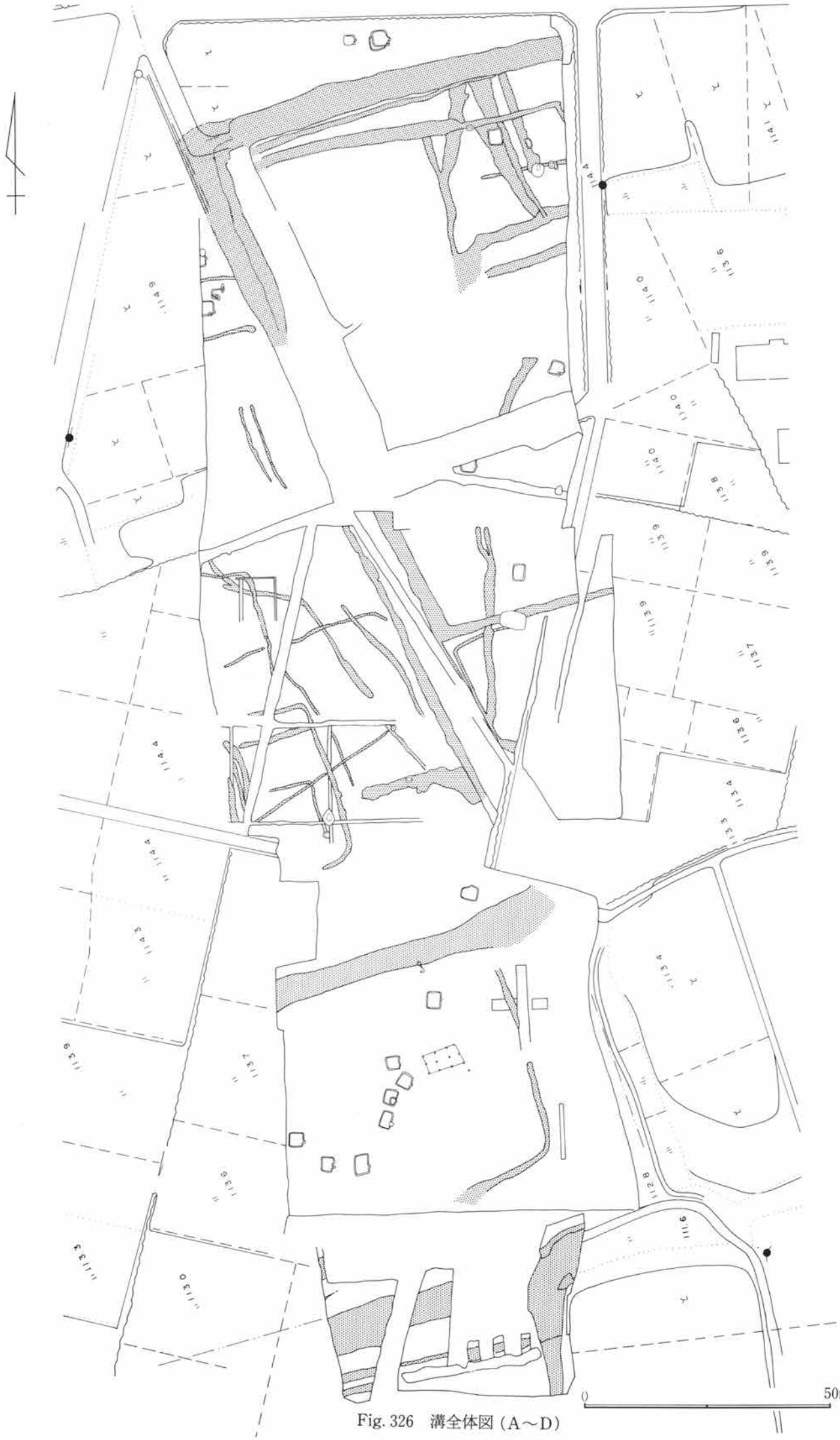


Fig. 326　溝全体図（A～D）

Fig. 327　溝全体図（D～F）

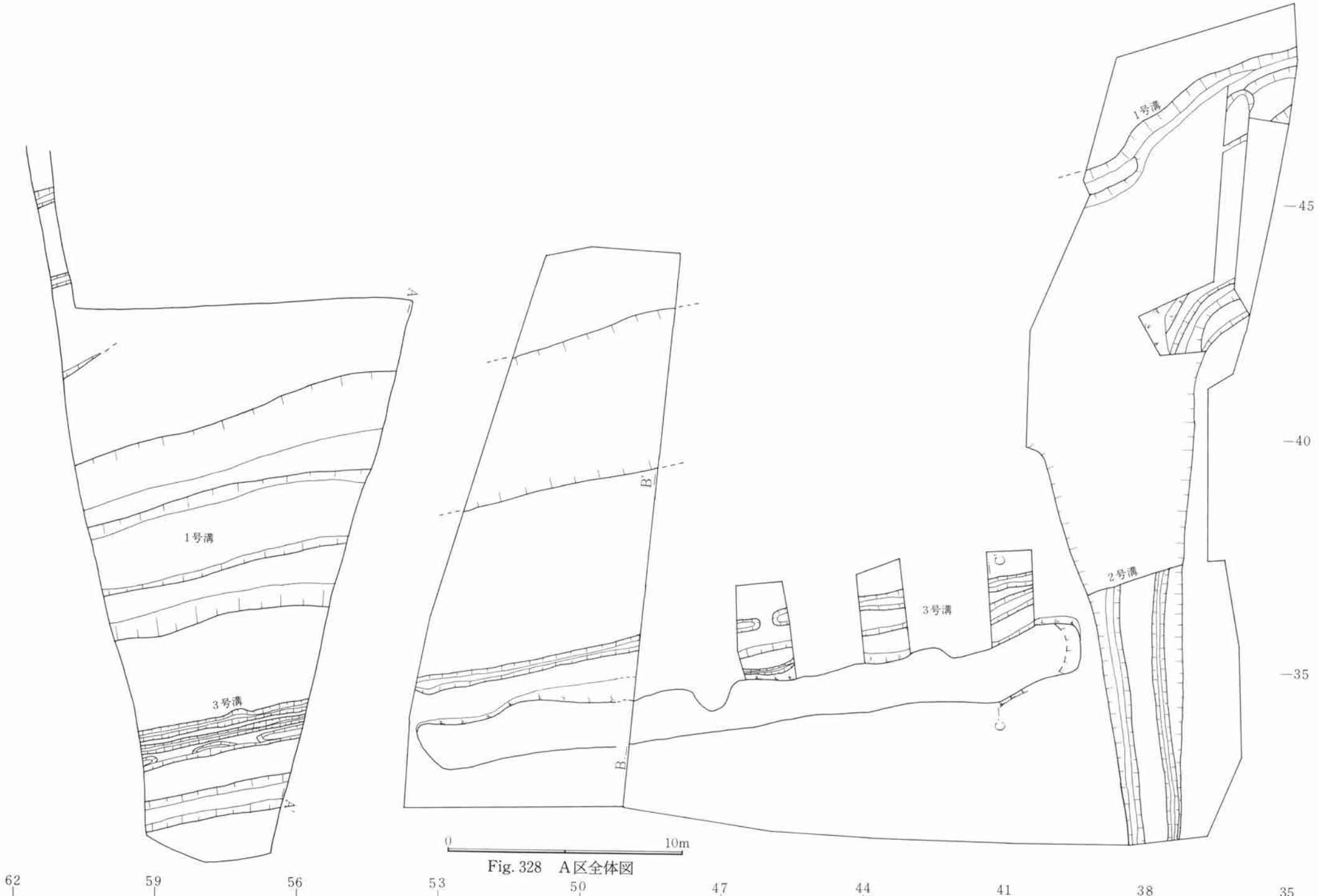


Fig. 328　A区全体図

Ａ２号道路状遺構

Ａ２号道路状遺構はＡ１号道路状遺構の東延長線上にあり、検出範囲は39～53Ａ32～35におよぶ。浅間山降下のＢ軽石粒を含む茶褐色土を堀り込んで構築される。路面はＢ軽石混じり茶褐色土と、Ａ１号道路状遺構の基層となっている粘性黒色土及び茶褐色土を約37㎝掘り込み、明らかに人為的な盛土と見られる白色・茶色・黒色などの粘土が混存したものを用いてある。検出全長は約29mにおよび、幅員は最大で2.5mを測る。走向はＡ１号道路状遺構とほとんど変らずＮ－78°－Ｅを示す。なお、路再北縁は後の攪乱のためか、南縁に比べ路線に乱れが生じている。Ａ１号道路状遺構に併走するＡ３号・Ａ４号溝から、南側に位置する４号溝は、Ａ２号道路状遺構の検出面では存在しない。断割土層観察によれば掘り込み面であるＢ軽石混じり茶褐色土下の粘性茶褐色土に僅かな落ち込みが認められ、これをＡ４号溝とすれば、両者の間に明瞭な時間差が存在することになる。

Ａ区には、このほか２号溝内に道路状遺構が確認されている。昭和53年の調査時には、昭和33年以降に行なわれた土地改良以前の道路であると記録されているが、道路に関するそれ以上の所見は述べられていない。

幅員約１m・全長11mが検出され、走向はＮ－５°－Ｗを示す。

Ａ区溝跡

Ａ１号溝跡

Ａ１号溝は浅間山降下Ｂ軽石粒を混える茶褐色土層下で確認された。当跡はＢ軽石純層（Unit 堆積）を掘り込み面にしている。検出部分は断続的であるが、35～61Ａ35～48の範囲におよび、全長約55mである。上面幅10.7m・底面幅8.5m・確認面からの深さ75㎝を測る。断面形状は幅広なＵ字形を呈する。走向は１号・２号道路状遺構とほぼ同方向をとりＮ－70°－Ｅを示す。上面覆土は現耕作土と昭和33年頃に実施された耕地整理事業による盛土が覆う。埋土は耕地整理以前の水田耕作土と水田底面の鉄分沈澱層とこれらと同質でＢ軽石粒を含む層が主体的である。最下層には基底に砂層と互層になる粘性土が埋まる。調査時の所見では溝内に一定の水量が留まっていた状況ではなく、空堀と考えられている。当跡は調査区東側で南北走するＡ２号溝と合流して、さらに東へ延びる様相が見られる。

Ａ２号溝跡

Ａ２号溝は調査区の東側に位置し、およそ37～40Ａ31～40の範囲にある。当区では唯一南北走する溝である。北へ向かうにつれ上幅を広げるが、Ａ１号溝と接してこれを横断して北走することはない。本来的にＡ１号溝と合流させる意図で開削され、互いに有機的な関連があると考えられる。なお当溝とＡ２号道路状遺構及びＡ３号溝は平面的に直交する位置にあるが、両者とも当溝が切っており、さらに東側延長線部分には確認されていない。南側での溝上幅は2.6m・深さ20㎝を測り、Ａ１号溝との合流直前では幅約6.4mまで広がり深さ約１mを測る。走向はＮ－５°－Ｗを示す。底面は中央部に幅約１mの高まりをもち、これが昭和33年以降に実施された土地改良以前の道路に相当するとされている。この道路に沿う東・西には轍状の１～0.6mの溝が設けられている。この溝から道路部分の高底差は約20㎝である。しかしＡ２号溝跡の底面検出部分は南側の約11.5mの範囲に留まり、Ａ１号溝との合流点で状況は不明である。

Ａ３号溝跡

Ａ３号溝はＡ１号・Ａ２号道路状遺構の北縁を併走する溝である。検出面は当区における基層となる粘性

茶褐色土であり、深さ10cm・上幅40cmの浅く小規模な溝である。走向は道路状遺構とほぼ通じくしており、N－78°－Eを示す。当溝はＡ１号道路状遺構部分では２条をなすが、これに近接するＡ２号道路状遺構部では１条に、さらに東に至っては約１mの幅広な溝になる。そして検出最東部では再び２条が検出されている。これらの検出状況から見て、Ａ３号溝跡はその遺存の度合によって各部分の様相が異なるものの、本来は単一の遺構としてとらえ得る可能性が強く、Ａ１号・Ａ２号道路状遺構とは密接な関連をもつ遺構であり、両道路状遺構の側溝的機能が考えられる。

Ａ４号溝跡

Ａ４号溝は、Ａ１号道路状遺構の南縁に沿って検出された溝である。検出面はＡ３号溝と同じく粘性のある茶褐色土面である。上幅約１m・深さ10cm程度である。走向はＡ３号溝と同じN－78°－Eを示す。規模・走向その他検出状況にはＡ３号溝に類似しており、やはりＡ１号道路状遺構に対する側溝的機能が考えられる。しかし、Ａ３号溝と異なるのは、東側に延びるＡ２号道路状遺構の南縁には検出されていない点である。当溝の延長上はＡ２号道路状遺構の粘土路面が重なっており、新旧のある両道路状遺構のうち新しいＡ２号の路面構築に際し当溝の機能を停止させたものと考えられる。

Ｂ１号溝

Ｂ区のほぼ中央部東西走行する溝である。38～65Ｂ20～33の範囲にあり、走向方位はおよそN－65°－Eを示す。規模は最大上幅5.5m・下幅２m・深さ50cmを測る。断面形は浅いＶ字形を呈す。西方は調査区外に延び、東方は地勢的に低地帯に及ぶため自然消滅の様相を呈す。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒が主体である。

Ｂ２号溝

Ｂ区南端から北東走し、孤を描いて折れ北西へ延びる。38～46Ｂ０～24の範囲に及ぶ。走向方位はN－60°－Eで約17m・N－15°－Wで約15m延びて一担跡切れ、35mまで確認できた。Ｂ１号溝と合流する位置にあるが検出できなかった。

Ｃ37号溝

Ｃ区南半にあり、北西から南東走する溝で一部はＢ区に及ぶ。42～58Ｂ40～Ｃ19の範囲で検出している。走向方位は直線的でN－25°－Wを示す。規模は上幅約２mで断面緩いＶ字形を呈す。立ち上がり縁辺には土留と考えられる木杭が施工されている。埋土は現耕作土に近く軟弱な砂質である。当溝の東側に接し現用水路があり、この用水路の改築前の用水溝と考えられる。近世に相当しようか。

Ｃ38号溝・Ｄ1010号溝

両者は同一の溝である。Ｄ区南部で調査区を東西に横断するＤ1010号溝は、その西部で直角に近く折れ南北走してＣ区に至る。41～70Ｂ40～Ｄ18の広範囲に及ぶ。Ｂ・Ｃ・Ｄ区に及ぶ走向方位はN－28°－Wを示しＤ区に至って、N－70°－Eへ走向を変える。最大上幅約6.5m・下幅２m・深さ1.9mの断面は比較的整った箱掘形を呈す。埋土は上位が浅間山降下のＢ軽石粒を主にする砂質土であった。なお、Ｂ・Ｃ区の範囲は現用水路と重なったため完掘はできなかった。

Ｃ1012号溝

Ｃ区の北東端にあり一部はＤ区に及ぶ、東側は調査区域外に延びる。35～45Ｄ46～Ｂ１の範囲にある。検出長は約21mで、西側は南より入る埋没谷地地形に吸収される。幅2.5mの浅い溝である。走向方位はＮ－65°－Ｅを示す。埋土は浅間山降下Ｂ軽石料が主である。

Ｃ1013号溝

Ｃ区の北東端にあり、Ｃ1012号溝の南約５mの間隔をもってほぼ同一走向する溝で、東・西端は同様な状況にある。35～44Ｃ45～47の範囲で、検出長約16mである。上幅50cmの浅い箱堀掘形である。走向方位はＮ－65°－Ｅを示す。

Ｃ1050号溝・Ｃ1051号溝

Ｃ1051号溝はＣ1050号溝の南縁にあり、両者は同一の可能性がある。Ｄ1051溝は低く立ち上がり、底面はほぼ平坦をなしたままＣ1051号溝の落ち込みへと続く。35～43Ｃ43～47の範囲で、検出長は17.5mである。東・西端はＣ1012号・Ｃ1013号溝と同様で、走向方位もほぼ同一である。上幅約３mの浅い溝である。

Ｄ1005号溝・Ｄ1006号溝

Ｄ区の南部を東西、走い西側では接するごとく伴走し東側で合流して溝幅を狭める。なお東端は直角に折れ南へ向かう様相で、西端はＤ1010号溝によって跡切れる。検出長は約60mである。Ｄ1005号溝は上幅1.3m・深さ40cm・1006号溝は上幅約１m・深さ30～40cmを測る。合流後の上幅は約１mで深さは約40cmである。走向方位はおよそＮ－80°－Ｅを示す。断面形はともに形状である。

Ｄ1008号溝

Ｄ区南部からＣ区の北部に及び、46～49Ｃ46～Ｄ８の範囲にある南北走する溝である。Ｄ405号溝がＤ区南端で東西に分岐し、西側分岐のＤ1009号溝と重複する。新旧関係は当溝が新しい。北側はＤ1005溝によって跡切れ、南端は埋没谷に吸収される。検出全長は約25mである。幅は最大で1.5m・深さ40cmを測る。走向方位はＮ－25°－Ｗを示す。

Ｄ1007号溝

Ｄ区南部にあり、Ｄ1010号溝に併走する溝である。35～68Ｄ４～14の範囲にある。西端は南へ折れるＤ1010号溝によって跡切れ、東へ向かい細まる。検出長は約50mを測る。最大幅1.5m・深さ40～50cmで、走向方向はおよそＮ－70°－Ｅを示す。

Ｄ1009号溝

Ｄ区の南を南北走し、Ｄ405号溝から分岐した後Ｄ1008号溝と重複する。検出長は約22mを測る。最大幅３mで、深さ20～25cmの底面に凹凸の著しい溝である。走向方位はおおよそ南北である。

Ｄ405号溝

Ｄ区全域にわたって南北走する溝である。37～61Ｄ０～50の範囲にあり、全長約108mに及ぶ。幅約5.5m・

深さ30～50cmを測り、底面は凹凸が著しいピット状落ち込みが検出されている。南端部は上面の削平が深いためか溝幅・深さとも規模を減じている。走向方位はN－35°－Wを示す。鳥羽遺跡において、当跡は数少ない古代に属する溝である。当該期の竪穴住居跡との重複も見られず、集落形成時より意識的に走向位置が選定されていた可能性がある。

D404号溝

D405号溝の東側をほぼ平行に併走する。37～58D４～49の範囲にあり、全長95mを測る。幅約２m・深さ20～30cmを測る。走向方位はおよそN－25°－Wを示す。時期的にはD405号溝と同じ古代に属しようか。

E１号溝

F区の南端より発し南北走して、館跡の北辺外堀であるE23号溝によって跡切れる。53～55E38～F１の範囲にある。壁線はかなり不安定であり、底面は浅い。検出長29m・幅2.5mを測る。走向方位はN－15°－Wを示す。

E４号溝

E区北東部にあり、東端は調査区域外へ、西端は完結する。検出長約12m、最大幅２m、深さ30cmを測る。断面形は緩いU字形を呈す。走向方位はN－70°－Eを示す。E１号・E８号・E11号住居跡を切り込み構築される。埋土中より梵鐘の撞座鋳型の小片が出土している。

E1021号溝・E1022号溝

E区北東部にあり東西走して西部で緩く折れる。37～43E32～34の範囲にある。東部は調査区域外に入り、西端は館跡外堀E２号溝が北辺へと折れる個所に合流する。この延長は館跡の外・内堀間にも及ぶが館跡溝より旧い時期の所産である。検出長約28m、幅2.5m、深さ40～50cmを測る。断面はU字形を呈す。西側の底面が二筋のラインを成すが本来同一の溝と考えられる。走向方位はN－90°－EからN－45°－Eと変わる。

F１号溝

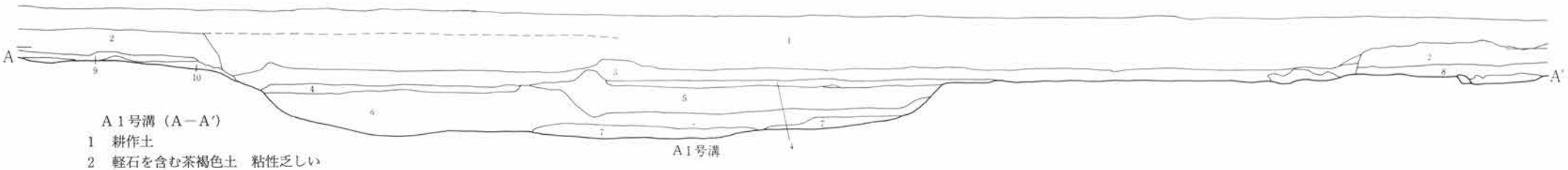
F区北端にあり、東西走する大規模な溝である。しかし北縁は調査区域外（現県道前橋～安中線にかかり全様を知ることはできない。D39～60F39～45の範囲にあり、検出長41mである。現状での溝幅約10m、深さ1.3m前後を測る。断面形は緩いU字形を呈す。埋土上位には浅間山降下B軽石粒を主体とする砂質土が埋まる。走向方位はほぼN－90°－Eを示す。

F２号溝

F区西部にあり南北走する溝である。壁線はかなり不安定で、底面の凹凸も著しい。53～65F０～38の範囲にあり、E１号溝に連続する可能性が高い。F区内での検出長78mを測る。幅約4.5m、深さは一定せず20～50cmと落差が大きい。走向方位はおよそN－20°－Wを示す。埋土上位に浅間山降下B軽石層の存在があることから古代末頃の所属であろう。

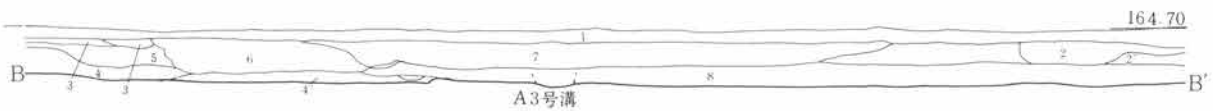
Ｆ３号溝

Ｆ区東部にあり、北端はＦ１号溝に合し、南部で東へ直角に近く折れ調査区域外に延びる。38～45Ｆ16～40の範囲にある。検出南北長47mを測る。最大幅４m、深さ50～60cmを測り、断面形は緩いＵ字形を呈す。南北走部分の南半部で僅かに西側へ折れるが、この部分より南側の西縁に人頭大の川原石を用いた石組施工が行なわれている。館跡を形成する堀が想定できようか。南北走行方位はおよそＮ－０°－ＥからＮ－５°－W。南側東西走方位はＮ－90°－Ｅを示す。Ｆ１号・Ｆ12号住居跡を切り込んでいる。



A1号溝（A－A′）

1　耕作土
2　軽石を含む茶褐色土　粘性乏しい
3　耕地整理以前の耕作土（水田）
4　水田下の鉄分沈澱層
5　鉄分の沈澱・凝固したもの（木の根等に付着して）が塊状に入る茶褐色土　よくしまって固い、粘性乏しい。軽石多い
6　1層と基本的には同質の層で、軽石多く砂質、鉄分の混入が1層より少ない（BPが多い）
7　粘土塊を含む粘性土　下の方に砂も含まれる
8　B軽石を多量に含む茶褐色土
8　B軽石を多量に含む茶褐色土　軽石と土が混在するが、軽石かなり多い一次堆積ではないと思われるが、軽石降下時に近い時期の堆積とみられる
9　B軽石一次堆積
10　茶褐色粘性土



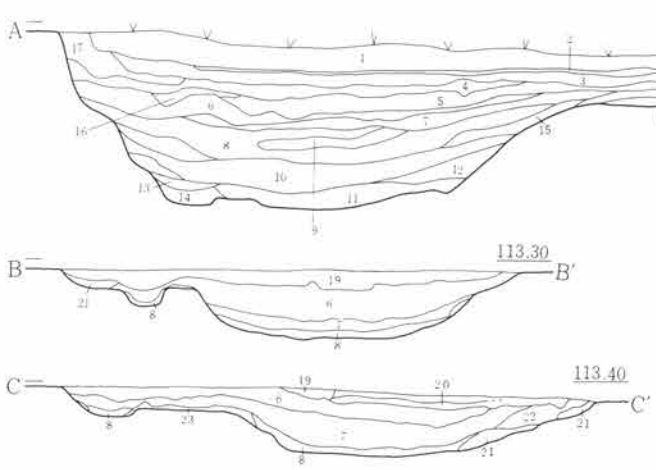
（B－B′）

1　耕作土
2　砂質茶褐色土　軽石の混入多い
2′　2層と同質なるも軽石の混入やや少ない
3　B軽石を多量に含む砂質土　く3'3層と類似
4　粘性茶褐色土
4′　茶褐色粘性土　砂混入あり　粘性土をやや欠く
5　4層に軽石が多く混入
6　人為的な盛土と見られるがB軽石降下以后のものとみられる
7　土地改良前の火田耕作土
8　水田下

（C－C′）

1　現耕作土
2　旧耕作土
3　西の方で見られた4層に比較するとB軽石の混入少ない
3′　砂を含む黒褐色土
4　2号道路状遺構　粘土の盛土（粘土　褐色土の混成土で人為的な盛土

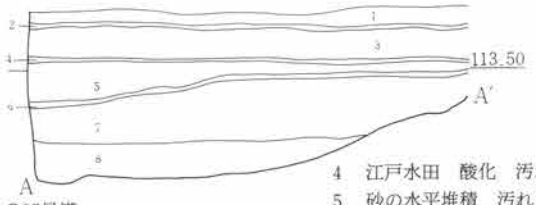
Fig. 329　A1・3号溝



B1号溝

1　現耕作土　軽石　炭化物を含む
2　耕作土　粘性強く鉄分を含む
3　耕作土　　3層より暗い色調
5　茶褐色土　軽石　炭化物　鉄分等を含む
6　茶褐色土　B軽石　炭化物　鉄分等を含む
7　茶褐色土　6層より粘性が強く軽石の混入が少ない
8　暗茶褐色土　粘性強く白色の水成ローム塊を含み軽石の混入が少ない
9　暗茶褐色土　水成Loam塊を多く含む
10　暗青灰色土　粘性強く　若干の炭化物と水成Loamを含む
11　青灰色土　水成Loamのくずれたもの
12　水成ロームと10層の混じったもの
13　暗青灰色土　10層の混入物がないもの
14　11層に白色の水成Loam塊が混じったもの
15　暗茶褐色土　若干の炭化物等を含む
16　軽石と炭化物を多く含む　茶褐色土
17　耕作土　B軽石　鉄分を多く含む
18　暗褐色土　B軽石　炭化物　鉄分を含む粘性土
19　暗褐色土　B軽石を多く含む
20　茶褐色土　B軽石　炭化物を19層より多く含む
21　茶褐色土　Loam塊を多く含む
22　暗茶褐色土　B軽石　炭化物　焼土粒を多く含む
23　黒褐色土　黒色土のLoam塊　炭化物を多く含む

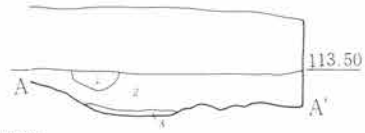
B1号溝



C37号溝

1　耕作土
2　酸化層　汚れたBPを主とする
3　汚れたBPを主とする
4　江戸水田　酸化　汚れたBPを主とする
5　砂の水平堆積　汚れたBPを主とする
6　酸化層　BPを含む　砂層の水平堆積
7　BPを含む　砂層の水平堆積
8　7層に類似するが酸化少ない

C37号溝



C38号溝

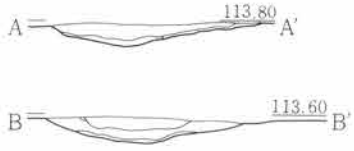
1　汚れたBPを主とする
2　汚れたBP中に黒粘土、FA塊を多く混じえる
3　砂質土　FA塊含まない

C38号溝

C39号溝

1　黒褐色土
2　砂
3　黒褐色土　CPを多く含む
4　黒褐色土　CPを多く含む

C39号溝



C1012号溝

C1012・1050・1051号溝

1　暗褐色土　半グライ化に変じている
2　褐色土　やや明かるい　締っている　BP含む
2′　2層に類似するがやや暗い
3　暗褐色土　BPを少量含む　粒質
4　2層に類似するがややパサパサしている
5　黒褐色土　BPを多く含む　締っている
6　BPを含み　炭化物が混入

C1013・1050・1051号溝

D1006号溝

1　褐色土　砂質
2　灰褐色土　細粒C軽石を多く含む
3　灰色土　砂質　細粒C軽石少量混じる

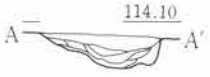
1005溝

1　褐色土　砂質　細粒C軽石を多量に混じえ　土粒荒く締まりなし
2　暗灰褐色土　粘性　C軽石細粒を若干含む　土粒荒い
3　2層と類似するが土粒は均一
4　灰褐色土　砂質
5　黒灰褐色土　粘性
5　均一性を欠く
6　灰褐色土　黄色土粒を多く混じえる

D1005・1006号溝

D1008号溝

1　灰褐色土　砂質　黄色土粒少量混じる　細粒C軽石を多量に含む
2　褐色土　砂質　C軽石を少量混じえる
3　暗灰褐色土　粘性あるが砂質　Mg黄色粒を混じえる
4　1層と類似するが黄色土粒を多く混じえる

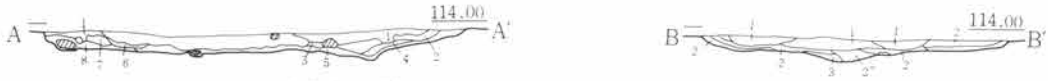


D1008号溝

5　1層と類似
6　3層と類似するが黄色土粒を多く混じえる
7　暗灰褐色土　締まりよい
8　黄色土塊　基盤が崩れたものか

0　4m

Fig. 330　B1・(37～39・1012・1013・1050・1051・D1005・1006・1008号) 溝

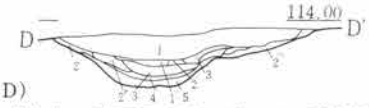


D405号溝（A・B）

1　黒褐色土　砂礫を多く混じえる
2　黒褐色土　粘性強い
3　褐色土　砂混じる　酸化が及ぶ
4　3層と類似するが黒味が強い
5　砂質層　堅く締まり酸化が強い
6　灰褐色土　砂質
7　暗灰褐色土　黄褐色土塊を多量に混じえる
8　暗灰褐色土　7層と類似するが締まり強い

D405号溝（C）

11　暗褐色土　BP 黄色土を含む
12　暗褐色土　茶褐色土混入　BPを含む
13　茶褐色粘性土（塊？）
14　茶褐色粘性土　BP 含む
15　BP・CP　黄色土を混入
16　暗褐色土　BP混入

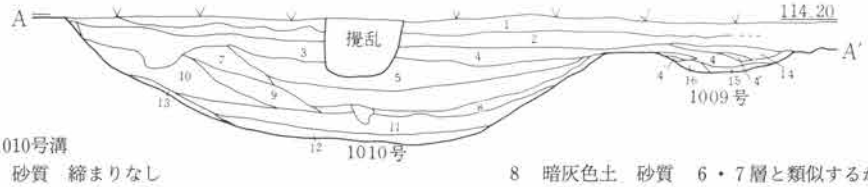


D405号溝（D）

1　暗褐色土　微小粒　C軽石及びグライ化による酸化鉄粒を含む　硬粘質土
1′　暗褐色土　C軽石及び小豆大の軽石　微小粒の酸化鉄を含む　硬粘質土
2　茶暗褐色土　微小粒C軽石及び多量の酸化鉄（微小）を含む硬粘質土
2′　茶暗褐色土　微小粒C軽石及び都量の小豆大の軽石、酸化鉄粒を多く含む　硬質粘土
2″　茶褐色土　微小粒C軽石を含み酸化鉄分小豆大軽石多量に含む　ロー質粘土
3　茶褐色土　微小粒C軽石及び微小酸化鉄粒含む　硬質粘質土
3′　茶褐区土　C軽石微小粒及び少量の酸化鉄粒を含む　硬質粘質土
4　茶褐色土　微小のC軽石を含み酸化第二鉄帯を含む　硬質粘質土
5　茶褐色土　C軽石（微小）を少量含み小豆大軽石を多量に含む　硬質粘質土

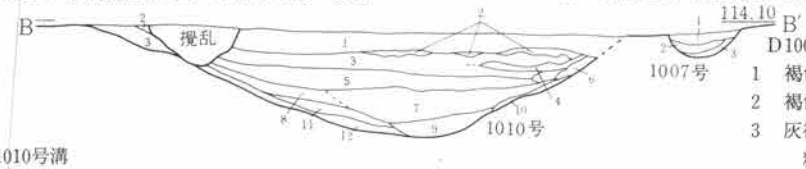
全体的にマンガン及び酸化第二鉄が広く拡散しておりグライ化が確認される

D405号溝



D1009・1010号溝

1　灰色土　砂質　締まりなし
2　褐色土　砂質　C軽石僅かに混じえる
3　褐色土　砂質　細粒C軽石を混じえる　黄色土粒の混石僅かに認められ4層と一連の可能性あり
4　Loam塊（黄色土）が不規則に混入　締まりなく攪乱層と思われる
5　灰色土　砂質　白色細粒が多量に混入　酸化粒が多く及ぶ堅く締まる
6　灰色土　砂質　5層と類似するが　より堅く締まる
7　褐色土　白色細粒混じる　締まりなし　硬質
8　暗灰色土　砂質　6・7層と類似するが締まりなし
9　7層と類似
10　褐色土　砂質が強く白色細粒を混入する
11　暗灰色土　白色細粒が多量に混入　酸化が強く極めて堅く締まる　5．6．8層より砂粒が細かい
12　暗灰色土　砂質（細粒）
13　暗灰色土　砂質（細粒）　粘性強い
14　2層と類似するが黒褐色土粒の混入がある
15　灰褐色土　乳白色土塊が混じる
16　灰褐色土　黄色土粒　黒色土粒が混じる



D1007号溝

1　褐色土　砂質　細粒C軽石混じる
2　褐色土　C軽石を少量混じえる　粘性あり
3　灰褐色土　褐色土混じえる　Mg 粒混じる　粘性あり

D1010号溝

1　褐色土　細粒C軽石を多く混じえる　砂質　締まりなし
2　B軽石（？）　粒子の荒い砂
3　褐色土　多量のC軽石（細粒）を混じえる　砂質
4　灰色土　粘性あり
5　3層と類似する　若干土粒が細かい　砂質
6　粘性灰色土を多く混じえる細粒　C軽石も含む　粘性あり　締まりなし
7　灰褐色土　砂質　細粒C軽石を多く混じえ酸化が強く及ぶ（赤味をおびる）　締まりあり
8　5層と類似する
9　灰褐色土　粘性強く酸化が強く及ぶ（赤味をおびる）大粒のC軽石を混じえる
10　灰褐色土　C軽石を混じえ粘性強い　酸化粒　Mg 粒を含む
11　灰褐色土　砂質
12　灰褐色土　粘性強い

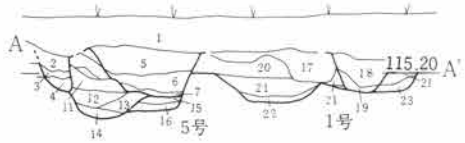
D1007・1009・1010号溝

Fig. 331　D405・1007・1009・1010号溝　0 ―― 4 m

D404号溝
1　暗褐色土　砂質
2　暗褐色土
3　茶褐色土　粘性あり

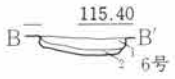
D1045号溝
1　茶褐色土　CP 多く炭化粒混る
2　暗茶褐色土　炭化粒含む
3　茶褐色土　（白色シルト層土）塊多く炭化粒混る
4　茶褐色土　炭化粒混る
5　暗茶褐色土
6　明茶褐色土　白色シルト塊が混じる

D404号溝



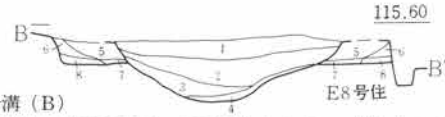
E１，５号溝
1　表土　耕作土層
2　暗褐色土　締まりやや良い
3　暗褐色土　２層より暗い　締まりやや弱い　もろい
4　暗褐色土　粘性あり　締まりやや良い
5　暗褐色土　黄褐色ローム質土塊（粒径２～７㎜位）を多く含む　締まりやや良い
6　暗褐色土　５層より暗く、黄褐色ローム質土の混入は少ない　マンガン凝集砂粒を含む
7　黒色土　水性泥質土粘性強い
8　暗褐色土
9　暗褐色土
10　黒褐色土　７層と同じ水性泥質土
11　暗褐色～褐色土　黄褐色ローム質土塊を多量に含む　締まりやや良い　粘性あり

D1045号溝
12　暗褐色土　11層より黄褐色ローム質土の混入少ない　マンガン凝集砂を多く含む　締まりやや弱い
13　暗褐色土　黄褐色ローム質土を殆んど含まない　マンガン凝集砂を特に多く含む　締まりやや弱い
14　褐色～暗褐色土　黄褐色ローム質土塊を主体としマンガン凝集砂を含む　粘性強い　やや軟質
15　褐色～暗褐色土　黄褐色ローム質土塊を多く含む　締まりやや弱い　粘性あり
16　暗褐色土　黄褐色ローム質土　直下の暗色土を主体とする締まりやや良い
17　暗褐色土　浅間Ｂ軽石の二次埋没　チョコレート色の灰を塊状に含む
18　暗褐色土　浅間Ｂ軽石と表され近似する土の混在層
19　暗褐色土　16層より明かるい　細粒
20　暗褐色土　黄褐色Loam質直上の暗褐色土に近似し　それより薄暗い　締まり良い
21　暗褐色土　締まり良い
22　褐色土　黄褐色Loam質土の流れ込み　粘性強い　締まり良い
23　暗褐色土　21層より暗く締まり良い



E１・５・F２・７・FⅡ６号溝

E４号溝（A）
1　黒褐色　砂質土　大きいLoam塊混入
2　黒褐色土　１層と同質であるが粘土塊が混入
3　１層、２層と同質砂層　細かいLoam塊混入
4　黒褐色　やや粘性　粘土率高い　軽石混入
5　黒褐色土　粘性　粘土比較的多く混入（壁の崩れか）　軽石少ない
5′　黒褐色土　軽石混入少ない　２層・４層と同質



E４号溝（B）
1　暗褐色土　浅間Ｂ軽石　F軽石を多く含む　締まりやや良い　粘性少ない　炭化粒僅かに含む
2　暗褐色土　１層より軽石の混入少なく粘性強い　締まり弱く暗い
3　暗褐色土　黄褐色Loam質土塊を含む　２層より粘性強い　B軽石の混入少ない
4　暗褐色土　黄褐色Loam質土の流入互層　粘性強い
5　暗褐色土　黄褐色Loam質土を均等に含む　締まりやや良い
6　暗褐色土　黄褐色Loam質土の流入互層　締まりやや良い
7　褐色土　黄褐色Loam質土を主体とし　焼土粒　炭を含む　粘性あり　締まりやや良い
8　褐色～黄褐色土　７層より黄褐色Loam質土の占める量多い　粘性強い

E４号溝

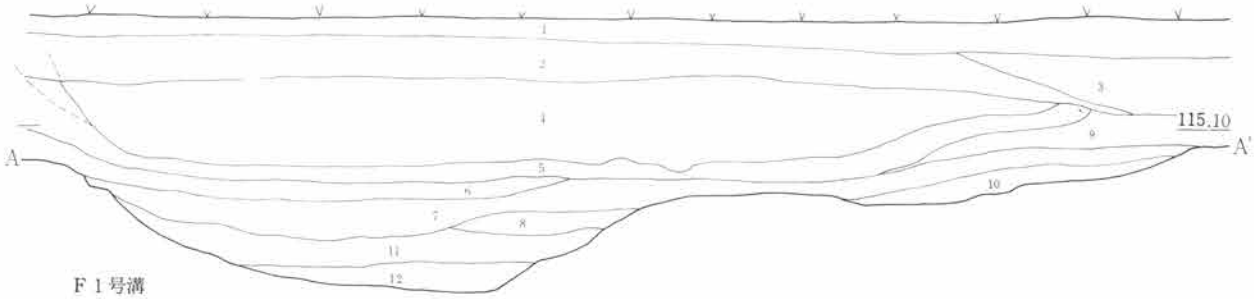
Fig. 332　D404・1045・E１・４・５・F２・７・FⅡ６号溝

0　4 m

E1021・1022号溝

E1022号溝

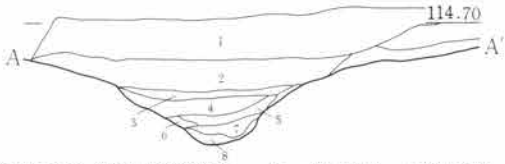
1　灰褐色土　B・C軽石　黄色塊を混在する　ボソボソしている
2　灰褐色土　１層に類似　特に黄色塊の混入が多い
3　灰褐色土　B軽石　褐色粘性土を混入する
4　灰褐色土　B軽石を多量に含む　堅く締まっている
5　灰褐色土　４層に類似するがやや粘質



F１号溝

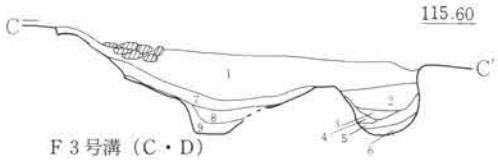
1　表土層　黒色土中に多量の砂利、円礫、角礫を多量に含む
2　表土層　黒褐色砂質層と砂利　４層と同一性質
3　表土層　２層、４層に黄色ロームを入れ耕作土F層の土質転換土
4　表土層　２と同一性質　黒褐色砂質層と砂利
5　溝堆積物　砂質灰褐色土層　混入物なし
6　溝堆積物　灰褐色粘質土層と砂利、12層の小塊含む
7　溝堆積物　灰褐色粘質土層と砂利、12層の塊の混土層で中央に向うほど多く外に向かっては混入少ない
8　溝堆積物　６層に類似　地層分層が可能であった
9　溝堆積物　灰褐色粘質土層　マンガン凝固部分あり
10　溝堆積物　灰褐色粘質土層　マンガン９層より粘質度増す
11　溝堆積層　灰褐色砂質土層＋砂利（少し含む）
12　溝堆積層　灰褐色砂質土層＋砂利（多量に含む）

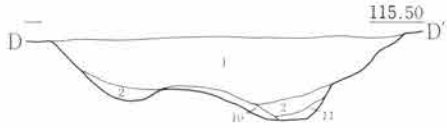
F１号溝



F３号溝（A）

1　淡黒色土　小指大の軽石　小粒の軽石を含む　締まり強く粘性のない土層
2　淡黒色土　１層より締まり強い　小粒の鉄分を含有し　１層に比べやや褐色がかる　小粒の軽石含む
3　淡黒色土　２層と類似するがやや砂質
4　淡黒色土　軽石の含有が少なくなり　やや黒っぽい
5　淡黒色土　４層に類似　鉄分の含有がやや多い
6　淡黒色土　５層と同一と思われるが鉄分の含有多くなるため色調やや明かるい
7　淡黒色土　５層と類似　色調やや黒い
8　灰白色粘土層　粘性に富む　細かな軽石を若干含む

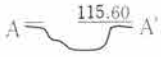




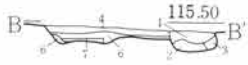
F３号溝（C・D）

1　暗灰褐色土　多量のパミスと焼土粒を含む
2　暗灰褐色土　１層に類似するが黒色味が強く焼土含まない
3　暗灰褐色土　非常に堅く締まる
4　灰茶褐色土　粘性味強い
5　暗灰褐色土　３層に類似するが粘質味強い
6　暗茶褐色粘質土
7　暗灰褐色土　１層に類似するが灰色が強く粘質
8　焼土　黄褐色Loam状の粘質味が加わる
9　黒褐色　非常に締まった粘質土層
10　黒褐色土　粘性　中に地山の白色粘土塊混入
11　３層と類似するが粘土の混入やや多い

F３号溝



F４号溝



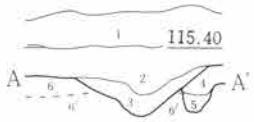
F６号溝

1　黒褐色土　軽石の土粒のものを含む
2　黒褐色土　１層と類似
3　暗褐色土　Loamシルトの薄茶色の土を混入する
4　暗褐色土　締まりあり　軽石含む
5　黒褐色土　１層に類似するが褐色味強い
6　暗灰褐色土　大粒の軽石含む
7　黄褐色Loamの純層

F６号溝

0　4 m

Fig. 333　E1021・1022・F１・３・４・６号溝



F 8 号溝

1　暗褐色土　多量のA・B軽石を含む
2　暗褐色土　1層に比べ茶色強く粘質味を増し、B軽石を多く含む
3　暗褐色土　2層に類似するが粘質味少なく軽石も少ない
4　暗褐色土　黒色味強く粘質味弱い　軽石含む
5　黒褐色土　Loam小塊を含み軽石少ない
6　自然堆積土　暗茶褐色粘質土層で、多量のマンガンを含む　軽石含
6′　自然堆積土　6層に比べ黄色味強く（Loam層か）軽石、マンガン凝集見られず F8号溝

F II 4 号溝

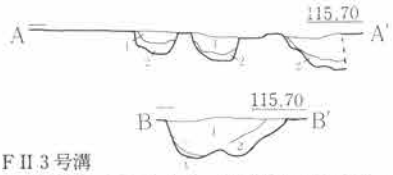
1　黒褐色土　Fp を多量に含み　堅く締まる
2　黒褐色土　Fp を少量含み粘性

FII4号溝

FII7号溝

F II 7 号溝

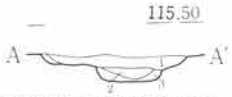
1　黒褐色土　C軽石多量に含み粗粒
2　黒褐色土　焼土粒　炭化粒含む
3　黒褐色土　Loam 塊少量含む
4　黒褐色土　Loam 塊多量に含む



F II 3 号溝

1　黒褐色土　FP を含む　粘質味を帯びた層であるが住居跡埋土に比べると軟らかくパサパサしている
2　黒褐色土　1層と類似しているが　炭化物、焼土塊小片が少々混入している
3　黒褐色土とLoam塊の混土層

FII3号溝



F II 5 号溝

1　褐色～暗褐色土　白色浮石(大粒)を多く含む　締まり良い　黄褐色ローム質土の互層が壁付近に明瞭
2　暗褐色土　粘性1層より強く3層より弱い　白色浮石を多く含む
3　暗褐色土　灰白粘土塊と　暗褐色土の混在層　粘性強い　白色浮石は少ない

FII5号溝

0　4 m

Fig. 334　F 8・F II 3～5・7号溝

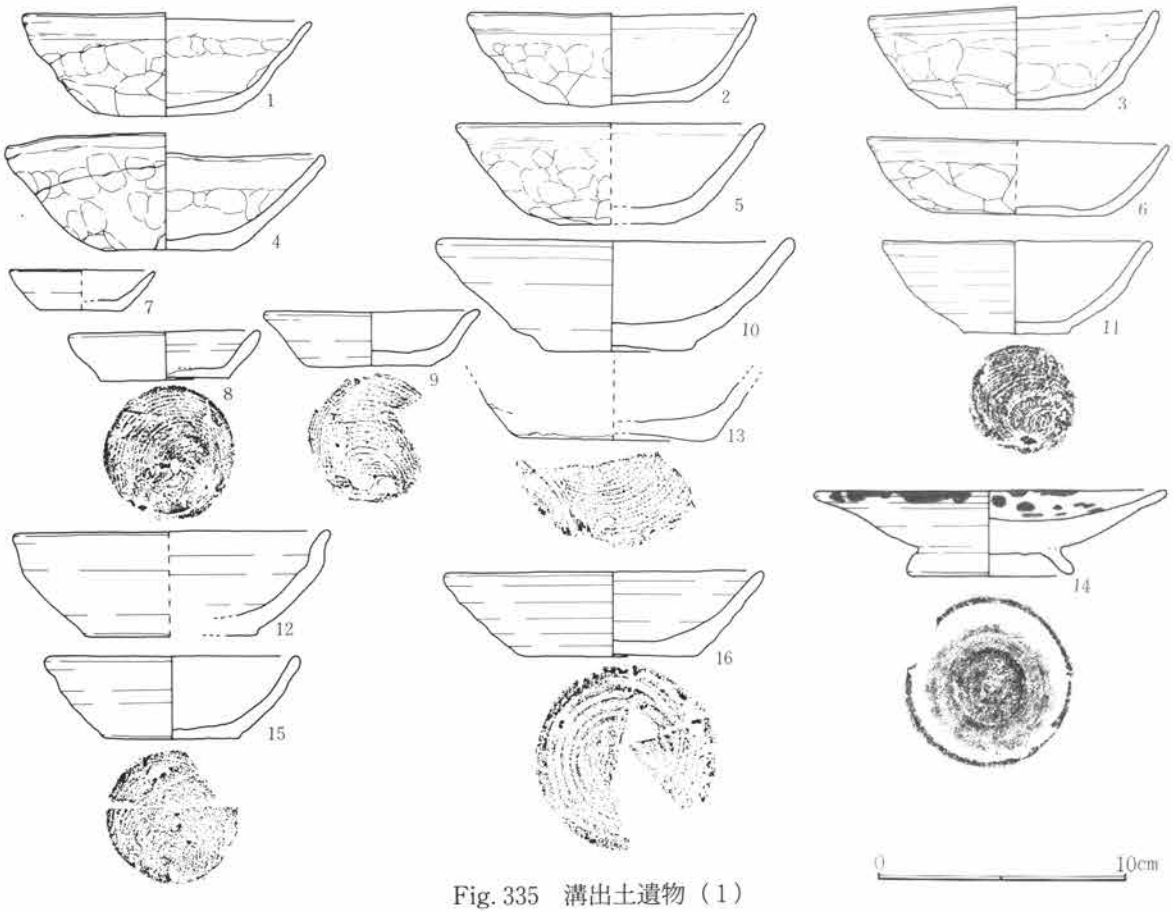


Fig. 335　溝出土遺物（1）

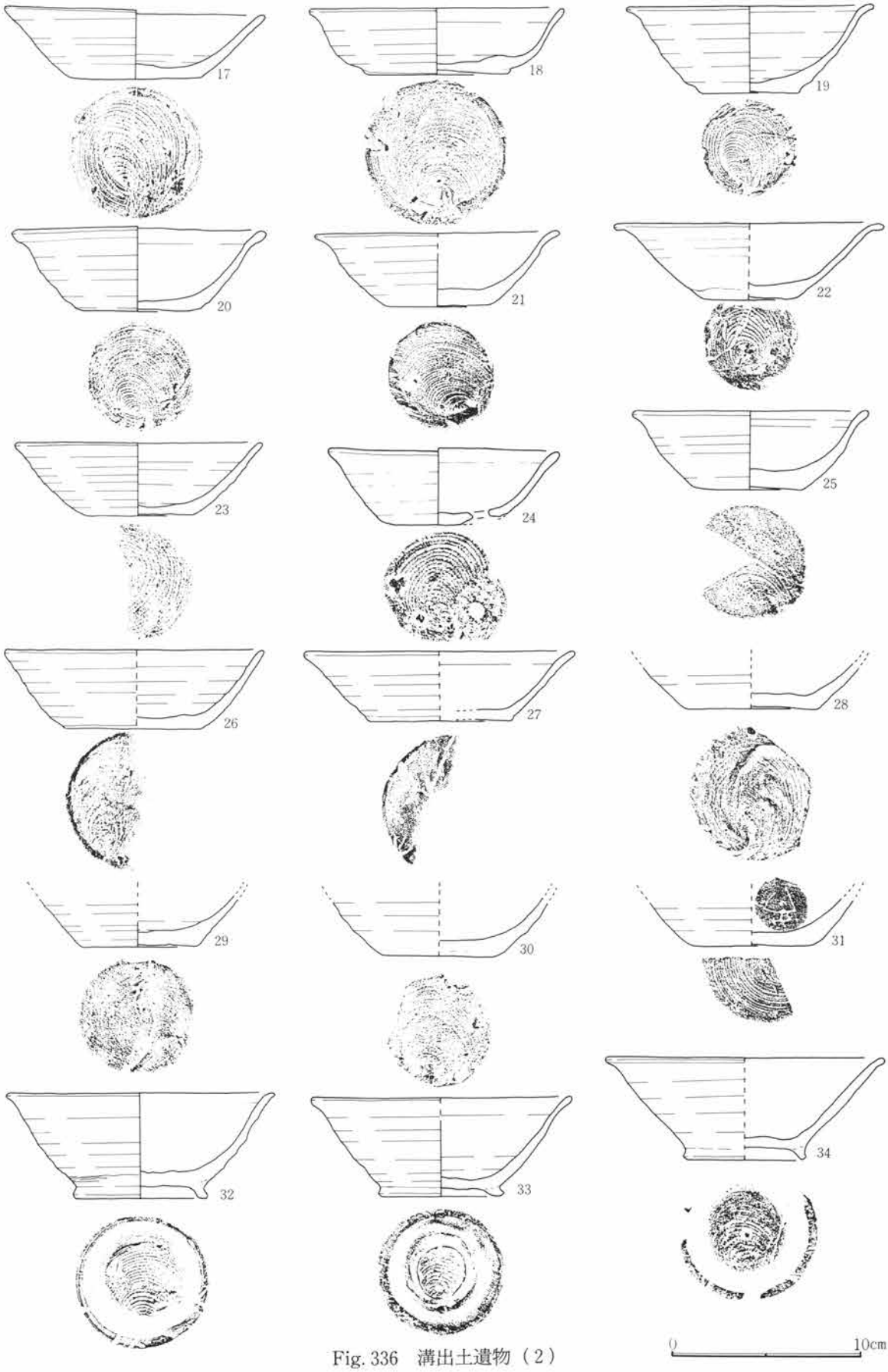


Fig. 336　溝出土遺物（2）

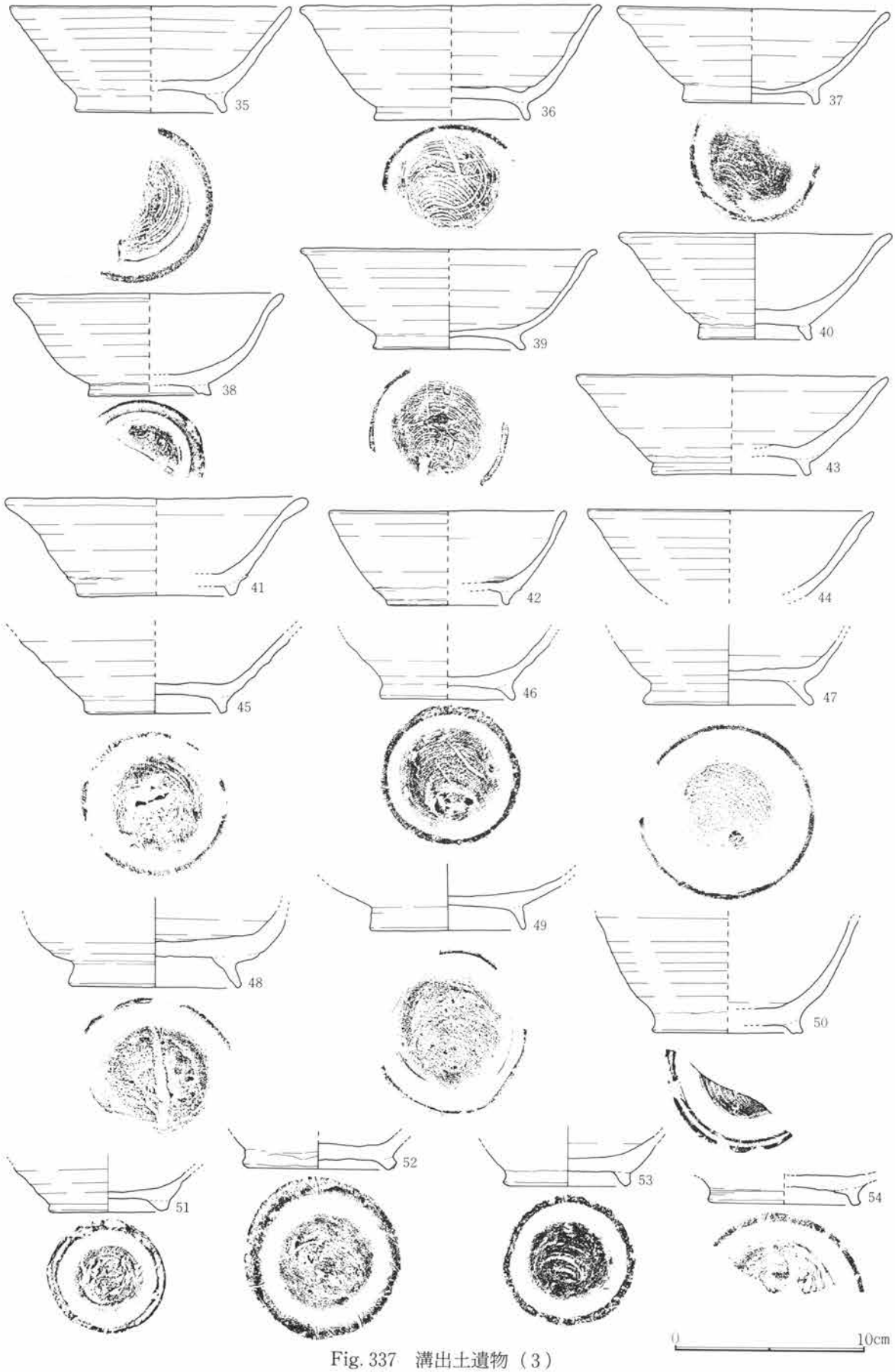


Fig. 337　溝出土遺物（3）

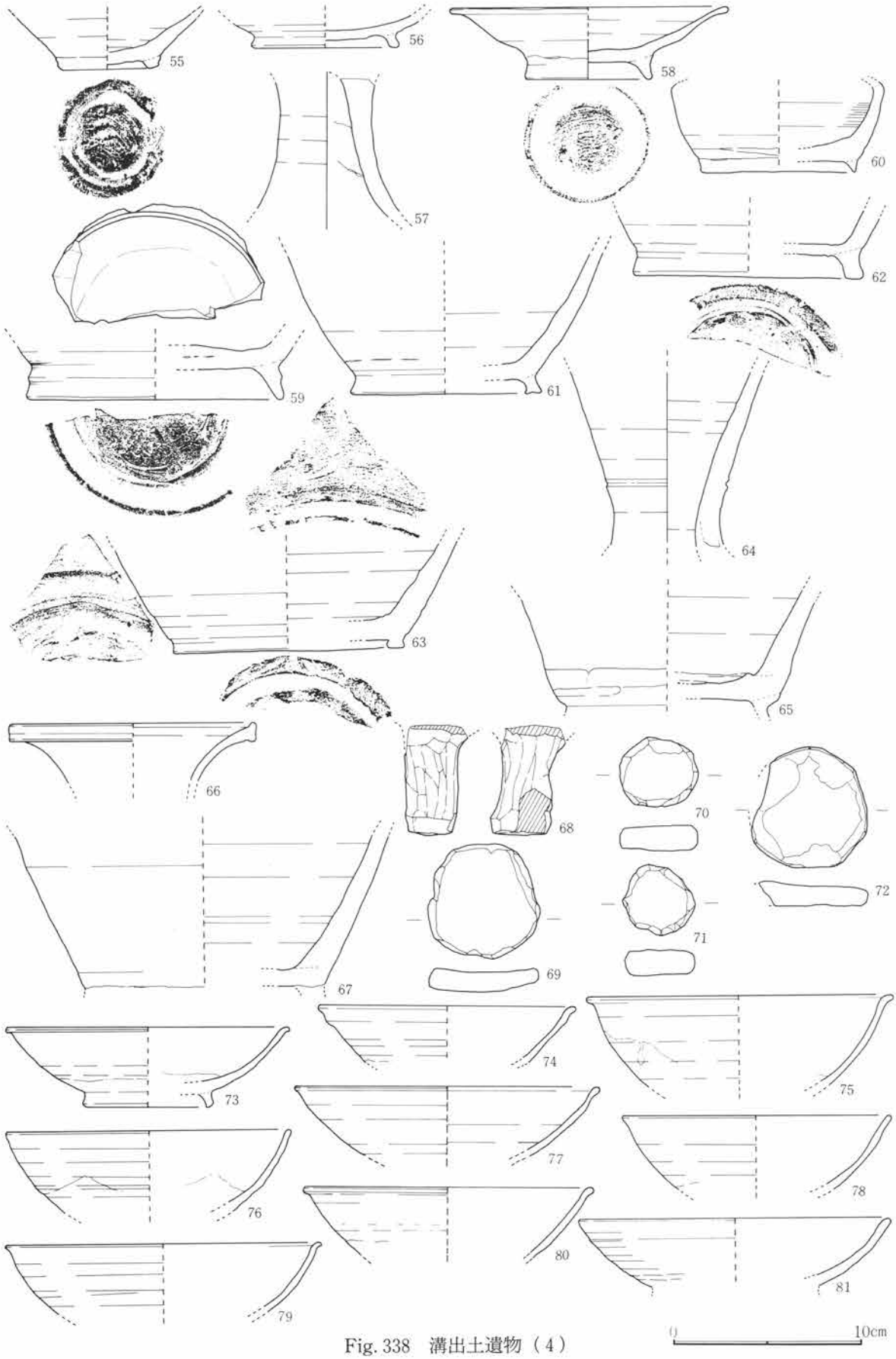


Fig. 338　溝出土遺物（4）

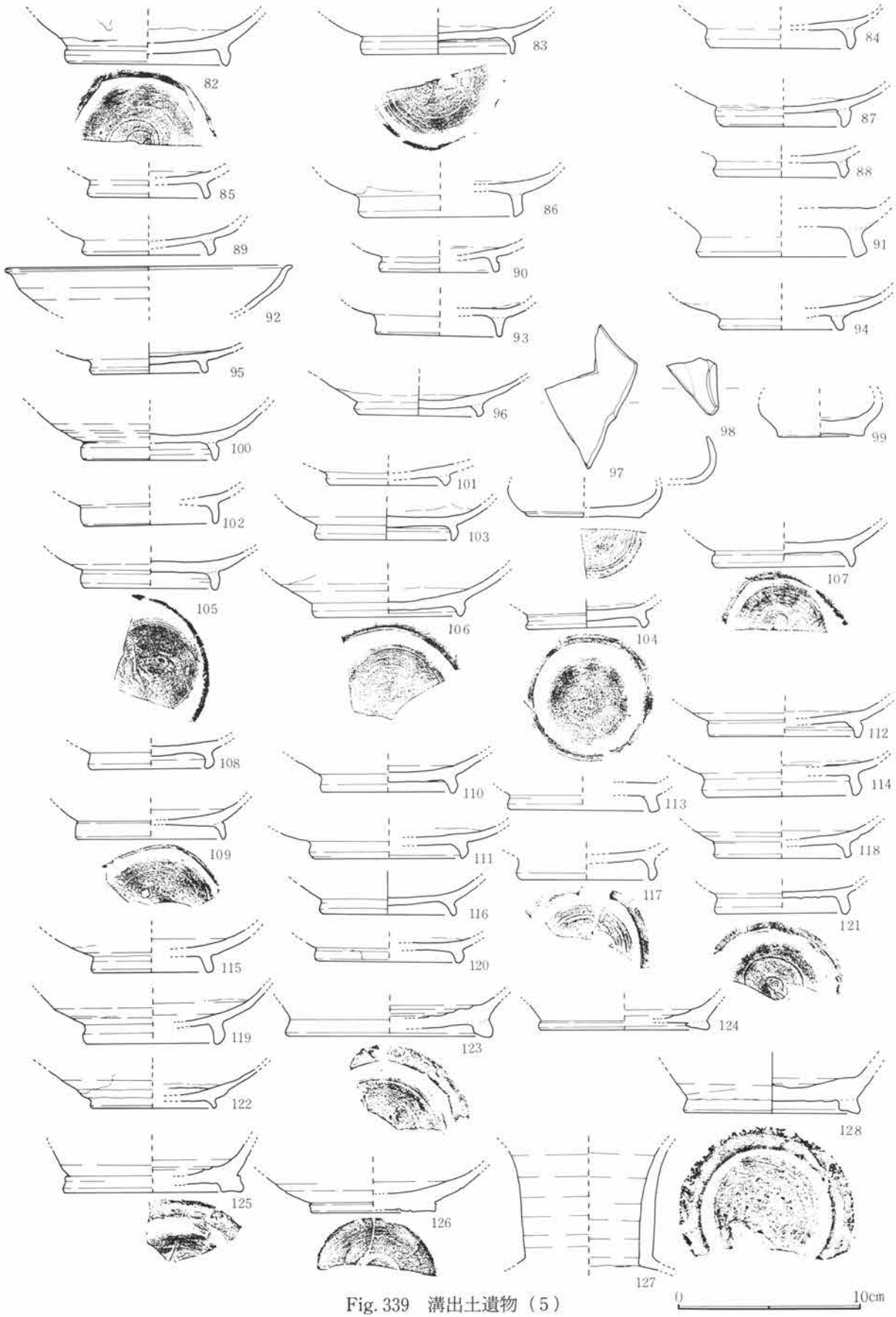


Fig. 339　溝出土遺物（5）

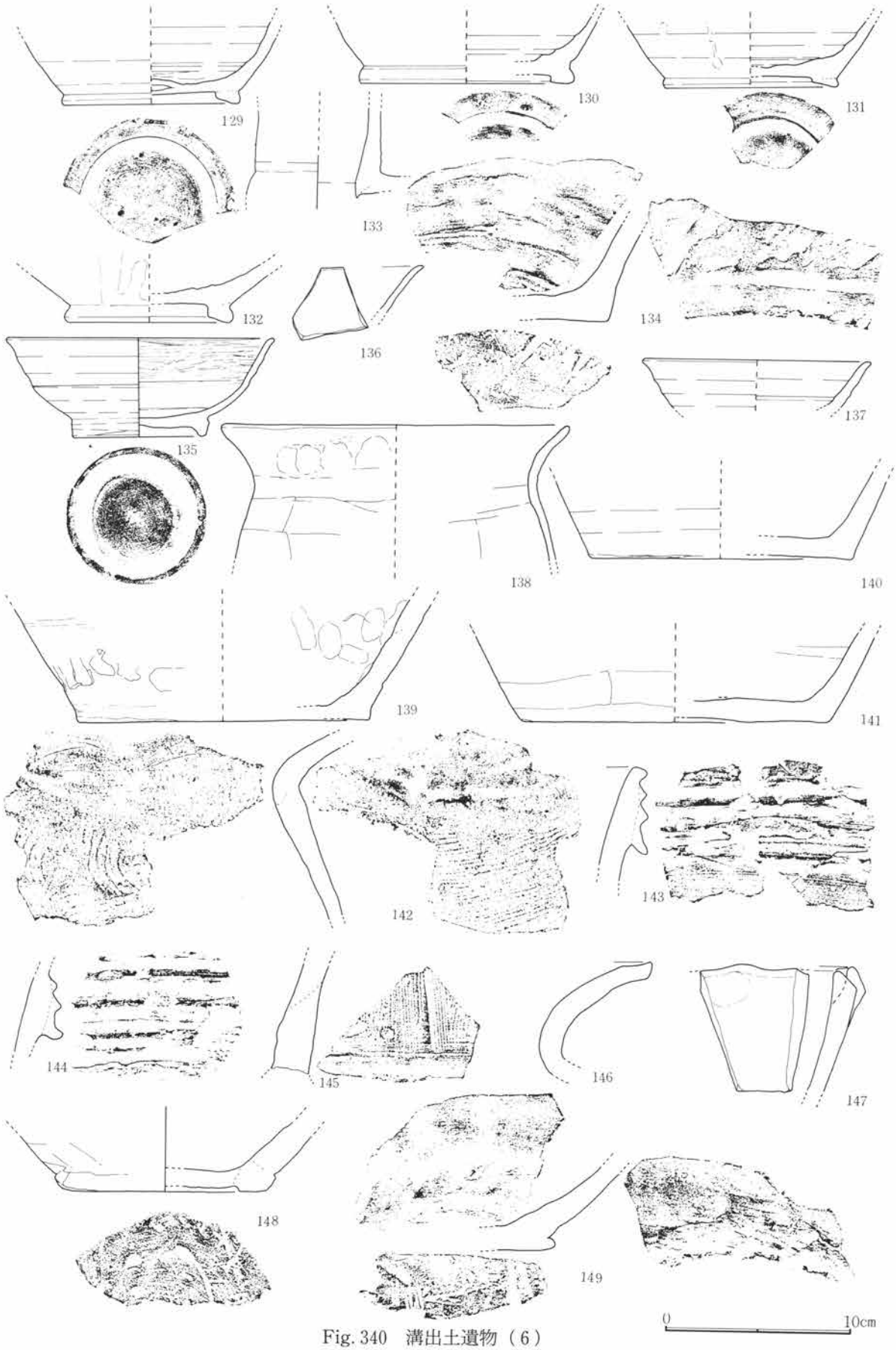


Fig. 340　溝出土遺物（6）

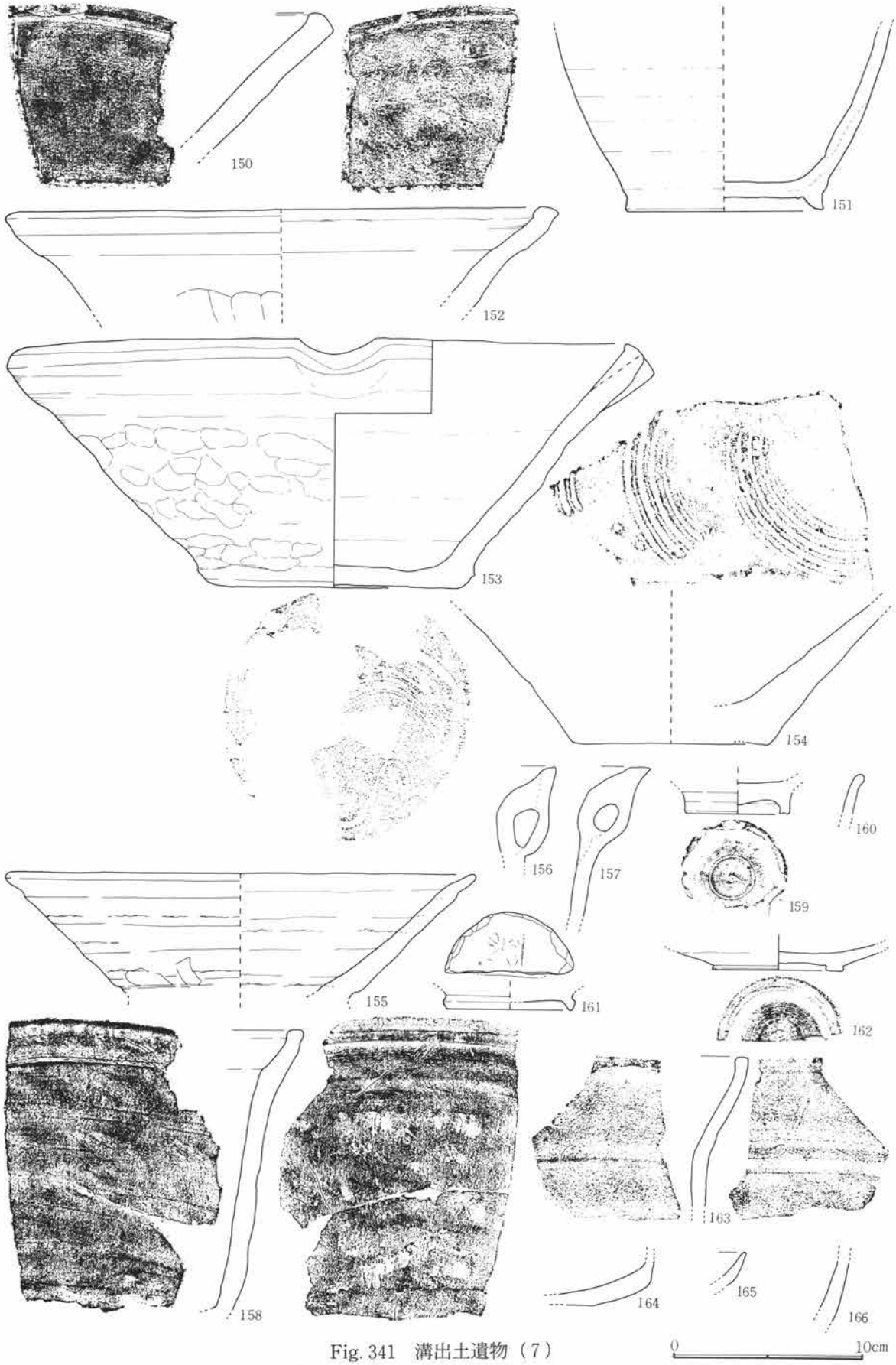


Fig. 341　溝出土遺物（７）

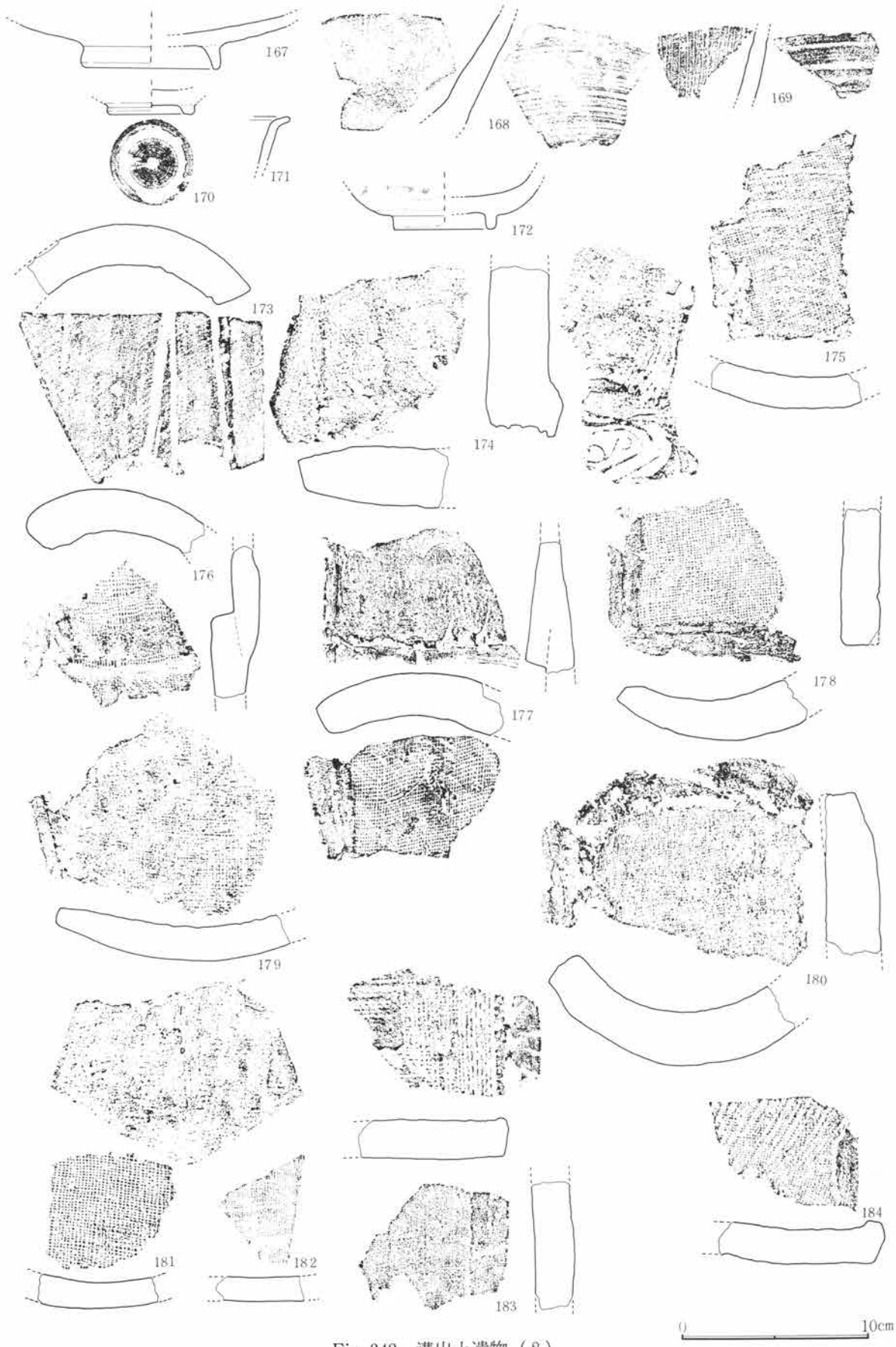


Fig. 342　溝出土遺物（8）

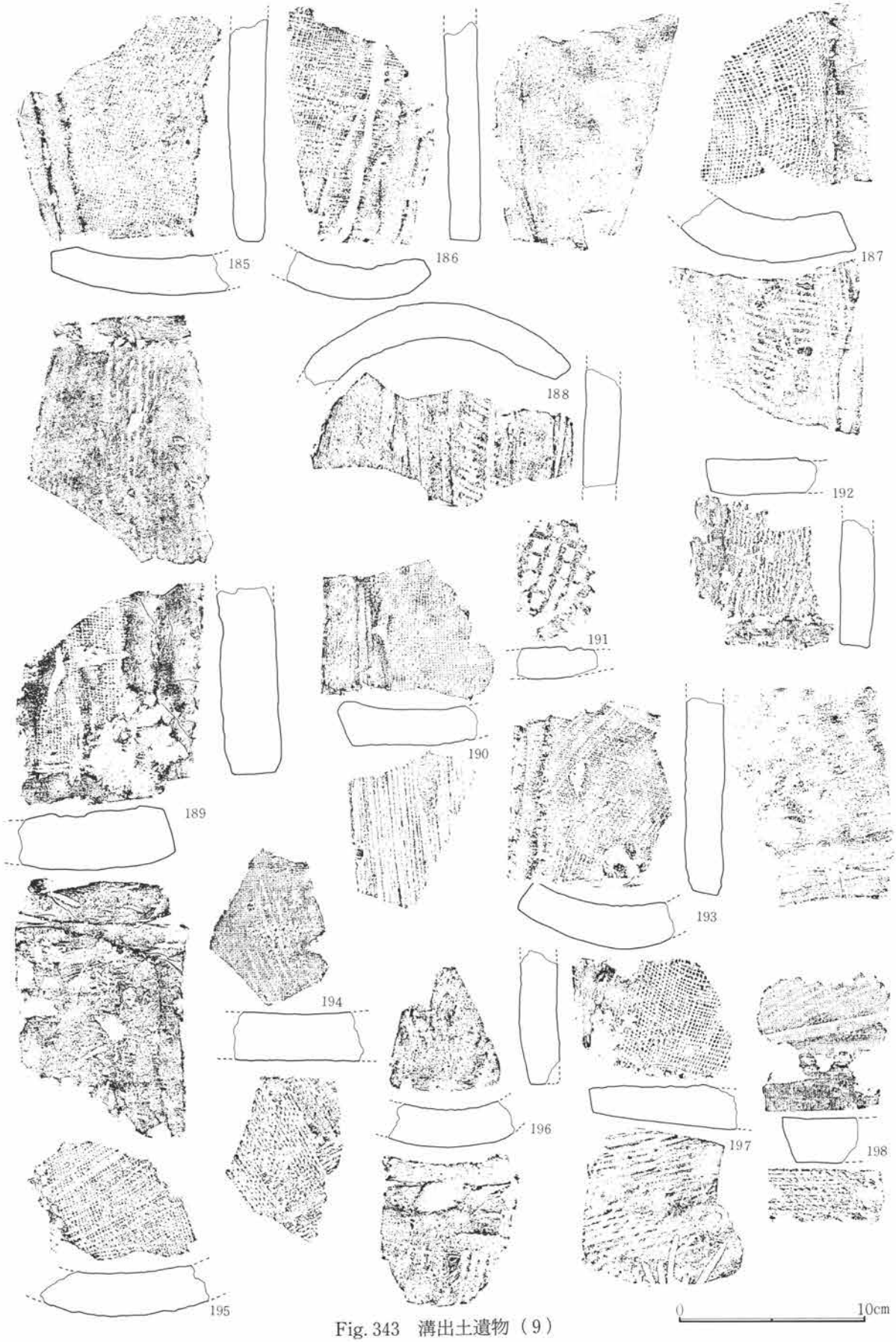


Fig. 343　溝出土遺物（9）

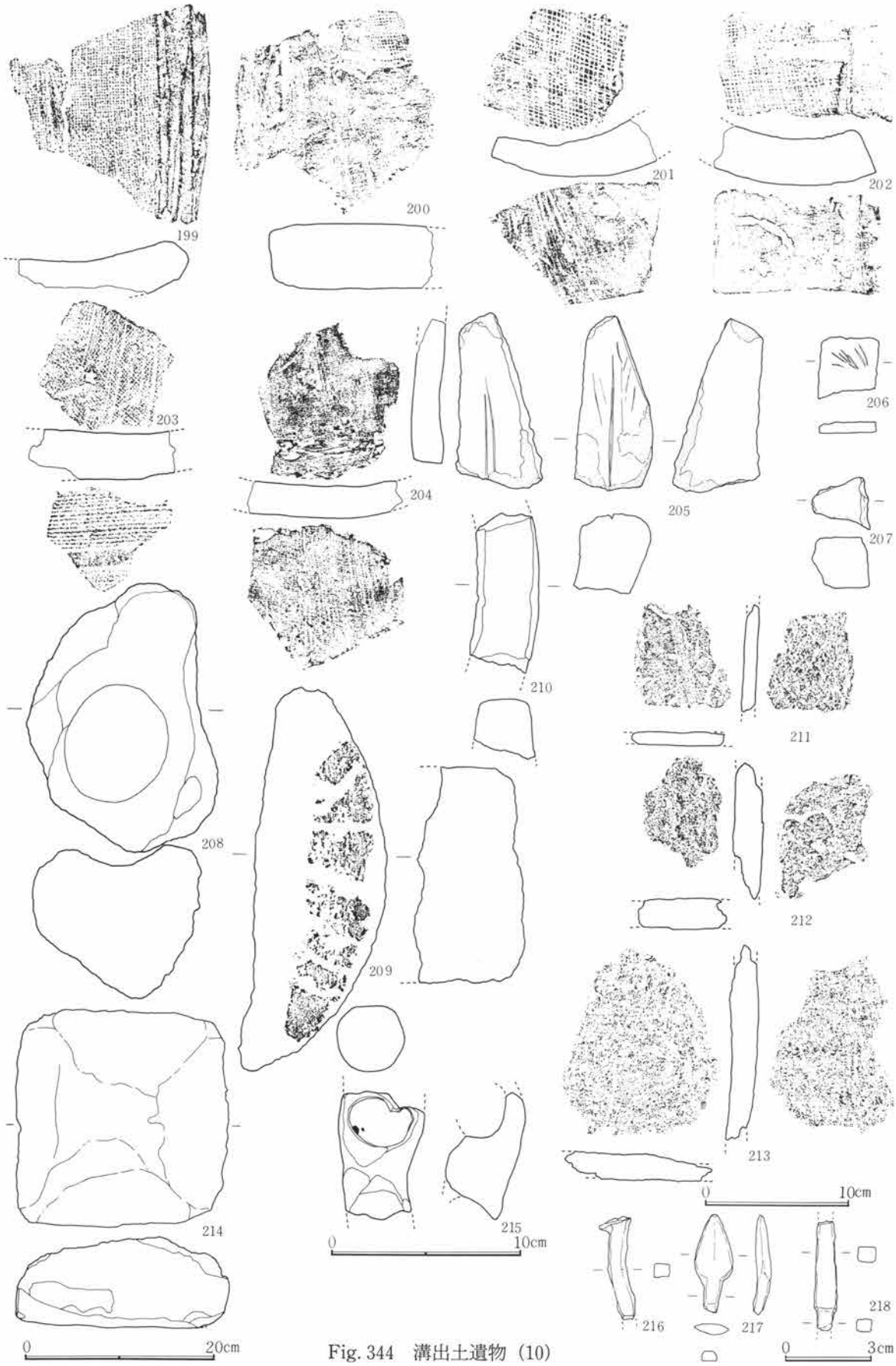


Fig. 344　溝出土遺物（10）

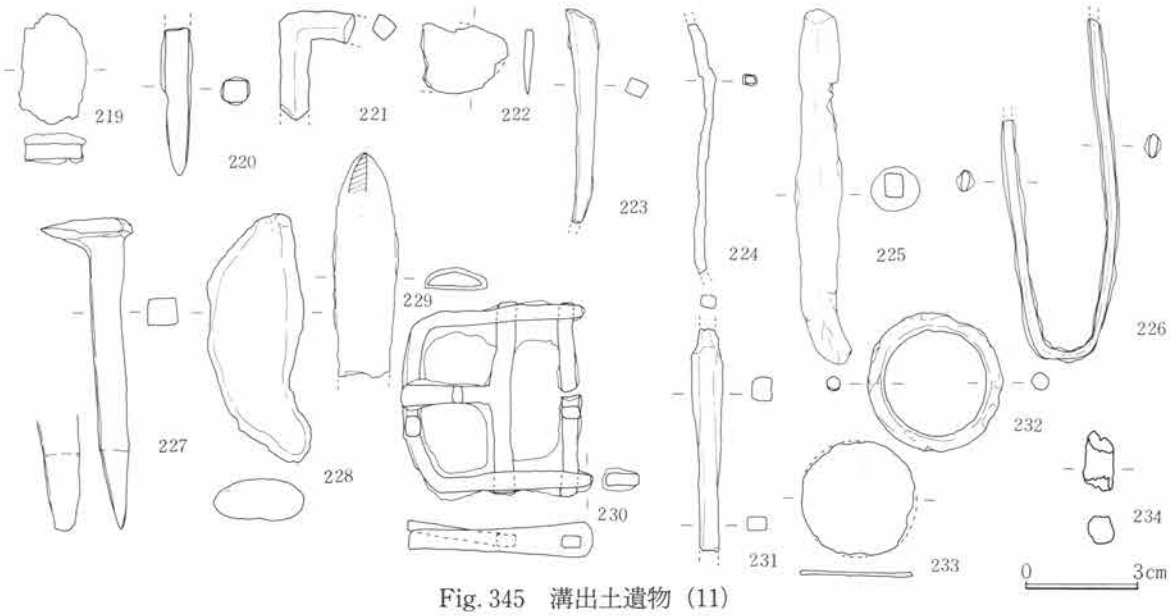


Fig. 345　溝出土遺物（11）

Ｂ～Ｆ区溝跡出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
335－１ 89－１	Ｄ404溝 埋土	土師器 杯	完形	11.6×5.8 ×4.1	平底をなすがやや不安定。腰部に丸味をもち、体部直線的に開く。口縁部横撫で。体部１段の指頭痕、腰部１段の横篦削り。底部一方向の篦削り。砂粒付着。内面横撫で。体部紐作り巻き上げ痕あり。	①良好　②橙　③やや粗
335－２ 89－２	Ｄ404溝 埋土	土師器 杯	⅔	11.6×5.9 ×3.9	平底。体部内湾気味に開く。口縁部横撫で。体部２段の指頭痕、腰部１段の横篦削り。底部１方向の篦削り。砂粒付着。内面横撫で。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
335－３ 89－３	Ｄ404溝	土師器 杯	ほぼ完形	11.7×5.8 ×4.2	平底。体部内湾気味に開く。口縁部横撫で。体部１段の指頭痕、腰部１段の横篦削り。底部１方向の篦削り。砂粒付着。内面横撫で。	①良好　②淡黄　③やや粗砂粒混
335－４ 89－４	Ｄ404溝 埋土	土師器 杯	完形	12.8×5.2 ×4.5	平底。体部直線的に開き、口唇部小さく内屈。口縁部横撫で、体部から腰部３段の指頭痕。底部１方向の篦削り、体部に紐作り巻き上げ痕あり。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
335－５ 89－５	Ｄ288溝 埋土	土師器 杯	⅓	12.4×4.3 ×4.0	腰部に丸味をもち、体部直線的に開く。外面口唇部下位に１条の凹線巡る。体部指頭痕著しく腰部１段の篦削り。底部不定方向の篦削り。砂粒付着。	①良好　②橙　③やや粗砂粒混
335－６ 89－６	ＦⅡ３溝 埋土	土師器 杯	¼	12.1×7.0 ×2.9	平底から体部緩く内湾して開く。口縁部横撫で、体部横～斜の弱い篦削り、底部不定方向篦削り。	①良好　②橙　③やや粗輝性細粒混
335－７ 89－７	Ｄ1006溝 埋土	土器 小坏	¼	5.8×3.4× 1.6	極めて小型、体部直線的に開き、口唇部細まる。轆轤整形。	①良好　②淡橙　③密
335－８ 89－８	Ｆ５溝	土器 小皿	完形	7.7×5.2× 1.9	体部下半で緩くくびれ、上半は丸く内湾気味に開く。口唇部丸く肥厚。轆轤整形。左回転糸切り。底部外面より穿孔。	①良好　②橙　③密茶色粒混
335－９ 89－９	Ｄ405溝	土器 小杯	⅔	8.6×5.0× 2.1	腰部に丸味をもち、体部緩く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化気味良好　②淡橙　③やや密
335－10 89－10	Ｅ１溝	土器 小杯	⅔	14.3×6.0 ×4.3	全体に肥厚。腰部で強くくびれ、体部内湾気味に開く。口唇部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②橙　③やや粗砂質
335－11 89－11	Ｃ33溝	土器 小杯	ほぼ完形	10.7×4.3 ×3.6	底径小さく、体部丸味をもつ。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化やや軟　②橙　③やや密
335－12 89－12	Ｅ１溝 埋土	土器 小杯	⅓	12.6×6.8 ×4.1	器肉全体に肥厚。体部丸味をもち上位で強く張り、くびれて上半は直立気味に外反する。轆轤整形。	①良好　②浅黄橙　③やや密小石混
335－13 89－13	Ｄ1045溝 埋土	土器 小杯	底部⅓	－×7.6× (2.4)	轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②淡橙　③やや密
335－14 90－14	Ｅ１溝	土器 皿	完形	1.4×6.6× 3.3	底部から体部は著しく肥厚。体部上半は細まる。腰部から体部丸味をもち大きく開く。付高台やや高く断面丸く強くハの字状に開く。轆轤整形。内面及び口唇部に油煙状斑点。	①良好　②淡橙　③密
335－15 90－15	Ｂ421溝 埋土	須恵器 杯	¾	10.3×5.0 ×3.3	体部僅かに丸味をもち、内湾気味に立ち上がる。口唇部丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。内外面に油煙状付着物。	①酸化軟　②淡黄　③やや密

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
335—16 90—16	D406溝 埋土	須恵器 杯	½	12.8×7.2 ×3.4	底径大きく、体部直線的に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
336—17 90—17	D288溝 埋土	須恵器 杯	ほぼ完形	13.6×16.8 ×3.7	体部直線的に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
336—18 90—18	FⅡ3溝 埋土	須恵器 杯	½	13.3×7.5 ×3.4	腰部丸味強く、体部上半は外反して開く。口唇部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。２度切り痕あり。	①良好 ②灰 ③やや密黒色粒多混
336—19 90—19	D405溝 ３層	須恵器 杯	½	12.8×5.0 ×4.5	底径小さく深身。体部丸味をもち、上半は強く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。腰部に強いさし込み。	①良好 ②灰 ③密
336—20 90—20	D404溝 埋土	須恵器 杯	¾	13.2×5.6 ×4.4	底径小さく、体部丸味をもつ。口唇部丸く肥厚し外傾して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
336—21 90—21	D166溝 埋土	須恵器 杯	¾	12.8×5.4 ×4.0	体部にやや丸味をもち、上半は大きく外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③密
336—22 90—22	F２溝 埋土	須恵器 杯	¼	14.1×4.0 ×4.0	底部極めて小径。体部丸味をもち大きく開き、口縁部水平に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②暗灰 ③やや粗白色粒混
336—23 90—23	D289溝 埋土	須恵器 杯	½	13.0×5.6 ×3.8	体部直線的に開く。轆轤整形。回転糸切り。体部外面轆轤目強い。	①良好 ②灰 ③粗
336—24 90—24	F２溝 埋土	須恵器 杯	完形	12.1×(4.8) ×4.0	底部小径、体部やや丸味をもち、口縁部小さくくびれて開く。底部内面より焼成後の穿孔径0.9cm、轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化やや軟 ②淡橙 ③やや粗
336—25 90—25	D166溝 埋土	須恵器 杯	⅔	12.3×5.6 ×4.2	体部中位にやや丸味をもち、上半は外反して開く。口唇部やや肥厚して丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや密
336—26 90—26 埋土	F４溝	須恵器 杯	½	13.5×7.0 ×4.1	体部直線的に開き、口唇部細る。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化軟 ②黄橙 ③密長石粒混
336—27 90—27	D405溝 トレンチ	須恵器 杯	小片	14.2×7.4 ×3.6	体部やや浅く、直線的で大きく開く。轆轤整形。回転糸切り、部分的に箆調整。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
336—28 90—28 埋土	D676溝	須恵器 杯	底部⅔	－×6.9 ×(2.4)	腰部直線的に立ち上がる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗黒色粒混
336—29 90—29	D289溝 埋土	須恵器 杯	底部	－×6.0× (2.5)	底部肥厚し、器肉の薄い体部は直線的に開く。轆轤整形。右回転糸切り。内外面燻し焼成気味で暗灰色を呈す。	①やや軟 ②灰 ③密
336—30 90—30	D289溝 埋土	須恵器 杯	底部	－×5.6× (3.1)	底部肥厚し、体部丸味をもつ。轆轤整形。右回転糸切り。内外面部分的に燻し焼成気味で暗灰色を呈す。	①やや軟 ②灰白 ③密
336—31 90—31	D292溝 埋土	須恵器 杯	底部⅓	－×6.0× (2.5)	底部から腰部肥厚。内面体部下位に焼成後箆文字轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
336—32 90—32	FⅡ3溝 埋土	須恵器 椀	½	13.2×6.9 ×5.6	体部張り弱く轆轤目強い。口唇部小さく外反し細る。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。見込部に重ね焼痕。	①やや軟 ②灰 ③密
336—33 90—33	D405溝 ３層	須恵器 椀	½	13.6×6.4 ×5.1	体部下半にやや丸味をもち、上半は外反気味に開く。付高台作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
336—34 90—34	D406溝 埋土	須恵器 椀	½	14.5×6.4 ×5.3	腰部に張りなく小径の底部より、体部直線的に開き深目。口唇部僅かに外傾。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
337—35 90—35	D406溝 埋土	須恵器 椀	⅓	14.7×7.9 ×5.5	腰部に張りなく、大径の底部より体部直線的に開き、口唇部やや細る。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
337—36 91—36	D405溝 ３層	須恵器 椀	⅓	15.8×8.2 ×5.9	体部にやや張りをもつ、上半は小さく外反して開く。付高台、ハの字状に開き端部丸い。轆轤整形。回転糸切り。底部「サ」箆文字あり。	①良好 ②灰 ③密
337—37 91—37	D404溝 埋土	須恵器 椀	⅓	14.2×7.2 ×4.9	体部は緩く丸味をもち、上半は緩く外傾して開く。口唇部丸まる。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③やや粗
337—38 91—38	F６溝 埋土	須恵器 椀	¼	14.2×6.5 ×5.2	腰部から体部丸く張り、体部上位は大きく外反気味に開く。付高台断面矩形下端面段をなす。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③密
337—39 91—39	D404溝 埋土	須恵器 椀	⅓	15.6×8.0 ×5.2	体部に緩かな丸味をもち、口唇部は強く外屈する。器肉全体に薄い。付高台強く外方に開く。轆轤整形。右回転糸切	①軟 ②灰 ③やや密
337—40 91—40	D288溝 埋土	須恵器 椀	¾	14.2×6.0 ×5.5	体部緩やかな丸味をもち、上半は緩く外反して開く。口唇部丸い。付高台小径、断面丸く作り雑。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③やや密
337—41 91—41	F２溝 埋土	須恵器 椀	¼	15.9×－× (4.6)	器高やや低く、体部上半は大きく外反して開く。口唇部丸く肥厚、付高台直立気味。轆轤整形。	①やや軟 ②褐灰 ③粗砂粒多い
337—42 91—42	D405溝 ３層	須恵器 椀	¼	12.4×6.4 ×4.9	体部内湾気味に立ち上がる。付高台。轆轤整形。内面見込部は回転箆当て痕。	①良好 ②灰 ③やや密
337—43 91—43	F２溝 埋土	須恵器 椀	⅓	16.3×8.3 ×5.1	器高やや低く、体部大きく開く。付高台、断面矩形、轆轤整形。回転糸切り。内外面に重ね焼の燻し痕あり。	①やや軟 ②灰白 ③やや密

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（３）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
337—44 91—44	D288溝 埋土	須恵器 椀	体部⅓	15.0×－× (4.5)	腰部丸味強く。口唇部内湾気味に開き端部細る。轆轤整形。	①やや軟 ②灰 ③ やや粗
337—45 91—45	Ｂ１溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×7.6× (4.2)	体部直線的に開く。付高台断面矩形。轆轤整形。外面轆轤目強い。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
337—46 91—46	C32溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×(6.8) ×－	体部内湾気味に立ち上がる。付高台断面丸くハの字状に開く。内外面燻し焼成。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②暗灰 ③ やや密
337—47 91—47	FⅡ3溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×8.8× (3.6)	腰部僅かに張り気味。付高台高く大きくハの字状に開く。端部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
337—48 91—48	FⅡ3溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×9.0× (3.6)	底部から腰部の器肉厚く、腰部丸く張る。付高台高く強くハの字状に張る。轆轤整形。底部篦調整。	①良好 ②灰 ③や や粗白色粒多混
337—49 91—49	FⅡ3溝 埋土	須恵器 椀 or 皿	底部	－×8.1× (2.7)	体部大きく開き皿型になるか、付高台やや高く直立気味。端部丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③や や密黒色粒多混
337—50 91—50	D676溝	須恵器 椀	⅕	13.7×7.9 ×(6.0)	腰部僅かに丸味をもち、体部直線的に立ち上がる。付高台断面矩形、下端面に凹線状に段をなす。轆轤整形回転糸切	①やや軟 ②灰 ③ 密
337—51 91—51	Ｆ２溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×5.9× (2.2)	付高台、低く幅広。轆轤整形。回転糸切り。内外面燻し焼成を施し褐灰色を呈す。	①やや軟 ②灰 ③ 密輝性細粒多い
337—52 91—52	D1005溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×8.0× (1.8)	付高台幅広で断面丸味あり、作り雑。見込部にうず巻き状痕跡あり、轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③ やや粗砂粒多混
337—53 91—53	Ｆ２溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×6.7× (2.7)	腰部に丸味をもつ、付高台断面丸くハの字状に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗
337—54 91—54	D1006溝 埋土	須恵器 椀	底部⅓	－×8.0× (1.6)	付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り、二次被熱の可能性あり。	①酸化やや軟 ②淡 橙 ③やや密
338—55 91—55	Ｅ４溝 埋土	須恵器 椀	底部	－×5.0× (3.0)	腰部に張りなく直線的。付高台、低く断面は丸味のある矩形で作り雑。轆轤整形。回転糸切り。内面燻し焼成気味。	①酸化やや軟 ②赤 褐 ③やや密
338—56 91—56	D404溝 埋土	須恵器 椀	底部½	－×6.8× (1.6)	高台断面矩形。大原２号窯式期。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
338—57 91—57	D166溝	須恵器 高杯	脚部	－×－× (7.3)	内面に巻き上げ痕あり。	①良好 ②灰 ③や や粗砂粒多混
338—58 91—58	D404溝 埋土	須恵器 皿	¼	14.8×6.8 ×3.9	体部やや脹らみをもち大きく開き、上半はさらに強く開く口唇部丸く細まる。付高台やや高く断面丸くハの字状に張る。轆轤整形。回転糸切り。見込部の凹凸著しい。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
338—59 91—59	D406溝 埋土	須恵器 壺	底部½	－×13.6 ×(3.1)	壺型の底部か、付高台はやや高く凸線状の稜をもつ。底部摩耗著しく転用硯と考えられる。	①良好 ②灰 ③や や密
338—60 92—60	Ｆ４溝 埋土	須恵器 小壺	底部¼	－×8.2× 4.3	胴部短かく緩い張をもち上位で強く内屈し肩をなす。小短頸壺か。付高台、低く断面三角。腰部、底部篦調整。轆轤整形。	①良好 ②灰褐 ③ 密
338—61 92—61	B近世溝 埋土	須恵器 瓶	底部¼	－×10.0× (7.3)	胴部下半緩やかに丸味をもって立ち上がる。付高台低く断面矩形。	①良好 ②灰 ③や や粗黒色粒多混
338—62 92—62	D405溝 ４層	須恵器 瓶	底部⅓	－×12.0× (3.6)	高台幅広く、断面矩形を呈しやや高目。胴部下半は回転篦削り。	①良好 ②灰 ③密 黒色粒多混
338—63 92—63	D405溝 ４層	須恵器 瓶	底部¼	－×12.2× (5.5)	高台低く断面矩形を呈す。腰部篦削り。	①良好 ②灰褐 ③ やや粗白色粒多く混
338—64 92—64	Ｆ４溝 埋土	須恵器 瓶 ?	頸部	－×－× (9.0)	頸基部細く、上方へ直線的に外傾する。外面下位に１条の凹線巡る。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③や や密黒色細粒混
338—65 92—65	Ｆ５溝 埋土	須恵器 瓶		－×－× (6.0)	腰部やや肥厚し、小さく張る。胴部下半僅かにくびれ直線的に外傾。付高台、幅狭く小さい。底部粗い篦調整。	①良好 ②灰 ③や や密
338—66 92—66	D404溝 埋土	須恵器 瓶	口縁部 小片	13.0×－× (3.0)	口縁部強く外反して開く。口縁帯肥厚。	①やや軟 ②淡黄 ③粗砂粒多混
338—67 92—67	Ｆ５溝 埋土	須恵器 瓶	底部¼ 高台欠	－×12.7× (8.0)	胴部丸味なく直線的。高台欠損。外面自然釉。	①良好 ②灰 ③密
338—68 92—68	D405溝 埋土	須恵器 獣足		高5.5 径2.8	足先など細部の表現はない。指頭による縦位の強い撫で付けで、面取状に調整する。	①良好 ②灰 ③や や密
338—69 92—69	Ｂ１溝 埋土	軟質陶器 円盤		6.0×5.9× 1.2	軟質陶器片を円盤状に加工。縁辺部は摩滅調整を加える。	①良好 ②灰 ③や や粗
338—70 92—70	Ｂ１溝 埋土	軟質陶器 円盤		3.7×4.3× 1.4	軟質陶器片を円盤状に加工。縁辺部は摩滅調整を加える。	①良好 ②灰 ③や や密
338—71 92—71	Ｂ１溝 埋土	軟質陶器 円盤		3.4×3.7× 1.4	軟質陶器片を円盤状に加工。縁辺部は細かく打欠いて整形。	①良好 ②褐灰 ③ やや密
338—72 92—72	D1005溝 埋土	須恵器 円盤		6.2×6.0×1.2 重49.8g	須恵器 or 羽釜の底部を円盤状に加工。縁辺部は磨滅調整を施す。	①酸化軟 ②淡黄橙 ③やや粗

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（４）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
338—73 92—73	D404溝 埋土	灰釉陶器 椀	小片	15.0×6.8 ×4.2	体部やや浅く緩やかに丸味をもつ。口唇部強く外屈。高台断面矩形気味の三ケ月高台。腰部回転篦削り。内外面刷毛	①良好 ②灰 ③緻密
338—74 92—74	D405溝 ３層	灰釉陶器 椀	口縁部 小片	13.6×－× (3.0)	体部直線的に開き、口縁部僅かに丸く肥厚し小さく外反する。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
338—75 92—75	D405溝 ４層	灰釉陶器 椀	体部小 片	16.0×－× (4.7)	体部丸味をもち、口唇部強く外屈する。体部下半回転篦削り。内外面施釉。光ケ丘１号～大原２号窯式期？	①良好 ②灰 ③密
338—76 92—76	D405溝 ２層	灰釉陶器 椀	体部小 片	15.0×－× (4.3)	体部丸く内湾気味。外面轆轤目強い。内外面漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期？	①良好 ②灰白 ③密
338—77 92—77	D406溝 埋土	灰釉陶器 椀	口縁部 ⅓	16.3×－ ×(3.6)	浅椀になるか、体部緩やかに丸味をもち、口縁部外反して開く。内外面施釉。光ケ丘１号～大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
338—78 92—78	D405溝 ３、４層	灰釉陶器 椀	体部小 片	14.2×－× (3.9)	体部丸味をもつ。内外面施釉。虎渓山１号窯式期。断面に小亀裂入る。	①良好 ②灰白 ③やや密
338—79 92—79	D405溝 ３、４層	灰釉陶器 椀	体部小 片	16.6×－× (3.6)	体部緩く丸味をもち、口縁部小さく外屈する。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
338—80 92—80	D404溝 埋土	灰釉陶器 椀	小片	15.6×－× (3.7)	体部緩やかな丸味をもつ。口唇部丸く外屈。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
338—81 92—81	Ｆ２溝 埋土	灰釉陶器 椀	体部小 片	16.3×－× (3.5)	体部やや浅く丸味をもつ。口唇部丸まり僅かに肥厚。腰部回転篦削り。内面施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰白 ③密
339—82 92—82	D405溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部½	－×9.0× (2.7)	高台断面は丸味のある三角。器肉厚目。見込部緩く凹み撫調整。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—83 92—83	D405溝 埋土	灰釉陶器 椀　？	底部½	－×8.2× (2.0)	高台外稜の弱い三ケ月高台。内面刷毛塗り？施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—84 92—84	Ｅ１溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部¼	－×(7.7) ×－	高台やや高く、丸味をもち内湾して立つ。大原２号窯式期	①良好 ②灰 ③密
339—85 93—85	D406溝 埋土	灰釉陶器 椀　？	底部小 片	－×6.6 ×(1.5)	高台やや高く内湾して立つ。	①良好 ②灰 ③密
339—86 92—86	Ｆ２溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部小 片	－×8.9× (2.1)	腰部丸味をもち張る。付高台高く直立し、端部尖がる。内外面施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰白 ③緻密
339—87 91—87	D404溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.4× (1.9)	高台肥厚しやや高く、内湾して立つ。内面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—88 92—88	Ｆ７溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部¼	－×7.4× (1.2)	高台外稜強く丸味のある三ケ月高台。内外面施釉。光ケ丘１号～大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—89 93—89	D289溝 埋土	灰釉陶器 椀　？	底部½	－×7.2× (1.5)	高台内湾気味に立ち、断面丸味のある矩形。	①良好 ②灰 ③やや密
339—90 93—90	D405溝 埋土	灰釉陶器 椀　？	底部小 片	－×6.6× (1.6)	高台外稜丸い矩形気味の三ケ月高台。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—91 93—91	FⅡ２溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部小 片	－×9.2× (2.8)	底部器肉厚い。付高台幅広で高くハの字状に張る。内面に自然釉か。大型の椀と思われる。丸石２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—92 93—92	D404溝 埋土	灰釉陶器 Ⅲ　？	小片	15.6×－× (2.4)	体部上位に張りをもつ、口唇部丸く外屈。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—93 93—93	Ｆ１溝 埋土	灰釉陶器 Ⅲ	底部小 片	－×－× (1.0)	高台やや高く直立し、端部丸く細まる。内面施釉。	①良好 ②灰白 ③密
339—94 93—94	Ｆ１溝 埋土	灰釉陶器 Ⅲ	底部¼	－×6.8× (1.5)	高台端部丸い。腰部回転篦削り。内外面施釉。	①良好 ②灰 ③密
339—95	Ｆ２溝 埋土	灰釉陶器 Ⅲ	底部½	－×6.4× (1.4)	高台断面丸い。内面施釉痕。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—96 93—96	Ｅ１溝 埋土	灰釉陶器 Ⅲ	底部⅓	－×(6.5) ×－	腰部直線的に大きく開く。高台丸味をもち内湾気味。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—97 93—97	D289溝 埋土	灰釉陶器 耳　Ⅲ	底部¼	－×6.0× (1.7)	内外面施釉されるが内面の釉は厚い。底部回転糸切り。	①良好 ②灰 ③緻密
339—98 93—98	D405溝 ３層	灰釉陶器 耳　Ⅲ	小片	－×－×－	内外面施釉。底部回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③密
339—99 93—99	D406溝 埋土	灰釉陶器 耳　Ⅲ	底部½	－×4.7 ×(1.9)	内面施釉。底部ベタ底。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
339—100 93—100	D406溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.3 ×(2.6)	腰部回転篦削り。高台やや高く内湾して立つ。内面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—101 93—101	D406溝 埋土	灰釉陶器 椀　？	底部⅓	－×6.7 ×(1.2)	高台低く断面矩形。底部回転篦削り。	①良好 ②灰 ③やや密
339—102 93—102	D406溝 埋土	灰釉陶器 椀　？	底部⅓	－×7.2 ×(1.8)	高台高く内湾して立つ。内外面施釉。	①良好 ②灰 ③緻密

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（５）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
339—103 93—103	D405溝 3層	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.8× (2.0)	高台外稜の強い三ケ月高台。漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰白 ③密
339—104 93—104	D405溝 3層	灰釉陶器 椀	底部	－×6.6× (1.2)	高台低く、外稜丸味をもつが強い。内外面漬け掛け施釉。底部篦調整後撫で。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや粗
339—105 93—105	D405溝	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.4× (2.0)	高台内湾気味に立つ。底部中央に糸切り痕残り、周辺は撫で調整。腰部篦削り。見込部に重ね焼痕。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
339—106 93—106	D405溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×8.0× (2.5)	高台低く、断面丸い。見込部緩く凹む。底部篦調整後撫で内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—107 93—107	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 椀	底部½	－7.0× (2.1)	高台肥厚し、外稜丸味のある三ケ月高台。大原２号窯式期	①やや甘 ②灰 ③密
339—108 93—108	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×6.6× (2.0)	高台丸味強く内屈する。底部篦調整。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—109 93—109	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×8.2× (2.1)	高台端部細まり、内側内湾する。底部器肉薄い。	①良好 ②灰白 ③緻密
339—110 93—110	D405溝 2、3層	灰釉陶器 椀	底部¼	－×7.2× (2.1)	高台やや厚味のある三ケ月高台。底部篦調整。	①やや甘 ②灰白 ③密
339—111 93—111	D405溝 3層	灰釉陶器 皿	底部½	－×8.0× (1.8)	高台はやや外稜に丸味のある三ケ月高台。内面施釉。見込部に重ね焼痕。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—112 93—112	D405溝 3層	灰釉陶器 椀	底部¼	－×8.0× (1.9)	高台丸味の強い三ケ月高台。見込部緩く凹み、重ね焼き痕あり。体部施釉。大原２号窯～虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—113 93—113	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×8.0× (1.6)	高台肥厚し幅広。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰白 ③やや密
339—114 93—114	D405溝 3層	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×8.0× (1.9)	高台肥厚気味。外稜丸味強い。漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①やや軟 ②灰白 ③密
339—115 94—115	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 椀	底部¼	－×6.4× (2.2)	高台肥厚気味、直線的に開く。漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや粗、黒色粒混る
339—116 94—116	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.4× (1.9)	三ケ月高台。底部篦調整。内面体部刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
339—117 94—117	D405溝 3層	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.2× (1.6)	やや高目の外稜丸味のある三ケ月高台。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—118 94—118	D405溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部¼	－×7.0× (1.9)	高台は外稜の強い三ケ月高台。光ケ丘１号窯～大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
339—119 94—119	D405溝 3、4層	灰釉陶器 椀	底部¼	－×7.0× (2.8)	高台やや高く丸く肥厚し内湾気味に立つ。腰部篦削り。底部器肉薄く見込部緩く凹む。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
339—120 94—120	D405溝 4層	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.6× (1.4)	やや幅広な三ケ月高台。底部篦調整。見込部緩く凹む。	①良好 ②灰 ③密
339—121 94—121	D405溝 3層	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.2× (2.0)	高台やや高く肥厚気味で丸味をもつ。底部回転糸切り後撫調整。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
339—122 94—122	D405溝 3層	灰釉陶器 皿	底部⅓	－×7.4× (1.5)	高台低く狭少な三ケ月高台。刷毛塗り施釉？。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
339—123 94—123	D405溝 3層	灰釉陶器 瓶	底部⅓	－×11.0× (2.1)	高台幅広く、畳付け内傾する。内面轆轤痕顕著。	①良好 ②灰 ③やや密
339—124 94—124	D405溝 埋土	灰釉陶器 瓶	底部¼	－×9.2× (1.6)	高台低く幅広。下端面内傾する。底部器肉極めて薄い。内面轆轤痕顕著。	①良好 ②灰 ③密
339—125 94—125	D405溝 3層	灰釉陶器 瓶	底部小片	－×10.0× (2.6)	高台低く幅広。断面略矩形。	①良好 ②灰 ③やや密
339—126 94—126	D405溝 3層	緑釉陶器 椀	底部½	－×6.8× 2.3	器肉厚い。底部削り出し平高台を呈するが、中央部に弱い削り込みがあり、蛇の目高台の可能性あり。内外面施釉。胎土は灰色硬く焼き締まり、釉調は濃緑色。京都落西産か	①良好 ②灰 ③密
339—127 93—127	F２溝 埋土	灰釉陶器 瓶	頸部½	－×－×(6.0) 基部径７cm	下半部直立し、上半緩く外傾して開く。内外面施釉。	①良好 ②灰 ③密
339—128 93—128	E１溝 埋土	灰釉陶器 瓶	底部⅔	－×9.9 ×－	高台低く幅広。畳付け緩く段をなし内傾。腰部回転篦削り。底部回転篦削り後回転撫で調整。	①良好 ②灰 ③やや密
340—129 93—129	F１溝 埋土	灰釉陶器 瓶	底部½	－×9.5× (3.4)	胴部下半僅かに脹らむ、付高台低く幅広。腰部回転篦削り。底部中央部は爆ぜて脹らむ。	①良好 ②灰 ③密
340—130 93—130	D405溝 トレンチ	灰釉陶器 瓶	底部¼	－×11.4× (3.6)	高台低く幅広、下端面僅かに内傾。	①良好 ②灰 ③やや密

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（６）

Fig. № PL. №	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
340－131 94－131	D405溝 3層	灰釉陶器 瓶	底部	－×9.4× (3.4)	高台低く幅広。畳付け緩く内傾する。内面轆轤痕顕著。外面篦削り調整あり。	①良好 ②灰 ③やや密
340－132 94－132	FⅡ2溝	灰釉陶器 瓶	底部小片	－×9.0× (2.5)	高台低く幅広。下端は僅かに内傾。見込部轆轤痕著しく釉付着。	①良好 ②灰 ③密
340－133 94－133	D404溝 埋土	灰釉陶器 平瓶	頸基部	－×－× (4.6)	肩部片端は頸基部より直に下がる。口頸部は胴部にはめ込み式。	①良好 ②灰 ③やや密
340－134 94－134	D405溝 3層	灰釉陶器 甕	底部小片	－×－×－	胴部下半は直線的に立ち上がり、粗い篦撫で付けを施す。腰部篦削り。	①良好 ②灰白 ③密
340－135 94－135	D405溝 埋土	緑釉陶器 椀	⅔	14.4×7.0 ×5.1	体部下半丸味をもち、中位に緩い稜をなして上半は外反気味に開く。外面下位回転篦削り。内面上半横篦磨き。高台矩形を呈し削り出し。釉調は淡黄緑色、底部無釉。口唇部油煙。	①軟 ②淡黄 ③密
340－136 94－136	D289溝 埋土	緑釉陶器 椀	体部小片	厚0.2～0.4	体部上半は緩く外反して開き、口唇部細まる。内外面施釉、釉調はオリーブ灰色を呈し光沢がある。	①良好 堅緻 ②灰 ③密
340－137 94－137	D405溝 埋土	緑釉陶器 段皿	小片	12.2×－× 2.5	体部僅かに丸味をもち、口縁部小さく外反、内面に段をなす。内外面施釉、釉調は淡緑色。	①軟 ②白灰 ③密
340－138 94－138	F3溝 埋土	土師器 甕	口縁部 ¼	18.6×－× (7.1)	肩部張りなく、胴部は僅かな張らみをもつか。口縁部外反して開く。口縁部指頭痕後横撫で。肩部横篦削り。	①良好 ②橙 ③やや粗
340－139 94－139	B472溝 埋土	須恵器 甕	底部¼	－×15.6× (6.4)	腰部直線的に立ち上がる。外面指頭痕後横篦撫で調整。内面接合部の指頭痕著しい。	①良好 ②灰 ③密
340－140 94－140	B1溝 埋土	須恵器 甕	底部¼	－×14.0× (4.6)	腰部に張りなく底部より直線的に立ち上がる。腰部横篦削り後撫で。	①良好 ②灰 ③密
340－141 94－141	C405溝	須恵器 甕	底部¼	－×16.0× (4.8)	平底の底部より緩く内湾気味に立ち上がる。見込部磨滅著しくすり鉢か。胴部下位横位篦撫で。底部篦削り。	①良好 ②灰 ③やや密
340－142 94－142	F3溝 埋土	須恵器 甕	肩部小片		外面平行叩き、内面青海波当７目。	①良好 ②灰 ③粗
340－143 94－143	D405溝 3層	須恵器 甕	口縁部小片	－×－×－	口縁部上位に極めて強く突出する４段の貼り付け凸帯を巡らす。	①やや軟 ②灰 ③密白・黒細粒混
340－144 94－144	D405号溝	須恵器 甕	口縁部小片	－×－×－	143と同一個体。	①やや軟 ②灰 ③密白・黒色粒混
340－145 94－145	F2溝 埋土	須恵器 甕？	頸部小片		外面に縦方向の櫛目。	①良好 ②灰 ③密 縞状
340－146 94－146	FⅡ3溝 埋土	須恵器 甕	口縁部小片	－×－× (7.6)	基部強く湾曲して直立し、上半は緩く外反気味に開く。	①良好 ②灰 ③やや粗白色細粒混
340－147 94－147	FⅡ6溝	須恵器 鉢	口縁部小片		片口の鉢。口唇部断面三角形。	①良好 ②灰 ③やや粗白色細粒多混
340－148 94－148	F4溝 埋土	須恵器 鉢	底部½	－×10.9× (3.7)	体部肥厚。内面摩滅著しく擂鉢として機能か。	①良好 ②灰 ③粗
340－149 95－149	D405溝 3層	須恵器 鉢？	底部小片	－×－×－	底部縁辺は不規則に突出し、胴下半やや丸味をもって開く内面摩滅が見られる。	①良好 ②灰 ③やや粗白色粒混
341－150 95－150	E4溝 埋土	須恵器 鉢	口縁部破片	－×－× (7.0)	体部直線的、口唇部断面矩形。擂鉢か。器肉厚い。	①良好 ②暗灰黄 ③？
341－151 94－151	D405溝 埋土	須恵器 瓶？	下半部 ¼	－×10.4× (9.4)	胴部僅かに丸味をもち立ち上がる。付高台低く小さくハの字状に開く。腰部篦撫で。	①良好 ②灰 ③やや密黒色粒混
341－152 94－152	D1006溝 埋土	軟質陶器 擂鉢	口縁部小片	29.0×－× (5.2)	外反気味の体部から、僅かにくびれ、口縁部は内湾気味でさらに大きく開く。口唇部断面矩形。表面は燻し焼成気味	①良好 ②鈍い橙 ③やや粗茶色粒混
34－153 94－153	B1溝	軟質土器 片口擂鉢	ほぼ完形	31.3×14.5 ×12.9	体部直線的に大きく開く。口唇部断面矩形を呈し、上端部内側に小さく突出。内面中位より下半著しく摩滅。外面体部４段の指頭痕著しい。底部右回転糸切り。燻し焼成気味	①やや軟②暗褐灰③やや粗
341－154 94－154	F5溝	軟質陶器 すり鉢	体部下位小片	－×5.3× (6.6)	底部肥厚、体部大きく直線的に開く。内面に５条１組の擂り目を孤状に配する。	①良好 ②灰褐 ③やや粗
341－155 94－155	E5溝 埋土	軟質陶器 鉢	体部⅓	(24.4)×－ ×(6.5)	体部直線的で大きく開く。口縁部下位はくびれて稜をなす。外面横撫で、腰部篦削り。内面横篦撫で。高台欠損か。	①酸化良好 ②淡黄橙 ③やや粗砂粒多
341－156 95－156	F5溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	小片		口唇部上端は平坦で内斜。	①良好 ②灰 ③粗
341－157 95－157	F5溝	軟質陶器 内耳鍋	小片		口唇部上端は平坦で外縁部鋭く尖がる。	①良好 ②灰 ③やや密
341－158 95－158	E4溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	体部小片	厚1.1	平底と考えられる底部から、体部高く直立する。口縁部外傾し内湾気味に小さく開く。口唇部断面矩形。内面及び口縁部横撫で。体部指頭痕、腰部篦削り。外面煤状付着物あり。	①良好 ②灰 ③やや密

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（７）

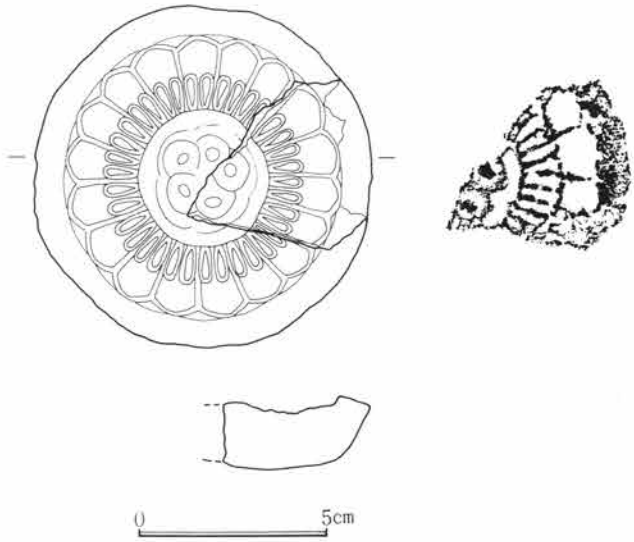
Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
341—159 93—159	Ｆ１溝 埋土	陶器 椀	底部	－×5.5× (1.6)	底部著しく肥厚。高台直立し断面矩形。内面に灰釉施す。	①やや軟　②灰白 ③密
341—160 95—160	Ｆ１溝 埋土	陶器 皿	小片	厚0.5	口唇部丸く外反して開く。内外面に灰釉施す。	①良好　②灰　③密
341—161 93—161	Ｆ１溝 埋土	陶？器 皿	底部⅓	－×6.9× (1.3)	内外面に灰釉を施す。見込部には褐釉による草花文を線描きで描く。	①良好　②灰　③緻密
341—162 93—162	Ｆ１溝 埋土	陶器 皿	底部½	－×6.9× (0.9)	低く幅広な削り出し高台。内面全体と外面体部に灰釉施す。見込部にトチン痕。腰・底部は無釉。	①良好　②明黄褐 ③密
341—163 95—163	Ｆ３溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	小片	厚0.8	胴部直立し、口縁部折れて内湾気味に外傾する。口唇部矩形。外面胴部に横位の指頭撫で。	①良好　②褐灰　③やや密
341—164 95—164	Ｆ１溝 埋土	陶器？ 皿	底部小片		腰部水平に近く開き、体部はくびれて直立するか。内面と外面体部に褐釉を施す。底部・腰部回転篦削り。	①良好　②淡黄　③密
341—165 95—165	Ｄ404溝 埋土	陶器 皿	小片		内外面透明釉、内面貫入。	①良好　②灰白　③やや密
341—166 95—166	Ｆ１溝 埋土	陶器？ 皿	小片		全面に白色（透明）釉施す。	①良好　②白　③やや密
342—167 95—167	Ｆ１溝 埋土	陶器 皿	底部⅓	－×7.4× (2.3)	体部直線的で水平気味に開く。高台高く直線的、内外面全面に褐釉を施す。	①良好　②浅黄橙 ③密
342—168 95—168	Ｆ１溝 埋土	陶器 擂鉢	小片	厚1.0～1.6	内外面に褐釉を施す。内面体部には10条＋α単位の方射状擂り目を施す。内面の摩滅著しい。	①良好　②灰白　③やや密
342—169 95—169	Ｆ１溝 埋土	陶器 擂鉢	小片	厚0.9	内面に粗い縦方向の擂り目。	①良好　②明黄褐 ③やや粗
342—170 95—170	Ｆ１溝 埋土	青磁 碗	底部	－×4.7× (1.3)	高台径小さく、断面矩形。内面施釉、釉調はオリーブ黄を呈し薄い。底部回転篦削り。	①良好　②灰白　③密
342—171 95—171	Ｆ１溝 埋土	白磁？ 鉢	小片	厚0.4	口縁部水平に折れる。	①良好　②淡黄　③緻密
342—172 93—172	Ｆ１溝 埋土	磁器 碗	底部¼	－×5.5× (2.1)	底部肥厚し腰部の丸味強い。内外面全面施釉。外面に不鮮明な染付け文様あり。貫入著しい。	①良好　②灰　③密
342—173 95—173	Ｆ１溝 埋土	瓦 丸瓦	小片	厚2.1	凸面縄目押し後撫で消し、凹面布目、３ケ所に継ぎ目あり。側縁部篦調整。	①酸化気味やや軟 ②淡赤橙　③密
342—174 95—174	Ｄ405溝 ３層	瓦 軒平瓦	小片	－×－×－ 厚3.0	瓦当文様唐草文。凹面篦削り、凸縄目叩き。	①良好　②灰　③粗 白色小石多混
342—175 96—175	Ｅ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.7	凹面布目。凸面粗い篦撫で。	①良好　②灰　③密 縞状
342—176 95—176	Ｆ１溝 埋土	瓦 丸瓦	小片	厚2.2	有段式丸瓦、凸面篦撫で、凹面布目。	①良好　②灰　③やや粗
342—177 96—177	ＦⅡ３溝 埋土	瓦 丸瓦	小片	厚2.2	有段式。凸面縄目押後撫で。凹面布目。側縁部篦調整。	①酸化気味やや軟 ②淡黄橙　③密
342—178 96—178	Ｃ405溝	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目、凸面撫で。側縁部篦調整。	①良好　②暗灰　③粗白色粒混
342—179 96—179	Ｄ405溝	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚1.7	凹面布目。凸面篦撫で。側縁部篦調整。	①酸化　②淡橙　③密
342—180 96—180	Ｆ２溝 埋土	瓦 丸瓦		厚2.8	凸面篦撫で。凹面布目。側縁部面取り調整。	①良好　②褐灰　③やや粗
342—181 96—181	Ｄ405溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.3	凹面布目、凸面撫で。	①良好　②灰　③やや粗白色粒混
342—182 96—182	Ｂ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目、凸面撫で。	①良好　②灰　③やや密
342—183 96—183	ＦⅡ３溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面細布目、凸面細縄目押し、砂粒若干付着。側縁部篦調整	①軟　②灰　③密
342—184 96—184	Ｅ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目、凸面細縄目押し型、砂粒付着。側縁部篦調整。	①良好　②灰　③密
343—185 96—185	Ｆ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.8	凹面布目。凸面縄目押し後撫で消し、側縁部篦調整。	①酸化軟　②淡橙 ③やや密石英粒多混
343—186 96—186	Ｄ405溝	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚1.7	凹面布目、横骨痕あり。凸面篦撫で、側縁部篦調整。	①酸化軟　②淡黄 ③密白色粒混
343—187 96—187	Ｄ405溝 ３、４層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚2.3	凹面やや粗い布目、凸面平行叩き後篦撫で。側縁部篦調整	①良好　②灰　③やや粗小石白色細粒混
343—188 96—188	Ｆ２溝 埋土	瓦 丸瓦	小片	厚1.8	凸面縄目叩き後撫で調整、凹面布目後強い篦撫で調整。側縁部篦調整。	①良好　②灰　③やや密

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（８）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
343－189 96－189	Ｄ405溝 ４層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚3.0	凹面布目、横骨痕あり、凸面篦撫で。側縁部篦調整。	①やや軟 ②灰 ③密
343－190 96－190	ＦⅡ３溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.9	凹面布目、凸面細縄目押し、砂粒多く付着、側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③やや密縞状
343－191 96－191	Ｆ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.6	凹面布目、凸面斜格子文押し。	①良好 ②灰 ③やや密白色細粒混
343(代)192 96－192	Ｄ1005溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目後篦撫で。凸面細縄目押し、砂粒付着。側面篦調整。	①良好 ②灰 ③密白色細粒混
343－193 96－193	Ｄ405溝 ４層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚2.0	凹面細かい布目、凸面篦撫で、側面篦調整、縦側面に凹面からの切り込み痕あり、化粧仕上げなし。	①良好 ②暗灰 ③やや密白色細粒混
343－194 97－194	ＦⅡ３溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.4	凹面細布目。凸面細縄目押し、砂粒多く付着。	①良好 ②灰 ③やや密
343－195 97－195	Ｅ５溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.3	凹面布目。凸面篦撫で。	①やや軟 ②灰 ③やや密
343－196 97－196	Ｆ２溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目、凸面縄目叩き後撫で調整。側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③やや密
343－197 97－197	Ｄ405溝 ３、４層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚2.0	凹面布目後撫で。凸面撫で、側縁部篦調整。	①酸化 ②淡橙 ③粗小石混
343－198 97－198	Ｅ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.3	凹面布目、凸面細縄目押し型。砂粒付着。断面に表裏貼り合せ痕あり。側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
344－199 97－199	Ｄ404溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.6	凹面布目、凸面撫で、側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
344－200 97－200	Ｄ405溝 ４層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚3.3	凹面布目、凸面平行叩き、篦文字状の痕跡あり。側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③やや密
344－201 97－201	Ｄ405溝 ３層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚1.8	凹面粗い布目、凸面平行叩き、側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③やや粗白色細粒混
344－202 97－202	Ｄ405溝 ３層	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚2.4	凹面布目、凸面撫で。側面篦調整。	①やや軟 ②淡橙 ③やや密小石混
344－203 97－203	Ｄ405溝	瓦 平瓦	小片	－×－×－ 厚2.8	凹面細布目、凸面細縄目回転押捺、凸面に細粒砂痕。	①堅緻 ②灰 ③密
344－204 97－204	Ｆ１溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.6	凹面篦撫で調整。凸面斜格子文押し型痕後弱いかき目調整。側縁部篦調整。	①良好 ②灰 ③密
344－205 97－205	Ｄ1005溝 埋土	石製品 砥石		9.0×4.0× 4.1 167.2g	片端細まる長方形、４面使用、両端面は使用痕なし。３面に刃痕著しい。	流紋岩
344－206 97－206	Ｃ32溝 埋土	石製品 砥石	小片	0.6×2.9× (3.2)	扁平な板状、両面・西側使用、１欠損側面に擦痕と半円穿孔痕。	
344－207 97－207	Ｄ405溝 ３層	石製品 砥石	小片	2.9×1.7× 2.6	両面使用。	流紋岩（砥沢？）
344－208 97－208	Ｅ１溝	石製品 凹石	完形	14.0×9.0×8.0 987g	不定形の石を使用。平坦面に径７cm、深さ1.5cmの凹みを作る。縁辺は研き状に調整。側面は砥石に使用が摩滅痕あり	粗粒安山岩
344－209 97－209	Ｅ１溝	石製品 石臼	下臼小片	高11.0	上端面の摩滅著しい。下端面及び側部はノミによる調整痕。	粗粒安山岩
344－210 97－210	Ｄ1006溝 埋土	石製品 石臼	小片		茶臼の上臼上端縁と考えられる。	安山岩
344－211 97－211	Ｄ1005溝	板碑	破片	7.8×6.8× 1.0	小片であり、表裏共に剝離のため、部位さえ不明。	緑泥片岩
344－212 97－212	Ｄ1006溝 埋土	板碑	破片	(10.5×6.5 ×2.1)	小片であり、彫り込みも一切見られず、部位さえ不明。	緑泥片岩
344－213 97－213	Ｄ405溝	板碑	破片	厚1.8	中央側端部の破片か。彫り込みは一切見られない。表面は若干剝離。	絹雲母片岩
344－214 98－214	Ｄ1010溝	五輪塔	火輪 略完形		底面に丁寧な仕上げが残る。他の面は磨滅が著しい。上面に空間輪受(接続)部の孔がなく、浅い孔か、又は未穿孔か。	角閃石安山岩
344－215 98－215	Ｂ１溝 埋土	土製品 鋳型？	部分	6.7×4.5× 4.0	獣脚状土製品の両端面が丸く凹む。片端の凹み鋳込と考えられ高熱のためクロミが見られ鉄分付着。真土が塗布。	①酸化 ②鈍橙 ③やや粗砂粒多混
344－216 98－216	Ｄ1008溝 埋土	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長(3.5)幅・ 厚0.5×0.6	頂部折頭式角釘、身部緩く曲がる。	
344－217 98－217	Ｄ405溝 埋土	鉄製品 槍鉋	先端部	長(3.4)刃 幅1.3	刃部やや幅広で両刃。僅かな反をもち槍鉋の可能性あり。	

Ｂ～Ｆ区溝出土遺物観察表（９）

Fig.No. PL.No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
344－218 98－218	D404溝	鉄製品 鉄鏃	茎部小片	長(3.7)	長頸鏃。	
345－219 98－219	D1005溝	鉄塊	小片	長3.1 幅・厚1.8×0.6	板状、割口に銀化現象あり、鋳物か？	
345－220 98－220	D289溝	鉄製品 角釘	先端部	長(3.9)幅・厚10.7	角釘先端部。断面方形。	
345－221 98－221	C32溝	鉄製品 角釘	頂・先端欠損	長2.8 幅・厚0.7	断面矩形を呈し角釘か。Ｌ字に折れる。	
345－222 98－222	D1006溝 埋土	鉄製品 鉄片	小片	長(2.2)幅・厚1.7×0.2	板状鉄片。	
345－223 98－223	Ｂ１溝 埋土	鉄製品 角釘	頂、端部欠損	長(5.6)厚0.4	先端部僅かに曲がる。角釘。	
345－224 98－224	Ｂ近世溝 埋土	鉄製品 不明	両端欠損	長(6.6)幅・厚0.3×0.2	細い角線状製品。	
345－225 98－225	Ｂ１溝 埋土	鉄製品 角釘	頂部欠損	長(9.5)厚・幅0.6×0.5	角釘か。頂部欠損し、先端部緩く曲がる。断面長方形。大型の角釘と考えられる。	
345－226 98－226	Ｅ１溝 埋土	鉄製品 不明		長(9.0)	断面扁平な楕円形をなし幅0.6cm、厚0.2cm。楕円形に環状になるか。責具の類か。	
345－227 98－227	Ｂ近世溝 埋土	鉄製品 角釘	完形	長8.2 幅・厚0.8×0.7	頭部形状は折頭式の角釘。身端部は薄く鋭がり楔形を呈す	
345－228 98－228	Ｂ近世溝 埋土	鉄塊		長6.5 幅・厚2.4×1.1	断面は扁平な楕円形、半月形の鉄塊。	
345－229 98－229	D289溝	鉄製品 鉄鏃	鏃先	長(6.0)幅・厚1.7×0.5	柳葉型の鉄鏃先か。断面弱いかまぼこ状。	
345－230 98－230	D289溝	鉄製品 鉸具	完形	長・幅5.0	縁金の頂辺は緩く孤を描く。刺金と横棒は固定式で、横棒は縁金と帯をつなぐ横棒は縁金を貫通、刺金横棒は可動式	
345－231 98－231	D405溝 埋土	鉄製品 鉄鏃	柄部残欠	長(5.7)	柄部両端欠損。鉄鏃の柄部と思われる。	
345－232 98－232	C32溝	鉄製品 不明	完形	径3.5	太さ0.4cmの環状製品。つき目は不明。	
345－233 98－233	Ｆ１溝 埋土	鉄製品 不明		径3.0 厚0.1	円板状で薄い。	
345－234 —	C38溝	銅製品 不明	小片	長1.5 径0.8	円柱状銅製品。	



Ｅ４号溝出土鋳型

５．館跡（Fig. 346・PL. 34～36・99～105）

Ｅ区のほぼ全域を占める館跡は昭和54年の試掘調査によって、その存在が確認されたものである。館跡を構成する遺構は南辺から東辺・北辺を二重に巡る内堀・外堀を中心に、館内部の小穴群が主な遺構である。館内部には小竪穴状遺構、土坑、墓跡、井戸などが検出されているが、同時期的に存在したか否かはいずれも明確ではない。なお、館跡の西半は調査区域外に及び、検出範囲の南西は一部Ｄ区の区域にかかる。外堀を限る検出規模は南北約80m・東西約64mの範囲である。

外堀：調査が数次に渡ったため、Ｅ２号溝・Ｅ23号溝・Ｅ165号溝などの遺構名を付されるが同一のものである。南辺は約64mを検出し、走行方位はおよそＮ－70°－Ｅを示す。規模は上幅約7.5m、下幅約1.5m、深さ約1.5mを測る。底面よりの立ち上がりは弱い段状となり、断面形は比較的開きの大きいＵ字形を呈す。東辺との折部より西へ約40mの個所で幅４mで高さ50～60cmの凸状部を形成している。この凸状部には南北相対する状態で６本のピットが検出されており、橋脚の存在が想定される。底面数ケ所に方形区画が認められるが、堀の開削工程の区割作業によったためと考えられる。なお、橋脚部が当館跡の中央部に相当すると仮定すれば、東西規模は約80mとなる。南辺からほぼ直角に折れる東辺は約70mの規模でＮ－23°－Ｗの走向をもつ。上幅６～7.5m、下幅約３mを測り深さは南辺とほぼ同じである。断面形はやや箱堀に近く、立ち上がりは急傾斜となる。開削工程の区割りは北側に認められる。北辺は約45m検出し、東辺に対し約100°の開きをもって鈍角に折れる。北辺は上幅約６m、下幅２m、深さ1.5mを測る。断面形はかなり明瞭な箱堀を呈する。西側底面に掘形区割の痕跡がある。

内堀：Ｅ３号溝・Ｅ21号溝の遺構名がある。走向はほぼ外堀と同じである。南辺のほとんどと、東辺の一部は、生活道確保の為未検出である。上幅約４m、深さ約80cmを測る。南辺は約20m、北辺は34mまで検出した。東辺規模は約43mと考えられる。断面形は大きく開くＵ字形を呈す。

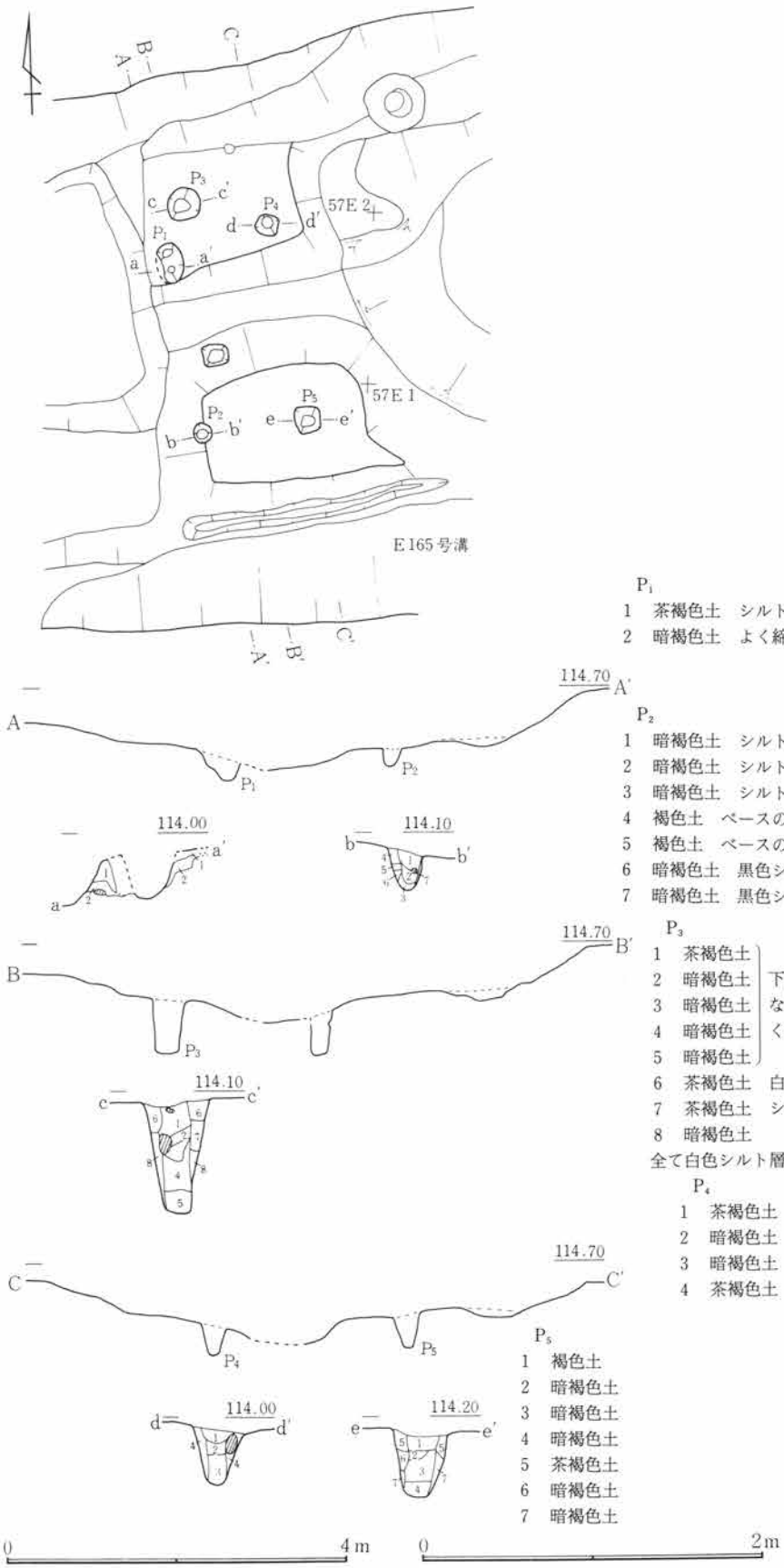
当館跡を構成する内・外堀には南・東・北辺の各々が異なる間隔をなしている。南辺の外・内堀間には約10mの空間があり、東辺では５m、北辺では僅か２mである。最も広い空間をもつ南辺は、橋脚の存在から正面を意識したとも考えられるが、内・外堀が同時に存在したから検討を要するであろう。また、北辺に関しては、内・外堀に重複して、Ｅ19号溝・Ｅ20号溝などが検出され、館跡の構成施設の変遷があったとも考えられる。

掘立柱建物跡：館跡内部には多数のピット群が検出されている。調査時には建物跡としての明確な存在を認識されていなかったものであるが、図面検討から重複するＥ６号・Ｅ７号掘立柱建物跡の２棟を認定した。

Ｅ７号掘立柱建物跡は、横方向がＮ－18°－Ｗを示す２間×２間の規模をもつ。棟行柱間は3.5m×4.2m・桁行柱間は2.5m×３mを測る。

Ｅ６号掘立柱建物跡は、棟方向がＮ－18°－Ｗを示す３間×２間の規模をもつ。棟行柱間は2.5m・桁行柱間は北辺が3.5m・南辺が４m×2.5mを測る。

Fig. 346　館跡全体図



P_1
1　茶褐色土　シルト層土主体　酸化著じるしく極めて堅い
2　暗褐色土　よく締まる

P_2
1　暗褐色土　シルト質
2　暗褐色土　シルト質
3　暗褐色土　シルト質
4　褐色土　ベースの白・灰・黒シルト層主体酸性土含む
5　褐色土　ベースの白・灰・黒シルト層主体酸性土少し
6　暗褐色土　黒色シルト層土主体　4層分入る
7　暗褐色土　黒色シルト層土主体　4層分入る

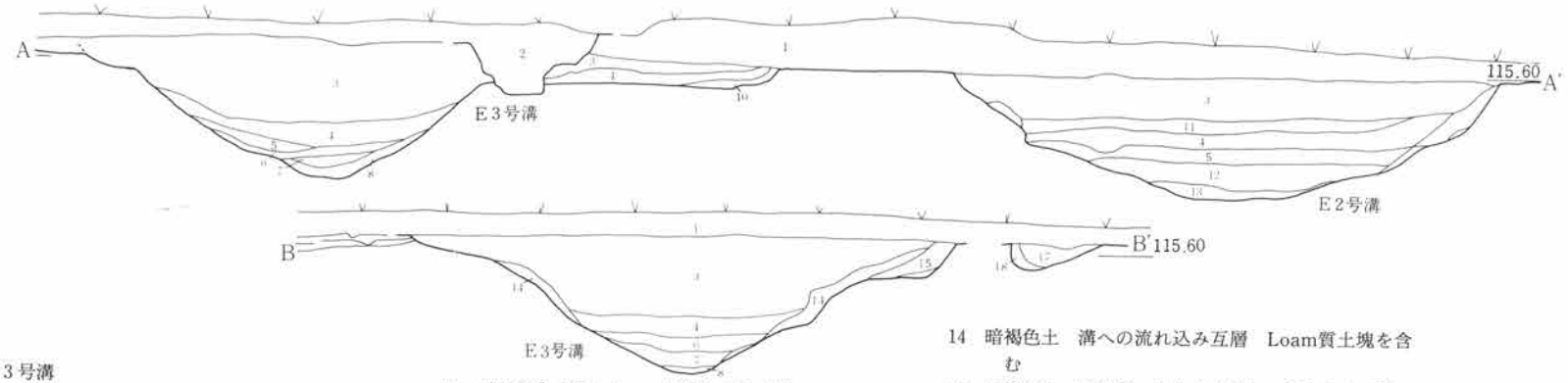
P_3
1　茶褐色土
2　暗褐色土
3　暗褐色土
4　暗褐色土
5　暗褐色土
下層へ行くほど白色シルト分が少なくなる　B軽石は混入するが顕著ではなく軟質である
6　茶褐色土　白色シルト層土塊が著じるしい
7　茶褐色土　シルト層の粒子の混じりが主体
8　暗褐色土
全て白色シルト層とLoam質土の混土である

P_4
1　茶褐色土　酸化している
2　暗褐色土　若干酸化している
3　暗褐色土　酸化が見られない
4　茶褐色土　シルト質土（茶色）塊を若干混入する　硬質

P_5
1　褐色土
2　暗褐色土
3　暗褐色土
4　暗褐色土
5　茶褐色土
6　暗褐色土
7　暗褐色土

1：5は酸化している
4～2は4～2にゆくほどローム分が多くなる
1～4は柱痕と思われる

Fig. 347　中世遺構外堀土橋部



E2・3号溝

1　暗灰褐色土　サラサラしたB軽石を含む
2　暗灰褐色土　B軽石を含む　1層より締まっている
3　暗褐色土　B軽石　F軽石含む　短期間に埋まったと考えられる　Loam塊も含む
4　黒褐色土　粘質味が強くLoam塊を多量に含む
5　暗灰褐色粘土層とLoam塊細粒の混土層
6　暗灰褐色土層とLoam塊細粒の混土層
7　暗灰褐色土層とLoam塊細粒の混土層
8　暗灰褐色土　粘土層とⅢ層の細粒が急に流れたようにまだら状に観察出来る
9　暗灰褐色粘土質層
10　黒色灰層
11　黒褐色粘質土層
12　暗褐色土　マンガン凝集層も存在
13　暗褐色土　マンガン凝集層も存在
14　暗褐色土　溝への流れ込み互層　Loam質土塊を含む
15　黒褐色土　B軽石、炭を多く含む　締まりやや弱い
16　暗褐色土　15層より明かるく粘性あり
17　褐色土　黄褐色Loam質土塊（径3～5㎜）を多量に含む　一柱埋没土　粘性あり
18　暗褐色土　黄褐色Loam質土塊を含まない（締まり弱い）

E1022号溝

1　暗褐色土　少量の軽石を含み酸化鉄凝集（痕跡）が認められる　砂質土
2　茶褐色土　Loam層　粘土
3　茶褐色土　Loam層　砂質塊を含む
4　暗褐色土　B軽石を少量含む　砂質土
5　暗褐色土　1層に似て軽石を含むがFcの確認は出来ない　磁質土
6　暗褐色土　5層に比べ軽石の量が少ない　砂質土
7　暗褐色土　軽石及びLoam塊を多く含む
8　茶褐色土　Loam層　粒土
9　暗褐色土　B軽石及びLoam塊を多く含む
9′　暗褐色土　9層に比べLoam塊が少ない
10　暗褐色土　B軽石を少し含み堅く締まった砂質粘土層
10′　暗褐色土　グライ化層が認められる　小豆大の軽石及びB軽石を含む
11　暗褐色土　微小粒　B軽石を都く含んだ砂質土
11′　暗褐色土　11層に類似するが軽石の量が少ない
12　黒褐色土　小量の微粒状B軽石を多く含み堅く締まる　砂質粘土層

E1021号溝

1　暗褐色土　少量の軽石を含み酸化鉄凝集　砂質土
2　暗褐色土　1層に類似するが1層に確認されたFeはない　砂質土
3　暗褐色土　C軽石とLoam塊が複雑に混在している　砂質土
4　暗褐色土　3層に類似するが、3層程Loam塊は多く存在せず、砂質土
4′　暗茶褐色土　Loam塊著じるしく存在している粘土層
5　暗褐色土　B軽石を多く含み堅く締まった層
6　暗褐色土　5層に類似するが酸化鉄粒砂量含有した層　堅く締まった砂質土
7　暗褐色土　B軽石及びC軽石の混在した層で確認が出来る砂質土
7′　暗褐色土　7層に類似するがLoam塊を多く含む
8　暗褐色土　B軽石　締まり良い
8′　暗褐色土　堅く締まった層
8″　暗褐色土
9　暗褐色土（一部灰褐色土を含む）　軽石の量は僅かになりる
10　暗茶褐色土　軽石及びFeを多く含む　同軽石は微小粒B軽石
10′　暗茶褐色土　10層に類似する
11　黒褐色土　少量の軽石を含み　堅く締まった層

Fig. 348　E区中世内堀・外堀

0　4 m

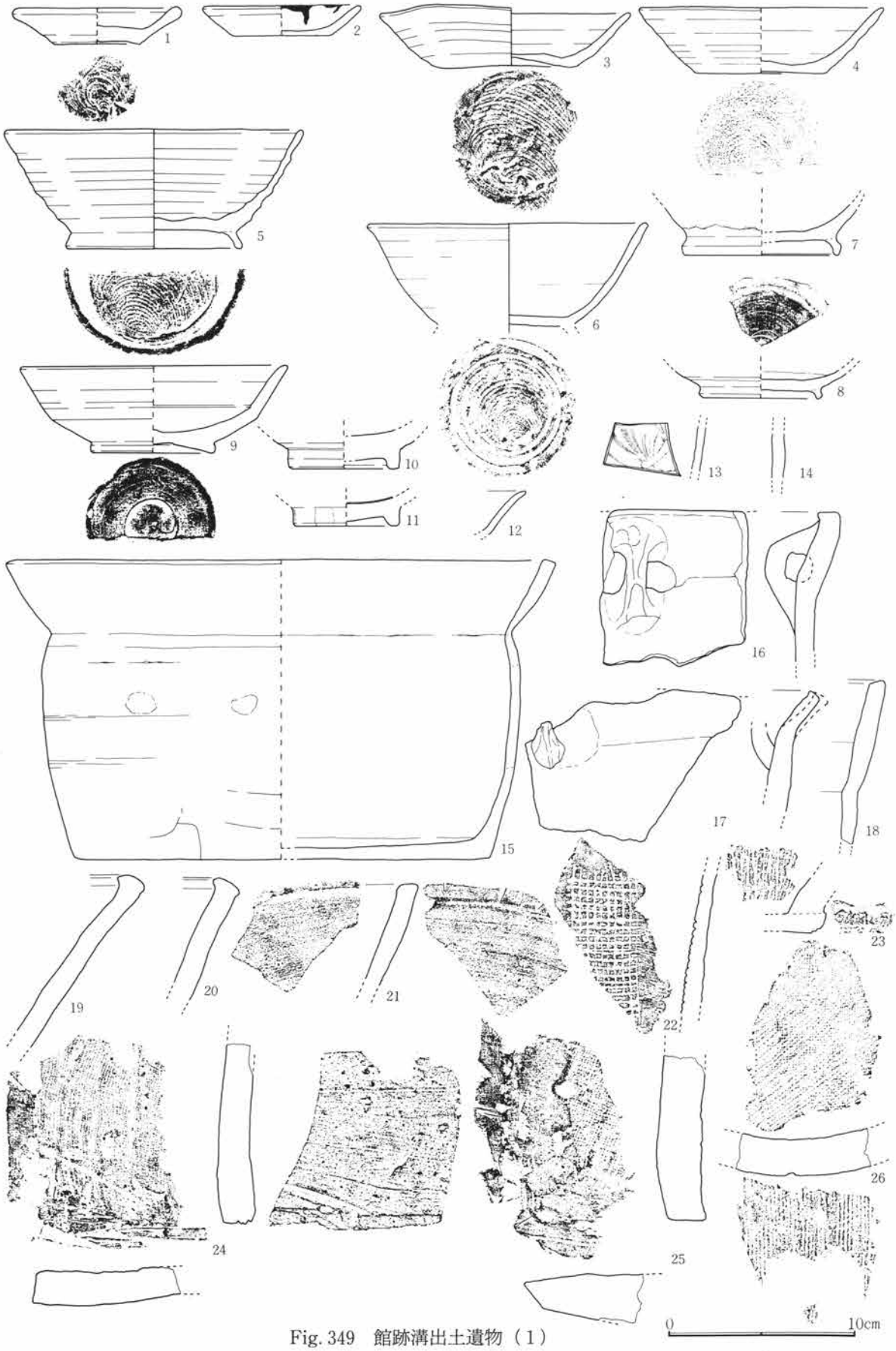


Fig. 349　館跡溝出土遺物（1）

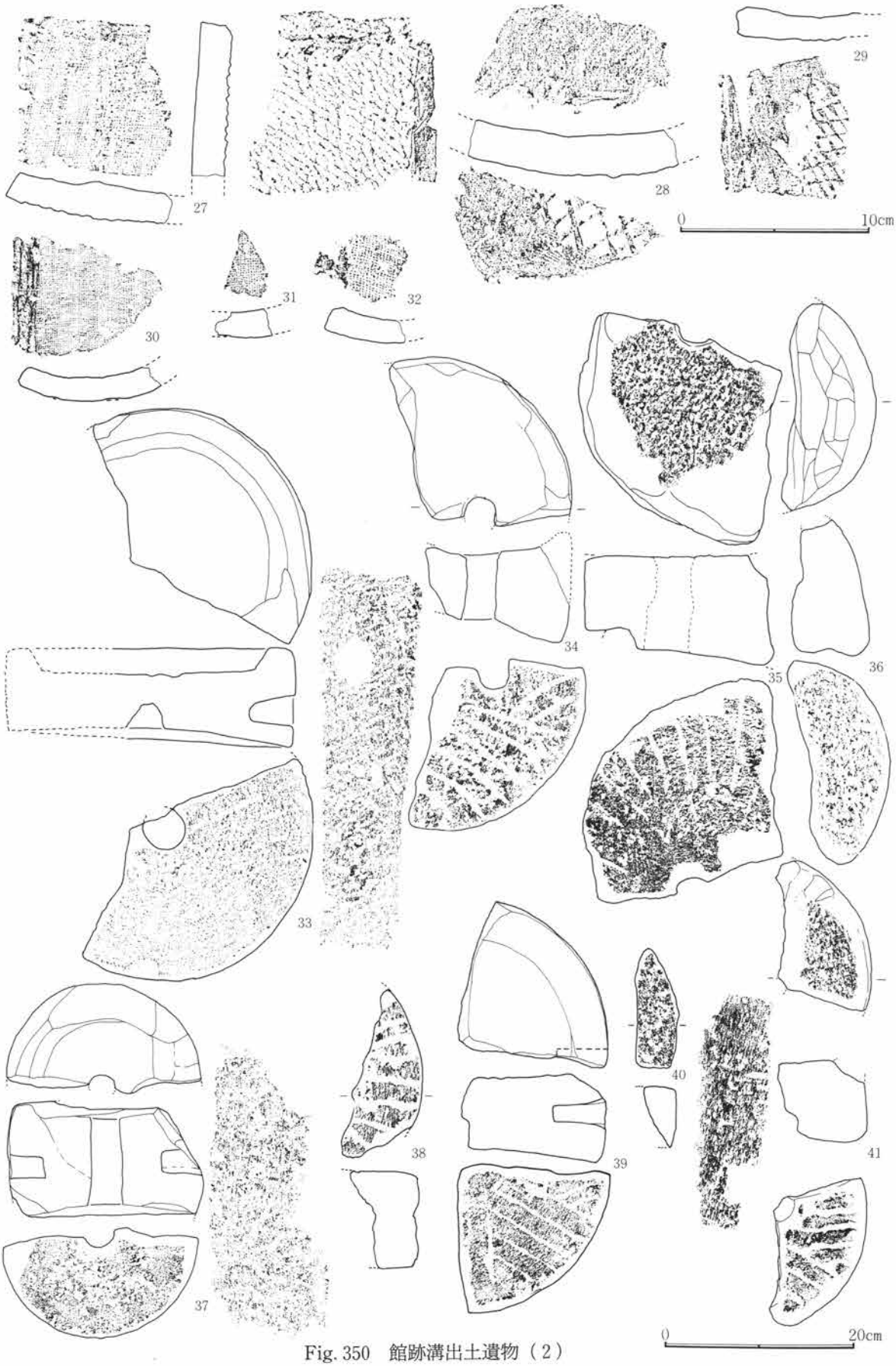


Fig. 350　館跡溝出土遺物（2）

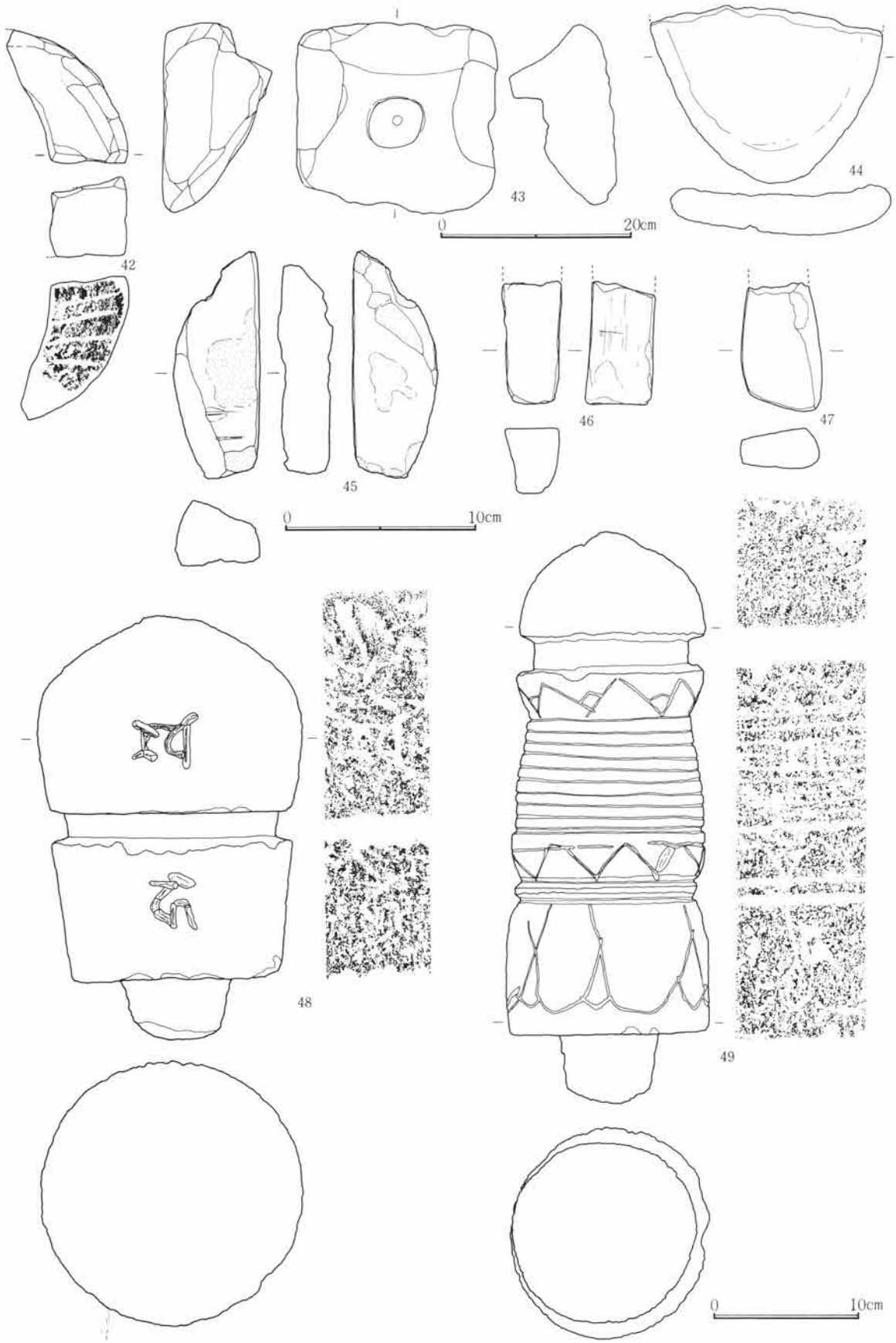


Fig. 351　館跡溝出土遺物（3）

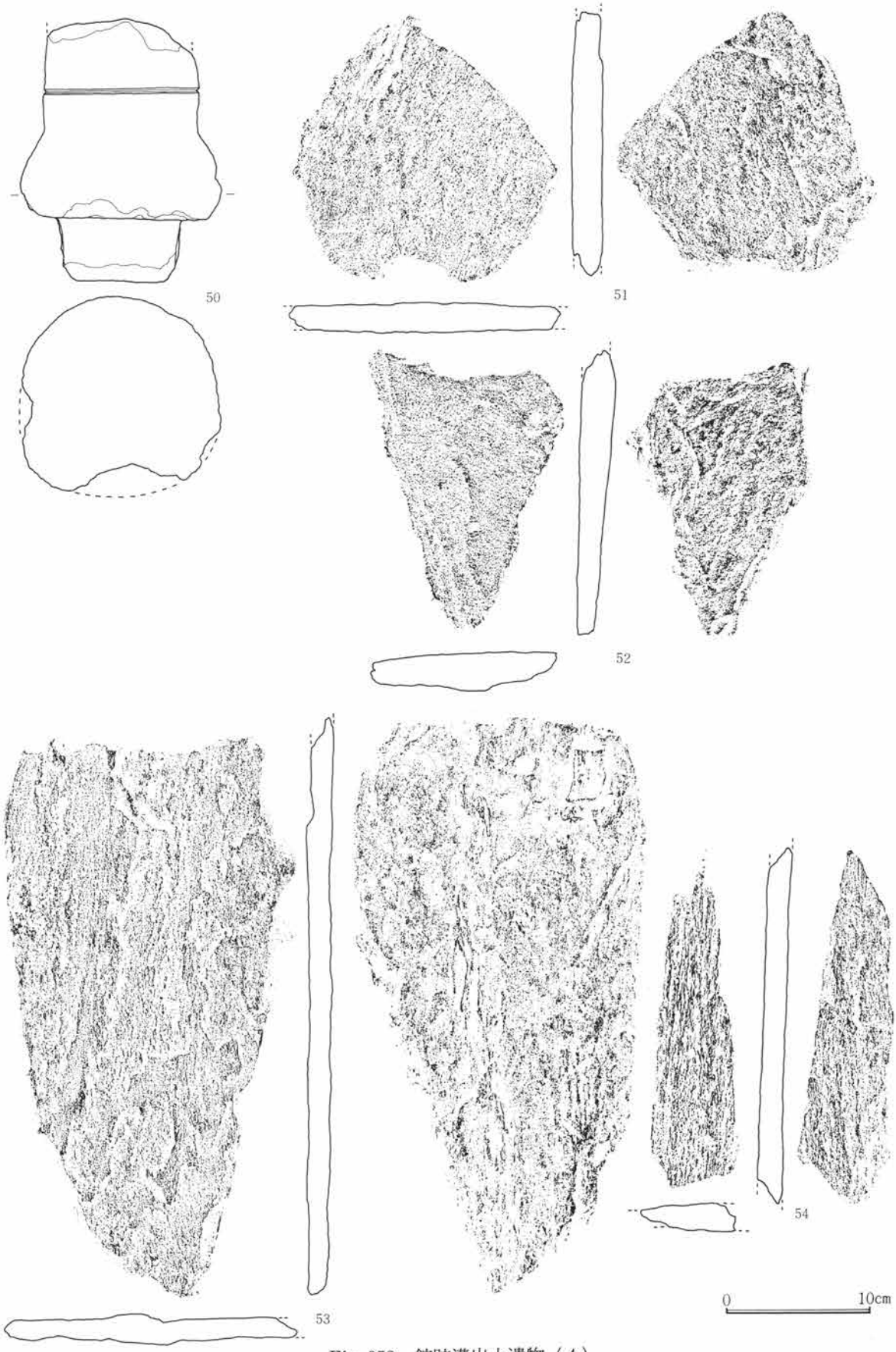


Fig. 352　館跡溝出土遺物（４）

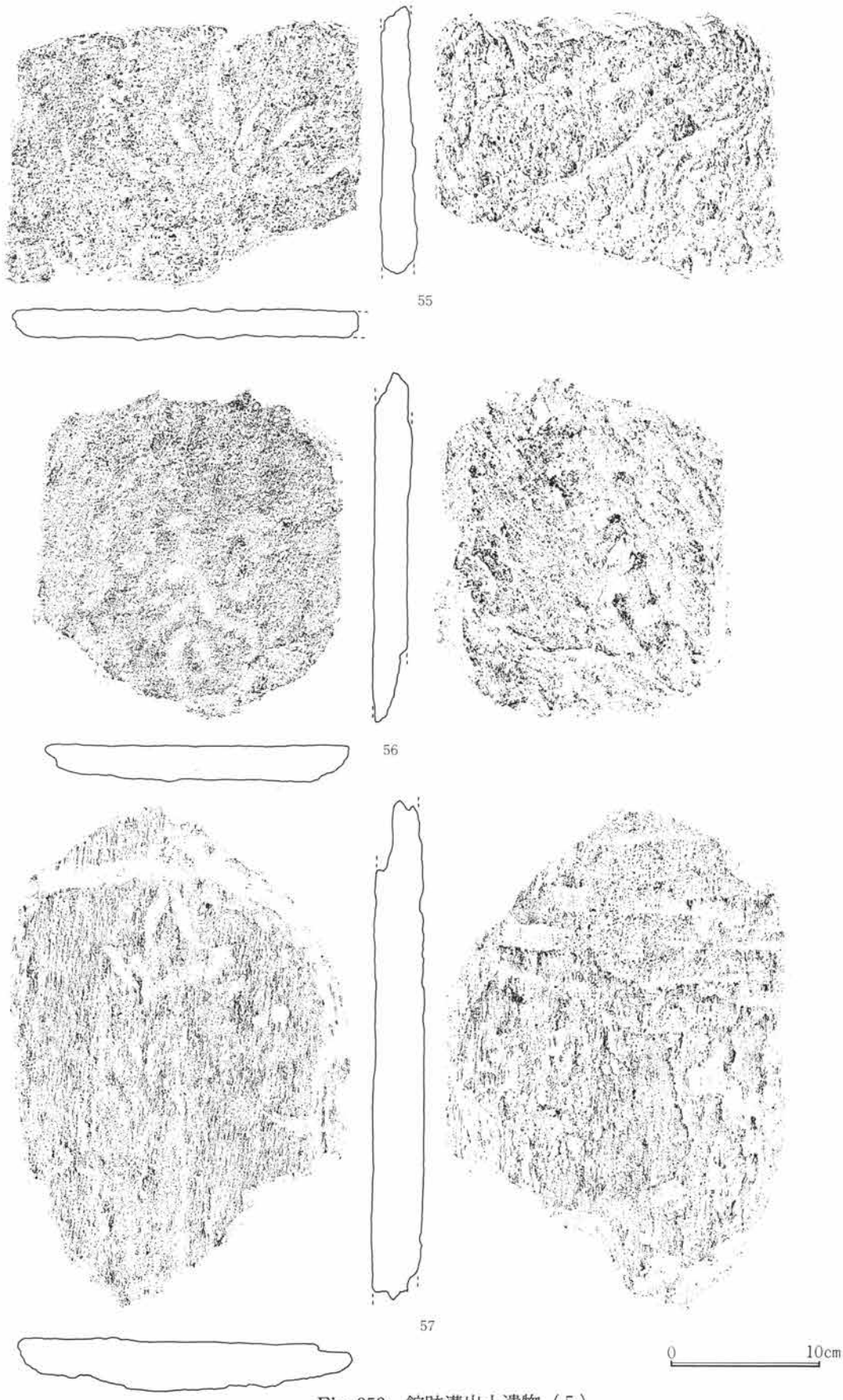


Fig. 353　館跡溝出土遺物（5）

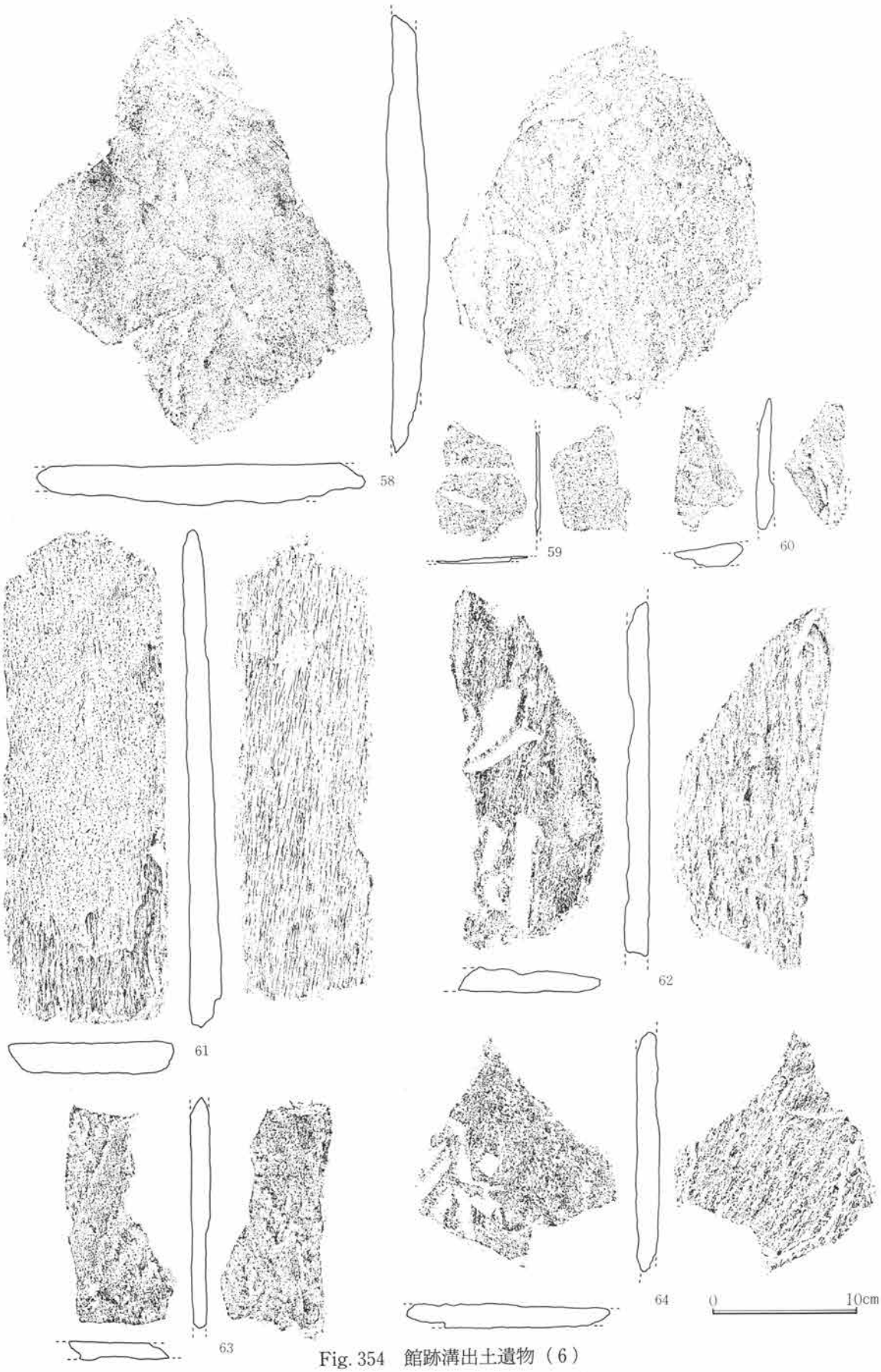


Fig. 354　館跡溝出土遺物（6）

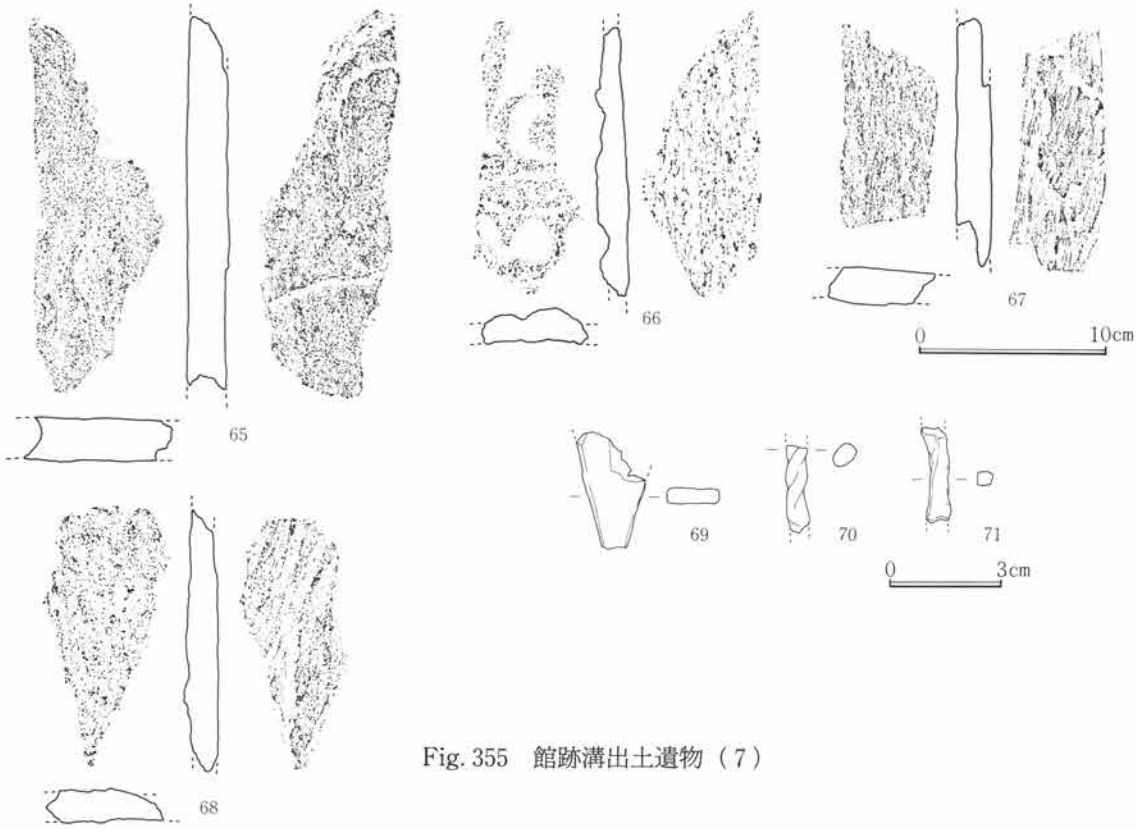


Fig. 355　館跡溝出土遺物（７）

館跡溝出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
349—１ 99—１	E23溝 埋土	土器 小杯	⅓	8.9×4.6 ×(1.9)	全体に肥厚。体部直線的に開き、口唇部丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②橙 ③やや密
349—２ 99—２	E24溝	土器 小杯	⅓	8.4×5.2× 1.6	底部器肉薄く、体部直線的に開く。内面及び外面口縁部横撫で、体部篦撫で。内面口唇部に油煙状付着物あり。	①二次被熱 ②褐灰 ③やや密
349—３ 99—３	E165溝 埋土	須恵器 杯	⅔	13.2×6.7 ×3.4	体部直線的に開き浅身。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
349—４ 99—４	E165溝 埋土	須恵器 杯	⅓	13.0×7.0 ×3.5	体部直線的に開く、轆轤整形。右回転糸切り。内外面燻し焼成気味で暗灰色を呈す。	①良好 ②灰白 ③やや密
349—５ 99—５	E３溝 埋土	須恵器 椀	½	15.7×9.2 ×6.2	底径大きく、腰部僅かに張り気味。体部直線的に立ち上がる。付高台、端部丸くハの字状に開く。轆轤整形。回転糸切り。内外面の轆轤目強い。	①良好 ②灰 ③やや密
349—６ 99—６	E３溝 埋土	須恵器 椀	高台欠損	14.7×— ×5.25	体部全体に弱い張りをもつ。口唇部丸く小さく外傾。付高台剝離。轆轤整形。右回転糸切り。内外面の轆轤目弱い。	①やや軟 ②褐灰 ③密
349—７ 99—７	E23溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部¼	—×(8.2) ×—	高台断面丸く、内湾して立つ。底部回転篦削り。	①良好 ②灰白 ③密
349—８ 99—８	E23溝 埋土	灰釉陶器 椀	底部⅓	—×(6.2) ×—	高台低く断面矩形。内外面施釉。	①良好 ②灰 ③やや密
349—９ 99—９	E24溝 埋土	緑釉陶器 椀	⅓	14.0×6.5 ×4.5	体部中位でくの字状に折れ、内面に段をなす稜椀。高台は削り出しにより蛇の目高台。内外面全面施釉、釉調は淡緑色で薄い施釉。畿内産。	①やや軟 ②淡黄～灰 ③密
349—10 99—10	E165溝 埋土	陶器 椀	底部⅓	—×5.8× (2.1)	削り出し高台。断面矩形。内外面褐釉。底部著しく肥厚。	①堅緻 ②灰白 ③緻密
349—11 99—11	E19溝	陶器 椀	底部⅓	—×5.7× (1.6)	高台断面丸い。内外面褐色釉施釉。底部回転篦調整。	①堅緻 ②灰 ③緻密
349—12 99—12	E24溝 埋土	白磁 皿	小片	厚0.3	器肉薄く体部緩く外反気味に開く。口唇部無釉。	①良好 ②灰白 ③緻密
349—13 99—13	E24溝 埋土	青磁 椀	小片	厚0.4	内面に片彫花文を施す。釉調はオリーブ灰色。	①良好 ②灰 ③緻密
349—14 99—14	E３溝 埋土	青磁 椀	小片	厚0.6～0.7	体部外面は鎬連弁文。釉は内外面厚く、オリーブ灰色の釉調を呈す。	①堅緻 ②灰白 ③緻密

館跡溝出土遺物観察表（2）

Fig.No PL.No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
349—15 99—15	E24溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	¼	29.0×22.0 ×15.7	平底。体部緩やかな膨らみをもって立ち上がる。口縁部やや肥厚し弱くくの字状に外傾して開く。口唇部断面矩形。口縁部内面横撫で。外面体部指頭痕後横撫で。内外面燻し焼成痕。	①良好 ②暗灰 ③やや密
349—16 99—16	E23溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	口縁部 小片	厚0.9～1.2	体部直線的。口縁部緩く内湾気味に僅かに開く。内面及び外面口縁部横撫で。外面体部指頭痕後不定方向撫で。	①良好 ②暗灰 ③やや密白色細粒混
349—17 99—17	E3溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	口縁部 小片	厚1.2	体部直立気味に立ち、口縁部はくの字状に折れて外傾して開く。内面耳部残欠あり。内面と外面口縁部横撫で。	①良好 ②灰 ③やや粗砂質
349—18 99—18	E24溝 埋土	軟質陶器 内耳鍋	口縁部 小片	厚0.6～0.9	体部より僅かに外傾して内湾気味に開く。口唇部断面矩形。上端面内斜。内外面横撫で。内面煤状付着物。	①良好 ②灰 ③やや粗
349—19 99—19	E3号溝 埋土	軟質陶器 鉢	口縁部 小片	厚1.1	体部直線的に開く。口唇部断面矩形。内面及び外面口縁部横撫で。体部指頭痕後不定方向撫で。	①良好 ②褐灰 ③やや密砂質
349—20 99—20	E3溝 埋土	軟質陶器 鉢	口縁部 小片	厚1.1	19と同一個体と考えられる。	
349—21 99—21	E165溝 埋土	軟質陶器 鉢	口縁部 小片	厚1.1	口唇部断面矩形。	①良好 ②灰 ③粗砂粒多混
349—22 99—22	E3溝 埋土	軟質陶器 擂鉢	体部小 片	厚1.0	内面に凹線格子のすり目あり、単位幅5.5・長さ10.5cm、外面指頭痕著しい。	①良好 ②灰褐 ③やや粗
349—23 99—23	E23溝 埋土	陶器 擂鉢	小片		内面深い櫛歯擂目。底部薄く、腰部肥厚。	①堅緻 ②黄橙 ③密縞状
349—24 99—24	E165溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.7	凹面細布目。凸面横箆撫で。側縁部箆調整。	①良好 ②灰 ③やや粗
349—25 99—25	E165溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.4	凹面布目。凸面横箆撫で。側縁部箆調整。凹面の縁部箆調整幅広い。	①酸化やや軟 ②淡橙 ③やや密
349—26 100—26	E19溝	瓦 平瓦	小片	厚1.9	凹面布目。凸面細縄目押し。砂粒多く付着。	①良好 ②灰 ③密縞状
350—27 100—27	E24溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目。模骨痕あり。凸面粗粒縄目叩き。	①良好 ②暗灰 ③やや密
350—28 100—28	E23溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目。凸面大画の斜格子文叩き。	①良好 ②灰 ③やや密狭雑物混
350—29 100—29	E3溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.5	凹面箆削り調整。凸面斜格子文押型。側縁部箆調整。	①酸化軟 ②灰橙 ③密
350—30 100—30	中世内掘 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.7	凹面布目。横骨痕あり。凸面撫で調整。側縁部箆調整。	①良好 ②灰 ③やや密縞状
350—31 100—31	E3溝 埋土	瓦 平瓦	細片	厚2.0	凹面布目。凸面撫で調整。	①良好 ②灰 ③やや粗白色粒混
350—32 100—32	E165溝 埋土	瓦 平瓦	小片	厚1.2	平瓦小片の側面を粗く欠き取る。凹面布目。凸面撫で。	①やや軟 ②淡橙 ③やや密
350—33 100—33	E3溝 埋土	石製品 石臼	上臼⅓	径30.0 高10.8	上縁高2.4cm、上・下幅4×2.5cm、側面に方形の挽き木打込み孔あり、裏面に臼目僅かに残るが摩耗著しい。	安山岩
350—34 100—34	E165溝 埋土	石製品 石臼	上臼¼	高11.4	上縁高1.8cm・幅4.0～2.5cm、裏面の臼目は切線主溝型。破損面は部分的に砥石転用と思われる摩滅痕あり。	安山岩
350—35 101—35	E3溝 埋土	石製品 石臼	上臼¼ 上縁欠	高(11.4)	上縁欠損。供給口径4cm、裏面の臼目は放射型。芯棒受孔径4cm。供給口径3.5cm。	安山岩
350—36 101—36	E165溝 埋土	石製品 石臼？	不明	高さ15.0	石臼の側面部分か。	石英閃緑岩？
350—37 101—37	E165溝 埋土	石製品 石臼	上臼½	径21.0 高12.0	茶臼の上臼。上縁高1.5cm・幅2～3cm、中央部供給孔径3.0cm側面対に方形挽き木打込孔あり。裏面は摩耗著しく臼目無し。	安山岩
350—38 101—38	E24溝 埋土	石製品 石臼	下臼小 片	高10.2	表面臼目は切線主溝型。摩耗著しく滑らか。	安山岩
350—39 101—39	E24溝 埋土	石製品 石臼	上臼小 片	高(10.5)	上縁欠損。側面に方形挽き木打込孔あり。裏面臼目は切線主溝型。摩耗著しい。	安山岩
350—40 102—40	E12溝 埋土	石製品 石臼	小片	12.0×4.0 ×6.0	石臼縁辺部。上下臼は不明。片上面は摩滅著しい。	粗粒安山岩
350—41 102—41	E165溝 埋土	石製品 石臼	上臼小 片	高(9.0)	上縁欠損。側面に方形挽き木打込孔あり。裏面の臼目は切線主溝型。供給口は表裏で一致せず段になる。	安山岩
351—42 102—42	E165溝 埋土	石製品 石臼	上臼小 片	高(8.4)	上縁欠損。裏面の臼目の切線主溝型。破損面は部分的に砥石転用と思われる摩滅痕あり。	安山岩

館跡溝出土遺物観察表（３）

Fig. No PL. No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
351—43 102—43	E165溝 埋土	五輪塔	火輪 下部⅔	20.0×20.0 ×10.0	側面部は丁寧な研磨仕上げ、上面に径5.5cm・深度３cmの空風輪受部を穿孔。	角閃石安山岩
351—44 102—44	E165溝 埋土	石製品 石皿	約½	長(18.0)幅・ 厚23.0×4.2	縄文時代の石皿か。僅かに湾曲。表面縁辺は僅かに高まりをなす。裏面は多孔石として転用か。	安山岩
351—45 102—45	E19溝 埋土	石製品 砥石		11.5×4.4×3.4 重188.2g	長方形。多面使用。硬質。	流紋岩
351—46 102—46	E165溝 埋土	石製品 砥石		6.3×3.4×3.3 重111g	長方形。４側面及び１片端面使用。硬質。	流紋岩
351—47 102—47	E19溝 埋土	石製品 砥石		長6.6　幅4.1 厚2.0重39.4g	楔形。多面使用。	角閃石安山岩
351—48 102—48	E165溝 埋土	五輪塔	空風輪 略完形	高28.8	空輪頂部を欠失する。空輪側面に(キャ)、風輪側面に(カ)の梵字を刻む。全体に丁寧な仕上げ。	粗粒安山岩
351—49 102—49	E165溝 埋土	宝篋印塔	相輪部 完形	高38.8	全体に丁寧な研磨仕上げ。宝珠の造り出しは、五輪塔空風輪に類似、宝珠下の蓮弁及び下部反花の蓮弁は共に省略化	粗粒安山岩
352—50 103—50	E165溝 埋土	宝篋印塔	相輪 下半部	高(18.0)	全体に丁寧な研磨仕上げ。反花の蓮弁は省略か？。下部の露盤への差し込み部の形状は円筒形ではなく方形を呈す。	角閃石安山岩
352—51 103—51	E24溝 埋土	板碑	上半部 破片か	(18.0)×(20.0) ×2.0	上半部（頂部）の破片と思われるが、二条線、種子は見られない。完形では50～60cm程の板碑か。	緑泥片岩
352—52 103—52 埋土	E24溝	板碑	破片	(20.0)×12.8 ×2.4	種子等は一切なく、厚さより１m前後の中型板碑の破片か割れ口に磨滅が見られ、埋没時以前に破片化したものか。	緑泥片岩
352—53 103—53	E24溝 埋土	板碑	下半部 破片	(40.0)×20.0 ×1.6	表面は剝離。紀年銘等は見られない。裏面の加工痕も顕著ではない。全体で長さ80～90cm程の板碑か。	緑泥片岩
352—54 103—54	E24溝 埋土	板碑	破片	(24.0)×(6.8) ×1.6	種子等は一切見られず、厚さより１m前後の中型板碑の破片と考えられる。	緑泥片岩
353—55 103—55	E24溝 埋土	板碑	中央部 破片	(18.0)×(23.2) ×2.4	上下部を欠失。種子・紀年銘は見られない。横巾・厚さより１m前後の中型板碑の破片か。	絹雲母片岩
353—56 104—56	E24溝 埋土	板碑	上半部 破片	(24.0)×20.0 ×2.4	頂部の一部と主尊下欠失。浅い丸彫りの「キリーク」（阿弥陀）種子を刻む。蓮座は不明。二条線なし。やや摩滅。	緑泥片岩
353—57 104—57	E３溝 埋土	板碑	中央部 破片	(32.0)×22.0 ×3.6	上方に浅い竹彫りの「キリーク」（阿弥陀）種子及び蓮座を残す。脇侍はなく一尊。磨滅が著しく、紀年銘は残らず。	緑泥片岩
354—58 104—58	E３溝 埋土	板碑	中央部 破片	(30.0)×(23.2) ×2.8	碑面は剝離。種子等は一切見られない。裏面に板状整形時のノミ痕を若干残すが、これも摩滅する。中型の板碑。	緑泥片岩
354—59 104—59	埋土	板碑	中央部 破片	(7.2)×(6.8) ×—	碑面の薄く剝離したもの。碑面に残る２本の線刻は、華瓶の花茎か。	緑泥片岩
354—60 104—60	E24溝 埋土	板碑	破片	(9.6)×(4.4) ×1.2	表裏共に剝離。部位さえ不明。	緑泥片岩
354—61 105—61	E24溝 埋土	板碑	完形	34.0×12.0 ×2.0	長さ34cmを計る小型板碑。中央やや上に「キリーク」（阿弥陀如来）種子を浅く刻む。碑面はやや摩滅。	緑泥片岩
354—62 105—62	E24溝 埋土	板碑	上半部 破片	(24.0)×(10.0) ×1.6	主尊の一部とその蓮座下に「サ」（観音）が残ることから、阿弥陀三尊種子。種子・蓮座は薬研彫り。碑面やや摩滅。	緑泥片岩
354—63 105—63	E24溝 埋土	板碑	破片	(16.0)×(7.2) ×1.2	碑面は剝離。裏面に製作時（板状整形時）のノミ痕が若干残る。	緑泥片岩
354—64 105—64	E24溝 埋土	板碑	上半部 破片	(16.0)×(14.0) ×1.6	主尊の「キリーク」（阿弥陀）を浅い薬研彫りで刻む。蓮座は不明。碑面はやや摩滅。推定全巾は22cm。	緑泥片岩
355—65 105—65	E３溝 埋土	板碑	破片	(20.0)×(8.0) ×2.4	種子、文字等は一切なく、部位さえも不明。	緑泥片岩
355—66 105—66	E３溝 埋土	板碑	上半部 破片	(14.0)×(6.0) ×1.6	阿弥陀三尊の脇侍である「サ」（勢至）又は「サク」（観音）種子及び蓮座の一部、脇侍一字が15cm程の大型板碑。	緑泥片岩
355—67 105—67	E３溝 埋土	板碑	破片	(13.2)×(5.2) ×2.0	種子、文字等は一切なく、部位さえも不明。	緑泥片岩
355—68 105—68	E24溝 埋土	板碑	破片	(13.2)×(6.0) ×1.6	種子等は一切見られず、碑面は摩滅が著しい。	緑泥片岩
355—69 105—69	E165溝 埋土	鉄製品 不明	両端欠 損	長(3.0)幅・ 厚(2.0)×0.4	鏃部三角式の基部か。	
355—70 105—70	E165溝 埋土	鉄製品 不明	両端欠 損	長(2.3)径 0.7×0.5	螺線状を呈し、錐状工具か。	
355—71 105—71	E165溝 埋土	鉄製品 不明	両端欠 損	長(2.5)幅・ 厚0.4×0.4	角釘か。	

6．鋳造遺構（Fig. 356～370　PL. 36～37・106～114）

鋳造跡関連の遺構は鳥羽遺跡調査区の南部、CからD区にかけて検出されている。遺構群の南・北・西側についてはほぼその分布範囲をとらえ得るが、東側は調査区域外に広がる様相がある。鋳造遺構群は浅間火山に起源をもつ軽石流に対応すると考えられる半固結灰色凝灰岩質層面でほとんどが検出されており、遺構の基底部がかろうじて遺存する状況である。遺構検出面から見た微視的な地形は鋳造遺構群の西側を区切るように南から北へ小さな埋没谷が入り込み、遺構群は台地状に形成された凝灰岩質層の西側縁面に位置する状況になる。鋳造にかかわる操業以降にかなりの削平を受けたものと思われ、本来の遺構の状況を捉えることはできない。検出された主な遺構は鋳造施設（鋳造土坑）・作業竪穴・鉱滓廃棄土坑・井戸跡・掘立柱建物跡・Pit 群などがある。出土遺物は鋳型・溶解炉壁・鉱滓・三又形土製品などの他、土器・磁器片・古銭などで、遺物の多くはD43号井戸跡に廃棄された状態で検出されている。なお出土遺物中にはかなりの溶解炉の焼壁片が認められるが溶解炉そのものの存場は確認できなかった。また、鋳造遺構群の規則的配置や工房跡の単位構造など判然としない部分が多い。しかし、出土遺物からは、梵鐘鋳型中子・鋺・鍋・蓮台・鍬・犂（？）などがあり多彩な鋳造品を製造していたようである。さらにやや距離があるがE区4号溝中より撞座鋳型片が発見され、当鋳造遺構との関連が注目される。

鋳造遺構群内およびその周辺には井戸跡・墓跡・溝など多くの諸遺構が存在している。墓跡についてはその性格上とりあえず関連性を考慮しないとしても、井戸・跡・溝跡が問題となろう。井戸跡に関しては、現状で認識できる範囲として、井戸跡からの鋳造関連遺物の出土を一つの指標として扱うこととする。これに従えば鋳造遺構の構成単位として位置付けが可能な井戸跡はD43号井戸である。D43号井戸は鋳造遺物の廃棄所としても使用されたらしく、遺構群中最も豊富な遺物出土量をもっている。溝跡は、埋土中より鉱滓など僅かな遺物を出土するにとどまり、また関連遺構との重複などから、工房跡区画などの積極的な機能は現在のところ見い出すことはできない。

1．遺　　構

鋳造遺構として確認できる遺構は梵鐘鋳造土坑のD1058号、作業竪穴と考えられるD1029号・1050号・1056号・1057号・1059号。廃棄土坑のD1021号・1022号・1033号・1057号・井戸跡のD43号・不明土坑の1054号が主なものである。また廃棄土坑の周辺にはおびただしい Pit 群が検出されている。しかし明確に柱筋を有する Pit 単位の抽出は困難である。掘立柱建物跡としてはかろうじて3棟がその可能性あるものとして捉えられる。なお3棟は重複しており3時期に渡るようである。

D1058号土坑

鋳造遺構群の北東部に位置し、36～38D11・12の範囲にある。土坑の南縁はD1005号溝に切られている。平面形状は東西3.2m、南北2.4mの不整楕円形の掘形をもつが、東辺には方形状の落ち込みが連続する。深さは一定せず15～35cmである。土坑底面に2ケ所の楕円形 Pit を連結する1条の溝が主眼となる施設であるが、管見する鋳造遺構の中では梵鐘鋳造に類似する様相が強く、同種の施設として考えている。土坑は凝灰岩質層を浅く掘り込むが、おそらく掘形基底部に近く上位部構造は不明である。埋土は炭化粒と基盤層の凝灰岩質層の粒状物が混る粘性、練りの強い黒褐色土である。底面には幅15cm・深さ15cmの1条の溝が南北方向に検出された。溝はほぼ水平を保ち、その南・北端には溝底面より深い掘形をもつ楕円形 Pit が各々連なっている。Pit は径70×15cm・深さ15～20cmを測る。溝および南・北端の Pit 内は多量の炭化粒を含む粘性黒褐

Fig. 356　鋳造関連遺構

色を埋土としている。南・北端の Pit 内には輝緑安山岩の角礫が見られたが、いずれも被熱による破損状態を示している。なお、溝が掘られる南北1.2m・東西1.0mの範囲は土坑掘形よりわずかな高まりとなっているがこの高まりは西に接して径2×1.5m・深さ約30cmの楕円形土坑により西半分が消失していると考えられる。楕円形土坑内には被熱による破損状態で人頭大の輝緑安山岩が出土している。出土遺物には、鋳型・鉱滓などは見られないが、東辺に続く方形状落ち込みから渡来銭3枚紹聖元宝・洪武通宝などが検出されている。

梵鐘鋳造土坑とされる遺構には、土坑底面に梵鐘鋳型を捉えるための定盤と呼ばれる基礎部分が存在するものと、定盤が残らない鋳造土坑には底面に2本ないし3本の溝が検出される例がある。これらの溝は定盤や鋳型の受け材を固定ないしは鋳型の上下に材を渡しこれを締結して鋳型のずれを防止する材の下端の痕跡とされる。当遺構は南北端に穿たれた一対の Pit と、これを結ぶ一条の溝から構成されるが、通常考えられている形状とは基本的に一致するものである。また、西側の楕円形土坑によって、対になる施設が消失してしまっている可能性もある。

D1054土坑

鋳造土坑D1058の南側に近接し、37～39D10・11の範囲にある。D1005号溝と重複するが、これより旧い時期の所産である。当遺構は形状の異なる二つの落ち込みからなり、検出面は凝灰岩質の堅牢な土質面である。北側は不整楕円形で、これを南から東へ巻くようなL字状の土坑である。両者はその形態から、切り合い関係にある。各々独立した遺構の可能性もあるが、埋土の観察では差は認められていない。ここでは同一の遺構として扱う。楕円形の部分は、南北2.6m・東西2.5mを測る。壁線は整わず、僅かな凹凸が見られる。深さ10cmで、底面はほぼ平坦をなすが、細かな凹凸がある。埋土は総じて粘性の強い淡茶褐色土で構成されるが、部分的に多量の炭化粒・焼土粒が含まれる。しかし、壁面や底面には、被熱などの痕跡は認められない。L字状の土坑は、楕円形土坑との境界部分が僅かに高まりをなすが、深さは10cmで同様である。東西は4.9m・南北は2.3mを測るが、東側の北端はD1005号溝により消失している。

D1057号土坑

D区南東部に位置し、40D3・4の範囲にある。当跡は、D区あるいはE区から続く平安期と考えられるD405号溝中に検出されている。D405号溝はD区南側ではその掘形が浅くなり、とくに両側の立ち上がりは不明確で両縁は緩い窪みとなる。D1057号土坑はこの西縁に検出されている。形状は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、南北長1.2m・東西長0.89mである。深さは、D405号溝との切り合いで、僅かに輪郭を認め得たにすぎない。出土遺物は、底面に張り付くように鋳造鋳型・鉱滓・溶解炉壁の細片が検出されている。

D1055号土坑

D区の南東隅部に位置し、35D5の範囲にある。南端は地形の変換部のためか途々に壁線が不明確となり全体の形を失っている。形状は南北方向に長軸をもつ楕円形と考えられ、東西長56cm・南北は約80cmの範囲まで確認した。深さ約10cmを測り、南北軸方位はおよそN－0°－Eを示す。埋土は浅間山B軽石粒を含む粘性土で埋まり、埋土中より細片化した土器片のほか、鉱滓・溶解炉壁が検出されている。

D1059号土坑

D区の南東部に位置し、35・36D9・10の範囲にある。一部調査区の東隅にかかり全体は検出されていな

い。また北東部はD1050号溝と重複し、これより旧い時期の所産である。形状は南北方向に長軸をもつ細方形を呈すると考えられる。南北3.5mの範囲まで確認し、東西長は0.8mである。深さは約15cmを測り、南北軸方位はN－35°－Wを示す。埋土は浅間山降下B軽石粒を混える粘性の暗褐色土で埋まる。出土遺物は角釘と考えられる鉄製品小片のほか、鉱滓・溶解炉壁片が検出されている。

D1022号土坑

D1035号土坑の北に近接して位置し、44D３の範囲にある。周辺にはPit群が点在する。形状は長軸方位を東西にもつ隅丸方形を呈する。長軸東西方位はN－60°－Eを示す。東西長90cm・南北長70cm・深さ18cmを測り、断面形はすり鉢状になる。埋土は浅間山降下B軽石粒と考えられる砂質土に粘土の黄色土塊が多く混入する。出土遺物は埋土中より少量の鉱滓とともに溶解炉壁が検出されている。壁面・底面などには被熱の痕跡はない。

D1033号土坑

D区の南東部、D1035号土坑の南に位置し、43D２の範囲にある。点在する小Pit群中にある。形状はほぼ円形を呈し、径80cm・深さ約10cmを測る。埋土は浅間山降下B軽石粒を主にし、出土遺物には数点の細片鉱滓が検出されている。壁面・底面には被熱などの痕跡は認められていない。

D1029号土坑

D区の南東部に位置し、43～45D４・５の範囲にある。形状は東西に長軸をもつ細方形を呈し、東西長約3.3m・南北長1.3m・深さ20～30cmを測り、底面はかなり凹凸が著しい。長軸方位はN－73°－Eを示す。土坑内には数個のPitが検出されているが当跡に併うかは不明である。当跡の南側には小Pit群が多数見られることから、これら一連のPit群と同じものの可能性がある。埋土は土坑上面中央部で浅間山降下B軽石が浅いすり鉢状に堆積し、下位はB軽石粒の混った粘性黄色土塊で埋まる。出土遺物は小量の細片鉱滓が検出されたのみである。壁面・底面とも被熱などの痕跡は認められなかった。

D1050号土坑

D区の南東部に位置し、41～43D７～９の範囲にある。形状は南北に長軸をもつほご方形を呈する。南北長3.5m・東西長2.9m・深さ35cmを測り、南北の長軸方位はN－５°－Wを示す。掘形は壁線及び底面とも堅牢である。土坑内にはPitなどの施設はなんら認められなかった。埋土は全体に浅間山降下のB軽石粒を総体的に含み、中位の第３層中には細片化し、比重の軽い鉱滓が多量に混在している。その他、当跡からは溶解炉壁や羽口部分と考えられる破片も多く、いずれもが小破片の状態で検出されている。なお、埋土中には焼土粒・炭化粒などの混入は少ない。

D1035号土坑

D区の南東部に位置し、44・45D２・３の範囲にある。鋳造関連の遺構群では比較的南側に検出されている。形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈するが、南北長1.02m・東西80cmの小規模な土坑である。検出面からの掘形は浅く、深さ13cmを測る。長軸方位はN－29°－Wを示す。埋土は浅間山降下B軽石粒を主体にする黒褐色土で埋まるが、土坑の平面形状確認の際には表面に細片化した鉱滓が認められていた。この鉱滓は土

坑中央部に集中した状態にあり、底面に一括して塊状の状況を示す。土坑壁・底面には被熱などの痕跡はなく、埋土中にも焼土・炭化物などは存在していない。このような状況から、当跡は鋳造に直接関わる施設とは考えられず、鋳造作業に伴って排出された鉱滓を投棄するための拾て場的性格の遺構であろう。

Ｄ1036号土坑

Ｄ区の南部に位置し、50～52Ｄ６・７の範囲にある。鋳造跡関連の遺構群では最も西側に検出されている。

形状は東西に長軸をもつ方形を呈するが南西隅部でＤ1037号土坑と切り合い、これより新しい時期の所産である。東西長4.1m・南北長3.1m・深さ40cmを測る。壁面・底面は凝灰岩質層を基盤にし、掘形は堅牢であるが、底面はやや凹凸が目立つ。南北軸方位はＮ－77°－Ｅを示す。埋土は浅間山降下Ｂ軽石粒を主体にするが、粘性のある黄褐色土が塊状で多く見られ、人為的に埋め戻しされた可能性が強い。壁面や底面には被熱を受けた痕跡もなく、埋土中には焼土粒・炭化粒などの混入物は極めて少ない。出土遺物には細片化した土師器片などのほか、これも細粒の鉱滓が僅かに検出されたにすぎない。当跡の性格などについては不明である。

Ｄ1037号土坑

Ｄ1036号土坑と重複し、これより旧い所産である。重複のため全体の形状・規模は不明であるが、形状は方形を呈すると考えられ、南北長２m・東西長は約１mの範囲まで確認された。深さは約30cmを測り、底面は小さな凹凸が著しい。埋土は粘性の暗褐色土を主に塊状の黄褐色粘土が多く混存している。これは前述Ｄ1036号土坑と共通しており、やはり人為的な埋め戻しがあったものと考えたい。出土遺物は少量であるが、埋土中より鋳造鋳型細片のほか溶解炉壁・鉱滓・被熱した石英閃緑岩などがある。

Ｄ1021号土坑

Ｄ1036号・Ｄ1037号土坑の南に位置し、50Ｄ４の範囲にある。形状は小型の円形土坑で、径0.8×1.0m・深さ20cmを測る。埋土は上位に浅間山Ｂ軽石粒を、下位に粘性暗褐色土をもつ、出土遺物には数点の小粒鉱滓が見られた。壁面及び底面には被熱などの痕跡は見られない。

鋳造関連 Pit 群

Ｄ区南東部を中心に検出された鋳造跡及びその関連遺構の周辺には多数の Pit 群が検出されている。とくに顕著な集中は41～46Ｄ０～４の範囲に見られる。この地点は基盤層が凝灰岩質層となっており、Pit はその掘形を明瞭に留める。掘形の形状は円形と方形の両者が認められ、量的には後者の形状が大半を占める。これら Pit 群からの出土遺物はほとんどなく、鋳造跡との直接的な関係を示してはいない。しかし、Pit 群内には鋳造に関わる遺物を廃棄した土坑などがあり、位置的には鋳造作業においてこの Pit 群が何らかの機能をもっていたと考えられる。

Pit 群から建物跡および柵列などの抽出を試みたが、かろうじて２～３棟の建物跡の可能性を指摘できるにすぎない。これらの建物跡は小規模で、比較的大型のものでも２×３間ないしは２×４間の建物が想定される。また想定可能な建物は各々重複する位置関係にあり、単体で存在していたと考えられる。現状で知れる建物跡が作業場的な性格のものとすれば、鋳造の事業自体はそれほどの規模をもっていなかったことになろうか。

１号建物跡

想定される建物では最も大型な施設である。41～43D １～３の範囲にある。東西棟建物で南・北辺約5.2m・東西辺約３mを測る。柱間は不揃いで、柱筋は四隅と東・南・北辺に穿たれる数個の Pit により主柱が構成されているようである。主軸方位はN－73°－Eを示す。西辺は P_1 と P_2 からなり１間柱間である。東辺は P_4・P_5・P_6 の２間柱間で P_4・P_5 間は1.65m、P_5・P_6 は1.2m。南辺は P_2・P_3・P_4 で、P_2・P_3 間は2.85m、P_3・P_4 間は2.2mを測る。各柱間には小径な Pit が検出されているが間隔は不等一であり補助柱穴となるかは不明である。北辺は P_1・P_7・P_6 で P_1・P_7 は約２m、P_7・P_6 は3.2mである。北辺 P_7 と P_6 間でも柱筋に乗る小径 Pit がある。

２号建物跡

１間柱間の小規模な掘立柱建物跡である。42～44D ２・３の範囲にあり、南東部は１号建物跡と重なる。東西棟建物で南・北辺長2.8m、東・西辺長２mを測る。主軸方位はほぼN－90°－Eを示す。柱穴の掘形形状は南東隅の P_3 の円形を除き他は方形である。当跡の中央部にはD39号井戸跡が位置するが、鋳造跡に関連する遺物などは検出されず鋳造跡とは時期的に隔たりがあろう。

３号建物跡

柱間は不揃いでおよそ２間×３間の建物跡である。41～43D ３～５の範囲にあり、南部は１号・２号建物跡と重なる。東西棟建物で、南北辺長4.2m、東・西辺長３mを測る。主軸方位はN－112°－Eを示す。柱穴の掘形は円形を主体とする。南辺の柱は３間と考えられるが、柱穴の１つは２号建物とのものと共有する形となる。北辺の柱間は３間分の柱穴が検出されていない。また、東・西辺では柱間の間隔が揃っていない。

鋳造跡付近で検出された３棟の掘立柱建物跡はいずれも柱穴の構成が不明瞭であり、柱筋が通るだけの理由でとり上げたものである。建物跡としての認定には僅かな可能性があるに留めざるを得ない。

２．鋳造関連出土遺物

鋳造跡に関連する出土遺物は鋳型、鋳造炉壁材及び羽口断片・鉱滓・鉄釘・銅銭・鋳造用具などである。これら遺物の多くはD43号井戸跡から検出されている。鋳造作業の停止に伴ないD43号井戸跡に一括廃棄されたものと考えられる。当区での鋳造に関わる遺構は鋳造土坑と考えられる。D1058号土坑を中心として、大小の土坑類や、建物跡から成っているが遺存状態は決して良好と言えるものではない。また遺構に残される遺物類は非常に貧弱な質・量となっている。しかし、D43号井戸に見られる多種多様な鋳造遺物から、当区で行われた鋳造作業はある程度の規模と内容をもっていたことが知られ、同時に、鋳造終了後における徹底した撤収作業がなされていたことが窺い知れる。

土器

鋳造に関する土器類はD1035号土坑・D1050号土坑・D1055号土坑より出土している。１はD1055号土坑出土の灰釉陶器椀の口縁部小片である。僅かに肥厚して小さく外屈する。体部上半まで弱い回転篦削り調整し、内外面とも施釉される。２は灰釉陶器の皿底部であろう。高台は低く弱い三ケ月を呈する。内外面に施釉される。見込部の摩耗が著しく滑らかである。１・２は大原２号窯式期に比定できよう。３はD1035号土坑出土の土師器甕である。底部・胴部とも強い球形を呈する。胴部は横位・斜位の篦削りが施され、内面は

横位の篦撫でがなされる。焼成は良好で橙色を呈するが部分的に二次被熱による黒ずみがある。胎土は比較的均一で細かい。形状・技法などから８世紀に属しようか。D43号井戸を除く鋳造関連からの出土土器は少数で、その出土状態が不明確な面もあるが、いずれも遺構との時期差が著しい。

鉄製品（Fig.361・PL.106）

鋳造関連の遺構より出土している鉄製品は角釘状製品２点である。４はD1035号土坑出土で断片である。長さは現状で3.4cm、断面は短形で0.7×0.5cmを測る。片端部はやや細まって緩く湾曲する。５はD1059号土坑出土で長さ3.1cm・断面短形で0.6×0.4cmである。片端が細まり角釘の先端部と考えられる。

銅銭

D1035号土坑から１点（６）、D1058号土坑から３点（７～９）が出土している。６は「紹聖元宝」で、径2.4cm、北宋、紹聖元年（1094）初鋳。７は「天聖元宝」で、径2.4cm、北宋、天聖元年（1023）初鋳。８は「洪武通宝」で、径2.2cm、明、洪武元年(1368)初鋳。９は「大観通宝」で、径2.3cm、北宋、大観元年(1107)初鋳。７～９は梵鐘鋳造土坑と考えられるD1058号土坑出土であり、東側に方形状に張り出す部分の底面より検出されている。

鋳型

鋳造跡に直接関わると考えられる遺構から検出された鋳型は、４点の小破片である。いずれも、鋳造の製品を知り得るものはない。10はD1050号土坑、11はD1054土坑・12・13はD1057号土坑から各々出土している。11は厚さ３cm、5.4×6.6cmの大きさである。緩い湾曲面をなす。湯（溶銅・溶鉄？）と直に接する面は微細粒子の薄い真土が塗られ、灰色調を呈する。真土面か内湾形状であることから外型になろうか。約３cmの型厚のうち、ほぼ中位で明瞭な剝離の痕跡が認められる。真土を塗られた最上面に続き、やや砂粒を混えるものの比較的細かい土粒からなる灰色・赤褐色層が形成され、砂粒・スサ入りの外層から構成されている。ここで一担、きれいに剝離する均一な面が表われ、細かい土粒の薄い赤褐色層ののち砂粒・スサ入り粘土となる。これらのことから、剝離面外側の部分が先に鋳型として使用された後、内側に粘土を貼り、同形の鋳型を作ったものと考えられる。鋳型製品は不明である。12は、厚さ３cm、3.4×6.0cmの大きさである。真土塗布面は緩い内湾面をなし、外型であろう。真土は暗褐色の色調をなし、赤褐色の細土、スサ・砂粒混入の粘土からなる。湯面には直線的な幅0.3cmの凹線が刻まれ、文様表現の一部と考えられる。鋳造製品は不明である。12は、厚さ1.6cm、3.2×4.6cmの大きさで、真土、細粒土とスサ入り粘土で構成される。真土面は緩い内湾面をなし、外型であろう。鋳造製品は不明である。13は、厚さ1.5cm、３×4.5cmの大きさで、灰色の真土・細粒土からなり、外面剝離面にはスサの痕跡が残る。真土面は内湾面をなし、外型であろう。鋳造製品は不明である。

羽口

14の羽口小片がD1050土坑より出土している。溶解炉の内面に接する先端部で紫赤色のアメ状に溶解する。内面はスサ入りの粘土で作られる。

レンガ状製品

15～17はいずれもＤ1050号土坑出土である。かなり高温で熱を受けたと考えられ淡橙色である。土質はやや粗目の砂質で縁辺部には指頭による成・整形痕が認められる。湾曲と直方の二種類がある。15は幅４cm、厚さ7.5cm。16は幅5.5cm、厚さ９cm。17は長方体で、幅11cm＋８、厚さ６cmを測る。湾曲する15・16に類似する製品はＤ43号井戸跡より多量に検出されている。

Ｄ43号井戸出土は鋳造関連遺物（Fig.362～368・PL.107～114）

鋳造関連遺物はＤ43号井戸よりそのほとんどが検出されている。多くの鋳型・レンガ状製品・羽口・不明土製品などである。出土状況から、一括投棄されたものと考えられる。

鋳型

図示可能な個体数は58点である。いずれも表面は真土を用い平滑に仕上げてある。これらのうち、ある程度形状が知られるものや、製品が推定されるものは17点である。18は最も完形度の高い鋳型である。長さ38cm、幅37cm、厚さ11.4cmを測る。表面は全体に真土を用い平滑に仕上げる。３方に平坦な縁辺部を形成し、１方が開方状態となっている。縁辺部から内側に向いやや深い曲面をなし、中心部縦列に２個の十字形の凹みをもつ。縁辺部は上下型の合せ面と考えられる。なお鋳造製品は明らかではないが、表面の真土部分のうち、網点で示した部分が鍬形状に灰色となる。19は一辺33cm、厚さ10cmの方形状基部に最大径23cmの円形製品である。幅２cmの縁をもち、５mm程度の段をなす。中心部には径５cmの穿孔がなされ、湯口になろうか。真土面は素文である。蓮台の可能性がある。20は基部の形状から円形製品であろう。厚さ９cmで、表面に真土を用いるが、縁辺にも痕跡が認められ、鋳型の再使用による真土の再塗布と考えられる。21は銅鋺の鋳型である。高台部は浅い凹状をなし、口縁部は緩く外反して開く。復元口径6.5cm、器高1.9cm、底径４cmになろうか。22・23・29・30・31・34・37・38・39・43・47・51・52は体部上位で外屈し、口縁部の開く鍋状の製品鋳型と考えられる。

レンガ状製品

鋳型とともに多量に検出された遺物である。前記したＤ1050号土坑出土のものと同種である。赤褐色あるいは淡橙色であり、比較的高温の熱を受けていると考えられる。いずれも湾曲体をなし、手捏ねによる成・整形痕が見られる。両端部の欠損するものがほとんどであるが、全体の形状としてはドーナツ状になると考えられる。また唯一端部が完結する89の存在から、本来は幾つかに湾曲体が分割された状態で、これらを組み合わせることによって使用されたものであろう。各個の厚さは約８cmで最大幅５～６cmとほぼ均一であるが、上下面幅に１～0.5cm程度の僅かな差があり、湾曲内側が内湾する。さらに各個体の内径には最大43cmから最小17cmの差が存在し、この間の内径も段階的に認められる。これらのことから、レンガ状製品は中空の円柱状に組み合わさる状態が想定される。レンガ状製品の使用形態は明らかではないが、梵鐘などの比較的大型品の鋳造に際して内外の鋳型をささえる為のものか、鋳型作成時の外側を囲ったものであろうか。

三足状土製品

いずれも手捏ね製品である。105は他と異なり品面の調整が丁寧になされる。上端面には大きく凹みをなす。また足端部は形骸化するものの獣足形態をもち、獣足鋳型の内型の可能性もある。径２cm、高さ４cmを測る。106・108は基部で足部が欠損している。107はほぼ完形であり、高さ３cm、足径1.2cmを測る。109は足部であ

る。高さ6㎝、足径1.7㎝、やや大型になろうか。鋳造道具の一種であろうか。

羽口

110・111・103は器肉が厚く羽口本体の先端部分と考えられる。著しく溶解が進んでいる。112・114は炉体と羽口の接合部となろうか。器肉は薄く、器表面は発胸小孔が著しい。

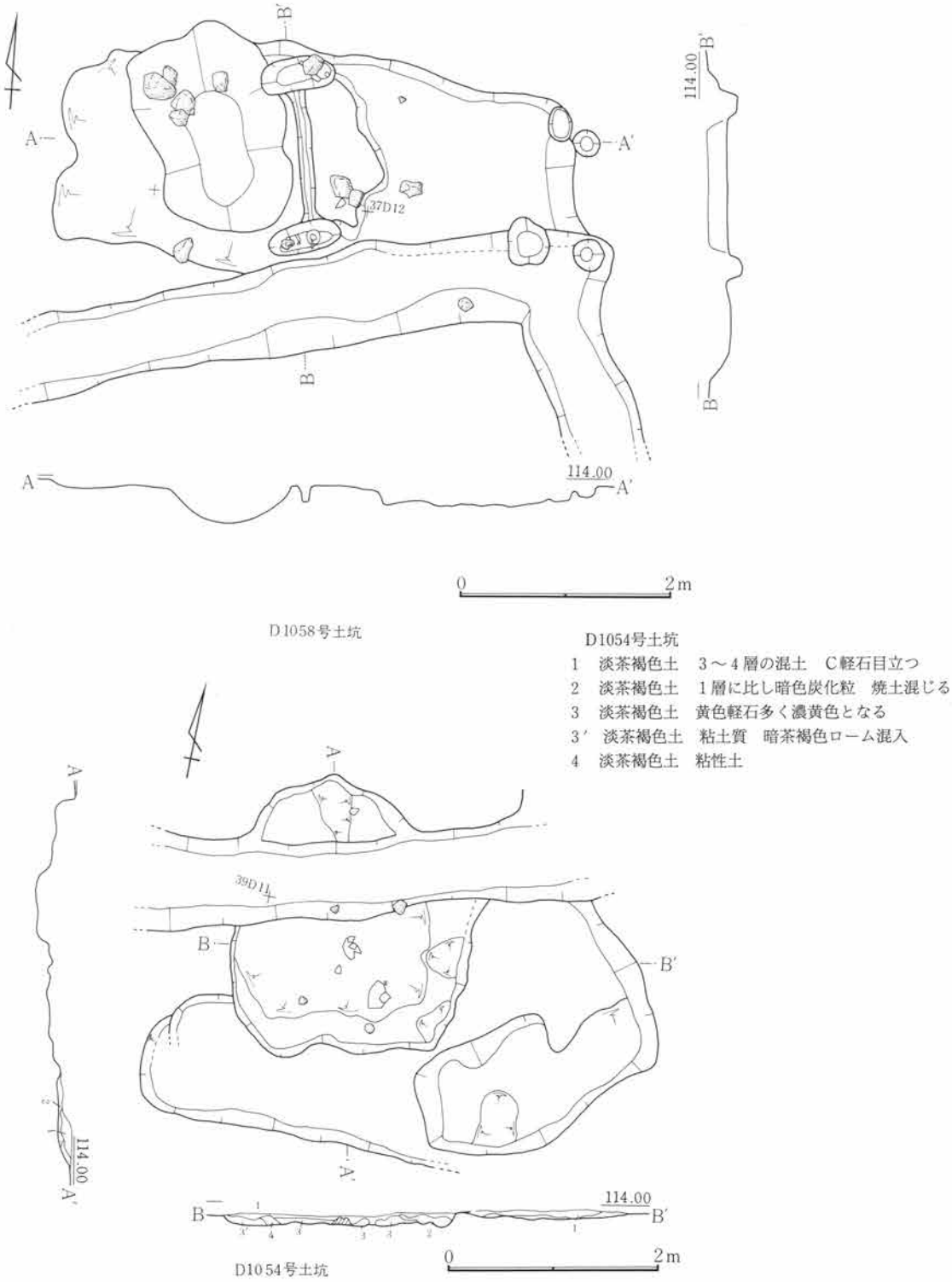
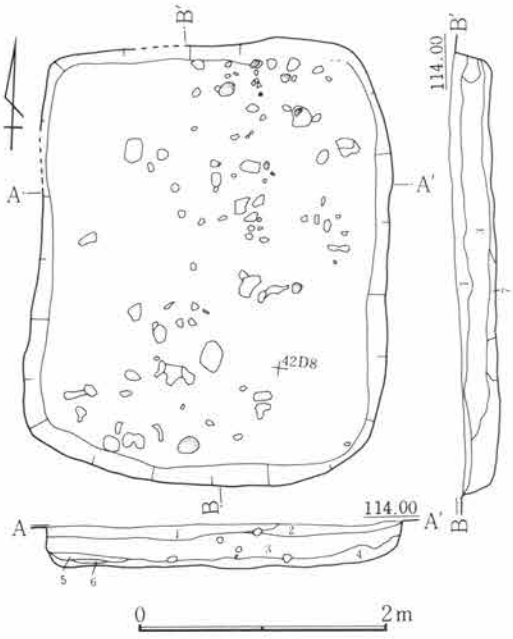


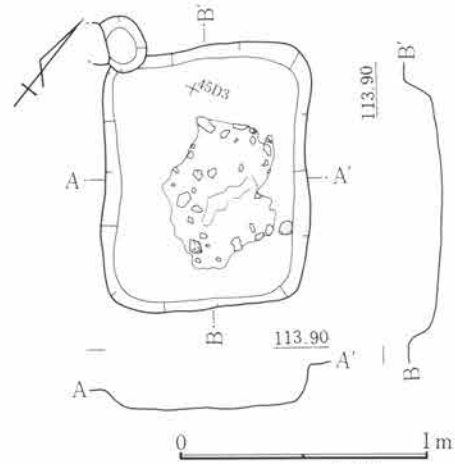
Fig. 357　D1058・1054号土坑



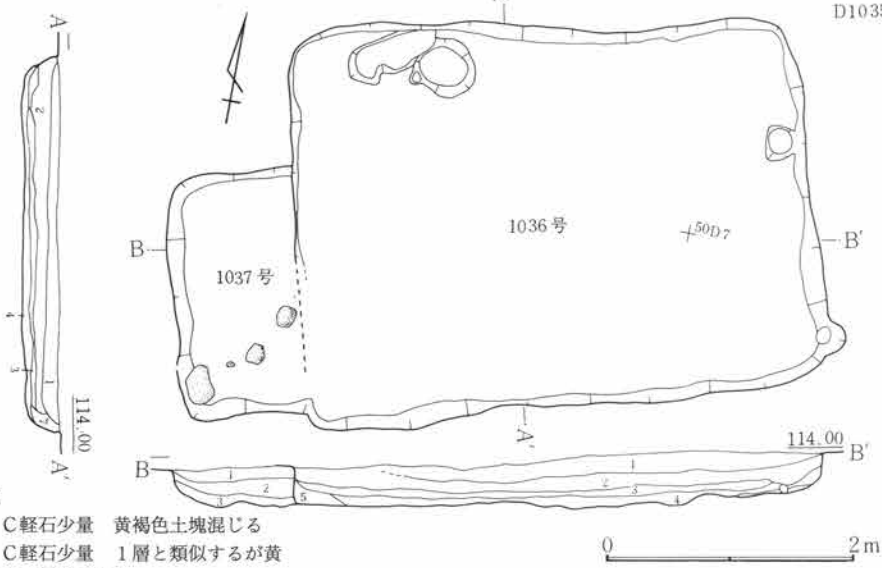
D1050号土坑

1　B軽石を多量に含む
2　B軽石・黄色土塊を多く含む
3　B軽石・黄色土塊・鉱滓を多量に含みパサパサしている
4　B軽石を含み粘質
5　褐色土　B軽石を含む
6　黄色土粒を多量に含む
7　黄色砂質土塊を多量に含む

D1050号土坑



D1035号土坑



D1037号土坑

1　暗褐色土　C軽石少量　黄褐色土塊混じる
2　暗褐色土　C軽石少量　1層と類似するが黄褐色土塊多量に混入する
3　暗灰色土　砂質　堅く締まる

D1036号土坑

1　暗褐色土　C軽石・黄白色土粒・塊を多く混じえる　B軽石も含む
2　暗灰褐色土　1層と類似するが灰色味が強い　B軽石も混じえる
3　暗灰褐色土　黄白色塊を混じえる　B軽石も混じえる
4　B軽石層　堅く締まる　黄白色土塊を若干混じえる
5　B軽石層
6　暗灰褐色土　B軽石混じる
7　暗褐色土　C軽石混じる
8　褐色土　白色粘質土塊混じる
9　褐色土　粘性あり
全体に黄白色塊が多量に混じる　堅く締まっており自然埋没より人為的に埋塡した可能性が強い

D1036・1037号土坑

Fig. 358　D1050・1035・1036・1037号土坑

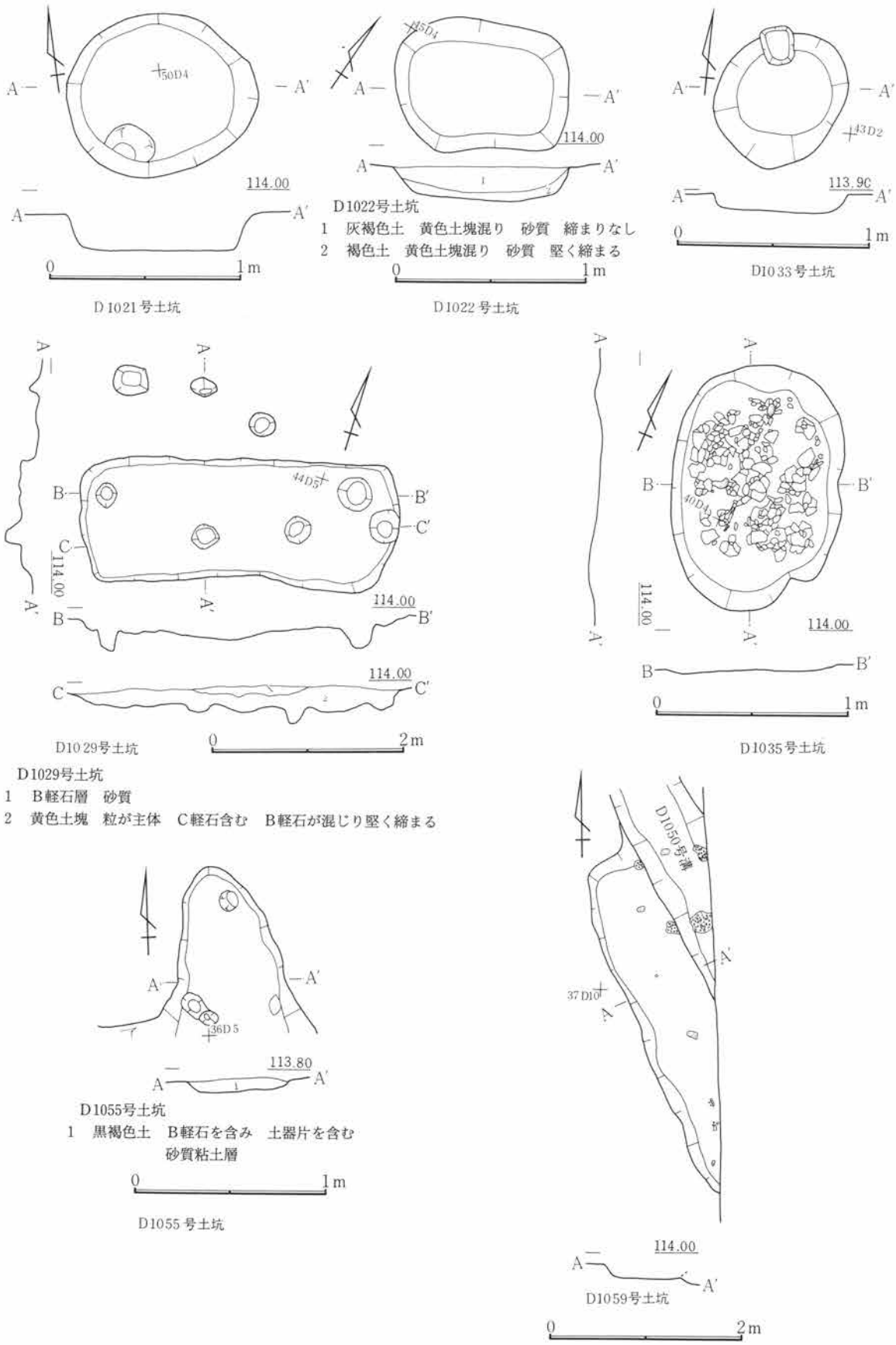
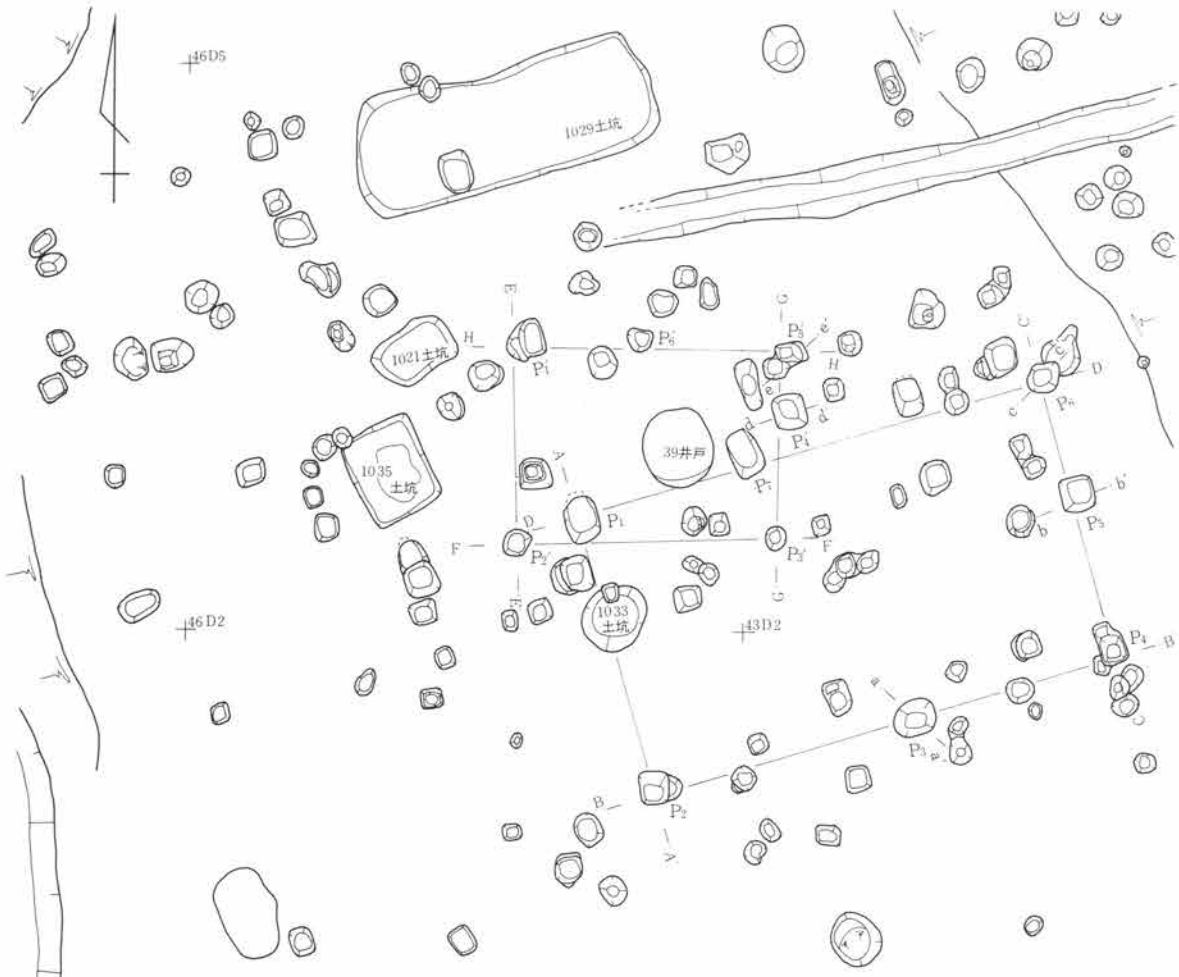


Fig. 359　D1021・1022・1029・1033・1055・1057・1059号土坑



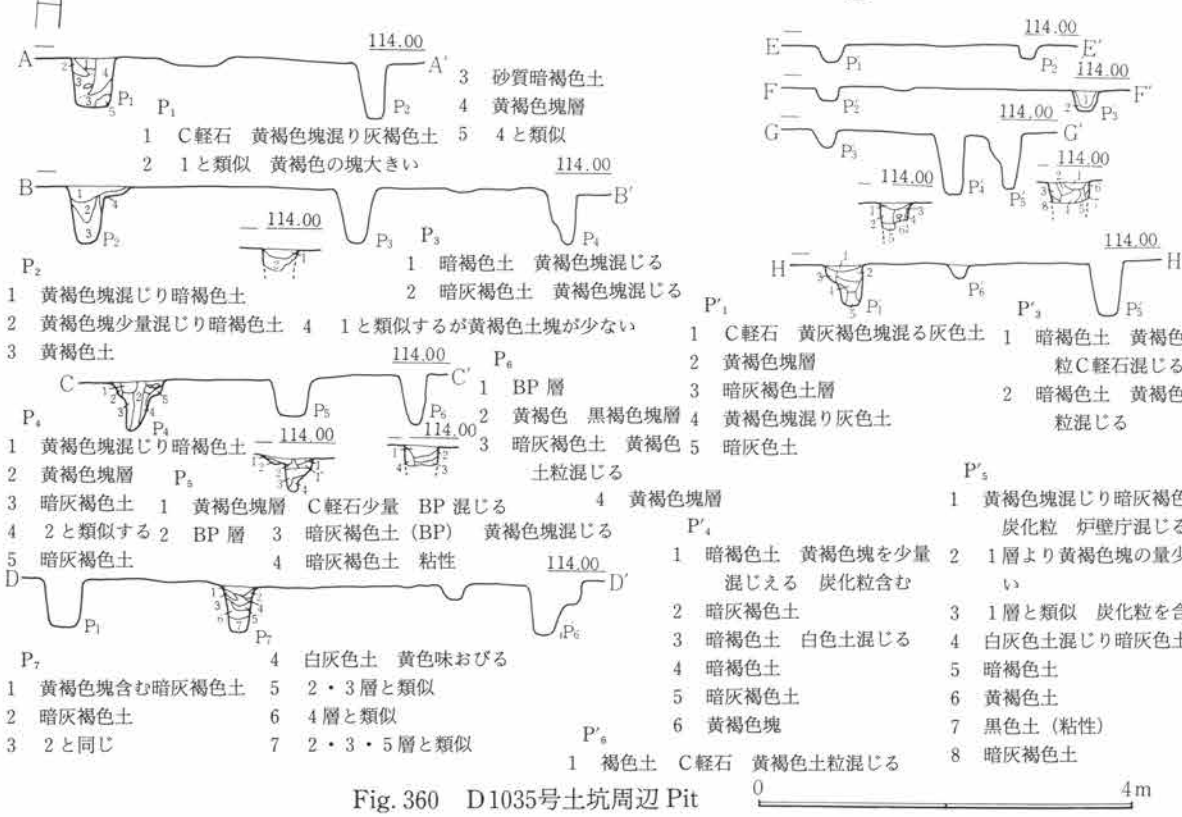


Fig. 360　D1035号土坑周辺 Pit

Fig. 361　鋳造関係土坑出土遺物

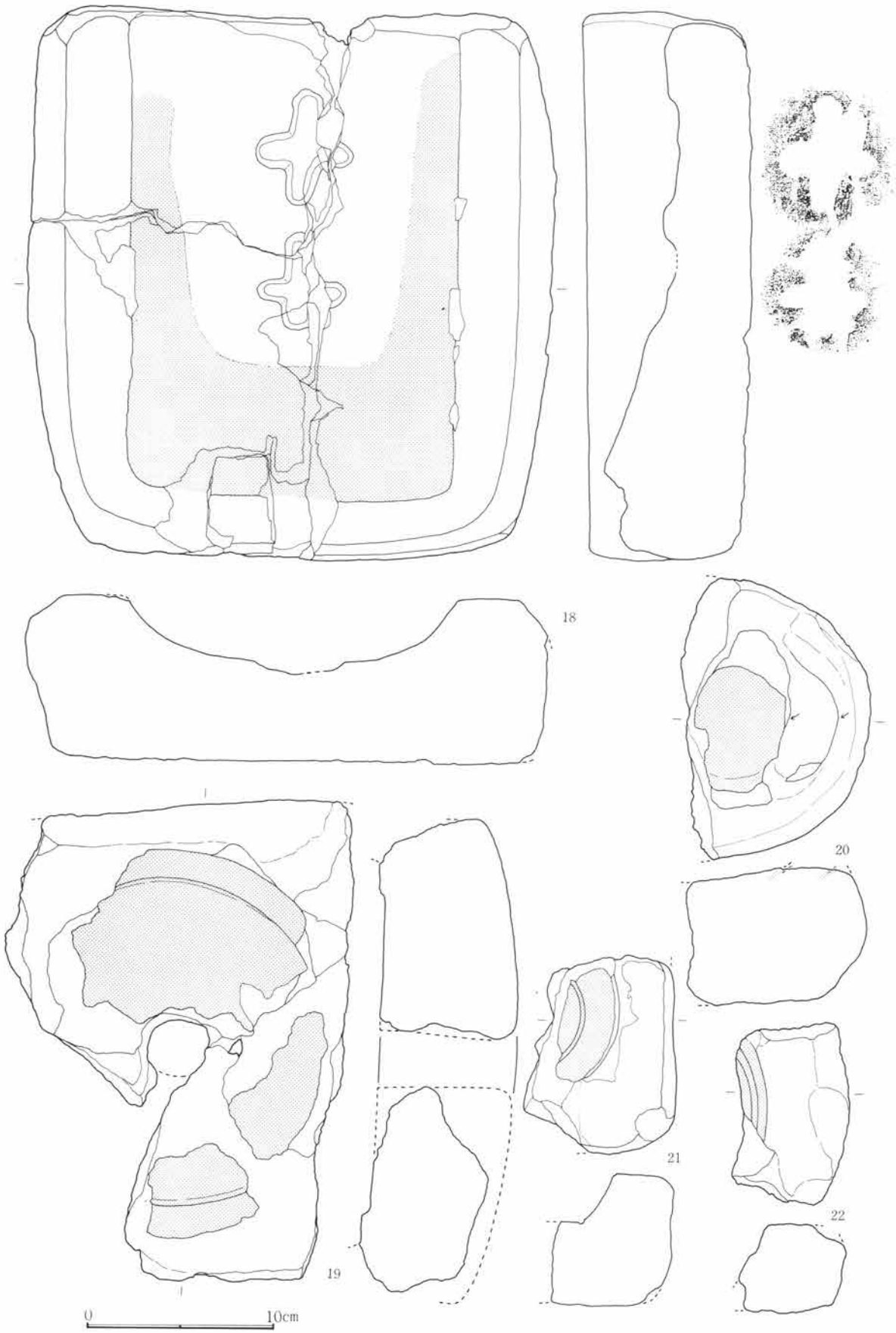


Fig. 362　D43号井戸出土遺物（1）

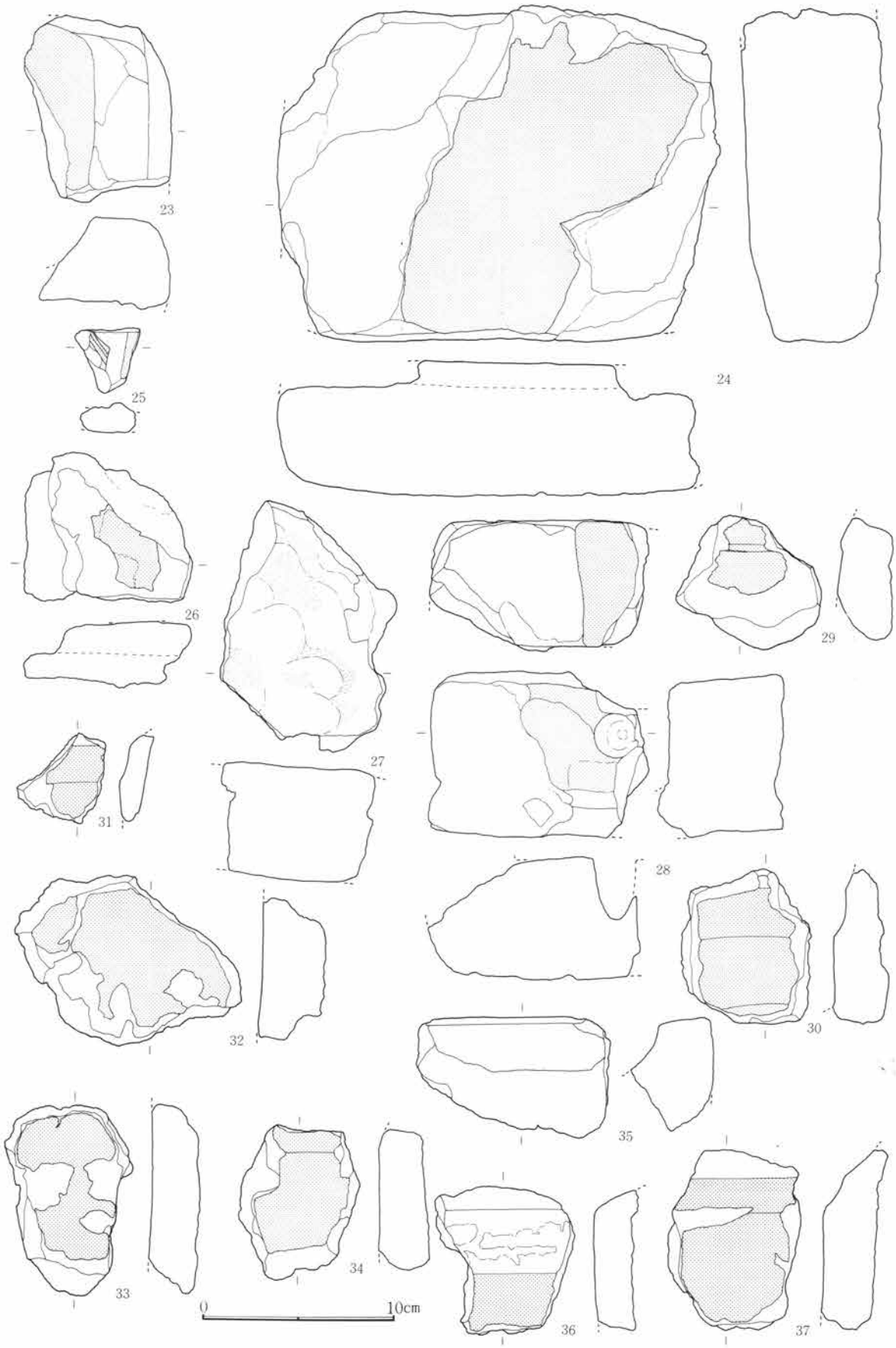


Fig. 363　D43号井戸出土遺物（2）

Fig. 364　D43号井戸出土遺物（3）

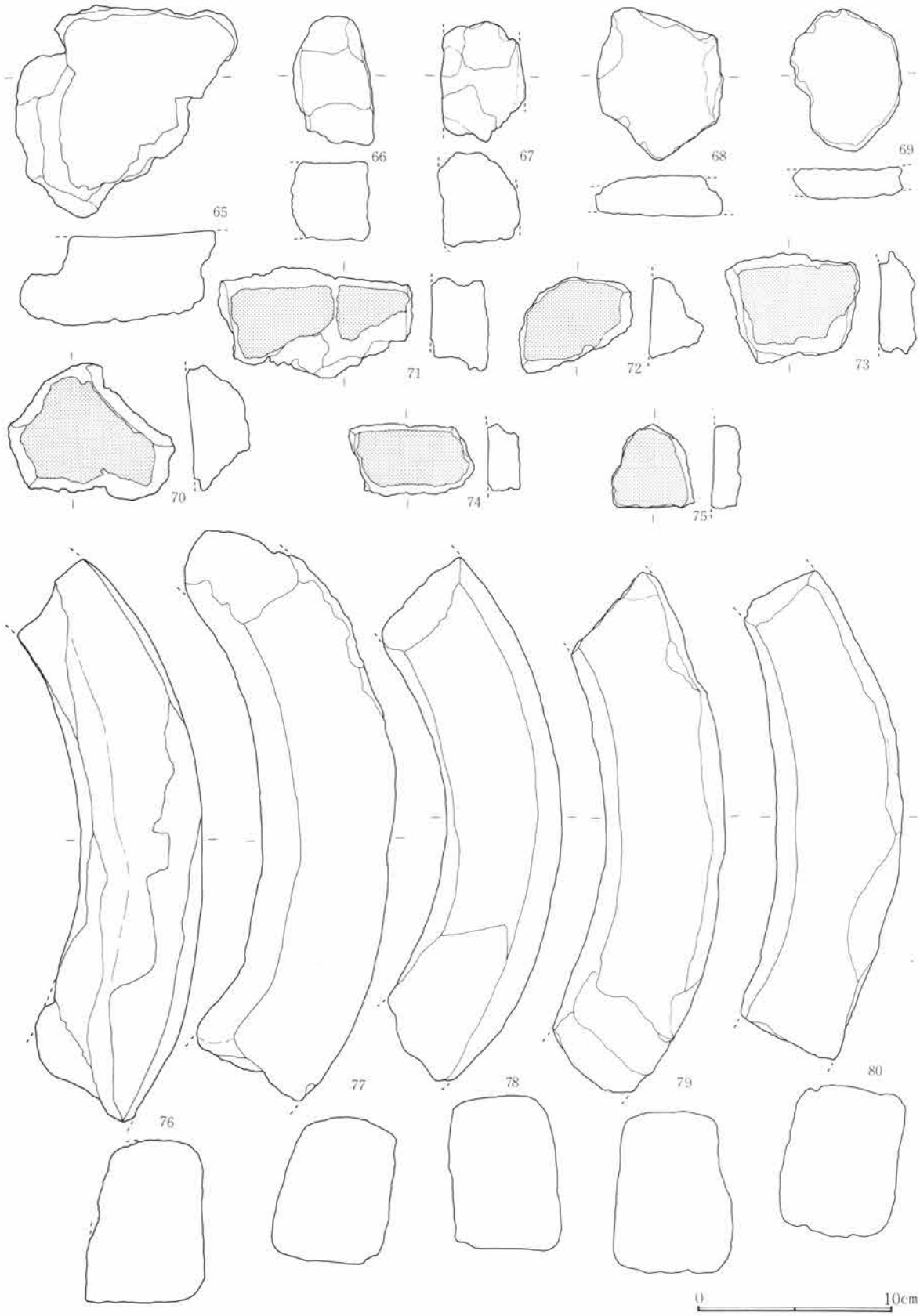


Fig. 365　D43号井戸出土遺物（4）

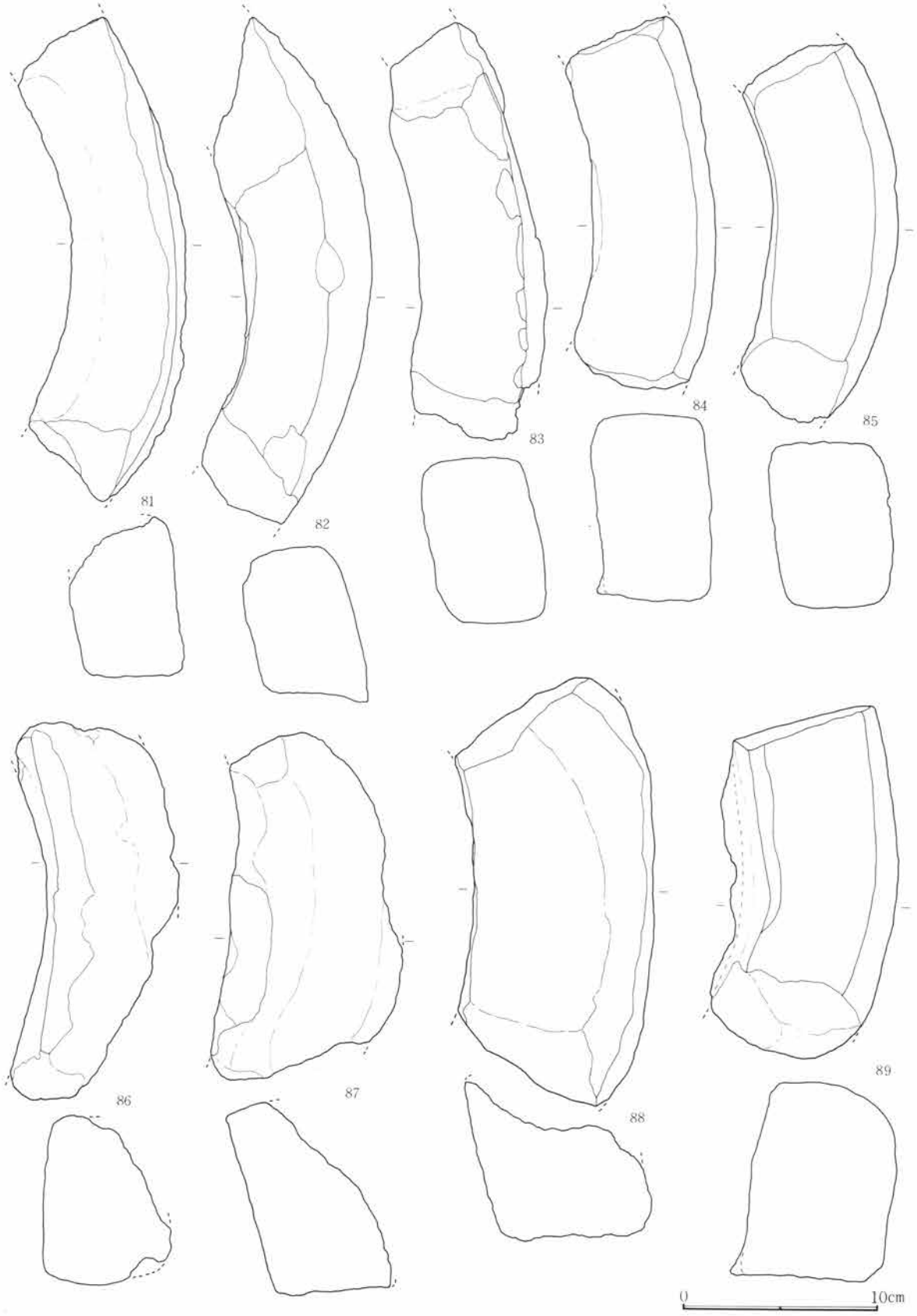


Fig. 366　D43号井戸出土遺物（5）

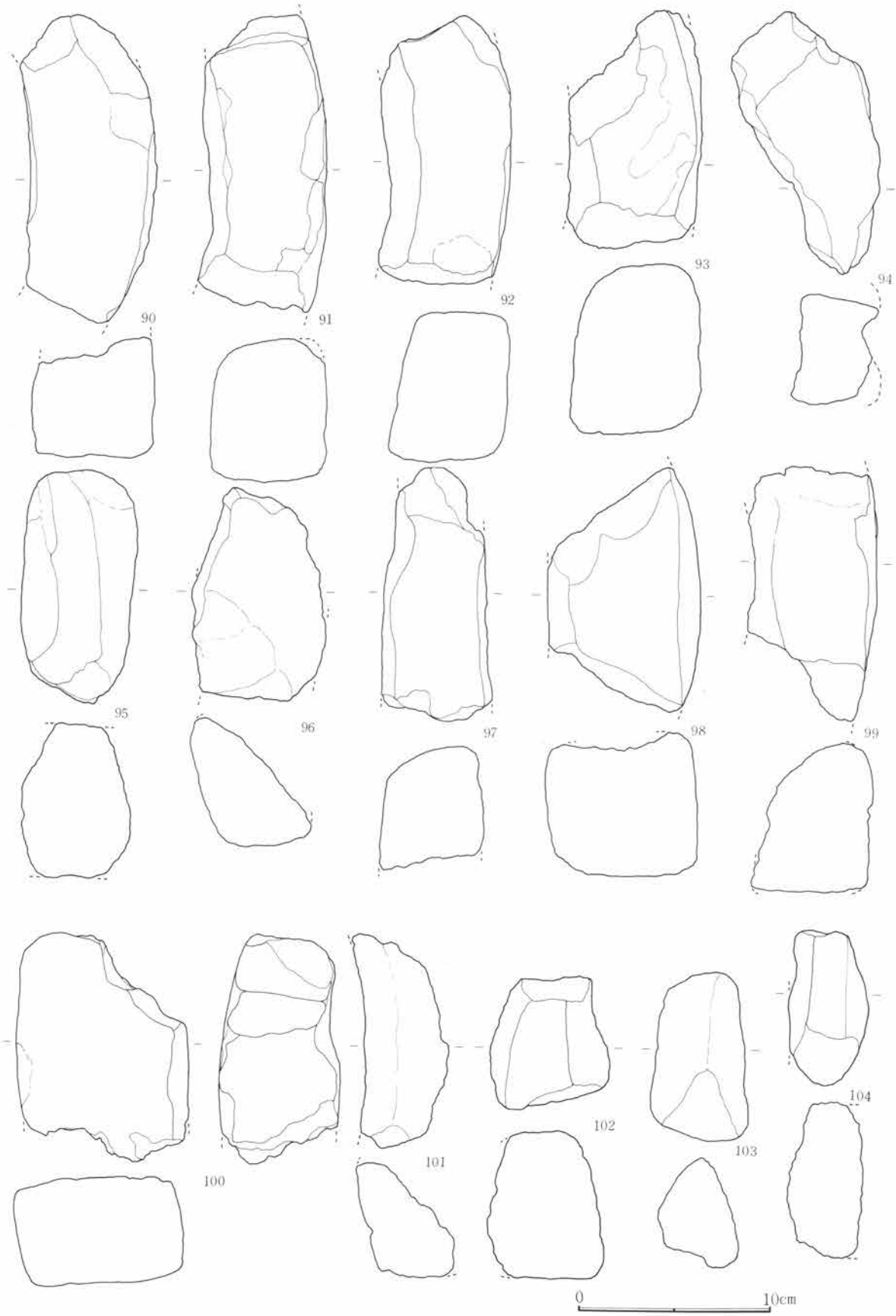


Fig. 367　D43号井戸出土遺物（６）

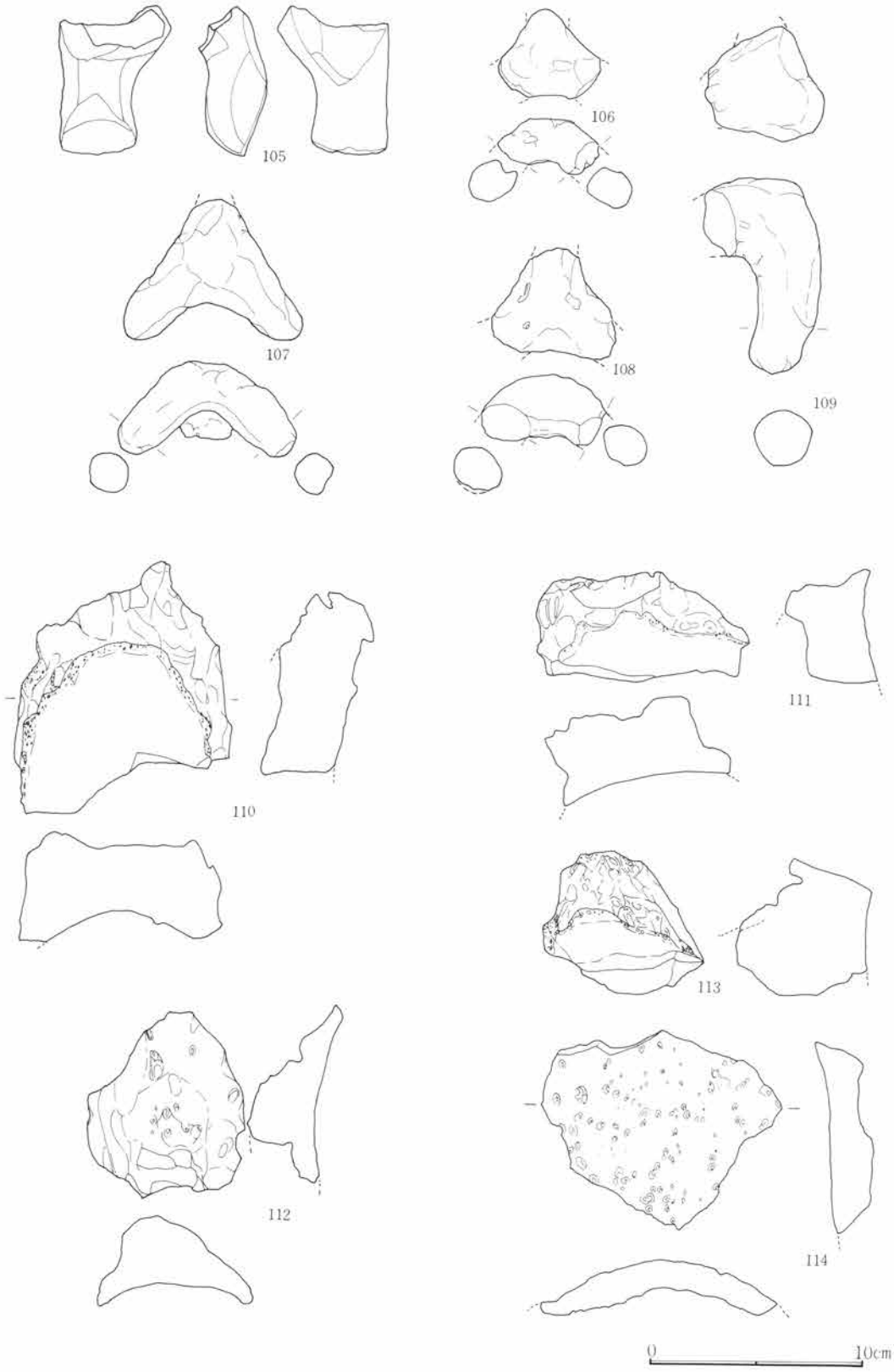


Fig. 368　D43号井戸出土遺物（7）

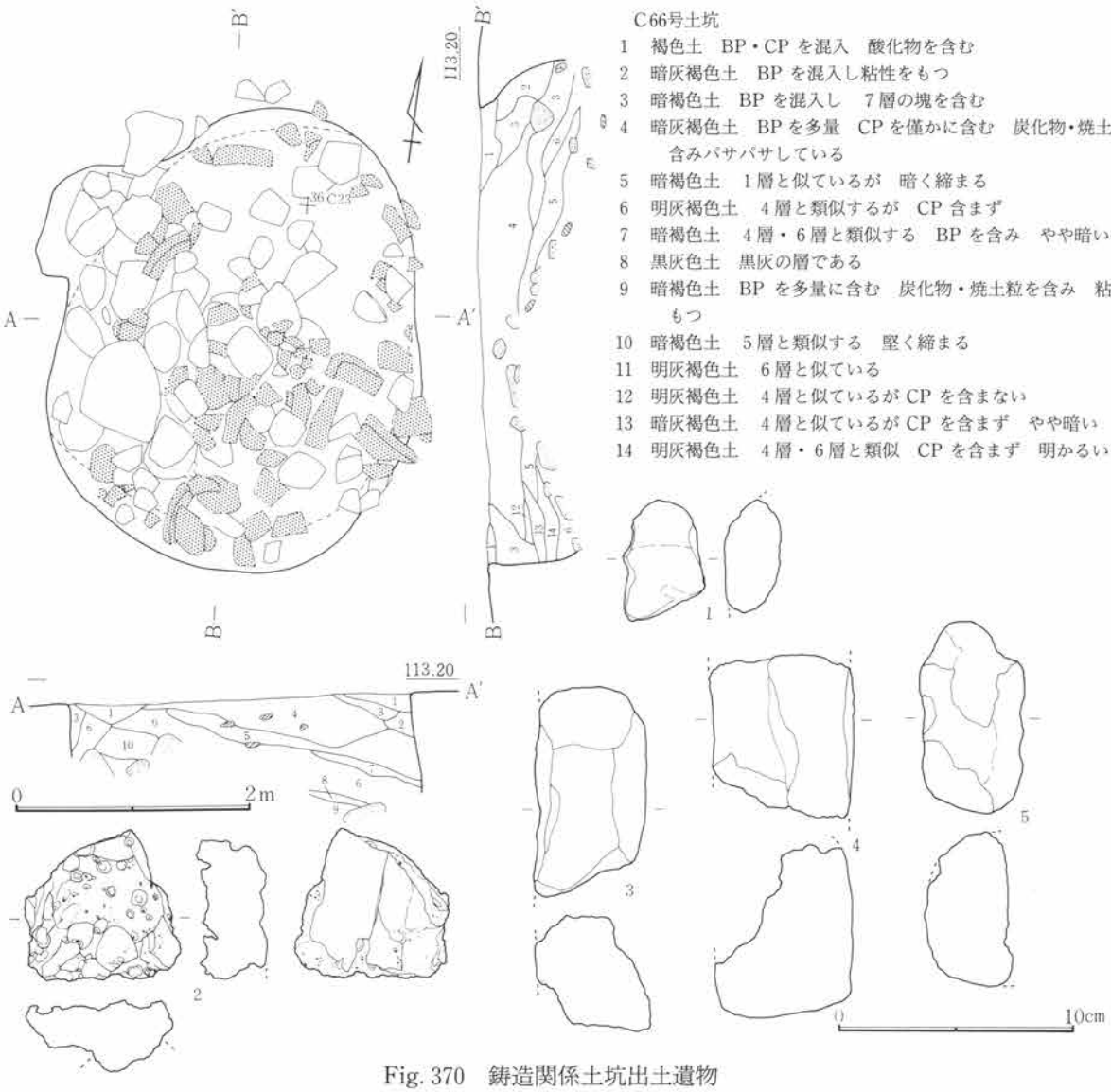


Fig. 370　鋳造関係土坑出土遺物

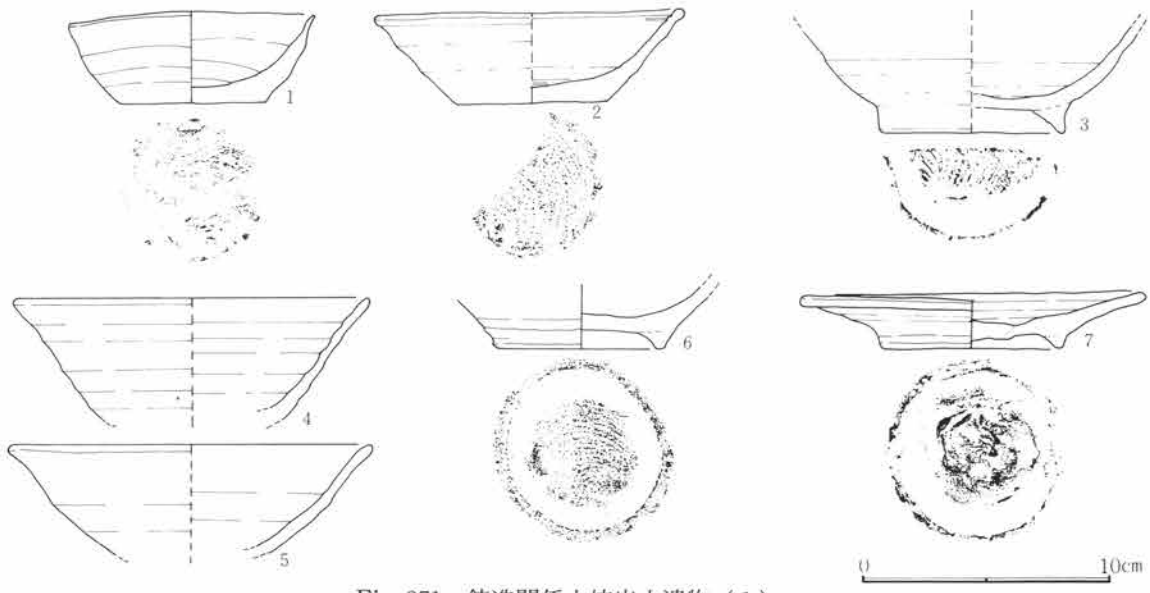


Fig. 371　鋳造関係土坑出土遺物（1）

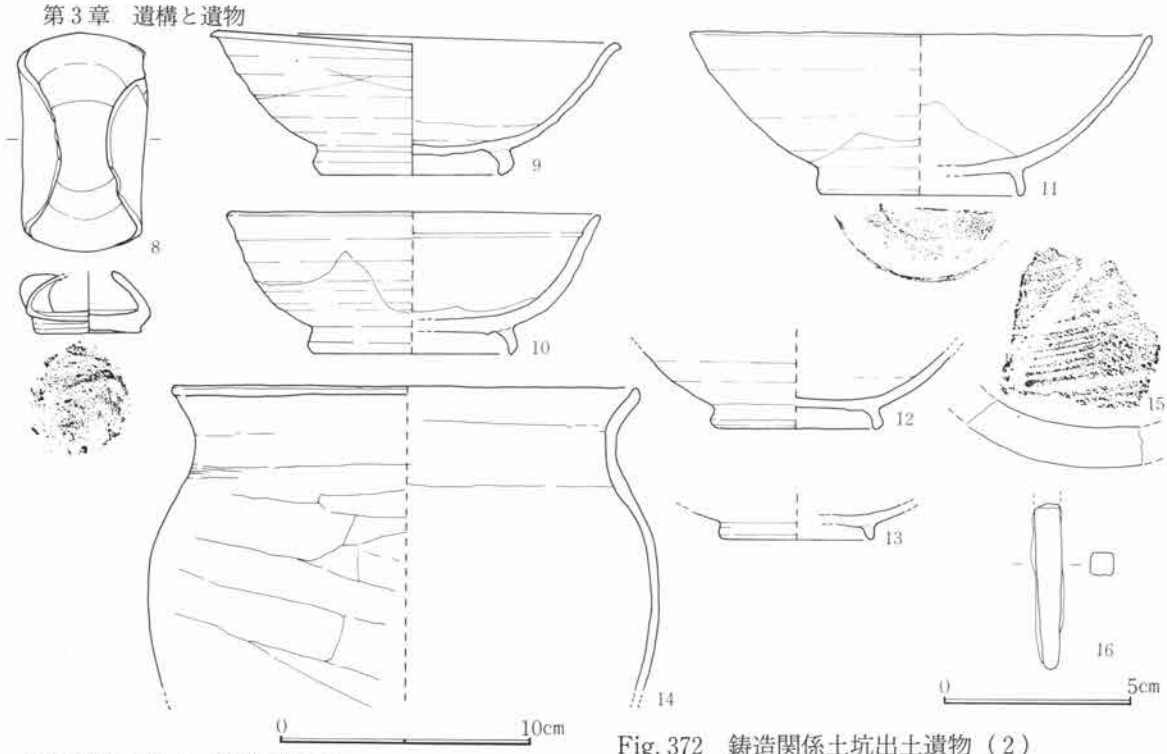


Fig. 372　鋳造関係土坑出土遺物（２）

鋳造関係土坑出土遺物観察表

Fig. No PL. No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
371－1 115－1	D61土坑	土器 小杯	完形	9.8×5.8× 3.6	体・底部肥厚。体部やや脹らみをもち、口縁部著しく細まる。巻き上げ整形後回転撫で調整。右回転糸切り。	①やや軟 ②淡橙 ③密
371－2 115－2	D470土 坑	須恵器？ 杯	⅓	12.4×6.0 ×3.6	体部直線的に開く。内面口唇部に小さな段をなす。轆轤整形。右回転糸切り。見込部篦磨き。	①酸化軟 ②橙 ③ 密
371－3 115－3	D470土 坑	須恵器 椀	底部⅓	－×7.4× 4.2	腰部丸味をもつ。付高台やや高く断面三角形。轆轤整形。回転糸切り。二次被熱。	①良好 ②灰 ③や や密
371－4 115－4	D597土 坑	須恵器 椀	体部⅓	14.1×－× 4.8	腰部に丸味をもち、体部緩く外反して開く。轆轤整形。	①酸化気味やや軟 ②淡黄 ③やや密
371－5 115－5	D631土 坑	須恵器 椀	体部⅓	14.6×－× 4.4	腰部に丸味をもち、口縁部は緩く外反。口唇部僅かに肥厚し丸まる。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③や や密
371－6 115－6	D598土 坑	須恵器 椀	底部	－×6.6× 2.5	腰部張りなし、付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③ やや密
371－7 115－7	D599土 坑	須恵器 皿	ほぼ完 形	13.8×7.2 ×2.2	体部外反気味で水平に近く開く。付高台低く断面略三角。轆轤整形。回転糸切り。見込部粘土補塡痕。	①良好 ②灰 ③密
372－8 115－8	D631土 坑	須恵器 耳皿	ほぼ完 形	8.6×4.2× 2.5	両縁を強く折り曲げる耳皿。轆轤整形。右回転糸切り。燻し焼成か。	①やや軟 ②暗灰 ③やや密細砂粒混
372－9 115－9	D631土 坑	灰釉陶器 椀	完形	16.2×7.4 ×5.3	腰部に緩い丸味をもち、口唇部小さく外屈して尖がる。高台肥厚気味の三ケ月高台。内外面刷毛塗り施釉。腰部から体部中位は回転篦削り。光ケ丘１号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻 密
372－10 115－10	D61土坑	灰釉陶器 椀	⅔	15.0×8.0 ×5.6	腰部丸く強く張る。口縁部僅かに外反。高台やや高く外稜の丸い三ケ月型。底部から体部中位回転篦削り。口縁部内面に凹線巡る。内外面漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
372－11 115－11	D631土 坑	灰釉陶器 椀	¼	18.4×8.2 ×6.4	体部緩い丸味をもち大きく開き、やや大型。高台断面丸味をもちやや高い。内外面漬け掛け施釉。腰部から体部中位は回転篦削り。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻 密
372－12 115－12	D559土 坑	灰釉陶器 椀	底部½	－×(17)× (3.5)	腰部丸味。高台丸味をもち内湾して立つ。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰白 ③ 緻密
372－13 115－13	D611土 坑	灰釉陶器 皿？	底部小 片	－×6.0× 1.4	高台低く断面丸い。大原２号～虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
372－14 115－14	D599土 坑 埋土	土師器 甕	上半部 ¼	18.6×－× 12.7	肩部張り小さい。口縁部僅かに内傾して立ち、上半は外傾する略コの字口縁。肩部横篦削り。	①良好 ②淡橙 ③ やや密
372－15 115－15	D597土 坑	瓦 平瓦	小片	厚1.6	凹面布目。凸面篦削り。	①酸化良好 ②橙 ③やや密白色細粒混
372－16 115－16	D631土 坑	鉄製品 角釘	頂部欠 損	長(4.3) 幅・厚0.9	角釘先端部。	

７．生産跡

鳥羽遺跡における生産跡関連の遺構はおおよそ南半に検出されている。多くはＢ・Ｃ・Ｄ区分に分布する。

さく状遺構：浅間山降下Ｂ軽石粒を埋土とする中世所属の遺構と浅間山降下Ｃ軽石粒混土の黒褐色土を検出面とする遺構に大別される。前者はＢ・Ｃ・Ｄ区を通じ各区の西半に存在する。Ｂ区は南北ライン44を東限にして、走行はＮ－80°～90°－Ｅを示す。Ｃ区は南北ライン53を東限にして走向がＮ－70°～80°－Ｅを示すものとＮ－20°～30°－Ｅの群がある。Ｄ区は調査区北半東部35～54Ｄ25～50の範囲にある。走向はＮ－65°－Ｅを中心にするものと、Ｎ－40°－Ｗを示す２種類がある。浅間山降下Ｃ軽石粒混土黒褐色土を開削するさく状遺構は古墳時代に属すると考えられ、その検出範囲は比較的限定されている。検出区はＢ区の30～44Ｂ40～50とこれに連続するＣ区30～53Ｃ０～39の範囲である。とくに集中して検出されたのはＢ区30～43Ｂ40～50、Ｃ区30～50Ｃ０～20の間である。遺構は細かな格子目状で観察され各々のさく間は50cmから１m程度の込み合った状態となっている。さく走向はほぼＮ－70°－Ｅを示すものと、Ｎ－10°－Ｗを示す２形態がある。

水田跡：鳥羽遺跡では水田跡の検出は僅かであり、Ｄ区中央部認められたのが唯一のものである。検出された水田跡は３面で、50～52Ｄ23～27の範囲である。Ｄ405号溝と重複し、同溝の埋没後浅間山降下Ｂ軽石以前の開田である。Ｄ405号溝は平安期に属し、水田跡検出付近でのみ浅間山降下Ｂ軽石層のユニット堆積が認められている。このことは、Ｄ405号溝の埋没後、この地点がまた凹みをとどめており、水田を形成しうる状態であったことが想定される。３面の水田はほぼ同規模を有し、約８㎡前後であろう。畦畔は約40cm幅で水田面より４～５cmの高まりとなる。また水田側には1.2m程度の空間を置いて北西～南東走する、幅70cm、深10cmの溝が存在する。３面の水田跡のうち最も北に位置する水田跡の北東隅部から、この溝に接続する小溝があり、水口に相当しようか。

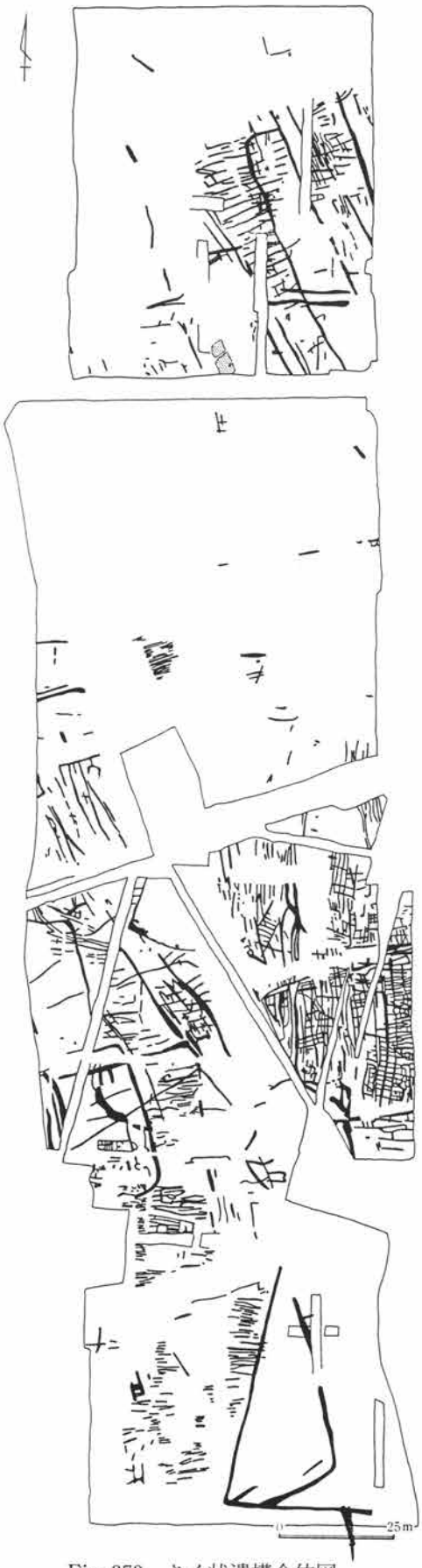


Fig. 373　さく状遺構全体図

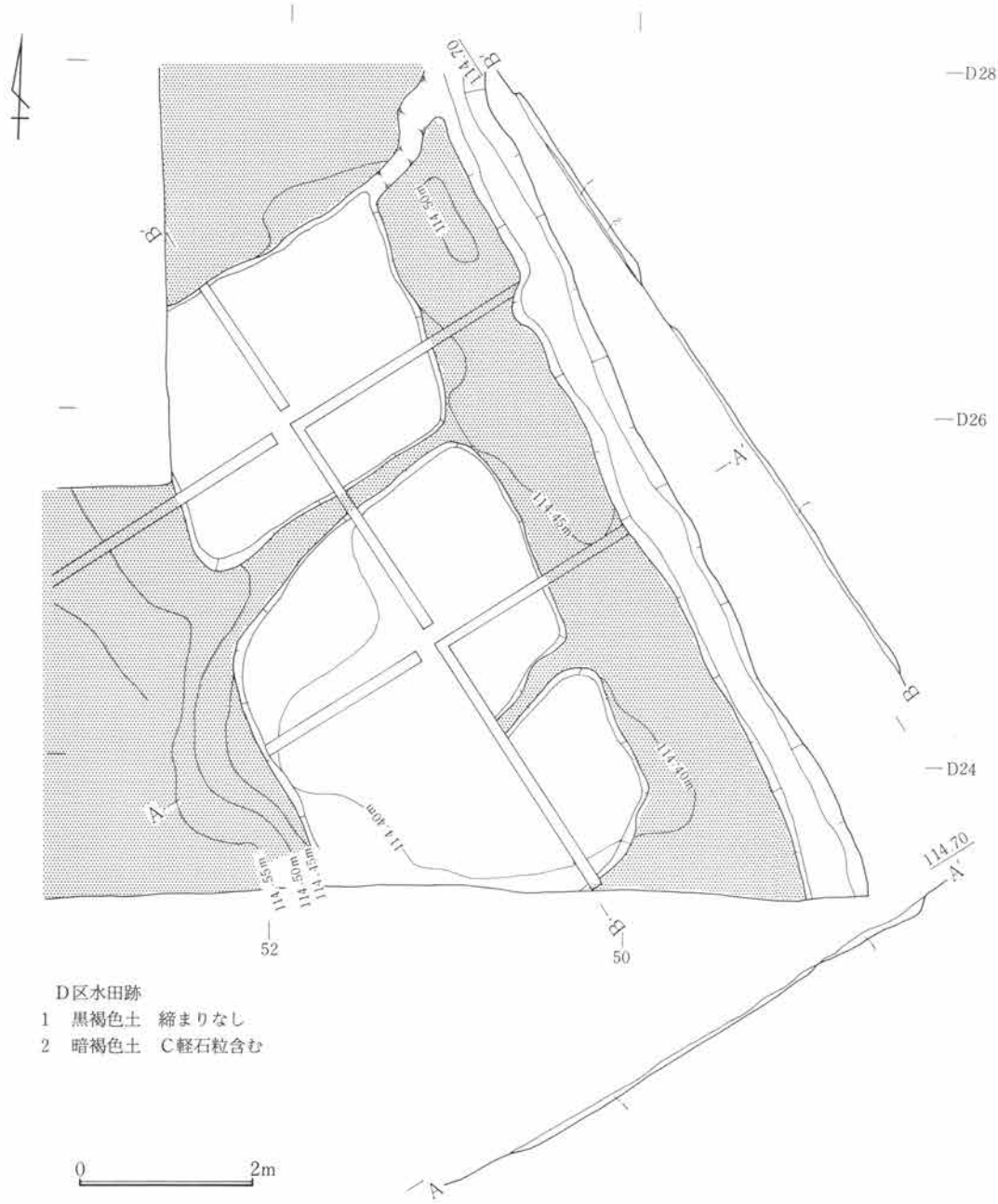


Fig. 374　D区水田跡

8. そ の 他

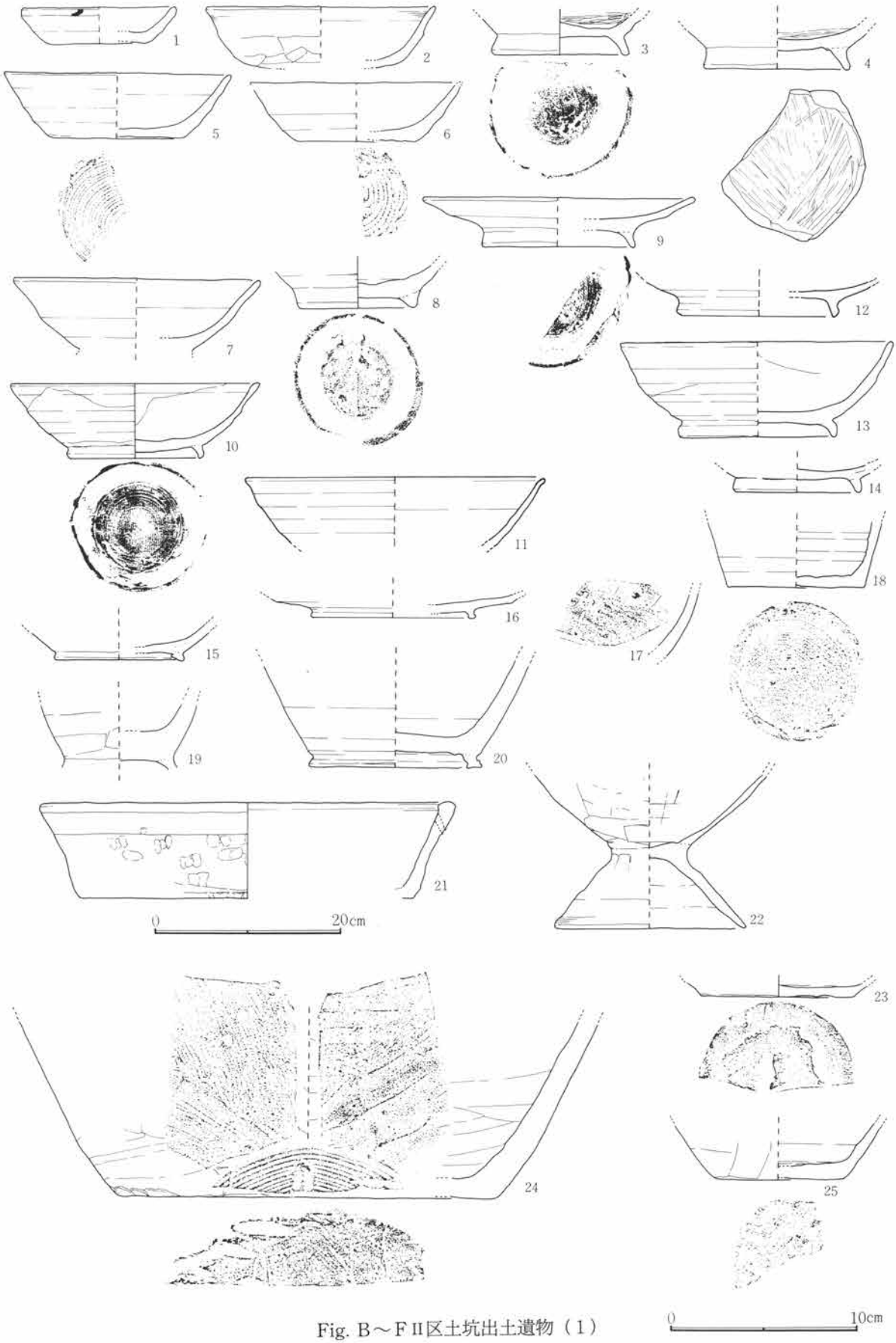


Fig. B～F II区土坑出土遺物（1）

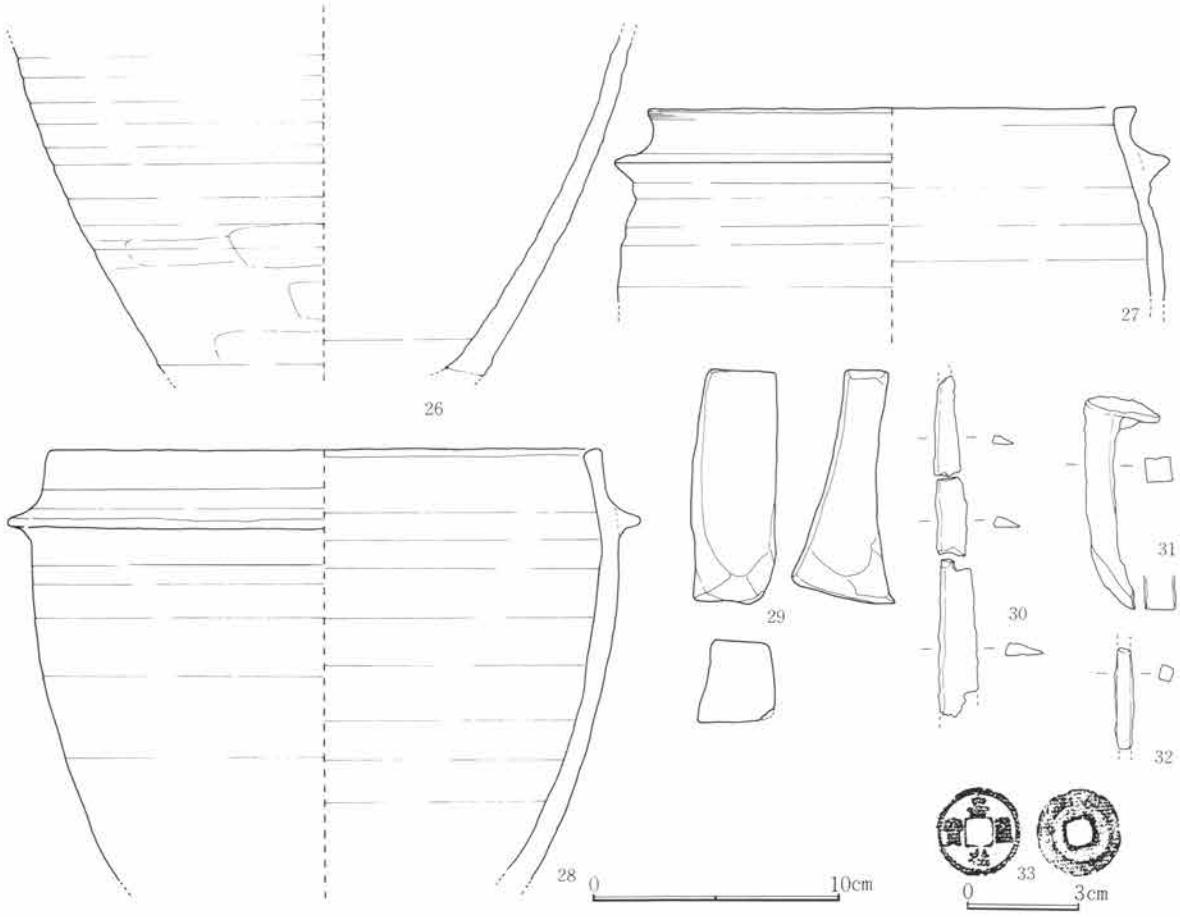


Fig. 376　B～F II区土坑出土遺物（２）

B～F区土坑出土遺物観察表（１）

Fig. No PL. No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
375－1 116－1	E173土坑　埋土	土器 小杯	⅓	8.2×5.6×1.9	体部直線的に開き、口唇部短かく直立。口唇部油煙状付着物。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②淡橙　③密
375－2 116－2	E137土坑　埋土	土師器 杯	小片	12.2×－×3.2	不安定な平底。腰部僅かに丸味をもち、口縁部は緩く外反口縁部横撫で、体部中位篦撫で。腰・底部篦削り。	①良好　②橙　③やや密
375－3 116－3	E130土坑	須恵器 椀	底部⅔	－×7.4×(2.0)	小型の椀。付高台やや高くハの字状に開く。轆轤整形。底部回転篦削り。	①良好　②灰　③やや密黒色斑浮く
375－4	F II310土坑	内黒土器 椀	底部⅔	－×7.8×(2.3)	付高台やや高く、断面矩形を呈しハの字状に開く。内面黒色処理。篦磨き。	①軟　②淡橙　③密
375－5 116－5	F II313土坑 埋土	須恵器 杯	⅓	12.0×7.0×3.5	体部僅かに丸味をもつ。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟　②淡橙　③やや密
375－6 116－6	F II244土坑 埋土	須恵器 杯	⅓口唇部欠損	(11.2)×6.4×3.1	体部緩く内湾して開く。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味　②淡橙　③やや粗
375－7 116－7	F II309土坑 埋土	須恵器 椀	¼高台欠損	13.0×－×(3.7)	腰部丸く体部上半は外反気味に開く。轆轤整形。燻し焼成。	①良好　②暗灰　③やや密輝性細粒多混
375－8 116－8	F II306土坑 埋土	須恵器 椀	底部	－×6.2×2.2	腰部僅かに張る。付高台低く肥厚し、断面三角。轆轤整形。	①酸化やや軟　②橙　③やや密
375－9 116－9	E120土坑　埋土	須恵器 皿	¼	14.4×8.2×2.6	体部中位で小さく折れ大きく開く。器肉薄い。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化気味　②淡橙　③やや粗
375－10 116－10	F５土坑 埋土	灰釉陶器 椀	⅔	13.2×7.2×3.9	体部緩く丸味をもつ。高台は内面の内湾が小さい三ケ月高台。内外面漬け掛け施釉。作りやや雑。大原２号～虎渓山１号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
375－11 116－11	F II210土坑 埋土	灰釉陶器 椀	体部小片	16.0×－×3.5	体部緩く丸味をもち、口唇部小さく外反。内外面施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密

Ｂ～Ｆ区土坑出土遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
375—12 116—12	FⅡ312土坑 埋土	灰釉陶器 椀	底部小片	－×8.2×1.9	高台やや高く、外稜丸く内湾気味に立つ。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
375—13 116—13	FⅡ191 土坑埋土	灰釉陶器 椀	小片	14.4×8.2×5.0	体部丸味をもつ。高台は外稜に丸味をもつ三ケ月高台。底部回転糸切り。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③密
375—14 116—14	E156土坑 埋土	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×6.8×1.5	高台端部丸くハの字状に開く。虎渓山２号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
375—15 116—15	E142土坑 埋土	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.0×1.7	腰部丸味をもつ。低い角高台。内面厚く全面施釉。黒笹14号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
375—16 116—16	E274土坑 埋土	灰釉陶器 皿	底部小片	－×8.8×1.2	腰部ほぼ水平に開く。内面厚く施釉。高台低く、幅狭な角高台。黒笹14号窯式期。	①良好 ②灰 ③やや密
375—17 116—17	E136土坑 埋土	須恵器 小瓶	小片	－×－×－	外面に「大十」の箆文字あり。焼成前。	①良好 ②灰 ③密
375—18 116—18	BⅡ土坑	須恵器 瓶	底部	－×7.4×3.5	胴部丸味なく、底部より直立する。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
375—19 116—19	FⅡ232土坑 埋土	須恵器 瓶	底部⅓	-×-×(3.5) 基部径5.8	胴部僅かに張り気味。胴下半横箆削り。付高台端部欠損。底部極めて厚い。	①良好 ②灰 ③密
375—20 116—20	B11土坑	須恵器 瓶	底部⅔	－×9.2×5.7	胴部下半直線的に立ち上がる。付高台、低く断面矩形。轆轤調整。内面撫で調整。	①良好 ②灰 ③やや密黒色粒混
375—21 116—21	C1026土坑	軟質陶器 鍋	体部⅙	42.0×35.0×10.0	器肉厚い。体部外反気味に立ち上がり上半は小さく内湾、口唇部矩形を呈し、内側端部は小さく突出、口唇部下に内面より径0.9～0.5cmの穿孔。外面指頭痕。	①良好 ②暗灰褐 ③やや粗輝性細粒混
375—22 116—22	E290土坑 埋土	土師器 台付甕	台部	－×10.0×(8.0)	腰部丸く内湾して開く。台部直線的でハの字状に開く。腰部横箆削り。台部横撫で。	①良好 ②橙 ③やや粗
375—23 116—23	F８土坑	須恵器 甕	底部¼	－×13.2×4.9	底部器肉薄く、胴部肥厚して直線的に立ち上がる。胴部下半弱い横箆削り。	①良好 ②灰 ③密
375—24 116—24	E271土坑 埋土	須恵器 甕	底部¼	－×20.0×9.1	腰部粗く強い箆撫で、胴部下半平行文叩き。内面底部櫛歯状掻き目。胴部強い指頭撫で。	①良好 ②灰 ③やや密黒色粒多混
375—25 117—25	FⅡ215土坑 埋土	羽釜	底部⅓	－×6.4×(3.0)	平底。見込部指頭痕。外面箆削り。	①良好 ②淡橙 ③粗
376—26 117—26	FⅡ310 土坑	須恵器 甕	胴部	-×-×(14.3) 最大幅24.8	胴部ほぼ直線的に立ち上がる。底部・高台欠損。巻き上げ回転撫で調整。胴下半弱い箆削り。	①良好 ②灰 ③やや密
376—27 117—27	E132土坑 埋土	羽釜	口縁部小片	19.6×－×7.7	胴部僅かに張らみ、口縁部外反して内傾する。口唇部幅広で断面矩形。鍔部断面三角で強く突出する。	①酸化気味 ②灰橙 ③やや粗
376—28 117—28	FⅡ314土坑 埋土	羽釜	胴部上半⅓	22.2×－×(17.0)	胴部僅かに丸味をもち、口縁部外反気味に内傾。口唇部断面矩形。鍔部水平に突出。内外面回転撫で。下半撫で。	①良好 ②褐灰 ③やや密
376—29 117—29	FⅡ252土坑 埋土	石製品 砥石	片端欠損	9.1×3.2×3.2 122g	長方形砥。使用減り著しく中央部大きく反り撥形。５面使用。	流紋岩
376—30 117—30	FⅡ318 土坑	鉄製品 刀子	刃部	長(8.5)幅1.0 厚0.3	刀子の刃部。僅かに茎部残る。刃部研ぎ減りのためかかなり細まる。	
376—31 117—31	FⅡ225 土坑	鉄製品 角釘	完形	長(6.0)幅・厚0.6×0.6	頂部折頭式角釘。先端部楔状に尖がる。地金の遺存は極めて良好。	
376—32 117—32	F206土坑 埋土	鉄製品 角釘	両端部欠損	長(2.7)幅・厚0.4×0.35	角釘。	

鋳造を除く土坑　古銭

Fig. No. PL. No.	遺構名	部位 残存量	計測値 径(cm)	備考
376—33 117—33	E118土坑	完形	2.3	嘉祐通宝（真）銅 北宋嘉祐元年1056

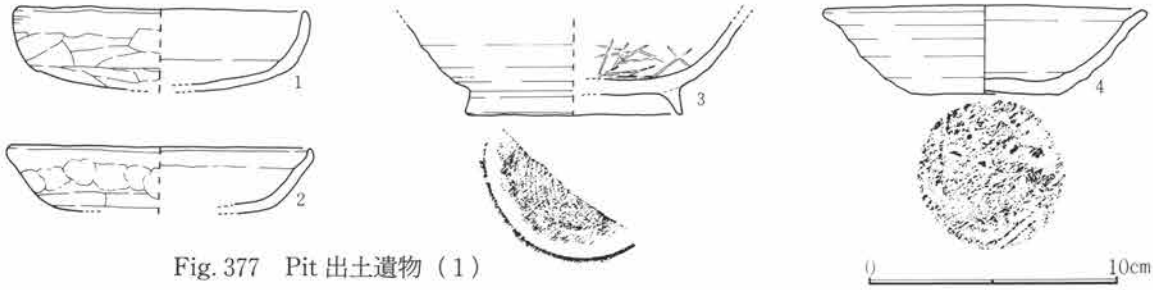


Fig. 377　Pit 出土遺物（１）

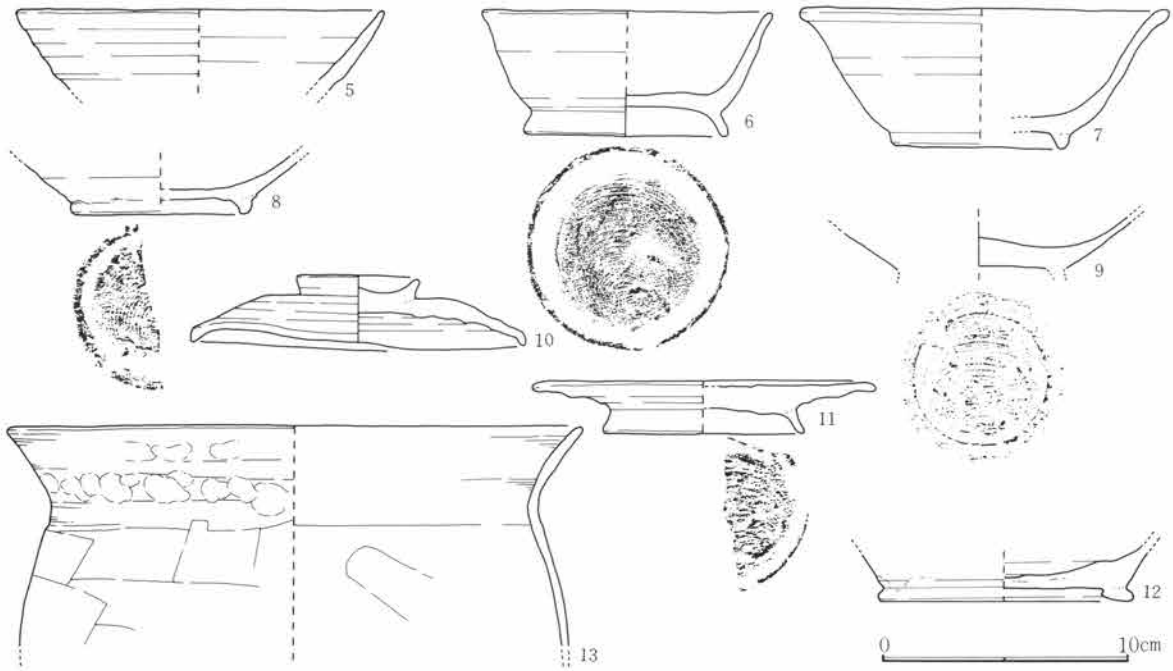


Fig. 378　Pit 出土遺物（2）

Pit 出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
377－1 117－1	FⅡ1Pit 埋土	土師器 杯	⅓	11.9×10.4 ×3.2	扁平な丸底。体部内湾気味に立ち上がる。体部上半横撫で下半は弱い横篦削り。底部不定方向篦削り。	①良好 ②橙 ③やや密
377－2 117－2	FⅡ1Pit 埋土	土師器 杯	¼	12.2×8.6 ×2.6	不安定な平底。体部浅身で、口唇部丸まって内屈。体部中位指頭痕。下位横篦撫で。底部篦削り。	①良好 ②橙 ③やや密
377－3 17－3	E 5 Pit	内黒土器 椀	底部½	－×8.7× (3.8)	腰部に丸味をもつ。付高台ハの字状に開く。内面黒色処理体部横・斜位、見込部一方向の篦磨き、轆轤整形回転糸切	①酸化気味軟 ②淡黄 ③やや密
374－4 117－4	E 5 Pit	須恵器 杯	½	13.0×5.8 ×3.5	腰部僅かに丸味をもち、体部上半は外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。吸炭部多く燻し焼成か。	①軟 ②暗灰 ③やや粗
378－5 117－5	E 3 Pit 埋土	須恵器 杯	体部小 片	14.8×－× (3.2)	体部直線的。轆轤整形。	①やや軟 ②灰 ③密
378－6 117－6	F53Pit 埋土	須恵器 椀	½	11.6×8.2 ×4.9	腰部僅かに丸く張る。体部上半は緩く外反。付高台、やや高くハの字状に張る。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
378－7 117－7	FⅡ10住内 Pit埋土	須恵器 椀	¼	15.0×7.2 ×5.5	腰部丸く張り、体部上半は大きく外反して開く。口唇部やや肥厚。付高台低く断面丸味のある矩形。轆轤整形。	①軟 ②灰 ③やや密
378－8 117－8	E 5 Pit	須恵器 椀	底部½	－×7.3× (2.3)	付高台、低く作り雑。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟 ②灰 ③粗砂粒多混
378－9 117－9	E 2 Pit	須恵器 椀	底部	－×－× (1.5)	底部肥厚。体部薄い。高台欠損。轆轤整形。右回転糸切り	①やや軟 ②灰 ③やや密
378－10 117－10	FⅡ1Pit 埋土	須恵器 蓋	ほぼ完 形	13.3×－×3.0 摘み径4.9	天井部平ら。体部直線的に開き、口縁部やや開き気味に折れる。大径の環状摘吐。天井部回転篦削り。歪み大。	①良好 ②灰 ③やや密黒色粒混
378－11 117－11	E 6 Pit 埋土	須恵器 皿	小片	13.8×8.0 ×2.1	体部水平になり形状は托型。付高台、やや高くハの字状に開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密黒色細粒混
378－12 117－12	E 6 Pit 埋土	灰釉陶器 瓶	底部小 片	－×10.4× (2.1)	高台低く幅広。	①良好 ②灰 ③密
378－13 117－13	F48Pit 埋土	土師器 甕	口縁部 ¼	23.0×－× (8.8)	胴部緩く脹らみ、口縁部外反して開く。口縁部指頭痕後横撫で、胴部上半横篦削り。	①良好 ②橙 ③やや密

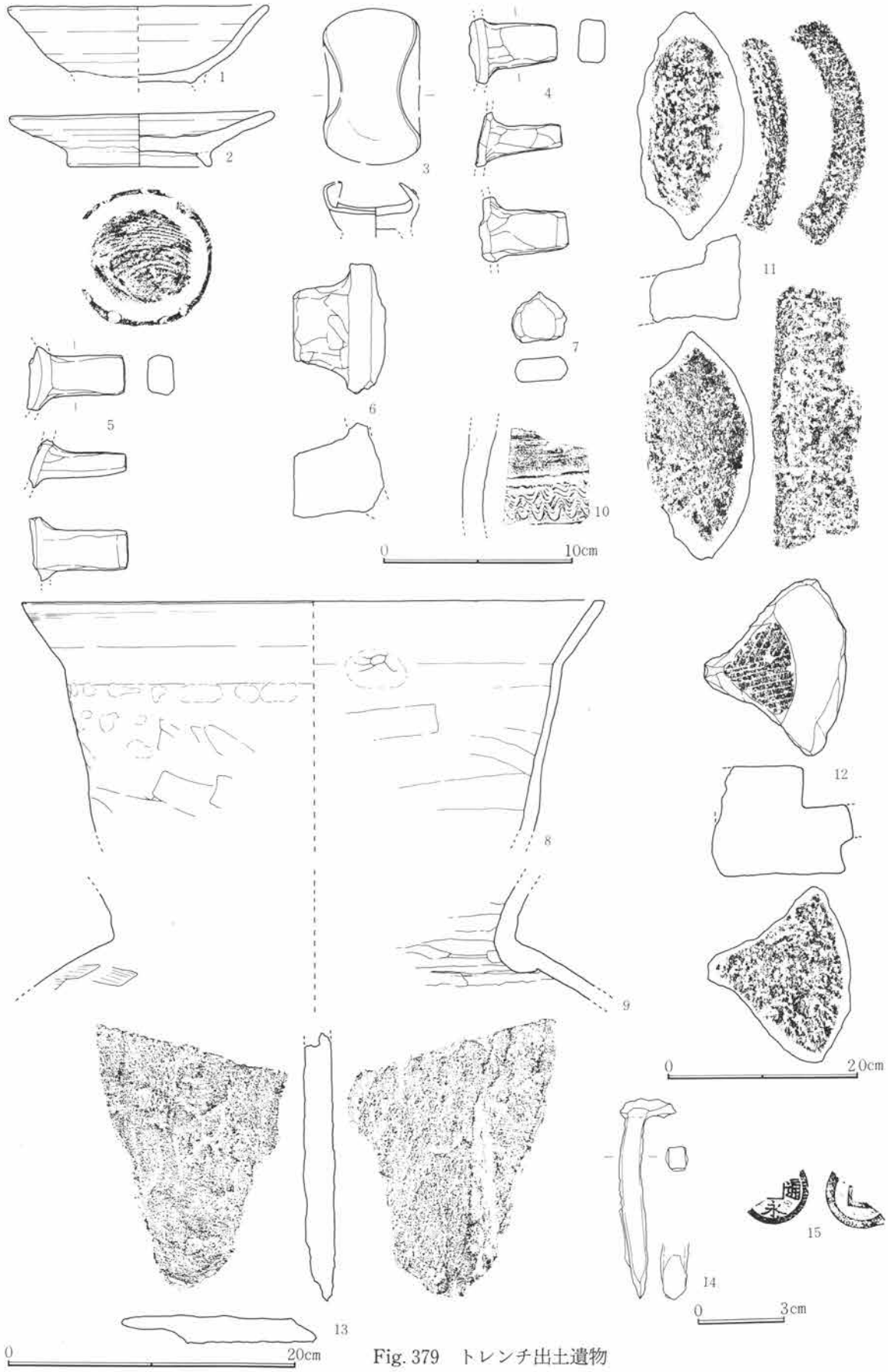


Fig. 379　トレンチ出土遺物

Ｂ～Ｆ区出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
379－1 118－1	不明	須恵器 椀	¼高台 欠損	13.6×－× (4.0)	体部中位に張りをもち、口縁部緩く外反して開く浅身。付高台欠損。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化やや軟 ②淡橙 ③やや粗
379－2 118－2	不明	須恵器 皿	⅔	13.8×7.5 ×2.9	体部直線的、器肉厚目。付高台ハの字状に開くが雑な作り轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰～灰褐 ③やや粗
379－3 118－3	Ｄ区	須恵器 耳皿	½	(8.0)×－ ×(2.5)	両側強く内屈する。付高台欠損。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
379－4 118－4	不明	須恵器 耳杯	把手	厚1.3 幅2.2	長方形に丁寧な篦削り面取り。僅かに反る。	①良好 ②灰 ③やや密
379－5 118－5	不明	須恵器 耳杯	把手	厚1.4 幅2.0	長方形に丁寧な篦削り面取り。僅かに反る。	①良好 ②灰 ③やや密
379－6 118－6	35－40E00 －10	須恵器 脚		高2.8径4.0	多面体に篦及び手捏ね整形。火舎の脚か。	①良好 ②灰 ③やや粗
379－7 118－7	Ｅ区	須恵器 メンコ状		厚1.2 径2.4	甕片を転用。縁辺を粗く欠き取る。メンコ状。	①良好 ②灰 ③やや密
379－8 118－8	館址内 pit7	軟質陶器 内耳鍋		40.8×－× (15.9)	腰部僅かに丸味をもち、体部直線的に外傾。口縁部折れてやや大きく開く。口唇部矩形。内面口縁部に耳痕。内面横撫で、外面口縁部横撫で。体部指頭痕後撫で。外面煤付着	①良好 ②灰 ③やや粗
379－9 118－9	Ｅ区	須恵器 甕	肩部	－×－× (7.8)	中型の甕。外面横撫で、内面指頭横撫で、口縁と肩部の変換部は篦削り。口縁部の接合痕顕著。白色斜状鉱物含む。	①良好 ②灰 ③やや密 南比企産
379－10 －	不明	須恵器 甕	口縁部 小片	厚0.6	６条の波状文。	①良好 ②灰 ③やや密
379－11 118－11	不明	石製品 石臼	上臼小 片	高9.0	上縁高2.0cm。幅3.0cm。裏面摩耗著しく臼目は不明。	安山岩
379－12 118－12	中世館掘	石製品 石臼	下臼¼	高11.5	受皿のはんぎり部欠損。上面臼目は細くこまかい。側面は滑らかで磨きが施されるか。	安山岩
379－13 118－13	不明	板碑	基部 破片		板碑基部の破片か。上側端部の一部のみに研磨の痕跡が顕著に見られ、転用の可能性がある。	緑泥片岩
379－14 118－14		鉄製品 角釘	ほぼ完 形	長6.6幅・厚 0.7	身はかなり太く、やや寸が短かい。先端部は扁平になり断面楔状。頂部折頭式。	

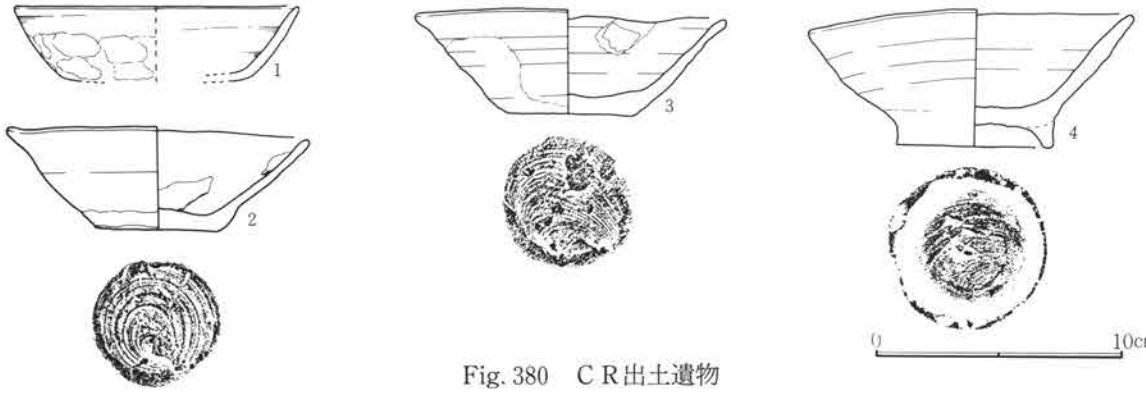


Fig. 380　ＣＲ出土遺物

Ｃ区出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
380－1 119－1	Ｃ区	土師器 杯	¼	11.4×－× (3.0)	体部直線的に開く、口縁部横撫で。体部指頭痕著しい。底部篦削り。	①良好 ②橙 ③やや密
380－2 119－2	Ｃ区	須恵器 杯	完形	12.1×4.9 ×4.2	底径極めて小さく、体部中位やや膨らむ。口縁部くびれて大きく開く。轆轤整形。右回転糸切り。作り極めて雑。	①良好 ②灰 ③やや粗
380－3 119－3	Ｃ区	須恵器 杯	完形	12.4×5.0 ×4.3	底径小さく、体部直線的に開く。口縁部外反気味。轆轤整形。右回転糸切り。作り雑。	①良好 ②灰 ③やや粗
380－4 119－4	Ｃ区	須恵器 椀	完形	13.0×6.3 ×5.4	腰部に張りなく、体部直線的に開く。付高台直立し雑。器肉厚い。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗

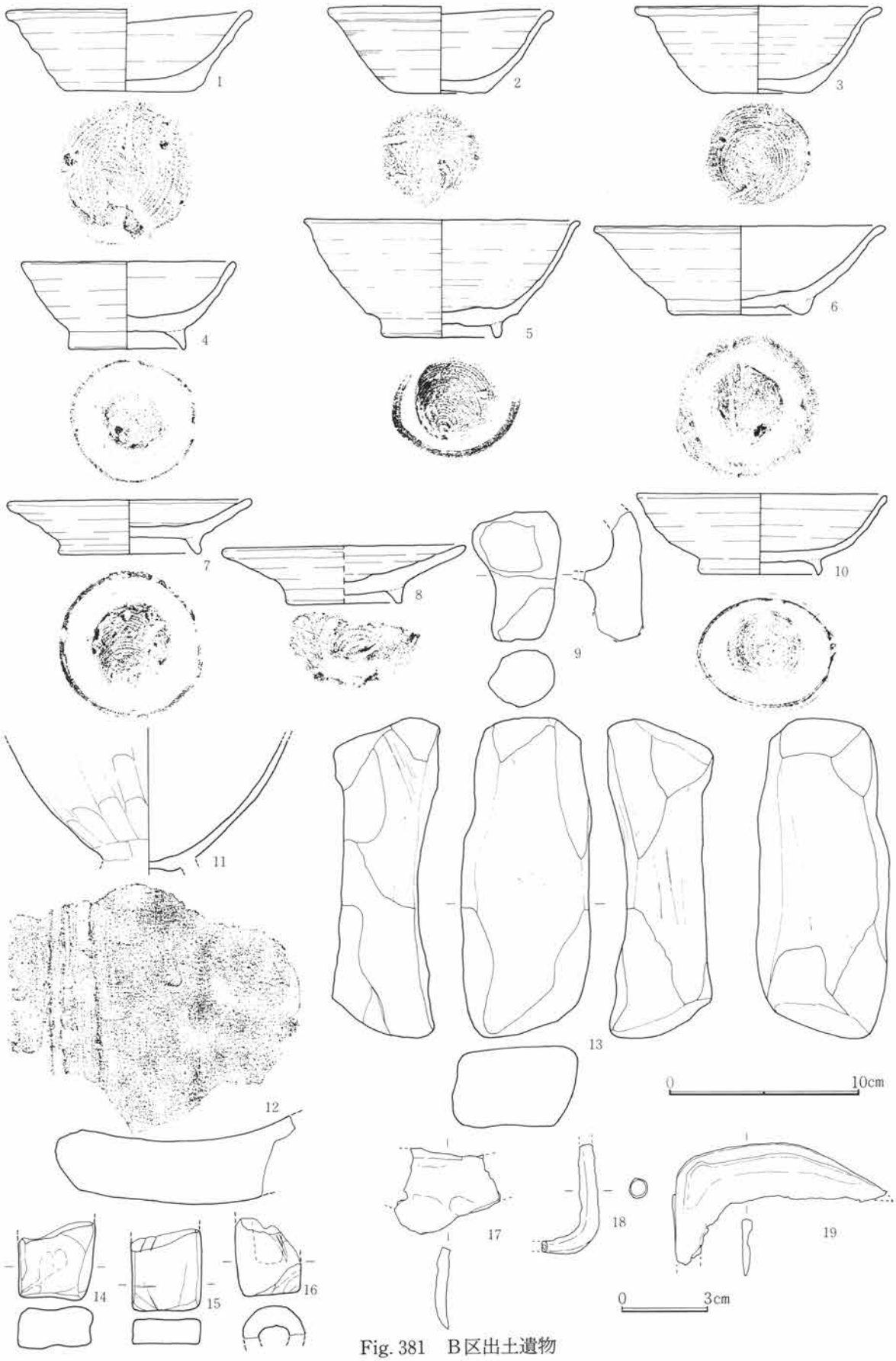


Fig. 381　B区出土遺物

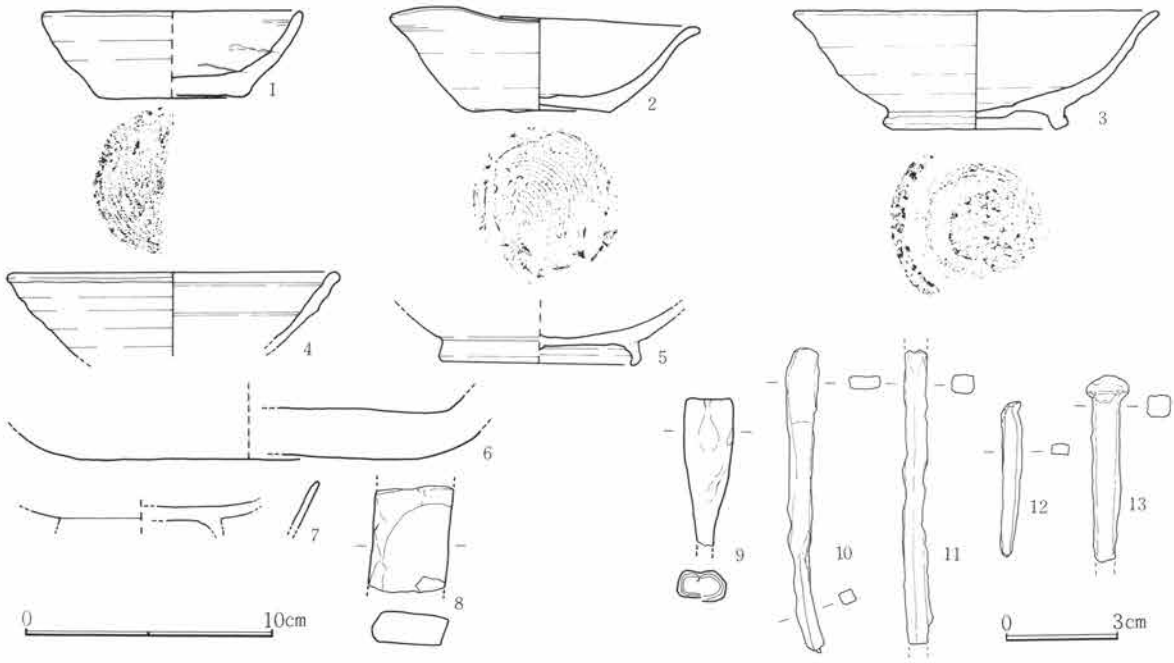


Fig. 382　C区出土遺物

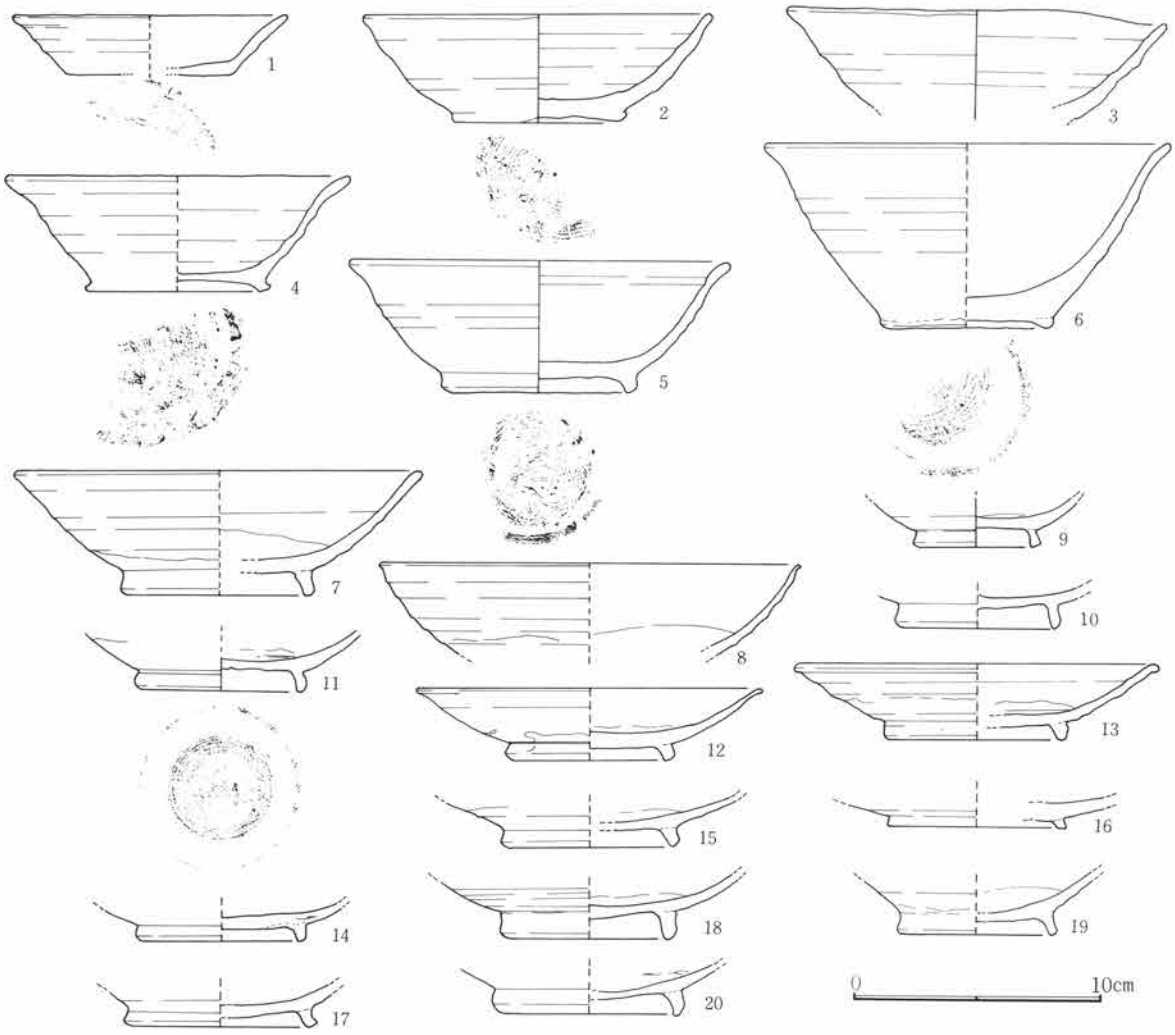


Fig. 383　D区出土遺物（1）

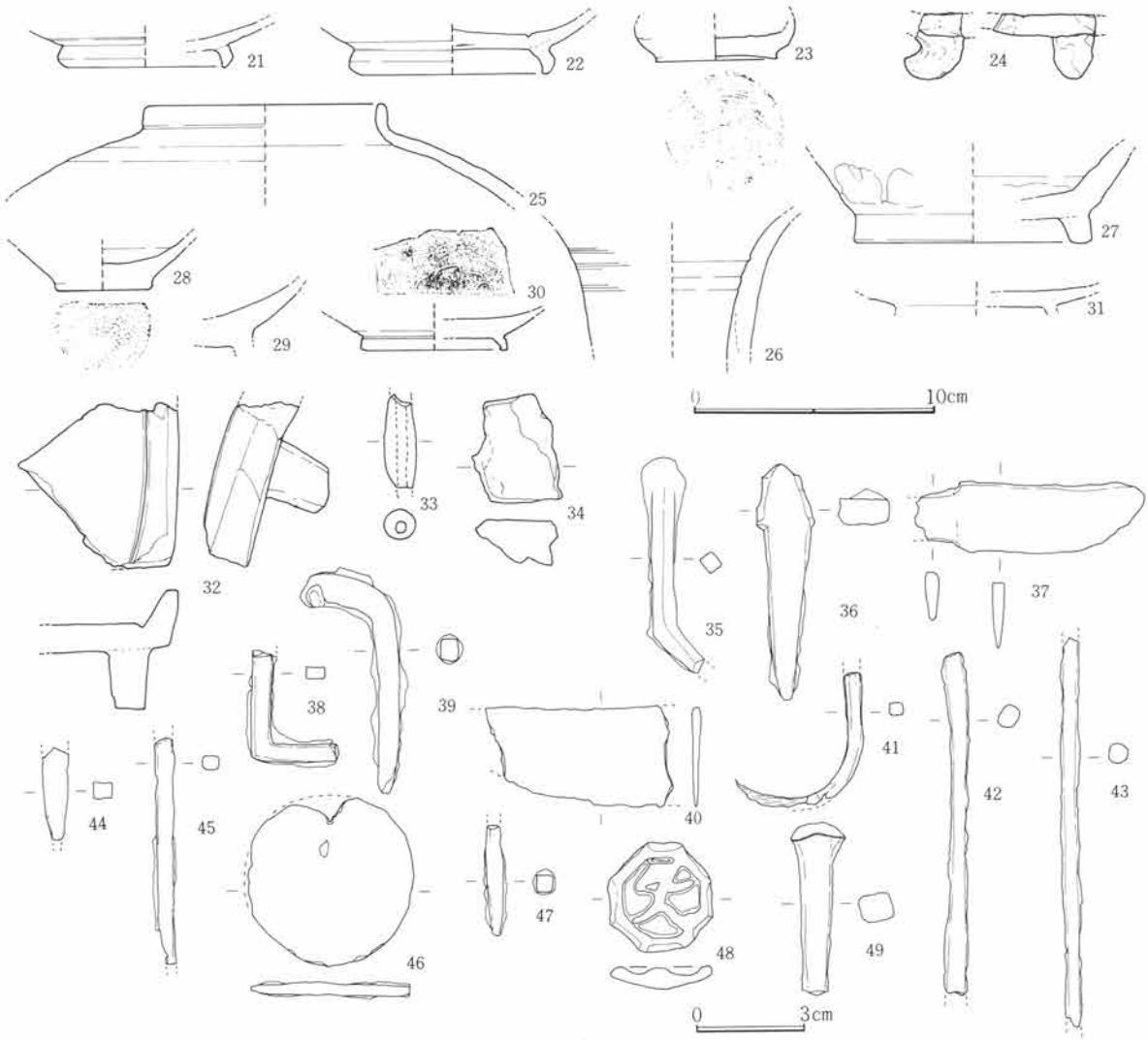


Fig. 384　D区出土遺物（２）

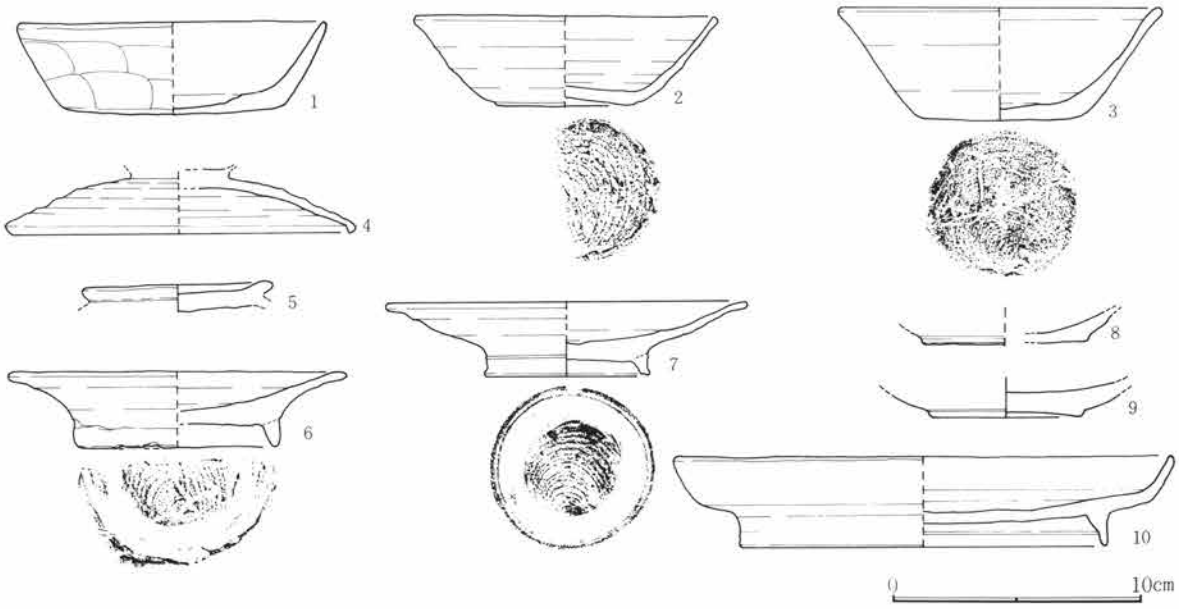


Fig. 385　E区出土遺物（１）

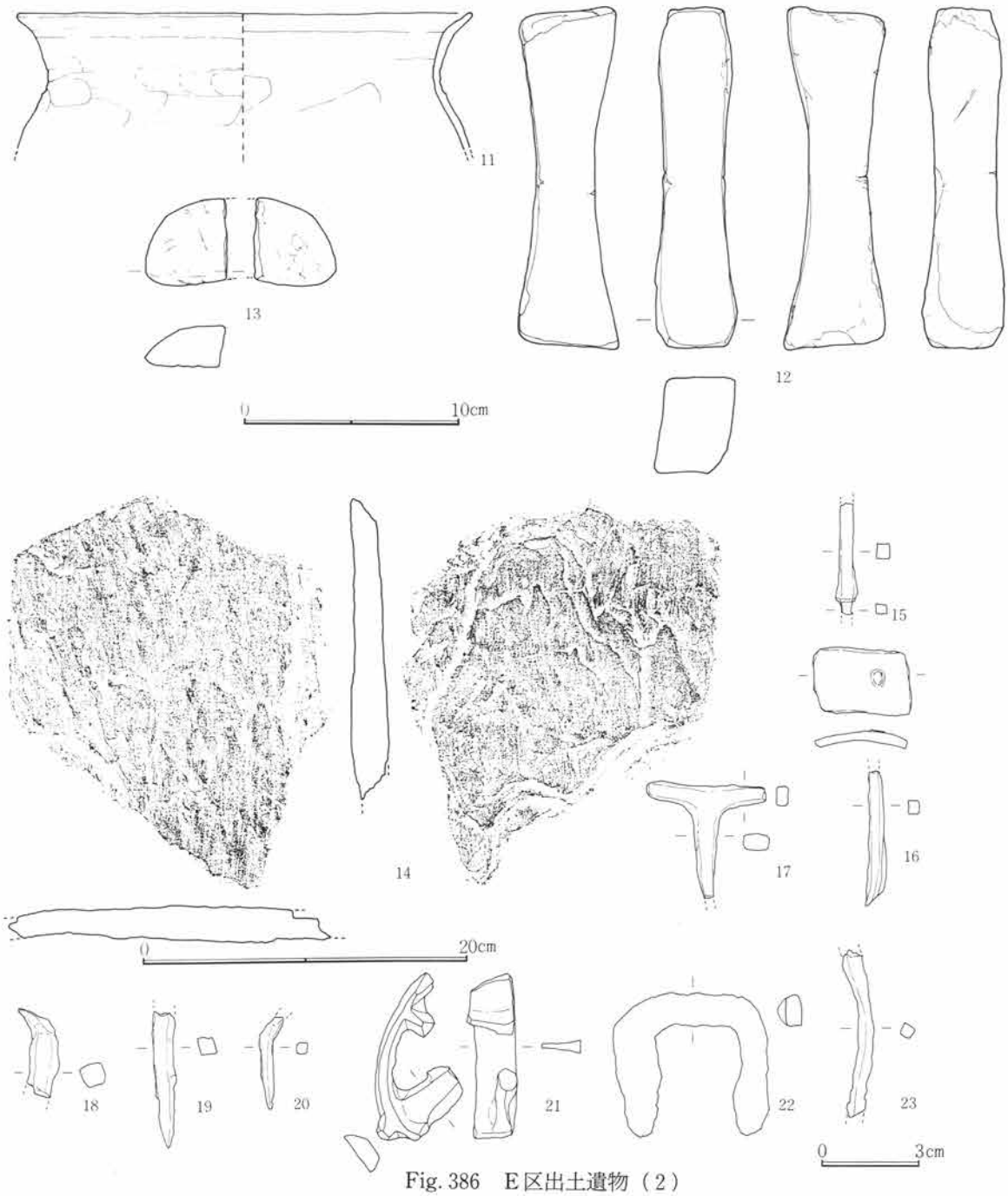


Fig. 386　E区出土遺物（2）

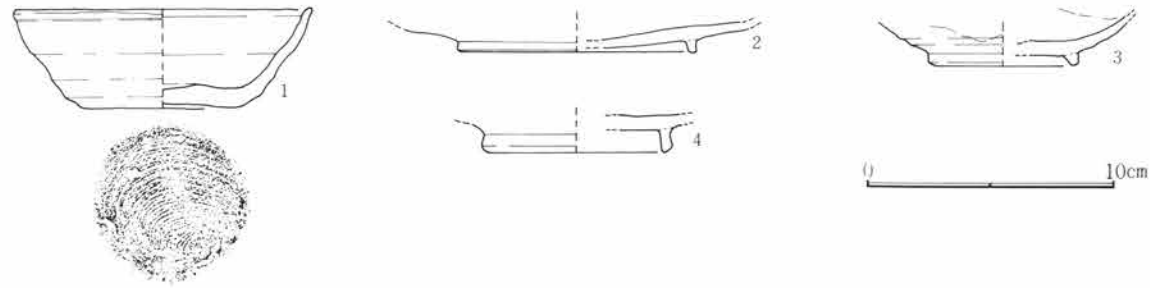


Fig. 387　F区出土遺物

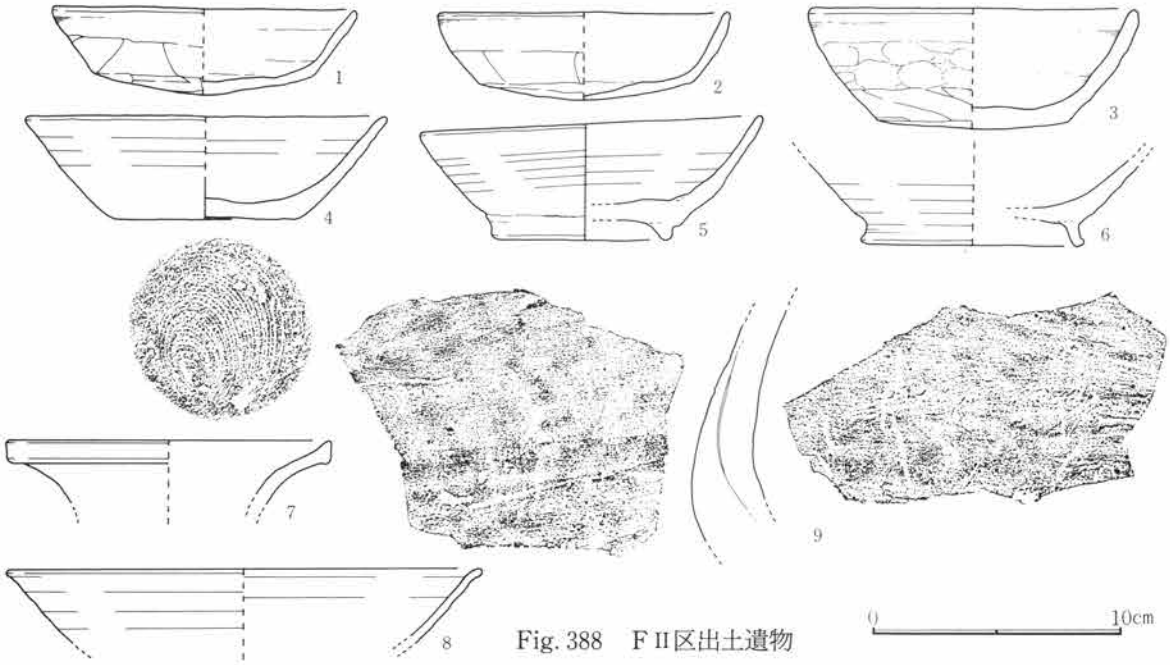


Fig. 388　ＦⅡ区出土遺物

Ｂ～Ｆ区出土遺物観察表（１）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
381－1 119－1	Ｂ区 32Ｂ46	須恵器 杯	完形	12.9×7.0 ×4.3	底部肥厚し深身、体部緩く外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③粗白色細粒混
381－2 119－2	Ｂ区 32Ｂ47	須恵器 杯	⅔	12.0×5.0 ×4.5	底径小さく、深身。体部やや丸味をもち、口縁部大きく外反して開く。口唇部丸く肥厚。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好軟 ②灰 ③密
381－3 119－3	Ｂ区 31Ｂ20	須恵器 杯	⅔	13.0×5.6 ×4.5	底径小さく、深身。体部やや丸味をもち、口縁部強く外反し水平。口唇部肥厚し丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟 ②灰白 ③密
381－4 119－4	Ｂ区 35Ｂ37	須恵器 椀	ほぼ完形	11.4×6.0 ×4.5	体部僅かに丸味をもち、口縁部小さくくびれて肥厚気味。付高台やや高く直立し断面三角。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗砂粒多混
381－5 119－5	Ｂ区 20Ｂ49	須恵器 椀	⅔	14.4×6.2 ×6.0	体部緩く丸味をもつ深身。口唇部小さく外屈。付高台断面矩形で直立。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
381－6 119－6	Ｂ区	須恵器 椀	⅔	15.0×7.0 ×4.6	体部緩く丸味をもち、やや浅身。口縁部緩く外反して開く付高台低く幅広で断面丸い。轆轤整形。	①軟 ②灰 ③やや密輝性細粒混
381－7 119－7	Ｂ区	須恵器 皿	⅔	13.0×7.6 ×2.8	器肉厚い。体部直線的に開く。付高台肥厚し端部丸い。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや密
381－8 119－8	Ｂ区 26Ｂ37	須恵器 皿	⅓	12.8×(6.0) ×3.0	器肉厚い。体部直線的に開く。付高台幅広で断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰白 ③やや粗
381－9 119－9	Ｂ区 29Ｂ35	須恵器 獣足		長6.6×幅 3.5×厚2.9	手捏ね。撫でによる面取り状調整。	①酸化気味やや軟 ②灰橙 ③やや粗
381－10 119－10	Ｂ区 20Ｂ30	灰釉陶器 椀	⅔	13.0×6.4 ×4.2	体部やや丸味をもち、口縁部僅かに外反気味。口唇部丸い。外稜強い三ケ月高台。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①やや軟 ②浅黄橙 ③密
381－11 119－11	Ｂ区 24Ｂ18	土師器 台付甕	胴部下半	－×－×(6.7) 最大幅14.1	腰部から胴部下半丸味をもつ。胴下半縦箆削り。腰部横撫で。	①良好 ②鈍橙 ③やや密
381－12 119－12	Ｂ区	瓦 平瓦	小片	厚3.2	凹面布目後撫で、凸面斜格子文あり。側縁部箆調整。	①良好 ②灰 ③やや粗白色細粒混
381－13 119－13	Ｂ区	石製品 砥石	ほぼ完形	長16.3×幅6.7 ×厚3.0重84g	長方形砥、多面使用、刃痕あり。	流紋岩
381－14 119－14	Ｂ区	石製品 砥石	小片	3.4×3.9× 1.8 重49g	方形砥（長方形）多面使用。	流紋岩
381－15 119－15	Ｂ区50～60 Ｂ39～40	石製品 砥石	小片	3.9×3.6× 1.2 重35g	方形砥（長方形）刃痕あり、欠損面使用。精砥。	流紋岩
381－16 119－16	Ｂ区 55Ｂ40	石製品 滑石	小片	2.3×2.2× 1.1 重8.9g	円柱状になるか。未貫通の穿孔あり、径１cm。外面調整の擦痕あり。	滑石
381－17 119－17	Ｂ区 29Ｂ20	鉄製品 不明	小片	長3.7幅・厚 3.0×0.3	板状の鉄片。緩く湾曲する。鋳造製品の可能性あり。	

Ｂ～Ｆ区出土遺物（２）

Fig.No PL.No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
381－18 119－18	Ｂ区 29Ｂ45	鉄製品 角釘？	両端部 欠損	長3.7幅・厚 0.5×0.4	角釘か。片端はＬ字に曲がる。	
381－19 119－19	Ｂ区 29Ｂ45	鉄製品 鎌	ほぼ完 形	長7.5刃幅 2.0	小型峯部断面矩形。樋部は峯部と明瞭に画される。刃線は直線的で、コミ（柄付部）の角度はほぼ直角。	
382－1 120－1	Ｃ区	須恵器 杯	⅓	10.6×6.0 ×3.5	器肉厚目。腰部僅かにくびれ、体部内湾気味に開く。内面に巻き上げ痕あり。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟　②灰　③やや粗砂粒混
382－2 120－2	Ｃ区 69Ｃ12	須恵器 杯	ほぼ完 形	12.4×5.6 ×3.8	体部やや脹らみをもち口縁部大きく外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③密
382－3 120－3	Ｃ区	須恵器 椀	½	14.6×7.4 ×4.7	体部下位に脹らみをもち、口縁部緩く外反して開く浅身。付高台断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①酸化軟　②灰橙 ③やや粗小石混
382－4 120－4	Ｃ区 65Ｃ10	須恵器 椀	体部½	13.4×－× (3.3)	体部直線的に外傾。口唇部丸くつまむ。内外面燻し焼成。轆轤整形。	①良好　②暗灰　③やや密
382－5 120－5	Ｃ区 65Ｃ30	灰釉陶器 椀	底部⅔	－×8.2× (2.3)	体部丸く張るか。高台外稜やや丸味のある三ケ月高台。漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③やや密
382－6 120－6	Ｃ区 35Ｃ35	須恵器 転用硯？	壺底部 小片	厚2.0	見込部摩滅著しく光沢あり。転用硯の可能性が大きい。	①良好　②暗灰　③粗白色粒多混
382－7 120－7	Ｃ区 表土	緑釉陶器 椀　？	底部小 片		器肉厚手。内外面施釉、発色は淡緑色。内面篦磨きあり。東海産。焼成は須恵質。	①良好　②灰　③やや密
382－8 120－8	Ｃ区 表土	石製品 砥　石	小片	(4.1)×3.4× 厚1.2重31.2g	肉薄な長方形砥。側面使用。石質やや硬目。	流紋岩
382－9 120－9	Ｃ区 55Ｃ20	銅製品 きせる	吸口	4.0×1.3× 厚1.0	管内に竹管材残る。	
382－10 120－10	Ｃ区 65Ｃ10	鉄製品 鏃　？		長8.0幅・厚 0.5	片端部は幅0.8、厚0.4cmの扁平になる。	
382－11 120－11	Ｃ区 65Ｃ10	鉄製品 角釘？	両端部 欠損	長7.7幅・厚 0.5	頂・先端部を欠損する角釘か。	
382－12 120－12	Ｃ区 40Ｃ45	鉄製品 角　釘	先端部 欠損	長3.2幅・厚 0.5×0.3	断面やや扁平な角釘。頂部折頭式か。	
382－13 120－13	Ｃ区 69ｃ12	鉄製品 角　釘	先端部 欠損	長4.9幅・厚 0.7×0.6	頂部鋲形の円頭式角釘か。	
383－1 120－1	Ｄ区 表土	土器 小　杯	¼	11.0×6.4 ×2.4	体部直線的で僅か外反気味に開く、轆轤整形。左回転糸切り。	①やや軟　②橙　③やや密
383－2 120－2	Ｄ区 45Ｄ15	須恵器 杯	½	14.0×7.0 ×4.5	底部小さく突出。体部内湾気味で丸味をもって開く。轆轤整形。回転糸切り。	①良好　②灰白　③やや密
383－3 120－3	Ｄ区45Ｄ 35～40	須恵器 椀	底部欠 損	15.2×－× (4.2)	体部轆轤目強く、大きく波うって外反気味に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
383－4 120－4	Ｄ区 40Ｄ30	須恵器 椀	⅓	14.0×7.4 ×4.6	体部直線的に外傾し、口縁部強く外反して開く。付高台やや低く断面矩形。轆轤整形。回転糸切り。	①やや軟　②灰褐 ③やや粗
383－5 120－5	Ｄ区 55Ｄ00	須恵器 椀	½	15.4×7.8 ×5.2	腰部から体部丸味をもち、口縁部外反して開く。付高台作り丁寧で断面丸味のある三角内湾して立つ。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②褐灰 ③密
383－6 120－6	Ｄ区 40Ｄ00	須恵器 椀	¼	16.3×7.0 ×7.2	底径小さく、体部僅かに丸味をもつ深身。口縁部緩く外反して開く。付高台極めて低い。轆轤整形。回転糸切り。	①軟　②灰白　③密
383－7 120－7	Ｄ区 50Ｄ31～33	灰釉陶器 椀	¼	16.2×7.6 ×4.9	体部下半に丸味をもつ上半は直線的に開く。高台やや幅広な三ケ月高台。内外面施釉。光ケ丘１号～大原２号窯式期	①良好　②灰　③密
383－8 120－8	Ｄ区 47Ｄ45	灰釉陶器 椀	体部 ⅓	16.8×－× (3.6)	体部丸味をもち内湾して開く。口唇部小さく外屈して尖がる。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰　③密
383－9 120－9	Ｄ区 50Ｄ20	灰釉陶器 椀	底部 ⅔	－×5.0× (1.9)	高台径小さく、三ケ月高台。体部丸味をもつ。内面体部刷毛塗り施釉、外面施釉有無不明。光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰　③密
383－10 121－10	Ｄ区 57Ｄ37	灰釉陶器 椀	底部小 片	－×6.6× (1.7)	高台やや高く断面丸い。内面施釉、外面有無不明。虎渓山１号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
383－11 120－11	Ｄ区40～50 Ｄ31～40	灰釉陶器 椀	底部	－×6.8× (2.4)	高台やや高く断面丸味のある矩形で内湾気味に立つ。腰部丸味をもつ、漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
383－12 120－12	Ｄ区 40Ｄ30	灰釉陶器 皿	⅓	13.8×6.8 ×2.8	体部丸味をもち、口唇部強く折れて外屈。高台やや幅広な三ケ月高台。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰　③密
383－13 120－13	Ｄ区37～38 Ｄ30～35	灰釉陶器 皿	⅓	14.6×7.3 ×3.0	体部直線気味。口唇部強く折れ丸まって外屈。高台断面矩形。内外面刷毛塗り施釉。光ケ丘１号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
383－14 121－14	Ｄ区60～65 Ｄ23～29	灰釉陶器 皿	底部½	－×6.8× (1.5)	高台やや低く断面矩形気味。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密

Ｂ～Ｆ区出土遺物観察表（３）

Fig.No PL.No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
383－15 121－15	Ｄ区 40Ｄ30	灰釉陶器 皿	底部½	－×7.0× (2.0)	高台丸味のある矩形。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	
383－16 121－16	Ｄ区 50Ｄ20	灰釉陶器 皿	底部¼	－×7.0× (1.2)	高台低く角高台。内面厚く全面施釉。黒笹14号窯式期。	①良好　②灰　③やや密
383－17 121－17	Ｄ区53～57 Ｄ42～48	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.6× (1.7)	高台やや低く断面丸味のある矩形。大原２号窯式期。	①やや甘い　②灰白 ③密
383－18 121－18	Ｄ区 60Ｄ30	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.0× (2.5)	高台断面丸味をもち、内湾して立つ。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	
383－19 121－19	Ｄ区55～60 Ｄ30	灰釉陶器 椀	底部½	－×6.6× (2.5)	高台やや崩れた三ケ月高台。内外面漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③やや粗
383－20 121－20	Ｄ区 50Ｄ30	灰釉陶器 椀	底部½	－×7.8× (2.0)	高台やや高く、丸味のある三ケ月高台。内面施釉。外面有無不明、大原２号窯式期。	①良好　②灰　③緻密
384－21 121－21	Ｄ区45～46 Ｄ23～25	灰釉陶器 皿	底部¼	－×7.2× (1.9)	高台断面丸味をもち内湾気味に立つ。漬け掛け施釉、大原２号窯式期。	①良好　②灰　③密
384－22 121－22	Ｄ区35～40 Ｄ35～40	灰釉陶器 椀	底部½	－×8.5× (2.3)	器肉厚い。高台断面丸く内湾して立つ。作りやや雑。虎渓山１号窯式期。	①良好　②灰　③やや密
384－23 121－23	Ｄ区 48Ｄ29	灰釉陶器 耳皿？	底部	－×5.0× (2.2)	底部小さく突出。右回転糸切り無調整。内面施釉。	①良好　②灰　③密
384－24 121－24	Ｄ区 表土	灰釉陶器 短足盤	脚	高さ1.6	篦削りによる丁寧な整形。	①良好　②灰　③密
384－25 121－25	Ｄ区 40Ｄ30	灰釉陶器 短頸直壺	口縁部 ⅔	10.0×－× (4.1)	肩部丸味をもって大きく開く。口縁部短かく直立。外面施釉。	①良好　②灰　③密
384－26 121－26	Ｄ区 50Ｄ30	灰釉陶器 長頸瓶	頸部	－×－× (5.8)	内外面施釉。	①良好　②灰　③やや密
384－27 121－27	Ｄ区 52Ｄ24	須恵器 瓶	底部¼	－×9.8× (3.9)	高台断面矩形。体部内外面に自然釉。	①良好　②灰　③密
384－28 121－28	Ｄ区 60Ｄ40	緑釉陶器 小椀	底部⅔	－×4.0× (2.1)	底径小さく著しく厚い。体部内湾気味に立つ。内外面施釉、発色はくすんだ緑色。底部無釉。右回転糸切り。近江産。	①良好須恵質　②灰 ③やや密白色微粒混
384－29 121－29	Ｄ区60～65 Ｄ35～40	緑釉陶器 椀	底部小片	底部小片	底部厚く、削り出しのベタ高台。内外面施釉。発色はくすんだ暗灰緑色。畿内産。	①良好　②灰　③緻密
384－30 121－30	Ｄ区 48Ｄ24	緑釉陶器 皿	底部⅓	－×6.0× (1.6)	付高台器肉薄く内湾気味に立つ。内外面篦磨き、見込部に陰刻花文を施す。内外面施釉、発色は明緑色。東海産。	①良好　②灰　③やや密
384－31 121－31	Ｄ区 45Ｄ41	緑釉陶器 皿	底部小片	－×－× (1.0)	付高台。内外面施釉、発色は淡緑色。内外面に篦磨きを施す。見込部に円形陰刻文。東海産。	①軟　②白　③密
384－32 121－32	Ｄ区 57～65 Ｄ30～40	須恵器 風字硯	硯尻部 小片	(6.7)×(6.5) ×4.9	風字硯の硯尻か。硯尻を除き断面台形の縁が巡ると考えられる。硯尻右側部に高い脚が貼付される。全体が篦削り調整。硯面内側に使用による摩滅が見られる。	①良好　②灰　③やや密
384－33 121－33	Ｄ区60～65 Ｄ23～29	土製品 土錘		(3.8)×1.3 ×1.2	葉巻き型。手捏ね。径0.5cmの穿孔。	①やや軟　②淡黄 ③密
384－34 121－34	Ｄ区	軽石 砥石		4.5×3.8×1.8 重16.1g	不正方形。多面使用。	
384－35 121－35	Ｄ区50～40 Ｄ30～40	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長6.0 幅・厚0.6	頂部錆著しく不明。先端部付近で折れる。	
384－36 121－36	Ｄ区45Ｄ 25～30	鉄製品 不明		長6.3幅・厚 1.2×0.6	扁平で先端は細まり片端は広がる。	
384－37 121－37	Ｄ区35～ 40Ｄ30	鉄製品 刀子？	柄部欠 損	長6.0幅・厚 1.2×0.3	刀部長さ５cm、刀子か。柄部幅1.2cm。	
384－38 121－38	Ｄ区35～ 40　Ｄ30	鉄製品 角釘	両端部 欠損	長3.1幅・厚 0.7×0.5	断面やや扁平な角釘か。Ｌ字状に折れる。	
384－39 121－39	Ｄ区60 Ｄ35～40	鉄製品 釘状	完形	長6.3径0.8	錆著しく、断面形不明。頂部付近からＬ字状に曲がる。頂部は環状になる可能性あり。	
384－40 121－40	Ｄ区 60Ｄ40	鉄製品 刃物？	刃部	長(5.0)幅・ 厚2.7×0.2	器肉薄く刃線は反る。鉋丁様の刃部か。	
384－41 121－41	Ｄ区 69Ｄ33	鉄製品 角釘	頂部欠 損	長3.5幅・厚 0.3	先端部錆著しく細まる。Ｕ字状に曲がる。	
384－42 121－42	Ｄ区 63Ｄ25	鉄製品 棒状		長9.2幅・厚 0.4	両端部が僅かにふくらむ棒状製品。	
384－43 121－43	Ｄ区 63Ｄ25	鉄製品 棒状		長10.5 幅・厚0.5	棒状製品。	
384－44 121－44	Ｄ区 30Ｄ40	鉄製品 角釘？	先端部	長2.5 幅・厚0.5	角釘の先端部か。	

Ｂ～Ｆ区出土遺物観察表（４）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
384—45 121—45	D区60～64 D23～29	鉄製品 角釘？	両端部 欠損	長6.2 幅・厚0.4	角釘か。	
384—46 121—46	D区60～64 D23～29	鉄製品 円板状	縁僅か に欠損	径4.5厚0.2	紡錘車の紡輪部か。	
384—47 121—47	D区49 D35～40	鉄製品 角釘	両端部 欠損	長3.2幅・厚 0.4	断面矩形をなし角釘か。	
384—48 121—48	D区 50D30	鉄製品 玩具	完形	径3.0厚0.4	八角ベーゴマ。裏面は僅かに凸る。表面は文字が不明。	
384—49 121—49	D区 50D30	鉄製品 角釘	先端部 欠損	長(4.1)幅・ 厚0.7×0.7	頂部折頭式の角釘か。	
385—1 122—1	E区 57E43	土師器 杯	⅓	12.4×8.8 ×3.7	平底から体部直線的に開く。底部不定方向篦削り。体部横位篦削り。口唇部撫で。	①良好　②橙　③粗
385—2 122—2	E区 65E445属	須恵器 杯	¼	12.2×5.6 ×3.5	底径小さい。腰部から体部に丸味をもつ。口唇部丸まる。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②暗灰　③粗白色粒多混
385—3 122—3	E区 66E465属	須恵器 杯	⅓	13.0×6.0 ×4.5	底径小さく、体部深目で直線的に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰　③密
385—4 122—4	E区 62E435属	須恵器 蓋	¼	14.0×－× (2.6)	天井部扁平で緩く丸味をもつ。口縁部短かく強く内屈して折れる。環状摘み。轆轤整形。天井部回転篦削り。	①良好　②灰　③やや密黒色細粒多混
385—5 122—5	E区 63E455属	須恵器 蓋	摘み部	－×7.6× (1.1)	大型の平扁環状摘み。轆轤整形。	①やや軟　②灰　③やや密
385—6 122—6	E区 66E46	須恵器 皿	¼	13.4×8.0 ×3.0	体部外反気味に開く。付高台、やや高く直立し、肉厚で端部丸い。轆轤整形。右回転糸切り。	①やや軟　②灰白　③密
385—7 122—7	E区 61E435属	須恵器 皿		14.4×6.6 ×2.9	体部中位小さく張り、上半は外反して開く。付高台、断面矩形。轆轤整形。右回転糸切り。	①酸化軟　②淡橙　③密
385—8 122—8	E区	緑釉陶器 椀		－×6.6× (1.3)	底部削り出しのベタ高台。緑釉の発色はオリーブ灰。	①良好　②白　③密
385—9 122—9	E区	緑釉陶器 椀	底部½	－×6.2× (1.4)	見込部・外面不方向篦磨き、底部削り出しのベタ高台。緑釉の発色は淡いオリーブ灰。畿内産。	①良好　②白　③密
385—10 122—10	E区 45E43	須恵器 盤	⅓	20.0×14.6 ×3.6	腰部で強く折れ、体部短かく立つ。付高台、端部細まり直線的に立つ。轆轤整形。底部回転篦調整。	①酸化やや軟　②橙　③密
385—11 122—11	E区 57E47埋土	土師器 甕	口縁部 ⅓	21.0×－× (6.2)	肩部にやや張りをもつ。口縁部下位は直立し、上半は外傾して開くコの字口縁。口縁部横撫で。肩部横篦削り。	①良好　②橙　③やや密細砂混
386—12 122—12	E区 62E42	石製品 砥石	完形	15.6×4.6 ×4.4	長方体。長軸４面の使い減り著しい。重335.7g。	流紋岩(砥沢) 流紋岩？
386—13 122—13	E区 45E50	石製品 砥石	小片	40×(3.8) ×1.9	不定形。多面使用。刃痕あり。重32.2g。	
386—14 122—14	E区 38E08	板碑	上半部 ⅓	(18.5×19. 8)	頂部山形～主尊部の破片なれど、二条線、種子は見られない。磨滅の度合いも少なく、種子は極めて浅い彫りか。	緑泥片岩
386—15 122—15	E区	鉄製品 鉄鏃	箆被 茎小片	長(3.4)	箆被から茎にかけての小片。箆被部長(2.9)cm・幅・厚0.5×0.4cm。茎長(0.5)cm ・幅・厚0.3×0.3cm	
386—16 —	E区 64E42	鉄製品 不明		長3.0幅1.8 厚0.3	板状の鉄製品、片面に鋲の痕跡あり。	
386—17 122—17	E区 60E39	鉄製品 不明		長3.5 幅3.2×厚0.5	Ｔ字状鉄製品。垂直部の端部は尖がる。	
386—18 122—18	E区	鉄製品 角釘	頂部	長2.7幅・厚 0.8×0.6	頂部折頭式角釘。	
386—19 122—19	E区	鉄製品 角釘	先端部	長4.0幅・厚 0.6×0.5	角釘先端部。	
386—20 122—20	E区	鉄製品 角釘	完形か	長3.0幅・厚 0.4	短かい角釘。頂部折頭式か。	
386—21 122—21	E区	鉄製品 不明	両端欠 損	長(0.5)幅・ 厚0.4×0.4	角釘か。	
386—22 122—22	E区	鉄製品 不明	完形	長4.5幅4.7	Ｕ字形鉄製品。断面矩形。幅・厚は0.9×0.5cm鎹か。	
386—23 122—23	E区	鉄製品 角釘	頂・先 端欠損	長5.0幅・厚 0.4	頂部折頭式の角釘か。	
386—24 122—24	E区 64E42	鉄製品 角釘	両端欠 損	長(4.2) 幅・厚0.4	頂部、先端部欠損の角釘。	
387—1 123—1	F区 61F4	須恵器 杯	⅓	12.0×6.4 ×3.9	底径小さく、体部上位に張りをもつ。口唇部尖がり気味で外傾。口唇部に油煙状付着物。轆轤整形。	①やや軟　②灰　③やや密小石混

Ｂ～Ｆ区出土遺物観察表（５）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値（cm） 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成　②色調 ③胎土
387－２ 123－２	Ｆ区 66Ｆ２	灰釉陶器 耳　皿	底部¼	－×9.6× (1.2)	内面に厚く施釉。発色は濃い灰緑色。高台は低い角高台。黒笹14号窯式期。	①良好　②灰　③やや粗
387－３ 123－３	Ｆ区 64Ｆ４	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×6.0× (2.0)	腰部に丸味をもつ。高台低い三ケ月。内外面漬け掛け施釉。見込部摩耗著しく光沢あり。大原２号窯式期。	①良好　②灰　③やや密
387－４ 123－４	Ｆ区 58Ｆ１	灰釉陶器 椀	底部¼	－×3.8× (1.5)	高台やや肥厚し断面に丸味。内外面施釉。虎渓山１号窯式期？	①良好　②灰　③やや密
388－１ 123－１	Ｆ区 埋土	土師器 杯	¼	12.2×－× 3.4	底部僅かに張り丸底気味。体部外反気味に開く。体部上半横撫で。下半は横１段の篦削り、底部不定方向篦削り、内面横撫で。見込部縁辺に指頭痕。	①良好　②鈍い橙 ③やや密金雲母混
388－２ 123－２	Ｆ区 埋土	土師器 杯	½	11.7×－× 3.5	底部僅かに張り丸底気味の体部内湾気味に開く。体部上半横撫で。下半は横１段の篦削り。底部不定方向篦削り。内面横撫で。見込部窪み指頭痕。	①良好　②鈍い褐 ③やや密金雲母混
388－３ 123－３	Ｆ区 埋土	土師器 杯	¼	13.1×7.5 ×5.0	底部僅かに丸味。体部内湾して開き深目。器肉厚い。体部上位横撫で。中位２段の指頭痕。下位横・斜篦削り。底部不定方向篦削り。内面横撫で。	①良好　②橙　③やや粗茶色粒混
388－４ 123－４	Ｆ区	須恵器 杯	⅓	14.4×7.0 ×4.1	体部直線的に開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好　②灰　③やや粗
388－５ 123－５	Ｆ区	須恵器 椀	½	13.6×7.2 ×5.0	腰部やや丸く張り、体部内湾気味に開く。付高台作り雑。	①良好　②灰白　③やや密
388－６ 123－６	Ｆ区	須恵器 椀	底部	－×8.8× (3.4)	腰部張りなし。付高台やや高く断面矩形。轆轤整形。	①良好　②灰　③やや密
388－７ 123－７	Ｆ区	灰釉陶器 瓶	口縁部 小片	13.0×－× (2.5)	頸部上半は強く外反して開き、口縁帯は直立する。内外面施釉。	①良好　②灰白　③緻密
388－８ 123－８	Ｆ区	緑釉陶器 椀	口縁部 小片	19.0×－× (3.0)	体部丸味少なく、口唇部丸まって小さく外屈。内外面施釉釉調はオリーブ灰を呈し部分的黄色を呈す。	①良好　②灰　③密
388－９ 123－９	Ｆ区	須恵器 大　甕	破片		頸部外面より貼り合せ痕明瞭。	①良好　②灰　③やや密

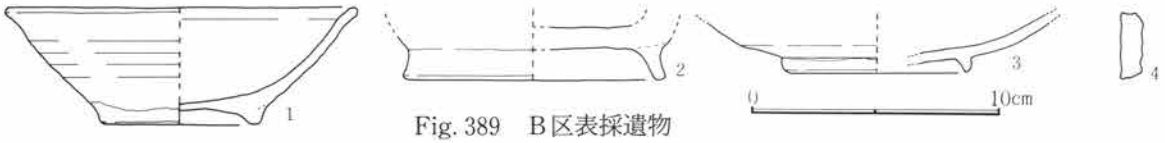


Fig. 389　Ｂ区表採遺物

Fig. 390　Ｃ区表採遺物

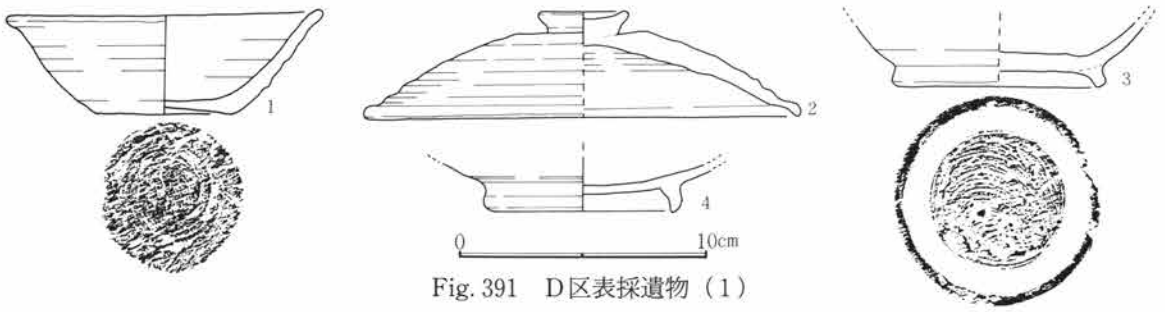


Fig. 391　Ｄ区表採遺物（１）

Fig. 392　D区表採遺物（2）

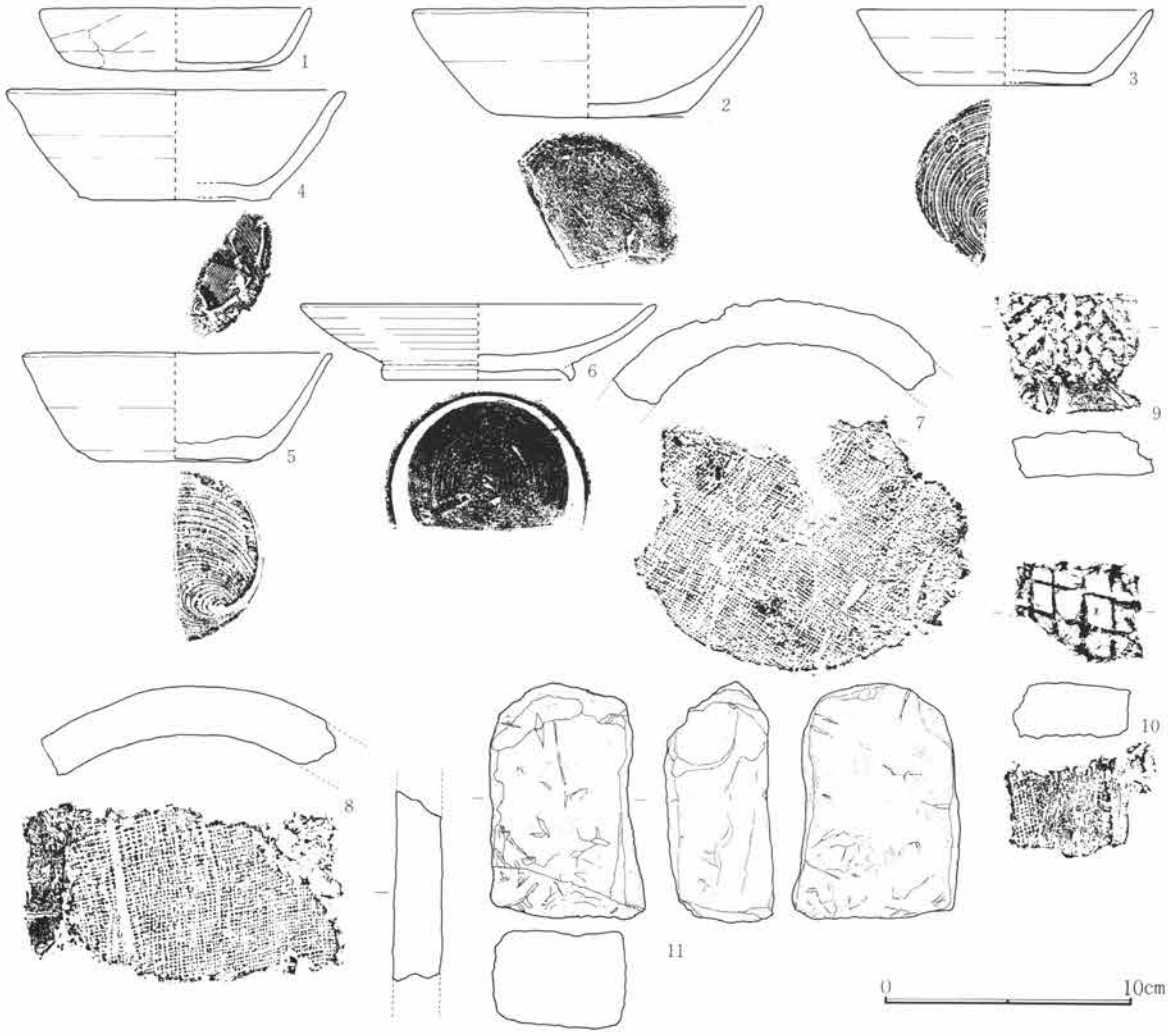


Fig. 393　E区表採遺物

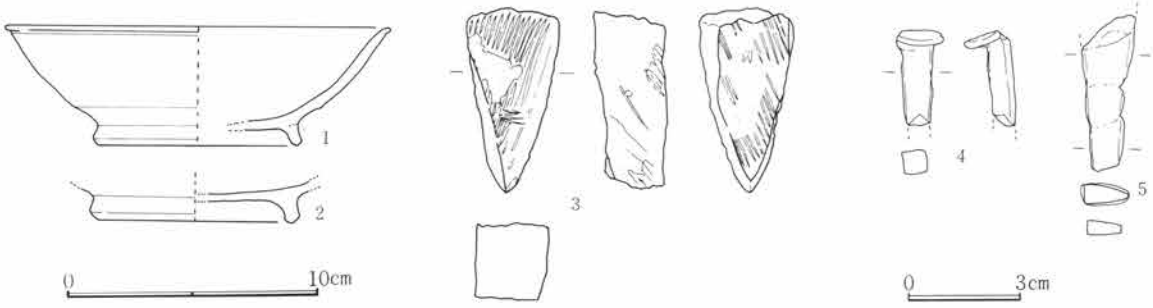


Fig. 394　F区表採遺物

Ｂ～Ｆ区表採遺物観察表（１）

Fig. № PL. №	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
389－1 123－1	Ｂ区表採	須恵器 椀	½	14.0×6.4 ×(4.6)	体部僅かに丸味をもち、口縁部外反して開く。付高台幅広な断面矩形。轆轤整形。	①やや軟 ②灰 ③やや密
389－2 123－2	Ｂ区表採	須恵器 瓶	底部⅓	－×10.4× (2.2)	付高台やや高く断面矩形、ハの字状に開く。	①良好 ②灰 ③やや粗白色粒混
389－3 123－3	Ｂ区表採	灰釉陶器 皿	小片	－×(7.2) ×－	体部中位で小さく折れ、上半は緩く外反して開く。高台断面三角。漬け掛け施釉。虎渓山１号窯式期。	①良好 ②灰白 ③密
389－4 123－4	Ｂ区表採	常滑か？	小片	長1.8 幅0.6		
390－1 123－1	Ｃ区表採	土師器 杯	½	13.3×8.4 ×3.15	底部平底気味。体部中位で大きくくびれ、外反して開く。口縁部丸まって内屈する。体部上半指頭痕著しい。下半弱い横篦削り。底部篦削り。	①良好 ②橙 ③やや密
390－2 123－2	Ｃ区表採	土師器 杯	⅓	11.9×6.35 ×4.3	体部深目で直線的に開く。平底。体部中位指頭後撫で。下半横篦削り。底部篦削り。	①良好 ②橙 ③粗
390－3 123－3	Ｃ区表採	須恵器 杯	完形	12.1×6.5 ×3.4	腰部丸く張り、体部上半は僅かに外反して開く。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③密
390－4 124－4	Ｃ区表採	須恵器 椀	⅓	10.9×5.7 ×4.5	腰部丸く張り、体部上半は直線的に立つ。付高台、断面矩形、轆轤整形。回転糸切り。	①酸化良好 ②淡黄 ③粗砂粒多混
390－5 124－5	Ｃ区表採	須恵器 瓶	口頸部 ⅔	7.4×－ ×(6.85)	口縁帯直立し、上下端細る。頸部に弱い凹線２～３条巡る	①良好 ②暗灰 ③やや密
390－6 124－6	Ｃ区表採	須恵器 小瓶	小片	(5.0)×(7.0) ×(5.0)	胴部丸味なく、肩部角張る。轆轤整形。	①軟 ②灰 ③やや密
390－7 124－7	Ｃ区表採	灰釉陶器 皿？	底部⅓	(-)×(4.5) ×(2.0)	腰部に丸味をもつ。外面に施釉痕。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
390－8 124－8	Ｃ区表採	石製品 砥石		厚1.3 65.1g	全体に細擦痕。部分的に刃痕あり。	
390－9 124－9	Ｃ区表採	瓦 メンコ状		厚1.25径2.3 ×2.6 10.2g	瓦小片の周縁を細かく割る。二次被熱。表面布目。裏面縄目あり。	①良好 ②灰 ③やや密
391－1 124－1	Ｄ区表採	須恵器 杯	ほぼ完形	12.6×5.5 ×3.9	底径小さく、腰部僅かに丸味をもち、体部は緩く外反して開く。轆轤整形。回転糸切り。燻し焼成か。	①軟 ②黒灰 ③やや密
391－2 124－2	Ｄ区表採	須恵器 蓋	⅓	17.4×3.6×4.2 摘み径3.6	体部僅かに丸味をもち、口唇部丸まって短かく折れる。環状摘み。天井部回転糸切り。体部中位まで回転篦削り。	①良好 ②灰白 ③やや密
391－3 124－3	Ｄ区表採	須恵器 椀	底部	－×8.0× (2.5)	腰部僅かに張る。付高台断面やや丸味のある矩形。轆轤整形。右回転糸切り。見込部に焼成前の『×』篦描き。	①良好 ②灰白 ③密
391－4 124－4	Ｄ区表採	灰釉陶器 椀	底部	－×7.6× (7.3)	高台外稜に丸味のある三ケ月高台。内面施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
392－5 124－5	Ｄ区表採	石製品 砥石		5.8×4.8× 3.2 39g	多面体。４面使用。	角閃石安山岩
392－6 124－6	Ｄ区表採	石製品 砥石		7.0×5.5× 3.0 40.7g	多面体。３面使用。	角閃石安山岩
392－7 124－7	Ｄ区表採	土製品 不明	脚部	高6.2幅7.0 厚4.2	獣足型土製品。上端面に窪みをもち、一部に被熱の痕跡がある。下端は平坦をなし、径0.5cm・深4.2cmの小径孔が通る鋳造鋳型か。外面指頭痕調整。	①良好 ②赤褐 ③粗砂粒多混
393－1 124－1	Ｅ区表採	土師器 杯	¼	10・－× 2.5	不安定な平底気味。腰部丸味をもち、体部は内湾気味に開く。体部篦撫で。腰部・底部篦削り。	①良好 ②鈍橙 ③やや密
393－2 124－2	Ｅ区表採	内黒土器 杯	¼	14・7.55 ×4.3	平底気味。体部深身で内湾して開く。口唇部小さく外反。内面黒色処理。篦磨き不明。轆轤整形。腰部篦削り。	①良好 ②橙 ③密
393－3 124－3	Ｅ区表採	須恵器 杯	⅓	11.8×7.0 ×3.0	腰部丸味をもち、体部直線的に外傾。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
393－4 124－4	Ｅ区表採	須恵器 杯	小片	13.5×7.6 ×4.35	腰部くびれて体部下半に張らみをもつ。体部外反気味に開き深身。轆轤整形。回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや密
393－5 124－5	Ｅ区表採	須恵器 杯	¼	12.4×6.6 ×4.3	腰部小さくくびれて、体部下半に脹らみをもつ。体部外反気味に開き、深身。轆轤整形。右回転糸切り。	①良好 ②灰 ③やや粗
393－6 124－6	Ｅ区表採	灰釉陶器 皿	⅓	14.1×7.5 ×3.0	体部内湾気味に開く。高台丸味のある三ケ月高台。輪花皿。体部轆轤目強い。漬け掛け施釉。大原２号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
393－7 125－7	Ｅ区表採	瓦 丸瓦	小片	厚1.65	玉縁付有段式。凸面篦削り。凹面布目。	①良好 ②灰 ③粗白色小石混
393－8 125－8	Ｅ区表採	瓦 丸瓦	小片	厚1.9	凸面撫で調整。凹面布目。	①良好 ②灰 ③粗白色小石多混
393－10 125－9	Ｅ区表採	瓦 平瓦	小片	厚1.75	端部撫で。凸面斜格子文。	①良好 ②灰 ③やや粗白色細粒多混

Ｂ～Ｆ区表採遺物観察表（２）

Fig. No. PL. No.	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
393－10 125－10	Ｅ区表採	瓦 平瓦	小片	厚2.0	凹面布目。凸面斜格子文。燻し焼成か。	①軟 ②暗灰 ③やや密
393－11 125－11	Ｅ区表採	石製品 砥石		厚3.6 重281.5g	長方形定形砥石。四面及び破損面使用。	
394－1 125－1	Ｆ区表採	灰釉陶器 椀	¼	15.4×8.0 ×4.7	体部緩く丸味をもち、口唇部丸まって外屈。高台断面矩形。漬け掛け施釉。	①良好 ②灰 ③密
394－2 125－2	Ｆ区表採	灰釉陶器 椀	底部⅓	－×7.8 ×－	見込部緩く窪む。高台やや高く三ケ月高台。腰部回転篦削り。	①良好 ②灰 ③やや密
394－3 125－3	Ｆ区表採	石製品 砥石		厚2.9cm 重83g	楔形。２面使用。２面は整形。切り出し時の条痕。	流紋岩
394－4 125－4	Ｆ区表採	鉄製品 角釘	身部欠損	長(2.5)幅・厚0.6×0.6	頭部形状は折頭式の角釘。	
394－5 125－5	Ｆ区表採	鉄製品 不明	両端欠損	長(4.0)	上半部は断面三角。下半は矩形を呈す。刀子の刃部から茎部にかけての部分か。幅1.2cm・厚0.5cm。	

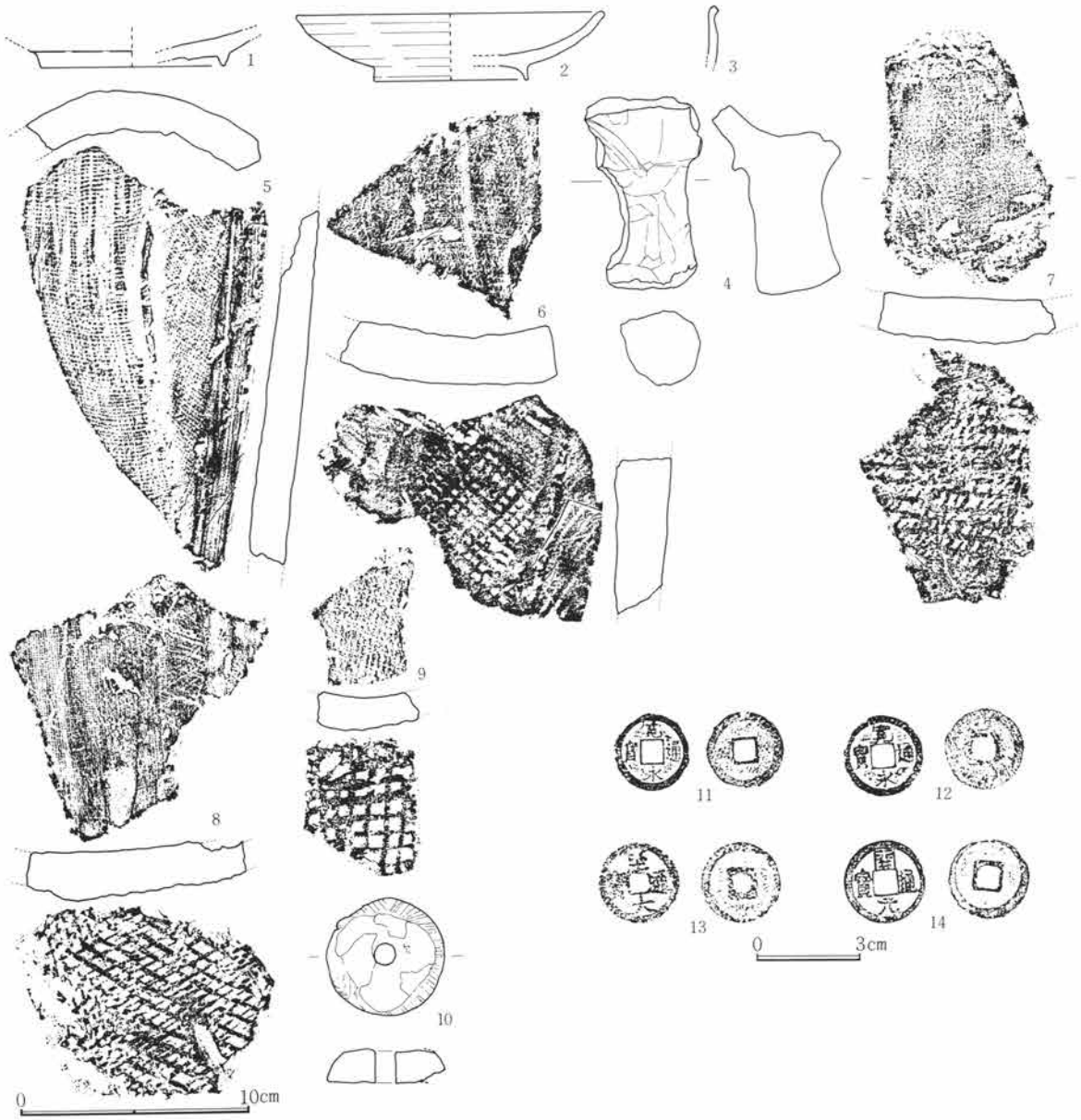


Fig. 395　鳥羽遺物表採遺物

鳥羽遺跡表採遺物観察表

Fig. No PL. No	出土位置 (cm)	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土
395－1 125－1	表採	須恵器 椀	底部小片	－×(8.0) ×－	付高台低く、小さな角高台。轆轤整形。	①良好 ②灰 ③やや密
395－2 125－2	表採	灰釉陶器 皿	小片	13.3×6.6 ×2.85	体部内湾して開く。口唇部小さく外反。高台細く直立。漬け掛け施釉。大原2号窯式期。	①良好 ②灰 ③緻密
395－3 125－3	表採	灰釉陶器 椀	小片		口唇部小さく外傾。	①良好 ②灰 ③密
395－4 125－4	表採	須恵器 火舎	獣足	高6.7、基部径3.0	火舎獣足。手捏ね撫で調整。	①良好 ②灰 ③密
395－5 125－5	表採	瓦 丸瓦	小片	厚1.6	凹面布目。凸面篦調整。織目違い布の合せ目あり。側縁部篦調整。	①良好 ②灰白 ③やや密
395－6 125－6	表採	瓦 平瓦	小片	厚2.05	凹面細布目。凸面斜格子文叩き。側面篦調整。	①軟 ②灰白 ③密
395－7 125－7	表採	瓦 平瓦	小片	厚1.85	凹面布目。凸面斜格子文叩き。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
395－8 125－8	表採	瓦 平瓦	小片	厚1.9	凹面細布目。凸面斜格子文叩き。	①良好 ②灰 ③やや密
395－9 125－9	表採	瓦 平瓦	小片	厚1.3	凹面布目。凸面斜格子文叩き。	①やや軟 ②灰白 ③やや密
395－10 125－10	表採	石製品 紡錘車	ほぼ完形	厚1.4 重44.7g	断面扁平な台形。中央部に径0.9cmの穿孔。	

表採　古銭

Fig. No PL. No	遺構名	部位 残存量	計測値 径(cm)	備考
379－15 118－15	45D15	½	2.4	寛永通宝　鳥越銭？ 銅銭　明暦2年1656
395－11 125－11	表採	完年	2.2	寛永通宝
395－12 125－12	表採		2.2	寛永通宝
395－13 125－13	表採		2.2	至大通宝　銅銭 元　至大3年1310
395－14 125－14	表採		径2.3	開元通宝　銅銭 唐　武徳4年621

第4章　各　　説

第1節　鳥羽遺跡出土の縄文時代遺物

谷　藤　保　彦

本遺跡における縄文時代の遺構・遺物は、これまでにも幾度か報告してきた。その主なものには、先に刊行された「鳥羽遺跡L・M・N・O区」(1990) に掲載した縄文時代後期末葉の住居跡があり、住居に伴なう土器も数点出土していることは周知のごとくである。しかし、検出された遺構は南北に長く延びる調査地からすれば、遺跡の北端の染谷川に接する場所の一角に存在するのみで、南に広がる平担地では検出されていない。散発的に土器や石器が出土するだけで、その量も少なく、縄文時代におけるこの場所が主体を成していなかったことを物語っているのであろう。

では、遺跡内より散発的に出土した遺物についてみてみよう。

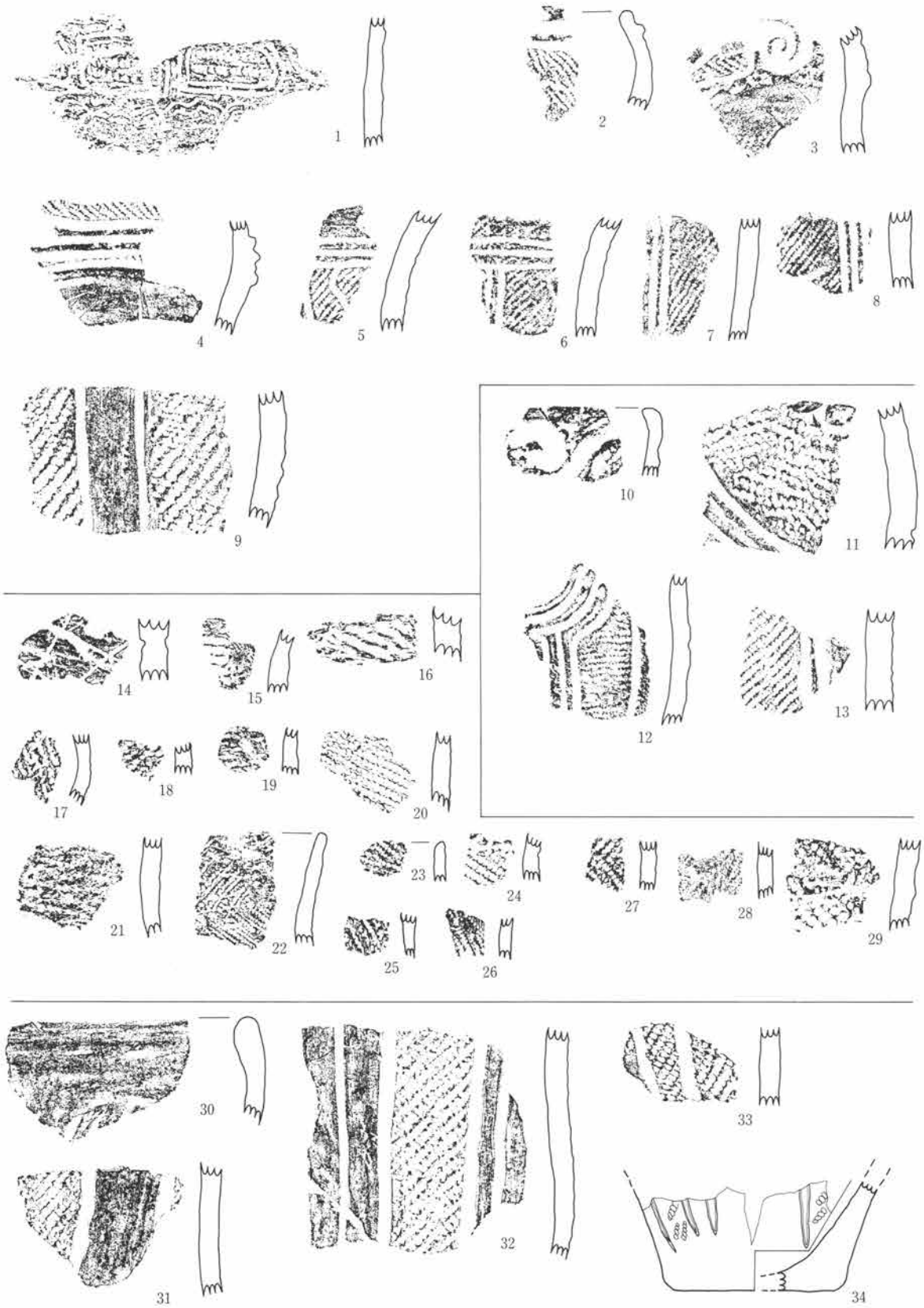
土　器　1は、胴部に半截竹管で横位に楕円を描き、内部に押し引き状の連続刺突を施し、その下部に波状の沈線を施すもの。2・4は、口縁部から頸部にかかるもので、口縁部文様の区画に太い沈線を施こし、内部にRLの縄文を施こすもの。3―10も、口縁部から頸部にかかるもので、口縁部に渦巻状の沈線を施こしつつ文様区画を行ない、内部にRLの縄文を施こしている。5・6は、頸部から胴部にかかるもので、頸部が無文帯となりそれを区画する平行沈線が施こされ、胴部には直線・波状の垂下する沈線が施される。地文には、LRの縄文が施される。7・8は、胴部に直線的に垂下する沈線が施され、地文にLRの縄文を施こす。9・13・31～34は、胴部に直線的な沈線を垂下させ、その内部を磨消している。地文にはやや粗いLRの縄文を施こしている。また、34は底部となるものである。11・12は、胴部に曲線的な沈線を描くもので、地文にLRないしはRLの縄文を施こすものである。30・35は、やや内反する平口縁で、太い沈線ないしは隆帯状のもので文様を区画しているもの。以上の土器は、縄文時代中期に位置づけられるものである。

14～24・27～29は、胎土に繊維を多量に混入するものである。14は、胴部に斜位の沈線を施こすもの。15・16は同一個体のもので、胴部に太いLの線を施こすものである。17～20・23は、胴部にLRないしはRLの縄文を施こすもの。21は、胴部が無文となるもの。22は、平口縁となるもので、器面全体に一本附加条の撚りの異なるRLとLRで羽状に施こすものである。24・27・29は、胴部にLRとRLにより羽状に縄文を施こすもの。25・26は、胎土に繊維を含まないもので、比較的撚りの細かいRLの縄文を施こしたものである。これら14～29の土器は、縄文時代前期に位置づけられるものである。

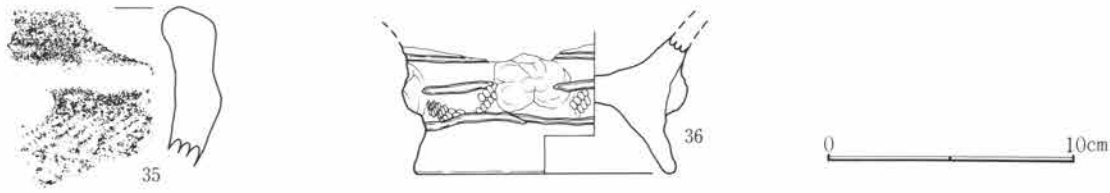
26は、高台の付く底部で、底部のくびれ部に2対の瘤状の隆帯を貼り付け、その間を2条の平行沈線を施こす。さらに、器面は丁寧に研磨され、一部にLRの縄文を施こしているもので、縄文時代後期に位置づけられるものである。

石　器　本遺跡から出土した石器には、2点の石鏃と、スクレイパー1点、さらには石斧と凹石・磨石および剝片類である。このうちのスクレイパーは、表皮を打面とした縦長の剝片を素材に、その側縁部に表面ないしは裏面側から連続的な調整加工を施こしたものである。石斧は、比較的撥形を呈するものが多く、分銅形を呈するものも目につく。又石器の計測値については表に示したとおりである。

以上、本遺跡から散発的に出土した遺物について記してきたが、遺物の多くは縄文時代中期の所産による



鳥羽遺跡出土縄文時代遺物（１）

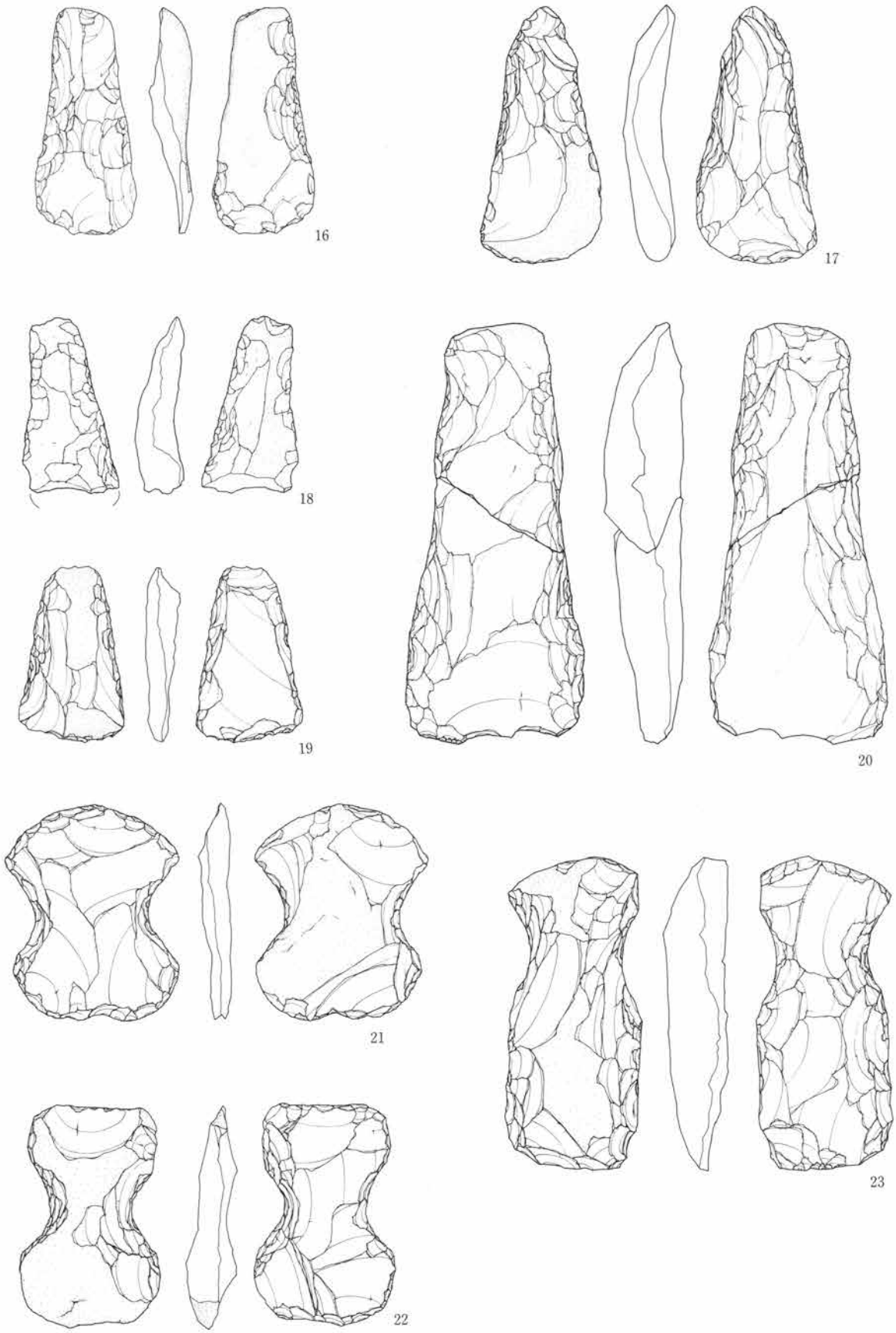


鳥羽遺跡出土縄文時代遺物（2）

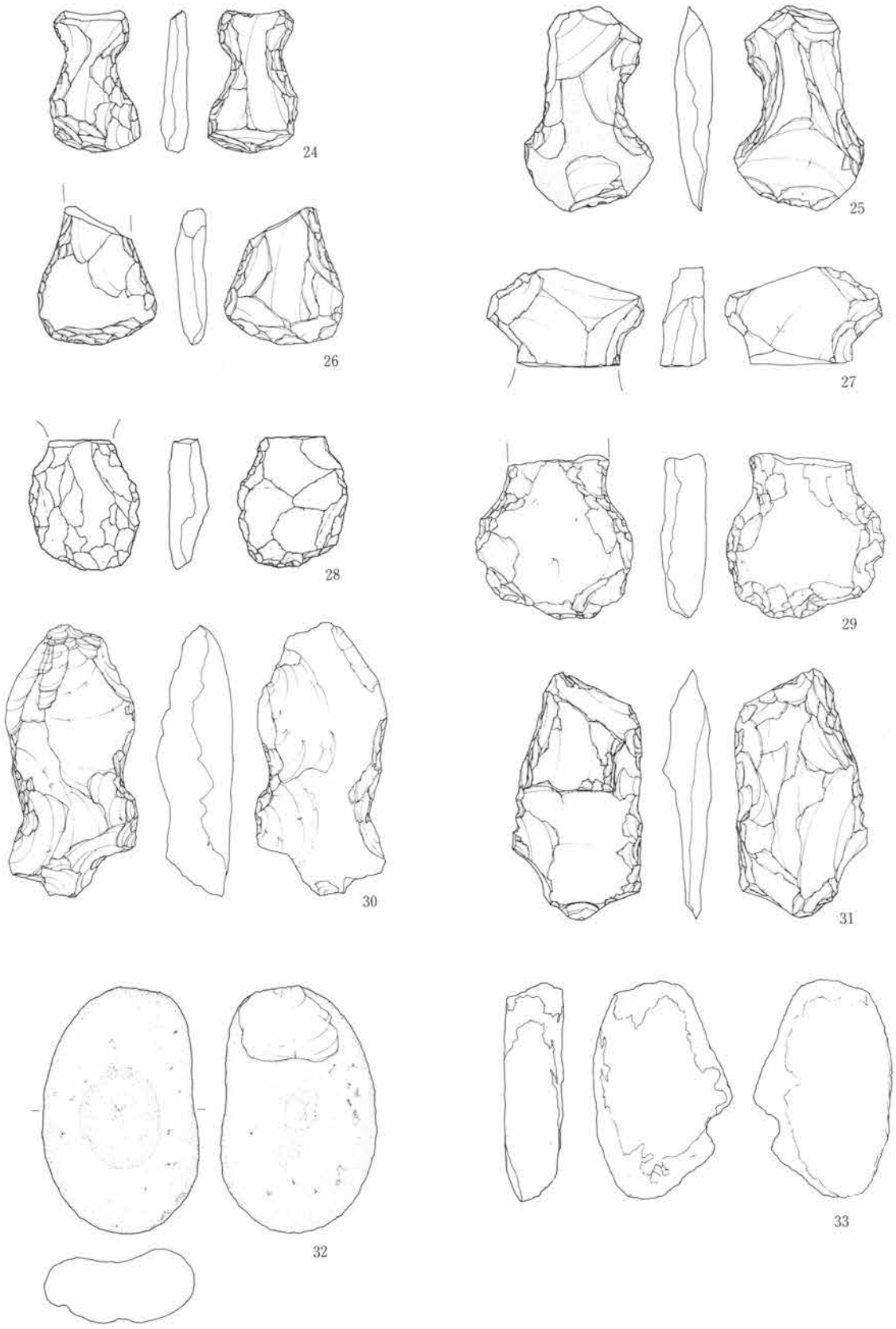
ものであり、勝坂式・阿玉台式から加曽利E式にいたる型式に含まれるものである。また、後期のものも少量出土している。本遺跡の北側、染谷川を狭んだ対岸には本遺跡と同様な平担地が続いており、ここには縄文時代中期後半の大集落が発見されている（上野国分僧寺・尼寺中間地域（1）、1986年　群馬県埋蔵文化財調査事業団)。このような大集落が周辺に点在していることを考えるならば、本遺跡に遺物が散在することも理解ができよう。また、現在のところ、本遺跡以南での縄文時代の遺跡の検出例は皆無に近い状況にあるが、遺物が散在する以上はその周辺に集落の可能性があり、今後の調査の進展をまちたい。

番号	出土位置	種別	長さ	幅	重さ	石材	備考
1	G75	石鏃	1.4	1.6	0.5	チャート	
2	59D285層	石鏃	2.0	1.3	0.9	黒色安山岩	
3	SD-1 48-49 I -12-13	スクレイパー	12.0	4.3	106.1	黒色頁岩	
4	表採	打製石斧	12.0	4.7	145.4	黒色頁岩	
5	SD-37埋土	打製石斧	10.7	4.3	86.7	細粒安山岩	
6	F IISJ 5埋	打製石斧	10.1	3.5	55.5	黒色頁岩	
7	I区フク土	打製石斧	(8.1)	4.6	53.8	細粒安山岩	頭部欠損
8	I区54-56 I 19-21フク土	打製石斧	(6.9)	6.3	102.5	粗粒安山岩	頭部欠損
9	55-60D-45	打製石斧	(6.5)	3.7	28.7	粗粒安山岩	刃部欠損
10	60D30 4・5層	打製石斧	(6.1)	3.4	36.2	黒色頁岩	刃部欠損
11	30-40E-00-10フク土	打製石斧	(7.1)	3.6	49.1	黒色頁岩	頭部・刃部欠損
12	40E 0～579	打製石斧	(7.7)	5.4	110.0	細粒安山岩	頭部・刃部欠損
13	K区 SJ-80	打製石斧	(6.8)	4.4	69.0	細粒安山岩	刃部欠損
14	ISD152・53 I 11・12	打製石斧	(7.5)	6.0	90.3	細粒安山岩	頭部欠損
15	SJ-99№19	打製石斧	12.4	5.5	146.5	黒色頁岩	
16	ISJ 93№11	打製石斧	11.7	5.3	112.9	黒色頁岩	
17	F 2号溝埋	打製石斧	13.2	6.3	192.7	黒色頁岩	
18	表採	打製石斧	(9.1)	5.1	89.5	黒色頁岩	刃部欠損
19	51 0-29 SI	打製石斧	8.2	5.6	90.6	細粒安山岩	
20	C区	打製石斧	21.7	9.3	871.4	凝灰質砂岩	
21	B298・39	打製石斧	11.2	9.0	167.4	黒色頁岩	
22	SD 40　53・4層	打製石斧	11.5	7.3	189.0	黒色頁岩	
23	31トレンチ北端溝内	打製石斧	16.2		446.6	黒色頁岩	
24	SD-105　№1	打製石斧	7.1	4.5	51.5	黒色頁岩	
25	SD-22　№1	打製石斧	10.3	6.5	133.8	黒色頁岩	
26	D区 SD-1010	打製石斧	(6.9)	6.1	69.8	黒色頁岩	頭部欠損
27	45・50E-00	打製石斧	(5.0)	7.0	98.6	細粒安山岩	刃部欠損
28	E区口府大溝	打製石斧	(6.5)	5.6	83.1	黒色頁岩	頭部欠損
29	20B49	打製石斧	(8.2)	8.0	190.9	細粒安山岩	頭部欠損
30	K区 SD-1	打製石斧	13.6	6.7	380.0	黒色頁岩	
31	表採	打製石斧	12.4	6.6	178.4	細粒安山岩	
32	45-35トレンチ	凹石	12.3	7.9	467.8	粗粒安山岩	
33	SD-30　40E	磨石 or 石皿？	(10.9)	(7.0)	331.8	石英閃緑岩	一部のみ残存

鳥羽遺跡出土縄文時代遺物（３）



鳥羽遺跡出土縄文時代遺物（4）



鳥羽遺跡出土縄文時代遺物（５）

第2節　鳥羽遺跡E区の館跡について

石　守　　晃

鳥羽遺跡のE区に調査された館跡には伝承・文献何れも無く、館名・城主・築造年代・存続期間はもとより、発掘調査時点までその存在すら知られていなかった。従って館跡に関する情報は区画整理前の地籍図と航空写真、及び発掘調査による成果であり、以下これらのデータに用いて若干の考察を試みたい。

1　調査された館跡遺構とその変遷

館跡（写真1）は東寄りの約1,000㎡を調査し、堀や土塁の設置に伴うと思われる溝、内郭に調査された掘立柱の柱穴群などを検出した（第1図）。このうち堀は内堀と外堀があるが、以下の調査所見がある。

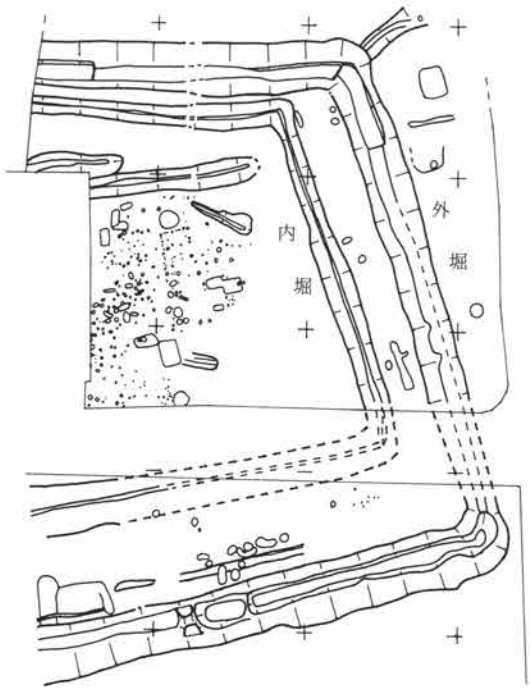
(1)　内堀は確認面で幅3.3m、深さ1m程を測る薬研堀である外堀は同じく幅5.5m程、深さ1.1m程の箱堀であろうと思われるが、底部に掘削時の区画や一部に石垣状の遺構が残されている。

(2)　内堀と外堀は同時併存ではなく、北側の断面観察から外堀の方が新しい。

(3)　内堀の虎口遺構は確認できなかったが、外堀では南側の堀の中程に掘り残しの土橋と橋脚のものと思われる小ピット、そして（担当者間に異論があるが）埋め戻しの土橋を確認することができた。

(4)　掘り残りの土橋は基底幅約2mで、上面が削平されている。これは、土橋が使用されなくなった段階で掘の掘り直しなどによって削平されたものと思われる。

(5)　小ピットは、上述の土橋の上に土橋と同じ方向で2穴づつ2対が調査された。掘り込みが浅いため橋の重量を持たせるようなものではなく、補助的な橋脚であったろうと思われる。2対の間には20～40cmのズレがあり4脚構造の橋であったか2脚でY字形またはT字形の構造を持つ橋脚であったかは特定できない。



第1図　鳥羽遺跡館跡遺構図

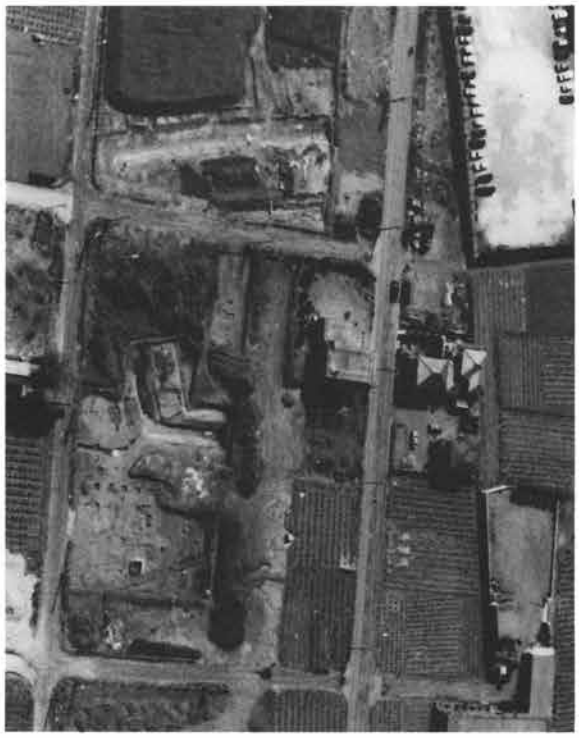


写真1　推定域を含めた鳥羽遺跡館跡全景

写真２　外堀の礫のまとまり（西より）

写真３　礫のまとまり東側の石垣

写真４　外堀南の石垣状遺構（東より）

(6)　土橋の西に隣接して礫のまとまりが出土し（写真２）ている。この礫のまとまりは西に向かって崩れ、はっきりした規格性がないため流れ込みであるとする見解が担当者間には主流であるが、筆者はその中心部分のレベルが近接していること、東南部分に石組のようなもの（写真３）が見られることから、堀を埋め戻してその頂部付近に礫を組む或いは敷くなどした土橋の残欠であろうと考えている。尚、この土橋は地籍図に見られる馬入れ付近に比定されるため、館廃絶後の所産とも考えられる。

以上の所見から、館の変遷は次のように区分できると思われる。

第１期　内堀を使用した時期

第２期　外堀を使用した路等

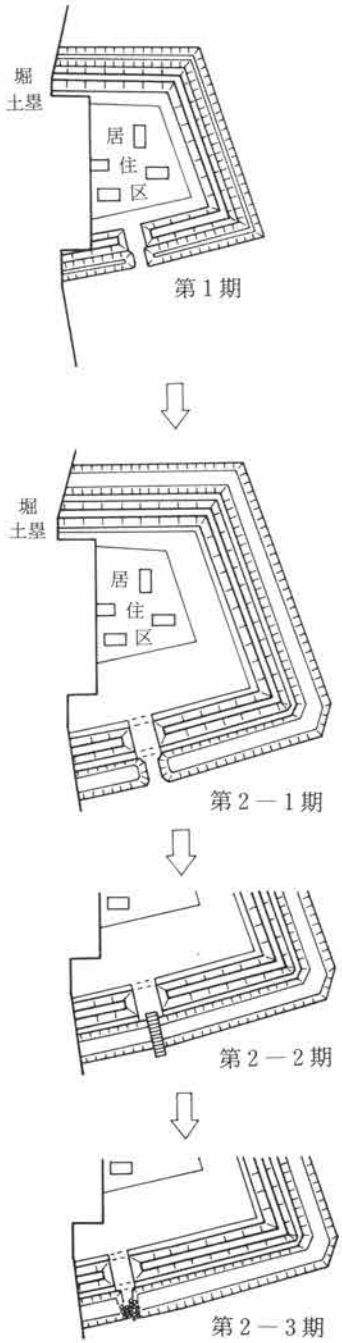
２－１期　虎口に（掘り残しの）土橋を用いた時期

２－２期　虎口に木橋を用いた時期

（２－３期　虎口に埋め戻しの土橋を用いた時期）

東寄りの内堀と外堀の間の断面観察によって、浅い溝ではないかと思われる２カ所の落ち込みが確認されている。この落ち込みはそれぞれ外堀から70cm、内堀から60cmの地点から堀込まれ、前者は幅80cm、深さ15cm程度、後者は同じく幅65cm、深さ22cmを測る。また、こうした溝の残欠と思われるものが南側の外堀の内郭部分にも堀に沿って残されている。これらは上述の第２期に於いて掘られたものと考えられるが、土塁の築造あるいはメンテナンスに伴って土塁の両側に掘られたものと思われる。

掘立柱建物の柱穴は内堀の内郭側の肩から４m程隔てたラインを境に、その内側の地域にまとまって遺存していた。しかし、このラインの外側にはほとんど柱穴を確認することはできなかったため、内堀にも土塁が設けられ、第２期の段階に入っても居住域は第１期の頃と同様の区画内に押さえられていたことが想定される。なお、建物としては２棟が確認されたに過ぎず、建物の種類、使用状況などを特定することはできなかった。



第２図　館跡変遷概略図

第3図　館跡周辺地籍の状況　　（上1：10000、下1：2500　染谷川は河川改修以前の流路）

2　地籍図に見られる館跡とその周辺

(1)　館本体の範囲と形態

館跡の西寄りの部分は調査対象外であり、当該地域は区画整理が終わっていたので、遺構の調査所見を併せて、以下地籍図によって館跡及びその周辺を検討してみたい。(第3図)

調査対象地域で確認された東・南・北の堀は何カ所かで細長い区画として比定することができた。

路線外の区画のうち西の堀に比定されるのは、前橋市と群馬町の境を為す、凡そ南北に走行する水路の東側に沿う細長い土地と、その東に平行する幅25mほどの全体として長方形になる区画である。南と北の堀のうち内堀に比定される土地は西行して幅25mの長方形の区画の東辺に接し、外堀に比定される区画は同じく市町境の水路の東に接する細長い土地に至っている。

(2)　館の周囲の区画

地籍図を観察すると館跡の周囲に館を包むような区画が東側で40～50m、北側で30mの幅で見られる。南側は外堀に沿ってその南に見られる10m幅のものが該当すると思われるが、内堀の外周として見ると外堀を含めた約30m幅の区画となる。西側についても内堀の外周として見れば、幅25mの長方形の土地が該当する。

(3)　館周辺の溝

館跡の周辺では何れも浅間山噴出のＢ軽石を含む、中世の所産と考えられ、江戸時代中頃までは溝または窪地として残っていたと思われる、幅３～６ｍの溝が何条か調査されている。

前橋市と群馬町の境には水路及びこれに沿う細長い区画の土地が弓なりに西側に張り出しており、本遺跡ではＣ・Ｄ区でその一部を、またＩ・Ｊ区でこの弓なりの区画の延長線上の部分を調査している。前者はSD 38溝（SD 1010溝）であり縄文時代以降に埋没した谷地形を掘削して造られ、後者はＩ・Ｊ１号溝で流水の痕跡を残している。SD 38号溝はＤ区で東に折れているが、この部分から SD 38号溝などの乗る弓なりの区画の中で溝が切れる範囲は特定できないが、少なくも館部分には溝（堀）があったことが推定されるので館跡までの間に限定されるものと想定される。

SD１号溝は館の北約100mの地点、県道前橋―安中線のすぐ南側で調査区を東西に横切っている。地籍図の上では東西に細長い土地として表され、西端は市町境の水路に達するがその西側には出ていない。調査区の東の地域では南北二筋に分かれ、SD１号溝は北側のものが比定され、水路から150mの地点で切れるが、南側の土地を挟んで南に約60m走る細長い区画に続く。その南は東側に２倍～３倍の幅に膨らんで区切れながら約80m続く。西辺は第１期の館の四囲を包む区画に接している。その南は西側に寄って細くなる区画が10m程延びて、館の南側の外堀から東に延びて来る道路にぶつかっている。

一方 SD 1010号溝に乗る細長い区画は調査区を東に抜けてから約120mで止まり、続いて北に延びる道路につながっている。道路は約80m続き、その北側は東西に広がって SD１号溝の延長と思われる区画の南端部分と組み合わさり、その東に長靴形の区画を以って40m程続く。この南北双方からの区画が組み合わさる一画をどう解釈するかは難しいが、現時点ではその形状から西端を北からの溝が走り、館跡の南から東方向に延びて来る道路に乗って東に折れ、南から来た土地に接続していたものではないかと考えている。

館の外堀から約150m南の地点で SD 38号溝に直行して西に張り出す溝は、調査時点では使用中の水路の下にあったが、地籍図の上には帯状の区画が確認される。この区画は約110mの地点で北に走行を変えて約110m走って東西走行の道路に至っている。この道路及び東に連なる地境の下に東端を水路の位地とする溝の存在を推察することができる。

(4)　館及びその周囲の状況

以上のように、地籍図の推察などによって得られた若干の所見をひとまずまとめてみたい。

館跡のプランは内堀を使用していた時期（第１期）には凡そ68m×62mのほぼ正方形を呈し、外堀を使用する時期（第２期）には凡そ83m×108mのやや東西に長い長方形を呈していたものと推定される。外堀使用の第２期では、館はその南から SD 38が東に折れる部分迄を除いて西側に弓なりに張り出す、凡そ南北走行の溝を西側の堀として利用しているものと思われる。

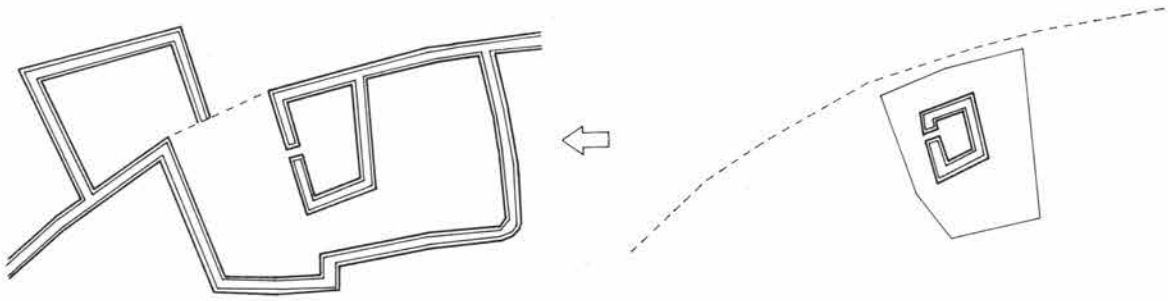
館跡の四囲を囲む区画は推定される内堀のラインの外側を25～50m（平均約32m）の幅で巡っているが、その外側の土地との境には明瞭な遺構が確認されなかったことから、館の第1期の時点で館周囲に設けられ、特段の施設は持たないが、館に関連した区画として認識されていたものではないかと推定される。

更にその周辺の状況を見ると、館の接する南北走行の弓なりの溝の東には、館跡から北に110m、南に85m、東に50m隔てて東西約120～150m、南北約230mのコ字状の溝が取り巻いている。東の溝は折を持つものと思われる。また館の南西には市町境に水路に沿う溝の西側に張り出して一辺110mの方形を呈する溝が見られる。館を中心に30,000㎡余りの区画を囲っていることからこれらの溝は環濠集落を形成するためのものであったかと想定している。また時期については、館の西の外堀が水路に沿った南北走行の溝を利用していると思われること。第1期の館の周囲を包む区画を残し乍ら、その区画が一群の溝の設定に当たってはあまり意識されていないことなどから、第2期の段階のものではないかと考えている。

なおこれらの溝はⅠ・Ｊ1号溝を除いて流水の痕跡は見られず、Ⅰ・Ｊ1号溝も当時蒼海域の防御機能として堰止められていた染谷川のオーバーフローした水を受けただけで、通水されてはいなかったのではないかと考えている。

3　鳥羽遺跡の館跡の実年代に関する検討

鳥羽遺跡の館跡の遺構及びその周囲の地籍の状況から、（想定されるものを含めた）遺構群の変遷を大きは2期に区分した。そして第1期の館周囲の区画が第2期にも残ること、内郭の掘立柱の分布は第1期・第2期で変化が見られないことなど、第1期から第2期への拡張は計画的ではなく急を要したもので、堀幅を広げ館の外周も堀で囲むなど、防御機能を高める必要があったことを窺わせる。



館跡周辺変遷概略図

絶対年代に関しては次のような所見がある。

(1)　外堀覆土中から14世紀末から15世紀前半に比定される土器が出土している。

(2)　走行の方向館と異なる SD 24号溝からは16世紀前半の土器が出土している。

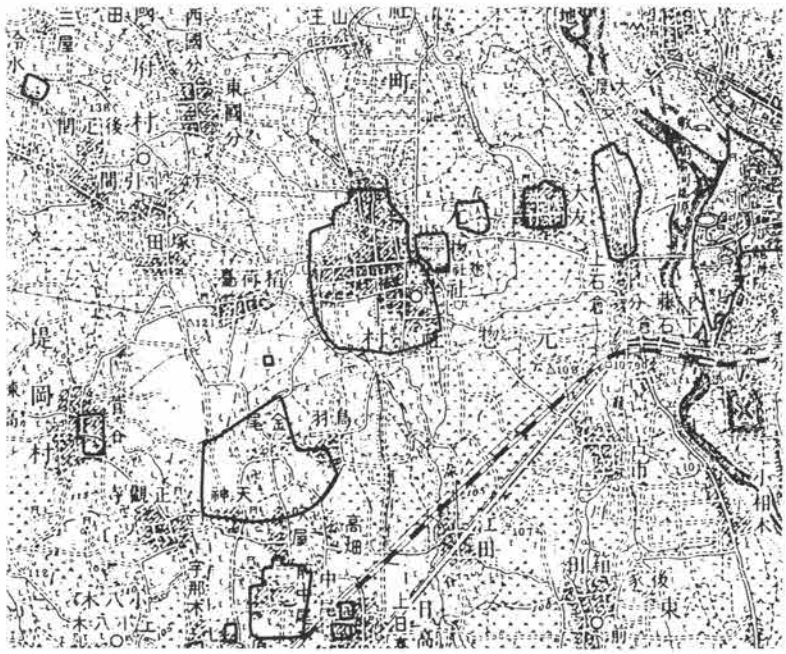
(3)　内堀、外堀双方から出土の板碑などからは14世紀末～15世紀中頃という年代観が与えられている。

(4)　使用中の館やその周辺に造られる可能性が低いと思われる。永楽銭など明・宋銭を副葬する所謂中世土壙墓（SZ 13土壙墓など）が、第1期の館及び館を囲む区画に調査された。

これらの所見から、館は14世紀末から15世紀中頃に機能していたのではないかと判断される。

館跡は東に約400mに染谷川を隔てて総社長尾氏の居城であった蒼海城、南に約300m隔てて当初の城主が金尾佐渡守と伝えられる金尾城に隣接し、東山駅路推定地の北300mの位地に在る、当時の東西走行の幹道は、

既に南に600m程離れたの推定東道に移っていたと思われるが、総社長尾氏に関する者が14世紀末から15世紀初めの頃、蒼海城に対して染谷川の対岸あり、東山駅路の名残りの道を押さえる位地に、それを意識して鳥羽遺跡の館を造った（第１期）のではないかと推定している。この時期は上野守護上杉氏に国衙職が与えられた時期と一致する。



第５図　鳥羽遺跡館跡周辺図（国土地理院「前橋」《明治41年測図》使用）
１鳥羽遺跡館（14～15世紀）　２蒼海上（14～16世紀）　３前橋城（石倉城、14～19世紀）　４村山城（16世紀）　５石倉砦（16世紀）　６金尾城（鳥羽城、環濠集落、16世紀）　７菅谷城（環濠集落？、16世紀）　８引田城（16世紀）　９八日市場城（17世紀）　10大友城（環濠集落？）　11中尾城（環濠集落）　12黒崎屋敷　13上日高尾敷

第１期から第２期への移行に対しては、上述のように館の拡張が短時間に行われたことが窺れることから戦乱などの緊張状況が要因であろうと考えている。当該期で国府付送に戦乱が及ぶ危険性のあった動きとしては、応永23年（1416）の上杉禅秀の乱、永享10年（1438）の永享の乱、宝徳元年（1449）以降の足利持氏と上杉憲実らとの衝突などが挙げられる。こうした動きの中で鳥羽遺跡の館は拡張（第２期）されたものと思われる。現時点では、管領上杉憲実が鎌倉公方足利持氏との不和から平井城（藤岡市）に逃れ、公方方が素早く常岡郷（藤岡市）に侵入するなど３者の中では最も短時間で緊張が高まったと思われる永享の乱が、その原因として可能性が高いのではないかと考えている。

鳥羽遺跡の館の廃絶に関しては[1]館主の滅亡、[2]蒼海城の整備のため館を蒼海城内に移した場合、[3]軍事的緊張関係から館を蒼海城内に移した場合、[4]軍事的緊張関係に対応するため環濠集落ごと別の場所に移転させた場合などが考えられる。第１～３者の場合は館主として弥勒氏の可能性を、第４者の場合は金尾氏を館主として近接する金尾城に移った可能性を検討できるのではないかと思われる。

以上のように推定に推定を重ねての検討となってしまった。情報量が少ないこともあって良好な成果を得ることはできなかったが、鳥羽遺跡の館跡解明の手掛かりは提供できたのではないかと考えている。

註

(1)　鳥羽遺跡の館の名称は知られていない。大字は蒼海城と同じ「元総社」で字は「弥勒」であるが、字「弥勒」の範囲はかなり広い。弥勒については『上野伝説雑記』「総社記」に長尾氏被官72氏の一つとして記載されている。

(2)　地籍図は、昭和30年代前半に撮影された国土地理院の航空写真「前橋」をベースに、米占領軍が戦後まもなく撮影した航空写真で補正したものに、旧元総社村・旧国府村・旧新高尾村の地籍図を当て嵌めたもので、一部割り付けて復元してある。

(3)　土器の年代は木津1986（『上野国分僧寺・尼寺中間地域Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）の編年に、板碑などの石造物の年代については新倉明彦氏の所見によった。

［参考文献］
『群馬県古城塁址の研究』山崎　一　1978
『群馬県の中世城館』群馬県教育委員会　1988
『元総社村史』元総社村史編纂委員会　1950

第５章　化学分析及び鑑定

第１節　鳥羽遺跡出土材の樹種

藤　根　　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

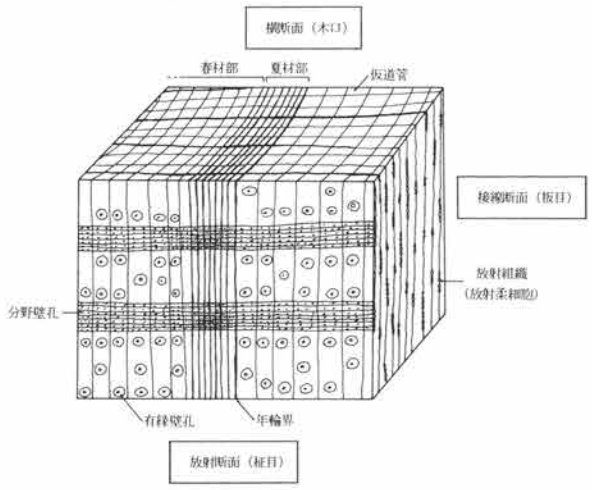
鳥羽遺跡は、関越自動車道前橋インターチェンジを基点に北へ総延長1.2kmの範囲にあり、榛名山東南麓に水源をもつ染谷川浴いの台地上および台地下（低地）遺跡よりなる。台地上では、古墳時代～平安時代、縄文時代の住居跡あるいは奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡の竈構築に供したと考えられる構築材採用掘坑群などが検出されている。また、台地下では、榛名二ツ岳降下火山灰（ＦＡ：古墳時代後期）を挟み、弥生時代後期や古墳～奈良・平安時代の多量の土器類などが検出されている。

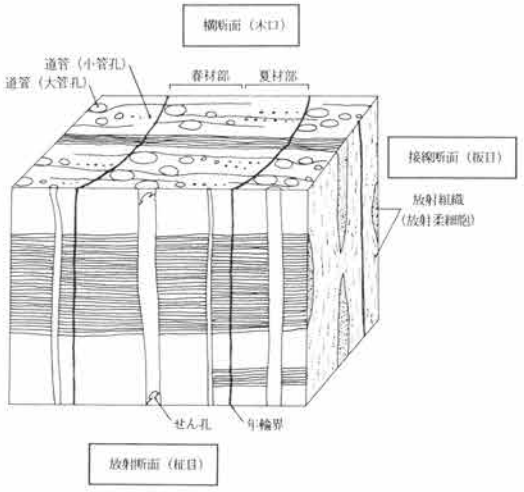
このうち木器類では、枝杭や角材・板材あるいは分割材が43点検出され、これ以外にも加工痕はさほど明眇ではないが382点に達する材遺体が検出されている。

ここでは、これら木器類の樹種同定を行い、出土樹種の特徴について若干の考察を試みる。

２．方法と記載

試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団において、プレパラートの作成が行われた。プレパラートは、検出された木器類のうち加工痕が明瞭なもの（実測試料）と加工痕がさほど明瞭でないもの（参考試料）とに分類されている。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40～400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載及び同定の根拠を述べる。表２～６にその結果を示す。参考として、材組織の記載中の主な用語については、図１および図２にその概略を示した。なお、保存の悪いものあるいは比較標本や資料の不足により、種および属まで同定できないものは、材組織の特徴である環孔材、散孔材などとした。プレパラートは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。





イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight)K,koch イヌガヤ科　図版１a～１c.

垂直及び水平樹脂道を欠き、仮道管の大きさとその配列は乱雑な針葉樹材である(横断面)。保存が悪いため、仮道管内壁に見られる有縁壁孔及びらせん肥厚は認められないが、柔細胞の水平壁は、結節状である(放射断面)。放射組織は柔細胞からなり単列で１～８細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定される。イヌガヤの樹木は、樹高10m、幹径30cmの常緑針葉樹で、東北地方以南の暖温帯に分布する。材は、やや堅硬で、木理は緻密であり、器具材、小細工物などに用いられる。

モミ属　Abies　マツ科　図版２ａ～２ｃ.

垂直および水平樹脂道を欠き、放射仮道管を欠く針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく薄壁で、晩材部仮道管は厚壁で偏平でかつ狭い(横断面)。放射組織は、柔細胞からなり単列で２～17細胞高である(接線断面)。また、その分野壁孔はトウヒ型で１分野に１～２個存在する。また、放射組織の壁は厚く、じゅず末端壁を有する（放射断面)。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ（Abies veichii）やオオシラビソ（A.mariesii)、暖温帯に分布するモミ（A.firma）などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。木材は、加工が容易で、割れやすく、保存性が低く軽軟である。材は、建築材、下駄、製紙原料などに用いられる。

スギ　Cryptomeria japonica (Linn.fil.)D.Don　スギ科　図版３ａ～３ｃ.

水平及び垂直樹脂道をともに欠く針葉樹材で、春材から夏材への移行はゆるやかである(横断面)。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、１分野に２個見られる(放射断面)。放射組織は、矛細胞からなり、単列で２～17細胞高からなる（接線断面)。

以上の形質から、スギの材と同定される。スギは東北から北州にかけて温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。材は軽くて軟らかく、強靱・木理通直で、建築材をはじめとして極めて広い用途を持つ。

ハンノキ節　Alnus sect. Gumnothysus カバノキ科　図版４ａ～４ｃ.

中型の管孔が放射方向または塊状に２～４個複合して散在する散孔材である（横断面)。道管のせん孔は、８本程度の階段状である(放射断面)。放射組織は同性で、単列もしくは２細胞幅、３～41細胞高で、結晶細胞を持つ（接線断面)。ただし、集合状の放射組織は見られない。

以上の形質から、カバノキ科のハンノキ属ハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節には、平野部の水湿地に生育するハンノキ (Alnus japonica)、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ (A.hirsuta)、そして山地に生育するヤシャブシ(A.firma)などが分布している。ハンノキ節の樹木は、いずれも樹高20m、幹径50mに達する落葉広葉樹で、陽のよく当たるところに生育する。木材は、緻密で柔らかく、建築材、器具材、家具材などに用いられる。

アサダ　Ostrya japonica Sarg.　図版５ａ～５ｃ.

丸みを帯びた小～中型の道管が放射方向に２～５個複合した散孔材である。木部柔組織は１細胞幅で接線状に配列している（横断面)。道管の内壁には微細ならせん肥厚が見られ、道管のせん孔は単一である（放射

断面)。放射組織はほぼ同性で１～３細胞幅、２～41細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のアサダの材と同定される。アサダは全国の温帯を中心に分布する落葉広葉樹で、標高15mに達する。材は固く粘りがあり、耐朽性が高く、杭や木槌などに用いられる。

イヌデシ節　Carpinus sect. Eucarpinus　カバノキ科　図版６ａ～６ｃ.

やや小型の丸の管孔が単独あるいは放射方向に２～３個複合し散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、単一で、内壁にはわずかであるがらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、異性で１～３細胞幅、３～47細胞高であり、両端細胞はやや大きい（接続断面)。

以上の形質から、カバノキ科のクマシデ属イヌシデ属イヌシデ節の材と同定される。イヌデシ節には、イヌシデ（Casqjovt tschonoskii）及びアカシデ（C.laxiflora）があり、暖帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高15m、幹径60cmに達する。材は硬く、家具材、柄類などに用いられる。

カバノキ属　Betula　カバノキ科　図版７ａ～７ｃ.

やや丸い中型の道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合してほぼ均一に散在する散孔材である（横断面)。道管のせん孔は15～21本の横棒からなる階段状である（放射断面)。放射組織は同性で１～３細胞幅、２～26細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のカバノキ属の材と同定される。カバノキ属の樹木には、樹高25m、幹径１ｍに達するウダイカンバ（Betula maximowicziana）や亜高山帯上部に広く分布するダケカンバ（B.ermanii)、山地帯の二次林に多いシラカンバ（B.platyphylla var.japonica）など10種類ほどあるが、種を識別するには至っていない。材は、緻密でやや堅硬で建築材や器具に用いられる。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版８ａ～８ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が１～３列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチローズの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する（横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は柔細胞で単列同性であり、時に２細胞幅で、４～22細胞高である（接線断面)。

以上の形質からブナ科のクリ属クリ材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高20m、幹径１ｍに達する。材はやや重硬で耐朽性、耐湿性、保存性のいずれにも優れ、杭、橋梁などの土木材、下駄材、挽物、漆器木地、彫刻材など広く用いられる。

コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図版９ａ～９ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が１～２列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である（横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる（放射断面)。放射組織は単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ（Quercus acutissima）と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ（Q.variabilis）があるが、識別するには至っていないが、アベマキの分布が限られることからクヌギと考えられる。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹で、材は堅硬で割裂容易、耐朽性があり、器具材、下駄材、薪炭

材、椎茸原木などに用いられる。

コナラ属コナラ節　Quercus seet. Prinus　ブナ科　図版10ａ～10ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が１列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である（放射断面)。放射組織は単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面)。

以上の形質からブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（Quercus serrata）やミズナラ（Q.mongolica var.grossesrrata)、カシワ（Q.dentata)、ナラガシワ（Q.aliena）などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高20m、幹径１mを超える葉葉広葉樹で、暖帯から温帯にかけて分布する。材は重硬緻密で、建築や家具材、枕木、曲木細工、薪炭材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版11ａ～11ｃ.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、チロースが見られる（放射断面または接線断面)。放射組織は、柔細胞で単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線新面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ（Q.acuta）やアラカシ（Q.glauca）やシラカシ（Q.myrsinaefolia）をはじめ８種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径１mに達する常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素であ。材は重硬、強靱であり、農具などに用いられる。

エノキ属　Celtis　ニレ科　図版12ａ～12ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が１～２列並び、そこから径を減じた小管孔が夏材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である（横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔な内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面)。放射組織は異性で、３～８細胞幅、８～20細胞高で、瀾細胞をもつ（接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ（Celtis sinesis）や、温帯に分布するエゾエノキ（C.jessoensis）などがあるが、現在のところ識別するには至っていない。エノキは樹高20m、幹径１mに達する落葉広葉樹である。材はやや硬く、割裂困難で、建築材、家具材、柄類、薪炭材などに用いられる。

ケヤキ　Zelkova serrata(Thunb.)Makino　ニレ科　図版13ａ～13ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし２列に並び、夏材部では小管孔が２～８程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認レられる（放射断面)。放射組織は、異性で１～６細胞幅、３～38細胞高から構成されている（接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキと同定される。ケヤキは樹高35m、幹径２mに達する落葉広葉樹で、暖帯から温帯にかけて分布する。材は、光沢があり木理が美しく、耐朽性があり通直な材が得られる。社寺などの柱あるいは梁などに多く用いられる。

ヤマグワ　Morus bombycis Koidz.　クワ科　図版14ａ～14ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が夏材部で接線方向に数個複合して分布する環孔材である。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる。木部柔組織は周囲状である。放射組織は異性で、１～４細胞幅、４～31細胞高である。

以上の形質から、クワ科のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹で、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する。材は、重硬で光沢があり、狂いが少なく、強靱であるため、建築材や家具材、彫刻材などに用いられる。

サクラ属　Prunus　バラ科　図版15ａ～15ｃ.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、放射方向に数個複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある。道管の内部にはガム状物質が詰まっている(放射断面)。放射組織は同性に近い異性で、１～６細胞幅、３～10細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。日本に分布するサクラ属の樹木には樹高25mに達するヤマザクラ（Prunus jamasakura）など数種類あり、暖帯から亜熱帯にかけて分布する。材は堅硬でやや緻密、耐朽性・保存性は高く、加工容易で建築材や家具材、器具、彫刻材など広く用いられている。

バラ属　Rosa　バラ科　図版16ａ～16ｃ.

年輪のはじめに丸い管孔が２列ほど並び、そこから径を減じて散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である（放射断面)。放射組織は異性で、１～13細胞幅、１～52細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、バラ科のバラ属の材と同定される。バラ属の樹木には、蔓性のノイバラ(Rosa multiflora)から落葉低木のヤマイバラ（R.sambucina）までとその種類は多い。

イヌエンジュ　Maacikia amurensis Rupr.et Maxim.var,buergeri(Maxim.)C.K.Schn.　図版17ａ～17ｃ.

年輪のはじめに大管孔が並び、そこから径を減じた管孔が２個程度複合して散在する環孔材である。また、木部柔組織は周囲状で(横断面)、接線断面においては層階状である。放射組織は異性で、１～６細胞幅、１～54細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、マメ科のイヌエンジュの材と同定される。イヌエンジュは、北海道から本州中部の温帯に分布し、その変種であるハネミイヌエンジュは本州中部から九州の暖帯に分布する。イヌエンジュは、樹高15m、幹径60cmに達し、材はやや重硬で、建築内装材などに用いられる。

コクサギ　Orixa japonica Thunb.　ミカン科　図版18ａ～18ｃ.

小型の管孔が集合して雲紋状を呈する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、かすかにらせん肥厚が認められる（放射断面)。放射組織は異性で１～２細胞幅、２～15細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、ミカン科のコクサギの材と同定される。コクサギは本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹（低木）である。材は割やすく細工物などに用いられる。

カエデ属　Acer　カエデ科　図版19ａ～19ｃ．

中型の管孔が単独あるいは放射方向に２～５複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する（横断面）。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は同性１～５細胞幅、１～50細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く分布し、その種類も20種以上と多い。多くは低山～山地の林内に生える。材は建築材などに用いられる。

トチノキ　Aesculus turbinata Blume.　トチノキ科　図版10ａ～20ｃ．

小型の管孔が単独または２～４個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は、単一である。内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面）。放射組織は、同性単列まれに２細胞幅、５～16細胞高である。また、この樹種を最も特徴づけるリップルマーク（規則的な層階状配列）が見られる（接線断面）。

以上の形質から、トチノキ科のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径２mに達する落葉広葉樹で、北海道から九州まで分布している。材は、建築、器具、下駄、などに用いられる。

ウコギ属　Acanthopanax　ウコギ科　図版21ａ～21ｃ．

小型の管孔が接線方向からななめ接線方向につらなって配列する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。方射組織は異性で、２～６細胞幅、４～36細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ウコギ科のウソギ属の材と同定される。ウコギ属の樹木には、落葉高木のコシアブラ（Acanthopanax sciadophylloides）を除く、樹高２～５mの落葉低木のヤマウコギ（A.spinosus）や樹高１mの落葉低木のオカウコギ（A.nipponicus）などがある。

ハリギリ　Kalopanax pictus(Thunb.)NaKai　ウコギ科　図版22ａ～22ｃ．

年輪のはじめに大型の管孔が並び、そこから径を減じた管孔が接線方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は異性で、１～５細胞幅、２～37細胞高である（接線断面）。

以上の形質からウコギ科のハリギリの材と同定される。ハリギリは暖帯から温帯にかけての山地の林内に分布する落葉広葉樹で、樹高25m、幹径１mに達する。材は加工が容易で、家具材、土木材、彫刻材などに用いられる。

エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　図版23ａ～23ｃ．

小型の管孔が放射方向に２～５個複合し、そこからやや径を減じて放射方向に２～５複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は16本程度の階段状である（放射断面）。放射組織は異性で１～３細胞幅、２～35細胞高である。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ（Styrax japonica）や全国の温帯に分布するハクウンボク（S.obassia）あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク（S.shirasawana）などがある。材は加工が容易で、器具材、細工物などに用いられる。

トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科　図版24ａ～24ｃ．

年輪のはじめに大型の管孔が１～３個並び、そこから径を減じた管孔がやや塊状に分布する環孔材で、木部柔細胞は周囲状もしくは連合翼状である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は同性で、単列または２細胞幅、３～３５細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、モクセイ科のトネリコ属の材と同定される。トネリコ属の樹木には、トネリコ（Fraxinus japonica）やシオジ（F.spaethiana）あるいはヤチダモ（F.mandshurica）などがあり、全国の温帯に分布する。材は、弾力があり、建築材、家具材あるいはバットなどに用いられる。

ニワトコ　Sambucus sieboldiana Blume ex. Graebn　スイカズラ科　図版25ａ～25ｃ．

小型の管孔が年輪のはじめにやや密に並び、そこから接線方向に２～３個複合して散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は異性で、１～４細胞幅、６～45細胞高以上である（接線断面）。

以上の形質から、スイカズラ科のニワトコの材と同定される。ニワトコは樹高５m程度の落葉広葉樹（低木）で、全国の温帯から暖帯にかけて分布する。材は、軽軟で、細工物などに用いられる。

環孔材Ａ　図版26ａ～26ｃ．

年輪のはじめに大型の管孔が２個並び、そこから径を減じた小管孔が散在する環孔材である。また、木部柔細胞は、周囲状もしくは帯状を呈する（横断面）。道管のせん孔は、単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は異性で、１～３細胞幅、353細胞高である（接線断面）。

散孔材Ａ　図版27ａ～27ｃ．

小型の管孔が放射方向に２個程度複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は、単一である（放射断面）。放射組織は異性で、１～２細胞幅、４～53細胞高である（接線断面）。

散孔材Ｂ　図版28ａ～28ｃ．

小型の管孔が単独または放射方向に２～３個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は、単一である（放射断面）。放射組織は異性で、１～２細胞幅、２～25細胞高である（接線暖面）。

蔓性植物　図版29ａ～29ｃ．

年輪のはじめに丸い管孔が並び、そこから径を減じて散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は同性で、細胞幅および細胞高はともに多い。

３．考　　察

鳥羽遺跡から出土した木器類（加工痕が認められる材遺物や加工痕が認められない材遺体）の出土状態の特徴は、榛名二ツ岳火山灰（ＦＡ：古墳時代後期）を狭在する堆積物中のものであること、および廃棄されたと考えられる多量の土器群を伴うことである。このことは古墳～奈良・平安時代と出土期間は長いものの、この遺跡における一時期の材遺物あるいは材遺体であるということであり、一断面ではあるが遺跡周辺の植生や材利用に関する樹種選択などに関する有益な情報源である。

	実測試料		参考試料		合　計	
樹　種	点数	%	点数	%	点数	%
イヌガヤ			1	0.3	1	0.2
モミ属	9	24.3	9	2.4	18	4.3
スギ	1	2.7	1	0.3	2	0.5
ハンノキ節	1	2.7			1	0.2
アサダ			47	12.3	47	11.2
イヌシデ節	1	2.7			1	0.2
カバノキ属	1	2.7			1	0.2
クリ	3	8.1	48	12.6	51	12.2
クヌギ節	5	13.5	27	7.1	32	7.6
コナラ節	2	5.4	64	16.8	66	15.8
アカガシ亜属			2	0.5	2	0.5
エノキ属			1	0.3	1	0.2
ケヤキ	3	8.1	28	7.3	31	7.4
ヤマグワ	3	8.1	5	1.3	8	1.9
サクラ属			26	6.8	26	6.2
バラ属			2	0.5	2	0.5
イヌエンジュ			1	0.3	1	0.2
コクサギ	2	5.4	2	0.5	4	1.0
カエデ属	1	2.7	58	15.2	59	14.1
トチノキ	1	2.7	3	0.8	4	1.0
ウコギ属			2	0.5	2	0.5
ハリギリ	1	2.7	43	11.3	44	10.5
エゴノキ属	3	8.1	2	0.5	5	1.2
トネリコ属			4	1.0	4	1.0
ニワトコ			2	0.5	2	0.5
環孔材Ａ			1	0.3	1	0.2
散孔材Ａ			1	0.3	1	0.2
散孔材Ｂ			1	0.3	1	0.2
蔓植物			1	0.3	1	0.2
合　計	37	100.0	382	100.0	419	100.0

表１の結果を見ると、実測試料の多くは杭材や板材などの土木材として出土し、それらの樹種はモミ属、クヌギ節、クリ、ケヤキ、ヤマグワ、エゴノキ属などからなり、37点の出土点数に対して15種と多くの種類が検出されている。

参考試料を含め全体的に見ると、一般的に北関東に多いとされるコナラ属（アカガシ亜属やコナラ節・クヌギ節からなるコナラ亜属）やクリやスギあるいはヒノキ科などから比べると（例えば辻ほか（11986）や吉川（1988）など）、カエデ属やハリギリあるいはサクラ属などの樹種が多く検出され、アサダやケヤキあるいはサクラ属なども比較的多い。これらは人為的要素によるものなのか、局所植生を反映したものかは現段階では判断できない。また、これ以外にも、単一木からの複数の分割（人為もしくは自然によるもの）などの可能性も考えられる。いずれにせよ何等かの原因で、一般的状況とは異なった組成を示しており、今後の問題提起とする必要がある。

引用文献

辻　誠一郎・南木睦彦・小杉正人（1986）館林の池沼群と環境の変遷史、茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第２集、館林市教育委員会、110 p.

吉川昌伸（1988）２．赤城遺跡の花粉化石、川里工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書、㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団、P 455―461.

試料番号	製品名	時　代	樹　種	試料番号	製品名	時　代	樹　種
1	枝杭	古墳～平安	モミ属				
2	枝杭	〃	コクサギ				
3	枝杭	〃	エゴノキ属				
4	枝杭	〃	〃				
5	枝杭	〃	コクサギ				
6	枝杭	〃	エゴノキ属				
7	枝杭？	〃	ヤマグワ				
20	不明木製品	〃	イヌシデ節				
21	棒状木製品	〃	コナラ節				
23	〃	〃	カバノキ属				
24	板材	〃	クリ				
25	割り材	〃	モミ属				
27	二又鍬？	〃	クヌギ節				
28	木片？	〃	コナラ節				
29	薄板	〃	クヌギ節				
30	木片？	〃	クリ				
32	木片	〃	ケヤキ				
33	板材	〃	モミ属				
34	〃	〃	〃				
35	〃	〃	〃				
36	〃	〃	クヌギ節				
37	部材	〃	ハンノキ節				
38	板材	〃	カエデ属				
39	〃	〃	クヌギ節				
40	厚板材	〃	〃				
42	〃	〃	トチノキ				
43	板材	〃	モミ属				
44		〃	ハリギリ				
45		〃	モミ属				
46		〃	ヤマグワ				
47		〃	ケヤキ				
48		〃	モミ属				
49		〃	ケヤキ				
50		〃	ヤマグワ				
51		〃	クリ				
52		〃	スギ				
		〃	モミ属				

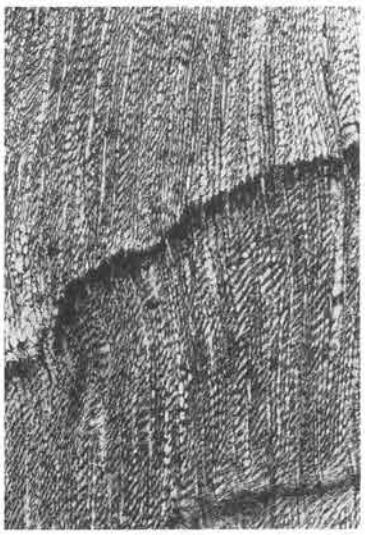
試料番号	製品名	時　代	樹　種	試料番号	製品名	時　代	樹　種
1		古墳～平安	カエデ属	52		古墳～平安	ケヤキ
2		〃	〃	53		〃	〃
3		〃	コナラ節	54		〃	クリ
4		〃	ヤマグワ	55		〃	カエデ属
5		〃	カエデ属	56		〃	クリ
6		〃	クリ	57		〃	アサダ
7		〃	ハリギリ	58		〃	コナラ節
8		〃	カエデ属	59		〃	ハリギリ
9		〃	〃	60		〃	クリ
10		〃	〃	61		〃	トネリコ属
11		〃	〃	62		〃	カエデ属
12		〃	ケヤキ	63		〃	コナラ節
13		〃	アサダ	64		〃	アサダ
14		〃	クリ	65		〃	コナラ節
15		〃	カエデ属	66		〃	環孔材Ａ
16		〃	クリ	67		〃	コナラ節
17		〃	ヤマグワ	68		〃	〃
18		〃	カエデ属	69		〃	〃
19		〃	アサダ	70		〃	ハリギリ
20		〃	コナラ節	71		〃	〃
21		〃	カエデ属	72		〃	サクラ属
22		〃	ハリギリ	73		〃	コナラ節
23		〃	アサダ	74		〃	アカガシ亜属
24		〃	トネリコ属	75		〃	サクラ属
25		〃	コナラ節	76		〃	カエデ属
26		〃	〃	77		〃	〃
27		〃	クヌギ節	79		〃	ケヤキ
28		〃	ケヤキ	80		〃	ハリギリ
29		〃	コナラ節	81		〃	アサダ
31		〃	アサダ	82		〃	エノキ属
32		〃	クリ	83		〃	クヌギ節
33		〃	コクサギ	84		〃	カエデ属
34		〃	クヌギ節	85		〃	〃
35		〃	バラ属	86		〃	サクラ属
36		〃	アサダ	87		〃	アサダ
37		〃	イヌエンジュ	88		〃	カエデ属
38		〃	ケヤキ	89		〃	アカガシ亜属
39		〃	カエデ属	90		〃	クヌギ節
40		〃	アサダ	91		〃	カエデ属
41		〃	ハリギリ	92		〃	サクラ属
42		〃	クヌギ節	93		〃	クヌギ節
43		〃	〃	94		〃	ヤマグワ
44		〃	バラ属	95		〃	クリ
45		〃	カエデ属	96		〃	コナラ節
46		〃	コナラ節	97		〃	クヌギ節
47		〃	クヌギ節	98		〃	カエデ属
48		〃	アサダ	99		〃	〃
49		〃	ケヤキ	100		〃	コナラ節
50		〃	〃	101		〃	アサダ
51		〃	アサダ	102		〃	エゴノキ属

試料番号	製品名	時　代	樹　種	試料番号	製品名	時　代	樹　種
103		古墳～平安	カエデ属	154		古墳～平安	カエデ属
104		〃	〃	155		〃	コナラ節
105		〃	コナラ節	156		〃	アサダ
107		〃	ハリギリ	157		〃	〃
108		〃	〃	158		〃	〃
109		〃	カエデ属	159		〃	ケヤキ
110		〃	クヌギ節	160		〃	アサダ
111		〃	エゴノキ属	161		〃	ケヤキ
112		〃	クリ	162		〃	ハリギリ
113		〃	コナラ節	163		〃	〃
114		〃	アサダ	164		〃	コナラ節
115		〃	〃	165		〃	アサダ
116		〃	コナラ節	166		〃	クヌギ節
117		〃	散孔材A	167		〃	ヤマグワ
118		〃	サクラ属	168		〃	サクラ属
119		〃	カエデ属	169		〃	〃
120		〃	〃	170		〃	クヌギ節
121		〃	〃	171		〃	カエデ属
122		〃	クリ	172		〃	〃
123		〃	コナラ節	173		〃	ウコギ属
124		〃	クリ	174		〃	クリ
125		〃	カエデ属	175		〃	アサダ
126		〃	ケヤキ	176		〃	クヌギ節
127		〃	カエデ属	177		〃	カエデ属
128		〃	クヌギ節	179		〃	アサダ
129		〃	散孔材B	180		〃	クリ
130		〃	カエデ属	181		〃	クヌギ節
131		〃	サクラ属	182		〃	サクラ属
132		〃	ハリギリ	183		〃	コナラ節
133		〃	クリ	184		〃	ケヤキ
134		〃	サクラ属	185		〃	ハリギリ
135		〃	ケヤキ	186		〃	コナラ節
136		〃	カエデ属	187		〃	アサダ
137		〃	〃	188		〃	コナラ節
138		〃	〃	189		〃	アサダ
139		〃	コナラ節	190		〃	モミ属
140		〃	ハリギリ	191		〃	ハリギリ
141		〃	トチノキ	192		〃	アサダ
142		〃	クリ	193		〃	ハリギリ
143		〃	カエデ属	194		〃	〃
144		〃	ケヤキ	195		〃	〃
145		〃	クヌギ節	196		〃	クヌギ節
146		〃	コナラ節	197		〃	ハリギリ
147		〃	ケヤキ	198		〃	〃
148		〃	〃	199		〃	コナラ節
149		〃	ニワトコ	200		〃	クヌギ節
150		〃	サクラ属	201		〃	カエデ属
151		〃	カエデ属	202		〃	サクラ属
152		〃	サクラ属	203		〃	トネリコ属
153		〃	ニワトコ	204		〃	ケヤキ

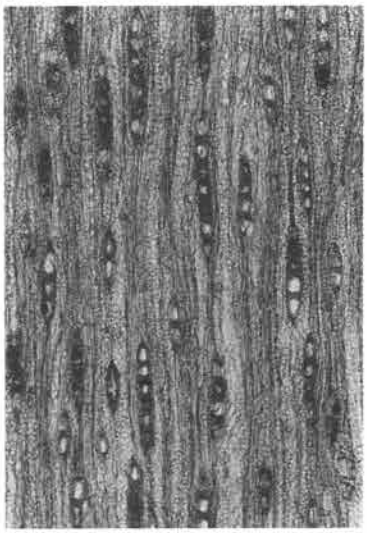
試料番号	製品名	時　代	樹　種	試料番号	製品名	時　代	樹　種
205		古墳～平安	ケヤキ	257		古墳～平安	カエデ属
206		〃	サクラ属	258		〃	〃
207		〃	ハリギリ	260		〃	ハリギリ
208		〃	アサダ	261		〃	クリ
209		〃	クリ	262		〃	ハリギリ
210		〃	コナラ節	263		〃	コナラ節
212		〃	〃	264		〃	カエデ属
213		〃	ハリギリ	265		〃	コナラ節
214		〃	〃	266		〃	〃
215		〃	クリ	267		〃	ケヤキ
216		〃	〃	268		〃	カエデ属
217		〃	〃	269		〃	〃
218		〃	〃	270		〃	〃
219		〃	ケヤキ	271		〃	ハリギリ
220		〃	アサダ	272		〃	ヤマグワ
221		〃	ハリギリ	273		〃	カエデ属
222		〃	サクラ属	274		〃	コナラ節
223		〃	コナラ節	275		〃	カエデ属
224		〃	〃	276		〃	ハリギリ
225		〃	アサダ	277		〃	アサダ
226		〃	コナラ節	278		〃	トネリコ属
227		〃	〃	279		〃	コナラ節
228		〃	〃	280		〃	〃
229		〃	ハリギリ	281		〃	クリ
230		〃	〃	282		〃	モミ属
232		〃	クヌギ節	283		〃	コナラ節
233		〃	ハリギリ	284		〃	サクラ属
234		〃	サクラ属	285		〃	モミ属
235		〃	ハリギリ	286		〃	アサダ
236		〃	ケヤキ	287		〃	クヌギ節
237		〃	クヌギ節	288		〃	カエデ属
238		〃	サクラ属	289		〃	サクラ属
239		〃	ウコギ属	290		〃	ハリギリ
240		〃	カエデ属	291		〃	サクラ属
241		〃	ハリギリ	292		〃	モミ属
242		〃	〃	293		〃	サクラ属
243		〃	カエデ属	294		〃	アサダ
244		〃	ハリギリ	295		〃	〃
245		〃	アサダ	296		〃	〃
246		〃	サクラ属	297		〃	〃
247		〃	クリ	298		〃	〃
248		〃	コナラ節	299		〃	ケヤキ
249		〃	クリ	300		〃	サクラ属
250		〃	コナラ節	301		〃	アサダ
251		〃	アサダ	302		〃	コナラ節
252		〃	コナラ節	303		〃	カエデ属
253		〃	〃	304		〃	〃
254		〃	蔓植物	305		〃	ケヤキ
255		〃	コナラ節	306		〃	コナラ節
256		〃	〃	307		〃	アサダ

試料番号	製品名	時　代	樹　種	試料番号	製品名	時　代	樹　種
308		古墳～平安	アサダ	357		古墳～平安	アサダ
309		〃	コナラ節	358		〃	コナラ節
310		〃	クリ	359		〃	カエデ属
311		〃	クヌギ節	360		〃	ハリギリ
312		〃	〃	361		〃	コナラ節
313		〃	ハリギリ	362		〃	クリ
314		〃	クリ	363		〃	トチノキ
315		〃	コナラ節	364		〃	ハリギリ
317		〃	クリ	365		〃	コナラ節
318		〃	〃	366		〃	〃
319		〃	コナラ節	367		〃	クリ
320		〃	ケヤキ	368		〃	ケヤキ
321		〃	〃	369		〃	アサダ
322		〃	コナラ節	370		〃	コナラ節
323		〃	ハリギリ	371		〃	トチノキ
324		〃	クリ	372		〃	クリ
325		〃	〃	373		〃	〃
326		〃	アサダ	374		〃	アサダ
327		〃	〃	375		〃	クリ
328		〃	ハリギリ	376		〃	〃
329		〃	クヌギ節	377		〃	〃
330		〃	〃	378		〃	〃
331		〃	ハリギリ	379		〃	〃
332		〃	クリ	381		〃	イヌガヤ
333		〃	クヌギ節	382		〃	クリ
334		〃	クリ	383		〃	〃
335		〃	サクラ属	384		〃	〃
336		〃	クリ	385		〃	〃
337		〃	コナラ節	386		〃	〃
338		〃	スギ	387		〃	モミ属
339		〃	サクラ属	388		〃	〃
340		〃	モミ属	389		〃	サクラ属
341		〃	ハリギリ			〃	
342		〃	アサダ			〃	
343		〃	モミ属			〃	
344		〃	アサダ			〃	
345-1		〃	コクサギ			〃	
345-2		〃	モミ属			〃	
345-3		〃	クリ			〃	
346		〃	コナラ節			〃	
347		〃	〃			〃	
348		〃	カエデ属			〃	
349		〃	コナラ節			〃	
350		〃	〃			〃	
351		〃	〃			〃	
352		〃	〃			〃	
353		〃	カエデ属			〃	
354		〃	ケヤキ			〃	
355		〃	〃			〃	
356		〃	カエデ属			〃	

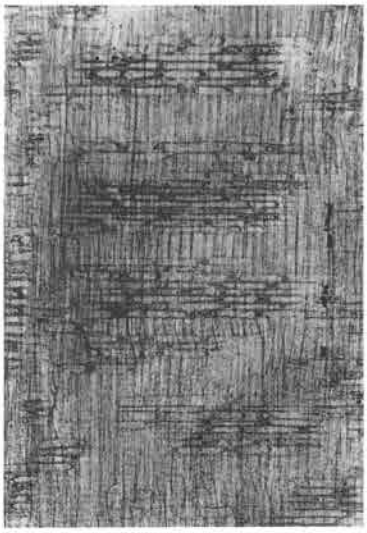
図版１．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



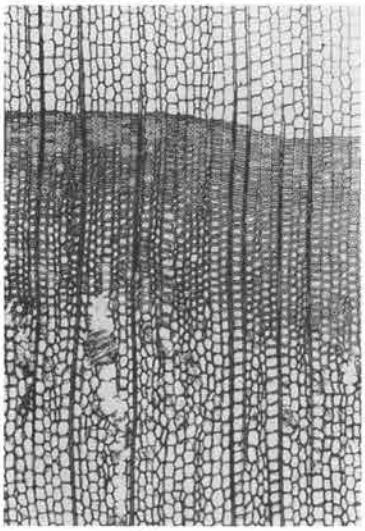
1a．イヌガヤ（横断面）No381 bar：0.5mm



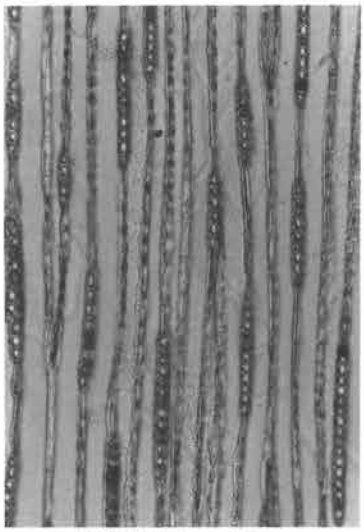
1b．同（接線断面）bar：0.1mm



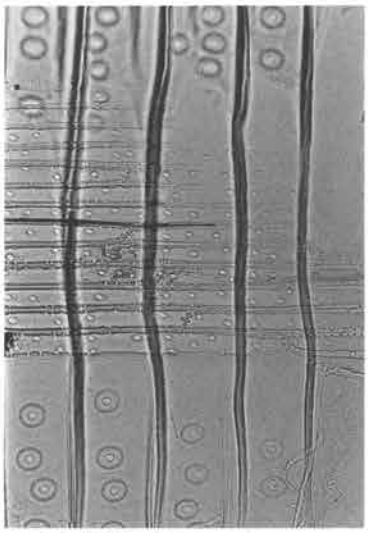
1c．同（放射断面）bar：0.5mm



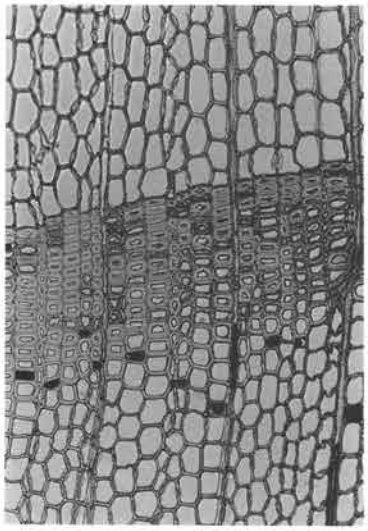
2a．モミ属（横断面）No285 bar：0.5mm



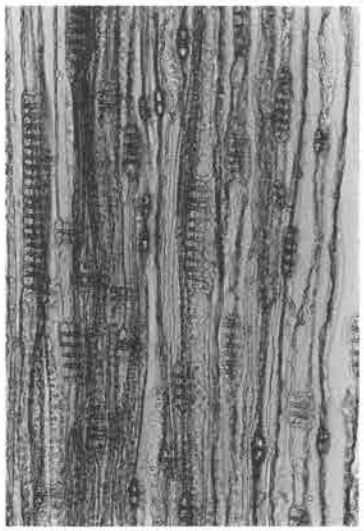
2b．同（接線断面）bar：0.5mm



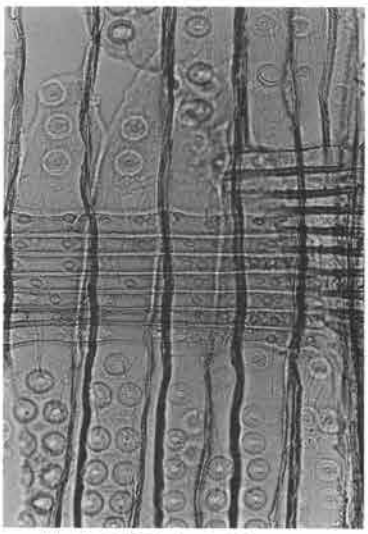
2c．同（放射断面）bar：0.1mm



3a．スギ（横断面）No. bar：0.5mm

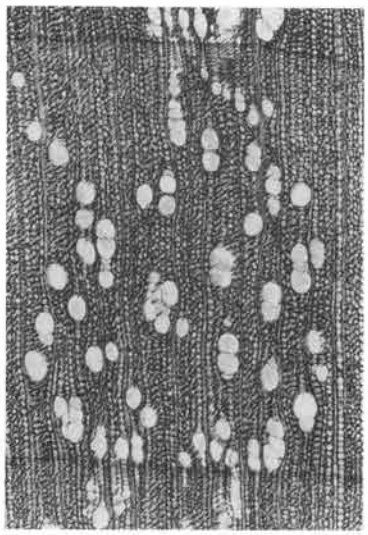


3b．同（接線断面）bar：0.2mm

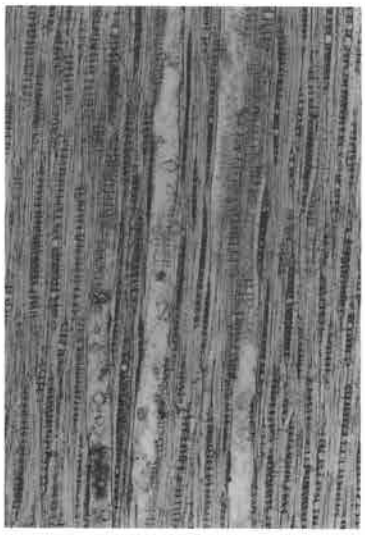


3c．同（放射断面）bar：0.1mm

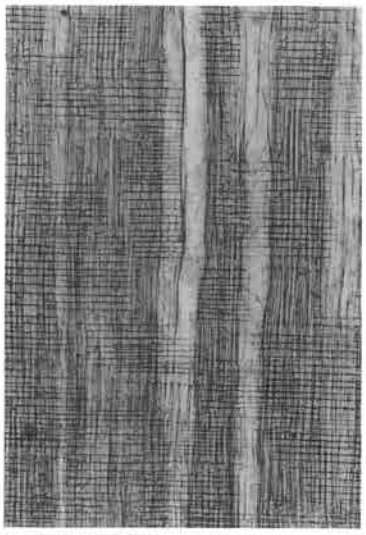
図版２．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



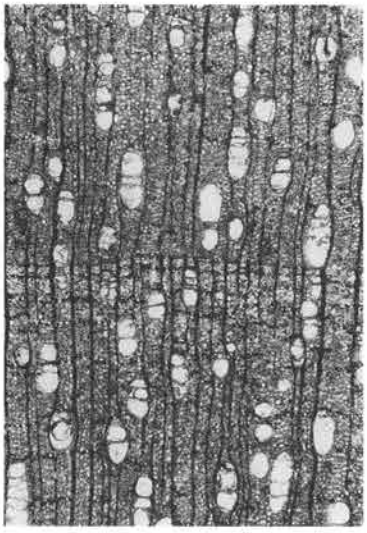
4a．ハンノキ節（横断面）No. bar：0.5mm



4b．同（接線断面）bar：0.5mm



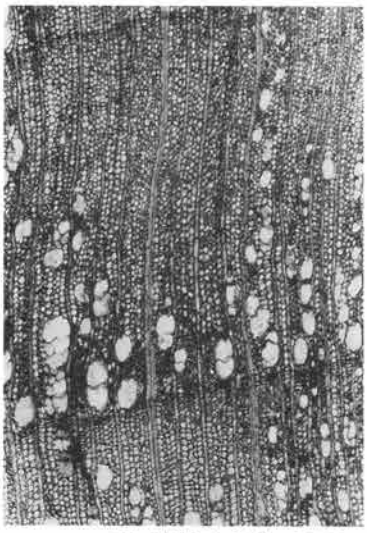
4c．同（放射断面）bar：0.5mm



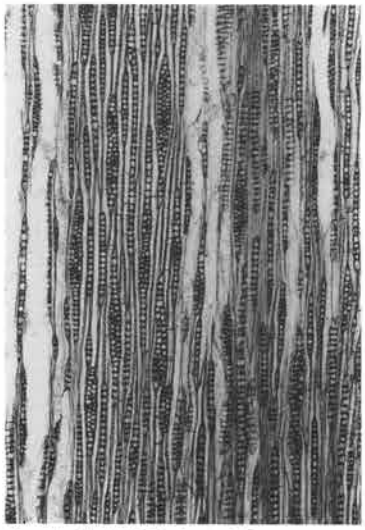
5a．アサダ（横断面）No. bar：0.5mm

5b．同（接線断面）bar：0.2mm

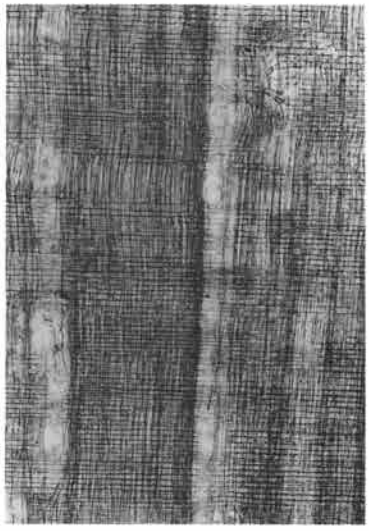
5c．同（放射断面）bar：0.2mm



6a．イヌシデ節（横断面）No. bar：0.5mm

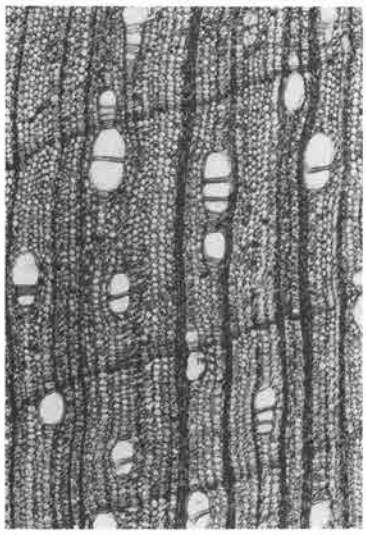


6b．同（接線断面）bar：0.5mm

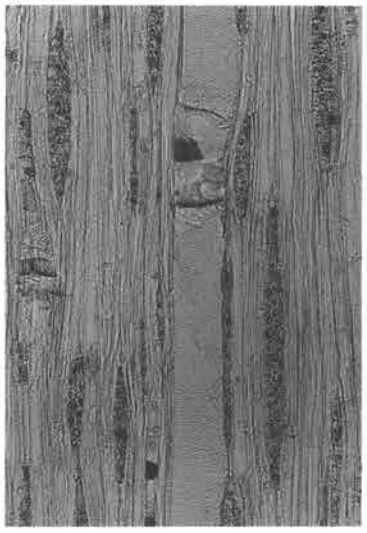


6c．同（放射断面）bar：0.5mm

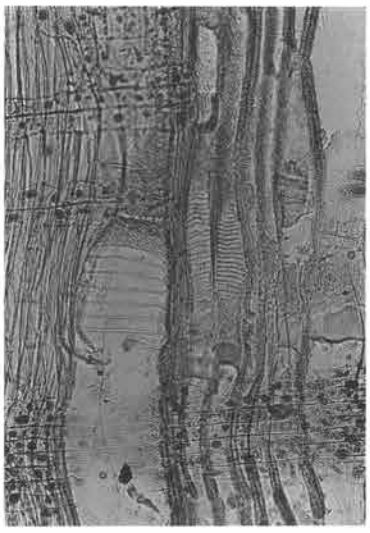
図版３．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



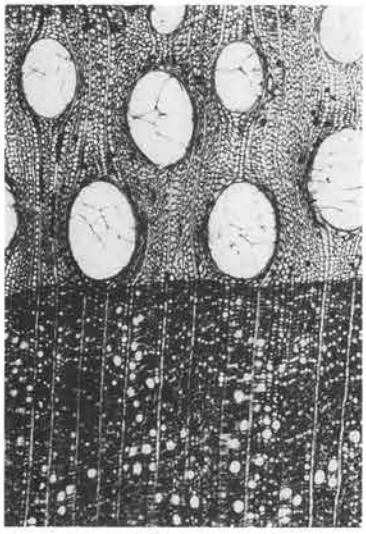
7a．カバノキ属（横断面）No. bar：0.5mm



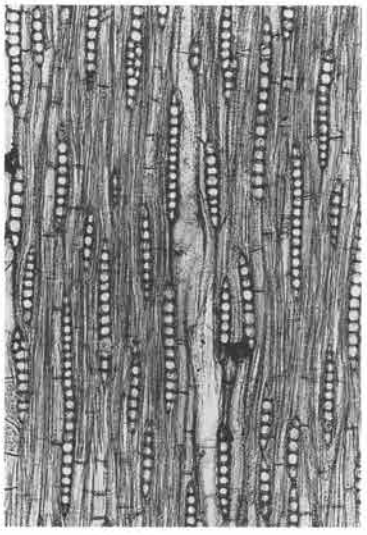
7b．同（接線断面）bar：0.1mm



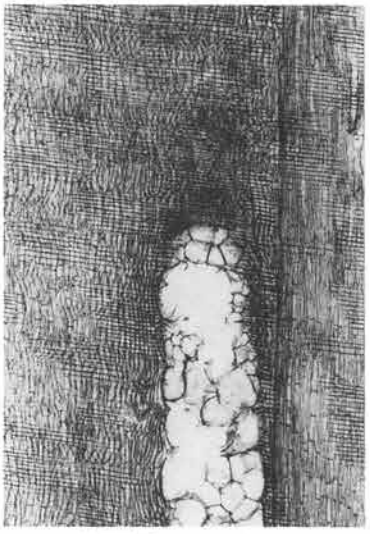
7c．同（放射断面）bar：0.1mm



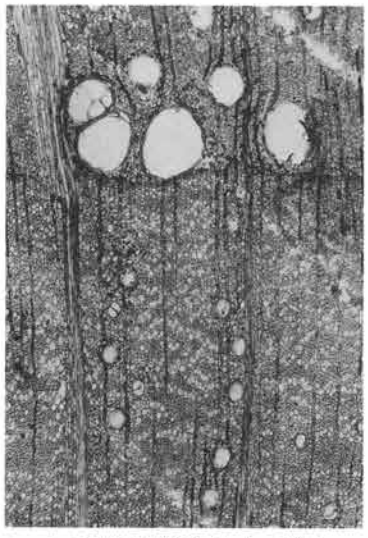
8a．クリ（横断面）No. bar：0.5mm



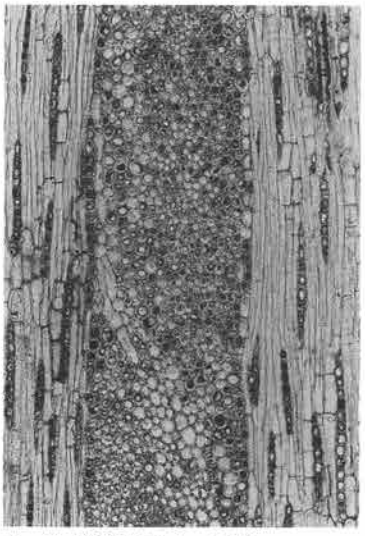
8b．同（接線断面）bar：0.2mm



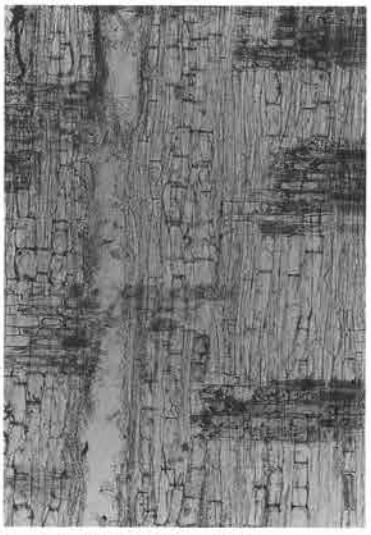
8c．同（放射断面）bar：0.5mm



9a．クヌギ節（横断面）No. bar：0.5mm

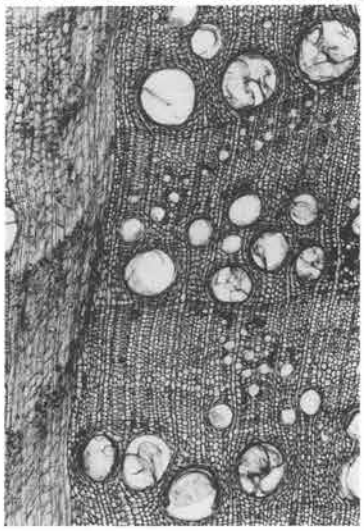


9b．同（接線断面）bar：0.2mm

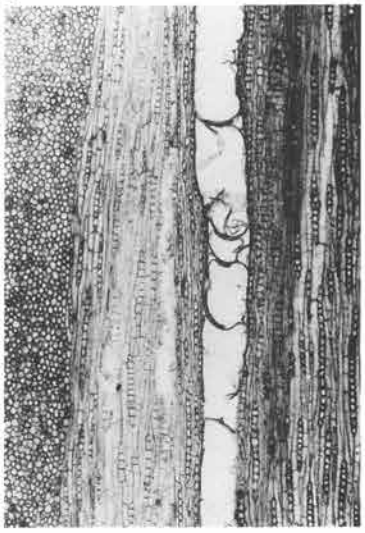


9c．同（放射断面）bar：0.2mm

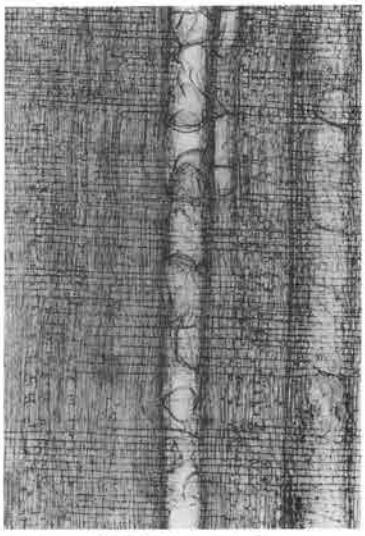
図版４．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



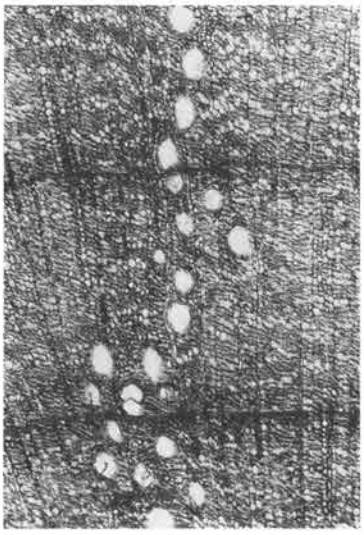
10a．コナラ節（横断面）No. bar：0.5mm



10b．同（接線断面）bar：0.5mm

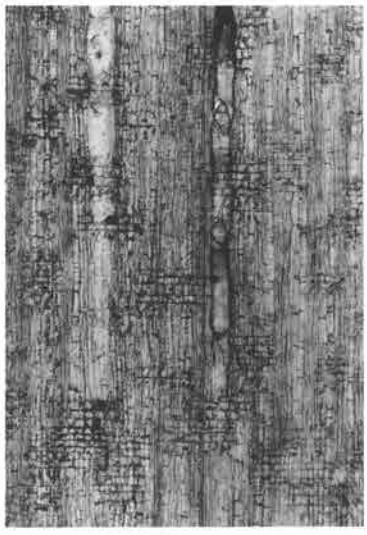


10c．同（放射断面）bar：0.5mm

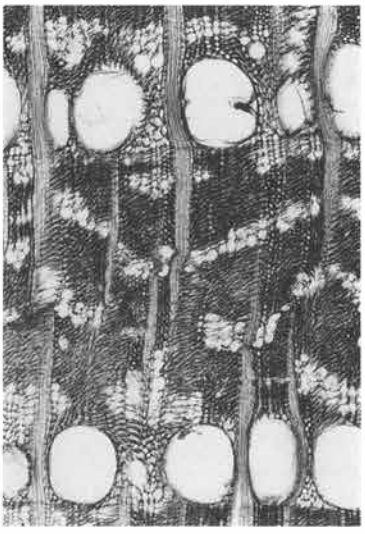


11a．アカガシ亜属（横断面）No. bar：0.5mm

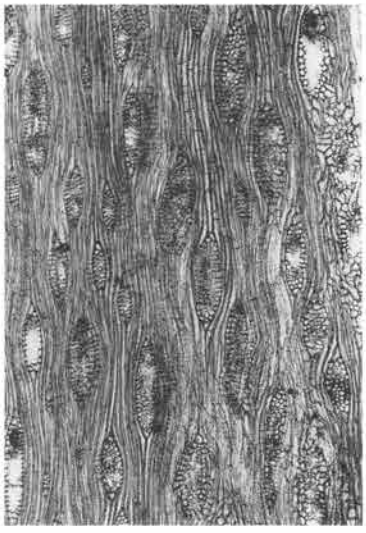
11b．同（接線断面）bar：0.5mm



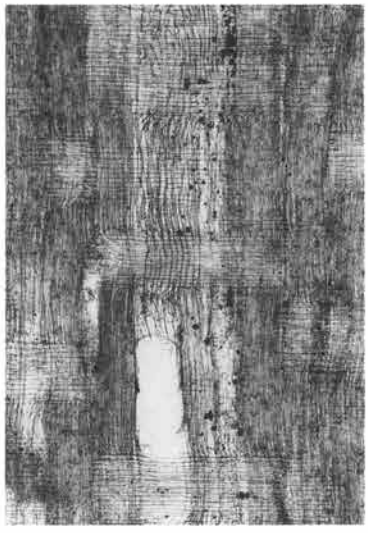
11c．同（放射断面）bar：0.5mm



12a．エノキ属（横断面）No. bar：0.5mm

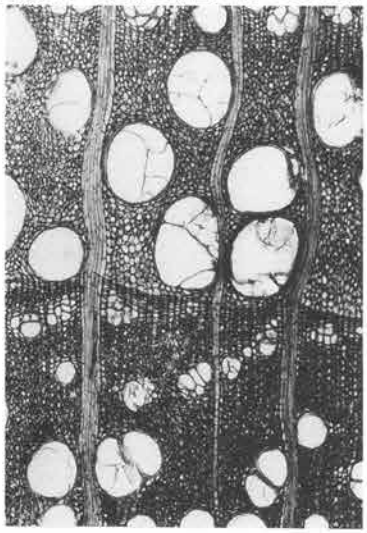


12b．同（接線断面）bar：0.5mm

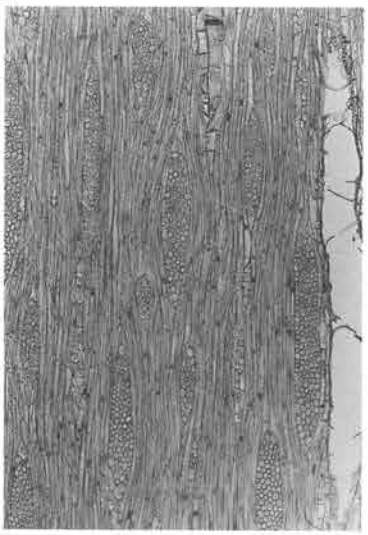


12c．同（放射断面）bar：0.5mm

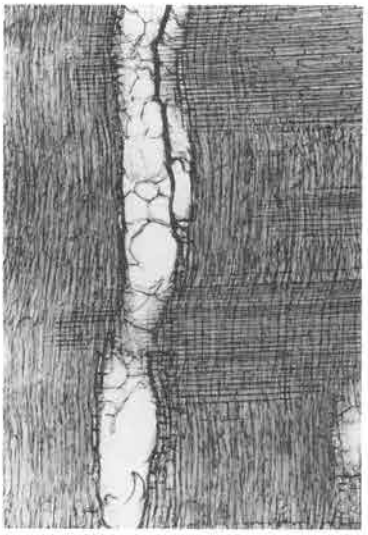
図版５．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



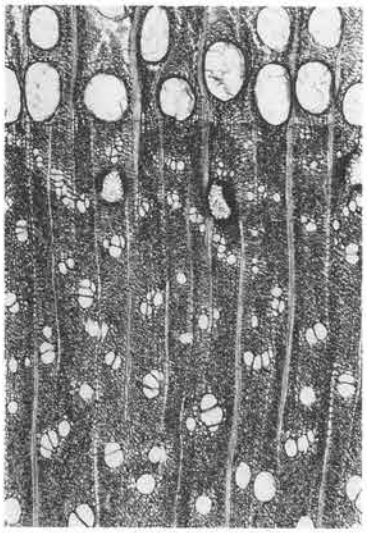
13a．ケヤキ（横断面）No. bar：0.5mm



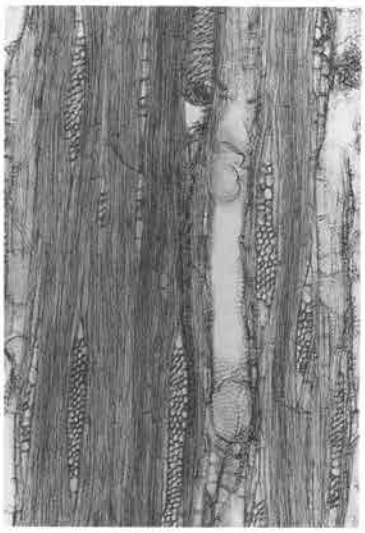
13b．同（接線断面）bar：0.2mm



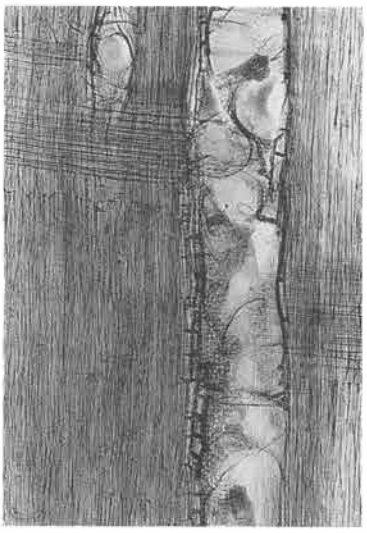
13c．同（放射断面）bar：0.1mm



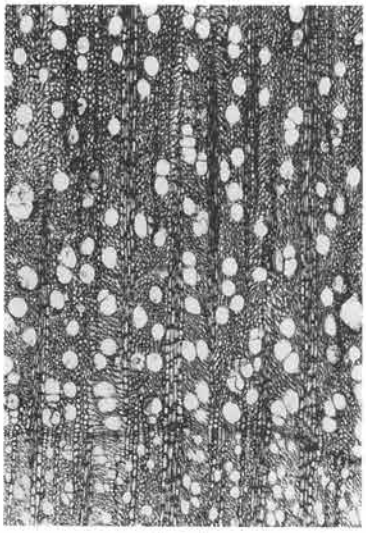
14a．ヤマグワ（横断面）No. bar：0.5mm



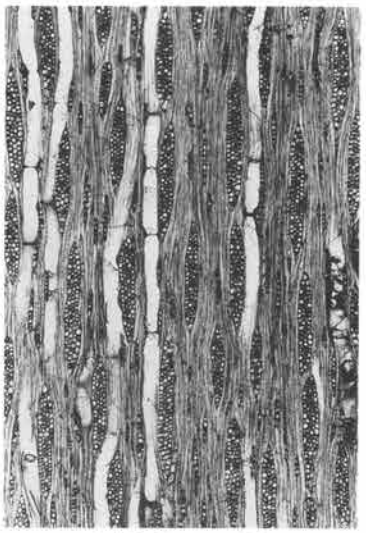
14b．同（接線断面）bar：0.2mm



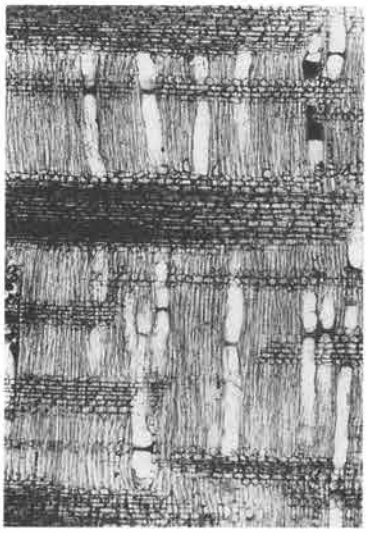
14c．同（放射断面）bar：0.5mm



15a．サクラ属（横断面）No. bar：0.5mm

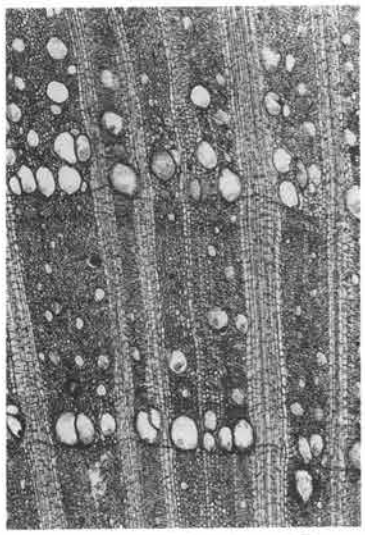


15b．同（接線断面）bar：0.5mm

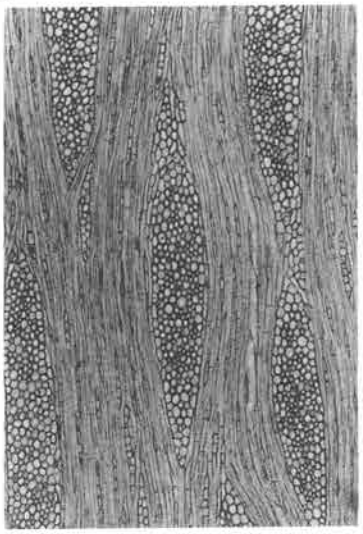


15c．同（放射断面）bar：0.5mm

図版６．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真

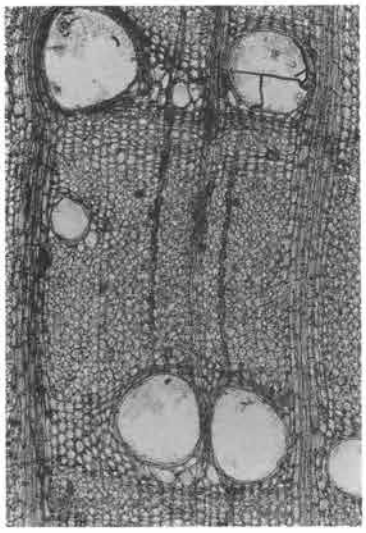


16a．バラ属（横断面）No. bar：0.5mm



16b．同（接線断面）bar：0.5mm

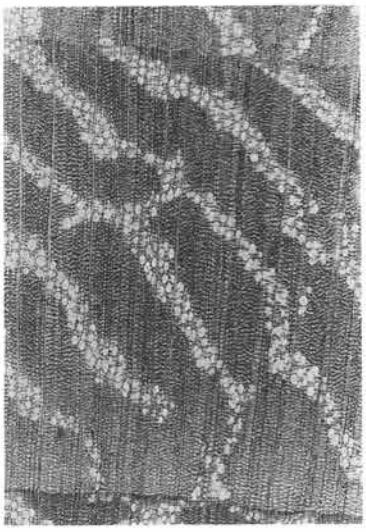
16c．同（放射断面）bar：0.5mm



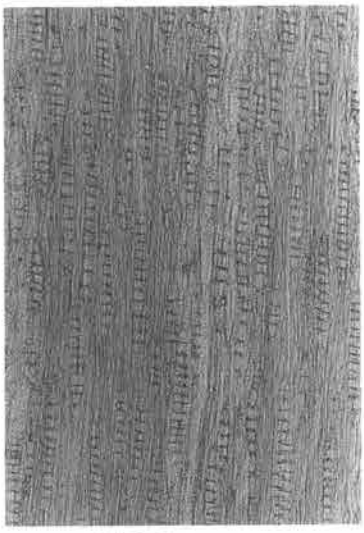
17a．イヌエンジュ（横断面）No. bar：0.5mm

17b．同（接線断面）bar：0.5mm

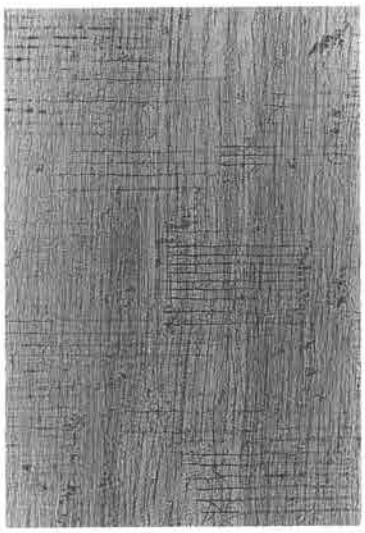
17c．同（放射断面）bar：0.5mm



18a．コクザキ（横断面）No. bar：0.5mm

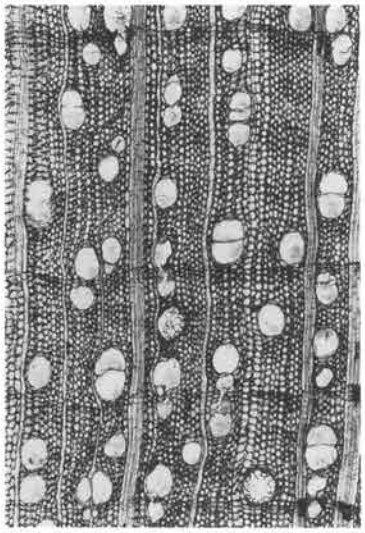


18b．同（接線断面）bar：0.2mm

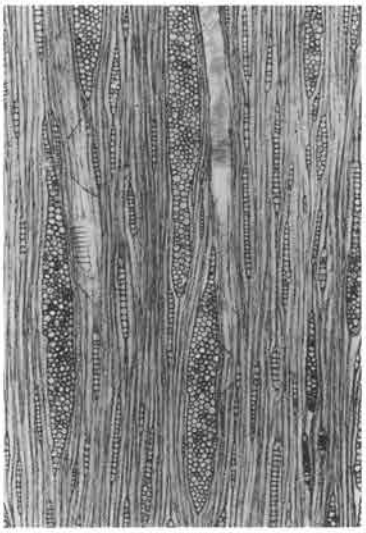


18c．同（放射断面）bar：0.2mm

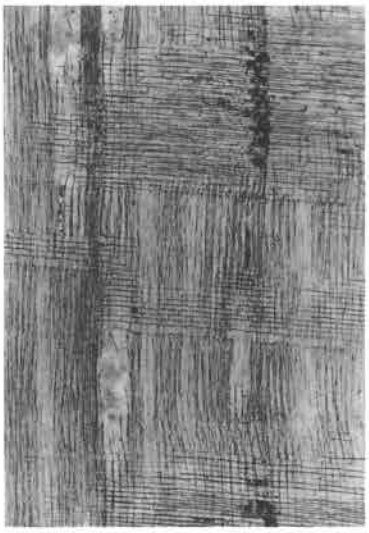
図版７．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



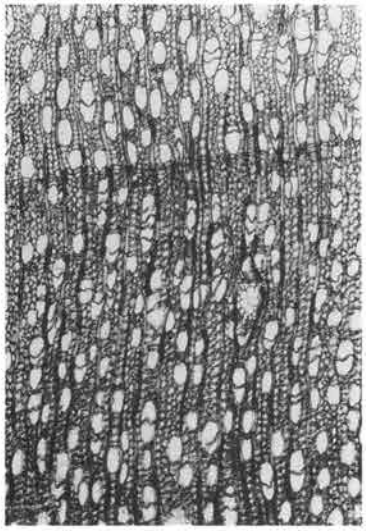
19a．カエデ属（横断面）No. bar：0.5mm



19b．同（接線断面）bar：0.5mm

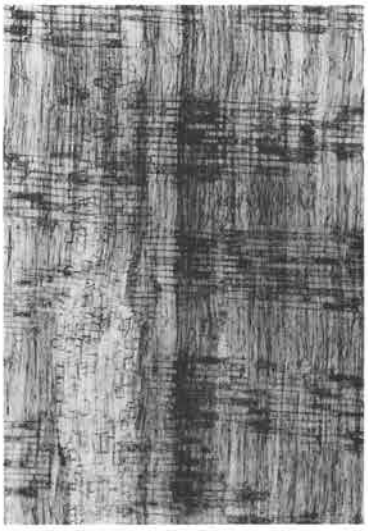


19c．同（放射断面）bar：0.5mm

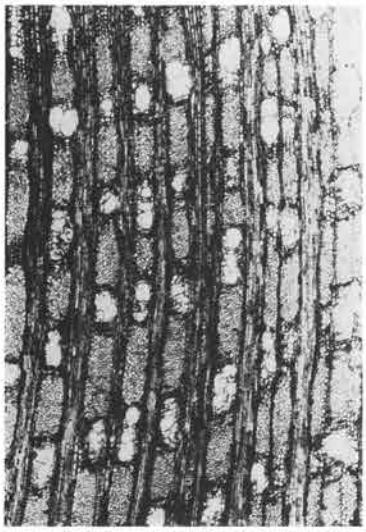


20a．トチノキ（横断面）No. bar：0.5mm

20b．同（接線断面）bar：0.5mm



20c．同（放射断面）bar：0.5mm

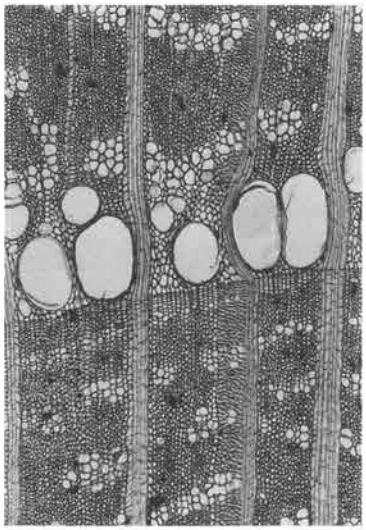


21a．ウコギ属（横断面）No. bar：0.5mm

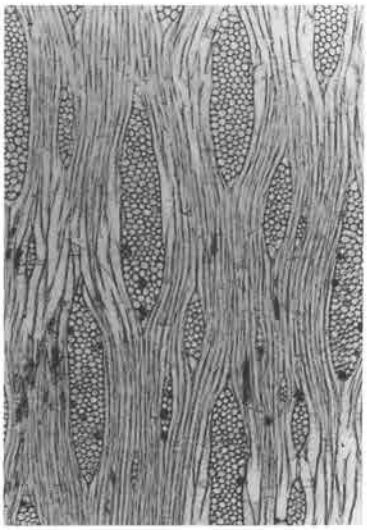
21b．同（接線断面）bar：0.5mm

21c．同（放射断面）bar：0.5mm

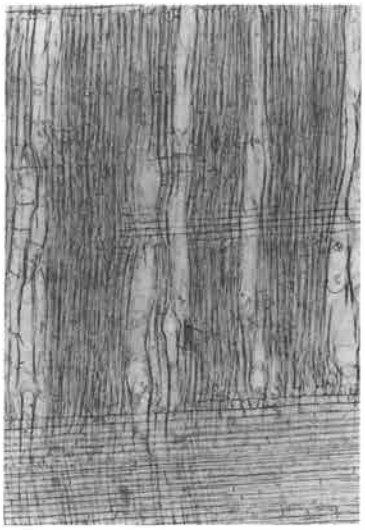
図版８．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真



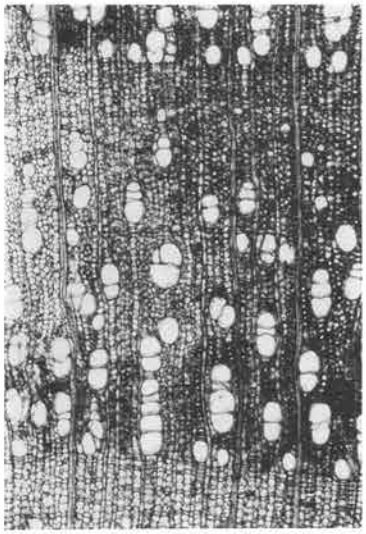
22a．ハリギリ（横断面）No. bar：0.5mm



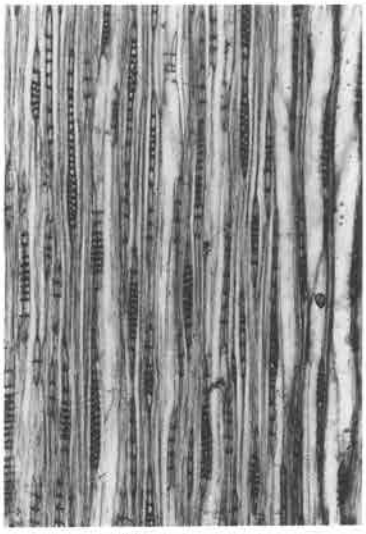
22b．同（接線断面）bar：0.5mm



22c．同（放射断面）bar：0.5mm

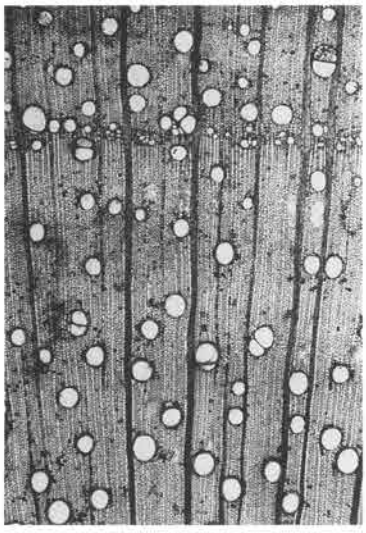


23a．エゴノキ属（横断面）No. bar：0.5mm

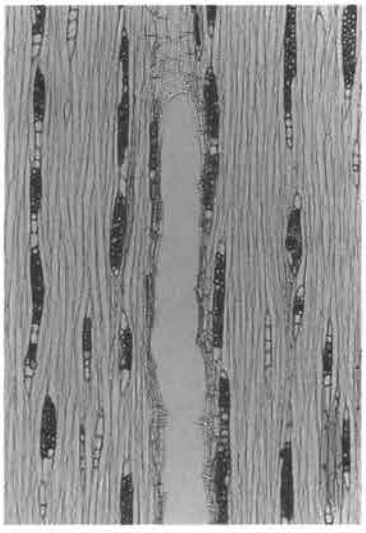


23b．同（接線断面）bar：0.1mm

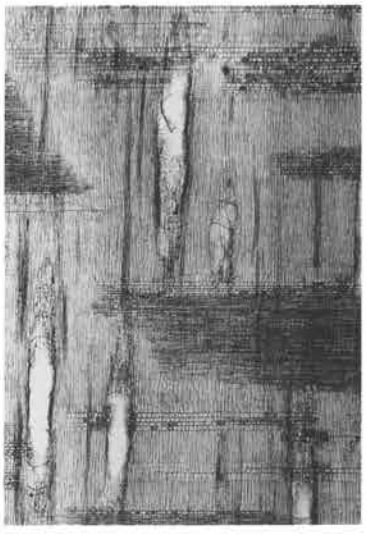
23c．同（放射断面）bar：0.5mm



24a．トネリコ属（横断面）No. bar：0.5mm

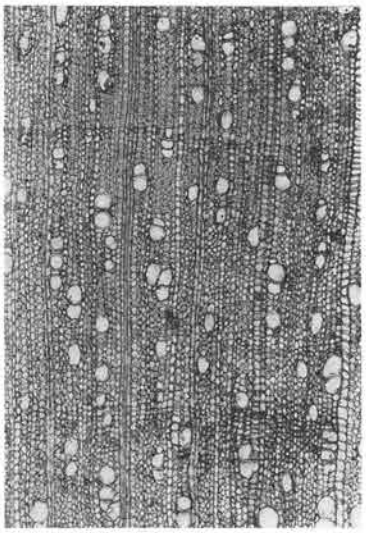


24b．同（接線断面）bar：0.2mm

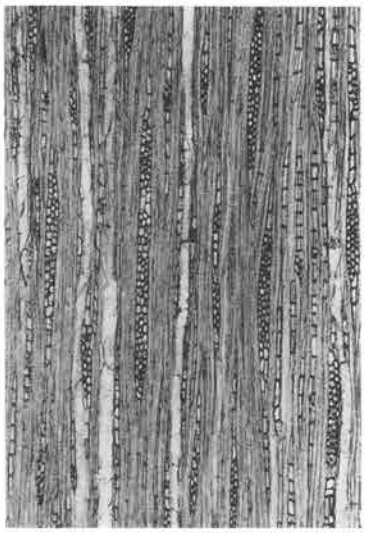


24c．同（放射断面）bar：0.5mm

図版９．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真

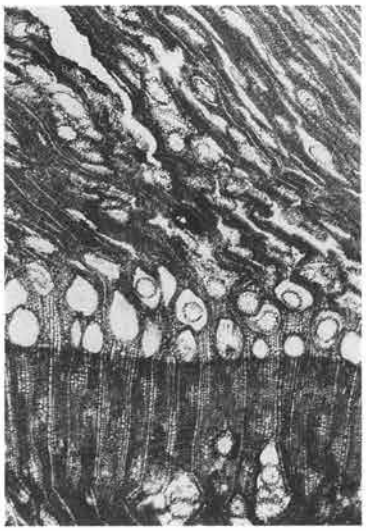


25a．ニワトコ（横断面）No. bar：0.5mm

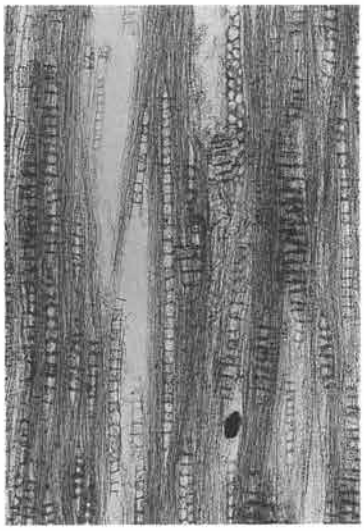


25b．同（接線断面）bar：0.5mm

25c．同（放射断面）bar：0.5mm

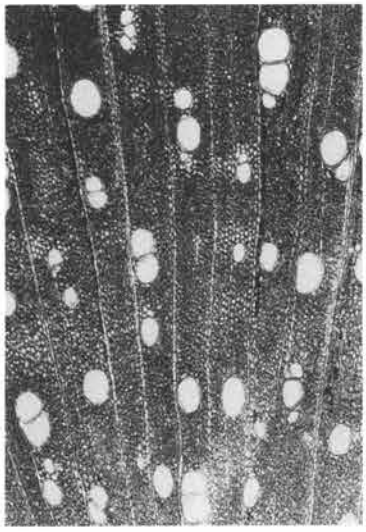


26a．環孔材Ａ（横断面）No. bar：0.5mm

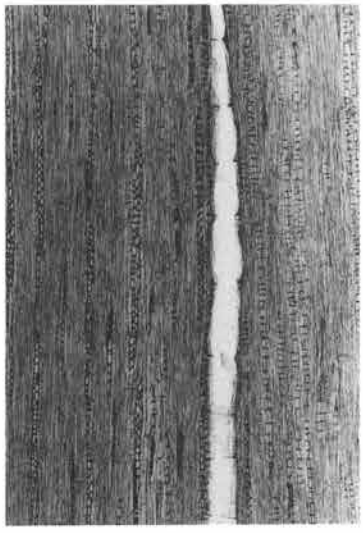


26b．同（接線断面）bar：0.2mm

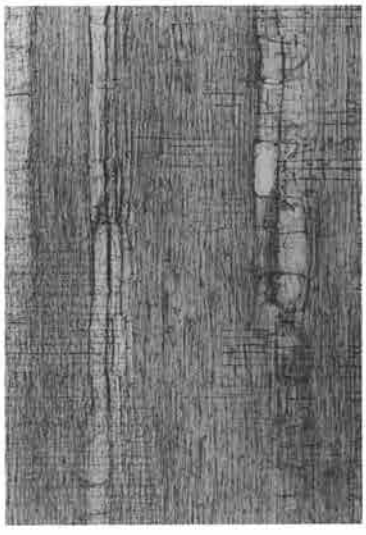
26c．同（放射断面）bar：0.5mm



27a．散孔材Ａ（横断面）No. bar：0.5mm

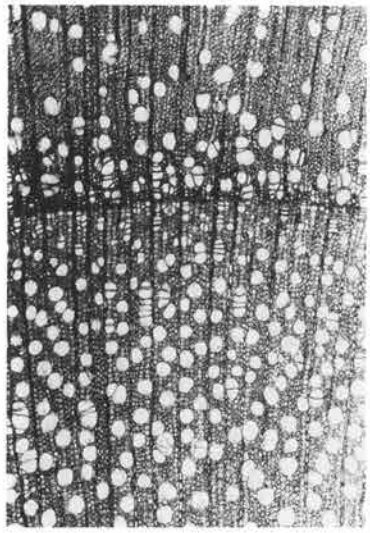


27b．同（接線断面）bar：0.5mm

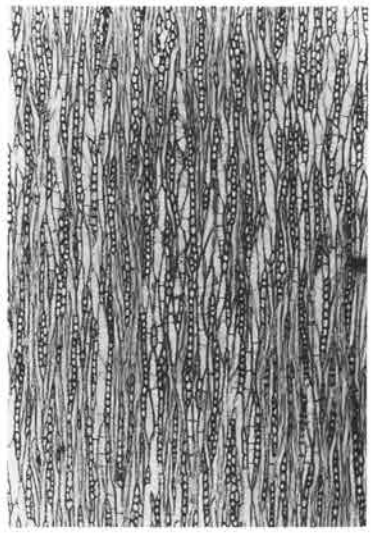


27c．同（放射断面）bar：0.5mm

図版10．鳥羽遺跡出土材の顕微鏡写真

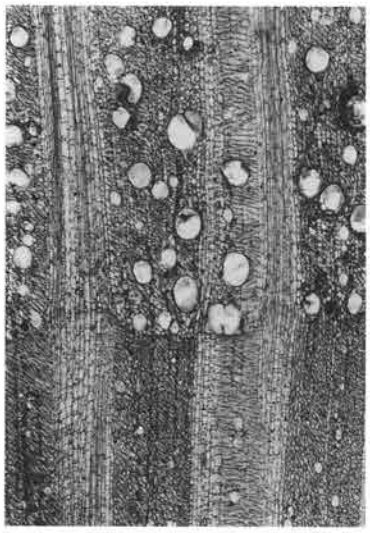


28a．散孔材Ｂ（横断面）№ bar：0.5㎜

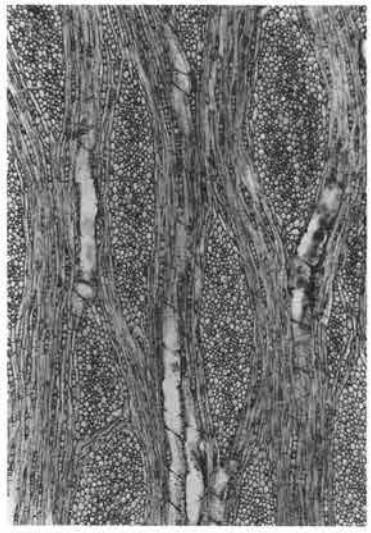


28b．同（接線断面）bar：0.5㎜

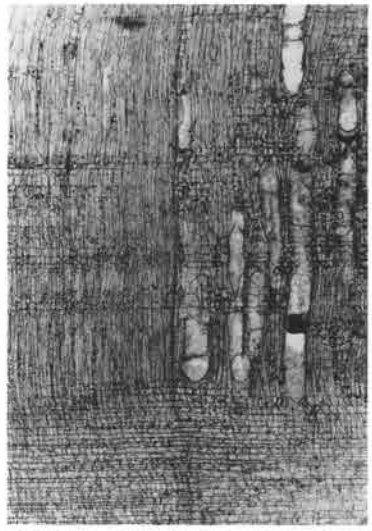
28c．同（放射断面）bar：0.5㎜



29a．蔓植物（横断面）№ bar：0.5㎜



29b．同（接線断面）bar：0.5㎜



29c．同（放射断面）bar：0.5㎜

第２節　鋳造遺物化学分析

１．群馬県鳥羽遺跡出土遺物記録（中世Ｄ区）

記録者　穴　澤　義　功

No.１　粒状の金属つき溶解炉々壁片

不整台形の溶解炉の炉壁破片である。板むで円弧を描き、断面は全部で４層からなる。縦方向はタガ状のきれいな輪積み単位がわかる。表面は緩やかな波状の黒褐色のガラス質滓で、表面には赤錆がまばらに付着している。粒状突起物も認められる。２層目は内張りと思われる胎土で紫紅色を呈し、剝離面に発泡層が面をなしている。表層とこの２層との間には球状の８㎜大で磁着の強い物質をかんでいる。炉体の胎土となる３、４層は赤色と黄褐色の酸化層で、胎土はスサが少々と籾がらの多少入った硬質のものである。分析は表層のガラス質滓の化学組成分析と、２層間の粒状の金属部分である。

No.２　溶解炉々壁片

溶解炉々壁体ブロックの内側に塗った粘土の溶解物と内容体の滓が付着した遺物である。厚み3.5㎝、高さ6.7㎝、厚さ3.5㎝のたが状の輪積が単位の炉壁片である。胎土には繊維化して白くなったスサ若干と籾がらを多少含んでいる。板状で円弧を描き、断面は全部で４屈からなる。表層は灰黒色で、内面には木炭痕を密に残し、流滴状のガラス質化している。また３ヶ所に木炭を噛み込む。木炭の大きさは、2.5×1.5㎝程度である。酸化物も粒状に付着する。２層目は内張りと思われ紫紅色を呈する。３、４層目は炉体の胎土で、籾・スサを混入する赤色と黄褐色の酸化層からなる。中位に薄く灰色の変色した部分も見られる。炉壁はきれいな輪積み単位を示し、上、下の端面に指頭痕が残っている。分析箇所は表層、内張り、炉壁ベースの胎土の３か所を行う。

No.３　羽口カバー粘土

断面形は三角形を呈し、羽口と炉体の隙間を埋めるカバー粘土と考えられる。羽口側は細かいスサを混じえた荒い砂質粘土で、茶褐色を呈する。ほとんど平坦な内面は灰黒色のガラス質滓である。一部に紅色の酸化色がある。破面は黒褐色の滓からなる波状面と、顆粒状でやや磁気反応をもつ２つの面からなり、後者は砂鉄の半溶解物の可能性がある。ガラス質面の基部には板状の木炭痕も２か所見られる。分析部分は破面に見られる顆粒状の磁着粒子部分を実施する。

No.４　ガラス質滓

流動状の濃いうぐいす色のガラス質滓の破片である。滓の一部に大きさ1.5㎝の黒鉛化した木炭が貫入し、裏面にも３か所の木炭痕が見られる。断面の気孔はやや楕円形を呈し、場所により大小が散在している。表面の一部には１～２㎜大の雲母状の結晶が晶出する。分析はガラス質部分を実施する。裏面には一部黒鉛化木炭をかんでいる。分析箇所はうぐいす色の溶解部の先端側を実施する。

No.５　椀形滓

断面椀形、平面は三角形の椀形滓の破片である。側面１面のみ原状を残し、２面は破面であり、全体は褐

色である。上半部は黒色とうぐいす色のガラス質の滓化しており流動状である。中心部は気孔の少ない緻密な鉄滓である。下面は砂粒状の土が覆っている。この砂粒は鍛冶炉の炉底粘土の一部であろう。分析箇所は滓中間部の気孔のほとんどない緻密な滓部分で実施する。

No.6　珪化木半溶解物

表面が被熱して一部が溶解した珪化木である。灰色で全体にゆがんでいるが、縞状の互層になっており元が珪化木であった質感はかろうじて残っている。小さな気孔は表面が中心である。分析箇所は長軸端部の½を用いる。

No.7　黒鉛化木炭

①うぐいす色のガラス質の滓の付着した黒鉛化木炭片である。元の木炭はほとんど消失し、外縁部が黒鉛化して残存する。少なくとも5年以上の年輪はあり、比較的薄い板状の材が黒鉛化したものと思われる。

②端部が黒鉛化した木炭の組織を残すが、年輪数や形状は不明である。木炭の空隙に残る酸化木質の径から考えると小枝状の木炭の基部と考えられる。

No.8　鉄塊系遺物

指頭大で楕円形の鉄塊系遺物である。表面は褐色、中心部は黒褐色となる。磁着度は中程度。表面の放射割れによる剝離部はセメダインでついでいる。中心部は黒錆が吹き、磁着反応が強い。端部に土砂付着。分析箇所は中心部の金属部分を実施する。

No.9　溶解炉内壁付着鉄塊系遺物

溶解炉の壁に付着した鉄塊系遺物である。溶解炉の壁は内面から内張粘土、灰色の滓層、鉄塊系遺物を介在する層、灰色の滓層の4層からなる。壁の溶解物は内側の一部を除き灰白色部や赤色部（銅色）褐色部など混在した色調に滓化している。2㎝大の木炭痕があり、気孔も部分的に多少認められる。中心部は錆を中心に放射割れをおこしている。この部分は年輪状に酸化物化し、中核部の黒錆部分は磁着反応が中程度と強い。溶解炉の壁に付着した鉄塊系遺物が滓に覆われたものか。分析は放射割れの中心の金属部を主に実施する。

No.10　鉄滓つき鉄塊系遺物

楕円形で塊状の中心部に金属鉄を残す鉄塊系遺物である。表面には被膜状の、裏面には薄い酸化土砂が付着している。さらに内側には気孔を散在させる鉄滓層が認められる。端部の中心部には磁着反応の強い金属鉄の遺存が推定される。金属鉄の多そうな鉄塊である。端部露出の部分は表面の緩やかな塊状を呈し、鉄が滓に巻き込まれた可能性がある。酸化物の中心に球状の金属鉄があると考えられる。磁着度は中程度。分析は金属鉄部分をねらう。

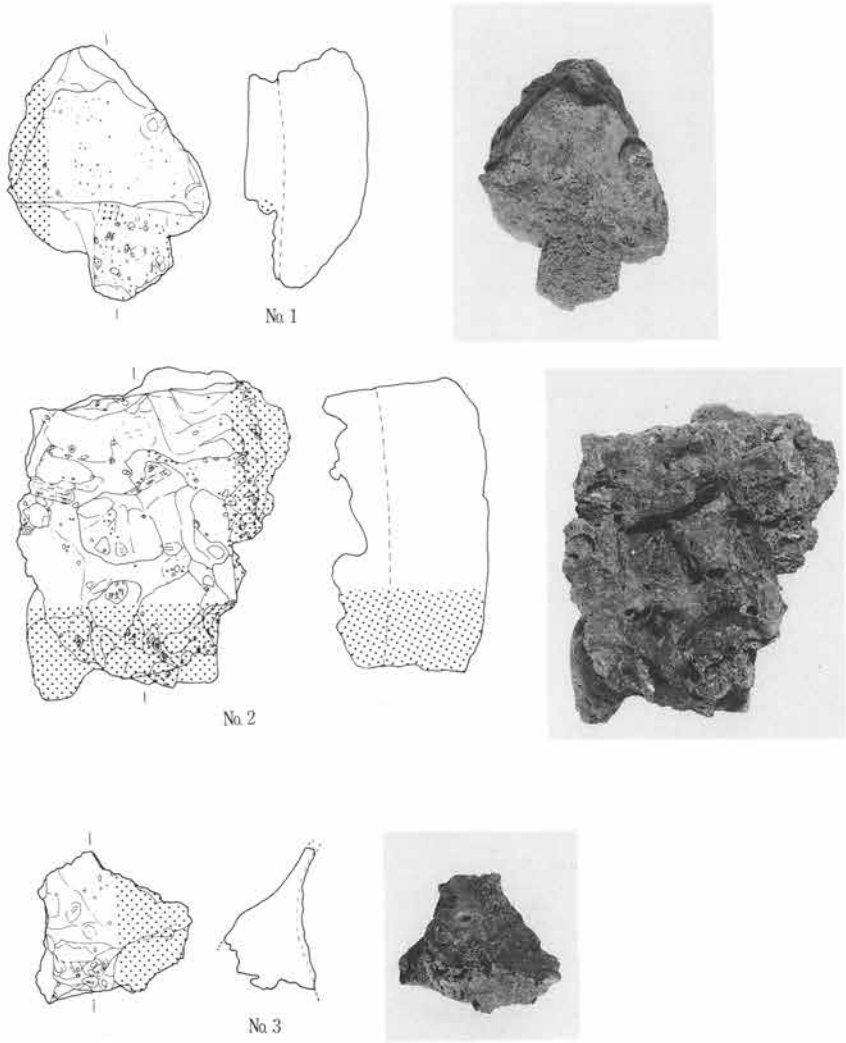
No.11　鋳型

胎土に細かいスサや籾がらを含み、スの多いやわらかな砂質の鉄鍋の鋳型である。地と中真土（厚さ、1.3㎜）と内真土（厚さ、0.8㎜）の順に3層となっている。内側には横方向のやや荒い引き目が若干残ってい

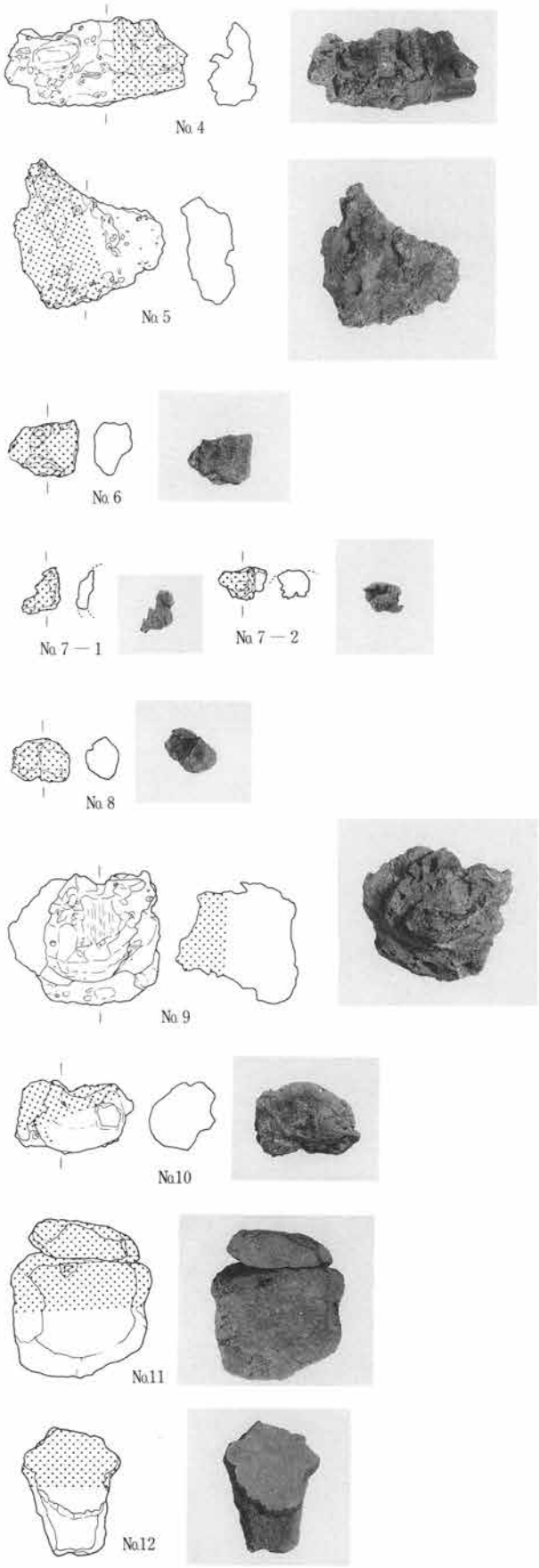
る。鋳造後の鋳型のために内真土は還元して灰青色であり、地色は赤褐色で一部はやや吸炭ぎみである。分析は胎土と２枚の真土の３か所を用いる。

No.12　鋳型

硬い焼成の鋳型である。地にはスサや籾がらを含まず色は赤褐色から灰紅色の砂質で硬いものである。使用後のもので、内側５～６㎜の厚さで還元している。横方向の引き目が残るが、極めて細い筋状であり、かなり丁寧な引き型と考えられる。中真土は砂質で、内真土とほとんど同質に見える。分析は地と中真土の２か所を実施する。



D区出土鋳造遺物化学分析試料（１）



Ｄ区出土鋳造遺物化学分析試料（２）

２．鳥羽遺跡出土の中世鋳造関連遺物の金属学的調査

大　澤　正　己

概　　要

鳥羽遺跡出土で、中世遺構のＣ43号井戸跡及び1050号作業竪穴から出土した鋳造関連遺物を調査して次の点が明らかになった。

(1)　鋳造作業は、鉄と銅の２通りの操業があった可能性をもつ。

(2)　溶解炉の炉壁、羽口カバー粘土及び鋳型胎土らは、すべての同系素材が充当されたと推定される。

(3)　銅鋳造は、濃緑色ガラス質の存在から想定できた。ただし、該品からは、金属鉄粒と片状黒鉛を析出する鉄のみの確認で、銅粒は未検出である。銅の比重が鉄より大きいので此の様な現象が起ると推定している。

(4)　鉄塊系遺物及び含鉄滓中の残留金属鉄は、過熱組織をもち、更に局部的に片状黒鉛を析出させる。これらは、鍛冶用原料となるのか鋳造溶解時の派生物なのか検討が必要である。後者の含鉄滓は、溶解炉の炉壁溶融物であり、鉄か銅かの判別が要求される。

(5)　鉄塊系遺物の１つは、高温からの水中冷却で現われるマルテンサイト組織が認められた。製鉄操業終了時、炉外へ取り出した鉄塊を冷却の為、水中へ投入する水鋼的手法が存在したのであろう。

１．いきさつ

鳥羽遺跡は、群馬県前橋市鳥羽町及び群馬郡群馬町大字塚田にわたって所在する。当遺跡Ｄ区内から出土した鋳造関連遺物（溶解炉炉壁及び溶着物、羽口カバー粘土及び溶着スラグ、濃緑色ガラス滓、椀形状滓、硅化木、黒鉛化木炭、鉄塊系遺物、小鉄塊、含鉄滓、鋳型）の調査を、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団より穴澤義功氏経由で要請された。

鳥羽遺跡は昭和53年４月から昭和59年３月にわたって発掘調査され、報告書は全４巻で計画された。第２巻には、Ｉ区の鍛冶工房跡が報告されて、拙稿はその鍛冶関連遺物に引続いて２度目の提出となる。

２．調査方法

２－１　供試材

Table １に示す。調査試料は、Ｄ43号井戸跡、1050号作業竪穴、ＫＫ16Ｄ埋土(この試料のみ古代に属する可能性あり）出土遺物である。明確な鋳造遺構からの出土品ではない。

２－２．調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

(3)　ビッカース断面硬度

(4)　ＣＭＡ（Computer Aided X-ray Micro Analyzer）調査

(5)　化学組成

全鉄分（Total Fe)、金属鉄（Metallic Fe)、酸化第１鉄（FeO)：容量法。炭素（Ｃ)、硫黄（Ｓ)：燃焼容景法、燃焼赤外吸収法。二酸化硅素（SiO_2)、酸化アルミニウム（Al_2O_3)、酸化カルシウム（CaO)、酸化カリウム（K_2O)、酸化マグネシウム（MgO)、酸化ナトリウム（Na_2O)、酸化マンガン（MnO)、二酸化チ

タン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)：ＩＣＰ法。ＩＣＰ(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(6) 耐火度

耐火物の火熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験は三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

３．調査結果

(1) 溶解炉炉壁付着物：金属粒とガラス質滓、（ＴＲＢ－１）　Ｄ43号井戸跡出土

① 肉眼観察

溶解炉炉壁は、板状で層をなすが、弧を描き、復元形はドーナツ形となる。断面は４層からなる。表層は緩やかな波状をなすガラス質で粒状突起物を作る。色調は黒褐色。２層は内張りと思われる茶褐色を呈し、剝離面に細粒気泡が面をなす。表層と２層との間には粒状（９㎜）で磁着の強い物質をさむ。３、４層は炉胎土で、酸化赤色土と黄褐色土からなる。籾を少量とスサを多量含む。

調査は、表層のガラス質滓の化学組成分析と、２層間の粒状物の組成チェックである。

② 顕微鏡組織

２層間の粒状物の組織を Photo. １、２、３に示す。まず、粒状物を５倍で撮影した断面マクロ組織を Photo. １の①に提示した。芯部５㎜の白色部は金属鉄で、これの周辺を外皮の２㎜が覆っている。最表皮はスラグ質、その内側はヴスタイト(Wüstite:FeO)である。最表皮側から芯部の金属鉄までの断面連続組織を Photo. １⑤に示す。これは研磨ままで腐食 (Etching) を施してない組織である。最表皮側では、暗黒色ガラス質スラグ中に短板状淡灰色結晶のファイヤライト(Fayalite:$2FeO.SiO_2$)の晶出が認められる。その内側の淡灰白色部はヴスタイト(Wüstite:FeO)が凝集して存在する。芯部は白色を呈する金属鉄である。酸化鉄系の非金属介在物を多く含む。当芯部金属鉄は、炭素（Ｃ）量が少なく、Photo. １の③に示す如く粒状のセメンタイト（Cementite:Fe_3C）が極く微量析出するのみで純鉄に近いものである。

Photo. ２には、ナイタル（５％硝酸アルコール液）で腐食した組織を示す。ヴスタイトの粒界が明瞭となり、芯部の金属鉄はフェライト（Ferrite: α（アルファ）鉄または純鉄ともいう）の結晶粒界が表われる。

Photo. ３の⑤は、Photo. ２④断面の反対側断面方向を示す。こちらは、ヴスアイト粒内が、微小に腐食を受けている。

③ ビッカース断面硬度

Photo. ３の③にヴスタイト、④に金属鉄フエライトの硬度測定後の圧痕写真を示す。硬度値は、ヴスタイトが455Hv、フエライトで90.8Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hvである。フエライトも100Hv以下である。両者は、それぞれの組織に対応した値であった。ヴスタイトは、硬度値からも同定できた。

④ ＣＭＡ調査

Photo. 10には、粒状物芯部金属鉄中に含まれる非金属介在物の特性Ｘ線像を示す。分析元素の存在は、白色輝点の集中度によって読みわける。ＳＥ（２次電子像）にみられる球状介在物は２層に分かれているが、両方共鉄（Fe）と酸素（O）に白色輝点が集中しており、該品は酸化鉄（FeO）と同定できる。溶解炉での鉄の溶融時に混入した介在物と考えられる。

⑤ 化学組成

表層のガラス質滓の分析結果である。Table、２に示す。鉄分は少なくガラス質主体となる。全鉄分（Total Fe）は7.25％で、このうち、酸化第１鉄（FeO）1.87％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）が5.49％の割合である。ガラス質（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）成分は、86.01％であった。銅（Cu）は0.005％で左程多くない。二酸化チタン（TiO_2）はガラス質滓としては、やゝ高目で0.94％であった。炉壁粘土の溶融物で、若干の鉄滓成分を混じ込ませる。

鉄鋳造の炉壁とも考えられるが、全面的にこれのみに固執する訳にいかなく、銅溶解の可能性も今後検討すべきであろう。

⑵　溶解炉炉壁（ＴＲＢ－２）Ｄ43号井戸跡出土

①　肉眼観察

前述したＴＲＢ－１炉壁に近似する。溶解炉胎土は、板状で層をなすが、弧を描き、復元形は円形で断面は４層となる。表層は灰黒褐色を呈し、流滴状のガラス質である。一面に木炭喰み痕があり、３ケ所に木炭を噛み込む。木炭の大きさは、2.5×1.5cmである。また酸化物が粒状に付着する。２層目は内張りと思われる。紫褐色を呈する。３、４層目は炉胎土で、酸化赤色土と黄褐色土からなる。胎土には籾、スサを混入し、中位に薄く灰層がみられる。炉胎は輪積み単位を示し、上・下端面に指頭痕が残る。

調査個所は、表層、内張り、胎土の３個所とする。

②　顕微鏡組織

Photo、４の①～③に１層目（Ⓐと表示）、④⑤に２層目（Ⓑと表示）、３・４層目をPhoto. 22の①～⑤に示す。１層目のガラス質部には、淡灰色片状結晶のアルミナ鉱物とチタンが共存する。２層目は、暗黒色ガラス質スラグに、白色粒状のチタン系析出物を晶出する。３層目はカオリナイト（$Al_2O_3 \cdot 2SiO_2 \cdot 2H_2O$）類を主体とするもので、石英その他の不純鉱物を含んでいる。

③　ＣＭＡ調査

Photo. 11に１層目のガラス質溶融部の特性Ｘ線を示す。淡灰色片状結晶には、アルミ（Ａｌ）に白色輝点が強く集中し、これに白色不定形金属晶出物はチタン（Ｔｉ）が検出される。両方共、高温で溶融する鉱物であり、溶解炉内で残存したと考えられる。

Photo. 12は、２層目の内張り部の溶融物の特性Ｘ線像である。アルミナ鉱物の淡灰色片状結晶は、やはりチタン鉱物と共存し、これは未溶解で残存する様相がよく判る。球状チタン鉱物は２層に分かれているが、色の濃い個所は97.8％Ｔｉで、淡い方は、22.6％Ｓｉ－47.1％Ｔｉ－19.5％Ｆｅとなる。１層と２層は、チタンにバラツキがあるが、同系粘土で若干の溶融温度差が認められる。１層目が高温溶解していた。

④　化学組成

Tahle、２に１層目（TRB-2A）と２層目（TRB-2B）を示す。成分的には両方共差異がなく、かつ、前述したTRB-１と近似するものであった。ただ気になるのは、１層目の銅（Cu）が0.010％に対して２層目は0.005％と僅かながら差が認められた。銅溶解炉の可能性も考えられる。

⑶　羽口カバー粘土（TRB-3）Ｄ43号井戸跡出土

①　肉眼観察

表皮は、黒色地に小豆色を混じた無光沢ガラス質滓である。数点の気泡露出と木炭痕が平坦部に認められる。指示サンプル採取個所は、無光沢灰黒色部、他破面は黒色ガラス質部もある。粘土部分は酸化赤色でスサ入りであった。

②　顕微鏡組織

Photo. 4の⑥～⑧に示す。暗黒色ガラス質スラグが主要鉱物である。⑥は3粒の半還元砂鉄粒子が懸だくする様子を提示した。通常溶解炉であれば、炉内に破鉄を装入する必要はない筈である。該羽口は製錬関連のものであろうか。

③　CMA調査

Photo. 13と14に砂鉄粒子の特性X線像を示す。いずれも粒内からは、鉄（Fe）主体に砂鉄特有元素のチタン（Ti）が強く検出されて、脈石成分の硅素（Si）、アルミ（Al）、マグネシウム（Mg）らが共通して認められる。なお、Photo. 13では、砂鉄粒子内からカルシウム（Ca）の存在が認められて、これは自媒剤としての鉄と滓の分離に効くものと想定される。

④　化学組成

Table. 2に示す。前述した溶解炉炉壁溶融滓よりは、鉄分が倍程度増加して、ガラス質成分は少量低減する。すなわち、全鉄分（Total　Fe）は15.47%でガラス質成分は77.065%である。銅（Cu）は0.010%と、やゝ高目であるが、銅溶解炉に装着した羽口カバーとは考え難い。砂鉄粒の検出が鉄関連遺物といいきれるか否かの検討も必要である。

(4)　ガラス質滓・濃緑色（TRB-4）1050号作業竪穴出土

①　肉眼観察

表裏共に局所に鉄錆を発する濃緑色ガラス質滓である。

②　顕微鏡組織

Photo、5の①～③に示す。鉱物組成は、暗黒色ガラス質スラグに白色の球状金属鉄を晶出する。黒色球状部は気泡である。又、鉄錆を発する個所は、金属鉄の錆化したゲーサイト（Goethite:α-FeO.OH）が存在する。②は、そういったゲーサイトの一つの組織であるが、これには黒色みみず状の片状黒鉛(Flake Graphite)が析出して、除冷を受けたねずみ鋳鉄（Gray cast iron）と判る。

球状鉄や、ねずみ鋳鉄の検出がなされたが該滓は、濃緑色を呈するので銅の鋳造滓に分類する。古代・中世の製銅法（真吹き）では黄銅鉱系を原料とすると、硫化銅と硫化鉄の混合物の鈹：マット相をつくり、スラグと分離させる。そのため、生成された粗銅は鉄分が多く含まれる。これが鋳造時の溶解で、銅の比重は8.9に対して鉄は7.8なので、分離しやすく、かつ、銅の融点1083℃と鉄の1535℃（炭素量が増加すると低温化する）に差異があり、滓中に銅が留まるケースは少なくなるものと考えられる。

③　CMA調査

Photo. 15に球状鉄の特性X線像を示す。白色球状鉄は、白色輝点が集中する元素は、鉄（Fe）のみで、その周囲には、ガラス質成分の珪素(Si)、アルミ(Al)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)、ナトリウム（Na）らが存在する。白色粒状鉄の定量分析値は、鉄（Fe）が105%となった。

Photo. 16には、ねずみ鋳鉄の片状黒鉛の特性X線像を示す。片状黒鉛部は炭素（C）が検出されて、黒鉛の析出であることを証明する。

④　化学組成

Table、2に示す、前述した炉壁溶着スラグに近似する成分系であるが、それらと異なる点は、金属鉄（Metallic Fe）が1.25%、酸化カルシウム（CaO）が12.70%と多い。金属鉄は、顕微鏡組織で観察した様に粒状鉄の晶出が影響する。酸化カルシウムは、銅製錬の真吹き時に石灰石を投入していて、その影響が残っているのかも知れない。銅（Cu）は、0.005%と低値である。銅鋳造滓としての数値からの特徴は握み難い。全鉄分（Total Fe）は6.67%、ガラス質成分は89.5%であった。

(5)　椀形鉄滓（TRB-5）1050作業竪穴出土。

①　肉眼観察

椀形状滓で約半分が欠損する。破面を観察すると、上部半分がガラス質、底部側は緻密な鉄滓状滓となる。表皮は黒色無光沢ガラス質で破面と対応する。分析指示は底部側であったが、両方共検鏡を行なった。

②　顕微鏡組織

Photo. 5の④～⑧に示す。④は底部の鉄滓状緻密質部、⑤⑥は表面と底部緻密部の境界、⑦⑧は表皮側ガラス質部である。底部緻密質部の鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト（Wüstite:FeO）、淡灰色短柱状のファイヤライト（Fayalite:$2FeO.SiO_2$）、それに暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛冶工房でみられる鍛冶滓組織とまったく同様のものである。

⑤⑥は緻密部と表層境界部のファイヤライトである。基地の暗黒色ガラス質スラグ部にも微細なファイヤライトが認められる。表層ガラス質部は、ほとんどが非晶質ガラスであるが、⑦⑧には、少量のファイヤライトの晶出部を示す。

該品は、鍛冶滓であるのか、銅鋳造に関連するのか判定の難しい滓である。

③　化学組成

Table、2に底部緻密質部の分析結果を示す。全鉄分（Total Fe）31.74%、このうち、酸化第1鉄（FeO）は31.70%と多く、酸化第2鉄（Fe_2O_3）が9.90%と少ない。ガラス質成分$CSiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は57.03%である。砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO_2）は0.45%、バナジウム（V）0.01%らは少ない。鍛錬鍛冶滓とみられぬこともないが、二酸化チタンやバナジウムの低値から銅の鋳造関連遺物としてもおかしくない成分である。椀形鍛冶滓は出来ず、結論は保留にしておきたい。

(6)　硅化木（TRB-6）1050号作業竪穴出土。

①　肉眼観察

淡灰黒色で無光沢の硅化木である。鳥羽遺跡内では第2巻報告の鍛冶工房でも多く出土されて、金属精錬に対して何か用途をもつものか否か議論を呼ぶ物質である。

②　顕微鏡組織

Photo. 6の①に示す。淡灰色網目状組織が認められる。

③　化学組成

Table. 2に示す。二酸化硅素（SiO_2）が主体で69.4%を占め、他に酸化アルミニウム（Al_2O_3）15.56%、全鉄分（Total Fe）3.78%、酸化カリウム（K_2O）2.5%、酸化ナトリウム（Na_2O）2.9%である。塩基性成分の酸化カルシウム（CaO）0.29%、酸化マグネシウム（MgO）1.44%は、媒溶剤としての役割も期待できない。硅化木は鍛冶や鋳造作業で何か利用価値があるのか不明である。

(7)　黒鉛化木炭（TRB-7）1050号作業竪穴出土。

①　肉眼観察

木炭に鉄分が置換して鉄錆を発した木炭状鉄片である。

②　顕微鏡組織

Photo、6の②に示す。木炭の気孔を残して鉄が置換されている。鉄は錆化されてゲーサイト（Goethite: α-FeO.OH）となっている。

化学組成は試料不足で実施できなかった。

(8)　鉄塊系遺物（TRB-8）ＫＫ16Ｄ区埋土出土。該品のみは古代（8C）に属する可能性がある。

①　肉眼観察

指頭大の楕円形の小鉄塊で、半分は放射割れにより剝離後接合する。残りの部分は黒錆が吹き、磁着反応が強い。端部に土砂を付着する。分析個所は、黒錆を吹いた部分の中核部を行なう。

②　顕微鏡組織

Photo. 6の③～⑦に示す。③は、小鉄塊表皮側に鉄滓を付着し、その内側の白色部は金属鉄を残存させる。④は鉄中の非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物）である。淡茶褐色多角形状を呈する。介在物組成は硫化鉄（FeS）でＣＭＡ調査の組成の同定結果を示す。⑥⑦は、ピクラル（ピクリン酸アルコール飽和液）腐食（Etching）で現われた過熱組織（Over heated Structure）である。製鉄炉内で生成された小鉄塊は、高熱にさらされ、オーステナイト（Austenite）結晶粒が温度と共に成長し、著しく粗大化している。組織は、フェライトとパーライト（Pearlite: フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）である。フェライトは白く、パーライトは黒く現われ、針状のフェライトは、ウイッドマンステッテン組織（Widmannstätten Structure）を呈してる。1300°C前後の温度でさらされて炉外へ出されて空冷を受けた組織と推定される。炭素含有量は0.4%前後の亜共析鋼に分類される。

③　ビッカース断面硬度

Photo. 6の⑤に硬度の測定結果を示す。硬度値は178Hvであった。過熱組織に見合った硬度値と考えられる。

④　ＣＭＡ調査

Photo. 17に小鉄塊表皮に付着した鉄滓の特性Ｘ線像を示す。ＳＥ（２次電子像）に示した鉱物組成はモライト系（Mullite-$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）の長柱状結晶とイルミナイト系（Ilmenite:$FeO \cdot TiO_2$）の微小結晶である。チタン（Ti）に白色輝点が集中しており、この小鉄塊は、砂鉄を始発原料とする事が想定される。

Photo. 18は、淡茶色非金属介在物の特性Ｘ線像と定量分析結果である。淡茶色介在物は鉄（Fe）と硫黄（Ｓ）に白色輝点が集中し、定量値は、67.1%Fe—37.5%Ｓで硫化鉄（FeSと同定される。なお、硫化鉄と共に対角線状に微小粒状に鉄—燐共晶のステダイト（Steadite）Fe—Fe_3C—Fe_3P の三元系共晶も認められた。特性Ｘ線像で燐（Ｐ）が斜めに帯状に存在するのが認められる。

⑤　化学組成

Table. 2に示す。全鉄分（Total Fe）は52.64%で、このうち金属鉄（Metallic Fe）は9.53%、酸化第1鉄（FeO）が8.07%、鉄錆を含む酸化第2鉄（Fe_2O_3）が52.67%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+K_2O+Na_2O$）は15.98%を含む。ＣＭＡ調査で表皮鉄滓のチタン（Ti）分の検出から始発原料は砂鉄由来と想定できるが、二酸化チタン（TiO_2）は0.47%と左程高くない。非金属介在物に燐共晶がみられた様に、燐分はやゝ高目で五酸化燐（P_2O_5）として0.22%が含有される。又、炭素（Ｃ）は、1.12%と高目傾向にあるのは、表皮側の有機物の影響が大きいと考えられる。銅（Cu）の0.015%は、砂鉄系でも銅は鉄に固溶するので、この程度は普通であろう。

(9)　含鉄滓（TRB-9）D43号井戸出土。

①　肉眼観察

内面から内張り粘土、灰色滓層、含鉄鉄粒を介在する層、灰色の滓層の4層からなる。調査個所は、含鉄層を行なう。この層は、年輪状に酸化が進んでおり、その中核部分は黒錆をもち、放射状亀裂が走る。この部分は磁着反応が強い。溶解炉の内壁には付着した鉄粒が滓に覆われた可能性がある。4層目の灰色層の分析まで行なった。

②　顕微鏡組織

Photo. 7、8に示す。Photo、7の⑤に含鉄部の断面長手方向の連続組織写真を示す。最表層側は、過熱組織でフェライトが成長して若干脱炭気味である。その内側の淡黒から黒色の増した個所はパーライト組織である。更に内側に入ると、木炭による固体侵炭による異常組織が認められる。パーライトの周囲に大きくフェライトが発達し、その粗大フェライトの中にセメンタイトが網状に析出している。又、更に内部に入ると、異常組織とパーライトの内側には、片状黒鉛の析出が認められる。Photo. 8の①～③には、この片状黒鉛をピクラル腐食（Etching）有無で示している。

Photo、8の④～⑧は、4層目の灰色層ガラス質部である。鉱物組成は、ゲーレナイト（Gehlenite:Ca2Al_2SiO_7）系に金属鉄及びゲーサイトを含む。

③　ビッカース断面硬度

Photo. 7の③に片状黒鉛析出個所に近いパーライト部の硬度圧痕写真を示す。硬度値は212Hvである。④は異常組織に近い個所のパーライト部で281Hvであった。

④　ＣＭＡ調査

Photo. 19に片状黒鉛析出部の特性Ｘ線像を示す。片状黒鉛部には、炭素（Ｃ）が検出されて、黒鉛の同定ができた。この片状黒鉛中にはステダイト（Steadite）のFe-Fe_3C-Fe_3Pの三元系共晶が認められた。

Photo. 20は、4層目の灰色層の特性Ｘ線像である。白色の不定形部は金属鉄である。これらの周囲には、ゲーレナイト（Gehlenite:$Ca_2Al_2SiO_7$）の長柱状結晶と、微小粒状のファイヤライト及び暗黒色ガラス質スラグが認められる。

⑤　化学組成

Table. 2に示す。4層目灰色層の分析結果である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）主体で80.98％となる。全鉄分（Total Fe）は、11.48％と低目で、二酸化チタン（TiO_2）は0.59％、バナジウム（V）0.02％と2成分共に少ない。銅（Cu）は0.015％とやゝ高目で、鉄と銅のどちらの鋳造関連溶解炉か判定の難しい滓である。

金属鉄部分の分析も行なった。炭素（Ｃ）は1.03％で過共折鋼である。硅素（Si）が0.92％は高過ぎて鉄滓のまぎれ込みが考えられる。燐（Ｐ）が0.26％と高目は材質に対して気がかりである。ただし鋳造鉄素材であれば湯流れが良好となるので問題ない。砂鉄始発原料でもチタン（Ti）0.01％バナジウム（V）0.02％と低値となる。

⑽　鉄塊系遺物（TRB-10）Ｄ43号井戸跡出土

①　肉眼観察

表裏共に淡褐色土砂混りの一層に覆われた楕円塊状の小鉄塊である。端部中核部には磁着反応の強い金属鉄の残留が推定された。端部亀裂発生部の金属鉄残存部より分析試料を採取した。

②　顕微鏡組織

Photo. 9の①～⑨に示す。②は左側に最表層の錆化層直下の過熱組織から濃淡ムラをもつパーライト部までを連続組織写真で示す。又、視野を変えた個所には表層側に接してマルテンサイトと球状センタイト（Martensite and Glabular Cementite）が認められる。

製鉄炉内で800℃前後まで加熱された小鉄塊が炉外へ出されて水冷された可能性をもつ。すなわち、球状セメンタイト組織のものを水冷している。ただし、60ｇの小塊で、②に示した過熱組織と、このマルテンサイトと球状セメンタイトの両組織を併せもつのは、作業条件が今一つ不鮮明で、何か突発的な偶然的産物かも

知れない。ただしマルテンサイトを有する水冷組織をもつ小鉄塊は熊本県荒尾市の狐谷製鉄遺跡で幾つか検出されていて、古代製鉄において水鋼的手法が存在した事は間違いない事実であろう。③

③　ビッカース断面硬度

Photo. 9の⑦と⑧に硬度圧痕写真を示す。⑦はパーライト析出部で硬度値は262Hvである。これに対して⑧のマルテンサイト組織は367Hvであった。当硬度を提するマルテンサイトの炭素量は、0.2〜0.3%の亜共析鋼レベルであろう。

④　CMA調査

小鉄塊金属鉄中にある球状非金属介在物の組成同定を行なった。Photo. 21に特性X線像と定量分析値を示す。組成は硅酸塩系で二層に分けられる。SE（2次電子像）に示された球状介在物の1と番号を振った個所は、塩基性成分（CaO + MgO）の高い個所で、44.3% SiO_2−37.5% CaO +2.4% FeO −4.9% Al_2O_3−11.9% MgO となる。2の個所は51.7% SiO_2−13.8% CaO−2.4% FeO−21.0% Al_2O_3−9.1% K_2O−2.2% MgO系である。チタン濃度は1.4%と低いが、砂鉄系の可能性が強い。Ti系介在物には遭遇することが出来なかった。

⑤　化学組成

金属鉄の分析結果をTable. 2に示す。炭素量は1.37%と過共析鋼である。硅素(Si)が0.95%と多いのは、一部鉄滓の捲込みがあって、その影響がでたのだろう。マンガン（Mn）は0.01%と少なく、原料中のものは滓へ移行する。燐（P）が0.34%と高目は注目される。銅（Cu）は0.043%と高目で、チタン（Ti）0.01%、バナジウム（V）0.01%と低目である。砂鉄特有元素のチタン、バナジウムが少ないといって短絡的に鉱石系とも云いきれない。非金属介在物での確認が必要となる。該品は硅酸塩系介在物の検出で、かつ、非金属介在物中の二酸化チタン(TiO_2)が1.4%という値であった。現在、得られたデータからは、磁鉄鉱石を始発原料とする小鉄塊といいきれぬ事もないが、介在物1点のみの結果では、やゝちゅうちょせざるを得ない。ただし、群馬県秩々父山中には鉄鉱石を産する鉱山もあるので、気がかりな小鉄塊ではありうる。TRB-9の含鉄滓中の金属鉄の化学組成と該品は近似した成分系である。また、TRB-9B　のガラス質滓のCMA調査（Photo. 20）から二酸化チタン（TiO_2）が検出される状況をかんがみ、やはり砂鉄系小鉄塊とすべきであろう。

(11)　鋳型（TRB-11）　D43号井戸跡出土。

①　肉眼観察

真土、基土からなり2度の使用で互層となる。胎土には、籾、スサが混じる。

②　顕微鏡組織

Photo. 22の⑥⑦及び、Photo. 23の①〜③に示す。鉱物組成はカオリナイト(Kaolinite:Al_2O_3]$2SiO_2$. $2H_2O$)主体である。被熱面は溶解後凝固している。断面の色調は被熱部が黒味を帯び、中間層は赤く、外側は淡茶色を呈していた。この3個所の組織写真では顕著な差異は認められない。詳細は後日粉末X線回折で同定する予定である。

③　化学組成

Table、2に被熱層(A)と中央の赤色層(B)の2層について分析した結果を示す。A、B両者に成分差なく近似する。全鉄分（Total Fe）7.0%台、二酸化硅素（SiO_2）5.6%台、酸化アルミニウム（Al_2O_3）18%台である。又、酸化カルシウム（CaO）5.6%、酸化マグネシウム（MgO）3.0%と塩基性成分は多い。酸化第2鉄（Fe_2O_3）は2.0%台と低目もあり、その他不純物成分は少ない。アルミナ質は多い目で耐火物として適した

粘土であろう。

④　耐火度

被熱層(A)の粘土について耐火度を調査した結果、1210℃だった。鋳型粘土としてほぼ機能する温度であった。

⑿　鋳型（TRB-12）D43号井戸跡出土。

①　肉眼観察

鉄鍋の鋳型である。表面は粒子の細かい土で構成され、鋳造後のためか灰褐色に還元している。表面には横走する筋目が見られる。胎土は粗い砂質粘土でスサ入りの可能性がある。分析個所は3層に分けて行なった。

②　顕微鏡組織

組織は初熱層(A)と外側(B)の2個所の観察である。Photo. 23の④～⑦に示す。カオリナイト系で、前述したTRB-11 粘土と大差ない組織である。

③　化学組成

3層にわたって分析を行なった。組成は3層共大差ない成分系である。構成成分も、前述したTRB-11A、11B と差異のない胎土であった。

4　ま　と　め

鳥羽遺跡の中世に属する鋳造関連遺物の調査を行なった。溶解炉遺構そのものの確認はなされていないが、鋳造遺物の廃棄所として使用されたD43号井戸跡遺物及び1050号作業竪穴出土遺物らを併せて供試材とした。

(1)　溶解作業は、鉄と銅の両方が行なわれた形跡をもつ。溶解炉の炉壁使用粘土と、羽口カバー粘土及び鋳型胎土らはは、同系粘土の使用が想定された。各粘土は、アルミナ質は18%台で耐火性は優れ、耐火度は1210℃前後であった。

(2)　銅の鋳造に関しては、濃緑ガラス質滓が出土した。該品は球状化鉄粒を晶出し、ねずみ鋳鉄を残存させるが、銅粒は未検出である。銅の鋳造滓といえども、比重差で銅はほとんど回収されたと推定される。(銅8.9、鉄7.8の比重)

(3)　製鉄炉や鋳造溶解炉内では、時折り木炭に鉄が置換した黒鉛化木炭が派生する。今回も、この黒鉛化木炭の出土をみたが、鉄分の錆化が進行していて炭素含有量までの情報を得ることが出来なかった。

(4)　鍛冶工房で多くみられる椀形状滓も検出された。鉱物組成は、鍛冶滓にみられる晶癖のヴスタイト（Wüstite:FeO）とファイヤライト（Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$）の構成であるが、これは銅鋳造に関連する滓の可能性をもつ。銅製錬の真吹では、硫化銅と硫化鉄混合物の鈹(かわ)：マットを荒銅には含まれるから、滓として鉄系も残りうる。ヴスタイト系銅滓の追求は多年に亘る研究課題でもある。[④]

(5)　鳥羽遺跡では、多くの硅化木の出土を遺構近くでみた。硅化木は、塩基性成分（CaO ＋ MgO）が特別多い訳ではなく、鍛冶や鋳造に際して特別の用途があったか否か不鮮明である。この問題も後日の研究課題となる。

(6)　砂鉄を始発原料とした鉄塊系遺物の小鉄塊が検出された。高温域からの水冷により析出するマルテンサイトが確認された。近世たたらの水鋼的手法の産物であろうか。この小鉄塊は、鍛冶用原料となる荒鉄なのか、鋳造時の溶解炉の生成物なのか、その判別は決めかねる。ただし、羽口カバー粘土溶着スラグには、半

還元砂鉄粒子が遺存されて、該品が製鉄炉に装着されたとするならば、荒鉄の要素もありうるが、製鉄炉操業は状況証拠としては難しい。

(7)　鋳造溶解炉の炉壁溶着物には、ねずみ鋳鉄が残存してる。これを単純に鉄鋳造用の炉壁と決めつけるのは早計であろう。前述した様に銅製錬で生じたマットの硫化鉄と硫化銅の両方から、銅鋳造に際しては、比重差から銅は残らず鉄のみの検出だって起りうるからである。

(8)　古代の可能性をもつ小鉄塊の検出もあった。該品は表皮に砂鉄を始発原料とする鉄滓を付着し、鉄中非金属介在物には硫化鉄（FeS）を含む。古代製鉄炉からの産物で、鍛冶原料の可能性をもつ。

(9)　含鉄滓（TRB-9）と鉄塊系遺物中の残存金属鉄の分析において燐（P）が0.26～0.34％で検出された。高燐含有鉄である。燐は鋳造時に湯流れを促進する元素である。目的意識をもって添加したのが、自然含有か興味を呼ぶ値である。これも今後の研究課題としておきたい。

(10)　古代・中世の金属鋳造の研究において、鉄なり銅なり遺構の確定できる出土遺物の基礎データの早急蓄積が望まれる。これが今回調査遺物を通して抱いた所感である。

Table. 1　鳥羽遺跡出土供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目				
				大きさ（mm）	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA調査	化学組成	耐火度
TRB-1	溶解炉炉壁付着物	KK16D区SE43（井戸）	中世	75×95×45	265	○	○○	○	○	
2	溶解炉炉壁	KK16D区SE43（井戸）	〃	100×120×60	670	○○○		○○	○○	
3	羽口カバー粘土	KK16D区SE43（井戸）	〃	60× 50×42	78	○		○○	○	
4	ガラス質滓	KK16D区SK1050（作業竪穴）	〃	35×75×15	56	○		○○	○	
5	椀形鉄滓状	KK16D区SK1050（作業竪穴）	〃	60× 65×30	92	○			○	
6	硅化木	KK16D区SK1050（作業竪穴）	〃	30× 22×12	12	○			○	
7	黒鉛化木炭	KK16D区SK1050（作業竪穴）	〃	15× 18× 9	8	○				
8	鉄塊系遺物	KK16D区埋土	古代(8C)？	25× 16×13	15	○	○	○○	○	
9	含鉄滓	KK16D区SE43（井戸）	中世	60× 50×35	162	○○	○○	○○	○○	
10	鉄塊系遺物	KK16D区SE43（井戸）	〃	45× 30×18	59	○	○○	○	○	
11	鋳型	KK16D区SE43（井戸）	〃	60× 60×40	142	○○○			○○	○ 1210℃
12	鋳型	KK16D区SE43（井戸）	〃	60× 40×22	45	○○			○○	

○１ケ所調査　○○２ケ所調査

Table. 2　化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	分子式 Total Fe	分子式 Total Fe	注
TRB-1	鳥羽	KK16D区SE43井戸	ガラス質滓	中世	7.25	0.31	1.87	5.49	56.0	18.28	5.66	2.62	1.280	2.170	0.16	0.94	0.01	0.005	0.19	0.10	0.02	0.005	86.01	11.865	0.130	①
2A	〃	〃	〃	〃	8.29	0.28	1.44	9.86	56.5	19.07	5.53	2.53	1.500	1.730	0.13	0.78	0.02	0.005	0.18	0.12	0.02	0.010	86.86	10.478	0.094	〃
2B	〃	〃	〃	〃	7.84	0.26	1.58	9.14	56.8	18.68	5.70	2.61	1.785	1.905	0.13	0.73	0.03	0.008	0.19	0.09	002	0.005	87.48	11.158	0.100	〃
3	〃	〃	〃	〃	15.47	0.20	4.68	16.66	49.9	16.67	5.13	2.59	1.005	1.770	0.16	0.66	0.03	0.006	0.19	0.06	0.02	0.010	77.065	4.982	0.043	〃
4	〃	KK16D区SK1050作業竪穴	〃	〃	6.67	1.25	1.58	5.99	53.2	17.46	12.70	3.16	1.320	1.615	0.17	0.62	0.02	0.008	0.11	0.16	0.03	0.005	89.455	13.412	0.093	〃
5	〃	〃	椀形鉄滓状	〃	31.74	0.17	31.70	9.9	36.8	12.62	3.49	1.85	1.310	0.955	0.12	0.45	0.01	0.011	0.19	0.06	0.01	0.005	57.025	1.797	0.014	〃
6	〃	〃	硅化木	〃	3.78	0.17	1.58	3.40	69.4	15.56	0.29	1.44	2.555	2.910	0.07	0.54	0.03	0.006	0.12	0.12	0.01	0.005	92.155	24.380	0.143	〃
8	〃	KK16D区埋土	小鉄塊	古代(8C)?	52.64	9.53	8.07	52.67	11.2	3.50	0.48	0.46	0.110	0.230	0.03	0.47	0.02	0.159	0.22	1.12	0.04	0.015	15.980	0.304	0.009	〃
9B	〃	KK16D区SE43井戸	ガラス質滓	中世	11.48	0.39	2.16	13646	52.4	16.42	6.28	2.57	1.530	1.780	0.14	0.59	0.02	0.012	0.23	0.13	0.02	0.015	80.980	7.054	0.052	〃
11A	〃	〃	鋳型粘土	〃	7.00	0.13	0.79	13.46	55.7	16.82	5.78	3.04	0.975	2.085	0.14	0.71	0.04	0.005	0.16	IgLoss 0.59	0.02	0.005	84.40	12.057	0.101	〃
11B	〃	〃	〃	〃	7.14	0.17	0.72	2.04	57.9	18.66	5.46	2.96	1.110	1.925	0.14	0.71	0.01	0.008	0.16	IgLoss 0.84	0.02	0.005	88.015	12.327	0.099	〃
12A	〃	〃	〃	〃	7.28	0.12	0.72	9.44	56.8	18.58	5.53	2.93	1.316	2.205	0.14	0.70	0.01	0.006	0.16	IgLoss 0.95	0.02	0.010	87.361	12.000	0.096	〃
12B	〃	〃	〃	〃	6.93	0.11	1.73	7.83	57.9	18.39	4.93	2.98	0.955	1.840	0.16	0.70	0.02	0.007	0.16	IgLoss 1.68	0.02	0.005	86.995	12.553	0.101	〃
12C	〃	〃	〃	〃	6.72	0.11	0.86	8.45	57.2	18.38	5.56	3.26	0.775	2.105	0.16	0.71	0.01	0.007	0.15	IgLoss 1.39	0.02	0.005	87.28	12.988	0.106	〃
9A	〃	〃	金属鉄	〃	C 〃 1.03	Si 0.92	Mn 0.02	P 0.26	S 0.073	Cu 0.026	Ti 0.01	V 0.02	—	—	—	—	—	—	—	—						
10	〃	〃	〃	〃	C 1.37	Si 0.95	Mn 0.01	P 0.34	S 0.059	Cu 0.043	Ti 0.01	0.01	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
J-864A	鳥羽	3号南土坑	銅ガラス質滓	中世	5.50	—	5.96	1.24	63.4	17.76	6.88	2.09	—	—	0.11	0.90	Nil	0.011	0.12	0.50	0.18	Nil	90.13	16.387	0.164	②
J-861A	〃	1号工房KK16I区	鍛錬鍛冶滓	奈良・平安	40.7	—	48.0	4.40	27.5	11.15	5.18	1.90	—	—	0.12	0.55	0.01	0.017	0.24	0.04	0.012	0.009	45.73	1.124	0.014	〃
B	〃	〃　〃	精錬鍛冶滓	(8～9C) 〃	45.5	—	42.2	18.15	17.70	6.84	5.90	2.67	—	—	0.31	4.22	0.02	0.004	0.39	0.19	0.23	0.006	33.11	0.728	0.097	〃
C	〃	〃　〃	鍛錬鍛冶滓	〃	40.3	—	31.3	22.83	26.4	10.01	5.51	1.66	—	—	0.11	0.96	0.01	0.054	0.21	0.19	0.038	0.042	43.58	1.081	0.024	〃
D	〃	〃　〃	鉄酸化物	〃	54.15	—	10.35	65.91	10.22	2.83	0.64	0.60	—	—	0.03	0.14	0.007	0.083	0.38	1.11	0.010	0.013	14.29	0.264	0.003	〃
J-862A	〃	2号工房　〃	〃	〃	55.10	—	9.05	68.73	8.62	2.46	0.36	0.23	—	—	0.02	0.11	Nil	0.030	0.12	2.00	0.005	0.074	11.67	0.212	0.002	〃
B	〃	〃　〃	鍛錬鍛冶滓	〃	41.3	—	46.1	7.82	27.00	9.45	5.90	1.82	—	—	0.09	0.43	Nil	0.012	0.16	0.06	0.017	Nil	44.17	1.069	0.010	〃
J-863A	〃	3号工房　〃	精錬鍛冶滓	〃	45.2	—	42.0	17.95	17.12	9.82	4.34	2.67	—	—	0.28	4.17	0.02	0.016	0.31	0.33	0.28	0.008	33.95	0.751	0.092	〃
B	〃	〃　〃	〃	〃	42.6	—	46.1	9.64	20.68	8.73	7.36	0.66	—	—	0.40	5.42	0.02	0.035	0.31	0.13	0.30	Nil	37.43	0.879	0.127	〃
C	〃	〃　〃	ガラス質滓	〃	5.25	—	3.66	3.44	60.2	18.71	9.01	2.64	—	—	0.10	0.91	Nil	0.003	0.16	0.06	0.018	Sil	90.56	17.250	0.173	〃
D	〃	〃　〃	鉄酸化物	〃	50.70	—	11.50	59.70	16.04	3.25	0.56	0.48	—	—	0.07	0.31	Nil	0.080	0.22	1.04	0.024	0.008	20.33	0.401	0.006	〃
J-861D	〃	1号工房　〃	小鉄塊	〃	C 0.86	Si 0.83	Mn 0.004	P —	S 0.122	Cu 0.013	Ti 0.005	V 0.005	Cr Nil	Ni 0.067	Co 0.036	Mo Nil	Sn 0.005	Ca 0.046	Al —	Mg 0.015	T.Fe 85.7	—	—	—	—	〃
J-862A	〃	2号工房　〃	鉄平製品	〃	C 0.47	Si 0.005	Mn 0.004	P 0.016	S 0.003	Cu 0.008	0.005	Nil	Cr Nil	Ni 0.023	Co 0.023	Mo Nil	Sn 0.006	Ca 0.006	Al 0.005	Mg 0.003	T.Fe 99.2	—	—	—	—	〃
J-863D	〃	3号工房　〃	小鉄塊	〃	C 0.68	Si 6.35	Mn 0.028	P —	S 0.084	Cu 0.012	0.022	0.020	Cr Nil	Ni 0.022	Co 0.030	Mo Nil	Sn 0.009	Ca 0.094	—	Mg 0.080	T.Fe 67.0	—	—	—	—	〃

①大澤正己「鳥羽遺跡出土中世鋳造遺物の金属学的調査」『鳥羽遺跡』(A～F区)関越自動車道（新潟県）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第 39 集，群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992

②大澤正己「鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査」『鳥羽遺跡』（I・J・K区）関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988

注

① 群馬県教育委員会、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『鳥羽遺跡』（Ｉ・Ｊ・Ｋ区）～関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第21集～　1988

大澤正己「鳥羽遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の金属学的調査」同上

② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』　1968。

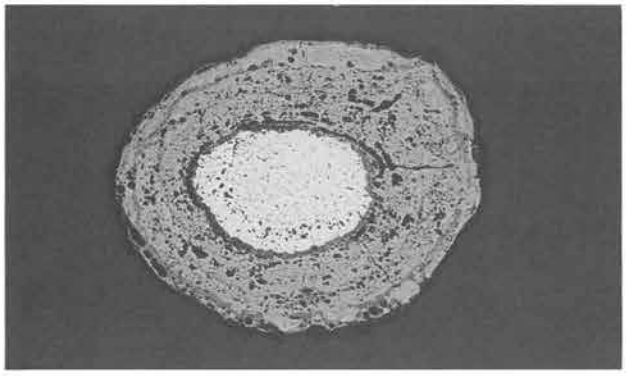
符　号	硬　度　測　定　対　象　物		硬度実測値	文献硬度値※１
	Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）	※2	560,588	600～700Hv
	磁　鉄　鉱	※2	513,506	530～600Hv
	マルテンサイト	※2	641	633～653Hv
	Wüstite（FeO）	※3	481,471	450～500Hv
	Magnetite（Fe_3O_4）	※4	616,623	500～600Hv
	白　鋳　鉄	※5	563,506	458～613Hv
	亜共析鋼（c：0.4%）	※6	175	160～213Hv

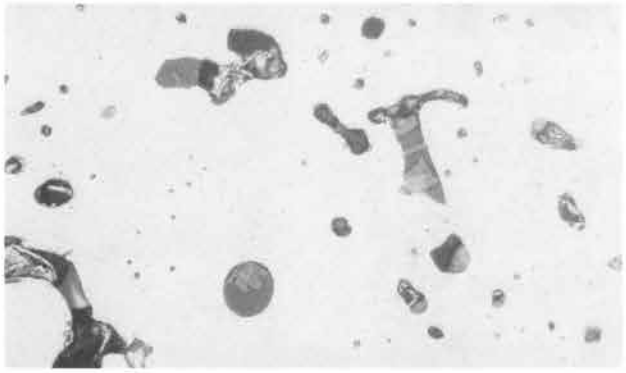
※1　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法」1968他。
※2　滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物　７Ｃ末～８Ｃ初
※3　兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛治滓　　４Ｃ後半
※4　新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓Ulvöspihel　平安時代
※5　大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鋳造鉄斧　古墳時代前期
※6　埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鏃　５Ｃ中頃

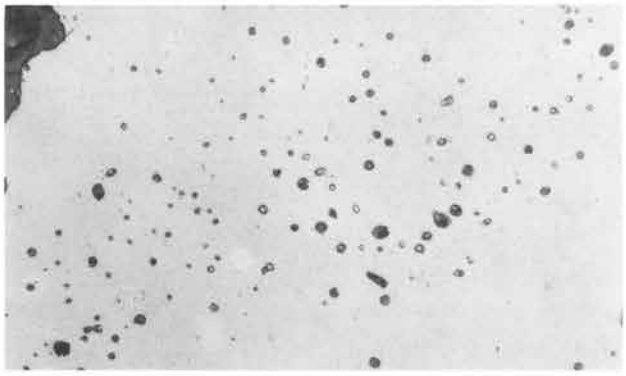
③ 大澤正己「金山・樺製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『金山・樺製鉄遺跡群』荒尾市教育委員会　1992

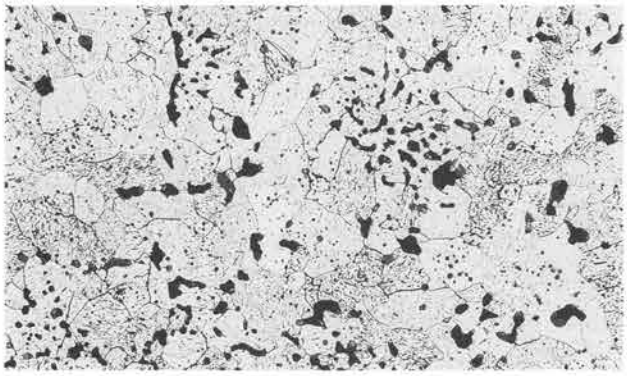
④ 大澤正己「小糸遺跡出土銅滓の金属学的調査」『小糸遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第58集）（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1987

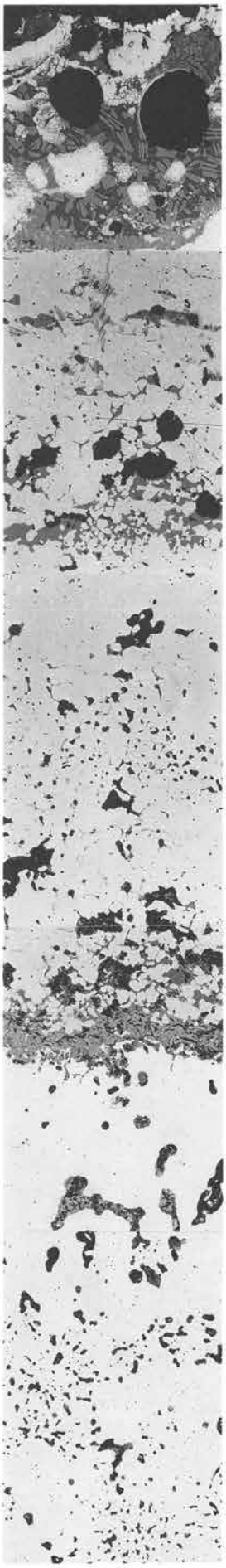
(1) TRB－1（その1） 鳥羽遺跡 （D43号井戸出土） 溶解炉壁溶解 滓中金属粒		⑤表層 Slag (研磨のまま) wustite ×100 中央部 Metalnit Fe
	① ×5 金属粒マクロ組織	
	② ×400 研磨のまま 非金属介在物	
	③ ×400 ピクラルetch 球状 Cemcntite	
	④ ×100 ナイタルetch 結晶粒	











表層部
暗黒色部
ガラス質
淡灰色結晶
Faydhite

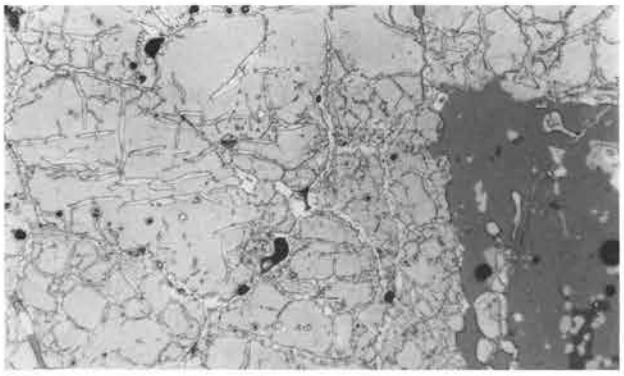
①に対応

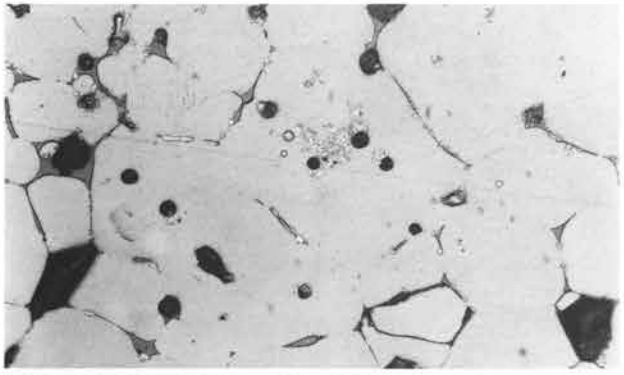
wūstite
(FeO)

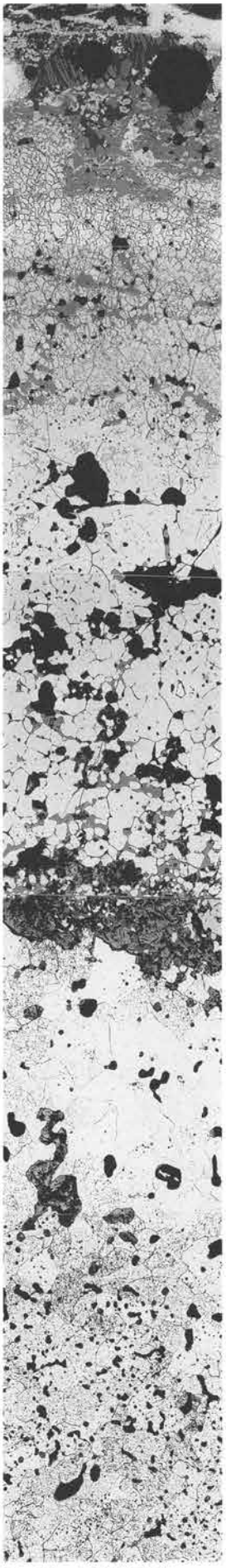
中央部
MetallicFe
②③④に対応

Photo. 1　ガラス質滓中金属粒の顕微鏡組織

(2) TRB－1（その2） 鳥羽遺跡 （D43号井戸出土） 溶解炉壁溶解 溶解滓中金属粒		表側
		裏側
	外観写真 1/3	④表層 slag ナイタル etch
	① ×400 ナイタルetch wüstite（表層）	（×100） wüstite
	② ×400 ナイタルetch wüstite（内側）	中央部 metallic Fe
	③ ×400 ナイタルetch Ferrite	







表層部
暗黒部
ガラス質
淡灰色結晶
Faydlite

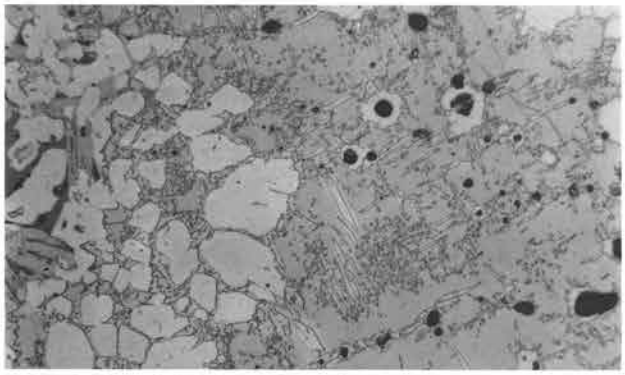
①に対応

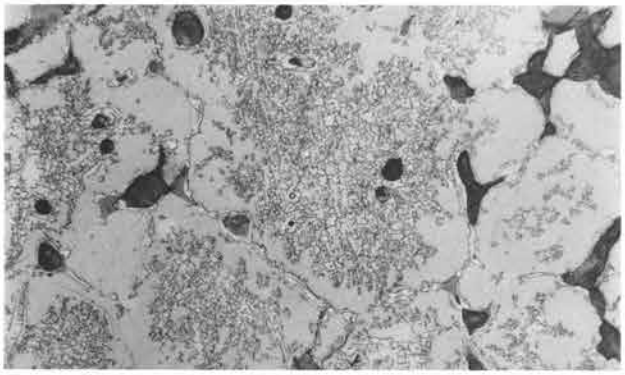
wustite
②に対応

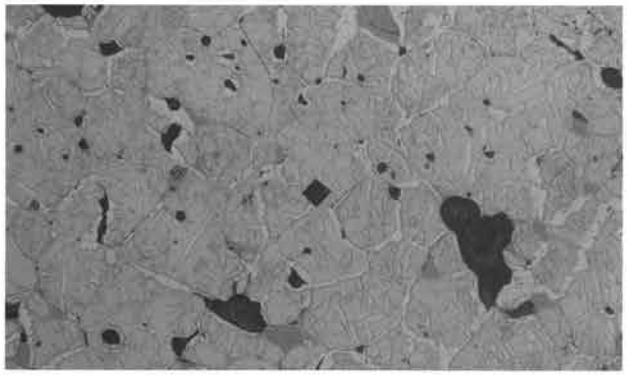
中央部
metallic
Fe
③に対応

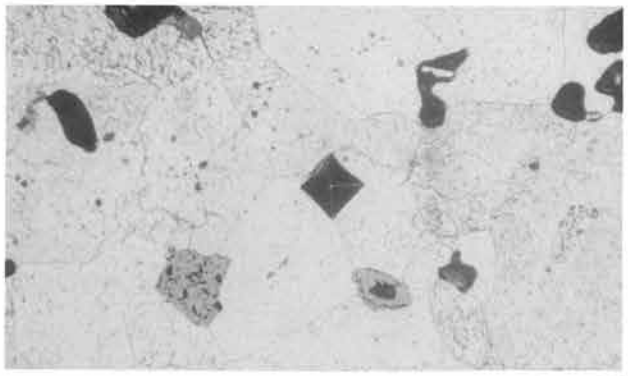
Photo. 2 ガラス質滓中金属粒の顕微鏡組織

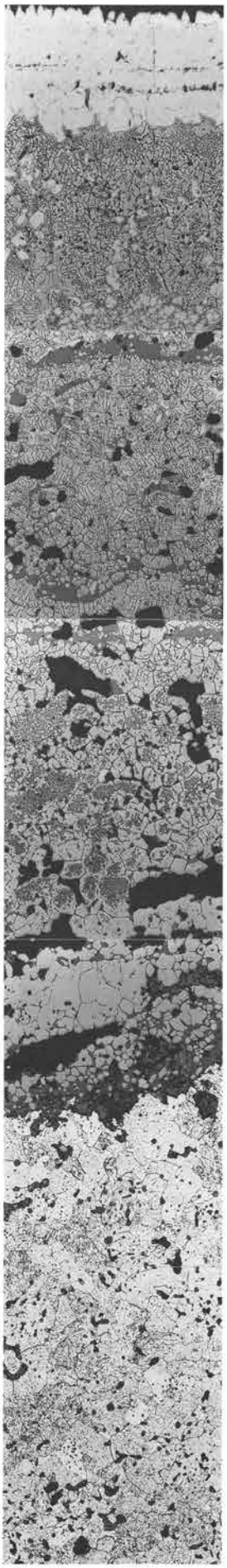
(3) TRB—1（その3） 鳥羽遺跡 （D43号井戸出土） 溶解炉壁溶解 溶解滓中金属粒		⑤表層 ナイタル etch
	① ×400 ナイタルetch wüstite	
	② ×400 ナイタルetch wüstite	wüstite
	③ ×200 硬度圧痕 455HV荷重100 g	×100
	④ ×200 硬度圧痕 90.8HV荷重100 g	中央部 metallic Fe











Hematit

wüstit

③にwüstiteに対応

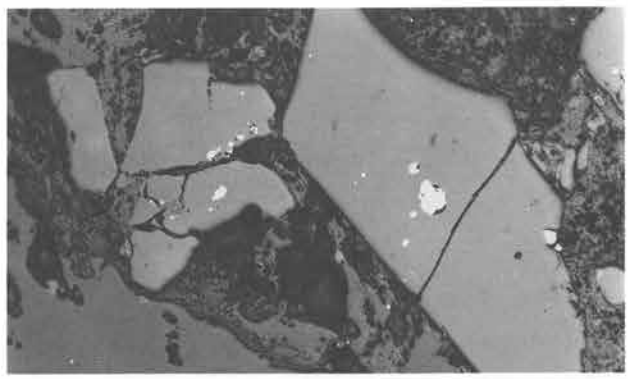
中央部
matallic Fe
④Ferriteに対応

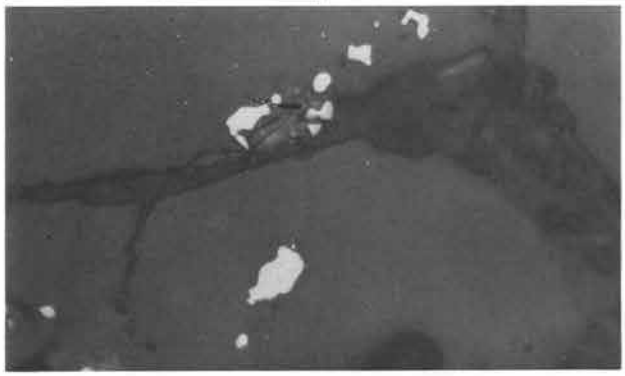
Phote. 3　ガラス質滓中金属粒の顕微鏡組織

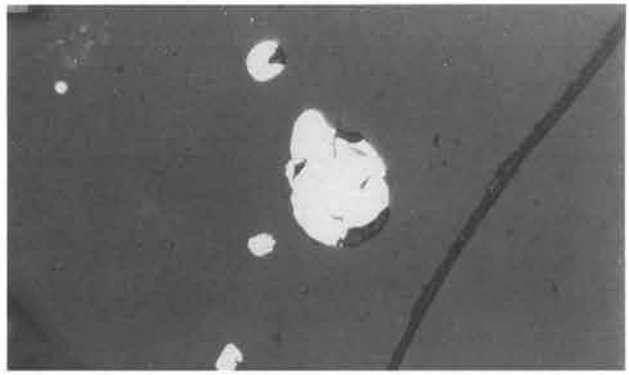
(4) TRB－2
鳥羽遺跡
（D43号井戸出土）
溶解炉
炉壁

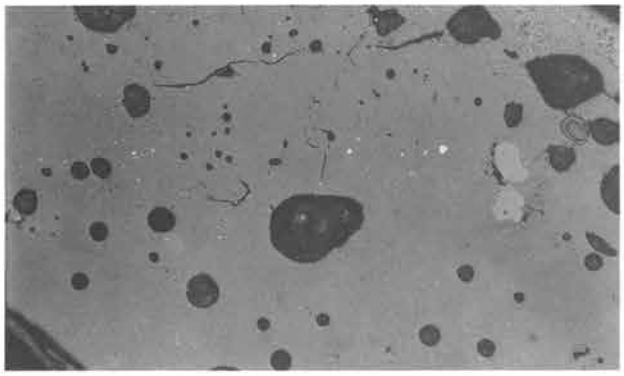
	① ×100 ガラス質
② ×400 Ⓐガラス質	③ ×400 Ⓐガラス質
④ ×100 Ⓑガラス質	⑤ ×400 ガラス質

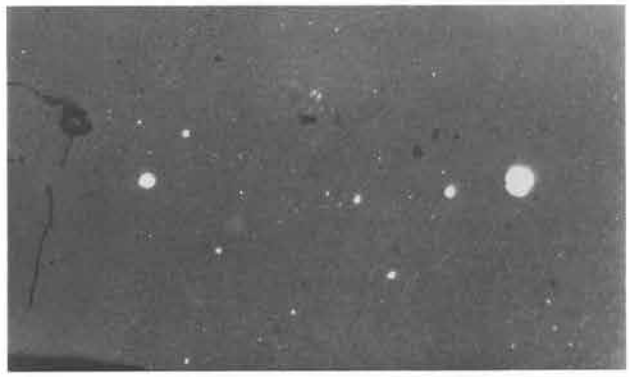
外観写真 1/3











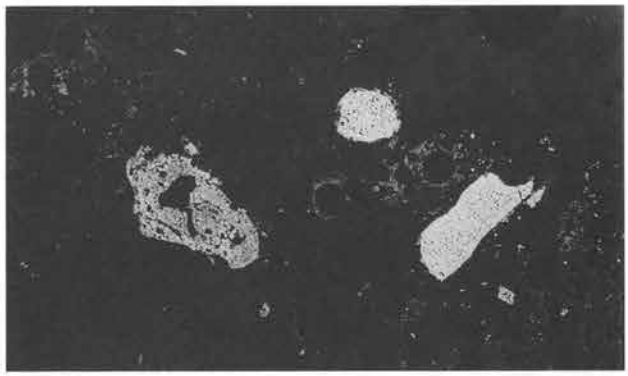
(5) TRB－3
鳥羽遺跡
（D43号井戸出土）
羽口カバー粘土

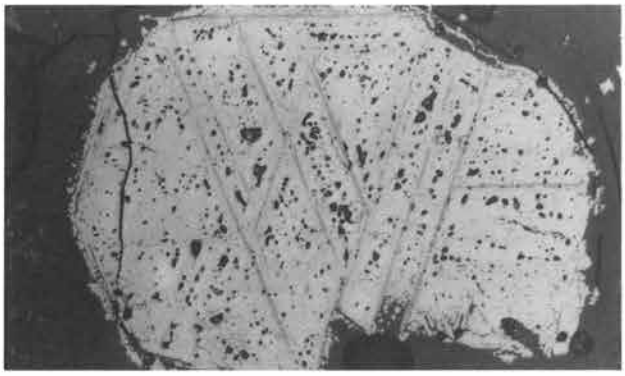
	⑥ ×100 ガラス質スラグ ＋ 半還元砂鉄
⑦ ×400 半還元砂鉄	⑧ ×400 半還元砂鉄

表側

裏側

外観写真 1/3





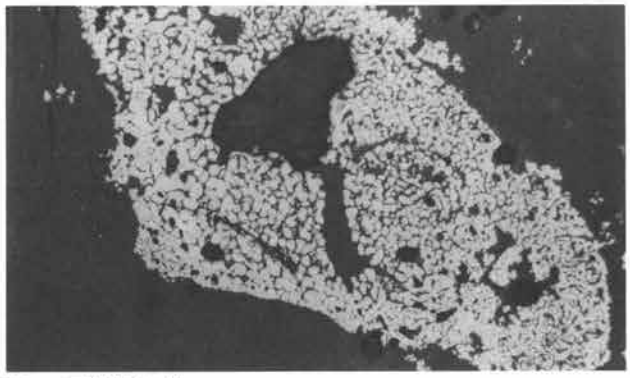


Photo. 4　ガラス質滓の顕微鏡組織

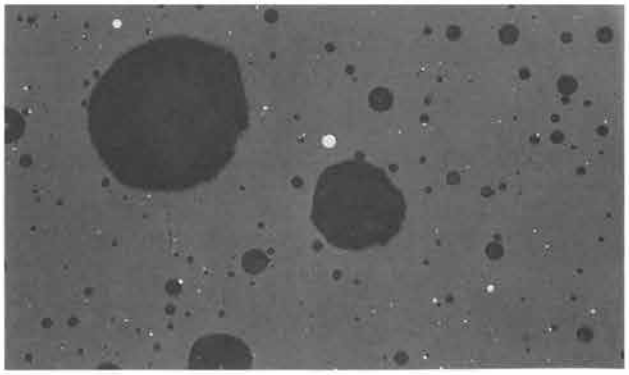
(6) TRB－4
鳥羽遺跡
（D1050号土坑出土）
濃緑色ガラス質滓

表側

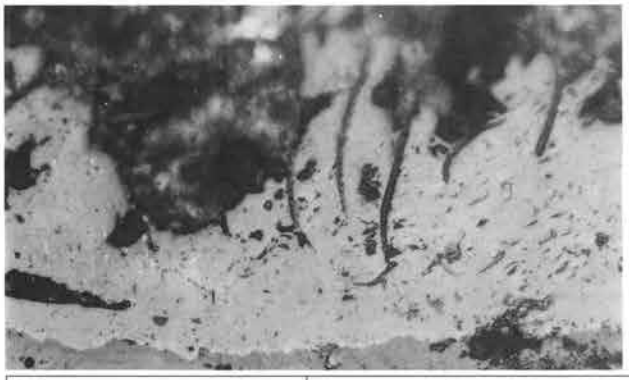
裏側

外観写真 1/3

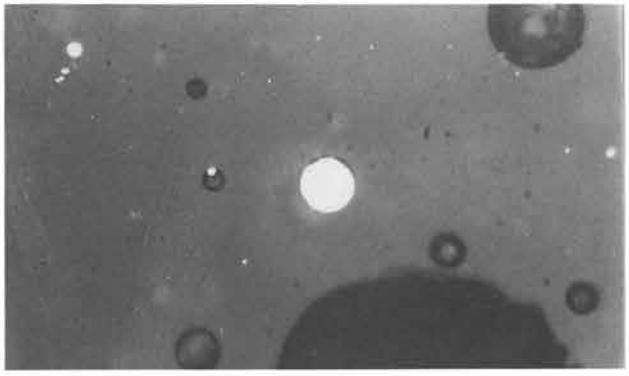
① ×100
ガラス質と金属鉄粒



② ×400
片状黒鉛



③ ×400
ガラス質と金属鉄粒



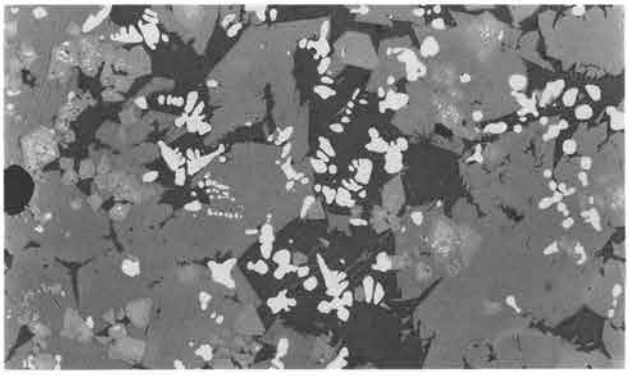
(7) TRB－5
鳥羽遺跡
（D1050号土坑出土）
椀形鉄滓状

表側

裏側

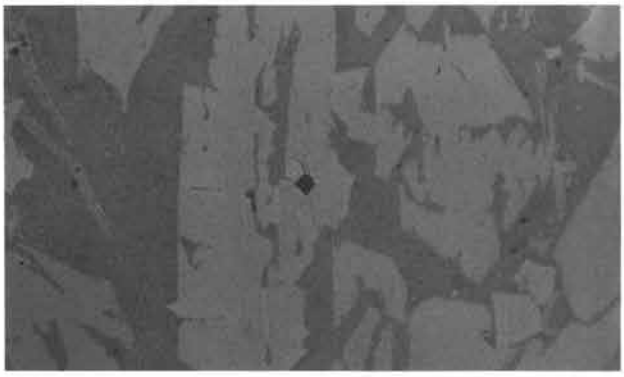
外観写真
1/3

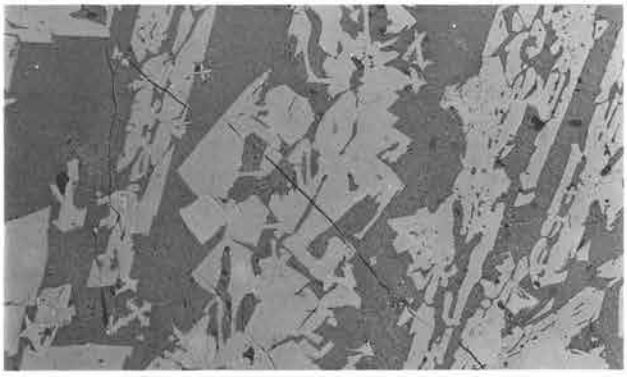
④ ×100
wüstite
Fayalite



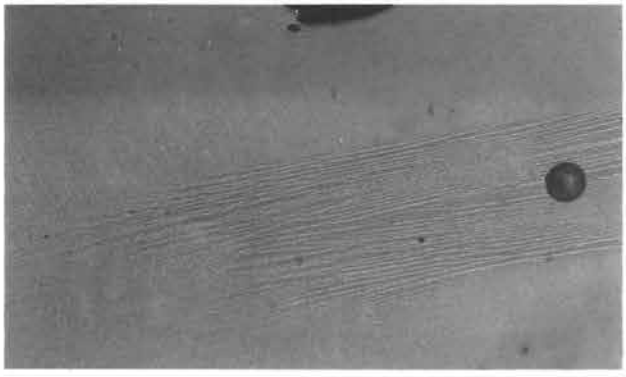
⑤ ×200
硬度圧痕
698HV荷重100g

⑥ ×100
Fayalite





⑦ ×100
ガラス質



⑧ ×400
ガラス質

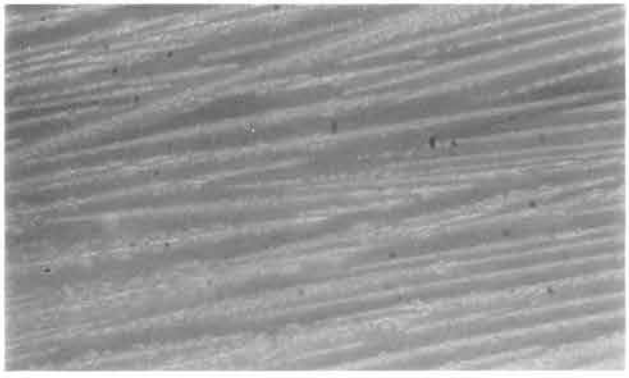


Photo. 5　濃緑ガラス質滓と椀形状滓の顕微鏡組織

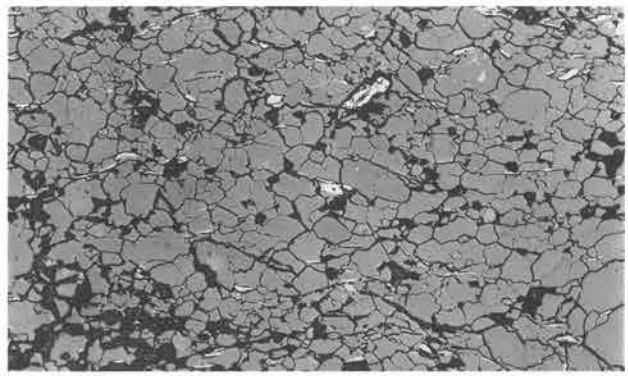
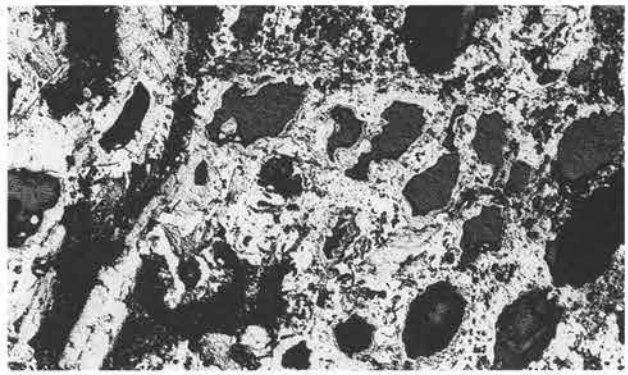
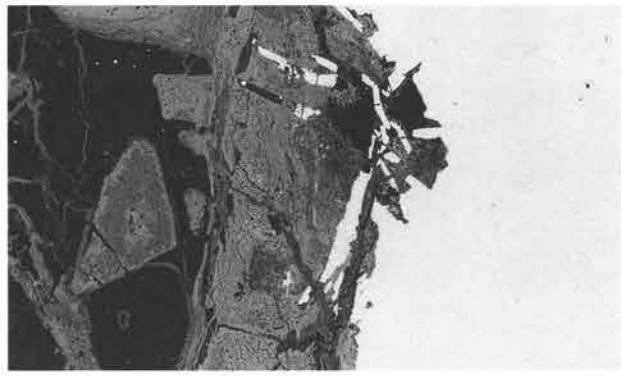
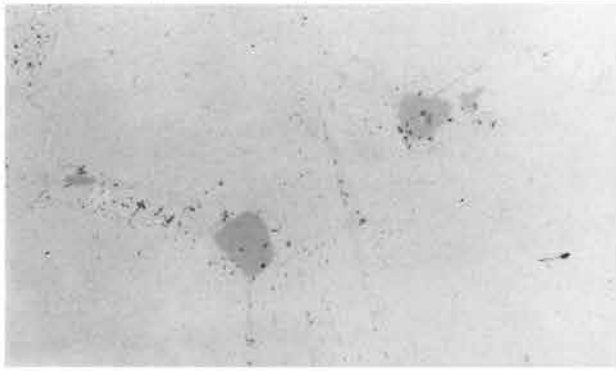
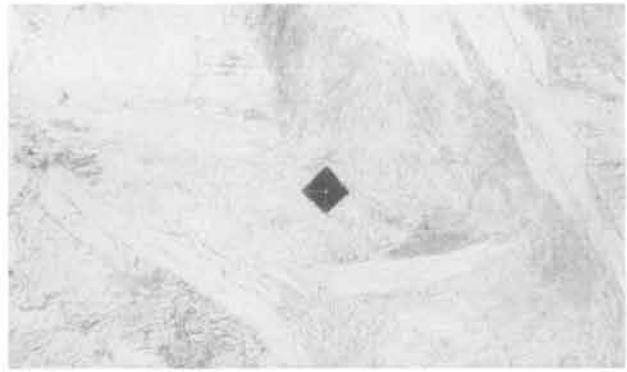
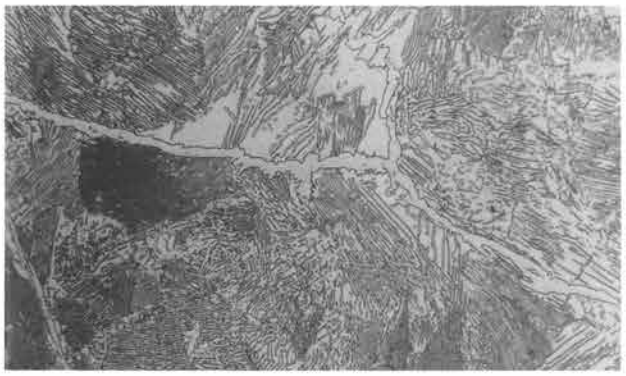
(8) TRB－6 鳥羽遺跡 （D1050号土坑） 硅化木 ×100 外観写真 1/3	 表側	
(9) TRB－7 鳥羽遺跡 （D1050号土坑） 黒鉛・化木展 ×100 外観写真 1/1	 表側	
(10) TRB－8 鳥羽遺跡 （D区埋土出土） 鉄塊系遺物	 表側 外観写真 1/1	
	③ ×100 左：表皮鉄滓 右：金属鉄	
④ ×400 非金属介在物 Fes	⑤ ×200 硬度圧痕 178HV荷重100g	
⑥ ×400 ピラクルetch 過熱組織	⑦ ×400 ピラクルetch パーライト	

Photo. 6　硅化木・黒鉛化木炭、鉄塊系遺物の顕微鏡組織

(11) TRB－9 A（その1） 鳥羽遺跡 （D43号井戸出土） 含鉄滓（鉄部）		⑤表層 過熱組織
	① ×400 ピクラルetch 過熱組織	×100
	② ×400 ピラクルetch パーライト	パーライト
	③ ×200 硬度圧痕 212HV荷重100 g	ピラクルetch
	④ ×200 硬度圧痕 281HV荷重100 g	片状黒鉛



①に対応
過熱組織

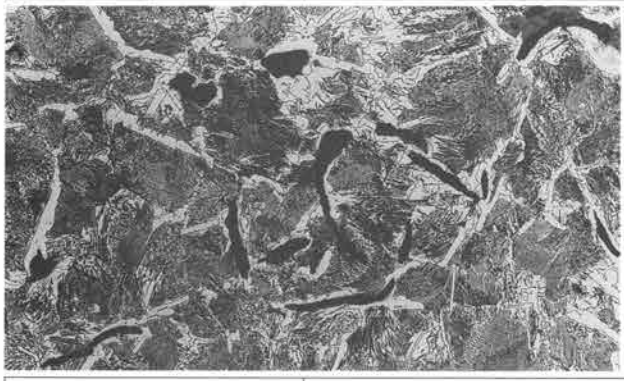
④に対応
パーライト

②に対応
異状組織

片状黒鉛析出
③に対応

Photo. 7　含鉄滓の顕微鏡組織

⑿ TRB－９Ａ（その２） 鳥羽遺跡 （Ｄ43号井戸出土） 含鉄滓（鉄部）		 表側 外観写真 1/3
	① ×100 研磨のまま 片状黒鉛	
② ×100 ピクラルetch 片状黒鉛と パーライト	③ ×400 同左拡大	



⒀ TRB－９Ｂ（その３） 鳥羽遺跡 （Ｄ43号井戸出土）	

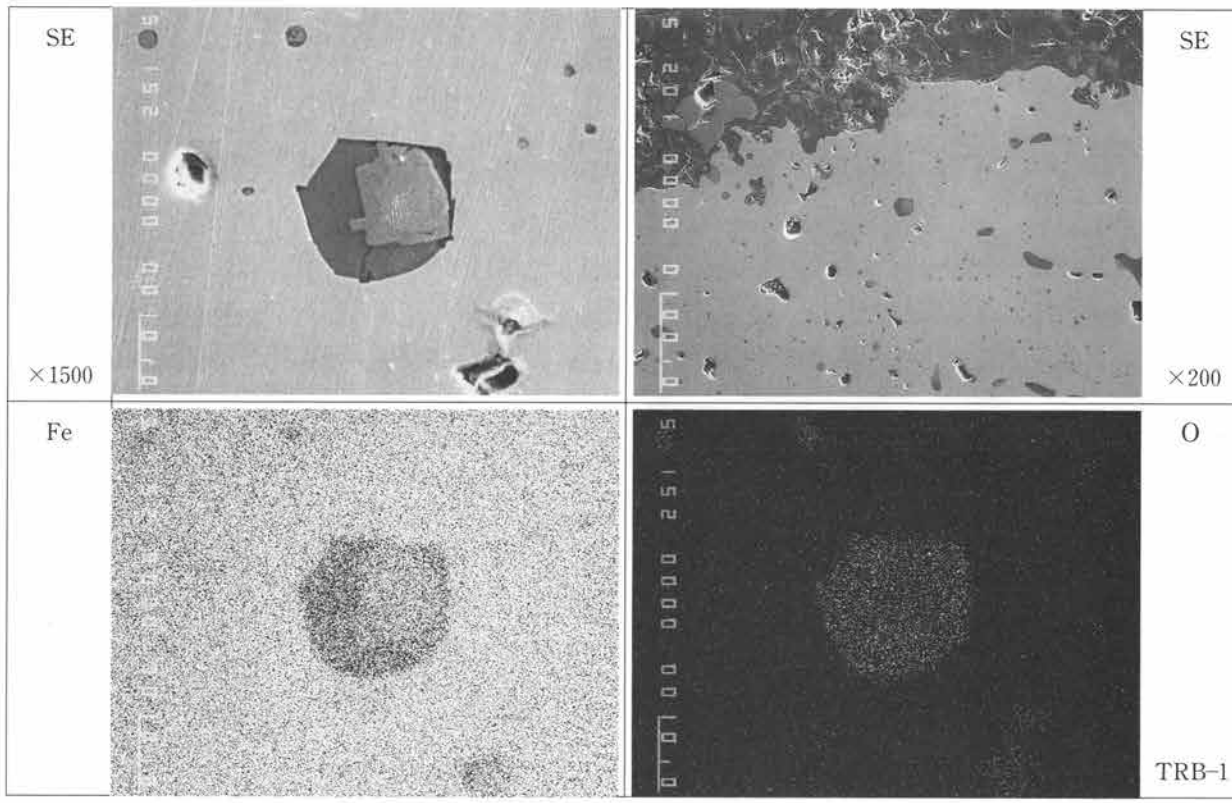


Photo.10　鳥羽遺構出土溶解炉内金属鉄中非金属介在物の特性X線像

（×1500：縮小0.7）

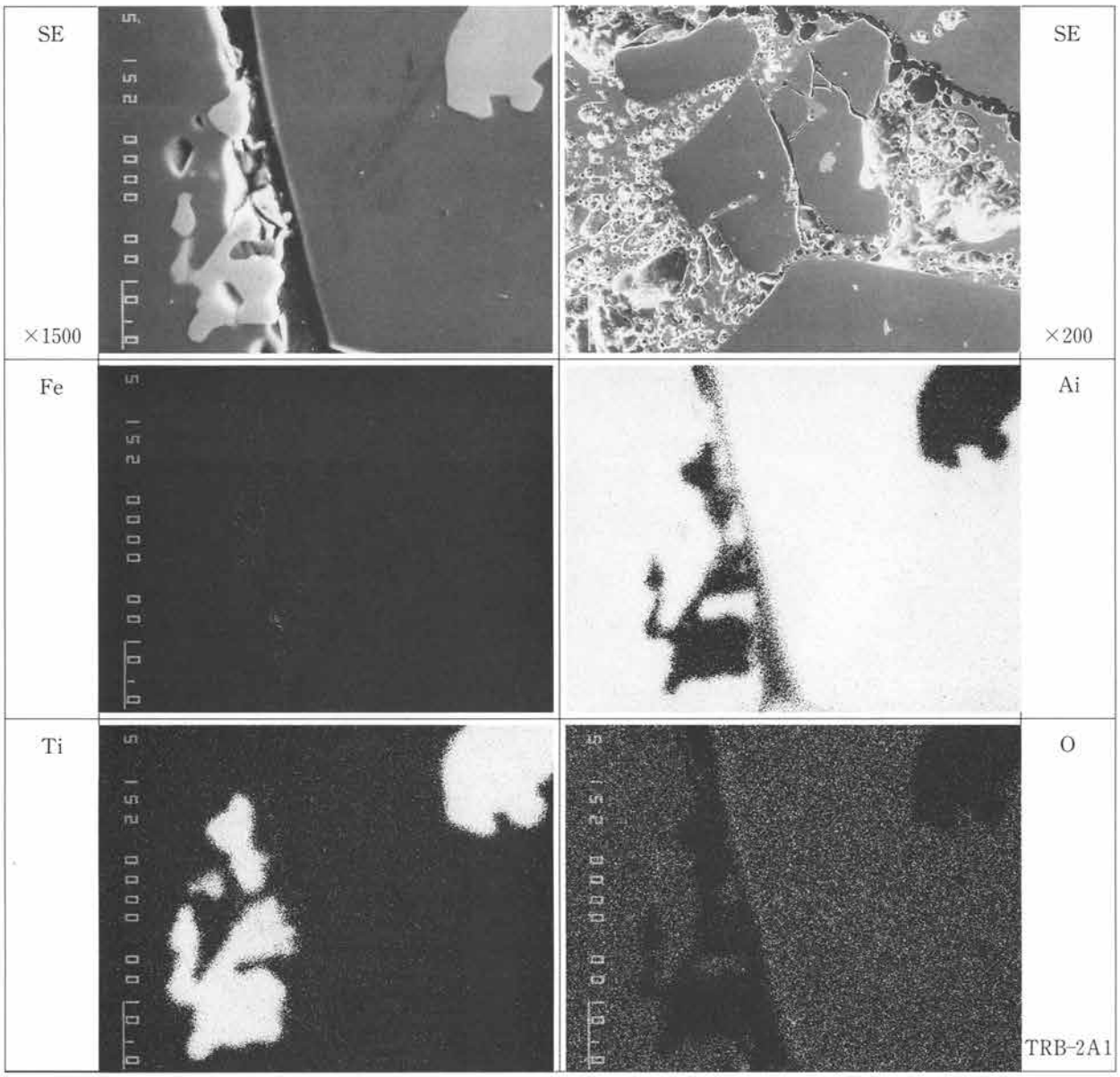
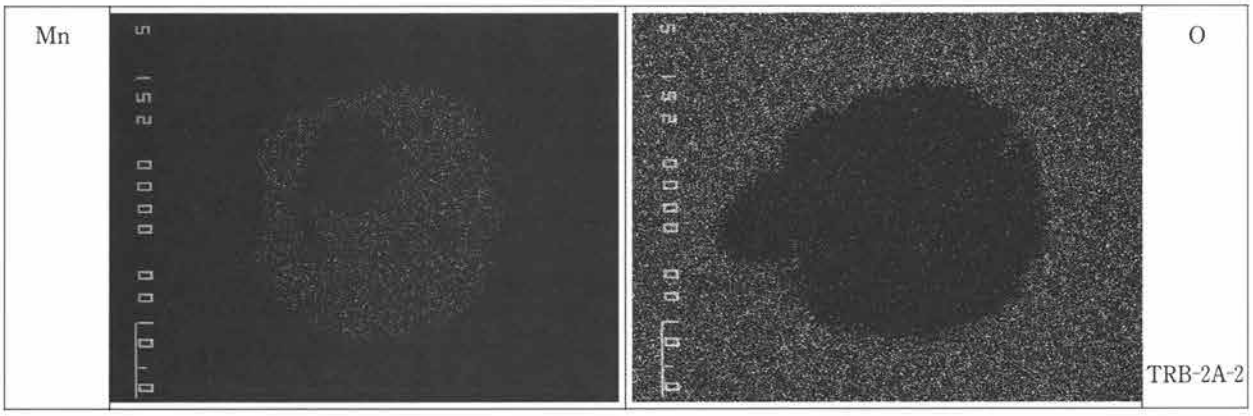


Photo. 11　鳥羽遺跡出土溶解炉炉壁溶解滓（TRB－２Ａ：その１）の特性Ｘ線像
（×1500：縮小0.7）



	NA	MG	AL	SI	P	S	K	CA	Ti	CR	MN	FE	TOTAL
3	0.000	0.000	0.059	22.562	2.039	0.000	0.000	0.000	47.069	2.215	4.909	19.484	98.337
4	0.033	0.006	0.096	0.014	0.000	0.000	0.000	0.000	97.828	0.005	0.007	0.257	98.246

Photo. 12の１　鳥羽遺跡出土溶解炉炉壁溶解滓（TRB-2A：その２）の特性Ｘ線像と定量分析値
（×1500：縮小0.6）

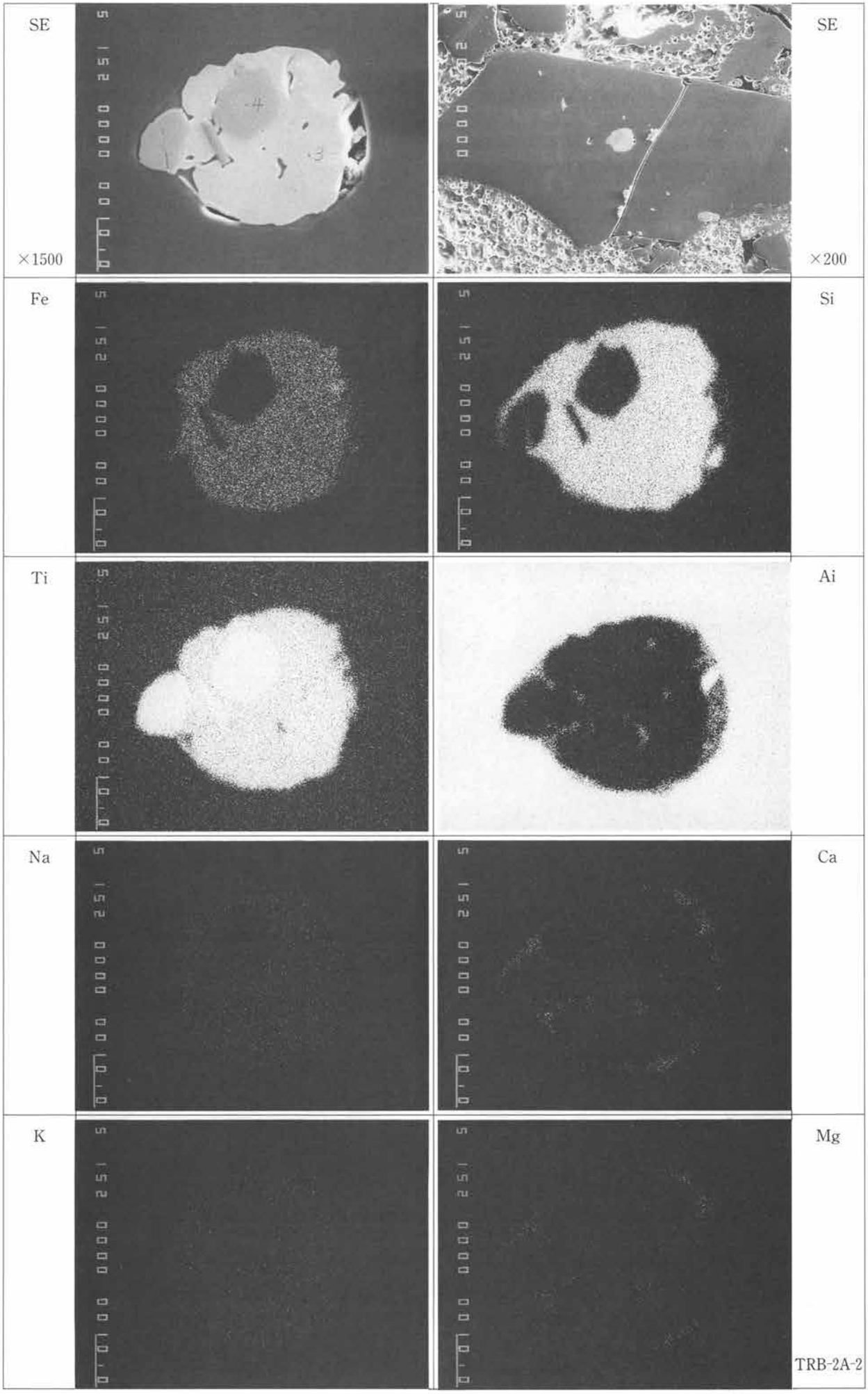


Photo.12　鳥羽遺跡出土溶解炉炉壁溶解滓（TRB－２Ａ：その２）の特性Ｘ線像と定量分析値
（×1500：縮小0.6）

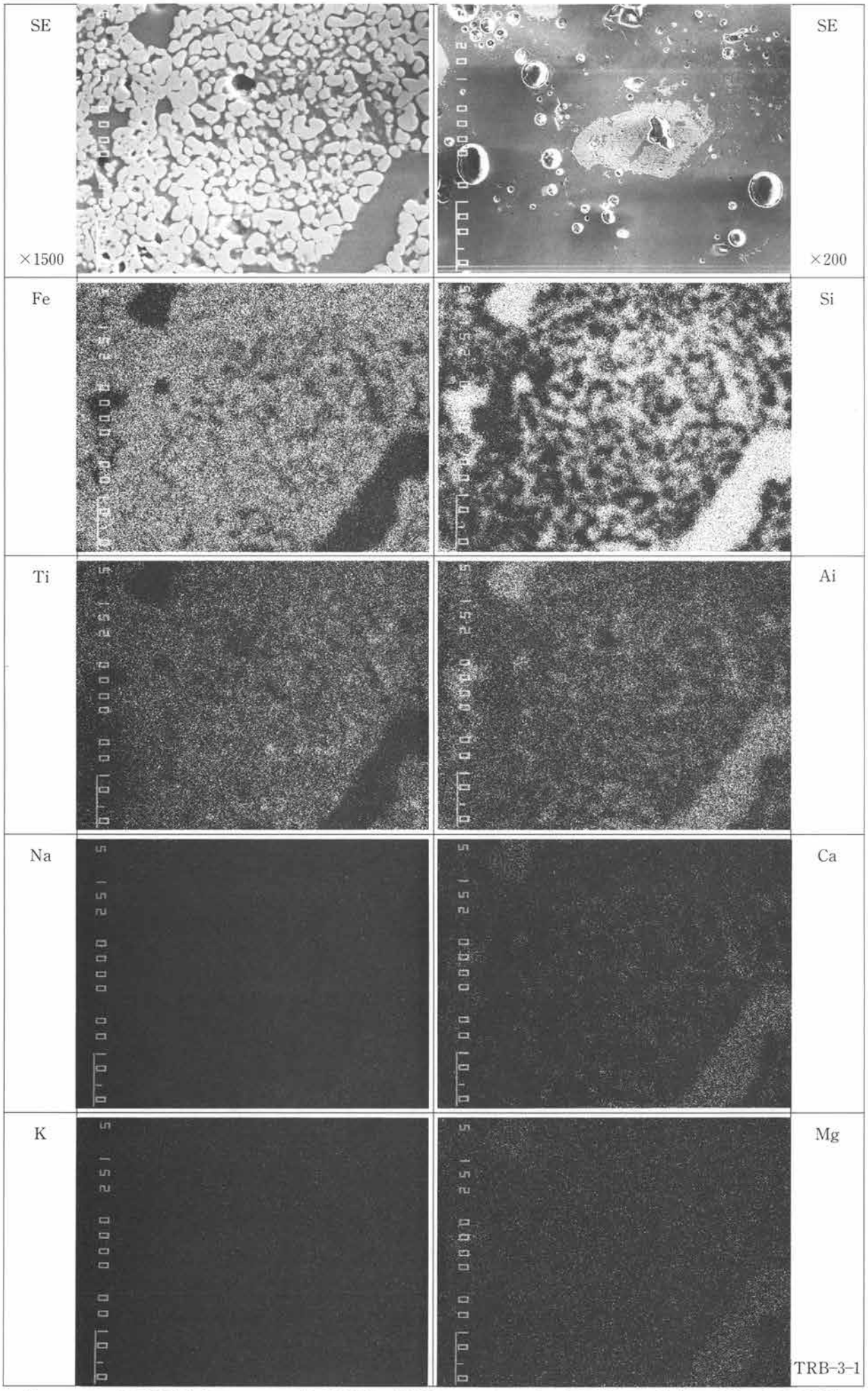


Photo.13　鳥羽遺跡出土羽口カバー粘土付着滓（TRB－３、その１）中砂鉄粒子の特性Ｘ線像と定量分析値
（×1500：縮小0.7）

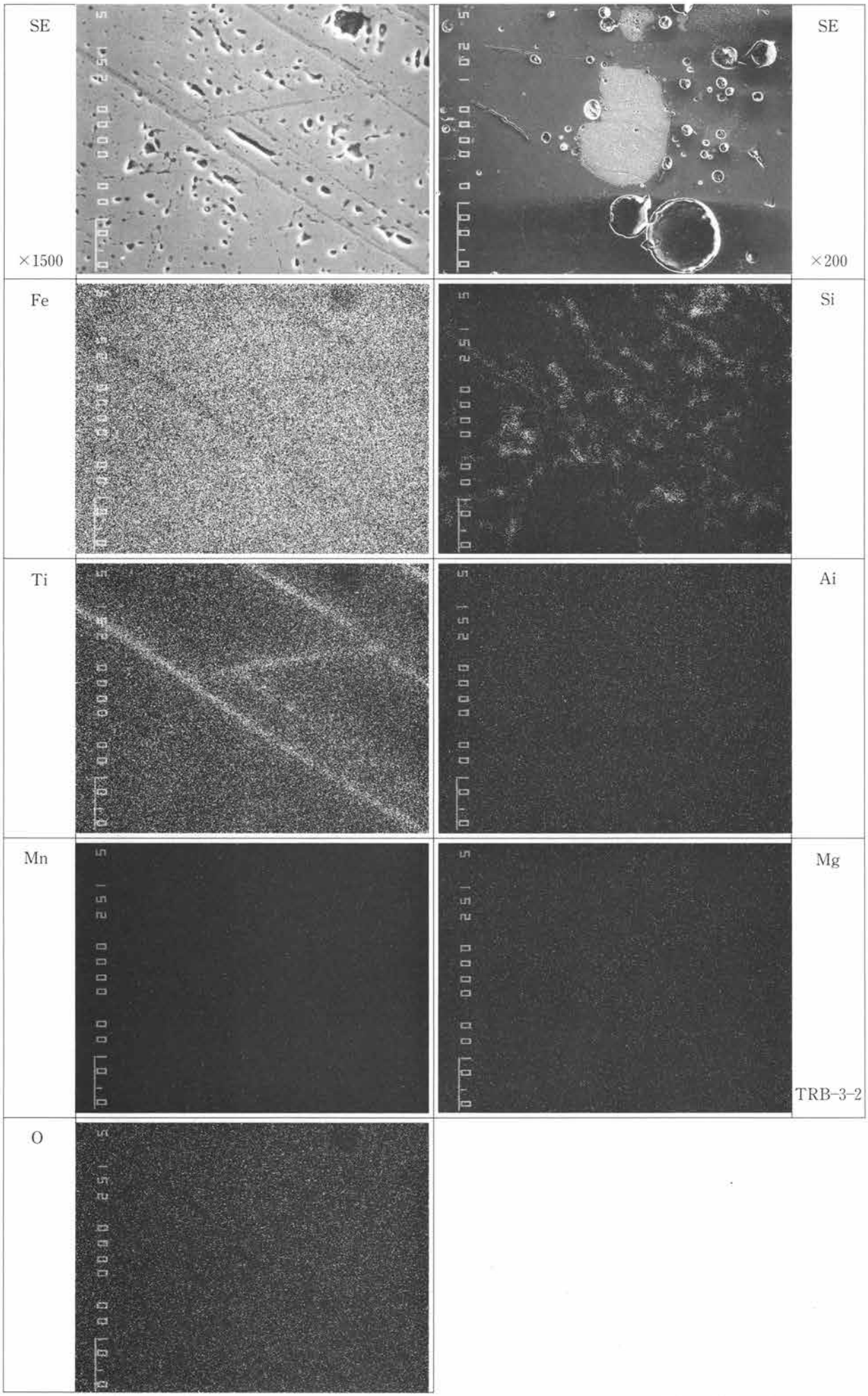


Photo. 14　鳥羽遺跡出土羽口カバー粘土付着滓（TRB—３、その２）中砂鉄粒子の特性X線像と定量分析値
（×1500：縮小0.7）

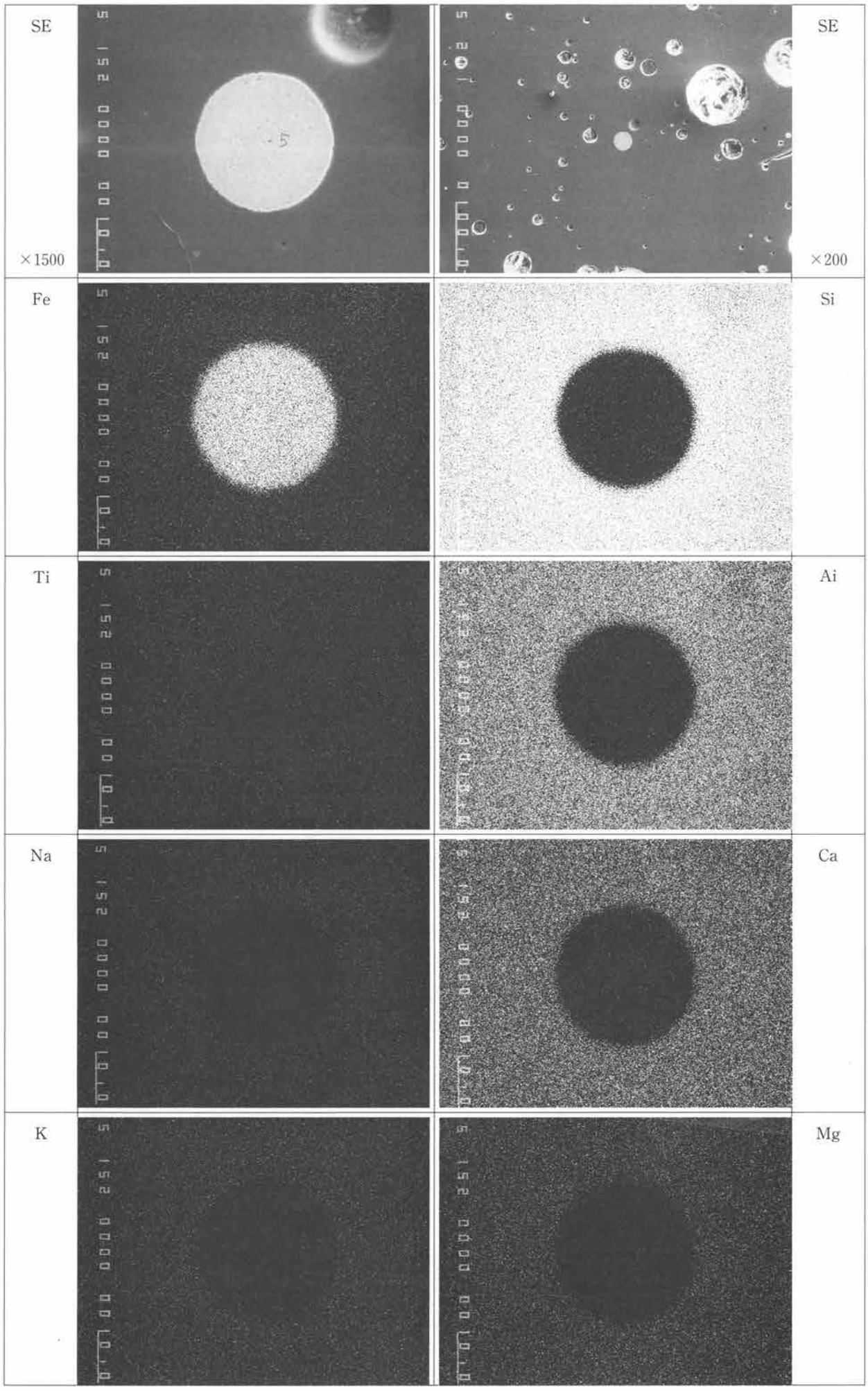
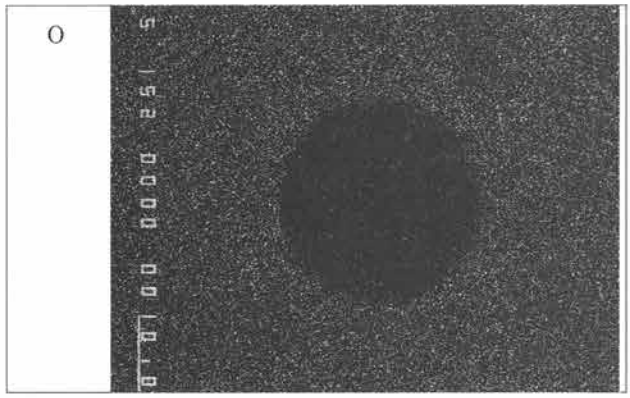


Photo.15　鳥羽遺跡出土濃緑色ガラス質滓（TRB—4、その1）中球状鉄の特性X線像と定量分析値
（×1500：縮小0.6）



	NA	MG	AL	SI	P	S	K	CA	Ti	CR	MN	FE	TOTAL
5	0.054	0.000	0.000	0.005	0.619	0.091	0.012	0.000	0.000	0.000	0.019	105.834	106.633

Photo. 15の２　鳥羽遺跡出土濃緑色ガラス質（TRB-4、その１）中球状鉄の特性Ｘ線像と定量分析値
（×1500：縮小0.6）

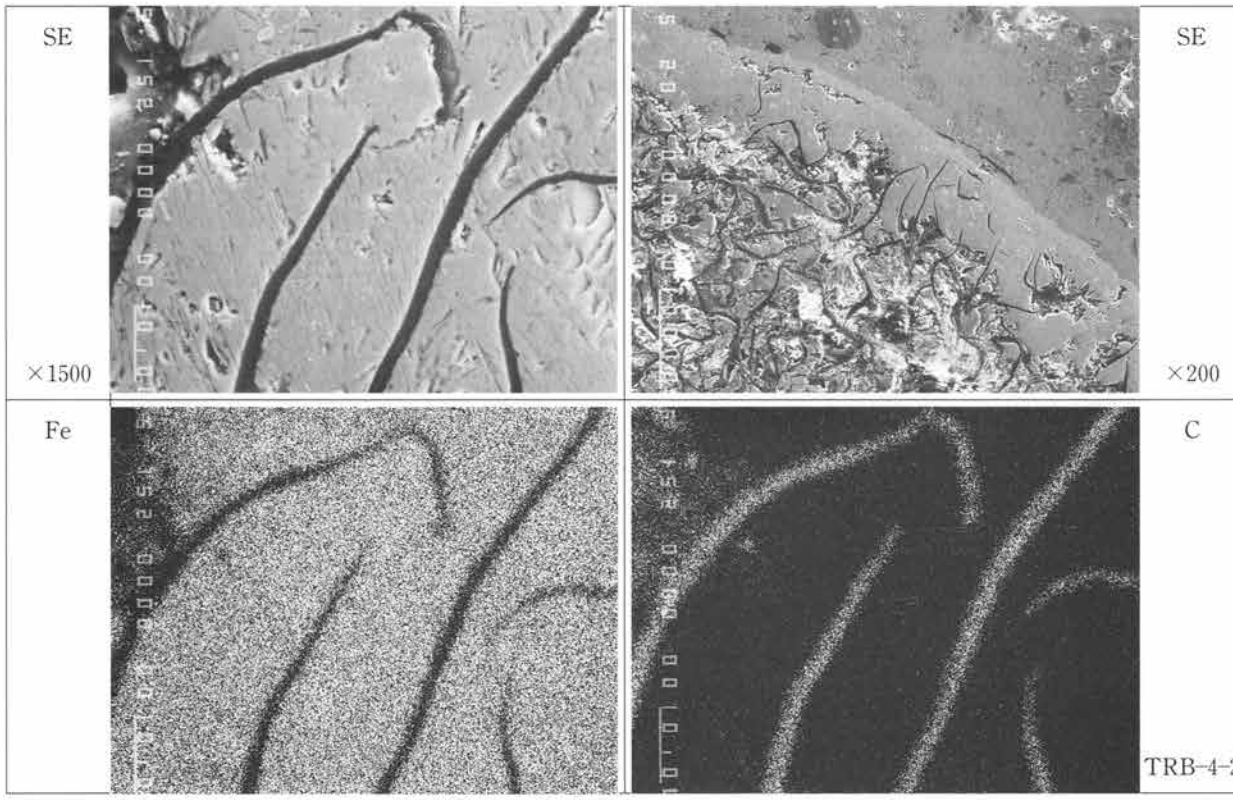


Photo.16　鳥羽遺跡出土濃緑色ガラス質滓（TRB－４、その２）中ねずみ鋳鉄の特性Ｘ線像
（×1500：縮小0.7）

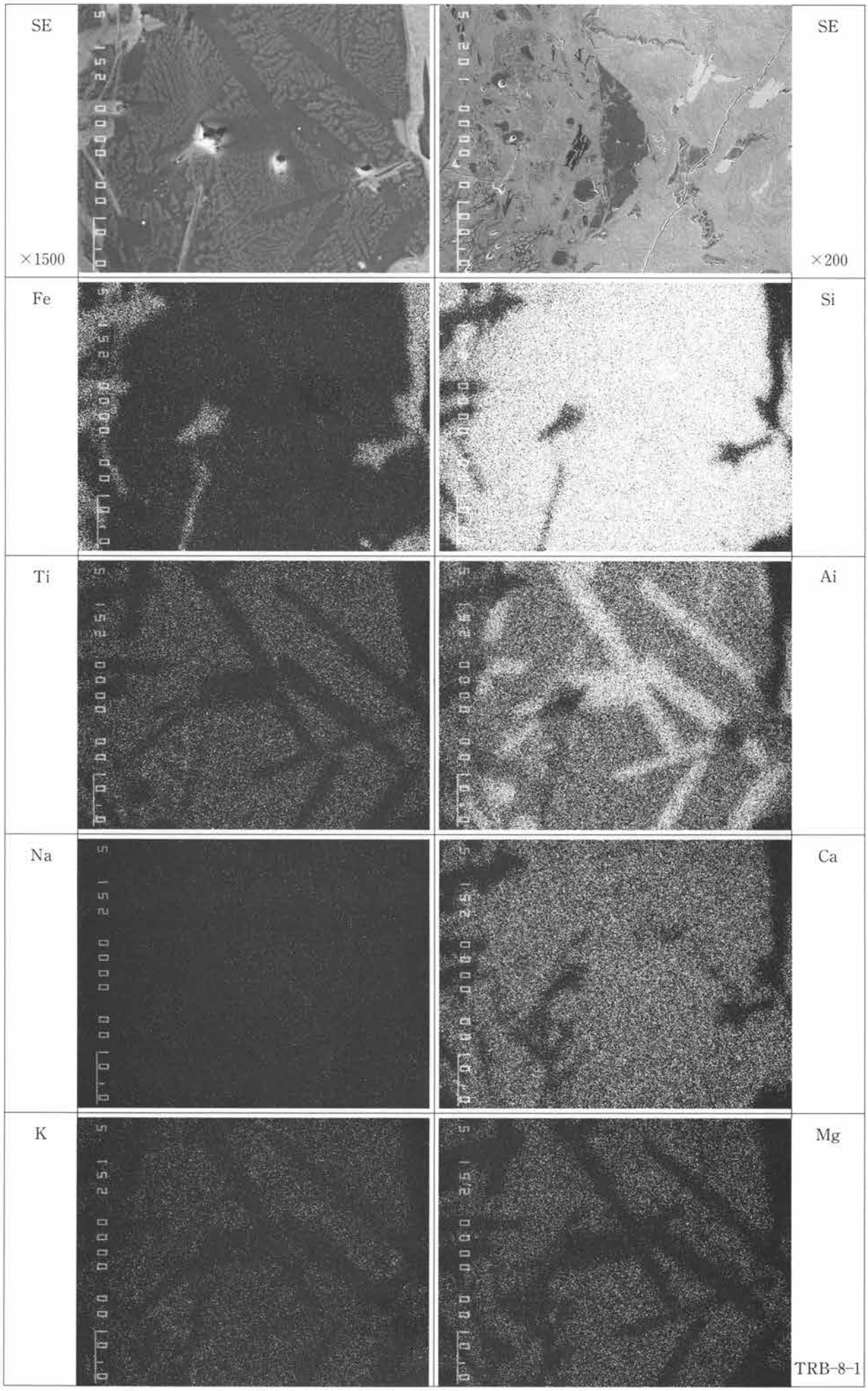
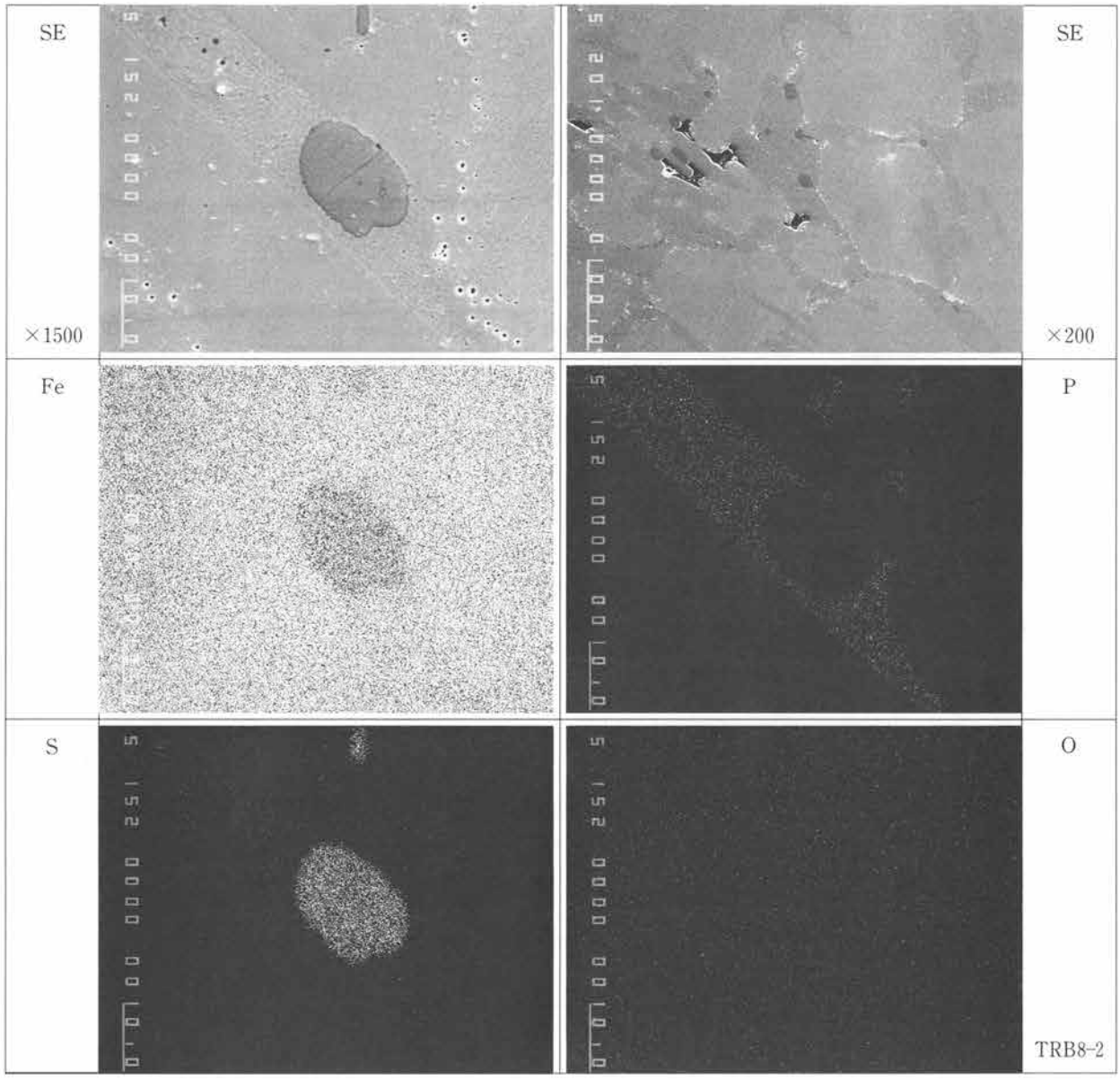


Photo.17　鳥羽遺跡出土鉄塊系遺物（TRB－８、その１）表皮鉄滓の特性Ｘ線像

（×1500：縮小0.7）



	NA	MG	AL	SI	P	S	K	CA	Ti	CR	MN	FE	TOTAL
6	0.000	0.040	0.000	0.000	0.023	37.529	0.000	0.000	0.023	0.069	0.086	67.046	104.816

Photo.18　鳥羽遺跡出土鉄塊系遺物（TRB－８、その２）鉄中非金属介在物の特性Ｘ線像と定量分析値
（×1500：縮小0.7）

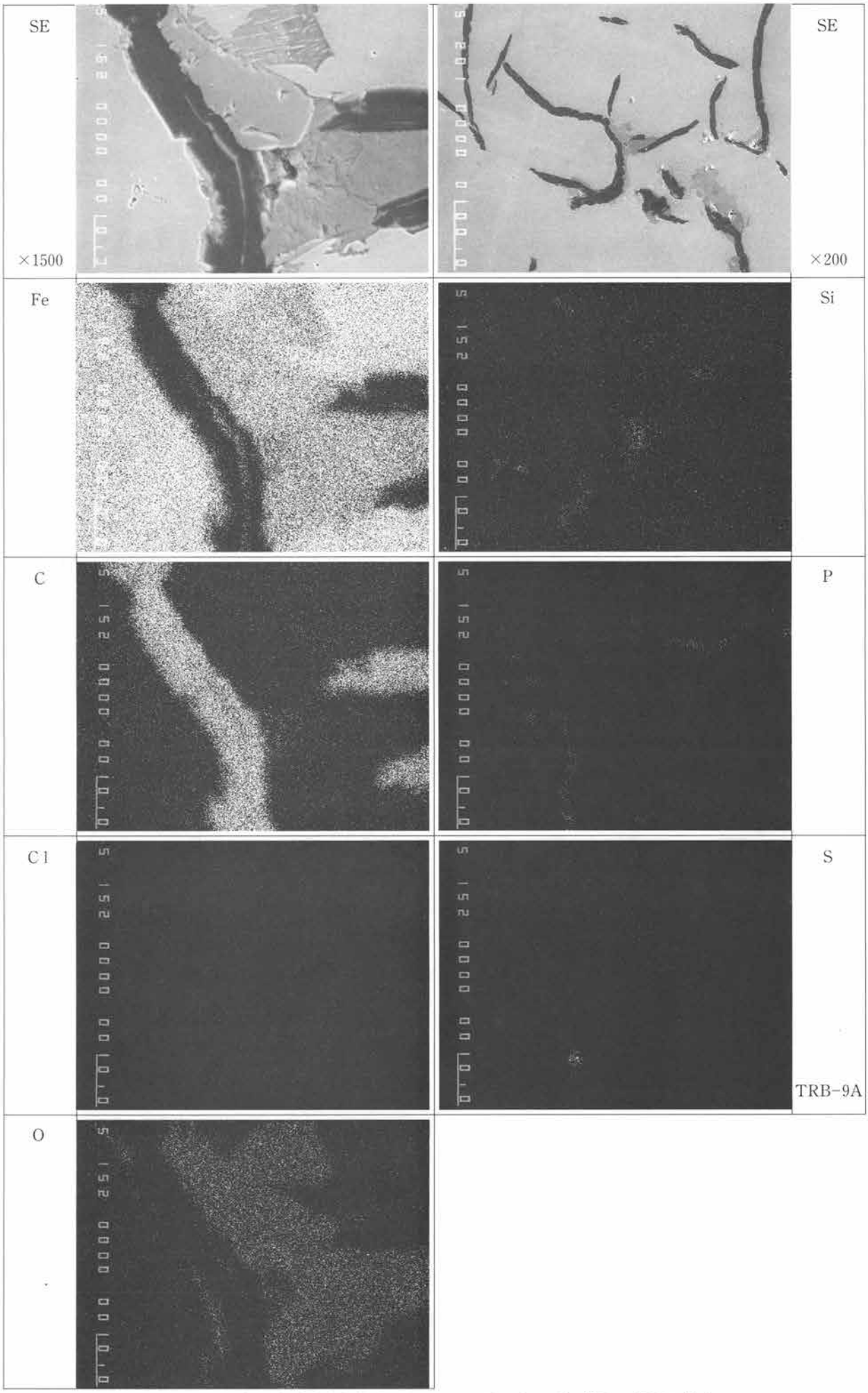


Photo.19　鳥羽遺跡出土含鉄滓（TRB－9 A）中ねずみ鋳鉄の特性X線像

（×1500：縮小0.7）

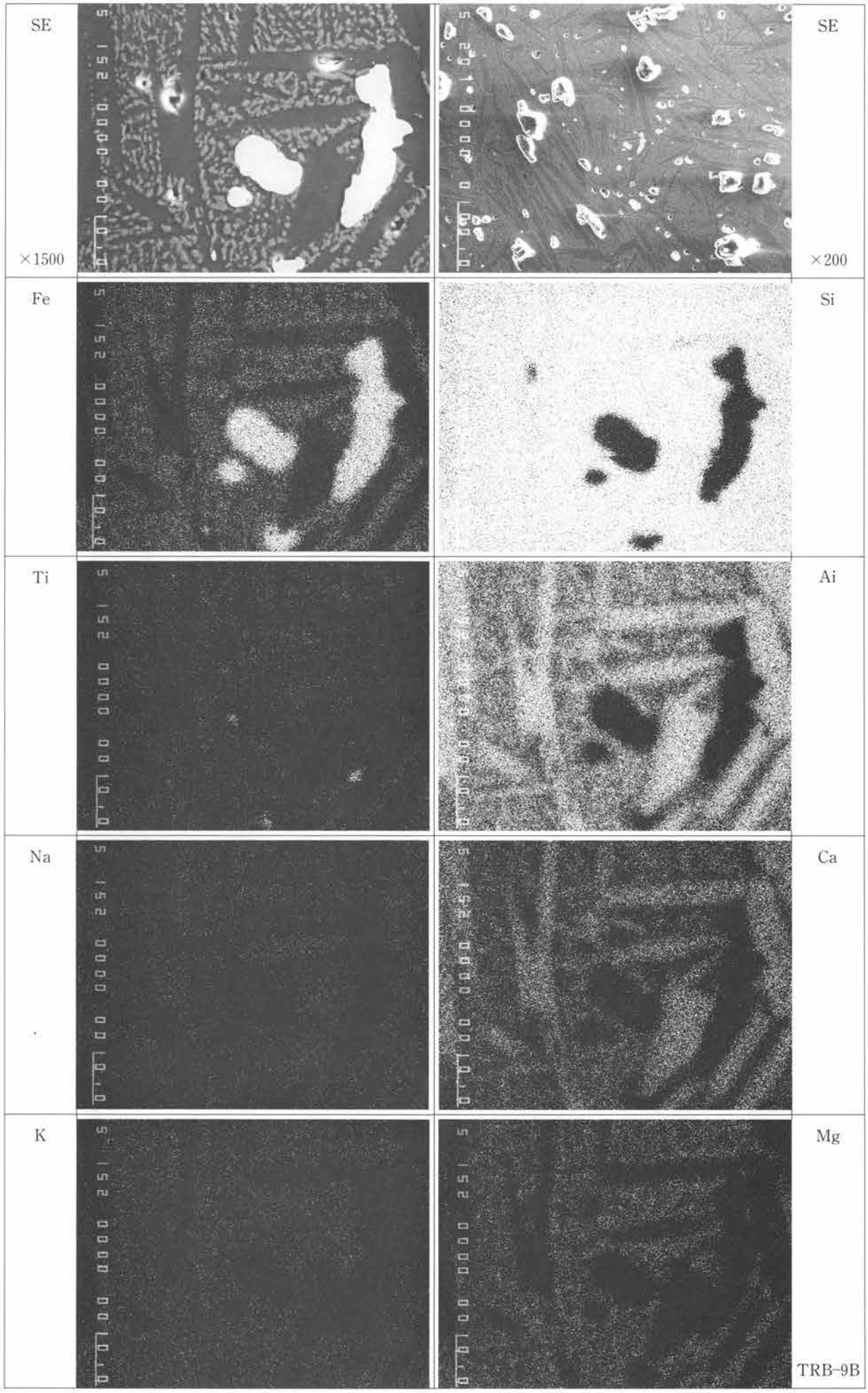
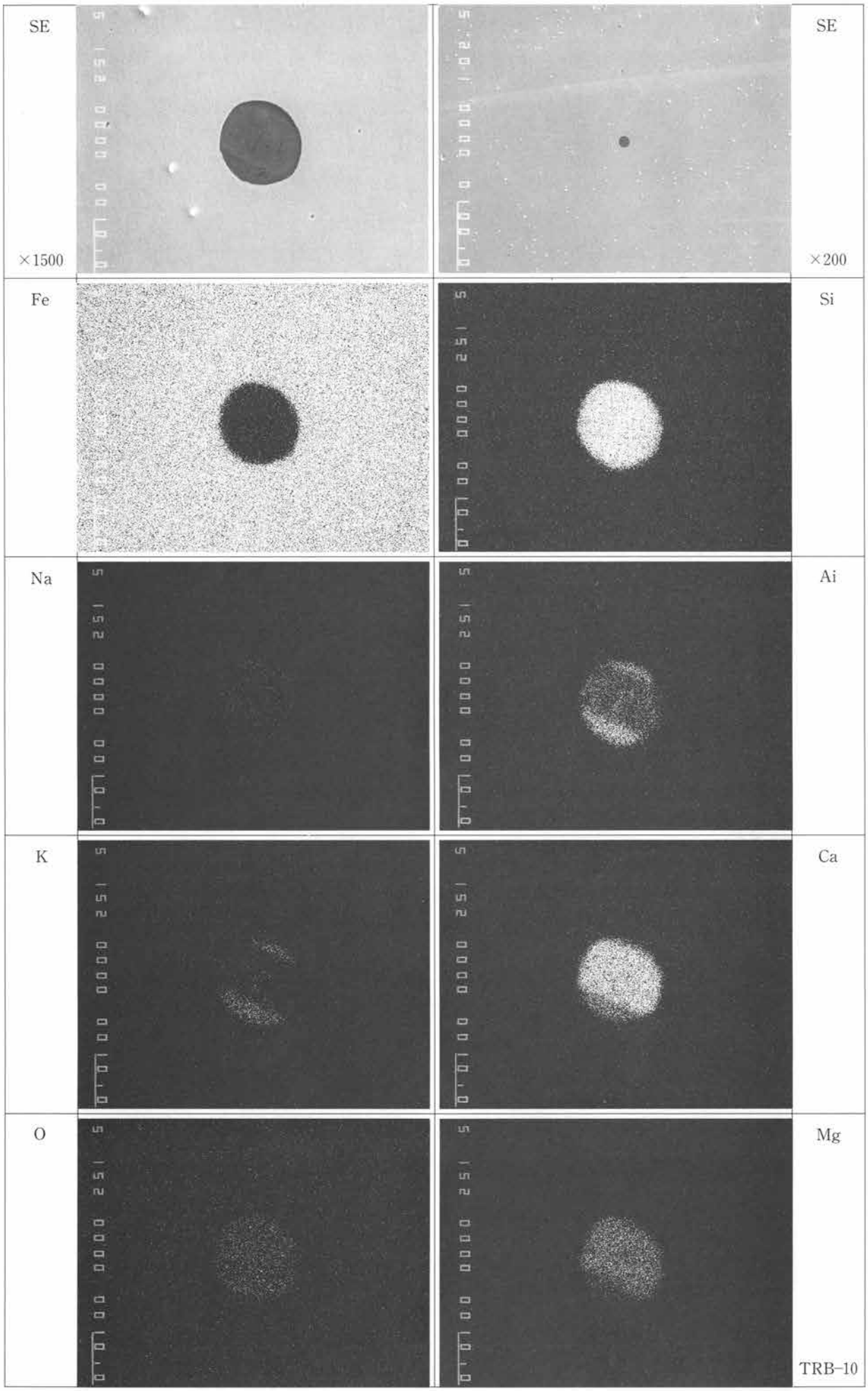


Photo.20　鳥羽遺跡出土含鉄滓（TRB—９Ｂ）中滓部の特性Ｘ線像

（×1500：縮小0.7）



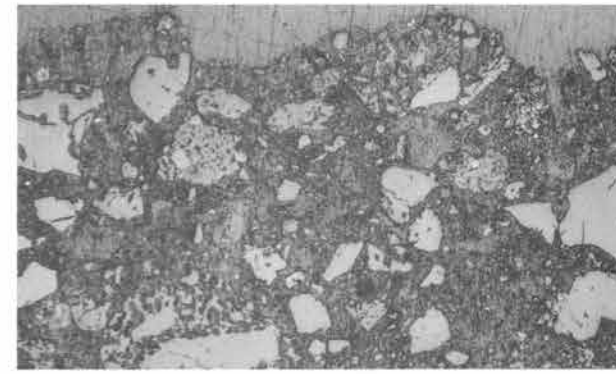
	SI02	CA0	FE0	F	AL203	K20	MN0	M00	S	TI02	NA20	ZR02	CR203	TOTAL
1	44.300	37.513	2.411	0.000	4.967	0.371	0.245	11.974	0.000	0.052	1.314	0.000	0.013	103.160
2	51.727	13.837	2.354	0.000	21.014	9.050	0.209	2.172	0.109	1.433	1.613	0.000	0.029	103.548

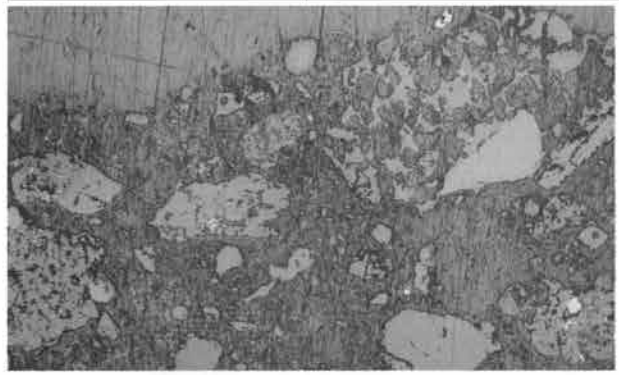
Photo. 21　鳥羽遺跡出土鉄塊系遺物（TRB—10）非金属介在物の特性X線像と定量分析値

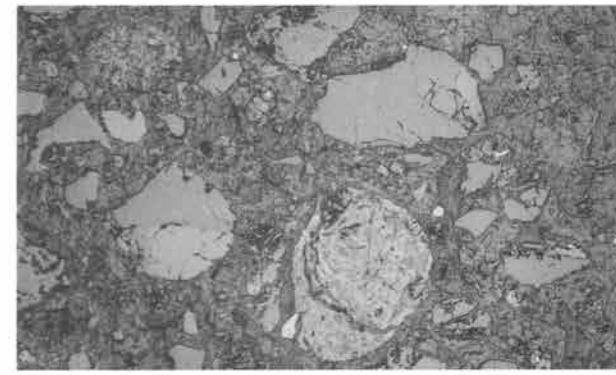
（×1500：縮小0.7）

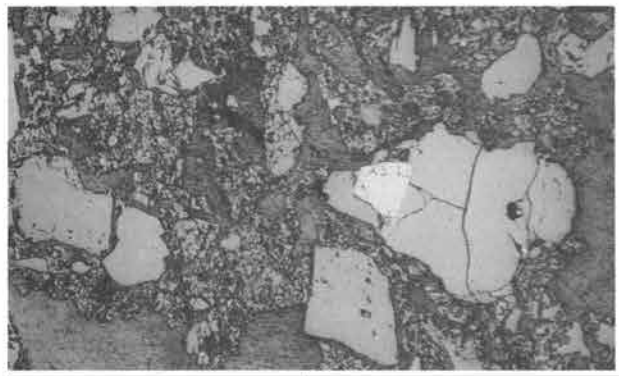
(15) TRB－2 C
鳥羽遺跡
（D43号井戸出土）
溶解炉炉壁粘土

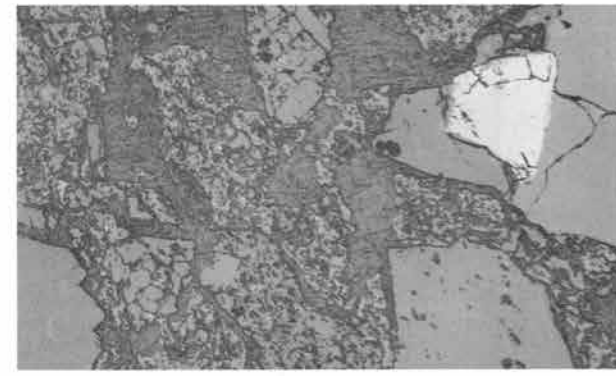
	① ×50 被熱部
② ×100 被熱部	③ ×50 中央部
④ ×50 外側	⑤ ×100 外側
外観写真×1.4	











(16) TRB—11
鳥羽遺跡
（D43号井戸出土）
鋳型粘土

	⑥ ×50 A：被熱部
	⑦ ×100 A：被熱部
外観写真×1/1.8	

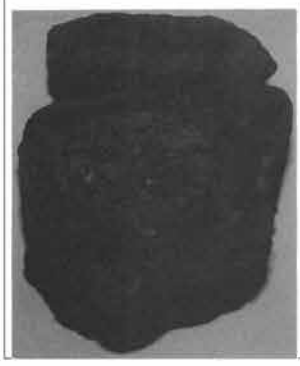
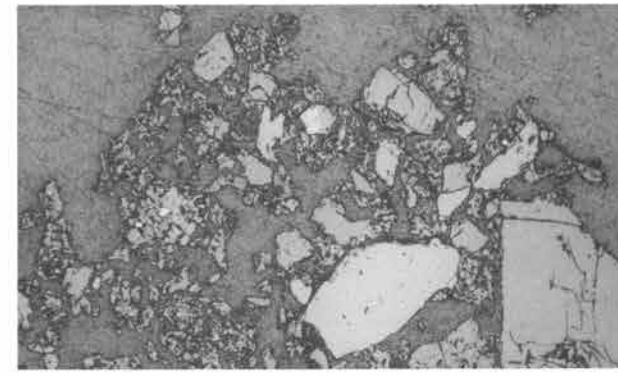


写真1.4倍

A：被熱部
B：中央部
C：外側



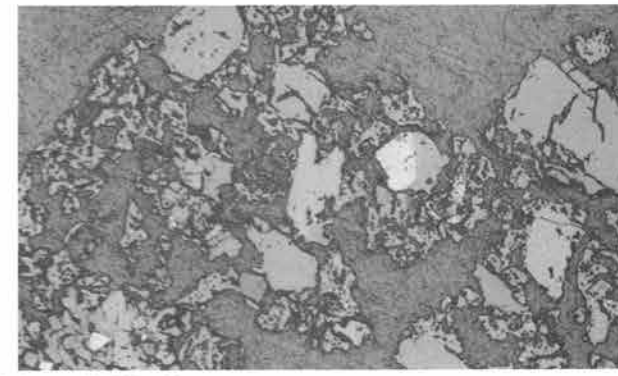


Photo. 22　鋳型粘土の顕微鏡組織

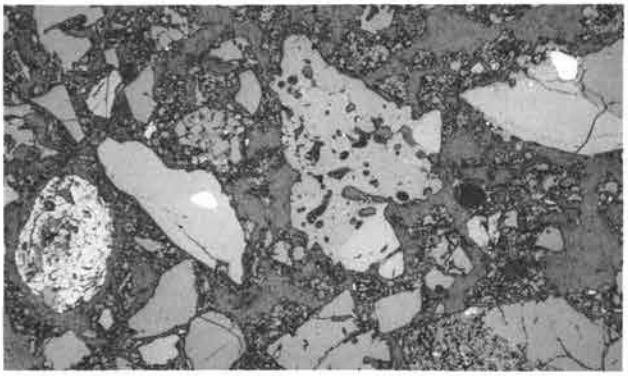
(17) TRB—11
鳥羽遺跡
（D43号井戸出土）
鋳型粘土

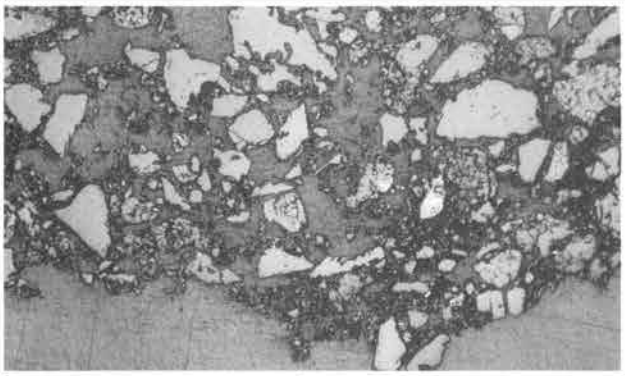
① ×50
B：中央部

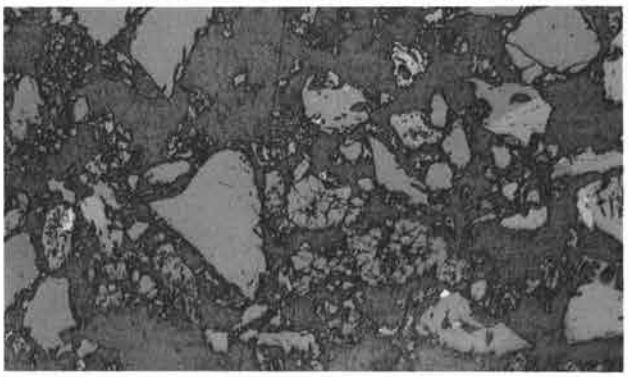
② ×50
C：外側

③ ×100
C：外側

外側写真側面×1.8







(18) TRB—12
鳥羽遺跡
（D43号井戸出土）
鋳型粘土

④ ×50
A：被熱部

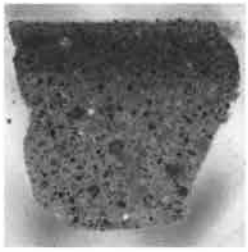
⑤ ×100
A：被熱部

⑥ ×50
B：外側

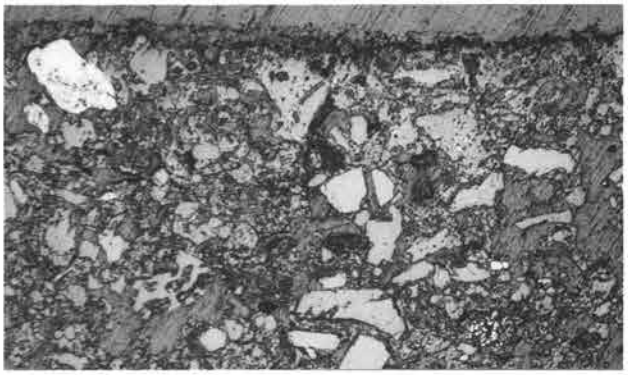
⑦ ×100
B：外側

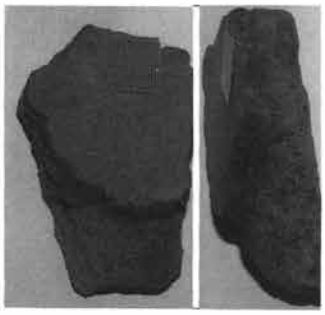
A

B



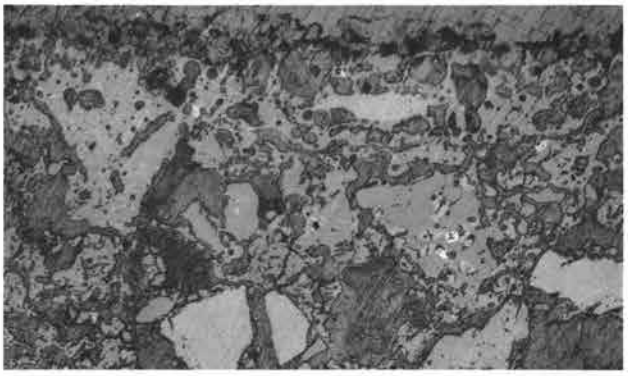
外観写真 1.4倍

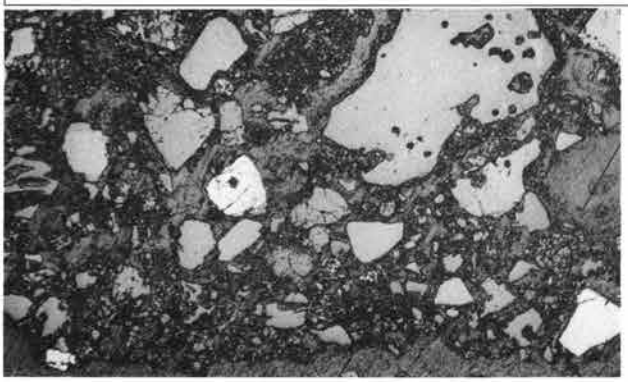




表面マトリックス
溶解後凝固

外側写真側面×1/1.8





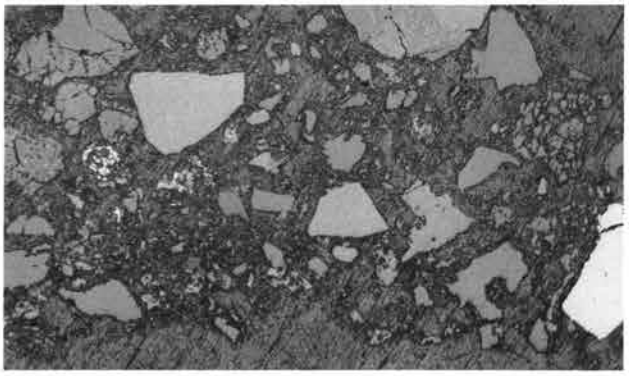


Photo. 23　鋳造粘土の顕微鏡組織

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第128集

鳥羽遺跡
A・B・C・D・E・F区

《本文編》
—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第39集—

平成4年3月21日 印刷
平成4年3月25日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23－1111

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村下箱田784番地の2
電話 (0279) 52－2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社